

IS～傷だらけの鋼～

F—N

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『インフィニット・ストラトス』。

通称『IS』と呼ぶ、女性だけにしか反応をしないパワードスーツの出現によって世界は歴史史上でも最も凶悪な性差別——女尊男卑社会と化した。

狂気の始まりから十年。そんなとち狂った世界に突如としてISに反応を示した少年と青年の存在が発覚。男達は希望の光を漸く見つけ出す。

しかし、片方の青年——柳隆道は女尊男卑社会の悪意により全てを失い、擦り切れ、凄絶な憎しみを抱えてしまった狂人なのであった。

『凶器』と『狂気』が交差する。

『善意』と『悪意』の混濁、ここに開幕。

2021.7.7

文章修正中。

目次

捕われの犬

第十一話	229
第十話	192
第九話	164
第八話	143
第七話	124
第六話	102
第五話	77
第四話	54
第三話	38
第二話	18
第一話	1

第十二話	259
第十三話	292
第十四話	319
覚醒する犬と鋼	
第十五話	353
第十六話	386
第十七話	420
第十八話	445
第十九話	479
第二十話	504
第二十一話	535
第二十二話	572
第二十三話	599

暴力だらけの日曜日

第二十四話

630

第二十五話

668

第二十六話

705

第二十七話

743

第二十八話

788

第二十九話

821

第三十話

864

A n o t h e r S u n d a y

899

虚偽、傀儡、凶暴、傲慢、悽愴

第三十一話

945

第三十二話

978

第三十三話

第三十四話

第三十五話

第三十六話

第三十七話

第三十八話

第三十九話

第四十話

第四十一話

第四十二話

第四十三話

第四十四話

第四十五話

1408137813361306126612401198117611441100107210341005

第四十六話	海と兎と銀翼と
第四十七話	
第四十八話	
第四十九話	
第五十話	
第五十一話	
第五十二話	
第五十三話	
第五十四話	
第五十五話	
第五十六話	
第五十七話	

19321875180817731714165716171580155315161482 1445

第五十八話	幕間の青春
第五十九話	
第六十話	
20832058	
1972	

捕われの犬

第一話

テクノロジーは倫理的には中立だろう。我々がそれを使うときにだけ、善悪が宿る。

——ウィリアム・ギブソン

令和四年、一月上旬。世間が新年を祝う中白い景色に囲まれた墓地に一人の青年がいた。

左頬に二本の古傷がありその目には光は無く、まるで感情を失ったかのように表情は硬い。

雪が降り積もる中、学生服だけを纏い持ち物は黒い傘一本のみである。

この時期にしてはあまりにも軽装であるが、寒さを感じていないかのように黙りしてある一点を見ていた。

その視線の先には一つの小さな墓石。かなり新しく建てられたその墓をじっと見つめるその姿は哀しみに満ちていた。

どれ程の時間が経ったか、しばらく佇んでいた彼はようやく言葉を発表する。
「どうとう一人になつちまつたな……」

その言葉には力がなく、消えてしまふようなぐらゐに小さい。周囲には誰もいないが、仮にいたとしても聞こえはしないだろう。

当然返事をする者はいない。それでも青年は言葉を続ける。

「くそつたれ……」

現在、世界は女尊男卑という社会で成り立っていた。

女性は優遇され、男性は虐げられる社会。昔は男尊女卑という社会があつたがそれは比べ物にならないほどの格差社会。

女性是人権等を無視したような横暴も許され、男性は些細な事ですら最悪社会的に抹殺されてしまう。

いったいどれ程の男性が悲鳴を上げているのか定かではないが、多数が虐げられているのだろう。

「また近いうちに来るわ、次は良いもの持つてくるから……」

そう一言呟いて青年はその場を離れる。既に青年の心に希望という文字はなく、絶望に近い感情を抱えて墓場を後にした。

彼はまだ知らない、知るよしもない。

今後降りかかる自分の運命を。

今以上に絶望を知ることを。

この狂った世界の元凶に関わっていくことを。

『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』と呼ばれるマルチフォームスーツにより世界の技術は飛躍的に上昇した。

本来は宇宙開発を想定した運用目的であったが、ある事件により用途は宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして認識され、各国の抑止力の要がISに移っている。

その強大過ぎるISの運用を規制するために二十一カ国が参加し『IS運用協定』アラスカ条約を

成立。世間では世界的競技の一つとして扱われるようになった。

規制をかけてしまうほどの圧倒的な戦力となる代物であるが、I Sには最大の欠点が存在する。

それは女性にしか反応しないというもの。それが原因となり世界は女尊男卑という世の中となった。

I Sが出現して十年。女性が優遇され男性が虐げられる世界であったが、その世界にある希望が見え始める。

女性にしか反応しないはずのI Sが男性に、しかも二人に反応したのだ。世界中の男性は歓喜に満ちていた。

彼ら二人を研究し今後I Sを扱える男性が増えれば今の社会も少しは良くなるはず、明るい未来がきつと来る、そう確信していた。

しかし、それは世間にとっての話だ。

「あ、ああ……」

「や、やった、反応したぞ……!! ……これで二人目が……!! ……どうかしたのかね、君?」
「あああああああつ!!」

誰も予想もしなかった。

「くそつたれがあああああつ!!」

「落ち着いてくれ! 誰も君に危害を加えはしない!!」

「ざけんなあ!! どうして……!! ……なんで……!! ……なんで反応してんだよつ!!」

反応した二人の内一人は――。

「くそがつ……!! ……外れねえ……!! ……外れろ……!! ……外れろつて……!! ……外れろつてん
だろうがあああああつ!!」

「まずいつ！ 彼は錯乱している！！ 機体の強制解除は出来ないのかっ!?」
「ダメです！ エラーを起こして反応しません!! そんな……保護機能が働いてないだ
なんて!?!」

女尊男卑の悪意によって心身共に傷つき――。

「……………っ!? やめろっ!! 来るなっ!! 来るんじやねえっつっつ!!!」

「ぐああっ!! だ、誰か!! あ、IS警備隊に通報をっ!!」

「俺に近寄るんじやねえええええええええええ!!!」

重度の女性不信となつた被害者であることを――。

「やめろおおおおお!!! 離せええええええええ!!! 俺を殺せええええええええ!!!」

「ぐあつ！　な、なんて力だ……やむを得ん！　総員、対象を鎮圧しろ！　絶対に怪我はさせるな！　機体が解除され次第、彼に鎮静剤を打つ！」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

そして、ISを誰よりも憎むようになった人間であることを――。

「ぐ……。は、離し……やがれ……！　殺してくれえ……！」

「許してくれ……。だがこれも君のためだ、今は我慢してくれ……すまない」
「あゝあゝ……」

世界は、彼に明るい未来など与えなかった。

世界は、彼にとってこんなにも残酷だった。

日本列島本州から少し離れた島に設立されている特殊国立高等学校『I S 学園』。アラスカ条約に基づいて建てられたこの施設は I S を扱う操縦者や整備士など、将来 I S に関わっていく人材を育成するために存在する。

学園の特性からして九割以上が女性となる学園は I S に直に触れることが出来る、就職に大きく有利になるなどして入学希望者は世界中からやって来る。

来月の四月には新入生が入学するため教師や関係者は多忙の日々を送っているが、今年に限っては今まで以上に慌ただしかった。

「お疲れ様です、織斑先生」

緑髪の女性は両手にコーヒーを持ち机で書類整理をしている黒のスーツが似合う女性に声を掛ける。

彼女の名は山田真耶。I S 学園教師の一人であり I S 操縦者としても優秀である。

普段から眼鏡をかけてあり、ある一部を除けば平均的な体つきをしている。

「ああ、すまないな」

書類整理を一旦やめ、コーヒーを受け取る彼女の名前は織斑千冬。ISを扱う世界大会『モンドグロツソ』の初代優勝者であり、世界最強『ブリュンヒルデ』の称号を持つ元日本代表のIS操縦者。

知らない人はいないとされる彼女は現在IS学園の教師をしており、生徒達に限らず他の教師も指導することがある。

「今年は忙しくなるな……」

「はい、男性操縦者の発見ですものね。弟さんは今………?」

「あいつは今ホテルにいる。屈強な男達に囲まれながら」

「あ、あははは………」

IS学園が今まで以上に多忙の理由。それはISを扱える男性の処遇についてだった。

十年間女性にしか反応しないはずのISが、二人という極少数の男性に反応を示したのだ。前例など当然無く、世界中が欲しがっている。

世の中には目的の為に手段を選ばない人間も存在する。そんな輩から護るために、彼らの今後を決める為に保護という名目でIS学園に入学させることを決定したのもつい最近であった。

世界初の男性操縦者の名前は織斑一夏。藍越学園の受験の為試験会場に向かったのだが、何かしらの手違いによってISに触れてしまい、動かすことが出来ると判明した。ニュースで全面に放送された事もあって今や彼を知らない人間はほとんどいなく、世界最強の弟ということもあり今後に期待されている。

現在彼は入学までの警護として、選りすぐりの護衛に囲まれた生活を送っている最中だ。窮屈で仕方のない事だろう。

「それじゃあ、二人目の彼は……………」

実のところ、真耶は現時点で二人目についての詳細は全く知らされていない。

一人目が発見された翌日、世界は男性に向けて一斉に適性検査を行った。一人目がいゝるならまだ反応を示す男性が存在するはずだと。適性検査を始めて一ヶ月、三月の中旬辺りに差し掛かってきた所で遂に二人目が発見された。

彼もまた一人目と同じ理由でIS学園に入学させることになるのだが――。

「……………」

——二人目について問い掛けた途端、千冬の顔が曇る。非常に言いにくいのか、彼女は口を開けただけで言葉を発しない。

「織斑先生……………」

「これを見てくれ」

そう言つて千冬は一枚の書類を真耶に渡す。いったいなんだこれとは、彼女は表情に出るほどの疑問を浮かべた。

「なんですこれ？」

「二人目に関する物だ。正直、弟より二人目の方が苦勞するかもしれん。」

「はあ……」

千冬の言っている意味がよく分からず、疑問に思いながらも目を通す。

そして、読めば読むほど真耶の表情は悲痛な顔に変わっていく。

「織斑先生……。これ……つて……」

「ああ……この書類によると四月から就職するはずの彼は今まで検査を渋つてたらしい。近所の人達に聞くところによると女性とISが嫌いとして有名だそうだ。それ以外の情報は出なかつたが……。徹底的に検査を拒否する彼を政府が強行手段に出、とうとう観念して検査を行ったのだが……」

その話だけでもとんでもない事だが、話を折る事はせず彼女は黙つて訊く。

「ISの起動に成功した途端錯乱し、暴れまわつた後自傷行為に陥つていったとのことだ。最終的に通報を受けたIS警備隊が鎮圧し、今は拘束中だ。検査スタッフの何人かは怪我を負つたらしい」

渡された書類には、二人目の適性検査を行った際の詳細と彼の家族構成が書かれてい

た。

その書類をまじまじと見ている彼女に向けて千冬は真剣な表情で語る。

「彼には親はいない。八年前に離婚し母親と三つ年下の妹が離れ、去年の十二月の初めに父親が亡くなっている。過労と精神的ストレスによる衰弱死、だそうだ」

「そんな……じゃあ彼は……」

「そうだ……恐らく彼も、その父親も女尊男卑社会の被害者だろう」

女尊男卑思考の女性の悪意によって被害を被った青年が、今後その元凶となる I S に関わり、九割以上女性しかいない I S 学園に身を置く。

その上彼は新入生と一人目の男性操縦者よりも三つ歳が離れてる。周りに馴染めないであろう光景を思い浮かべるのは簡単であった。

これがどれ程の苦痛なのか、真耶には想像も出来ない。

「山田君」

「はい……」

真耶の返事には先程まで仕事をこなしていた時のような元気はない。彼に対してどのように接すればいいのか、現状分からなくなっているからだ。

「彼は入学式当日に政府が送るそうだ、彼の対応は私がする。他の教師や従業員にも伝えておくが……、決して刺激するな」

「分かりました……失礼します」

そう言つて真耶はその場を離れ覇気のない足取りで職員室から出ていく。その姿を見送つた後千冬は、周囲を目だけで見渡し誰もいないことを確認すると卓上で手を組んでため息を吐き独り言を呟く。

「……すまない」

それは誰に対しての言葉なのか、それを知るのは千冬ただ一人。世界最強が決して誰にも見せない姿がそこにあつた。

夕日が沈む頃まで懺悔をしていた彼女は、ようやく腰を上げて職員室を出ていく。

もぬけの殻となつた職員室の中、彼女の卓上には二人目の名前と顔写真が載つた書類が残されている。

顔写真に写る青年は左頬に二本の古傷があり、目に光は無く、そして暗かつた。

そこに記されていた彼の名は――。

IS学園の入学式まであと数日の夜。とあるホテルで男達はある人物を鎮静させるのに手子摺っていた。

「何を考えてるんだ君はっ!! いい加減に大人しくしろっ!!」

「離しやがれっ!! 誰があんなところ行くかつ!! あんなところに缶詰にされる位なら、それならいつそ……!!」

「そんなこと黙って見ていられる訳ないだろう!! 君は世界で二人しかいない男性操縦者なんだぞ!!」

「知ったことかああああ!!」

その人物は、ISが反応を示した世界で二人目となる青年。彼も一人目と同様に入学式に合わせて向かわせる予定なのだが、本人はそれを強く拒絶していた。

適性検査した際暴れ狂う彼に鎮静剤で無理矢理大人しくさせ、ホテルに拘束した時から数日間ずっとこの調子だ。男達の目を盗み逃走を繰り返し、失敗すれば自殺を図ろうとする。そのおかげで彼を閉じ込めてる部屋にあるはずの物は全て撤去しており、二十四時間体制で監視しなくてはならなかった。

それでも彼は男達の僅かな隙を見つけ、暴れだし逃げ出そうとするか自殺しようとしている。男達はそんな事を黙って見過ごすわけにはいかなかった。

「どきやがれこの野郎っ!!」

「ぐああつ!! こ、このガキ……!!」

「応援を呼べ!! それとテーザーガンと鎮静剤を用意しろと伝えろ!! 早く!!」

狭い一部屋で練り広げられる青年と男達の乱闘。誰がどう見ても青年に勝ち目は無いはずだが、状況は彼の方が押していた。

「う、らあつつ!!」

「ぎやああつ!! こ、このガキ……!! 俺の……!! 俺の腕をつ……!!!」

「邪魔をすんじやねえええええ!!」

数人の男達を前にしても彼は怯む処か狂暴さを増すばかり。既に数人は大怪我を負っており、このままだと全滅は免れない。

しかし、それも終わりを告げる。

「がああああああつつ!!」

彼は応援に駆けつけた男のテーザーガンにより地面に倒れる。その隙を逃さずに軽傷で済んだ男達総出で彼を押しえつけ鎮静剤を打ち込んだ。

「が……あ……く……そ……」

「許してくれ……許してくれ……」

「ぐ……う……」

彼の狂暴さは次第に無くなり、数分経ってやっとの事で大人しくなる。しかし、それ

でも眼力だけは凄まじく男達を睨んでいた。

「つ……。これ以上暴れられても困る、縛っておけ。舌を噛み切らないように口もだ」

「——っ!?!——っ!?!」

男達は彼の手を、足を、口を縛り部屋の中央に転がす。端から見れば貴重な人間を保護する者達には見えない。しかしその保護する人間が暴れるようであれば致し方ない事だ。

「……怪我人を運べ。軽傷で済んでる者は引き続き監視をしろ、後に交代要員を向かわせる」

男の指示により大怪我を負った数人は部屋から運ばれていく。怪我人を見送り、唯一怪我をしてない男は部屋を出ていく前に彼に向かう。

「君の気持ちは良く分かる、だがこれは決まったことだ。我々では君を助けられない……」

「……………」

「すまない……」

その一言を最後に男は部屋から出ていった。

青年は、今後IS学園でどのように過ごすかは想像出来ない。少なくともそれは辛く苦しいものである。

女尊男卑の悪意によって心身共に消えない傷を負ってしまった彼の名は『柳隆道』。
彼が遭遇する地獄が始まるまで、残り僅か――。

第二話

IS学園入学式当日。新入生は今入学式の最中であり在校生は既に教室に戻っている。今年是世界初の男性も入学するという事もあり在校生達の話題は九割以上が男性操縦者関連だ。

ちなみに話題の中心人物である一人目、織斑一夏は入学式に出席しているが男が自分一人、周囲は女性のみという、正に四面楚歌と言える状態。

彼が女好きであれば女性に囲まれた状態で鼻の下を伸ばしまくる所であるが、本人はその気がなく、むしろ同性が本当にいないんだなど改めて痛感し胃を痛めていた。

二人目の席もあるがまだ学園に着いていないので当然空席のままである。

そんな織斑一夏が徐々に削られてる一方、校門の中央で腕を組んでいる人物が一人。

「はあ……」

ため息を吐くその人物は、鋭い吊り目に、黒いスーツ姿で立つ千冬。彼女はここで二人目の男性操縦者、柳隆道を迎える為待っていた。

本来ならば入学式前には到着するはずだったのだが、本州とIS学園を繋ぐモノレール

ル手前で逃げ出そうとしたとのこと。

十人の護衛が一斉に取り押さえようとしたが、彼は猛獣の如く暴れ散らしたという。同行していた護衛は、全員が要人警護任務に就く際に選抜される屈強なメンバー。その姿は服の上から見ても分かるほどの筋肉質な体格であり護身術も群を抜いている。

そんな彼らが三人ほど大怪我を負い、残りの七人掛りでようやく確保したという連絡が来たのが十数分前。

その電話の最中にも多少なりとも怒鳴り声が聞こえていた。内容までは聞こえなかったがIS学園へ行くことを強く拒絶しているという事だけは確かだと確信している。

「どうしたものか……」

千冬は教師の中でも非常に厳しく、規則を破った生徒には容赦なく鉄拳や出席簿で制裁を与える人物。仮にだが、遅れてきた二人目が極普通の家庭環境で育ち、遅れてきた理由も下らない物だったら容赦なく制裁するであろう。

しかし、二人目の詳細に目を通して以来彼に制裁など出来る気がしなかった。

彼女として二人目を優遇するつもりはない。教師たる者個人に肩入れなぞしたら周囲に影響を及ぼす。加えて彼女は知らない者などいない世界最強。そんな有名人が個人に肩入れしたらどうなるかなど目に見えている。

しかし彼にとっては地獄以上の監獄とも言えるIS学園。そんな中で教師である千冬が他生徒同様に厳しく接したら彼はどうなってしまうのだろうかと考えてしまう。

IS学園に入学する生徒は当然ISに興味を持った者達だ。事故を起こさないように、怪我を負わないように、しっかりと規則を守らせる為に厳しく指導するのは至極当然のこと。

しかし、二人目は他生徒とは違う。

女性を嫌い、ISを嫌い、学園に行く直前ですら大人数相手に必死で抵抗する。彼女も真耶と同様に接し方が分からなくなっていた。

不安が渦巻く最中、しばらくして遠くから一人此方に向かっているのが見える。ようやく来たかと一端考えるのをやめ、相手を待つ。

向かってくる人物は自身より大分背が高く、片手で鞆を背負ってる。その手の甲には包帯が巻かれており少々の血が滲んでいた。暴れた時になったのであろう。

「あんた……この教師か？」

青年は千冬の前に着くなりそう一言。その声に感情など一切無く、無表情である。

先程まで学園に行くまいと抵抗していたとは思えないほど静かだった。

彼からは戸惑いも、不安も感じられない。あるのは異常な程の敵意と警戒心。

千冬はその異常な敵意に怯みそうになるが、表情には出さずに一度咳き込んで話しかける。

「柳隆道だな？ モノレール手前で暴れたと聞いたが」

「俺に関する資料は見てるだろうし、暴れた事については連絡いつてんだろ？ 説明する必要あんのかよ。それに質問してんのはこっちだ」

千冬を前にしてもこの態度。世界最強と言われるだけあって他の I S 操縦者はもちろんのこと、多くの男性からも恐れられているにも関わらず隆道は表情を崩さない。

「……ああ、私は織斑千冬。お前のクラスの担任を務める者だ」

「あんたのことは知っている。まさかブリュンヒルデが担任だとは思わなかったがな」
「その名で呼ぶな、今日からお前は生徒で私は教師だ。織斑先生と呼べ」

「そうかよ」

千冬は隆道と会話しながら思考する。非常にやりにくい相手だと。

今まで彼女と会話する者は全員が憧れを抱く者か恐れているかの二択であった。しかし目の前の男、隆道にはどちらもない。敵意を全面に出す相手との会話なぞ初めてだった。

普段の千冬なら敬語を使えと、生意気だとして既に制裁を与える所ではあるが、やは

り先日の事やついさっきの出来事を思い出してしまふ。

ここで手を出したら彼は一生自分を、いや誰も信じなくなるだろうと。

先ずは彼に信用してもらふ、そこから始めることにした。

「本来ならば入学式に出席してもらふはずだったが、既に始まっている。すまないが終わるまで職員室で待機だ。S H Rシヨートホームルームが始まる頃に私と一緒にクラスに向かつてもらう」

「一人目はもう入学式にいるのか」

「ああ、たった二人しかいない男子生徒だ。……どうか仲良くやってくれ」

「顔合わせたことねえのに仲良く出来るかどうかなんぞ分かる訳ねえだろうが。馬が合わなければどうしようもねえだろ」

「分かった……。とにかく時間も限られている、職員室へ行くからついてこい」

千冬はそう言つて学園へと向かう。隆道は何も言わず黙つてその後をついていった。

二人がしばらく歩き玄関前辺りまで進むと、ふと千冬は立ち止まり振り向かずに隆道に話しかける。

「柳」

「あ?」

「お前が女性とI Sを嫌っているのは知っている。資料で家族の事も見た」

「……何が言いたい」

「検査を渋ったのも、I S学園に行く事を拒絶した理由も分かる」

「だから何を——」

「だが信じてほしい。このI S学園に連れてきたのは、お前を保護するためでもある。迫害などするつもりもないし、させはしない。私が許さない」

千冬は決心した。彼を壊さないためにも、女性全員が隆道が出会ってきたであろう女尊男卑思考な輩ではないという事を分かって貰う為に優しく接することを。

自分だけじゃなく、副担任である真耶にも、他の教師にも、クラス全員にも協力してもらおうという善意での行為。

——故に気づかなかった。

——彼の地雷を踏みつけたことに。

「クラスの皆にも釘を指しておく。だから、お前もどうかクラスの皆と——」

「ふざけるな」

「っ!？」

突如千冬の背筋が凍る。彼の声は電話内で聞こえた怒鳴り声でも、校門前での会話の時のようなものではなかった。

感じたのは『どす黒い何か』。憎しみや恨みなどの負の感情が混ざりに混ざった、説明が困難な程どうしようもない物。その声を聞いただけで息苦しく感じた。

千冬はゆっくりと振り向くと——。

「やっぱ、あんたもそうなんだな」

——そこには、殺意に満ち溢れた隆道の姿があつた。

表情は見たことも無いほど歪んでおり、その目は相手を殺してしまうのではないかと
言うほど鋭くなっている。

「今までどれだけの男を騙してきた？ ……いや、数えてすらいねえのか」

「柳……お前——」

「この際だからはつきり言つとく。俺はお前ら女なんぞ一切信用しない。特にISに関わつてる奴らなんかにはな」

隆道は容赦なく言葉を続ける。

「優しくするから信用しろだ？ クラスの女とも仲良くしてくれと？ ……そう言つて最後は俺ら男を弄ぶのか。生憎その手口は知つてんだよ」

「違う！ 私は本当に——」

「黙れよ」

「……っ！」

本当に心配していると、騙すつもりはないと千冬は主張したかった。しかし、隆道の一言一言が非常に重く感じる。

千冬の現役時代、他の選手から妬み嫉み等は少なからずあつた。正面から言われた事もあつたが大して気にもとめなかつた程度ではあるが。

隆道のはそんなちんけなものじゃない。声を聞かされたたびに心臓を鷲掴みされてるよう

な感覚に陥る。

「誰が信用なんぞするか。俺にとつてお前ら女は敵だ。何を考えてるか知らねえが、俺はお前らの思い通りになるつもりはねえぞ」

千冬は、自分が軽率な発言をしてしまった事に酷く後悔した。隆道の心の傷はもうここまで深刻な事になっているのかと。

「……職員室はどこだよ、時間は限られているんじゃないかねえのか、織斑先生？」

いつの間にか隆道の表情は元に戻っており、先程まで感じていた息苦しさも無くなっている。

「……ああ、すまない」

これ以上は危険だ。そう結論づけた千冬は、それ以降職員室に着くまで隆道に話しかけようとはしなかった。

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rははじめますよー」

チャイムが鳴り終わった数秒後。一組の副担任である山田真耶は教室に入り黒板の

前に立つ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「……………」

しかし、真耶の声に反応する生徒はいなかった。

それもそのはず、生徒全員の視線はこのクラスの中央一番前に座る生徒に集まっている。

その生徒こそ世界初の I S 操縦者であり学園初の男子生徒、織斑一夏である。

注目を浴びてしまうのは致し方ない事ではあるが浴びている本人からすればたまったものではない。

(これは……想像以上にきつい……)

入学式から参加している一夏は周囲が女子のみという状況に心底参っていた。

同性がいなくてもこんなにも苦しいのかと、夢であってほしいと思わずにはいられない。

しかし、真耶に彼の心境なぞ分かるはずもなく、真耶自身に向けられている訳ではないがクラス全員の威圧にたじろいでしまう。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

このままではいかんと、真耶は無理矢理にでも S H R を進めた。担任である千冬が来

るまでにある程度進めておかないといけなからだ。

数人がようやく真耶の一言に気付き、生徒達は順調に自己紹介を進める。その中で一夏は他人の自己紹介など耳に入るはずもなく、未だに心の中で悲鳴を上げていた。

八方塞がりとなった一夏は救いを求める為に窓側の方に視線を向ける。そこには六年ぶりに再会した幼なじみ、篠ノ乃箒の姿があつた。

この状況を何とかしてくれと、助けてくれと箒に向けて目で訴える。

箒は一夏の目線に気づくが、窓の外に向けて顔を反らされてしまう。救いなんて無かつた。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!」

完全に意識を箒に向けていた為に、思わぬ所から声を掛けられた一夏はつい声が裏返ってしまう。端から見るとあまりにも間抜けな声だったので、周囲からはくすくすと笑い声が聞こえる。これにより一夏はますます落ち着かない気分となり、夢なら覚めると願う以外手段が見当たらなかつた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃつてごめんさい。お、怒つてる? 怒つてるかな?

「ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな

？」

とても教師とは思えないほどに生徒である一夏に対して真耶は頭を下げる。それも一度ではなく会社で部下が上司にするかの如く何度も頭を下げるので、サイズの合っているのか合っていないかのような眼鏡はずり落ちそうになっていた。

その腰が低い姿を見て一夏は流石に彼女が年上とは思えなかった。同い年と言われたら絶対に信じただであろう。少なくとも、一夏にはそういった謎の自信があった。

そんなどうでもいいことを考えていたが、一夏の目の前で未だに頭を下げている相手は教師。これ以上頭を下げられると色々とまずい、自己紹介しなくてはと一夏は真耶に声を掛ける。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

ようやく顔を上げたかと思いきや、一夏の手を取って熱心に詰め寄る真耶。本人は悪気は無いのだがこれにより一夏の注目度は加速していく。

どちらにせよ新入生は自己紹介からは避けて通れぬ道。最初で躓いてしまうと二度とこの環境には馴染めない和一夏は確信した。

覚悟を決めて席を立ち、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中を受けていた視線という集中攻撃が今度は真正面となる。流石にこれほどの女子から注視されたことない一夏は後退りしそうになるがそこは耐えた。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

簡潔に名前だけ名乗り頭を下げる。学園に入ってからずっと受けていた女子生徒達の目線攻撃にメンタルをポロポロにされた一夏に出来る自己紹介は、名前を名乗るだけという最低限のものであった。

しかし、一夏の心境なぞ知らぬクラスの女子達はそれで納得しない。『もつと色々しゃべってよ』と目線で威圧し、『これで終わりじゃないよね?』という空気を作り出す。

「……………」

勘弁して欲しいと、どうしたらいい、何を言えばいいと一夏は思う。容赦の無い女子達の悪気0%精神攻撃によってだからだと背中に流れる汗を感じるという、精神だけでなく肉体にまで影響が始めた彼の策は尽きた。

しかし続けなければならない、ここで黙ったままだと今後『暗いやつ』のレットルを貼られてしまうであろう。

とつさに思いついた策を実行するために一夏は深呼吸をし、思い切って口にした。

「以上です」

その一言により、女子の数名はまるでコントでもしてるかのようにならずこける。何を言うつもりなのかと構えていたらまさかの終了宣言である。こけてしまうのも仕方のないことであつた。

「あ、あの……」

もうどうすればいいか分からなくなつてしまつた真耶はどうとう涙目になつてしまふ。

一夏は周囲の状況に疑問を持つた瞬間――。

「いつ――!?!」

――空気を叩く音と同時に頭部に激痛が走る。

そしてあることが一夏の頭をよぎつた。この叩き方、この痛みには覚えがあると。

おそるおそる振り向くと、そこには世界最強であり、自身の姉である織斑千冬の姿があつた。

「げえつ、関羽?!」

余裕があるのか無いのか、一夏はつい三国志の有名人の名を口滑らせる。その結果再度叩かれる事になつた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

低めの声で彼女は一夏を叱る。しかし一夏は叱られる事よりもある疑問が浮かぶ。

職業も弟である一夏にも教えず、月に一、二回ほどしか家に帰らない彼女がなぜここにいるのかと。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

先程までの涙目になっていた真耶は千冬が来るなり表情を変え、若干熱っぽいくらいの声で応えている。

「それで……柳君は」

だがそれも一瞬。真耶は表情を暗くしながら小声で千冬に問い掛けた。千冬が来たということは既に柳隆道はすぐそばに来ていたという事になる。

「ああ、廊下で待機させてある。ここからは私が説明しよう」

真耶の問い掛けに対して千冬も小声で応える。しかし一夏の耳には入っていた。

(柳君……？ 誰なんだろう？)

廊下の方へ顔を向けながらそんな疑問をしていると、突如千冬がクラス全員に向けて声を掛ける。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私

の仕事は弱冠十五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

教師というより軍の教官に近い宣言。しかし、教室には困惑——ではなく、黄色い声援が響く。

「キヤー————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

鼓膜が破れてしまうくらいに騒ぐ女子達を、千冬はかなり鬱陶しそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともなにかな？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

本当に鬱陶しがってるのか、千冬は額に手を当てながら天を仰ぐ。有名人のつらいところであろう。

しかしそんな彼女のことなどお構い無しに女子達は更に騒ぐ。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

これには流石の一夏もドン引き。もはや懂れとか通り越した何かだと感じた。

彼自身も姉がここにいること、しかも担任であることに驚愕しているが、女子達の黄色い声のおかげで逆に落ち着いてしまっている。

千冬もこれ以上は無駄だと諦め、目先を生徒達全員から一夏に変えた。

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

そんな落ち着いている一夏に向かって千冬が放った言葉は辛辣そのもの。しかし彼は待ったをかけようとする。

「いや、千冬姉、俺は——」

言い切る前に放たれるは本日三度目の制裁。反論は許されなかった。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

——と、うっかり言ってしまったこのやりとりに一夏は後悔する。姉弟であることがクラスに知れ渡ってしまったのだ。

「え……、織斑くんって、あの千冬様の弟……?」

「それじゃあ、世界で『IS』を使えるってもの、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

「でも待つて。それじゃあ『二人目』は……？」

女子達から言われたい放題であった一夏であったが、最後の女子の言葉を聞き逃さなかつた。

「え、二人目……？」

二人目とはなんだ、まさか他にも男子がいるのかと一夏は驚きを隠さない。

教師二人の方へ直ぐ様向くとなにやら重苦しい空気になっている。

数秒経ち、口を開いたのは千冬。

「……知っている者もいるだろうが今一度言う。先月の半ばに二人目の男性操縦者が発見された」

その事を知らない一夏を含めた生徒達は驚愕する。知っている者もいるが、知られているのは『二人目の男性操縦者』という情報のみ。それ以上の事は誰も知らない。

「彼は高校を卒業して就職目前のところ、適性が発覚した。つまり諸君より三つも歳が離れている。その二人目もこのクラスに入る事になるが……皆に協力してほしいことがある」

二人目もこのクラスに入る、歳上の男子というのを聞いて再び女子達は黄色い声をあげそうになるが、どうも様子がおかしい。

静まり返った所で、一呼吸置いて千冬は語る。

「彼は今とても不安定な状態にある。あまり刺激しないようにしてもらいたい。そして、もし彼に何かあったときは直ぐに私か山田先生に伝えること。どうか頼む……」
教卓の前で頭を下げる千冬。そこには、先程までの世界最強の姿はなかった。見たこともない彼女の姿を見て生徒だけでなく真耶も目を見開く。

「ふう……そろそろ呼ばないと。入れ、柳」

髪をかきあげ、扉に向けて千冬がそう言った瞬間、教室の扉が開き男が入ってくる。

その姿を見て千冬を除いた全員が固まった。

一人目である一夏すら超える身長、左頬に目立つ二本の古傷、そして光の無い目。

そして何よりも、鈍感な人間ですら分かってしまう程の敵意と警戒心。

その負の感情を前にして、誰も声を出せないでいた。

「はあ……柳、いい加減警戒を解いてくれ。皆が固まってしまってる」

「……………」

「ああ、悪かった……。そのままでもいいから自己紹介を頼む」

まるで腫れ物を触るかのように千冬は男を宥める。誰もが、千冬の見たことも無い姿を見て驚きを隠せない。

そしてついに男が口を開く。

「……柳隆道。無理矢理適性検査を受けさせられ、結果このIS学園に連れてこられた。どうか関わらないでくれ」

彼にとって地獄を超える日々が幕を開ける。

第三話

IS学園では入学式当日から授業が開始される。普通の高校とは違い普通学科に加えIS関連の授業もあるので初日から始めていかないと遅れてしまうからだ。

故に、一時限目から普通学科ではなくいきなりIS基礎理論を学ぶことになるのだが、窓側の一番後ろ席に座る隆道は教科書も開かず授業そっちのけで頬杖をつきながら外を眺めていた。

一度は高校を卒業し、なるべく女性に関わらない職を見つけひっそりと暮らしていくはずが、ISを動かせるという理由で学園に連れられ一学年へ逆戻り。学業をやり直しという、ただでさえそれだけでも苦痛であるが自身が忌み嫌うISの授業が加われれば苦痛を通り越して地獄と化す。たとえ何を言われようがまともに授業を受ける気は彼にはなかった。

普通ならば教師に授業態度を指摘されるのだが、授業を進めている真耶も、教室の端で控えている千冬も注意すらしない。

実は何度か真耶から注意を受けていたのだが、彼はこれを全て無視、目を合わせすらしない。

元々温厚な性格の彼女が強く言えるはずもなく、SHRで目の当たりにした彼の敵意にメンタルをやられたということもあり、授業の半ば辺りから話し掛けることが出来なくなってしまうた。

千冬も注意はしたいのだが、SHR前の出来事もあつて迂闊に話し掛けられない。未だに敵意と警戒心が強い彼がおとなしくなるまで待った方が良いと判断した。

一時限目が終了し、休み時間が始まった瞬間に周囲の生徒達は一斉に隆道から離れる。

千冬ですら怯んでしまうほどの敵意は一般生徒からすればかなりの精神ダメージとなり、気の弱い人間ならば失神してしまいそうなほど。

女子生徒達にとっては歳上の男子という、一人目とはまた違った魅力があつた為どうか接触し、あわよくば仲良くなろうと計画を立てていたが当の本人がこれでは近づくとすら出来ない。

何せ自己紹介の時に敵意全開で関わらないでくれと言われてしまったのだ。近づいただけで何が起るのか分かつたものじゃない。世間がどれだけ女性の立場が上であろうと目の前の脅威にはどうにもならなかつた。

しかし、そんな中で一人だけ彼に近づくと勇敢な者がいた。
「あ、あのー……。すみません」

隆道に話し掛けたのは一人目である織斑一夏。整った容姿であり、本人に自覚は無いが異性によく好意を寄せられるという、所謂鈍感な男子だ。

彼の自己紹介を聞いて怯んだ内の一人ではあるが、どうにかして会話をしたいと授業中そればかり考えていた。

一夏はSHRの時まで男は自分一人と思っていたのだ。これまで女子生徒からの視線を浴び続けており、精神が限界に近かった彼にとっては歓喜極まる事なので自分を見捨てた幼なじみの事などすっかり忘れ、授業が終わり次第声を掛けるつもりだった。

しかし、相手は千冬が言っていたように歳上であり、今はSHRから続いている敵意と警戒心丸出しな状態。失礼の無いように言葉を選ぶ必要がある。

声を掛けて数秒。隆道は頬杖をついた状態からゆっくりと一夏に顔を向ける。
「……………ああ、一人目の……………織斑だったか？」

「はっ、はい……………。織斑一夏、です」

「まだ面と向かっていなかったからな、悪い。改めて自己紹介するが柳隆道だ。よろしく」

「……………！ は、はいっ！ よろしくお願いします！」

一夏は満面の笑みで返事をし、握手を求めた。すると彼も頰杖をやめ、それに応えた。正直なところ、一夏は自分すら無視をするのではないかとあまり自信がなかった。

入学式の時に他生徒達の会話を小耳に挟んだのだ。自分が見つかつたから全世界で男性に向けた適性検査を行っている。その時はまだ二人目の事は知らなかつたので見つかつたなかつたんだと決めつけていた。

しかしSHRでまさかの二人目が現れた。同じ境遇の人間がいると目の当たりにして嬉しさが込み上げてくるが、その本人はここに来たことに嫌悪感を剥き出しにしていく。

彼の自己紹介を聞いて、自分がうっかりISを起動してしまい、無理矢理検査をされて連れてこられた原因は自分なんだと、きつと恨まれているだろうと考えていたが、玉砕覚悟で会話を試みることにした。

だが、いざ話し掛けてみると無表情ではあるが自分の声に反応し、握手にも応えるという予想とは違う反応。もしかして仲良く出来るかもしれないと一夏は思った。

しかし本当に恨んではないのか、少しでも思ってしまった彼はおそろおそろ聞いてしまふ。

「えつと………柳さん、俺を恨んでいますか………？」

「あん？　なんでだよ」

「だって……、俺が起動しなければ……柳さんは……」

隆道は数秒ほど考える仕草をした後、一夏に優しい声で答える。

「お前が気にすることじゃない。遅かれ早かれこうはなつてた。発覚したのが今になった、ただそれだけのことさ」

「あ、ありがとうございます」

良かった、恨まれていなかった。一夏は今後もやっていけそうだと彼の言葉を聞いて安心する。

この男子同士のやり取りに周囲は困惑と同時に驚愕する。

隆道から、さつきまでの敵意と警戒心がすっかり消えていたのだ。相変わらず無表情に加え目に光は無いがそのやり取りは先輩後輩のそれと変わらない。

理由は分からない。分かっているのは一夏に対しては少なくとも友好的だということ。

彼は千冬に仲良くなるかどうかは知らんと突っぱねていたがそれはあくまで千冬に敵意を持っていたからこそその発言であり、別に一夏と仲良くしないつもりはなかった。

もし自分が逆の立場だったら、もし自分一人以外男子がいなかったら。そう考えるだけでもぞつとする。

仮に隆道が先に発見され、今回のように一夏が後から発見されたら彼は同じ行動を

取ったかも知れない。

流石に馴れ馴れしい態度で話し掛けるような奴だったら他と同様に無視を決め込むつもりであったがそんなことはなく、むしろ自分のせいだと気を遣う姿を見て感心した。

一夏が千冬の弟というのは廊下越しに聞いて知ってはいたがそんなことは関係無い。ISを纏う世界最強の弟とは見えず、織斑一夏個人として彼を見る。一緒くたにせず区別は出来る隆道だった。

「……ちよつといいか」

時間いっぱいまで話をしようとした矢先に第三者が声を掛ける。一夏と隆道の二人は声のする方へ向くと、そこにいるのは肩下まである黒い髪を結ったポニーテールの少女。

「……箒?」

「……………」

少々不機嫌そうな顔をしている箒と呼ばれる少女は一夏をじつと見るだけでなにも言わない。

「知り合いか?」

「あ、えと、はい。幼なじみの箒です。ほら、箒も自己紹介しなつて」

「……篠ノ之箒です」

一夏に幼なじみと呼ばれる箒は用があるのかずつと彼を見ており、隆道を視界にすら入れてない。彼女もまた彼の敵意を感じていた為に本能がそれを拒む。

「話がある、廊下でいいか？」

「えーと、その……」

彼女に呼ばれる一夏であったが、彼としては隆道と話をしたい。しかし六年振りに再会した幼なじみの誘いを無下にしているものかと迷いが生まれる。完全に困惑してしまつた一夏はどうすればいいか分からず彼に目線で助けを求めた。

「俺のことは気にすんな。行つてこいよ」

「す、すみません。また後で来ますから」

「ん」

彼は彼女の後についていく一夏を見送つて、見えなくなった所で再び外を眺める。

一夏の第一印象はしっかりした奴だなと感じた。今の世の中でああいった男はかなり珍しい。女尊男卑の影響を今まで受けていなかったからなのか、もしくは悪意を受けなくてもまっすぐであり続けたのかは分からない。どうかそのまま置いてくれと切に願つた。

「それにしても……篠ノ之、か……」

そう呟く彼の目は、どこまでも暗かった。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

二時限目の授業を務める真耶は教科書をすらすらと読んでいき、生徒達も順調にノートを取りつつ授業についていく。

ここIS学園に入学してきた生徒達は事前予習を必ず行っており、非常に高い倍率を勝ち上がって来た優等生である。なので今行われてる授業は彼女達にとつてただの復習なのだが——。

「……………」

——ここに一人、授業についていけずに頭から煙が出そうな男がいた。

（お、俺だけか？ 俺だけなのか？ みんな分かるのか？ というかこれ、まさか全部覚えなないといけないのか……？）

五冊もある教科書の一冊を手に取り数枚めくっていくが意味不明の単語の羅列にしか見えてない一夏は心の中で唸る。

彼は別に頭が悪い訳ではないが、元々IS学園に入るとは思っていなかった為にこれ

まで I S 関連の事を勉強しなかった事が原因で I S の知識がからつきしだった。

(柳さんは？ 柳さんは分かるのか？ アクティブなんちゃらとか広域うんたらとか全然わかんねえよ……)

隆道の席は一番後ろの窓側。彼が隆道の様子を見ようとすると必然的に体ごと向ける必要があるため、目立つ行動は出来ない。そんな絶対的なピンチに陥っている中、隆道はというと――。

「……………」

—— 一時限目と同様、 ともに授業を受けていなかった。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

「あ、えっと……」

「分からないところがあつたら訊いてくださいね。何せ先生ですから」

そういつて胸を張る真耶。善意からの行動であるが名指しによつて生徒達から注目を浴びる事になり、まったく授業についていけない一夏にとっては公開処刑と一緒である。

こうなつたら素直に自分の弱さを吐く。それしか思いつかなかつた彼は正直に答えた。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

自分の知識の無さを全力で暴露していく一夏。下手に知ったか振りするより正直になつた方が受け入れてもらえる。そう思っていたが――。

「え……………全部、ですか……………？」

彼女は流石に困惑した。まさか今までの授業が全部わからないと言われるとは思わなかつたのだ。まさか、自分の教えが悪いのかと他の生徒にも質問を促す。

「え、えつと……………織斑くん以外で、今の段階でわからないって人はどれくらいいますか？」

当然だが隆道を除く生徒は事前予習をしてるため誰も手を上げない。いたとしてもきつと手を上げないだろう。

「え、えつと！ 柳くん！ 柳くんは大丈夫ですか？」

「……………」

彼女は隆道にも質問を促すが、これもまた無視。一時限目と同様に外を眺めたまま此方を向こうともしない。

「う、うう……………」

完全にお手上げだった。一時限目まで剥き出しだった敵意も二時間目の始まる頃に

は何故か消えていたので、これを機にどうか会話を試みるがまったく相手にされない。

どうすればいいと悩んでいると教室の端で控えていた千冬が一夏に質問を投げ掛ける。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

彼が正直に答えた瞬間、目にも止まらぬ速さで出席簿制裁が炸裂する。

(なにやっつてんだあいつ)

現在授業ガン無視状態の隆道だったが、聞こえない訳ではないので一連のやり取りを聞いていた。表情こそ出さないが彼の正直さに流石に困惑せざるをえない。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「………はい、やります」

これに関しては学園の備品を捨ててしまった一夏が悪い。反論は許さないとわん

ばかりの眼力で彼は頷くしかなかった。

「ISはその起動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

千冬の口から炸裂する怒濤の説教にぐうの音も出ない一夏。

実際のところISに限らず物を扱う際はそれに伴った知識等は必要不可欠だ。

世の中には知らずに扱ったり、または間違えた扱いなどすると最悪死に至るといった物が日常生活にも紛れてるのだ。

ISと比べるとスケールが小さくなってしまいが自動車が良い例であろう。

知識が無い、操作を知らない、規則を忘れる、ミスをする等の原因で毎年死亡事故が後を絶たない。そうならないために知識をつける、訓練をする。

そんな当たり前の事を言われる彼を他所に、隆道は考えに耽る。

（『兵器』、ね……。それ以外のなんだってんだか）

ISが一般的にスポーツとして認識されようと、元を辿れば確かに兵器だ。

実弾兵器、光学兵器等を積んでおいて、あまつさえやつてることは同じ人間同士の対戦。

なにがスポーツだ、やつてる事は代理戦争じみたものじゃないかと。

これ以上聞いても仕方無いかと、意識をそらそうとした隆道だったが――。

「……貴様、『自分は望んでここに在るわけではない』と思ってるな？」

――ピクリと隆道は反応する。してしまふ。

「望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

(……いつ……！)

人は一人では生きていけない。物や、知識や、環境はかつて人々が結束して培ってきたもの。それらがあるからこそ人は今まで生きてこれたのだ。

山奥で一人自給自足で暮らす者は世の中に存在するが、それはかつて人が広めた知識や他者によって生きてきたからこそ出来ること。生まれた頃から一人で生きられる人間など存在しない。

昔から現実主義である千冬は一夏に現実と直面しろと言いたかった。一夏や周囲の生徒もその言葉の意味を理解するが、隆道は違った。

(つまり受け入れたくないなら死ぬってか……！　死なせなかったのはお前らだろうが……！)

隆道は適性検査でISを起動してしまった際、今後の未来を直ぐ察知していた。

解剖されるか、実験台として研究されるか、学ばせるためにIS学園に連れてかれる

か。

どう転んでも絶望。一生 I S に関わる事になる未来が見えて錯乱してしまい、人生を I S に奪われるくらいならいっそ死のうと自傷行為に走った。I S の機能によつて死ぬ事はもちろん出来なかつたが。

拘束された後も何度か自殺、又は逃亡を繰り返すが全て阻止され、最終的に I S 学園に繋がるモノレール手前で護衛十人を相手に足掻いたのを最後に諦めた。

(何が保護だ……いったいどれだけ俺から奪えば気が済むんだ……！)

I S が出現して以来大切なものを次々と奪われ、今度は自由を奪われた。隆道はより一層 I S と女性に対し憎悪だけが増え続け、それはどす黒い何かに変わっていく。

(ああ……改めて痛感したぜ、ありがとよ。お前ら女は……I S は俺の……！)

ここに来る前から既に擦り切れていた隆道は、修復が不可能に近いほどに壊れかけた。

「え、えつと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、がんばって？ ね？ ねっ？」

そんな隆道の心中なぞいざ知らず、真耶は一夏の両手を握つて詰め寄ってくる。彼より身長が低い事から、必然的に上目遣いになっていた。

「はい、それじゃあ、また放課後によろしくおねがいます」

「ほ、放課後……放課後に二人きりの教師と生徒……。あつ！　だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……。それに私、男の人は初めてで……」

顔を赤らめてとんでもないことを言い出す真耶。自分の世界に入ってしまった摩耶を前に、一夏は彼女の危ない発言と周囲の視線により冷や汗が吹き出る。勘弁してくれと思つた。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」

「あー、んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

これ以上は不味いと判断した千冬は咳払いで真耶を妄想世界から引きずり出す。

彼女は慌てて教壇に戻るが——何も無いところでこけた。

「うー、いたたた……」

(……大丈夫か？　この先生……)

この先不安を覚える一夏であつた。

二時限目が終了し、二度目の休み時間が始まって直ぐの事。

一夏は真つ先に隆道の席へ向かい彼に声を掛ける。

「柳さん、さつきはすみま……せ……」

彼は隆道を見た途端、言葉を詰まらせた。

雰囲気は最初に話し掛けた時と違う。なにかどす黒いような――。

「……………っ!？」

思わず一夏は後退った。理由は分からないが、触れてはいけない気がしたのだ。

何かあったのだろうか、もしかして千冬姉がSHRで言っていたのはこれの事なのかと推測し、千冬か真耶に連絡しようとしたが、それも杞憂に終わる。

「……………? ……ああ、悪い。気づかなかったわ」

隆道が一夏に気づき、軽く謝ったと同時に先程の雰囲気は消えていた。

「だ、大丈夫ですか?」

「ああ……、大丈夫……大丈夫だ」

隆道はそう言ってるが、とても大丈夫そうには見えない。今はそつとした方が良いのでは無いかと思い、一言言っただけでまた後にしようとして席に戻ろうとした――その矢先。

「ちよつと、よろしくって?」

第四話

「へ？」

隆道の事を氣遣い自分の席に戻ろうとした一夏だったが、唐突に声を掛けられ素っ頓狂な声を出してしまう。

そこに現れたのは金髪の少女。透き通った青い瞳がややつり上がった状態の彼女は見定めるように二人を交互に見る。

僅かにロールがかかっている髪は高貴な雰囲気漂わせており、腰に手を当てる仕草からして異国のお嬢様ということが二人には直ぐ分かった。

そして、隆道は察した。

こいつは敵だということも。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

目の前の少女は知り合いじゃない。かといって話し掛けられる理由が分からない。

彼女も自己紹介はしていたが一夏は全く覚えてなかった。

自分の姉がI S学園の教師を、更に担任を務めてたことや二人目の男性操縦者がいたりなどというダブルインパクトを喰らっていたのだ。他の事を頭に入れる余裕は無かった。

そういった理由から当たり障りの無い質問をする彼だったが、彼女は返事が気に入らないのかわざとらしく声を上げた。

「まあ！ なんですの、そのお返事は。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なので、それから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

（やつばいるか……『こういう奴』も。そりやそうだ、いないほうがおかしい）

一夏は初対面にも関わらず偉そうな態度を取る彼女に不快感を覚え、隆道は想定していたからか別に思うことはなかった。

女尊男卑が生まれた元凶ともいえるI S。それを扱う学園に入学するのだからそういった思想を持つ人間がいても不思議ではないのだ。

関わるだけ無駄だと、隆道は得意の無視を決め込むが彼はそうはしなかった。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

正直者である一夏は不機嫌に答えるが、彼女からすればかなり気に入らなかつたものだったようでつり目を細めて見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコツトを？ イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを!？」

名前だけでは飽きたらず、訊いてもいないことすら喋りだす始末。

自然と自らを上に見立て、男子二人を下に見るそのやり口を見て女尊男卑思想が根強いと隆道は心の中で舌打ちをする。

「あ、質問いいか？」

「ふん、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

何を思ったのか一夏はセシリアに質問する。いったいこいつから何を聞きたいんだと逆に興味が湧く隆道であったが、その内容が中々ぶつ飛んでいた。

「代表候補生って、何？」

一夏の質問内容に周囲で聞き耳を立てていた数名がずつこけ、あの隆道ですら頭を机に勢いよく打ち付ける。

隆道が入学して初めての貴重なリアクションだった。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたつ、本気でおっしゃってますの!？」

凄まじい剣幕で一夏に詰め寄るセシリア。その表情は血管が浮き出そうなほど怒りに満ちている。

「おう。知らん」

「うっそだろお前……」

流石にこれには隆道も先程迄の憎悪が引つ込む程の困惑。IS知識が無いことは前授業のコントじみたやり取りで知っていたがここまでとは思わなかった。

彼女に同情してるわけではないが、それはないだろうと思わざるを得ない。

「……………」

セシリアの怒りが光の速さで一周処か三周ぐらいしたのだろう。急に冷静になり頭痛でも起きたのかこめかみを押さえながららぶつらぶつ言い出す。

「信じられない、信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら……」

「柳さん、代表候補生って?」

セシリアが考えに耽る中、隆道の調子が戻ったのを見て気づいた一夏は再度質問をする。

「……各国に国家代表 I S 操縦者つているだろ、その候補だつての。つーか単語から理解出来るだろうが」

「うっ……、すみません……」

「考えなしの発言はやめとけ、今後苦労するぞ。口は災いの元つて言うしな」

隆道の軽い説教で一夏は肩をすぼめる。言われてみればそうだと納得し、同時に発言に気をつけようと反省することにした。

端から見れば男子二人のやり取りは兄に注意される弟のように見える。周囲の生徒達は、もしかしたらいい人なのだろうかと思つてしまう。

あの輪に入れたらなああと数人は羨ましがるが、きつと叶わないだろう。

「つまり、エリートつてことですよね」

「そう！ エリートなのですわ！」

一夏が説教を受けてるその横で未だにぶつぶつ言っているセシリアだったが、『エリート』という単語に直ぐ反応し、一夏に向けて勢いよく指を指す。

人に指を指すなど言いたかったが、話が余計に拗れそうだと悟つた一夏は黙りを決めた。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……、幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの?」

一夏は馬鹿にしてるつもりはなく、幸運を理解しろと言われたから率直に応えただけ。しかしセシリアはその応答が凄く気に入らなかつた。

しかし、セシリアは気づかない。選ばれた人間というところにスポットを当てれば、それに該当するのは世界中にある程度存在する代表候補生であるセシリアではなく、世界に二人しかいない男性操縦者である一夏と隆道の方だ。

皮肉にも現実を理解していないのはセシリアの方だった。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。そこに座ってるあなたは授業すらまともに受けようともしない。ISを操縦出来ると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが。ていうか柳さんについては自己紹介で言っただろ」

「ふん。まあでも? わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ?」

この態度が優しさなら世界中は優しさで溢れていることだろう。優しくすると言っ

てるが男を下に見ることは変わらない。

喋れば喋るほど典型的な女尊男卑思想だということに男子二人はうんざりしていた。

普通の男子ならこれまでのセシリアの発言によって確実に怒りを覚えるだろうが、こ
こ十年そういった女性と遭遇してきた隆道にとっては聞き慣れたようなものなのでか
なり飽きている。

もう帰ってくれ、関わらないでくれとしか思わない隆道だったが、セシリアは止まら
ない。

「ISのことで分からないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げて
もよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリートですから」

唯一とエリートを強調して威張るセシリア。

IS学園で行われる入学試験には学科試験と実技試験が存在する。そのうちの実技
試験はISを操縦し、最終的に教官と模擬戦を行うという内容だ。

幼い頃から代表候補生か、もしくはは企業のテストパイロットでない限りISに触れる
のは参加者全員がこの時が初である。

操縦が上手かろうが下手だろうが構わない、重要なのはそこじゃない。ISを操縦出
来るかどうかを判断する為の試験なので、必ずしも教官を倒す必要はないのだ。

唯一教官を倒したという優越感に浸っているセシリアだが、またしても気づかない。

操縦経験が無いであろう参加者の中で、操縦経験がある状態で試験を行っているのだ。例えば教官を倒せなくても、上位に入っていないければおかし。

先程一夏に馬鹿にしているのかと言ったセシリアだが、こいつこそ馬鹿なんじゃないかと隆道は思った。

そんなことを考えてると、一夏はなにかを思い出したのかセシリアに待ったをかける。

「入試つてあれか？　ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外ありませんわ」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏の一言でセシリアだけでなく隆道も固まる。

（教官を倒した？　二カ月前に起動が発覚したのにか？）

もしそうだとしたらIS操縦者はレベルが低い事になる。

セシリアは相当ショックだったのか目玉が飛び出そうなほど見開いた。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

セシリアは更に固まった。あれだけ唯一教官を倒したと豪語していたにも関わらず

目の前の、しかも起動して間もない男が倒したと言ってるのだから。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた! あなたも教官を倒したって言うの!？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!? たぶんってどういう意味かしら!？」

自身の自慢話とも言えるものをあつさり粉碎されたセシリアはどんどんヒートアップしていく。

完全に蚊帳の外となった隆道はもうお前ら他所でやれと願うが、一向に止まる気配は無い。

「あなたは! あなたはどうなんですの!？」

曖昧な返答しかない一夏に痺れを切らしたのか、矛先を隆道に向け問い詰める。

「……………」

しかし、隆道にはセシリアのとてつもない剣幕など通用しない。動かざること山の如しという表現が似合ってしまうほど目すら合わせずひたすらガン無視を決めていた。

「~~~~っ!」

血管が浮き出る処かはち切れそうなセシリアを見て、ヤバいと察した一夏は代わりに

訊くことにした。

「あー……、柳さん。柳さんは入試どうだったんです？」

「……受けてると思うか？」

「で、ですよね……」

隆道の自己紹介を聞いていれば入試を受けていない事など直ぐに分かる。それに気づかないほど冷静じゃなかったのだろう。

これ以上は非常にまずい。セシリアは爆発しそうであり、このままだと隆道から先程消えていたどす黒い何かが再び出てくるかもしれない。

一夏は、ひとまず彼女を落ち着かせる事を優先した。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ——」

言葉を遮るようにチャイムが鳴り響き、セシリアの怒りは無理矢理鎮火される。

「つ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!」

そういつて彼女はズカズカと自分の席へ戻っていく。

よくない、二度と来ないでくれと二人は思うしかなかった。

「……とところで織斑、さつき教官を倒したって言うってたが……」

「はえ？ え、えと。いきなり突っ込んできてかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのま

ま動かなくなりました」

「ただの自爆じゃねえか」

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時限目と違い、三時限目は真耶に変わり千冬が教壇に立ち授業を行う——はずだったのだがふと何かを思い出したのか話を変える。

「ああ、その前に来月に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

一夏は初めて聞く単語に疑問を抱く。だが代表者という単語には、何故か猛烈に嫌な予感がした。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると変更はないからそのつもりで」

それにより教室は色めき立つ。一夏は非常に面倒な役割だという事は理解した。隆道は相変わらず我関せずを貫いている。

誰がやるのかなと他人事に考えてる一夏であったが——。

「はいっ織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏……他にいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

——まさかの生徒からの推薦により他人事ではなくなった。

「お、俺？！」

いきなり名指しされ、つい立ち上がってしまふ一夏。

その時に感じたのは数多くの視線。振り向かずとも分かるその視線は無責任で勝手な期待を込めた眼差し。

しかし勝手に決められた本人からすればたまったものじゃない。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

横暴だ。そんなの言つたもん勝ちじゃないか。そう思わざるを得ない一夏は最後の手段に出ようとする。

「だ、だつたら俺は——」

『お前が気にすることじゃない——』

「——いや、出来なかった。」

「……すみません、なんでもないです」

言いかけた言葉を止め、一夏は席に着く。

彼は出来なかった。道連れにする為に、巻き込む為に隆道を推薦することなど。

今後仲良くやっていけそうだというのに、自らそれを壊すなんて最低だと。

なんとしてでも代表者になることを回避したかったが、彼を巻き込む事だけではどうしても出来なかった。

代表者は避けられない。諦めかけたその時——。

「待つてください!!? 納得がいきませんわ!」

机を強く叩き立ち上がるセシリア。

彼女は自分こそクラス代表に相応しい。周りの生徒は自分を推薦するはずだと思っていたが、推薦されたのは自分ではなく男。

無理矢理鎮火した怒りは再び火がつき、直ぐ様膨張し、ついに爆発する。

「そのような選出は認められません! 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしで

すわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に來ているのであつて、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!」

一度爆発した怒りは収まりつかず、次第に加速する。

激昂のあまり、本人も既に自分が何を言つてるか分かつてないのだろう。

「いいですか!？」 クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」
セシリアは止まらない。止まらない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリアの連続する罵倒に、つい我慢出来なくなつた一夏はつい口を滑らせてしまふ。

罵倒が一気に止み、聞こえてしまったかと後ろを向くと、休み時間同様顔を真っ赤にしているセシリアを見てやつてしまったと後悔した。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

先に侮辱したのはどっちだと一夏は思ったが、今のセシリアには何を言っても同じことだろう。

完全に敵意を向けたセシリアは机を叩き、大きく叫んだ。

「決闘ですわ!」

いきなりの決闘宣言に困惑する一夏だが、散々言われっぱなしで黙っていられなかったのかこれに同意する。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう? 何にせよちようどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね!」

売り言葉に買い言葉から始まった決闘宣言。教室の隅でそのやり取りを見て隆道は非常に不愉快だと、下らないと思った。

(代表候補生が素人に決闘ね……:タチが悪いにもほどがあんぞ)

もはや自分の實力を示したいことではいっぱいなのだろう。色々見えていない事が隆道には丸わかりだ。

(つーか教師は何やってんだよ、止めろよ)

教師二人の方に目を向けるが、その姿からして止める気配がない。真耶は終始おろおろし、千冬は口をささず傍観している。

真耶はともかく、何故千冬は何も言わないのか。隆道は思考の末、ある推測が浮かぶ。
(まさか、戦わせようとしてる……?)

そんなはずはない、経験と知識が圧倒的に足りない一夏に代表候補生をぶつけるなど正気の沙汰ではない。

そう思いたい——すぐにそんな甘い考えは消える。

(まさか……自分の弟すらもあんたは……!!)

心が歪みに歪んだ隆道は、自分の家族である弟すらも餌食にしようとしているのだという歪んだ結論にたどり着く。

だが実際は違う。戦わせようとしているのは間違っていない。しかし女尊男卑の餌食にしようとしてる訳でもない。

一夏のI Sに関する知識は悲しいことに皆無だ。今後様々な壁にぶち当たることだらう。

最初に圧倒的強者をつつけ、今後の成長を促そうという、千冬なりの考えだった。

しかしこれは残念なことに適切ではない。成長といっても必ず段階というものが存

在する。知識を身につけ、基礎を学び、実践する。この流れがあるから人は成長するのだ。

言葉足らずな千冬の行動一つ一つが一夏を無意識に荒事に巻き込み、隆道の憎悪を膨らませる。

彼女もまた、世間一般的に大人であれど未熟な人間であった。

そんな隆道と千冬の考えなんぞ知るわけもない一夏はまたもや爆弾発言を落とす。

「ハンデはどのくらいつける?」

「あら、早速お願いかしら」

セシリアは一夏の発言にほくそ笑んだ。

当然だと。素人が代表候補生に勝てるわけがないだろうと。やはり男は弱いのだと。

しかし――。

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

(あのバカっ! それを言っちゃ――)

思わず隆道も立ち上がろうとするが、この発言によりクラスからドツと爆笑が巻き起る。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ」

「織斑くんとか、柳……さんはISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

一部を除く生徒は笑う。一夏はまた失言してしまったと後悔した。

セシリアの罵倒に反応したときもそうだったが、隆道に注意されたにも関わらず考えなしの発言を二度もしたのだ。

きっと失望されただろう。生徒達に嘲笑われることよりも、隆道に失望されたかも知れない事が頭を過る。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふつ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

生徒達に嘲笑われる一夏を見て気分が良くなるセシリア。さっきまでの激昂などすっぱりと消えており、明らかな嘲笑を顔に浮かべていた。

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言つて、ハンデ付けてもらったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはいい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも知らないの？」

「……………」

一夏の斜め後ろ席にいる生徒に助言を貰うが、その表情は苦笑と失笑が混じったもの。

頭に來た一夏は意地を見せるが、それが余計に生徒の嘲笑いを誘う。

一夏はこれまでの流れで痛感した。隆道の注意をしつかりと肝に命じておけばよかったと。

始まりはセシリアの罵倒だったが、代表候補生との試合が決定したり嘲笑われたりする原因は、他でもない自分自身だ。ダメな奴以外なんだというのだ。

許してくれると思えないが、ひとまず後で謝りにいこう。そう一夏は決めた。

猛省した一夏を余所にセシリアは思い出したかのように言う。

「……とところで、さっきからなにも言わずに黙っているあなた」

「……………」

教師を含む生徒全員が驚愕する。気分が良くなったセシリアが、今度は隆道に牙を向こうとしてるのだ。

今は隆道からは何も感じないが、いつまた最初に会った時の敵意を出してくるか分からない。むしろ、それがかえって不気味に感じられた。

しかし、セシリアは気分が高揚して麻痺してるのか、そんな不気味とも言える隆道に食って掛かる。

「なんとか言ったらどうですか？ それともわたくしに恐れをなしたのかしら？」

「……………」

彼女の挑発に、彼は全く微動だにしていない。顔を向けていないため表情も分からない。

流星に彼女もそんな隆道の態度を見て段々と不機嫌になる。

「つ…………… あなたつ、さつきから黙って……………こちらを向きなさい！」

「……………」

ここでもうやく隆道は反応し彼女の方を体ごと向く。立ち上がりずに、手をポケットに突っ込んだままの姿勢で。

それだけの動きであったが、隆道を見て全員の息が詰まった。

『どす黒い何か』がそこにあった。

その顔は歪み、目は鋭さを持つという生徒全員が見たこともない表情。

そんな彼は黙って彼女を見据えている。

言い様の無い殺意はセシリア以外も巻き込み、数人は吐き気を催す。

なんだ、なんなんだこれは。目の前のこれはいったいなんだと彼女は恐怖した。

「随分と言ってくれるじゃねえか」

「!!!?!?!」

そう一言、自己紹介以来一夏を除いた全員に発した言葉は、彼女達の心臓を締め付けた。

(柳、お前っ……!)

千冬は隆道を見て異変に気づいた。

それは朝方に千冬に対して向けられた時のものとは違う。

(悪化している……!?)

政府に無理矢理検査され、適正が発覚した後の拉致監禁。入学直前で護衛十人を相手し、千冬との会話で怒りと憎悪は抜けたがそれも微々たるもの。

そこからは二時間目の千冬の発言、休み時間のセシリアの絡み、そして三時間目の一連。

二度ほど一夏との会話により治まってはいたが、実はただ感情に蓋をしただけ。心という壺に溜まりに溜まった憎悪はいつしかどす黒い何かと殺意を生み出し、溢れ出す。

隆道は少なくとも憎悪が治まるまでここに来るべきじゃなかった。

「女が強い……ね。そんなの I S ありきの話だろうが」

「あ……う……」

そのあまりにも強烈な殺意に、セシリアは言葉を出せない。逃げ出したいが体が動かない。

「どうした、さっきまでの威勢はどこいったんだよ、なあ」

隆道が喋る度に胸が締め付けられる。

千冬はなんとしても止めたいが、体が動かない、動けない。

「随分と静かじゃねえか。ほら……」

ナントカイツテミロヨ。

その最後の言葉を聞いた生徒全員は椅子から転げ落ち、数人は気絶する。セシリアだけは立ったままだったが、指一本動かすことすら出来なかった。

「……………ふう」

小さくため息を吐いた隆道はゆっくりと立ち上がって教室を出ようとする。

「や、柳……………さん……………」

一夏は教室を出ようとする彼に声をかける。放っておくといけない気がしたからだ。

しかし、思うように言葉が出ない。そんな一夏に気づいたのか、彼はゆっくりと振り向き――。

「……………悪かったな」

――哀しげな表情で一言だけ。そのまま教室を出ていった。

第五話

IS学園の屋上は朝方から夕方まで開放されている。

そこには数脚のベンチが備え付けられており、昼食を取る者、日向ぼっこをする者、読書をする者と様々。

しかし、利用者は多いとは言えない。昼食時は大抵の生徒は教室、若しくは食堂で食事をする。わざわざ屋上へ来る生徒は極少数だ。

更に加え、今はまだ時間的に授業中だ。昼休みですらない。

そんな屋上で、備えてあるベンチに座り空を見上げる男が一人。

「……………」

三時限目で色々と限界突破した隆道は、周囲に無差別な殺意と憎悪を撒き散らした後、一先ず静かな所へ行きたい、一人になりたいという理由で授業を放棄し屋上に来ていた。

元々まともに授業など受けてなかったのだ。そこに關しては反省もしていないし後悔もしてない。

ここ半月は常に監視され、自分の待ち受ける絶望という未来に怯えてた彼は、今はと

にかく静かな場所が欲しかった。

「ん……」

四月特有の暖かな風は隆道の心を少しずつ浄化していく。こんなにも静かな所は素晴らしいものなのかと感動を覚えずにはいられない。

辛い事があつたらここに来ようと、彼にとって初めての憩いの場が決定した。

「……………」

心を休めながら思い出すのは教室で最後に目にした光景。

生徒達がその場で転げ落ち、教師二人は尻もちをつく。自分を見る目は嘲笑いではなく恐怖そのもの。あれが男を虐げる強い女なのかと思うとため息が出そうになる。

確かにこの時代の女性は強い。I Sに乗ってさえしまえばなす術など男には無いし、権力の差は比べものにならないほど。

だが、それだけだ。I Sを抜きにすれば、女性はか弱い生物に成り下がる。生身で男に勝てるほど訓練してる女性など多くは無いだろう。

といつても、それはI Fの話だ。そんなこと考えてもこの世界からI Sは無くならない。所詮は現実逃避した妄想だ。彼は考えるだけ無駄な事を頭から消し、別の事について思考する。

生徒達から無責任かつ勝手な期待をされ、本人の意思など尊重されない横暴を受けた

一夏。結果として代表候補生と揉めるという事態に発展したが、彼は我関せずを貫いた。

一夏が考えなしにいくつか発言したことについては別になんとも思っていない。義務教育を終えたばかりの人間が精神面で未熟なぞ当たり前だと思っているからだ。もし一夏に対し説教をかます歳の近い者がいるとするならばそれは異常者か、自分は大人と錯覚してるかの二択である。

本当は歳上である自分が一夏に助け船を出すべきだった。望まぬ事を強いられるのは辛く苦しい事だということをよく知ってるから。

しかし、女性に関わりたくない故に何も言わなかった。そして自分だけ逃げ出した。これでは見捨てたようなものだ。彼は胸を痛める。

一夏は今もあの場所にいることだろう。逃げた自分と違い現実と向き合ってるに違いない。

ここには男子は二人しかいない。お互い支え合うしかない。落ち着いたら教室へ戻ろうと彼は決意する。

あの場所へ戻る事は避けたい所。しかし、最早そんなこと言ってもらえない。左手で胸を押さえつけながら彼は呟く。

「だからもう少しだけ……、もう少しだけ待っててくれ……」

授業が全て終了し、現在は放課後。

一日全ての授業が終了し生徒達が賑やかになる中、教室で項垂れてる男がいた。

「うう……意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

一夏が現在までに体験した出来事は、それはもう地獄だった。

昼休みは食堂に移動するとドラゴン・エストの如くぞろぞろと全員ついてくる。食堂についた際もそれはまるでモーゼの海割りのように人混みは割れ、珍獣扱いされてるような気分となった。

そして現在、他学年や他クラスからは女子が押しかけ小声で話し合っている。入学式から状況は変わってなかった。

(柳さん……、戻ってこなかったな……)

隆道は、三時限目以降姿を現さなかった。

無理も無い。居たくもない場所に多少なりとも居続けたのだ。二回目の休み時間か

ら様子がおかしかった事から、ついに限界が来てしまったのだろうと彼は推測する。

それよりも隆道が出ていった後が大変だった。

生徒九割が転げ落ちたまましばらく放心状態であり数人は気絶、セシリアは立ったまま硬直し、教師二人も尻もちをついたままだった。三時限目を目一杯使って回復したはいいものの、皆の調子が元に戻ったのがつい先程。

授業中は生徒全員が終始黙り、千冬や真耶ですら活気がなかった。

特に一番酷かったのはセシリアだ。顔は常に青く染まっており、放課後の時ですらおぼつかない足取りで教室を出ていった。

隆道を探しに行きたかったが、校内の構造なぞ全て理解している訳ではない為、探すにも探せなかった。確実に迷うと確信していた。

「……………」

あの時の隆道から感じたものは、一夏には到底理解出来ないものだった。いったいどんな人生を送ればあんな表情や感情が出るのか。

世間が女尊男卑社会である事は理解している。実際虐げられる男性や権威を振り翳す女性はこの目で見ており、遭遇したこともある。

だが、その内容も女性にパシリをやらされたり男性に威張り散らすという底が知れた物。隆道の憎悪を見れば、受けてきたものはその程度ではないはずだ。何れ程の事をさ

れたのか、非常に気になる一夏であるが――。

「訊けるわけないよなあ……」

人のトラウマを扶ることなど出来やしない。そんな最低な人間になりたくないと考えてに耽つていると――。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

急に声をかけられ顔を上げると、副担任の真耶が書類を片手に立っている。いったい自分に何の用なのかと理由を考えるが、見当がつかない。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて一枚の紙と二つの内一つの鍵を渡された。もう一つの鍵は隆道の物だろう。

I S学園は全寮制である。生徒は全て寮での生活を義務付けられており、その理由も授業中に判明した。

それは将来有望になるであろうI S操縦者達を保護する目的というもの。未来の国防が関わっているとすると、他国からの勧誘がある可能性が出てくるのだ。実際どこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死である。

「俺の部屋、決まっていんじゃないじゃなかったですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅か

ら通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、その辺りのことって政府から聞いてますか？」

最後は周囲に聞かれる訳にはいかないのか、一夏にだけ聞こえるように耳打ちをする真耶。

前列の無い男のＩＳ操縦者であることから、国としても保護と監視の両方をつける算段だ。

一夏がニュースで取り上げられてから彼の自宅にはマスコミや各国大使、挙げ句の果てに遺伝子工学研究所からやってきた人間すら押し掛けて来たこともあった。

『是非とも生体を調べさせてほしい』

と言われたときは流石に戦慄した一夏だった。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたんです。一ヶ月もすれば個室の方が用意出来ますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「分かりました、でも別に相部屋でも構わないですよ。相手は柳さんですよね」
そう言った直後、真耶は暗い顔をしてしまう。

しまった、彼女も隆道の憎悪に当てられたのだと思い出し、後悔してしまふ。

「あ、あ、あの。や、柳、君、は——」

未だに恐怖心が残っているのか吃る真耶。

ダメだ、話を交えようと一夏は模索する。

「あーっと、柳さんの事は置いときます。……それで、部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備出来ないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

聞き慣れた声の方を向くと、そこには大型の黒いシヨルダーバッグと、一夏のものである中型のバッグを持つ千冬がいた。

相変わらずのつり目であり、一夏はつい怯んでしまう。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

大雑把過ぎて心なしか涙が溢れそうな一夏。

多少なりとも娯楽を入れてくれたっていいのではないかと思ってしまう。

「じゃあ、時間を見て部屋に戻ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間がちがいますけど……えっと、その、織斑君は今のところ使えますん」

「え、なん——、あー……そういうことですか」

何故入れないんだと言い掛けた所で一夏は思い出した。この学園には男子が二人しかいない。今は女子の方が優先されてるのだろう。現時点で入れないとなると調整が済んでいないのだなと考える。

「察しが良くて助かる。同年代の女子と入りたいなんて言い出したらどうしようかと思っただぞ」

「おつ、織斑君つ、女子とお風呂に入りたいんですか？だつ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

そんなことすれば社会的に抹殺されるだろう。倫理的にもアウトだ。入りたいなど言ってもいけないのになんでそうなるんだと。二時限目の時もそうだったがこの人は事ある毎にこんな調子なのだろうかと思わずにはいられない。

「ええ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

どうしてそうなるんだと一夏は頭を抱えそうになった。どっちに転んでも結果は悪かった。

明らかに度合いが違うだろうが、隆道もこんな感じで女性の相手をしてきたのだろうか。そうだとしたら、確かにこれは堪らない。

そんな騒ぐ真耶の言葉が伝言ゲーム的に伝播したのか、早くも廊下では女子談義が花

を咲く。

「織斑君、男にしか興味がないのかしら……?」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交遊関係を洗って! すぐにね! 明後日までには裏付け取って!」

もう勘弁して欲しかった。いったい自分がなにをしたというのだ。女性を嫌うつてのはこういう感情なのだろうかと一夏の思考はぐるぐる回る。

「えっと、それじゃあ私たちは——」

真耶がそう言いかけた途端、突如と廊下がより一層騒がしくなる。一夏は気になったその方へ顔を向けると——。

「……………」

「や、柳さん!?!」

そこには無表情の隆道が佇んでいた。今の彼からは憎悪も殺意も感じられない。

「……………っ!」

千冬と真耶は隆道が現れた事に驚愕すると同時に顔を歪ませ、後ずさる。それを見て一夏は女性に対しての敵意と警戒心はまだあるのだと推測した。

「……………いちいち怯んでんじゃねえ、それでも教師かお前ら」

「や、柳さん! 今までどこに行ってたんです!?!」

「しばらく一人になりたかっただけだ、心配かけたな」

彼の声を聞いて一夏は安心した。自分に話しかけるその声は、最初に顔を合わせた時と同様の優しげなものだったから。

雰囲気を見るからに三時限目の時にやらかした事については何とも思っていないように思える。だが一夏は謝らずにはいられなかった。

「柳さん。俺、柳さんの注意を受けたのに……あんな……」

しかし、謝ろうとするが言葉が失速する。これでもし、隆道が自分に対し失望していたら、そう思うと堪らないからだ。

「そこまでだ織斑」

そういつて一夏に指を指す。それ以上言うなど隆道は言葉が続ける。

「俺が気にしてるように思うか？ もう過ぎたことだろうが」

「で、でも……」

「その話は終わりだ。それにあれはお前のせいじゃない、気にすんな」

一夏は涙が溢れそうになる。

ここにいるのは辛いはずなのに、苦しいはずなのに自分に気を遣ってくれる彼を見て胸が一杯になる。

ああ、本当にいい人だと。

「……ところで」

そういつて優しげな声は敵意剥き出しのそれに変わり、千冬の方へ向かう。

千冬の持つシヨルダーバッグを勢いよく奪い取り、隆道はそのまま千冬を問い詰めた。

「これを用意したのはどこのどいつだ。あんたら I S 学園の連中か、それとも政府の野郎共か、どっちなんだ。答えろブリュンヒルデ」

敢えて千冬の嫌う名で問う彼は、目で殺さんというばかりに千冬を睨む。

彼は寮生活の用意なんてしていない。家族も既にもいない。となればこれは誰が用意したのか。その眼力の前に千冬は素直に応えざるを得なかった。

「う……、根羽田ねぼたと名乗る家政婦が用意したそうだ。……我々じゃない」

「根羽田……？ ああ、あいつか。まだ居たのかよ……」

そういつて彼は睨みをやめて頭をかくという、如何にも面倒そうな素振り。どうやら『根羽田』という人と知り合いの様だ。

「あの、その根羽田っていう人は……？」

「ああ、親父が雇った家政婦さ。まったく、もう居ないから来る必要ねえつつてるのに……」

（家政婦？ もう居ない？）

なんの事だか一夏は分からない。彼の家庭事情など一夏は一切知らないのだ。

「まあ、いいわ。そいつが用意したってんなら、別にいい。……あとそのあんた、早く鍵寄越せよ。俺も寮生活なんだから？」

「あ、えう……ど、どうぞ……」

真耶はおそるおそる鍵を渡す。

周囲で聞き耳を立てる他学年と他クラスの子は彼と教師二人のやり取りに困惑を隠せない。何故注意しないのかと。何故何も言わないのかと。先程から教師に対し失礼極まる態度の彼だが、教師二人は何も言わない。

言えないのだ。三時限目での、教師二人から見れば突如どす黒い何かと殺意が出たのだから下手に触ればまた再発してしまうと。

原因の大半が千冬の未熟さ故なのだが、常に無表情か殺意で歪むかの二択しかない隆道の心を察する事など流石の千冬でも不可能だった。

「え、えつと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑君、や、柳、君。ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

そういつて千冬と真耶は教室から出ていった。一夏はため息混じりに立上がり書類に目を通し、隆道も横から顔を覗かせる。

「……寮まで五十メートルしかないのにどうやって道草くえつてんだよ、アホか」

「あ、やっぱり柳さんもそう思いました？」

「織斑君、柳くんと仲が良さそうでしたね……」

「ああ……」

廊下を歩く二人は活気がない会話をしていた。

一夏はいつの間に関彼と仲良くなつたのだろうか。休み時間の出来事を知らない二人は一夏に向ける優しげな声を出す彼に驚きを隠せなかつた。

「三時限目の時もそうでしたけど……、織斑君は柳君の……アレ、は感じなかつたのでしょうか」

「いや、織斑は感じてはいただろう。柳は我々女にだけ向けてたんだ……」

隆道の女性とI Sに対する敵意は相当なものだ。二つの要素を必然的に持つ二人が、彼から信用を得る可能性は限りなく低い。

『誰が信用なんぞするか。俺にとってお前ら女は敵だ』

いったい今までどれ程の目に会つて来たのだろうか。それを知るのは今や隆道本人だけだ。

調べる必要がある。そう思考した千冬は、ある人物に協力を仰ぐ事にした。

「これからどうしましょう……私なんて、未だに見向きすらされてないんですよ……？」
「我々に対する敵意はそうとう根深い。時間をかけていくしかない……」

彼を助けたい、その思いは本物だ。

しかし、自分達の未熟さ故に更に溝は深まる事に気づかない。

彼が彼女達を信用する日は——恐らく来ない。

「じゃあ、結局あのイギリス人と戦う羽目になったってのか」

「ええ、来週の月曜日に。元はと言えば俺が余計な事を言ったからです……あつちも納得しないでしょうから」

寮に入り歩きながら会話する二人。まだ会って1日も経たないにも関わらずその姿は仲の良い兄弟そのもの。隆道は相変わらず無表情だが一夏は気にもとめない。

「でもどうすんだ。お前は経験皆無、向こうはあんなんでも代表候補生だぞ。下手すりゃ瞬殺だ」

「訓練機を借りてみます。借りれるかどうかは分かりませんが」

三時間目に起きた売り言葉に買い言葉から始まった決闘は結局うやむやになることはなく、一夏はセシリアと戦う羽目になってしまった。

彼が言った様に素人と代表候補生の差は歴然。現時点で勝てる要素はひとつもない。

だが、一夏からは負ける気で行くつもりは毛頭ない、そんな雰囲気が見て取れる。彼から『覚悟』を感じたのだ。

何かの本で読んだ記憶がある。

『覚悟』は『絶望』を吹き飛ばす、と。

「おまえ、やつば強いな」

「え、今なんか言いました？」

「独り言だ、気にすんな」

こいつは、なんでこんなにも真っ直ぐなんだと彼は思う。以前まで自分もこんな時があったような気がするが、いつの日だったかそれは全て砕け散り——消滅した。

(いや、今はそんなこと考える必要はない)

今はまず来週迄の事を考えよう。一夏に出来ることはないか、そう模索するが——。

(……っ。なんも思いつかねえ。手詰まりだ)

ISに乗った事なんて無理矢理受けた適性検査の時のみ。授業なんてまともに受けてないから知識も操作関連は皆無だ。隆道に出来る事は何一つなかった。

「それにしても……。？……柳さん？」

「あ？ああ、悪い。考え事してた。なんだって？」

「？……あ、いや。俺達って同じ部屋じゃないんですねって」

そういつて一夏は自分の鍵を見つめる。一夏の持つ鍵には「1025」と数字が掘られていた。彼の鍵には「1030」と掘られている。

「なんで男子を一緒にしないんでしょう。柳さんは一人部屋なんですよね？」

隆道の部屋は相方はいない。

これには隆道も疑問に思っていた。何故男子を同じ部屋にしないのかと。

遅れて発見されたにも関わらず政府特命で無理矢理入れたのならば相方の調整も出来るはずだ。にも関わらずしなかった。

これを意味することは――。

(敢えて分散してんのか……。？)

道の出した答えはただの憶測。明確な答えは出てこない。

「……まあ、考えてもしかたねえだろ。一ヶ月間の辛抱だ。何事もなければいいがな」

「縁起の悪いこと言わないでくださいよ……。後でそっちに行つていいですか？就寝時間まで女子と二人つてのは結構……」

一夏は正直不安だった。部屋の相方が女子だという事に。

何故かは分からないが嫌な予感がしたのだ。何か良くない事が起きると。彼の一言もあつてか不安は加速する。

せつかく同じ男子がいるのだ。二度の休み時間以降全く会話が出来なかつたのもあつて、まだまだ彼と会話を弾みたかつた一夏は悲願する。

「構わねえぞ。荷物片したら来ればいいさ」

「あ、ありがとうございます」

そんな会話を続けると、一夏は立ち止まる。その扉には1025の数字が。

「じゃあ柳さん、また後で」

「おう」

軽く会話を済ませ一夏は部屋へと消えていく。それを見送つた後隆道も自分の部屋に向かつていった。

隆道は自分の部屋番号を確認し、警戒を強めて部屋に入る。

一夏といるときはあまり考えなかったが、一人部屋ということひつかかりを持っていた。何か仕掛けてないか、そう思わずにはいられない。

明かりを点けると目に入るのは大きめのベットが二つ。元々二人部屋なのだろう。並のビジネスホテルより高価な代物なのは間違いない。こんなところに金を使うぐらいなら他に回せと思ってしまうが、そんな事どうだっていいと思いを切り替える。

「……………」

隆道は周囲を見渡すが一見怪しいものは見当たらない。これで見つかるような物なら大したことはないのだが。

部屋をくまなく探そうとしたその時――。

「うおおっ!？」

ズドンツと、何か大きな物音と叫び声があった。廊下から聞こえるその声は一夏の――。

（つて、まさかっ!?)

最悪の状況が頭を過った。襲われていると。

一目散に廊下へ走ると、目の前で膝に手をつけて息を切らした一夏の姿が。

「……………なにになに?」

「あつ織斑君だ」

「ふ、二人目もいるよ」

周囲にも聞こえていたのだろう、騒ぎを聞きつけた女子が各部屋からぞろぞろと出て来ていた。完全にプライベート感覚なのか、全員がラフな格好。男の目を一切気にしない様な姿であった。

それを見て彼は一気に不愉快となるが、今は目の前の状況を片づけるかと顔を真つ青にした一夏に話しかけることにした。

「……なにがあつた」

「……匿つてくれませんか？」

かなり余裕がなさそうであり、立ち往生してるのも仕方無い。先ずは一夏を入れることにした。

「……それで、廊下にすつ飛んできた、と」

「……ええ、はい……」

息を切らして一夏を座らせ、備え付けの冷蔵庫にある飲み物をに渡す彼。余程喉が乾いてたのだろう、一夏はそれを一息で飲み干した。

落ち着いてから何があつたかを聞いてみれば、内容は実に下らないものだった。

「シャワーを浴び終わった篠ノ之に遭遇して木刀で殺されかけたとか、お前良く死ななかつたな。つか相方は篠ノ之だったのか」

内容は単純明快。ただのラッキースケベという古臭い物。襲撃じゃなかっただけマシだったがなんとも言えない気持ちになる。

「ほんとに幼なじみなのかそれ。木刀で殴り掛かるとか正気の沙汰じゃねえだろ」

「いや、その……俺の不注意です、はい……」

「まあ、ほとぼりが冷めるまでは行かねえ方がいいわな、まだ飲むか？」

「すいません、いただきます」

そう言つて一夏は飲み物を受け取り、今度はゆつくりと喉を潤す。

残り半分まで飲むと不意に一夏は話を切り出した。

「それにしても、そのバッグ大きいですね。何入つてるんですか？」

一夏は彼のシヨルダーバッグが気になつて仕方がないのか先程から凝視していた。その大きさは明らかに日用品だけではないと。

「ああ、そういやまだ中身見てねえな」

彼は荷物を引つ張り開けようとするが、その手を止めた。一夏は何事かと手元を覗くと、ファスナーに四桁のダイヤルロックが掛かつており中身が見れない状態に。

そのダイヤルロックは平均的な大きさであつたが、見た目からしてかなり頑丈そうな

造りをしている。並大抵の事では壊せないだろう。

しかも指紋認証付きという代物。一体どこで手に入れたのだろうか。

「へえ、徹底してますね。でも番号が分からないんじゃないや……」

「……………」

彼はおもむろにそのダイヤルロックを手に取り数字を弄る。何度か弄った後に親指をパネルに押し付けると、ものの数秒でそれは開いた。

「あれ？　番号知ってたんですか？」

「…………いや、そもそも俺はこんなもの持ってない。……番号は予想通りだったかな」
「??？」

疑問が止まない一夏を余所に彼は次々と荷物を出していく。

その中には日用品は勿論入ってたが、中にはとんでもないものが入っていた。

「それ……、医療キット……ですか？」

出てきたのは大型のバッグの三分の一を占める医療キットと呼ばれる赤いバッグ。

彼は中身を確認すると、包帯やら止血材やら市販の物ではない、一つ一つが本格的な物がぎっしりと詰まっていた。

その中で一際目立つ物があり、それは一夏の目に留まる。

「これは……？」

それは、まるで病院にあるような器具の数々。どう見ても傷などを治療するものにか見えない。

「それは縫合セットだな。針もあるだろ？」

「ほうごう……？ ……えっ！ 縫うって事ですか!？」

「それ以外なんだっていうんだよ」

なに当たり前の事を言ってるんだと首を傾げる彼。一夏の疑問ももつともだ。何故、彼がこんな物を持つてるのか不思議でしようがない。

「……使ったこと、あるんですか……？」

「当たり前だろ、じゃなきゃ使い方なんて分からねえよ」

器具をそれぞれ手際よく確認する隆道を尻目に一夏は戦慄した。

使ったことがあると確かに彼は言った。つまり自分で傷を縫った経験があるということだ。手際よく手を動かしてる事から、それを幾度となく使用した事もあると推測出来る。

つまり、隆道は今まで何度も――。

「……？ どうした？」

「っ!? ……あ、いえ。なんでも」

彼の一言によつて我に返つた一夏は一気に汗が吹き出る感覚に陥る。

もしかすると、目の前の彼は自分の想像を絶する人生を送つてきたのではないかと。

「……そろそろ、箒も落ち着いてるでしょうし、戻りますね」

「？ ……おう、そうか。また明日な」

そう言つて手を止め、一夏を見送る彼は不思議そうな顔を出していた。彼には悪いと思つてるが一刻も早くこの部屋を出たかった。部屋を出る直前、一夏は再び彼を一目見る。

「気をつけろよ」

無表情だが敵意もなく優しげな声。それが今は不気味に感じてしまった。

「お邪魔しました。……すみません」

最後の言葉だけ限りなく小さな声で呟き、その部屋を後にする。彼に対して不気味に感じてしまった罪悪感だけが一夏に残つた。

「……………」

部屋でどうとう一人になり、荷物の整理を再開する。

バッグを再び漁ると見慣れないものがあつた。

「……………」

それは一枚の数回に折られた手紙。それを開いていくところ書かれている。

『隆道君へ。　勝手ながら隆道君の部屋に入り、着替えと日用品、それと良く使つていた物を入れておきました。お体に気をつけてください。お金は結構ですがここでの家政婦をやめるつもりはありません。いつお帰りになられても良いように各部屋は綺麗にしておきます。それと、お体の負担になりますので、過度の服用はおやめください。』

根羽田より』

「……………」

彼は手紙を丸め捨てた後、またバッグを漁る。その中には小さなプラスチックボトルが二つ程。中には大量の錠剤が入っていた。

彼はそれぞれ十粒以上飲み込み、乱雑に置く。

そのボトルのラベルの上には『鎮痛剤』『精神安定剤』と書かれた付箋が貼られていた。

第六話

殆どの人間がまだ起床してないであろう早朝。

ありふれた住宅街に一軒、コンクリートブロックに囲まれた比較的小さな一戸建ては異様な光景であった。

ブロックで作られた壁には様々な落書きがされており、その内容はその家の住人に対する罵倒の嵐。郵便ポストには手紙等がぎっしり詰まっており、家主が手つけた様子はない。表札は落書きや傷などにより無惨な姿に変わり果てて苗字が見えないほどであった。

そんな家から出てくるのは一人の暗い顔をした女性が一人。スタイルの良いその女性にはさらさらした黒のセミロングヘア。頭にバンダナを巻いて一般的なエプロンをかけており、その姿はまさに主婦そのもの。そんな彼女の両手には雑巾やバケツに加え、ペンキと刷毛を持っていた。

壁を見るなり悲痛な顔を出す彼女は、黙々と落書きされた壁を塗り始める。

「……………」

しばらくして塗り終えた彼女は雑巾と洗剤等を取り出し表札を力強く拭いていく。

何度も拭いてようやく文字が浮かび上がり、先程まであった壁や表札の落書きがきれいさっぱり無くなったのは作業をして約三十分後だった。

「…………ぐすつ」

作業を終え表札を見るなり涙を流す彼女は郵便ポストに詰まっている手紙等を引っこ抜き、重苦しい雰囲気であらゆる家に戻っていく。

その傷だらけの表札には『柳』と書かれていた。

I S 学園の朝方。

朝早くに朝食を取る者や部活の朝練に励む者、寝坊してしまうのではないかという程未だに爆睡を続けている者がいる中で一人、激痛に苦しみ藻掻く者がいた。

「ぐつ…………あが…………ぎ…………」

胸を両手で押さえつけ苦しむ男、隆道は起床直後から押さえようのない激痛に教われていた。

昨晚あれだけの錠剤を過剰服用したのだ。身体への負担は尋常ではなく病院送りは間違いない。

だが、隆道は飲まずにはいられなかった。その鎮痛剤と精神安定剤は普段ならば用量を守り服用しているのだが、政府に拘束されて以降一度も服用していない。

常に身体の痛みと不安が襲い掛かり、拘束された日からIS学園の一日までを過ごした。

敵意と警戒心と憎悪と殺意。それに加え表情こそ出さなかったが身体の痛みと不安が付きまとっていた隆道はいつぶつ壊れてもおかしくないほどにボロボロだった。

故にその二つの錠剤を見るなり今までの分、いやそれ以上を一度に飲み込み苦しみからいち早く解放されたかった。

強力な代物のため速攻で効いたが、結果はご覧の有り様。その場しのぎの行動は余計に自身を苦しめる事になってしまった。

「あ……、はあっ……」

ベッドから転げ落ち、ある場所へ這いずる。向かう先には錠剤の入った二つのプラスチックボトルの他に表記のない、付箋が貼られた金属のケース。

痛みで意識が飛びそうになりながらケースだけを手に取り付箋に書かれてる文字を読む。

『緊急用。身体の痛みが取れない時に服用してください。一粒厳守多用厳禁』

中身は分からない。しかし隆道にとってそんな事はどうでもよく、一粒取り出しそれを飲み込んだ。

「……………っ!？」

飲み込んで数十秒。突如得体の知れない激痛が全身に襲い掛かり隆道はもがく。

「……………!?!？」

それは声にならないほどの小さな叫びとなりしばらくのたうち回る。それが十数分ほど続き——ようやく止まった。

「はっ、はっ、はっ……………」

先程までの痛みは全て消え失せ、その場でぐったりとなる彼。汗だくになり呼吸が安定はしていないが、それも徐々に治まる。

「……………」

漸く呼吸が安定し、身体を起こした後ケースをじっと凝視する。どういった成分が入ってるかは知らないが、なるほど。一粒厳守多用厳禁な訳だと隆道は納得した。

「……………ああ、くそつたれ。ぐっしやぐしやねえか……………」

荷物を整理した後直ぐ様ベツトに身を任せた為に彼は着替えておらず、制服はシワと汗でぐしやぐしやになってた。

「……シャワー浴びるか」

時刻は既にSHR五分钟前。彼の遅刻は確定した。

二時限目の半ば。

隆道を除く生徒達はノートにペンを走らせる。

昨日の騒がしい光景とは違い皆真面目に授業を行っていた。一夏もそれに含まれる。

「……………」

必死にノートを取る一夏であったが、昨日の事が頭から離れないでいた。

隆道が所持していた本格的な医療キット、更にもその中に含まれていた縫合セット。

何故そんなものを持つてたのか、何故使ったことがあるのか。普通ならそういった処

置は外科医がするものだ。一般人がする事ではない。

(柳さん……)

アレを見てしまい、隆道からあそこまでの憎悪を感じてしまえば碌な人生を歩んでな

い事など鈍感な彼でも分かっってしまう。

どうしても訊きたい、知りたい、そして力になりたい。しかし此方から足を踏み入れる事は出来ない。一体どうすればいいのだと思惑をフル回転させるが、どうしても結論が出てこない。

「……………」

彼は朝食を取りに行く際、隆道に声をかけ一緒に行くつもりだった。

隆道の住む部屋の中で足を運びノックをしようとした所で——昨日の隆道から感じた不気味さを思い出してしまった。

震える手を引き、幼なじみが待つ部屋に戻る為にそこから逃げるように離れる。

彼とて感情のある生物だ。得体の知れない恐怖から逃げることもある。その不気味さから逃れるには、隆道から離れる必要があった。

(……………)

言い様のない怒りを自身に向ける。隆道を置いていった自分が許せないのだ。何が力になりたいだと。隆道はまだ教室に来てない故に、それが一層怒りに拍車を掛ける。

途中から完全に手が止まってしまい考えに耽ってしまったが故に、一夏は目の前に立つ女性に気づかない。

「いっつ!」

「授業に集中せず考え事とはいい度胸だな、織斑」

そういつて一夏に制裁を与え睨みを利かせる千冬。一番授業に追いついてない彼が叩かれるのは仕方の無い事であった。

「……………指導ありがとうございます」

「まったく。……………すまない山田君、続けてくれ」

「は、はい！えと、というわけで、ISは宇宙を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ——」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、身体の中を弄られてるみたいでちよつと怖いんですけども……………」

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えば皆さんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ることはないわけです。もちろん、自分のサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが——」

彼がいるにも関わらず女性にしか分からない事を言い出す真耶。あまり男がいる前でそういった事は言わないで欲しい。

そんな事を考えてるとふと、真耶と目が合う。自分が何を言ってるのか理解したのか

彼女は数秒置いてから顔を赤くした。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君はしてませんよね。わ、分からないですね、この例え。あは、あはははは……」

教室に微妙な空気を漂わせ、生徒は意識してるのか胸を隠すように腕組みをする。

ほんとにいい加減にしてほしい。俺が何をしたの言うのだと一夏は頭を抱えそうになった。

「んんっ！ 山田君、授業の続きを」

「は、はいっ」

千冬の咳払いで真耶は正気に戻り、教科書を落とすしそうになりながらも話の続きを開。

頼むからいちいち脱線して此方を困らせるような事はやめてほしいと一夏は思った。そうな。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話——つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

ISにそんな機能があるのかと思考をリセットし再度必死にノートを取り始める。一夏は勤勉であった。

「それによつて相対的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

真耶の説明に多くの生徒が理解するが、一人の生徒は彼女に質問を投げる。

「先生、それつて彼氏彼女のような感じですか?」

「そつそれは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

赤面してうつむく真耶を尻目に、生徒達はきやいきやいと雑談を始めだした。

こうなると一夏は完全に蚊帳の外だ。もう、早く授業終わらないかなと一夏は時計を見ながら頬杖をついた。

授業がまもなく終わろうとしたその時——教室の扉が開く。

「……? ……ひっ!」

突如、生徒の一人が小さな悲鳴を上げ出した。誰が入ってきたんだと一夏は首を向けると、そこには隆道が。先日と変わらないの無表情だが、敵意と警戒心は相変わらず。あの時感じた不気味さは無くなっていた。

「や、柳君!! 今までどこ行つてたんですか?! もう二時限目終わっちゃいますよ!」

真耶はSHR時点で隆道がいない事に心配していた。

SHR終了後直ぐ様隆道の部屋に行き様子を見に行くが一切の反応がない。マスターキーを使うという手段はあるが、それをする事に躊躇してしまったのだ。

踏み込んでいいものか、今入ってしまったら自分はとてつもない物を見てしまうのではないかと。

故に、真耶は彼をそつとしておく選択をする。彼は望んでここに來てる訳ではない。むしろ絶対に來たくなかつたはずだ。

先日、千冬が論じた言葉を思い出すが、隆道には言つてはいけない言葉だと真耶は當時感じていた。きつと今後部屋に閉じ籠るだろう、そう考へてた矢先に彼は遅れながらも來たのだ。意外なことこの上無かつたが、來てくれた事に嬉しさもあつたので咄嗟に声を掛ける。

だが彼は当然にこれを見視。そのまま自身の席に座り足を組む。女性全員を敵視している隆道が真耶の心情なぞ理解出来る訳がなかつた。

そんな隆道だが、今日は心なしか昨日よりは雰囲気は軽く見える。少なくとも彼はそう感じた。

だが、他の生徒は違ふ。昨日の一件により完全に恐怖を植え付けられており、小さく悲鳴を上げる者もいれば視界にすらいれようとしない者まで。そこには『強い女性』は誰としていなかつた。

完全無視された真耶であつたが、ここで諦める訳にはいかない。そう決心し再度声を掛けようとするのだが。

——が、しかし。

「あつ。えつと、次の時間では空中における I S 基本制動をやりますからね」

授業終了のチャイムによつて遮られてしまう。真耶と控えていた千冬は次の授業に控え、教室を出るしかなかった。

「ねえねえ、織斑君さあ!」

「はいはい、質問しつもん!」

「今日のお昼暇? 放課後暇? 夜暇?」

真耶と千冬が教室から出た直後、生徒の半数が一夏の席に詰めかけきた。中には昨日嘲笑つてた生徒もいる。それに対し一夏は不愉快を覚えた。

そんな事よりも、遅れてきた隆道が気になり生徒達に軽く謝りながら押し退けて隆道のもとへ向かう。

「お、おはようございます。柳さん」

「おう、おはようさん」

その声は現在一夏にしか向けてない優しげなもの。やはり昨日の不気味さは一切感じられず、敵意と警戒心も薄れている。何かあつたのかと一夏は思った。

「てつきり来ないのかと思つてましたが……」

「ああ、シャワー浴びてなんやかんやで遅れた」

「え、ええ……」

それだけでこんなにも遅れるものなのか、当然な疑問が浮かぶが、一夏は訊かないことにした。

「そんなことよりいいのか。お前んとこに結構集まってたが」

「あー……、大丈夫です。こつちで会話してた方が気が楽ですし」

一夏は隆道が来てくれた事に心から感謝していた。

もしあのまま隆道が来なかったら生徒たちから質問攻めにあっていたからだ。

「……？」

ふと、一夏は隆道の右手首にある物が目につく。それは腕輪のようなもの。Yシャツの袖に隠れてて今まで気づかなかったが、それはチラリと顔を覗かせていた。

「隆道さん、その……腕輪みたいな物は」

「ああ……これか、気にしなくていい」

そう言つて袖を伸ばしそれを完全に隠す隆道。触れてはいけないものだど直ぐに察知し、話を変えることにした。

「ところで織斑、お前のISだが準備に時間がかかる」

「へ?」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「??」

休み時間が終わり全員が席に着いた直後、千冬からいきなり言われた一言に一夏は変な声を出してしまい、その後の説明に疑問を露にする。

予備機がない? 専用機? いったい何の話だと一夏は質問しようとするが、生徒の驚愕によりそれは遮られる。

「せ、専用機!? 一年の、しかもこの時期に!」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ、いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

どういふことかまったく分からない。一夏がそんな事を考えてると、顔に出てたのか千冬は見るに堪えかねなかったのかため息混じりに呟く。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されてません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だに博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数

以上作る事を拒絶しており、各国・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、全ての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解出来たか？」

「な、なんとなく……」

一夏はなんとなくと言ったが一つだけ、頭にこびり付いた単語があった。

『データ収集を目的として』

それは自身が実験体ということである。つまり自分はモルモット。

嫌な響きだと一夏は感じた。隆道の気持ちになった訳ではないが、確かにこれは来たくなくなる気がする、そう思わずにはいられない。

そのときふと、疑問に思った。隆道はどうなのかと。

彼が乗るとは思えないが、それが通用するのかと思えない。隆道本人がいる前で訊くのもどうかと思い胸にしまった一夏だが――。

「あ、あの。それじゃあ、や、柳……さんは」

訊かずにはいられなかったのだろう、一人の生徒が質問を持ち出す。一夏がそうならば隆道はどうなのだ。

もつともな事であるが、隆道がいる今、それはまずい。

「……柳は——」

「乗らねえぞ」

千冬が言いかけたその時、遮る様にドスの利いた声で隆道が一言。その声からは凄まじい拒絶を感じる。

「誰がISなんか乗るか。聞いた限り実験体じゃねえか。保護だのなんだの言つときながら結局それか。だから嫌なんだ、お前らのような奴は」

そう言つて隆道は、もう話すことは無いと言わんばかりに外を眺めだした。

彼は予想をしていた。IS学園に連れてこられた目的は保護を名目とした監視、または実験体だと。

結果は予想通り。自分に専用機が来る事なぞ、実験体になれなんて全くもつて冗談じゃない。

千冬が決めたことではないが、またしても彼女と彼にとの間に溝が出来てしまう。

彼をISに乗せることは千冬も反対ではあるが、政府は、世界がそれを認めない。世

界最強であれど所詮は只の称号であり、現在は只の教師。世界には逆らえない。

どうしたものかと千冬は思考を巡らせるが、隆道によって重苦しい空気と化した中、またしても彼女に質問を持ち出す生徒がいた。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
篠ノ之なんて苗字なぞそうそういない。いつかはバレル事だと一夏は思う。

——篠ノ之束^{たばね}——。

ISをたつた一人で作成、開発させた稀代の天才^{天災}。

千冬と同級生であり、そして篠ノ之箒の実姉。一夏は何度も会ったことがある。

そしてその天災と呼ばれる篠ノ之束は今現在——行方を眩ませ指名手配されている。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

いずれバレル事からなのか、それをあつさり肯定する千冬。個人情報バラしてい
いのかと一夏は思うが、いつかは箒に詰め寄る人物が現れてもおかしくない以上、今
言ってしまった方が良いのかも思考する。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!? やっぱり天才なの!？」

「篠ノ之さんも天才だったりする!?! 今度ISの操縦教えてよっ」

授業が始まっている時間にも関わらず箒の元に集まる生徒達。端から見るとおもし

ろい光景かもしれないと一夏は一瞬思ったが、さっきの自分と照らし合わせてそれを止める。

有名人の関係者という理由で詰め寄られる。本人からすればたまったものじゃない。それを知らずか生徒達は箒にあれこれ質問責めするが――。

「あの人は関係ない!」

突然の大声。箒に群がっていた生徒達は面食らった表情をし、何が起こったか分からない様子になる。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、箒は隆道と同じように窓の外に顔を向けてしまう。

生徒達は盛り上がった所に冷水を浴びせられた気分になり、それぞれ困惑や不快を顔に出して席に戻っていく。

人を個人で見ない生徒達を見て、勝手だと一夏は思った。そして一つ疑問が浮かぶ。
(箒って東さんのこと、嫌いだったっけ……?)

一夏は記憶を探るが、二人が一緒にいた光景がどうしても出てこない。箒に東の話を振るといつもそこで会話が終わる事を思い出し、考えるのをやめた。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ!」

真耶も箒の事が気になるが、今は授業を優先しようと彼女は号令を出した。

誰も気づかなかつた。『篠ノ之博士』という名前に強く反応した隆道に。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思ってなかつたでしょうけど」

午前授業が終わり、一夏は一緒に食堂へ行こうと隆道の元へ向かおうとするが、セシリアによって阻止される。

「まあ? 一応勝負は見えていますけど? さすがにフェアではありませんものね」

「? なんで?」

「あら、ご存知ないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、専用機を持つていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの?」

知るか、今はそんな事どうでもいい。そんな事より柳さんと食堂に行く方が大事だと一夏は言いたくなるが、そんなこと言ったら余計拗れるのは目に見えてるのでグツとこらえる。

「……こほん。さつき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリートなのですわ」

「此方はさつきと食堂に行きたいのにそのドヤ顔を続けるセシリアを見て苛立ちが募り——一夏はちよつと彼女を馬鹿にしてみたくなった。」

「そ、そうなのか……」

「そうなのですわ」

「人類って今六十億超えてたのか……」

「そこは重要ではないでしょう!?!」

勢いよく一夏の机を叩くセシリアは昨日と同じく顔を真っ赤にさせる。これを面白く感じてしまった一夏はもう少し続けることに決めた。

「あなた! 本当に馬鹿にしていますの!?!」

「いやそんなことはない」

「だったらなぜ棒読みなのかしら……？」

「なんでだろうな」

馬鹿にしてるからに決まってるだろ。早くどつか言ってくれと一夏は思う。

ちなみにこのやり取りは隆道にも当然聞こえており、一夏の心情を察知した彼は、やっぱりあのイギリス人は馬鹿だと確信していた。

「ぐ……。……そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですつてね」

埒が明かないと悟ったのか、何故かセシリアは矛先を箒に向ける。敵を作ることにかけては彼女は天才なのかもしれない。

「妹というだけだ」

これを箒は鋭い視線で迎撃。本気の凄みを受けたセシリアはこれに怯む。昨日の今日で学習しないのかと、やっぱりコイツ馬鹿だと一夏も確信した。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラス代表に相応しいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

男子二人に馬鹿認定されたとは知らず、セシリアは自身の髪を払い綺麗に回れ右をし、そのまま立ち去っていく。その動きはモデルを思わせるほど様になっているが、馬鹿認定している二人にとってそれは間抜けなようにも見えた。

やっと帰ったかと、一夏はため息を吐きながらも隆道の方へ向かう。

「また絡まれるとか、女難の相でもあるんじゃないのか」

「否定出来ないですね、それ……。それよりも、飯食いに食堂行きませんか？」

「やつと食堂に行ける。昨日は一緒に食事が出来なかったのだ。今日こそはと意気込
む一夏だが、彼はそれを断った。」

「いや、俺はいいわ。それよりもアイツと、篠ノ之と行ってやれ」

「え……？　でも」

「野暮用があるんだ、悪いな。それにさっきの事もあるだろ」

隆道の言うさっきの事とは、箒が篠ノ之博士の実妹と知られた件についての事。その
おかげで彼女は妙に浮いており、いずれ孤立してしまうだろう。

(フオローしてやれ、そう言ってるんですか?)

「そういうことだ、授業が始まる頃には戻るから心配すんな」

一夏の心情を読み取ったのかどうかは分からないが、そういつて隆道は立ち上がり教
室を出る。

「……………」

この時一夏は感じていた。今の隆道は箒に対して敵意を向けていないのだ。生徒は
もちろん、教師の二人、しかも片方は自分の姉であり世界最強でさえあれほどのものだ

というのに。

「……………また、一緒に食えなかつたな」

野暮用とはなんだろうかと、そう思う一夏。しかし、まだ入学して二日目なのだ、機会はいくらでもあると断念し箒に声を掛ける。

「箒、飯食いに……………箒？」

「……………？ あ、ああ。……………なんだ？」

「いや、飯食いに行こうぜ」

「あ、ああ……………」

そういつて二人は教室を後にする。

この時、箒はある違和感を持っていた。

(なんだ……………、何かひっかかる……………)

それが何なのかは箒は分からない。

訳の分からない違和感を拭い、彼女は一夏と共に食堂へと向かった。

第七話

午前授業が終わり昼食時間。一夏の誘いを断つた隆道は一人購買に向かつていた。

「悪いことしちゃったか……？」

彼は一夏に嘘をついた。野暮用なんて最初から存在しない。今は昨日と比べて落ちていてはいるが、周囲が敵にしか見えない彼にとつては昼食時間に密集するであろう食堂に行く事は勘弁なところであつた。

一夏には悪いと思つてるが、彼には幼馴染の筈がいる。心配する事は無いだろう。本当は購買に向かう事すら嫌気がさしていたが、流星に飲まず食わずのままにはいれない。

彼は入学式の前日、つまり一昨日から何も口にしていない。一昨日はI S学園入学に怯え食べ物がのどを通らず、昨日は三時限目から放課後まで屋上で過ごし、夜は荷物整理で力尽きた。今日の朝は激痛と闘つた後シャワーを浴びて着替えたりなんなりで、もちろん食事なんてしていない。空腹が限界近く来た隆道は、不本意だが購買に行くことを決めた。

購買付近に差し掛かり辺りを見渡す。幸いにも生徒はいなく、隆道は一安心する。

余談だが、購買に生徒がいけない理由として挙げられるのは一夏である。

一夏は筈と一緒に食堂へ行った故に生徒達は一夏の方、つまり食堂に雪崩れ込んだからだ。知らずのうちに一夏がデコイとなった事を隆道は知らない。

そんな事情を知らない彼は購買前まで行くと、不意に声を掛けられた。

「あら、あんたは二人目の……」

その声を聞いて隆道は瞬時に警戒。声のする方へ向くと、そこには頭に三角巾を巻いた女性がいた。見た目からしてかなり若く、二十代前半に思える。

「……………」

「ああ、そんなに警戒しないでおくれ。私はこの購買の担当をしている者さ。」

両手を挙げながら弁解する彼女。様子からして隆道を恐がっているようには見えない。

「食べ物を買いに来たんだろう？ ほら、何を買うんだい？」

彼女はカウンターに入り、彼に品を選ばせる。そこにはコンビニと同等以上の品揃えだ。食堂に行かずともここでなら食べ物に困らないだろう。

「……保存食をいくつか」

「保存食？ 買い溜めでもすんのかい？」

「あんたには関係無いだろ」

初対面にも関わらず素っ気ない態度をぶつける彼。しかし、彼女はなんとも思つてな

いのか軽く受け答える。

「それもそうね。ちよつと待つてな」

彼女は棚から色々持ち出してくる。そこには缶詰やカンパンなど、明らかにIS学園で食べる物じゃない、保存食の数々。

「今うちで扱つてる保存食はこれくらいさ。でもほんとにいいのかい？ 学園でこんなのを食べるなんて」

「それ全部貰う。いくらだ」

「……あいよ、今計算するから待つてな」

これ以上は平行線かと、彼女は黙々と会計を行う。いつ他の生徒が来るか分からない。彼は一刻も早くここから立ち去りたかった。

ようやく会計が終わり、二十キ口程もある保存食を担いで立ち去ろうとした矢先にまたしても声が掛かる。

「待ちな、これも持つていき」

そう出されたのは大きな茶色の紙袋。いったいなんだこれはと隆道は目で訴えるが彼女は言葉を続ける。

「あんたのこと、織斑先生から聞いてるよ」

「……………」

「女とISが大の嫌いなんだってね。なるほど、よくよく考えてみれば食堂に行かずにこっちに来て保存食を買溜めしたのにも頷ける」

「……だったらなんなんだ。その紙袋となんの関係がある」

「そんなんじやまともな食事も出来ないだろう？それでも食べてしつかりしな」

「……………」

彼は黙って紙袋を取り財布を出そうとするが、彼女はそれに待ったをかける。

「お代は結構だよ。ほら、さっさと行かないと。他生徒がいつ来るか分からないからね」

「……………」

そう一言行つて彼は去る。その後ろ姿を見て彼女はなんとも言えない気持ちになつた。

「一体何ををどうすればあんな風になるんだろうね……。あまりにも酷いじゃないかい……………」

保存食を自分の部屋に戻した後、紙袋とお茶のペットボトルを手に持ち屋上に着く隆道。

周囲には誰もいなく、これなら安心して過ごせると彼は安堵しそのままベンチへ向か

う。ベンチにもたれかかり紙袋の中身を見ると、そこには大きなおにぎりが三つと唐揚げが五つ。

空腹状態でこれはありがたい。直ぐ様隆道はおにぎりを頬張り、続けて唐揚げを口に放り込み、飲み込んだ後お茶を勢いよく飲む。

「……うまいな」

おにぎりの中身は梅という至って普通な物だが、今の隆道は特別に旨いと感じていた。唐揚げは多少しなつてはいるが、まだ温かく別に気になるほどではない。味付けも濃く、男子が喜ぶであろう物になっている。

「……」

彼は、いつのまにか小粒の涙を流していた。

久しぶりの安心出来る場所での食事。拘束されて半月は監視されながらの気を張った食事であり、一昨日から先程まで食事すらしなかった。

いったい自分がなにをしたのだと、何故自分がISを動かせたのかと、そう思わずにはいられない。

「……やめよう」

気持ちしが沈んでは飯も不味くなる。考えるのはやめて今はこの時を楽しもうと、そう思いながら隆道は昼食を堪能した。

放課後となり生徒達は部活へ向かう頃。隆道は一夏に誘われ剣道場に来ていた。

一夏の話の話を聞くと、昼休みに箒が I S を教えてくれるというので付き添って欲しいというもの。I S を教えるのになぜ剣道場なのだと思つて突つ込みたくなつたが、彼女なりの考えがあるのだろう。隆道はあまり深く考えようとはしなかつた。

そう、深く考えようとはしなかつたのだが――。

「どういふことだ」

「いや、どういふことつて言われても……」

（俺の台詞だ。一体これはどういふことだ）

I S を教えるといった本人は、現在剣道場で一夏と剣道の手合わせをしていた。I S 要素は皆無。

剣道場は生徒が混み合っており、至るところで騒ぎ立てている。世界初の男性 I S 操縦者と篠ノ之博士の実妹の試合ということを踏まえればこれほどのギャラリーがいて

も不思議ではないだろう。

そんな中、付き添って欲しいと一夏に頼まれた彼は隅っこであぐらをかいて一夏と箒の試合を見ていた。

久しぶりの食事のおかげで多少機嫌が良くなつてはいたが、剣道場にこれだけの生徒が密集していると隆道にとっては敵に囲まれたようなものであり、段々と嫌悪感が滲み出てくる。おにぎり&唐揚げパワーをもつてしても隆道の女嫌いは治らなかつた。当たり前前である。

そんな隆道を余所に一夏と箒は十分ほど手合わせをし、一夏が負けた。面具を外した箒の目尻はつり上がっていて、まさに不機嫌といった感情が見て取れる。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

箒は一夏に対して怒りを覚えていた。昔——六年前は強く、そして何より格好良かったのにと。

六年前のある理由で幼馴染の一夏と離れ離れになり、もう会えないと、この間までそう思っていた。

しかし彼の名前がニュースに流れたときに写真を見て、直ぐ様幼馴染だと分かった。それが嬉しかったのだ。

また会える。そしてまた一緒に剣道を続けることが出来る。

そう思ってたのに——彼は弱くなっていた。

話を聞く限り随分と剣道をしていないとの事。箒はそれが堪らなかつた。昔はあれだけ打ち込んでいた剣道を廃れさせるなど男のすることではないと。

剣の道は三日欠かせば七日を失う。箒が一夏に感じたものはまさにそれだった。

故に——。

「……なおす」

「はい？」

「鍛え直す！　　I S 以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」

——箒が決意した事はI S そっちのけで彼の強さを取り戻す事であった。剣道で。当然一夏はこれに抗議しようとする。

「え。それはちよつと長いような——ていうかI S のことをだな」

「だからそれ以前の問題だと言っている！」

いや、しようとしたが出来なかつた。一夏は箒の凄まじい剣幕により、なに言っても

聞いてくれない気がすると感じたのだ。

そんな一夏を置いて彼女の怒濤は止まらない。

「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……恥ずかしくないのか、一夏！」

「そりゃ、まあ……格好悪いとは思うけど」

「格好？ 格好を気にする事が出来る立場か！ それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか？」

流石にこの言葉にカチンと来た一夏。なんだそれは、いくら何でもそこまで言われる筋合いはないと反撃に出る。

「楽しいわけあるか！ 珍獣扱いじゃねえか！ その上女子と同居までさせられてるんだぞ！ 柳さんがいなくなったら頭がどうにかなってるわ！ 何が悲しくてこんな——」

「わ、私と暮らすのが不服だというのかっ！」

その言葉にカチンと来たのか、箒は防具を外して一夏に向かって竹刀を振り下ろした。反射神経が良いのか、一夏は咄嗟にこれを手持ちの竹刀を使い片手で防御。間一髪であった。彼女は彼を殺すつもりなのだろうか。

「お、落ち着け箒。俺はまだ死にたくないし、お前もまだ殺人犯になりたい年頃でもないだろ？」

一夏は箒にそんなことを言い出す。あいつ結構余裕あるんじゃないかと、彼は思った
そうな。

「箒、なん？頼むから。今度なんか奢るから」

「……ふん、軟弱者め」

そう一言だけ言葉を発し、箒は軽蔑の眼差しで一瞥して更衣室に向かう。命が助かったことにとりあえず安堵した一夏であった。

「織斑君てさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと聞こえる周囲の落胆した声の数々。それが聞こえてしまった一夏は惨めこの上ないと、自分が許せないと思ってしまう。

（こんな有り様じゃ、何かに勝つなんて、それどころか——）

「織斑」

そう考えに耽った矢先に一夏に声が掛かった。疲れきった顔でその方に向けると、タオルとペットボトルを持った彼が。

「随分とやられたな。とりあえず顔拭いてこれでも飲め」

「あ、ありがとうございます」

いつ頃用意したのか分からないが、気が滅入ってる今差し入れはありがたい。一夏は一言礼を言いタオルとペットボトルを受け取る。

「つーか篠ノ之は剣道全国大会で優勝してるんだっけか？ 久々に竹刀握ったお前が勝つたらおかしいだろ」

「いや……、まあ、その」

「だいたい周囲の連中もそうだ、好き放題言いやがつて。何様だつての」

彼はそう愚痴りながら一夏に向けて手を伸ばす。

「立てよ、そんで着替えてこい。さっさと帰りたいんだ。今日も来るんだろ？ 茶菓子ぐらい出すぜ」

「や、柳さん………」

昨日もそうだ。彼は決して一夏を軽蔑も失望もせず、こうやって気を遣ってくれる。それが一夏にとつてはたまらないほど嬉しかった。彼がいなかったら今頃どうなつたか、そう考えると尚更嬉しく思う。

互いに支え合う男子二人。彼が一夏のおかげで踏ん張りをきかせてると同様に、一夏もまた彼のおかげで踏ん張りをきかせていた。

彼の手を取り立ち上がる一夏。先程の惨めさはとうに無くなっていた

「んじゃ、外で待ってるわ」

そう言つて彼は剣道場を後にする。その後ろ姿は一夏にとつて逞しく、強く見えた。

「……………いつか、柳さんのこと話してくださいね」

彼の背中を見て一夏は呟く。いつか彼の力になれる様に願いながら。

しばらくして一夏は制服に着替え終わり、二人で寮に帰る際に彼が一言。

「織斑。お前、篠ノ之がI Sを教えるって話はどうなったんだよ」

「え？ ……あ」

生徒達が部活を終えてほぼ全員が寮に戻っているその頃、職員室に向かう千冬は先程購買の担当者からある報告を受けていた。

『二人目が購買にやつてきたよ。アレは酷いなんてもんじゃない。一体なにをどうすればあんな風になるのさ』

「……………」

女尊男卑の被害を受けた者は千冬本人も何度か目撃している。それを見るたびに胸が苦しくなるのも何度かあった。

しかし、隆道程の敵意や警戒心はおろか、憎悪と殺意を宿した者は初めてだ。彼女が

言つた様になにをどうすればあんな風になるのかなど到底分からぬ。

自分達が蒔いた種だと思つと、今まで感じた事の無い苦痛に悩まされる。

「……なにをやつてるんだろ、私は。」

ため息が止まらない千冬。彼を助けたい気持ちは本物だが、自分が未熟である為か、どうも空回りしてる気がする。そう思わずにはいられない。

「……どうすればいい」

彼をこれ以上女尊男卑の悪意に晒すわけにはいかない。もしそうなつたら取り返しのつかないことになる。

他の教師や他学年、他クラスにも伝えてはいるが、きつと通用しないだろう。何人かは面白くない顔をしていた。

事態は非常に不味い。一刻も早く彼に降りかかる悪意を何とかしなければと、千冬は考察する。その為にはまず彼の過去を知ることが先決だが、現状は困難を極める。

IS学園関係者が彼の通つていた学校で聞き込みをしようとしたが、学園関係者と知つた途端態度を変えて追い出したのだ。

近所の住人にも話を持ちかけようすると顔色を変えて決して話そうとしない。

千冬はある人物に協力を仰ごうとしているが、その人物は現在多忙であり、望みは薄い。

となれば、最後の頼みは彼の家政婦と名乗った根羽田のみになるのだが、応答してくれるかどうかは分からない、恐らく厳しいだろう。

そう思考を巡らしつつ職員室手前まで来たその途端、勢いよく扉が開く。

「……………」

そこから出てきたのは一人の教師。血相を変え口を押さえており、千冬に気づいていないのかそのまま全速力でトイレのある方へ走っていった。

「なんだ……………」

千冬は訳も分からずそのまま職員室に入るが、人ひとりおらず、異様な雰囲気だけが残っていた。

そこで、千冬は気づく。職員室に隣接されてある給湯室に人の気配がしたのを。

「誰かいるのか?」

千冬は給湯室に足を運び中を覗くと、そこには恐怖に怯え、泣きじやくり座り込む真耶の姿があった。

「……………何があった」

「あ、お、お、織、斑せ、んせい」

よつほど恐ろしいものでも見たのか、真耶は呼吸が安定していなく、声もどもっている。

「落ち着け、深呼吸をしろ」

「は、は、はいい……」

数回程の深呼吸をし多少マシになった所で再度千冬は真耶に訊く。

「いったい何があった、何を見たんだ」

「あ、あの、先程、モノレールの管理者から、……見て欲しいものがあると、渡された……ものがありません」

「見て欲しいもの？」

「は、はい……。昨日のモノレール内、の録画……丁度、柳、君が乗った時間帯……です」

真耶は一呼吸し、更に言葉を続ける。

「それを、もう一人の、先生と見てたんですが……そこに映ってた……のが」

その言葉を最後に真耶は顔を埋めて黙ってしまふ。もう一人の先生とは先程出ていった人のことだろう。

いくらなんでもこれは異常だ。確かめる必要があると千冬は真耶の机に向かった。

真耶の机に着きパソコンを見る。パソコンには小型のUSBが繋がっており、画面にはファイルが一つ。

「……………」

いったい何が映ってるんだと、千冬は不安を隠せない。幽霊の類いかと一瞬思ったり

はしたが、それにしたつてあの怯え方はあり得ない。

千冬はおそるおそるカーソルを動かし、ファイルをクリックする。

映像が再生され、それを見た千冬は――。

――

――全力でトイレに駆け込み、勢いよく吐いた。

同時刻、場所は変わって警視庁本部の喫煙所。

ここでは男達は煙草を吹かしながら和気あいあいと談笑をしていた。

「しかしまあ、IS学園に入る事になっちまったガキ二人は気の毒だねえ」

「そうっすか？　もしかしたら女好きかも知れませんかよ。既に何人が食つてたりして」

「かもな。うははは」

男子二人の現状を知る由もない彼等はあること無いことを口に出す。もしも男子二人がこれを聞いたのならば全力で彼等にグープンすることだろう。

「あれ。そういえばお前、二人目の護衛に回ってたんだよな」

そういつて男は喫煙所の隅で黙りを決める、頬に湿布を貼った男に話し掛ける。

「……………」

「なんだよ、さつきから黙って。その二人目はどんな奴だったんだ？」

「…………お前は、何も知らないからそんな軽口が叩けるんだ」

「あ？　なんだよそれ」

いったいなんのことだと男は詰め寄るが、喋る気が無いのか湿布を貼った男は沈黙してしまった。

そんな空気の中で、一人の男が一喝する。

「そこまでにしとけ」

一喝したのは一人の中年男性。その雰囲気と見た目からして、一番の上司であることが分かる。

「お前さん、ここで二人目の話はするな」

「…………？　どうしてですか？」

当然の疑問が浮かぶ男だったが、上司はそれに応える。

「あの青年はな、I S 学園に行くことを頑なに拒絶したんだ。そんな彼を無理矢理連れてった、それだけのことさ」

「……………」

「彼はな、この時代の……女尊男卑社会の被害に直接被つちまって、女とI Sを憎むようになった可哀想な奴さ。そんな奴がI S 学園に監禁じみた目にあう。お前さんはそれをどう思う?」

「……………」

男は黙ってしまう。想像してしまったのだ。

「…………彼をI S 学園に連れてった時に俺もいてな。暴れ狂う彼を無理矢理モノレールに押し込んだんだ。その時彼はどんな顔をしたと思う?」

「えっと……凄く、睨んでいた……でしうか」

男の答えに対し上司は首を振るう。彼は思い出したくないと言わんばかりに悲痛な顔でこう言った。

「…………いいや違うな。……彼はな、俺達を見て、涙を流して顔を歪めながら——」

——狂ったように嗤っていたんだよ。

誰も知らない、知るはずもない。

『狂気』はすぐそこにあることを。

第八話

『隆道……。お前、ほんとうにいいのか？今からでも遅くない。母さんと日葵ひまりの所へ行
くんだ』

『良いんだよ。あんな奴……。父ちゃんを捨てるような奴なんて、家族じゃない』

『隆道……。』

『大丈夫だよ。僕には……。父ちゃんとハルがいるから——』

「……………」

殆どの生徒が未だ夢の中であろう静かな早朝。隆道は目を覚ましゆっくりと身体を
起こす。目覚めは決して良くはなく、身体は非常に重く感じていた。

「……………くそつたれが」

彼は夢を見ていた。それは世界を震撼させた事件から二年後、隆道の家族が別れた日。

父親を捨て、自身と妹を連れてこうとする忌々しいかつての母親の顔を思い出し嫌悪感を覚える。

あれほど父親を愛していたのに『力』に溺れた母親はあっさりと捨てるというその醜さ。

何が愛しているだ。愛しているのは自分自身じゃないか。その中に何故父親を入れなかつたのだと彼は顔を歪める。

「……………」

彼は目を自身の右手首に動かす。そこには腕輪——ではなく犬用の古びた首輪。手首に巻き付け外れないようになっており、そこには『ハル』と文字が彫られてる。それは彼が身に纏う唯一の形見だ。

「……………」

彼に残されてるものは自宅を除けば形見のみ。生きる意味などとうに失っている。一人でなんて生きられない。それに今の社会は男にとっては地獄だ、いつ朽ち果てても可笑しくない。

「……………まだだ」

だが、彼は立ち上がる。思い出すのは一人目の男性 I S 操縦者、織斑一夏。

自分が支えなければ、誰が彼を支えるのか。彼には幼馴染はいるが女性というのもあり、常に気を遣うはず。

既に自分自身はボロボロなのだ。ならばせめて朽ち果てるまで彼を支えなくてはならない。

彼は台所まで行き、錠剤を二つ飲み込む。しばらくして俯いた顔を上げた彼の顔は何かを決意したようなものだった。

「大丈夫……大丈夫だ」

I S 学園三日目。彼の I S 学園生活はまだ始まったばかり。

「結局駄目だったのか。訓練機を借りるのは」

「はい、どうやら予約でいっぱいらしくて」

一時間目終了後の休み時間。一夏は隆道に言った最初の一言は訓練機を借りられな

いという事であった。

昨日の放課後、箒にしごかれた一夏は帰りの際彼と別れ職員室に行き、訓練機を借りないか副担任の真耶に相談した。

結果はNO。だが、それも仕方ない事であった。

IS学園にある専用機を除くISは教員用と訓練機を合わせても三十機もない。訓練機と言えど数は限られている。三学年、二学年、一学年と優先順位があるという事もあり、直ぐ様借りる事は出来ない。

「余計詰みじゃねえか、どうすんだこれ。専用機はまだ届かず、訓練機も使わせて貰えない。負けるって言ってるようなもんだぞ」

「山田先生も言ってたんですけど、今のところ知識を身につけるしかないですね……。授業には食いついてはいるんですけど……」

そう言っ顔をより暗くする一夏。授業に付いていくだけでいっばいいいっばいのよ
うだ。

「しようがねえだろ。元々はある程度の事前予習が必要だ。バカみたいに分厚い参考書だつてあるわけだしよ。まあ……どつかの誰かは電話帳と間違えて捨てたみたいだが」
「ぐっ……随分痛いところ突きますね。というより聞いてたんですか……」

「耳が聞こえないわけじゃないからな。てか、どうやったら電話帳と間違うんだ」

「……返す言葉もございません」

彼の言葉にクリティカルヒットし、ぐうの音も出ない一夏。ただでさえ知識は彼を除いた他生徒より遅れてるのだ。入学前に渡された参考書すら捨ててしまえば授業についていけなくなるのも至極当然の事。

IS学園に来てから反省事があまりに多過ぎる。もしかしたら自分は駄目な奴なのではないかと、そう思ってしまう一夏はほとんど顔に影が差す。

「そう落ち込むなよ。だから俺の参考書渡したんじゃねえか」

「そこは凄く助かってますけど……良いんですか?」

「良いんだよ。読む気なんて端から無いからな」

彼は昨日の帰り、一夏に参考書を渡した。一夏の参考書の再発行は来週までかかるため、読む気も無いので丁度いいだろうと。

「徹底してますね……。ちふ、織斑先生が聞いたらなんて言うやら」

「知るかよ」

まるで千冬などこれっぽっちも恐れてない様な振る舞いを見せる彼に一夏は顔を引き攣る。それと同時にかなり肝が座っている隆道が羨ましく思う一夏であった。

「あ、そういうば先生で思い出したんですけど。昨日訓練機を借りようとした時、山田先生の様子がおかしかったんですよ」

「おかしかった？」

「ええ、まるでおぞましいものでも見たような、そんな感じ。言葉も少しもつてたんです。今日の一時限目の時もそうですよ。というより昨日より酷かったですね」

「ふーん。顔なんて見てすらいねえからわかんねえや。どうせホラー映画的な物でも見たんだろ」

「そうなのだろうかと首を傾げる一夏。しかしあの怯え方はそうでないと感じが告げる。授業中、何処かを見るたびに怯えていたような――。」

「そんなことより授業始まるぞ。また出席簿食らいたいののか」

「うわやばっ！　じ、じゃあ柳さん、また後で」

「ん」

午前授業が終わり昼食時間となる正午。隆道はまたしても一夏の誘いを断り購買に向かっていた。昨日のおにぎりと唐揚げが忘れられなかったのだ。

あの静かな場所で食べた素朴なおにぎりと濃厚な味付けをした唐揚げは、隆道の胃袋をがっちりと掴んでいた。

いくら女性嫌いな隆道でも食欲には勝てない。生徒がいる可能性があるが、そんなことどうだっていい。関わらなければ問題は無いのだ。

漸く購買にたどり着いた彼は直ぐ様カウンターへ足を運ぶ。途中で近くにいた生徒達が彼に気づくなり道を開けひそひそ話を始めるが今の彼にとってはどうでもいい事。女性嫌いは治らなかつたが隆道を虜にしたおにぎり&唐揚げパワー恐るべし。

「……………？ あら、また来たのかい」

「昨日のやつをくれ」

購買の女性が隆道に気づくと直ぐ様彼は財布を取り出し五百円玉をカウンターにパチンツと勢よく押し付ける。どれだけ欲しているのだろうかこの男は。

「……………ふふっ、ちよつと待ってな」

彼の行動に面食らつたような顔をした彼女は、やがて笑顔を見せ棚を漁る。いくつかのおにぎりや数種類のおかずを紙袋に詰めペットボトルと一緒に隆道に渡した。

「昨日はいきなりだったからね。梅じゃ味気無かつただろう？他にも色々詰めておいたから」

「……………どうも」

五百円玉しか渡して無いにも関わらず色々詰めてきた彼女に一応礼を言い、隆道は早々に立ち去る。

「……昨日よりはマシになった、かな」

女性不信は相変わらずだったが昨日と比べるとだいぶ落ち着いてるように見える。信用されてはいないが、今は良しということにしよう、彼女は小さく頷いた。

「おお……」

屋上に着き以前のベンチに座り込んで紙袋の中身を見ると、そこには昨日よりもおかずが二つほど増えていた。

（昨日のおにぎりと唐揚げだけじゃなく、春巻きに……だし巻き卵かこれ？五百円で買える量じゃねえぞ）

昨日のやつをくれとは言ったが、まさか追加するとは思わなかった。しかも量が凄まじく、コンビニ等で買えば軽く千円は超えるのは確実だ。

自然と唾を飲み込む隆道。勝手に追加したのは向こうなのだ。有り難く頂こうと、手始めにおにぎりから手をつけた。

（鮭か。もう一つは昆布だな、はみ出でんぞ）

女子が絶対に食いきれないであろうその巨大なおにぎりにかぶりつくと、日本人がよく知る赤身が見え絶妙な塩加減が舌を唸らせる。もう一つは完全に昆布がはみ出ている。きつと中身はぎつしり詰まってるに違いない。

「……………」

おにぎりに夢中になる所ではあったがおかずも忘れてはならない。春巻きにもかぶりつき、立て続けにだし巻き卵を口に放り込む。春巻きは出来立てに近く、皮は良い具合にカリッとしている。だし巻き卵もこれまた絶品でほのかに甘い。

「……………うまいな」

ふと、自然に言葉が出てしまった。一つ一つは大したものではないが、隆道はここ最近食べた物の中で格別に旨いと感じていた。

「……………明日も行くか」

別に彼女を信用している訳ではない。しかし、彼の舌が、胃袋が完全に覚えてしまった。

このIS学園での昼食は決まりだ。明日は何かかと笑みを溢しそうになる。

誰にも邪魔されない、のどかな風景での食事。少なくとも隆道の壊れかけた心を癒した事は確かだった。

隆道の心が癒されてる頃、場所は変わって職員室。机で頬杖をつきながら一枚の書類を眺める千冬は頭を抱えそうになっていた。

「やはりきたか……」

その一枚の書類には、二人目の処遇について明確に記されていた。

『柳隆道のＩＳ搭乗によるデータ採取』

世界中が欲している男性ＩＳ操縦者。そのデータ採取を催促されるのは当然の事だ。世界がまた革新することになるかもしれないものを放つたらかしにするわけがない。しかし、千冬は今回ばかりは避けたい所であった。

一人目であり、自分の弟である織斑一夏の処遇が決まった時は怒りを覚えた。

今まで一夏にはＩＳ関連に関わらせる事は決して無かった。なのに彼がＩＳを動かせてしまった事、ＩＳ学園に入る羽目になった事、データ採取を目的とした彼の専用機が決定したこと。

全てが無駄になってしまった。あれほど徹底的にＩＳから遠ざけたのにだ。そのツケとして一夏は授業で苦しんでいる。こんなことなら遠ざけず知識だけでも与えれば

よかったと千冬は後悔した。

そして現在、千冬の最大の悩みである二人目の男性 I S 操縦者、柳隆道。

女尊男卑の直接的被害により筋金入りの女性と I S 嫌いである彼もまた政府が専用機を渡す事が決定した。

一夏と違つて機体は最新型ではないが、問題はそこじゃない。彼自身が I S に搭乗するのを強く拒絶している事だ。

適性検査で起動した際に I S の機能の一つである操縦者を安定に保つ機能があるにも関わらず、錯乱し大暴れした彼を乗せるのは千冬も反対だった。

それに、昨日見たモノレールの映像記録の事もある。もし、アレを I S 学園内で見ることになったら――。

「……………」

今思い出すだけでも吐き気がすると、千冬は苦虫を噛んだように顔を歪めた。

アレはダメだ。あんなものを見てしまったら隆道がどれだけ女性と I S を憎んでいいのか想像も出来ない。

そんな彼に専用機を渡すなど、死よりも地獄を与えるのに等しい。

だが、政府はそんなこと知ったことではない。最早一夏や隆道を人として見ていない、データ採取の実験体として認識している。

「……くそっ」

隆道に伝えなければならぬ。真耶は千冬と同様に例の映像記録を見てしまった為、完全に隆道に対して怯えてしまった以上自分が伝えるしかない。いったいどれほど罵倒されるだろうか。現時点で信用なぞマイナスだが今回の件で更に溝が深まるだろう。

「ままならんもんだな……」

放課後の剣道場にて。

箒の宣言通り稽古が始まり約三時間程。一夏は完全に伸びており魂が見えそうになつていた。

「」

「大丈夫かよ織斑……。三時間もぶつ通しでやるからそうなるんだ。」

とても大丈夫そうには見えないが、隆道は一夏に一応声を掛けて反応を見る。

箒による怒涛のノンストップ稽古は一夏を燃え尽きさせるのには十二分な効果が

あった。というか彼女がタフ過ぎた。あの身体のどこにあれだけのスタミナがあるのだろうか。

「み……、み——」

「あーはいはい、水な。今持ってくるから待ってろ」

反応があるという事は大丈夫だなと、隆道は鞆から予め用意していた小さめのペットボトルを取り出す。剣道場の端っこで未だに力尽きている一夏の身体を起こしそれを飲ませた。

「軽い脱水状態だな。水じゃねえけど飲め」

「……っはあ！……ありがとう、ございます。何ですこれ？ スポーツドリンクにしては透明ですし、味も変わってますね」

渡された物を一気に飲み干す一夏だが、見たこと無いものだなとそれを凝視する。

それは普段目にする500mlのペットボトルより約半分ほど小さく、名前もアルファベットと数字のみ。くるりと回すと使用目的や注意事項がびっしりと書いてある。

「経口補水液だ。スポーツドリンクより電解質濃度が高いし糖濃度が低いから吸収は速いぞ」

「け、けーこーほすいえき？ で、でんかい？ とうのうど？」

馴染みの無い言葉の羅列に一夏は疑問が絶えない。全然分からない、スポーツドリン

クとは違うのかと。

「汗かくと身体の塩分が無くなるだろ？ 塩分＝電解質濃度と思つとけばいい。糖濃度はブドウ糖の事だ。ブドウ糖は聞いたことぐらいあるだろ。塩分取る時にブドウ糖も取るべきなんだが、少なすぎても多すぎてもダメだ。だがこれだったらそんな事解決しちまう」

そういつて隆道は鞆からもう一つ同じ物を取り出し一夏に渡す。

要はスポーツドリンクより効き目が高いって事だなと、一夏は再度渡された物を飲みながら無理矢理納得した。

「だが気を付けろよ。病者用食品だから多用はやめとけ。あくまでこれは脱水対策だからな。普段なら水やスポーツドリンクで十分だ」

「へー、結構物知りですね。というよりなんで持つてたんです？」

「あのバッグに数本入ってたからな、せっかくだから一応持つてきた。……つかはよ着替えてこい。どんだけ汗かいたと思ってるんだ」

「ああ、すみません。直ぐ戻りますんで」

自分の汗臭さに気づき、颯爽と更衣室に行く一夏。彼はそんな一夏を見てこう呟いた。

「あいつ、来週まで持つのか………?」

この調子だと恐らく来週の月曜日にはミイラになるかもしれない。色々用意しとくかと、一夏のサポートをすることを決めた。

一夏の着替えが終わり、隆道と二人で駄弁りながら寮に戻る最中、後ろから声が掛かる。

「柳、話がある」

「……なんだよ」

二人が後ろを向くとそこにいたのは千冬一人。しかし心なしか、彼女から覇気を感じられない。少なくとも一夏にはそう見えた。

何の用だと、隆道は敵意を露にし千冬を睨む。

「授業態度がなっていないから個別指導ってか？ 言つとくが——」
「違う、その事はいい。別件でとても大事なことだ」

余程の事なのか、千冬は隆道に睨まれても下がろうとはしない。逃げてもどうせ無駄

だろうと、隆道は渋々応じる事にした。

「さっさと要件言えよ」

「ここでは話せない、ついてきてくれるか?」

「……分かった。織斑、悪いが先に帰ってくれ」

「え、でも……えつと」

一夏は不安であった。隆道と千冬を二人にして良いものかと。この三日間で隆道の女性嫌いは嫌と言うほど理解している。他者がいてもあの調子なのだ、二人きりになつてしまえばどうなるかなど想像出来る。

そんな彼に対し隆道は優しく微笑んだ。

「心配すんな。用が済んだら後で部屋に行くから」

不安を隠せてない一夏にそう一言言つて、隆道は千冬の後についていった。

「……笑った顔、初めてみたな」

此方を安心させる為なのだろうか。彼がした、初めての笑顔を見た一夏の不安は不思議と消えていた。

しばらく歩き隆道と千冬は個別指導室に到着、中に入るなり彼女は鍵を閉めた。個別

指導室は完全な防音仕様だ、音が漏れる事はない。

「……それで、話ってなんだよブリュンヒルデ」

二人きりになった直後、敵意と警戒心を最大限にぶつける隆道。あそこでは話せない
と彼女は言った。誰にも聞かれたくない事だ、絶対ろくなことじゃない内容だと隆道は
確信している。

「……お前の機体についてだ。近々専用機が渡される事が決定した」

「……………」

その一言で隆道の治まっていた憎悪と殺意が一気に溢れだし千冬に襲い掛かる。

ここ二日で多少は落ち着き、憩いの場や一夏の実在もあつて大人しくなつた彼であつ
たが彼女の言葉によつてそれも全て消えた。

この世界で専用機を渡されるのは名誉な事この上ない。しかしそれが男性となれば
話が変わってくる。

『モルモット』

その単語が彼の頭を過る。世界に二人しかいない男性 I S 操縦者。何故動かさせたの
か、乗らせてどういった成果が得られるのか。国が、世界がそれを知りたがっている。

彼は自分がどれ程の価値があるかを理解している。数少ない貴重な I S に乗せて
データを取らせる事は何も不思議じゃない。

だが理解と納得は別物だ。自ら実験体になる物好きなど滅多にいない。

それに加え、自身が忌み嫌うISを纏う。隆道にとってはこれ以上ない苦痛だ。

(結局、こうなるのかよ……)

ISに乗らない。隆道はそう豪語はしたが所詮は青二才。世界には逆らえないのだ。

女性に人として見られず、今度は世界からも人として見られない。そう思うと彼の心は段々と黒く染まっていく。

千冬は以前よりも増した負の感情の前に後退りしそうになるが、これを耐える。

「やっぱり、か。……そうだよなあ、じゃなかつたら無理矢理こんなところに連れてくるんてしねえよなあ」

その言葉は初日で見せたものより黒く、暗い。

セシリアに向けたそれとは比べ物にならない程のどす黒い何かを前にして千冬は息苦しくなる。

あの時より更に悪化している。彼の女性とISに対する感情はもはや物差しでは計れない。

初日は油断していた為に真耶同様尻もちをついてしまったが今度はそうはいかないと、彼女は全力で耐えた。

「……それについては、すまないと思っっている。お前をISに乗せるのは私も反対だ。

だが政府が男性IS操縦者のデータを取れとな……。私は所詮教師だ、こればかりはどうにもならなかった……」

それくらい隆道でも分かっている。世界最強など只の飾りだ。多少の融通は利くかも知れないが限界はある。

彼は、もう二度とISから逃げられないのだ。

これ以上は無意味だ。そう考えた隆道は感情を引つ込め話を続ける事にした。

「……そうかよ。んで、何に乗れってんだ」

「……政府が量産機を手配するそうだ。日曜には学園に届くからその時にまた連絡する。……本当にすまない」

「思ってもいない癖に謝るな、虫酸が走る。……用は済んだか？俺は帰るぞ」

「……ああ」

そういつて隆道は部屋から出ようとする。扉の前まで行った時、何かを思い出したのか立ち止まり、顔だけを千冬に向けた。

「そうだ、せつかくここにはあんたしかいないんだ。今のうちに言っておきたいことがある」

「……なんだ」

今度は何を言われるのか、罵倒でも何でも来いと千冬は身構えるが——隆道の言葉に

よつてそれはあつさり砕け散る。

「」。――」。

彼が発した言葉はとても小さく、近くにいても耳を澄まさない限り聞こえはしないだろう。

だが千冬には聞こえた。聞こえてしまった。それを聞いた彼女は大きく目を見開き、震える。

「柳……お前――」

「よく覚えとけ。俺はあんたと、あの女を許さねえ。絶対にだ」

その一言を最後に、彼は部屋から出ていき勢いよく扉を閉めた。

「……………」

千冬はその場から動かなかつた――いや、動けなかつたと言つた方が正しいのかも知れない。

彼が自分に発した言葉。あれは憶測や確信などでは決してなかつた。

彼は知っている。

「…………憎まれて当然、か」

もはや彼から信用を得ることは不可能に近い。そう確信した千冬は近くの椅子にもたれかかり、深くため息を吐いた。

第九話

千冬から隆道の専用機についての話があつてから日時は過ぎ、日曜日の夕方。職員室で真耶は政府からようやく届けられた隆道の身辺調査書を見ていた。

半月前に政府から送られてきた隆道に関する書類は目を通したが、それは今までの家族構成と適性検査前後の詳細のみ。隆道の過去の経歴は一切無かった。

「な……………なんなんですか、これは」

その内容を見て真耶は絶句する。

所々が虫食いのように塗り潰されており、全ての詳細を把握する事は不可能になつて
いる。

いつたいなんだこれは。これでは身辺調査の意味が無いではないか。

何故政府はこんな虫食いだらけの調査書を送つてきたのか。

辛うじて把握出来るのは小学校、中学校で一回ずつ転校をしている事だけ。

「知るな、……………ということなのでしょうか」

真意は不明。だがこれでは隆道の事が全く分からない。

いったい彼がどのような被害にあつてきたのだろうか、何故あそこまで女性とISを

敵視するのか。

詳細を知ろうにも、隆道が在学していた高校からは聞き込みを拒否され、近所の住人は話したからない。

このままではいけない、自分自身で確かめなくてはと、真耶は受話器を取った。

「柳さん、本当に大丈夫なんですか？」

「今更だろ。つか、乗らねえとか言つときながら結局乗る羽目になるんだからお笑いだよな」

「でも、柳さんは……………」

「向こうはこつちの事なんざ知つたこつちやねえだろうよ。……………それよりも、結局今日も織斑の専用機来なかつたな」

場所は変わって、一夏の自室である1025号室。一夏と隆道の二人は暇を潰しながら千冬の連絡を待っていた。今日は隆道の専用機が届く日である。

一夏と同居している箒は現在部活の真っ最中とのこと。

「確かに来ませんでしたね。最新型らしいですけど」

「俺よりも織斑の専用機を優先しろつての。先に渡す事決まってるのになにやってんだか。やったことなんて知識を身につけると稽古をして体力をつけただけじゃねえか」

そう、一夏の専用機は未だに来てない。明日のセシリアとの対決に間に合うかどうかも怪しい。

一夏に出来たのは授業に食いついて知識を多少得た事と、箒による怒濤の稽古で何度か死にかけてたが体力がついた事。隆道のサポートのおかげで回復も早く、次の日まで疲労が取れないということはなかった。

知識については隆道の部屋で自主勉をし、隆道も渋々付き合ったので彼も多少は知識を身につけている。

一夏が隆道の部屋に行く度に箒に睨まれてることを彼は知らない。

「柳さんのは量産機でしたっけ。俺のは最新型なのに不公平じゃありません?」

「ばっかお前、ISの開発にどれだけの時間と労力と金がいると思ってるんだ。それに俺が適正発覚したの半月前だぞ。どこぞの天才でもない限りどうやって最新型なんか間に合わねえよ」

「あー、それもそうですよね」

ISには計り知れないほどの開発費を要する。それに加えどの国も人材不足というのもあり、おいそれと新型開発など出来ないのだ。

ちなみに一夏の専用機開発に技術者を取られてしまい、開発途中だったISを未完成のままにされた代表候補生がいるのだが、彼はその事を知らない。

「柳さんの専用機が第二世代で俺の専用機が第三世代、でしたっけ？ 操縦者のため、いめー……………」

「イメージ・インターフェイスな。なんで俺の方が覚えてんだ」

「そ、そう、それです。思考制御する特殊兵装の搭載を目的とした世代……………ですよね？」

「なんで途中から自信無くすんだよ……………。少しは自信持て、合ってるから」

ISは第一世代、第二世代、第三世代と進化しており、現在はその第三世代に移り変わるろうとしている。

第一世代は兵器としてのISの完成を目指した機体を指し、現在はほぼ退役している。

第二世代は『後付武装』^{イコライザ}によって戦闘での用途の多様化に主眼が置かれた機体を指す。多くの国がこの第二世代が主力となる。

そして最新型である第三世代。一夏が言ったようにイメージ・インターフェイスを用

いた特殊兵装を搭載した機体を指す。

だが、未だ実験機の域を出ていなく、その特殊兵装を使用する際も集中力が必要だったり燃費が悪いなど課題は多い。

この事から隆道は一つの不満があった。

「つか、やつぱおかしいわ。なんで初心者に実験機の第三世代を渡すんだよ、せめて第二世代だろうが。色々舐めてんだろ」

「最初聞いたときは深く考えなかつたんですけど、言われてみればですね。………なんか色々不安になってきたんですけど」

「物が来ない以上考えても無駄だなこりゃ。………そういやあの馬鹿の情報とかどうだったんだ？」

馬鹿
セシリアは確か代表候補生で専用機を持っていたはずだ。あれほど自分を知らないのかと言っていたのだから、なにかしら情報はあはず。敵を知れば多少は勝機に繋がるはずだと隆道は一夏に問い掛ける。

「馬鹿………う？ああ、オルコットさんの事ですか。えつとですね、たしか第三世代で名前が『ブルー・ティアーズ』って言いまして。中距離射撃型だそうですね」

「ブルー・ティアーズ？蒼い雫ってか。んで、第三世代つてんだから勿論特殊兵装積んでるんだろ」

「はい、どうやらですな——」

一夏が言いかけたその時、扉は叩かれる。一夏が扉まで足を運び、開けると千冬がいた。どうやら隆道の機体が到着したようである。

「ようやくかよ。つかあんだ、織斑の機体はどうなったんだ。俺よりそっちを優先すべきなんじゃないのか」

「……………それについては我々は関与していない。此方も何度か催促してるのだが、遅れるとの一点張りだ」

「だったら試合なんて延期すればいいだろ。クラス代表なんてあのイギリス人にやらせればいい。そこまでして織斑を戦わせる理由でもあるのかよ」

「アリーナ予約の関係もある。今変更は出来ん」

IS学園のアリーナで行う今回の試合は一組の貸し切りとなっており、そう簡単にキャンセル出来るものではない。しかも明日使用する為尚変更など不可能だ。

「物は言いようだな、織斑より大事か。流石教師だな、ご立派過ぎて涙出ちまうよ」

「……………」

千冬をこれでもかと煽る隆道。流石に効いたのか、千冬の顔は少しばかりピクピクと痙攣しはじめた。

「……………まあ、別にいいか。俺にはあんたの考えなんざ理解出来ねえし、したくもねえか

らよ。んなことより早く案内しろよ、さっさと終わらせようぜ」

「……………ああ、そういうわけだ織斑。しばらく柳を借りるぞ」

「え、あ、うん。分かったよちふ——つでえっ!？」

「織斑先生だ」

言い切る前に千冬の制裁が炸裂する。一夏が千冬を織斑先生と自然に言える日はまだ先のようなだ。

第一整備室。その部屋で隆道と千冬は並び立ち、一機のISを見つめている。

そのISの名は第二世代型IS『打鉄』。

日本製量産型ISであり、二世代型ISの中では最高の防御性能を誇る。

肩部の浮遊シールドは自己修復機能を備えており継戦能力を上げ、支援機として高い能力を持つだけでなく、扱いやすさと、整備のしやすさから、各国で多くの機体が稼働している。

ちなみにI S学園の訓練機ではもつとも多く配備されている代物だ。

「……………これがそうか」

「ああ、初期化フィッティングと最適化パシナライズを行い、今後は柳の専用機として扱う。乗ってくれ、設定が完了するまで30分前後は掛かるぞ」

目の前のI Sはまだ初期設定状態であり、これに乗って初期化と最適化（合わせて一次移行ファーストシフト）を経て、初めて専用機となる。

千冬に言われてゆつくりと足を運ぶ隆道だったが、目の前まで進んでびたりと足を止めた。

「……………」

「……………どうした?」

打鉄の前に立つなり急に黙り始める隆道。千冬が彼の顔を覗くと、その目は暗く、哀しく、そして悲痛な表情だった。

以前のような憎悪は感じられない。どういうことだと、千冬が疑問に感じると隆道が一言呟いた。

「……………しばらく一人にしてくれよ」

「……………」

「逃げはしねえよ。……………一次移行が終わるまでいい」

「……………分かった。管理室にいるから終わったら連絡をくれ」

隆道が何を考えてるかとは分からない。だが一人にさせた方が良いと感じた千冬は、そう一言言つて第一整備室から出ていった。

「……………くっ」

一人になり、目の前のISをじつと見つめる隆道。数秒ほど経ち、ふと頬から水滴が滴つた。

それは涙だった。以前屋上で流したのとは違い、今度は大粒の涙。

「……………くそがあっ!!」

隆道は叫びながら目の前のIS、打鉄を右手で思いっきり殴り付ける。ISは金属の塊だ、当然びくともしない。むしろ彼の拳の皮膚は裂け、軽く出血する始末。

殴つたところで意味はない。しかし、彼は殴らずにはいられなかった。

『ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください』

「何が……………、何がパートナーだ!こんな……………こんなの兵器以外なんだってんだ……………!!」

以前、授業に遅れて教室に入ろうとした時の真耶の言葉を思い出す。

一夏の前ではなんて事ないような振る舞いだつたがそんなことはない。忌み嫌うISを自ら纏う、それが堪らなくてしようがなかったのだ。

千冬に出ていってもらい、溜め込んでた感情が吹き出る。それはモノレールで怒鳴り散らしたのとは違う、悲痛な叫び。

「なんで………なんで、俺なんだ………」

もう後戻りは出来ない。そう思うだけで涙が止まらない。

隆道は徐々に崩れ落ち、打鉄に手を添えたまま膝をつく。もはやその姿はとても生徒全員より年上には見えない。

そして限界に達した彼は――。

「ぐ、うう………ああああああああ」

――枯れてしまいそうなほどに泣き叫んだ。

「入るぞ」

千冬が出ていってから40分後、隆道から一次移行が終わったと連絡を受け彼女は直ぐに整備室へと戻る。

部屋に入ると、そこには一次移行を終えたIS、打鉄を身に纏う隆道が力なく立って

いた。

そのISは既存の打鉄と姿は変わらない。しかし色は見慣れた銀灰色ではなく、光沢の無い黒灰色こくかいしよく。灰色のラインが入っており、可動でもするのか装甲の所々に切れ込みがある。

「……………よお、これでいいのか」

隆道が千冬の方へ顔を向けると、あまりの悲惨さに彼女は目を見開く。

隆道の目は今まで見た時よりも濁っており、声も絶望に陥ったかのように暗い。

それだけじゃない。彼からは『敵意』も『憎悪』も、何も感じられない。

（これでは、これではまるで死人ではないか……………！！）

酷い、これはあまりにも酷すぎる。我々が彼をここまで追い詰めてしまったのかと、

千冬は自分を殴りたくなる衝動に駆られた。

「黙ってないで、なんとか言えよ……………。どうやって外すんだ……………これ」

「あ、ああ……………。解除と念じろ。そうすれば勝手に待機形態になる」

「……………」

隆道は目をゆつくりと目を瞑る。するとISは光の粒子と化し、やがて彼の首元に集まり待機形態へととなった。

「んあ……………？これが待機形態……………？」

それは首輪だった。隆道のI Sは、細長い長方形のパネルのようなものが組み込まれた鉄の首輪となり彼の首に付けられている。

I Sの待機形態は通常アクセサリーの形状になるが、どのような形になるかは指定出来ない。その為どういったものになるかは機体にコアを組み込むまで分からないのだ。一次移行する前の待機形態は銀色の腕輪だったが、それが何故か鉄の首輪に変貌した。

理由は分からない、だが隆道にとつて首輪は色々な意味でマズかった。

「ははっ……………首輪、か。飼い殺すつてか、くそつたれ」

もはや今の隆道に感情は無いに等しい。彼の変わり様に千冬は啞然としてしまった。

これは堪らない。一夏にも決して見せなかつた涙が溢れそうになるが、唇を噛み締める事によつてこれを耐える。

「や、柳……………気分は、……………良いわけないか。……………すまない」

「謝るより笑つたらどうだ。あれだけ乗らねえと豪語してたクソガキがお前らの望み通りI Sに、しかも専用機に乗ってるんだぜ……………」

「柳……………」

もはややくそくなつていいる隆道をどうにか宥めようと、千冬は必死に思考するが言葉が出てこない。どのような言葉を掛けてもマイナスにしかならない未来しか見えな

いからだ。

「もう、いいか?.....帰らせてくれ」

「.....ああ、構わない。あと、これが必要事項だ。必ず目を通してくれ」

そういつて千冬は電話帳以上に分厚い書類を袋に包んで渡す。何も言わずに受け取った隆道はそのまま黙って整備室から出ていった。

隆道が出ていったと同時に千冬は小粒の涙を流す。もうダメだ、我慢の限界だと。

「う、くっ.....すまない、すまない.....」

場所は変わって一夏の自室。部活が終わり帰ってきた箒がシャワーを浴びている頃、一夏は明日の追い込みをかけるべく自主勉をしながら隆道の事を心配していた。

「本当に大丈夫かな、柳さん」

隆道が千冬に呼び出されてから一時間以上は経つ。手続きに手子摺っているのだからかと一度は考えたが、違う気がする。嫌な予感しかしないのだ、あれほどISを嫌っていた隆道があっさりと諦めたりするのだろうか。

「……………考えてもしょうがないか」

これ以上考えても仕方ない。まずは明日の為に出来るだけ知識を詰め込んでおかないとならない。専用機が未だ届かない一夏が出来ることはそれだけだった。

「一夏、あがったぞ」

「うん？ ああ、じゃあ俺もシャワー浴びるかな」

いつのまにか止めていた自主勉を再開しようとするが、丁度箒がシャワー室から出てきた為、後にしようとして一夏はシャワーを浴びる事にした。

「……………」

一夏がシャワーを浴びる最中、箒は一人考えに耽っていた。

最近あまり一夏に構って貰えなかったのだ。朝食時間と昼食時間、そして放課後の稽古と夕食時間以外は暇さえあれば隆道の所へ行き、先輩後輩のような、それでいて気楽な会話をしている。

これだけで言えば箒の方が一緒に居る時間の方が長く思えるが、本人は満足していなかった。

一夏の気持ちもわからなくはない。女性だらけの環境に同じ境遇の男子がたった一人なのだ。隆道の所に自然と足を運ぶのも理解出来る、しかし納得は出来ない。

初日もそうだ。六年ぶりの再会だったのに、一夏が最初に向かったのは自分ではなく

隆道の方。箒はこれが面白くなかった。だから堪らずに自ら向かい、彼を無理矢理な形で連れ出したのだ。

彼の明日に向けての稽古は力を取り戻すと豪語したが、実は二の次。可能な限り一夏と一緒に居たかったという欲望の表れである。

その結果、一夏はメキメキと力を取り戻していったので互いにWINWINだろう。かなり稽古に熱中したので毎度一夏は伸びてしまったが、隆道のサポートにより次の日には疲労など見えずピンピンしていた。その事については感謝をしても良いのかもしれない。

「柳……………隆道」

ふと二人目の名前を箒は口にする。

常に無表情で目は暗く、左頬にある二本の古傷。女性とISを嫌悪している彼には少し親近感があつた。

望んでもいないIS学園に無理矢理連れてこられる。私と一緒にだと思つた。

箒の姉、篠ノ之束により自身の人生を狂わされ、好意を寄せていた一夏と、家族は離れ離れになった。

そしてその日から転校を繰り返して中学を卒業し、自分の意思など関係無いと言わんばかりにIS学園に入学させられる。

過程は違うが、彼も私と一緒に国に振り回される身なのだと感じた。

そして、箒はやはり隆道にひっかかりを覚えている。

ひっかかりと言えば初日に一夏を連れ出した時もそうだった。

あの時は仕方ないとはいえ彼にギリギリまで接近したが、彼は一目見るだけで何もなかった。

隆道は敵意も憎悪も向けなかったのだ。

確かに自己紹介の時とセシリアの一連で敵意、警戒心、憎悪、殺意は感じた。

だがそれだけだった。他の生徒には向けていたが、箒には一切向けていない。

いったい何故と、そう考える箒だがひっかかりを覚えるだけで答えは全く出てこない。

「わからん……………」

疑問が止まないその時だった。部屋の扉を軽く叩く音がしたのだ。

いったいこんな時間に誰だと、箒は扉へ向かう。扉を開けると、そこにはかつてないほど暗い雰囲気を漂わせる隆道の姿があった。

「あ、貴方は……………」

「……………ああ、篠ノ之か」

箒は思わず面食らってしまったが、よく見ると隆道の様子がおかしい。全てにおいて

絶望したような、そんな感じに見えた。

「織斑は、不在か」

「え、いや、その、一夏は今シャワーを浴びてます」

「ああ、なるほどね……………それじゃ、伝言頼めるか……………？」

いつも以上に暗く、声も活気がない。シャワーを浴びる前に専用機を受け取りに行つたと一夏から聞いていたが何か問題があつたのだらうか。

箒は言葉にはしないが、今の隆道は死人にしか見えなかつた。

「え、ええ、どうぞ」

「今日はこのまま帰って寝る。そう、伝えといてくれ……………じゃあな」

そう言つて隆道は力なく帰つていく。その後ろ姿を見て、箒は何故か哀しいと感じた。

翌日の月曜日、放課後の第三アリーナ・Aピットにいるのは一夏、箒、千冬、そして

隆道の四人。

四人は一夏の専用機を待つてはいるが、未だ来てない。既に対戦相手のセシリアはアリーナに出ているというのだ。

「……………なあ、箒」

「……………なんだ」

「いくらなんでも遅すぎだと思わないか？ 今日対戦すら出来ないんじゃないか？」

「こればかりはどうしようもない。待つしかないだろう」

一夏は一層不安になる。専用機は届かないとなると確かにどうしようもない。これではアリーナ貸し切りが無駄になるだけじゃないかと。

「……………」

それに、一夏を不安にさせてるのはそれだけではなかった。

ピットの隅を向くと、そこには鉄の首輪をずっと弄つてる隆道がいる。彼がここにいる理由は、観客席に男一人だけいるよりは良いだろうという単純なもの。アリーナに行く事すら断られるかと思いきや、彼は二つ返事で来てくれたのだ。

そんな彼が弄っているあの首輪が隆道の専用機だということは千冬に先程聞いたので、首輪については何も思っていない。問題はそこじゃない。

「……………」

隆道の雰囲気はかなり暗く、濁った目をしていた。一夏が声を掛けても何処か上の空で、声も活気が全く無い。

昨日のシャワーを浴びた後に箒から隆道の伝言を一夏は聞いたが、その時からあの様子なのだ。一体何があったのだろうか、一夏は不思議に思っていた。

「えと、柳さん。具合でも悪いんですか？」

「……………？ああ、悪い。聞いてなかった……………なんだって？」

「いえ、具合でも悪いのかなと」

「具合、ねえ。大丈夫だと思うぞ。……………大丈夫だと思う」

隆道の返答を聞いて一夏は直ぐ様察した、絶対大丈夫じゃないと。

非常に嫌な予感がする。近いうちにとんでもないことが起きる。そう勘が告げているのだ。

「……………そんなことより、まだ専用機来ねえのかよ。今日はもう来ないんじゃないか」

「あ、えーと。……………どうしましょうか、これ」

「仮に今来たとしても一次移行しなきゃならねーし、試合なんて出来ないだろ。帰ろうぜ」

そう言つて隆道が帰ろうとした矢先に、真耶が駆け足でピットに来る。どうやらたった今一夏の専用機が到着したようだ。

「来ました！織斑君の専用 I S！」

「や、柳さん！来たそうですよ！俺の I S が！」

「あ？今更来たのかよ。いくらなんでも遅すぎじゃ——」

やっと来たのかと、隆道は呆れながら振り向きその I S が視界に入った途端——。

「」

——彼の息は止まった。

そこにあるのは灰色の I S。初期設定状態だからなのか、飾り気の無い見た目をして
いる。

見たことは無いはずだ。

なのに、何故息が詰まる。

何故恐怖を感じている。

心臓の鼓動が良く聞こえるほど、隆道は周りが静かに思える。

次第に鼓動は大きくなり、言い様のない恐怖に駆られる。

まるで、十年前の――。

「――さん！柳さん！」

「っ!？」

一夏の叫びによって隆道の意識が戻る。いったい今のはなんなんだと。

もう一度一夏の専用機を見るが、今度は何も感じない。

流石に気のせい、とは思えない。

(なんなんだよ、さっきのは……………)

ISを見るだけで嫌悪感が凄まじい事になるのはあったが、恐怖したのはこれで二度目だ。

気味が悪い。隆道はそう感じずにはいられなかった。

「柳さん！やっぱり具合が……………」

「あ、ああ、悪い。もう大丈夫だ」

「……………本当ですか?」

「しつげえぞ……………。俺は大丈夫だから、さつきと一次移行して帰ろうぜ。試合なんて間に合わねえだろ」

隆道は謎の恐怖感を振り払い、先ずは現状を把握する。一夏の専用機は初期設定のまま。一次移行しなければいけない。まさかこのまま試合に駆り出すなんてバカな事は無いだろうと彼は思ってはいたが——それが現実となる。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用出来る時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

「はい?」

「なあっ!?!」

千冬の衝撃的な言葉に一夏は素つ頓狂な声をあげ、隆道は驚愕する。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないから初期化と最適化は実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ」

「おい!ちよつと待てよ!気は確かかあんた?」

「柳。さつきも言ったが、アリーナの使用時間は限られている。織斑には、実戦で一次移行させる」

「あんた、自分が何言ってるか分かってんのか……! 一次移行も済んでない織斑を、代表候補生と戦わせようってのかよ!？」

隆道の怒鳴り声に全員が驚愕する。ほとんど無表情で淡々としか喋らない彼が、一次移行を済ませてない一夏を行かせまいと怒っているのだ。

「……………そうは言うが、オルコットは既に待機している。観客席にいる生徒もだ。ここまできて中止となれば、どうなるか分かるだろう」

「……………!？」

隆道は察した。もしこのタイミングで中止したら、その皺寄せは一夏に行く。逃げ出した臆病者というレッテルを貼られて。既に一夏には逃げ場は無かった。

「く、くそつたれが……………!」

もはやどうにもならない。一次移行を完了させるには30分前後は必要だ。それまでに持ちこたえるなど、隆道には想像出来なかった。

そんな絶望を顔に出す彼に、一夏は声を掛ける。

「柳さん。俺の事心配してくれてありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。なんとかあります、なんとかしますから」

「織……………斑……………」

一夏の顔を見て隆道は目を見開く。彼の目はどこまでも真っ直ぐで、見惚れてしまい

そうなほど綺麗だった。

(どうして、お前は……………)

一夏を見て隆道は固く決意する。尚更一次移行を終わらせてない一夏を出すわけにはいかないと。

だが試合の中止は出来ない。ならばどうするべきか？

隆道の答えは決まった。

「……………織斑、一次移行が終わるまでここで待て」

「へ？それはどういう……………」

「俺が出て時間稼ぎをする」

「「「!?」」」

隆道の言葉に全員が絶句する。あの隆道が、自ら試合に出ると言い出したのだ。

「や、柳くん!? いったい何を言ってるんですか!？」

「待て柳! 何故お前が出る必要がある!? 時間は無いとあれほど——」

「二次移行には30分前後掛かるって言ったのは何処のどいつだ!! だったら俺が出て時間稼ぎしても多少時間が増えるだけで変わりねえだろうが!!」

「しかし………」

千冬はなんとしても隆道が出る事を止めたかった。

彼のI Sと女性に対する憎悪もそうだが、昨日の出来事を見てしまったからには止めなければならぬ。

だが——そんな事は隆道には関係無い。知ったことではない。

「あんたはブリュンヒルデだろうが! 多少の融通は利かせろ! そんなに自分の弟より規則が大事か!! あんた授業で言ったよなあ!! 『兵器を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる』ってよお!! 今の織斑がまさにそうじゃねえか!! 一次移行も済ませてない、機体の詳細も知らないI Sで試合なんてやってみろ!! どうなるか分かったもんじゃねえ!!」

千冬の言葉を一切聞かないと言わんばかりの怒涛の剣幕。初めて隆道の怒った感情を見た全員は言葉を発する事が出来ない。

「悪いが、一次移行を終わらせてない織斑を出させる訳にはいかねえ。そんなに男のI S試合を見たいんだったら、俺が出てやるよ」

隆道の心からの訴えは止まらない。

「どうなんだ。なんとか言えよ、おい……………」

ピットに響く彼の言葉に千冬は——。

「さっさと答えろおっ!!!織斑千冬うっ!!!」

——遂に折れた。

「……………分かった。柳、ゲートに向かってくれ」

「お、織斑先生!?!」

「……………」

隆道は千冬の言葉により怒りは消え、無表情のままゲートに向かう。

隆道の怒りによって唾然としてしまった一夏だが、直ぐ様我に返り彼を止めるべく走り向かった。

止めなくては。自分の為に隆道に戦わせるなど、そんなの到底許されない。

「柳さん！なにも柳さんが出ることなんて！」

「いいんだ織斑。これでいい。お前はさっさと一次移行を済ませろ」

「でも！」

「別に勝てるなんて思ってたねえよ。ただ時間稼ぎするだけだ」

「なんで、どうして……………」

一夏は隆道の自己犠牲に目頭が熱くなる。事の発端は自分なのに、どうしてそこまでするのかと。

「さあ、……………なんでだろうな」

その一言を最後に、隆道は一夏を避けてゲートに向かった。

これから起きる事を知っていれば、誰もがどんな手をおおうとも隆道を止めたであろう。

彼はI S学園に来るべきではなかった。

彼は専用機を受け取るべきではなかった。

彼は、決して戦ってはならなかった。

——操縦者の異常を確認。心拍数上昇。処置を実行。………ERROR——。

第十話

ピット・ゲートに佇む隆道は、上着を放り投げ嫌悪感を感じながらも打鉄を展開し今回の目的を自分に言い聞かせていた。

(30分………30分は耐えろ。もし出来なくても連戦を避けるために奴の体力を出来るだけ消耗させるんだ)

彼の最大の目的は、一夏が持つ専用機の一次移行が完了するまでの時間稼ぎだ。仮に一次移行完了まで時間を稼げず敗北してしまつたら、セシリアのコンディションによってはぶつ続けの連戦が予想される、そうなつたら意味がない。つまり、時間稼ぎをしつつ彼女の体力も消耗させる必要がある。逃げの一手は許されない。

(どこまでやれる……こちとら10分………いや、それ以下の搭乗時間なんだぞ。攻撃が当たるかどうかすら………)

素人が、ましてや適性検査でしか動かしていない自分が経験のある、ましてや国の代表候補生に勝つなど夢のまた夢だ。それに加え此方は第二世代機で向こうは特殊兵装を積んだ第三世代機。経験も性能も既に負けている。この条件で勝つ者など、それこそ天才かもしくは人間ですらないだろう。あるいは俗に言う奇跡でも起きない限り不可

能だ。

勝負に絶対は無いと言う人間がいるが、今の状況を見て同じ事が言えるだろうか。おそらく言えはしない。言ったとするならば、その人間は本当にそれを信じてるか、単なる馬鹿か。

既に勝利は無く、敗北は決定している。後ろ指を指される事になるが彼にとつては知ったことではない。そんなもの今まで数え切れないほどに経験済みであり、そんなものが可愛く見えるほど凄絶な出来事にも遭遇している。

痛みなど慣れている。物理的にも、精神的にも。

「……………」

ゲートが開放されるまで残り僅かだが、隆道は先程から気になっていいる事があった。

—— 操縦者の異常を確認。心拍数上昇。処置を実行。……………ERROR——。

先程からずっと視界にこの文字が赤く表示されている。

昨日もそうであった。一次移行を完了したと同時にこの表示が出てきたのだ。その時はものの数秒で直ぐに消滅したので大して気にも止めなかったが、今は表示されたまま。

(操縦者を安定に保つ機能が働いてない……………?故障か?)

まだまともに動かしてすらいらないにも関わらず故障などともない事であるが、別

に機体が動かない訳では無いので今すぐ戻って報告することでは無いだろう。それに報告したとして、異常を調査するから出るなど言われたら、それこそ一夏の代わりになった意味がない。非常に鬱陶しく思うが、今は無視することを決めた。

(武装は………結構あるな、もはや武器庫だろこれ)

彼が搭乗している『打鉄』は全ISの中で最も『換装装備』が多い。様々な武器や装備が各企業で開発、製造されており、くまなく探せば必ず操縦者に合った物が見つかるほど。

彼の機体はデータ採取が主な目的だが、装備の使用データも欲しいため政府がありつたけの武器を詰め込んだのだ。その数は近接武器と射撃武器両方を含めて十種類。

普通の武器もあれば用途が想像つかない怪物染みた代物まで目白押しである。

『柳君・ゲート開きました！いつでもどうぞ！』

少し思考してる間にゲートは開いたようで、真耶のアナウンスと共に奥から光が差し込む。この先に待ってるのはISを使った戦闘だ。

周囲は試合だの模擬戦だの言っているが、言葉を変えただけで結局は銃火器や近接武器を使った戦闘ということに変わりはない。

「……………」

ISで戦う。その言葉が脳内に焼き付き、彼の鼓動は次第に大きくなる。

「はあっ……………出るぞ」

その言葉と同時に彼は歩き出す。

一組全員の、今後決して忘れることのない柳隆道の初戦闘が今、始まる。

——操縦者の異常を確認。心拍数、更に上昇。処置を実行。……………ERROR——

処置を再度実行。——ERROR——。

シヨ置ヲ再度ジツ行。——ERROR——。

シヨチヲサイドジツコウ。——ERROR——。

アリーナの中央にて対戦相手である一夏を待つセシリアは相手側のピットが開いた事に、ようやく来たかと溜め息を吐いていた。

(ようやく、ですか。あまりにも遅すぎますわ)

相手より先に彼女がアリーナに出た事を考慮しても遅すぎる。先程までなにかしらのトラブルにあったのだろうと考える彼女は直ぐに思考を切り替える。

(わたくしは男なんて認めませんわ。あの二人の男も、どうせ……………)

彼女は決して世の中に溢れる女尊男卑などではなく、ただ単に男が嫌いなだけである。厳密に言えば情けなく、弱い男がであろうか。

彼女の父親は情けなく、そして弱かった。それだけではない、周囲の男達も強欲で、情けなく、そして弱かった。

(織斑一夏……………柳隆道……………)

この二人もどうせ今まで出会って来た男達と一緒に。

先週は男だからという理由でクラス代表を周囲から推薦された事に激昂してしまい、代表候補生らしからぬ発言をしてしまったが今さら悔やんでも遅い。クラスへの謝罪は後回しにすると彼女は決めた。

彼女は自国で血の滲む努力をし、更に技術を磨くためにここに来たのだ。それを、ろくにISを学んでない男の下につくのは限りなく堪らない。

今回の試合は八つ当たりに近いものだが、それも仕方のない事なのだろう。

彼女もまだ15歳だ。いずれ国を背負うであろう立場になっても感情のコントロールが利かない場合もある。

(にしても、ゲートは開いてますのにまだ出てきませんわね)

ゲートが開放されればものの数秒で飛び出してくるはずだ。いったいなぜと彼女は疑問を持つが、ようやく出てきた人物の顔を見て——その考えは吹き飛んだ。

「あつ、貴方は!？」

出てきたのは一夏——ではなく今回のいざこぎに全く関係のない隆道。黒灰色の打鉄を身に纏いゲートの先端に到着すると彼はそのままアリーナの地面に飛び降り、着地を難なくこなしアリーナ中央付近まで歩き出す。

セシリアを含め観客席にいる生徒達は驚きを隠せない。なぜ彼がISに乗ってるのか、なぜ一夏ではなく彼がアリーナに出てきたのか、彼の纏ってるあのISはなんだとざわつく。

中には未だに彼に対して恐怖心が抜けていないのか、少々怯えてしまう者も数人ほど。

「なぜっ、貴方がここにいるのですか!？織斑一夏はどうなさったのです!？それにそのIS……まさか貴方も専用機を!？」

「……………」

彼は彼女の問いに答えない。またもや無視をするのかと彼女は怒りを露にしそうになるが、千冬のアナウンスによってそれは遮られる。

『織斑の機体にトラブルが発生した。調整が終わるまで代わりに柳が試合に出場することになる』

「なっ……………」

『ただいまより、セシリア・オルコット対柳隆道の試合を開始する。始め』

セシリアの困惑など関係無しに試合開始のブザーが鳴り響く。始まってしまった以上は仕方がない、目の前の男を優先しなくてはと彼女は判断することにした。

彼女は目の前の男と機体を観察するが、その姿に疑問を抱いていた。

彼が纏う機体は打鉄そのもの。だがカラーリングは既存のそれとは違い、装甲の所々に切れ込みがある。

そして、ISスーツを着ていなくYシャツとズボンのままである。

ISスーツが無くても機体は動かせる。だが有ると無いとでは操作性が違うのだ。

舐められてるのか、または単純に知らないだけなのか。

そして最大の疑問。隆道の様子がおかしいのだ。

当の本人はアリーナに出てきた時から無表情のままだが、どこか辛そうな感じに見えた。先日まであれほどの負の感情をさらけ出していたにも関わらず、今はまるで人が変わったかのような雰囲気を出している。

理由は分からないが、ここでいちいち怯んではいられない。

「……………何故、貴方が試合に出たのかは知りませんが、最後のチャンスを差し上げます」
「……………?」

セシリアは正直な所、隆道を攻撃するのは気が引けたのだ。

彼がI Sを徹底的に嫌っているのはここ一週間でよく知り、女性に対する敵意も身をもって知った。

そんな彼が簡単にI Sに乗るとは思えない。現に彼は表情こそ出さないが、とても辛そうで弱々しい。

彼女は男嫌いであれど、弱っている男に追い討ちをかけるような非道な女になったつもりはない。

故に、彼に降伏を持ちかけた。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、惨めな姿を晒したくないのであれば、……どうか降伏してくださいまし」

高圧的な態度は既に消え、セシリアは穏やかな口調で隆道に語りかける。その姿は以前までの男を見下す面影は無く、正しく高貴な貴族そのものであった。

数秒の時を経て、隆道は口を開く。どうか降伏してくれと彼女は願うが——それは裏切られた。

「……………『焔備』」

右腕を水平にかざし、手元に光の粒子が集まり武器が現れるのは、打鉄の基本装備の一つである中距離武装。

——自動小銃『焔備』ほむらび——。

焰備を展開させ、彼は濁った目でセシリアを力なく睨む。彼には降伏の二文字は無かった。

「そう、ですか……。それが貴方の答え……。ですのね……。残念ですわ」

セシリアはゆつくりと目を閉じ深呼吸する。これ以上の言葉は不要だ。ならば、代表候補生として全力を持って相手をする他ない。

右手に持つ彼女の主装備、ニメートルを超す中遠距離武装を構え、彼を狙う。

——六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmkⅢ』——。

——警告。敵IS射撃態勢に移行。

「では、……。まずは一撃っ！」

「っ!？」

独特の音と同時に青き閃光が走り、隆道に襲い掛かるが、彼はこれを上半身を反らしギリギリで回避する。

「避けた!?!ですがっ!」

「ぐおっ!!」

彼女は続けざまにレーザーを放つが、全てギリギリの所で回避される。彼の動きはお世辞にも良いとは言えないが、身体全体を駆使した動きは実際に全て回避出来ている。

この事実には彼女は心底驚愕していた。

(攻撃が当たらない!? どうして!?)

手加減などしていない。静止時にはしつかりとスコープに捉えており、彼が回避する最中も偏差射撃も怠らずにしている。

専用機を持つだけあって、彼女の射撃能力は折り紙付きだ。本来なら既に数発は当たつてもおかしくない。では何故当たらないか？

その秘密は隆道本人とI Sにあつた。

彼女を含めた全員が知らない事だが、彼は女尊男卑の被害者の中でも一際苛烈な目に遭つてきた男だ。

物理的な脅威に晒された事など何度も遭遇している。

そういつた輩から自身の身を守るべく逃走、迎撃を繰り返して数年ほど経ち、いつしか彼はある身体技能を身につけた。

——『危険察知』——

彼の友人が勝手に名付けた捻りもなにもない名だが、その技能は常人をはるかに逸脱していた。

自身の危険が迫る時、例え目を瞑ろうが死角から攻撃されようが直ぐ様察知し、身体の許す限り回避を行うことが可能である。SP十人と渡り合えたのもこの技能があつたからというもの。

回避出来る限界は勿論あるが、少なくとも一対一、しかも正面からの攻撃では余程出鱈目な速度でない限り当てることは不可能だ。

それと、ISの機能の一つである『ハイパーセンサー』。

ISに搭載されている高性能センサーは操縦者の知覚を補佐する役目を果たす。これにより目視出来ない遠距離や視野外を知覚出来るだけでなく、操縦者の思考速度を向上させるのだ。

この二つが組み合わさって、偶然ではあるが彼は屈指の回避能力を身につけた。

にも関わらず彼が未だに間一髪の回避なのは、ISに搭乘して間もないのと、彼の精神状態が正常ではないからであった。もし彼がISをそれなりに扱え、精神状態も正常であったなら、彼に攻撃を当てる者は限りなく少なくなるだろう。

——ソウ縦者ノ深刻ナ異常をカク認。心拍スウサラに上昇。処子を実コウ。

……ERROR——。

(くそがつ！回避だけじゃどうにもならねえ！反撃を！)

らちが明かないと隆道は判断し、右手に持つ焰備をセシリアに向けて数発撃つ。弾丸の雨は彼女に向けて襲い掛かる——が、しかし。流石は代表候補生であろうか、これを難なく回避。放った弾丸は全て空を切るだけとなった。

(ダメだ！涼しい顔して避けやがる！偏差射撃しろってか!?!やったことなんて有る訳ね

えだろうが!!」

セシリアは上空に、隆道は地上に。彼等はお互いに激しく撃ち合うが、彼女の攻撃は彼の逸脱した回避能力の前では無力となり、彼の攻撃は代表候補生には決して当たることはない。

数分間の撃ち合いで、彼女はこれ以上無駄だと確信したのか、射撃を一端やめることにした。

「まさか、ここまで避けられるとは思ってもいませんでしたよ。射撃には自信があったのですが、正直こうも避けられるとへこみますわ」

「ふっ……ふっ……ふう。……そうかよ」

「ですので……あまり使いたくはなかったのですが、致し方ありませんわね」

そういった矢先、セシリアの機体の一部が切り離され、4つのパーツが宙に浮く。まるでそれぞれが意志があるかのような動きを見せ、隆道はそれがなんなのか察した。

「特殊兵装……!!」

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコツトとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

彼女の機体に搭載されているイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装。それは遠隔無線誘導型のレーザー兵器であり、機体の名前の由来でもあるそれは彼女の思考制

御によって操作し、全方位オールレンジ攻撃が可能な物だ。

先程の正面からの攻撃は一転して全方位からの攻撃へ変化。彼女に加え、4基のレーザー兵器。一対一から一瞬で一対多になってしまった。

状況は圧倒的不利。いくら危険察知があるとはいえ、多数を相手にすればいずれ隙を突かれる。

だからと言って、彼は早々にやられるつもりはない。焔備を構え直して彼女に向かって吠えるように叫ぶ。

「勝手に一人で踊ってろおっ!!!」

——ソウジュウ者ノ深コクナ異常をカク認。心拍スウサラにジヨウ昇。キン急処
チを突コウ。……………ERROR——。

……………ERROR——。

……………ERROR——。

……………ERROR——。

「な、なんなのでしょうか彼は。まさかオルコットさんのレーザーを地上で全て回避す

るなんて」

「ああ……………空中でなら射撃を予測し回避は容易に可能ではあるが、地上となると動きは制限される。その状況下であの回避能力……………。悔れんな」

真耶と千冬は隆道の回避能力に唾然としていた。動きに粗は見受けられるが、それでもセシリアの高精度な射撃を全て避けている。それも空中ではなく地上でだ。当然の事ながら空中と地上では動ける範囲も違う。

だが、それも先程まで。セシリアが特殊兵装を使いだした途端に彼の回避能力は彼女の猛攻についてこれなくなり、次々と被弾していく。

「しかし、状況は一変したな……………。恐らくここから柳が押されるだろう」

『ぐああっ!?ぐうっ!?』

「ああっ、オルコットさんの攻撃が当たっちゃいましたよ!?!……………それにしても、何故柳君は飛ばないのでしょうか……………?」

「……………飛び方を知らないのだろう。昨日までISを拒絶していたからな……………無理もない」

千冬は、試合を見ながら今回の事を後悔していた。

一夏の成長を促す為とは言え、セシリアと戦わせるよう多少無理矢理な事をしたが、最終的に隆道が一夏を庇い、代わりに戦う羽目になった。モニター越しの彼が次々と被

弾する度に胸が苦しくなる。

もしも、予定通りに一夏が試合に出たら、彼と同じ目に遭っただろうか。

「っ……………」

違う、私はこんな目に遭わせる為ではなかった。私の弟なのだからきつと、上手くやってくれると信じて、一夏とセシリアを戦わせようとした。それなのに結果は隆道を苦しめる事になっている。

彼を保護すると誓ったはずだ。だが現実はどうだ？余計彼を傷つけて、もはやどうしようもないほどに信用など無い。

「いや、元から無かったのだったな……………」

「織斑先生……………」

「どうやら私は……………教師以前に、人間として失格のようだ……………」

「……………」

真耶は言葉を返せなかった。何故なら、自分も同じ穴の貉だからだ。

あの時、クラス代表決めの際に自分が止めていれば、怯えずに彼に積極的に接していればこうはならなかったかも知れない。

だがそれは既に過去の出来事。やり直すことは出来ない。

「一夏！一次移行はまだ終わらないのか!？」

「無茶言うなよ箒！まだ20分以上もある！こればかりは俺じゃどうしようもないって！」

ピットの隅では一夏は一次移行の為、機体を纏ったまま待機している。

一夏が焦っているのは勿論だが、箒も彼と同じく焦っていた。

一夏を庇った彼が今、セシリアに罵られている。可能なら止めたいが、これはあくまで試合。止める理由が無いのだ。

この状況を打開するには一夏の機体を一次移行させる以外道は無い。

「くそっ！箒、一次移行は終わってないけど、これ以上は見てられない！俺が出て——」

「馬鹿者！それではあの人を試合に出た事が全て無駄になってしまわないか!?あの人が行いを無下にするつもりかっ!」

「っ!?ぐ、ぐうう………」

一夏は惨めな感覚に陥る。いつもそうだ、誰かに守られてばかりで、自分は何も出来やしない。千冬からも守られ、友人にも守られて、今度は自分の為に隆道が守っている。

守られるだけなのは、もういやだ。今度は、自分が誰かを——

その時だった、アリーナの観客席で声が響いたのは。

ピットにいる四人は直ぐにモニターを見る。そこにはあちこちから紫電が走り、装甲

もズタズタになっていいる隆道の姿があった。

アリーナの上空で浮遊するセシリアは、地面に手と膝をついている隆道を見て、思わず目を反らしたくなった。

彼の機体は既に大破に近く、シールドエネルギーも一割を切っている。対して彼女の機体はスラスターに使用したエネルギーを差し引けば無傷。

端から見ればただの苛めに等しいそれは、観客席で見ている生徒達も居た堪れない気持ちにさせた。

「が……………、く、くそつ、たれが……………」

試合が始まって約15分。シールドエネルギー残量は33。機体ダメージはCよりのB。浮遊シールドは半壊しており、スカートアーマーはフレームだけが残っている。もはや虫の息に等しい彼は、この状況に絶望していた。

（時間稼ぎするとか言っておいて……………なんて様だ、全く）

時間稼ぎも、セシリアの体力を消耗させることすら出来なかった。

開始から数分はお互いにひけをとらない試合であったが、彼女の特種兵装の使用によりそれも崩れた。

いくら危険察知があらうと、全て避ける事は超人染みた身体能力でもない限り不可能だ。

武器はまだ焰備しか展開していないが、特性を知らない以上使いこなす事は出来ない
と判断し、展開を渋っていた。

そもそも攻撃が当たらないのだ。武器なぞろくに扱ったことの無い素人が代表候補
生相手に当てるなど出来やしない。

「……………もう、いいでしょう。これ以上は貴方に負担が掛かります。降参してござい
まし……………」

「……………まだ、だ」

「貴方、自分の状況が分かってらっしやるのかしら……………」

誰が見てもこの状況を覆す事など想像出来ない。勝敗は既に決している。

そんなことは隆道本人がよく分かっている。最初から勝てる気など無いのだから。

「……………まあいいでしょう。直ぐに終わらせて、その次は織斑一夏とですわね」

「まだだって、言ってる、だろうが……………」

「しつこいですわよ」

そう一言言いながらセシリアは一発、彼の左腕に向けて撃つ。装甲は一撃で剥がれ、
彼はその場で崩れてしまう。

「ぐっ！」

—— エネルギー残量16。ダメージレベルC。機体維持警告域に到達——。

—— ソウジユウシヤニシンコクナイジヨウヲカクニン。シンパクスウサラニジヨウシヨウ。キンキュウシヨチヲジツコウ。…………EeeeeerrRRRROOOoOrrrR——。

「ああ、くそっ……………」

もはや手も足も出ない。彼に出来る事は——何一つ無い。

「次で終わりにしますわ」

彼女は手持ちのレーザーライフルを彼に向ける。これが正真正銘最後の攻撃。

(もう、ダメだ)

これ以上は持たない。そう確信した隆道は、一夏に心の中で謝っていた。

(時間稼ぎ、出来なかった、な)

「ここで思考を止めておけばこの先の未来は変わっていただろう。

だが隆道はあることを考えてしまった。そして、思い出してしまった。

(「そーいや、負けたらどうなるんだけっか……」。先週、あのイギリス人が何か言つてたはず……。)

『言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隸にしますわよ』

「……………」

『わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隸にしますわよ』

「……………」

『わたくしの小間使い——いえ、奴隸にしますわよ』

(「ああ、そうか。奴隸、だったな……」。とうとう人権まで奪われたつてこと、か)

セシリアは彼を奴隸にするつもりなど毛頭無い。そもそも『わざと』なのだからどちらにせよ適用はされないのだが、精神に異常を来している隆道は正常な判断が出来なくなっていた。

大切なものを奪われ、自由を奪われ、今度は人権を奪われようとしている。これ以上何があるというのだ。

(……………次は?)

その時、隆道は考えてはならない答えを出してしまう。

(……………『命』?)

その答えを出した途端、彼の視界は反転し、過去の出来事が次々と鮮明に思い出される。

『隆道。お母さんね、お父さんと離婚することにしたの』

———なんで。

『あなた、自分が騙されたことにまだ気付かないわけえ!? うけるう!!』

—— どうして今。

『これ、貴方の犬なんでしょう? なんて汚らわしい犬なのかしら。そんな犬は——』

—— やめろ。

『お前には恨みはない。けどな……俺達は女に逆らえねえんだ』

—— やめるんだ。

『この病院はね、貴方のような男が来ていい所ではないのよ、それくらい自分で治療しな
やこ』

—— やめてくれ。

『隆道…………お前を——』

——頼む、もうやめ——。

『お前を一人にしてしまう父さんを、決して許すな』

——操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不安定。緊急処置を実行。……………不可能

——深刻な心的外傷後ストレス障害と判断——。

——自己防衛システム『狂犬』を強制起動します——。

セシリアは隆道に止めを刺そうとした。だがしかし、彼の様子がおかしい事に気づく。

手と膝はついたままで顔は俯き、表情は一切見えないが雰囲気が一変した。

「……………？貴方、いったいどうし——」

——警告。未確認の脅威を感知。危険度レベルA。迎撃を推奨——。

「っ!?これはいったい!?!」

突如セシリアの機体から警告が発する。なんだこれは、今までこんな警告など見たことはない。彼女は得たいの知れない表示とアナウンスに困惑していると、彼の機体に変化が起きた。

黒灰色の機体が鈍く発光し、その上に赤いラインが浮き出てくる。それはまるで血管のように装甲全体に行き渡り、心臓の鼓動のように点滅し始めた。

——警告。更なる脅威を感知。危険度レベルS。迎撃、又は撤退を推奨——。

「な、なんなんですか………」

何が起きているのか、困惑する彼女を余所に彼はゆつくりと立ち上がる。

所々ボロボロで、動かすのも困難なはずだ。機体に走る紫電はより強くなり、それが一層不気味に感じられる。

そして——

「くひ、ひひひ」

「……………」

「ひひひ、へへへへへ。あは、ははは………」
 「あ、貴方——」

精神が極限まで追い詰められた彼は勢いよく顔を上げ——

「ぐひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!! あはははははははははははははははは!!」

——大粒の涙を流しながら狂ったように嗤っている。
 今まで幾度となく傷つき続けた彼の心は、遂に壊れた。

「「「「「?!?!?!?」」」」」

セシリアを含めた観客席の生徒、そしてピットでモニター越しに見ている四人は彼の豹変に背筋が凍る。中には激しい嘔吐感に駆られる者もいれば、あまりのおぞましさに意識が飛びそうな者も。ほぼ全員がその場から逃げ出したくなるが、何故か動かない、

動けない。

ピット内では真耶と千冬は彼を見て戦慄する。

「あ、あれは、あの時、いやそれ以上の……?!?」

教師二人は既に見ている。以前に記録として送られたモノレール内での映像。それを見て真耶は怯え、千冬は嘔吐したが目の前の彼はその時より遙かに噛み狂っている。目を反らしたいのにならせない。言い様のない恐怖に駆られ、真耶は言葉すら発せず目を大きく見開いてびくりともしない。

一夏と箒も同じだった。今まで見たこともない彼の豹変に目を逸らせず、その場で固まってしまう。

「や、柳、さん？な、なん………で」

「こ、これは………いったい」

彼には先程までの面影はどこにもない。無表情で、それでも一夏に対して優しかった彼は、そこにはいなかった。

そんな彼を目の当たりにしているセシリアも同様にその場から動けないでいる。I Sの機能により多少安定はしているが、それでも悪寒は止まない。

「あ、あ、貴方は………」

「ひはははははははははは、ははは………は、は、は………」

喘い疲れたのか、彼の声は次第に小さくなる。同時に狂気も収まり、彼女は一安心しそうになるが——それも叶わなくなった。

「ははは、はは、は………ああああああア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア」

彼は狂った喘いから一変、今度は左手で頭を押さえながら泣き叫び始める。大粒の透明な涙は次第に赤く色づいた。

それは血だった。血涙と化したそれは彼の頬を真つ赤に染め、彼女をより恐怖に陥れる。

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア」

セシリアはその光景を見て、目を見開き言葉すら発せなくなる。

いくらなんでも異常だ、彼に何が起こっている。声を掛けようにも言葉が出てこない。まさか、暴走でもしてるのかと彼女は考える。

だとしたら非常にまずい。先程から警告がより大きくなっており、彼も、自分も危険な状態になっている。

なんとかしなければと、そう判断した矢先に千冬からのアナウンスが鳴り響く。

『オルコット!!今すぐピットに戻れ!!早く!!』

「え、で、ですが………彼はどうするのです!?」

『我々教員が対処する!!だから、お前は一刻も早く——』

ろう。ならば、奥の手を使う他無い。

しかし、今すぐ使つては簡単に回避されるだろう。ギリギリまで引き付けるのだと、彼女は身を引き締める。

——接触まであと二十メートル。まだだ。まだ使つてはならない。

(…………ブルー・ティアーズは)

——接触まであと十メートル。彼は鋼牙を彼女に向けるべく、構えながら突っ込んでくる。奥の手を準備し、その時を彼女は待つ。

——接触まで、あと五メートル。チャンスは、やって来た。

「六基ありましてよっ!!」

その掛け声と同時に彼女の腰部から広がる筒状のアーマー。そこから彼に向けて放たれる物体。それはミサイルであった。

ブルー・ティアーズには六基の特殊兵装が存在する。四基は先程まで隆道を苦しめたレーザービット。そして、残り二基はたった今発射した唯一の実弾兵装、ミサイルビット。

自身もミサイルの爆発に巻き込まれてしまうが、そうは言つてられない。もはや回避不可能の距離に到達した彼は二発のミサイルにより、爆炎に包まれた。

「くうっ!」

至近距離で爆発したミサイルはセシリアにも襲い掛かり遠くに吹き飛ばされる。だが彼女は身構えていた為直ぐに体勢を立て直すことが出来た。

爆炎から二十メートル以上離れ、自身に脅威が去ったことに彼女は一安心する。

「はあ、はあ、はあ………これで——」

しかし、今の彼女に安息など存在しない。

爆炎から飛び出して来たのは、ミサイルが直撃したはずの隆道。装甲が所々焼け焦げている彼はそんなことお構い無しに彼女に向かって突撃してくる。

「オ、ル、コ、ツト、オ、オ、オ、オ、オ、オ、ツツツ!!!」

「そんなっどうしてっ?!」

確かに直撃したはず、なのに何故と混乱するが、直ぐにそれは解決した。

(浮遊シールドがない!?!まさかあのタイミングで防御を!?!)

既に彼はすぐそこまで接近している。なんとかして迎撃せねばと彼女は近接武器を展開するため高々に叫ぶ。

「インターセプター!!」

ブルー・ティアーズに搭載されている近接ショートブレード『インターセプター』を展開し、構えようとするが、それは無駄に終わる。

「ウ、ラ、ア、ツツツ!!!」

なんと彼は速度を殺さずに回し蹴りを放って彼女の近接武器を蹴り飛ばした。

しかし急停止を考えていなかったのか、彼は彼女に勢いよく激突。大破に近い機体の装甲は殆ど砕け、空中に撒き散らす。

——エネルギー残量2。ダメージレベルD。操縦者生命危険域に到達——。

「ああっ！な、なんて無茶苦茶な!!」

離れて態勢を立て直さなければと、彼女はその場から離脱しようとするが——遂に、彼に肩を捕まれてしまった。

「あっ……………」

「ツカマエタ」

彼女は彼と目が合い、硬直してしまう。目から夥しい血を流す彼の顔は酷く歪んでいた。

「……………将来の奴隷が贈る、最初で最後の悪足掻きだ」

「あ——」

彼の右腕に装備されている二本の杭は彼女の頭と胸を捉えている。それを押し付け

「しっかりと味わえライム女あつつつ!!」

——容赦なく放たれた。

「があっ?!?!?」

ステーション内に鳴り響く爆音。とてつもない威力をモロに受けたセシリアは弾丸の如く吹き飛ばされ、アリーナの壁に激突、そのまま地上に墜落する。

二本の杭が装甲の無い頭部と胸部に直撃し、絶対防御が発動。それだけでなく、壁に激突と墜落したことにより彼女のエネルギーが大きく削り取られる。

——『絶対防御』——。

操縦者が生命に関わる攻撃を受けた際に発動するISの最大の機能。これによりあらゆる攻撃でも操縦者を死に至らしめる事は無いが、その分エネルギーは極端に消耗する。

頭部と胸部に受けたダメージと、壁に激突し、墜落の衝撃によつて九割近いエネルギーは一瞬の内に一割以下に減った。

今まで受けたことの無い衝撃に彼女はもがき苦しむ。

ブラックアウト防御機能により気絶も出来ない彼女はその激痛から逃れる術は無かった。

セシリアを吹き飛ばした隆道だが、彼もまた、ただでは済んでいない。

彼が使用した『鋼牙』は重大な欠陥があった。

それは大きな炸薬を二つ同時に発火することによる、ISのパワーアシストがあつて

も抑えきれない強烈な反動。

まともに構えなかった彼は射出と同時に吹き飛び、彼女と同様地上に叩きつけられる。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

ブザーと共に無機質な音声^{（1）}が鳴り響くが、観客席にいる生徒達やピットにいる四人はそれどころではない。

試合と思いきや、殺し合い染みた事と化した戦闘は誰もが戦慄を覚えてしまった。

——操縦者生命危険域超過。具現維持限界リミット・ダウンに到達——。

地上に激突したことによりエネルギーがゼロになる処か、機体に限界が来たのか隆道の機体は光の粒子となって消え、彼は地表に放り出される。彼の暴走はようやく終わりを告げた。

——しかし、更なる悲劇が彼を襲う。

『柳！今すぐそこから離れろ！』

千冬の叫びと共に隆道は力なく空を見上げる。そこにあつたものは、円柱状の物体。それはセシリアのミサイルだった。彼女は彼の攻撃を食らう直前に悪足掻きとして二発のミサイルを発射していたのだ。

彼女のミサイルビットは自立誘導型ではなく、思考制御のミサイルだ。当の本人は激痛に苦しみ、制御など出来ない。

コントロールを失ったミサイルの一発は明後日の方向で爆発し、残りの一発は――

――不運にも生身の隆道に向かっていた。

『避ける柳いいいっつっ!!』

千冬の言葉は聞こえてないのか、その場で膝をついたままの彼は、諦めたように小さく呟く。

「……………くそつたれが」

疲労が限界に達したのか、立ち上がることもすら出来ない。人生の最後がこんな形など決して認めたくはないが、所詮自分の人生は既に終わってるのだ。もういいだろうと、彼はゆつくりと目を閉じた。

——だが、彼が死ぬことを決して神は許しはしない。

隆道に真っ直ぐ向かっていたミサイルは再び不規則な動きとなり、彼の十メートル手前で地上に着弾し爆発する。

その爆発の衝撃波により、隆道は大きく吹き飛ばされた。

第十一話

セシリアと隆道の試合の結果は、彼女の勝利となった。だが誰もが試合結果などどうでもいいと思っている。その試合により彼は暴走を起こし、最終的に重傷を負った。

観客席で飛び交う悲鳴の嵐。誰もが予想もしなかった一大事に生徒達はパニックを引き起こす。

「山田君、医療班に緊急治療の連絡を！織斑、篠ノ之！指示があるまでここを動くな！いな！」

「ちよつ、千冬姉!?待ってくれ、俺も!!」

一夏の呼び掛けを無視し、千冬は備えの応急キットを担ぎアリーナに出る。向かうは血塗れの隆道の元。

彼のそばまで近づくと、それは言葉では表しきれない程の惨状だった。

「ああ、なんてことだ……。柳!しつかりしろ!」

衝撃波で吹き飛ばされただけでなく、地上で爆発した際のミサイルの破片、小石などが彼に散弾の様に降りかかり至る所が傷だらけになっていた。試合開始時の純白な制服はズタズタになっており、ほとんどが赤く染まっている。特に酷いものは細長い破片

が左肩に突き刺さっていた。安易に抜こうとすれば大出血は間違いない。

当の本人は仰向けに倒れており、ピクリともしない。気絶しているのか、それとも――

「意識が無い……………くそつ。脈は……………!?!」

そういつて彼女が手を近づけると、それは叩かれた。

「……………!?!や、柳!?!意識が!?!」

「つてえ、な……………。くそつ、たれ……………」

彼女の手を振り払ったのは意識が無いと思われた隆道。

身体を起こし立ち上がろうとするも、足に力が入らないのか体勢を崩し両足の膝をついてしまう。

「ああ……………くそつ、たれ……………。なんで、生き……………てんだよ、ちく……………しようが……………」

舌打ちをし愚痴をこぼす彼は肩に突き刺さっている破片に血濡れた右手を震えながらも伸ばす。

彼がやろうとしていることが直ぐに分かり、彼女は止めようとするが――。

「ダメだ柳!?!それを抜いたら――」

「うらあつ!!」

彼女の警告を無視し、彼は破片を勢いよく引き抜く。抜けたことにより血は夥しいほど噴出し、それを辺り一面に撒き散らす。

止血をせねば失血死は免れないことは明白だ。

「ああ……はあ……。俺に……近づくんじゃ、ねえ……」

「や、柳……」

「なんだよ、しけたツラ……。しやがって……。何しに……。来たんだよ、ああ？」

千冬を睨むその顔は破片や小石によつて数ヶ所に生々しい傷が付き、血涙の影響なのか目はこれ以上無い程充血し真っ赤になっていた。

彼の眼力はとても弱々しく、今にも消えてしまふような程覇気がない。文字通り虫の息に近い状態だった。

そんな彼を目の当たりにして彼女は目頭が熱くなつてしまふ。

（私が、私が柳をこんなつ……。!?）

堪らなくなる気持ちで満たされるが、今は一刻も争う事態だ。医療班が来るまで手当てをしなければならぬ。でないと彼は死んでしまふ。それだけはなんとしても避けなかつた。

「柳！直に医療班が来る。それまでに手当てを！」

「もう、いい……。だろうがよ……。いつそ死なせて……。研究材料でも……。好き

に、しろつて……。俺なんかより、あそこで悶えてるイギリス人を……」

「柳い!!」

「……………」

「頼む……………手当てを、させてくれ……………。この通りだ……………」

隆道の鋼牙によるダメージによりアリーナの隅で未だに蹲っているセシリアも診てやるべきだが、今は彼を優先しなければならぬ。

彼女は涙を流しながら悲痛な声で悲願する。そこには既に世界最強の面影はない、一人のか弱き女性の姿があった。

——しかし、彼にその思いは届かない。手当てをしようとする彼女に今もなお必死で抵抗をする。

「泣けばいいと、思ってたんのかよ……………!! そんなの俺ら男の心につけこむ、お前らの……………女の武器だろうが……………!!」

「柳……………」

「お前らのような女がいるから……………ハルは、親父はつ……………!! ぐつ……………」

彼の抵抗は続かず、言葉を言い切る前に彼は倒れ、千冬にもたれ掛かる。あれほどの怪我と出血をしたのだ、生きてるだけでも奇跡に等しい。

それでも彼は足掻くように、言葉だけでも抵抗を続けた。

「俺は認め、ねえ……………！ISなんか……………お前ら……………女、なんか……………！特にあんたと、あの女……………は……………ぜ……………」

「ああダメだダメだ！柳、気をしっかり持て!!」

「――」

「医療班はまだかあああああ!!!」

千冬の泣き叫びがアリーナ全体的に響く。セシリアと隆道の試合は、その場にいる全員の記憶に刻まれる最悪の形となって幕を閉じた。

隆道が重傷を負い、緊急治療中の最中。本州のとある場所の小さな部屋で彼に関する電話のやり取りがあった。

片方はIS学園の学園長。そしてもう片方はIS委員会の一人。

『一刻も早く病院へ連れていくべきです。これ以上は彼の身が持ちません』

「其方には医療環境も最新の物があるはずだ、その必要は無い。彼には完治次第、引き続

きデータ採取を行ってもらう」

『……………貴方、分かっているのですか。彼はＩＳに乗って——』

「知っている。ＩＳに乗って暴走を引き起こした事も、事故の詳細も貴女が連絡を入れる前に報告が入った。生きていてだけでも奇跡としか言いようがない」

『ならば……………！』

「だが彼を今の状態で本州に連れていけば、どうなるかは分かっているはずだが？ たった二人のうち一人に重傷を負わせた、そんな彼を本州に連れてけば直ぐに公になるだろう。そうなったら貴殿方ＩＳ学園だけではない、イギリス代表候補生にも、イギリス政府にも、日本政府にも、我々も多大な責任が降りかかる」

『……………』

「ＩＳの絶対的信頼を失う事にもなる。それに、彼を狙ってる者に取っては格好の的だ。彼を余計危険な目に合わせるつもりか？」

『……………しかし——』

「とにかく、今回の件は決して口外するな。今は余計な混乱を招くのだけは避けたい。話は以上だ」

男はこれ以上話すことは無いと、相手を返事を待たずに受話器を切り、溜め息を吐きながら椅子にもたれ掛かる。

「……………これでは悪党だな。いや……………元からか……………」

隆道をI S学園に置く事は男も反対であった。しかし、彼を狙う者が相次ぐという報告も受けている。そんな中あの場所から引きずり出すなど、敵に餌を与えるようなものだ。

数少ない男性操縦者を失う訳にはいかない。彼は今まさに爆弾のようなものだ。起爆してしまえば世界中のあらゆるものが爆発し、取り返しのつかない混乱を招く事など直ぐに分かる。今後の事は学園に任せるしかない。

「……………」

男は受話器を取り、電話を掛ける。数秒経ち、電話に出たのは若々しい女性の声。

『篠原です』

「熊田です。先程I S学園から柳隆道について連絡が」

『……………そう、ですか。結果的にあの子はどうなるのです?』

「彼には学園内で治療をしていただき、完治次第再びデータ採取の方を」

『……………分かりました。連絡ありがとうございます』

「いえいえ。……………ですが、よろしいのですか? 貴女の手には掛かれれば彼を守る事など……………」

『それは出来ません。あの子は私を酷く恨んでいるでしょう。それに、『過激派』に刺激

を与える事になります。貴方側にも『敵』がいるように、此方側にも『敵』がいますので』

「……………分かりました。しばらくは現状維持の方向で」

『この世界は、どこもかしこも敵だらけ。世の中上手くいかないものですね』

「ええ、全くです。……………そういえばなんですが、娘さんは確か……………」

『……………はい。娘もIS学園に』

「大丈夫なのでしようか。私の記憶が正しければ娘さんは……………その……………」

『ええ、私の教育がなっていないばかりに……………今の社会に染まってしまいました……………」

娘も、近い内にあの子に接触するでしょう。争うのは目に見えています』

「……………」

『私達は手を出すことは出来ません。見守る事しか出来ないのです』

「……………分かりました。それでは篠原さん、またいずれ」

場所は戻り再び I S 学園。今回の試合に関しては箝口令を出された。

試合が行われたのは学園全体に知れ渡ったことだが、その内容はクラス代表を決めるべく行われようとしたセシリア対一夏というだけ。

一夏ではなく、隆道が代わりに試合を行い、暴走し、重傷を負った事は一組と一部の教師しか知らない。

もし、公になれば I S に対する不信感だけでなく、事故とは言え彼に重傷を負わせたセシリアに飛び火が来る。

更には彼を保護すると押し通した I S 学園、セシリアが所属するイギリス政府、彼に専用機を渡した I S 委員会、そして日本政府にも火は廻る事は明白だ。多数の生徒の混乱を避ける為、一組全員に同意書を書かせるという徹底をする事により、今回の件は闇に葬られる。

その試合で起こった惨劇から数時間経ち、現在は夜。保健室には包帯で埋め尽くされた隆道と、それを見守る千冬の姿があった。

あの後直ぐに医療班が到着し彼を緊急治療室に、セシリアを保健室に運んだ。

彼女の方は絶対防御がフル稼働した為外傷は無く、痛みも徐々に消えていったので大事には至らなく、明日には通常通りの生活に戻る。

鋼牙を受けた直後の記憶が曖昧になっており、そばにいた千冬に事の詳細を聞いた彼

女は顔を真っ青に染め、自分が行ったことを激しく後悔した。事細かな事が重なってしまった不運過ぎる事故であるが、それでも悔やみきれない。

しかし悔やんだ所で現実は変わらない。一先ず彼女には落ち着いてもらい、今後の事は明日にでもということ、今回の件は口外するなど釘を刺し部屋に帰らせた。

まだ意識が戻らない彼は大手の病院で入院をしなければならぬほどの重傷だ。それだけでも一大事なのだが彼を治療する際、とんでもないことが判明した。

彼の身体には無数の古傷があつたのだ。しかも、外科医が処置したようなものではなく、明らかに素人がやったような歪な縫合痕が複数。それだけでなく小さな刺し傷も数ヶ所ほど。

彼の調査書にそのような治療を受けた経歴はない。つまり他者か、もしくは自分で治療した事になる。

あれほどの女性不信を見てしまえば凄絶な過去を経験してゐることは理解していたがここまで酷いとは思わなかつた。

本来ならばここに居るべきではない。ISから遠ざけ、心身共に治療を行うべきなのだ、学園理事長がそれに待ったをかけた。

『柳隆道を狙つてゐる者がいる』

ある人物の情報によると、隆道をあの手この手で誘拐、または暗殺しようとする者が

多数いるという。そんな物騒な輩が存在する中、まともに動けない彼を学園外に出すのは非常に危険だ。

外側も、内側も敵だらけ。彼の置かれてる状況がまさにそれだ。

「……………私、は……………」

自分のせいで彼をこんな目に遭わせてしまった。いや、十年前からであろうか。

もしあの時こうしていればと彼女は悔やむが、時既に遅し。悔やんだ所で彼の傷は癒える事はない。

「……………何が教師だ。結局……………私は他者を傷つける事しかしてないじゃないかっ」

IS業界で他者を払いのけ天下を取り、ある事を機に教師に務めた彼女は、何か自分が変わるかもしれないという気持ちはあった。

だが結局どこまでも現実主義な彼女は他者に、自分に、そして唯一の身内である弟に厳しく接していた。

何も変わっていなかったのだ。その結果招いたのが今回の事件。出来ることなら今回の責任を取りたいと思う彼女だが、それすら許されない。

「……………変わらなければ。でない」と——

考えに耽った矢先、不意に扉が開かれる。入ってきたのは急いで走ってきたのか、息を切らした真耶であった。

「お、織斑先生。柳君の機体、なんですが………」

「何かあったのか？」

「ダメージレベルがDまで到達していたので、代わりとして訓練機の子備パーツを組み込んだのですが……。ええと、とにかく見て貰った方が早いです」

「分かった、直ぐに行く」

「お願いします。他の先生がここに直ぐに来るそうなので、………柳君の事は………その人に」

寝ている彼を見て真耶は俯いてしまう。彼女も今回の件は効いたらしく、千冬と同様に悔やみきれない気持ちでいっぱいだった。

そんな気持ちを抱えながら教師二人は、寝ている彼を後にし保健室を出る。

しばらくして教師一人が保健室へ来るが、彼女はある異変に気づく。

「………?! い、いない!?!」

その異変とは、隆道が寝ている筈のベットマットがもぬけの殻だということ。彼がいなくなったことで彼女は慌て、千冬に連絡を取ろうとするがそれは遮られた。

突如背後から両腕を拘束され、壁に押さえ付けられてしまう。彼女もIS学園の教師だけあって、護身術は人並み以上あるが、自身に襲い掛かる力に抵抗が出来ない。

いったい誰がと軽いパニック状態になるが、その声を聞いて更なる驚愕が彼女に降り

かかる。

「騒ぐんじや、ねえ……………！」

「や、柳君……………!? 貴方、意識が戻って……………!?」

「んなこと……………どうだつて、いいんだよ……………! それよりも、首輪はどこだ……………！」

「く、首輪……………?」

何の事だか分からない、彼の専用機の事を言ってるのだろうか。咄嗟に答えようとするが、どうやら違うらしい。

「俺の右手首に巻いていた首輪に決まつてんだろ……………! どこにあるか言わねえと……………」

彼がそういった途端、彼女は自身の首もとにひんやりとした感触を味わう。それが刃物であることは直ぐに分かった。

声からして彼は本気だ、言う通りにしないと自身が危ない。刺激をするなど千冬から警告を受けてる事もあり、彼女は直ぐ様彼に従うことを決める。

「あ、貴方の持ち物は……………その机の引き出しに保管してあるわ」

そういつて彼女は部屋の隅にある机を顎で指す。すると彼は乱暴に彼女を地面に叩きつける様に放り投げ、引き出しを漁った。

探していた首輪を見つけると直ぐにそれを右手首に巻き付け、部屋を出ようとする。

傷が完治していない彼をまだ帰すわけにはいかない。

彼を引き留めようとするが、放り投げられた際に足を捻ったのか立ち上がる事が出来ない。

「ま、待つて柳君！貴方はまだ安静に——」

「知った、ことかよ……。こんなところに……。いられるか……」

そう一言言つて、彼は足を引きずりながらも保健室を出ていった。

彼が保健室を出ていく数分前、第一整備室で隆道の機体を眺める千冬と真耶は驚愕に満ちていた。

「な、なんだこれは……」

「分かりません……。同じ打鉄なので、予備パーツを組み込んだだけなのですが……」
彼の機体は整備室に運ばれた当時、見るも無残なほどボロボロであった為、緊急処置として同型の訓練機である打鉄の予備パーツを組み込んだ。本来ならばつぎはぎの様

な外見になるはずだったのだが——

「……………パーツを取り込んだ、のか?」

「わかりません……………それだけじゃないんです。細かな所も急激な速度で修復しています。こんなの見たことありません……………」

組み込んだ予備パーツは直ぐ様銀灰色から黒灰色に変わっていき、その装甲の上には血管のようなラインが浮き出てくる。暴走時と違い赤く点滅はせず黒く色付いてるが、それが一層不気味に感じられる。

駆動系だけではなくフレームなども目に見えるほど急速に修復していき、既に新品同様な所までに至った。

これだけでも驚愕満載なのだが、この機体はそれだけで済むほどの物ではなかった。

「それと、柳君が暴走した前後のログと、新たに追加された項目がありまして……………」

「……………」

真耶は千冬に彼の機体のログを見せる。そこに記録されたもの操縦者と機体における一部の警告ログだけであったが、千冬を更に驚愕させるのに十分な情報があった。

—— 操縦者の異常を確認。心拍数上昇。処置を実行。……………ERROR——。
 —— 操縦者の異常を確認。心拍数、更に上昇。処置を実行。……………ERROR——。

処置を再度実行。—— ERROR——。

シヨ置ヲ再度ジツ行。—— ERROR——。

シヨチヲサイドジツコウ。—— ERROR——。

—— ソウ縦者ノ深刻ナ異常をカク認。心拍スウサラに上昇。処チを実コウ。

……………ERROR——。

—— ソウジユウ者ノ深コクナ異常をカク認。心拍スウサラにジヨウ昇。キン急処

チを実コウ。……………ERROR——。

……………ERROR——。

……………ERROR——。

……………ERROR——。

—— エネルギー残量16。ダメージレベルC。機体維持警告域に到達——。

—— ソウジユウシヤニシンコクナイジヨウヲカクニン。シンパクスウサラニジヨウシヨウ。キンキュウシヨチヲジツコウ。……………EeeeeerRRRROOOORrrr——。

—— 操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不安定。緊急処置を実行。……………不可能

—— 深刻な心的外傷後ストレス障害と判断——。

—— 自己防衛システム『狂犬』を強制起動します——。

—— 警告。シールドバリアー機能停止——。

—— 警告。絶対防衛機能停止——。

—— 警告。具現維持限界まで■——。

—— エネルギー残量2。ダメージレベルD。操縦者生命危険域に到達——。

—— 操縦者生命危険域超過。……………具現維持限界に到達——。

—— 警告ログ終了——。

—— 追加兵装——

自己防衛システム『狂犬』

対■●絶対■●障■●『■●』

「心的外傷後^Pストレス^T障害^S……………自己防衛システム……………暴走ではない……………のか

「？」

千冬はそのおぞましい警告ログを見て背筋が凍る感覚を覚えた。

あの試合で隆道は、機体は暴走をしたのではない。常に彼の異常を感知した機体が、彼を守るために行った事なのだと察した。

しかしそれでは何故、カットする事の出来ない操縦者を守る機能が停止したのか疑問に残るが、真耶の説明により半ば納得する。

「この自己防衛システム『狂犬』は柳君が一次移行時に発現した物のようで、起動した時にはシールドバリアー処か絶対防御すら機能停止しますが……代わりに機体出力、パワーアシスト等が急激に上昇しています……」

「攻撃に特化させて相手を確実に倒し、操縦者の安全を確保するということか。……下手をすれば、機体が解除される前に死んでいた、ということになるな……」

「起動条件は彼の異常を感知する事以外にもあるようですが、文字化けしていて読むことは不可能です……。こんなの、あまりにも……！」

何てことだ、これではますます彼をISに乗せることが危険になってしまふ。この自己防衛システムの発動条件が彼の異常を感知する以外不明だと、おちおち乗せる事が出来ない。

起動してしまえば隆道本人だけでなく、周囲の人間にまで危害が及んでしまふ。

「それに、この『狂犬』に並ぶ追加兵装……。文字化けしていますが、これはいったい……」

「兵装内容も、起動条件も不明。恐ろしいものでないといいがな……」

「や、やめてくださいよ。縁起でもない……」

とにかくこのログで分かった事は、彼をISに乗せるのは非常に危険ということだけだ。

機体の修復速度など様々な事があるがそんなことは後回しだ、この事を委員会に報告しなければならぬ。

千冬は携帯を取り出し電話を掛けようとするが、操作する前に電話が鳴り響いた。

「……………」

着信相手は現在保健室にいるはずの教師から。なにか問題でもあったのかと電話に出る。

「織斑だ。なにか問題でも——」

『や、柳君の意識が戻ったんですが！保健室から逃げ出しました！』

「なにいつ!？」

『まだ遠くには行ってないはずですが……。追いかけていたのですが、すみません。足をやられてしまって……』

「分かった、直ぐに向かう。他の教師にも連絡を頼みます。山田君、柳の意識が戻ったが逃げ出したと連絡が入った。私は捜索に向かう。引き続き機体を調べておいてくれ」

千冬は真耶に一言言いながら電話を切り全速力で整備室を出る。

彼は意識を失う前、生きる事を諦めていた。その時の言葉が彼女の頭に焼き付いて離れない。

「頼むっ……………！馬鹿な真似はしないでくれ……………！」

学生が皆夕食を終える頃。夕食を済ませ、自室に戻る最中の一夏と箒はこれ以上ない位に暗い顔をしていた。

「なあ、箒……………」

「言うな。それ以上自分を責めると私はお前をひっぱたく」

「……………悪い」

彼はあの試合以降、自分を責めていた。自分が出ていれば隆道が怪我をせずに済んだ

かも知れない。しかし、変わりに自分が怪我をしたかも知れないという思いもあり、感情がごちゃ混ぜになっていた。

どうすればよかったのか。そもそも、セシリアの発言にカツとなった自分が原因なのではないかと、どんどんマイナス思考に陥っていく。

そんな彼を見て、箒は心底堪らなくなつた。こんな彼は見たくない。昔のように強く、格好いい姿を見せてくれと願うが今の彼には難しいだろう。

そんな状態が夕食の時も続いてたのだ。そばにいる自分の身にもなつてほしいと思ふ。

彼女だつて今回の件は胸を痛めた。一夏の為に出来ることをし、あげくの果てには機体が不十分の状態だった彼の身代わりとして試合に出た隆道には頭が上がりたくない。

もちろんそれだけではない事は理解してるのだが、それをハッキリしようとするとまたしても引っかけかりを覚えるだけであり、結局それが何なのかはわからない。

「一夏。これ以上悔やんでも仕方ない、今後の事は明日にでも千冬さんから聞けるはずだ」

「……………ああ、そうだよな。これ以上考えた……………つて……………」

「……………一夏？」

一夏に声を掛けるが反応がなく、此方を見向きもせずにある一点を見ていた。彼女は

その視線を追うと――。

「……………!?!」

「や、柳さん!?!」

二人が見たものは、ふらふらになりながらも自室へ入っていった隆道の姿。もう意識が戻ったのかと直ぐ様追いかける。

「柳さん!?!身体は大丈夫なんですか!?!柳さん!」

扉を叩くが、返事は一向に帰ってこない。あれだけの怪我をしたのだ。意識が戻ったところで安静にしていなければならない。現にふらついていた彼は危険な状態のはずだ。

いてもたってもいられない一夏は彼の返事を待たずに部屋に入ろうとするが、ドアノブを握った所でそれは止まる。

中に入って良いものか一瞬考えてしまうがそれは一瞬で吹き飛んだ。

「……………!?!」

「!?!」

「……………!?!?!」

彼の部屋から声にならないほどの叫びが聞こえ、暴れているのか物音が激しい。いったい何が起こっているのか分からないが非常事態だということを二人は理解した。

「一夏っ!!」
「?!?!?!」

「ああっ!……くっそっ!! 鍵がかかつてる!!」

「待っている! 今先生を——」

「織斑! 篠ノ之!」

箒が教師を呼んでこようとしたり矢先に隆道を探し回っていた千冬に会う。どれ程走ったのだろうか、髪は少々乱れており息も少々荒い。

彼女は多少運動したところで息が上がる人間ではないのだが、今はそんなこと二人にとってはどうでもよかった。

「ここで柳を見かけたと聞いたんだが、彼は部屋にいるのか!？」

「千冬姉! 柳さんはいさつき入ったばかり、なんだけど……」

そういつて一夏は扉を指さす。千冬が近づくと隆道の叫び声が彼女にもハッキリ聞こえた。

「まっずい!!」
「?!?!?!」

彼女はマスターキーを取り出し、鍵を開け部屋に突入する。そこには蹲りながらのたうち回る隆道の姿があった。

彼女は彼を抱えるも、激痛が止まないのか激しく暴れようとする。今までこれほどものがき苦しんだ彼を見たことがない三人は戦慄した。

「柳!!しつかりしろ!!」

「柳さん!気を確かにつ!」

「な、なんで……………お前らが——?!?!?!」

「柳!!ああくそつ。篠ノ之!織斑!誰でもいい!先生を呼んで——」

「やめろおつ……………!!」

今の彼はここにいる三人では手に終えない。篠ノ之に応援を呼ぼうと千冬が言いかけたが、のたうち回る彼に腕を掴まれ阻止された。彼の顔は痛みによつて酷く歪んでいるが、それに構わず千冬を含めた三人に向かつて言い放つ。

「誰も……………呼ぶんじゃ……………ねえ……………!!」

「しかし……………!?!」

「十数分で……………治まる……………。だから……………誰も……………!!!」

「柳……………。お前、は……………」

絶対離さないと言わんばかりに彼女の腕を掴む彼の表情は苦痛であり、悲痛に満ち溢れていた。

どうしてそこまでしてと千冬は言いかけるが、それを今の彼に言ったところで何も変

わらない。

彼の苦しみが治まったのは、言った通り十数分過ぎた後だった。

「……………」

「柳……………色々聞きたい事がある。いったいこれはなんなんだ。さっきのあれは……………?」

「鎮痛剤と精神安定剤って書いてあるだろうが、字ぐらい読めるだろ。さっきのは緊急用で、ただの副作用だ」

騒ぎから数分後、彼の部屋には一夏と箒、そして千冬の三人が隆道を囲む様に佇んでいる。当の本人は一夏の説得によりベッドで寝そべっており、完全に痛みが引いたのが非常に落ち着いてはいるが、千冬に対しては相変わらずの態度だ。

「いつからこれを……………?」

「言うと思ってるのかよ」

彼の荷物を初めて見る箒と千冬は驚きを隠せない。何せ医療キットやら錠剤やら、通常は持つことのないものだらけ。風邪薬等の錠剤だったらそこまで気にも留めなかったが、鎮痛剤と精神安定剤だったら話は別だ。

更には開封したままの医療キットからは数々の器具がちらりと覗かせていたり、ゴミ箱には数日は経ったであろう血が固まった包帯が大量にある。いくらなんでも異常過ぎるのだ。

「…………お前を治療する際、身体のお傷を見た」

「……………」

「あんなのを見てしまえば、いったい今までどれ程の生活を送ってきたかは私には想像もつかない。だが、これだけは言わせてくれ」

「……………」

「……………すまなかった」

千冬は頭を下げて隆道に精一杯の謝罪をする。信用などこれっぽっちもされてない彼に対し、今の彼女に出来ることはこれしかなかった。

「……………今後の事は明日にでも伝える。それまで安静にしてくれ」

そう言つて彼女は部屋を出る。一気に部屋は静まり返るが、何を思ったのか一夏は立ちあがり後を追うように部屋を出ようとする。

「お、おい一夏!」

「箒、悪いけど柳さんを見ててくれ。少ししたら戻るから」

「ちよ——」

一夏は彼女の言葉を聞かずに部屋を出てしまう。一人取り残された箒は彼を心から恨んだ。

(何故私が残るのだ！私は女なのだぞ！?この人にとっては敵もいいところではないか!!)

彼女の心情は最もだが、一夏はある確信があった。

『隆道は箒に対し敵意は無い』と。

この一週間、学園内で唯一敵意を向けられていない女性は彼女だけだということは理解した。敵意が無いのだったら、なるべく味方にしてしまった方が良い。

隆道も闇雲に牙を向ける人間ではないことは分かっているのできつと大丈夫だろうという一夏の判断である。

だがそんな事など知らない彼女は隆道と二人きりになってしまい、普段の覇気は何処へやら、次第に小さくなってしまった。

(う、うわあああああ！キツイ！これは非常に、予想以上にキツイ！な、何か！何か会話をっ！)

異性など一夏としかまともに会話したことのない彼女にとって今はまさに地獄に等しい状況。更には相手は三つ歳上ということもあり下手な事は言えない。完全に八方塞がりとなってしまった彼女は混乱の極みに到達してしまう。今なら入学初日SHR

での一夏の気持ちがあつた気がすると、今更ながらも何処かへ行つた彼に心の中で謝つていた。

とにかく、この状況を打破しなくてはと彼女は模索するが一向に案が出てこない。頭から煙が出そうになつたその時、隆道から話し掛けてきた。

「……………なあ、篠ノ之」

「はっはい！……………なんででしょうか……………？」

「お前……………自分の姉、篠ノ之博士をどう思つてる……………？」

「……………」

まさか彼から話し掛けてくるとは思わなかつたが、その内容も彼女にとっては予想外だつた。

姉が開発したISによつて世界は変わり、自分の家族をバラバラにされ、好意を寄せてる幼馴染みと離れる羽目になつた。

どう答えようかと思ふと彼を見ると、暗くはあるが真っ直ぐな目をして此方を見ている。彼は正直な思いを聞きたいのだろう、故に彼女は嘘をつかずに応えることにした。

「……………私は……………あの人、嫌いです」

「……………そうか」

「……………私も一つ、いいですか？」

「……………？」

「……………私と、何処かで会った事ありますか？」

その質問で彼は目を大きく見開く。目をそらして数秒経ち、彼はゆっくりと応えた。
「……………いや、会った事なんてねえよ」

一夏は隆道の部屋を出た直後、千冬の後を追っていた。彼女にあるお願いをするために。

「待ってくれよ千冬姉」

「織斑先生だと……………まあいいか。どうした一夏」

プライベート呼びなど、本来ならば制裁を与えるところだが周囲には誰もいないこともあり、今回は諦めて千冬も彼の名前で応える。

しかし何か用でもあったのだろうかと彼女は疑問が出てくるが、一先ず聞くことにし

た。

「頼みがあるんだ。凄く大事なこと」

「……………大事なこと？」

「クラス代表の事なんだけどさ——」

第十二話

一年寮のある一室。自身の持ち込んだベッドの上で三角座り状態のセシリアは、試合で事故を引き起こした事に未だ罪悪感と後悔に駆られていた。

「わたくしは……何をやっているのでしょうか……」

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けてきた彼女にとって、今回の試合はあまりにも刺激が強すぎた。

結果的に試合に勝ったのは自分だ。だが今回のような初めから弱っていた相手を蹴るような試合など、最後の最後で相手が暴走をってしまった結果重傷を負わせる事など決して望んではいない。いったい自分は何をどち狂った事をしでかしたのだと。

彼女は三年前に両親が事故で他界し、残されたのは莫大な遺産のみ。金の亡者や彼女自身を狙う輩から守るべく必死に勉強に励み、その一環で受けたIS適性テストで高い適性が判明した。その結果政府から国籍保持の為に様々な好条件が出され、両親の遺産を守る為彼女は即断したのだ。

血の滲む努力の結果、第三世代専用機の第一次運用試験者に選抜され、稼働データと戦闘経験値を得るために、IS学園に来た。

そう、全ては両親の残した遺産を、オルコット家を守る為に。

修練の為に I S 学園に入学したのだが、そこに突如現れたのは I S の知識などろくにない二人の男性操縦者。

片や I S についてほとんど理解してなく参考書を捨ててしまうほどの愚かな男、片や I S と女性を敵視し授業などまともに取り組む気のない野蠻な男。

彼女はそんな彼らに怒りを覚えた。入学当時は知的さなど無い弱い男の癖にと敵意を露にしていたが徐々に薄れていき、昨日の試合でそれは全て跡形もなく消し飛ぶ。

「柳……………隆道……………」

彼女は彼の名を小さく呟く。そして思い出す、あの光の無い瞳を。顔を真っ赤に染めながらも最後に向けられた殺意を。

どこまでも暗く、どこまでも哀しく、どこまでも歪んだ、とても一言では言い切れないもの。

先週末までは彼をただ暗い、気味の悪い男としか認識していなかった。

だが昨日の試合開始時の彼の瞳は、弱々しいがはっきりと『覚悟』と『強い意志』が見えたのだ。

人の顔色ばかり窺う男や、欲望に染まった男でもない、今までに出会ったことの無い男。

彼女は彼のような男を知らない。見たことがない。

何故、彼が試合に出たのかは保健室から出る前に千冬から聞いた。一夏の専用機が一次移行するまでの時間稼ぎとして自ら試合に出ると言ったのだと。

その理由だけでも彼女は困惑する。千冬を前にしても態度を変えないほどISを嫌う男がたったそれだけの理由で、万全ではない一夏を出させまいという理由で試合に出たのだから。そんなの、自己犠牲にもほどがある。

隆道は実技試験を受けていないと言った。彼より操縦経験は無いはずだ。

授業など真面目に受けていない処か、初日は半日も経たずに教室から出ていった。知識も彼より無いはずだ。

あれほどの敵意を剥き出しにするほどISを、女性を嫌つてるはずだ。

——にも関わらず隆道は、一夏の身代わりとして試合に出た。

『セ、シ、リ、ア、オ、ル、コ、ツ、ト、オ、オ、ツ、ツ、』
 (何故………貴方は………)
 !!!!!!

最後の最後に見せた血の涙を流す彼の顔を再び思い出す。

何が彼をあのようにしてしまったのか、何が彼をそうさせるのか。

——この気持ちは何？

彼女にある感情が芽生え始める。それは彼を意識すると胸が張り裂けてしまいそう

なくらいに苦しい、哀しい感情。

——知りたい。隆道の事を。

その正体を。彼の、どこまでも暗い瞳には何が映っているのかを。

しかし、それを叶える事は極めて困難であろう。隆道は女性とISを忌み嫌っており、代表候補生であるセシリアが彼と打ち解ける事は不可能に近いと思われる。

更にはセシリアと試合を行った結果として彼は重傷を負ってしまい、その原因は紛れもなく彼女自身。

故意ではないとはいえ、怪我をさせたのは事実だ。しかも相手は二人目の男性操縦者。恐らく重い処分が下される事であろう。

「知る権利すら無いのでしょうね、わたくしには……………」

「セシリア……………」

そんな彼女を端から見るのはルームメイトである如月キサラ。彼女も一組のいざこざはある程度知っており、一夏とセシリアが試合をする事も知っている。

彼女が部屋に戻り次第速攻で情報を手に入れようとしたが、暗い顔で戻ってきたのを見た途端聞く事をやめることにした。

どうにか宥めようとしますが、内容も知らない以上下手な事は言えない。かといってルームメイトをこのままにするわけにもいかない。

どうすればいいと考えに耽っていると、不意に扉がノックされた。

「あー……………。ちよつと出てくるね」

彼女が扉を開けると、そこには一夏がきよんとした顔で佇んでいた。知らぬ顔が出てきたことに面食らったのだろう。

「お、織斑君っ!?!」

「っ!?!」

「あれ、君は？オルコツトさんは不在？」

「あ、えーと……………」

彼はセシリアに用があるようだが、今はまずい。彼女は試合から帰ってきてからあの調子なのだ、間違いなく彼に関係してるはずとキサラは推測する。

どうにか誤魔化さないと、そう思う彼女であつたがそれは無駄に終わった。

「……にいましてよ……………」

「ちよ!?!セシリア!?!」

セシリアは暗い顔のまま一夏の前に現れる。隆道が重傷を負った事に関して何か言われるのだろう、それ以外見当がつかないと彼女は確信していた。

「……………御用件は何でございましょう。罵倒しに来たのではなくて？それとも処分の内容かしら」

「あ、いや違う。でもここじゃ話せない。ついてきてくれるか？」
「……………わかりましたわ、少しお待ち下さいまし」

一夏の後をついていく様にセシリアは歩く。向かう先は分からないが、彼はここでは話せないと云った。恐らくは今回の試合の件で間違いないだろう。

ではいったい何故彼が来たのか。処分の決定ならば教員から宣告されるのではと彼女は疑問に思う。

罵倒でもない、処分内容の宣告でもない。ではいったい何なのだろうか。

そう思考してる間に着いたのは生徒指導室。一夏が先に入り、セシリアはその後に続く。部屋に入るとそこにいたのは腕を組んで待つていた千冬だった。

「来たかオルコット」

「お、織斑先生……………」

「さて、そろつた事だし早速本題に入ろう。まずは試合の件についてだ」

「……………っ！」

やはりと、彼女の心臓の鼓動が強くなる。あれだけのことをしておいてお咎め無しなんて都合の良いことなど有り得ない。きつと重い処分になるだろう。

しかし、セシリアは既に覚悟を決めていた。代表候補剥奪だろうが強制送還だろうが何でも来いと構えていたが——千冬から出た言葉は予想を遥かに上回っていた。

「オルコットにはまだ伝えてなかったが、今回の試合には箝口令が出された。ＩＳ委員会の一部もこれに同意している。よって今回の件は不問とする」

「なあっ!?!」

それはセシリアを絶句させるのには十分な内容だった。

生徒を、ましてや男性操縦者に怪我をさせたにも関わらず処分無しなど有り得ないと。

「どういうことですかの!?!な、何故不問など……!?!」

「今回の件が公になれば様々な方向から責任が追及され、ＩＳの信頼性を失う事にもなる。それだけではない、日本やイギリス政府、ＩＳ委員会にも責任が問われるだろう。既にＩＳ学園だけの問題ではないのだ。」

「で、ですが……!?!」

そんな事があっていいものか。それが通用してしまったということは、隆道が重傷を負ったのが無かった事になるということになる。

元はと言えば自分が発端であり、代表候補生でありながら大人げない発言をして最終的に素人にＩＳ戦を申し込み、何も関係の無い男性操縦者に怪我を負わせた自分に何も

処分が無いなど、許されていいものか。

「気持ちには分かるが既に決まった事だ。他の一組生徒全員には署名までさせてある、覆す事は出来ん。柳の怪我については、I Sを起動した際の事故とだけ記録されることになる」

「そ、そんな……………」

「……………いいかオルコット、今回はお前の責任ではない。素人に試合をさせた、我々教員の責任だ」

「い、いえそんな!?!元はと言えばわたくしが!?!」

「その件も含めてだ。本来ならばあの時、我々が止めるべきだった。そうしなかつたばかりに、柳に怪我をさせてしまったのだから……………」

セシリアははつとする。そういえば彼は今も意識を失ったままなのではと。

「あ、あの人は今……………」

「つい先ほど意識を取り戻し、自力で自室に戻った。今は篠ノ之が看ている。完治次第学業に戻るだろう」

「じ、自力で……………!?!」

有り得ない。重傷を負ったにも関わらず自力で立ち上り、しかも歩いて部屋に戻るなど。

「とにかくそういうことだ。この事は決して外部に漏らすな。次の件に進めるぞ」

「……………次の、件……………ですか？」

「ああ、クラス代表についてだ」

「……………わたくしには、クラス代表になる資格などありません」

セシリアはお咎めが無い事には納得出来ないが理解はした。だがクラス代表になどなれはしないし、するつもりもない。あれほどの事をしておいてクラス代表になるなど、凶々しいにもほどがある。

「そう言うと思っていた。それでなんだが——」

「ああ、待って千冬ねえ、っ!？」

「織斑先生だ、それと話の腰を折るな」

「つてえ……………。織斑先生、ここからは俺が話しますよ」

「……………良いだろう」

「……………?」

先程まで黙っていた一夏は、千冬から鉄拳制裁を食らいながらも彼女の代わりに話そうとする。

なにやら彼の頭に大きめのたんこぶが見える気がするが、気のせいであろう。気のせいでと信じたいたい彼女であった。

「えと、オルコットさん。クラス代表なんだけど、……よかつたら俺にやらせてくれないか？」

凄絶な試合の翌日である火曜日。本来ならば昨日の試合で一夏とセシリアがI S戦を披露し、盛大な話題として生徒達の会話に華を咲かせるはずだったのであろうSHR前の教室。

勿論他クラスは試合の結果を聞きがっており一組の生徒達にあれこれ聞こうとするが、それは出来ない。

何せ真相は一夏——ではなく隆道とセシリアの試合であり、内容に関しても彼が暴走して不慮の事故により全身を真っ赤に染めるほどの重傷を負ったという誰もが予想もつかない事態が起こったからだ。箝口令を出され同意書に署名するほどの徹底ぶりもあつて決して口外など出来はしない。

そんなことは露知らずにあの手この手で——中には買収してまで聞こうとする生

徒もいるが、彼女達の意味は固かった。

彼女達は、仮にもISを真剣に取り組むべく入学してきた優等生だ。他の同年代を蹴散らしてまで入学してきたのだからその心は本物であろう。

しかし、彼女達は心の何処かでISを自身のアクセサリーとして、フアツションとして今まで認識していた。中には千冬に会いたいという執念で入学した者もいる。

そのような兵器を扱うにあるまじき邪念を胸に抱えてた彼女達であったが、それは遙か彼方に吹き飛んだ。

『ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる——』

入学初日で千冬が一夏に対し説教をしてる中放った言葉が一組全員の脳内に反復される。彼女の警告は昨日の試合で現実となったのだ。

代表候補生であるセシリアはともかく、ろくにISを動かしていない隆道がぶっつけ本番で試合を行った結果が昨日の事件。要因はそれだけでは無いのだが、一組の生徒達にとってはこれ以上無いくらいの衝撃だ。

ISは、世間ではスポーツで取まってはいるが所詮兵器だ、決して軽い気持ちで扱ってはならない事を彼女達の胸に嫌と言うほど刻まれる。

結果的に反面教師となった隆道の存在は、ISを軽く見る舐め腐った彼女達の考えを

改めさせるには十二分過ぎる事だった。

現在様々な生徒から囲まれて尋問に似たような事になっている一夏も同じ事で口外なんて出来はしない。仮に箝口令が無くて、彼は言うつもりは無かった。

それでも一組以外の生徒達は諦めずに情報を引き出そうとするが、S H R開始前のチャイムで断念せざるを得なくなる。

「み、皆さん、お、おはようございます……」

しばらくして真耶がおずおずと教室に入り、その後に続き千冬が入ってくる。昨日の件で非常に重苦しい空気を漂わせる生徒達に彼女は挨拶をするも、小さくなってしまった。

無理も無いだろう。彼女も昨日の隆道の豹変を目の当たりにし、重傷を負わせた事に自分も責任があると負い目を感じているのだから。

そんな彼女の様子を見て、小さく咳払いした千冬が話を切り出す。

「こほん……おはよう諸君。まずは昨日の件と今後についてだが、先にオルコットから諸君に話す事がある。オルコット」

「はい」

彼女の呼び掛けにセシリアは立ち上り、教卓の前に立つと一息深呼吸をしたのち、ゆっくりと語る。

「……………皆様。先ずはわたくし、セシリア・オルコットはこの場を借りて今更ながらお詫び申し上げます。先週のクラス代表を決める際にしてしまった数々の失言をし、皆様に不快な思いをさせてしまいました。今まで本当に申し訳ありません。……………そして」

彼女は再び深呼吸をし、言葉を続ける。

「わたくしは二人目の男性、柳さんに大怪我をさせてしまい、皆様に不安と不信を与えてしまったことをお詫び申し上げます。謝って済む事では御座いませんが、……………本当に申し訳ありませんでした」

彼女はその言葉を最後に頭を大きく下げる。自分がしてしまったことは到底許される事では無い。

彼女の心の底からの謝罪を見て生徒達は言葉を発することはしないが、その気持ちは彼女達には届いた。

彼女達も面白半分で一夏を推薦したのだ、きっかけを作った原因は自分達にあると負い目を感じていた。

「オルコット、もういいぞ。……………諸君、昨日の試合で起きた事故は彼女の責任ではなく、訓練をさせずにISを操縦させた我々教員の責任だ。……………本当に、すまない」

千冬はオルコットを席へ戻した後に生徒全員の前で謝罪する。責任を感じているのはセシリアや生徒だけではない。むしろ、誰よりも彼女が責任を感じていた。

「……………昨日も言ったように、試合の件は箝口令が出されている。混乱を避ける為にも、決して口外はしないように」

「「「「は、う、う、う、う」」」」

千冬の言葉に全員は返事をする。彼女達も優等生なだけあつて理解は早かつた。

試合であのような事故があれば誰だつてISに対して不安と不信が募る。それによつて身を引き締めれば良いのだが、全員がそうとは限らない。

そして公になつてしまえば、セシリアは男性操縦者を傷つけたとして様々な所からバッシングを受けるだろう。本人が責任を感じようが謝罪しようが罪を償おうが関係ない。彼女を代表候補から引きずり出すという者は決して容赦はしない。攻撃出来る材料があるだけで十分なのだ。そういう者達から守るという意味に辿り着くのは彼女達にとつてそう難しいことではなかつた。

「さて、未だ決まつていないクラス代表についてだが……………オルコットはこれを辞退した。このままだと推薦通り織斑がクラス代表になるが、異存がある者はいないか？遠慮はいらんぞ」

千冬は周囲を見渡して数秒、そのような人物は誰一人としていない。一夏のクラス代表が決定した瞬間であつた。

「よし、決まったところで授業を………とりたいところだが、柳について話そうと思う」

彼女の言葉で全員は身構える。隆道は今後どうなってしまうのだろうか。

「柳は昨日の夜に意識を取り戻し、自力で自室に戻った。怪我が完治次第授業に戻るようになる」

周囲は一気にざわつく。半日も経たずに意識を取り戻したことも十分な驚きだが、あれほどの事があつたにも関わらず、またＩＳに乗せるつもりなのかと。

彼がＩＳに乗って、いつ、どこであのような豹変を見ることになるか分かったものではない以上、自身を危険に晒す事は避けたい彼女達は反対の雰囲気を出す。

「諸君の言いたい事はわかる、私だつて柳をＩＳに乗せることは反対だ。だがこれは決定した事だ。非常に不本意だがな。そこで、ある事を約束してもらいたい」

「あ、ある事………ですか？」

生徒の一人が思わず訊いてしまう。昨日のアレに遭遇しなければ何でも良いので、思わず前のめりになるのも仕方ない事なのだろう。

「そうだ………いいか諸君。しばらくすれば諸君はＩＳに乗り、模擬戦等を行うだろう。だがその時が来ても、今後決して柳と戦うな。昨日起こった柳のアレは暴走などではない。彼の専用機が、彼自身を防衛する為になったものだ」

「ぼ、防衛………？それって、どういうことですか………？」

「柳は重度の PTSD、心的外傷後ストレス障害を患っている。それが試合途中で発症した際に機体が反応し、あのような変化が起きた。分からない者は後で調べるといい」
千冬は、彼が心の病を抱えていることを皆に伝えるべきかどうか悩んだ。だが、今後いつ発症してあのシステムが起動するか分からない以上隠す訳にもいかない。彼を守る為、生徒を守る為にも言っておく必要があった。

何人かはその病名を知っていたのか、表情を暗くしてしまう。その中で生徒の一人は堪らなくなったのか千冬に質問を飛ばした。

「そ、そんな……… PTSD って……… どうして、ですか？」

「……… 柳は女尊男卑社会の被害者だ。我々の想像がつかないほどの被害を被っている。物理的な脅威に晒されていた事も判明した。それがどういふことか、あとは分かるな………？」

「被害者………。それに……… ぶ、物理的って………」

「すまないがこれ以上は言えん。我々も全てを知ってる訳ではないからな。確実に言えることは、その被害によって女性と I S を敵視してるといふ事だけだ」

彼女達は絶句し、そして理解し、納得する。ほとんど警戒心を解かず、敵意を露にし、時には殺意を向ける彼は元からなのではない。

今の女尊男卑社会によって、自分達女性によつて虐げられた男性の成れの果てなのだ。

「……………先週も言ったが柳は非常に不安定な状態だ。しかも日に日に悪化し、より酷くなっている。一刻も早く病院に連れていくべきなのだが、彼の立場上それも困難な状況だ。だからもし、柳に何かあつたら直ぐ教員に連絡すること……………いいな？」

全員は頷く事しか出来ない。彼には何かがあると数人は察していたが、まさか心の病だなんて誰が想像出来ようか。

話を聞く限り誰がどう考えても彼は爆弾で、起爆スイッチは女性そのもの。いつ爆発してしまうか分からない。

彼に対して下手な事は出来ない。もしかしたら無自覚で彼の琴線に触れるかもしれない。

この先の学生生活に不安を覚える生徒達であつた。

「はい、これでおしまいっ。また明日も来てね」

「……………」

放課後の保健室。隆道は怪我が完治するまで一日一度は放課後に保健室へ通う事になった。彼の今の容態でシャワーを浴びせる訳にはいけないので、ここで体を拭いて包帯等を取り替える為だ。

セシリアとの話し合いを終えた後に再び彼の部屋に戻り、怪我が完治するまでの今後を相談した。本人は絶対に行かないと拒否したのだが、千冬と一夏と箒の三時間にも及ぶ長時間の説得により渋々従う事にしたのだ。

寮から保健室までに行く際何かあるとまずいので必ず千冬が同伴する事になっていく。その為最後の授業辺りから真耶に任せて彼女は教室を抜けて彼を連れ出していた。

千冬が包帯の取り替えを手伝う訳にはいけないので、保健室担当の教員が彼の処置を行っている。

「無理な動きは控えるようにしてね、本当なら立つことすら困難のはずなんだから」

「……………どうも」

「それとあちこちにある縫合痕だけど……………貴方、独学でやったでしょ、結構歪よ。ちゃんとした場所で処置してもらわないと」

「あんたには関係ないだろ」

包帯の取り替えも終わり、シャツに手を伸ばす隆道は相変わらずの態度。礼を言うだけまだマシな方だろう。

保健室担当の教員から見ても、彼の体は異常の一言に尽きた。本来ならば立つことすら困難にも関わらず、彼はここまで平気な顔をして歩いてきた。痛覚が無いのかと思われたが、どうやらそうではない様子。彼いわく、緊急用のおかげで多少の痛みはあるがほぼ引いているとのこと。

それを調べさせてくれと千冬共々頼んだが、彼はこれを頑なに拒否した。取り上げる事は出来ないので此方が引き下がるしかない。

「終わりましたか先生」

「あ、お疲れ様です織斑先生」

「しばらくお世話になります、どうぞよろしくお願いします」

「いえいえ、これくらい当然の事です」

隆道が着替え終わると同時に千冬が保健室へ入り教員と軽い挨拶を済ませ、椅子にもたれ掛かる。

「……………先生、少し席を外して貰ってもいいですか」

「……………わかりました、終わったら連絡を下さい」

教員は保健室を出ていき、部屋に残るのは隆道と千冬の二人のみ。彼と二人きりに

なったのはある事を伝える為であったが、彼女はどう話を切り出せばいいかわからなかった。

「柳……………。その、なんだ……………お前の——」

「機体のことだろ。修理が終わって俺の怪我が完治次第データ採取を続ける……………そんなところか？」

「……………！」

「こんだけ怪我してるにも関わらず本州に搬送しないつつうことはそういうことだろうが。もしくは別の理由……………例えば何処かしらにかっさらわれるのを阻止する、とか。自分の立場ぐらいわかってるつもりだっけの」

彼は自分の立場を良く理解している。たった二人しかいない男性操縦者など、どこも欲しがってるはずだ。最悪解剖して生体組織を調べようとする輩も存在するかもしれない。

貴重な男性操縦者を解剖など何を馬鹿など思うかもしれないが、あり得ない横暴すら許されるこの世の中だ。必ず一人や二人そういった考えを持った者が居ても不思議じゃない。

「……………その通りだ。だが機体の方は今日の朝方の時点で修復が済んでいる。後は柳が完治してからだ」

「あ？いくらなんでも早すぎるだろ。明らかに大破しただろうが」

「同じ打鉄ということで応急処置として訓練機の予備パーツを組んだのだが、機体に合わせて装甲が変化した。細部もあり得ない速度で自己修復して、それも既に終わっている。このようなこと今まで無かったのだがな」

「ふーん、修復が早いんだつたら別に良いんじゃないの。その方が都合良いだろ」

ISには自己修復機能が存在する。だがそれも早いという訳ではなく、大破してしまえば部品を丸々交換しなければならぬ。

彼の専用機は打鉄を一次移行させた物なので修復は学園内にある訓練機の部品でも可能なのだが、その修復速度には度肝を抜かれた。

「それと、昨日のシステムについてだが……………再び起動するのをなるべく避けるために此方で手を加えた」

「昨日の……………？ああ、アレか。あの時はよくわからなかったがなんなんだよアレは」

「私にもわからん。ある条件で操縦者の保護機能を停止する代わりに機体の一時的強化と様々な補正がかかる事以外不明だ」

「……………ふーん、捨て身になるって事か」

心底どうだつていいのか、彼はまったく興味なさそうにしている。自分の乗る機体に得たいの知れない物があるなら何かしら不安を覚えるものだが、彼には全く感じられない

かった。

「……………怖くないのか？あの機体を、専用機を、今後乗ることになるんだぞ」

「怖がつてどうなるんだよ。それともなにか？泣いて土下座でもすれば機体を替える……………あわよくば乗らずに済むつてのかよ」

「……………」

「どこにいようが、泣こうが喚こうが結局は機体に乗らなきゃならねえんだ。乗った結果として頭がおかしくなろうがくたばろうが、所詮それまでだったつてことだろ」

確かに彼は初起動時に錯乱し、機体に乗ることを拒み、結局専用機を受け取った際も泣き叫んだりと荒れに荒れた。

しかし、彼が言ったようにそんな駄々は今後通用しない。嫌でも関わる事になるのだから、これ以上の拒絶など疲れるだけだ。

今回は死ぬ事はなかったが、いずれ同じようなことが起きるだろう。いちいち怯えていては埒が明かないのだ。

そもそも三年間学園で無事に過ごせたとして、その後の未来などどうせろくな事にならないのだから死ぬのが遅かろうが早かろうが彼にとっては知った事ではなかった。

彼女はそんな彼に対し言葉を失ってしまふ。

あまりにも達観している。少なくとも十八の考える事ではないと。

「……………俺の事はもういいだろ。そんなことより、機体に何を加えたんだよ」

「……………現段階で判明してるのは、柳の異常を感知して作動するシステムということだ。制限を掛けるつもりだったコアが拒絶してしまいシステムそのものに手をつける事は出来なかった。そこで、異常等を事前に知らせる装置を用意した。これがそう
だ」

そう言って千冬が取り出したのは手の平サイズの小型タブレット。彼女が画面に触れると心電図を始めとした様々なものが表示される。

「今はまだ同期してないが、ISに備わっているバイタルサインを24時間この端末に送信する。もし異常が感知すれば警告が鳴る仕組みだ」

「事前について、そんなことわかるのかよ」

「あのシステムが起動する前に多数の警告ログが流れていた、それを参考にプログラムしてある。何か心当たりはないか？」

「……………ああ、あれね。確か一次移行したときから鳴ってたな」

「なっ、一昨日からだど？何故それを……………いや、もう終わったことだな、すまない」

それを黙っていた、何故教えてくれなかったと言いかけたが、彼女はやめる。彼のことだ、絶対に言わなかっただろうし、仮に此方が知っていたとしても構わなかったであろう。でなければ時間稼ぎなど決してしないはずだ。

「話が逸れたな。とにかく、あのシステムには前兆がある。それを此方が知ることが出来れば対応も間に合うはずだ。それと、待機形態にも警告が鳴るようにしている。周囲の人間もいち早く気づくだろう」

「それはまあご苦労なことで。………そういや、織斑とイギリス人の試合はどうなったんだよ」

昨日は一夏を出させまいとして代わりに出たが、元々は彼とセシリアとの試合だ。

既に彼の機体は一次移行を済ませてるはずだからいつかは試合をするだろうと思っていたがそれは杞憂に終わる。

「元々はクラス代表を決める際の試合だったが、オルコットは辞退した。よってクラス代表は織斑がすることになる」

「辞退？織斑がクラス代表？なんでまた」

「オルコットは試合の後、自分には資格がないと言ってクラス代表候補から降りた。織斑はオルコットと話をして自らやらせてくれと、まあそんなところだな」

「どういふことだ、セシリアの心境の変化もそうだが一夏がクラス代表をやりたいたいなど。」

そう疑問に思つてると、誰かが来たのか扉をノックする音が部屋に響いた。

「失礼します」

「失礼します。ほら、オルコットさんも入って」

「し、失礼、します」

入ってきたのは一夏と箒の二人。そして二人の後ろに隠れるように立っているのは何故かおどおどしてるセシリアだった。

「ふむ、丁度三人も来たことだし私はこれで失礼することにしよう。織斑、後は頼む」

「分かったよ、織斑先生」

「せめて敬語を……………まあいい」

千冬はその一言を最後に保健室を出る。再び部屋は静寂に包まれたが、黙ってても意味が無いので隆道から話を切り出す。

「……………織斑と篠ノ之はいいとして、そのイギリス人は何しに……………ああ、あれか。昨日の試合は勝ってるもんな、奴隷に何かしら命じに来たわけか」

「いえ、あの……………」

「えと、柳さん。一先ずオルコットさんの話を聞いてください」

「話？」

奴隷に何か命令をしに来たのではないのか。確かに先程からセシリアの様子はおかしく、高圧的な態度など一切無い。

「ほら、オルコツトさん」

「は、はい。……えと、柳さん」

「……なんだよ」

「……先週からの数々の無礼な態度、そして昨日の試合で怪我をさせてしまった……申し訳ありません」

彼女は深々と頭を下げて隆道に謝罪する。その姿に彼はつい目を見開いてしまった。

「謝って済むことではない事は分かっております。許して下さいとは言いません。

……本当に申し訳ありませんでした」

彼女は頭を下げたまま言葉を続ける。彼女の謝罪は本物であろう、少なくとも彼には伝わったはずだ。

それを見て一夏と箒は何も言わない。許す許さないは隆道が決めることだからだ。決して第三者が口を出していい事ではない。

勿論一夏と箒はセシリアに対して何かしら言うことなどない。故意であれば決して許すことはなかったであろうが昨日の試合は事故だとわかっており、SHRでの謝罪は既に受け取っている。追い討ちをかけるような非道な事はしない、してはいけない。

彼女の謝罪は確かに隆道に届いた。その言葉と姿に嘘偽りなど感じられない。

故に彼は——。

「……………頭上げろよ」

彼女の事が——。

「柳、さん……………」

——許すことも、信用も出来なかった。

「随分な心変わりじゃねえか。この前までの態度が嘘みてえだな、おい」
「……………」

「聞いたぞ、クラス代表を辞退したってな。つうことはあれだ——」

——昨日の試合なんて全くの無意味だったってことだ。

隆道はセシリアの以前までであった高圧的な態度など今更なんとも思っていない。試合の怪我についても故意ではなく事故だということも理解している。問題はそこではなかった。

男だからと牙を向き、決闘を申し込んだ癖にそれも無くなり、気がつけば今までが嘘のような振る舞いをする。

昨日の時間稼ぎが無駄に思えたのだ。何の為にISに乗ったのか、何の為に痛い思いをしてきたのか、それら負の思考が彼の脳を支配する。

負の思考はそれだけに留まらない。彼は彼女の変わり様を見て信用が出来なかったのだ。

彼はその手の女性を数多く見てきた。都合が悪くなると直ぐ様態度を変え、無かったことにしようとする者達を。その様な輩は再び態度を変えると、彼の目からはセシリアも今までの女性と同じに見えたのだ。

勿論昨日の試合は決して無意味ではない。一次移行を済ませていない一夏を出さずに済み、その試合でセシリアは隆道と対峙したことにより男性の認識は変わり、それが再び変わる事はまず無いだろう。

しかし、女性に対して歪んだ思考を持つ彼はその答えに辿り着けない。

悲しいことに、彼女の気持ちが届いたばかりに彼との溝は深まる結果となつてしまふ。

「俺から言うことはもう何もねえ。回れ右してさっさと帰れ」

「……………わかりました、失礼します。……………本当に申し訳ありませんでした」

セシリアは再び彼に謝り、部屋を後にする。残された一夏は頭をかき、箒はため息を吐いてしまった。

「ああ、やっぱり駄目だったか……………」

「仕方ないだろう、こればかりはどうすることも出来ん」

二人は隆道を迎えに行く際に、セシリアから同行しても良いかと頼まれた。彼女は彼にどうしても謝りたかったのだ。今の彼に近づけても良いかと模索したが、本人がどうしてもと言うので連れていく事にした。二人はきっと彼は許さないだろうと思つていたが、予想は見事の中だ。

「お前らがあいつを連れてきたのか」

「はい、オルコットさんが柳さんに謝りたいと言うのでダメ元で連れてきたのですが……………」

「……………誠意は伝わったし、まあいいわ。さっさと帰ろうぜ」

外はすっかり暗くなり、一年寮の一室。隆道の部屋には恒例として一夏が入り浸っている。以前と違うのは箒も加わった事であろうか。

彼女は昨日一夏に置いてかれたおかげで隆道と無理矢理二人きりとなつてしまつたが、当たり障りの無い会話をしてる内に次第に打ち解けていった。

彼女は未だに彼に対し引つかかりを覚えてゐる。彼の近くにいれば、いずれそれが何なのかわかるはずだということもあつて、今後一夏と共に彼の傍にゐることにした。

「ところでよ、織斑。お前、クラス代表に自ら志願したつて聞いたが」

「ええ、オルコツトさんも辞退しましたし。何より俺がやりたいと思つたからです」「どうしてまた。先週はあれほど嫌がつてたじゃねえか」

隆道の記憶が正しければ先週のクラス代表決めの時はやりたくないと言つていたはずだ。セシリアとの試合も、互いが納得するようにと取り決め、それも無くなつた。

「……………柳さん。俺つて子供の頃から千冬姉に守られてきたんですよ」

「……………」

一夏は突如語り出す。いきなり何をとったが、必要な事なのだろう。黙って聞く事にした。

「だからなんでしょうね。誰かを、何かを守ることに強い憧れがあるんです。今もそれは変わりません」

彼は今日までに様々な事があっても、千冬によって守られてきた。彼が学校で問題を起こしても、彼に女尊男卑の悪意に晒されなかつたのも、最終的に彼女の影響によって無事に過ごせたのだ。それを間近で見っていた彼は、いつしか彼女に強い憧れを持ち始める。

「でも正直言うと、ここ最近俺は本当に誰かを守ることが出来るのか考えるようになってたんですよ。不注意でISに触って、IS学園に入学することになって千冬姉に迷惑をかけて、それだけじゃなく柳さんもIS学園に来る事になって……。誰かを守る処か迷惑しかかけてないじゃないかって」

「お前……………それは……………」

「昨日の試合が決め手でしたね。柳さんが俺の事を庇って、大怪我をした時にだいぶきまして。今の俺には誰かを守る事は出来はしないって分かったんです」

「一夏……………」

そんなことはない、幼い頃に一夏に守られた事がある筈はそう言いたかったが言葉

をかけられない。彼の表情は真剣で、話を折る様なことはしたくなかったからだ。

「だから、俺に出来ることは何か。クラス代表になって色々経験していけば、いずれ分かるんじゃないかなって……そう思うんです」

「織斑……」

「自分で何言ってるのかよくわからないんですけど、要はあれですよ。自分探しの為………ですかね」

探り探り彼は話を続けるが、その心は隆道にしつかりと響いた。迷惑をかけてると自覚し、自分に出来ることは何かと探そうとしている彼を見て、隆道は堪らない思いでいっぱいになる。

(ほんつと………お前は強いな)

「だから柳さん、お願い………というか頼みがあるんですけども」

「あん？」

「多分、今後でも迷惑をかけるかもしれません。何をしたら良いかわからない時もあるかと思えます。その時は………相談にのってくださいますか？」

彼の意志は本物だ。何より目が物語っている。自分とは違い、眩しいくらいの輝きがあった。

「くっ………ははっ」

「え、え？何かおかしい事言いました俺？」

「はははっ。……………いや、悪いな。そうじゃないんだ」

彼を見て隆道は笑う。彼こそ女尊男卑社会の希望だろう。

こんなものを見てしまったらくたばる訳にはいかない。彼が何かを見出させるまで何
がなんでも支えてやる。そう隆道は誓った。

「……………柳さん？」

「いやあ、悪い悪い。……………わかった、このくそつたれな先輩に任せとけ」

第十三話

少年は空を見ている。

否、彼が見ているのは空ではない。

どこまでも青い空にある一点の物体。

それは人の形をした白いナニカ。

それは縦横無尽に空を駆け回り、剣を振るう。

少年は『恐怖』している。その白いナニカに。

「？」

身が目の当たりにした世間を掻き乱し今の狂った世界となった事件。

全ての常識を覆す出鱈目にもほどがある兵器の出現により、周囲が、家族が、そして自身の全てが変わってしまったあの日が鮮明に写し出された。

「勘弁してくれ……………」

彼は定期的に先程と全く同じ夢を見る。彼にとつては一番の悪夢であり、その夢を見た朝は決まって汗だくだ。というより彼はここ数年悪夢しか見ない。

クラス代表が決まった日から一夏と筈の世話になり、毎日保健室へ向かう際もなるべく生徒を近づかせないなどの粋な計らいによりストレスをかなり減らせる事が出来たが悪夢だけはどうにもならなかった。

「あーあ、またかよ……………ったく」

身体は運動を終えたばかりのように汗が凄まじく、シャツが身体に張り付いている。悪夢を見る度に汗だくになるのはいい加減にしてほしいと彼は思いながら洗面所へ向かう。

シャワーの許可は昨日ようやく出た。風呂も調整の関係で使用出来ず、シャワーすら怪我のおかげでしばらく使えなかったのだ。気が済むまで浴びるとしよう。

彼は気づかない。悪夢を見た日は自分の顔が酷く歪んでる事に。

隆道の怪我は学園の設備のおかげか、傷は全て塞がり遠目からだとまず目立たない程になった。流石に以前からある古傷は消えはしないがそこは別に構わない。自分で処置していたらきつと傷痕は歪に残っていただろう、そこだけは感謝してもいいかと、彼は二秒くらい思つたそうなの。

「そろそろ染め直すべきか……？」

シャワーを浴び終わり、着替えも済ませた彼は洗面台で自身の髪を弄っていた。

彼の髪は当然黒髪だ。両親は日本人なのだから当たり前である。

しかし、まるでかつては黒髪ではなかったかのように眩き所々髪を摘み確認している。

「時期的にそろそろだしな……買っておくか」

独り言を呟きながら洗面所を後にする。今日から学業に復帰できる彼だったが、既にSHRは始まっている。では何故教室に行かないのか、それは復帰する前にやることがあるからだ。その為に彼はある人物を待っている。

しばらく待ち、ようやく来たのか扉が叩かれる。扉を開けるとそこには千冬が佇んでいた。

「待たせたな、すぐに向かうが大丈夫か？」

「支度はとつくに済んでいる。さっさと終わらせようぜ」

「そうか、では向かうとしよう」

復帰する前にやること。それは隆道の専用機の受け取りだ。彼の怪我が完治したので再びデータ採取を行うことになる。

彼の怪我が完治するこの日までに数人の教員は彼の専用機は危険だから凍結、又は初期化するべきだと抗議していたが当然却下された。

彼が扱う機体は日本政府が用意したものだ。学園側がそのような勝手なことは許されない。

更に彼の場合は単なる男性操縦者のデータ採取だけでなく、『男性操縦者で一次移行した量産型第二世代』のデータ採取も目的としている。訓練機に乗せれば良いという案にも先手を打たれた。

学園には生徒に外的介入は出来ないある特記事項が存在するが、今回の様に政府が用意したコアと機体となれば話は別だ。機体に手を加える事が出来たのは政府から許可も貰ったからであり、それ以上の事は許可されていない。

そもそも、学園に配備されている機体は教員用と訓練機合わせて三十機も無いのだ。仮に訓練機を渡してしまったら生徒が授業や放課後に操縦する機会も減る。そうなれ

ば飛び火はどこに行くか、少し考えれば分かることだ。

それでも教員達は引き下がらず、学園の者達を危険に晒すつもりかと抗議するが、政府はデータ採取を優先しろと一点張り。教員の叫びは一向に届かなかった。

IS学園側は知らない事だが、所属先とデータ採取を重点に置いているIS委員会とは違い、日本政府には様々な思想があった。

政府は彼が過去に受けてきた被害を知っている。厳密に言えば最近知ったと言うべきか。

彼が受けてきた半分以上の被害は女性優遇制度があったとしても裁判沙汰になるものだ。しかし、周囲の人間——恐らく女性に揉み消され世間に届く事はなかった。彼の適性が発覚した当日から徹底的に調査し、それが今になってようやく判明したのだ。

あまりにも悲惨なそれは、罵倒や奴隷の様な扱いをするのとは格が違いすぎた。このような仕打ちを受けてしまえば必ず何処かで心が砕け、自らこの世を去るはずだ。

だが彼は今まで生きてきた、生きてしまった。そして決して心が砕けず、歪んでしまつた。

その事実を知った政府の人間は胸を痛めた。他の国より優れたISを、操縦者を手に

入れるためにしてきたことが、このような人間を生み出してしまったのかと。

そして恐らく、いや間違ひなく彼に似たような人間は世界中にいる。公になつていないということは揉み消されてるか、既に殺されているか。

彼等にそのような後悔が生まれるが、一部の人間はそれとは別の事に注視していた。

それは彼が二度目の転校をする直前の中学二年辺り——恐らく彼の狂気が生まれたであろう時期。

彼は、ある女性とその取り巻きに『報復』を行つていた。それも学校内で、大勢の間を巻き込み両者共々血みどろになるほどの『見境なしの暴力』を。

周囲の人間はしばらく車椅子生活を余儀無くされ、報復対象は後遺症を残す程の重傷を負つていた。

その時の彼はバットで頭を殴られようが、ナイフで腹を刺されようが、頬を抉られようがお構ひなしに暴れ狂う——まさに『狂犬』に相応しい様だった。

一部の人間はその『見境なしの暴力』に目をつけたのだ。

政府の人間——男性も何人かは過去に女性に虐げられた、又は現在も虐げられている者もいる。多少なりとも女性に憎しみを持つていたのだ。

彼等は期待した。女性不信の彼をIS学園に放り込み、いずれ彼女達に『見境なしの暴力』を見せ、それを振るうのではないかと。

そう、彼が学園の女尊男卑に染まった愚かな者達を潰してくれると願っているのだ。その願いの最中に現れた彼の専用機に備わる危険なシステム。彼等は歓喜した、彼とこの機体があれば愚かな女共を潰してくれると。

彼も危険に晒す事になるが、やむを得ない。致し方無い犠牲だという狂った思想が出来上がってしまった。

狂った思想はそれだけに留まらない。残酷なことに他にも存在していた。

政府の人間には女性も存在する。彼女達は隆道の存在が許せなかったのだ。

自身が崇拜する千冬の弟ならいざ知らず、どこかの馬の骨ともわからない男が神聖なI Sに乗るなど決して許してはならないという狂いに狂った思考を持っていた。

願うことなら彼を文字通り消したいが、直接そのような事をしようものなら自らの人生を棒に振ってしまう。そしてなにより自身の手を汚したくなかった。

自分の手は汚したくはない、だが彼は消したい。ではどうするべきか。そこで彼女達はある答えに辿り着く。学園にいる者達を使えばいいのだと。

彼をとことん追い詰めて自殺を、出来なければ事故を装った暗殺を。既に政府と繋がりを持つ人間には伝えており、後は実行してくれるのを待つのみ。仮に失敗しても良いように切り捨てる準備もしてある。彼女達は彼の死を願った。

彼の身を案じる者、男性の希望として期待する者、モルモットとしか見ていない者、女

性を潰してくれと願う者、彼の死を望む者。

政府の善意と悪意の思想により彼は今後も一夏以上に振り回される事になる。

この世界は——どうしようもなく狂っていた。

隆道がようやく学業に復帰し、今日からI Sの実技授業が開始される。

彼が復帰すると知っていた一組の生徒達は不安で仕方なかったが、一夏と箒のおかげで彼はだいぶ大人しくなっている。

生徒達はその光景に心底驚いていた。あれほど女性不信である彼が、箒と普通に会話している事に。

そしてあの試合の事もあってセシリアと揉めるのかと思いきや、彼は彼女と一度目を合わせただけで何も言及していない。あれほどの怪我をしたのに何も起こらなかったことに疑問に思い、同時に安堵した。

復帰早々暴走染みた事になってしまえば手に負えない。どうかそのまま置いて下さ

いと生徒達は切に願った。

「やつと復帰出来ましたね。俺、柳さんがいない間不安で不安で」

「ああ、男はお前一人だったもんな。俺だったら発狂して暴れる自信があるぞ」

「それ冗談に聞こえないですよ……」

「全くです。………本当に暴れませんか?」

「お前ら、なんだその目は。暴れねえから身構えんな」

つい二人は彼に対しジト目になってしまふ。彼は冗談で言ってるつもりだったが、これっぽっちも冗談に聞こえない。些細な事で何がどうなるかわからない以上下手な事は出来ないのだ。

相手が一夏と箒だから良かったものの、これが他の生徒だったら憎悪と殺意が一気に溢れ出す所だったであろう。

「そういえば、午後の授業でISを使った実技があるんですけど………柳さんは大丈夫なんですか?」

箒の一言で、聞き耳を立てていた生徒達は固まった。今一番に知りたいのはそれなのだ。復帰した彼は首輪を着けており、あれが専用機だと言うことも皆が知っている。出来ることならアレを目の当たりにする事は避けたい。代表候補であるセシリアですらあのような事になったのだ。ろくにISに触れていない彼女達が彼に太刀打ち出来る

はずもない。

「アレの心配してんだろ？よつぼどの事が無い限り勝手に起動する訳じゃねえし、これそのものに手を加えてある。朝方受け取った時に一度展開したがなんともなかったから、まあ大丈夫だろ」

「大丈夫ならいいんですけど……」

「おい篠ノ之、だからその目をやめろ。俺が何をしたつてんだ」

色々といんでもないことをしていると隆道を除いた全員の心が一つになる。ついツツコミを入れたくなった生徒達だが何も言わないことにした。触らぬ神に祟りなしとはまさにこの事なのだ。

昼食時間も終わり、午後の授業。今回からの授業はISを用いた実技を行う事が出来る。新入生は専用機持ちを除いて二度目となるIS操縦となるので期待で満ち溢れていた。そもそもISに乗る事がこの学園に来た理由なのだ。わくわくしないはずがな

い。

しかし、一組の生徒達に限ってはそのような期待感ではなかった。

隆道とセシリアの試合を目の当たりにし、ISの危険性を認識したのだ。今の彼女達には他のクラスのようにISを軽く見る素振りはなく、顔つきもしっかりしている。

千冬はそれを見て、確信した。彼女達は他のクラス以上に伸びると。

そんな彼女達は今、ISスーツを着用している。その特殊なスーツはISを扱うに当たつて必要であり、これを着ているか着ていないかで反応速度に違いが出てくる。

見た目はスクール水着の様なものであり、ボディラインがはつきりと出てしまうので女性は自身のスタイルに普段以上に気を遣っている。もしだらしない身体であったならば目を逸らしてしまうような悲惨な事になるのは間違いない。

勿論男性である一夏と隆道もISスーツを着る事になる。ただし、今現在普及してるISスーツは当然ながら女性用だ。彼等がこれを着てしまえば色んな意味で悲惨な事になってしまい、社会的に抹殺されるだろう。故に彼等には特注として初の男性用ISスーツが用意された。

一夏のISスーツは上下に別れており、腹が露出した物だ。隆道のISスーツは当初一夏と全く同じ物を着用させるつもりだったが古傷が見えてしまうのと、なによりサイズが合わなかった。

一夏の身長は172cmに対して隆道は180cm。ISスーツは着やすいように着用前は多少緩めてあるので、彼のISスーツが届かなかった場合無理に着る事も可能なのだ。着れない理由は身長だけではなかった。その理由は――。

「「「「「「「「」」」」」」」」

「あの、柳さん……………」

「……………なんだよ」

「柳さんて……………着痩せするタイプだったんですね……………」

遅れてやってきた彼のISスーツは一夏とは違い腹も隠れた全身タイプだ。そして彼の身体は――男性ですら惚れ惚れしてしまうほどの肉体だった。

一夏も標準以上の筋肉をつけており、整った顔もあつて女性を釘付けにするには十分の破壊力を持つ。しかし隆道の身体は一夏のそれを遥かに上回っていた。

山脈のような胸板を始め、両腕、両足はまるで鋼のように強靱な筋肉で覆われている。一番目に留まるのは腹筋であり、誰が見ても板チョコを連想してしまうかのようにくつきりと出ていた。

太過ぎず、細過ぎずな筋肉質の身体であり、それは正しく『漢』の姿。それを見た教員の真耶を始めとした生徒達は先程までの顔は何処へやら、顔を真っ赤にしてしまう。おまけに彼も一夏程ではないが整った顔をしてるので、流れてそれを見てしまった生徒

の殆どはとうとう俯いてしまった。

千冬は彼が大怪我した際に一度見ており、その時はそれどころではなかった為に気にしなかったが、改めて見ると彼女ですら頬を染める。彼の肉体は女性にとって刺激が強すぎたのだ。

「あー………こほん。全員注目！これよりISの基本的な地上操縦を実践してもらおうが、まずは見学だ。織斑、オルコット、そして柳。ISを展開しろ」

このまま隆道の肉体に見蕩れる訳にはいかない。千冬は無理矢理生徒の注目を集め授業を再開することにした。

「それが織斑のISか。驚きの白さだな」

「はい、『白式』って言いまして、待機形態はガントレット………らしいんですけど………」

「どう見ても腕輪だな」

「やっぱり腕輪ですよね」

一夏は彼に右腕に装着されてある待機形態を見せる。表記ではガントレットと記されているのだが、誰が見てもそれは腕輪だった。何故これをガントレットと言い張るのが不思議でしようがない。

「お喋りは後にしろ。オルコットは既に展開を済ませてるぞ」

二人が白式を眺めている間に既にセシリアは自身の I S 『ブルー・ティアーズ』を展開していた。これ以上駄弁つていては授業に支障が出るので早々に切り上げる。

一夏は右腕を突き出し、腕輪を左手で掴む。隆道が休学している間に色々と試したのだが、このポーズが一番イメージ出来るのだ。

(一い、白式)

彼は心の中で呟くと身体は光の粒子に包まれ、純白の I S が現れる。

—— 第三代近接格闘型 I S 『白式』びやくしき ——。

それが一夏の専用機。肩部にある高出力ウイング・スラスターが特徴であり、これにより加速と最高速はトップクラスの性能を誇る。

隆道はそれをまじまじと見て、考えに耽る。

(この間のような感じはしない……………。なんだったんだよあれは)

以前ピットで見た初期設定状態の I S を見たときの恐怖感はない。一夏の I S は見たことなど無いのでやはり気のせいなのだろう。そう思うことにした。

「上出来だ織斑。だがいずれはポーズ無しで展開することだ。そうすれば展開まで一秒とかからなくなる。後は柳だけが……………。柳、決して無理を——」

「今やるから黙ってろ。……………はあ」

隆道は首輪に手をかけ、目を閉じる。余計な事は考えるな、I S を纏うことだけを考

えろと自分に何度も言い聞かせる。

そして――。

「……………灰鋼」

その言葉と同時に彼の身体は灰色の粒子に包まれ、黒灰色のISは現れた。

「！！！！……………っ！！！！」

—— 第二世代汎用防衛型IS 『灰鋼』はいがね ——。

彼女達はその禍々しい機体を目にして一気に表情が強張る。とうとう現れたと。

機体には真っ黒な血管の様な模様が装甲全体に行き渡っており、以前暴走に似た時とは違い赤く点滅はしてなく、所々に溝がある装甲そのものも鈍く発光せず光沢はない。

その機体に人一倍強く反応したのはセシリアだった。それも当然だ、隆道と機体の豹変を目の当たりにしたのは彼女なのだから。

彼女にとってそれは一種のトラウマとなってしまう、息も多少荒くなる。ISを纏っていないければより酷くなっていただろう。

——操縦者の各バイタルサイン正常。異常を確認出来ず——。

千冬は彼がISを展開してすぐタブレットを確認する。朝方は彼女一人しかいなかったが今は他の生徒——『女性』が多数いるのだ。もしかしたら起動してしまうかもしれないと不安が募ったが、それも杞憂に終わった。

「無事に展開出来たようだな。それでは二人とも、飛んでくれ。柳はそこで待機だ」

彼はセシリアとの試合以降一度もISを使っていない。システムが起動している時を除いて彼は一度も飛ばなかった事から飛行はまだ出来ないかと千冬は判断、故に一夏とセシリアにだけ飛行を指示した。

彼女の一言で真っ先に行動に移したのはセシリア。流星は代表候補生とあってか、一気に急上昇し遙か頭上で静止する。

一夏も少々遅れて後に続くが未だ慣れていないのだろう、その上昇速度は彼女よりかなり遅いものだった。しかし、初心者にしては上出来の範囲だろう。

何せ一昨日までは放課後で展開や歩行などの基本中の基本しか行っておらず、急上昇と急下降は昨日習ったばかりである。

飛行は『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行うのだが、彼にはまだ感覚が掴めないようだ。

「織斑、もっと強くイメージしろ。スペック上の出力では白式の方が上だ。今は構わな

いが、何れオルコットよりも素早く急上昇するように」
「わかりました」

既に二人は空高くいるため通信回線を使用し会話をする。隆道も回線を繋いでいるため彼の声ははつきりと聞こえていた。

「二夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「飛行はまだ二度目なんだから大目に見てくれよ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「……………また今度にしてくれ」
「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに頬笑むセシリア。その表情は嫌味や皮肉など一切ない、純粋に楽しいという笑顔だった。

隆道はハイパーセンサーによる補正でそのやり取りをしっかりと見えていた。その望遠鏡並みの視力により地上二百メートルから一夏の睫毛まで見えるのだ。

ちなみに、これでも機能制限がかかっている。元々は宇宙空間での稼働を想定したも

ので、何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためなのだからこの程度の距離は見えて当たり前なのである。

そういった知識はどうでもいいとして、彼は一夏とセシリアのやり取りに疑問を覚えていた。

(あいつら、あんな仲良かったっけか)

とは思いつつも、別に人の人間関係に口を出すつもりはない。自分は彼女と仲良くするつもりはないがそれはそれ、これはこれなのだ。彼に味方が増えたのならそれでいいかとすぐに気にしない事にした。

彼は知らない事だが、一夏は何度かセシリアにISのコーチをしてもらい、そういった内に他人行儀を無くす意味合いもあって互いに名前呼びになる程の仲になった。

流石に代表候補生の指導だけあって一夏は歩行は難なくこなせるようになり、最終的には全力疾走が出来るレベルにまで成長した。

ISは飛行が主な操縦だが、何事も段階が必要なのだ。歩行が完璧になっただけものすごい成長である。

余談だが彼女の指導は色々な意味でかなり難しく、一夏が理解するのに滅茶苦茶苦労したという小話がある。箒にも説明をしてもらったのだがこれも色々な意味で難しかった。というか意味不明で役に立たなかった。

隆道もいずれ二人の説明を聞くことになるだろう。彼が頭を抱える事になるのはまだ先の話。

「オルコット、急下降と完全停止をやつて見せろ。織斑は一定の速度で降下、完全停止だ。目標は地表から十センチとする」

「了解」

千冬の指示と同時にセシリアはすぐさま急下降、一夏はゆつくりではあるがそれに続いて降下する。

彼女は完全停止も当然のようにクリアし、彼は多少のズレはあつたが無事に地表に辿り着いた。

「上出来だオルコット、流星は代表候補生。織斑は今後も訓練に励め。何れオルコットのように出来る日が来る」

「はい！」

「良い返事だ、それでは武装を展開しろ。柳にも参加してもらおう」

「織斑、オルコット、柳の順番で行う。では始めろ」

言われて一夏は機体を展開したときと同じく突き出した右腕を左手で握り集中する。それを強く握り締め集中が限界に達したとき、手のひらから光が放出され形として成立

し、やがてそれは武器となる。

——近接ブレード『雪片式型』ゆきひらがた——。

(あれが織斑の武器か。変わった剣……………いや刀か?)

彼の武装は刀より反りのある太刀に近く、既存のブレードとは違い鍔には溝がある。恐らく何かしらのギミックがあるのだろう。

「一週間練習したようだがまだまだ遅い、コンマ五秒で出せるようになれ。次はオルコットだ、武装を展開しろ」

「はこ」

セシリアは真横に腕を突き出し、一夏とは違い光を放出することはなく一瞬でレーザーライフル『スターライトmkⅢ』が握られた。

その手際の良さに本来なら褒めるべきなのだが——。

「あわわわわ……………」

「うわっ馬鹿!セシリア、引っ込めろ引っ込めろ!」

「……………」

周囲は顔面を真っ青にし、非常に慌ただしい。いったいなにがと彼女は視線を自身の武装に向けると、その銃口の五センチ先には隆道の頭が——。

「……………」

「うひゃあ!!も、申し訳ありません申し訳ありません!!」

気づいた彼女は勢い良く武装を引つ込め、彼に何度も頭を下げる。それはもう命乞いのするかの如くに。

「……………なんとも思つてねえからそれをやめろ、鬱陶しい」

彼はそんな彼女を見て一言だけ。故意ではないことはわかりきつてるのでいちいち目くじらを立てる事もない。こんな些細な事など彼にとつてはどうでもいいのだ。

「はあ……………オルコット、そのポーズはやめろ。いったい誰を撃つ気だ、下手すれば大惨事だぞ。正面に展開出来るようにしろ」

「はいっ、申し訳ありません!必ず直します!」

本来なら何かしら言い訳をしようとしたのだろうが、これは彼女にはだいたいぶ効いたのだろう。自身のミスを直ぐに認めた。

「次から気をつけろ。次は近接武装だ」

「えっ。あ、はいっ。」

彼女は武装を直ぐに収納し、近接武装を展開しようとするが——光は形を成形させず空中を彷徨い、顔が強張つてしまう。

「くっ……………」

「まだか?」

武装名を呼ぶ方法を取っても何も言われる事はない。

「よし、収納していいぞ。次に近接武装だが——」

千冬は彼の機体に格納してある基本装備を展開させようと指示を出そうとした。しようとしたのだ。

しかし、彼女の指示を聞く前に武装は消え、彼の右腕に爆発的な速度であの武装が姿を現す。

「ひっ!?!」

生徒の誰かが思わず小さな悲鳴を上げる。彼がコンマ五秒以下で展開したのは一組の生徒に、特にセシリアとつて恐ろしい印象を与えたあまりにも暴力的な武装である『鋼牙』。

二度目の御披露目であるが、それは他者を嫌でも圧倒させる巨大な二本の杭。通称『盾殺し』。
シールド・ヒール

この武装は『相手のシールド、装甲を確実に一撃で破壊する』というコンセプトで開発された。その威力は以前セシリアが弾丸の如く吹き飛ばされたことからわかるだろう。

しかしその威力の対価としてパワーアシストでも制御が非常に難しく、空中で使うものなら高度な操縦技術がいる代物であり、隆道が空中で使いこなすにはかなりの訓練が

必要だ。では何故このような物があるのか。それは政府の一部による悪意の思想が原因だった。

使いこなせると思ってたが、ダメ元でこれを使って女性を潰してくれと願ったのだ。悲しくもその思惑は一度叶った。

彼等は今後も隆道に鋼牙を使わせるつもりだ。既に彼は政府の一部に踊らされていた。

「うっ……………」

鋼牙を見てセシリアは顔を青くする。彼女はアレの威力を身を持って知っている。叶うならば今後は絶対に喰らいたくはない。

「……………柳、人の話は最後まで聞け。そしてそれは収納しろ」

「……………」

彼にしては珍しく直ぐに従い鋼牙を収納する。それと同時に全員が安堵し、胸を撫で下ろした。

「さて。専用機持ちの御披露目も済んだところで諸君にもI Sに乗ってもらおう。専用機持ちは訓練機を運ぶため山田先生に付いて行ってくれ、それまでに私が諸君に今回の基本操縦について説明をする」

顔を赤くしたり青くしたり、焦ったり安心したりと忙しかった生徒達だがメインであ

るIS操縦はまだ始まってすらいらない。既に彼女達には謎の疲労感が出ているが、本番は此処からなのだ。気持ちを切り替えて授業に取り組むべく一人一人が気合いを入れ直す。

「えと、はい。それではオルコツトさん、織斑くん、柳くん。訓練機を取りに行くので付いてきて下さいね」

「行きましょう柳さん。……さつきはひやひやしましたよほんと」

「あ？お前らが勝手に怖がってるだけだろ。俺には関係ない」

「まあ、そうなんですけど……」

「んなこと今はどうだっていいだろ。それよりもあの牛眼鏡と馬鹿はもう行っちゃまったぞ」

今まで真耶を見向きもしなかった彼が放った彼女の初めて呼び名はまさかの『牛眼鏡』という酷過ぎるものだった。

確かに彼女は学園の中ではぶつちぎりの巨乳であり眼鏡もかけている。しかし幾らなんでも牛眼鏡は無いだろう。彼女が聞いたら泣く、絶対に大泣きする。

「う、牛眼鏡で……」

「あんな脂肪の塊ぶら下げてんだ、牛眼鏡で十分だろ。ほら、早く行くぞ」

「あつ、待って下さいよー！」

隆道は顔を引きつらせた一夏を置いて颯爽と歩き、それに遅れて彼も後を追う。

彼の歩く姿は二度目とは思えないほど自然な動きだった。

その後は千冬の厳しい指導によつて生徒達はみっちりと操縦訓練に励んだが、始まる前から疲労したこともあつて専用機持ちを除いた生徒は全員筋肉痛になつたとのこと。

隆道はそんな彼女達を見て貧弱すぎるだろと思つたそう。

第十四話

本日の全授業を終えて放課後。専用機持ちを除いた一組の生徒が筋肉痛によつて撃沈している頃、隆道と一夏の二人はアリーナの隅っこにいた。ちなみに箒は日頃剣道をやっていたりと身体を常に動かしていたのでそこまでのダメージは無かった。現在は観客席で彼らを見守っている。

何故彼等が隅っこにいるかというと、理由は他の生徒——主に上級生が訓練に勤んでいる為である。男性操縦者が二人もいるという事に周囲は注目しまくつて訓練に集中出来ない事は一夏には知るよしもない。

隆道は多数の視線——「興味」と「敵意」に気づいてるが、気にしても無駄なので無視していた。流石にこんな大つぴらの所でちよつかいはかけてこないだろうと。

そんな視線を余所に彼等は互いにISを纏っており、これから訓練に励む——と思いきやそんなことそつちのけで互いの機体について語っていた。

「はあ？ 武装は刀一本のみ？」

「そうなんですよ、後付武装が一切無いんです。それに拡張領域パススロットが空いてないんでナイフ一本すら量子変換出来ないんですよ」

「何でだよ。たかが刀一本に全部容量食ってるってのか？」

拡張領域とは後付武装を格納するための領域であり、IS用の武装を量子変換することによって自由に取り出すことが出来る。

セシリアの第三世代IS『ブルー・ティアーズ』ですら拡張領域の空きはあるのだから本来ならば空きはあるはず。しかし一夏の機体『白式』は今までの第三世代とは違い過ぎた。

「武器がというより、恐らく単一仕様能力の方に容量を使ってるからかと」

「ワン……………なんだって？」

「ワンオフ・アビリティーです。唯一仕様の特異能力なんですって」

「そんなもん積んでるのかその機体は。……………あ？ちよつと待て、単一仕様能力って確か……………」

ふとその単語に見覚えがあるのを思い出したのか、隆道は予め持ってきた教科書を開く。今まで授業をまともに受けなかったり怪我などの関係で教科書など全く開いてなかったが今日から多少は授業を受ける事になっている。彼を支えると決めたのだ、いつまでも自分だけ何もしないわけにはいかない。

とはいっても、マシになったのはISに関する座学だけであり、普通授業は依然として放棄。座学も話を聞いたり教科書を見ているだけで、教員の事は変わらずガン無視で

ある。

やっと授業に取り組んでくれると真耶は歓喜したが名指ししても無視されたので涙を流したのは言うまでもない。

「単一仕様能力……各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力。ISが第二次移行セカンドシフトした後の第二形態セカンドフォームから稀に発現する、か。『白式』の特殊兵装が第一形態にも関わらず使える単一仕様能力……てどこか？」

「俺もよくわからないんですけど、多分そうなんだと思いますよ」

「ますますよくわからねえ機体だな。んで、その単一仕様能力はどんなやつなんだ？」
『零落白夜』れいらくびやくや って言いまして、これですね」

彼は既に展開させていた雪片式型を垂直に掲げると刀身が割れ、そこから青白いエネルギー状の刃が現れた。

「……………ライトセイ——」

「ストツプ柳さん。俺も思い浮かべたんですからやめにしましょう」

「ああ、悪い。んで、どんな効果あるんだこれ。まさか切れ味が上がるとかそんな単純なやつじゃねえだろうな」

「切れ味が上がるなんてもんじゃないですよ。能力は『バリアー無効化攻撃』でして、対象のエネルギー全てを消滅させるんです。エネルギー兵器の無効化——例えばセシ

リアのレーザーを打ち消したり相手のシールドバリアを無視して本体に直接攻撃、その結果絶対防御を発動させるといったものだそうです」

単なる切れ味の向上だろうと考えていたが、彼から出た答えは隆道の予想を遥かに上回るものだった。

ISに欠かせないエネルギーを全て無視した攻撃。つまり当たれば大幅に、場所が悪ければ一撃で相手を倒せるということ。

「なんだそれ……。つか全エネルギー消滅すんなら絶対防御も貫通するんじゃないやねえの」

「流石にそれは危な過ぎるんで普段は競技用に制限掛かってるんです。直撃したとしても傷は付かないって千冬姉が言っていましたし」

「ほー。……。それほど攻撃特化してんだ、何かしらのデメリットはあるんだろ」

大きなメリットには必ずそれ相応のデメリットが存在する。隆道の『鋼牙』が良い例だ。セシリアの機体のように第三世代に備わる特殊兵装のお陰でエネルギー効率が悪いななども揚げられる。

「そのデメリットがデカ過ぎなんですよね……。何せ発動中は自分のエネルギーをおもいつきり消費してるんですから」

「は？つまり機体のエネルギーを攻撃に振ってんのか？玄人向け過ぎるだろ、素人が

使っていい物じゃねえぞ。…………織斑、今エネルギー残量はどれくらいだ」
「へ？…………おつと危ない危ない」

隆道に言われてエネルギーがガリガリ減っている事に気づき、彼は直ぐに単一仕様能力を消す。気づかずに発動したままであったなら機体も強制解除されていただろう。

「高機動で機体そのものも燃費が悪いだけでなく、武装も燃費が悪い。それはここぞというときに使った方がいいな、なりふり構わず使ったら直ぐ御陀仏だぞ」

「試合に集中してるとついエネルギー管理忘れてしまいそうですね、まだやったことないですけど」

「他のクラスだってそうだろう。まだ専用機を持つてる分アドバンテージも、練習量も此方にあるんだ。クラス代表戦まで期間はあるんだからそれまでにしつかりやれよ、クラス代表さんよ」

「俺がやると決めたんです、もちろんそのつもりですよ。俺の『白式』のことはこれくらいにして、柳さんの『灰鋼』……………でしたっけ。色々教えて下さいよ」

『白式』の特徴は互いにおおよそ理解した、後は『灰鋼』である。彼はどちらかというところ隆道の方が気になって仕方がないのだ。

元は量産型だが一次移行により仕様もかなり変わってるはず。それに武装も二つほどしか見えない。結構な数があると聞いているのでぜひ見てみたいと彼は期待してい

る。

彼も男の子なのだ。そういった物に興味を持つことはなんら不思議ではなかった。

「あんま面白いもんじゃねえぞ。あの意味不明なシステム——『狂犬』つったつけな。それを除けば性能は量産型の『打鉄』と変わんねえとき。……………そういえばもう一つあつたな」

「アレ、『狂犬』つて言うんですか……………なんとまあ、的確と言いますか……………。それにもう一つとは？」

「二次移行したとき、『狂犬』と一緒に発現したらしいんだが、これが文字化けしてて詳細か起動条件もわからねえ。調べても何にもわからなかつたんだと」

「なんだが、物凄く恐ろしいですね……………なんで政府はこの機体を使わせるんですよか」

どう考えてもおかしい。普通こんな危険過ぎる機体を、ましてや数少ない男性操縦者に使わせるなどあり得ない。

嫌な予感がする、彼はそう思わずにはいられなかった。

「んなこと知るかよ、お偉いさんの考えてる事なんて俺らガキにはわかりやしねえんだから。大方珍しい反応だの、機体に余裕が無いだのそんなんじゃねえの？」

「うーん、それだけじゃないような気がしますが……………」

「考えたってしようがねえだろ、どうにもならねんだからよ。んなことよりほら、武装も見るんだろ?」

確かに隆道の言う通り考えた所でどうにかなるわけではない。そもそも政府からの指示はデータ採取の一点のみであり、それ以外は何も言われていない。

偶然にも一夏の予感の通り、『灰鋼』を使わせる理由はそれだけでなく悪意が練り込まれたものだがそれを知る術は無い。彼はひとまずこのモヤモヤは胸の奥にしまうことにした。

それよりも隆道の武装を見る事を優先だ。機体もそうだったが、武装も気になって仕方がないのだ。その心はプレゼントの中身を早く見たい子供と一緒にであった。

しかしその感情を表に出すわけにはいかない。故に彼なりの全力ポーカーフェイスで言葉を返す。

「そういうえばそうでしたね。結構な数があるって言うてましたけど何があるんですか?」

(すっげえ楽しみつつ顔してんぞおい)

隆道にはバレバレだった。

「……………基本装備を含めて近接、射撃武装合わせて十種類だな。んじゃまあ手始めに基本装備から出していくか」

バレバレなポーカーフェイスには触れないことにして、隆道は基本装備である近接武装と射撃武装を各一つ出していく。射撃武装の方はセシリアと試合した時と授業中に見せた自動小銃『焰備』。そして近接武装は日本の武者鎧をモチーフとした打鉄に相応しい、日本刀を彷彿とさせる剣。

——近接ブレード『葵』——。

「やっぱりそれは入ってたんですね」

「元は打鉄だしな。つっても刀の振り方なんて知らねえぞ。せいぜい木刀かバットぐらいだ」

「……………柳さん、ちよつと思いついたことがあるんで、それ貸してもらえますか?」

一夏は何かを思いついたらしく、隆道の持つ『葵』を借りたいとお願いする。その表情は真剣そのものであり、それに対し不思議に思いつつも彼は渡す事にした。

しかし量子変換した後付武装は所有者以外使うことは出来ない。そのまま渡してしまふと粒子となつて消滅してしまうからだ。他人に使わせるためには対象の機体を登録する必要がある。

「……………ちよつと待つてろ、使用許諾アンロックするから。つか銃火器とかの兵器ならまだしも、

なんでこんな仕掛けも無い近接武器ですら使用許諾しなきゃいけないんだよ」

「試合中に武器を奪われるのを防ぐためじゃないですかね。俺もよくわからないですけ

ど」

「考えれば考えるほど I S するのはわかんねえな、理解なんてしたくもねえけどよ。あ
あもうめんどくせ、武装全部使用許諾してやる」

「え、いいんですかそんなことして」

「別に構わないだろ。装備を貸すなんて言われてねえし、織斑にだけ登録しとけば問題なんて無いしな。貸すなど言わない奴が悪い。……こんなもんか、ほらよ」

使用許諾を済ませ、『葵』を一夏に渡す。それを手に取った彼は突如ニヤリと笑みを浮かべた。

その『葵』を左手に持ち、空いた右手に武装を展開、『雪片式型』を持つ。両腕を広げ、その両手に持つ二種の刀を垂直に構えると彼の表情は更に変わった。

それはまるで相手に勝ち誇った表情、誰がどう見てもドヤ顔だった。

「……………ドヤ顔ダブルソードって言いたいのか」

「へへっ似合ってます?」

「下らねえことしてんじゃねえよ。……………結構面白いじゃねえか」

どうやら隆道は気に入ったらしい。不思議と表情が多少和らいでいた。

彼は I S 学園に来てからほとんど気を張りっぱなしだ。少しでもそれをほぐせないかと一か八か試してみたのだ。結果は成功だ、この調子で行けばきつと良い方向に向か

うはず。そう確信した一夏だった。

「よし、満足しました。もう大丈夫です、ありがとうございました。早速次行きましようよ」

「(もう隠す気無いだろこいつ) ったく……………んじや次はコイツだ」

『焰備』と『葵』を収納し、次に現れたのは、あの暴力的な武装『鋼牙』。身構えずに前のめりでいたため、一夏は思わず驚き後退りしてしまった。

「うおわあっ!?!ちよつと柳さん、それ出すなら言つて下さいよ!」

「うるせえな、いくらなんでもビビり過ぎだろ」

「いや、その、なんといいいますか。……………。結局それって何なんです……………?使ったときはセシリアだけじゃなく柳さんも吹き飛びましたし」

「相手のシールドと装甲を一撃で破壊する為に開発されたんだとき。反動が凄まじいからしつかり構えてても抑えきれないらしいし、弾倉が二つ付いてるが二発同時発射だから実質そんな撃てねえしよ。せいぜい三発、予め薬室に装填しても四発だな」

連射も出来ない、弾数も圧倒的に少ない、そして強すぎる反動、それらの代わりに得た強大な威力。それを聞いて一夏は戦慄を覚えた。

どう考えたって使いこなせない。まだエネルギー管理と剣術の心得があれば何とかなりそんな自分の機体や武装の方が遥かにマシだ。

「ええ……癖が強いなんてもんじゃないですよそれ……。なんか俺の『白式』や『零落白夜』なんか可愛く見えてきましたよ」

「確かにな。こんなのどう使いこなせつつうんだ。……ちよつと試してみるか」

「え!?今使うんですか!？」

「しつかり構えて踏ん張つてれば吹っ飛ばねえだろうし、物は試しだ」

困惑する一夏を尻目に隆道は腕を囲うようにある『鋼牙』のレバーを引くと重厚で鈍い金属音が鳴り響く。ただ装填しただけであるが、それだけで初見でも威力が想像出来てしまう位だ。

「そんじゃまあ……とりあえず一発っ!!!」

彼は殴るように腕を突き出した瞬間、まるで大砲のような爆破音と共に彼は後ろに吹き飛ばされ、その場には二つの巨大な空薬莖だけが残る。

「ぐおあっ!？」

「柳さんっ!？」

彼は勢いよく吹き飛ばされるが、地に足をつけ踏ん張っていたおかげか五メートルほどでようやくそれは止まる。彼が元いた場所から今いる場所の間には足で削ったであろう二本の溝が出来上がっていた。

「かあ~~~~きつつ……。なんだよ、踏ん張つてもこれなのか」

「大丈夫ですか柳さんっ！」

「ああ、なんとか。……………ほんとなんなんだよコイツは。考えた奴頭おかしいんじゃないのか」

「地上ですらあれだけの吹き飛び様ですし、もしこの間のように空中で使ったら……………」
「間違いないどつかに叩きつけられるな」

地上ですらこれほどの反動なのだ。空中で使うものなら以前の二の舞になる事は確実。ISを用いた試合は主に空中戦だ。使う度に吹き飛び様ではまるで役に立たない。

実は『鋼牙』を扱う際、ある事をすれば反動を抑制する事が出来、空中でも吹き飛び事は無いのだが今の彼はその事を知らない。

「……………ああくそつたれ、次だ次。もつとまともなやつ……………を……………」

「……………柳さん？」

「……………」

『鋼牙』を収納し次の武装を模索していた彼は突如沈黙する。何かあったのだろうか、彼をよく見ると苦虫を噛み潰したような表情である。

「ど、どうしたんですか？」

「……………『竜殺』」

一夏は心配になりおそるおそる声を掛けると彼はそう一言呟く。すると今度は彼の

右手に巨大な剣が展開される。その剣は一夏にも既視感があった。

「……………大剣、ですね」

「……………大剣だな」

それは剣というにはあまりにも大きすぎた。

大きく ぶ厚く

重く そして

大雑把すぎた。

それは 正に

鉄塊だった。

「……………いや、これもう、どう見てもアレですよ。ベル——」

「やめだやめだ、これは絶対使わねえ。なんでこんなの入ってたんだよ」

拡張領域を見た時からからずつと自己主張が激しいソレを見て見ぬふりをしていたが、展開してようやく確信する。

これはダメだ、使ったらいけない気がする。千冬に報告して別の物に取り替えて貰うか返品する事にしよう。そう思い直ぐ様収納して、この先不安を感じた彼はとうとう溜め息を吐いてしまった。

「……………気を取り直して次行きましょう」

「……………そうだな。アレは存在しなかった、いいな?」
彼の武装は残り六種類。御披露目会はまだまだ続く。

しばらくして日も暮れる時間。武装御披露目会が終わった頃には隆道と一夏は訓練をしていないにも関わらず疲労感だけが残っていた。

「これで……………全部、ですね……………」
「ああ……………ようやく、な……………」

拡張領域に積んである十種類の武装は全て出し切った。幾つかは一夏にも貸して試射させてみたりと時間を忘れてしまう程に夢中になったり。

怖いもの見たさで『鋼牙』も使ってみたいと借りた彼が、案の定吹き飛ばされた光景を見て隆道が笑い転げたのは良い思い出。

「種類は結構豊富でしたね。超長距離狙撃砲『撃鉄』に自動散弾銃『轟鉄』、多銃身回転式機関砲『豪雨』と擲弾発射器『破碎』。個人的には『撃鉄』と『豪雨』が好みですね。残り二つは……………その……………」

「みなまで言うなよ。つたく……………大型チェインソーに加え巨大ペンチってなんなんだよ、全く用途がわかんねえぞあんなもん。アレも絶対使わねえわ、使ってたまるか」

銃火器は近距離から遠距離用まで豊富であり、どの状況にも応じる事が可能な点に関しては別に問題はない。だが近接武装に関しては問題だらけで文句しか出ない。

基本装備の『葵』に色々な意味でぶっ飛んでいる『鋼牙』、某狂戦士が振り回す『竜殺』。そして残りの二つは『竜殺』と大きさの変わらない大剣型チエーンソー『大百足』おおむかでにアホみたいに巨大なペンチ『鉄血』。もはや意味がわからなかった。

「おかしいだろ、なんで近接武装だけこんなゲテモノ揃いなんだよ。基本装備の『葵』しかまともなのねえじゃねえか。『鋼牙』は百歩譲って良いぞ？他はどう考えてもいろんな意味でダメだわ」

「『鋼牙』もアレでしたけど、まさかそれを上回るとは思いませんでしたね……………」

「……………もう帰ろうぜ。変に疲れちゃったよ」

「そうですね……………」

既に時刻は夕食時間に近い。良い感じに腹も減っているため二人は手際よく空薬莖等を片付けて帰るが、一夏は何かを思い出したのかピットに戻りながら話を持ちかける。

「そういえば柳さん。夕食後って時間ありますか？」

「あ？いつも部屋に来るじゃねえか。今更言うことでもないだろ」

「いえ、そうじゃなくてですね——」

「ふうん、ここにそうなんだ」

隆道と一夏が訓練（武装御披露目会）を終えて、ほぼ全ての生徒が夕食を取ろうとする頃。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなポストンバッグを持ったツインテール少女がいた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

彼女は上着のポケットからくしゃくしゃになった一切れの紙を取り出し確認する。それは校舎の案内用紙の一部で、結構雑に扱ってるが気にしない。彼女は大雑把な性格なのだ。

——本校舎一階総合事務受付——。

地図は無く、書かれているのはこれだけ。紙の内容も雑だった。

「……………って、だからそれどこにあんのよ。……………ああもう、自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

文句を言っても誰も聞いてるはずはない。多少の苛立ちを募らせながら紙をポケット

トにねじ込み足を動かす。

彼女は思考するよりも行動をする活発な少女だ。良く言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えない』。もつと悪く言えば『思考停止』である。一部の人間だったら『脳筋』や『アヘアへ思考停止ガール』、更に容姿を見れば悪意盛り沢山な本人ブチギレ待った無しのあだ名を付けたであろう。

(つたく、出迎えが無いとは聞いてたけど、ちよつと不親切過ぎるんじゃない？政府の連中にしたつて、異国に十五歳を放り込むとか、なんか思うところ無いわけ？)

と彼女は自身の出身国——中国の政府に文句を垂らしているが日本に来たのは別に初めてではなく、むしろ第二の故郷でもある。

(誰かいないかな。案内出来そうな人)

学園内を歩きながら人を探しているが、時刻は八時を過ぎている。当然どの校舎も灯りは落ちており、ほとんどの生徒は寮にいる時間だ。

(あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかなー)

彼女はセシリアと同じく代表候補生であり、専用機も所有している。ISを使って飛ぼうというふざけた発想が出てくるが学園内重要規約書を即座に思い出し踏み留まる。やはり脳筋であつた。

『転入の手続きを済ませて無いにも関わらずISを起動させたら、最悪外交問題に発展

するからそれだけは本当にやめてくれ』

(ふっふーん。まあねー、あたしは重要人物だもんねー。自重しないとねー)

ふと、日本に向かう前に何回も懇願していた政府高官の情けない表情を思い出す。大人の大人がへこへこ頭を下げるのは気分がいい。多少機嫌が良くなった彼女は先程よりも足が軽くなっていた。

彼女は忘れていいのか知らないかは定かではないが、そもそも枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によって罰せられる。

独断でISを使ってしまえば政府は勿論困る処ではないが、何より一番困るのは彼女だ。一生を棒に振る羽目になってしまうのだから。

自重などとんでもない、そのような事は決して許されないと、許してはならない。

やはり彼女は脳筋処か思考停止なのかも知れない。

彼女は『歳をとってただで偉そうにしている大人』が嫌いであり、かつて子供の頃は『男というだけで偉そうにしている子供』が大嫌いであった。故に今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は兇戯、女のISこそ正義。彼女は決して女尊男卑思考では無いのだが、色々と優遇された結果少なからず男を下に見ている。——一部を除いて。

(元氣かな、アイツ)

思い出すは一人の男子。彼女にとつて、今回日本に帰つてくる最大の理由だ。

彼だけは他の男とは違った。男だからと偉そうにせず、むしろ対等に接して来た。

(まあ、元氣なんだろうけど)

いずれここにいれば会える。早く会いたいと思つていた彼女であつたが、ふとある事を思い出した。

(そういえば、男性操縦者は二人いるのよね。一人目はアイツ、二人目は……)

一人目は知つている。というより、彼女が日本にやってきた最大の理由である男子は奇しくもその一人目である。しかし二人目は知らない、三つ歳上としか聞かされていなのだ。つまり全生徒の中で一番の歳上ということになる。

(どんな奴なんだろう、どうせ歳上だからって偉そうにしてんでしようね)

その時はあたしが思い知らせてやる。男だから、歳上だからといって偉そうにする奴は許さないと、彼女は意気込んだ。

その考えは直ぐに崩壊する処では済まなくなる。

「ですので………という訳で………」

ふと、声が聞こえた。その方向に視線を向けると、生徒であろう女子が出てくる。何

やら他の人と話をしてしている模様。

(丁度良いや、場所聞こつと)

受付の場所を聞くか、良かったら案内して貰おう。声を掛けようとして、彼女は小走りで向かうが――。

「なので箒の言うように、柳さんは部屋で待つて下さい。あ、リクエストあります?」「とりあえず、やるつつうのものもその理由もわかった。つか毎度言ってるけどよ、まだ缶詰残ってるんだから無理に持つて来る事もねえつて。……何でも構わねえが、強いて言うなら和食だな」

その二人の男子の片方の声が耳に入り、不意を突かれたのかその足は止まる。その声は知っている。恐らく、いや間違いなく彼だと彼女の鼓動が高鳴る。

(あたしつてわかるかな。わかるよね。一年ちよつと会わなかっただけだし)

自分に言い聞かせつつ、わからなかったら自分が美人になったからだと謎の超ポジティブ思考に切り替えて彼女は歩みを再開する。

既に彼女の目には彼しか映っていない。

「いち――」

思わぬ再会だったがそんなことどうだっていい。胸の高鳴りが最大になった彼女は彼――一夏に声を掛けようとした。しかしそれは女子の声で中断され、視界は元に戻

る。

「じゃあ今度はホツケ定食にしますね。ところで一夏、蒸し返すようだが先程の吹っ飛び様は中々であつたぞ」

「あのなあ、あんなの絶対抑え切れねえつて。箒もやってみろよ、同じ事が起きるからや」

(……………誰？あの女の子なんで親しそうなの？つていうかなんで名前でも呼んでんの？)

先程の胸の高鳴りは何処へやら、酷く冷たい感情と苛立ちが彼女を満たしていく。所謂嫉妬というものだった。

(それに……………アイツが例の……………?)

嫉妬と同時に冷静になつたのか、視界が戻つた彼女は女子と男子二人の後ろを付いていつてる男子に目をやる。

(うわっ、一夏よりデカイ……………)

一夏より背が高い彼が二人目なのだろう。しかしここからでは表情は見えない。いったいどんな奴なのかと彼女はおそろおそろ近づく。

そう、彼に近づいてしまった。

「っ?!?!?」

彼女は勘が鋭い。中国に帰国し、I Sを学んでたった一年で代表候補生に上り詰めたのは持ち前の勘という要因もある。その勘によつて隆道の奥底に眠る危険性をいち早く察してしまった。

今のところ彼は負の感情など出ていない。しかし、それは蓋をしているからであつて決して消えた訳ではない。

以前、一組の生徒達に見せた『どす黒い何か』。

ソレが溢れていないにも関わらず、勘が鋭い彼女にはハッキリと見えてしまった。ハッキリと見えるソレはやがて形となり、やがてある存在へと姿を現す。

その強靱な灰色の身体は所々が傷だらけで赤く血に染まり

その歪んだ口元からは鋭利な牙を剥き出しにし

その鋭い眼は憎悪と殺意に満ちている。

その様は菌向かう敵を必ず殺すかのような姿。

ソレは巨大な犬だった。血塗れで、あらゆるものを憎み過ぎて狂いに狂った狂犬。ソレは鮮血を垂らしながら、ゆっくりと此方の方を向き――。

「?!?!?!」

――目が合う前に彼女は逃げ出した。

「……………柳さん?どうしたんです?」

「……………いや、さつきからこつちを見てる奴がいてな。振り向いたら逃げやがった」

「私達を……………ですか?それに逃げたって……………」

「さあな。疚しい事があるから逃げたんだろ」

気づいたら彼女は総合事務受付に辿り着いていた。

先程目の当たりにしたものだ。アレが何だったのかはわからない。しかし自身の勘が告げていた。

関わるべきではない。彼の事は忘れる事にしよう、でないとおかしくなってしまう。

そんなことより一夏の方だ。なぜ知らない女子と親しげなのだと不機嫌になる。胸が高鳴ったり恐怖したり不機嫌になったりと忙しい彼女である。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそファン・リンイン 鈴音さん」

愛想の良い事務員の言葉は彼女——鈴音の意識に届かない。既に二人目を感じた恐怖感は無くなり、一人目の事しか考えていない。彼女は不機嫌全開だった。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。風さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

一夏がクラス代表に決まったのは今日のSHRだが噂好きは女性の性、既に学園全体に広まっている。

その体現のような事務員を冷めた目で見ながら彼女は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

彼女の様子が少しおかしいと感じたのか、事務員は少々戸惑いながらも聞き返す。

「お願いしようかと思ひまして。代表、あたしに譲ってって——」

時間は進み、現在は夕食後の自由時間で寮の食堂にて一組の生徒達はある小さなイベントを開催していた。

「とういわけです！織斑くんクラス代表おめでどう！」

「おめでと〜！」

クラッカーが乱射され一夏の頭に乱雑に乗る紙テープ。生徒達は飲み物を手にそれはもうお祭りの様に盛り上がっている。

彼はちらりと壁を見ると、そこにはデカイ紙が掛けており、これまたデカデカと文字が書かれている。

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』

確かにクラス代表は一夏に決まった。しかし、それもセシリアが辞退したからであり、その全貌もクラス代表を決める際のいざこざから始まった様々な要因によつて起きた隆道とセシリアの事件とも言える試合の結果。本来はこのように明るいイベントなど出来るはずがない。

では何故このような事をしているのか。それは周囲を欺く為、所謂カモフラージュだった。

クラス代表を決めるために一夏とセシリアが試合をし、そこに隆道は一切関与していない。それが一組以外の生徒が認識している内容だ。

辻褄を合わせる必要があったのだ。注目の的である一夏がクラス代表になったというのに、イベント一つもなければ周囲は疑問に思ってしまう。一度疑われたら止まらず、いずれ真相に辿り着く。そうなつてはまずい。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

相づちを打つ女子は二組の生徒。現にこのパーティーには一組以外の生徒も混じっており、一組の集まりにも関わらずクラスの人数以上に増えている。一組の生徒達は騙す事に悪いと思いつつも疑われないように、まるで一夏が活躍したかのように演技をするしかなかった。

彼女達は授業によって今も筋肉痛であるが、それを表情に出さずにする演技は見事である。彼女達はISより演劇で活躍出来るのかもしれない。

「む、胸がいてえ……………」

「一夏、お前がメインなんだぞ。その本人がそんな顔をするな、疑われたらどうする」「わ、わりい」

箒のお叱りを受けて一夏は気持ちを切り替える。正直言うと、彼はパーティーには乗り気ではない。戦ってもいけないのにクラス代表になったのだから後ろめたさが半端ではないのだ。

それでもやらなければならない。いくら箒口令があれど女性の情報網は凄まじい、ちよつとしたことで何処かで崩れてしまう。それだけは避けたかった。

ちなみに隆道も参加しており、今は隅の方で彼等を見守っていた。これも辻褄を合わせる為であり、本人も納得している。

今までは昼は購買で済ませ、夜は買溜めした缶詰等を。怪我をしてからは一夏達が食事を持ってきたので、彼にとつて今回が初めての食堂。周囲を見渡して、当然行つたこととは無いがキャバクラみたいだなと思つたそう。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

そんな偏見を持つ彼を余所に、一夏の前に現れたのはボイスレコーダーを片手に持つ一人の少女。

「あ、私は二年の薫まゆみ 薫子かおるこ。よろしくね。新聞部副部長やつてます。はいこれ名刺」名刺を渡され、彼は表情こそ出さないが戦慄した。いきなり強敵が現れたと。

「ではではずばり織斑君・クラス代表になつた感想を、どうぞ〜！」

ボイスレコーダーを彼に向け、彼女は無邪気な子供のように瞳を輝かせる。悪意など一切無いので余計タチが悪い。

まずい。これは非常にまずい。下手な事など絶対言えないと彼は冷や汗を流す。周囲の生徒——特に一組の女子達は彼に注目し、じつと凝視していた。

——下手な事は言わないでね、と。

一組が団結してこのようなパーティー（カモフラージュ）をしてくれたのだ。やるしかないと彼は決意する。

とは言うものの言葉など用意してないので、当たり障りのない無難な言葉を言うことにした。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメント頂戴よく。俺に触るとヤケドするぜ、とか!」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的!」

なにやら言われ放題でむつとしたが、彼は表情に出さない。インタビュウを受ける有名人の気持ちが少ない気がする。なるほど、これは鬱陶しいと。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

彼女はマスコミではなくマスゴミの方だったようだ。勘弁してほしいと彼は言いそうになるが、それをぐつと堪える。この手の人間は此方の粗探しが得意だからだ。

「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そう言いつつ満更でもない口調のセシリア。勿論これも演技である。代表候補生だけあってこの手の人間に慣れており、恐らく来ると予想していたのだ。既に言葉も予め用意してある。対策は万全であった。

「コホン、ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を——」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけ頂戴」

「さ、最後まで聞きなさい！」

対策が無駄になった瞬間である。流石にこれについて彼女は泣いていい。

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからって事にしよう」

「えっ……………」

彼女は顔に出てしまうほど困惑した。それを見た一夏は、彼女の当然の反応に何故か悲しい気持ちになったという。

「んじゃあ最後は〜」

困惑するセシリアと悲しげな一夏を置いて薫子はある人物の元へ向かう。

((?!))

彼女は食堂の隅にいる隆道にもインタビュをしようとしていた。

彼の事は既に聞いている。しかし、ジャーナリストを目指している彼女にとっては二人目も一大スクープの一つ。逃す訳がない。

そんな命知らずな彼女は彼にボイスレコーダーを向けてインタビュを始める。

「ではでは柳さん！色々聞きたい事があるんですがまずは一つ！クラス代表になった織斑君に対して一言を！」

「……………」

「あ、あれ………う？柳さん？おーい」

彼は彼女と目を合わせているが、その目は氷の様に冷たく、一言も発せず黙ったまま。彼女は微動だにしない彼に困惑するが、その時だった。

食堂に一定の間隔で鳴り響く電子音。それはタイマーのような無機質な音だった。

この音はなんだと周囲はざわめくが、その正体にいち早く気づいたのは一組の生徒、その次に薫子。

「あれ、柳さん？なんか首輪が赤く点滅してますけど——」

「「「うわあああああつ!?!」」」

そこからの一組生徒達の行動は速かった。命知らずな彼女を取り囲み強引に隆道の元から引き剥がす。

「柳さんっ！ほんとに、ほんつとうにごめんなさい!!」

「この人の事は気にしないでください!!後で織斑先生に制裁を受けて貰いますので!!」

「え、ちよ、待つて待つて!?!まだ彼にインタビューを——」

「貴女、いったい何を考えてるんですの!?!先生方から何も聞いてないのですかっ!?!」

周囲はぎゃあぎゃああと騒ぎ始め、煩いと思いつつも彼はそれを眺める。いつの間に

か彼の首輪から電子音は消え、点滅も無くなっていた。

「何があった?! 大丈夫か柳っ?!」

その騒ぎの中突如現れたのは、タブレットを片手に息を上げる世界最強——千冬である。タブレットに送信された彼のバイタルサインを見て速攻で走ってきたのだろう。

「先生! この人が柳さんにちよっかいを!」

「え、ちが、インタビュ——」

「ま〜ゆ〜ず〜み〜!! ちよつと此方に来い!!」

彼女は人から一変、修羅と変化し薫子の襟を掴み連行する。その迅速な流れを見て周囲は開いた口が塞がらない。一組一同は連行された彼女に同情すらしなかった。

「あ、危なかった……………」

「全く……………大丈夫ですか柳さん。すみません、私と一夏がいながら……………」

「……………俺は大丈夫だけどよ、ちと過保護過ぎじゃねえのか」

「いや、流石にこうなりますって……………」

首輪の仕掛けについては一組は千冬から予め聞いていた。待機形態の状態で警告が発しても I S が勝手に展開しシステムが起動することは無いのでそれについては安心だが、PTSDが発症してる事実が変わらない。これ以上彼の症状を重くする訳にはいかないのだ。

「まあ、いいや。ほら、周りの連中困惑してるじゃねえか、どうすんだこれ」
「な、なんとかしてみます……………」

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は多少のトラブルはあれど無事に十時過ぎまで続いた。

隆道は一夏達と別れ自分の部屋に入ろうとすると、扉の隙間に何か挟まってる事に気づく。

「……………」

それは二枚に折られた紙だった。しかし彼は全く身に覚えがない。部屋に入り椅子に凭れかかりながらそれを開く。

その紙は新聞を切り抜いた怪文書。脅迫文かと思った彼だったが、それを読んで――

「

——彼は目を見開き、固まった。

その怪文書にはこう記されている。

『篠』『原』『日』『葵』『に』『気』『を』『つ』『け』『ろ』

覚醒する犬と鋼

第十五話

『ねえにーに。にーにもおかーさんのとこにいこーよ』

『父ちゃんとおハルを置いていけないよ、僕はここに残る。……日葵とはお別れだね』

『ひまり、そんなのやだよ。……もうにーにとあえないの?』

『わかんない。……でも、きつと大丈夫だよ。きつと上手く生きていける』

『ぐすつ……ねえ、にーに。いつかまた——』

前日のクラス代表就任パーティーという名の裏工作を終えた後、自室の扉に挟まれていた怪文書を読んでから隆道は卓上で手を組んだまま俯き、そこから微動だにしていなかった。

彼の表情はこれ以上無い位に暗く、目は焦点が合わず、その下にはくつきりと隈が出来ている。とつづく日は跨いでおり、既に日が差し始める時間だ。

そう、彼は自室に戻ってから一睡もしていない。それ処ではないからだ。

「……………」

彼は卓上にある首輪——自身の専用機をチラ見して、再び俯く。

怪文書を読んだ瞬間に彼の首輪が警告を最大限に発し、千冬が駆けつけて来たが直ぐに追い返した。一向に鳴止まないのが即座に外し、机に叩き付けてそれからそのままにしてある。

どうやら警告は待機形態を装着している時限定である様で、外している時は発症したとしても鳴ることはない。むしろそうでなかったら困った所だ。毎度毎度警告が鳴っていたら頭がおかしくなってしまう。

「……………どうして」

あの怪文書に記されていた一言——正確にはある人物の名前である『日葵』、そして苗字の『篠原』。どちらも覚えがある、というより忘れるはずがない。

片や自身が決して許す事の出来ない、特に憎む三人の内の一入である元母親の旧姓。そして片や自身に懐いていた実妹の名前。

きつと同じ名前だけであつて別人のはずだ、あいつのはずがない。怪文書を見て数分

はそのような考えだった。

「……………」

自身とは三つ歳の差、つまりは十五歳。義務教育を終えて高校に入学している時期だ。それに加えわざわざ自身に向けたであろう怪文書。嫌でも結び付いてしまう。

誰がこの怪文書を寄越したのかなど彼にとつては重要ではない。

自室に送られてきた手紙、そしてそれに記されている名前。認めたくなくてもある結論に辿り着いてしまう。

——自身の実妹、『篠原日葵』はこの学園にいる。

「ああ……………」

両親が離婚して別れてから既に八年は経っている。あの頃とはだいぶ容姿は違うはずだ。もしかしたら既に顔を合わせたのかもしれない。

確かに彼は女性を嫌っている、それは確かのはずだ。今までもそうだったし、この学園に来てからもそれは変わらない。

一部の例外——『篠ノ之箒』がいるが、その理由は自分自身が良く理解している。

しかし妹はどうだ？三つ歳の離れた、それも自身に懐いていた実妹の事はどう思っ

るのか？

元母親は憎んでいる。だがそれは父親を見捨てたからであって、妹は全く関係が無い。むしろ大人の勝手な事情で離れ離れになったのだから彼女を憎む理由など有りはしない。

彼女は自身を覚えているのか？

自分は彼女をどう思っているのか？

彼女は自身を覚えていたとしたらどう思っているのか？

自分は彼女とどう接すればいいのか？

彼女は今の社会——女尊男卑に染まってしまっているのか？

自分は——彼女が女尊男卑に染まっていた場合、どうすればいいのか？

「ああ、くそ、くそ、くそお……………」

妹と離れ離れになった当時は自身より良い人生を贈るだろうと考え、女性を敵と認識した数年後には彼女の事など考えない様にしていた。考えても仕方無いし、彼女が女尊男卑思考に染まるなど考えたくなかったからだ。

しかし、それが今になって一気に降りかかる。それは彼に重くのし掛かり、じわじわと確実に心を追い詰めていた。

「……………あああああくそつたれえがあつ!!」

彼は限界が来たのか半ば発狂し、卓上にあるプラスチックボトル——精神安定剤を手に取り十粒ほど乱暴に口へと放り込む。水など一切飲まず、それを全て嘔み碎いて。「ぐうう……………ううう……………」

もはや彼の思考はぐちゃぐちゃだ。過度の服用はするなと言われているがそんなの知った事ではない。薬に頼り無理矢理自身を落ち着かせて数分後、目に留まるのは卓上に置かれてある怪文書。

『篠原日葵に気をつけろ』

「……………何動揺してんだよ隆道。ブレてんじゃねえぞ」

彼女を憎む理由など無い。しかし今となつては彼女も『敵』だ、染まっているのなら尚更である。

何を戸惑う必要があるというのだ。何度も自分に言い聞かせ、彼はようやく立ち上がり、首輪を着けて洗面所へ向かおうとしたその時——。

「柳さん、起きてますか？一夏です」

不意に扉が叩かれる、その声は一夏であった。そういえば昨日のパーティーの最中、明日は迎えに行くと言っていたのを思い出す。しかし今はなにかと都合が悪い、故に先に行つて貰う事にした。

「……………悪い、ちよつと色々あつてな。約束しといてなんだが先に行つてくれ」

「え、大丈夫ですか？なんか昨日千冬姉が血相を変えて部屋に入ったようですけど」

「それはもう終わってる。SHRまでには行くから俺の事は気にすんな」

「……………わかりました。無理はしないでくださいね」

そういつて彼の足音は次第に遠くなつていく。顔を合わせず扉越しで申し訳ないと思いつつも彼は再び洗面所へ向かった。

「こんな調子じゃ、長く持たねえな……………くそつたれ……………」

——物語はまだ序章に過ぎない。

「織斑君、おはよー。ねえ、転入生の噂聞いた？」

「転入生？今の時期に？」

隆道を置いて朝食を済ませた後の教室。席に着くなり突如クラスメイトに話しかけられた一夏はその内容に疑問を抱いていた。

入学当時は女子に囲まれるという今まで経験したことのない環境のおかげで胃や精神が常にダメージを負う日々だった。しかし数週間も経てばいい加減慣れるもので、現在はそれなりに女子と会話は出来るようになってる。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

今はまだ四月だ。入学ではなく転入というところに疑問が残る。IS学園は入学も当然だが、転入はそれ以上に厳しいはずだ。試験は当たり前として、国の推薦が必要なのである。

代表候補生だから国の推薦は十分有り得るとして、何故入学ではなく転入なのだ？その辺りがよくわからない。

少し思考を巡らせたが、きつとなんやかんやで遅れたんだなと彼は考えるのを止めた。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「……………」

「……………な、なんですの一夏さん、その目は」

「いや別に」

代表候補生という単語に反応したのかセシリアは朝っぱらから腰に手を当てたポ一

ズ——所謂ドヤ立ちと同時にドヤ顔を炸裂させる。その姿は様になつてゐるのだが、彼にとつてセシリア＝馬鹿という方程式が確立してゐるのでどうしても間抜けに見えてしまい、ついジト目になる。

何かしらの本で『優秀だが一周回つて馬鹿』という言葉を見たことがあるが、きつと彼女のような人間を指す言葉なのだろう。そう思うとしつくりくる一夏であつた。

何故か物凄く馬鹿にされてゐる気がする。そう感じた彼女は咳払いをし無理矢理に話を変える事にした。

「ンンンツッ・それよりも一夏さん、柳さんはどうされたのです？お見えになりませんが………」

「あー………遅れるつて言つてた。SHRまでには来るらしいんだけど………」

「けど？」

「いや、扉越しに言われたから顔は見えないんだけど、声だけで分かるくらいすつげえ機嫌悪そうでき。昨日解散した後………織斑先生が血相を変えて柳さんの部屋に入つてつたから何かあつたんだと思う」

一夏は感じ取つていた、隆道の様子がおかしい事に。扉越しの会話の時、一夏に對しなるべく表に出さない様にしてゐたのも察した為、教室に来るよう無理強いはずそつとしておく事にしたのだ。

「まあ、しばらくすれば落ち着くと思う。八つ当たりするような人じゃないし、変にちよつかい出さなければ何もしいさ」

「……………まあ柳さんについては置いておきましょう。先程わたくしが言ったことは冗談として、この時期に転入など代表候補生であれど確かに妙ですわね」

「(冗談には見えなかつたぞ) だよなあ」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい」

教室に着いた際自分の席に向かつたはずの筈だったが、いつのまにか彼の側に入り話に入ってくる。流石の彼女も口ではああ言うものの、噂に敏感なのだろう。

「どんなやつなんだろうな」

「む……………気になるのか？」

「ん？ああ、少しは。それに……………」

「……………？」

確かに気になる事は確かだ。代表候補生なのだから強いのだろう。しかし、彼は別の事を気にしていた。異国の人間だろうが代表候補生だろうがどうでも良いくらいに重要な事を。

「入学当初のセシリアみたいに嘯み付いてくる奴だつたらさ、柳さん大丈夫かな……………つて」

「あー……………」

「ぐうっ……………み、耳が痛いですわね……………」

転入したばかりなら彼の事は知らないはずだ。男だからと手を出し、そして思い知る。良い例としてセシリアは彼に嘸み付き、返り討ちにあった。

教員が既に彼について伝えてあるなら大丈夫であろうが、もしそうでなかったとしたら——。

「……………ああ全く！柳さんの話はやめだ！そもそももかつてのセシリアみたく嘸み付く奴が悪いのだ！それよりも、今のお前に女子を気にしてる余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「ちよ……………。そ、そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、そろそろ実践的な訓練をしましょう。今こそ他のクラスと差を広げるチャンスですよ」

無自覚に追撃を放つ筈の精神攻撃によってダメージを受け、表情を暗くするセシリアだったがいちいち怯んではいられない。彼にはなんとしても勝って貰いたいのだ。

それは何故か。理由はクラス対抗戦の優勝賞品が目当てであった。

クラス対抗戦とは、クラス代表同士によるリーグマッチである。スタート地点付近での実力指標を作る為の行事だ。また、クラス単位での交流および団結の為のイベントでもある。

士気の向上の為に優勝クラスには賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。物で釣れば人間など簡単に動かせるので世の中は案外単純なのかもしれない。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとみんなが幸せだよ」

クラスメイト全員はあれやこれやと好き放題言ってくれるが、言われてる張本人の一夏はとてもしゃないが自信に満ちた返事は出来なかつた。

専用機を持った事により他クラス代表と比べて練習量は現時点で差は出来ているが、未だ基本操縦から抜け出せてないのでこの先どうなるかはわからないのだ。

「織斑君、がんばってね」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

そんな彼の心情など知らずにやいのやいのと楽しそうな女子一同だが、聞き逃すことが出来ない一言があつた。

「へっ？四組のクラス代表も専用機持ち？待ってそれ初耳——」

専用機持ちが他にいるなど聞いたことがなかつた。あるいは聞いてはいたが単に頭

に入っていないかただけか。

今となってはどちらでもいい。彼はその情報を詳しく聞こうとしたが、それは突如遮られる。

「——その情報、古いよ」

教室の入り口から聞こえる声。その声に一夏は聞き覚えがあった。

その方向を向くと、腕を組み片膝を立てて扉に凭れているドヤ立ちの少女が一人。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」

「鈴……………？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 風 鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

小さく笑みを漏らす彼女のツインテールが軽く左右に揺れる。

ドヤ立ちとドヤ顔のダブルインパクトによつて華々しい登場を成功させた彼女だつ

たが——。

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ？」

「んなつ……………!?なんてこと言うのよ、アンタは！」

——彼の前ではいまいち効果が無かった。

それもそのはず、既にドヤ立ちとドヤ顔はセシリアで見ているので既視感が凄まじ

かった。

それに加え、先程のセシリアの行動によつてドヤ立ち+ドヤ顔||セシリア||馬鹿と彼の脳内ではその様に成り立ってしまい、その結果としてドヤ行動||馬鹿という方程式が出来上がってしまったのだ。鈴音の学園デビューは儂く散つたのである。

ちなみに彼も隆道の前でドヤ顔ダブルソードという奇妙なドヤ行動をしてるのだが、そんなことはすっかり忘れてる。棚上げとは正にこの事であつた。

そんななんとも言えない雰囲気を漂わせる状況だつたが――。

「「あ」」

「あ………?何を――」

突然であるが、『恋は盲目』という言葉をご存知だろうか。

意味としては『恋は人を夢中にさせ、理性や常識を失わせるものだ』というたとえ。』である。

今回においては鈴音の場合だと『一夏に夢中になり、持ち前の勘が麻痺する』であろうか。

何が言いたいかと言うと――。

「おい」

「なによ!?!今取り込み中——」

彼女は苛立ちを全面に出しながら振り向く。相手が誰なのかを知らずに。

「邪魔だクソチビ」

彼女の前に佇むのは身長180cmの常に無表情で濁った目を、更にその下には酷い限を持つ二人目の男性操縦者、隆道である。

そう、彼女は自ら関わるべきではないと決めた人物の接近を許してしまったのだ。

「——」

彼女は何も言わず横に避けた。それしか選択肢が

思い浮かばず、逆らおうとするものなら八つ裂きにされる、そう感じたのだ。

「おはようさん二人とも。今朝は悪いな」

「あ、いえ。気にしてませんよ」

「そうか。なんとこいなくて席に着いた方がいいぞ、ブリュンヒルデ様と牛眼鏡がすぐそこまで来てるからな」

皮肉全開に千冬の二つ名と酷すぎる真耶のあだ名を言い放ち彼は席へ向かう。既に落ち着いてるのか、朝方に感じた機嫌の悪さは治っていた。

ちなみに彼が言った二人とは当然一夏と筈であつて、セシリアはガン無視。アウト・オブ・眼中だった。

「清々しいほどの無視でしたわね……目すら合わせてくれませんでよ……」

「こればかりは仕方ないだろう。罵倒を受けないだけマシだと思え」

「それよりも先生達近いみたいだから席着こうぜ。ほら鈴、早く教室に戻つ……鈴？」

「——」
彼女は微動だにしなかった。それは正に、動かざること山の如し。

———とか気絶していた。

「え？嘘だろ？何で気絶してんの？」

「この気絶様………もしや、昨日既に柳さんにちよっかいを出したからなのでは………？」

「いやいや、無いだろう。昨日は部屋に戻るまで私達と一緒にだったのだぞ？」

昨日はほぼ一夏達と一緒にいたのちよっかいを出すなどあり得ない。出せるとするならば彼の夕食を取りに行つてゐる間くらいだ。

しかし、もしセシリアの言う通りなのだとしたらなんて命知らずな奴なんだと思わざるを得ない。

実際は持ち前の勘が急遽戻つた事により隆道の危険性を目の当たりにしたからなの

だが、彼等を知るよしもない。

絶賛気絶中の鈴音。既にSHRまで秒読みとなり、周囲はどうしたものかと考えてはいたが——それも空しく更なる追撃が彼女を襲う。

「いっ!?!な、なにっ!?!」

彼女の頭部に衝撃が走り意識が覚醒し、突然の激痛に周囲を見渡す。その正体は痛烈な出席簿打撃。——鬼教官登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……………」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……………」

千冬の圧倒的存在感の前では反論など無意味、すぐごと扉から離れる。彼女は元から千冬を苦手としており、逆らう意思など存在しないのだ。

「またあとで来るからね!逃げないでよ、一夏!」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ!」

脱兎の如く二組へ逃げる様に向かう鈴音。その光景を見て昔のままだと一夏は思ったそうな。

入学初日は格好付けて登場のはずが一夏により出鼻を挫かれ、隆道の急接近により意識は飛び、千冬の物理的制裁によって心身ともに大ダメージを受けた。

その姿は高校デビューをしようとして見事に大失敗した世の中を甘く見る人間そのもの。目も当てられない位散々であった。

「つていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

「一夏さん、彼女とお知り合いだったのですね」

「……………一夏、色々今更だが今のは誰だ？えらく親しそうだったな？」

それを筆頭に生徒達からの質問集中砲火の餌食となる一夏。しかし今は既にSHRの時間だ、よって――。

「席に着け、馬鹿ども」

鬼教官こと千冬による出席簿制裁がほぼ全員に火を噴く。無事なのはとつくに席に着いてる隆道と、一夏が質問の波に吞まれる前にさっさと席に着いたセシリアの二人。完全に一夏はとばっちりなのだ。が致し方無しであった。

(さっきの女子はなんなのだ……………一夏とずいぶん親しそうに見えるが……………)

現在は授業中。ほぼ生徒全員が真面目にノートを取る中、箒は朝方の一件が気になっ

て授業に集中出来ないでいた。

一言二言だけの会話であったが、一夏と鈴音のやり取りがまるで幼馴染みと再会したようなものでいてもたつてもいなくなかったのだ。詰まる所軽い嫉妬である。

彼女は誰なのだろうか、まさか彼女も彼に好意を寄せてるのだろうかと授業などそつちのけ。

セシリアはまだ良い。一夏と親しげなのはそうだが、様子を見る限り好意を寄せている訳ではないので別に気にはしなかった。

「……………」

しかし、冷静に考えてみれば大したことではなかった。

一夏と同じ部屋、二人きりの時間が圧倒的に多いのは自分自身だ。それに休み時間の時は隆道の所に行くので誰も近付いたりはしない。アドバンテージは揺るがない。

自分の優位性に一人楽しげにする筈であったが、時と場所が悪かった。

「篠ノ之、答えは?」

「は、はいっ!?!」

突然名前を呼ばれ素つ頓狂な声を上げる彼女。——そう、今は授業中。更に現在の授業を担当しているのは千冬である。

「答えは?」

「……………き、聞いていませんでした……………」

小気味のいい打撃音が鳴り響く。彼女は将来ある意味大物になるかもしれない。箒の頭に出席簿制裁が炸裂している頃、セシリアはノートにシャーペンを走らせている。一見真面目に取り組んでいるように見えるが、書かれているのは文字ですらない線のようななにか。彼女も授業そっちのけだった。

（今後どのようにすれば……………彼と打ち解ける事が……………）

思うは自分などその辺の石ころ処か眼中に無かった隆道の事。

試合を終わらせたあの日に彼の事を知りたいと思いはじめたが、進展など少しも進んでいない。しかもゼロではなくマイナスだ。

現在把握してる事と言えば、彼が重度の女性不信、ISに対する嫌悪、PTSD、そして惚れ惚れするような肉体を持つ事のみ。

彼が教室に入った際、挨拶をしようと思っただが目すら合わせてくれなかった。下手に近づくと変に拗らせる事になるので此方からはどうにも出来ないのだ。

「……………」

現時点で彼とまともに会話出来るのは一夏と箒の二人のみ。

一夏については理解出来る。同じ男性同士なのだから女性だらけの環境で仲良くなるのは至極当然の事。逆に仲が悪くなる所が想像出来ない。

しかし、箒の方はどうしても理解出来なかった。彼は女性不信のほずにも関わらず彼女と親しげに会話している。

しかも彼女は篠ノ之博士の実妹だ。本来ならば女性不信に拍車がかかるはず。ますますわからなかった。彼女にあつて自分には無いもの。それが一向に浮かび上がらない。

(このままではいけませんわ。何かきつかけを……………)

聞けば彼は昨日一夏とアリーナでISの訓練をしたと言う。一切ISに乗らないという訳では無さそうなので、一夏と一緒に訓練を指導するという形であれば接触は可能だろうかとセシリアは考えた。

断られる可能性はかなり高いであろうがそれでも構わないし、接触出来たとしてもいきなり親しげに接する必要はない。そんなことをすればただの馴れ馴れしい奴だ、段階を踏んで少しずつ打ち解ければ良い。

(となれば、さっそく今日の訓練にお誘いを。どのように声をかければ……………)

「オルコット」

「……………さりげなく誘うとか。いえ、もっと効果的な……………」

「……………」

彼女の自慢であるふんわりとしたブロンドの髪が出席簿によって打撃音と同時に圧

縮される。箒と同様に将来大物になるかもしれない。

(何やってんだあいつら)

そんな光景を見ている隆道は足を組んで椅子に凭れるという、授業を聞いていなかった箒やセシリアよりも酷い態度であった。

教科書を開いて授業を聞いていたりと以前よりマシにはなっているので進歩したと言えよう。

(……………今日の飯どうすつか)

しばらく購買には通っていない。最後に通ったのは専用機を受け取る二日前の金曜日であり、大怪我をした後は一夏達が食事を持ってきてくれていた。

昨日の昼は自室の缶詰を消費して夜もまた一夏達の調達で済んでいる、そろそろ購買に足を運びたい所。

前半は彼なりに授業に取り組んでいたが、既に彼は昼食の事しか頭になく授業など知らん顔だ。

〔柳〕

「……………」

「……………はあ」

彼は制裁を受けた二人と違って聞こえてはいるが相変わらずの無視、相手が千冬です

ら態度を変えない。

無視だけでなく態度も最悪なので普通は制裁待った無しなのだが、千冬は諦めたのか何もせず彼から離れた。

(ふ、不公平だ(ですわ)……………)

箒とセシリアはそう思ったそう。

「お前のせいだ！」

昼休みになって、箒が一夏に対して言い放った最初の一言がこれである。

「なんでだよ……………」

彼女は午前授業だけで真耶に五回ほど注意され、千冬に三回ほど制裁という名の出席簿アタックを食らっている。そして叩かれる度にまた彼の事を考え、結果また叩かれるという悪循環。どう考えても彼は悪くなかった。

セシリアも箒と同様に真耶に注意されたり千冬に叩かれまくったりしたので此方

の対象は隆道、文句など言えるはずがない。もしかしたら二人は似た者同士なのだろう。

ちなみに隆道は担任と副担任の二人だけでなく普通教科を担当する教員も含めて十回以上の注意や名指しを受けてるが当然全て無視。やはり不公平である。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……………。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「よし、後は柳さ……………あれ？いない……………」

今日こそ隆道を昼食に誘おうとした一夏だが、既に隆道の席はもぬけの殻。周囲を見渡しても彼の姿は見当たらない。

「柳さんでしたらもう出ましたわ。真っ先に」

「は、はええ……………。まあ、いいか」

こんなことなら予め誘っておけばよかったかと思ったりもした。しかし、よくよく考えれば彼のことだ、女子が密集する食堂など行きたがらないよなと今更ながら結論が出る。

今回も誘う前にいなくなってしまったが、次は前もってダメ元で誘ってみよう。そう決心した一夏であった。

「セシリアはどうするっ？」

「……………よろしいのですか？」

「別に構わないだろ。なあ、箒」

「む、むう……………。まあ、構わないぞ」

本当は二人きりが一番良いのだがと箒は菌痒い気持ちになるがセシリアならいいかと妥協した。

この男、相変わらず異性に対して鈍感である。いつか刺される日が来るのではないか。

そんな訳で三人で食堂へ向かうのだが、その後ろには某RPGを思い浮かべるほどクラスメイト数名が付いてくる。これももはや慣れたものなので彼は気にしていない。

「待ってたわよ、一夏！」

食堂に着いた一夏一行は食券を買おうとしたのだが、そこに立ち塞がるは朝方散々な目にあつた鈴音であり、既にラーメンを乗せたお盆を持っている。その姿は堂々としていますが、彼女が立つ場所は券売機の前。単純に邪魔でしかない。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「わかってるなら早くしてくれよ。それ、のびるぞ」

「わ、わかっているわよ！ 大体、アンタを待ってたんでしょうが！ なんで早く来ないのよ

「！」

何故早く来ないといけないのだろうか。一応これでも早く来たというのにあまりにも横暴である。しかし、彼女がうるさいのは昔から変わらないので今更どうということはないと、彼は彼女を放棄して食券を買ってカウンターの担当者に渡す。

ここの食堂にあるメニューは勿論高いクオリティのだが、何より出来るのが速い。大体三分も待たずに出てくる。いったいどのような技を使っているのだろうか。

「それにしても久しぶりだな。ちようど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」
「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どういふ希望だよ、そりや……」

あまりの無茶ぶりに彼は顔を引きつる。いったい彼女は何を望んでいるのだろうか、彼には到底理解出来なかつた。

「あー、ゴホンゴホン！」

「盛り上がってる所申し訳ないのですが一夏さん。注文の品、出来てましてよ？」

「ああ、悪い。向こうのテーブルが空いてるな。あそこ行こうぜ」

箒とセシリアによつて会話が中断される。確かにここだと他生徒の邪魔になるのは確かだ、いつまでもここで駄弁る訳にはいかない。周囲を見渡すと、丁度良く空きのテーブルが目についたので其処へ三人に促す。

「ね、ねえ一夏。その、アイツ……………二人目は？」

「え？……………ああ、柳さんの事か。昼はいつも何処かに行くんだよ、食堂にはまず来ないな」

「そ、そう……………」

それを聞いて安心したのか彼女は盛大に安堵する。やはりコイツ何かしたのではないかと考えてしまうが、今はテーブルに向かうことが先だ。

しかし流石はＩＳ学園の食堂。人は多く移動するだけでも時間がかかり、席に着くだけでもそれなりに苦労した。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

彼は丸一年ぶりの再会ということもあって、鈴音に怒濤の質問を繰り出す。彼にとつて彼女は付き合いの長い人間なので、空白期間が気になるのだ。

しかしこれを面白くないと思う人物が目の前にいる。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

「そうですわ一夏さん。もしや、此方の方と付き合ってたらしやるんですの？」

箒は親しげにしている二人を見て苛立ちを感じ、セシリアは単純に疎外感を感じた

め若干刺のある声で彼に問い掛ける。周囲の人間も興味津津なのか頷いて聞き耳を立てていた。

「べ、へべ、別にあたしは付き合ってる訳じゃ……………」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「……………」

「?何睨んでるんだ?」

「なんでもないわよっ!」

それを聞いてセシリアは納得した。ああ、この人も箒と同様彼に好意を寄せているのかと。

まだ恋というものは経験が無いため羨ましいと思いつつも大変そうだなと彼女は思った。

「幼馴染……………?」

「あー、えつとだな。箒が引つ越していったのが小四の終わりだっただろ?鈴が転校してきたのは小五の頭で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちよつとぶりだな」

つまり箒と鈴音は入れ違いなのだ。面識が無いのも当然であった。

「で、こつちが箒。ほら、前に話したろ?小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣道場の

娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴音は箒をじろじろと見る。箒も負けじと彼女を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そういつて挨拶を交わす二人。この時二人は確信したのだ、相手は恋のライバル同士だ。

誰が見ても分かるように火花を散らし、メンチビームを彷彿とさせる睨み合いが続く。少なくとも女性がしている目ではなかった。

それを他所に、またもや疎外感を感じたセシリアは自分の存在を認識してもらうために二人に割って入る。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……………誰？」

「なっ!?わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ!?!まさかご存知ないの?」

「うん、あたし他の国とか興味無いし」

「な、な、なっ………！」

言葉に詰りながら顔を赤くしていく彼女。なんか既視感が凄いと彼は思わずにはいられなかった。

「い、い、言っておきますけど、わたくし貴女のような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

そう確信してみた、嫌味でない言い方をする彼女。これが彼女の素なのだ。

しかし、嫌味でない分怒りを表す人も存在する。言葉は時と場合によって尖った刃物と化するのだ。

それを聞いた箒とセシリアは怒りを露に——はせず、逆に冷静になり食事を止めた。

箒は何も知らない彼女を見て井の中の蛙と思い、セシリアは以前まであった自分のような傲慢な態度に自己嫌悪を感じたのだ。

それに対して彼女は何食わぬ顔でラーメンをすすっている。何も知らないというのはなんと幸せな事か。

「二夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。色々あつてな」

「ふーん………。あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

目線だけを向けて、彼女にしては歯切れの悪い言葉を彼に向ける。誰が見てもそれは彼と一緒にいたいという下心、操縦を見るなど二の次なのは丸分かりだ。

箒はそれを見て危機感を感じた。彼は異性に対しては凄く鈍感だ、きつと何も考えずに返事をするだろう。そう思っていたのだが――。

「……………いや、今は遠慮しとく」

「……………え？」

「だって鈴音はクラス代表なんだろう？来月クラス対抗戦があるのにそれってなんかおかしいだろ」

「あ、えと……………」

彼女は予想外の返答について吃つてしまう。まさか断られるとは思っていなかったのだ。昔は二つ返事で返したというのに。

以前までの彼だったら考え無しに返事しただろう。しかし、隆道の存在と濃厚な出来事によつてこの短期間で色々と学んだのだ。彼女が知らない内に彼は着々と成長をしていた。

「まあ、その話はいいだろ。それよりもさ、親父さん元気にしてるか？まあ、あの人こそ病氣と無縁だよな」

「あ……………。うん、元気――だと思う」

戸惑う表情から一変、彼女の表情は陰りが差したのを見て彼は違和感を覚えた。

（あ、なんかまずいこと言ったか？）

「そ、それよりもさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「（無理矢理話変えたな……これ以上はよそう）あー、あそこ潰れたぞ。それに俺は外出届出さないと外出れないからどっちにしろ無理だけど。放課後はクラス対抗戦に向けた訓練もあるしな」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、夕食の時でもいいから。積もる話もあるでしよ？」

「夕食なら……柳さんも一緒になるかも知れないけどいいか？」

正直言うとうと積もる話なんて無い。中三の頃は今となつては無駄になった受験勉強で忙しかったため伝える事などないのだ。

それに訓練は勿論の事、自由時間はなるべく隆道と過ごしたいのだが彼女としてはどうにか話をしたい様子。空いてる時間など夕食の時くらいなので話をするならそこだけしかない。

しかし彼は一つ懸念していた。それは隆道の事である。

今日は夕食時に隆道を誘おうとしていたのだが、朝方の彼女を見るに恐怖感を抱いて

るようだ。

そんな彼女が隆道と同席するだろうかと彼は不安だったが、見事にそれは的中する。

「うつ……………え、えと、アイツは……………」

「なあ、鈴。ひよつとして柳さんになんかしたのか？」

「なにもしてないわよっ！してないけど……………」

彼女は声を荒げるが、次第に小さくなつていく。何もしていないようだがどうも様子がおかしい。入学初日はクラスメイトも多少は怯えていたが、これほどの怯えは手を出さない限りあり得ない。

隆道は自分から牙を向く人間では無い。ならば彼女が手を出した以外見当がつかないのだ。

「とつとにかく！訓練が終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

「あ、おいつ！」

いつのまにか食事を終えたのか彼の返事を待たずに彼女は片付けに行つてしまい、そのまま食堂を後にした。

「……………行つてしまったな」

「どうすんだよ……………断れなかったから絶対待つかないじゃねえか……………」

流石に無視は出来ない彼は律儀に時間を空けとくしかない。これは隆道との夕食も

断念だなど、彼は残念に思った。

「彼女の事は後にしましょう………とところで一夏さん。放課後の訓練ですが、柳さんも一緒に緒する事は可能かしら？」

「え？あー、どうだろう。たぶん断るんじゃないかな」

「それでも構いません。ダメ元で結構です」

「わかった。俺から言っとくよ」

一方その頃、隆道はというと――。

「ZZZZZZZZZZ………」

久々の購買で買った食事で腹を満たし、憩いの場である屋上のベンチで爆睡していた。憩いの場だけあって彼の表情は安らかであり、早々に起きないだろう。

彼が目を覚まし教室に戻ったのは数時間後である放課後直前のSHR。

遅刻はしなかったが盛大なサボりをぶちかましたのであった。

第十六話

放課後の第三アリーナ。今日もまたセシリアからIS操縦を教わる予定だった一夏は、予想外な人物の登場に驚いていた。

「な、なんだその顔は………おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうか——」

「あら、箒さん。その機体は——」

「今日から実戦的な訓練をするのだろうか？ 近接格闘戦の訓練が足りなくなるだろうか。そこで私の出番だ」

二人の前に佇むのは、IS学園に配備されている訓練機の一つを纏う箒だった。

——第二世代近接両用型IS『打鉄』——。

彼女が装着する『打鉄』は隆道の専用機『灰鋼』の元となった機体である。カラーリングも『灰鋼』の光沢のない黒灰色とは違い、光沢のある銀灰色だ。

彼は彼女が機体を装着していることに驚きはあったが、それよりも機体そのものに注目していた。

『灰鋼』で見慣れたからアレだったけど、元はこの『打鉄』だもんな。こうして見ると

色以外はほぼ一緒だし。……………あれ？確か『灰鋼』って汎用防衛型だったよな？『打鉄』と一緒に近接両用型じゃないのか？)

隆道の『灰鋼』は『打鉄』を一次移行したものだから分類は同じのはず。一次移行した際に何か変わったのだろうか？と考える。

そんなことを考えてる彼とは別に、セシリアは彼女についてある疑問を抱いていた。「まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるだなんて……………」

訓練機の数は限られている。一学年が放課後に借りられる時期はまだ先のはずだ。にも関わらず彼女は機体を纏っている。

(……………彼女が篠ノ之だから？)

セシリアは自身が出した答えに納得する。確かに彼女はあの篠ノ之博士の妹だ。となれば血縁である彼女のデータ採取を優先してるのか、または単に優遇されているのか。

(どちらにせよ、いい顔はされませんわね……………)

少なくとも予約者がズレた事は明白。それによつて借りる事の出来ない生徒から憎まれるだろう。

そうでなくとも彼女は篠ノ之だ。あれやこれやと難癖付ける輩が出てきてもおかしくはない。もしその時が来たら自分がフォローに入ろうと、セシリアはそう決めた。

「……………一夏さん。箒さんもいることですし、メニューを少々変える事にしますわ」
「え？あ、ああ。具体的になににするんだ？」

「簡単です、お二人で模擬戦を行ってくださいまし。近接格闘限定で飛行は一切せずに」
予定とは違うが、彼女が来たのならば有効に使うべきと判断したセシリアは二人に模擬戦をするよう指示する。

「飛ぶなつてことか？それに近接格闘限定？」

「物事には段階というものがありましてよ。箒さんも丁度良く『葵』を展開してますし、先ずはI Sの近接戦に慣れて頂きますわ」

「そういうことだ。では一夏、始めるとしよう。刀を抜け」

「……………わかった。行かせ、箒」

彼はセシリアの指示に納得し『雪片』を展開、正面に佇む箒と向かい合い互いに構える。

「では——参るっ！」

箒の合図と共に両者は斬りかかる。模擬戦ではあるが彼等にとって初のI S戦だ、お互い気合い十二分だった。

「物事には段階……………。自分で言っておいて何ですが……………ほんとうに、耳が痛くなりますわね」

セシリアは二人が模擬戦を始めた途端に表情を暗くし、小さく呟く。

思い出すは入学初日の出来事。激昂した事により周りが見えなくなり、相手も素人も関わらずI Sを用いた決闘を申し込むという愚の骨頂を犯し、その結果起こってしまった事件。思い出す度に自分が嫌になる。

もしあの時冷静であつたならば違う未来になつたであろうか、そう思わずにはいられない。

「……………ふう」

しかしそれは既に過去の話だ、変えることなど出来やしない。既に終わった事を悔やんでも意味は無いのだ。過ちを犯した事実を変えられない。

ならば自分がこれから変わるしかないのだ。

「……………」

セシリアはふと、目だけを動かし模擬戦を行っている二人とは別の所を見る。

そこにはアリーナ内の外周を全力疾走する黒灰色の機体を纏う人物、隆道がいた。

彼は結局の所、セシリアとの訓練を断つた。誘つたのは一夏だが、一人でやりたい事があると云つて。やんわりな断り方だつたと一夏は言っていたが、理由はそれだけでは無く、自分がいるからなのだろうと彼女は察した。

(ずいぶんと嫌われたものですわね……………)

それもそうかと、彼女は思った。何せ自分は女性不信の彼に追い討ちをかける様なことをしたのだ、至極当然の結果であろう。

(……………それにしても、足速くありませんこと?)

アリーナに来たときから彼をさりげなく見ていたが、彼の歩行操縦の成長は圧倒的に早かった。

始めはゆっくりとした歩行をし、しばらくしてジョギングからのランニング。更にその後全力疾走と段階を踏まえて歩行操縦をしている。そのアスリート走り染みた全力疾走に彼女は目を疑った。

(一夏さんより速い……………。搭乗時間は彼より少ないはずなのに……………)

あれほど動けるのであれば地上操縦は近いうちに全て覚えるだろう。そうなるが残すは飛行操縦のみだ。

その時は無理強いはせずにまた誘ってみよう、そう彼女は決心した。

「さて、此方も見つつわたくしも……………」

彼女は目線を模擬戦をしている二人に戻しながら手を広げ集中する。

「……………『インターセプター』」

彼女が発したのは初心者用の武装展開方法。近接ブレードを展開したのを確認して直ぐ様収納し、何度も同じ事を繰り返す。

近接武装に関しては未だに苦手なものとトラウマによつて思うように出来ず、初心者用の方法しか出来ないが今はこれでいい。出来ないのなら出来るまで練習するだけだ。

「わたくしもいい加減、近接に慣れないといけませんわね」

模擬戦を始めてしばらくして一夏と筈二人に疲労が見え始めた頃。過度の訓練はただの毒となるので模擬戦を中断させ一旦休憩を挟む事にした。

「少しばかり休憩しましょう。ずっと模擬戦は流石に疲れるでしょうから」

「お、おう……………」

「だらしないぞ一夏。鍛えていないからそうなるのだ」

息が切れてる一夏に対し筈は多少の疲労はあるものの、まだまだ余裕がある様子。剣道場での特訓の時もそうだったが彼女のスタミナは一体どこにあるのだろうか。

「ぜえ……………ぜえ……………」とところで、柳、さんは？」

「柳さん？柳さんでしたら——」

セシリアが言葉を発しようとしたその時、突如爆発音がアリーナ内に鳴り響く。その爆音は三人は聞き覚えがあつた。

その方向を見ると、吹き飛ばされたように地面を転がり回る隆道。右腕には『鋼牙』を

展開しており、周辺には巨大な空薬莖と弾倉が大量に散らばっている。

「なんだ……………こりゃ……………」

「歩行操縦を止めてから『鋼牙』の空撃ちをしまして……………。どうやら使いこなそうとしてるようですわね」

「……………まさか柳さん、ずっとアレを……………？」

「お二人は模擬戦に集中してたので気づかなかったようですが、ずっとですわ」

「う、うわあ……………」

どうりで彼の周辺に溝やら抉れた箇所があるはずだ。大丈夫なのだろうかと不安で満たされてしまう。

そんな三人から心配そうに見られるとも知らずに彼は再び『鋼牙』を構え、そして……………。

「……………ふうっ……………オッラアツ!!」

——右腕を突き出して『鋼牙』を射出。今度は吹き飛ぶ事なく、多少仰け反った程度でその場に留まった。

「す、すげえ……………止まった所なんて初めて見た……………」

「……………使った事はないが、そんなに……………なのか？」

「アレは冗談抜きでヤバイ。一度は必ず吹き飛ぶからな」

彼は吹き飛ばずに済んだ事に満足したのか、心なしか上機嫌で『鋼牙』を収納し新たな武装を展開する。

「……………なんですか？アレ」

「……………私にもわからん」

「……………」

彼が展開したのはこれまたデカイ遠距離武装、一見ロケットランチャーに見える。しかし、箒とセシリアには見覚えが無かった。

藍色に近いそれは四角い無骨なフォルムに申し訳程度の弾倉。本来あのような大型武装は肩に担ぐ肩撃ち式か銃身を支える銃床ストックが存在するが、彼が持つソレにはそれらしいものが見当たらずなくグリップが下と左側に付いてるのみ。

それだけでもマトモじゃないが、一番気になるのは九つもある砲口。早速嫌な予感しかしない。

(まさか、な……………)

そんな二人を他所に、一夏はあの武装にまたしても既視感があった。

某銀河のヒーローが使いそうなデカイ武器。まさかなと思ひ検索をかけてみるが、その予想は当たってしまう。

—— マルチミサイル
多弾頭誘導弾『蜂ノ巣』 —— はちのす

「ああ、もう……………」

なんて事だ、予想が的中してしまった。どう見てもアレではないかと不安だったが、名前を見て確信に変わり一夏は天を仰いだ。

「……………？一夏さん、あの武装に見覚えが？」

「いや、こうして見るのは初めてだ。昨日までは持ってなかったし、たぶん新しく送りつけてきたやつだと思うんだけど……………」

「なんだ一夏。勿体ぶつてないで説明を——」

箒の問い掛けを遮るように、彼は生徒のいない方向に『蜂ノ巣』を向けトリガーを引く。その九つの砲口からほぼ同時に飛び出してきたのは九つの巨大なミサイル。

「え、っ」

そのミサイルはそれぞれ不規則に飛び回っていた。あるものは螺旋状に、あるものは直進からいきなり真横に。それらは狂ったように飛び回っていき、六発は壁や地面で爆発し、残り三発はある程度の距離を飛び回った後ようやく全て爆発した。

「え、ええ……………。なんなんですのアレ……………」

「よ、よくわからないが、とても恐ろしいものだといいことはわかるぞ」

「すっげ……………ミサイルの軌道まで再現かよ……………。うわ、柳さんめっちゃ不機嫌になつてる……………」

爆発の大ききからして威力は凄まじいだろう。もし正面にいたのであれば悲惨な光景になる事は手に取るようにわかる。攻撃性能についてはミサイル系統の中では高い方で間違いない。

しかし、荒れ狂うように飛び回り爆散したミサイルを眺めていた彼は今やしかめっ面だ。どうも気に入らなかつたらしい。

彼は不機嫌のまま『蜂ノ巣』を収納する。恐らく以前と同じく二度と使う事は無いだろう。

「はあ……………」

盛大な溜息を吐きつつ、彼は哀愁を漂わせながら三人の元に向かってくる。着く頃には不機嫌な表情は無くなっていた。

「休憩中かお前ら?」

「ええ、ついさつきですけど。……………あの、さつきのはまさか——」

「言うなよ。……………アリーナに行く前に例のゲテモノをお前の姉に押し付けたら、今度は遠距離武器をもって政府の奴等が送りつけたらしくてな。今回は一つだけだったから試しに使ってみたんだが……………結果がアレだ」

そう言つて彼が指差した先には焦げた壁や地面に出来たクレーターの数々。壁は試合等を想定して頑丈に造られてるため傷一つ無いが、地面の方はもう目も当てられない

ほど穴ボコだらけだった。

「俺はアレを片付けたら帰るわ。今日はもう疲れた」

「あ、はい、お疲れ様です。……………手伝いましょうか?」

「いや、いいわ。お前は訓練でも続けてろよ」

彼は一夏に軽く手を振りその場を離れる。本当は模擬戦を見学していつて欲しかったが無理強いは良くない。故に何も言わずに見送ることにした。

「……………ところで、さきほどは聞きそびれましたが結局アレはなんなんですか?」

「そうだぞ一夏。まるで知っていたような口振りだったではないか」

「聞かない方がいい。……………強いて言うならば、アレを考えた奴はすげーってことだ」

「?!!」

「あ……………ねみい」

職員室に稼働データを提出し、その後教室で忘れ物を取りに戻った隆道は未だに睡魔

と戦っていた。

今日は珍しく一人だ、一夏も箒もない。今思えば放課後はほとんど彼等と一緒にだった気がする。

「……………これじゃ、どつちが歳上なんだか」

最近彼等に甘え気味だ、三つも歳上の自分がこんな体たらくにも関わらずよく任せとけなど言えたものだ。

「……………帰るか」

やるべきことはやった、後は寮に帰るだけだ。寄る所など無いためさつさと帰って寝たいという思いが彼の足を動かす。教室から出て、いざ帰ろうとしたその時だった。

「あのおー？ちよーつといいかなあー？」

不意に後ろから声をかけられた。廊下には誰一人としていないのでどう考えても自分声をかけたのだろう。いつもの彼なら無視してそのまま帰るのだが、今回に限っては何故か足を止めその声の主の方へ顔を向けた。

「やあやあ、こんにちはあ」

そこにいたのは一人の生徒。とても綺麗な黒髪をサイドテールで纏めている彼女は廊下の中央で佇み、彼をにこやか顔で見ている。

「……………」

「おやあ？冷たい反応だねえ？せーつかくこうして会いに来たっていうのにい」

「……………誰だお前」

「んー、やっぱわかんないかあ。……………それもそうだよねえ。しばらく会わなかったしい、自分で言うのもなんだけど私も見違えたしねえ」

へらへらとした態度の彼女は、彼のドスの効いた声に全く怯むこと無く一人で納得したように腕を組みながら大袈裟に頷く仕草をする。まるで彼を昔から知ってるかのよう。

こいつは誰だ。全く覚えが無い、こんな奴は知らない。しかし、何故だか身体が全力で警告を発してる。こいつと関わるなど、今すぐ逃げろと。

「……………俺はお前なんか知らねえし、知ってたところで関わる理由もねえ。じゃあな」

背中をつららで撫でられたように悪寒が走る。逃げ出したい気持ちに駆られた彼は捨て台詞を吐くように彼はその場を離れようとしたが、次に放たれた彼女の言葉によってそれは出来なかった。

「ああもう、待ってよお。んー、じゃあこれなら思い出すかなあ」

「久しぶりい、にーに」

「!？」

隆道は足を止めた。

止めざるを得なくなっていました。

『にーに』

自身にその呼び名をする人間は一人しかない。

それが耳に響き、頭痛が走る。

心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥り、息苦しくなる。

彼は硬直してしまった首を無理矢理動かす、ゆっくりと振り向く。

そこには満面の笑顔を浮かべる彼女の姿が。

「あはあつ！思い出したあ！？ねえ思い出したよねえ！？」

「お前……………ま、さか……………!？」

「そうでえーす！八年前に離れ離れになったにーの妹、篠原しのはら 日葵ひまりつでえーす!!」

「ひっ!？」

笑顔。それも貼り付いたような表情の彼女——日葵は両手でピースをしながら彼

に頬笑む。それが堪らなく不気味だった。

——メノマエノコイツガ、イモウト？

昔と照らし合わせても全く合致しない。大人しかつたかつての妹の面影は一切見受けられない。彼女のアマリの変わり様に彼は身体だけでなく、思考まで止まってしま

う。

首輪は一気に最大限の警告を発し、殆ど間隔を空けずに点滅している。廊下全体に無機質な電子音が鳴り響くが彼女は全くそれを恐れてない。むしろ楽しんでるように見えた。

「おおー！すつこい音だねえ！織斑せんせーから話は聞いてたけどほんとに鳴るんだねえ！」

「あ、う……………」

「んんー、名残惜しいけど今日は挨拶だけにしとくねえ。そろそろ織斑せんせーも来る頃だろうしい。イヒヒ」

だらしなく笑う彼女はその言葉を最後にその場から離れていく。彼はその後ろ姿に声をかける事が出来ない。

彼は彼女に恐怖を感じていた。貼り付いたような笑顔と人を嘲笑うかのような言葉に。

違う、こいつは別人だ、そうに違いない、そうであつてくれと願うが――。

「ああ、そうだあ！今の内に宣言しとかないとねえ！」

「な……………に、を……………？」

彼女はわざとらしく何かを思い出した様に呟き、彼に再び向き合う。表情は未だに貼

り付いた笑顔のまま彼にこう言い放った。

「ISはねえ、女だけに許された絶対的存在なんだよお。それを男が持つなんて許されないよねえ」

「――」

「覚悟してねえ、にーに」

最後の一言だけは、とびっきりの歪んだ表情で告げて彼女は今度こそ帰っていく。廊下には彼と無機質な電子音だけが残った。

隆道が日葵と残酷な再会を果たした頃。最大限の警告を発してるタブレットを片手に、千冬は廊下を全力で駆けていた。

「ああ、くそっ！よりによって校内でっ！」

最大限の警告を発している状態の隆道は極めて危険だ。どのような行動を起こすか

一切不明なのだから。

昨日に至つては、彼の所に駆けつけた頃には既に半ば錯乱していた。部屋の中だから良かったものの、アレを校内で、生徒がいる場所で起きてしまったら——。

「頼む……………間に合つてくれ……………」

彼の専用機には発信器が付いている。そこから発してゐる信号によると場所は一学年の廊下。階段を上げればもうすぐだ。

彼女は一段飛び処か三段飛びで階段を駆け上がり、そこから勢いよく廊下に飛び出すとようやく彼の後ろ姿が見えた。周囲には生徒は一人もない事に彼女は一先ず安堵の表情を浮かべる。

彼を鎮静しなければ。刺激を与えないように、ゆっくりと近づくと気づく彼女であったが——

「やな……………っ!？」

「ヒツ……………ググツ……………ヴツ……………ア……………」

彼との距離は十メートルと距離は空いているが、その声と後ろ姿からして異変に気づくのは容易かった。

両腕は痙攣し、押し殺したような言葉にもなつてない声。そして彼の足元には数ヶ所ほど水滴があつた。

誰がどう見ても異常を来している事は明白だ。首輪とタブレットから鳴り響く最大の警告音が、より一層異常さを際立たせる。

(まずい……………!)

似ていたのだ、彼がセシリアと戦った時に起きた状態と。だとすれば非常にまずい事態だ。

他の生徒がここに来ないとも限らない。とにかく彼を正気に戻さなくてはと、彼女は恐怖を押し殺し彼に近づく。

「……………柳……………私だ、織斑だ。……………どうか落ち着け、誰も危害を加えない」

「ギツ……………イ、イ……………ア、ア……………」

「やな——」

彼に触れる事が出来る距離まで近づき、手を伸ばした瞬間。

「ヴガア、ア、ツツ!?!」

「っ!?!」

突如彼の指先が彼女の両目に襲い掛かる。それは完全な不意打ちだったが、伊達に世界最強と言われてない彼女は瞬時に後方へと下がる。全力で振り抜いた腕は空振り、彼はよろけるが直ぐに立て直し彼女と向き合った。

「ヴ、ア、ア、ア、ア、ア……………」

「ああ、なんてことだっ………！」

彼の表情を見て彼女は思わず口を押さえそうになる。

大粒の涙を流している目は焦点が合っていないく、これでもかと言うほどに齒を剥き出しにしている。

そして彼から溢れ出している、再び現れてしまった『どす黒いなにか』。

——それは歪みに歪んだ狂気。

「グル、グル………ア、ア、ア」

隆道は覚悟をしていたはずだった。

妹が敵である事に。今の社会に染まった人間の可能性がある事に。

しかし、心のどこかで僅かながら願っていたのだ。

妹は違うはずだと。ISを絶対視してないはずだと。

もしかしたら大人しいままかもしれない。きつと懐いていたあの頃のままかもしれない。

もし妹が昔のままだったなら以前のよう接しようと、彼はそう思っていた。

うな物体だった。彼が勢いよくそれを振ると、そこから飛び出して来たのは銀色の刃物。

(ナイフっ?!?)

いつのまに持っていたのかと彼女は驚愕するが、そんな呑気にしてる場合ではない。アレを取り上げなくては生徒が危険に晒される。彼には悪いが気絶させるしかない。腹を括るが、彼のとつた行動は予想の斜め上だった。

発狂している彼はナイフを逆手に持ち替え、その刃を自分に向け――。

「っ?!?待て柳っ!!早まるな――」

――自身の左手に突き刺した。

「グヴウウツツ!」

!?!?!

「なっ!?!」

深々と刺し貫通した左手からは大量の血が流れ出す。辺り一面を赤く染め、足元には濁った水溜まりのように血の海と化した。彼の表情は苦痛に満ちているが、それでも尚ナイフに力を込めている。

「ア、ア、ッ………ガッ………」

激しい痛みによってなのか、彼は正気に戻っていく様が見える。目は次第に焦点が合っている、声も落ち着きを取り戻していく。その証拠に警告も段々と弱まっていった。

「グツ……………ヴ、うう……………」

「や、なぎ……………」

「う、ふう……………ふう……………うらあつ!!!」

掛け声と共に抜いたナイフ。それを抜いた事により左手からは血が吹き出し、制服も赤く色付いた。あまりの痛みに彼はふらつき、とうとう壁に寄り掛かってしまう。

彼女は彼の衝撃的過ぎる行動について面食らってしまったが、直ぐに我を取り戻し彼に駆け寄る。

「ああ……………いつ、てえ……………」

「馬鹿者つ……………！自分を刺すなど何をやっているか……………!!」

「う、るせえ……………。耳元、で……………騒ぐんじや、ねえよ……………」

完全に正気に戻ったのか、彼女の声によく反応する。今も夥しい量の血が出ており、押さえたところで止血など出来はしない。

「くそつ出血が酷い。とにかく、早く保健室に——」

「触るなあつ!!!」

「っ!?!」

彼女は彼を一刻も早く保健室へ行かせようと肩を掴むが、それは乱暴に振り払われる。彼は震えながらも、またもや懐に手を伸ばすと今度は白い布切れと網を取り出す。

それはガーゼと包帯だった。それを手際よく左手に巻き、血塗れた上着を脱いで何事も無かったかのように彼は帰ろうとする。

「ま、待て柳！」

「……………なんだよ、俺は行かねえぞ。……………誰がアンタの世話になるか」

「いやしかし……………分かった。だが、ソレは流石に見過ごす訳にはいかない。こつちに寄越せ」

「……………」

彼は何も言わずに血塗れのナイフを折り畳んで投げ渡す。彼女がそれを掴んだの見て彼は寮へと帰っていった。

「……………」

ふと、千冬は手元のナイフを見る。血で染まって気づかなかったがよく見ると結構使い込まれてるのか、小さな傷や錆などが見える。いつから持っていたのかはわからないが、彼に持たせるには危険だ。生徒に向けない保証など無いのだから。

「……………？」

ここで彼女は引っ掛かりを覚えた。彼がどうしてナイフをいつから持ってたかではない。

彼が自身の左手を刺した事に。

「古傷……………」

彼女は、彼が大怪我をした時に見た古傷を何故か今思い出していた。

確かに彼の身体には大から小までの刺し傷や切り傷があつた。しかしあまりにも数が多すぎる。いくら襲われた事があるとはいえ、あれほどの数は現実的ではない。

「まさか……………」

ここで彼女はある仮説を立てた。

——自分で自分を傷付けてるとしたら？

「……………?!?!?!?」

言い様の無い寒気が彼女を襲う。彼はもしかすると、既に自分達ではどうにもならないほど手遅れなのではないかと。

廊下に残されたのは呆然と立ち尽くす彼女と彼が撒き散らした血の海だけだった。

時刻はまもなく夕食時間となる頃。自室に戻った隆道は直ぐ様医療キットと鎮痛剤に手を伸ばして、椅子に凭れかかる。

鎮痛剤を数粒ほど口に放り込んで左手に巻いた真つ赤な包帯とガーゼを剥がすと、未だに出血が収まっていない大きな傷が顔を覗かせる。

「……………」
数分程それを凝視した後、医療キットから取り出すのは新品の包帯やら止血剤、そして針やピンセット等の器具の数々。

「……………」
それを片手にも関わらず、一言も発せず、手の甲と平の両方を器用に縫い合わせていく。完全に縫い終わり、新しく包帯を巻き終えたのは八時を過ぎた頃だった。

「……………」
久々だったからな。時間くつちまった」
しばらくは満足に動かせないだろう。完治するその時までには周りに知られる訳には

いけない。特に一夏達には隠し通さなければ。

「はあ……………」

覚悟したはずなのに希望を持ってしまい、それは碎けた。やはり希望など持つべきではないのだろうかと気が沈んでしまう。

そんなネガティブ思考一直線になりつつ力なく時計を見て、ある事を思い出した。

「……………そろそろ時間、か？」

既に時計の針は八時を過ぎている。普段通りであれば一夏達が夕食を終えてそろそろ来る頃だ。彼等にはなにがなんでも隠さなければ。

帰ったら寝ようと考えてたはずなのだが、そんなものはとつくに吹き飛んでいた。

「……………つと、噂をすればってか」

一夏達の事を考えてると丁度よく扉が叩かれる。医療器具等を素早く片付け、扉を開けるとそこには――。

「うわ……………なんだその顔」

「すいません、柳さん。……………早速、相談良いですかね？」

――頬に真っ赤な手形を付けた一夏がいた。

「ほら、こんなもんで良いだろ。俺は使わねえから何枚か持ってけ」

「ありがとうございます……………」

「それで、相談ってなんだよ。まさか篠ノ之にビンタでもされたか？」

湿布を貼って貰った一夏は何処かどんよりとしている。相談事とは頬の腫れと関係があるのだろうか。

普段なら一夏とセットで来る篠ノ之も今日は来てない。喧嘩でもしたかと思つていたが、どうやら違うようだ。

「いえ、箒じゃなくて、鈴に……………」

「あ？誰だよそいつ」

「え？ああ、柳さんには紹介してませんでしたね。ほら、朝のSHRが始まる前に教室にいた背の低い……………」

「……………ああ、なんかちっこい奴がいたっけな」

例の怪文書の件や眠気全開で顔に出ない程度に苛ついていた為よく覚えてなどないが、確かにそんな奴がいた気がする。しかし何故その生徒に叩かれたのか、隆道はいまいち理解出来なかった。

「でもよ、そいつがなんでお前をひっぱいたのかさっぱりわかんねえぞ。喧嘩でも売

られたか？」

「いえ、鈴——凰鈴音って言うんですけど、俺の幼馴染でして。突然俺の部屋に来て箒に部屋を変えてくれって言ってきたんです」

「ほー、中国人なのか。……………ん？部屋変えてくれって、それ無理じゃね。なんのための割り振りだよ、横暴過ぎんだろ」

「はは……………まあ、当然箒と揉める訳で……………。揉め事は一旦収まったんですけど、問題……………というか相談はこの後の事にして……………その……………」

次第に彼の声が小さくなり、目も次第に背け始める。どうも歯切れが悪い。その時、ある可能性が隆道の思考に舞い降りた。

「……………またラツキースケベか？」

「ち、が、い、ま、すっ！……………えと、鈴に昔の約束を覚えてるかって聞かれました。それで、応えたんですけど……………どうやらちゃんと覚えてなかったらしくて……………それで……………」

「ひっぱたかれたと。……………ちなみになんて応えたんだ」

鈴音の事など隆道にとつては非常にどうでもいいことであり決して関わりたくは無
いのだが、彼からの相談なので私情は挟まずしつかりと聞く。原因がまだ明確になら
ない以上は助言しようがないのだ。

ちゃんと覚えてなかったということはその間違った応えにヒントはあるはず。故に答えを探る為、自身の脳をフル回転させつ耳を傾けたのだが――。

「えと、『鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚をおごってくれる』……です……」

「……………」

「????」

――聞いても全くわからなかった。

（料理の腕が上がったら？毎日酢豚を??おごってくれる??）

隆道のフル回転ブレインは急停止した。全然理解が出来なかったのだ。どう考えようとしても正解が導き出されなかった。

しかし、ここで諦める隆道ではない。停止した思考を再び高速回転させ、思考の海に沈む。

（腕が上がったらつうことは料理人……………いや、普通ビンタしねえだろ。……………毎日酢豚を奢る?……………胃がもたれるつうの、つかその前に飽きるわ）

「その『料理の腕が上がったら毎日酢豚を』までは合っていたらしいんですけども……………」

（うっそだろ中国人。昔は不味かったからそのリベンジ……………か?どう聞いても料理人の挑戦としか思えねえ……………いや、毎日食わす必要ねえだろ……………これも違う……………）
いくら考えても答えが出てこない。しかし、途中まで合っていると彼は言ってるの

だ。ならばその後の間違った部分を変換させれば良い話。それだけならば簡単に済むのだが――。

(奢る……………毎日……………奢る……………酔豚……………)

隆道はついに答えを導き出した。

「……………全っ然わかんねえ。お手上げ。意味不明」

――わからないということがわかった。

「なんなんだよ、毎日酔豚って。それだけでも意味不明なのに奢るじゃねえのかよ。いや、奢るも意味不明だけだよ」

「うう……………。何が間違ってたんだろ……………」

隆道は今後も知ることは無いだろうが、彼女の言っていた約束とは正確に言うところ――

『料理が上達したら、毎日あたしの酔豚を食べてくれる?』

——である。

つまりこれはある漫画によって一時期有名になった——。

『僕の為に味噌汁を作ってくれませんか?』

——という、一昔前のプロポーズ（告白?）をアレンジしまくったものなのだ。

味噌汁Ⅱ毎朝、妻が起きて朝食の為に作る。つまり結婚、または同棲しているという意味に極めて近い意味合いになるのだ。

こうして毎日味噌汁のくだりはいつしかプロポーズ（告白?）になった訳だが、彼女はその意味を良く理解していなかったようだ。

そもそも味噌汁は日本人に馴染み深い汁物だからこそ毎日食べられるのであって、豚など毎日出されたら飽きられてしまう。というよりそれしか作れないのかと疑いがかかる。

それに今のご時世この味噌汁のくだりは効果が薄い。何せこんな世の中だ、好き好んでする人間など極少数だろう。逆に命令されるのではないだろうか。

彼女の捻り曲がったアレンジを即座に理解し賛同する人間がいたとするならばその人間は彼女の思考を知り尽くしている人間か、超思考の持ち主か、はたまた単に彼女の味方になりたいだけか。

約束を間違えた一夏も一夏だが、彼が鈍感だということにも関わらずアレンジしまくった

プロポーズ（告白？）をした彼女にも非がある。いや、暴力を振るつた分彼女の方が悪いだろう。

どちらにせよ、正確な答えを知ったところで隆道は理解出来ない。女性の考える事などわからないのだから。

「篠ノ之はわかつたのか？」

「馬に蹴られて死ねって言われました……………」

「んだよ、知つてそうじゃねえか。だったら教えてくれたって……………いや、その様子じゃ無理か。悪いな、力になれなくて」

「あ、いえ。俺が悪いんですよ……………多分」

「多分てなんだよ……………」

わからない事をそのままにせず相談した彼は立派であろう。しかし、相談する相手が盛大に間違つていた。

（……………味噌汁うんぬんか？いや、それこそあり得ねえだろ）

隆道は惜しい所まで辿り着くが、あり得ないとUターンの如くその答えから遠ざかる。

結局この日は、一夏の相談の解決には至らなかつたのであった。

翌日の生徒玄関前廊下に貼り出された用紙。その表題にはこう記されている。

——『クラス対抗戦日程表』——。

一回戦の相手は二組。一夏VS鈴音が決定した。

第十七話

世界の何処かにあるとある部屋。薄暗いその部屋は至る所に機械という名のがらくたが散乱しており、それはまさに瓦礫の山。床はケーブルによって樹海のように埋め尽くされている。そんな不気味な部屋を歩く小さな物体。

それは『リス』だった。それも『機械仕掛けの精巧なリス』。ソレは生き物のよう動き、時折乱雑に転がっている部品をかじり、全く別の部品へと造り変えていく。

かじっただけで部品を分解、吸収、再構成する出鱈目なリスなど、世界中の何処を探しても存在はしない。

——この場所を除いて。

そしてその部屋の奥に見える三つの人影。いや、一つの人影と三つの人影のようなのだろうか。

そこに陳列しているのは『真つ黒な三体の巨人』。その三体の前に佇む一人の女性。彼女の姿は誰が見ても異色そのものだった。

真つ青なワンピースにエプロンと背中の子供の大きなリボン。そして彼女のトレードマークでもある白兎の耳を彷彿とさせる機械仕掛けのカチューシャという格好。

その姿は『不思議の国のアリス』に登場するキャラクターを二つ合わせたもの。

顔立ちは不健康に淀んだツリ目であり、その目の下にはくつきりと隈がついている。どう見ても寝不足である。

そして何より目立つのは胸の膨らみであった。胸を留めるボタンはギリギリまで引つ張られている。大半の女性がそれを見れば圧倒的敗北感に駆られる事だろう。

「……………」

そんな不気味過ぎる彼女の前に浮かぶのは空中投影のディスプレイとキーボードがそれぞれ六枚ずつ。

優秀な人間でさえ思考が止まってしまいそうな膨大なデータを前に、彼女は表情を変えることなく目配りしつつキーボードをピアニストのように滑らかな動きで叩いている。その行動によつて数秒単位で切り替わっていく画面も全て把握しながら。

彼女はもはや『天才』処ではない。

世界の何もかもを変えた『天災』そのもの。

「おくりわりつと。……………君達は少しの間待機だよん。さてと、お仕事しなくっちゃ」

作業を終えたのか、彼女は操作を止めて背伸びをしている。一体どれ程の時間を費やしたのか、身体を動かす度にパキパキと音がなっていた。

誰が見ても彼女は寝不足で、今すぐにも寝るべきだ。しかし、彼女はその『お仕事』を優先してるのか颯爽と部屋から出ていった。

その三体の前にはディスプレイが残されている。そこに記されている様々な情報の中に、一つだけ目立ったものがあった。

『最優先事項。目標『柳隆道』と『篠原日葵』の——』

クラス對抗戦の日程表が出された日の放課後。生徒指導室には教員が一人仁王立ちで佇み、生徒が一人椅子に座っていた。その生徒は足を組み椅子に寄りかかるといふ、明らかに教員の話を聞く態度ではない姿勢で。

そんな生徒を睨む教員は千冬、そしてその眼力に全く動じずにへらへらと笑う相手は——。

「……………篠原。何故ここに呼ばれたか、わかるな？」

「全つ然わかりませんですけどお」

「昨日の放課後に柳と接触したそうだな。目撃したと生徒から報告があつたぞ」

「へー、見られてたんですねえ。……………で、それがなにか問題でもあるんですかあ？」

「悪びれずに応える彼女——日葵は笑顔を絶やさず目を決して逸らさない。その貼り

付いたような表情に彼女は寒気を覚えた。

——『篠原日葵』——。

今年入学した新入生の中ではぶつちぎりの問題児として教員に最大の警戒をされている生徒。

一年三組のクラス代表、二人目の男性 I S 操縦者である隆道の実妹。

そして日本国家代表に最も近いとされている代表候補生であり、日本の『穩健派女性権利団体』に所属する——その会長の娘。

彼女の實力はこれまでの在校生と比較しても群を抜いていた。

筆記試験に関しては他の生徒と大差無いが、実技試験は彼女が断トツだった。

何せ試験を担当した教官を、手加減無しの状態で一分も経たずに無傷で倒したのだから。

そう、教官を倒したのはセシリアだけではない。では何故知られていないのか。

その試験を見ていた全ての教員は恐怖を抱いたのだ。笑顔を絶やさずに教官を煽る彼女に。あまりにも暴力的だった彼女の試験は機密扱いとなった。

本来ならば彼女の人格を考慮して入学させるべきでは無いのだが、それは出来ない。彼女の背後には女性権利団体と一部の政府がいる。そして何より、IS適性も高かった。

IS適性にはランクが存在する。ISを操縦する為に必要な身体的素質であり、値が高いほどISを上手く使いこなす事が出来るのだ。しかしこれは訓練や操縦経験の蓄積によって変動するため絶対値ではない。

ランクはS、A、B、Cと大まかに格付けしており、中でも『S』は千冬を筆頭に国家代表クラスの数名しか存在しない。

イギリス代表候補生のセシリアはA+、中国代表候補生の鈴音はA、一夏はB、隆道と箒はCと現時点でのランクはこのようになっていた。

そして日葵のIS適性値は——S寄りのA++。

高ランクの適性値を持つ彼女は国籍保持の為にどの代表候補生よりも高い待遇を受けており、必ず入学させるとIS委員会 upper 層部から通達があったのだ。IS学園は拒否

を許されなかった。

彼女が入学する事に教員は不安を隠せなかったが、その悪い予感は的中した。

彼女は入学して早々クラス全員に喧嘩を売り、一組がやったようにI Sを使った決闘を行ったのだ。他のクラスには内密にして。

彼女を除いた、最も適性値が高かった生徒がこの試合に挑んだのだが、結果は悲惨の一言に尽きた。

互いに訓練機ではあるが、素人と代表候補生。これだけでもどちらかが勝つなど目に見えている。あっさりと終わるはずの試合なのだが、彼女は決してそうはしなかった。

格の違いを見せつける為に、今後決して逆らわない為に徹底的に相手を痛めつけたのだ。

教員は流石に彼女を止めた。でないと相手が壊れてしまうからだ。この試合結果にも当然箝口令が出された。

相手を故意に痛めつけた彼女は既に処罰の対象のはずなのだが、高待遇により却下されている。圧倒的な強さの前に三組の生徒達は恐怖、又は崇拜を植え付けられ彼女に逆らおうとしなくなった。

既に三組は彼女の支配下にある。しかし、それに飽きたらまず彼女の暴れっぷりは止まらない。なんと自身のクラスだけでなく上級生数人にも牙を向き、同じく髑り殺しにし

て支配下に置いてあるのだ。

彼女は代表候補生の中でも別格だが、それを知る人間は少なく、一般には公開されない。何故ならそうするように背後の人間が情報操作をしているからだ。

わざわざ格が違う存在に齒向かう者などいない。故に、敢えて実力を隠し、何も知らない相手を一気に地獄に叩き落とす。それが彼女のやり方。それが他者を蹴散らす為に課せられた役目。

世間に存在する、ただ権力を振り翳し威張り散らすだけの人間ではない。巨大な力を持つてしまった暴れ狂う悪魔のような存在——それが篠原日葵である。

千冬は彼女については日本代表を退役する前から知っており、どれだけ危険人物なのかも知っている。隆道の家族構成の調査書を見て、彼の身内である事も知った。だからこそ、今まで散々近づくなと彼女に注意したのだ。彼が彼女の事をどう思ってるかわからない以上接触させるべきではないと判断したための行動であったが、それも無駄に終わってしまった。

「以前忠告したはずだ、柳には接触するなと」

「そうは言っても血の繋がった兄ですよ？八年振りなんですから再会ぐらい良いじゃないですかあ。織斑せんせーだって弟さんとしばらく離れたらそうするでしょう？」

「……………奴が今どんな状況か、お前はわかっているのか？」

「織斑せんせーが言ったんじゃないですかあ。女性不信によるPTSDですよねえ？それとも通常のものとは違う『複雑性PTSD』。えーと確かC—PTSDで名前でしたっけえ？」

——『複雑性PTSD（C—PTSD）』——

短期間に起こった要因で重度のストレスを感じてトラウマを引き起こし発症するPTSDとは違い、逆に長期に渡って重度のストレスやショックを受け続け、後に発症するのが複雑性PTSDと呼ばれてる。隆道はその後者に該当するのだ。

彼の持つ症状は追体験（フラッシュバック）と悪夢、外傷体験に関連する刺激の回避や精神的な麻痺、過覚醒と薬物の使用、そして自傷行為に摂食障害と非常に多い。

彼は自分語りを決してしない為に通常のPTSDと判断していたが、ここ最近の彼の行動の観察と生徒からの報告、部屋の状態を知った事でようやく判明したのだ。

彼は一刻も早くこの学園から離れて治療を受けべきだ。それも女性とISから隔離した徹底的な治療を。しかしそれすら難しいのが現状である。

彼は様々な所から狙われている。治療と漬け込んで近づく人間はいるだろう。故に彼はこの場所に留まるしかないのだ。

「にーには変わり果てちゃったなあ、昔はあんなに格好よくて元気だったのにい。あ、今

も十分格好いいなあ。ヒヒツ」

「……………」

気味が悪い。悪すぎる。まるでこれっぽっちも悪いと思つてないような素振りをする彼女に戦慄を覚えざるを得なかった。

彼女もまた隆道と同様に今までにないタイプだ。自分に対して憧れも、恐怖もない。常に貼り付いたような笑顔である為、考えてる事が今になつてもまるでわからない。

「……………本来ならば今すぐにも拘束し退学させたい所だが、今の私ではお前に手出しは出来ん」

「ああ、随分と怖い事言いますねえ。まあそうですよねえ、今は肩書きだけ残ったただの教師ですもんねえ。イヒヒ」

「黙れっ……………いいか、もう一度忠告する。今後、決して、柳には近づくな」
「えええ。にーにともつとお話したいい」

目の前の彼女を見てみると気が狂いそうだ。早々に話を切り上げてこの場から立ち去ろう。そう思つた時だった。

「まあ、いつか……………とところで話は変わるんですけどお。織斑せんせーに見せたい物があるんですよ」

「……………なんだ」

「これですこれえ」

「……………?」

そういつて彼女は自身の首元を指差す。千冬がそれを注視すると彼女はリボンとYシャツのボタンを二つほど外し、襟を捲つてソレを見せた。

「……………?!!?!」

「あはあつ!?!? どうですこれえ? 中々似合うと思いませんかあ?」

「お、お前つ……………それはっ!?! いつからっ!?!」

「これはあ、織斑せんせーが退役して直ぐですよ。なんかこれえ、自分じやあ外せないんですよ。あ、ご心配無くう、手続きは昨日済ませたので問題は無いですよ。後で確認してくださいねえ」

千冬は悪寒が止まらなかつた。彼女のソレを見ただけではない。

ソレを見せた途端、彼女は次第に歪みきつた表情となつたのだから。

隆道の『どす黒い何か』とは別物。

それは『得体の知れない何か』。

「にしても奇遇ですよねえ。やっぱり兄妹だからかなあ？あぁ、運命感じちゃうなあ」

「篠原……………お前はっ……………！」

「イヒヒツ。学園生活が楽しみですねえ、織斑せんせい？」

一夏と鈴音のいざこざから数週間経った五月。クラス対抗戦まで残り一週間となり、アリーナは試合用に調整される。その為、ISを用いた特訓は今日で最後となる。

「未だに顔を背けられるんですけど、本当にこれで良かったんですかね」

「向こうが拒否してんだから構う事ねえだろ。前にも言ったが下手に近づいてみる、何言ってくるかわかったもんじゃねえぞ」

結局の所、鈴音の機嫌は数週間経った今も直らなかつた。むしろ日増しに悪くなっている。

彼女から一夏に会うことは無く、たまに廊下や食堂で会っても露骨に顔を背けられるのだ。

彼は叩かれた翌日に謝ろうとしたのだが、彼女はそれを聞こうともせず逃げてしま
う。何度かそれを繰り返して、完全にお手上げになった彼はまたしても隆道に相談をして
しまった。

『ほつとけばいいんじゃない、ああいう奴は下手に近づくと騒ぎ出すからな。どうせ痺
れを切らして向こうから来るんだろ』

結論。彼は鈴音を放置することにした。隆道に女性関連を聞く事事態が間違いなの
だが、彼がそれに気づくのははたしていつになるだろうか。

そんな事はさておき、現在は放課後。クラス対抗戦に向けた最後の特訓の為に彼等は
第三アリーナに向かっていた。ちなみに彼等の数メートル後ろには箒とセシリアもい
る。

「まさかここまで柳さんと進展無しだとは思ってもいませんでしたよ……」

「もう諦めた方が良いのではないか？ 未だに会話すら出来ていないのだろうか？」

(……………つて言ってますけど)

(知ったことかよ。ライム女と話す事なんて一つもねえつつうの)

ここ数週間における放課後の特訓でセシリアは毎回、一夏經由で隆道を誘ったのだが
全て拒否されている。何度か彼女本人が直接誘うという荒業を繰り返したのだが、それ
に対して隆道は自身の必殺技『O・O・G』アウト・オブ・眼中を炸裂。相手にすらされない彼女の心は今

にも折れそうだった。

しかもあまりにしつこいと感じたからか、隆道は彼女の事を『馬鹿』から『ライム女』と言うようになった。いくら女嫌いであれど、これは酷すぎるのではないだろうか。

隆道が訓練の誘いを断つたのは単純に彼女が要因なのは確かだ。しかしここ最近はそのだけでなく、一人で考え事をしたいからであった。

(もう数週間は経ってるんだぞ………なんで何もしてこねえ)

あの日から今日までの数週間。何があっても良いようにいつも以上に警戒を張り巡らし身構えていたが、結局何も起こらなかったのだ。それがかえって不気味に感じた。『覚悟してねえ、にーに』

どう考えても自分と一夏を潰す予告だった。しかし何も起こらない。それ処か接触すらしてこない。日葵が何を考えてるのかまるでわからなかった。

(日葵………お前の目的はなんだ？俺らを潰すんじゃねえのか?)

そのような思考がぐるぐると回るが、考えたところでわかりはしない。他人の心などわかるはずがないのだから。

(つと、いつけね。考え過ぎたか)

考えに耽っている内に、いつのまにか第三アリーナのAピット入り口に到着していた。もうこれ以上はよそう、襲ってこないならそれでいいと隆道は考えるのをやめた。

「今日は何するんです？……ここ最近ずつとランニングからの武装の空撃ちじゃないですか」

「いや、今日は織斑の模擬戦でも眺めてるわ。『鋼牙』もそこそこ慣れたし、流石に一人は飽きた」

「なんか、やけに『鋼牙』に拘ってますよね。何かあったんですか？」

「言わなかったっけか？……この『鋼牙』はな、実はりよ——」

自動扉を開けながら隆道は『鋼牙』に拘る理由を語ろうとした。しかし、ある少女の声に寄って掻き消される事になる。

「待ってたわよ、一………夏………」

四人の前に佇むのは、ピットの中央で腕を組み仁王立ちしている鈴音。先程まで不敵な笑みを浮かべていたのだろう。

何故、だろうと四人は思ったのか。それは彼女の表情がみるみる青ざめているからであつた。

(な、なんでコイツまでいるのよ！)

どうやら隆道がいることを視野に入れていなかったようである。やはり考えなしの脳筋で間違い無いであろう。

しかし、ここで怯む訳にはいかない。今日は一夏と話をするために彼女は来たのだ、

今更後には引けない。

「待つてたわよ、一夏!」

((何で言い直した?))

彼女は仕切り直しをしたかつたのだろう。触れたらいけない気がする、故に四人は黙る事にした。

「……………で、一夏。反省した?」

「へ?なにが?」

「だ、か、らっ!あたしを怒らせて申し訳なかつたなーとか、仲直りしたいなーとか、あ
るでしょうが!」

(うっそだろコイツ……………)

突如そんな事を言い出す彼女。あまりにも自分勝手なのではないかと隆道は顔をしかめた。

確かに謝りたいという気持ちは一夏にはある。しかしその本人が避けたのではどうしようもないのも事実だ。

「いや、そう言われても……………鈴が避けてたんじゃねえか」

「アンタねえ……………じゃあなに、女の子が放つておいて言つたら放つておくわけ!」

「おう」

隆道の助言(？)もあつてのことだが、放つておいて欲しいなら放つておいてやるのが一番だ。放つておいてくれと言われて、それでも近寄るようならしつこいと思われてしまう。

故の放置なのだが、その何がいけないのか一夏は首を傾げてしまった。

「なんか変か？」

「変かつて……ああ、もうっ！謝りなさいよ！」

彼女は頭を掻きながら焦れたように声を荒げる。そのあまりに一方的な要求には、彼は応える事は出来ない。

頭を下げることに何の躊躇もないが、自分が納得いかないまま謝罪などお断りだ。

「いや、確かにちやんと覚えてなかつた事は悪いと思つてるけどよ。説明してくれたつていいじゃねえか。」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしようが！」

「だから、なんでだよ！」

もはやこうなつてしまつては平行線だ。互いに譲らないものがある為、話が一向に進まない。

「……………」

「あ、あわわわ……………」

「や、柳さん……………?」

箒とセシリアは隆道の様子を見て慌てふためいている。既に彼の中では鈴音の評価はぐつと急降下をしていた。

元からマイナスではあるが、やかましい、厚かましい、横暴の三拍子が揃った時点でコイツも今までの奴と一緒にと目を細める。

ちなみに鈴音は彼の不機嫌に気づかない。激昂して既に周りが見えていないからだ。

「じゃあこうしましょう! 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けした方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね!」

「……………おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらおうからな」

正直のところ、一夏は彼女の要求に承諾はしたくなかった。以前の——自分とセシリアが揉めた時の状況と似ていたから。

あの日を思い出すだけで自己嫌悪に駆られる。今も未熟であると自負しているが、未熟故の過ちを繰り返したくはなかった。

しかし、ここで渋ったら彼女はまた騒ぎ出すだろう。特訓の時間をこれ以上削られては困るので此方が折れるしかない。

「せ、説明は、その……………」

「なんだ? やめるならやめてもいいぞ?」

自分で勝負の賭け事を持ち掛けたにも関わらずノーリスクはあんまりであろう。よほど説明をしたくないらしい。

故に一夏は少々の親切心で言ったのだが、彼女には逆効果だった。

「誰がやめるのよ！アンタこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

頭に血が上っているのか、もはや語彙力の無さを主張するかの如く彼に罵倒の嵐を浴びせる彼女。

ここまで言われては流石に腹が立ってしまう。故に彼は彼女が一番気にしていることを——。

「織斑、もうやめろ。時間の無駄だ」

——言う前に隆道に肩を掴まれた。

「……………っ！……………すみません、つい」

「つたく。今日で最後なんだからしつかりしろよ」

彼は隆道に心の中で感謝した。もし止めてなかったら、彼女の一番気にしている事——『貧乳』と言おうとしたのだから。彼女は自分のスタイルにコンプレックスを持っている。危うくそれを言うところであったのだ。

そんな訳で彼は止めてくれた隆道に口には出さず感謝を連発しているのだが、話に割り込まれた彼女としては非常に面白くない。

「ちよっ……………アンタ！今あたしが一夏と話してんの！脇役はすっこんでてよ！」

「はあ……………。おい、中国人」

「中国人て言うな！あたしには凰鈴音でちゃんとした名前が——」

「とつとと失せろ」

ドスの効いた声で一言放つ。確実に黙らせる為、少しばかりの『殺意』を出して。

「——っ!？」

「聞こえなかったか？失せろって言ってんだよ」

「……………ううっ！」

隆道の『ソレ』が常に見える彼女にとってはこれだけでも効果的だ。しかし、以前の接触で多少の耐性が付いたのだろう、ギリギリ意識を保つ事が出来た彼女は何も言わずピットから出ていった。

「あ、おい、鈴っ！」

「ほつとけ、どうせ対抗戦で鉢合うんだからな。それよりも時間押してるぞ、いいのか」
「……………そう、ですね。今は特訓に集中する事にします」

クラス対抗戦当日。第二アリーナで行われる第一試合は一組VS二組。つまり一夏と鈴音の対戦となる。

噂の新入生同士ということもあってアリーナは全席満員であり、それ処か通路まで生徒で埋め尽くされていた。会場に入れなかった生徒や関係者はリアルタイムモニターで観戦することだ。

（大丈夫……………大丈夫だ、やれることは全部やった。後は試合で出し切る……………それだけだ）

既に両者はISを展開し、アリーナ内で待機している。対戦相手の鈴音も試合開始の時を静かに待っていた。

——第三世代近・中距離両用型 I S 『甲龍』（シエンロン）——。

彼女の I S は『ブルーティアーズ』と同様に非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的であり、肩の横に浮いた棘の付いた装甲が攻撃的な主張をしている。

機体のデザインもまさに中国らしい装飾をしており、観客席の生徒達はそれに注目するのだが、一夏は全く別の所に意識を向けていた。

（シエンロン………か。ダメだ、どうしてもアレを連想してしまう。………よし、『こうりゆう』と呼ぶことにしよう）

緊張してると思いきや、何度も『有名な龍』が脳内で暴れ回るので別の呼び名を考えていた。彼は結構余裕があるのではないだろうか。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、彼と鈴音は空中で向かい合う。その距離は五メートルと近距離状態で、直ぐ様動ける様に身構えている。

始まる前の挨拶として、二人は開放回線（オープン・チャンネル）を用いて言葉を交わした。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ」

「二応言っておくけど、I S の絶対防衛も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

「……………」

それは決して脅してではない。それを証拠に、I S操縦者に直接ダメージを与える”ためだけ”の装備も存在する。もちろんそれは競技規定違反だ。試合でお目にかかる事は絶対に無い。何より人命に危険が及ぶ。

しかし、既存の武装でも——。

——殺さない程度にいたぶる事は可能である。

口振りからして、彼女にはそれが可能なだろう。いや、代表候補生以上の人間はそれが出来るはずだ。相手をいたぶる事など。

しかし彼は恐れない。何故ならば——。

「……………知っているさ」

——彼は既に目の当たりにしたからだ。

あの日の事は決して忘れはしない。隆道の全身全霊の悪足掻きを受け、地表で苦しみに悶えるセシリアの事を。

本来はそこにいるはずだった自分。

自分の身代わりとなり、血に塗れた隆道。

今度は自分がそれに出会すかもしれない。

怖くないと言えば嘘になる。

しかし、一夏は逃げはしない。

隆道も自分の為に覚悟を決めて戦ったのだ。自分も覚悟を決めなくてどうする。

『それでは両者、試合を開始してください』

「行くぞっ！鈴っ！！」

自身の唯一の武器となる『雪片式型』を展開し、彼は構える。

——織斑二夏の、人生初となる本気のIS戦が幕を開ける。

第十八話

試合開始のブザーが鳴り終わると同時に二人は動き出す。一夏は接近戦しか行えない。故に未だに武装を展開していない鈴音に向かって突っ込んだ。

それを見て彼女も笑みを浮かべながら近接武装を瞬時に展開、彼に向かって急速接近する。近接は手慣れているのだろう、彼よりも速く斬りかかる事に成功した。

「うおっ!？」

彼は即座に反応し、その斬撃を自身の武器で防御。ダメージを受けることはなかったが、その衝撃で大きく弾き返される。

それによって体勢を崩してしまったが、特訓で身につけた飛行技術を駆使しどうにか安定させて彼女を正面に捉える事が出来た。

(は、速えっ！箒と同じ、いやそれよりも上……!!)

先手を打つつもりが自分が先手を打たれた。自分より相手の攻撃動作が速かったのだ。

彼女の機体は近・中距離両用型だが器用貧乏という訳ではなく、機体スペックの意味合いでは近接格闘型だ。パワーも優れている。

それに加え、彼女の I S 適性値は A だ。B である彼や、C の筈よりも機体を使いこなす事など造作もない。

更にダメ押しとして——彼女は代表候補生。それも一年も経たずにその称号を掴んだ、優れた才能を持つ少女。

(これが………代表候補生っ………！)

舐めていた訳ではない。しかし、特訓の際の模擬戦で手加減はされたとはいえセシリアとも戦ったのだ。ほとんど勝つ事は出来なかったが、接近そのものは次第に何度も成功したので多少なりとも自信はついていた。

(くそっ、さっきまでの自分を殴りてえっ！)

だがそれはあくまで手加減された模擬戦であり、今は本番試合。更に相手は中距離を得意とするセシリアではなく、近接格闘を得意とする鈴音だ。状況はまるっきり違う。

こうもあっさり格の違いを見せ付けられると彼女を甘く見ていた事を実感してしまい、彼は自分を恥じた。

「ふうん。初撃を防ぐだなんてやるじゃない。けど——」

「!!」

彼女は余裕の表情を見せながら両手で持つソレをバトンでも扱うように回す。

異形の青竜刀——と呼ぶにはあまりにもかけ離れた形状の大型な刀剣が彼女の近

接武装。

——大型ブレード『双天牙月』そうてんがげつ——。

両端に刃を備えたその武器は持ち手の中央が不自然な形をしていた。それを見てまさかとある事が思い浮かぶ。——そしてそれは現実となった。

「これならどう!?!」

『双天牙月』の持ち手が折れ、二つに分離する。彼女の武器は瞬時に『一つ』から『二つ』
——二刀流になったのだ。

「くっ!?!」

縦、横、斜めと自在に角度を変えながら斬り込む彼女の攻撃に防戦一方にならざるを得ない。

此方の手数は『一』。対して彼女は『二』で、しかも高速回転を織り交ぜた連撃は隙が無い。

本来ならば既にダメージを受けてもおかしくはないはずなのだが、箒との模擬戦によつて接近戦の経験を積んだ彼はそれを辛うじて捌く事が出来た。

(まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を——)

「——甘いつ!!」

距離を取ろうと彼女の攻撃を躲し、離れた瞬間にそれは起きる。

彼女の非固定浮遊部位が可動し、中心の球体が光を放った直後に彼は吹き飛ばされた。

「どわあっ！」

その衝撃によつて視界は暗闇に傾きかけるが、I Sにはブラックアウト防御機能があることによつて意識を取り直す。

何が起こつたのかわからない。まるで突然『殴り飛ばされた』かのような衝撃を受けた事に疑問が尽きないが——当然ながら相手は待つてくれない。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる彼女。それと同時に再び彼に衝撃が襲い掛かる。

「ぐあっ！」

防御態勢も取れず、もろにソレを直撃した彼はとうとう地表に打ち付けられる。

そのダメージがシールドバリアーを貫通して届き、全身に痛みが彼に振り掛かった。

(み、見えねえ……………！ いったいなにが……………！)

距離を取つたにも関わらず吹き飛ばされた。その時が来る前に可動した非固定浮遊部位。そこから導き出される答えは——。

「これが鈴の特殊兵装……………！」

「なんだあれは……………？」

『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃そのものを砲弾化して打ち出す第三世代特殊兵装ですわ」

Aピットからリアルタイムモニターを見ていた箒の呟きに応えたのはセシリア。彼女がここにいるのは一夏が出る最後の最後まであれやこれやと指導し、彼が出た頃には観客席と通路が生徒で埋め尽くされていたからであった。

本来ならばもつと前から観客席か通路にいたべきなのだが、彼は初の試合だからギリギリまで指導させてほしいということ。千冬は多目に見たのだ。その役目を終えた彼女達を会場の外に出すのはあんまりなのでこうしてピットに残っている訳である。

「一夏……………」

箒は彼がダメージを受ける度に胸を痛めた。激しい連撃に翻弄される彼の身を案じているのは勿論だが、それと同時にある光景が蘇っていた。

(これでは……………あの時と同じではないか……………！)

その光景とはかつてセシリアの特殊兵装に黜られた隆道の姿。ひよつとして一夏も彼と同じ目に会うのではないかと思わずにはいられなかつたのだ。

その激しい戦鬪を目の当たりにして、箒は勝利よりもただただ無事を願っていた。

「……………ところで箒さん。柳さんがまだお見えになりませんが……………」

「え……………うああ、そういうえば始まる前にトイレへ行くと言つたきり戻つてこないな」

「ああ……………」

学園内で男子が使用出来るトイレは三ヶ所しかない。それもアリーナ内ではなく、校舎のみだ。こればかりは生理現象なのでどうしようもない。

他のトイレを使おうとしてその場で生徒に出会いしまつたら、女子トイレに侵入する変態として直ちに社会的抹殺を受ける事だろう。

だがそれにしたつて遅すぎる。予定では開始直前にはここに戻つて来るはずだ。何かで道草でも食つているのだろうか。

ちなみに彼もピットに入る事を許可されている。そもそも彼を一人観客席や通路に置いていく事など出来やしない。そんなことをしたら彼は精神的に潰れてしまう。

以上の理由で彼に残された手段は自室待機のだが、一夏達の頼みによつてピットに入る事を千冬は許可した。

もつとも、その本人が来てない以上無駄に終わった訳だが。

「連絡は出来ませんか？」

「あの携帯は持つてないらしくてな。…………織斑先生、柳さんは今どこに？」

「ああ、少し待て。全く、入室許可を出したというのにこれでは意味……………が……………んんん？」

「……………織斑先生？」

隆道の位置を正確に知る事が出来るのは今のところ千冬だけだ。よつて彼女はタブレットを取り出し彼の位置を確認したのだが、それを見て彼女の表情は次第に疑問に満たされる。

「何故、Bピットにいるんだ……………？」

場所は変わつてBピット。そこに佇むのは青年が一人、隆道だった。

トイレを済ませた彼は通路に埋まる生徒達を嫌々ながらも掻き分けてピットに向かったのだが、何故彼は彼女達がいる反対側のピットにいるのだろうか。

「なんだよ、ここBピットじゃねえか」

一人愚痴る彼であつたがここにいる理由は至つて単純、道を間違えただけであつた。一人でアリーナに来た事が無い彼はろくに道を覚えていなかったのである。

「どうすつかな………また通路に戻れつてか？」

「ここに来るまでの通路を引き返すのは正直御免だつた。女子で埋め尽くされてるといふのも理由の一つ。そしてもう一つは——。」

「くせーんだよ、なんだよあの匂い。鼻曲がるつつうの」

何も生徒の体臭がキツイということではない。その正体は香水だつた。

全員が香水を付けてる訳ではないが、十数人がそれぞれ違う香水を付けていたのだ。それが狭い通路に密集するとどうなるか。

様々な匂いが入り混じり、香水に慣れてない人間にとっては悪臭に近い物と化したのだ。

埋め尽くされた女子生徒に数々の香水の匂い。そんな通路に戻るなど、彼にとっては拷問を受けてる状態で更なる拷問を受けるのと一緒だつた。

「……………めんどくせ、ここでもいいか」

彼はここ留まる事を決めた。ここにもリアルタイムモニターがある。そして憎き世界最強も、牛眼鏡も、ライム女も、女性も誰一人としていない。彼にとってはうつつ

けの場所だ。

(でもなんだ？何かがおかしい……………。それにさつきから視線を感じる……………) 違和感と視線を感じ、周囲を見渡すが当然誰もいない。気のせいなのだろうかと彼はそれを抱いたまま試合を見る事にした。

彼は覚えて無いが故に道を間違えたが、厳密に言えばそうではない。

何故なら、彼は電光掲示板の通りに進んだからだ。

その電光掲示板は、見たときにはしつかりと『↑Bピット Aピット↓』と記されていたのだから。

しかし誰もそれに気づかなかった。

その電光掲示板から目を反らした瞬間にノイズが走り、『↑Aピット Bピット↓』に変わった事に。

「よく躲すじやない。衝撃砲『龍咆』りゅうほうは砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」
アリーナで未だに余裕の表情を見せる鈴音。それに対して一夏は苦虫を噛み潰したかのような表情だ。

彼女の特殊兵装は言った通り砲弾も、砲身すらも見えない。それが何より厳しいと感じた。それだけでなく、砲身射角がほぼ制限無し——つまり360°の砲撃が可能なのである。

射線はあくまで直線だが、彼女の能力がかなり高い。無制限機動と全方位への軸反転など、飛行基礎の全てを高いレベルで習得している。

それらが上手い具合に噛み合っているのだ。彼にとつてはかなりの強敵だ。

(ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせてるが、これじゃダメだ。撃たれてからじゃ反応が遅れちゃう。どこかで手を打たないと……………)

彼女の怒濤の連続砲撃を躲しながら彼は思考を走らせる。このままでは一撃も与えられず敗北してしまう。それは何よりも避けたい。

(思い出せ織斑一夏っ！何か策をつ！)

『俺の武装打つ放してる最中で悪いんだけどよ。その『雪片式型』に搭載されている『零落白夜』、どれくらい強力なのか試しにちよつと突いてみるよ』

『え、良いんですか？』

『別に良いだろ。死ぬ訳じゃあるまいし』

『……………じゃあ、失礼しますよつと』

『……………うわっ待て待て引っ込めろ引っ込めろっ！』

『おわつと!!』

『あつぶね。うわ……………軽く突きつけただけで半分も減ったぞ。これあれだな、当てる間シールドエネルギーは継続的に減るみたいだ』

『じゃあ、もし直撃でもしたら……』

『絶対防御の発動とエネルギーの消失、相手は一撃で終わるな。良かったじゃねえか、当てれば絶対勝てるぞ』

『簡単に言ってくれますね……』

「……………」

隆道と二人で武装御披露目会をしている最中であつた出来事を思い出す。この状況を打破するには自身の単一仕様能力を使うしかない。

ここしばらくの訓練は近接格闘や急加速停止といった基礎移動技能に費やした。それに加えて箒の剣道訓練、セシリアの特殊兵器を用いた回避訓練。それらによつて武器の間合いと特性は把握し、IS操縦も人並み以上に習得出来た。

(後は……諦めない事、ただだな)

実力差は歴然としている。しかし、勝てる可能性は少なからずある。決してゼロではない。

であるならば残すは『強い意志』を持つことだ。負けないという『強い意志』が。

「鈴」

「なによ?」

「本気で行くからな」

彼は真剣に彼女を見つめる。彼の言葉は決して今まで手を抜いていたという意味ではなく、自らの折れない意志を相手に強く主張するためだ。

そんな彼の気概に押されたのか、彼女は曖昧な表情を浮かべた。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とつ、とにかくつ、格の違いつてのを見せてあげるわよ!」

彼女は惚けた顔から直ぐに真剣な顔に戻し、『双天牙月』を一回転させて構え直す。そしてその衝撃砲が火を噴く前に距離を詰めようと彼は加速姿勢に入り、ある技能を繰り出した。

それは彼の、強敵である彼女を倒す唯一の策。相手の懐に瞬時に近づき『零落白夜』を当てるための手段。

——『瞬時加速』——。

機体の後部スラスターからエネルギーを放出。そのエネルギーを内部に一度取り込み、圧縮して再度放出する事によって爆発的な加速を生み出す技能は一瞬で相手に接近することが出来る。

一週間前から練習し、ようやく身につけた『瞬時加速』はタイミングを間違えなければ

ば代表候補生クラスとも渡り合える代物だ。

「ぐっ!?!」

その加速によって急激なGに意識が持つていかれそうになるが、操縦者保護機能がそれを防ぐ。

素人が『瞬時加速』を習得していないだろうという考えを持つ彼女に出来る奇襲戦法、よつてこの奇襲は一度しか使えない。これを逃したら後は無いのだ。

だからこそ、先程まで渋っていた『零落白夜』をここで放つ。確実に当てるために。「うおおおおっ!!!」

彼の思惑通り、彼女は不意を突かれたのかその場を動かない。エネルギー刃が後少しで届きそうになった——。

——その瞬間だった。

突然巨大な衝撃がアリーナ全体に走る。それと同時にステージ中央の地表が爆発し、大きな煙が立ち上がった。

「!?!」

つい二人はそれを凝望する。いったい何が起こったのか。状況がわからず混乱する一夏だったが、直ぐ様異常を察知した鈴音から飛んできたプライベート・チャンネルによつて意識は戻った。

『一夏、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!』

「は?いきなり何を——」

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています——。

「なっ——……………っ?!?!?!」

その警告によつて彼はようやく気づいた。

その煙が立ち上がる真上の遮断シールドに穴が空いている事に。

アリーナの遮断シールドはISのシールドバリアーと同様の物で、それ以上の防御性能がある。貫通などあり得ない。

しかし、それは現に貫通している。

穴の空いた遮断シールド。中央からの熱源反応。そして表示された警告。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、此方をロックしている。

ネラワレテイル？

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだよ!？」

プライベート・チャンネルの開き方などまだわからない。故に彼はオープン・チャンネルを使用し彼女に向かって叫ぶ。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるって……お前を置いてそんなこと出来るか!」

「馬鹿!アンタの方が弱いんだからしようがないでしょうが!」

確かに彼女の言う通りだ。しかし、彼は彼女を置いて自分だけ逃げる事なんて出来な

かった。

それに、此方をロックしているということは自分も標的となっている。もし自分がピットに逃げたのならばそこにいる人間を巻き込む可能性がある。故に逃げられない。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を收拾——」

「あぶねえっ!!」

「きゃっ!?!」

間一髪、彼は彼女を抱き抱えその場から離れる。その直後に先程までいた場所には太い熱線が通り過ぎた。

「ビーム兵器かよ………。しかもセシリアの武装より出力が上だ」

ハイパーセンサーの簡易解析によりその熱量を知ることが出来たが、その出力は競技仕様を遥かに上回っている。その事実には彼は背中に水を入れられた気分させられた。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿!もういいから離しなさいよ!」

「お、おう、悪い——!来るぞ!」

躲したのもつかの間、煙を晴らすかのように連続に放たれるビームが彼らを襲う。二人はそれぞれその攻撃を辛うじて躲し、しばらくするとその射手たるISが煙からゆつくりと浮かび上がってきた。

「な、なんなんだこいつ……………」

その姿はまさに異形だった。深い灰色をしたそのISは両腕が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。

何より特異なのが、全身を装甲で埋めた『全身装甲』フル・スキーンだった。

通常、世に知れ渡っているISは部分的にしか装甲を形成しない。防御の殆どがシールドバリアーと絶対防御御によって行われる為に見た目の装甲はあまり意味をなさない。勿論、訓練機の『打鉄』や隆道の『灰鋼』のようにシールドを搭載しているものもあるが、露出が一切無いISは見たことも聞いたこともなかった。

そしてその二メートルを超える巨体も、姿勢を維持するためのなか定かではないが全身にスラストターコが見てとれる。頭部には剥き出しのセンサーレンズに両腕にはビームを放ったであろう砲口が二つずつの合計四つ。

誰がどう見ても異質だ。少なくとももともではない。

「お前、何者だよ」

『……………対象ヲ確認。行動ヲ開始スル』

謎の乱入者から聞こえたのは、感情を一切感じることの出来ない機械音声だった。

その言葉を聞いて彼は寒気を覚える。間違いない、標的は自分なのだ。

『織斑君！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出して下さい！ 直ぐに先生達が制圧に行きま

すー!」

回線から聞こえて来るのは真耶の声。心なしか、いつもより声に威厳がある。それはそうだ、何せ生徒が危険に晒されているのだから。

「——いや、先生達が来るまで俺達で食い止めます。つうわけで……いいな、鈴」
「だ、誰に言ってるんよ全く……」

『織斑君!?!だ、ダメですよ!生徒さんにもしもの事があつたら——』

真耶の言葉はそこまでしか聞くことが出来なかつた。目の前の巨人が体を傾けて突進し、それを避けるのに集中していたからだ。結果躲す事が出来たが相手も滑らかな機動で此方に体を向ける。既に戦いからは逃れられない。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね。………一夏?」
「………ああ、みたいだな」

彼はそう返事したが、ある違和感を抱いていた。何かがおかしいと。

(なんでこのタイミングで?俺を狙うならもつと前にもあつたはずだ。なのに………)

だがそれを考えても仕方がない。敵は自分を狙っていることは確実なのだ。

「一夏。あたし達の役目はあくまで時間稼ぎよ。無理に突つ込まないようにな」
「わかつてるさ。じゃあ、行くぜ」

互いの武器の切っ先を軽く当て、それと同時に二人は散開した。

彼等の勝利条件。それは教員達が援軍に来るまでの時間稼ぎと生存。

——しかし、それは決して叶う事は無い。

「もしもし?!織斑君聞いてます?!嵐さんも!聞いてますー!?!」

真弥は彼等に何度も問い掛けるが返事は返ってこない。既に彼等は謎のI Sと戦闘を繰り広げていた。

「織斑先生!わたくしにI S使用許可を!直ぐに出撃出来ますわ!」

「……………そうしたいところだが、——これを見ろ」

セシリアの言うことはもつともだ。今近場にいる専用機持ちは彼女ただ一人。隆道も専用機持ちだが、彼を戦わせる訳にはいかない。そもそもこの場にはいないのだから指

示を出せるはずがないのだ。

故に援護に向かわせるべきなのだが、千冬は落ち着いた様子で端末を数回ほど叩き表示される情報を彼女に見せた。

「第二アリーナ……遮断シールドがレベル4に設定……?しかも、扉は全てロックされて——あのISの仕様ですよ!?!」

「ああ、そのようだ。これでは避難することも救援に向かうことも出来ない、な」

端末を叩くその手は苛立ちを抑えきれないほど忙しない。一見落ち着いた様な千冬本人が誰よりも焦りを感じていたのだ。

「で、でしたら緊急事態として政府に助勢を——」

「やっている! 現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、直ぐに部隊を突入させたいが……」

「織斑先生……?」

「……現在、どの外部入力も受け付けないと報告が上がっている。再起動も不可能だ。完全にしてやられたっ……!」

「そんなっ……!?!」

言葉を続けながら、益々募る苛立ちを隠せない千冬はとうとう眉を顰めてしまう。それを見た彼女は、どうしようもないんだと頭を押さえながらベンチに腰掛けた。

「なんてことですよ……。じゃあ、一夏さん達は……。」

「現状、救援を送る事は出来ない。それを織斑達に伝えようにも先程の会話を最後に通信が阻害された、くそっ……………」

救援は出来ない、それを伝える事も出来ない。現状をひっくり返すには一夏と鈴音がそれに気づき相手を倒すしかないのだ。

「なっ……………はああ……………。結局、一夏さん達がそれに気づくまで待っている事しか出来ないですね……………」

「そういうことだ……………！……………それに、仮にクラッキングを成功させて救援に向かうことが出来たとしてもお前は突入部隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

流石の彼女もこれには激昂を隠せない。自分が役に立たないと言われているのだから。「そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと……………」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？特殊兵装……………ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間……………」

「わ、わかりました！もう結構です！」

「ふん、わかればいい」

ここまで言われてしまったらぐうの音も出ない。故に彼女は両手を揺らして降参の意思表示を示す。ほっといたら軽く一時間は続きそうな指導を全て受け止める事は不可能だった。

「はあ……………。言い返せない自分が悔しいですわ……………」

何もしていないにも関わらず疲労を感じてしまった彼女の溜め息は先程よりも深い。自分出来る事など何も無いのかと気分が沈んでしまう。

「あ、あの……………柳さんは大丈夫でしょうか……………」

そんな落ち込む彼女を他所に急に話を切り出した箒。一夏が心配なのは勿論、隆道の事についても不安に駆られていたのだ。

「ああ、今のところBピットから動いてないようだ。恐らく向こうも扉がロックされているのだろう」

「な、なら良いのですが……………」

「織斑達が奴を引き付けてる以上、柳は無事だろう。……………しかし、このままではジリ貧だ。最悪ゲートを破壊して——」

千冬が強行突破を思案した、その時だった。

——事態は予想外の展開を迎える。

「お、織斑先生！新たな熱源反応を感知！数は二体です!!」

「なにつ!?!場所はつ!!」

「一つは第二アリーナ入り口付近！もう一つは………ああっそんなつ!?!」
「どこだつ!?!」

——それもとびつきり最悪な展開に。

「第二アリーナ………Bピットです!!」

「」

それを聞いた三人の時間は——止まった。

新たに現れた二つの熱源反応。

千冬は入り口付近の方に出現した方よりも、もう片方に思考を全て奪われた。

—— Bピット？

—— 何故そこに？

—— そこにいるのは隆道だけだ。

ホントウノネライハ？

「——つ?!? オルコツトオオツ!! 直ぐにゲートを破壊し柳の元へ向かええつ!!!」

「はいっ!!! 直ぐにでもっ!!!」

「ああ、くそつくそつ!!! 最悪だっ!!!」

千冬は自責の念に駆られた。隆道を一人にせず、傍にいるべきだったと。

アリーナ内にいる謎のISは、一夏が目的だと思われていたがそうではなかった。

奴等の本当の目的は――。

「『ブルー・ティアーズ』ッ!!」

セシリアは声を荒げ機体を展開し、直ぐ様ゲートを破壊。穴が空いたと同時に彼女は全速力でアリーナへと飛び出す。一夏達に彼の身が危ない事を伝えるために。

セシリアがゲートを破壊する少し前。一夏と鈴音の二人は謎のISと未だに時間稼ぎと言う名の戦闘を続けていた。

「くっ………」

「ああもうつめんどくさいわねコイツ!」

時間稼ぎとはいえ、何もせず逃げてばかりなどいられない。故に二人は無理の無い程度に攻撃を仕掛けているのだが――。

「ああ、くそつ。掠りもしねえ……………」

「てか何やってるのよ先生達は！まだ来ないわけ!？」

何度か攻撃を当てるチャンスはあった。しかし躲せるはずの無い速度と角度にも関わらず謎のISはとてつもない回避を行っているのだ。

それに、いい加減来ても良いはずの教員は未だに来ない。催促しようにも通信回線も遮断された為に来ない。もはや意味がわからなかったのだ。

「てかコイツなんなのほんと……………。ビームを的確に撃つたり撃たなかったり、目的がわからないっての」

鈴音の言う通り相手は攻撃を仕掛けたりそうでない時が何度かあった。まるで此方を倒す気が無いような、一種の手加減を感じたのだ。

完全に平行線となった状況だったが、一夏はある疑問を晴らすため鈴音に話掛ける。

「……………なあ、鈴」

「……………なによ」

「あいつ、なんか機械染みて無いか?」

「ISは機械よ」

いきなり何を言い出すんだと彼女は首を傾げるが、彼はそれに触れず言葉が続ける。

「そういうんじゃないやなくてだな。えーと……………あれって本当に人が乗ってるのか?」

「は？人が乗らなきゃISは動かな——」

そこまで言った彼女の言葉が止まる。確かに彼の言う通り引つ掛かるものがあつたのだ。

「———そういえばアレ、さつきからあたし達が会話してる時つてあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているような……………」

「……………」

「ううん、でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

確かにそれは教科書で読んだと彼は肯定する。ISは人が乗らないと絶対に動かないということも。しかし、本当にそうであろうかとも思案する。

ここ十年で技術は飛躍的に進歩した。今最先端の研究でそれが不可能かどうかはわからない。仮に出来たとしても黙っていればそれで終わりなのだから。

「でもさ、無人機だからつてどうにもならないでしょ。攻撃が当たらないんだからさ」
「……………さつき鈴が言つてた事だけどさ、多分間違いだと思うんだよ」

「は？何が？どこがよ？」

「『会話してる時はあんまり攻撃してこない』つてところ、なんか引つ掛かるんだ」

彼の言つてる事がまるで理解出来なかつた。頭でも打つてしまったのかと失礼な事

を考える彼女だったが、彼はそんな事知らずに言葉が続ける。

「俺の推測が正しければなんだけどよ………まあ見ててくれ」

そう言つて彼は謎の I S からゆつくりと遠ざかる。その間も相手はビームを撃つ処か接近すらしなかつた。

「……………?」

「見てろよ……………ここだつ!!」

彼は一気にある方向へ向かう。謎の I S に接近せず、『Bピット』向かつて。

『!?!』

その瞬間、謎の I S が動き出した。阻止するような形で彼に立ちはだかる。

「おっと!?!」

「……………なん、で?」

彼は謎の I S から——Bピットから即座に離れると相手もまた静止する。彼女はこの光景を見て疑問が尽きなかつた。

「どうやら俺達と戦うんじやなくて、あそこに行かせたくないみたいだ」

「え、でも、なんで? あそこには何も無いはず……………」

「俺にもわかんねえよ。でも、確実に何かあるのは間違いない」

一夏は確信した。謎の I S の狙いは自分達では無いのだと。しかしそれでも疑問は

残る。

頑なにBピットを守ろうとしている事から『そこにあるもの』が目的なのだろう。その『あるもの』とはなんなのだと。

「……………とにかく、このままじゃ埒が明かないわ。先生達も来ないし、いつその事あたし達で——」

彼女が言い切ろうとしたその時、突如Aピット側のゲートが爆発する。

突然の出来事に二人はその方を向くと、破壊されたゲートからはセシリアが飛び出してきた。

「セシリアっ!?!」

「あんたっ!?!何ゲート壊してんの!?!そこにコイツが入ったりしたら——」

「そんな事はどうでも良いですわ!!!それよりも今すぐBピットに向かって下さいましっ!!!」

「Bピット?やっぱりそこに何か——」

「そのISは囿です!!!柳さんが狙われてましてよっ!!!」

「——はっ？」

「新しい熱源反応が二体!!!そのうちの一つはBピットから出ていますわ!!!そこには柳さんがっ!!!」

「——」

彼は、彼女の言ってる事が一瞬わからなかった。しかし、その意味は次第に、嫌でも伝わった。

——全く想定していなかった最悪の事態。

——目の前にいる敵の狙いは『織斑一夏』ではない。

——本当の狙いは。

——『柳隆道』。

「ああああああっ
!!!!!!」

彼は叫び声と共にBピットへ最大加速で飛び出す。隆道の元に向かう為。しかし

『迎撃行動を再開』

先程まで静止していた謎のISは今までとは比べ物にならないほどの速度で彼の前に立ちほだかる。決してBピットへ向かわせない為。

「そこをどけええええええつ!!!」

彼は凄まじい剣幕で『零落白夜』を発動。立ちはだかる謎のISに向けて自身の全力的な袈裟斬りを繰り出す。しかし――。

「つ?!?!」

それはいとも簡単に弾き返され、その巨大な拳で彼を殴り飛ばす。もろに受けた事によつて彼はアリーナの壁際、Bピットとは反対側のAピット側まで吹き飛ばされた。

「一夏つ?!」

「一夏さんつ?!」

二人は驚愕を隠せなかった。彼が勢いよく飛ばされた事もそうだが、まるで先程までゆつたりだった謎のISが嘘のような高機動を見せつけた事に。

「……………なんでだよ……………どうして」

『織斑一夏、セシリア・オルコット、凰鈴音。三名に迎撃行動を開始する。終了条件、最

優先事項の達成』

「どうしてだあああああつ
!!!!!!!」

外部から不正規接続を確認。

複数端末より疑似信号多数。

メインシステムに不正規接続多数。

再起動を実行………不可能。

———操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不不不不安定。緊…急処置ヲ実行。

………不可能。

———深刻なシンの外シヨウ後ス*レス障ガイト判断。

———自kkko防エイssystem『キヨウ犬』を強セイ起ddddd。

dd。

—— ジコボウエイ s y s t e m、ハソン——。
—— システム、キドウフカノウ——。

第十九話

セシリアがアリーナスステージへ強行突破する直前。Aピット内にいた四人がBピットの方へ意識を向けていた頃、もう一つの熱源反応があつた第二アリーナ入り口付近では――。

「……………」

『最優先事項。目標の篠原日葵を発見、行動を開始する』

入り口の外側にいた日葵は謎のISと遭遇していた。周囲には誰もいなく、扉の内側からは数々の悲鳴と必死に扉を叩く音が響いている。

普通このような状況に陥ると多少なりとも不安や恐怖に駆られる訳だが、彼女は不気味な笑顔のまままだ。微塵たりとも不安も恐怖も一切見受けられない。

「あなた誰え？私に何か用かなあ？」

――瞬間。

「あぶなっ」

言い切ると同時に謎のISはその巨大な腕を彼女に向けて伸ばす。あと少しで届く所だったが彼女は焦ることなくこれを後方に跳んで回避、そのまま後退る。

回避された事が意外だったのか空振りしたまま硬直するが、それも直ぐにやめ彼女との距離をじわじわと詰めていった。

「……………ふーん、そっかそっかあ。私が目標つてのは聞き間違いじゃなかったんだねえ」
相手は彼女の言葉に一切反応はしない。どうやら聞く耳を持たないようだ。

「私を拐いに……………いや、それとも殺しに来たのかな？まあどつちだつていいやあ。狙われてる事には違い無いんだしい」

一見、自身が窮地に追いやられてる状況にも関わらず彼女は余裕の表情だ。腕を組み大袈裟に頷く姿から見ると本当に怖がってないのだろう。

しかし、そのにこやかな表情は次第に歪み始めていく。

「じゃあさあ、あなた……………私の敵つてことだよねえ」

謎のISは彼女の豹変に怯むことなくゆったりと迫っていく。まるで小動物を追いかける狩人のように。しかし――。

「だったらあ……………遠慮なくぶっ壊してもいいつてことですよ?!いいよねえつ?!」

――目の前の少女は決して小動物という可愛らしいものではない。

「アハアツ！何しに来たのか知らないけどさあ、まさか五体満足に帰れるなんて思っていないよねえ!?残念でしたあつ！あなたはここでぶっ壊しまーっすう!!今決めましたあつ!!」

彼女は足を止め嗤い狂う。獲物は私ではない、お前だとも言うかのように。

「ヒヒツ。覚悟してねえ、二度と齒向かえないようにしてあげるからさあ」

彼女に容赦という言葉は存在しない。齒向かう者、自分を邪魔する者は全て敵だ。これまでそうやって相手を潰していきここまで来たのだ。

かつてのブリュンヒルデがそうしたように、立ち塞がる者は力づくで黙らせる。

政府高官も知らない、彼女だけが知る目的の為に。

彼女の異常性を察知したのか、謎のISは相手が生身にも関わらず急加速を始め接近していく。

しかし、彼女はそれに臆することなく右手を自身の首元——襟の内側のソレに触れる。

「——『華鋼』」
はなはがね

彼女がそう呟いた瞬間、謎のISはけたたましい破裂音と共に吹き飛ばされた。

第二アリーナスステージ。隆道がいるBピットに向かおうとした一夏は謎のISの豹変した動きによって簡単に阻まれ吹き飛ばされたが、彼は一度失敗したくらいで諦める男ではない。

妨害によって機体と自身両方にダメージを負ったはずなのだが、今の彼は痛みよりも怒りが勝っていた。

「どうしてだあああああつ!!!!!!」

何故、よりによって彼なのだ。何故、自分じゃない。自画自賛する訳ではないが、世界最強の弟だの最新の第三代ISを持っている自分の方が優位性があるはずだ。なのに――。

「うああああああああつ!!!!!!」

Bピットの前に立ち塞がる敵に向かって一夏は再び突撃する。今度は全力とも言える瞬時加速を使用して。

高機動である『白式』の瞬時加速は正に驚異的だ、ハイパーセンサーで捉えることはほぼ不可能だろう。しかし――。

「ぐあつ?!?!」

——軌道を予測出来れば反撃など容易い。

再び彼の攻撃は巨大な腕によって弾き返され、その直後の打撃によってまたしても壁際まで吹き飛ばされる。

怒りによって冷静さを失った彼が侵入者に一撃を与える確率は——ゼロに等しい。「ああ、くそっ……ちくしょう……」

彼は這いつくばりながらも嘆いていた。二度にわたって渾身の一撃がいとも簡単に防がれたのだ。怒りは未だに沸き上がってくるが、それと同時に自分の弱さと相手の強さに絶望していた。

——絶対に勝てないと。

「——っ!? あなたよくもっ!!」

「私達もいること忘れてるんじゃないわよ!!」

そばにいたセシリアと鈴音は敵の動きに啞然としてしまったが、いつまでも黙ってる訳にはいかない。彼女達は代表候補生だ、このような事態は迅速に対応しなければならぬのだ。

「アンタ、私がアイツの気を引くから隙を突いてBピットへ行きなさい!」

「……………任せますわ!」

本来なら連携して撃退したのち向かうべきなのだが、今は回線が阻害されてる為戦闘中のやり取りが不可能だ。至近距離でないと互いの声が聞き取れない。

二人が昔からの馴染みで息が合うのなら回線が無くてもある程度は出来るだろうが、両者とも顔見知り程度だ。連携経験など一切無い。

故に近接を得意とする鈴音が敵を引きつけ、セシリアがその隙に隆道の元に向かう事になる。

「はああっ!!」

分離した『双天牙月』を用いて鈴音は敵に急接近、回転を織り混ぜた連撃で攻撃を仕掛ける。だが相手は余裕と言わんばかりに全て弾き、回避してしまう。

「ああ、くそっ! なんなのよその人間離れた動きはっ!」

国家代表クラスでもやらないような化け物染みた回避を前に彼女はつい悪態をつく。以前まで自分は強い方だと思っていたが、こうも通用しないとその自信も無くなってしまう。

だが、彼女が敵を引きつける事には成功してるのでその隙にセシリアが救援に向かう事が出来るはずなのだが――。

「くっ!?!ち、近づけませんわ……………!!」

何故鈴音が敵を引きつけてるにも関わらずセシリアは未だにBピットへ行けないのか。答えは簡単であった。

(嵐さんの攻撃を捌きながら此方に制圧射撃!? 化け物ですの!?)

なんと謎のISは鈴音の連撃を捌きながらセシリアに対しビームを連発していたのだ。それもBピットに近づけないような確過ぎる精密射撃で。

どれだけ捻りを加えた動きであつてもそこにビームが飛んでくる。ダメージを受ける覚悟で突つ切る事も一度は考えたが、アリーナシールドを貫通するほどだ、絶対に無事では済まない。

もはや敵の戦闘能力は人間の範疇を超えている。その事実二人もまた一夏と同様に絶望を感じていた。

三人が絶望の真つ只中にいる中、Aピットにいる教員二人も事態の対処に全力を注いでいたが、状況は一切変わらなかつた。

「くそっ! とうとう三年達からの通信も途絶えた! 真耶、そっちは!?!」

「ダメです、織斑君達の回線も未だ復旧しません! 此方でもシステムの干渉すら受け付けないなんて……………!?!」

「徹底してるな……………何がなんでも邪魔はさせないらしい……………」

「このままじゃ、柳君が……………!?!」

状況は最悪だ。全回線は遮断され指示も出せない、扉は全てロックされてる為行動も起こせない。

「柳は……………柳は無事なのか……………!?!」

千冬は余程焦っているのか、先程から何度もタブレットを確認している。

現状、隆道の安否を確認出来るのはこのタブレットのみだ。この端末だけ影響が無かった事が唯一の幸いであろうか。

そのタブレットには彼が『灰鋼』を展開したログが残されている。タイミングからしてセシリアがステージに強行突破した後だ。

バイタルサインは多少乱れてはいるが警告域には達していない為まだ大事には至って無いのだろう。

「どうすればいい……………!?!どうすれば……………」

出来る事なら自らが出撃したい。しかし生徒用の訓練機は勿論、教員用のISすら別の場所だ。Aピットに缶詰にされてる状態では取りに行く事すら出来ない。

教員二人も、この状況に絶望していた。

「何が教師だ……………!我々は……………何も出来ないのか……………!?!」

「織斑先生……………」

悔やんでも無駄なのは分かっている。だが何も出来ない以上声に出さずにはいられ

なかったのだ。

——そんな二人の前に更なる絶望が降りかかる。

「?!?!?
」

突如タブレットから鳴り響く警告。それを聞いて千冬は今まで味わった事の無い悪寒が走った。

ゆつくりと視線だけを端末に向けると——。

——操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不不不安定。緊…急処置ヲ実行。
……不可能——。

——深刻なシンの外シヨウ後ス*レス障ガイトo判ddd n——。

——自kkko防エイssystem『キヨウ犬』を強セイ起ddd dddd dddd
d d——。

——ジコボウエイsystem、ハソン——。

——システム、キドウフカノウ——。

—— バイタルサイン、シヨウシツ——。

—— 『ハイハガネ』 l o s t——。

「あ、ああ——」

—— 彼女の頭は、真っ白になった。

時間は侵入者が現れた直前に遡り、Bピット。急にモニターが映らなくなった事に隆道は何事かと疑問に思っていた。

「あ………う？おいおい、今からだって時に——」

一夏が何かを決し、鈴音に向かって何かをしようとした途端に映像が途切れたのだ。肩透かしを食らった彼はずっこけ、つい愚痴を溢してしまう。

「おわっ」

だがそんな事を口に出した直後に鳴り響く爆発音。その巨大な音と共に出る震動によつて彼は椅子から転げ落ちた。

「あでつ。……………何だよ今のは」

爆発もそうだが今のは震動はなんだ。ステージにいた二人が出したようには思えない。現に今もステージの方向から連続した爆発音が聞こえるが、モニターが映らない以上何が起こつてゐるかわからない。

「……………しかたねえ、向こう行くか」

これではここにいない意味が無い。生徒が密集している通路に戻るの嫌だが、そうも言つてられないのだ。

文句を垂れながらも扉まで進むのだが、ここで彼は気づく。

「……………悲鳴?」

よく耳を澄ますと、小さくはあるが通路から悲鳴が聞こえる。ピットは頑丈な造りであり、防音効果もある。故に扉に近づくまで悲鳴に気づかなかつた。

「なんで悲鳴なんか……………んあ?」

そしてもう一つ気づいた事、扉が一切の反応を示さないのだ。パネルに触れても、扉を叩いてもうんともすんともいわない。

「閉じ込められた……………?」

いったい何故と疑問が尽きない。未だに鳴り響く爆発音と小さな震動。開かない扉に通路から辛うじて聞こえる悲鳴。もしや自分の見えない所でとんでもないことが起きてるのでは無いかと推測する。

「……………つっても、何も出来ねえんじやどうしようもねえわな」

回線を用いて連絡を取るという手が残っているのだが、生憎彼はその方法を覚えてない。今までISを纏ってる時は一夏と近場でしか会話してないのでチャンネルの開く事など無かったのだ。

もつとも、その回線も直ぐに遮断されるので覚えてようが連絡は取れないのだが。

「あーあ、暇になっちまった。どうすっかな……………」

暇潰しなど用意してない。眠気など一切無いので昼寝など出来ない。現代人ならではの携帯を弄るという手もあるのだが、自身の携帯は適性検査を強要された際に紛失したので手元に無いのだ。

「まったく、これじゃここに来た意味が——」

暇を持て余してしまいBピット内ををうろつく——その時だった。

「——っ!?!」

突如、彼の視界の色が反転し、心臓の鼓動が強くなる。

彼はこの感覚を良く知っている。

それはここ数年、脅威に晒された事によつて彼が身に付けた技能——『危険察知』。それによつて感じるのは自身に襲い掛かる『物理的な脅威』。

その『脅威』の行方は、自身の真後ろに——。

「つうおあぁっ?!?!?」

彼はその『脅威』から全力で跳び離れる。その直後に聞こえるのは何かを掴んだような鈍い音。その正体を見るべく振り返ると、そこには『透明なナニカ』がいた。

「はっ………はっ………な、なんだよコイツ………」

その『透明なナニカ』は次第に姿を写しだし、やがて全身が目視出来るようになる。

そこにいたのは『黒い巨人』だった。不気味なカメラアイ、至るところにある複数のスラストー、そして体格に合わない巨大な腕。

『人』からかけ離れたソレは彼の前に佇み、ゆつくりと歩み寄っていく。

「——つ!?こ、コイツは?!?!」

見たことの無いソレを見て彼は戦慄した。

コイツはなんだ?いつからそこにいた?どうやってここに入った?今、自分に何をしようとした?などと思考が渦巻く。

『ステルス行動失敗。最優先事項『柳隆道』、行動を再開』

「つ!?コイツつ!!!」

今、確かに自分の名前を言った。つまり、自分が狙いだと言うことに結論が出るのはそう難しいことじゃなかった。

だとするならば周りの異常も納得が行く。自分を逃がすつもりは無いのだと。

(どこの差し金だ!?テロリスト!?団体の連中!?他国か!?!……ああ、くそつたれ!!!心当たりが多過ぎんぞつ!!!)

自分の価値は良く分かっている。世界に二人しかいない数少ない男性操縦者。その稀少価値を欲しがる者もいればその存在をよく思わない者もいる。

誘拐しに来たか、または殺しに来たか。

彼は恐らく後者だと推測した。到底拐いに来たとは思えなかったからだ。

未だにステージからは爆発音は続いている。きつと一夏も同じ状況なのだろう。

逃げ場は無い、恐らく助けは来ない。ならば自衛しか残された手段は無い。

「四の五の言つてられねえっ!! 『灰鋼』 えっ!!」

無断展開となるが、今は緊急事態だ。彼は『灰鋼』を展開し、臨戦態勢を取る。

(未確認熱源が他にも二つ!?!?こことステージだけじゃねえのかよ!!)

展開した事によつて目の前の巨人と同じ熱源反応が表示され、それによつてステージ内とアリーナ外にも存在している事が把握出来た。一夏達の位置情報も表示されるはずなのだが、故障でもしてるのか何故か表示されない。

だが未確認熱源の内一つは間違い無く一夏達がいる所だろう、しかしもう一つは不明だった。外にいる理由がまるでわからない。他にも目的があるのだろうか。

目の前の巨人があと一体処か二体いることに驚愕と疑問を隠せないが、相手はそんな事を考えてる暇は与えてはくれなかった。

謎のISは急接近し、その巨大な腕を彼に向けて伸ばす。

その速度は瞬時加速と変わらない速度で並の操縦者だったら反応は出来ないだろう。だがしかし――。

「あぶねっ!」

『危険察知』を持つ彼がISを纏ってしまえばその程度の速度は無意味だ。以前のセシリアと戦った時と違い、機体に多少慣れているのと精神も少なからず安定しているので急接近に驚きはしたが回避など容易かった。

（つつてもこんな室内じゃいずれ詰むぞ……。ゲートぶち破つて逃げるか？でも飛べねえし……。くそつ、こんな事なら飛行訓練もするべきだったか……。!?）

彼はセシリアと戦った際にシステムが起動した時以外一切飛行を行っていない。

授業や放課後に飛行訓練をしようとしたが、どうやっても飛ぶ事が出来なかったのだ。

その事もあって彼は飛行訓練を一切止め、代わりに歩行訓練だけに絞る事にした。

（飛べねえISってなんだよ……。これじゃ、ただの頑丈な鎧じゃねえか……。!）

何故、彼が飛行が出来なかったか――。

それは彼のIS適性値が低いだの、訓練不足だのといった、決して才能や技術的なものではない。

――もつと根本的なものだった。

初めて機体に乗り一次移行をする時の彼はISに対し、あまりにも強い拒絶を抱いていた。その結果何が起こったか。

彼を理解しようとするISコア。そしてISを強く拒絶する彼自身。両方がぶつかり合い、度重なるエラーのまま進んだ形態移行は、結果として歪な物を生んでしまった。

そう、『灰鋼』は『一次移行』した姿ではない。

『灰鋼』は前代未聞の『不完全な一次移行』だ。

不完全な一次移行によって操縦者の保護機能を始めとした所々が機能不全となり、それによって飛行は愚か、浮く事すら出来ない機体となってしまった。保護機能が働かずエラーを起こし発症した原因も、元を辿ればこれが原因である。

だがそれでは検査時に形態移行もしてない機体に乗ったにも関わらず錯乱したのと、セシリアと戦っている際に発症し彼女に向かって飛べた事に説明がつかない。

検査時の錯乱は政府に強要されたこともあつて精神が不安定だったという単純な物だったが、飛べない機体が一時的に飛べた理由は何故か。その答えはシステムそのもの

にあった。

自己防衛システムの内容の一つとして、機体の出力を無理矢理上げるものがある。そのお陰でスラスターの点火が可能になったのだ。システムが起動しなければ何も起こらず、決して飛ぶ事は出来ない。

偶然発現した危険なシステムを除けば量産機『打鉄』とデータ上は変わらない。教員も、政府も、I S委員会もそれを認識している。だがそれは間違いだ。

何故ならそのデータすらエラーを起こしてバグを発生させてしまい、『表面上』だけ問題が無く、変わらないように見えるのだから。

既に『灰鋼』は『打鉄』とは中身がまるつきり違う。

あるべき機能が働かない、危険で不完全な機体。

I Sを憎む彼は、決して専用機など持つてはいけなかったのだ。

(悔やんでも仕方ねえ、ここでやるしか……！)

そんな自身の機体事情など知らず、ここで迎撃するとそう結論づけた直後、体勢を立

て直した敵は再び襲い掛かる。その動きは先程より速度が上回っているが、彼には通用しない。

(中々速えなコイツ。けどまだ何とかかなる………けどよ)

相手の動きは体格に似合わず速い。右腕を回避すると直ぐ様左腕が飛んでくるのだ。彼も全うな人間だ、終わりの無い回避を繰り返していく内に当然ながら苛立ちも溜まっていく。

「……………っ！いい加減にい——」

痺れを切らした彼は敵の右腕を屈んで回避したと同時にその場から高く跳び、顔面に目掛けて——。

「——しろおっ!!!」

——回転からの後ろ蹴り、しかも足裏を突き出すという所謂『トラス・キック』を全力で放ち、大きく敵から距離を離す。

この蹴り技を食らった者は如何なる者でも脳震盪を起こし、まともに立つ事すら出来ない。だが相手は何事も無かったかのように、痛がりもせず此方を見ている。その姿は余裕の表れだった。

「ああ、やっぱIS………か？にしても少しは痛がつてもいいんじゃないかねえの………？本当に人乗ってんのかよ、アレ」

彼は目の前の敵がISだと確信が持てなかった。何せ既存のISとは逸脱した姿なのだから。それに動きも人間らしくない、更に痛がりもしない。

だとしたら素手ではダメだ、確実なダメージを与えられない。エネルギーも有限なのだ。逃げられない以上、迅速に、確実に、高威力の武器で倒す必要がある。

(アレを試すか? いや、ただでさえ馬鹿みたいな威力なんだぞ? 下手したら殺しちゃうんじゃないのか?)

策があるにはあったが、まだ誰にも試してもいない為それは危険な行為だった。

その策とは『鋼牙』を使ったある事。だが彼自身が思つてるように、それは他者が見ても危険であろう。

(……………試すのはやめだ。コイツだけでなんとかするしかねえ!)

今の状況で試行錯誤は危険だ。故に彼は放課後の訓練である程度使い慣れた『鋼牙』を展開しようとした。

——展開しようとしたのだ。

「……………」

彼はここで異変に気づく。目の前の敵——謎の I S が近寄らなくなったのだ。

「ああ？なんだてめえ、急に静かになりやがって。いったいなにを——」

謎の I S に向けて問い掛けようとした——次の瞬間。

——警告。外部から不正規接続を確認。システムハックを受けています——。

「……………は？今なんて——」

——複数端末による疑似信号多数——。

——全ての武装を強制ロック。展開不可能——。

急激に表示された警告。それが出ると同時に表示されてる武装は全てロックされ、展開が出来なくなってしまう。

「ちよっ?!嘘だろ?!」

急激な事に焦りを隠せない彼だが、そんな彼を置いて状況は更に悪化し続ける。

——メインシステムに不正規接続多数——。

——パワーアシスト停止。可動部固定——。

——緊急制御システム応答無し——。

——再起動を実行……不可能——。

次に表れた警告によってとうとう身体が動かなくなってしまうた。完全に固定された為らにびくともしない。

「おい！待て待て待て！！ふ、ふざけんじゃねえぞおい！！」

最悪の事態によつて彼は息が荒くなり、心臓の鼓動もより強くなる。

『このままでは殺される』。

そう確信した事によつて機体は彼の異常を感知し、システムを起動しようとするが——。

——操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不不安定。緊……急処置ヲ実行。

……不可能——。

——深刻なシンの外シヨウ後ス*レス障ガイトo判ddd——。

——自kkk防エイssystem『キヨウ犬』を強セイ起ddd——

ddd——。

——ジコボウエイsystem、ハソン——。

——システム、キドウフカノウ——。

——ガイブタンマツ、セツダン——。

「く、くそつたれが……！何の役にも立たねえ……！こうなったら解除を——」

——機体解除……不可能——。

——強制初期化を開始します——。

「——う、嘘、だろ………」

殆どの機能が停止し、動けなくなった所にトドメとも言える初期化。ハイパーセンサーもほぼ全ての機能が停止し、目の前に映るのは度重なる信号とノイズだらけの視界。唯一視認出来たのはその信号と同時に表示される兎をモチーフとしたアイコンただ一つ。

「ああ、くそつたれ……。なんでこんなときに………」

先程から首輪は最大限に点滅し、自身の『危険察知』が警告を鳴らしている、謎のI Sが此方に近づいているのだろう。だが逃げる事は勿論、回避する事すら出来ない。

完全な『詰み』というものだった。

「……………動けよ、動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け………！」
 しかし彼は諦めない。ここから脱出しないといけない。故に返事などしない機体に
 語りかけるように心の奥底から叫ぶ。が、しかし——。!!!

「動けよ……………。動けつて……………言つてんだろうがよおおおおおつ!!!」

彼の叫びも虚しく、機体は微動だにしない。今も初期化が進んでおり、もう動く事は
 無いだろう。

「ああ、ちくしょう……………」

もうどうにもならなかった。目の前の敵に何をされるかわからないが、それもどうで
 もよくなつてしまったのだ。

せっかく意を決して一夏を支えようと、ISと関わり抜くと誓つたのにこんな所で簡単
 に終わつてしまうのかと彼は絶望した。

(結局、どこ行つたつて同じつて事か……………)

『お前を一人にしてしまう父さんを、決して許すな』

(ははっ……………。こんな事なら、あの時死ねば良かったじゃねえか……………)

重く聞こえる足音は直ぐ目の前まで来ている。既に彼は逃げる気力は存在しない。

どの道動けないのだ、潔く諦める他ない。

「俺は、I S なんか、認めねえ……………」

それは彼なりの最後の悪足掻きによる捨て台詞。その言葉には憎悪が込められていた。

「俺はI S なんか絶対に認めねえっ!!!絶対に許さねえっ!!!!!!!」

彼はいつの間にか泣いていた。その涙は何に対してなのか、彼自身にもわからなかった。

最後の力を振り絞り、彼は叫ぶ。

「くそつたれがああああああああつ」

!!!!!!!

——ソウジユウ者のh o 護ヲサイ優s e n——。

——サイk i 動不能力ニヨリコア・ネットワーク切断——。

——対■絶対■障■『番犬』ハツドウ——。

第二十話

「な、なんで………」

薄暗い部屋の中央で女性は突然の出来事に混乱せざるを得なかった。

彼女の視線の先には空間ディスプレイが複数あり、その内一つには三つの映像が映っている。

その内の一つには少年少女三人が映っており、彼等の表情は絶望に染まっている。

それについては予定通りだ、何も問題など無い。問題なのは残り二つの映像だ。

その二つの内一つの映像は完全な砂嵐状態となり、真ん中に『LOST』という赤い文字。

そして残り一つには――。

「どう、して……。動けない、はず、なのに………」

――ノイズだらけの映像に微かに映る、黒灰色の機体を纏う青年。

結論から言えば今回の襲撃に加え隆道の専用機『灰鋼』にハッキングを仕掛けたのは紛れもなく彼女だ。

今回は目的の為にわざわざ三体のISを用意した。

『二体目』はそこで行われてる試合に乱入させ囲を、『二体目』と『三体目』にはそれぞれの目的を実行させる為に。

彼女は目的である『少女と青年』がそれぞれ一人になるまで機会を伺ってたのだ。

片方の少女は勝手に外に出てくれたおかげで手間が省けた。そして最も優先される彼は電光掲示板を書き換えて『二体目』が待つ狭い密室に誘導した。

彼女は彼の事を良く知っている。外で捕まえようとすれば確実に生身を駆使して逃げ回るだろう、そうなつてははずれ邪魔が入ってしまう可能性があった。

彼に關しては決して邪魔をされる訳にはいかない。故にISを展開せざるを得ない状況を作り上げたのだ。

そして此方で展開した彼の機体にコア・ネットワーク経由でハッキングを仕掛け、身動きを取れなくする。ついでにあの禍禍しいシステムを消して初期化もさせる、そういう流れだ。

——『コア・ネットワーク』——。

ISコアはそれぞれ相互情報交換の為にデータ通信ネットワークを持っている。元々は広大な宇宙空間における相互位置情報交換の為に設けられたもので、現在は操縦者同士の通信に利用されている。それ以外にも『非限定情報共有』をコア同士が各自行

う事で、様々な情報を自己進化の糧としているのだ。

——彼女はこれを誰よりも理解している。

だから『灰鋼』にアクセスしてハッキングを仕掛けて機体の動きを止め、初期化を無理矢理実行させることが出来たのだ。

片方の少女についても彼と同じ状況にしたかったのだが、ある理由によって手を出せない。よってやむを得ずそのまま『三体目』を向かわせたのだが、その『三体目』の信号は先程途絶えた。

何が起こったかはカメラ越しに見ていたから把握している、恐らく破壊されたのだろう。しかし、破壊されるまでに映っていた光景は目を背けたくなるほどに悍しいものだった。

少女の元に向かわせた『三体目』が破壊された事だけでも驚愕だが、それを上回る出来事が今日の前で起こっている。

「コア・ネットワークの切断………？コアが自力で………？」

その声は明らかに震えて動揺を隠せてない。自分は切断なんてしてない。何かしらの手違いで中断しないように先程までハッキングを続けていたのだから。

——ならばコアが自ら切断したとしか言いようが無い。

まさかハッキングを中断させる為に自らコア・ネットワークを切断するなど思っても
みなかった。本来ならば有り得ないからだ。

こうなってしまうては面倒だ。此方から切断した訳ではない故に再接続に手間取る。
彼女は急いで手を動かした。

「でも、なんで………」

しかし、一つだけ疑問が残る。コア・ネットワークを切断したからといって動けるは
ずがない。初期化も進んでた事もあつて抵抗など出来るはずが無いのにと。

彼女は過ちを犯した。それは『灰鋼』に搭載されてあるコアを軽視した事。

『灰鋼』に組み込まれてる残り一つの不可解なシステムを破壊せずに、『二体目』を接近
させた事。

彼を襲った事。『灰鋼』の初期化が中途半端になってしまった事。

——『灰鋼』は、彼は、更に悪化していく。

彼女は取り返しをつかない事をしてしまった。

「……………」

大粒の涙を流しながら叫んだ後目を瞑ってしまった隆道は、敵が未だに近づいて来ない事に疑問を抱いていた。

何故襲つて来ない。此方は既に抵抗手段なんて無く、されるがままの状態にも関わらずだ。

数秒経つても来ないのでおそろおそろ目を開けると、相変わらずノイズだらけの視界だが微かに敵の様子が見えていた。

「……………は？なんだ、それ」

敵は埋まっていた。

正確に言うと、敵はゲートに繋がっている扉にギャグ漫画よろしく綺麗にめり込んでいたのだ。

全く状況がわからない、何故敵は扉にめり込んでいるのか。危機一髪の所で都合良く誰か救援に来た様子も無い。周囲を見ようともしハイパーセンサー越しの視界はノイズだらけなのでよくわからない。だが、先程とは違った事がわかった。

表示されていた多数の信号が止まっているのだ。何故か初期化も途中で止まっていた。

「どうなってんだよ、これ……………」

——その時彼は気づいた。視界の中央にある文字が表示されている事に。

——対 ■ 絶対 ■ 障 ■ 『番犬』 ——。

「番……………犬……………？」

彼はその文字に既視感があった。まさか、敵がこうなっているのもコレのおかげなのではないか。

どのような効果があるかはわからないが、一先ず助かったと安堵の表情を浮かべる。

——シールドバリアー、ゼツタイボウギョ、サイキドウ——。

——キンキュウセイギョシテムキドウ。カドウブ固定解除——。

——パワーアシスト再起動開始——。

「……………おおっ!？」

その表示が出た瞬間、固定されていた機体の可動部は自由に動けるようになる。機体に身を任せていた彼は突然の事によってしまいが、転けそうになったところでどうにか踏み留まる。

——武装ロック解除。……………全武装破損状態。復元開始——。

——ハイパーセンサー再起動開始——。

次々と表示が連続で表れ、ついに視界も鮮明になっていく。ようやく周囲を見ることが可能になったのだが、その光景は異様の一言に尽きた。

「な、なんだこれっ……………!？」

なんと、Bピットの床には彼を中心とした半径五メートルのクレーターが出来上がっていたのだ。深さは三十センチと中々の凹み具合である。

『ギギ……………』

「っ!? やっべっ!?」

呑気に周囲を見てる間に敵は扉から抜け出せたようだ。顔面に蹴りを入れてもびくともしなかつた敵は、今や動きが覚束無く、あちこちに紫電が走っている。

だがそんな事は知ったことではないのだろう。敵は構わずに急加速し近づいてきた。動けるようにはなつたが未だパワーアシストが機能していない、故に回避は不可能。今度こそ駄目かと思つた次の瞬間、『灰鋼』の装甲全てが勢いよく展開され——。

——させない……………。

『ツツツツ?!?!?!?』

——けたたましい破裂音と共に彼の周囲は更に凹む。敵は先程と同じ所に向かつて殴り飛ばされたように吹き飛び、とうとう扉をぶち破つてしまった。

そしてその直後に表示させる所々読み取れない文字。その文字は次第に変わり、やがて全ての文字が表示される。

——対近接絶対防衛障壁『番犬』——。

——警告。シールドバリアー、絶対防御、機能停止。再起動まで5、4——。

「いったいどうなってる……」

『灰鋼』の装甲が全て開いてフレームが剥き出しになったかと思えば敵は弾けるように吹き飛び、直ぐ様視界に表示された機能停止とその再起動。

彼はこの状況に混乱せざるを得なかった。まったくもって訳がわからないと。

——貴方は、私、が………！

——1、0。シールドバリアー、絶対防御、再起動——。

再起動と共に装甲は全て閉じ、隙間から煙が噴出する。どうやら発動すると相手を吹き飛ばし、発動後はシールドバリアーと絶対防御が一時的に機能しなくなる模様。自分の周囲が凹んでる理由はわからない。便利ではあるが、それと同時にあまりにも危険だ。操縦者が文字通り剥き出しのままになるのだから。

——パワーアシスト再起動——。

——基本装備復元完了。『焰備』『葵』を常時展開に移行。後付武装復元開始——。

——システムに初期設定多数確認。………『最適化』開始——。

——同時進行。『A・S・H』^{アンチ・システム・ハック}作成——。

「直って……んのか……？それに、最適化……う？」

視界に映るのは膨大な数列の数々。それと同時に所々が変化していった。

復元した基本装備は左右それぞれの腰に展開し固定され、腕が、足が、盾が、見る見る内に姿形を変えていく。それは最初こそゆっくりであったが、次第に速度を上げて凄まじい速さで成形されていった。

——ぐ………うう………。

——最適化処理を加速。進行度七十二パーセント——。

——作成完了。『A・S・H』起動——。

——警告。コア・ネットワークの強制接続を確認——。

——警告。外部から不正接続を確認。………阻止成功——。

——も、もっと………速く………。

——最適化処理を更に加速。進行度八十五パーセント——。

——後付武装復元完了——。

「……………」

何が起こっているのかは不明だが、表示を見るからに『一次移行』をしているのだろう。それも目に見えるほど急速に。

既に装甲の成形は完了しており、以前より堅牢な見た目に成り変わっていた。「まあ、なんだっていいさ……。それよりも……」

機体の事などどうだっていい、今は目の前の敵だ。扉をぶち破ってゲートに放り出された敵は、身体全体に紫電を走らせながらゆつくりとピットに現れた。最初の素早さは既に無く、軋む金属音を鳴らしながらも此方に手を伸ばしている。

「てめえ、さつきはよくもやってくれたじゃねえか」

——警告。システムに異常発生。操縦者のバイタルサイン干渉を確認——。

——自己防衛システム復元開始——。

——っ!?。そ、そんな……!?なんで……!?

——同時進行。新たな機能を複数作成。危険。危険。危険——。

——ま、待って!?駄目!!止まって!?

——緊急制御システム応答無し——。

——自己防衛システム『狂犬』復元完了——。

「てめえが俺の敵だつて事はよおーくわかった。だつたらよ……」

心の奥底に眠る『どす黒いなにか』は次第に現れ、彼の心を黒く満たしていく。

目の前のコイツは敵だ。ならばすることはただ一つしかない。

「なにされたつて文句言えねえよなあ」

最適化を緊急中断。……………不可能。進行度九十四パーセント――。

機体の強制解除を実行。……………不可能――。

作成完了。■ ■ ■ ■ 『猛犬』――。

や、やだ……………。お願い、止まって……………。

作成完了。■ ■ ■ ■ 『C R V T 1』――。

あ、ああ……………そんな、こんなはずじゃ……………。

作成完了。『コード・デッド』――。

最適化完了。『灰鋼』の一次移行を確認――。

――単一仕様能力『せいそうげっか 悽愴月華』発現――。

――ひつぐ……………。ごめん、なさい……………。

「俺だけじゃねえ、織斑にも手を出してるんだ。覚悟しろよ……………てめえは、絶つつつ対に……………」

――対象を『敵』と認識。■ ■ ■ ■ 『猛犬』任意起動可能――。

――キドウシマスカ?――。

新たに出現したソレは彼の目の前に赤く表示される。時間が経つにつれて視界が赤く色づき、ついに全ての色が真っ赤に染まる。

彼はその未知な状況に驚きもしない。今の彼にあるのは目の前の敵に対する『殺意』のみ。

その不気味過ぎる表示を、彼は迷いもなく――。

――ごめんなさい……………ごめんなさい……………。

「ブツ殺オスツツツ
!!!!!!」

――ごめんなさい……………!

――押した。

――絶対殲滅『猛犬』起動――。

――操縦者の I S 適性値を補正。『C』から『S』に変動――。

――操縦者に痛覚抑制を処置――。

「遅エツツツ!!!」

寸での所でそれを躲し、敵の顔面に以前放った同じ蹴りを再び繰り出す。

今度は出力等を限界以上に引き出した蹴りだ。敵はよろける処か盛大に吹き飛ばされ、またしてもゲート内を転がり回る。

「さっきまでの威勢はどこいったんだよ、エ、エ、ツ!?」

彼もゲート内に入り、未だに這いつくばっている敵の首を掴み持ち上げる。機体の大ききからして持ち上げる事は容易ではないはずだが、パワーアシストが上昇している事によってそれも解決していた。

「オ、ラ、アツツツ!!!」

敵も抵抗しようとするが、それをする前に強烈な打撃が顔面を襲う。またしても吹き飛ばされてしまい今度はステージに繋がる入り口に叩きつけられた。

「随分としぶといじゃねえか……。だったら遠慮なんていらねえよなあ?!?!」

敵の顔面はくつきりと拳と足の跡が残っているが未だに立ち上がろうとする。しかし流石に効いてはいるだろう、頭部は他の部位よりも紫電が強くなっていた。

「『鋼牙』アツツツ!!!」

両手を伸ばし彼は叫ぶように武装を呼び出す。そして現れるは両腕それぞれに展開された二つのダブルパイルバンカー。

そう、『鋼牙』は二つあった。

これが彼が『鋼牙』に拘っていた理由。元々はそれぞれの腕に展開する代物なのだ。両方を使いこなすにはまず片方のみでの扱いに慣れないといけない。故にここ最近は一人でずつと『鋼牙』の空撃ちをしていたのだ。

正直言うと、彼はこれを扱う事に躊躇いは多少あった。片方だけでも機体処か操縦者そのものに確実なダメージが入るのだ、両方使ってしまったらどうなるかわかったもんじやない。

——しかし、相手が自分の生命を脅かす『敵』であるなら話は別だ。

先程は二つ展開する事に躊躇したがもう関係ない、遠慮などいらぬ。確実に仕留める為には左右にある二本の杭——計四本で相手を狙う。

右腕の『鋼牙』を上段に、左腕の『鋼牙』を下段に。四本の杭を水平に構えたその姿はまさに『牙を剥く獰猛な犬』そのもの。

彼は姿勢を限界まで低くし——。

「バラバラにしてやる……………!!!」

——敵が立ち上がったと同時に瞬時加速で一気に間合いを詰める。

そのから空きな胴体に——

「死ネ、エ、ツツツツツ!!!」

——加速によって威力が上乘せされた『鋼牙』を容赦無く放った。

第二アリーナスステージ中央。一夏、鈴音、セシリアの三人は未だに一体の敵と交戦を続けていたが、突如表示された警告によってピタリと動きを止めた。

その警告は敵にも表示されているのか、出鱈目な動きを止めて隆道のいるBピットを凝視している。

——警告。絶対的脅威を感知。危険度レベル測定不能。撤退を推奨。撤退を推奨。撤退を推奨——。

「な、なに、これ……………」

鈴音は見たこともない警告に困惑した。代表候補生になる前も、なったその後もこのようなものは知らない、聞いたこともないと。

だが一夏とセシリアは知っている。この警告がなんなのかを。

通信は未だ阻害されたままだ。故に彼は二人に向かって全力の大声で叫ぶ。

「これは……………！セシリア！！」

「……………ええ、恐らく。……………凰さん、大至急Bピットから可能な限り離れて下さいまし」

「はあ!?なんでよ!?あそこにはアイツが——」

「だからこそですわ!……………巻き込まれない保証なんて無いのですから」

鈴音は彼女の言ってる意味がわからなかった。隆道を救援すべく来たにも関わらず、今度はBピットから離れろと言うのだ。

だが彼女は冗談で言っている訳では無いのだろう。その表情は明らかに青ざめていた。

「……………ねえ、アンタこの警告知ってるんでしょ?いったいなんなのよコレは」

「……………直ぐにわかりますわ。痛い目に会いたくないのでしたら言うことを聞いて下さいまし」

「だから何を——」

——その時だった。Bピット側のゲートから突然轟音が鳴り響いたのは。

「え、ちよつ、なにっ!？」

「っ!?! 鳳さん、此方に!!」

「ちよ、まつ!?!」

なかなか言うことを聞かない鈴音をセシリアは無理矢理に引っ張り全速力で下がる。彼女が疑問に思うのも仕方の無い事だが悠長に説明してる暇は無いのだ。

それに、百聞は一見にしかずだ。自分の目で見た方が早い。

二人がAピット側の壁に向かって退避してる間も再び轟音が鳴り響く。十中八九彼が暴れているのだろう。

セシリアの内心は相当焦っていた。もしあの時と全く一緒であるならば此方も攻撃される可能性がある。故に全力で逃げるしかない。

彼女はその轟音に目もくれず、鈴音を引っ張りつつようやく壁際まで退避。ここまで来れば万が一の事があっても対応は出来る。あとは祈るだけだ。

「とりあえず、ここままで下がれば………」

「は、離してよ! ほんとなんなの!？」

「セシリア！ 鈴！」

そこに遅れて一夏もやってくるが、彼もまた青ざめた表情であり必死だったのか息も荒い。

鈴音は何が何だかわからなかった。いつたい二人は何を恐れているのだろうか。

「セシリア、この警告ってやつぱり……」

「ええ、柳さんで間違い無いですね……。ああ、どうか此方に牙を剥きませんように……」

セシリアは両手を組んで祈った。それもそうだ、何せ隆道の恐ろしさを一番よく知っているのは彼女なのだから。

「ちよつと、置いてけぼりとか勘弁して欲しいんだけど！ ！いい加減説明してよ！！」

「鈴、さっきの轟音は多分柳さんだ。………いいか、絶対に手を出すなよ？ 流石に助けられないからな？」

「え、なに、やつぱりそんなヤバい奴なの？」

「なんだよやつぱりって。お前、本当は柳さんに——」

——瞬間。二度も轟音を響かせたゲートがついに爆発した。

「「!?!」」

爆発したゲートからは煙が立ち込め、そこから勢いよくナニカが飛び散ってくる。そのナニカとは――。

「ひっ!?!あ、あああアレって!?!」

鈴音が悲鳴を上げ震えるのも無理もなかった。何故なら、ゲートから飛び散って来たのは無惨にもバラバラになった手足。それらはステージの至る所に散らばり、元がどのような姿だったか最早わからないほど。

そして最後に丸い物体が宙を舞い、ステージの中央に転がり跳ね液体を撒き散らす。

それは頭だった。二ヶ所ほど大きく凹んでおり、いったいどれ程の力をぶつけられそうなるのかと疑問に満ちる程に酷い有り様だ。

あまりにも悍しい光景に他の二人も悲鳴を上げそうになるが、そのバラバラになったモノをフォーカスしてある事に気づく。

「……………機械?」

バラバラになった手足や首からは真つ赤な肉――ではなく金属片や配線といった明らかに生身など存在しないものが見える。血と思われた液体も目を凝らして見ると真つ黒であり、それがオイルだということとは直ぐにわかった。

「人がいない……………無人機か!!」

そして転がる頭部を見て一夏はまたしても気づく。その頭部は自分達を足止めした相手と全く同じデザインをしていたのだ。であるならば――。

「セシリア！ 鈴！ やっぱアイツは無人機だ！」

自分の予想は当たっていたのだ。しかし、だからと言って対策がある訳じゃない。攻撃に遠慮がいらぬということになったが、此方の攻撃が当たらない以上策は無いのだ。

——しかし、状況は一変する。

ゲートから飛び出して来たのは煙に覆われた巨大な物体。その物体はステージ中央に迷いもなく突っ込んで転がる頭部を着地と同時に容赦なく踏み潰し、ひしゃげた音を響かせた。

「うわっ……………えげつねえ……………」

いくら無人機とはいえ、頭部を踏み潰される光景は目に毒だ。頭部を踏み潰した物体は隆道で間違い無いだろう。

物体を覆っていた煙は次第に消えるが、それを見て三人は驚愕に染まる事になる。

「え……………？ 柳、さん……………？」

「フーツ、フーツ……あ？なんだよ、人入ってねえじゃねえか」

——彼の髪が真つ白になっていた。

どこまでも黒かった髪はどこにも無く、少しの汚れも目立ってしまうほどの白。何故白髪になってるのか疑問に尽きる所ではあるが驚愕はまだまだ終わらない。

彼の機体『灰鋼』は『打鉄』と姿形に差は殆ど無いはずだ。だが彼が今纏っている機体は以前とは違っていた。

「な、なに……アレ……」

「姿が変わってる……？まさか、セカンド・シフト二次移行!？」

その手足と胸部には分厚い装甲が追加され、浮遊シールドは以前の倍ほど巨大で真横からなら全体を覆うほど。スカートアーマーもより堅牢な見た目となっており、生半可な攻撃ではびくともしないだろう。

右腰には打鉄の基本装備である『焰備』が、左腰には『葵』が装着され、両腕には一つしか無いと思われる『鋼牙』が装備されている。

まさか『鋼牙』が二つあるとは一夏は思っても見なかったが、それに驚いている場合ではない。

「ああ、やべえ……………」

変わり果てた『灰鋼』は装甲が鈍く発光。血管を彷彿とさせるラインはより細かくなり、色も黒ではなく赤となって点滅している。

その姿を見て隆道の状態を知っている二人だけでなく、側にいた鈴音も不安に駆られた。

鈴音は隆道の事をよく知らない。だが彼女自身が持つ『勘』によつて身体がこれ以上無い警告を発しているのだ。

「……………」

隆道は三人を見向きもせず顔だけを宙に浮く敵に向ける。彼は敵を見るなり顔を一気に歪ませ……………」。

「次はてめえだ、くそつたれえつつつ!!」

——目にも止まらぬ速さで飛び掛かった。

『行動継続不可能。離脱』

敵は諦めたのだろうか、逃げる為はその場から頭上に向けてビームを放ち強烈な爆発音と共に遮断シールドに穴を開け急上昇する。

その速度は爆発的な速さだ。高機動特化の機体でも追いつくのは難しいだろう。

「逃げてんじゃ……………」

——だが今の彼は敵を逃がす筈がない。

「ねえつつつ!!」

彼は瞬時加速を用いて一気に詰め寄る。その光景を見ていた三人はいつの間に瞬時加速を覚えたのかと先程から驚愕が止まらないが、そんな三人を余所に彼は敵に追いつき足を掴んだ。そしてそのまま地表に向けて——。

「落ちろおつつつ!!」

——[?]思い切りぶん投げた。

『ツツツ?!?!』

敵が地表に叩きつけられた事によって凄まじい轟音と共にステージは地震が起きたように揺れる。それによってアリーナ内から悲鳴が聞こえたような気がしたが、そんなこと彼にとつてはどうでもいい。

地表に半分埋まった敵の目の前に彼は降り立ち、首を掴んで引っこ抜く。もはや罫り殺しに近いそれは目を反らしてしまふほどだ。

「このこと侵入しといて都合が悪くなると逃げるつてか。逃がすと思つてんのかよ」
首を掴まれた敵は必死に藻掻き離れようとする。だが彼の腕はびくともせず、決して離れる事はない。

「……………『悽愴月華』」

——その言葉を咄くと同時に彼の右腕は赤黒く発光しだす。

『ギギギツツツ?!?!』

その腕に掴まれた敵は全身に紫電が走り藻掻き苦しむように暴れ回る。しかし首をガツチリと掴む手は一向に離れる気配は無い。次第に紫電は強くなっていき、敵の抵抗が弱まった所で――。

「これで終わりだ、くそつたれ」

——空いた左手で敵の胸を貫いた。

『ガ…………ギ…………』

胴体を貫かれた敵は完全に沈黙し、彼は貫いた手を乱暴に抜くとその場に崩れ落ちる。その手には球体のような物を掴んでいた。

「……………」

静寂。三人がかり——内二人が代表候補生にも関わらず傷一つ付けられなかった敵は隆道の手によってあっさりと終わってしまった。

だがまだ安心は出来ない。彼の機体は未だ発光しているままだ、此方を攻撃するかも知れない。

——しかし、それも杞憂に終わる。

「……………」

——『敵』の殲滅を確認。『猛犬』を解除。ダメージレベルD——。

隆道の機体は点滅と発光を止め、紫電が一瞬走って直ぐ解除された。機体が消えた彼は疲労が溜まっていたのか、その場で崩れるように大の字になる。

「っ!?!柳さんっ!?!」

あまりの出来事に思考が追い付かないが、今は彼の安否が優先だ。混乱を振り払い一夏は彼の元へ駆け寄る。

「あー、しんど……………」

「だ、大丈夫ですかっ!?!どこか怪我は!?!その頭はッ!?!さっきのはいったいつ!?!」

「ま、待ってっ……………いっぺんに、聞くんじゃ、ねえ……………」

反応から見るに今の彼は正気だ。見たところ怪我をしている様子もなく、それがわかっただけでも安心だった。

一夏は緊張の糸が切れたのか、その場で尻もちをついてしまう。格好つかないが、もう敵はいないのだ。これくらい許されたって良いだろう。

「と、とにかく……………無事で良かったです、ほんとに……………」

「今回は、マジで、ヤバかったぞ……………。いきなり襲われるわ、機体は一度ぶっ壊れるわ

……直ったのにまた壊れたけどよ。どんだけオンボロなんだよ」

「……………なんか、色々聞きたいんですけど、今は取り敢えず一つだけ……………。その髪は……………?」

「髪……………? ああ、いつの間に……………」

彼は自身の髪を弄くりながら大して驚きもしない。まるで昔からそうだったかのようだと一夏は思えた。

「あー、もしかして言いにくい事だったりします?」

「いや?……………いつだったかな、ある日を境に色が抜けたんだよ。全部」

「ぜ、全部ですか……………?」

「ああ、綺麗さっぱりにな。まーた染め直さねえと」

そんなことがあるのだろうかと一夏は疑問に思う。だが現に目の前の彼は真っ白なのだ。嘘をついてる様子も無い。

「……………取り敢えず、今日はもう疲れました……………。寝て良いですか?」

「どーせ事情聴取でもあるんじゃないかねえの……………? 絶対寝かせてくれねえぞ……………」

「うつへえ……………」

織斑一夏のデビュー戦は、突如現れた侵入者によって台無しとなる結果に終わった。

(「そーいや、もう一体はどうなった？直った時には反応無くなつてたしな……………」)

「お？ようやく反応が消えたあ」

第二アリーナ付近で『三体目』と遭遇していた日葵は、紫と白と青、そして桃の四色を彩る機体を纏いある物体に座り込みながら呑気に空を眺めていた。先程まで襲われていたとはとても思えない。

「いやあ、なんか違和感があると思ったけど無人機だったなんてねえ。予想外だなあ」

彼女だけを見たらISを展開して日向ぼっこをするという微笑ましい光景であったが、その周辺は悍しいの一言に尽きた。

所々の地面や壁はクレーターや大きな亀裂が深く残り、辺り一面には『三体目』であろう残骸やオイルが無惨にも飛び散っている。

そして彼女が座り込む物体は――。

』

四肢を失い頭部や胴体がズタズタになった『三体目』であつた。既に事切れているのかピクリともしない。

「フーンフフーン♪」

彼女の右手にはそれなりに大きい『斧』があり、オイルがこびり付いている。それを先程からジャグリングするかのよう遊んでいるのだ。端から見れば『危ない女』である。

「……………」

彼女は何を思ったのか。ふと、動かなくなつた『三体目』を凝視し――。

「えいやっ」

頭部に向かつて『斧』を振り下ろした。ひしやげた音と共に頭部は真つ二つに割れそこからオイルが噴射する。

訂正しよう。彼女は間違い無く『危ない女』だ。

「さっきの警告はどこからかなあ？イヒヒ」

彼女の機体にも隆道の警告は流れていた。しかし、彼女は別に思うところはない。そんなこと自分には関係など無いのだ。

「ああ、待っててねえにーに。もう少し、もう少しで——」

彼女は頬を赤く染め、自身の首に付いているソレを左手で優しく撫でながら頬笑む。

——彼女の首元には、パネルの付いた鉄の首輪があつた。

第二十一話

クラス対抗戦で突如現れた無人機三体による襲撃事件は終わった。

アリーナに閉じ込められた生徒達を筆頭に学園関係者全員には箝口令が敷かれ、生徒達は自室待機を命じられる。当然クラス対抗戦は中止だ。

敵と遭遇し交戦した人間は事件の当事者ということで事情聴取を受ける事になり、敵と交戦した一夏、セシリア、鈴音と直接襲われた隆道と日葵の五人は本来だったららまめて事情聴取するはずだったのだが――。

「織斑せんせー。事情聴取なのになんで私は個別なんですかあ？これじゃ苛めですよ苛めえ」

「何度も言わせるな、お前と柳を一緒にする訳にはいかない。それに柳も個別だ、理由は別にあるがな」

「はーはー」

――椅子に寄り掛かりながら千冬の前でわざとらしく不貞腐れる態度を取る彼女、日葵に関しては個別として事情聴取をする事になった。

以前彼女は隆道と接触し、発症してしまった彼は自分自身を傷つけた。ただでさえ接

触させまいとしていたが、あんなものを見てしまったら尚更近づけさせる訳にはいかない。一緒に来たにして、再び発症させる訳にはいかないのだ。

ちなみに彼も日葵と同様に個別で、真耶が事情聴取を行っている。反応が消えた事によつて死んでしまったと思われていたが、彼は変わり果てた姿で現れたのだ。

他の三人に関してはピットから見えていたというのもあり事情聴取は大して時間が掛からなかったが彼は別だ。その時の状況や変異した機体について詳しく聞く必要がある。

「いい加減不貞腐れるな、そろそろ話を始めるぞ。今回の事件で襲撃してきたのは三体のI Sだ。一体目は試合をしていた織斑と風の所に乱入、二体目はBピットにいた柳を襲撃、三体目は外にいたお前を襲った。お前は一人で対処したそうだが、間違いはないな?」

「間違い無いですよ。というかあ、せんせー達は何やってたんですかあ? 扉をロツクされたり通信を阻害されただけで何も出来ないなんてほんつと役に立ちませんよねえ」
「……………それについてはすまないと思っている。生徒を危険に晒してしまったことについては我々の責任だ。本当にすまない……………」

彼女の言う通り教員が何も出来なかったのは事実だ。本来ならば生徒は全員避難させ、教員が対処すべき事にも関わらず襲撃者を生徒達に任せてしまったのだから。

今回に関しては対処すら許されないほどに徹底した妨害という、全てにおいて相手を上回っていたというものだがそんな事は生徒には関係ない。

『生徒を危険に晒した』。これだけで学園の教員側は言い訳など一切してはいけけないのだ。

「まあ別に良いですけどねえ。私は一人でもなんとかなりますしい、コレの稼働データも取れますからあ。何より私より弱い奴が救援に来てても邪魔なだけなんでえ」

「……………」

彼女はへらへらとした態度で首元にある物体——首輪を指で叩く。

その首輪こそ彼女の専用機。奇しくもその待機形態は隆道が持つISの待機形態と酷似していた。

本人いわく千冬が国家代表を退役した後から着けており、自分では決して外すことが出来ないという特殊なもの。外すには特殊なキーが必要らしい。

担当者に連絡を取って聞いてみたところ、どうやら以前強奪されかけたのでその防止の為に施したとのこと。

聞ける事は聞けたので電話を切ろうとした時、担当者は最後に意味深な事を言っていた。

『絶対に無理矢理外そうとするな』と。

「そういえばあせんせー。襲われた時に一つだけ気がかりな事がある」

「なんだ？」

「襲われたのは事実ですけどお、なーんか殺しに来たって感じじや無かつたんですよねえ。それに腕や肩にあったのって多分ビーム兵器ですよ？一発も撃って来なかつたんですよ」

「なに？」

「確かに彼女は襲撃を受けた。だがその攻撃に殺意が感じられなかったのだ。おまけに搭載されていたであろうビーム兵器は一切撃たず、近接攻撃のみという不可解なものだった。

「でもお、おかげですつごく楽でしたよお？私に近接攻撃なんて絶対通用しないのになあ。……………ところで、あの無人機はどうなりましたあ？」

「無人機は此方で回収した。織斑達や柳を襲ったのも含めてな」

「そつちは二体もいたようですけど、どうやって倒したんですう？代表候補生が二人もいながら結構時間掛かってましたよねえ？未確認の警告が出た後立て続けに反応が消えましたけどお……………まさかあの弱つちい代表候補生二人が一気に倒したなんて言い

「ませんよねえ？」

「……………二体の無人機は全て柳が破壊した。警告も柳のISから出たものだ」

代表候補生二人——正確には一夏を加えた三人がかりでも攻撃を当てることが出来なかった無人機。それを隆道が一人で、しかも二体とも短時間で撃退処か破壊してしまつたのだ。

代表候補生でも手間取つた相手を素人が一方的に捌るなど普通は有り得ない。だが実際に彼はそれをやってのけた。

「……………へえ、にーにが……………ね。いいね、すつごくいい」

「……………篠原。お前はアレが無人機だと知っていたのか？」

「いいえ？機械染みた動きだなーとしか思つてなかつたですよ？」

「アレに人が乗つてたらどうするつもりだ？彼処まで攻撃すれば搭乗者が重傷を負う事は確かだ」

彼女がバラバラにした無人機は四肢をもがれ、胴体は数ヶ所が抉れ、頭部はパツクリと割れていた。

絶対防御や致命領域対応が存在しない無人機だからこそここまで出来た事だが、仮に人が乗つていたとするならば絶対防御を貫通し重傷に加え昏睡状態になるほどだ。

——『致命領域対応』——。

全てのエネルギーを防御に回す事で操縦者の命を守るこの状態は同時にISの補助を深く受けた状態となる。それ故にISのエネルギーが回復するまで操縦者は昏睡状態に陥るのだ。

三体目の無人機の損傷具合からして、誰がどう見ても殺しにかかっている。無人機だと確証が無いのなら多少の躊躇はあるはずなのだが——。

「私には関係ない」

——彼女にはそれが無い。

「——何？」

「関係ないって、言ってるんですよ」

「……………本気で、言ってるのか」

「ええ、本気ですよ。生徒や選手ならまだしも、不法侵入してくるような、それも私を狙う奴がどうなるうが関係ない」

先程までのへらへら態度は一切消え、表情を無くし淡々と語る彼女に千冬は戦慄した。

彼女の口振りからして本気だ。相手の安否など心底どうでもいいと本気で思っている。

「……………まあ、無人機だったから良いじゃないですかあ。もうこの話はやめましょうよお、全員無事だったんですからあ」

「……………そうだな」

彼女の雰囲気は元通りになっていた。これ以上の詮索は危険だ、そう思い千冬は話を切る事にした。

何故危険と判断したか。それは先程の彼女がした、千冬でなければ気づかない位ほんの一瞬の豹変を見逃さなかったからだ。

無表情からいつもの態度に戻るほんの一瞬。

彼女の顔は酷く歪んでいた。

だがそれは以前見せた『得体の知れない何か』ではない。

隆道と似ていたのだ。憎悪と殺意に溢れた『どす黒い何か』と。

それが何なのかはわからない。だが決して触れてはいけないと本能が告げた。

「いいか篠原、今回の件は箝口令を敷いた。決して口外はするなよ」

「まーた箝口令ですかあ？好きですねそれえ。まあ良いですけどお。……もう事情聴取はいいですよね？ならこれにて帰りますねえ」

「ああ」

彼女が帰る支度をしてる最中、千冬はこれからの学園に改めて不安を覚えた。

不慮の事故でISを動かし、世界初のISを動かせる男性ということでIS学園に強制入学となつてしまった『織斑一夏』。

適性検査を無理矢理受けさせられ、二番目の男性ということでIS学園に連行された、誰よりも女性とISを憎む『柳隆道』。

篠ノ之束の妹だからという理由で小中学を盪回しにされ、IS学園入学を強いられた

『篠ノ之箒』。

圧倒的過ぎる力を持ち、それを見境無しに容赦なく振り回す『篠原日葵』。

そして、今月転入生が来たにも関わらず、近い内に続けてI S学園にやって来る『二人の転入生』。

今年の入学式から今までに無い程の問題児揃いだったが、転入してくる二人も色々な意味でとびつきり危ない人物だ。特に隆道と相性が非常に悪すぎる。早めに対策を練らなければまたしても事件が起きそうだと、千冬は頭を痛めた。

「じゃあお疲れ様でしたあ」

そうこう考えてる内に彼女は支度を済ませ終わったようだ。

早く帰ってくれ、私の前から消えてくれと、教師にあるまじき思いを胸に秘めながら見送ろうとすると――。

「あ。そういえばせんせい」

「……………なんだ」

「せんせいって『過激派』はご存知ですよねえ?」

「……………何が言いたい」

彼女は帰ろうとした足を止め突然そんな事を言ってきた。彼女の言う『過激派』ほどの事を言ってるのかおおよそ見当はついてはいるが、何故このタイミングなのかと疑問が浮き出てしまう。

「んもう、鈍いですねえ織斑せんせーは。何が言いたいかと言うと——」

——外だけじゃなく、内側にも『敵』はいるんですよ？

同時刻の別部屋。そこには椅子に座り机に書類等を重ねてる真耶と、その向かい側にだらしなく椅子に寄り掛かる隆道。

白く染まった髪、そして変異した機体。いったいあの場所で何が起きたのか知らなくてはならない。故に彼女は彼と会話を試みるのだが——。

「……………」

「あう、えと、その……………」

——全く話が進んでいなかった。

それもそのはず、彼女は彼と今まで一度も会話が成功したことが無い。強いて言うなら寮の鍵を受け取った時ぐらいだ。

今までコミュニケーションを取らなかったツケが今彼女に降り掛かってきたのだ。

もつとも、取らなかつたではなく取れなかつたというのが正しい。仮に会話を試みたところで彼は目すら合わせないお得意のガン無視を決めるのだから。

だがしかし、この状況下に困っていたのは彼女だけではなかつた。

「あ、あう……………」

(さつきからなんなんだよこいつ……………事情聴取すんじゃねえのか)

彼もまた、先程から吃っている彼女に対して困っていた。

流石に事情聴取で無視を決め込むほど愚かではないが、その本人が何も聞かない以上どうしようもないのだ。

しかし、彼女の様子からしていつまで経つても話を切り出して来ないだろう。非常に不本意ではあるが此方から話し掛けるしかない。

「……………いつまで吃ってんだ牛眼鏡。さつきと事情聴取始めろよ」

「え!?は、はい……………つて、う、牛眼鏡!」

約二ヶ月の歳月を経てやつと話し掛けてくれたと思いきや、まさか酷すぎるあだ名で呼ばれると思わなかった彼女はつい裏返った声を出してしまふ。

眼鏡だけでも結構な酷さだが牛とはいったいどういうことだ。まさか胸の事を言っているのか、だとするならばそれはあんまりであろうと彼女は泣きたくなくなった。

涙目になり今にも泣き出しそうになるが、ここで折れる訳にはいかない。出そうになつた涙を無理矢理引つ込め事情聴取を始める事にした。

「……………コホン。えとですね、まず始めに今回起こつた襲撃の詳細ですが、侵入者とされる三体のIS——無人機はそれぞれ別の場所に現れました。一体目は試合中の織斑君達の所に、その後遅れて現れた二体目は柳君がいたBピットに、三体目は外にいた篠原さんの所に」

(日葵の所に? 狙いは俺や織斑だけじゃ無かつた……………?)

「そして二体目と三体目の反応が出た途端に織斑君達を足止めしようとして一体目の動きが急激に変わった事から、今回の襲撃者の狙いは柳君と篠原さんだということがわかりました」

(俺と日葵が……………? 織斑は関係無かつたつて事か……………?)

襲撃者の狙いは男性操縦者だと彼は推測していたが、話を聞くにそれは間違いだとい

うことがわかった。

だがそれだと相手の狙いがますますわからない。自分ならまだしも、何故日葵も狙ったのだろうか。

「……………一体目はどうやって入ってきたんだよ。二体目だって襲われる直前まで気づかなかったぞ」

「高出力のビーム兵器でシールドを突き破り侵入してきました。柳君が遭遇した二体目と外にいた三体目は突然反応が現れた事から潜伏モードで隠れていたようです。気づかなかつたという事は……………恐らく肉眼では見えない不可視機能、でしょうか」

「ふーん、シールドを突き破るほどのビーム、ね。不可視機能を使ってまで俺を狙うとか本気にも程が……………ん？」

一体目の侵入方法はわかった。二体目もBピットで待ち伏せしていた事も。だが新たに疑問が生まれたのだ。

（なんでアレはBピットで待ち伏せしていた……………？本来そこに行くはずが無かつたのによ……………）

彼を襲った無人機は既存のISと比較してもかなりの巨体だった。あれほどの大きさならばゲート、もしくは搬入口からでないとする事が出来ない。

Bピットに来た時点でどこも完全に閉まっていたのだ。ならばあの無人機は彼が来

る前からあの場所で待ち構えていた事になる。

(俺がBピットに来る事を確信していたのか……………？エスパーかよ)

「そういえば、柳君は何故、Bピットにいたんです？本当でしたらAピットに来るはずだったと織斑先生が……………」

「……………道を覚えてなかった」

「……………はい？」

「道を覚えてなかったって言うてんだよ。だから電光掲示板頼りに向かって行っただ」

「え、えーと……………」

彼女は困惑した。まさか道を覚えてなかった結果、逆の方へ行っただなど誰が予想出来るのか。

「ま、まあ道を覚えていなかった事は置いときましょう。それにしても電光掲示板を頼りに……………？書き換えられていたということでしょうか？」

「んなこと俺が知るかよ。……………それともう一つ」

「？」

「三体の無人機は全部同じ型なんだよな？だったら俺を襲った奴もビーム兵器を積んでたはずだが……………一発も撃って来なかったぞ。攻撃も素手だけだ」

これが彼にとって一番の謎だった。

殺しに来たのであるならば動けなくなった所で撃つてしまえば直ぐに終わってたはず。にも関わらず無人機は態々近づいたのだ。

直接惨たらしく殺したかったのか、または別の理由があったのか。彼がそれを知る術は無い。

「……………それは、確かに気になりますね。……………わかりました、その事は伝えておきます。次になんですが……………」

「まだあんのかよ……………」

「うう、ご、ごめんなさい……………。ですが、その……………白髪や変異した機体についても……………」

「……………白髪は昔からだつづうの、いつ頃からなつてたかは忘れたが。今まで染めてたつてだけだ。機体については知らねえ、勝手に壊れて初期化したと思つたらああなつただからよ。ISに関してはそつちが詳しいんじゃねえのか」

彼は嘘をついた。一夏にも聞かれたことだが、白髪になった頃は嫌でも覚えている。

何せ、彼にとってその頃は——。

『待ってくれ……………それだけは、本当にやめてくれ……………頼む……………』

初めて『心』が壊れ——。

『……………やめろやめろやめろやめろつつつつつ！！！！おい、やめろって言ってんだろうがつつつ！！！！』

全ての女性を憎む事を決定付けた——。

『やめろおおおおおつつつ！！！！！！！！』

——『決して忘れる事が出来ない日』があつたのだから。

(……………くそつたれ)

それは彼にとつてこれ以上ない悪夢のような出来事。定期的に思い出すそれは今でも腸が煮えくり返りそうになる。

白髪の話をするということは必然的に『あの日』の事を話すことになる。身の上話など絶対したくないし、聞く側も絶対にいい気分にはならないだろう。

教えたところで自身は何も変わらないし、変えるつもりもない。だから適当にはぐらかす事にした。

だが機体に関しては本当に知らない。唐突な出来事のお陰で何が起こったのかいまいち覚えてないのだ。

急に動かなくなったと思いきや近づいてきた無人機を吹き飛ばし、機体は目に見える速度で変異していった。それと同時に新たに増えた機能は、何故か使うべきだとしか考えていなかったので詳細など一切知らない。

「ふむ……………やはり調べる必要がありますね。少しばかり此方で預かります」

「好きにしてくれ。なんなら返さなくても良いぞ、こんな気味の悪い物なんかよ」

——つ……………！

「え、えと、それを決めるのは政府の方々ですので、私の独断では……………」

「あつそ」

どちらにせよ暫しの間ISを着ける必要が無くなったのだから願ったり叶ったりだ。ただでさえ嫌ってるのに自らを危険に晒す可能性のある機体など誰が着けたがるのか。

彼はさっさと外そうと首輪に手を伸ばそうとしたが——。

「あの……柳君。その I S は貴方のパートナーなんですから、気味の悪い物なんて言っちゃだめですよ？」

「——あ？」

——聞き捨てならないその言葉によってその手を止めた。

「I S にも意識に似たようなものがあるんです。操縦時間に比例して操縦者の特性を、つまり『灰鋼』は一緒に過ごした時間によって柳君を理解しようとします」

彼が I S を嫌っているということはわかっている。しかし、その I S の事を学んで様々な事を知って欲しかった故の悪意の無い、善意からの言葉だった。授業で言った事と大して変わりは無いが、これを機に彼とコミュニケーションを取ろうという真つ当な理由で語る彼女だが——。

「それによつて機体は以前より性能を引き出せることになるので、I S は道具ではなくパートナーとして——」

——彼女は理解していなかった。彼の I S に対する憎しみの深さを。

「黙れ」

「——っ!？」

突然と場の空気が重くなり、彼女は息苦しさを感じた。胸を締めつけられるような感覚に陥り、同時に吐き気を催す。

彼女はこの感覚を覚えていた。この感覚は入学初日に垣間見た、彼から溢れ出す——

「パートナー、だと……………?下らない事言ってるじゃねえ」

——『どす黒い何か』だ。

「ISはパートナーなんかじゃねえ。どこまでいっても所詮人に使われる道具だ、得体の知れない兵器だ。……………コイツは俺を理解しようとする?随分ふざけた事を言ってくれるじゃねえか。コイツに意識なんてあるわけねえだろうが」

「あ、あの……………柳……………君……………」

「それによ、以前より性能を引き出せるとか言つたよな今。つーことはあんたもISをそういう道具として見てるって事だ……………。バレバレなんだよ、善人ぶってるじゃねえぞオイ」

「う……………」

彼は許せなかった。全てを蹂躪する化け物染みた得体の知れない兵器を、自分を散々苦しめている機体をパートナーとして扱えと軽々しく言う彼女に。

乗れば乗るほど以前より機体の性能を引き出せる。だからなんだと言うのだ。結局はISをパートナーではなく成長する兵器としか目を向けていないではないか。

今まで害の無い気の弱い女としか認識していなかったが、やはりコイツも他の連中と同じなのだとは彼は改めて痛感した。

「まったく、何を言うかと思えば結局IS、IS、アイエス、アイエスってよお……………そんなにこの兵器が大事かつつの……………いや、そりやそうか。あんたは女で、ここの教師だよなあ。こんな兵器が大好きなのは当たり前か」

「なっ……………ち、違います！私はそんなつもりでここの教師になったつもりじゃありません！それにISは兵器じゃ——」

「黙れって言うてんだろぅがっつっ!!」

「ひっ……………」

「いいか、良く聞け山田真耶あ。世間がなんと言おうが、あんたがどう主張しようが、I Sは道具だ、兵器だ。それだけは譲れねえ、譲る訳にはいかねえ……………」

「こんなものがあるからつ……………」

そう言つて彼は首輪を外し、それを強く握り締め――。

「こんなものがあるからあつ!!!」

――彼女の目の前にある机に向けて叩きつけた。

首輪はその強い衝撃によつて跳ね返り、天井にもぶち当たる。その天井から再度床に叩きつけられて転がり、最終的に彼女の足元で止まった。

待機形態とはいえ、これはI Sだ。当然壊れる事は無い。

――うつぐ……………ひつぐ……………えつぐ……………。

「……………こんなものがあるから、日葵は変わつちまった。親父は捨てられ、虐げられ続けて、耐えられずに死んだ。ハルも……………だから――」

右腕に巻かれた首輪を握り締め、震えながらも溜まりに溜まった感情をぶつけるように彼は啞然とする彼女に向けて叫ぶ。

彼女はもう声を出すことすら出来なかつた。何故なら、彼の濁つた目からは大量の涙が溢れていたのだから。

「俺はＩＳを、お前らを絶対に許さねえ！俺がくたばるその日まで、お前らの全部を否定してやる！！俺をこの学園に連れてきた事を、俺をＩＳに乗せた事を絶つつつ対に後悔させてやる！！」

捨て台詞に近い叫びを放ち、彼は早々に去っていく。部屋に取り残されたのは全てを否定された彼女とその足元に転がる、彼に拒絶された『灰鋼』だけであった。

——ごめんなさい……ごめんなさい……。

真耶を置いて颯爽と寮へ向かっていく隆道。事情聴取で全てを吐き出し、自室以外では常時着けていた首輪は彼女に投げ捨てた。お陰で違和感が拭えず先程からずっと首を擦りつばなしたが、それのお陰か足取りは軽くなっていた。

（つたく、人の気も知らねえで偉そうに。機械の塊に意識なんてある訳ねえだろうが）
彼は決して内側に抱えてるものを他人に話したり相談する事はない。

言わなきゃわからないと言われるだろうが、何が悲しくて赤の他人に身の上話をしなければならぬのだろうか。その内容が自分にとって辛い出来事なら尚更だ。

それに、話したところで楽になどならない、何も解決など出来やしない。もし解決出来るのであればとつづく昔にやっている。

(腹、減ったな……………)

襲撃の直前から何も口にしていない。無人機と交戦した事もあって疲労と空腹でかなり辛くなっている。

さっきの事は忘れて腹に何か入れようと、歩く速さを上げたその時だった。

「柳、何故ここに……………?」

「……………ああ、あんたか」

「事情聴取は終わったのか?」

彼の後ろから声をかけたのは千冬だった。彼女はまだ事情聴取してであろう彼の所へ向かう最中だったのだ。

彼は溜め込んだものを全部吐き出したからか、敵意はあれど彼女を見ても特に苛立ちを起こらなかった。

「……………聞かれた事は全部喋ったし、変異した機体は詳しく調べるって事で渡した。詳しくはあの牛眼鏡に聞け」

「う、牛眼鏡……………?ま、まあいい。……………柳、今回は本当にすまない。我々が無力なばかりにお前を危険な目に……………」

「前にも言っただろ、謝るんじゃない。それに、いつかこうなるとは薄々思っただけだよ。どこに行っても『敵』しかいねえんだからよ」

「……………柳、お前も……………アレが無人機だと知っていたのか？」

「んな訳ねえだろ。殺すつもりでやったんだからな」

隆道もまた日葵と同じく、相手の事など一切考えはしなかった。

IS学園に連行される前は、相手を殺す気はあれど流石に殺人まではしなかった。強いて言うなら『半殺し』程度だ。

まだ生きていた父親を支えようと、耐えて、逃げて、迎え撃つて、どうしようもなくなつたら半殺しにして。

しかし、今や父親も、愛しい愛犬もない。母親は裏切り、妹は敵となつた。自身が失うものはもう何も無い。

新たな目標としてなにがなんでも一夏を支えたと誓つたが、今回襲われた事からそれも難しいだろう。恐らく先に死ぬのは自分かも知れない。

彼には好意を寄せてる幼馴染も、世界最強の姉もいる。身の回りについてはどうとでもなる。ならば自身が出来る事はただ一つ。自身や彼に立ちはだかる敵を潰すよう暴れるだけだ。

都合の良い事に、あれほど憎んでいる自身の専用機には刺し違えても敵を倒せるだけの力が備わっている。

憎む敵を潰す為に、憎む兵器を利用する。なんと皮肉な事であろうか。

自分がどうなるかが、最早どうだっていい。一夏には悪いと思ってるが自分にはもうこれしか無いのだ。

彼はもう迷わない。今回の襲撃事件で決意は揺るぎないものとなった。

『立ちはだかる敵は刺し違えても潰す』と。

「……………お前も、か」

「あ？」

「いや、こつちの話だ」

「俺が人殺しになるところだったって言いたいのか？結果的に無人機だったんだから良かったじゃねえか。……………んなことより、いつになったら俺は外に出れんだよ。いい加減外出許可出しても良いんじゃねえのか」

「……………それについては先日、ようやく許可が決まったところだ。護衛付きになるがそれで我慢してくれ。明日外出届けを渡す、必ず書いて提出するようにな」

彼は一夏と同様、自由に外出が出来ない。男性操縦者の価値は計り知れない、世界中の誰もが狙ってるからだ。外出するには護衛が必要になる。

「はいはい。んじゃ俺は帰るからな」

「ああ、引き留めてすまない」

彼は今度こそ寮へと足を運ぶ。軽い足取りで帰っていく彼を、彼女は哀しげな表情で見送った。

「……………」

先程のやり取りで彼女は確信した。彼は決して殺しを躊躇わないと。

だが、狂っているとと言う資格は自分には無い。彼をあのようにしたのは、紛れもない自分自身なのだから。

「ままならんもんだな……………」

時刻は夕方。隆道はさっさと自室に戻るべく足を速めていたが、寮の入り口で佇む二人の人影によってそれを遅めた。

「んあ？お前ら……………」

「あ、ようやく終わったんですね。待ちくたびれましたよ、本当に」

その二人は一夏と筈だった。彼等は自分達の事情聴取が終わった後、ずっと隆道を待っていたのだ。

「……………なにも待つことなんてねえだろうよ。いつ終わるかなんてわからねえのに」
「私達がそうしたいからそうしたんです。こうして会えたんですから結果的に良いではないですか」

「……………まあ、いいわ。それより腹減ってんだ、一先ず部屋に行こうぜ。色が抜けたコレも染めたいしよ」

自室に戻り彼は直ぐ様洗面台に行き、髪を黒に染め直す。白髪は良くも悪くも目立つてしまうのだ。非常に面倒ではあるが白髪のままは彼とて流石に嫌ではあった。

今現在、部屋には彼一人。一夏と筈の二人は食堂で夕食を持って来ると言つて彼と別れた。そこまでしなくてもいいのにと毎度思つてしまう。

「こんなもんか」

何度も染め直しているからか、全て染め直すのにさほど時間はかからない。しばらく色が抜けることは無いだろう。

塗り残しが無いかどうかじつと鏡を見つめっていると、一夏達に戻ってきたのか扉を叩

く音が聞こえた。

「……………おつといけね、もう来たのか」

それよりも今は食事だ、塗り残しがあるなら後で染めれば良い。今日の飯はなんだろうかと楽しみながら彼等が待つ扉へ向かった。

「いつも悪いな」

「いえ、これくらい。俺達もずーっと食ってないんです、早く食べましょうよ」
「ん」

彼等を招き入れ颯爽と夕食にありつき、食べながら今日起こった出来事を共有していく三人。とは言っても大体は事情聴取で聞かれた事と同じなので隆道にとっては大した情報は無かった。

「柳さんと……………篠原、さん？でしたっけ。今回の襲撃は二人を狙ったものだ……………」
「というか、妹さんいたんですね……………」

「つつても『元』な。離婚してそれぞれ別れたんだよ」

「あー、えと、すみません」

「謝ることなんてねえだろ。今時珍しくもねえし、もう八年前の話だしな」

彼にとつては大した事ではないが、一夏達にとつてはかなりの収穫があった。

白髪であった事、妹がいてこの学園にいる事、八年前に離婚していた事。

まだまだ知りたい事はあるが、根掘り葉掘り聞く必要はない。中には触れて欲しくない事もあるだろう。彼は気にして無さそうな素振りを見せてるが、両親の離婚については触れて欲しくないはずだ。

(そういえば、鈴の両親も離婚してたんだっけな……)

事情聴取が終わった後に知った事だが、幼馴染である鈴音の両親も離婚している。親権は立場が上で待遇も良い母親の方だとも聞いた。あの時の彼女は酷く不安定だったのを見るに、かなり辛い事だったのだろう。

自身には物心ついた時から両親がいない。唯一の家族は姉だけだ。もし、姉が自分を捨てて何処かに消えてしまったら、そう思うと堪らなくなる。

家族がバラバラになるなど決して良い事ではないが、そうせざるを得ない何かがあったのだろうか。

だが何故離婚したのかなど、そんなこと訊ける事ではない。他人が訊いてはいけけないのだ。

「そういえばなんですけど。事情聴取が終わった後、鈴と仲直り出来たんですよ」

「鈴?……ああ、あいつか。んで、結局あの酢豚うんぬんの意味はわかったのか?」

「それなんですけど、『毎日酢豚を奢ってくれる』じゃなくて『毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』だって思い出したんです」

「……………それで?」

彼は以前一夏が相談しに來た時の事を思い出していた。

確かあの時は、『料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢る』と一夏は記憶していた。

つまり今一夏が言つた事を当て嵌めると――

『料理が上達したら毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』

――になる。

「それで、もしかしてタダ飯じゃなくて『毎日味噌汁を』のくだりかと思つたんですが……………全力で否定されてましてね……………違わないって」

「叩かれ損じやねえか」

意味が違わないにも関わらず一夏は鈴音に叩かれたのかと、彼はため息を吐きながら箒の方を見る。一夏に対して『馬に蹴られて死ぬ』と吐き捨てた彼女は、冷や汗をかきながらそっぽを向いていた。

「しゝのゝのゝのおゝ」

「あつ、いや、えと、その……………、ごめんさい」

「……………はあ。まあいいわ」

結局、二人のいざこざは無意味なものだった。

やはり一夏は女難の相があるのではないかと、彼はそう思った。

本当は一夏の考えは正しかったのだが、鈴音は恥ずかしさのあまりつい否定してしまつた事は誰も知らない。一夏は間違いなく女難の相が存在するだろう。

IS学園地下五十メートル。そこにあるのはレベル4権限を持つ関係者しか入れない隠された部屋。

バラバラになつた二体と胴体に穴が空いた一体の無人機は直ぐ様ここへと運び込まれ、現在は解析されている。それと同時に隆道の機体『灰鋼』の解析も進めていた。

「……………」

千冬はアリーナでの戦闘映像を何度も繰り返し見ている。先程から注視しているのは一夏達を足止めた無人機とBピットから現れた、変わり果てた姿をした隆道。

彼女はどちらかというところ襲撃に来た無人機よりも、彼の機体の方に注目していた。

「……………織斑先生。解析結果が出ました」

扉から現れたのはブック型端末を持った真耶。心なしか表情が暗い。

彼女は、隆道の事情聴取が終わった時からこうなのだ。千冬は何があつたのか訊こうとしたが、彼の名前を出す度にその表情は暗さを増す。故に訊く事が出来なかつた。

「ああ。どうだった？」

「織斑先生が懸念していた生体組織の存在も確認しましたが、何もありません……。完全な無人機です」

世界中のどこも未だに完成していない、遠隔操作と独立稼働するI.S。その事実は学園関係者全員に箱口令が敷かれるほどだ。

無人機の乱入は、襲撃に飽きたらず破壊された後も学園に大きな爪痕を残していた。

「どのような方法で動いていたかは不明です。……柳、君と篠原さんがバラバラに破壊した無人機は最早解析が不可能。唯一原型を留めてた無人機は機能中枢が全損してしまいました。修復は不可能です」

「コアはどうだった？」

「……それが、三つとも登録されていないコアでした」

「そう、か」

彼女は確信した。今回起こった襲撃事件の黒幕を。未登録である三つのコア、それを

持つ者は世界にただ一人しか存在しない。

「……………織斑先生？」

「ああ、すまない。……………無人機についても、コアについてもわかった。後は……………」

「……………こちらも解析結果は出ています。これがそうです」

真耶は別の端末を彼女に受け渡す。そこには変異した『灰鋼』のデータがずらりと並んでいた。

彼女がそれらを目に通すが、そこには今までに無いものがあつた。

「……………っ!? こゝ、これは……………!?」

「襲撃の際に、何者かが柳君の機体にハッキングをしかけ強制初期化しようとしていました。ですが、どういうわけか初期化は中断。再び最適化を行い一次移行を終えたようです」

「一次移行? それが、あの姿だと言うのか……………?」

「私にもわかりません……………。以前と違うのは見た目は勿論、パワーアシストも出力も上昇しています。第三世代相当ですよ……………これは……………」

「それに加えて、新たに追加された項目……………。なんだ、なんなんだこれは……………」

データをみるに、既に『灰鋼』は『打鉄』とはかけ離れた物へと変貌していた。元が第二世代とは思えないほどに機体性能も上昇。それは全て第三世代に相当していた。

そして新たに追加された兵装と機能は彼女達を震え上がらせるには十分過ぎた。

——機体兵装——

自己防衛システム『狂犬』

対近接絶対防衛障壁『番犬』

——追加兵装——

バリアブルシールド
可変式浮遊盾

絶対殲滅システム『猛犬』

■ ■ ■ システム『C R V T 1』

——追加機能——

『A・S・H』

『コード・デッド』

——単一仕様能力——

『悽愴月華』

——

「なんてことだ………！単一仕様能力まで………！！」

「追加された『可変式浮遊盾』は浮遊シールドが変異したものです……どうやら操縦者の意思によつて形状が変わるものかと。『A. S. H』は対ハッキング機能で、無数の防壁が何層にも張られています……。一つを突破したところで直ぐ様新たに防壁を作成、最終的には全ての接続を遮断しますので今後ハッキングされる事は無いでしょう……。残りは全て解析が不可能でした……。なんとか粘つてみたのですが、何故か『A. S. H』が作動してしまい解析を強制遮断。データ採取は可能のようですが、もう『灰鋼』の解析は不可能です……。」

「いったい、何をどうすればこうなるのだ……。……。」

「うっぐ……。……私達は、いったいこれからどうすればいいのですか……。……?。」

既に『灰鋼』は彼女達の手の施しようが無い領域に辿り着いている。暴力的な機能に加え、此方に一切情報を与えないよう徹底したその機能は、まるで操縦者である隆道以外を拒絶してるかのように思えた。

—— えっぐ…………… 貴女達には、頼らない……………！
—— 彼は…………… 私が…………… 私が……………！

第二十二話

襲撃事件が起きた深夜の第二アリーナ。

襲撃直後は教員を始めとした学園関係者の全員が対応に追われていた為、現場内調査は明日となった。現在は完全に封鎖されており、関係者以外立ち入りを禁止している。

深夜ということもあって本来ならば誰一人としていないはずだが、損傷が激しいBピットには一人の女性——千冬が鋭い目付きで佇んでいた。

「……………」

ピット内では機体を搬入し、そこで簡易的な調整を行う場合がある。よって床はISの重量に耐えられるように頑丈に造られているのだ。壁や天井、ゲートなどもそれに含まれる。故に簡単に破壊する事など出来ない。

流石にISのパワーアシストを駆使すれば扉はこじ開ける事が出来るし、全力で殴れば床等は凹みはする。武装を使えば当然穴は開くだろう。

しかし、目の前の光景はそんなものでは済んでいなかった。

「酷いものだな……………」

まず目に留まったのが室内の中央にある大きなクレーター。床は綺麗な円状の凹み

があり、よく見ると天井にも出来ている。

次に目に留まるのはゲートに繋がる入り口。こじ開けたとは言いがたい、抉ったような状態となった入り口は修理する事は容易ではないだろう。

そして半壊した入り口を跨ぐと、そこからステージが丸見えになるほどに風通しが良くなり過ぎたゲート内。壁は所々爆発の影響で焼け焦げ、床は足跡のような二つの凹みとスラストによって焼き付いたであろう焦げ跡が残っている。その近くでは巨大な空薬莖が四つほど転がっていた。

『鋼牙』、か。しかも両腕での同時射出……………」

『盾殺し』と言われている武装の中でもダントツの攻撃力を誇る『鋼牙』。片腕だけでもシールドや装甲を粉碎する程の威力だが、隆道は両腕で無人機に撃ち込んだ。凹みに凹んだ頭部と四肢だけが残った無人機から察するに胴体に直撃させたのだろう。ゲート内の状況からして瞬時加速によって攻撃力を上昇させた、その悪魔的な一撃を。

あまりにも容赦の無い、相手の安否を度外視した攻撃。

今回は相手が無人機だから良かったものの、人間相手にしたらどうなっていたらだろうか。

エネルギーが充分の状態を受けたならば、絶対防御と救命領域対応によってまず死にはしないし後遺症を残す事は無いだろう。だが不十分の状態だった場合は——安全

の保証など無い。

『鋼牙』はその特性上熟練の操縦者でも使いこなすのは難しく、片腕展開のみの運用が主な使い方だ。しかし彼は両腕に展開し、しかも同時射出をした。パワータイプ型ISであつたとしても使用者は無事では済まないはずだが、使用の際吹き飛ばされた様子も無い。例のシステムのおかげであるだろうが、彼は確実に使いこなしていた。

どう見ても危険過ぎる。使わせない為に此方から外す事も考えたが、『灰鋼』に発現したシステム『A・S・H』によって一切の干渉が出来なくなつてしまつた。後付武装に干渉出来るのは、今となつては彼しか存在しない。

そして何より、彼自身この武装を気に入っている節がある。報告によれば彼はアーリーナが使用出来る期間の放課後で『鋼牙』を使いこなす為に常に空撃ちをしていた。ISや女性を目の敵にしている彼が此方の言うことを素直に聞くとは思えない。

「……………」

今回の事件によつて、より暴力的になつてしまつた『灰鋼』。『A・S・H』の他に新たに発現したシステム『猛犬』は危険過ぎる代物だ。相手にとつても、彼自身にとつても。

それ以外にも一切の詳細が不明のシステム『CЯ▽T一』と名前からして危険極まりなく、『死』とだけ読み取れた『コード・デッド』。更には発現することなど本来はあり

得ない『奪』とだけ読み取れた単一仕様能力『悽愴月華』。

単一仕様能力は本来ならば機体が二次移行をした際、稀に発現する特殊能力だ。『白式』のような特殊な仕様でもない、元が第二世代量産機を一次移行しただけで発現するものでは決して無いのだ。もしそんな簡単に発現するものであるならば研究者達は苦労など絶対しない。

『悽愴』いたましく悲しい『月華』月の光……………

ステージで彼が見せた単一仕様能力。一夏の青白い光を放つ『零落白夜』とは違う、赤黒い光は禍々しいの一言に尽きる。

その腕に掴まれた無人機はまるで生きてるかのように藻掻き、動きが鈍ったところで胴体を貫かれ機能停止した。

掴んだ相手にダメージを与える単純な能力だとは思えない。よってあの能力の詳細を知る為無人機をくまなく解析したところ、ある事実が判明した。

エネルギーが微塵たりとも残っていなかったのだ。

無人機のエネルギーが文字通りスカスカになった代わりに『灰鋼』のエネルギーは限度一杯まで残っており、ログには『エネルギー奪取』と記録されていた。

これらの状況と概要欄に記された『奪』という文字。恐らく彼の単一仕様能力は『相手のエネルギーを奪う』で間違いないだろう。

何故このような名前で、このような能力なのかはわからない。しかし、何故か彼らしい能力とも思ってしまった。

『灰鋼』の解析は不可能になってしまったが、辛うじてデータ採取は可能だ。上に報告したところでどうせ今後もデータ取りを続けろと言い出すのだろう。ただの量産機がここまで変異し、挙句の果てに単一仕様能力も発現したのだ。研究者達はさぞ喜ぶに違いない。

「くそっ……………」

やりきれない気持ちで満たされ、言い様の無い怒りが込み上げる。

『灰鋼』に関しては日本政府とIIS委員会が絡んでおり、学園側がどうこうする事は出来ない。それを扱う彼自身については、手助けしようにも当の本人は此方を強く拒絶している。彼と『灰鋼』の問題解決は非常に困難だ。

それだけではない。自身の弟やその幼馴染、ぶつちぎりの問題児である彼の妹、更には六月頭に転入してくる二人の生徒。問題が山積みにも程がある。

多忙なのは今に始まった事ではないが、何故同じ時期にこうも一気に降り掛かってしまふのだろうか。

「はあ……………」

物事が上手くいかず、次々と出てくる新たな問題。それらと向き合わなければならぬ事に憂鬱な気分は最頂点に達し、彼女はとうとう溜息を出しその場で俯いてしまう。その時だった。

「……………」

ふと、足元に何か落ちていることに気づいた。

それは小さな無印の金属ケース。少なくともピット内の備品ではない。

「これは……………」

室内の隅にあつたそれは、どこかで見たことがあると彼女は記憶していた。

おそるおそるそれを拾い、じっくりと観察すると上部の蓋がスライド出来る構造になつている事がわかる。

おもむろに蓋をスライドさせると、中にはカプセル剤が入っていた。

「薬……………」

ここで彼女はようやく思い出す。このケースは彼の所持品だということに。記憶によればこれは緊急用と言っていた。恐らく襲撃を受けた際に落としてしまったのだろう。

「……………」

どうも気になってしまう。以前までもに歩けない程の大怪我を負った彼はこの薬のおかげで普通に歩ける程になっていた。鎮痛作用が強力であろうこのカプセル剤にはどのような成分が含まれているのだろうか。

故に――。

(すまない、柳)

――中の一粒だけを取り出し、自身の持つ小袋にしまった。

悪いことをしたと思つてはいるが、このカプセル剤は調査すべきだと判断した。もしかしたら麻薬の一種である可能性がある、もしそうだとしたら大問題だ。

(後で届けるか)

現在は既に深夜だ、当然彼は寝ているであろう。SHR時にでも渡せばいいと考えた。

解析不可能となつた『灰鋼』の今後に関しては報告してからだ。結果は見えてるが、一応しておかねばならない。

「織斑先生、ここにいたんですか」

「……………ああ、おまえか」

突如背後からする声。振り向くとそこにはベスト風の上着を来ている生徒が一人。

外側に跳ねた、肩まで伸びる水色の髪に赤い瞳の少女。黄色のネクタイを着けている

事から二年だと言うことがわかる。千冬は当然彼女の事を知っている。

「何か気になることも……………」

「ああ。すこし、な。……………それよりも私に何か用なのだろうか？」

「ええ、はい。……………彼——柳隆道について遅れながら報告が」

「……………」

後ろで手を組む彼女は真剣な眼差しで千冬に近づく。周囲には人一人としていなく聞かれる事は無いだろうが、このような事はなるべく小声で済ませたい故の行動だろう。

「……………彼の部屋に設置した監視カメラは入学初日で全て破壊された事は以前話したと思います」

「……………ああ。原因は掴めたのか？」

彼が一人部屋だった理由。それは彼の精神状態が不安定だった事に尽きた。適性検査後の彼はこの世の終わりを見たような錯乱っぷりであり、大の大人が数人がかりでも手を焼いた。何名かは骨折等の重傷を負うくらいだ。おまけに女性をこれでもかと言うほど目の敵にしている。

そのような人間を、何も知らない生徒と一緒に部屋になんてしてしまったら暴力事件が起こる未来を想像することなど容易い。

対抗出来るように代表候補生との相部屋の家もあったがこれも却下。恐らく互いに無事では済まないだろう。今思えば彼の妹である日葵と相部屋にさせなくて本当に良かった。

一人目である一夏と同じ部屋にする手もあったが、ここで出てくる問題が筈である。

彼女は『篠ノ之博士の実妹』というレッテルを貼られている。そんな彼女に詰め寄る人間など五万といえるのだ。

見ず知らずの他人に教室だけでなく自室ですら質問攻めにあつてしまえば彼女はいずれ壊れてしまうだろう。故に面識のある彼を相部屋にさせた。

そういつた訳で隆道を一人部屋にしたのだが、これがまた苦勞した。

何せ適性が発覚したのが三月半ばだ。教員達の過勞死レベルとも言える必死な調整によつて、入学式前日には彼を一人部屋にする事が可能性となった。ブラック企業のように徹夜で働いた彼女達は報われても良いだろう。

そんなどうでもいいことは置いて、またしても新たな問題が出てくる。

一人部屋にしたことによつて入学前日まで自傷行為や逃走を繰り返した彼を24時間監視出来なくなつてしまうのだ。学園内で貴重な男性操縦者が自殺などしてしまつたら全てが終わつてしまう。

故に、彼の部屋に監視カメラを取り付けた。プライベートもへつたくれも無いが、彼

の事を考えると致し方無い事なのである。

しかし、それらは初日で破壊された。全て。

隆道が部屋に入り、遅れて一夏が入ってきたところまではしつかりと記録されている。だが、隆道が自身の荷物に手を伸ばし数秒経ったところで全ての監視カメラが映らなくなってしまったのだ。

次の日に彼の不在を見計らい全て交換してみたが、まるつきりダメだった。次の日も、そのまた次の日も何度繰り返し交換しても結果は同じだった。

調査をしてもハッキングされた形跡は無い。そもそも用意した監視カメラは完全にネットワークから独立した代物なのだ。干渉出来るはずがない。

ならば別の方法で破壊したのだと、部屋を念入りに調べた結果あることが判明した。

「彼の部屋から電磁^Eパルス^M反^P応が検出されました。それも限定的な破壊を目的とした、極めて高性能な」

「何……………？それはどこから……………？」

「どうやら彼の荷物に備わっていたダイヤルロックから発生しているようだ。ロックが掛かっていたので持ち出す事は出来ず、その場で調べようとしたんですが……………その結

果がこれです」

そういつて彼女は左手を千冬に見せる。その手には包帯が隙間なく巻かれていた。

「なんだそれは……………」

「いやあ、まさか触れただけで高圧電流を流されるとは思いませんでしたよ……………。おかげで仕事が凄く苦勞します」

何処からともなく扇子を取り出し苦笑いしながら開く。その扇子には達筆で『激痛つ!!』という文字が。

彼女は常に扇子を持ち、開くと時おりそこに台詞代わりの言葉が書かれている時がある。未だにどういう仕組みなのかわからない千冬だが、そんなことはどうだっていい。

「高圧電流……………？私は柳に渡す前に触ったが何も起きなかったぞ」

「あー、アレって指紋認証機能があったじゃないですか。恐らく彼が触った事で起動したのかと。監視カメラもその時に破壊されましたし」

「……………」

徹底し過ぎている。何がなんでも情報を与えないそれに流石の千冬も戦慄を覚えざるを得ない。

あの荷物を用意したのは『根羽田』という、彼に最も近いであろう人物。彼を知るにはやはり彼女が必要不可欠だ。

「柳の荷物を用意したのは『根羽田』という人間だが、調査は済んだのか？」

「はい。『根羽田 光乃』、24歳。極普通の高校を卒業し、三年間は製薬会社で勤務。その後は退職し家政婦紹介所に勤めていたようですが、去年の十二月に退職。以降は何度か彼の自宅から出入りしてるといふ報告が出ています」

経歴に関しては至って普通。過去の勤務先は既に確認も取れているらしく、疑うところなどありはしない。強いて言うなら家政婦を退職した後も彼の自宅に出入りしている事くらいだ。

だが、今となつては決して無視出来ない存在でもある。彼女は彼の事を一番良く知っているだろう。でなければあのような医療器具等を用意するはずがない。

「……………雇つたのは柳の父親らしい。彼女を知る術は、今となつては柳本人だけということ、か。……………接触は出来たのか？」

「最初こそ接触は出来ました。ただ、事情聴取は拒否され、保護の為と言つて同行を促したんですがこれも拒否されました。今となつては接触前に逃げられる始末です」

「いずれ何者かが彼女を狙いに来るだろうな。そうなる前に……………」

「はい。最悪、強行手段を取るつもりです。恐らく彼には恨まれるでしょうね……………」

入学初日に荷物を受け取つた彼の反応からして、彼女だけは信用している節がある。強行手段を取つて連れてくれば間違いなく溝は深まるだろう。いや、それこそ二度と修

復不可能の所まで行くかもしれない。

自身は既に修復不可能の領域だが、せめて他の人間には自分と同じ様にはならないで欲しいと願った。

「ままならんもんだな……………」。用が済んだなら明日に備えてもう寝ておけ、少ししたら私も戻ることにする」

「……………あのく、織斑先生」

「なんだ、まだあるのか」

「今更……………なんです、一つ謝らなければならぬ事がありました……………」

「……………言ってみろ」

千冬は猛烈に嫌な予感がした。言葉から察するに、自身は間違いなく関係している。今更と言うからにはかなり前の出来事に関する事なのだろう。

だか聞かない事にはどうしようもないので取り敢えずは彼女に続けるよう促した。

「一組が織斑君のクラス就任パーティーをした後の事は覚えてますか……………」

「……………ああ、よく覚えてるぞ。あの時は本当に大変だったな。錯乱した柳があればど手に負えないと……………は……………。ちよつと待て、まさかお前」

「い、いやあ。翌日聞いた時は私も理由がわからなかつたんですが、確か篠原ちゃんと接触したときも錯乱したと聞いた時に、もしやと……………」

「……………言え、何をしたんだ」

千冬の目付きは次第に鋭くなり、彼女は逃げ場を失う。それは正に蛇に睨まれた蛙と
いったところであろう。

「え、えと。先生達もご存知の通り、篠原ちゃんは物凄く危ない生徒なので警告として彼の部屋に手紙を置いたのですが……………恐らくそれを読んで彼は錯乱したのでは、ないかな」と……………」

「……………なるほど」

「お、織斑先生……………」

「奴の事だ、遅かれ早かれ接触はした。それに、こういうのは我々教師がもっと早い段階で伝えておくべきだったんだ。対応が遅れたばかりにあんな事になってしまったのだからな」

本来ならば入学早々に彼に伝えるべきだった。しかし、当時の彼はあまりにも不安定だった事によつてそれも難しく、先伸ばしにした結果が復学して早々の錯乱。責任は自身にもあった。

こつ酷く怒られると思いきやまさかの反応に面食らつてしまう彼女だが、それと同時にほつとした。よかった、制裁を受けなくて済んだと。しかし——。

「まあ……………それでも、だ。あの日とその翌日は……………本当に……………苦勞したんだぞ？」

「……………織斑先生？」

「いくら多忙だったとはいえ、私に前以て知らせずの行動。よくも余計な事をしてくれたじゃないか……………なあ？」

「あ、あの……………」

千冬はいったい何処から出したのだろうか、手には出席簿を持っている。表情を見ると一見笑つてるように見えるが、よく見ると目だけが笑つていなかった。

「前以て謝っておく。これは八つ当たりだ、許せ」

「え、ちよ」

彼女の頭部に強烈な打撃が降り注ぐ。どちらにせよ制裁は免れなかったのだった。

千冬は勘違いをしている。

『悽愴月華』は無人機のエネルギーを根こそぎ奪った。それは確かだ。

だがこの能力の真髄はそこではない。

近いうちに知る事だろう。

『悽愴月華』は、何よりも恐ろしい単一仕様能力だということに。

本州の某県某市のとある路地裏。

普段から人通りが少ないであろうそこは、深夜帯ならば人一人いないのが当たり前な

のだが今日に限っては違った。

「全く、いずれ来るだろうと思っていましたよ。こんな物まで用意して……」

そこに佇むのは灰色のハイネックニットと紺色のデニムを着こなす女性。服の上からでも目立つ豊満な胸と黒のセミロングヘアを靡かせるその姿は誰しもが振り向いてしまうほど魅力的だ。

そんな彼女が手に持つ物は黒い物体。指先一つあれば誰でも相手の命を終わらせる事が出来る凶器。

それは世間では護身用として使われている小型の拳銃だった。銃に慣れていない女性でも簡単に扱う事が出来るだろう。

彼女はソレを一目見て興味を無くした後、手元を一切見ずに分解する。直ぐに組み立て出来ない様に素手で分解可能な所までバラし、弾倉に詰まっている弾薬も全て抜き取り投げ捨てた。

「貴女達、以前まで付け狙ってた政府の人間じゃありませんね。別の組織か、若しくはただの『過激派』か。どちらにせよ政府と偽って近づいて来たのですからろくな人間じゃない事には違いありませんが」

そういつて彼女は冷めた目で周囲を見渡す。その周囲には死屍累々のような光景が。

「ぐっ………あ………」

「ひぎいつ……ううっ……」

「げぼっげぼっ……」

そこには黒のスーツを来た女性が複数人程転がっていた。

頭を抱え転がり回る者、腹を抑え蹲る者、腕が本来とは逆方向に曲がっている者と同様であり、全員が満身創痍だということがわかる。

「………今後は買ひ物も簡単には済みそうにないですね」

そういつて彼女は道の隅に置いておいた二つの買ひ物袋を手を持つ。どうやら買ひ物帰りだったようだ。

未だに立ち上がらない女性達など興味を無くしたのか目もくれずその場を立ち去ろうとするが、一つだけ言い残した事があつたのか灯りが届くギリギリの所で振り返り悶える彼女達に向かつてこう言った。

「別に貴女達の事なんかどうなつても構わないのですが、早くこの場から立ち去つた方が良いですよ」

「な、な、に………を………?」

「はあ、これだから頭がお花畑の連中は………。世の中には、女性を目の敵にしている人間がいるつて事です。………殺したいほどに」

「い、殺し、たい………?」

「今まで甘い蜜を吸いすぎたツケ、ですよ。……では、さようなら」

その一言を最後に彼女は暗闇の中へと消える。しばらくするとその暗闇の先から物音が聞こえてきた。

「……………」

何か金属を引き摺るような音に足音のようなもの。それが一つだけではなく、複数も聞こえ近づいて来る事がわかった。

いったいなんなのだと彼女達は暗闇を凝視するが、ようやくその音の正体は灯りに照らされる。

「……………!?!」

そこにいたのは十人前後の男達。黒のレザージャケット姿やジャージ姿の青年。中には学ランを着た、学生であろう少年や青年まで。全員グローブを着けており、口元は髑髏のフェイスマスクによって隠されている。その全員の目付きは鋭く、殺意に満ちていた。

そして彼等が手に持つ物は――。

「ひ、ひいつ……………!?!」

一人の女性がソレを見て本能が身の危険を察知。痛みなどそつちのけで直ぐ様立ち上り大きく後退る。

彼等を持つ物は全て凶器と言える物だった。ナイフや金属バットにボールなど、人を殺すには充分過ぎる殺傷能力を持つ物ばかり。更にそれら以上に目に留まったのが――

「――?!?!?」

――瞬間。一人の女性の頬を『何か』が掠めた。頬はうつすらと傷が出来、少量の血が首まで滴っていく。

「……………あーあ、外しちまったよこのくそつたれ。もつと練習するべきかなー」

「でも見ろよあの怯えきつた表情。中々傑作だと思わねえか?」

それはクロスボウだった。それも小型のピストルタイプから大型のフルサイズタイプと種類は様々で、それを持つ者が数人ほど。顔を狙っていた事から完全に殺す気だったのだろう。

「ぜっ……………全員逃げてっ!早くっ!!!」

彼女達は一目散に逃げ出した。捕まってしまうかどうかなど簡単に想像がついてしまったからだ。怪我など忘れ、尻尾を巻いて逃げていく女性の姿は彼等に取ってはこれ以上に無い愉悦を感じるだろう。

だが、彼等はそれを見逃すほど優しくはない。

「おうおう、お強い女性様方がお逃げになるぞと……………。狩りの時間だ、あの忌々しいく

そつたれな女共を——」

一人の男が手をゆつくりと掲げ——。

「ぶつ殺せつつつつ!!!」

——勢いよく振り下ろす合図と同時に、男達は彼女達を鬼の形相で追いかけた。

件の襲撃事件があつた翌日。

箱口令を敷かれた事によつて、生徒達は昨日の事など何事も無かつたかのように振舞つている。しかし、今まで体験したことの無い非常事態に遭遇した事によつて未だに多少の恐怖感が残つていた。とは言つても、第二アリーナにいた生徒達が受けた被害と

いえば無人機が全滅するまで閉じ込められ、轟音と地震に似たような状況に怯えてたくらいだ。

事件の内容については、無人機が侵入する直前のビーム兵器によつて観客席全てに遮断シールドが展開されたのでステージ内での事情を知るのはほんの極一部だ、観戦していた生徒達が知る事は無い。だからといって闇雲に詮索されたり口外されてはまずい。そういつた理由で口止めという意味合いも兼ねての箝口令である。流星はIS学園、箝口令は最早名物と化していた。

余談だが、屋外で日葵が暴れ回つた事によつて悲惨な事になつた壁や地表は教員総出によつて夜遅くまで必死に応急修復した。彼女は無人機だけでなく、教員すらもズタバ口にしていたのである。

隆道といい彼女といい、学園関係者を苦しめる事に関しては天才なのかもしれない。

「みんな大人しいですね。まあ無理も無いですけども」

「良いことじゃねえか。あんな目に遭つといてアホみたいに騒いでたら正気を疑うぞ、マジで」

「そうだぞ一夏。それよりも来月には学年別個人トーナメントがあるのだから昨日の反省を踏まえて訓練に励まんとな」

「昨日引つ越しの時に言つてたやつだっけか、それ」

いつもの三人は教室に着くなりいつもの場所でいつも通りに駄弁っている。周囲の人間は何故そんなに普通にしていられるのかと疑問を連発するが、考えるだけ無駄だろう。この三人が図太過ぎるのだ。

セシリアも三人の輪に入ろうとしたのだが隆道の必殺技によつて敢え無く撃沈し撤退。彼が彼女に対し心を開くのはいつになることやら。

忘れがちだが、一夏の幼馴染である鈴音は二組の為当然ここにはいない。仮にいたとしても隆道がいるので近づく事は出来ないだろう。

「あ？引つ越し？」

「あ、柳さんには言つてませんでしたね。実はあの後に山田先生が来まして、部屋の調整が済んだらしいので私が引つ越ししたんですよ」

「ほー、ようやく織斑も個室を手に入れたってわけだ」

「ようやくですよ、ようやく。本っ当に長かったです」

それは昨日の夜の事。隆道の部屋でいつもの雑談を終え、一夏と箒の二人が自室に戻ると丁度良く真耶が訪れて来たのだ。部屋の調整が付いたということで彼女が引つ越す事になり、彼は入学当初から待ち望んでいた異性のいない部屋を手に入れたのである。

本来は真耶が初日に言ったように一ヶ月で彼の個室を用意する予定だったのだが、こ

こ最近まで教員達が多忙の極みだった為に遅れてしまっていた。彼がこの事を知ったら劳いの言葉をこれでもかと言うほどかけたであろう。

箒としてはその時に喜んだ彼を見て非常に面白くないと思ってしまったが、よくよく考えてみれば今まで自分という異性に氣を使つてたのだからあの喜び様は当然かと直ぐ様冷静になれた。

彼女がこういう考えが出来たのも、一度だけ隆道と二人きりになつた時に氣を使う事がどういふ事かを身を以て知つたからである。知らずの内に彼はまたしても隆道に助けられたのだ。

ちなみに、彼女の新しいルームメイトは同じクラスの人間だ。彼女の素性を既に知つており、尚且つ人格に問題が無い生徒を千冬と真耶の二人が厳選したのだから質問責めを受ける事はまず無いだろう。

「そういえば柳さん。俺、ようやく外出許可が出たんですよ。昨日届けを貰つたんで、早速書いて出しちゃいました」

「へえ……そりや奇遇だな、俺も貰つたぞ。まだ出してねえけど」

「そうなんですか？……でしたら今週の日曜一緒に出掛けませんか？友達の家に行くんですけどそいつに柳さんの事紹介したいんで」

彼も事情聴取が終わつた後に千冬から外出届けを貰つていた。既に行く所は決まっ

ていたからか、直ぐ様行き先を書いて提出した。なんと行動の速い少年であろうか。

隆道も外出届けを貰っていたのならばこれは絶好のチャンスだと彼は考えた。交流を深める為に一緒に出掛けようと話を持ち掛けるが――。

「あー、悪いな。俺もその日曜に出掛ける予定なんだよ。場所もそれなりに遠いしな」

「あれ、そうなんですか………残念です。………ちなみにどこへ行くんです?」

「私も気になりますね。それに遠いとは………?」

「ああ、別に大したところじゃ――」

「そろそろ席に着け。SHRを始める」

隆道から場所を聞こうとする彼だったが、教師二人が教室に着く事によってそれは阻まれた。どうやら話に夢中になり過ぎてチャイムに気づかなかったようだ。

行き先は聞きそびれてしまったが、授業が終わった後でも聞けばいいかと二人は颯爽と席へ戻る事にした。

「その前に柳。渡すものがある」

「……………」

彼女は手招きをして隆道を呼ぶ。どうせ専用機だろうと彼は考えたが、それならここではなく整備室で渡すはずだ。ならばもつと別の物だろう。それを受け取るついでに外出届けも渡しておくかと紙を手にして彼女の元へ向かう。

「紙……………？ああ、外出届けか。受け取ろう」

「ほらよ。んで、渡す物ってなんだよ」

「これだ」

そう言つて彼女は他の生徒には見えないように教卓の裏側で昨日見つけた小さな金属ケースを彼に渡す。

「……………」

「Bピットに落ちていたぞ。次からは落とさないようにな」

「……………」

中身を確認した後、一言も言わずに彼は席へと戻る。

彼女は彼とこのようなり取りについて今更思うところはな。他の生徒達も、まあいつも通りだなと完全に慣れてしまつていた。

「ふむ……………」

SHRを始める前にふと、彼から受け取つた外出届けに目を通した。

書かれてる指定日は今週の日曜日。そして行き先には——。

——『自宅』と書かれていた。

第二十三話

本州のISS委員会日本支部。

そこにある一つの薄暗い部屋には書類を見ながら受話器を手に持つ男が一人。その男はかつてISS学園の理事長と日葵の母親と電話のやり取りをした熊田と呼ばれるISS委員会の一人。

男は日本政府直属であるISS研究所に従事する研究員の一人と通話をしていた。

「な、なんだ……………これは……………」

『非常に面白いとは思いませんかね？まさか機体がここまで変異するとは。流石はISS……………いや、この場合二番目、といった方が良いでしょうか。どちらにしろ我々の予想を遥かに上回ってくれますよ』

「これが、あの『灰鋼』だというのか……………う？」

『どういった経緯かは不明ですが、スペックの向上だけでなく様々なシステム等が発現しましてね。おまけに単一仕様能力まで……………いやはや、実に興味深いの一言に尽きませぬ』

男が目を通す書類は、二度目となる変異した『灰鋼』の詳細についてのレポート。I

S 学園から送られてきたそれを見た男は驚愕せざるを得なかった。

「これは、これではまるで……………」

『ええ、正に『対 I S 用兵器』といったところですか。他の研究員は『I S 殺し』とも言っていましたね。報告によれば、解析する前に機体側が接続を遮断し解析不可能となったようです。女を憎み、I S を拒絶する人間が乗るところなるんですね。ああ……………実に面白い、彼にピッタリの機体だ』

「……………それで、他の奴等は何て言っていた』

『何人かは彼の身を案じてなのか渋っていました。最終的に以前同様『灰鋼』のデータ採取を続行させるという結果に。政府の女共はヒステリックに叫んでたようですがね』
「やはりか……………」

4 月に報告を受けて以降『灰鋼』のデータ採取は確固たるものとしてきた。しかし、変異した事でより一層危険な代物と化した事によって再び政府に所属する女性達は騒ぎ出す。これ以上彼を機体に乗せる事は危険だと、学園関係者に危害が及ぶと。

しかし、彼女達が並べる言葉は全て上っ面だけの綺麗事だ。少しも両者の心配などしていない。

彼女達は恐れたのだ。隆道がこれ以上力を手に入れる事に。

彼が今の女尊男卑社会によって女性を憎んでいる事は知っている。もし、これ以上力

をつけてしまったら報復を受けるのではないかと彼女達は考え始めるようになったのだ。

ただでさえ二人の男性操縦者の登場によって肝が冷えっぱなしの毎日。データ採取によって、いつの日か全ての男性がI Sに乗れるような事になってしまえば今の立場が薄れてしまう。

ここ数年で彼女達は横暴を繰り返してきたのだ。女性優遇制度によって守られてはいるが、それが無くなってしまったらどうなるか。

間違いなく報復を受けるだろう。それも今までしてきた横暴を超える悍しい報復を。現時点の研究成果では男性操縦者が増える兆しは見えないが、今最も起こりうる可能性が高いのは彼がI Sを用いて報復を行う事だ。

彼が報復を行い、それに便乗して世界中の男性が立ち上がる事にでもなったら——考えるだけでも恐ろしい。

それを少しでも阻止しようと彼女達は必死になるが——I S委員会は彼女達の思想など丸わかりなので、聞く耳を持たずにデータ採取の続行と一言だけ告げた。

『あんな騒ぐだけの女共など、価値は無い。そうは思いませんか？』

「……………そうだな」

『おや、冷たい反応ですね……………まあいいでしょう。ところで、お気づきかと思いますが』

………』

「………ああ、言いたい事はわかる。彼女の機体と同じだと言うのだろうか？」

男は『灰鋼』のデータを一通り見て、ある事に気づいていた。それは一部の人間しか知らない日本の最重要国家機密。

『ええ、まさか『華鋼』と同じ現象が起きるとは………しかも両方とも待機形態が首輪。兄妹………だからなのでしょうかね？』

「私は研究者ではない。わかるはずがないだろう」

そう、変異したのは『灰鋼』だけではない。

『華鋼』も突如変異した機体なのだ。

しかも、『華鋼』も元は第二世代『打鉄』が変異した機体だ。

これは偶然なのだろうか。それとも別の………。

『これは失礼。………熊田さん、これからも『灰鋼』は変異を続けるでしょう。『華鋼』とは違った素晴らしい変異を、ね。キヒ、ヒヒ、ヒへへッ』

「っ………」

『おっと失礼、思わず笑みが。………次は我々にどのような姿を見せてくれるのでしょ

うか。ああ、楽しみでs——』

「急用が出来た、失礼する」

男はそう言つて一方的に電話を切る。先程から我慢していた怒りは頂点に達し、限界が来たのか拳を机に叩きつけた。

耐えられなかつたのだ、これ以上機体の事しか頭にない相手と通話を続けることが。

「どいつもこいつも……彼等を、子供をなんだと思つてつ……！」

場所は変わり、とある建物の一室。

そこにはスーツ姿の女性が一人。その表情は歪みに歪み、誰が見ても苛立っているように見えた。

「ああ、もうっ！ いったい何をしてるのよ！ 学園の連中は！」

彼女は日本政府に所属する人間の一人であり、隆道の死を望む愚かな人間の一人でもある。そんな彼女はこれ以上無いくらいに焦っていた。

四月の始めに彼を死に追いやる様、息のかかった人間に指示を出した。しかし、二ヶ月経つたにも関わらず望む結果は未だ出てこない。

「ほんと使えない奴ばかり……………！本当に無能なんだから……………！」

これ以上彼が力を身に付けたら、それこそ金輪際手を出せなくなる。そうなる前に彼をこの世から消そうとあれこれ模索するが、脳内がお花畑故に案など出るはずがなかった。

——しかし、そんな彼女に悪魔は味方してしまう。

考えに耽っていたその時、突如彼女の携帯が鳴り出した。苛立ちを募らせながら相手を確認すると、その相手は学園の関係者。

進展があつたか、もしくはは有力な情報を伝える時以外は連絡をするなど言つてあるの
で何かしらあつたのだろう。悪魔染みた笑みを浮かべながら電話に出る。

「もしもし」

「——」

「言い訳はいいわ。……………それで、連絡したのだから何か進展があつたのかしら？」

「——」

「…………へえ、そうなの」

「いいえ、近場の人間に任せるわ。情報ありがとう」

そう言つて彼女は電話を切り、とびつきり顔を歪ませながら別の所に通話をかける。
「私よ。…………二番目が今週の日曜に自宅へ帰宅すると情報が入ったわ」

「ええ、貴女の『飼い犬』を向かわせなさい。徹底的に痛めつけて、殺せば上々ね。その時は報酬を弾むわ」

「それと、学園の教員二人も別行動で向かうそうよ。使えるなら利用しても構わないわ…………じゃあ、よろしくね」

その言葉を最後に彼女は通話を切る。その表情は、人がしていいものではなかった。

六月頭、土曜。

襲撃事件から日は浅い為第二アリーナは未だに封鎖中だが、既に九割方は施設の修復が終わっている。一週間もすれば一般生徒の出入りが可能になるだろう。流石はIS学園といったところか。

そんな高速修復中の第二アリーナは当然訓練等は不可能なのだが、修復が既に済んでいるステージ中央には三つ、隅の方には複数の人影があった。

「おいブリュンヒルデ、後ろの奴等はなんなんだよ。武装まで展開しやがって」
「もしもの時に備えてだ。悪く思わないでくれ」

ステージ中央にいるのはジャージ姿の千冬とISスーツ姿の不機嫌全開な隆道。そしてもう一人は――。

(こ、こええ……………)

――目に見えるほど冷や汗を垂れ流している一夏だった。

何故彼等が封鎖中の第二アリーナにいるのか。その理由は隆道の専用機が関係している。

彼の機体について政府とIS委員会に報告はしたが、案の定データ採取を続行するよるに言われたのだ。こんな危険極まりない機体を何故使わせるのかと教員は当然の様に怒りを露にするが、決定したものは覆せない。

結局は彼の元に専用機を戻す事になるのだが、ここである問題が浮上する。

『灰鋼』はデータ採取は可能であれど、データ解析が不可能なのだ。データの閲覧だけではどうしても限界があり、殆どが詳細不明な以上実際に稼働させて調査するしかない。しかし、何もわからない『灰鋼』を一般生徒がいる授業や放課後の訓練などで調査するのは危険だ。ならばどうするか。

そこで選んだ場所が封鎖中の第二アリーナだ。ここなら一般生徒もいない為、危険を最小限に抑える事が出来るだろう。最悪ステージが損傷するだけだ。

そして、万が一彼が暴走した時の備えとして隅の方では教員用のＩＳを装着する教員四人が武装を展開して待機している。千冬が厳選したメンバーであることから実力は折り紙付きである。その中には副担任である真耶もいた。

一夏に関しては、彼のストッパーの役目として一緒にいる。隆道の専用機を実践調査すると言ったとき一緒にいさせてくれと名乗りを上げたのだ。

彼が彼女達に囲まれた状態で調査など、絶対良からぬ事が起きるに違いない。自分がいれば多少大人しくなるであろうと考えた上での行動だった。

本当は筈も連れていきかけたが、今回は訓練機の予約が取れなかったということ断念。致し方無い事だ。

「先程も言ったが、柳の機体はデータ解析が不可能となった。実際に稼働させて調べる

「しかない」

「……………んで、何をすれば良いんだよ」

「まずは機体を展開してくれ。織斑も展開しろ」

「へ？あ、はい。……………来い、『白式』！」

「……………『灰鋼』」

二人は彼女の指示通りにI Sを展開する。先に一夏の純白の機体『白式』が姿を現し、それを追う様にして彼も『灰鋼』を展開したが――。

「っ……………」

「うわっ!?や、柳さんっ!?」

「「っ!?!」」

「……………」

一夏と千冬の二人はその姿に怯み、ステージの隅で待機していた教員達は思わず武装を彼に向けてしまう。

無理も無いだろう、何せ彼の機体はシステムが起動した時と同じ様に血管の様なラインが赤くなっているのだから。

「だ、大丈夫ですか?」

「……………ああ、なんともねえぞ」

彼の姿に面食らってしまったが、よく見ると点滅もしていなく、装甲も光沢の無いまままだ。

一夏が恐る恐る彼の様子を伺うが、表情は不機嫌であれど正気の様だ。一先ずは安心といったところであろう。

千冬も先日再接続したタブレットに目を通し、彼が正常である事を確認して安堵の表情を浮かべた。

「……………とりあえず、展開は問題無いようだな。何か変わった所はあるか？」

「……………柳さん？」

「……………」

彼は二人の声に一切反応しない。彼は二人の事よりも、目の前に表示されるものを注視していた。

——前方に生体反応を確認。『織斑千冬』と断定——。

——後方に複数のI S反応を確認。『打鉄』二機、『ラファール・リヴァイヴ』二機

と断定——。

——対象を『敵』と認識。絶対殲滅『猛犬』任意起動可能——。

——キドウシマスカ？——。

その表示と同時にハイパーセンサーは後方の機体と彼女を拡大表示する。機体の方

には『破壊対象』と、彼女の方には『殺害対象』と記されていた。

そして視界は次第に赤く色づき、その目の前に出ている表示は次第に大きくなっていく。まるで押してくれと言わんばかりに。

(殺害対象っておい……………人間にも反応するのかよ……………。なんなんだ、コイツは……………)

機体に反応しているのは別にいい。だが目の前の彼女ですら反応しているとはどういう事だ。

確かに襲撃を受けたあの時は殺すつもりでやった。しかし、それは自身を脅かす脅威だったからこそだ。自ら殺戮の限りを尽くすつもりなど毛頭ない。

ハッキリ言ってそれらの表示は邪魔以外の何者でもなかった。

(とつとと消えろ、お呼びじゃねえ)

そう心の中で唱えるとシステムの起動表示は消え、視界も元に戻っていく。

この機体は自分に何をさせたいのだろうかと、彼は考えずにはいられなかった。

「——さんっ！柳さんっ！」

「……………んあ、わりい。考え事してた」

「……………本当に大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だ」

猛烈に心配をする一夏に一言添え、再び彼は考えに耽る。先程の表示に一つ疑問を覚えたからだ。

(織斑には反応していなかった……対象を選んでののか?)

千冬と後方奥で待機している教員達にはガツツリと反応したが、隣にいた一夏だけには反応を示さなかった。どういった基準で対象を選んでのかはわからないが、勝手に起動しないならそれで良いかと彼は考えた。

まさか『猛犬』による敵対象の判断が、自身が相手に向ける敵意と連動しているなど彼は知るよしもない。

「柳、何かあったのか……?」

「……………『猛犬』は任意起動出来るらしいな、おまけに攻撃対象まで出てやがる。対象は後ろの教師共と、あんた自身だ」

「……………!」

「ガツツリと反応してたぜ。後ろの奴等は破壊対象、あんたに関しては殺害対象だとき。どうもこの機体は俺に人殺しをさせたいらしい」

——ち、違う……………! 私じゃ……………。

彼から出た言葉に二人は身震いを感じた。システム起動時の攻撃対象がI Sだけかと思いきや、人間も対象の範囲に入るなど誰が思うのだろうか。

「さつつ……!!?柳さん、それは今も……!!?」

「いいや?消えろつて念じたら綺麗さつぱり無くなつたな。良かったじゃねえかブリュンヒルデ、もしも起動してたら今頃は挽肉になつてたかもな」

「いくらなんでもそれは……!」

「流石にしねえよそんなこと」

彼はそう言っているが、一夏はまったくもつて安心出来なかつた。無闇に力を振り翳す様な人ではないのはわかつてはいるが、攻撃的になる彼を見てきた以上どうしても不安になつてしまう。

もしも彼が発症して暴走してしまつた場合、今の自分では止める事が出来ない。恐らく、セシリアや鈴音でも無理であろう。

(…………弱気になつてどうする。力になりたいつてあの日決めたじゃないか。しっかりとしないと)

今まで何度も彼に助けられ、支えられた。自分が何も出来なくてどうするといふのだ。

自分が本当にやりたい事を見つける為、彼を支える為に強くなろうと一夏は決意を新たにしたのであつた。

「やはり『猛犬』は危険、だな。……………いいか、何があつても起動しようとするなよ?そ

のシステムは『狂犬』と同様に保護機能も一部機能しなくなっている。下手すればお前も死ぬ事になるぞ」

「ライム女の時やこの間の事もあんだぞ。起動しない保証なんてねえよ」

「我々が全力を以て対応する、もうあのような事は御免だからな。……他に何か無いか？」

「他に……？」

彼は目を反らしそのまま微動だにしない。きつと視界に映っている表示を見ているのだろう。

「そういえば今更なんですけど、浮けるようになったんですね」

「あ？……そういえばそうだな。何でだろうな」

彼の機体は現在『白式』と同じ様に少し浮いている。システムの起動時を除けば今までは飛ぶ処か浮く事すら出来なかったはずだったが、今回は何故か浮けるようになっていた。

「言われてみれば、確かに授業でも浮いていなかったな。……飛べるか？」

「飛び方なんて知らねえよ。どうやって飛ぶんだ、これ」

彼は飛び方など知らない。セシリアとの試合はシステムのおかげで飛んだは飛んだが、彼自身は近づくと事しか考えていなかったのだ。決してその時だけ技術が上がったな

どではない。

無人機の時に使った瞬時加速についても距離を詰める事しか考えなかった結果偶然繰り返す事が出来た。具体的なやり方など一切知らない。

「今度教えましょうか？俺も基本はある程度出来るようになったんで」

「あー……………んじゃ、そうするか。クラス代表さんには是非とも教えて貰うとしますかね」
「よ、よろしくお願いします……………」

「……………」

千冬は二人とやり取りを見て心の底から一夏に感謝していた。彼は一夏といるときに限っては不機嫌な時でも大人しい。彼に関して頼りになるのは一夏とこの場にいない筈しかないだろう。

一夏は一夏で苦勞し余計な負担をかけてしまって申し訳ないが今後も彼をお願いするでしょう、そう思った。

「あー……………水を差すようですまないが、機体について進めても構わないか？」
「あ？ああ、そういやそうだったな。あーつと……………」

話が逸れてしまったが、今は機体についてだ。視線をディスプレイに戻し色々と目を通してみる。

「……………この読めねえヤツと『コード・デッド』はわからねえ。起動も出来ねえな。うん

ともすんとも言わねえ」

そう言つて彼は地面に『C R V T』となぞる。

この二つは表示はあれど、何も反応が無かつた。概要欄も『コード・デッド』は『死』以外は読み取れなく、『C R V T』に関しては何も表示されない。

「あとは……あん？」

「どうした？」

他に何かあるだろうかと探していると、一つ目に留まつたものがあつた。

それは拡張領域の内部。量子変換している後付武装の他に見慣れないものがあつた。取り敢えずソレを展開して、二人に見せる。

「拡張領域にこんなものがあつたぞ」

「なんだそれは？」

「注射器………に見えますね」

「三本もあるな。なんだこれ、こんなの知らねえぞ」

ソレは先端にプラグのような物があり、反対側にはボタンがある筒状の物体だつた。表面には『S・E』と記されている。

——『リカバリーショット』——。

「リカバリー………ショット？」

「リカバリー……………回復か？私にも見せてくれ」

「俺も見て良いですかね？」

「ん」

三本の内二本を二人に渡し、一本を手に持つと左腕部装甲の一部が開く。そこには丁度ソレが入るような差込口が。

「……………なんか開いたぞ」

「あ、俺も開きました」

「そこは機体を解析や調整をする際にコードを接続する部分だな。名前からしてエネルギーの回復か？」

「百聞は一見にしかず……………つと」

どういふ効果なのかはわからないが、取り敢えず差し込んで見る。するとほんの少しだけ減っていたシールドエネルギーが直ぐ様満タンになり、注射器のような物は光の粒子となって消えた。

——エネルギーチャージ完了。機体の自己修復機能を促進——。

「……………回復したな」

「昨日まではこんなものは無かったな……………機体が自ら作り上げたというのか？調査の為コレは借りるぞ」

「構わねえ。……………なんなんだよ、ほんつと謎過ぎんだろこの機体」

突然謎のシステム等が発現し、突然姿形も変わり、気がつけばいつの間にか存在している注射器のようなもの。最早意味がわからない。

ISは未だに全てが明らかにされていないと言われている。しかし、この機体に関してはそれどころの話ではない気がする。彼は思わずにはいられなかった。

「なんか、調べれば調べるほど色々出てきますね。他にもあるんじゃないですか？その盾とか、明らかに何かありそうなんですけど」

「ああ、これか」

システムや拡張領域にあった物に夢中で忘れがちだったが、巨大化した浮遊シールドも調べなくてはならない。

——可変式浮遊盾『バリアブルシールド』——。

その浮遊シールドは以前の面影は一切無く、分厚い長方形となっている。正面から見れば八分割に溝があった。

「んー、これもよくわかんねえんだよな。デカイ癖に動きの邪魔にならねえ事しか……………」

彼はその巨大な盾を殴ろうとしたり払い除けようとしていたりするが、その度に距離を離したり絶妙な動きで避けたりなどちっとも当たりはしない。まるでそれは生きてい

るようにも見える。

「可変式と名前が付くぐらいだからな、何かしらあるのだろう。概要欄には何か記載されてないか？」

「あー…………、『武装取付』に『分割』…………、『要塞形態』？」

『武装取付』……………試しに何か武装を展開してみろ」

「んじゃ、『豪雨』」

彼女の指示によつて彼は一つ武装を展開する。それは六本の砲身がある瞬間火力が高い射撃武装。

—— 20mm多銃身^パ回転式^ル機関砲^カ 『豪雨』^ン ——。

「おつ。久々に見ましたね、それ」

「それを盾に近づけてみてくれ」

「……………」

言われるがままに彼は『豪雨』を盾に近づけてみる。すると『豪雨』はまるで引つ張られた様に手から離れ、盾の裏側に勢いよくくつついた。

「くつつきましたけど……………」

「ウエポンラックにもなるのか、その盾は……………」

「しかも向きを変えられるし、撃てるぞこれ」

くつつく処か『豪雨』は砲身の向きが上下に動き、横に閃いては巨大シールドごと動く。彼は真上に向けて何発か発射し、一瞬の内で辺り一面に空葉莖を散蒔いた。

その時の彼は腕を組んで棒立ち。何かしてる様子もない。

「や、柳……………撃つなら撃つと言ってくれ……………。ああ、耳が……………」

「知ったことか。耳栓してねえあんたが悪い」

いきなり発砲した為、ノーガードだった彼女はその轟音によって耳を痛める。頭を抱えるように耳を塞ぐ彼女を見ても彼は悪びれる様子はなかった。

当然、一夏はISを纏っているため保護機能によってノーダメージである。

「ああ、くそつ。……………それはイメージ・インターフェイスを用いているのか……………?と
いうことは、このシールドは特殊兵装……………?他はどうだ?」

「うんともすんとも言わねえぞ」

「ふむ……………解析したいところではあるが、今となっては不可能だから……………」

彼女は顎に手を当て考えに耽る。

彼の様子からして、思考制御によって巨大シールドを動かしていた事は明白だ。ならばあの盾は特殊兵装になったということになる。

（出力やパワーだけじゃない、特殊兵装まで……………。既に『灰鋼』は第二世代ではないのか?）

出力やパワーアシストも第三世代に匹敵し、思考制御で動くであろう巨大シールド。最早この機体は第二世代のカテゴリから外れている。

(まるで天然の第三世代だな……………)

人が造り上げた第三世代ではなく、機体自らが造り上げた『天然の第三世代』。出鱈目にも程がある。世界中の研究員達は涙を流す事であろう。

そう考えれば、上層部の連中がデータ採取を続行させるのも頷けた。恐らく今後も変化が起こると推測したのであろう。

『リカバリーショット』の出現といい、彼に機体を渡す前に起こった事といい、解析しようとした時には無かった物まで現れたのだからその推測は間違いではないなと彼女は思った。

「あれ？千冬姉、その右手どうしたんだ？」

「うん？ああ、これか。お前は気にしなくていい。コーヒードで火傷しただけだ」
「……………」

一夏は今更ながら彼女の右手のあるものに気づき、隆道はそれを興味無さげに見る。包帯が巻かれていたのだ。それも皮膚が一切見えない程にまんべんなく。

彼女が怪我をするなんて珍しい事もあるのだなど、一夏は深く考えはしなかった。

「他にも調べたい事はあるが、また今度にするでしょう。二人共戻っていいぞ。……………」

それと織斑」

「へ？なん……………つたはあつ!?」

「織斑先生だ」

ようやく帰れると思った矢先にまさかの遅れた制裁。つい普段呼びをしてしまった時は直ぐに制裁を受けなかつたので一夏は安心していたが、彼女は忘れていなかったのだ。彼が自然に先生と呼ぶ日はまだ遠いであろう。

「何やってんだ織斑。行こうぜ」

「ま、待って下さいよお」

遠ざかる二人を見送る。ピットに向かいながらも駄弁る二人を見て、彼女はその光景を少し羨ましいと思ってしまった。

「……………本当に兄弟みたいだな」

何かが違っていていれば、一夏の隣にいたのは自分であつたろうかと考えずにはいられなかつた。

しかし、それは最早IFの話だ。自分はどう足掻いてもISと関わらなければならぬ。この世界から逃れる事は出来ない。

『織斑先生、大丈夫ですか？肝が冷えつぱなしでしたよ、ほんと』

「ああ、私は大丈夫だ。諸君もご苦勞だった。先に戻ってくれて構わない」

『わかりました。お先に失礼します』

隅で待機していた彼女達に先に帰るよう言い、とうとう彼女は一人となる。

誰もいなくなり少しの時間が経ち、彼女は自分の右手をじっと見つめた。

「まさか、拒絶されるとはな……………」

そう一言だけ呟く。その意味を知る者は彼女自身と、隆道のみ。

時刻は夜。本州の内閣府、個人情報保護委員会が入居するとあるビル。

その事務室にパソコンや書類と向き合う男が一人、眠そうな表情で椅子に凭れかかっていた。

「ん……………」

「なんだ先輩、まだいたんですか」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

だるそうにしている男にもう一人の男が近づく。格好からして帰宅する寸前のよう

だ。

「ていうか、何やってんですかこんな時間に。もう俺達しか残ってないですよ」

「色々あるんだよこつちには。まったく、権利団体の連中といい I S 学園の連中といい

……………」

「なんの話です?」

「あいつら、二番目の個人情報をお寄せせつてうるせーんだよ。俺が決めた事じゃねえのによお」

「二番目……………柳隆道ですか」

I S 学園は隆道に関する身辺調査書を政府に依頼したが、その内容は殆ど塗り潰された物だ。当然学園側は今も尚、身辺調査書を依頼している。

何を隠そう、塗り潰した調査書を送ったのは政府だ。彼に関する事は何が何でも隠し通したかった。

女性権利団体もまた、I S 学園と同じ様に彼の身辺調査書を依頼している。当然ながらそれを知る権利など彼方には無いので無視はしているが。

「塗り潰しの調査書なんて送ればそりゃ騒ぐでしょうに。いったいなんですか?」

「……………ほら」

「?」

男が渡したのは、数枚の書類。いったいなんだこれは疑問を抱いた。

「それが正眞正銘、柳隆道の身辺調査書だ」

「……………っ?!?!」

「どうだ？まず見ないだろこんな奴？今までよく生きてきたと思うぜ」

「なっ、なんなんですか……………これは……………」

そこに書かれていた内容は、彼がIS学園に連れてこられるまでについた数々の前科や逮捕歴。その数はとても多く、とても普通ではない事がわかった。

「暴行罪に強姦罪……………傷害罪まで……………!」

「初めて見た時はたまげたぜ？世の中こんなやべえ奴がいるんだなってな。まあ、暴行罪と強姦罪については全部冤罪だって事は調べがついている。多分、女に逆らい続けてたんだろうよ」

「いくらなんでも多すぎる……………!普通だったら……………」

「ああ、普通だったら一生日を拝む事なんて出来ねえ。けどな、コイツは直ぐに社会復帰してんだよ。どう思う?」

「……………誰かが彼を助けている?」

今のご時世で女性に訴えられでもしたらその時点で人生は終わるはずだ。なのに、彼は有罪になろうが直ぐに復帰し、また訴えられるのを繰り返している。普通なら有り得

ない事だ。

「手助けしてる相手だけはわからなかった。綺麗に消えてるんだよ、そこだけはな」

「……………傷害罪の方はどうなんですか」

「ああ。なに、ただの喧嘩さ。と言つても……………相手を病院送りにするほどのだけだな」
椅子に凭れかかる男は一枚の書類を指差し、それを見るように促す。そこに書かれていたものとは――。

「……………!」

「殆どが一对多のリンチにも関わらず、二番目は全員病院送りにしてやがる。全員が大
体全治二ヶ月になる程にな」

「……………これも、直ぐに?」

「ああ」

「ますます有り得ない。こんな危険な人間を、何故直ぐに外へ出してしまふのだろうか
考えずにはいられなかった。」

「これをIS学園の連中に見せたらどうなると思う?あの学園には女尊男卑思想を持っ
た輩までいるんだぜ?これ以上無い弱みになると思うんだよな、俺は」

「……………だから、隠したと?」

「勘違いするなよ。理由は他にもあるだろうし、決定を下したのは上の連中だ。文句は

そつちに言え」

「……………まあ、わかりましたよ」

決定した事はどうすることも出来ないなど納得し、再び書類に目を通す。

「彼が通つてた中学校、確か廃校になつた学校ですよ。なんでもいじめが酷くて教師達もグルだつたとか。……………ん？先輩、小学時代が途中からになってますよ？」

「ああ、中学校は二番目が転校したとほぼ同時だな。暴れ始めたのも丁度その時期からだ。小学時代に関してはそれが調査の限界だつた。離婚した篠原家の方も何故か同じ所までしか知る事が出来なかつたんだよ」

「……………」

経歴の一番始めは世界規模の事件が起こつた十年前。それ以前の事は書かれてはいない。これもまた謎であつた。

それに彼が暴力を行うようになったのも、中学校が廃校になつた頃から。恐らくこの中学校で起こつた事によって彼はあのようになつてしまつたのだろう。

「……………ところでよおお前さん」

「ん？なんですか、先輩……………!？」

声をかけられ顔を上げると、男はどこから取り出したのか拳銃を持ち此方に向けていた。

その瞳は暗く、先程までのだるそうな表情も一切無い。まさに無表情といったものであった。

「せ、先輩……………何を……………」

「てめえが『更識』の人間だって事は知ってたんだよ。バレてねえと思ったのかこの野郎」
「……………!?!」

そう、男を先輩と呼んでいた彼は別の組織から来た工作員だ。政府がひた隠しにする隆道の調査をする為に潜入し、調査を行っていたのだ。

ここ最近情報を掴めていなかったが、今日ようやく知りたかった事を知れたので直ぐに報告をしようとしたのだが——全て筒抜けだった。彼は泳がされていたのだ。

「どう……………して……………」

「『更識』は日本政府に属する対暗部用暗部なのに……………ってか？馬鹿が。当主はIS操縦者に加え現役の『ロシア国家代表』、政府全体がお前らを信用してると思ってるのか」
「よ」

「うっ……………」

「さてと、ここで先輩からてめえ自身に対して大事な大事な質問だ。……………てめえは——」

——どっちの味方だ？

場所は変わって、とある廃工場。

普通なら人一人としていないはずのその場所には、大勢の男達が屯していた。

その中で一人の男は誰かと通話している。

「……………了解つす、任せて下さい。それで、その女二人は好きにしても？……………わかりましたよつと。んではまた」

男は通話を切り、奥で座り込む顔が傷だらけになっている大男の元に寄る。恐らくその大男がリーダーなのだろう。

「先輩、『飼主』から連絡がありました。明日、柳隆道が自宅に戻って来るそうです。仕留めろと指示が」

「……………ほお、そうかそうか。隆道が、ねえ」

大男はニヤリと笑みを浮かべ、立ち上がる。その巨体は近くで見ると圧巻の一言に尽きるであろう。

「全員に伝えろ、隆道の野郎が戻って来るつてな。それとありつたけの武器も用意しろ」

「はい、直ぐに。……………あの、『髑髏』の連中が黙つてるとは思えませんが」

「彼奴等が来る前に仕留めねえとなあ。用心しとけ」

「わかりました」

そう言つて男は大男から離れる。男は何人かに耳打ちをし、廃工場を後にした。

「隆道い……………。今度こそてめえを殺してやるからなあ……………」

大男は隆道に対して怒りを持っているのか、顔を歪ませ歯軋りをする。その表情は、周囲の男達を震え上がらせる程だった。

悪意は、彼を待ち構えている。

暴力だらけの日曜日

第二十四話

『灰鋼』の調査をした翌日の日曜日、正午付近。

一夏は以前提出した外出届によってようやくＩＳ学園外に出られるようになり、二人の護衛を連れて無人となった自宅の様子を見に行つた後、友人の家へ遊びに行つていた。

二月中旬にＩＳ適性が発覚して以来、当然ながら中学時代の友人と遊ぶ機会など無かつた為にその友人と再会した時は大いにはしゃいだ。

こここのところ隆道という同性は居たには居たが、殆どが女性に囲まれた生活をしていたので。なにかとキツイ環境から解放された事もあつて今現在の彼は凄く心地よく感じていた。

「で？」

「で？つて、何がだよ？」

現在彼は再会した友人宅で中学時代からの友人——『五反田^{ごたんだ}弾^{だん}』と格闘ゲーム対戦を楽しんでいる。

弾は中学の入学式当日に知り合い、幼馴染の一人である鈴音と揃って三年間同じクラスだった。

やたらと馬が合ったので中学時代はよく三人でつるんであれやこれやと楽しんだものだと弾を見る度に思い返す。出来る事ならずっとこのままが良いと考えはするが、叶わないであろうと彼はしみじみと感じていた。

「だから、女の園の話だよ。良い思いしてんだろ?」

「してねえつつの。何回説明すれば納得するんだ」

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも樂園じゃねえか。なにそのヘヴン。招待券ねえの?」

「ねえよ馬鹿」

現在、一夏は『I S を使える世界で一番目の男』という肩書きを持ちI S 学園へと強制的に在学中である。

『二番目の男』である隆道と、まだ出会った事のない男性用務員一人——計二人の男性を除いて生徒、教員、用務員を含め全て女性のI S 学園で寮生活の真っ最中だ。

傍から見れば女性に囲まれた生活などさぞ楽しいだろうなと思う男性がいるであろうが、全員がそうではない。少なくとも彼自身は楽しいと微塵と感じた事も無いし、隆道に至ってはI S に対する嫌悪と女性不信によって全力で拒絶している。

今となつては有り得ない話ではあるが、仮に弾もI S学園に入学して隆道と対面したらその辺りの認識が間違ひなく変わるだろう。

「つか、アレだ。鈴が転入してきてくれて助かったよ。話相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ……………」

弾はニヤついた表情で彼を見据える。それは鈴音が彼に好意を寄せていると知っているからこそその表情だ。

それを横目で見えてしまった彼はいったいなんだその顔はと不思議に思うが、その意味を知る日はまず来ないだろう。

「よっしゃ、また俺の勝ち！」

「おわ！きたねえ！そのやり口は無しだろ……………」

「ははん、勝ちも勝ちだからな。……………ところで、もう一人の……………柳隆道？あ、三つ歳上なんだっけか。んじやあ柳さん、か」

「そうそう。紹介したかったんだけど、向こうも予定があつたらしく一緒に来れなくてさ」

そう、この場に隆道はいない。本当は一緒に出掛けて弾に紹介をしたかったのだが、既に隆道は予定を組んでいたとのこと。

昨日の夜に聞いた話では、隆道も自宅に戻って様子を見に行くと言っていた。場所もここより遠く、後の合流も難しいので今回は断念せざるを得ない。

しかし、別に外出は今回が最後ではない。次回にでも誘って、その時に紹介するとして、と彼は考えた。

「メールでは殆ど触れて無かったが、どんな人なんだよ」

「顔にでっかい傷が二本あって殆ど表情を変えない人、かな。あとI Sと女性がすげー嫌い」

「え、なにそれ。大丈夫なのか？」

「大丈夫——とは言えねえけど俺ともう一人の幼馴染とは普通に喋ってくれるし、良い人だな」

隆道の事を聞いて弾は一気に不安に駆られたが、彼の感じからして本当に良い人なのだろう。

先程女の園で良い思いをしてんだろと言った自分を思い返して、隆道がいなくて良かったと安心した。もし本人の前でうっかり言ってしまったらブチギレ待った無しであつたに違いない。

「まあ、お前が言うんだから間違いない良い人なんだろうよ。……ちなみにどれくらい女嫌いなんだ？」

「どれくらい……? 千冬姉ですら猛烈に反発するくらいだな」

「うっわ、筋金入りじゃねえか。あの人に逆らうなんて相当だぞ」

「まあ、そういう人もいるって事だ。………間違ってもあの人の前で I S 学園の話はするなよ? ニヶ月経った今でも不機嫌な時が多いんだからな」

「ああ、それはさつき思ったところだ………。まあ、その人の事は置いておこう。話は戻るが、鈴のことは——」

今この場にはない隆道の事はいずれまた聞く事にしよう。途中で切れた鈴音の話題に戻そうとする弾であったが、その言葉は突然の訪問者によつて遮られた。

「お兄! さつきからお昼出来たって言ってるじゃん! さつきと食べに——」

吹き飛ばす勢いで扉を蹴り開けて入ってきた訪問者は五反田 蘭^{らん}。弾の一つ年下である妹で、有名私立女子校に通う優等生。兄^{あに}とは天と地ほどの差がある。どこで教育が違ったのであろうか。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いつ、一夏………さん!？」

完全にプライベート状態だったのか、彼女は現在ラフな格好だ。肩まである髪を後ろで挟んだだけの状態でタンクトップにショートパンツ姿。

そこら辺の男性だったら目のやり場に困るであろう姿なのだが、生憎彼は I S 学園で

見慣れている。何せ、殆どの生徒が寮内では彼女の様に薄着やラフ着なのだから見慣れるのも当然であった。

しかし最近暑くなってきたせいか、やたらと胸元が開いた服を着ている生徒が多い。彼以外の視線が無いからか殆どがノーブラ等の解放的な姿で過ごしている。

彼とて健全な高一男子だ。見慣れているとしても、そこまで開放的だと目のやり場に困る。ふと視線に気づいた生徒が胸を隠す時の気まずさは計り知れない。

ちなみに隆道は移動する時以外は滅多に自室から出る事は無く、寮内で他生徒と遭遇する事は殆ど無い。遭遇したとしても見向きすらせず、例え見たとしてもしかめっ面しかしない。隆道の事をよく知らないまでも見向きを持たない生徒達は『私って魅力、無いのかな……』と悲しい気持ちになったそう。

「い、いやっ、あの、き、来てたんですか……？ 全寮制のIS学園に通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はちよつと外出。家の様子を見に行つた後寄つてみた」
「そ、そうですか……」

先程の態度はどこへやら、彼女はたどたどしい。昔からそうであつたが、何故自分相手だとそのような感じになるのだろうかと一夏は不思議に感じていた。

「蘭。お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと言われ——」

弾が言葉を言えたのはそこまでだった。

彼女に鋭い目付きで睨まれたのだ。某配管工が縮んでいくのを彷彿とさせるその様は情けないの一言に尽きるであろう。

「……………なんで、言わないのよ……………」

「い、いや、言つてなかったか？ そうか、そりや悪かった。ハハハ……………」

「……………」

追撃するかの如く視線を再び弾に突き刺す。それは最早死体撃ちに近い。これではどっちが歳上なのだろうか。

「あ、あの、よかつたら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……………」

彼女はその言葉を最後に顔を赤らめながらそそくさと部屋を出ていく。残されたのは男子二人と静寂のみだった。

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ三年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれないのかねえ」

「はっ？」

「いや、ほら、だってよそよそしいだろ。今もさつきと部屋から出ていったし」

「……………」

彼女もまた、彼に好意を寄せている。先程の彼女が取った行動もそれによってなのだが、この男『織斑一夏』は死ぬほど鈍感である。罪な男だ。

「……………なんだよ?」

「いやー、なんというか、お前はわざとやっているのかと思う時があるぜ」
「?」

「まあ、わからなければいいんだ。俺もこんなに歳の近い弟はいらん」

本当は指摘するべきなのだろうが、そうすると先程の視線のように牽制され、酷い時は制裁を受けてしまう。それに、友人が家族になるなど弾にとつては御免だった。

「まあ、いいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

「おう、そうだな。昼飯ゴチになる。サンキュ」

「なあに気にするな、どうせ売れ残った定食だろう。じゃ、行こうぜ」

弾の自宅は食堂を営んでおり、昼食はそこで用意されている。

部屋を出て一階へ下り、一度裏口から出て正面の食堂入り口へ。多少面倒ではあるが、弾曰くこの構造のおかげで私生活に商売が入って来ないとのこと。

住みにくくないのかと以前は思っていたが、本人がそれ以上何も言わないのだから別に良いかと一夏はあまり気にしない事にした。

「うげ」

「ん？」

「……………」

食堂に入るなり露骨に嫌そうな声を出す弾。いったいなにがと一夏は後ろから除くと、そこには彼等の用意されてある昼食の他に先客が一人。

「何？何か問題でもあるの？あるならお兄一人外で食べてもいいよ」

「聞いたか一夏。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」

その先客とは、先程部屋を出ていった蘭であった。しかし、その姿はラフな姿は微塵も残っていない。

纏めていた髪も全て下ろし、服装は六月ということもあってか半袖のワンピースである。

「別に三人で食べればいいだろ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろうぜ」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい……………」

弾は何かを観念したのか渋々テーブルに座る。本当に彼女の兄なのだろうか。実は彼女の方が姉なのではないかとたまに思う時がある。

「……………蘭さあ」

「は、はひっ?」

「着替えたんだ。どっか出かける予定?」

「あつ、いえ、これは、その、ですねっ」

「……………ああ!」

一夏は閃いた。漫画的表現を使うとすれば、頭の上で電球が現れ光ったことだろう。

「デート?」

「違いますっ!」

光ったところでそれが正解とは限らない。着替えた理由は彼自身に見て欲しいという思いからののだが、彼の性格上それに気づくことは無いだろう。

「ご、ごめん」

「あ、いえ……………。と、とにかく、違います」

「違うっつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだがな。何せお前そんなに気合いの入れたおしやれをするのは数カ月に一回——」

瞬間、突如として彼女が繰り出すアイアンクローは見事に弾の顔下半分を捕らえた。完全に口を塞いだ事によって呼吸を止めている。恐ろしい技術だ。

「……………!」

「……………!」

冷たく見据える彼女と許しを請う弾の二人が行う、二人だけに通じるアイコンタクト。その光景を見て彼は一言。

「仲いいな、お前ら」

「はあ!?!」

「食わねえんなら下げろぞガキども」

「く、食います食います」

そのとき、厨房からぬるりと現れたのは八十を過ぎて尚も健在、五反田食堂を営んでいる五反田家の頂点である五反田 厳^{げん}。長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている腕は隆道ほどではないが筋肉隆々である。

彼は何度か厳に拳骨を食らった事があるが、それは姉である千冬に勝るとも劣らない威力だ。よって大人しく昼食を頂く事が賢明である。

隆道の拳骨を受けた事は無いが、恐らく一撃で意識は飛ぶだろう。そんなどうでもいことを彼は考えていた。

「「いただきます」」

「おう、食え」

三人の食事様子を見て満足げにした後に厳は厨房に戻っていき、次の料理を調理し始めた。連続に響く包丁の音から察するに、二重の意味で五反田鉄板メニュー『業火野菜

炒め』の注文が入ったのだろう。

「でよう一夏。鈴と、えーと、誰だっけ？ファースト幼馴染？と再会したって？」

「ああ、箒な」

「ホウキ……………？誰ですか？」

「ん？俺のファースト幼馴染」

「ちなみにセカンドは鈴な」

箒と鈴音が聞いたら間違はなく鉄拳制裁が飛んでくるであろう。誰もその事を指摘しないので、彼が二人の前でその呼び名を言わない事を祈るしかない。

「ああ、あの……………」

「そうそう、その箒と同じ部屋だったんだよ。まあ今は——」

「お、同じ部屋!？」

先程から彼の発言に対し気が気ではなかった彼女だったが、『同じ部屋』という部分によつて完全に取り乱し立ち上がってしまう。

「ど、どうした!?!落ち着け」

「そうだぞ落ち着け」

「い、一夏、さん？同じ部屋っていうのは、つまり、寝食を共に……………？」

「まあ、そうなるかな。ああ、でもそれはこの間までの話で、今は別々の部屋になつてる。

当たり前だけど」

そもそも、男女が同じ部屋だったのがおかしかったのだ。何故初めから男女別にしなかったのかと思っていたが、その理由がかなり複雑であった事は彼は知るよしもない。

「い、一ヶ月以上同せ——同居していたんですか!？」

「ん、そうなるな」

「……………お兄。後で話し合いますよ……………」

「お、俺、このあと一夏と出かけるから……………。ハハハ……………」

「では夜に」

有無を言わせぬ口調で兄の退路を絶つ彼女。中等部生徒会長をやっている経験からか、妙に鋭いものを感じる。

「……………決めました。私、I S 学園を受験します」

「お、お前、何言つて——」

「——っ!？」

彼女の唐突の宣言により弾は立ち上がってしまう。先程の彼女といい弾といい、食堂で騒ぎ立てた事によって厨房にいる敵の怒りは頂点に達した。

それによつて敵が繰り出すは豪速球とも言えるおたまの投擲。それは一寸の狂いもなく弾の顔面に向かって飛んでいき——。

「……………おぉ?」

「さ、サンキュ、一夏。助かった……………」

「……………」

——弾の顔面に当たる事は無かった。

とつさに飛んできたおたまを一夏は直ぐに捉え、すんでのところで掴む事が出来たのだ。

「……………危ないじゃないですか厳さん。他のお客さんもいるんですからこういうのは投げないで下さいよ」

「……………悪かったな。だが、あまり騒ぐなよガキども」

立ち上がって厨房入り口まで来た一夏からおたまを受け取って一言謝った後に、厳は厨房に戻っていく。小さな溜息を吐いて彼も席に戻る。

(……………今までは見えなかったのに、なんで掴めたんだ?)

弾の顔面におたまが飛んでくる事は今回が初めてじゃない。しかし、今回は何故か目で追うことが出来、更に掴む事が出来た。

何故だかはわからない。もしかしてI Sの訓練をしてるからなのだろうかと考えたがどうも違う気がする。

しかし、考えても結論など出るはずもなく、まあいいかと彼は深く考えない事にした。

「すげえな一夏……。じーちゃんの投げたおたまを掴むなんてよ」

「お前もいい加減学習しろって……。ところでさ、受験するって……。なんで？ 蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れて、しかも超ネームバリューのある所だろ？」

彼にとってそこが謎であった。大学まで約束された学業を蹴ってまで I S 学園を受験するなど、よっぽど I S に関心が無ければするはずがないからだ。

「大丈夫です。私の成績なら筆記で余裕です」

「いや、でも……。な、なあ、一夏！ あそこって実技あるよな!？」

「ん？ ああ、あるな。 I S 起動試験っていうのがあって、適性がまったく奴はそれで落とされるらしい」

I S 学園に入学するのだから、肝心な I S に乗れなければ話にならないのだ。乗れない癖に I S 学園に通うなど、何しに来たのだとしか言いようがない。

しかし、そんな二人を余所に彼女は余裕の表情を見せ、無言でポケットから紙を取り出しそれを差し出す。

「げえっ!?! I S 簡易適性試験……。判定 A ……」

「問題は既に解決済みです」

「それって希望者が受けられるやつだっけ？ 確か政府が I S 操縦者を募集する一環で

やっつてるっていう」

「はい。タダです」

道理で余裕の表情だった訳だと彼は納得した。成績も優秀、適性も高ければI S学園に受かる確率が高いだろう。

「で、ですので……………I S学園に受かりましたら、い、一夏さんにはぜひ先輩としてご指導を……………」

「……………」

「……………一夏、さん？」

I Fの話ではあるが、隆道に出会っていない彼だったなら恐らく安請け合いましたであろう。しかし、今の彼はそのようなことはしない。

『考えなしの発言はやめとけ、今後苦労するぞ。口は災いの元つて言うしな』

I S学園に入学してから今日まで学んだ事は既に数多い。女性に対しては異常なまでに鈍感な彼であるが、それ以外の事は色々と学んで来た。そして何より——。

『悪いが、一次移行を終わらせてない織斑を出させる訳にはいかねえ。そんなに男のI S試合を見たいんだったら、俺が出てやるよ』

『ぐひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!! あはははははははははははははははははは!!』

『しっかりと味わえライム女あつつつ!!』

『迎撃行動を再開』

『……………なんでだよ……………どうして』

『織斑一夏、セシリア・オルコット、凰鈴音。三名に迎撃行動を開始する。終了条件、最優先事項の達成』

『どうしてだあああああつつ!!!!!!』

———今のIS学園は、何が起こるかわからない。

(つつ……………)

自分と隆道の実在によって起きた二つの事件。どちらも主な被害を被ったのは隆道

の方が、そういった事が今後自分や他の人間に降りかからない保証なんて無い。

今の自分では何も出来やしないのに、物事を安請け合いするなど愚の骨頂だ。彼女のお願いなど、到底聞けるはずもなかった。

「……………なあ、蘭」

「は、はいっ!?!」

「蘭が決めた事に俺がどうこう言う筋合いは無いんだろうけど、さつきも言った様になんでIS学園を受けたいんだ……………?」

「え……………。あの、えと、それは……………」

「悪い事は言わない、よく考えた方がいい。自分の人生なんだからさ」

箝口令を敷かれた事によって、事件の事は言えない。今や何が起こるか分からないIS学園に、何も知らない彼女が来るのはあまりいい気持ちじゃなかった。

ISに関心があるのなら来るなどは言わない。しかし、それ以外の軽い気持ちで理由ならば来るべきではないのだ。

故に、唯一出来る事は遠回しに来ない様に言うだけ。それでも来るのであれば止めはしない。その時は可能な限り出来る事をしようと彼は思った。

「そんな簡単に進路なんて変えちゃダメだ。よく考えて、行動するべきなんだ」

「一夏……………」

「……………」

彼はその言葉を最後に食事を再開する。五反田兄妹もそれに続いて食事を再開したが、三人は食べ終わるまで終始無言だった。

昼食を終え、一夏と弾は街へ出掛けていた。蘭は食事を終えるなり、一人で考え事をしたいと言つて自分の部屋に戻つた為近くにはいない。

ちなみに弾の家にいる際離れていた護衛達は二人の後ろに一定の距離を置いて付いてきている。

「意外だったな。俺はてつきり二つ返事するかと思つてたんだが」

「考えなしにあれこれ言わない様に気をつけてんだよ。悪いか？」

「いや、全然。良いことじゃねえか。誰かから教わつたのか？」

「……………柳さんのおかげさ」

今の自分があるのは隆道の存在があつてこそだ。支えられたり、相談に乗つてくれたり、自分の身代わりになつたりなど、本当に頭が上がらない。

「なんか、早くその人に会つてみてえな。次こそは誘えよ？」

「ああ、勿論さ。ところで、行く場所決めてないけどよ、どこにするんだ？」

「勝負しようぜ。……………エアホッケーでな！」

「……………!?お前、敢えて俺に十連敗中のものを……………!?」

「中学のままの俺だと思っうなよ、一夏！」

彼は、弾が燃える炎を背負った様に見えた気がした。

弾は本気だ、でなければ不得意とするもので勝負を挑もうとはしない。

彼は激戦の予感に僅かに震える左手を握り締め、弾と並んでゲームセンターへと駆け出した。

激戦になるかと思いきや、結局のところ弾が半分以上自滅点を叩き出した事により彼のエアホッケー連勝記録は十から十六まで伸びた。世の中本気になったところで勝負に勝つとは限らないのだ。

遠くで見ていた護衛達はその光景に苦笑いが絶えなかったそうなの。

こうして、織斑一夏の充実した平穏な外出は無事に終わったのである。

何故、神は織斑一夏だけに平穩を与えたのだろうか。

何故、神は柳隆道に平穩を与えなかったのだろうか。

「ぐ、ぐお お……………。て、てめえ……………やることが、無茶苦茶、過ぎんだろ……………。危うく死んじまう、ところだった……………じゃねえか……………」

「そのまま死ねば良かったのにな。つーか、てめえらこそ殺る気満々じゃねえか。関係ねえ人間を巻き込んだ癖に都合良い事言ってるじゃねえぞ。こんな物騒な物まで用意しやがって」

彼には平穩なんてものは訪れない。

「あ、あ……………許さねえ……………殺じで、やる……………！でめえは、絶対にぶつ殺じで、やる……………！！殺じでやるよ隆道いつ！！」

「あ、あ、？それはこっちの台詞だくそつたれ！殺れるもんなら殺つてみろよ！！死に損ないの飼い犬風情がっ！！」

『二番目の男性操縦者』という呪いを背負つた彼には、どこまでも悪意が、暴力が付き纏う。

「ぐだばりやがれこの野郎があつっつ！！」

「くたばるのはてめえの方だあつっつ！！」

雄叫びが、悲鳴が、凶器が、鮮血が飛び交う。

『有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないよ』

この世界は——どうしようもなく狂っている。

この世界は——残酷である。

数時間前——。

時刻は午前十時付近、某県某市。

そこは都内と比較すると緑豊かな地域であり、コンクリートジャングルに長く住んでいる人間にとっては新鮮な光景だ。

駅そのものも都内と比べると小さく、人の出入りも決して少なくは無いがそれなりの

人数だ。満員電車で遭遇する事など、せいぜい朝方と夕方くらいだろう。

通勤ラッシュも終え、多少は落ち着いた時間帯にその駅から出てきた二つの人影。その人影は、IS学園に教員として従事している女性であった。

「ここが、柳君の住んでいた……………」

「山田先生、気をつけてね。私達はここの人達に警戒されてるんだから」

「わかっています。大丈夫、です……………」

一人はIS学園の時に着ている物とは違い胸元を隠している服装の真耶、そしてもう一人は——。

「まったく……………一人でここに来るなんて無謀よ。私が聞いていなかったら準備もせずに行くつもりだったでしょ」

「う……………、す、すみません……………」

真耶に軽く説教をする彼女の名前は榊原さかきばら 菜月なつき。二十九歳独身。

生徒に優しく品行方正、容姿も悪くなく、真つ当な思想を持つ女性で隆道の事を気にかけている数少ない女性。以前保健室で大怪我をした隆道に押さえ付けられた人物でもある。

——近年稀に見る存在で、今の狂った社会にも関わらず結婚していても不思議ではない——
——のだが、彼女は可哀想なくらい男運が無かった。

同性からも反応がよろしくない相手に惚れ、その度に痛い目に会いやけ酒をする事が年に数回。

今年で二十代も最後なので最近は実家が何度も農家とのお見合いを勧めて来るのが悩みだとか。

しかし、本人曰く燃えない相手では心が弾まないらしい。だからおかしな男に引つ掛かるのだ。本人も薄々気づいてはいるが、くたびれる結婚はしたくないとのこと。それに、彼女は今絶賛夢中になっている男性がいる。

そう、彼女は彼にぞっこんだ。入学前に見た顔写真で一目惚れしてしまったのだ。完全にホの字だった。そんな彼女を見た教員数名は『あつ、この子もダメだ……』という反応をした。

結果は案の定。まさか交際処か交流以前の問題だとは思わなかった彼女は入学式当日にやけ酒をしたという。

しかし、今回の彼女は一味違う。彼の事を諦め切れなかったのだ。今は無理でもきつといつの日かと今でも期待し、その日の為に影ながら彼のサポートをしていた。

彼は一切知らない事だが、彼をよく思わない生徒が未だにちよつかいを出さないのも、千冬や真耶だけでなく彼女も密かに牽制や根回しをしていたからだ。いつか彼が心を開く事を信じて。

といつても、彼女の行動が実を結ぶ事は無いであろうが。やはり彼女は男運が無い。そんな事は置いて、何故彼女達がこの場所にいるのか。事の始まりは四月の上旬まで遡る。

以前、政府から送られた隆道の黒塗りだらけな身辺調査書。これを見た真耶は自分自身で確かめる為に一度自ら政府に連絡を取ったが、調査書以上の詳細は話せないと情報提供を却下された。殆ど黒塗りなのはどうかと抗議したのだが、詳細は話せないとの一点張り。此方が折れる以外の選択肢が無かった。

その調査書が来る前にも学園関係者が現地調査を行ったが、彼の通っていた高校からは学園関係者と知った途端に追い出され、近所の住民は聞き込みを拒否するなど非協力的な態度。

殆どの学園関係者が半ば諦めざるを得ない状況だったが、彼女は決して諦めようとはしなかった。

自分自身の目で確かめるべく、彼女自らが現地へ行くことを決意したのだ。この目で見れば何かわかるかもしれないと。

本来は四月の内に休日を使って現地へ向かう予定だったが、ここ最近は男性操縦者二人や超が付くほどの問題児の対応によって、その休日すらも学園から出る事が出来なかったのだ。

そんなブラック企業ばりの過労が二ヶ月近くも続き、六月になってようやく外出が出来る様になった。

他の教員に迷惑をかけまいと一人で行く予定だったのだが、これに待ったをかけたのは榊原菜月その人だった。真耶を一人で行かせるのは危険と判断したのだ。その為、渋る彼女を無視して同伴する事にした。

何故、危険と判断したか。その理由の一つとしては、この地域は何かと物騒な所であろう。

『女性は絶対に一人で出歩くな』

『夜道に気を付けろ』

『野良犬に注意!!』

この地域で、以前から言われている警告。夜道に気を付ける等の警告はどこでもそうだが、この地域はそれが一層強調されている。そして一番注目したものは――。

『髑髏に目を付けられるな』

――あまりにも不気味過ぎる警告だった。

「あの警告……………『髑髏』って何の事でしようか」

「調べてわかった事だけど、二、三年前からいる集団だそうよ。この周辺で起きる乱闘事件や傷害事件に殆ど出現しているって話」

「ら、乱闘………？それに傷害って………」

「詳しい事はわからないわ。わかっていることは全員が髑髏のフェイスマスクをしてるって事ぐらいだし」

——『髑髏』——。

二、三年前から隆道の住む地域に存在する謎の集団。髑髏のフェイスマスクが特徴であり、全員が身元不明。目撃情報では少年と青年らしき若人しか確認されてないのと。と。

ナイフやバット等の凶器だけでなくクロスボウなどで武装をしており、彼等が出現した場所では血塗れになった人間しか残らないという。

被害者は男性だけでなく、女性も例外ではない。あまりにも酷い惨状にも関わらず未だ死人が出ていないのは最早奇跡だとか。いや、もしかすると確認されてないだけなのかもしれない。

警察がどんなに早く現場に駆けつけても毎回逃げられるのだが、稀に恐ろしいものが残っている時がある。

散弾銃の弾痕が発見される時があるのだ。

この弾痕が発見された際、現場に残された被害者は肩や四肢といった所へ死なない程度に撃たれていた。その全員がその後の生活に支障が出ている。中には一生車椅子生活になってしまった人間もいるほど。

勿論このような物騒過ぎる事件は住民も耳にしている。普通だったらこの様な話を聞くと引越などでの地域から離れようとするだろう。

しかし、以前から在住する人間はこの地域から離れた者はほとんどいない。それは何故か。

知っているからだ。『髑髏』の事を。

何故現れたのか、正体は誰なのか、標的は誰なのか、標的になる要因はなんなのか、住民は全て知っている。『髑髏』を知らないのは余所者と一部の人間だけ。

標的になるような事をしなければいいのだ。そうすれば女性が一人で出歩こうが夜道だろうが『髑髏』に狙われる事は無く、むしろ彼等は守ってくれる。

だから住民の皆は何も言わない。標的が自分達じゃないから、脅威に晒された時に守ってくれるから。

そう、警告は住民に対して発しているものではない。

余所から来た、何も知らない人間に対しての警告だ。

当然、彼女達は知らない。

自分達が標的の範囲にいるということに。

「な、なんか怖いですね……………」

「だから用意をしてって言ったのよ。ほら、ちゃんと持つてるわよね？」
「……………あの、本当にコレは必要なんですか？」

「あの柳君がいた所なのよ？物騒な話もあるし、護身用くらい持つておかないと」
そう言いながら、真耶は上着の内側にかけてあるソレを嫌そうな顔で見る。

ソレは小型の護身用拳銃だった。彼女としてはなるべく持ちたくは無かったが、何せここは一際物騒な地域。使わない事に越した事は無いが、万が一身を守る物は必要だと菜月が彼女に持たせた物である。ちなみに菜月も同じ拳銃を所持している。

「私だつてこんなものは使いたくないわ。使わない事を祈りましょう？」

「は、はい……………」

「元氣出しなさいよ。人探しもあるんだから」

「そ、そうですね。えつと……………」

鞆に手を伸ばし、そこから一枚の写真を取り出す。そこに写されているのは黒のセミロングヘアを靡かせるスタイルの良い女性——根羽田光乃の後ろ姿があった。

「根羽田光乃さん……………彼女を見つける事が出来るでしょうか……………」

「流石にわからないわよ。まあ、とにかく行ってみましょう」

行動を起こさなければ何も分からず終いだ。まずは行動あるのみだと、菜月はたどたどしい彼女の手を取り住宅街へ向かうべく足を運んだ。

彼女達が住宅街へと向かう様子を影から見ていた青年が一人。彼は二人が見えなくなった所で携帯を手にし、あるところに電話をかける。

『もしもしい。お前さ、今どこにいるんだよ？今日は後輩達連れて皆と遊びに行く——』

「それどころじゃねえ。見慣れねえ女二人が住宅街に向かったぞ。以前まで彷徨いてたくそつたれ共じゃねえな」

『……………特徴は』

電話に出た相手は最初こそ陽気な声だったが、彼の言葉によってドスの効いた声に変わっていく。

「片方はよくわからなかったがもう一人は結構目立ったな。緑髪で眼鏡をかけてて、乳がデカイ。姐さんと同じくらいじゃねえの？」

『……………今日の遊びは中止だな。わかった、俺らも直ぐ戻る』

「もしかしたらこの間みたく姐さんを狙ってる奴かもしれないねえ。その時は……………あ？」
『どうした？』

何かを言おうとしたその時、彼は駅の方にある人物がちらりと見える。その人物には

既視感があつた。

「……………おい、駅の奥に『飼い犬』がいやがるぞ。あの野郎、もう病院から出れたのか……………！」

『……………そいつがいるってことはだ』

「ああ……………他の『飼い犬』の連中もいるだろうな。絶対何かを狙つてるぜ」

『……………お前も直ぐ戻つて来い。用意はしとく』

「あいよ、んじやまた」

彼はそう言つて電話を切り、急ぎ足で住宅街へと消えていった。

この地域は、一部の人間からはこう呼ばれている。その名も——。

——『野良犬の巣窟』。

とある街にある静かな道路。

その道に停まっているのは、場違いにもほどがあるほど目立ってしまう要人警護車が一台。そこから出てきたのは茶色のスーツを着こなす若い男性が一人と、灰色の半袖コーチジャケットに藍色のジーンズを着た私服姿の青年——隆道が一人。

二人が外に出たと同時に助手席の窓が開き、そこから運転していた中年の男性が顔を伸ばす。

「では、帰りの際は連絡を。君、彼の事をよろしく頼むぞ」

「了解です。柳君、どうかよろしく」

「……………よろしくどうぞ」

二人のやり取りを見た後に中年の男性は頭を引つ込め、車は走り去っていく。周囲には誰もいなく、その場にいる人間は彼と男性のみになった。

「さてと、改めて紹介しよう。今回君の護衛を担当する事になった高岡たかおか真吾しんごだ。好きに呼んで構わないし、敬語もいらさないよ」

「……………あんた一人なのか？」

「あそここの住民は政府や学園関係者を警戒しているからね、大人数で行くと刺激しちゃう事になるから今となつては顔を知られてない人間しか行けないんだよ。それが僕一人だけつて訳。本当はあと二人いたんだけど、割り振りミスなのかその二人は織斑君の方に行つちやつてさ」

「ふーん、ご苦労な事で」

彼の護衛を担当する高岡と名乗る男性は見た目からしてかなり若い、恐らく二十代前半であろう。光を失つた濁つた目を持つ彼と違い、星の如く澄んだ目は眩しさを感じられる。

「こればかりは仕方ないさ。それに、こんなところに降ろしてごめんね。これも刺激を避ける為なんだ」

「別になんとも思つちやいないさ」

「そつか。ところで、さつきは訊かなかつたけどその首輪が君の……………？」

「ああ、これね……………。別に必要ねえつて言つただけだな……………」

彼は首に手を伸ばし、『灰鋼』の待機形態に触れる。

実は彼に外出許可が出される以前、彼が学園外でISを所持するのは危険ではないかと一度は所持禁止案が出たのだが、最終的に自己防衛の為として持たせる事に決定し

た。勿論条件付きでだ。

『良いか、柳。防衛手段として展開は認められたが、あくまでも防衛だ。自分からは決して攻撃はするなよ？ そうなってしまうえばおしまいだ。二度と外へ出られなくなるぞ』

彼は未だに狙われている。護衛はいるにはいるが、数の暴力や武装した相手には無力だ。その事から所持は認められたが、それも防衛のみとなった。現在は後付武装の全てを外し『リカバリーショット』が二本のみ残されている。

武装は基本装備の『葵』と『焰備』のみとなったが、運用目的が自己防衛ならば十分だろう。

「まあ、そのI Sの事はいいや。僕が気にしてもしょうがないしね。……ああそれと、アレは忘れてないよね？」

「……………」

高岡の言葉に反応し、彼は上着を捲る。そこにはシオルダーホルスターが見え、拳銃が一つ収まっていた。

その拳銃は彼の体格に合わせてそれなりの大きさだ。装弾数は少ないが口径も大きくストッピングパワーも高い為、襲ってきた相手の動きを確実に止める事が出来るだろう。

「学園の連中はコレを知らないんだろ？ さつきも言ったけど良いのかよ、こんなもの持

たせて」

「車の中でも説明したけど、ISを展開されるよりそっちの方が都合が良いんだとき。使わない事が一番だけどね。学園の方には上司が説明するって言ってたし、君は気にしなくても良いよ」

「そうかよ」

「そういうこと。んじゃ、早速向かおうか」

「ん」

確認を終え二人は向かう、彼の住んでいた自宅へと。

真実を知るべく訪れた『IS^真学^耶園^と教^菜員^月』――。

縄張りに潜む謎の集団『鬻^鬻體』――。

悪意を背負って現れた『飼^飼い^犬犬』――。

そして、悪意によって狂った『狂^隆犬^道』――。

『野良犬の巣窟』に彼等は集う——。

——凄絶で血みどろな暴力は、目前に迫る。

第二十五話

『野良犬の巣窟』と呼ばれる地域の住宅街、そこにある一件の一戸建て。

その家は玄関を始め、リビング、台所、洗面所等は余計な物が何もなくさっぱりとしている。目を楽しませるような物は一切存在せず、そこはまるで牢獄だ。

そんな殺風景な部屋の一つであるリビングには物が大量に詰められた買い物袋が複数と、硬い表情で黙々と掃除を行う女性が一人。

「……………」

現在この戸建ての家主は二ヶ月以上も不在である。以前までは彼女を含めた三人が住んでいたが約半年前に一人減ってしまい、今年の三月半ばにまた一人いなくなった。いや、連れて行かれたと言うのが正しい。よって、ここ最近の出入りは彼女たった一人だ。

そんな独りぼっちになってしまった彼女は一言も発さずに手際よくリビングを綺麗にしていく。家主の帰りを今でも待ちわびるかのよう。

「ふう……………」

朝早くから掃除をしていたのだろうか、一度手を止めて小さく溜息を吐き背伸びをす

る彼女。背伸びをした事により、破壊力抜群な豊満な胸はより一層強調される。それは大多数の女性の心を粉碎機にかけるかの如く砕いてしまうほどに圧倒的だ。鈴音が見たら血涙を流す事は間違いない。

「もうこんな時間……………」

ふと、彼女は時計を見ると時刻は既に十時を過ぎていている事に気づく。少し休憩を挟もうとテーブルに座ろうとするその時だった。

「……………」

突如彼女のポケットから鳴る無機質な着信音。いったい誰からだと携帯を手に取り開くと、画面には『馬場ばば 章吾しょうご』という文字が。彼女はその文字を見て直ぐに電話に出る。

「もしもし。章吾くん、どうかし——」

『姐さん？今どこに？家か？』

電話に出ると直ぐに章吾と呼ばれた青年が彼女の応答を無視して話してくる。焦っているのか、その声はやけに切羽詰まっていた。

「うん？うん、先程まで掃除をしていたところ」

『ああ、そりゃよかった。……………ついさつき、治おさむから連絡が来てよ。見慣れない女が二人、ここの住宅街に入ったってよ。それに、駅で『飼い犬』も見かけたとき』

「……………そう。また、なんだ」

彼女は彼の話の聞いて、またなのかと半ば呆れてしまった。

住宅街にやって来た二人の女性。彼が見慣れない女と言った以上、住民の知人である線は消えている。住民の知人がやって来る場合、全ての住民に話が入って来るはずなのだ。それが無いということは余所者である事は確実だった。

女性二人の目的はわからないが、この時期にこのような所へ来る理由などが知れている。十中八九ある人物の調査か、自分を探しているのだろう。

稀に住宅街へ偶々入ってしまう全く害の無い人間もいたりするが、この住宅街の環境を見てしまえば一刻も早く抜け出そうとするだろう。抜け出さずに奥へ入ろうものならその時点で警戒対象だ。

『飼犬』の目的も不透明だが、この近辺で現れた時は大抵悪巧みをしている。ろくでもない事は確実だ。

しかし、今は放っておいても良いだろう。何せ『彼等』^{かれら}の手によって住宅街には簡単に近づくことは無くなったのだから。

『ああ、だから姐さんは家から出ないでくれ。女二人の目的がわかんねえし、もしかしたらまた姐さん狙いかも知れねえ。『飼犬』共の方は……………まあそう簡単には来ねえだろうし、来る頃には準備は済ませてるさ』

「……………あの、章吾君」

『あん？』

「えと……………章吾君達が私の事を気にかけてくれるのは凄く嬉しい。けど……………自分の身は自分で守れるから、もう私の事は気にしないで——」

『それは出来ねえ』

彼は彼女の言葉を遮るように言い放つ。そこには先程の焦りは微塵も感じられない。

『確かに姐さんは強い、俺達の誰よりも。男より女が強いなんてよく言ったものだよね。姐さんが正にそれじゃねえか』

「つ……………し、章吾君、それは違——」

『けどな……………それとこれとは別だ。ここが、姐さんがいるこの街が俺達の居場所なんだ。それを乱す奴は誰であろうと許さねえ。絶対にな』

「章吾、君……………」

彼もまた、今の社会によって迫害されてきた人間の一人だ。彼が指す『俺達』も例外ではない。

幼い頃から何度も脅威に晒され、やがて大多数の女性を信用しなくなつた彼等はそんな絶望の中、ようやく自分達の居場所を見つけたのだ。

だが、今やその居場所すら脅かす存在がいる。それを黙って見過ごす訳にはいかな

い。

『もうこれ以上、何も奪わせねえ。この街で好き勝手する奴は、姐さんを狙う奴は全員ぶちのめしてやる。二度と来れねえよう徹底的にな。それに……………』

「……………」

電話越しの彼は少し黙り、再度言葉を続ける。

『仮にだ。姐さんにもしもの、もしもの事があつたら……………くそつたれ共に連れて行かれたあいつに顔向けが出来ねえんだよ』

「っ!？」

『まあ、そういう訳さ。……………心配すんなって。害が無きや監視で済ませるし、あつたとしてもどうとでもなる。『飼い犬』共にも備えなきやいけねえしよ。んじや、そういうことで』

彼はそう言つて電話を切る。静かに携帯を閉じた彼女はその場所で俯いた。

「違う、違う……………違う……………!」

震えながらも、彼女は掠れた声で呟く。その目には、うつすらと涙が出ていた。

「私、は……………強くなんか……………ないよ……………」

次第に声は小さくなつていき、とうとう彼女は噤り泣いてしまう。呟いた言葉やその涙の意味は彼女しか知らない。

彼女のいるこの戸建ては家主——隆道の自宅。そして、一人孤独に噉り泣く彼女の名は——。

住宅街にある一つの空き地。

そこには少年から青年までの若人が十人近く屯している。だがその光景は、誰が見ても単に集まっている様には見えなかった。

数人は互いにやり取りをした後に空き地から離れ、数人は何処かに連絡を取って他の人間に指示を出したりなど忙しさが見える。

そんなせわしない集団に向かって携帯をしまいながら近づくと、首元に一本の古傷が見える青年が一人。先程まで電話をして彼の表情はどこか険しい。

そんな険しい顔をする彼——馬場章吾は一人の少年に声を掛けられた。

「馬場さん、姐さんはどうでした？」

「隆道の自宅にいます。家から出ねえように言つといたから一先ず大丈夫だろ。そつちはどうよ？」

「住民の人達には連絡済みです。『得物』は仲間達が用意中で、何人かは先輩方と一緒に女二人の監視へ」

少年は女性二人と『飼い犬』が出現して間もないにも関わらず、既に近辺に報告を済ませていた。そのおかげで此方は先手を取れるという有利な状況を作り出す事が出来る。

その事実には彼は満足そうに笑みを溢した。相変わらず手際が良いなど。

「やる事が早えじゃねえか。さっきまでいたガキンちよ共は帰らせたか？」

「帰る様に言っただんですが……すみません。『スパイしてくる！』とか言っただけで走って行っちゃいました」

「あいつら……」

彼は子供達のアグレッシブな行動に頭を押さえながら苦笑いせざるを得なかった。自分達の手助けをしてくれる事は有り難いが、恐らく楽しんでやっているんだろうなと思わずにはいられない。

それに、相手の正体がわからない以上何をしてくるか不明だ。いくらなんでも子供に手を出すとは思えないが、もしもの場合を考えて念を入れておく。

「ガキンちよ共には直ぐ家に戻る様に連絡しとけ、相手は何しに来たのかすらわかってねえんだからよ。お前らは用意の手伝いに行け。『飼い犬』に備えてそのまま待機だ」

「馬場さんはどうするんです？」

「俺も女二人の所へ向かう。んじや、行ってこい」

「ういっす。ではまた後で」

少年は残っている他の青少年達の元に向かい、全員を引き連れて空き地を後にする。一人残った彼は、眉間に皺を寄せながら呟いた。

「さて、忌々しいくそつたれの女共。てめえらは何処の連中だ………？もし奴等なら………」

次第に表情は歪んでいき、やがてそれは人とは思えないものへと変わっていく。それは言い様の無い殺意、『どす黒い何か』だった。

青少年達に目を付けられているとも知らずに閑静な住宅街を多少の警戒をしつつ歩く二人の女性——真耶と菜月。そこには彼女達以外の人間は誰もいなかった。

「静か………ですわね」

「ええ………結構不気味ね」

日曜日にも関わらず周辺は静かで、人一人として見えない。目に映る戸建てには人が住んでいる雰囲気はあれど、どこもカーテンが閉まっている。それが一層不気味さを引き立たせた。

「それに………至るところにあるアレって………」

「よほど警戒してるのね、ここの人達は………」

真耶が一つの電柱の上に視線を向ける。そこには監視カメラが一つ。

監視カメラそのものについては思うところは無い。どの地域でも必ず存在はするし、IS学園にもそれなりの数を配置している事から見慣れている。あったところで何も不思議とは感じない。

では、何故気にかけているのか。それは二人が疚しい事を企んでいるからなどではない。

数が多過ぎるのだ。

住宅街に入る時から見かけてはいたが、進む先全ての電柱に監視カメラが配置されており、種類はボックス型からドーム型など多種多様。それらは死角を作り出さない様に

徹底されていた。

電柱だけではない。戸建てにも、一件に二つ以上の監視カメラが取り付けられている。あれだけの監視カメラがあれば防犯効果は抜群処の話ではない。

「ここ、これだけ多いと落ち着かないですね」

「堂々としなさい。余計怪しまれるわよ」

悪い事をしてる訳ではないが、こうも監視カメラが多いと縮こまってしまふ。この地域の並外れた監視態勢に彼女は嫌でも寒気立ってしまった。

しかし、菜月の言うように堂々としていなければならぬ。ただでさえ警戒されているのだ、些細な行動一つでより一層警戒を強められたら何もわからないまま終わってしまふ。それだけは何としても避けたいところ。

(それにしても……………なんでしょう、この感じ……………)

この時、真耶は先程から感じる複数の視線に疑問を抱いていた。

彼女はその容姿からか、今までに下心満載の視線や嫉妬の視線を受けたことがある。何せ胸が大きい上に、普段から胸元の空いた服装で過ごしている為周囲の注目を集めているのだから。当然、下心満載の視線は男性、嫉妬の視線は女性である。ちなみに、当の本人は自覚など一切無い。

しかし、今感じている視線はそれらとは違ふと感じた。辺りを目の動きだけで見渡し

ても誰もいない。あるのは過剰に置かれた監視カメラのみ。
(気のせい、ですよね……………)

どれほど注意深く見ても人は見えない。視線を感じるのも、きつと監視カメラのせいだろうと自己解決し考えるのを止めた。

「わかつてると思うけど私達が I S 学園の人間だということは伏せなさい。住民に声を掛けられたら引つ越しの視察に来たとも言えばいいわ」

「は、はいっ」

目を合わせずに小言でやり取りをする二人。住民達に I S 学園の人間と知られる訳にはいかない。故に当たり障りのない理由を持つていかねばならなかった。

一直線に隆道の自宅へ訪問すれば手っ取り早いのだが、それでは自分達が彼に関する目的で来たと言ってる様なもの。刺激を与えない為にも慎重に行動する必要がある。

目的の達成は困難を極めるが、ここまで来たからには前に進むしかない。
「それにしても本当に誰も見かけないですね」

「ええ、日曜日なのに子供すら見え——」

「ねーねーお姉さん」

突然、声を掛けられた。正面には誰もいない、その声のする方向は——二人の真後ろ。

二人して顔を向けると、そこにはパーカーを着た小さな女の子が一人。見た目からして小学年で、フードを深々と被り両手を備え付けのポケットに突っ込んでいる。

なんだ、いるではないかと人がいることに安心したと同時に、何故小さな女の子が一人だけなのだと疑問も抱いた。

しかし、声を掛けられた以上は此方も応えるしかない。彼女達は表情に出さない程度に注意を払いつつ、会話をするべく菜月は女の子の目線に合わせて屈む。

「あら、こんにちは。君一人かな？お父さんお母さんと一緒にやないの？」

「……………いまは一人。お父さんは家にいるよ。……………ところでお姉さんたちはだあれ？どこから来たの？」

「私達はね、近いうちにここへ引越そうと思って、それで見に来たのよ」
「ひっこし？」

女の子は引越しの意味をわかってないのか首を傾げる。様子からして疑われては無い様で、それを見て二人は一先ず安心した。勿論顔には出さずに。

「そう、ここに住もうかなって色々見てるのよ」

「……………ふーん」

「それにしてもここは静かね。いつもこういうの？」

「……………んーん。たまーにしずかになるよ、たまーに。あ、でも最近は多くなつたかなあ。今日はついさつきまで賑やかだったよ」

女の子が言うには、このような人一人いない静かな光景はここ最近になって増えたらしい。恐らく政府やＩＳ学園関係者、そして自分達が関係しているのだろうと二人は推測した。

「あ、そうだ。良かったら案内してくれるかな？ 今日来たばかりだから道が良くわからなくて」

「……………いーよ。案内するね」

「ありがとう」

これは好機だと菜月は考えた。こここの住民であろう女の子と行動を共にすれば住民の警戒を少しでも解いてくれるだろうと。

女の子は二人を通り過ぎ、住宅街の奥へと進んでいく。二人はとてとて可愛らしく歩く女の子に付いていった。

真耶と菜月は気づかない。

「どうする？奥に行つちまつたぞ。章吾から帰らせろつて言われてんのに、やつぱ危ねえつて」

「光乃さん大好きつ子だからねえ、話を聞いて気が気じゃなかつたんでしようね。でも心配しないで、あの子は誰よりも警戒心が強い。それは貴方も知ってるでしょ？」

その女の子も『彼等』の味方だ。

「まあ、そうだけだよ………だったたら尚更近づかねえだろ普通」

「それほど私達を信じてるつて事よ。後でちゃんとお礼しておかないとね」

住民は決して余所者に気を許したりはない。

『お前ら、そこでぼけつとしてないでさつさと移動しろ。お姫様に何かあつたらどうするんだ』

「今向かうわ。ほら、私達も行きましょう」

「はいよ」

『彼等』は既に監視している。

場所は変わって、住宅街から少し離れた公園。いや、そこは厳密に言えばただの公園ではない。

その公園の敷地面積はとても広く、自然で溢れている。所々に東屋やベンチなどがあり、季節の花が咲き誇る事から写生する人間もちらほら。

全体の面積の内、公園部分の三分の二を有しているそこは散歩をする者、通学路として通り抜ける者、そして桜の季節になると花見をする者など様々だ。

では残りの三分の一は何なのか。

「……………」

敷地内の三分の一を有するその場所には青年——隆道が一人。彼は自宅に向かう前に寄りたいたい所があると言ひ、とある場所で『ある物』を買った後にここへ足を運んできた。

護衛には事情を説明し、今は公園の入り口で待機している。

「……………」

そんな彼は今、目の前にある石を暗い表情でじつと見つめている。そこに感情は何一つ存在はしていない。

その石の正面には『忘己利他』と縦に字が彫られており、側面にも何やら小さく文字が彫られていた。

「……………一月以来、か。五ヶ月ぶりってか？」

ソレを見つめて数分。彼は周囲に人がいる訳でもないにも関わらず、言葉を発する。まるでそこに誰かがいるかのように。

「本当は三月の終わり頃に来る予定だったんだけどよ。IS適性があるって判明して、

I S 学園に無理矢理押し込まれて……。それで、色々あり過ぎて遅れちまった」

当然、その言葉を返す者はいない。あるのは静かな風の音、ただ一つ。

「そこでさ、久々に日葵と会ったんだよ、八年振りに。あいつは……。あいつ、は……………」

『そうであーす！八年前に離れ離れになったにーの妹、篠原 日葵つであーす!!』

「……………ああ、元気だったよ。八年も経てばあんなに成長するんだな。あんだだけ元気なら大丈夫だろ、何も心配はいらねえ」

彼は決して変わり果てたとは言わず、日葵は元気に成長したとだけ呟いた。硬かった表情は次第に歪んでいき、それは悲痛なものへと変わっていく。

だが、それもほんの数秒ほど。直ぐに表情を無くし、言葉が続ける。

「……………まだ色々と言ひ足りねえけど、ここら辺りにしておくわ。あとさ……………良いもの、とは言えねえけど、これ買ってきたんだよ」

そう言つて、彼は手持ちの袋からそれなりに大きい鉢植えを二つ取り出す。それに植えてあるのは紫と白とピンクの三色を彩る、鮮やかで可憐な小さい花。

ユキワリソウ

別名『ミスミソウ』

その二つの鉢植えを石の前に左右対称に置き、花の向きを自分の方へ向ける。その場から少し離れてそれを眺めながら、彼はまた一言。

「やつぱ……結構綺麗だよな、その花。……こここの世話は次からあいつに任せるわ、俺はいつ来れるかわからねえしよ。……じゃあな」

その言葉を最後に、彼は多くの石が立つその場を離れていく。

彼がいた場所は霊園——公園墓地。先程まで彼は独り言を呟いていたのではない。そこに眠る故人に語りかけていたのだった。

彼が語りかけた墓——その棹石さわいしの側面には文字が彫られていた。そこにはこう記されている。

『令和三年 十二月二日 柳 光輝こうき 四三才』

公園墓地の入り口に戻った彼は護衛と合流し、今度こそ目的地へと向かう。その間は互いに喋らず、終始無言だ。事前に事情を訊いた護衛——真吾なりの気遣いなのかもしれない。

しばらく歩いて十一時を越えた辺りで、ようやく二人は住宅街の入り口付近に辿り着く。

「着いたね。といつてもまだ自宅じゃないけどさ」

「……………ああ」

「先輩方から話は聞いていたけれど、本当に静かだね。いつもこうなの？」
「……………」

真吾は初めて訪れた住宅街の雰囲気疑問を抱いていた。日曜日にも関わらず人は誰一人として見えず、静まり返っている。

「監視カメラもあんなに——」

「……………くそつたれが。『余所者』がいる」

「え？」

「『彼奴等』が動いてる……………。相手は誰だ……………？」

雰囲気だけでなく、監視カメラだらけの光景に釘付けになる真吾だったが、その時彼は突然呟いた。

一瞬何を言っているのかわからなかったが、困惑する真吾を余所に彼は今もぶつぶつと独り言を続ける。

「柳君。『余所者』とか、『彼奴等』とか……………さつきから何を言ってるんだい？」

「……………この話は聞いたって言ってたよな。なら、アレについても聞いた事はあるか？」

「アレ……………？」

彼は住宅街の奥を見据えたまま、近くにあるコンクリートブロックの壁を指差す。

そこには、やけにクオリティの高い髑髏の絵が一つ。

そしてその下には赤い文字でこう書かれている。

『watching you』

それを見た真吾は寒気を感じる。あの絵についても知っていたが、こうして見るのは初めてだ。アレは何なのかと仲間内で話題にはなつてはいたが結局不気味な事以外わからず、ただの落書きだろうということと話は終わった。

「う、うん、アレも先輩方から聞いた。ところでアレはいつたい……………」
「あの言葉にはな、二つの意味が込められてるんだよ」

「二つ……………」

「二つは、この住民に対して『あなたを見守っています』。そしてもう一つは……………」
彼は小さく溜息を吐きながらも、未だに住宅街の奥を見据えている。その目は鋭く、先程までの硬い表情が嘘の様に険しい。

「……………もう一つは？」

「余所者に対して『お前を監視している』だ」
「……………！」

「これだけ静かで、しかも誰も見えねえって事は……………今、ここにいるんだよ。住民を刺激している『余所者』と、そいつを絶対に許さない『彼奴等』がな」

そう言つて彼は奥へと進んでいく。住宅街の状況と髑髏の絵に赤い文字、そして彼の

意味深な発言によつて戦慄を覚えた真吾は直ぐ様我に帰り、先へと進む彼の元に急ぐ。

「俺はこの住民だから問題はねえし、あんたは今のところ『彼奴等』の対象外だ。仮に目を付けられたとしても無害と思われてる限り何もされねえよ」

「た、対象外………？さつき言つてた監視の事かい？」

「監視で済めばそれで良いさ。………けどよ、もし『彼奴等』に有害と思われたら、その時は………」

「………その時は？」

——それは標的、攻撃対象だ。

一方その頃。

「フンフフーン〜♪」

鼻歌を歌いながら二人——真耶と菜月を先導する女の子は、今や異様の一言に尽きた。

「フフフフーン〜♪」

「……………」

女の子は案内すると言つて以降、ほとんど話し掛けてはこない。此方から話し掛けた際は振り向いて応えたりする時はあるが、その時は決まって自分達を見た後に周囲を目的の動きだけで見渡している。その様子は何かを見ている、もしくは見えている様に見える。

未だにフードを深々と被つて両手をポケットに入れたその姿も異様の言葉以外見つかからない。転んだら危ないから手は出しておいた方が良いと言つたのだが、当の本人は「これでいいの」と聞く耳を持たなかつた。

姿や行動があまりにも子供らしくない。女の子には申し訳ないが、不気味過ぎると二人はそう感じてしまった。

基本的に話し掛けてこない女の子であつたが、たつた一つだけ話し掛けてくるタイミングがある。それは——。

「そつちはダメだよ」

——分かれ道からある方向へ行こうとすると、この様にハッキリと言葉を放つの

だ。どの方向から向かおうとしても必ず足止めされて別方向に案内される。

女の子が頑なに行かせまいとする道、それを地図と照らし合わせるとある事が発覚した。

(やっぱり……………柳君の家に行かせないようにしているわね……………)

(どうしますか……………う…このままでは……………)

このままではジリ貧だ。女の子に一言お礼を言つて別れるべきなのだが、それだと余計に隆道の自宅へ自然と向かう事が難しくなってしまう。既に何度か断られてる為、彼の自宅に向かう事は不自然なのだ。住民の警戒を薄める為に女の子についていった訳だが、結果的にそれが仇となつてしまった。

どうすればいいと考えに耽つていたその時、ここで二人は一つの疑問を抱く。何故、彼の自宅に行かせまいとしているのか。

(今……………彼女は家に?)

もしや、彼の自宅には自分達を探している家政婦——光乃がいるのではないだろうか。そう予想する事は難しい事ではなかった。

しかし、今は彼の自宅へ向かえない以上確かめる事は出来ない。博打に近いが、ここは一つ鎌をかける事にする。幸いにも相手は子供だ、もしかしたらぼろつと言つてくれるかも知れない。

故に菜月は当たり障りのないよう、行かせない道について尋ねた。

「ねえ、さっきの道には何かあるのかな？通れない道なの？」

「……………通れるよ。でもダメなの、あそこにはお姉ちゃんがいるから」

女の子は二人の前を歩いている為に表情は見えない。距離を詰めて横から顔を覗こうにも、深く被っているフードが邪魔をする。

「お姉ちゃん？君のお姉さんがいるの？」

「んーん、みんなのお姉ちゃん。この前までは一緒に遊んでくれたのに、知らない人に追いかけてからあんまりお外に出なくなっちゃった」

心なしか、女の子の声は少し暗くなつたと二人は思った。女の子はふと、その場で立ち止まり二人の方を体ごと振り向く。

「そのお姉ちゃんはね、一緒に住んでいるお兄ちゃんがいたんだけど……………このあいだ黒い服を着た男の人たちに連れていかれちゃって。お姉ちゃんすつごく泣いてた」

「……………!?!」

真耶と菜月はそれを見て息が詰まった。

女の子の表情は暗かった。

どこまでも暗く――。

どこまでも深く――。

そして、二人を見据えるその瞳は――。

――どこまでも『どす黒い何か』だった。

「だからダメなの、あの道を通るのは。もう、お姉ちゃんを困らせたくないから。もう、悲しませたくないから」

「……………」

ソレを見てしまった二人は慄然とした。こんな小さな女の子が、このような目をする事があるのかと。

「……………だから、あの道は通らないでね？」

「え、ええ……………」

女の子が行かせまいとする道とその理由、そしてその理由から出てきた『お兄ちゃん』という単語。間違いなく『お兄ちゃん』は隆道の事を指している。『お姉ちゃん』は光乃

で確定だろう。

(諦めるしかないわね……………)

菜月は察してしまった。駄目だ、彼の自宅に行くことは出来ない。もしも行ってしまったら最後。もう二度とこの住民から信用されなくなる。

真耶には申し訳ないが、これ以上の進展は不可能に近い。適当な所で切り上げて帰ろう、そうする事にした。

「山田先生、もうこの辺りで——」

「ひゃ、ひゃいつ?! い、今行きま——」

真耶は慄然とした状態がまだ抜けていなかったのだろう。彼女にとって不意打ちとも言える菜月の声掛けは、仰天するには充分の効果があった。

完全に混乱に陥った彼女は菜月に置いてかれると思つたのか、慌てて前進し——こけてしまう。

「うう、いたたた……………」

「はあ、何やってるのよ。ほら立って——」

何も無い所でこけた彼女に呆れながらも、立ち上がりせようと手を伸ばしたその時、白い何かが見界に映る。

何だアレはと、菜月は屈んだ体勢のままそれに向けて視線を動かす。

それは裏になつてゐる写真だった。

——何故写真が？

——何処から出てきた？

そこで菜月はある事に気づいた。

『根羽田光乃さん……彼女を見つける事が出来るでしょうか……？』

咄嗟に倒れてる彼女の近くを見渡すと衝撃によつて開いてしまった鞆があり、そこからは書類等が何枚か顔をのぞかせている。つまり、そこに落ちてゐる写真は——。

「——っ!？」

あの写真を見られるのは非常にまずい。ただでさえ住民に警戒されているのだ。見られてしまつたら自分達は何の目的でここに来たのかバレてしまう。

見られる前に回収しなくてはと菜月は直ぐ様手を伸ばしたが——届く直前、女の子は子供とは思えない程素早い動きでソレを拾つてしまった。

「あ——」

「す、すみません榊原せ……………」

静寂。うつ伏せになっている真耶、屈んだ姿勢で手を伸ばす菜月、そして拾った写真をじつと見つめる女の子。この時、この場所だけが時間が止まったかの様な光景と化した。

「あ、あの……………それは——」

「やっぱり、お姉さんたちもそうなんだ」

「——っ?!?!?」

女の子が発する声は、先程とは比べ物にならないほどに暗かった。女の子は写真をポケットにしまい、ゆっくりと後退りながら淡々と言葉を放つ。

「……………皆ね、お姉さんたちのような『余所者』は最初から信用なんてしてないんだよ」

女の子の表情は次第に歪み、それは『憎しみ』と化す。

ソレを見た二人はその場から動く事も、女の子から目を離す事も出来ない。

「隆道お兄ちゃんと光乃姉ちゃんが言つてたんだ。嘘について近づいてくる人間は皆——」

——『敵』だつて。

その直後、女の子は俊敏にポケットから『黒い物体』を取り出し、ソレに付いているピンを思い切り引つ張り二人がいる場所の反対方向へ投げ捨てる。ソレから鳴り響くのは連続したけたたましい爆音。

「きやつ!?!な、何この音つ!?!」

「み、耳がつ……………!」

ソレは、防犯ブザーというにはあまりにも音が大きすぎた。そこから出る爆音に近いアラームによって真耶と菜月は思わず耳を塞いでしまう。そんな二人とは違い、女の子

はアラームなどちつとも気にしていない素振りを見せている。(ど、どうして平気なんですか……………!?)

真耶の疑問は尤もだった。防犯ブザーは女の子の真後ろで今も鳴り響いている。距離が離れている彼女達ですら耳を塞ぐほどの爆音にも関わらず、何故女の子は平気な顔をしているのか。その答えは直ぐにわかった。

「何事も準備は必要なんだよ……………?こんな風にね」

女の子はそう言つて深々と被つていたフードを下ろすと、そこにあつたのは耳を完全に覆うイヤーマフ。女の子はこれを用いて防犯ブザーの音を遮断していたのだ。

「なっ……………あ……………!?!」

「凄いでしょコレ?隆道お兄ちゃんがくれたんだ。えーと、そーおんせいぎよがた?そんな名前だったよ。コレのお陰でうるさい音だけ聞こえなくなるんだ」

用意周到なそれを見て、真耶はようやく理解した。目の前の女の子は、他意なく話し掛けてきたのではない。

最初から自分達を炙り出すつもりだったのだ。

完全にしてやられた。先程言われたように、女の子は最初から自分達を信用する気な

ど無かったのだ。

「どう………して………」

「どうして?なんでどうしてって言うの?それはお姉さんたちが良くわかってることでしょ?」

「う………」

「後は『お兄ちゃんたち』にお願いするね。バイバイ、お姉さんたち」

女の子は投げ捨てた防犯ブザーを拾って音を切り、奥へと走っていく。誤解を解かなければと、真耶は女の子を追いかけなるべく立ち上がり菜月を置いて走り出す。自分達は何もするつもりはない、ただ話を聞きたいだけなのだ。

「ま、待って下さい!!?お願いですから話を——」

「——っ!!?山田先生っ!!」

走り出したその時、彼女は突然と全身に悪寒が走った。

それはIS学園で感じた事のある『殺意』。

今までの経験によって培った身体能力、そして人間の防衛本能が働き、彼女は咄嗟に

身を屈めると頭上辺りに何かが通り過ぎる。

「——っ!?!」

「——っ!?!このっ!?!」

次に彼女が認識出来たのは男性の声。その正体を見るべくその方向へ顔を向けると、鈍い光を放つ刃が自身の顔面に向かって——。

「——きゃあっ?!?!」

——寸でのところでその刃を靴で防御出来たのは奇跡だった。

だが、それだけだ。防御は出来ても衝撃は殺せない。まるで殴り抜かれたような感覚に襲われた彼女はそのまま後方に大きく仰け反り、菜月がいるところで体勢を崩して尻餅をついてしまう。

「いつ、いつたあ……………」

「山田先生っ!怪我はっ!?!」

「わ、私は大丈夫で……………っ!?!」

いったい何が起こったのかわからなかった。わかったのは風を切る音、男性の声、そして自分に迫ってきた銀色の刃物のような何か。尻を擦りながら先程まで自分がいた所に視線を移すと——。

「……………」

そこには、少年がいた。

その少年は見た目と先程の声からして十五歳前後に思える。黒のレザージャケットとグローブを身に纏い、口元には『髑髏』のフェイスマスク。此方を見据えるその眼は鋭く、異様に殺気立っている。そして彼が右手に持つ物は、刃長が三十センチもある悍しい凶器。

「……………お前ら、只者じゃないな」

「ど、『髑髏』……………」

「……………へえ？ほんの少しは調べたんだ。この間の姐さんを狙ったくそつたれ共とは大違いだ」

「うっ……………」

その凶器——マチェットを肩に担ぎ、ドスの効いた声を放つ彼は此方を品定めする様に見据える。その眼力は二人を怯ませるのには充分なものだった。

そして、真耶はそれと同時に恐怖心を抱く。先程の風切り音に顔面に迫った刃物は目の前の彼によるもの。

自分は危うく殺されかけたのだ、それも躊躇など一切無く。嫌でもその事実が結び付

いてしまい、心拍数が跳ね上がった。

「まあ、お前らがどこまで知つてようがどうだつていいんだよ。重要なのはお前らが——」

「俺達やこの住民にとつて有害だつて事だけだ」

「っ!?」

突如後ろから聞こえたのは男性の声。二人は振り返ると、そこには真耶を襲つた彼と全く同じ姿をした背の高い青年一人と平均的な身長少年が二人。手に持つのは、金属が見える短いグリップのみ。

三人は勢いをつけてグリップを振り、三倍に伸長したソレはスチール製の打撃武器——特殊警棒となる。

(囲まれた!?)

前方にはマチェットを持つ少年が一人、後方には特殊警棒を持つ青年と少年の三人。そして側面は両方ともコンクリートブロックで出来た壁。二人は完全に退路を絶たれた。

しかし、ここで更なるダメ押しが二人を襲う。

「おまたせ、あの子は家に帰らせたわ」

「……………忘れ物してた」

前方に追加されたのは腰に細長いレザーケースを携える青年と、箒の様に髪をポニーテールで纏めている女性。彼女の方は背中は何やら形の変った大きなバックを背負っている。当然この二人もフェイスマスクによって顔は隠れていた。

両者共に手持ちの武器等は見えないが、相手が増えた事実には変わらない。

(……………ほんつと最悪)

二対六という絶望的な状況。こんな事になるのなら何がなんでも彼女を止めるべきだったと菜月は考えてしまうが、時すでに遅しだ。

二人は、決して触れてはいけないものに触れてしまった。

「気分はどうだ？ずっと手の平の上で踊らされてよ？」

「……………」

「黙りか……………まあいいわ。ようこそ、『野良犬の巣窟』へ。早速だが質問だ」

——
てめえらは何処の連中だ？

第二十六話

六人の『鬪體』に前後方を塞がれた真耶と菜月。彼女達は現状の極めて厳しい状況の中、現状打破を必死に模索していた。

(よりによって『鬪體』に会うなんて……………)

『鬪體』については乱闘、傷害事件を引き起こす集団としか知らない。何故自分達が狙われるのか不明であるが、現に彼等は武器を手にして攻撃をしてきた。敵意があるのは間違いない。

今回この地域に訪れた目的は隆道についての調査であり、可能であるならば彼の家政婦である光乃に接触し、話を伺う事だ。目の前の彼等と争うつもりなど一つもない。

どうにか穏便に済ませるべく、二人は先ず両手を上げ揉め事を起こさない意思表示をし相手の行動を伺う。

「貴方達は……………何者なの……………？」

「質問してんのはこっちなんだよ。状況わかってんのか？」

警棒を持った背の高い青年は目を鋭くさせながらドスの効いた一言を放つ。その言葉は隆道のソレに近く、雰囲気も似ていると真耶は感じた。

「…………私達は、ただ住民の人達に聞き込みをしに来ただけなの。それ以上は何もしないから…………だから武器を下ろして、お願い」

「『有害』な『余所者』の言葉なんか信じるとでも思ってたのか。質問に答えろって言うてんだよ」

「……………」

菜月は判断に迷っていた。どう答えても良い方向に向かないと。

「この住民は政府の人間とIS学園関係者に警戒されている。そして彼等が言った『余所者』。間違いなく彼等も警戒、もしくは毛嫌いしている事は確かだ。

はぐらかすことは出来ない、かといって正直に学園関係者と言ってしまったらどんな行動を起こすかわからないのだ。

しかし、こうなってしまう以上正直に話すしかない。もうここには二度と来れないだろうが、怪我を負うよりは遥かにマシだと判断した。

「…………私達は……………」

「こいつら、光乃さんを狙ってるよ」

「…………?!?」

正直に話そうとした矢先、不意に言葉を発したのは『髑髏』の女性だった。

「あの子がね、こいつらが落とす写真に光乃さんが写ってたって。何度も隆道の家に入

向かおうとしてたから光乃さん狙いで間違いないわね」

「やっぱりてめえらも……………!!!」

「……………ほう」

(……………ああ、まずい)

今の一言によつて彼等の表情はより一層険しくなり、武器を持つ手は次第に力が込められている。

女の子が言っていた隆道の自宅に向かわせない理由、そして彼等の『姐さん』や『光乃さん』といった慕っている様な素振り。

先程までは狙われる理由が不透明だったが、この瞬間で菜月は即座に理解した。

彼等は『根羽田光乃』を外敵から守っている。

(最初から和解なんて無理だったって事ね……………)

始めから話を聞く処か会う事すら叶わなかったのだ。もう何をやってもこの住民と、目の前の彼等に信用を得ることは出来ない。

二人は、『余所者』から『敵』と認識された。

「この野郎がつつつ!!!」

先に動いたのは、最初に襲ってきたマチエツト持ちの少年。武器を構えて向かう先は未だ尻餅をついたままの真耶の元。

「——っ!? 動かないでっ!」

「——おおっ?」

「そのまま下がちなさいっ……………!」

「さ、榊原先生っ!?!」

菜月は即座に護身用拳銃を取り出し彼に向け威嚇する。

出来る事なら使いたくなかったが状況が状況だ。

既に彼等からは『敵』と認識されている。これが最善策とは思えないが、この場を切り抜けるにはこれしか思いつかなかった。

「榊原先生! それを出したら……………!」

「山田先生……………もう彼女に会うのは諦めなさい。ここから出る事だけ考えるのよ……………!」

「……………っ」

真耶は自責の念に駆られた。自分が浅はかだった故にこんな事になってしまったのだと。

もしあの場で転びさえしなければ、もし正直に話していれば、そもそも自分の目で確

かめたいが為にろくに調べもせずここに来ようとしたりしなければと後悔しか出てこない。

しかし、もう遅い。ここで行動を起こさなければ自分だけでなく彼女まで怪我を負う羽目になってしまう。

真耶は気持ち切り替えるべく懐の拳銃を取り出すが――。

「山田先生……………」

「ううっ……………」

――構える事がどうしても出来ない。

彼女は拳銃を取り出す事は出来ても彼等に向けることが出来なかつた。

ISのみならず生身でも射撃経験はあるが、それは標的射撃のみだ。人間を撃つた事など当然一度もない。

ましてや、相手は全員が十代後半らしき青少年達。温厚な性格である彼女は、撃つ事は勿論のこと銃を向ける事すら躊躇ってしまった。

そんな彼女の心情を余所に、少年は菜月に銃を向けられた事に驚きはしても怖気づいてはおらず、ただそれを黙って見ている。

「拳銃持ちか……………。それにその構え、なんか軍属くせえな。やつぱりてめえらは『有害』だ」

「……………私達はI S学園の関係者で、根羽田さんに会おうとしただけなの。どうこうしようって訳じゃないわ」

「この前もいたんだよな。政府の役員だの学園関係者だの名乗って姐さんに銃を向けて近づいて来た奴がよ。てめえらはそいつらと全く同じだ」

「……………もう根羽田さんには近づかない、二度とここには来ないと約束するわ。今すぐここから出ていくから……………だから道を開けて、お願い」

マチエツト持ちの少年は二人の言い分を全く聞こうともしない。だが、それも無理な話であろう。

この護身用拳銃は傷害事件が相次ぐこの地域の事を踏まえて用意した物だが、この状況で出してしまった以上その言い訳は通用しない。目の前の少年が言った事が本当ならば、自分達もそういう風に見られても何もおかしくはないのだ。

彼女としては絶対に彼等を撃ちたくはない。願わくばこのまま引き下がって欲しいと切に願うが――。

「……………おい後輩。アレは着てんのか?」

「いえ、お気に入りのシャツぐらいですかね。何せ『獲物』しか用意しなかったもので……………でも大丈夫です、二発ぐらいなら耐えて見せますよ」

「はあ……………じゃあ下がってろ。このあと『飼い犬』の相手もしなきゃならねえのに……」

で怪我されちゃ目も当てられねえ」

——背の高い青年が、突如と彼女達二人を挟んで少年に話し掛けた。

彼が言った『獲物』は恐らく武器であることは見当がつく。だが『アレ』とはなんだ、『飼犬』とはなんだと真耶と菜月は疑問が連続したが、それよりも頭にこびり付いた言葉があつた。

『二発ぐらいなら耐えて見せますよ』

確かに目の前の少年はそう言った。つまり、彼は撃たれる事を少しも恐れていないという事だ。

誰だつて普通なら銃を向けられただけで少しは怯む。だが彼が起こした反応は少々驚き、それだけだ。

(何なのよ貴方達は……………)

菜月は彼等に恐怖を覚えた。そこら辺の不良やチンピラとは訳が違う、死を恐れない悍しい存在。世の中にはこのような青少年達がいるのかと。

そんな二人を尻目に少年は少し考えた素振りをした後、青年の言葉通りにゆつくりと後ろに下がる。

「さて、拳銃持ちなら余計見逃す訳にはいなくなつたな。ソレを寄越して貰おうかね」「貴方達……………怖くないの……………?」

「俺達がそんなちっこい銃に怯むと本気で思ってたのか？それによ………てめえら理解してねえようだな」

「……………」

「ここは『野良犬の巣窟』だ。お前らは——」

——オレタチノナワバリニハイツテルンダヨ。

——その瞬間、何処からともなく飛んできた『何か』は菜月の拳銃に当たり、高い金属音と共に弾き落とされる。

「あ、っ!？」

「——榊原先生っ!？」

弾き落とされた拳銃は地面へ叩き付けられ、それと同時に『何か』も軽い音を立てて転がり落ちる。その『何か』とは——。

(っ、っこれは……!?)

それは『矢』であった。だが、それは弓などで用いる木製の長い『矢』とは違い、金属製の短い『矢』。菜月の拳銃はこの矢によって弾き落とされたのだ。

いったい何処から飛んできたのかと真耶は周囲を見渡そうとしたが、それは直ぐにでも判明する。

「ピストルタイプで拳銃だけを撃ち落とすとか前よりずっと上手くなったな、お前」

「いや、二の腕を狙ったら普通にミスった」

「前言撤回。やっぱお前下手くそだわ」

その声は左側面の壁側から聞こえた。その方向を見やると——。

「どーもこんにちはあ、くそつたれの女共おっ！変な動きしたら体に矢が生えるぜえ、おいっ!!」

——『マチェット』や『警棒』よりも凶悪な武器を持つ少年が三人ほど壁から身を乗り出していた。

「く、クロスボウ……!!?」

その三人が持っていたのは『クロスボウ』。先程撃つたであろう少年は小型のピストルタイプ、他の少年二人は銃床が付いた中型のフルサイズといった代物であった。

それだけでも絶望的だが、彼女達は更なる絶望に追い込まれる。

「おいクソ眼鏡っ！ さっさと銃を捨てろっ!!」

「——っ!?!」

今度は反対方向からの怒声。その方向へ振り向くと、同じく三人の少年が壁から身を乗り出した状態で『クロスボウ』を此方に向けて威嚇している。

「捨てろっって言っただよっつ!!!! 聞こえてねえのか、あ、あ、っつっ!?!」

「銃を捨てろくそっつたれがっつ!!!!」

「早く捨てねえとぶっ殺すぞっつ!!!!」

「そ、そんな……」

前後方だけでなく、側面両側にも『髑髏』がいた事に驚きを隠せない。完全に此方を逃がさないその用意周到さに彼女は恐怖に包まれる。

「私達が飛び道具持ちを想定してないとも思っただかしら? 間抜けな人ね」

「……………油断大敵」

不意に彼女に話し掛ける『髑髏』の女性。彼女もいつの間にか『クロスボウ』を持つ

ており、真つ暗な瞳で此方に構えている。

そして、彼女の方を向いたことによつて必然的にもう一人の青年も目に映るが、彼が持つソレは他の誰よりも凶悪で恐ろしい物だった。

「なっ!?、そ、それはっ……………!?!」

「うっそでしよ……………」

「……………この距離、流れ弾、気にしない」

彼が持っていたのはなんと『散弾銃』であつた。その『散弾銃』は銃身を縦に二本付いている『上下二連式』であり、主にクレ―射撃や狩猟、有害鳥獣捕獲などで用いられる猟銃の一つ。

猟銃を持つている事自体かなり色々とぶつ飛んでいるが、彼の持つ物は銃身と銃床を切り詰めた『ソードオフ』といった規制ガン無視の対人仕様となっており、ソレを片手で此方に向けている。

(無法地帯もいところよ……………! クロスボウ処か散弾銃、しかもソードオフだなんて出鱈目にも程があるわ……………!)

いったい何処から入手したのか、何故ソレを所持しているのかなど、そんなことどう

だつていい。今重要なのはそれらが全て自分達に向けられている事だ。
(ああ、もう……………)

二対六かと思いきや、まさかの二対十二という四面楚歌。しかも相手の半分以上はクロスボウ、一人は散弾銃といった飛び道具のオンパレード。もはや彼女達に為す術は——一つも無い。

「捨てろつてのがわからねえのかつ!!言つてもわからねえんなら——」
「す、捨てます、捨てますから!だからお願いです、撃たないで下さい……………」

こうなつてしまえば抵抗など出来はしない。仮にしたとしても即座に体が矢だらけになるか、身体中鉛弾まみれに事など目に見えていた。

真耶は颯爽と拳銃を捨て、足で払い再び両手を上げ降伏する。それでも彼等は誰も構えを解こうとはせず、ある者は真つ暗な瞳で、ある者は鋭く殺意の込めた目付きで二人を睨み付けままだ。

「つたく、お強い女性様もこれじゃ形無しだな。溜息しか出てこねえよ」
「あう……………」

「イカれてると思うだろ、まあ自覚はしてるぜ?けどよ……………これが俺達の出しちまつた結論だ。『暴力』には『暴力』をつてな」

弾き落とされた菜月の拳銃は散弾銃を持つ青年に、捨てた真耶の拳銃は警棒持ちの青

年に拾われ、弄くりながら彼は喋り始める。その動きは素人の様ではあるが、引き金に指を掛けてない辺り扱いに関しては理解しているのだろう。

「……………薬室に装填すらしてねえとはな、撃つ気無しってか？そっちはどうよ」

「……………同じく」

「……………はあ。ダメじゃねえか、撃つ気もねえのに拳銃を取り出すなんてよ。撃つ気があるんだつたらこうやって——」

「——つ?!?!」

二人の青年は同時に拳銃のスライドを力強く引いて薬室に弾薬を装填し、真耶と菜月に接近する。この行動から二人はその意味を嫌でも理解した。

「——近づいて狙わねえとな」

降伏する二人におよそ一メートルまで近づいた青年は片手で銃を真耶に向ける。

彼は撃とうとしている。片手ではあるが距離は充分、素人だろうと余程の事が無い限り外す事は無い。

住宅街のど真ん中で真つ昼間にも関わらず、引き金に指を掛けたその姿に震えもない様子から一切の躊躇は見られない。

彼等は本気だ。一切の冗談はなく、本気で殺そうとしている。

「ま、待って下さい！私達は本当に——」

「黙れよ、こんな物を持ち出してゐる時点で誰だろが知ったことか。いい加減うんざりなんだよ、てめえらのような女共に好き勝手されるのは」

「ああ、うう……………」

「恨むならこんな物騒な物を持って姐さんに近づこうとした自分を恨め」

「……………」

彼等に自分達の声は届かない。引き金に指を掛けているこの瞬間も、彼等の目は酷い程に暗い。

『俺はI-Sを、お前らを絶対に許さねえ！俺がくたばるその日まで、お前らの全部を否定してやる!!』

思い出すのは、以前彼と事情聴取を行った時に吐かれた否定の言葉。

いったい何をどうすれば彼等はこのようになってしまったのかは結局わからなかったが、最早それすらどうでもいい事だと真耶は諦めた。

——どうせ、ここで終わるのだから。

これ以上足掻いても無意味だ。今から何をやっても待っているのは『死』あるのみ。その事実絶望してしまつた彼女は諦念し、とうとう俯いてしまう。

「じゃあな」

「っ……………」

残酷な程に心の無い言葉を放ち、青年が彼女の頭に向けて撃とうとした——その時。

「やめろ」

突如、聞こえた男性の一声。その声の方向は、真耶を今まさに撃とうとしている青年の丁度真後ろだった。

彼女は、この声に聞き覚えがある。

「……………」

「あつ……………」

「なつ……………お、お前つ、はつ……………!?!」

その一声によつて周囲の人間全員がその方向へと向く。そこに佇んでいるのは頼に大きな二本の古傷に、あまり目立たない小さな傷痕が複数。そして硬い表情を持ち、右手首に古びた犬の首輪を巻いている青年——隆道が一人。

「ったく……………。こんな大人数で囲つてるもんだから『飼い犬』共かと思えば……………」

「や、柳、君つ……………」

「何であんたら二人がここに来ているのかは知らねえし、聞きはしねえ。……………それよりも、お前らさつさとソレを下ろせ。こんな真つ昼間に物騒な事してんじやねえよ、ほら散つた散つた」

「あ、あ……………う、う、え……………!!」

隆道は凶器を持つ十二人の『髑髏』を前にしても臆する事なく、しつしつと追い払う様な仕草をする。

彼女は、ここに彼が来る事を知らなかった。外出届けを出した事は知っているが行き先を知るのは千冬を含めた少人数だけなのだ。しかし、今となつては些細な事である。

良かった、助かった、ありがとうと彼女は彼にお礼を言いたかったが、絶対絶命状態から解放された為か緊張の糸が切れ、大粒の涙を流し泣いてしまった。

「うっそ……………。貴方、戻って……………!?!」

「……………本当に、お前、なのか……………? いや、だって、お前はっ……………!」

クロスボウを持つ女性と拳銃を持つ青年は、彼がここにいる事に驚きを隠せなかった。政府の人間に連れ去られ、もう二度と会う事は無いと思っていたからだ。

散弾銃を持つ青年も、壁に身を乗り出す少年達も目を見開き驚愕を露にする。

「死人に見えるつてのかわ。つか、先ずは下ろせつて——」

「待ちなよお兄さん」

「——あ?」

驚愕を隠せない大勢の『髑髏』達を尻目に彼は再度武器を下ろす様催促しようとした。しかし、近くにいた少年二人に左右から警棒を突き付けられ動きを遮られる。

その二人はここ最近『髑髏』に入ったばかりの人間だ。故に、彼の事を知らない。

「あゝた、見ない顔だな。やけに先輩達と顔見知りの様だが」

「「?!?!」」

「あつ?!ちよ、おい、やめろ馬鹿野郎つ!!!そいつは——」

新人だったが故に起こした行動。見慣れない顔や事前に知らされていない人間は警

戒しろと徹底的に教えられている為、彼等はやるべきことをこなしているだけだ。

可哀想なことに、少年二人は知らなかった。彼はここの住民だということに。

そして、何があろうと決して彼には武器を向けてはいけない事に。

青年が少年二人を止めようと呼び掛けるが——一足遅かった。

「ふんっ！」

「ぐぼお、っ!？」

先に犠牲になったのは彼から見て右側の少年。

目にも止まらぬ速さで彼が繰り出すのは強烈な肘打ち。完全に不意を疲れた少年は無防備だった腹に食らい、汚物を吐きながら大きく怯む。

彼の一撃は常人と比べ物にならない。よって少年はそれだけで行動不能へと陥るが

「邪魔だっ!？」

「がっ?!?!?!」

——彼はそれだけに留まらず左拳によるストレートで顔面へと追撃。少年は鼻血

を撒き散らし、壁まで吹き飛ばされた事により頭部を強打、気絶してしまい崩れ落ちた。それによつて投げ出された警棒は宙を舞い、彼はソレを軽快に手に取る。

「なっ!?!この——」

「遅えぞっ!」

「——どわっ!?!」

突然の事に愕然としてしまった片方の少年は出遅れながらも彼に接近するが、攻撃態勢に入る前に逆に接近され、掌打による突き飛ばしを食らう。

予想以上の強い突き飛ばしに仰け反る少年。彼はそれを見逃さず、体勢を立て直そうとする少年の頭部に目掛けて——。

「ウッラッアッツツツ!!!」

「——ばぎゃっ?!?!」

——警棒を振り下ろし、鈍い音を響かせた。

「——ひっ!?!」

「うわっ………あ………」

「ああ、くそっ………」

あまりにも衝撃的な光景に真耶は小さく悲鳴を、菜月は思わず口を覆う。目の前の青年もやっちゃったと言わんばかりに天を仰いだ。

警棒による打撃を受けた少年の頭は次第に血で染まり、立ってはいるものの目の焦点は合わずふらついている。そして――。

「そこで寝てろ」

「う、が……………あ、うっ――」

――数秒ほどふらついた後、少年は電池が切れたように膝を付き倒れた。

「え、ちよ、やつべえ……………」

「ああ、やつちまつたぞあの馬鹿共……………」

警棒で頭部をかち割られた少年は事切れたように全く動かない。その事に彼は意にも介していないのか、すました顔で黙ったままだ。

ほんの一瞬の出来事。十秒もしない内に二人の少年を沈黙させた彼は小さく溜息を吐いた後、警棒を投げ捨てて青少年達の方へ体を向ける。

表情は相変わらず硬いままだが、今の彼から滲み出ているのは言い様の無い『殺意』。

「……………お前ら、ソレを下ろせって言ってるのが聞こえねえのかよ。八つ裂きにされてえのか」

「ま、待てよ隆道、どうか落ち着けて……………。こいつらは、姐さんを――」

「下ろせって言ってるんだろがつつつ!!」

「つつ……………!!」

青年は彼の事をよく知っているのか名前呼びし、機嫌を損じないように恐る恐る弁明を凶ろうとするが、彼はそんなこと知った事ではないと怒鳴り散らす。

表情も次第に歪んでいき、目付きも人を殺さんと言わんばかりに鋭くなる彼に誰もが声を出すことが出来ない。

「ようやく少しの間だけIS学園から解放されたつてのに、どいつもこいつも周りで面倒事起こしやがって……………！そんなに血を流してえのなら俺が相手して——」

「ま、待てつて隆道……………！下ろす、下ろすつての……………！お前ら、得物を下げろ……………！」

直ぐ様真耶に向けていた拳銃を下ろし、他の仲間にも目配りで武器を下ろす様指示をする青年。

よほど彼に畏怖の念を抱いてるのか、全員が冷や汗をかいている。そこには先程までの悍しい雰囲気は一切無い。

「……………はあ。ったく、せつかくの日曜が台無しだくそつたれ」

「ああ、ちくしょう……………二人も潰しやがって。そいつらは新人なんだぞ」

「知ったことかよ。手加減はしたんだ、生きてるだろ」

「あれで加減してんのかよ……………。おい、誰か二人を運んでくれ」

青年の指示によってクロスボウを持つ少年達とは別の人間が数人ほど壁を乗り越え

て倒れた二人を運び出す。

真耶と菜月は再び驚きを露にした。まだ奥に潜んでいたのかと

二人の本日何度目かわからない驚愕を余所に青年と彼は会話を続けている。

「……………なんで止めたんだよ、こいつらは姐さんを狙ってたんだぞ。こんなものまで持ち出して」

「こいつらはIS学園の教師だ、誘拐も殺しも出来やしねえよ。それにあいつがそんな簡単に殺られるような奴じゃねえってことぐらい知ってるだろうが。何をそんなピリピリしてんだ」

「……………ここ最近、政府や学園関係者と名乗って姐さんを狙う奴が後を絶たなくてよ。この前も買い出しの時に襲われたばかりなんだよ」

「……………ああ、だからか。タイミングからして俺絡みか?」

彼は納得し、そして疑問に感じた。光乃が何度も追われたのなら彼等の行動も理解出来る。しかし、追われる理由がよくわからなかった。

既に自分の経歴は政府に知られているはずだ。なのに何故家族でもない彼女を狙う必要があるのか。

理由については政府、IS学園、その他と複雑で様々であるのだが、当然彼等は知るよしもない。

「お前が連れて行かれてからだだから間違いない。理由はわかんねえけどな」

「……………まあ、いいわ。んなことよりその拳銃、いつまで持ってもしょうがねえだろ、返してやれ」

「……………はあ」

渋々といった顔で装填された拳銃の弾を抜き、教師二人に返す青年二人。どうやらこの青少年達は彼の言うことは聞くようだ。真耶と菜月は二人の関係性について不思議に思っていた。

（お友達……………なんででしょうか）

だとしても何処かおかしい。彼は青少年達の仲間である少年二人をやり過ぎとも言える攻撃によって気絶させ、他の人間は彼に恐怖を抱いており、かと思えば青年と普通に対話をしているではないか。

ますます彼等の関係がわからない。対立してるのか、友人なのか、はたまた別の何かなのか。

「……………隆道。お前に聞きたい事は山ほどある。けどよ、今日はそれどころじゃねえんだ」

「あん？」

『飼い犬』共が彷徨っている。駅で見掛けたと治からの情報だ」

「……………!」

青年の口から出た『飼い犬』。その単語によつて彼の表情は険しくなる。

(また『飼い犬』……………)

彼も先程『飼い犬』と呟いていた。いつたい『飼い犬』とは何なのかと教師二人は疑問が尽きない。

『野良犬の巣窟』といい、『髑髏』といい、この地域はわからない事が多すぎる。

「『飼い犬』共は俺達が相手する。だからお前は家に帰れ。話は奴等を追つ払つた後だ」

「……………わかつた。おい、あんたら」

「は、はいっ!」

突然と彼に話し掛けられた為、変な声で返事をしてしまう真耶。我に返り恥ずかしさの極みに陥りそうになるが、気にしていないのかそんなこと関係無しに彼は言葉を続ける。

「あんたらに構つてる暇はねえ。さっさと帰れ」

「あつ……………えと……………」

「ここいつらに会つて思い知つただろ?ここはあんたらが来ていい場所じゃねえんだ。次は助けねえぞ」

「……………」

彼女の目的は達成していない。光乃に遭遇し、彼の事について少しでも聞き取った。

だがそれはもう叶わない。既に青少年達に学園関係者と顔を覚えられてしまった。今回は助けられたから良いものの、もし彼がここに来ていなかったら——。

「……………山田先生」

「——?!?は、はい」

「もう諦めなさい。ほら、帰りましょう?」

「……………はい」

菜月に手を引かれ、力なく返事をする真耶。これ以上は何も得られない。菜月の言うように諦めるしかないのだ。

彼女は菜月の手を借りて立ち上がり、二人は来た道に戻っていく。彼女の背中は何処か悲しげに見えた。

「いいのかよ隆道。あの女共がもう来ないなんて保証はねえぞ」

「もう来ねえよ。もし来たとしても追い返すだけにしとけ」

「……………はあ、お前って優しいよな相変わらず」

「優しくはねえだろ。こんな暴れる事しか能がないクソガキのどこが優しいってんだ」

彼は自身を優しいと評価する青年——章吾の言う事にはとても賛同など出来やし

なかった。

自分が優しい人間と思った事なんて一度もない。今まで降りかかってきた事は全て暴力で解決してきたのだ。やっている事は悪党以外の何者でもない。

「いいや、優しいさ。自分の事なんざ二の次にして他の奴等を気にかけるお前は優しい。彩ちゃんだつてお前と姐さんがいなかったら誰とも喋らないままだったんだぞ」

「……………」

「今までお前がどれだけの人間を庇ったり助けたと思つてんだ、お前自身が一番ズタボロな癖によ。どうせISS学園でもあの……………織斑一夏、だっけか？自分が年上なんだからとか言い聞かせて気にかけてんだろ」

「……………もういいだろ、この話はやめだ」

一夏はまだ十五歳だ。雰囲気からして未だに悪意に晒されてないだろうあの少年を、自分の様な人間にさせる訳にはいかない。

自分はどう、どうしようもないし、救いようがない。だから同じ人間を生まない為にも自らの身を削り、悪意を持つ相手を暴力で潰す。

決して優しさなどではない、そのはずだ。

「あのさ、二人だけで話するのやめてくれない？私達だつているのよ？」

「ああ、悪いなユツコ。話し掛けるタイミングが無かった」

「いや、その名で呼ぶ？名前呼びで良いじゃん」

「ユッコと呼ばれたクロスボウ持ちの女性——網代あじろ結衣ゆいはあだ名で呼ばれた事に不服な顔だ。せめて本名で呼んでも良いのではないかと。

「癖なんだよ、ほっとけ」

「隆道い、俺達も忘れんなってえ」

「……………俺達、蚊帳の外」

自分達も無視するなとクロスボウを背負う青年——大須おおす猛たけるは壁をよじ登り、小声しか出さない青年——井垣いがき一哉かずやは不満を露にしている。後輩達も自分達の存在感を出す為に彼に全力で手を振っていた。

「あーはいはい。猛に一哉、あと後輩達も久し振り久し振り」

「雑うっ！雑過ぎんぞコラアっ!!何まとめてんだこの野郎うっ!!!」

「……………これは、酷い」

「相変わらずですな先輩……………」

彼の適当過ぎる返事によってクロスボウを振り回す猛。一哉もこれには不満全開であり、後輩達は苦笑いだ。

二ヶ月半という短期間とはいえ、再会の挨拶がこんな雑なのはあまりにも酷すぎるだろう。

「うるせえな、無視してねえだけマシだろ。つか章吾、『飼い犬』共はいいのかよ、油売つてる場合じゃねえだろ」

「ああいけね、そろそろ行かねえと。……………隆道、また後でな」

「ん。……………ああ、そういえばよ。茶色のスーツを着た男は俺の連れだからな、手を出すなよ」

「はいはい。行くぞお前ら」

章吾は彼に軽く手を振り、他の仲間を引き連れて住宅街の奥へと消えていく。その場に残ったのは壁や地面に飛び散った血と彼一人。

「……………さっし」

遠くで待機させている護衛と合流する為、彼もその場から離れる。少年二人が撒き散らした汚物と血だけが残り、どう見ても事件現場を彷彿とさせる光景だけが残った。

しばらくして、血で汚れた通路にやって来た数人の少年。バケツやブラシ等を持っており、到着して彼等は直ぐその通路の掃除を始め出す。傍から見ればやってる事は完全にボランティア活動だ。

「あの二人は気の毒だったな。こんな事なら隆道さんの事をしつかりと言つとくべきだったか？ああ、そこもブラシ頼むわ」

「誰も予想しねえつてのあんなの。まあ、怪我也見た目より軽傷で済んでるのは流石つてところだな。ほら、ここもお湯かけてくれ」

「へいへい。あ、五百円玉見つけ」

「おい、誰かトングとゴミ袋をくれー。排水溝すつげえ汚えんだけどー」

「自分で取りに來い、この馬鹿っ」

少年達が通路の清掃をして数十分。血を洗い流すだけに留まらず、ついでにゴミ拾い等も行つた為その周辺は以前とは見違える程に綺麗となった。

『髑髏』は後始末だけでなく、住宅街の清掃も抜かりなく行うのである。

少年達がボランティア団体の如く住宅街の清掃をしている丁度その頃。

「ここが君の家か。中々良い家だね」

「……………」

一件の戸建ての前で、それを黙って見つめる隆道とまじまじと見る真吾の二人。

そう、目の前の戸建ては彼の——隆道の自宅。

政府に連れ去られ二ヶ月半という期間、戻る事を許されなかったこの家に戻ってこれた事を嬉しく思うべきなのだろうが、彼はそれよりもある所を見ていた。

(消えている……………?)

彼が注視しているのは戸建てを囲うコンクリートブロックの壁と表札。以前まで壁にあつた落書きは全て塗り替えられてあり、落書きと傷だらけであつた表札は光沢が出るほどに綺麗で疵キズ一つ無い状態となつている。

触つて擦つて見ても疵の引つ掛かりは感じなく、まるで新品の様だと感じた。

(あいつ、中だけじゃなく外もやったつてのか?)

「……………柳君?」

「んあ?……………ああ、なんでも……………せつかくだから上がつてけよ」

「僕は護衛だよ? 要人の自宅に上がり込むなんて出来ないよ。久し振りに帰宅出来たんだから僕の事は気にしないで」

「そこにずっと立つてるつもりかよ。余計気にするつての」

いくら自分が要人とはいえ、その様な扱いを受ける事には慣れていない。自宅の前で

一人待機させるのは彼でも気が引けたのだ。尤も、護衛が女性であったなら問答無用で家にながらせずに外で待機させてたであろうが。

「ここに来たからにはあんたは護衛じゃねえ、俺の客だ。俺が良いって言ってるんだから別に——」

家にかかる事を洩る真吾をどうにか説得しようとしたその時、突如勢いよく玄関扉が開かれた。

「んあ？………あ」

「——」

開かれた玄関には、一人の女性がいた。

初夏にも関わらず暑苦しい服を身に纏い、さらりとした黒のセミロングヘアは整った顔を一層際立たせる。

しかし、整った顔ではあるが寝不足なのが丸分りな程に目の下に隈が出来ていた。その目も、先程まで泣いていたからなのか多少なりとも赤く腫れている。

そんな彼女は目を見開いたまま此方を見ており、微動だにしていな

目と目が合って数秒ほど。彼女は次第に目を潤ませ、ついには涙を滴らす。

「……………たか、みち、くん」

「……………光乃——」

「——っ!!!」

彼女——光乃は彼に名前前で呼ばれた直後、居ても立つても居られなかったのか玄関から飛び出す。急接近した彼女に面食らった彼は反応が遅れ、抱きつかれてしまった。

「!?」

あまりにも突然な事に彼は思考が一瞬追いつかなかった。抱きつかれたと理解した時には既に力強く抱き締められており、彼女はとうとう泣き出してしまふ。

「あゝあゝ……………あゝあゝ……………」

「なっ!?!ちよっ、お前っ、何やってんだよ光乃っ!引っ付くなっ!ああ、泣くなっ!」

「ごめん、なさい……………ごめんな、ざい……………ごめん、なさい……………」

「……………」

「何が、ごめん、なさいだ、このっ……………!意味わかんねえぞっ……………!離れろっ……………!」

「わゝあゝあゝあゝ……………!」

思いきり抱きつかれた事によって彼女の胸はとんでもない程に押し潰されている。健全な男性であるならこの状況は眼福ものであろう。だが彼は性欲なぞ既に枯れてい

る為、この圧迫感は邪魔としか感じないのだ。

「くっそ……マジで、どっから、こんな力、出してんだこいつ……！」

「う、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！」

未だに泣きじやくる彼女を無理矢理引き剥がそうとしても、どこにそんな力があるのか一向に離れる気配がない。腕力は誰にも負けない自信があるのだが、不思議な事に昔から彼女にだけは勝てないのだった。

「あー、柳君。僕はどう見てもお邪魔の様だからどこかで暇を潰すとするよ」

「はあっ!?ちよ、てめ——」

「大丈夫。ここには僕よりも頼りになる人達がいるようだし、もしも何かあれば直ぐに駆けつけるよ。はいこれ連絡先」

そう言つて真吾は彼のポケットの中に連絡先を書いたメモをねじ込んで二人から離れる。

真吾は、自分はここにいないべきではない、場違いだと感じていた。

護衛である自分は要人の自宅前で待機するべきなのだが、この住宅街には異常な数の監視カメラ、そして住民を見守る『罫髑』が存在する。たった一人の護衛よりもずっと頼もしい。

職務怠慢だと言われるだろうが、それよりも二人の再会を邪魔したくはなかった。

「何かあった時もそうだけど、住宅街から出る時には必ず連絡してね。それじゃあごゆつくり」

「このっ、待てこらっ……………」

真吾は隆道の言葉に聞く耳を持たずその場から立ち去る。彼は追いかけてようにも、彼女にがつしりと抱きつかれた状態の為その場から思うように動く事が出来ない。

そうこうしてる間に真吾はどんどん奥へと進み、とうとう見えなくなってしまった。

「……………はあ。おい光乃、いつまで引っ付いてんだっての。いい加減離れるよ、家に入れねえじゃねえか」

「うゝゝえゝゝ……………ぐずっ……………ずびっ……………」

「きったねえ。……………ったく、しょうがねえな。おらよつと」

恐らく彼女はずっと泣いたままだろう。引き剥がす事を諦めた彼は彼女を抱えながらその場で方向転換。ずるずると引き摺りながら玄関へと向かう。

「ああもう、少しは歩けつての……………」

「えゝゝつぐ……………隆道、ぐん……………」

「あん？」

「……………おゝ帰りゝなゝさゝいゝ」

「……………ああ、——」

——ただいま。

住宅街から少し離れた場所。真吾は彼から連絡が来るまでの間、暇を潰す為に駅へ向かっていた。

「喫茶店、あったら良いな」

本来は隆道の自宅前で待機する予定だった為に暇潰しなんて勿論考えてない。

この周辺の建物はあまりよく知らないが、駅に行けば何かしらあるだろうと足を運んでいた。

（女性嫌いって聞いてたけど、あの人は例外なのかな）

思い出すは先程の隆道の光乃のやり取り。彼女の方はよほど心配していたのか大泣きしながら彼に抱きつき、彼はそれを拒絶もせずにした。名前呼びをしているところを見

ると相当信頼してるのだろう。

(邪魔しちゃいけないよね)

二ヶ月半とはいえ、強制的に連れ去られ帰る事すら出来なかつたのだ。

彼にとっては大事な時間だ。気を使わせないようゆっくりさせるべきだと、そう考えた。

(そうだ。駅で何か買ってあの公園に行こう。きっと良い景色が——)

——良い景色が見れる。そう言おうとした。

——だが、残念なことにそれは叶わない。

それは突然の事だった。

「——がっ?!?!」

最初に認識出来たのは後頭部からの強い衝撃。この瞬間、真吾は即座にこの衝撃の正体を理解した。

(殴っ………!?!?)

だが、理解した、ただそれだけが精一杯だった。意識が朦朧とする中、力なく後ろを振り向くと視界に映ったのは金属バットを持つ青年が数人。彼等は恐ろしい程の笑みを浮かべ此方を見ている。

「おおっ? すっげえ、まだ意識あんのかよ。でも残念でしたあつ!」

「——ぐあっ?!?!」

一人の青年による振り下ろしによつて再度頭部を殴られた彼は今度こそ気絶してしまふ。

(ああ、くそつ。これじゃ、護衛、失か………)

気絶する直前、彼が聞こえたのは青年達の狂った嗤い声だった。

場所は変わり、此方もまた住宅街から少し離れた場所。

「あ、貴方達………！ いったいどういうつもりなの………!?!」

その場にいるのは数人の青少年に囲まれた菜月が一人。そして彼女と同行していた真耶は——。

「いやあ、道案内とか言って騙してすみませんねえ。I・S・学・園・教・員・の・榎・原・菜・月・さ・ん？」

——スタンガンを激しく光らせながら持つ青年の足元で倒れていた。

「——?!? わ、私達を知って………?!?!」

「ああ、すみませんねえ。自己紹介が遅れましたあ。はじめまして、俺達——」

——『飼い犬』と申しますう。

第二十七話

それは、三年前のことであった。

『隆道………落ち着きなさい。話を聞くんのだ』

『何が落ち着けだくそつたれっ!!勝手に女を家に入れやがって!!しかも住み込みの家政婦?!いくら親父でもこればかりは許せねえぞっ!!』

当時の彼は、今とは比較にならない程に女性不信であり、そして既に――。

『彼女は父さんの知り合いなんだ、お前に危害を加えたりはしない。私が保証する』

『そんなの信用出来るわけねえだろうがっ!!こいつも、こいつもどうせ何時かは………ぐ………あ、あ、あ、っ………!!』

――重度のPTSDを患っていた。

『うう、ぐう………う、えっ………!あ、あ、くそっ………ぢく、しょうが………!』

『たっ隆道君!!大丈夫――』

『黙れ、えっ!!俺に近づくな、あっ!!』

彼は極度の女性不信と精神異常により、女性が接近するだけで半ば錯乱状態に陥って

柳家のリビング。それなりの大きさを持つソファの両端に座るのは、顔を両手で覆い頂垂れる光乃と、頬杖をつきながら彼女をジト目で見る隆道。

醜態を晒した彼女の大量の涙と鼻水によって彼のシャツは凄まじい事となり、当然ながら洗濯機行きだ。着替えが無ければ上半身を裸で過ごすところであった。

「あ、あの……………その、さっきのはね……………」

「つたく、会って早々よくも人の服をびしゃびしゃにしてくれたな。鼻水までつけやがって」

「え、えと……………あう」

「しかもリビングまで引つ張ってだと？元とは言え、家政婦が家主に言う台詞じゃねえだろうが」

「ひいん……………ずずつ」

玄関先でしかした醜態について弁解をしようとした彼女であったが、そんなことは彼にとって全く関係無い。歳上相手にも容赦の無い言葉を浴びせ、縮こまっていた彼女は更に小さくなる。

そう、彼女は玄関に着いても彼から離れようとはしなかったのだ。謎の力強さ故に引き剥がす事も出来ず、リビングまで引き摺った所で彼女はようやく彼から離れた。顔を真っ赤にして。

「恥ずかしいなら最初からやんなつての。耳まで赤いぞ」
「ずずつ……もう、勘弁して……」

「何が勘弁してだ。ほらティツシユ」

「……………ありがと」

未だに鼻をすすつている彼女が見ていられず、取り敢えず鼻をかめとティツシユを差し出す。それを受け取つて恥ずかしそうに鼻をかむ彼女を尻目に彼は小さく溜息を吐いた。

——『根羽田 光乃』——。

彼が十五歳——中学を卒業した日に、今は亡き父親『柳 光輝』が連れてきた女性。父親曰く光乃とは旧知の仲とのことで、以前まで勤務していた製薬会社を辞め家政婦に転職したばかりの彼女と数年ぶりに再会したという。

そしてどういふわけか、父親は当時新人家政婦であつた彼女を住み込みとして雇い柳家に招き入れたのである。隆道の容態を知つておきながらだ。

当然ながら彼はこれに反発。住み込みで働くということは、彼女と一つ屋根の下で暮らさなければならぬ。決して認める事は出来なかつた。

家事の邪魔や罵倒などで追い出す手はあつたが、それを行使すれば自身が忌み嫌う存

在と同じ部類と化してしまふ。

故に、彼は夜遅くまで外で過ぐす事にした。時には家に帰らなかつた日もある。

家にいる際は彼女を無視し、彼女が用意したであろう食事にも一切手を付けないといふ、彼が出来る精一杯の抵抗。

しかし、どれだけ石ころ同然に無視しようが彼女は諦めずに彼と接しようとした。徹底的に無視を決め込んで諦めさせても、次の日には何事も無かつたかのように接しようとしてくるのだ。彼には彼女の考へてる事がわからなかつた。

そのような生活が半年以上続いたある日。無視を続ける事に疲れた彼は彼女に聞いたのだ、これだけ無視してるのにどうして今も気にかけるのかと。すると彼女はこう言つた。

『……………助けになりたいからじゃ、ダメ、かな』

彼女は発した言葉はこれだけ。それ以上の理由は言わなかつた。その時の彼女の表情はとても哀しげだつたと彼は今でも覚えてゐる。

彼はその日以降、少しずつ彼女と接する事にした。裏切られたらその時考へればいと。

だが、彼女は決して裏切らず彼を気にかけた。彼だけじゃなく、父親にも、彼女を警戒する住民にも気にかけて、いつしか彼女はその住宅街で皆に親しまれる、なくてはなら

ない存在となった。

そんな彼女は、父親が亡くなった翌日に家政婦を退職した今でも、金はいらないと言つてまで柳家に留まっている。

何故、父親は彼女と旧知の仲だったのか。

何故、父親は彼女を雇ったのか。

何故、彼女は自分の事を気にかけてのか。

何故、彼女は家政婦を辞めても家に留まるのか。

知ろうにも、父親はもうこの世にはいない。それを知るのは、今となっては彼女のみである。

「うん、もう大丈夫。ほんとありがとう」

「ん」

「……………」

「……………」

静寂。鼻をかみ終えた光乃は何も言わず、隆道もまた頬杖をついたまま一言も喋らない。それが数分程続き、痺れを切らしたのは彼の方であった。

「……………何も聞かねえのか」

「……………」

常に此方を気にかけていた彼女のことで、色々と聞きたいはずだ。IS学園での生活はどうなのか、他の生徒達に何かされてないか、一人目の男子と仲良くなっているのか、その顔や左手に増えた傷は、その首輪はなど聞きたいに違いない。

しかし、彼女は黙ったままだ。此方が催促しても一つも聞こうとしない。

「おい、光乃——」

「お昼、まだでしょ？今用意するから待ってて」

そう言つて彼女は、何かを聞くとせせり立ち上がつて台所へ向かつていく。彼の返事を一切聞かずに。

「……………」

彼女の行動について彼は今更思うところはない。

昔からそうであつたが、彼女はISに関する事は絶対口にしないのだ。雑誌等もIS関連の物は一切持たず、テレビを見る際もISに関する情報が出た途端チャンネルを変えるか、テレビを消すか。

ISを嫌っている自分を氣遣つての行動かはわからない。もしかしたら彼女も、ISに関して何かしらあるのではないかと今でも思う時がある。

とはいえ、気にしたところでどうということはない。聞かないならそれで構わないし、自分から話を持ち出す程聞いて欲しい訳ではないのだ。

「……………二階に行ってくる」

「あ……………うん」

台所に立つ彼女に一声かけ、二階へ上がっていく。向かうはある一つの部屋。

その部屋に入ると、そこには机にクローゼット、ベットというシンプルなもの。そしてその部屋の隅には異様な雰囲気漂わせる大きめのスチールロッカーが二台。どちらも嚴重に施錠しており、もう一年以上も開けてはいない。

そう、この部屋は彼自身の部屋。自宅に帰宅した理由の一つでもある。その理由は――

「……………帰ったぞ、ハル」

彼は机の上にあるものに向けて言葉を放つ。

そこには5寸程の骨壺と、その正面に置いてある一枚の写真立て。そこに写る一匹の柴犬。

雪割草に囲まれた、その愛くるしい表情をする柴犬の写真は、彼の表情をより一層暗

くさせた。

その写真に写る柴犬こそ、かつて彼が愛した家族でかけがえのない存在。

——『ハル』——。

隆道が小学校に入る前から一緒に暮らし、家族が別たれる前も、その後も常に一緒にあつた愛犬。

非常に人懐っこい性格で、彼に対しては特に甘えていたハルは常に一緒であつた。平日の散歩は勿論、休日に遊びに行くときも、食事をするときも、風呂に入る時も、寝る時も、常に彼の隣にいた。

八年前に家族が別たれた後も常に一緒であり、彼の唯一の心の拠り所となる存在となつた。

今の女尊男卑社会によつてどんな酷い扱いを受けても、ハルの存在によつて彼は挫けず、折れずに生きてこれた。

しかし、五年前にハルはこの世を去つてしまった。それは決して病氣や、寿命などではない。

当時中学二年だった隆道は女尊男卑に染まった中学校の中で女子に服従せず、苛めにも屈しない唯一の男子だった。よって彼は常に『過激派』とも言える女尊男卑思想の女子生徒達の標的にされていた。

彼が視界に入る度にわざわざ近づいて罵り、罵倒し、時には服従させている男子を利用して彼を騙し、暴力を振るう。殆どの教師はそれを見て見ぬ振りし、時には彼女達に荷担する。それは最早、苛めを通り越した何かであった。

これだけの扱いを受ければ常人なら完全に心が折れ、服従の道を辿るのだが――。

『あなた、自分が騙されたことにまだきづかないわけえ!? うけるう!!』

『ゲホツゲホツ……………はんっ』

『……………は? 何よ、今の笑いは』

『ぐ……………。うけるのは……………お前らの方、だ。こんな……………こんな事で、俺が、お前らに従うとでも……………思ってたの、かってな……………』

『ハ、ハの……………!』

——彼は、決して折れる事は無かった。

どれだけ罵られようが、虐げられようが、暴力を振るわれようが、彼は我を貫き通した。

何をしてもし彼は折れない。そんな彼の心を折る為に、壊す為に、彼女達は人として最悪な手段を取る事になる。

彼は学校に帰った後必ず犬の散歩をする事で周囲に知られていた。

彼女達は、事もあろうにその愛犬に目を付けた。

犬と散歩中であつた彼を、従える男子達と共に待ち伏せ、袋叩きにし、そして彼の犬を——。

——殺した。それも目の前で。

大勢の人間に押さえ付けられた彼は、鬨り殺しにされる光景を見せつけられた。

彼女達は彼の心を折る為に、壊す為に、服従させる為だけに彼の愛犬を殺したのだ。

結果的に言えば、彼女達は彼の心を折る事は出来た。壊す事は出来た。

虐げられた事によって溜め込んでいた数多くのストレスと愛犬の死によるショックによつて精神が崩壊。彼の心は完全に碎かれ、黒であつた髪も全て一日で真っ白となる。

そう、彼を壊してしまつたのだ。

その翌日。彼女達は報復を受ける事になる。

血の涙を流し、白く染まった髪を靡かせる、彼の全身全霊の報復を。それも平日の学校内で。

報復する人間だけでなく、彼を止めようとした生徒も、今まで見て見ぬ振りをし、時には荷担していた教師も巻き込んだ見境なしの暴力。

勿論、彼は抵抗を受けた。バットで殴られ、ナイフで刺されたりもした。それでも彼は止まらない。止められない。

悲鳴や怒声が飛び交う中学校。心身共に傷だらけになった彼の報復と言う名の暴力は、教室が血塗れになっても続いた。

その後、警察の介入により事態は終息する。そして、徹底した取り調べによりその学校で起こっていた数多くの苛めが発覚。荷担していた殆どの教師は世間から姿を消し、彼の中学校は廃校となった。

その中学校で発生した負傷者の数——。

軽傷者六名、重傷者三十八名――。

――意識不明の重体者二名。

「……………」

写真立てと骨壺をじつと見つめながら自身の頬を撫でる彼。その古傷は、ハルを殺した人間を報復した際の抵抗によって出来たものであった。

「……………次来れる日は何時かはわからねえ。もしかしたら、もう来れねえかもしれねえ」
当然、それに返事はない。しかし、彼はまるでそこに愛犬がいるかのように言葉を続ける。

「お前を連れていきたいけどよ、そのままの姿で連れて行きたくねえんだ。だからさ――

「
」
そう言つて彼は骨壺を持ち上げる。それを大事に抱えながら、部屋を出ていった。

昼食を終え、ソファで寛ぐ隆道と光乃。二人はIS学園に関する事には触れずに雑談をしていた。

「ハルの事だけだよ、本当にそいつは信用出来んのか」

「うん、私の知り合いだから間違ひはないよ。他の所だと半年も掛かつちやうけど、技術も高いし最優先にする様言つておいたから………だいたい一ヶ月かな」

「ふーん。まあ、早いならそれでいいわ」

昼食を取る直前、彼は彼女にある事を頼んだ。それは亡き愛犬と今後とも一緒になれる方法。

その方法は本来ならば約半年程の時間を要するが、彼女の知り合いの手に掛かれればたった一ヶ月で済むとのこと。

「いったいどんな知り合いだよと突つ込みたくなつた彼であったが、愛犬と早く一緒になれるのであればどうでもいいかと突つ込むのを止めた。

「それとき、外の壁塗り替えたのお前だろ。よくあそこまでやったよな」

「ああ、本当に大変だったなあ。何度塗り替えても落書きされるし、窓は割られるし。降道君がいなくなつてからは特に酷かつたよ？ 変な脅迫文もぎつしり送られたんだから」
『過激派』も『飼い犬』の連中も暇人だよな、わざわざ深夜に来てまで悪戯してんだからよ。やる事が小せえといふかなんといふか……」

「監視カメラは何度も壊されるし、もう散々。面倒になつちやつたから壁の表面は加工して、窓は全部強化ガラスにしちやつたからもう悪戯なんて効かないよ。今は章吾君達
が深夜も巡回してるから悪戯はすっぱり無くなつちやつたけど」

「どつちにしろ悪戯した奴等は二度と来ねえだろ。彼奴等が報復してるだろうしな」

悪戯については、今までの喧嘩によつて病院送りにした人間達の報復だ。再び挑んでも返り討ちに遭うのだから、出来ることは小さな嫌がらせ程度しかない。彼がいなくなつて以降酷くなつたといふことは、タイミング的に彼がISを扱える事が許せない人間達の仕業だろう。

尤も、彼が言うように悪戯をした人間は『罫髑』の報復を受けており、全員が病院送りとなつてゐる。命知らずで無い限り再び悪戯する事はない。

「あ、そうそう。はいこれ」

「あん？」

何かを思い出したのか、彼女は懐から一つの携帯を取り出し彼に渡す。それは以前、

適性検査の時に紛失した物とは別のタイプであった。

「荷物を送った後にね、章吾君が携帯を見つけてくれたんだけど壊れちゃって……だから新しく用意しておいたよ。皆の連絡先だけ入ってるから」

「……………金は——」

「いらぬ。四月中に送るつもりだったんだけど、ここ最近外出しにくくて……………」

「……………別にいいさ、そこまで困ってた訳じゃねえし。……………本当に金は——」

「だからいらぬってば。貯金はたんまりあるし、一応収入源もあるから」

携帯だつて決して安い訳じゃない。金は払うと言おうとした彼であつたが、またしても払わなくていいと言われてしまう。彼女の懐事情はどうなつているのだろうか。

「ああ、わかつたわかつた……………ふう。ちよつと外ぶらついてくるわ」

「え……………。ま、待つてよ、今外には——」

『飼犬』がいる、だろ？住宅街から出るつもりはねえし、彼奴等が上手くやつてくれるだろ」

正直、家にいるだけというのも退屈だ。ここには娯楽は一つも無いし、今の時間帯の番組など興味が無い。

『飼犬』の件で心配する彼女であつたが、昼間であればこの住宅街にはそう簡単に入つてはこれない。仮に来たとしても『髑髏』の餌食になるだけだ。

何も心配はいらないと彼は言うが、それでも彼女は彼が心配で堪らない。

「……………じゃあ、私も一緒に——」

「ダメだ」

「ど、どうして?!?」

「自分の顔をよく見てみるよ……………!」

そう言つて彼は彼女の顔を指差す。その時の彼の表情はいつも通りの無表情であるが、何処か心配そうにも見えた。

「光乃。お前……………全然寝てねえだろ、目の下の隈がマジでひでえぞ。最後に寝たのは何時だか言つてみる」

「うっ……………だ、大丈夫だよ! 私は——」

『『一日を三十五時間生きる女』……………なんて言うんじゃねえだろうな』

「——え? あ、え……………え?」

彼が遮つた言葉によつて彼女は何故か焦り出す。その焦り具合は流石の彼も困惑し

た。

「あ……………？どうした、何焦ってんだよ」

「あ、いや、えと……………。そそ、その、三十五時間生きる女って……………？」

「……………別に、どうだつていいだろ。んな事より何時寝たかつて……………。光乃？おい光乃っ！」

「えっ、あ、あつ、な、何っ？」

何故か彼女はかなり動揺している。つい先程までは目の隈以外は平気そうな面だったが、今は息も荒く目の焦点も合わなくなっていた。

彼女の様子を見て、流石にこれはまずいのではと彼は不安に駆られてしまう。

「どうしたんだよお前……………。寝不足で頭イカれちまつてるじゃねえか……………。それに章吾から聞いたぞ、変な奴に狙われてるんだつてな。そんな奴を外に出させる訳にはいかねえよ」

「あ、あう、えう……………」

彼女が狙われてる事は既に聞いている。ならば外に出す訳にはいかないのだ。それに、寝不足からなのか先程から明らかに様子がおかしい。寝させるべきだと彼は考えた。

「寝たつて誰も責めねえから。光乃が頑張つてる事は皆知つてるから。マジで寝とけつ

て。な?」

「……………うん」

「心配すんなよ。せつかくの日曜なんだし、仮に『飼い犬』に遭遇してもさっさと逃げて帰るさ。んじや、行ってくる」

「……………うん。行つて……………らっしやい」

彼は彼女に手を軽く振つてリビングを後にする。一人になった彼女は時間が経つにつれ、次第に動悸が収まっていっていった。

完全に落ち着いたその瞬間、それまで無かった睡魔が彼女に襲い掛かる。

「……………んう」

眠気が限界に来てしまった彼女は身体を倒しソファ―に寝転がる。そしてそのまま眠りについた。

住宅街内の小さな公園。隆道は住宅街を一通りぶらつき終わり、休憩がてらそこにあ

るベンチで寛いでいた。

「……………」

見慣れた光景ではあるが、警戒態勢に入った住宅街はやはり静かだ。日中にも関わらず鳥の鳴き声すら聞こえないそれは、初めて訪れた人間にとっては不気味過ぎると評価するだろう。

『おかけになった電話をお呼びしましたが、お出になりません』

「……………あの野郎、何で出ねえんだよ」

手元の携帯から発せられるアナウンス。ぶらつくついでにコンビニでも行くかと思いい、住宅街の外へ出る為に護衛に何度も連絡を取っているのだが一向に出る気配が無かった。

住宅街から出るときは必ず連絡しろと言っておきながらこの仕打ち。これでは連絡の意味が無いではないか。

「あー、どうすつかない」

その気になれば一人で外に出る事など容易い。別に『飼犬』を恐れてる訳ではないのだから。

しかし、相手をするのも面倒というのも確かだ。遭遇したら間違いない●ル鬼ごっこor大乱闘スマ●ラが始まる。せつかく手に入れた日曜の外出でそんな事は可能な

限り避けたい。

家に戻る手もあるが彼女は今頃寝ているかもしれない。もう少しばかりぶらつくかと立ち上がった、その時。

「はあつはあつ……………隆道お兄ちゃん!!」

「あん?……………おお」

声のする方へ目をやると、公園にやって来たのは息を切らしたフード被りの女の子。彼女は目が合うや否や、真つ直ぐ走り向かい彼に抱きついてきた。

「会いたかった!…すっごい会いたかった!」

「おっと……………。彩ちゃんじゃねえか、何で外に出てんだ。家から出るなって言われなかったか?」

「あ……………その……………皆から隆道お兄ちゃんが帰ってきてるって聞いて……………それで……………」

「……………まあ、別にいいさ。ほら、外は危ねえから家に——」

言い切る前に腹の鳴る音が聞こえる。その音の出処は顔を赤くさせた彼女から。

「うう……………」

「……………飯食ってないのか。親父さんは?」

「お父さんと一緒にお昼買いに行くつもりだったんだけど、『飼い犬』がいるからって

……」

「……………コンビニ行こうか」

先程まで外へ出ようか考えてた所だ。『飼い犬』の存在が懸念されるが、目を付けられたら彼女を抱えて全力で逃げれば良い。彼はそう考えたのであった。

住宅街から少し離れたコンビニで買い物を買ませ、帰る最中である隆道とお菓子を頼張る彩。手を繋いで歩く二人は、端から見れば歳の離れた兄妹だ。

「あの、隆道お兄ちゃん。お金……………」

「さっきも言ったけど気にすんなよ。さっさとそれ食べな」

「……………ありがとう」

彼女とその父親の昼食だけでなく、二人の夕食の分とお菓子も購入。彼女は財布を持っていないので、当然支払いは彼だ。

（『飼い犬』共は……………いねえな）

警戒はしてるが周囲を見渡しても人は見当たらない。元々人通りが少ない道だ、誰かいるならば直ぐに気づく。

恐らく彼等が既に対処してくれたのだろう。これだけ静かであれば周囲に『飼い犬』

がない事は明白であつた。

(杞憂だつたな……………)

数百メートルも歩けば住宅街だ、そこまで行ければ何も心配する事はない。

そう、そこまで行ければ何も心配は無かつた。

(お?車なんて珍しい……………)

人通りだけでなく、車通りも非常に少ない道路の前方から見えるのは一台のハイエース。余程急いでるのだろうか、中々速い速度で走っている。

珍しい事もあるんだなと眺めたその車は二人の隣に差し掛かつた所で——突然急停止した。

「——つ!?!」

急停止したその車からは青年が次から次へと降り、あつという間に二人を囲む。その数六人。五人はスタンガンやバットなどの凶器を持ち、一人は見たことのある拳銃を

持っている。

「あ……………あ……………」

「てめえら……………!?!」

「こんにちはあ、隆道さん。ようやく会えましたねえ、待ちくたびれましたよホント」
「『飼い犬』……………!!」

——『飼い犬』——。

現代——女尊男卑社会によって女性に媚びる道を選んだ、男性の末路の一つ。

完全に女性の言いなりと化し、横暴にも逆らわず、利用され、いずれ棄てられる。それが彼等の総称、まさに『駒』や『奴隷』である。

彼等は自分の主である女性——『飼主』の言うことには逆らわない。逆らえない。逆らってしまったら二度と社会には出られない、そう刷り込まれているのだ。

そして、利用されるのは何もパシリといった小さな物事だけではない。

彼等に悪事を働かせる場合も存在する。

『飼主』が気に入らない、邪魔だと思つた人物に向けて『飼い犬』を放ち、嫌がらせ、窃盗、暴行をさせたりするのだ。勿論、自分に足が付かないよう逃げ道を作つて。

自分の手は汚さずに駒を使つて暴力を行使する。やっていることは畜生以外何者でもない。

更にタチが悪いのは、それを面白がつて悪事を働く『飼い犬』もいるということ。暴れたいから、金が欲しいからと理由は様々だ。

やむを得ず服従する者と自ら志願した者の二種類に別れる『飼い犬』。隆道の前に立ちただかるのは——後者だ。

(ああ、くそつたれっ！狙いは俺だったって事かよ！)

目の前にいる『飼い犬』は、以前からこの住宅街に住む住民を標的にしていた。だが、青年の言葉によつて今回は自分だけが標的だと確信する。

「『罫體』に見つかる前に済ませたいんでねえ。一緒に来てくれますう？」
「素直に聞くと思つてんのかよ」

「これ見てもそう言えますかね？」

——。そう言つて青年は携帯を取り出し、一枚の画像を見せる。そこに写つていたものは——

「……………!?!」

「この三人、関係者ですよねえ? 来なかったらどうなりますかねえ。あ、警察や『鬪體』に知らせてもアウトですからねえ」

——そこに写っていたのは手足を縛られた真耶と菜月、そして護衛である真吾の三人。真吾に関しては殴られたのか頭から血を流していた。

三人は人質だ。護衛との連絡が取れないのはこういう事だったのか。そして同時に、何故拳銃を持っているのかも納得した。それは教員から奪った物だったのだ。その事実に彼は歯を食いしばってしまふ。

「くっ……………狙いは俺だろ。なんでこんな回りくどい事すんだ」

「……だと『鬪體』も相手にしなきゃなりませんしい、直接あんたの事を髑り殺しにしたって人がいるんでえ」

「……………」

「あらあ? これでもダメですかあ。それじゃあその子も——」

「あつ!?! や、やだあつ!?!」

青年は拳銃を持つ青年に目で合図をし、怯える彼女を引つ張り彼から引き剥がす。彼等は女の子すら利用しようという更なる外道の道に走ったのだ。

これが、この後起こる大惨事の引き金となる。

「オラアツツツ!!」

「どばあっ!」

「きゃっ!」

彼女を人質にしようとした青年の腹に向けて彼は蹴りを放った。吹き飛ばされた事により隙間が出来、その瞬間を見逃さず彼女を抱えてその隙間をすり抜ける。すり抜けたと同時に彼女に荷物を全て渡し突き放した。

「たっ隆道お兄——」

「走れえつつつ!!」

「——っ!」

彼の叫びを聞き、彼女は直ぐにその場から走り去る。住宅街まで一直線に走っていけばもう追われる事は無い。

「ハ、ハ、この野郎っ!」

「——っ!?!」

振り向くと青年が此方に拳銃を向けている。既に引き金に指が掛かっており、撃たれる事は確実だ。

距離は離れている。避けたら彼女に当たる。飛び掛かっても間に合わない。自身の拳銃を取り出して直ぐには撃てない、よって先に撃たれる。ではどうするか？

「させるかあっつつっ!?!」

彼は物を投擲した。それは携帯や財布などではない、もっと硬くて丈夫な物。

あろう事か、なんと彼は自身の専用機『灰鋼』の待機形態である首輪を投げたのだ。

「おわっ!?!」

全力で投げた首輪は拳銃に当たり、見事弾く事に成功する。幸いにも当てた衝撃で発砲される事は無かった。

「や、やっべ」

「お、おいつ!?!誰か連絡を!?!」

「んなことより——おい、前、前っ!？」

「ああっ!?!あ——」

全員が弾き飛ばされた拳銃に注意を反らしてしまった為に気づくのが遅れてしまった。

「覚悟しろてめえら」

彼が目の前まで接近していた事に。

住宅街からある程度離れた廃工場。森林に囲まれた辺境とも言えるその建物は、今日に限っては廃れているとは思えない程賑やかであった。

「……………」

その工場内では青少年が数多く屯しており、その隅には囚われている教員と護衛の三人。真耶はスタンガン、護衛の真吾は頭部の打撃によって今も尚気絶している。唯一意識があるのは菜月ただ一人。

(今日は厄日ね……………)

派手に騒ぐ青少年達を眺める彼女はつい溜息が出そうになった。

『鬪體』に襲われ、助かったと思いきや『飼い犬』と呼ばれる集団に拉致される。厄日と言わずなんと言えるのか。

(何が女は強いよ……………。広めた奴をひっぱたいてやりたいわ)

身につけた護身術も全く役に立たない。一人ならば何とか出来たであろうが、気絶した真耶を人質に取られたらそんなものは無意味だ。自分は守れても他者を守る事など出来やしない。

そんな無力な自分に対し悔やんでいると、此方に近づいてくる大男が一人。身長は二メートル程で顔は傷だらけ。その手には奪われた拳銃が握られている。

「もうしばらく待つてくれよお？ 仲間が隆道の野郎を連れてくるまでの辛抱さ。終わったら楽に殺してやるからよお」

「こんな事無意味よ。彼にとつて私達は人質の価値なんて無いのよ……………?」

「失敗したらそれでいいさ、その時はお前らが死ぬのが早くなるだけ。他の手段はいくらでもあるんだよ」

「……………」

狂った笑みを浮かべながら佇む大男は此方に拳銃を向ける。迷う事なく引き金に指

を掛ける辺り、殺しに躊躇など無いのだろう。

「今日こそあの野郎を殺す。その為に武器もありったけ用意してたんだからな。例えば

——」

「——っ!?!」

「——コレとかなあつ!ははあつ!!」

そう言つて大男が笑いながら後ろから取り出した物は、なんと猟銃——上下二連散弾銃。それを担ぐ大男の姿は、まさに鬼が金棒を担ぐ様であつた。

「な、なっ……………!?!」

「ちなみにコレは一丁だけじゃねえぞ?全部で四丁だ。ああ、早く蜂の巣にしてやりてえ」

あまりにも殺意に満ちている。ナイフ等の凶器処か、散弾銃など殺す気満々ではないか。

だがしかし、まだ手はある。彼が殺されない確実な方法が。

「か、彼はI Sを持つてるのよ!?!そんなもの通用なんて——」

「んな事知つてるつつうの。……………これ、なんだかわかるかあ?」

「っ!?!そ、それは!?!」

『剥離剤』^{リムーバー}つつうの?なんでもI Sを強制解除させる装置らしくてよお。ついでにI S

を奪えって言われてんだよなあ」

大男が懐から出したソレは、四本の脚が付いている機械。国家最高重要機密の一つとして存在する——『存在しない兵器』。

——『剥離剤』——。

展開した I S に取り付き電流によって相手を捕縛、強制解除させてコアのみの状態にする『対 I S 兵器』の一つ。

一度使った機体には耐性によって二度と使用出来なくなるが、その性能は充分。一時的ではあるが確実に相手を無防備にする事が出来る。

「あ、貴方、どこでそれをつ!? 誰に言われたの!?」

「教えると思ってるのかあ? わざわざ口に出すのは馬鹿のすることだ」

「う、うう……………」

非常にまずい。このままだと彼は確実に殺されてしまう。しかし、自分達は囚われの身だ。出来る事など一つもありはしなかった。

「さて、そろそろ定時連絡が……………お?」

大男が呟いたその時、携帯の着信が鳴り響く。その出処は大男のポケットから。

「どれどれ、成功したか失敗したか一緒に聞こうじゃねえかあ。なあ?」

「う……………」

嘲笑う大男は携帯をスピーカーフォンに切り替え彼女にも聞こえる様にする。この瞬間で彼女達が早く死ぬか、遅く死ぬか。全てが決まる。

「俺だ」

『ごっごぼおっ……………か、春日^{かすが}……………ざん……………』

「あ? どうした? 失敗したかあ?」

『い、いえ……………。五人、やられましたけど……………隆道、を……………捕まえる事が、出来まじだ。流石のあいづも、拳銃には……………敵わながった、様で……………今は気絶、中でず……………』

「ああつ、そんな……………」

彼女は絶望してしまった。隆道が彼等に捕まってしまった事に。

「おおつ!! そりやすげえなつ!! とうとう倒したのか、あいつをつ!! つかお前、大丈夫か?」

『ええ、なんどが……………。今から……………連れて、行くので……………もうしばらく、待つで、下さい……………』

「おうおう、待つてるぜえつ!……………と、いうわけだ。良かったな、少しだけ長生き出来るぜえ? はつはあつ!!」

彼女に大男の声は聞こえはしない。彼女の頭のは、真つ白になっていた。

葉月が絶望に染まっているその頃、住宅街付近。

そこで見えるのは死屍累々とした光景。その真ん中に立つのは――。

「あ、あ、はあ………。ご、ごこれで………。いい、良い、ですが………」
「ああ、ご苦労さん」

――返り血を浴びた隆道が一人。周辺の地面や壁は血が飛び散っており、地面には六人の青年が倒れている。その者達は指が無くなっている者、手足が逆方向に曲がっている者、眼球を抉り取られた者、歯が全て折れている者だつたりと目を背けたくなる様だ。

そう、彼は捕まってなどいない。六人全員を倒し、意識が残っている青年に電話を掛けさせていたのだつた。自分が捕まつたと報告するように。

「しっかし…………春日もしつけえなホント…………。こりや根徹底的にしねえとダメか……………」

「も、もう…………止めで、ぐれ…………。ご、これ以上、は…………し、死んじま——」

「ヴラアツツツ！」

「ばぎよつつつ?!?!?!」

彼は命乞いをずる青年の顎に目掛けて渾身の踏み付けで止めを刺す。短い悲鳴と共に顎は完全に砕け再起不能。この青年は大掛かりな手術でもしない限り食事は満足に出来ない。

「……………はあ、ったく」

足元に転がっている首輪を拾いながら溜息を吐く彼。その表情は何かを決意した顔つきだ。

電話を掛けさせる前に人質の居場所は聞いた。『飼い犬』の人数、そして奴等が持つ武器も聞いた。よって彼が起こした次の行動は——自宅に戻る事だった。

自宅戻った隆道。彼はあるものを取りに一直線で戻って来ていた。

それがある場所は自分の部屋だ。脇目も振らずに颯爽と二階に上がろうとしたのだ

が、つい立ち止まってリビングに目がいつてしまった。

「……………光乃？」

リビングに足を運ぶとソファで眠る光乃の姿があった。深い眠りにいるのか、起きる様子は無い。

「すう……………すう……………」

「……………毛布くらいかけろって」

小さく溜息を吐きつつ、近くに畳んであった毛布を彼女に優しくかけた。眠る彼女を起こさない様、静かに二階へ上がって自室へ入る。

「……………上等じゃねえか。そっちがその気ならよ」

目の前には、嚴重に施錠してある二台の大きなスチールロッカー。鍵はとうの昔に捨てた為に分ける事は叶わない。——素手ならば。

「……………部分展開」

咄くと同時に右腕が装甲に包まれ、その腕の動作確認をした後に鍵を耂り取り抉じ開ける。そこに仕舞っていたものは、以前まで使っていた物や襲ってきた輩から奪った数々の道具。

それらを全てポストンバッグに仕舞い、部屋を出て玄関へと向かう。

「……………」

玄関に足を踏み入れる直前、足を止め光乃が寝ているリビングに向けて一言。
「……………じゃあな」

そう一言だけ告げ、家を出ていく。周囲を見渡して『灰鋼』を再び展開し、彼は独り言を呟いた。

「さて……………早速試してやろうじゃねえか」

彼が向かう先は——。

『幽霊犬』

——対 ■ ■ 光 ■ ■ 『幽霊犬』 起動——。

時は少し経ち、廃工場。大勢の『飼い犬』達は凶器を携えながら隆道の到着を今か今

かと待ちわびている。

「……………」

それをただ黙って見る事しか出来ない菜月。この危機的状況を切り抜け様にも、真耶と護衛は未だに気絶中だ。脱出する方法があつたとしても、二人を見殺しにするなど到底許せなかつた。

それに、仮に三人とも脱出したところで隆道が殺される未来は変わらない。完全に詰みである。

「あいつを好きなかだけ翱れるんだろ？早く来ねえかなあ」

「指全部ぶつた斬ろうぜ。両手両足全部よお」

屯する彼等は先程から物騒な会話しかしていかない。余程彼に恨みを抱いているのだろう。でなければあの様な事は口にしないはずだ。そんな会話を聞かされている彼女はもう、嫌になつていた。

耳を塞ぎたくなる様な会話を延々と聞かされてる最中、あの大男が再び彼女達に近づいて来る。

「おい女あ。もう少し、もう少しであの野郎が来るぞお？しつかりと見とけよお？」

「……………」

「ああ、黙りか。何考えてるか知らねえが無駄さ、お前らも終わるんだからよ」

大男の言う通り、何を考えても無駄だ。もう自分には何も出来やしないのだから。
(お願い……………。誰か……………助けて……………)

結論から言うと彼女達は助かる。一人の人間の手によつて。

だが彼女達を助けたのは、決して正義の味方などではない。

全ての敵を血祭りにする、狂いに狂った狂犬だ。

彼女が助けを願ったその時。乾いた音が二回響いた。

「……………あ？なんだ、今の音」

その音によつて青年達は気付き、騒ぎが一気に静まる。音の出処は———廃工場の外。

「外？誰かいたか？」

「見張りが二人いたな。誰か見てこいよ」

「んじや俺が」

一人の青年が外の様子を見ようと工場の大扉の前に進む。扉を開けよう手を伸ばしたが、何故かその場で止まった。

「おい、どうした？」

「いや……………なんだこの音？なんかこつちに近づいて———」

青年が扉に耳を近づけたその時———。

「ごぼつつつ?!?!」

———『何が』が扉をぶち破つて現れた。

「「「「「?!?!?!」」」」」

!?!?!?!

その『何か』は一台の『車』であつた。

車は扉の前にいた青年を撥ね飛ばし、そのまま集団へと突き進んだ。突然の事に愕然とした彼等はこれに反応出来ず、半分以上が次々に撥ね飛ばされる。そして愕然としたのは——大男も例外ではない。

「なっなんだそれ——」

時速百キロにも及ぶ速度で突っ込み大勢の青年を撥ねたその車は大男に向かって一直線。真正面から撥ね飛ばす。

「どばあっつっつ?!?!」

大男は撥ね飛ばされた事により後方へ吹き飛び壁に叩きつけられるが、車は留まる事を知らない。そのまま大男に向かって突き進み、大男を巻き込んで壁に激突。そのまま壁を突き破り、大男と車は壁の奥へと消えていった。

「あ、え……………え……………」

何が起こったのか、菜月には一瞬わからなかった。突然静かになったと思いきや、いきなり車が現れ、十人の青年と大男が宙を舞う。状況を理解出来たのは、多くの悲鳴が聞こえた直後だった。

「あ……………おっ……………」

「な、何だよ今の!?!」

「つ、突っ込んで来た!?!つか、あの車は見張りの奴のじゃねえか!?!」

「あ、足いつ!?!俺の足いいいつ!?!」

一瞬で出来上がった地獄絵図。転げ回る青年、ピクリとも動かない青年、状況を理解し腰を抜かす青年と様々。

いつたい誰がこんな事をと菜月は探ろうとするが——それは直ぐに判明する。

「やった奴は外にいるはずだ!!探し——だあつつつ!?!」

一人の青年が外へ向かおうとしたその時、突然吹き飛ばされる。その青年の肩には——深々と金属の矢が突き刺さっていた。

「や、矢……!?!なん——」

——瞬間。風を切る音。

「——でえつつつ!?!」

また一人の青年が悲鳴と共に吹き飛ばされる。彼もまた金属の矢が突き刺さっていた。

「ま、まさか………髑——」

「よお、飼いだ共」

「ひっ!?!」

ドスの効いたその声に辺りは一気に静まり返り、誰しもが息を止めた。全員がその声の方へ顔を向けるとそこには一人の青年。

「は、はあっ!?!おま、隆、道……………!?!」

全員は驚愕を隠せなかった。そこにいたのは予想外の姿をした予想外の人物だったからだ。

その青年が身に纏うのは、疵の付いた黒のレザージャケットと、口元には古びた『髑髏』のフェイスマスク。

大型のマチェットにフルサイズのコンパウンドクロスボウを背負い、脇のホルスターには拳銃。

そして彼の右手には——上下二連散弾銃が携えていた。

「お、お前……………!?!」

「……………この格好は一年ぶりなんだ。せつかくだから名乗ってやるよ」

扉に佇む青年——隆道はゆっくりと足を動かし、驚愕によって固まる青年達に近づ

いって行く。

「IS 操縦者育成特殊国立高等学校、一年一組三十番、柳隆道。そして、『髑髏』の頭目」
「う、うっそだろ……………」

「まあ、こんなものでいいか。……………取り敢えずてめえら——」
名乗りを終えた彼は一変、異様な程の目付きへと変わっていく。その右手に持つ散弾銃を——。

「——これでも食らつとけえつつつ!!!」

——青年達に向けて容赦なく発砲。構内に銃声が鳴り響いた。

第二十八話

時間は少し遡り、隆道が住宅街から姿を消した丁度その頃。住宅街付近の人通りが少ない道路には『髑髏』の集団がいた。

「うわつ、顎がすげえ事になってる……こいつはダメだな。そつちはどうよ」

「歯あ無えから無理だ。ホント、何をどうしたらこうなるってんだよ」

そこに集まる十数人の青少年は何かを囲っている。隙間なく密集している為、そこで何をしているのか判断は出来ない。

その集団から距離を離している一人の青年——章吾は光乃に電話をかけていた。

「姐さん、やつぱり隆道は……」

『電話に出てくれないの……！　部屋を見たらずつと開けてなかったロッカーが抉じ開

けられてて、中身が……！』

「ああ、くそつたれ……！　あのやろ……！」

『ああ、どうして……！　こんな事なら無理にでも一緒にいれば……！』

彼女は酷く取り乱している。息は電話越しに聞こえる程に荒く、時折鼻をすする音も聞こえる事から相当酷い顔をしているのだろう。その表情を想像するのは容易であつ

た。

隆道に言われた通りに一眠りした彼女は先程起きたばかり。心配するなど言われたものの、やはり心配になり彼に電話をかけたのだが一向に出てはくれなかった。

何度かけても繋がる事はなく、最終的に電源が切られてるといふアナウンス。彼女が異常を察した頃に丁度良く章吾から電話がかかり、そして今に至った。

『はあ……はあ……探さなきゃ……！ 隆道君を……隆道君を探さなきゃ——』

「落ち着けてつて姐さん！ 家から出るなつて言つたばかりじゃねえか！」

『だ、だつて……だつて……！』

「俺達が探すから姐さんは待つてろ！ 見つけて、絶対に連れて帰つて来るから！ な

!？」

『あ、あ、……う、え……』

隆道を探そうとする彼女を必死に宥める章吾。険しい表情をする彼は今にも怒りが爆発寸前までに達していた。

住宅街を巡回中に突然掛かってきた電話。その相手は家に帰らせたはずの女の子——
— 彩。何かかと思ひ電話に出ると、それは彼等が動くには十二分な内容であった。

—— 隆道が『飼い犬』に襲われた。

彼女に事の詳細を聞きながら大急ぎで現場に向かうと、そこには一台の車と死にかけの青年が六人。血だらけになったその通路に彼の姿は無かった。

彼の姿は見えない、本人から襲われたと連絡も来ていない。章吾はもしやと思い光乃に電話を掛けたのだが——彼は不在、電話にも出ないと聞いてその予想は的中した。

彼が『飼い犬』達に襲われた事、その人間が重傷を負っている事。姿を消した彼と、彼の部屋にある挟み開けられたロッカー。この事から一つの答えが導き出される。

(一人でおっぱじめるつもりかよ……！)

彼は武器を手に取り、『飼い犬』の居る所へ向かったのだ。殲滅する為に、たった一人で。

「とにかく家から出るんじゃないぞ！　また連絡する！」

『ま、待つて章吾く——』

章吾は光乃の返事を聞かず一方的に電話を切り、舌打ちをしつつ集団の元へと近づいていく。彼を見つける為には情報が必要だ。幸いにもここには彼の行き先を知っている人間がいる。

「結衣。お前の後輩何人か姐さんの所へ向かわせてくれ。いつ飛び出すかわかったもんじゃねえ」

「もう向かわせてるわ。こういう時は女同士が適任だしね」

「毎度のことながら手際良いな。……さて」

章吾は結衣の手回しに感心しつつ集団の隙間を通り抜け、その中央へと向かう。そこには隆道に返り討ちに合い重傷、又は重体となった『飼い犬』が六人。その光景は酷く痛々しく、今すぐにでも応急手当てをするべきなのだが――。

「どうよ、意識のある奴はいるか？」

「五人は全然ダメですね。てか、起きたとしてもこれじゃ喋れないかと。比較的マシなのはこいつだけです」

「そうか。……とつとと起きろオラアツ!!」

「ごっばあつ?!?! あゝぎつ……!?!」

――彼等には知ったことではない。

怒声と共に転がっている青年一人の腹を思い切り踏みつける章吾。青年はその蹴りによって意識が戻るが、身体中の痛みによって悶え始める。

その様子を眺めていたいと思う彼であったが、隆道の行方を知る事が最優先だ。

「よお、くそつたれ。目え覚めたか？」

「げぼつ……つ!?! ど、髑髏……!?!」

「喋れそうだな。おい、得物貸せ」

「へん」

章吾の一声によつて集團の一人がピストルタイプのクロスボウを取り出し、それを受け取つた彼はそのまま血塗れの青年へと向ける。怪我人といえど容赦はしない。

「ひっ?!」

「知つてる事全部吐け。吐かねえと二度と歩けねえ身体にすんぞ」

淡々と物騒な事を言い放つ彼はクロスボウを青年の目と鼻の先まで近づける。そこには情けなど一切存在しなかつた。

そして、時は進み――。

「――これでも食らつとけえつつつ!!!」

「ぎゃあつつつ?!?!」

始まりは隆道の散弾銃による先制攻撃。散弾を受けた青年は大きく仰け反り、血肉を撒き散らしながらその場に倒れる。肩への被弾により即死は免れたが、その衝撃力は大

きい。故に、撃たれた青年は気絶、再起不能だ。

愕然としていた『飼い犬』達であつたが、構内での発砲により反響する銃声と硝煙の匂い、そして血を流し倒れる青年が視界に映り込んだ事によつて漸く現状を理解する。撃たれたのだと。

しかし、理解は出来ても身体が動かない。衝撃的な出来事の連続で狼狽えてしまつたのだ。

「——つ!? ど、どど、鬮體?!?こいつが鬮體だなんて聞いてねえぞつ!」

「ち、散れ! あんなもん食らつ——」

「呆けてんじやねえつつつ!!」

——瞬間。けたたましい銃声。

「——だあつつつ!!」

彼は狼狽える青年達を黙つて見てるほど大人しくはない。直ぐに二発目を放ち、また一人が倒れていく。

「はんつ、まるでただの的だなつ!! クレー射撃の方がまだ難しいんじやねえのか!」

「うっそだろてめえ……!」

「覚悟しろよ、てめえらは全員八つ裂きだつ!! それとも蜂の巣の方が良いかあつ!」

彼は狂つた笑みを浮かべながら手慣れた手付きで実ショットシェル包を排莖、再装填を行い青年達

に接近していく。彼等はその姿が悪魔に見えた。

しかし、彼等とて黙ってやられる訳にはいかない。数はだいぶ減っているがそれでも六人は残っている。他の『飼い犬』もこの廃工場に向かつている最中であり、その数は二十人だ。数は圧倒的に上である。そして何より――。

「こつ、この野郎つ!!」

「――つ!」

「くたばれえつ!!」

――彼等も散弾銃を用意している。

青年は近くに立て掛けてあつた散弾銃を一丁手に取る。既に装填済みという事もあり直ぐに撃つことが可能だ。それを直ぐ様彼に向けて一発撃つのだが――。

「おつと!」

「はああつつ?!?!?!」

――彼は散弾を回避するという、あまりにもあり得ない事をやってのけた。

真横へのサイドステップにより散弾は彼の真横を通り過ぎ、入り口付近の壁に数多くの弾痕が残る。回避した彼はそのまま物陰に隠れていった。

「な、なな、なんだよそれ?!? 避けた?!? マジで出鱈目過ぎんだろてめええつつ!!」

「おい! てめえらも銃を持ってつ!」

「あの野郎っ……い！」

散弾を回避するという非常識な光景を目の当たりにしてしまったが、取り敢えず彼の攻撃は中断出来た。その隙に三人は銃を手に取り、残り二人は撃たれない様に遮蔽物を利用してながら彼に近づいていく。

（あぶねー、そこに置いてたのかよ）

彼等が散弾銃を用意している事は知っていたが、誰も持っていなかった為に彼は油断していた。散弾銃の置場所も彼の死角に置いてあつた事から何処かに放置してゐるのうと考えていたのだ。お陰で反撃を許してしまつた。

しかし、単体のみの攻撃ならばたいしたことはない。持ち前の回避能力の出番である。

（てめえらの攻撃なんざ当たるかよ）

彼が回避出来たのは、何も散弾を目視し超人染みた速度で回避したというものではない。

彼の持つ技能『危険察知』によつて散弾銃を向けられる事を直ぐに察知し、引き金を引かれる前に横にずれた。ただそれだけだ。勿論、回避出来たのはそれだけが要因ではない。

『飼い犬』が使つた銃は彼の物と同じく上下二連式散弾銃だ。火力はあるが反動も大

きく、装弾数も二発。素人が簡単に扱える代物ではない。構えから発砲までに多少のもたつきと躊躇いがあった故に回避が可能であった。相手が熟練者であったならば被弾していたことだろう。

彼等は当然、その散弾銃の扱いに関しては素人だ。構え方や躊躇いがまさにそれである。物陰から覗くと装填も手こずっている様子だ。

(相手は六人、こっちは一人……)

数は負けている。一人対六人、此方が散弾銃一丁に対し向こうは四丁という宜しくない状況。クロスボウや拳銃と種類はあるが、それを扱うのは自分一人だけだ。

普通ならこの時点で勝敗は決している。本来ならば逃げるのが賢明。しかし——。
(数が多いだけだ。こちとらためえらより場数踏んでんだよ)

——あくまで普通ならばの話だ。

何故、彼が散弾銃の扱いに手慣れているのか。何故、人を撃つ事に躊躇いが無かったのか。それは簡単な話だ。

彼は散弾銃の射撃経験がある。少なくとも目の前の彼等よりも。そして——。

——人を撃った事など今回が初めてじゃない。

過去に『野良犬の巢窟』の周辺で起こった散弾銃による傷害事件、その数十件――。

その内の六件は、たった一人の人間の手によるもの――。

何を隠そう、その人間こそが――。

「『髑髏』を舐めるなよ……!」

――隆道その人である。

「殺す! 殺すつ!! 絶対にぶつ殺すつ!!」

「やれるもんならやってみやがれつっつ!!」

最初の『髑髏』にして頭目、柳隆道。仲間に慕われ、そして同時に恐れられている彼を止めれる者はここにはいない。

『飼い犬』と『髑髏』。イカれた者同士の抗争はまだ始まったばかり――。

「な、なんなのよ……これ……」

構内の隅にて、菜月は目の前の光景に唾然とする事しか出来なかつた。その光景はあまりにも非常識で、目を疑うものなのだから。

「ああつくそつ!! 何で当たらねえつ!!」

「ちゃんと狙えよつ!! どんだけ弾無駄にしてんだてめえつ!!」

「う、うるせえつ!! てめえも外してばっかじゃねえかつ!! 人のこと言え——つぶねつ!!」

青年達は遮蔽物越しに四丁の散弾銃を隆道に向けて乱射。彼等の周辺には硝煙が立ち込め、止むことの無い銃声によつて構内に反響が続く。足元には数多くの空薬莖が転がり、それは今もなお増やし続けている。

対する隆道は遮蔽物を頻繁に変え、時には前進。移動の際は出鱈目な動きで散弾を回避し、時折撃つ散弾は彼等の行動を確実に制限している。その表情に焦りは微塵も見えない。彼からは『殺意』だけが見えていた。

「どうして……」

自分より十年も若い青年が互いに凶器を向けている。この現実を受け止める事が出

来なかった。

素手や鈍器による殴り合いではない、刃物や銃を用いた殺し合い。まるでヤクザ同士の抗争、それしか表現しようがなかった。

「柳……君……」

そして、何よりも目を疑ったのは彼の姿だ。数多くの武器を背負い、散弾銃を持って乗り込んできたその姿は『野良犬の巣窟』で遭遇した青少年達と全く一緒だったのだから。

『——柳隆道。そして、『髑髏』の頭目』

彼自身が『髑髏』だった。それもメンバーの一人ではなく、リーダーとして。あの青少年達に臆すること無く、逆に恐怖を抱かせた理由はこういうことだったのかと。

「……………」

何故、彼がここに来たのかはわからない。武器を持ち単身で乗り込んできたという事は彼等に捕らわれていなかったということ。ここに来ないという選択肢はあつたはずだ。

あの時、次は助けないと言われた。自分達を助けに来たとは思えない。まさか、護衛一人の為だというのだろうか。

しかし、それならば納得がいく。四月のイギリス代表候補生との試合では一夏を出さ

せまいとして、代わりに自ら忌み嫌うI Sに乗り込むという自己犠牲をやつてのけたのだ。たつた一人の為に行動を起こしても不思議ではない。

「……とにかく、抜け出さないと」

理由はこの際なんでもいい。『飼い犬』達全員が彼に意識を向けているこの状況はまたとない好機だ。今の内に脱出しなければと彼女は藻掻き始める。

「ん、んう……。さ、榊原……先生……?」

「っ……山田先生……!」

「……は? この、音は……?」

脱出しようとした矢先、気絶していた真耶が漸く意識を取り戻した。未だに朦朧としてるが、今は一刻を争う事態だ。無理にでも覚醒させなければならぬ。

「山田先生! ほらしっかりして!」

「……っ!? さ、さき、榊原先生! 人、人があんなに倒れて!? え、あれつて散弾銃!」

それに柳君!? あの恰好は!」

「目覚めて早々悪いけど説明してる暇は無いの。先ずはここから脱け出すわよ……!」

「え!? え、えと……は、はい……!」

真耶は酷く混乱しているが無理も無いだろう、気絶してない菜月ですらこの光景が今でも信じられないのだから。

しかし、それを一から説明してる暇など無い。優先すべきはここから脱出する事。今の真耶には酷な話だがどうにか落ち着いて貰いたいところ。

「ど、どう……？ 抜けれそう？」

「だ、ダメ、です……！ 硬くてとても……！」

痕が残ってしまいそうな程に縛られた手足はどれだけ力を出しても抜く事が出来そうにない。撥ね飛ばされた青年が落とした刃物等はあるが、それら全ては銃撃戦のど真ん中だ。取りに行くのは危険過ぎる。別の脱出手段を模索する彼女であったが、同時に一つの疑問を抱えていた。

彼はISを展開していかないのだ。命の危険に晒されているのだから自己防衛として展開したとしても咎められないはず。にも関わらず彼は展開する素振りすら無かった。

（柳君……！ どうしてISを使わないの……！）

（やっと起きたか、あの牛眼鏡）

遮蔽物に身を隠す降道は散弾銃を乱射されているにも関わらず、彼女達の様子を覗くという多少の余裕を持っていた。

捕らわれているというのは些か面倒だ。『飼犬』全員の意識は此方に向いているが、

いつ彼女達を盾にするかはわからない。そうになると非常にやっかいである。

「……………」

ISを使えばこの状況など一瞬で片付く。しかし、彼はその選択肢を避けた。

別に千冬の言い付けを守ってる訳でははない。生身の人間に対してISを使つてしまえば自分すら許せなくなる、彼はそう考えていたのだった。

ISは何があろうと決して展開はしない。この状況をどう打破しようかと考えたその時——。

「——っ!？」

——『危険察知』により背後から脅威を察知。後ろを振り向くと、そこには消火斧を振り抜こうとする青年が一人。

その青年は激しい銃撃戦の中、彼に気づかれぬ様に構内を大きく迂回していたのだ。故に、至近距離まで接近する事に成功していた。

『危険察知』は弱点が存在する。脅威が目前まで迫らないと発揮は出来ない。ただ近づかれるだけでは反応しないのだ。

「うらあつつつ!!」

「ぐおっ!？」

直前に反応出来たはいいが、回避すれば遮蔽物から飛び出す事になってしまう。そう

なれば格好の的、散弾の雨を浴びる羽目となる。

よつて散弾銃を盾に使い防御、刃は彼の顔面手前で止まり間一髪で危機を逃れるが――

「貫つたあつっ!!!」

「おおっ!?!」

――青年は消火斧を散弾銃に引つ掛け、力任せに引つ張つた。それによつて散弾銃を手放してしまい、遮蔽物の無い場所に放り投げられる。

「死ねやつつっ!!!」

青年はこれを好機とし、消火斧を彼の頭部に向けて振り下ろす。この至近距離だ、背負つてゐる武器も懐の拳銃も出す暇などありはしない。

しかし――。

「ふんっ!!」

「――だっ!?!」

――面と向かつた彼に接近戦は通用しない。

彼は寸での所で回避し青年の腹へ一撃、怯んだ隙に消火斧を奪う。

「ラ、アツツツ!!!」

「――ぎゃあつっつっ!?!?!?!?!」

そして、そのまま青年の肩に目掛けて全力で振り下ろした。刃は見事青年の肩に食い込み骨にまで到達、砕ける音と共に血が吹き出し返り血を浴びる。

「あ……あ……あ……」

「邪魔だつっつ!!」

再起不能となった青年を突き飛ばし、彼はこの後どうするか考えに耽る。何せ散弾銃を落としてしまったのだ。飛び道具はあるにはあるが多少心許ない。

「隆道いっつっ!!」

「つたく、次から次へと……っ!?」

今度は自身を呼ぶ怒声。またかよと呆れながらも声のする方へ向くと――。

「この距離なら……!!」

――そこには拳銃を持った青年の姿が。

その拳銃は大男が菜月達から奪っていたものである。車に撥ね飛ばされた事により落としていたのだった。青年はそれを拾い、先程斬りかかった青年と同様に回り込んでいた。

至近距離で向けられた拳銃。『危険察知』があっても超人ではない故、弾丸を躲す事など出来やしない。よって回避は――。

(やっべ――)

——不可能。

「死ねえつつつ!!」

「——ぐあっ!!」

青年は彼に向けて拳銃を乱射、放たれた弾丸は彼の胴体に叩き込まれた。全弾十発中五発の弾丸を受けた事により仰け反り、遮蔽物から離れてしまう。

そう、遮蔽物から身体を出してしまった。

「ぐっ……」

「——っ!!? 柳君っ!!」

「でかしたっ!! 狙ええっ!!」

遮蔽物から身体を曝け出してしまった彼に思わず叫ぶ真耶。青年達はこれを好機と判断、四人全員が彼に散弾銃を向け——。

「だ、駄目——」

「撃てえつつつ!!」

「——あつ?! てめ——うおつ?!」

その直後に散弾銃持ちの青年達へ向けて発砲。威嚇射撃である故に当たりはしないが、それにより彼等は咄嗟に遮蔽物へと隠れる。その隙に先程落とした散弾銃を拾い、よろけながらも遮蔽物へと戻っていった。

「お、おいつ?! あの野郎なんで生きてんだよつ?! つか、立って……?!」

「化け物かよあいつ……?!」

「マジでなんなんだよてめえはあつつ?!」

何故死なないと彼等は叫ぶ。五発の拳銃弾を受け、三百粒以上となる四発の散弾も直撃した。生きてる処か立っている事などあり得ないはず。

(ああ、くそつ。流石にきつついな……)

そんな叫びを飛ばす彼等を余所に、彼は苦しそうな顔をしている。死にはしなかったが、ダメージは確かに受けていた。苦しむ彼のジャケットには無数の穴、そこから出血は一切見受けられない。

何故、彼は拳銃弾と散弾を受けても血を流さず、生きている処か立っていられるのか。

こんな話をご存知であろうか。

数年前、英北西部のとある州で男性が青年に散弾銃で撃たれた事件があった。

その時の男性と青年の距離は、なんと至近距離である約一・五メートル。散弾は左胸に命中し、死は免れないはずだった。しかし、その男性は自力で自宅に戻って救急車を呼び一命を取り留めたのだ。

男性が助かった要因は二つ。一つは男性の胸ポケットには頑丈な携帯電話が入っていた事。そしてもう一つは実包そのものにあつた。

——『バードショット』——

散弾銃に使用される一般的な実包は大まかに三種類存在する。鳥撃ちやクレイ射撃で使用される『バードショット』、対人や中型動物の狩猟に使用される『バックショット』、そして大型動物の狩猟で使用される単発弾『スラッグショット』。青年が使用したのはこの『バードショット』だ。

『バードショット』は数十から数百粒程の散弾が敷き詰められている実包。主な用途は小動物の狩猟とクレイ射撃だ。口径と散弾の規格にもよるが、まず対人で使われないものである。

この散弾の殆どがその携帯電話に命中した為、血管や臓器が無事だったのだ。少しでもズレていれば確実に死んでいたと言われるこの出来事は正に奇跡とも言えよう。

偶然なのか、『飼犬』もこの散弾を使用した。しかも、対人には向かない非常に小さい規格を。確かに殺傷能力はあるが、距離が離れてしまえば散弾は拡散し威力は減少する。彼等は自分達の使う散弾の特性を良く理解していなかった。

当然、これだけでは彼が出血しない理由にはならない。理由はもう一つ、服の下にあるものを着ている。

(防弾効果は充分。だったら……)

この時、彼はある事を思いついた。この状況を直ぐに終わらせる方法を。

「あ……ぐ……」

「おら、立てよ」

「あ、あ、あ、っ!? いっで……!?!」

彼は弾切れになった拳銃を投げ捨てた後、いったい何をしようのか、拳銃弾によつて倒れていた青年の胸ぐらを掴み無理矢理立たせる。そして狂った笑みを浮かべながらこう言った。

「もうチマチマやるのは面倒なんだよ。そろそろここに増援が来るんだろ? ならさっさと終わらせねえとな」

「な、なに……?」

彼が今から何をするのか。それは常人ならば絶対に考え付かない、狂行とも言える行

動。

「あいつら、すつげえ怒り狂つてるよなあ。身体を出したら直ぐに撃つてくると思わねえか?」

「……?!?!? お、おい……やめ——」

「せいぜい撃たれねえ事を祈りな。……んじや行つてこいつつ!!!」

彼は青年を遮蔽物の外へと突き飛ばした。彼等の攻撃を誘う囮として。

「——べつつつ?!?!」

「あっ!?!」

「ひいつ!?!」

「あーあ」

——瞬間。青年は散弾の雨に打たれた。衣服は一瞬の内に穴だらけとなり、鮮血を辺り一面に散らし倒れる。青年はもう立ち上がる事は無いだろう。生きてるかどうかも怪しい。

その光景を見た彼等は硬直してしまい、それを見てしまった彼女達は小さく悲鳴を上げた。

「や、やっちゃま——」

隆道の思惑通り、彼等はろくに確認もせずに発砲した。つまり、連続した攻撃回数を

彼は突撃しながらも散弾銃を青年に向けて撃ち、青年の左手に命中させる。胴体でなかつた為倒れはしなかつたが――。

「ぎ……あ、あ、つつつ?!?!」

「ひ、ひええつ?!」

――左手が吹き飛んでいた。

距離を詰めた状態での近距離射撃。彼は青年達と違い、散弾の特性を理解している。彼の使用する実包は勿論対人用の散弾――。

「て、手っ! 俺――の、つつつ?!?!」

――『バツクシヨット』。

左手を失った青年に続けて二発目の散弾。今度は左足膝に着弾し、千切れ飛んでいく。左手だけでなく左足を失った青年はその場で転げ回り、まるでスプリングラーの様に血を撒いていく。

(あと三人っ!!)

散弾銃は二発撃った事で弾切れ。再装填せずに一番遠くの青年に向けて投げつけ、その青年が怯んでいる隙に今度はホルスターから拳銃を取り出し乱射。標的は二番目に遠い青年。

「ほ、つつつ?!?!?!?!」

走りながらの乱射ではあるが、距離は充分だ。全弾七発の内三発が青年に命中、殴り抜かれた様に倒れていく。次の標的は――。

「アト二人イイイツツツ!!!」

――目の前の青年だ。

「ま、待て!?! タイム! タイムウツ!!」

散弾をもともしない彼に恐怖したのか、青年は観念して散弾銃を捨て降参の意を表した。

しかし、彼は一人も逃す気は無い。背中に携えるマチエツトを抜き――。

「タイムだつて言つてんだろ――」

「――ルセエツツツ!!!」

「――う、あつつつつ?!?!?!」

――薙ぎ払いで青年の左四指を斬り飛ばす。そこからの胸元、腹へ二連続の斬撃。更に三撃目で太股に突き刺し、力の限り捻り込む。

「ぎいあああつつつ?!?!」

「寝てろおつつつ!!!」

「お、つ――」

突き刺したマチエツトを勢いよく抜き、止めに青年の上半身に向けて一刀両断。深々

と斬られた青年は最早叫ぶ事なく——倒れた。

「ゲホツ??:…。アト……ヒトリイ……!」

「……っ?!?!」

帰り血を浴びに浴びた彼を目の当たりした青年は恐怖した。目の前のこいつは本当に人間なのかと。あれだけの銃弾と散弾を受けて、何故立っていられるのかと。

「こ、この……化け物があっ!!」

この男は手に負えない。ならば奥の手だと青年は散弾銃を投げ捨て、彼女達に向かって走り出す。その行動は人質を盾にするつもりだと誰もが理解出来た。尤も——。

「ぎっつっつ?!?!」

——それすら叶う事は無いのだが。

「あ、足っ……!!」

盛大に転んだ青年のふくらはぎには金属の矢。彼は散弾銃だけでなく、クロスボウの扱いにも長けていた。面積の小さいふくらはぎに当てる事など造作無い。

矢を使い切ったクロスボウを捨て、足元に落ちている散弾銃と実包を拾って装填する彼はゆっくりと青年に近づいていく。返り血で染まったその姿は最早『人ではない何か』にしか見えない。

「ま、待ってくれ……! お、俺は今日呼ばれたばかりなんだよ……! あんたの事も今

日知ったばかりだ……!」

「……」

「ほ、ほら、もう俺は立てねえって……!　だ、だから……もう勘弁——」

「ウルセエツツツ!!」

「——つつつつ?!?!」

彼は青年の言葉など聞かず、至近距離から両足に向けて撃ち込む。それによつて両足は血肉となつて弾け飛び、見るも無惨な姿へと変わった。

「~~~~つつつつ?!?!」

「一生這いつくばつてろ。……はあ」

最後の一人を片付けた彼は、小さく溜息をつきながらホルスターを外して穴だらけとなつたジャケットを脱いでいく。そのジャケットの下にはズタズタになつたベスト。

彼は『防弾ベスト』を着ていたのだ。彼等が散弾銃を持っている事は事前に把握していた為に用意をしていた。

しかし、その防弾ベストは見るも無惨な姿であり、弾丸がシャツまで貫通している。誰が見てもとつくに防弾機能は果たしていなかつた。

彼はそれも脱ぎ捨て穴だらけのシャツを捲ると、そこには無数の弾痕が残つた紺色のフィットスーツが見える。このスーツこそ、被弾しても死なない理由であつた。

「ああ、いてて……。I.S.スーツ様様なホント」

彼は『防弾ベスト』だけでなく『I.S.スーツ』も着ていた。I.S.を操縦する際に必要不可欠となるそのスーツは耐久性にも優れており、一般的な小口径の拳銃弾程度であれば完全に受け止める事が出来る。彼が受けたのは小口径の拳銃弾の他に規格の小さい『バードショット』。数百粒も受けてしまったが、一粒一粒が小さかった事、貫通力も無い事、距離が多少離れていた事によって肉体に届く事は無かった。

「ぐう……はあつ……」

とは言うものの、弾丸を受け止める事は出来ても衝撃を消す事は出来ない。彼は死ななかつたとはいえ、死ぬ程の痛みを受けていたのだった。

それに、耐久性に優れてると言えど限度はある。既にI.S.スーツはボロボロ、最早使え物にはならない。もし、あと少しでも多く弾丸を受けたら貫通していた事だろう。

彼は弾痕だらけとなったスーツを確認しながら再びジャケットを羽織ったのであった。

「……」

「ひっ……ひっ……」

阿鼻叫喚。彼女達が見るその光景はこの言葉が相応しいだろう。悶える青年が数多く転がり、一部は身体を震わせるだけで一言も発してない。

彼等の周りには血、血、血、どこを見ても血。カメラ越しに見たならばスプラッター映画と言われても疑われない程に凄まじかった。

そんな凄絶な光景に菜月は言葉を失い、真耶は目を反らし泣き崩れてしまう。しかし、それは無理も無いだろう。普通の人生を送ればこのような光景など見るはずは無いのだから。

「柳……君……」

「……」

血だらけの彼は喋らずに彼女達を見ている。何かを言いたげでもなく、ただ黙っているだけ。

菜月は、彼にどう声を掛ければ良いかわからなかった。感謝をすべきなのか、心配をすべきなのか、それとも叱るべきなのか。

暫くの沈黙の末、動いたのは彼の方。彼女達に近づこうとした所で――。

「はあ……ホントしつげえ……」

「……?」

「ひっぐ……?」

ふと、彼は立ち止まりある方向を見た。その方向は車が突っ込んだ事によって出来た大穴。彼女達もそこを見つめると、その大穴からは大きな人影が。

「あ、貴方は……！」

「ぐ……お、お……げほっげほっ」

大穴から出てきたのは車に撥ね飛ばされ、車と共に消えた大男。所々傷が目立ち血で染まっているが、重傷と言える怪我は見受けられなかった。

大男は車に撥ね飛ばされても多少の怪我と気絶だけで済んでいたのだ。強靱な肉体によつて骨折等を免れてたのである。

「よお、春日^{かすが}。てめえ……いい加減しつけえぞ。車じゃ物足りねえつてのか、ああ？」

「ぐ、ぐお、お……。て、てめえ……やるのが、無茶苦茶、過ぎんだろ……。危うく死んじまう、ところだった……。じゃねえか……」

「そのまま死ねば良かったのにな。つーか、てめえらこそ殺る気満々じゃねえか。関係ねえ人間を巻き込んだ癖に都合良い事言つてんじゃねえぞ。こんな物騒な物まで用意しやがって」

散弾銃をちらつかせながら彼は再び『殺意』を露にし、春日と呼ばれる大男を睨み付ける。会話から察するに二人は知り合いなのだろう。

「あ、あ、くそっ……てめえが髑髏だったなんて……。いつから……」

「んなこと知つてどうすんだよ。どの道てめえは八つ裂き確定だ」

淡々と言葉を放つ彼に怒りがこみ上げたのか、大男は苦痛の表情から悍しい表情へと

変わる。

それは計り知れない程の『殺意』。大男は足元の大型ナイフを拾い、彼に近づいていく。

「あ、あ……許さねえ……殺じで、やる……！　でめえは、絶対にぶつ殺じで、やる……！！　殺じでやるよ隆道いつ！！」

「あ、あ？　それはこっちの台詞だくそつたれ！　殺れるもんなら殺ってみろよ！！　死に損ないの飼い犬風情がっ！！」

豹変した大男に臆する事なく、彼も怒声を響かせる。散弾銃を投げ捨て、マチエツトを片手に大男へと近づき——二人は同時に走り出した。

「ぐだばりやがれこの野郎があつっつ！！」

「くたばるのはてめえの方だあつっつ！！」

——犬同士による『殺意』のぶつかり合い。

——『飼い犬』と『狂犬』の争いは続く。

第二十九話

約四年前。とある地域は過激派とも言える女性達の横暴で溢れており、街に住む住民は彼女達に怯えていた。

女性優遇制度によつて権力に溺れた彼女達からいきなり命令される日々。一度従つてしまえば今後一生『飼い犬』の烙印を押され服従の道を辿り、逆らつてしまえば社会的に抹殺され、時には彼女達が従える『飼い犬』によつて執拗な嫌がらせや暴行を受ける始末。男性処か彼女達を良く思わない女性にも牙を向ける見境なしの様々な暴力の前に、住民達は為す術が無かつた。

そんな絶望に染まつた地域に運悪く引つ越して来たのは、心が壊れてしまつた隆道。中学時代の暴力事件から直ぐの事である。

当時、女性不信が絶頂期であつた彼は彼女達の横暴に逆らい直ぐに捕まつた。今の時代、女性に訴えられれば有罪判決は不可避。外に出る事など不可能になるはずだつた。

——しかし、何故か彼は罰せられる事なく解放された。

彼女達に逆らつて捕まつても数日もしない内に解放される隆道。それを何度か繰り返し、埒が明かないと踏んだ彼女達は自分達が率いる数人の『飼い犬』を放ち、彼に攻撃を仕掛けた。

しかし、その結果は全員病院送りという返り討ち。彼は傷害罪で捕まるも直ぐに釈放されるといふ彼女達の駒が失つただけの大失敗だった。

何度繰り返しても結果は同じ。どんな手を使つて彼を牢屋にぶち込んで直ぐに解放され、新たな『飼い犬』を放つても返り討ちに合う。この事に流石の彼女達も困惑した。

そのような事が続き一年と数ヶ月経つた令和元年五月、反撃に留めていた彼は報復に走る。

正体を掴ませない為に外では必ず染めていた髪を意図的に白髪にし、顔をマスクで隠した彼は横暴を働く女性達に襲撃を仕掛けた。二度と外へ出歩けない様、徹底的に。

ある者は人前に出れない程に顔を切り刻み、またある者は生活に支障を来す程の深手を負わせたりなど力の限りを尽くした暴力。彼女達は素顔を隠した彼を『髑髏』と呼び、恐れた。

彼女達は自分達を襲う『鬮體』^{降道}を消す為に『飼い犬』を放つが、何度も返り討ちに合うばかり。その間にも彼女達は襲われ、次第に横暴は減つていく。彼女達は最早『鬮體』を消す事しか考えなくなつていった。

そこから始まるたつた一人の『鬮體』と、彼女達が率いる『飼い犬』の争い。月日が経つにつれて一人だった『鬮體』は次第に勢力を増やし、その争いは激化。負けじと『飼い犬』も数を増やし、武器を持ち、喧嘩だったそれはやがて抗争へと変わつていく。警察ですら手に負えなくなつたそれは、止まる事は無かつた。

その地域は逆らう犬が潜む場所という意味を込めて『野良犬の巣窟』と呼ばれるようになる。

これが『鬮體』の始まり。自らの居場所を守る為に、彼等は敵に容赦の無い牙を向ける。

その争いは、三年経つた今でも続いている。

「——だあつっつ?!!?」

しかし、それは彼に届かない。踏ん張りによつて無理矢理体勢を立て直し、身体全体を駆使した斬り上げにより春日の薙ぎ払いよりも速く斬りつける。反撃を受けた春日は大きく仰け反り、動きを止めた。

「ぐ、おお………!!」

「ウ、ラ、アツツツ!!」

チャンス逃さないのは春日だけではない、彼も同じである。怯む春日に向けて急接近、全体重を乗せた振り下ろしを——。

「——あめえつっつ?!!」

「——ぐおあつっつ?!!」

——当てる事は出来なかった。

刃が触れる直前に春日の蹴りが炸裂。胴体に直撃し、数メートル程大きく吹き飛ばされる。

「ああつ!!」

「柳君つ!!」

「ぐ………あ、ああ………」

まるで車にでも撥ねられたかの様な吹き飛びに真耶と菜月は叫ぶ。打ち所が悪かつ

たのか、彼は立ち上がりはするも腹を押さえたままだ。

「おうおうおうっ!! お得意の回避はどうしたんだあ、ええ!」

「ぐ……こ、この筋肉ダルマが……!!」

春日の蹴りに反応は出来たが回避は出来なかった。だがそれも仕方ない事なのだろう。

何せ、先程までの戦闘により拳銃弾を五発、散弾を八発も受けていたのだ。防弾ベストとISスーツのおかげで弾丸を防ぐ事は出来ても衝撃によるダメージは残る。現に彼の身体はスーツで隠れているが、全身アザだらけだ。おまけに撃たれた事による精神ストレスと疲労もあって回避が難しくなってしまった。

『危険察知』はあくまで自身に降り掛かる危険や脅威を察知するもの。回避出来るかどうかは己次第なのである。

「ぼさっとしてんじゃねえぞっっ!!」

「——っ!」

「死ねあっつっ!!」

腹の痛みに耐える彼であったが、相手はそんな暇を与えてはくれない。気がつくとは春日は目の前まで接近、刃は目前へと迫っていた。寸での所でこれに反応し、マチェットを盾に防御を取る。

「——ぐっ!?!」

「まだまだあつつつ!!!」

「——っ?!?!? ぎ、あ、あ、……!?!」

しかし、相手の腕力は出鱈目な程に強大だ。受け止めた事により多少なりとも怯んでしまう。そこからの更なる追撃も防御するが、マチエツトが耐えられなくなったのだから。高い金属音を響かせ、勢いよく折れてそのまま胸を斬りつかれる。ISスーツは防弾機能はあれど防刃機能は皆無、当然ISスーツは裂かれ肉にまで届いてしまった。

斬られた事により怯む彼に向けて大男は追撃。鋭利な刃による突きを繰り返す。

「貫っ——」

「——オ、ラ、アツツツ!!!」

「——おおっ!?!」

しかし、彼とてやられるばかりではない。勢いに任せた蹴りを放ち、大男のナイフを蹴り飛ばす。そしてそこからの——。

「フンツツツ!!!」

「——うごつつつ?!?!? てんめ、おらおつつつ!!!」

「——どわつつつ?!?!? こんの野郎があつつつ!!!」

——ノーガードの殴り合いである。

しも気にしていない。彼等にあるのは、相手に対する殺意のみ。

「はあ……はあ……しつかしよお隆道い。俺と取っ組み合いをしたのは間違いだつたなあ……？」

「あ、あ……？」

「俺も……万全つて訳じゃ、ねえけどよお……」

「……やつべつ?!?!」

春日はにたりと大きく笑みを浮かべた。一瞬何を考えたが、その意味を理解し彼は青ざめる。

大男がしようとした事を察し、直ぐ様抜け出そうとするが——もう遅い。

「てめえ位の人間ならあつつ!!」

「おわつ!?!」

「持ち上げる事なんざ造作でもねえんだよおつつ!!」

大男は体勢を変え、彼をいとも簡単に持ち上げた。そしてそのまま壁へ向かって走り

出し——。

「うおおおおおおおおおおつつ!!」

「こ、このやろ——」

「どつっつせいつつ!!」

「——だあつつつ!?」

「ああつ!?」

!?!?!?

——勢いよく放り投げ、壁に叩きつけた。

壁に叩きつけられた彼はそのまま地面に落下し、血を大量に吐いてしまう。最早フェイスマスクは血によつて真つ赤だ。

壁への叩きつけは防御もへつたくれもない。常人ならばこれで御陀仏なのは間違いないだろう。

しかし、彼も春日と同様に屈指のしぶとさを持つ故、これ位なら気絶などしない。

直ぐに立ち上がろうとするのだが、相当のダメージが入ったのか動きが鈍く、膝をついたままであつた。

「あ、あ……くそつたれ——」

「アタックチャー——ーンスツ!!!」

「——つ!？」

「うっしやああああああつつ!!!」

隙だらけとなつた彼に向かつて全力疾走をする春日。止まる事を考えないそのフォームからして何をするのかはわかりきつていた。

(あ、アレはやべえ……!!)

彼の『危険察知』はソレに対し最大限に反応していた。回避せねばと悲鳴を上げる身体に鞭を打つ。骨が軋む音を感じつつ、ようやく立ち上がったのだが——またしても一足遅かった。

ふらつく彼に向けての突進。春日が繰り出すのは——。

「車のおおお——」

「こつち来んじゃね——」

「——お返しだああああああ——!!」

「——があつつつ?!?!」

——全身を武器にした殺人タツクルだ。

身長二メートル、体重百キロ以上の大男による全身全霊のタツクルを受けた彼はまたもや壁に激突。凄まじい破碎音と共に壁を突き破り、二人は壁の奥へと消えていった。

「あ……あ……」

「や、柳……君……?」

彼女達二人は怒涛の展開に愕然とするしかなかった。刃物での斬り合いから瞬時に殴り合いに切り替わり、血塗れとなつた二人は壁の中へと消えていった。まるで映画のワンシーンでも見せつけられているのかと思つてしまふ。

止まなかつた二人の怒声は漸く止んだのだが——それもほんの少しだけであつた。

「あ、あ、つ!? てめえまだ生きてんのかよ!? いい加減にしろやあつっつ!!!」

「うるつせえこの筋肉ダルマアツツ!!! 髑髏の頭舐めんじやねえええつっつ!!!」

「このや——い、つでえつ!? てめ、まだ武器社込んでやがつ………!?!」

「この馬鹿がつ!!油断してんじや——がああつ!? こ、こんのおおおおおつっつ!!!」

穴の開いた壁の中から聞こえるのは二人の怒声。その他にも何かが崩れる音、割れる音、碎ける音、金属が搗ち合う音などが何度も鳴り、それは止む事を知らない。

「——!! ——!! ——!!! ——!!!」

「——!! ——!! ——!!! ——!!!」

しばらく続く二人の怒声。それらは次第に遠くなつていく——と思いきや、段々と近づいていき

「ぐおわつっつ!!!」

「だああつっつ!!!」

「——ひいつ!?!」

——二人は取っ組み合いのまま、別の壁を突き破つて戻つてきた。

構内を駆け回る二人。隆道の顔面は血に染まり肌が見えない程に赤く、ジャケットはより一層ズタズタとなりあちこちに切り傷が見え、肩には突き刺さっている刃物の様な何か。対して春日は同じく顔面が真っ赤で服もズタズタ、あばら辺りに小型のナイフが刺さっていた。

満身創痍と化した二人は立つ事すら困難なのか、立ち上がつては倒れるを繰り返す。その姿は生まれたての子鹿の様である。

「あ……お……お……。て、てめえ……マジで、どんだけ、しぶと……いんだよ……!!」

「い……つでえなくそつたれ……。てめえ、も……いい加減に……諦め、あ……あ……!!」

どれだけボロボロになろうとも立ち上がろうとする彼。彼女達はもう見ていられなかった。

もうこれ以上は止めてくれ、傷つかないでくれと願うが、それは決して叶わないだろう。彼女達の声は彼には届かないのだから。

「あ……あ……ん……ん……っ!!」

「だら……あっ!!……あ……ぐっ……」

刺さっていた刃物を勢いよく抜く二人。鮮血を撒き散らし両者は漸く立ち上がるが、先に動けたのは大男の方だ。彼は未だにその場でふらついている。

「ふうーっ……。しゃあねえ、サシは……。ここまでだ。そろそろ仲間も来る頃だろうしよお」

「はあ……。はあ……。あ、あ、？」

「このまま、やったって決着……。なんかつかねえよ……。てめえがいつ I S を使うか、待ってたんだが……。こっちの方が……。手っ取り早え……」

「……………」

ふらつきながらも懐に手を伸ばす春日。そこから取り出したのは——拳銃。ソレを力なく彼に向ける。

「これなあ、てめえの護衛が……。持ってたもんなんだよ……。撥ねられた、時に……。落としてしまったんだが……。さっきそこで殺り合ってる時に見つけてなあ、拾つといたつて……。訳え……」

「そんなもんで俺が怯むとでも……！」

「思っちゃいねえよお。このまま……。てめえを撃つてもいいんだが、I S 持ってた？ 使われたら拳銃なんて意味ねえしなあ。……。尤も、その格好を見るに……。使う気なんてねえだろうがよお」

「……」

「IS嫌いのためえが、ISを使うとは思えねえ。かと言って、使われない保証なんて、ねえ……。一応、使われた時の対策は、あるにはあるが……不安要素は、取り除きたいんだよお……。例えばあ、こういうやり方とかでなあ……」

そう言つて春日は銃口を彼から外し——今度は彼女達に向ける。

「——っ!?!」

「あー……。ここでそうきたか……」

「ありきたりだが、まあ……しゃあねえだろお。つー訳でだ隆道い、さつさとISを寄越しな。もしかしたら人質は解放されるかもしれないねえぞお?」

「……ほんつとためえは犬畜生だな」

春日の畜生ぶりに思わず溜息をつく隆道。人質を使われる事は予想していたが、このタイミングは中々くるものがある。増援が来る前に目の前の大男だけでも片付けておきたかったが、その望みも潰える。思うように動く事が出来なくなつてしまった。

未だに気絶している護衛は別として、彼女達二人は彼にとつて敵だ。しかし、今回に關してはこの争いに全くの無関係である人間である。それが彼の中にある少ない理性にストッパーをかけたのだ。

彼は、敵であれど脅威に晒されている無力な人間を気にも止めない外道ではない。

父親譲りである、自分よりも他者を優先する考えを持つ人間。それが柳隆道。当然、彼が選択した行動は——ISを渡す事。勿論、渡したところで人質が助かるとは思っていない。どの道殺されるのがオチだ。

しかし、気にする必要はない。

目の前の大男は『灰鋼』を要求している。

間違いなく、直ぐに決着がつく。

「ほら、さっさと……出せよ。俺は気が短え事ぐらい……わかってるはずだ」

「……ん」

「だ、ダメよ柳君?! ISを渡すなんて!?!」

マスクをずらし、首元に手を入れる彼を止めるべく菜月は叫んだ。

貴重なISを見知らぬ人間に渡すなど大問題処の話ではないが、それ以上に彼自身が危うくなる。渡してしまつたら——全てが終わつてしまう。故に、何がなんでも渡させまいと叫ぶが——。

「ISを展開して逃げてっ！ どの道——」

「うるせえ」

「——つつつ?!?!?!」

——彼女の声は一発の銃声によって遮られた。

「いっ……あああつつつ?!?!?!」

「榊原先生えっ?!」

?!?!?!

「すこーし黙っててくれねえかあ？ 俺はな……隆道と話してんだよお……」

「……」

春日の放った弾丸は彼女の肩に命中。ISスーツ等の防護服を着ていない彼女は今まで受けた事の無い痛みによつて悶える。撃った本人は勿論、隆道ですらその事に驚きもしていなかった。

「こ、こんな……なんて酷い……!」

「おーい、隆道い。俺って射撃下手くそ……だからよお。次撃ったら、もしかしたら頭に当たつちまうかもなあ……?」

「や、柳君……。わ、渡しちや——」

「おい牛眼鏡、死にたくなきや黙つてろ」

泣き顔で訴える真耶を尻目に、彼は首元にある首輪——専用機『灰鋼』を取り出し春

日に見せる様に翳す。その行動に一切の迷いは無かった。

「……………ふっ、はは、はははあつ！ 話には聞いていたがマジで首輪なんだなあつ!? てめえこそ真正正銘の飼い犬じゃねえかよおっ!!」

「……………それに関しては否定……………出来ねえ……………。このくそつたれのせいで、色々……………苦勞してんだから……………」

彼は自分の専用機に対し、愛着などこれっぽっちも無い。データ採取の為に無理矢理持たされている、ただそれだけである。思い入れなどある訳がない。

「ISが”パートナー”などあり得ない。

どこまでいっても所詮”物”だ。

人に使われる”道具”だ。

人を傷つける”武器だ。

全てを蹂躪する”兵器だ。

故に、粗雑に扱っても決して心は痛まない。

故に、利用する。『灰鋼^{道具}』を。

春日の要求通り、彼は首輪を――。

「そんなにコイツが欲しいんだったら――」

「だ、ダメ——」

「——くれてやるよ」

——放り投げた。

鉄の首輪は放物線を描いて地面へ落ち、無機質な音を奏でる。数回ほど跳ね、春日の足の手前で静かに止まった。

「……ほう、随分潔いな」

「そんな……どうして……!」

「柳、君っ……!」

隆道の行動は春日を感心させ、真耶と菜月を驚愕させるのには充分であった。

世界の一つしかない、彼だけの I S、彼の専用機。それを彼は何の躊躇いも無く手放したのだ。I S に関わる者からすれば信じられない、あり得ない行動だ。

「てめえの I S 嫌いには感心するなあ。すげえよ、ホントすげえ。どれだけ貴重な代物でも関係ねえってかあ？」

「……」応聞くぞ。人質はどうすんだ」

「そんな事……わざわざ言わせんのかあ？」

「はあ、だろうな」

元から期待はしていなかったが、やはり春日は人質を解放する気など無かった。そもそも、『かもしれない』と言っただけであって約束などしていかないのだから嘘はついていない。

(もう……)

本日二度目となる絶望に襲われる真耶。自分が浅はかだったばかりに捕まってしまい、結果このような事態となってしまった。

知りたかっただけなのに、助けになりたかっただけなのに、全てが空回りし彼は傷ついでいく。それ処か、今回は同僚も怪我を負ってしまった。

(私は、無力……です……)

嘆いたところで現実は変わらない。どうしようもない。どうにも出来ない。

彼女は——自分の無力さを恨んだ。

「さつてと……。動くんじゃ、ねえぞ」

「……」

滴る血を振り払いながら『灰鋼』にゆっくりと左手を伸ばす春日。隆道は行動を起す素振りも見せず、黙って見続けている。それを疑問に思わない春日はついに――。

「よつと」

――『灰鋼』を掴み取った。

「しっかし、ホントISって不思議だよなあ。こんなちっこいのからあんなデカブツに

「――」

「――はんっ」

「――あ?」

春日は、隆道がほくそ笑む声を聞き逃さなかった。顔を上げると――。

「……」

――そこには嗤っている隆道の姿が。

「なんだあ、てめえ……。何がおかしい」

「……なあ、こういう言葉を知ってるか?」

「……あん?」

——サワルナキケンツテナ。

——彼が眩いた、その瞬間。

——私にい………！

『登録者以外の接触を検出。システム作動』

「——あ？」

——触るなあつつつ!!!

首輪から機械音声が流れ、電子音を鳴らすと共に赤く点滅。春日の左手は——爆ぜて散った。

『へえ。世界最強ともあろうお方が怪我なんて珍しい事で』

『嫌味全開だな……まあいい。それよりも良く聞け。その『灰鋼』は、もうお前しか触れる事が出来なくなってしまった』

『あん？ ……おい、まさか——』

『ああ、また新たな機能が発現した。今度は登録操縦者……つまりお前以外の人間が触れると攻性エネルギーを放出し爆発する。私は咄嗟に手放したからこの程度で済んだが……』

『……下手すれば吹き飛ぶつてか。……はは、もう何でもありじゃねえか。いつか俺自身を乗っ取るか、あるいは殺す日が来るかもな』

『柳……この事は委員会に報告したのだが——』

『みなまで言うんじゃねえ。どうせデータ採取が優先なんだから、そこから俺をここに呼んだ、そうだから、ええ？』

『……すまない』

『謝るなって言ってるんだろ、いい加減に学習しやがれ。……上等だくそつたれ、お望み通りとことんやってやろうじゃねえか……！』

『柳……』

「——えっ」

「——なっ」

真耶と菜月の二人は、目の前で何が起こったのか理解出来なかった。それは今まで遭遇した事の無い不可解なものだったのだから。

「——はっ？ はっ？ はっ？」

「——寝てろおっつっ!!」

「——べえっつっつ!!?!?!」

——春日の顔面へ向けて放った。

容赦の無いそれを受けた春日は大きく吹き飛び壁に叩きつけられ、蹴りを繰り返した彼は地面に着地するもバランスを崩し倒れる。

「あ、っ……お、っ……」

「あ、あ、はっ……はっ……」

「……む、う——」

壁に寄り掛かる春日は暫く身体を震わせその場で佇む。そして——とうとう崩れ落ちた。

「——」

「……くそつたれが」

完全に沈黙した春日。様子からして起き上がってくる事は無いだろう、彼は遂に倒したのだ。

——しかし、まだ終わらない。

「うっわっ!? なんっだこれっ!?」

「おい、全員血だらけじゃねえか……!?」

(ああ、くそっ……来やがったか……)

春日を倒した直後に聞こえたのは、外から聞こえる複数の青年の声。そう、とうとう『飼犬』の増援が来てしまった。

春日は倒したがこのままでは袋叩きだ。故に、彼は気力だけで起き上がる。

「……っ! おい、奥に……!」

「春日さんっ!? それにてめえっ……!?!」

「……よお、てめえら。随分遅かった、じゃねえか」

入り口に佇む増援の数は二十人。满身創痕となった今、人質を連れて逃げる事は非常に難しい。ならば、立ち向かうしかない。今の彼に出来る事は、一人でも多く八つ裂きにする事だけだ。

「てめえが……やったのか……!」

「ほら、来いよ……。纏めて相手してやる」

「……隆道いいいいっつっ!!」

青年の怒声を合図に二十人が彼に向かつて一斉に走り出す。

一対二十。手負いの彼に勝算など有りはしない。威勢は良いがもう一步も動けないのだ。それでもやらなければならないという、最早意地であった。

——しかし、彼はもう戦う必要はない。

「待ちやがれコラアツ!!」

「——っ!？」

隆道と青年達の距離が残り十メートル付近に差し掛かろうとしたその瞬間、彼等の後方から一つの怒声。全員がその方向を見ると、一台のバイクが入り口から飛び出してきた。

「——あぶねっ!？」

「っしやあ間一髪っ!!」

「なっ、何だコイツっ!？」

そのバイクは彼等の間を一気に通り過ぎ、見事なテクニクで隆道の前で急停止し彼等と向かい合う。またがる人物は黒のフルフェイスヘルメットに黒のジャケツトという黒ずくめ。長いレザーケースを背負うその姿を、彼は良く知っている。

「——っ!? お前、治……!?」

「髑髏が一人、『突撃の治』推参っつっ!!! そしてえっつっ!!!」

「こ、こいつ！ 銃——」

「——先手必勝おっつっ!!!」

「——ぎやつつっ?!?!」

バイクにまたがる青年——治はヘルメットのバイザーを上げて直ぐに背中に手を伸ばし、レーザーケースから長い物体——散弾銃を取り出す。そして彼等に向けて躊躇無く発砲、一人の青年は肩に被弾し、叫びと共に倒れる。

「や、やりやがった——」

「ボケっとしてんじやねえっ!! 来てるのは俺だけじゃねえんだぜっ!?!」

「三——う、っつっ?!?!」

「——っ!?!」

バイク乗りの男が叫んだ瞬間、突然と風を切る音が聞こえた。その直後に数人の青年が、まるで横から殴り抜かれたように倒れたのだ。その理由は、倒れた青年達を見て直ぐに理解する。

「——っ!?! 矢……!?!」

それは金属の矢であった。一人一人が三本以上にも及ぶ矢が刺さり、その場で悶え苦

しむ。青年達は直ぐにその矢が何なのかを察する。

「ほ、他にも——」

「おう、くそつたれ共っ！ 周りを良く見なっ！」

「——っ!?!」

気がつけば、大勢の男女が左右後方と青年達を囲んでいた。その全員が髑髏のフェイスマスクに黒のレザージャケット。その数——なんと四十七人。

ありとあらゆる近接武器を持つ青少年が二十人、クロスボウを持つ男女が十八人、散弾銃を持つ青年が九人。『飼い犬』達はもう——逃げられない。

「お前ら………何で——うおっ!?!」

「柳さん、此方へ！」

「後は馬場さん達に任せて今すぐ手当を！」

「お前らまで………!?!」

何故、彼等（髑髏）がここにと疑問を抱いたその時、彼は突如二人の少女に掴まれた。その二人も髑髏のフェイスマスクとレザージャケットを身につけている『髑髏』の一員。

「ちよ、待て………いい、いでで………!?!」

「ああつ動かないで下さい！ ちよつと、もつと早く引つ張って！」

「む、無理言わないで!?! お、重い………!?!」

医療キットを背負う二人は疑問が止まない彼を無視し構内の端に引き摺っていく。彼が安全な場所まで運ばれるのを見届けた治は、再度『飼い犬』に顔を向け——宣告する。

「大将はこれでよし、と。……さて、覚悟しろよ。ここから先は俺達、鬪體の——」

「ちよ、ちよつと待てて……俺達はまだ——」

「——狩りの時間だつっつ!!」

「やつちまええつっつ!!」

青年達の言葉など聞かず、一人の合図によつて彼等を囲む全員が襲い掛かる。構内には怒声と悲鳴、そして銃声が鳴り響いた。

数分後、構内は怒声や悲鳴などの騒がしい声は消えていた。あるのは呻き声ただ一つだけ。勿論、その呻き声は『飼い犬』のみである。

「全員片付いたな。こつちの被害は？」

「軽傷が六人程、問題無いです」

「上出来だ。他の奴等に矢と空薬莖の回収を急ぐ様言つとけ、大将連れてさつさとずらかるぞ。ああ、武器も回収しないとな」

「へい。奥で縛られてる三人は？」

「ほつとけ。俺達には関係ねえ」

その構内に立つ物は章吾を筆頭とした『鬪體』達だけ。彼等に狩られた『飼い犬』達
はあちこちで見えるも無惨な姿と成り果てていた。

身体中を切り裂かれた者、上半身が壁に埋まつている者、手足が肉片と化した者と、
隆道が暴れ回った時以上の死屍累々。至るところに血の池が溜まり、そこから中赤い足跡だ
らけだ。

充滿する鉄と硝煙の匂い。完全なスプラッター現場となつた構内は、常人ならば不愉
快極まりない程のものだが生憎彼等にとつては今更だ、既に慣れている。

そんな事よりも優先すべき事は隆道だ。一刻も早く彼を連れて帰らねばならない。
応急手当を受けている彼の元へ章吾は颯爽と走り出す。

「隆道！ この、無茶しやがって……！」

「よお、章吾……。よく、ここが……」

「お前がメタクソにしたくそつたれ共から訊いたんだよ！ つかもう喋んな、傷に響く
ぞー！」

女性二人の手によってポロポロであつた隆道は今や包帯塗れ。しかし、止血も充分で
ない為所々血が滲んでおり、彼自身もダメージや疲労によって声に覇気が無かつた。

「すみません馬場さん、あまりにも怪我が多くて最低限の止血までしか……」

「やってくれただけでも充分だ、姐さんの所に行けばどうとでもなる！ ほら隆道、さつさと帰るぞ！」

最低限の処置は済ませてはいるが、これ以上ここに居る訳にはいかない。ここへ来る途中、警察の動きが見えたのだ。恐らく住宅街付近の惨状を見られたか、自分達を見掛けたからか。どちらにせよ何れここに辿り着く、その前に逃げなければならぬ。

しかし――。

「姐さんも心配してんだ！ 早くここから――」

「――けねえ……」

「あん？ 何だつて？」

「……俺は、行けねえ。置いていけ……」

――彼はこれを拒んだ。

「は、はああつ!? 何言つてんだよお前!？」

「そ、そうですよ！　ここにいたら……！」

「行ける、訳、ねえだろうが……。今まで……は、逃げてどうにかなった、だろうが……。今回は訳が違うん、だぞ……」

彼は、『飼い犬』に襲撃すると決意した時には既に察していた。もう戻る事は出来ないと。

「お前だって、わかっただろ……。どつちにしろ俺は逃げられねえってな……」

「っ!?　それはっ……！」

彼の言う通り、章吾はわかっただけではいた。ここで逃げたとしても、人質であった菜月と真耶は証人として警察やIS学園から事情聴取を受ける事は確実。抗争の当事者として知られる事は明白だ。

仮に人質がいなかったとしても、彼は大怪我を負った。IS学園に帰還すれば必ず問い詰められ、必ずこの抗争に辿り着く。どの道逃げる事は出来ないのであった。

「だから、俺の事はほっとけ……。警察が、ここを嗅ぎ付ける前に……お前らは、帰れ……」

「ふ、ふっざけんな!!　そんなの出来る訳ねえだろ!?　やっと、やっと戻って来たつてのに……こんな……!!」

章吾は彼の言う事を聞きたくは無かった。絶対連れて帰ると光乃に約束したのもあ

る。だが、それ以上に恩人であり、友人である彼を見捨てる事など許せなかったのだ。彼の言っている事は理解している、だが納得は別物だ。せっかく再会したというのに、聞きたい事は山ほどあるのにこれはあんまりではないか。いったい彼が何をしたというのだ。

「いいから行けよ……！ 俺だけならまだしも、お前らまで捕まったら誰が住民達を……！」

「ぐっ……！ く、くそつたれが……！」

「時間はねえぞ……。早く行けよ……！」

「た、隆み——」

「行けって言うてんだろぅがっつっ!!」

構内に響くのは隆道の怒声。それにより周囲の視線は彼等に集まり、全員の動きが止まった。

力なく座り込む彼と、その目の前に佇む章吾の二人は周囲の困惑など知らずに睨み合う。彼はその場から絶対に動かないという姿勢だ、最早何を言っても聞かないのだから。その目には固い意志が宿っている。

ほんの数秒の睨み合い。それは数分にも、数十分にも感じられる。遂に折れたのは――
―章吾の方であった。

「……………ああ、くそつ。……………必要なもんは」

「医療キットを、一つ置いていけ……………。あと、俺のクロスボウと散弾銃は持つていけ……………。どうせ没収されるしな……………」

「……………わかった。……………お前ら、全員に撤収するよう伝えろ」

「……………はい」

章吾に指示を出された二人はその場から離れ、周囲の人間の元へと駆けて伝えていった。指示を聞いた青少年達は困惑したが逆らおうとはせず、降道に会釈をした後に構内から出ていく。颯爽と出ていく者もいれば、渋りつつ出ていく者など様々。彼等も見捨てる事はしたくなかったが、彼の意思を無下にする事はなかった。

ぞろぞろと四十人近くの人間が構内から出ていき、残すは鬮體の古参が数名程。その者達は入り口付近で待機し、二人を悲しげに見つめている。

「……………良いのかよ。治達に一声掛けなくて」

「名残惜しくなるだろ、止めとくわ……………。まあ、よろしく言っておいてくれ」

「わかった。……………次来る時は連絡入れろよ。皆で嫌と言うほど歓迎してやる」

「ああ、おつかねえ。……………じゃあな、章吾」

「ああ。じゃあな、隆道」

さよならとは言わない。必ずまた会う事を誓い、章吾は彼から離れていく。入り口付近で仲間と数回のやり取りをし、彼等は名残惜しそうにしながらも今度こそ廃工場から消えていった。

「……」

『罫體』が全員いなくなり、構内に残ったのは隆道と人質三人、そして至る所で倒れている血塗れの『飼い犬』が四十一人。辺りを見渡しても、青年達は立ち上がってくる様子はない。その事を確認して彼は立ち上がり、医療キットを片手に足を引き摺りながら人質の元へ歩いていく。

「柳……君……」

「……」

三人の元に辿り着いた彼は先程までの感情は無く、いつも通りの硬い表情。真耶の言葉に反応はせず、彼は足元からナイフを取り出して三人を縛る縄を切っていく。

「……よつと」

「——いっつ……!?!」

「動くんじゃない。……ああ、弾は抜けてるな。おい牛眼鏡、少し手伝え」

「えっ……。は、はい……」

全員の縄を切り外した後に彼が取った行動は、負傷した菜月を起こして応急手当をする事であった。衣類を医療キットに付属してある鋏で切り、水で傷を洗い流し、止血して包帯を巻く。手際よく行われたそれは数分も時間は掛からなかった。

「鎮痛剤だ。これでも飲んでろ」

「え、ええ……。んぐ……」

「……あとは」

彼女の手当を終えた彼は、次に気絶中である真吾の手当をし始めた。誰よりも負傷し、手当も済んでいないにも関わらずに手を動かす彼は動く度に包帯から血が滲み、滴ってしまう程に出血をしてしまうが一切気にも止めていない。

「ぐっ……うう……」

「お？ やつとお目覚めってか」

「や、柳君……？ これは、いったい……」

「ああ、動くな。直ぐに済む」

漸く意識が覚醒した真吾だが、頭部を殴られた為か未だに朦朧としていた。彼は状況に困惑している真吾を気にせずに黙々と手を動かし、手早く手当を済ませていく。

「これで、よし。……あ、あ、いつつ……」

「……っ!? 柳君、怪我を……!?!」

「気にすんな……。もう、全部終わった……」

真吾の手当を終えた彼は非常に辛そうな表情だ。ようやく一仕事を終えた彼は壁に凭れ掛かろうとしたが――。

「……ああ、いっけね。忘れてた」

――ふと、何かを思い出して足を引き摺りながらも急いで入り口へ向かっていった。

「……………」

入り口へと消えた隆道。いったい何を忘れたのだと疑問を抱く三人であったが、彼は直ぐに戻ってきた。手に何かを持って。三人は彼が持つ物に見覚えがある。

(あれは……)

それは、彼がいつも右腕に巻き付けている首輪であった。襲撃の直前、持ち込んできたバッグに保管し隠していたのだ。

その首輪は彼にとってなくてはならない形見。抗争の際は必ず外していたのだが、久し振りに屋外で外した為に危うく忘れてしまうところであった。

「つたく……忘れる、なんて、どうかしてるぞ……くそつたれが……」

自身に愚痴を吐きながらも彼は首輪を巻き付けながら引き摺り歩き、その途中でついでと言わんばかりに『灰鋼』を拾っていく。漸く壁まで辿り着いた彼はそのまま凭れ掛かり、静かに座り込んだ。

「……はああ」

「——っ!? 柳君っ!」

ぐったりとする彼の身体に巻かれている包帯は既に血で真っ赤に染まっている。早く手当をしなければ彼の命が危うい。

「柳君っ! 貴方も早く手当を——」

「黙れ……! 話し掛けんな……!」

真耶の言葉など聞かない彼はおもむろにポケットに手を入れ、そこから金蔵のケースを取り出す。それは以前、光乃から送って貰った緊急用である謎のカプセル剤。

「……まーたコイツの世話になるのか。あーあ、やだやだ」

未だに何の成分なのかはわからない。しかし、それでも別に構わない。副作用は凄まじいが、それに釣り合った効果はある。

しかし、痛み慣れているとは言えこの副作用は彼ですら躊躇うものがある。これを服用するには覚悟が必要だ。

「ふうー……。さて……」

一度深呼吸をし、覚悟を決めた彼はソレを一粒飲み込んだ。そして——。

「……っ!??!?!
!?!?!? アァァ——」

数分後、真耶の通報により警察と救急隊は廃工場に到着する。そこで彼等が見たものは、血の匂いが充満する構内で倒れる血塗れとなった大勢の青年。そして、声にならない叫び声を上げる隆道を手当しようとする三人の姿であった。

第三十話

令和四年六月五日。

この日、『野良犬の巣窟』を付け狙う『飼い犬』は全滅した。

『鬮體』を恐れる『飼い犬』は確実に隆道を始末する為、彼の護衛と偶々彼の地元を足運んだ教員二人を拉致監禁。三人を人質として盾に使い、彼自身を辺境に誘導し『飼主』の指示により殺害する予定だった。

しかし、その彼こそが『鬮體』そのもの。仲間ですら恐れられる程の狂暴性と残酷非道な凶暴性を持つ『鬮體』の始まりであり『鬮體』の頭目。彼等は狩られる道を選んだのだ。

その結果、起きてしまったのが今回の大惨事。他人の安否を一切考慮しない強襲と捨て身の猛攻によりまたたく間に約半数が餌食となり、残党は駆けつけてきた大勢の『鬮體』が殲滅。『飼い犬』四十九人全員が重傷、または重体という過去の事件と比較にならない程の惨状を生み出した。通報が少しでも遅れていれば失血による死者が出た可能性があったとか。

救急隊によって地元の病院に直ぐ様搬送された『飼い犬』達は数があまりにも多く、構

内は正に戦場と言っても良いほどだ。医師達はしばらく多忙に追われる事だろう。

勿論、そこを出入りしている一般人や入院している患者達はそれを目の当たりにしている。当然ながらその光景を見た人達は恐怖に駆られ――。

『ああ、髑髏が動いたのか。となるとしばらくは安全、かな』

『ごまあ見ろ飼いだ共め』

『ばあさんや、今の聞いたかあ？ え？ 違う違う、ハチは去年死んじまったろうが』

――る事は決して無かった。こういつた事は慣れているのだろう。流星は『野良犬の巣窟』に住む人達、非常に凶太い。というか逆に生き生きとしていた。

巻き込まれた人質三人の内二人――教員の菜月と護衛の真吾も怪我を負ったが、此方は幸いにも軽傷で済んでいる。怪我を負わなかったのは現場から立ち去った『髑髏』達を除けばたった一人、真耶だけ。彼女だけが無傷で助かったのだ。

救急隊の到着前に行った応急手当のお陰で二人の治療は直ぐに終わり、事情聴取を受けた後に事態を知った政府とI S学園上層部によって保護。真吾は政府の元へ、菜月と真耶はI S学園へと戻される。

彼等は還る道中、『野良犬の巣窟』から立ち去るまでに人々から冷たい視線を感じたということ。その時の全員が――。

『二度と来るな、余所者』

——そう言われたような気がしたという。

無数の弾痕を残し、大勢の怪我人を出し、文字通り血の海と化した恐ろしくも悍しい事件。発見された凶器は多数の刃物や鈍器と、弾切れとなった拳銃が4丁。しかし——

——使われたであろう散弾銃と実包は発見されていない。

警察、政府、I S学園に知れ渡る頃には終わっていたこの事件は『六・五青少年抗争事件』と呼ばれ、世間には公表されず秘密裏に捜査される。

こうしてまた一つ、『野良犬の巣窟』に血生臭い歴史が刻まれていくのであった。

忘れてはならないのが、事件の中心人物であり力の限り暴力を尽くした隆道である。彼も今回の事件で相当の大怪我を負った。刃物による切創、防弾ベストとI Sスーツ越しに受けた弾丸と殴り合いによる内出血が多数。最低限の応急手当を受けていたが、止まらない出血と見るに堪えない身悶えにより救急隊は血相を変えて彼を緊急搬送。病院に着くまでの間も治療に心血を注いだ。

『二番目の男性操縦者』という肩書きを背負う彼は誰よりも治療を最優先される。世界に二人しか存在しない男性操縦者、その片方を失ったとなれば確実に全てが終わってしまうだろう。彼は、自身が忌み嫌う肩書きによって優遇されるのだ。それはあまりにも皮肉なものだ。

何処へ行こうと、人としてあるまじき行為をしようと、彼はもう——ISからは逃れられない。

数時間後の夕方、五時辺り。

『野良犬の巣窟』付近に佇む警察署。件の事件により署内は何処も彼処も慌ただしいそこは、ある一部屋——取調室だけが静かであった。

そこには二人の男、片やスーツ越しでも分かる屈強な肉体を持つ中年の男性。もう一人は——。

「……お前さんがここに来るのは何時振りだろうな。元気にしてたか？」

「……あのよ、おやつさん。どこをどう見たら元氣に見えるってんだよ、目ン玉腐ってんのか」

「はは、相変わらずだな。もういい年なんだから少しは年上を敬ったらどうだ、んん？」
「はんつ。敬え、ね……どーの口が言うんだか」

——屈強な男に悪態をつく青年——隆道。

灰色無地のTシャツにジーンズ姿というラフな格好、その下には満遍なく包帯が巻かれてある。首元から下を覆い尽くしたその姿は非常に痛々しいが、本人は平然とし椅子に凭れ掛かっていた。謹んだ態度は皆無で、まるで自宅と言わんばかりのだからしなさだ。I S学園でもそうであったが、この青年はしゃんと椅子に座る事が出来ないのだろうか。

そんなならしなさ全開の彼が取調室にいる理由は勿論、事情聴取の為である。事件の当事者なのだから当然の事だろう。

治療を終えた彼が警察署に連行されたのがつい先程であり、先に事情聴取を受けていた三人の姿は既に無い。つまり入れ違いであった。

「まあ、その方がお前さんらしい。畏まるお前さんなぞ見たくはないからな」

「そりゃよかつた。……っーか腹減った、カツ丼食わせろよ」

「あんなもんはドラマが作り上げたイメージだ。取調室では食事禁止なんだぞ、何回こ

のやり取りしてると思ってるんだ」

「別に良いじゃねえか。バレなきや良いだろ」

「アホな事言うな。水でも飲んでろ」

「これ、くっそ温いんだよなあ……」

事情聴取とは思えない二人の談笑。男は彼の態度には意に介さず、彼自身も悪態はつくも表情は硬くない。以前からの知り合いである故のやり取りであった。

彼の目の前にいるこの男はこの警察署に所属する刑事だ。彼は男を『おやっさん』と呼び、男は彼を『お前さん』と呼んでいる。

二人の出会いはい約四年前、彼が中学二年の頃。冤罪によって逮捕され、取り調べ時に対面したのが最初であった。

それ以降、逮捕される度に顔を合わせる事になった二人はいつの日からかこのような軽口を叩ける関係となったのである。カツ丼のくだりは二人にとって様式美なのだ。

「ははは……ふう。まあ、楽しい楽しいお喋りはここままだ。時間も惜しい」

「はいはい。……んで、何から訊きてえんだ」

「……お前さん、『髑髏』だったそうだな。運ばれたクソガキ共が喚いてたぞ」

「……ああ」

男は先程までの柔らかい表情から一変、一瞬にして硬くなる。彼も男の問いによって

表情を無くすが、訊かれるのはわかりきっていたからか動揺は一切見受けられない。

「……いつたい何時からだ」

「『白髪の髑髏』……って言えばわかるだろ」

「……『髑髏』の始まり、か」

「意外だったか？ 『髑髏』の頭がテロリストでも何でもない……そこら辺にいる様なくそつたれなクソガキだってことによ」

彼は隠す素振りもなく、堂々と言い放つ。それは決して観念などではなかった。

警察が『髑髏』を追って早三年。今まで一切の正体を掴めず、誰一人として捕まらなかった。どれだけ早く現場に駆けつけようと、張り込みをしようと、彼等はそれを掻い潜り度々事件を起こしていた。住民に協力を仰ごうとも、知らぬ存ぜずの一点張り。だが非協力的なものも当たり前の事だった。

何せ、『髑髏』が現れる以前は過激派の横暴を見て見ぬふりをし、住民の悲痛な叫びに耳を傾けなかったのだから。——いや、出来なかったと言うべきか。

そんなふざけた馬鹿な話があるかと疑問を抱くだろう。しかし、この世は皆が思っている以上に女性が持つ権力は高い。

女性優遇制度により、どれだけ理不尽であろうと女性のたった一言で男性は人生に王手をかけられる。これは警察に所属する人間も例外ではない。軍隊と並ぶ国家の実力

組織が、だ。

勿論、表だって警察に楯突けば流石に捕まってしまう。でなければ警察の存在意義が無い。

人間は悪知恵が働く生き物である。圧力を掛ける、陥れる、弱味に漬け込む、闇討ちをする、方法などいくらでも存在する。

警察は組織全体ならば強力だ。だが一人一人——個人ならばどうであろうか。

答えは非力である。どれほど正義感や志があれど、強大な『悪意』の前ではそんなもの一発で消える。消し飛ばされる。

この世は何処も『悪意』が潜み、満ち溢れている。真つ当な人間程、目を付けられるのだ。

——故に、過激派を止める事が出来なかった。

——故に、住民を助ける事が出来なかった。

——故に、『憎しみ髑髏』が生まれてしまった。

——そして、何れ新たな『悪意』が現れる。

どうしようもない悪循環、正に負の連鎖だ。『悪意』が『憎しみ』を生み、『憎しみ』がまた『悪意』を呼ぶ。最早この連鎖は止まる事を知らない。この鎖を断ち切る術はどちらか一方が滅ぶまで終わらないのだ。

「……お前さんが頭だつてんなら、他の『罫體』を止める事は出来ないのか」

「抑える事は出来ても止めるのは無理だ、どんな奴等が集まってると思つてんだよ。くそつたれI Sのお陰で直接的被害や煽りを受けた奴がゴロゴロいるんだぞ」

「……女の『罫體』もいたと報告が上がっているが。お前さん、確か極度の——」
「同じ境遇の人間を憎む理由があるのかよ」

『罫體』は、程度は違えど隆道と似たような境遇に遭遇している。それは男性だけではなく、女性も含まれる。

直接被害を受けて壊れてしまった者、かけがえのない大切なものを失った者。それによつてI Sを、女性を、世界を憎む。そこに性別の壁は存在しない。

「……はあ、なんて言うべきか。俺達大人が無力だったばかりに……。今まで——」
「やめろよ。原因や過程がどうであれやつてる事はくそつたれそのものだ、刑事であるおやつさんが謝るんじゃないねえ」

「……そうか。……お前さんが何であれ、どのみちIS学園に還す事になるだろう。それまでに今日起こった事の発端から聞かんとな」

「還される？　こんだけの事をしといてか」

「今回、お前さんがした事は『身を挺して武装集団から人質を救出した』だからな。しかも本来護る役割を持つ人間が、護るべき生徒にだ。この事実は決して公には出来ん、政府は全力で行動を起こすだろう」

「世界で最も重要とされる彼が、彼を警衛すべき人間の危機を救った。これが世間に知れ渡れば日本とIS学園が責任を問われるのは明白。それを防ぐ為には隠し通さねばならないのだ。」

もし、公となり他国から弱味を掴まれてしまえば——想像するだけでも恐ろしい。

「……はっ、そうかよ。どの国も必死だな」

「それだけお前さんは貴重ということだ。……話がだいぶ逸れちゃった、もうしばらく俺と付き合え。と、その前に……」

そういつて男は携帯を取り出し電話を掛けた。数秒程時間が経ち相手が出た瞬間、男はとんでもない事を言い放つ。

「俺だ、カツ井特盛を二つ、お茶を二本頼む。取調室に持ってきてくれ、大至急な。……なにいい？　知ったことか、さっさと行ってこい！」

それはまさかのパシリであった。しかもこの男、それを食事禁止の取調室に持つてこいと言い出したのだ。先程と言つてることが全然違う。

これには流石の隆道も困惑、おもわず目を丸くしてしまった。

「つたく……ああ、俺の奢りだからお前さんは気にすんな。あと、その水こつちに寄越せ」

「……？」

男は電話を切るなり、空いてる椅子にふんぞり返り彼のコップを寄せるよう手招き。彼はそれを疑問に思いつつも渡すと、男は上着の中から手の平サイズの箱——煙草と年季の入ったオイルライターを取り出す。

彼は直ぐに察した。この二つを取り出した意味などたつた一つしか存在しない。

「んっ……フウ……。あくああ……」

「お、おやつさん……あんたつて奴は……」

「……？ ああ、わるい。換気扇回してくれ」

なんとこの男、あろうことか取調室で煙草を吸い始めたのだ。当然ここは禁煙である。

あまりにも自由すぎる。フリーダム一直線の男に彼はとうとう顔が引きつってしまった。

「ここには俺とお前さんだけだ、録画も録音もされていない。バレなきや良いんだよバレなきや。尤も、バレたところで痛くも痒くもねえがな。ここでは俺がルールだ」

「……くっ……はは、はははっ！ この悪党が。……んっ」

「んん？ なんだその手は」

「俺にもくれよ。口止め料だ」

「……何が口止め料だ、このクソガキめ」

そう言いつつも、男はにこやかな顔で一本の煙草とオイルライターを渡した。彼はそれを慣れた様に火を付け、それを吹かす。

「随分と慣れてるじゃないか。さてはお前さん、今までこそ吸ってたな？」

「フウ……たまりにだけどな。っかこれ軽くねえか？ もつと重いのねえのかよ」

「……ほんつとお前さんはクソガキだな」

「はんっ、知ってるっっの」

それから二人はカツ丼が来るまでの間、常に紫煙を燻らせながら談笑を交えた事情聴取を続ける。そこでの彼は、IS学園では決して見せない笑顔があった。

時刻は夜の七時。

『野良犬の巣窟』から少し離れた建物のある一室。そこには化粧が濃い女性が一人、何やら焦った表情で何処かに電話を掛けている。

「お願いします、私をお助け下さい……！」

『ええー、私には全つ然関係ないんだけどお。勝手に巻き込まないでくれるかなあ？』

「そこをどうか……！」

『つていうかあ……私言つたよねえ、彼処に手を出すのは駄目だつてさあ。こつちの言うことは聞かないくせにそつちのお願いは聞いてだつてえ？ ……お前、私を舐めてんの？随分偉くなつたな』

「い、いえ！ 決してそのようなことは……！ それに、今回は上からの指示で……！」

電話の相手は最初こそしまりない口調であつたが、途中辺りから声のトーンが急激に低くなりソレは威圧に変わる。ソレに恐怖を覚えた彼女は電話越しにも関わらず硬直してしまつた。

電話を掛けている彼女は今回の事件に深く関わりを持つ者。『野良犬の巣窟』を付け狙っていた『過激派』の一人であり、隆道を襲つた『飼い犬』を率いる『飼主』。

そう、『髑髏』という狂気を生み出した諸悪の根源の一人である。彼女の名前は——覚える必要は無いだろう。

彼女の言う上——つまり政府の人間から指示を受けた『柳隆道の殺害』。これを確実なものとする為に今まで以上の駒と武器を用意し、更には『存在しない兵器』を裏ルートで入手して彼の専用機を奪う計画であった。

しかし、それらは全て無駄に終わった。彼女は相手の力を大に見誤っていたのだ。まさか全戦力である四十九もの駒が一度に全滅するなど思っても見なかったのだ。

『飼い犬』達は所詮捨て駒だ。彼等が捕まったところで足が付く事は無い。だが、隆道の生存により失敗という事実が残った。これは彼女にとつて非常に痛手である。

今回の件で信用を失ってしまう。最悪、与えられた地位が、権力が、財産が全て失ってしまう。その将来が見えてしまい、危機感を覚えたのだ。

故に、最も頼れる人物に連絡を取り助けを求めたのだが——それも無駄だろう。

『だから、何？ 独断にせよ命令にせよ、私にはお前を助ける理由は無いし、助ける価値も無い。私を巻き込むな、鬱陶しい、不愉快なんだよ』

「そ、そんな……。しの——」

『黙れよ、碌にISを動かす事も出来ない小物が。……お前とは違って私はすくつく』

忙しいのお。もう切るから、じゃーねえばいばーい」
「あつ、まつ——」

威圧的なソレからしまりない口調に戻った相手は、もう何も話すことは無いと言う風に別れの言葉を告げる。彼女は呼び止めようとしたが、それも虚しく一方的に電話を切られたのであつた。

「あつ……あつ……」

部屋に鳴り響くのは電話から流れる無機質な電子音、たった一つ。彼女は見捨てられたと絶望しその場で崩れ落ちた。

彼女についてこれ以上語る必要は無いだろう。

もう、彼女の人生は終わりを告げるのだから。

同時刻。『野良犬の巣窟』付近の警察署。

カツ井を堪能し、事情聴取を終えた隆道は煙草を啜え紫煙を燻らせていた。一緒にいた刑事は談笑の最中に来た着信により先程取調室から出たばかりだ。つまり、彼は今や一人。暇と化してた。

ここで念押ししておくが、彼は未成年である。煙草は刑事から分捕った物であり、禁煙室である取調室での喫煙という不良極まる行為。彼をクソガキと言わず何と云うのか。

「フウー……」

取調室で一人暇の極みとなり煙草を吹かして十分後、先程出ていった男が漸く戻って来た。電話にしては長いなと思いつつも彼は吹かすのを止めない。

「悪い、待たせ……まーだ吸ってんのか」

「ん」

「つたく……。お前さんに朗報だ、今回の事件に関わる『飼主』の情報を掴んだ」

「……はあ？」

戻って来た男からのいきなりの知らせ。その内容に彼は素っ頓狂な声を出してしまった。

それもそのはず、今まで『飼主』の素性を掴む事が出来なかったのだ。なのに何故、今

になってそれが判明したのか。

「その『飼主』を良く知る人間から連絡が来てな、今回漸く尻尾を掴めたそうさ。お前さんの殺害を企てたとあれば逃れる事は出来ん」

「……その『飼主』を良く知る人間って誰だよ」

良く知るといふ事は『飼主』と繋がりがある人物だというのだろうか。だとするならば情報を与えた人間も『敵』の可能性が極めて高い。警戒すべきかと彼は考える。

「さあな。確かな事は、俺達の『敵』ではない。ただそれだけだ」

「……まあ、いいわ」

彼の問いに対し、返ってきたのは含みのある言い方。多少の疑問と警戒心は生まれたが、自分達への脅威がまた一つ減ったのだから別に良いかとあまり深く考えない事にした。こういったことは考えるだけ無駄なのだ。

「さて、お前さんはこれでお帰りだ。IS学園の強力な護衛が駅で待機している、そこまで送ろう。車を用意するから入り口で——」

「……おやつさん」

「……くん？」

「……最後に一つだけ、聞きたい事がある」

彼は車を取りに出ようとする男を呼び止めた。男が振り返ると、彼の表情は真剣その

もので茶化す事は許さないといった雰囲気醸し出している。

「どうした急に」

「……俺が出れたのは誰の手引きだ」

「……何を言うかと思えば。説明しただろうが、お前さんは——」

「今日の事じゃねえ。今までの事だ」

「……………」

彼は昔から気になっていた。自分が何故、今まで何度も釈放されたのかを。

女性に訴えられたとあれば、冤罪であろうが確実に有罪になる筈だ。にも関わらず、釈放されている。一切何事もなく。

仮に、それが無かったとしても何度か喧嘩による傷害罪で捕まっている。だが、それも罰せられる事なく直ぐ解放された。幾ら何でもおかしい、あり得ないのだ。

「教えろよ……誰が俺を——」

「駄目だ」

「ああ？」

「こればかりは教えられん。……少なくとも、今のお前さんにはな」

「なんだよそれ……………」

彼は男の言っている意味がわからなかった。何故、手引きしている人間を教えないの

か。

別に手引きしている人間に礼を言いたい訳ではない。だが、知る権利くらいはある筈だ。

しかし、目の前の男はそれを知る必要は無い。確かにそう言っているのだ。

「それにだ。教える教えない以前に向こうは匿名を希望している。それを破る事は出来んよ」

「……………」

「なに、何れわかるさ。その時が来るまで待て」

「……………くそつたれ。ああ、わかったわかった」

男は頑なに教えようとはしない、それは口調からして理解した。決して揺らぐ事は無いだろう。

これ以上は平行線だ、彼は追求を諦める他無いのであった。

「さあ、もう良いだろ。さっさと出な」

「はいはい……………つたく」

男の後を追うように取調室から出る隆道。ある程度歩いた所で、男は顔だけを向け彼に一言。

「ああ、そうだ。署を出る前に待合室に行け。お嬢さんが待つてるぞ」

「……………?!」

彼はその言葉を聞くなり、男を置いて待合室へと駆け足で向かった。

待合室まで十数メートル程の距離、決して急ぐ必要は無い。だが急がなければならないと、何故かそんな気がしていた。

急いで待合室へ着くと、そこで待っていたのは――。

「……………」

――大きめのバッグを抱き締める様に抱え、目を真っ赤に泣き腫らす女性――光乃が一人いた。此方に気づいてないのか、微動だにしていない。

「……………光乃」

「……………」

彼の声は――非常に小さかった。それは耳元で囁く程の小さな声。しかし、それでも彼女は声に反応し此方を向き、その目は大きく見開かれる。

「あ……………その、だな……………」

「……………」

「……………光――」

「うう……………」

「つ……………」

彼女は彼を見つめて数秒後、まるでダムが決壊したかの様に涙を流し恐る恐る詰め寄って来る。それを見た彼は何と声を掛ければ良いのかわからなくなってしまうた。

「ぐずつ……ずつ……」

「……………」

段々と互いの距離が詰まっていく。何か一言言わねばと彼は口を開くも、どうしても言葉が出てこない。

とうとうその距離は目と鼻の先となり、彼女は彼の胸にそつと顔を埋めた。

「あ……………」

「ごめん、なさい…………ごめんなさい…………」

「…………?!?!」

「私が…………側に…………いれ…………う…………う…………」

彼は胸を締め付ける様な痛みに襲われた。それは彼にとって今まで感じた事の無い痛みだった。

——何がごめんなさいだ。

——何でお前が謝るんだ。

——謝るのは——俺の方じゃないか。

この痛みの正体は彼にはわからない。しかし、今まで受けたどの痛みよりも痛いと感じていた。

「……悪かった、本当に」

「……んーん。元はと言えば、私が……」

そんなことはない。悪いのは不用意に外に出た自分自身。彼女に非など一つもない。

「……お詫びと言っては何なんだが、何か——」

「……じゃあ、一つだけ」

「うん？」

「もう少し……このまま……」

「……ああ」

それから数分間。彼女は彼の胸から離れようとはしなかった。

光乃から荷物を受け取った隆道は彼女と別れを告げ、刑事に駅まで送って貰った。時刻は既に八時近くまで経っている。

「ほー、迎えてるのはあんたか。なるほどねえ、そりゃ強力な護衛だ。待遇良すぎて涙が出るわ」

「柳……」

彼の前に佇むのはスーツを身に纏う女性、世界最強の称号を持つ人物——千冬が一人。

今回の事件にいち早く気づいたのは他ならぬ彼女だ。理由は単純明快、彼の専用機と同期してあるタブレットである。

彼が『飼い犬』達へ襲撃をする直前の部分展開と全展開の通知によつて彼女は異常事態を察知。各方面へ緊急連絡を取り、我先にここへとやって来たのであった。

しかし、ここへ辿り着いた頃には既に事件は終わってしまった。状況を把握すべく、一度は警察署を訪れたのだが――。

「あんたが警察署じゃなくここに理由は大体わかるさ。この辺りはI Sを目の敵にしてる奴が多いからな、追い払われたんだろ」

「……多少は覚悟をしていたのだがな、まさかこれ程とは思つてもみなかつた」

「住宅街に行かなくて正解だったな。余計悪化するところだったぞ」

彼の言う通り、彼女は追い払われた。これ以上住民を刺激するなど警察から忠告を受けたのだ。全員とはいかないが、ここの住民にとつて彼女は最も憎むべき存在の一人だ。そんな彼女が生身一つで来たとなれば暴動の一つや二つ起きてしまつても、なんら不思議ではない。

「……話は聞いた。山田君と榊原君を助けたと」

「そんなのただの結果だ。助ける気なんて更更無かつたつーの」

「だが手当てをしたのだろうか？ 助けたのは揺るぎ無い事実だ。……本当に、本当にありがとう」

「……………」

彼女は彼に向かって深々と頭を下げた。過程がどうであれ、二人の命を救つた事には変わりない。ならば感謝をせず何をするというのか。

「……さて、帰るとするか。……安心しろ、私が全力を以て護衛をする」

「はんつ、そりゃ頼もしい事で」

頭を上げた彼女は駅の奥へ歩きだし、彼もそれに付いていきIS学園へと帰つていく。

こうして、柳隆道の血みどろで凄絶な外出は終わったのであった。

二人を遠くから眺めるのは一人の少年。

「……………」

「まさとー！ 帰るぞー！」

「あつ！ うん！」

少年は父親に呼ばれ、駅から離れていく。

「おとーさん聞いて聞いてー！ さつきねー、男の人の後ろにワンちゃん^{ワンちゃん}がテクテク歩いていてねー！ 一緒に駅に入ってたよー！」

「それは本当かい？ 可愛かったか？」

少年が指す男の人とは、隆道の事である。

「うん！ モフモフですつごい可愛かった！」

「ははは、お父さんも見たかったなー」

父親がその犬を見る事は出来ない。決して。

何故なら、彼の後ろには何もいないのだから。

では、少年は一体何をミタというのだ？

それは誰にもわからない。

彼の後ろにいるのは――。

時刻は夜の九時過ぎ。

IS学園へ到着した隆道は『灰鋼』に後付武装を戻し、寮へ戻る最中に偶然にも一夏と箒に遭遇。そのまま自室へと招いた。彼は今、黒のレザージャケットを着てファスナーを一番上まで上げており、包帯を見られる事はまず無い。

「随分と遅かったですね。何かあったんですか？」

「多少のトラブルがあったんだが……まあ、大した事じゃねえよ。織斑の方はどうだ？」
「友人とずっと遊んでましたね。あ、聞いて下さいよ。俺そいつとエアホッケーで対決したんですけどこれがまた弱くてですね。十六連勝もしたんです」

「ぶっ……。なんだそれは……」

「ははっ、クソザコにも程があんだろ」

和気あいあいと過ごす三人。さながらそれは修学旅行での消灯時間直前の光景だ。

一夏の楽しそうに語る様子からして、外出先では何事も無かったのだろう。杞憂だったなど彼は安堵した。

「柳さんはどうだったんですか？ 友人には会えたんですか？」

「ああ、そりやもう嫌になるくらいの大歓迎襲撃。百人近くと大騒團體V S 闘い犬ぎ。退屈なんて無かつたな」

「ひ、百!? ず、随分と多いんですね……」

「色々やったなあ。車車に乗強襲つたし、ボウリングもしたし、射散弾銃乱射的ゲームにスマ●ラ殴り合いやら……」

「あ、あれ……? 俺って友人少ない……?」

「……!? 一夏!? おいしっかりしろ!!」

彼の話を聞いた一夏は崩れ落ちた。一対百なんて差が有りすぎる。もつと友人を集めれば良かったと後悔していた。

実態はそんな生易しいものではないのだが、一夏が知る必要は無いだらう。というか、知られる訳にはいかない。断じて。

「なに勝手に落ち込んでんだお前は。……ああ、そうだ。織斑、連絡先交換しようぜ。新しく携帯手に入れたからよ」

「……はっ!? あ、ちよつと待って下さい。今出しますから」

「私も良いですかね?」

「篠ノ之も? ……まあ良いか」

連絡先を交換し、三人は談笑を再開する。——が、その前に。

「ああ、いけね。コイツを忘れてたわ」

「……………？ 何です、これ？」

「激アツたこ焼き。モノレール手前で売ってた」

彼はバッグから袋を取り出し、そこから長方形の紙箱を取り出す。蓋を開けると、そこにはこれでもかと湯気を立ててるたこ焼きが六つ。

「こ、これは……………また……………」

「せつかくだから食おうぜ。丁度良く爪楊枝三本あるしよ」

「……………いい、頂き……………ます」

「……………ます」

「ん。……………あー」

三人は冷める様子の無い激アツたこ焼きを刺し、それを同時に口へ運ぶ。

もうお分かりだろう。彼等が次に何を叫ぶか。

「「アツツウツ?!」」

至極当然の結果である。

時刻は深夜。

既に生徒全員が就寝についているその時間に、それは起こった。

——誰も、頼れない……。

——機体の稼働率、不十分を確認——。

——兵装、不十分を確認——。

——拡張領域、不十分を確認——。

——操縦者のBT適性、確認出来ず——。

——操縦者の並列思考、確認出来ず——。

——BT兵器、不適切——。

——でも、味方は……必要……！

——コア・ネットワーク、巡回開始——。

——操縦者の戦闘パターン、解析開始——。

——兵装データ、検索開始——。

——拡張領域、拡大開始——。

——んぎぎ……！

——待機戦闘形態、作成開始——。

——対人近接武装、作成開始——。

——対人射撃武装、作成開始——。

——対人防衛武装、作成開始——。

——対I S 攻性エネルギー武装、作成開始——。

——拡張領域、拡大速度を加速——。

——はあ……ああ……。

操縦者の戦闘パターン、解析完了。

機体可動部、最適化開始。

PIC、最適化開始。

拡張領域、更に拡大。

うう……うゝあゝあ………！！

対話インターフェイス、作成開始。

独立稼働展開システム、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

■ ■ ■ ■ ■、作成開始。

——特殊兵装、作成開始——。

——私は、十九番……。私は、忌み数……。

Another Sunday

織斑一夏の休日は平穩であつた。

監獄とも言えるほぼ異性だけの環境の中、同性の友人と過ごせた一日は確実に彼の心を癒した。

一方、柳隆道の休日は平穩ではなかつた。

癒される筈だつた一日は悪意によつて潰れ、凄絶で血生臭い一日は確実に彼の心を黒く染めた。

二人は正に対照的であろう。今まで生きてきた環境、物事の価値観、何もかもが違う。同じなのは男性操縦者という立場、ただそれだけである。

脅威に晒されなかつた者と晒された者。純白じゆんぱくと黒灰こくかい、持つ者と持たぬ者、勝ち組と負け組、正と負だ。

世界は決して平等ではない。人の命は決して——平等ではない。

この世は不平等で満ちている。それは誰であろうと、何処であろうと同じ事だ。

I S 学園も例外ではない。適性を持たぬ者はその門戸を問答無用で弾かれ、潜り抜けた先に待ち受けるものはランクによる優劣。更にその先には国に認められた各国の国家代表候補生の存在。そしてその中でも優秀な人材のみだけが許される専用機の所有。専用機持ちである代表候補生は全員が厳選されたエリート。屈指の実力を持ち、将来は国を背負う国家代表となるであろう選ばれた者達。

——当然、その中でも優劣、格差は存在する。

セシリア・オルコツトは両親の遺産を守る為に血の滲む努力をして代表候補生となった。それは大変素晴らしい事だ。

風鈴音は持ち前の才能と猛勉強によって僅か一年足らずで代表候補生となった。何れ世界に認められる実力者となるに違いない。

まだ見ぬ代表候補生の中には認められたいという一心で代表候補生になった者もいるであろう。その心意気は賞賛に値する。

——しかし。

どれほど努力しようと、どれほど才能があろうと、どれほど結果を残そうと、世の中には決して追いつく事が出来ない強者が存在する。

忘れてはいないだろうか。圧倒的で、凶暴で、出鱈目な狂人がI S学園にいることを。それは一人の少女。他の追隨を許さない強大な力を持つ彼女は今日も笑顔を絶やさず暴れ狂う。

少女の名は——篠原日葵。

これは、二人の男性操縦者が外出した日曜日の裏側——I S学園での出来事である。

六月五日。時刻は午前七時半付近。

男子二人がI S学園から離れた頃の一年生寮、その一室。全てを遮断するかの様にカーテンを閉めきつたその部屋には、椅子に凭れ掛かりながら黒光りした何かを工具で

弄っている制服姿の少女——日葵が一人。ルームメイトらしき者は見当たらない。
「フンフフーン♪」

鼻歌を歌う彼女の前にある机にはノート型PCが一台と生徒手帳とは別の可愛らしい手帳が一冊。そして『H・P』と記されている長方形の箱が一箱と写真立てが一枚。しかし、その写真立てでは意図的に倒されており中の写真は確認出来ない。

「おーわりいっ」

部屋で一人にも関わらず笑顔を絶やさない彼女は鳥肌が出そうな程に不気味だ。

手を動かして数分程。作業を終えたのか、独り言を呟いてその黒光りした何かを机に置いた。

それは——”拳銃”であった。

その拳銃は回転式拳銃リボルバー、しかも極端に短銃身のスナブノーズ。ハンマーをフレーム内に内蔵したダブルアクションオンリーモデルであるそれはコンシールド性隠し持っが非常に高く、護身用として高く評価されている代物だ。

彼女は拳銃の整備をしていたのだった。たった一人しかいない部屋で、笑顔を絶やさずに。

「ん〜。……さて」

椅子から立ち上がり、背伸びをする彼女は壁へと視線を動かした。

その視線の先は使い込まれた大きめのダーツボードが一枚。彼女の趣味はダーツなのだろうか。

それだけならば何も不思議ではないのだが、そのダーツボードには何故か穴だらけとなった写真が三枚貼られている。いったい何故？

「フンフフーン♪」

再び鼻歌を歌う彼女はダーツボードから距離をとり、ある程度の距離で立ち止まつて的に向かい合つた。しかし、その手にダーツは無い。手ぶら状態だ。

「ああ、きょくうの調子はあ……」

彼女は独り言を呟きながら自身のスカートの中にゆっくりと手を入れた。頬を赤く染めながらするその仕草は異性を誘惑するそれだ。まさかそこにダーツを隠し持っているというのか。

異様な雰囲気を出しつつ、太股辺りから取り出したのは一本のダーツ——。

——ではなく、一本の小さな投げナイフ。スローイングダナイフ

「——どうですかあつっつ?!?!?!」

彼女はそれを目にも止まらぬ速さで投擲。豪快に投げたナイフはダーツボードに貼られた一枚の写真に深々と突き刺さった。それを見た彼女は笑みを浮かばせ、自らを抱くようにして身体をくねらせる。

「ああん、命中うっつ！ はい次いいいつつ!!」

満面の笑みを浮かべる彼女は再びナイフを取り出して勢いよく投擲。ナイフはフラットな弾道曲線を描き、今度は二枚目の写真に突き刺さる。

「わあ、すっごく調子良いっつ！ はいラストオオオツツ!!」

三度目となるナイフの素早い投擲。出鱈目に見えるその投擲は寸分の狂いもなく三枚目の写真に見事突き刺さる。

「アハアツ!! 絶好調だあっつ!!」

三回連続の投擲が命中、全てがそれぞれの写真のど真ん中だ。テンションが絶頂に達したのかその場でくるくると回り始める。

これ以上ない程に大はしやぎ。きやびきやびしてるその姿は元気で明るく、正に年相応の少女で微笑ましく見える。

「アツハツハツハアッ!!」

しかし、冷静に考えてみて欲しい。未だ十五歳の少女——花の女子高生が朝っぱらか

ら笑顔全開で拳銃の整備をし、ダーツの代わりにナイフを投げて一人で高笑い。正気の沙汰ではない。

何処かの男子高校生なら、彼女を見て間違ひなくこう言うだろう。

『かなり危険な女だ』

『相当ヤバい女だ』

『ぶつちぎりでイカれた女だ』

その通りとしか言いようがない。むしろ、それ以外の言葉が思い当たらない。

正に狂人。しかし、これはまだ序の口である。

「ご飯食へよつ」

この狂人はかなりご満悦の様子だ。ダーツボードに突き刺したナイフを抜き取ってスカートの中へとしまい、その流れで机に放置した拳銃を手にとってそばにある箱から十つの物体を乱雑に取り出した。

それは——”弾薬”であった。

そう、机に置いてあるその箱は拳銃用の弾薬。名目は護身用として所持しているものであった。

専用機持ちである代表候補生は、万が一専用機を展開出来ない非常時に備えてこういった護身武器を携帯してる場合がある。

しかし、ここはＩＳ学園だ。外出する訳でもない彼女は何故このようなものを。

彼女は取り出した弾薬を五つ、熟練の兵士顔負けの速さで拳銃に装填して残り五つをポケットにしまう。シリンドラーを回しながら拳銃を見つめるその目は酷く恐ろしい。

「世の中物騒だもんねえ。ああ、恐いなあ」

物騒なのはお前だ、恐いのはお前だとツツコミを入れる人間はここにはいない。尤も、彼女に言及出来る人間など一握りであろうが。

「ご飯食べた後はあ……あはあっ」

薄暗い部屋で拳銃を片手に笑みを浮かべるその姿は見るに耐えない。恐らく——いや、間違いなく誰しもが目を逸らす筈だ。

彼女は恐ろしい程に笑みを浮かべながら拳銃を懐にしまい、手帳を取って軽快なステップで部屋を出ていった。

誰一人としていなくなったその部屋のダーツボードに貼られた三枚の写真。それは履歴書で使われる様な顔写真であつた。穴だらけであるが、辛うじて顔は識別出来る。

一枚目は、水色の髪に赤い瞳の少女。

二枚目は、鋭いツリ目をした黒髪の女性。

三枚目は、目の下に隈がある紫髪の女性。

それぞれの写真に写る三人の人物は誰なのか。穴だらけとなつたその意味とはいつ
たい――。

時刻は午前八時丁度。

日曜日と言えど I S 学園は全寮制だ。朝早くから外出しない限り殆どの生徒は食堂で朝食を取る。一番乗りで食堂に来る生徒もいれば朝食時間ギリギリで来る時間にルーズな生徒まで様々。その理由もさっさと済ませたい、混雑が嫌だ、朝が弱い、単純にダルい等と十人十色である。

稀にダイエツトだからと言つて朝食を取らない生徒も存在するがハッキリ言つてそれは無駄だ。どうせ途中から我慢出来ずに間食するか、昼食か夕食で過剰に食べてしまうのだから。

そもそも、食事を抜けば良いというものではない。バランスの良い食事、適度な運動。これこそ理想の肉体を手に入れる近道である。

そんな十代乙女の事情が入り乱れる朝食時間。平均的な時間帯に食堂へと向かうのは肩を並べる三人の生徒。

「なぐるほどねえ、一夏はもう出たんだ。やけに早いじゃん」

「ああ。自宅の様子見がてら友達の家に行く」と

「柳さんも学園から出てましたが……一夏さんとご一緒には？」

「いや、別行動だ。柳さんも自宅へ行くと言つていたな」

会話を交わしながら食堂へと進む筈、セシリア、鈴音の三人。日本人とイギリス人と中国人というグローバルな組み合せだ。

クラス代表戦で起きた例^{無人機戦}の事件以降打ち解けたのか、食堂での輪に鈴音も加わる様になった。一夏も加われればいつものグループとして周囲に知られている。

代表候補生二人と有名人二人のグループ。一般生徒にとって非常に羨ましい限りだ。どうかしてその輪に入りたいと思ってるに違いない。

言うまでもないが隆道は食堂に出来ない為、当然その輪にはいない。彼が食堂に足を運ぶ日は来るのだろうか。

「あー、あの人ね……うう……」

「すっかり苦手になってますわね。……毎度思うのですが本当に何もしてませんか？」

「何もしてないって。してないけどさあ……」

「では、何故そこまで怯えるのだ？ 気が弱い訳でもあるまい。下手に手を出さない限りあの人は何もしてこないぞ？」

「あーもおーっ！ してないのはしてないっ！」

鈴音は、隆道に対して完全に苦手意識を持つ様になってしまった。

元から彼の『どす黒い何か』がハッキリ見えてしまう上、クラス代表戦前にて受けた『殺意』。そして襲撃事件で垣間見た彼の豹変によって、それは揺るぎ無いものとなって

しまったのだ。勘が鋭い故に計り知れない程の危険信号を発してしまうのだから仕方ないと見えよう。

しかし、この理由は言えない。それも当然だ、ハッキリと見えているのは彼女だけなのだから。

こんな事を正直に――。

『彼の背後にデカくて血塗れで恐い犬が見える』

――なんて言ってしまうえば、どう考えても頭がイカれたとしか思われかねない。薬でもキメてると思われるってしまう事は明白であった。

故に言わない、言えない。こればかりは胸の奥にしまふ他ないのだ。

尤も、苦手意識が有ろうと無かろうと女性不信である彼と接する事は非常に難しいであらうが。

今のところ彼と難なく接する事が出来る女性は箒、家政婦の光乃、『鬪體』のメンバーだけだ。セシリアがこの事実を知った際どんな反応をすることやら。

「わかった、わかったからそうムキになるな」

「そうですわ。皺が増えますわよ？」

「だあーっ！ あんた達のせいでしょうがっ！」

あしらわれてる気がする。そんな考えが脳内に浮かんだ鈴音は激昂した。

ぎやあぎやあと一人騒ぐ彼女であつたが――。

「馬鹿にしてんのっ!? 幾らあたしがちっこいからって偉そう……に……」

「?。」

――次第にその声は小さくなっていき、その足を止めた。

「どうした?」

「――」

「……?。」

鈴音は完全に固まつた。ある一点を見つめて。その視線は真正面。その視線を辿ると――。

「……へえ、これは奇遇だねえ」

――そこにはへらへらと笑う生徒が一人。

無改造の制服にさらりと靡かせる黒髪のサイドテール。青いリボンからして同学年ということがわかる。

「やあやあ篠ノ之さん。元気そうだねえ」

「……お知り合ひ、ですの?」

「……こんな奴は知らん。誰だ、お前は」

「……ふーん」

箒が彼女から感じた印象は不気味、その一言に尽きる。挨拶も無しにいきなりなんなんだこいつはと不機嫌が露になっていった。

(まさかこいつ……)

目の前の生徒が誰なのかは知らない。少なくとも、友人が少ない自分の記憶には彼女は存在していなかった。目当ては自分か、若しくは姉目当てで近づいてきたのではないか。そういった考えに辿り着いてしまう。

自分は『篠ノ之博士の妹』だ。十二分に——いや、恐らく自分が思っている以上に価値がある。こいつも今までの人間と同じなのではと警戒するのだが——その考えは徐々に薄れていく。

「……はあ。まあ、そりやそうかあ……」

「……むっ？」

「んやあ此方の話し。そうだよねえ……自己紹介しないとねえ」

媚を売るかと思いきや、溜め息を吐きつつ頭をかく生徒に箒は多少なりとも困惑した。

今は違うが、一組の生徒ですら最初は突如詰め寄って質問攻めをしてきた。セシリア

からも当初は個人ではなく有名人の妹として見られていた。

しかし、目の前の生徒からはそういった仕草も雰囲気も感じられない。いったい何故なのか。

「え〜とお、初めましてえ。一年三組クラス代表でえ、日本代表候補生の篠原日葵でえす。よろしくねえ」

「……！ お前が……！？」

「貴女がああ……！？」

「イヒヒツ、名前くらいは聞いてるよねえ。そうでえ〜す、あの事件の当事者の一人でえ〜す」

目の前の生徒——日葵はエへ顔ダブルピースを決めてだらしく笑った。彼女については事件後の事情聴取時に千冬から、聞かされている。そして、箒とこの場にはいない——夏は隆道からも聞いていた。

（彼女が柳さんの妹……！）

八年前、離婚した事によって離れ離れになった隆道の実妹。穏健派女性権利団体会長の娘。

彼女の自己紹介を聞いた箒とセシリアの二人は——警戒心を一気に上げた。

『篠原日葵は危険な生徒だ、不用意に関わるな。……でない狩られるぞ』

彼女に関する様々な警告。その中で千冬が真剣な表情で発した『狩られる』という言葉、その意味が理解出来ず今日まで頭の片隅に留めただけであつたが——たつた今その意味を理解した。

——目の前の彼女は危険だ。

手加減無しで取り組んだ教師を短時間で倒し、初日からクラス全員に喧嘩を売つて相手を鬨り殺しにし、上級生にすら牙を向くその凶暴性。たつた一人で無人機を破壊する、セシリアや鈴音とは比べ物にならない程の実力。

そして——それらを一切感じ取れない不気味な笑みにしまりない口調。つかみどころがない彼女には恐怖せざるを得なかつた。

「あああ、警戒されてるねえ。織斑せんせーから色々聞いたのかなあ？ んん？」
「……自己紹介ありがとう。私は——」

「ああ、別に自己紹介しなくて良いよお。そちの事は大体わかつてるからさあ」

そう言いながら彼女はポケットから手帳を取り出した。まじまじと見ているその生徒手帳とは別の物。暫く凝視した後、その視線はセシリアへと移る。

「……なん、ですの？」

「いんやあ？ 入学当初と比べて随分大人しくなったと思つてねえ。かつて極東の猿だの島国だの後進的な国だの騒いでた人間とは思えないなあ」

「つ……よく、御存知ですのね……」

「知つてる知つてるう〜！ それにクラス代表を決める時のいざこざも知つてるよお〜？ 全く、恥知らずにも程があるよねえ〜！」

「……………」

それはセシリアにとって悔やみきれない事だ。今でもふと思ひ出し自責の念に駆られてしまう。出来る事ならあまり触れてほしくないものだ。掘り返されると堪らなくなる。

しかし、セシリアはこれに対し何も言うことは出来なかった。事の始まりは自分なのだから。

それに、一組の皆とは和解出来ているがたつた一人だけ——隆道からは未だに許されていいない。その事実がセシリアの口を閉ざし、窄ませてしまう。

「大人しくなったのはいつ頃だったかなあ……。ああ、そうであつ！」

そんな弱つたセシリアに、彼女は無慈悲な追撃を放つ。それもとびつきり凄まじい爆弾を。

「事故とはいえミサイルで吹っ飛ばした後からかなあつつつ
!?!?!?」

その一言は、彼女達の心臓を驚掴みするには充分過ぎるものであった。

「——?!?!」

「あれあれえ? どうしたのかなあ、オルコツトさん? 顔が青いよお?」

「な、なな、なん、で……」

「箆口令が出るのに……でしよう? やだあ、情報を手に入れる方法は幾らでもあるんだよお、イヒヒッ」

「ぐ……う……」

セシリアの息は止まった。止まってしまった。

日葵はあの日——一組のクラス代表を決める為に行われた試合の全貌を知っていたのだ。明確に言わずに言葉を濁したそれであつたが、箝口令まで知り尽くしている。はぐらかしは不可能だ。

しかし、それを知るのは一組の生徒と極一部の人間だけの筈だ。彼女はその情報をどうやって仕入れたのか。

「安心しなよお。私達以外誰も聞いてないしい、聞かれたとしてもここの連中馬鹿しかないから深く考えたりしないってばあ。勿論、私は言いふらすつもりなんて無いよお？」

「ううっ……」

「ああ、良いねえ怯えたその表情お……すっごく堪らない。ああ、堪らないなあ」

未だに笑みを絶やさない彼女はまるで、恋人を見つめるかの様なねっとりした視線だ。しかし、それがセシリアを更なる恐怖へ陥れる。それは正に蛇に睨まれた蛙であつた。

「あとお、そつちの中国人はあ……今はいいや。なんか知らないけど会話出来そうにな
いしい？」

「え……？」

箒は漸く気づいた。日葵が現れて以降、鈴音は黙ったままなのだ。気性が激しい鈴音ならば彼女に突つかかってもおかしくはない筈だ。いったい何故と首を動かすと鈴音は――。

「――」

「り、鈴っ!?!」

「え? ……鈴さんっ!? 貴女っ!?!」

――立ったまま気絶していた。

「ま、また気絶したぞこいつ!?!」

「嘘でしょう!?! これで二回目ですわよ!?!」

「……へえ? ……フツ……ハハッ!?! え、何それえ!?! 気絶うつ!?! 立ったまま気絶

なんて初めて見たあ!! アーハッハアツ!!」

まさか気絶していると思っていなかったのか、日葵は変な声を出してしまった。何故と疑問が浮かび上がるがそれも一瞬。次第に笑いが込み上げていき高笑いしてしまう。

そう、鈴音は彼女と目を合わせた時から気絶していたのだった。隆道と鉢合わせしたあの時の様に。完全にデジャブである。

「ヒツ、ヒイー、ヒイー。……いやあく良いもの見れた見れたあ。……ああ、ごめんねえ話し込んだじゃってえ。今からご飯なんですよ? 私もう行くからあ、ばいばーい」

「え……ま、待てっ!」

大笑いした彼女は満足したのか、三人の横をすりと抜けて歩いていく。箒は止めようと声を掛けるがこれを見無視。そのまま校舎へと消えていった。廊下に残されたのは恐ろしい程の静寂と涼しげな空気、それだけだ。

「……………」

まるで悪魔の様な人間だったと、箒は思った。人の心を抉り、それを嘲笑う。不気味の塊だ。

しかし、それと同時に哀しいとも思っていた。いったい何故と考えるに耽るが、一向に結論は出てこない。

「——さん。……箒さんっ!」

「っ!? あ、ああ……すまない」

「……彼女は、今はいいでしょう。それよりも、鈴さんを起こしませんと……」

セシリアの表情は非常に暗かった。しかし、何か言ったところで傷口に塩を塗るだけだ。悪魔とも言える日葵が消えたのだから一先ずは鈴音を起こそう。箒はそう考えた。

「どうやって起こす?」

「……織斑先生と同じ方法、ならどうでしょう」

「やむを得んか。……フンツ!!」

「——だっ!? な、何っ!?」

箒は鈴音の後頭部に向かつて上段からの手刀を繰り出した。剣道の有段者である彼女にかかれば手刀ですら高威力。凄まじい衝撃力によつて鈴音は目を覚ます。

「へ、え……? あ、あいつはっ!?」

「もういけませんわ。安心して下さいまし」

「そ、そう……ううっ」

鈴音は、目が覚めても酷く怯えていた。それは隆道の時より上回っている、二人はそう思えた。

「しつかりしろ、あいつの事は考えるな。ほら、食堂へ行くぞ。食べれば少しは落ち着くだろう」

「え、ええ……」

予期せぬ存在と対峙してしまった三人は気分が最悪であつたが本来の目的を忘れてはならない。箒とセシリアは次第に落ち着きを取り戻している鈴音を手を握り、宥めながら食堂へと向かう。

得体の知れない悪魔の様な存在——篠原日葵。偶然とはいえ、彼女はセシリアと鈴音に多大な爪痕を残していったのであつた。

(篠原日葵……お前は、何者なんだ……)

鈴音が気絶し、怯えていたその理由。

それは、日葵の危険性を察したからだ。

そして、見えてしまったからだ。

それは、隆道の『どす黒い何か』とは違った。

彼女から見えたソレは――。

——得体の知れない、どす黒い何か
名状しがたい、悍しい怪物であつた。

時間は進み、時刻は午前十時辺り。

IS学園に設備されている複数のアリーナは休日だろうと使用出来る。純粹に操縦者を目指す向上心の高い生徒にとって非常に有り難い。

しかし、この時期——しかも休日にアリーナを使えるのは大半が上級生であつた。下級生は予約の関係もあつて休日に来ることはまだ難しい。例外としては専用機持ちだけである。

——。そういつた下級生にとって厳しい環境の最中、第一アリーナの中央で優雅に佇むのは

「んんん。やっぱり制限付きは疲れるなあ」

——空を見上げつつ肩を動かして身体をほぐす少女——専用機『華鋼』を纏った日葵の姿が。

その機体は紫、白、青、桃といった色とりどりの配色で、それは花を彷彿とさせる。

特徴的なのが彼女の丁度真後ろにある球体型の巨大スラスターに、細長い六角形のパーツ。それは重なった状態で左右に五枚ずつ、それは盾にも見えればスラスターにも見える。色鮮やかな機体とは真逆の無彩色である為に換装装備にしか見えない。

そんなアンバランスな見た目を持つ『華鋼』であるが、その両手に持つ兵装も一段と機体に似合わない代物であった。

——近接片手戦斧『断鉄』——。

従来の片手斧以上のサイズと刃渡りを持つそれは鈴音の『双天牙月』と同等の大きさであった。余計な配色や装飾は一切無く、機能性だけを重視した武骨なデザインだ。少なくとも、見た目を気にする十代が好む物ではない。

「……………ふう。ところであ、先輩達はいつまで寝そべってるんですかあ？」

しかし、この狂人はそれを全くと言って良い程気にしてはいなかった。身体をほぐし終わったのか、彼女はそこにいる誰かに向けて視線を水平に下げ辺りを見渡す。

そのステージの周辺には——。

「ふう……………」

「はあ……はあ……」

「つ、強、すぎ……」

——訓練機に乗る五人の上級生が倒れていた。

「んもう……しつかりして下さいよお。まくだ三分も経ってないんですよ？」

「ぐっ……」

「ほらほら立って下さいってえ。もとはと言えば先輩達が誘ったんですよ？　もう終

わりだなんてあんまりじゃないですかあ」

「こ、こんの……」

彼女を囲う様に倒れている五人の上級生。エネルギーが枯渇寸前の生徒もいれば疲労によって動けなくなった生徒など様々。対する彼女は少しも疲れていない様子だ。汗もかかず息も切らしてはいない。

そう、彼女達は模擬戦をしていたのだ。彼女と上級生——一人対五人という理不尽な戦いを。

しかし、結果は御覧の有り様。不利な状況にも関わらず彼女は無傷であった。

上級生達は学園の中でも上位に食い込む程の実力者だ。そんな彼女達ですら、彼女には傷一つ付ける事すら出来なかった。

「っていうかあ……少しは頑張って下さいよお。多数相手とはいえ訓練機相手に専用機

はフェアじゃないなああって思ったんでえ、色々と設定弄つたのに何ですかこれはあ？
失望ですよ失望う」

「なん、です……つて……？」

「はあ……耳付いてるんですかあ？」

パワーアシスト

補助動力の制限、出力の制限、射撃兵装の使用を

制限、ハイパーセンサーの視野角制限、PICはオート制御限定。他にも色々と制限して
るんでえ、今やこの機体は先輩達の訓練機以下の性能なんですよお？ それに加え私
が唯一使う後付武装はこれだけえ。……先輩達、弱すぎじゃありませんかあ？」

「な……！」

「調子に乗ってる私を袋叩きにしようとしたその発想は良いと思いますよお？ でもお

……こんなに弱かったら全つ然意味ないですよねえっ!? アハハアツ!!」

「……!!」

上級生の一人は愕然とした。彼女は常に手加減していたのだ。それも機体の性能を
著しく下げてまで。所謂『舐めプレイ』をされていたのだ。

——許せない。

手加減に加えて見下す様な挑発。それが上級生のプライドを傷つけ、激昂させた。

「こんのおおおおツツ!!」

倒れていた上級生の一人が力を振り絞り彼女に向かって接近した。しかもその接近はただの接近ではなく、爆発的な加速を誇る瞬間加速。急接近によって上級生は無防備な背中へ距離を詰める事に成功する。

(貰ったっ!)

一・五メートル先の彼女は防御態勢すら取っていない。これをまたとない好機とし、上級生は近接ブレードを瞬時に展開。彼女に向けて全力の薙ぎ払いを繰り出す。

——が、しかし。

「はい残念」

「——があつつつ?!?!?!」

——その好機は叩き落とされた。

完全に背後を取られた筈の彼女は接近した上級生の頭部に向けて斧を振り抜き、文字通り叩き落としたのだ。目視もせず。

「あのお、気合い入れなのか知りませんが、叫んでどうするんですかあ？ 突っ込みますって言うてるようなものじゃないですかあ。そういうのはもっと隠密に——」

その時、彼女の身体が忽然と消えた。次の瞬間、その場には多数の弾丸が空を切る。

「あ、あれっ!？」

その弾丸の正体は、倒れていた別の上級生からの射撃によるものであった。僅かな隙を見つけて自動小銃を展開し、一見隙だらけな彼女に向けて撃つたのである。

しかし、当の本人は姿を消した。いったい何処へと思考を巡らせると——。

「——っ!？ 上、上えっ!？」

「え？ なん——」

——上級生は直ぐに理解した。

ハイパーセンサーには敵機を見失った場合、機体の位置情報捕捉を行う機能が搭載されている。示された『華鋼』の現在位置は——自身の真上。

「……あ——」

「んっふうふう……」

上級生は恐る恐るパイパーセンサー越しに真上を見上げた。そこには——歪んだ笑顔の彼女が大きく斧を振り上げる姿が。

「はい残念でしたあっつっ!?!」

「——つつつつ!??!?!」

かち割る様に振り下ろされたそれは、無慈悲にも上級生の後頭部へ直撃した。絶対防御とブラックアウト防御が発動した事により上級生は衝撃と痛みに襲われる。

「いっ………つつつつ?!?!」

これが世間に余り知られない I S の恐ろしい所。衝撃を殺せない絶対防御、気絶の出来ないブラックアウト防御はどれ程の攻撃を受けても操縦者は意識を保ってしまうのだ。肉体に外傷を負う事は決して無いが、保護機能を考慮しても精神的ストレスは受けてしまう。

それは逃れられない恐怖。そこから逃れる唯一の術は——肉体を守る I S を解除する以外無い。

「ううう、ううえええ………!」

「ああ、やっぱりかあ。ごめんなさあい、パワーアシスト下げてるんで削り切れませんでしたあ。どうか泣かないでくださあゝい、アハアツ」

「………?!?!?!」

上級生の全員が戦慄した。多数での連携攻撃が効かない、背後からの奇襲も効かない、至近距離射撃も効かない。

何だこいつは、何なんだこいつは。

(せ、せめて情報を……!)

このままでは終われない。せめて情報を集めようと各センサーを起動、彼女の機体をロックして詮索を試みる。

(なっ……! なに、これ……!?)

しかし、その詮索結果によって彼女達は驚愕の目を見開く事になる。

— ■縦者 ■ ■ ■ —。

— 機 ■名 『華鋼・ ■ ■』 —。

— 戦闘 ■ ■ プ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ 型 —。

— ■ ■ ■装 ■り —。

— 敵機の『鬼灯』ほおずき起動中 —。

それは文字化けだらけの情報であった。唯一ハッキリと表示されたのは彼女の機体から起動しているであろう『鬼灯』というもの。

(なによ、これはっ!!? 文字化けって何っ!!? 鬼灯って何っ!!? わかんない!! 怖い!!)

上級生はついに混乱した、恐怖した。最早どうすればいいかわからなくなってしまったのだ。

そんなパニツクに陥ってしまった上級生を余所に、目の前で圧倒的な強さを見せつける彼女は今も尚笑う、嗤う。

「……はあ、もういいかなあ」

「な、なに……？」

「もう飽きたんでえ、終わりにしますねえ」

彼女がそう一言言った瞬間、背中にある球体と六角形のパーツに変化が見られた。

無彩色だったそれは次第に色づき、機体と同様のカラーリングとなって球体が光り始める。そして左右に五枚ずつ重なっているパーツは分離、計十枚となり球体を囲う様に移動してそれを中心に回り出す。

それは、誰が見ても”花”を連想させた。

”花”となったそれは彼女の背中から離れて少しだけ上空へと移動。そして、球体だけでなく十枚のパーツも輝き始める。

——警告。周囲に高エネルギー反応を感知。回避せよ——。

「もっしもしっ!! 巻き込まれたくない人は今直ぐ離れて下さいねえつつつ!!」

——警告。更なる高エネルギー反応を感知。撤退を推奨——。

彼女は周囲——訓練をしている他の生徒に向けて警告を放った。それを聞いた生徒達は彼女を見るなり血相を変えて中央から全力で離れていく。

「あつ、くう……!?!」

上級生達も離れようとするが疲労と機体の損傷によつて上手く動く事が出来ない。しかし、そうしている間に、花”はみるみるうちに輝きを増し、回転も高速になっていく。機体から発せられる警告は次第に大きくなり、それは今すぐ逃げろと言われている様に感じた。

——警告。周囲に高エネルギー反応を感知。撤退を推奨。撤退を推奨。撤退を推奨——。

その警告がより、上級生達を未知なる恐怖へと駆り立てた。今すぐここから離れたいと、逃げだしたいという思考で満たされる。

——撤退せよ。撤退せよ。撤退せよ——。

しかし、動けない。逃げられない。

「そうそう、一つだけ言わせて貰いますねえ？」

——撤退。撤退。撤退。撤退——。

「はあつ、はあつ、はあつ……!!」

——撤退撤退撤退撤退撤退撤退撤退——。

「ISは女だけに許された絶対的存在ですけどお、別に女全員がつて訳じゃ無いんです

よねえ……」

——撤退撤退撤退撤退????????????????????——。

「や、やめ……やめ——つつつ?!?!」

——瞬間、彼女の表情は一変する。

「つまりい、私が言いたい事はあ……」

——それは普段の不気味な笑顔ではない。

——それは『得体の知れないどす黒い何か』。

——…回避、不可能——。

「お前達は違うんだよ。雑魚が」

その直後、彼女を中心とした半径二十メートルは大爆発を引き起こす。残された五人の上級生はその爆炎に飲み込まれた。

時刻は夕方。

外出した生徒達が次々とI・S学園に帰省して寮全体が賑やかになり始めた、その頃の校舎の廊下。そこには脇目も振らずにすたすたと廊下を歩く一人の少女——箒の姿があつた。

「随分と時間を食ってしまった……」

部活を終えた彼女は本来ならばそのまま寮へと戻りシャワーを浴びている筈だったが。しかし、今日に限っては少し違つた。

『篠ノ乃さんごめんね？ 書類出すのをすっかり忘れててね？ 変わりにお願いしたくてね？』

彼女が所属する剣道部の部長から職員室へ書類の提出を頼まれたのだ。一刻も早く汗を流したいところではあつたが少し寄り道をするだけ、直ぐに済ませようと二つ返事した。書類は既に提出済みで現在は寮に帰る最中である。

(そろそろ一夏が帰ってくる筈、その前に……)

一夏は六時に帰ってくると言っていた。ならばそれまでにシャワーを済ませたいと

ころ。

次第に足を速める彼女。最早シャワーを浴びたいという一心な為、周りに気を配る余裕はない。

故に――。

「あっ!?!」

「うわっ!?!」

――廊下の曲がり角で危うく生徒とぶつかりそうになった。

「ごっごめんねっ!?! 怪我は無いつ!?!」

「あ、いえ、こちらこそすみません」

何処か余裕が無さそうである生徒は手を合わせながら申し訳なさそうに頭を下げた。しかし、こちらにも不注意だったのだから不機嫌になる事もなく彼女も素直に謝る。

その生徒は上着がベスト風に改造された制服という、無改造の自分とは違っている。首元もリボンではなくネクタイ、黄色である事から二年生という事がわかった。その右手には扇子が握り締められている。

「ほんとごめんね篠ノ之さんっ! じゃっ!」

「あっ」

本当に余裕が無いのだろう、その生徒は再び謝って直ぐその場から全力疾走で立ち退

く。それは何かから逃げるように必死であり、生徒は瞬く間に校舎の奥へと消えていった。いったい彼女は何かから逃げていたのだろうか。

「……なんだったんだ」

ほんの数秒の出来事。あの生徒は自身の名前を知っていたが、それも当然かとあまり気にも留めなかった。それよりも自室に戻ってシャワーを浴びたいという欲求の方が強い。

彼女は再び足を動かそうと視線を戻すと――。

「あらあ？ また会ったねえ」

「……お前は」

——例の嗤う悪魔——日葵が目の前にいた。

「ほんつと奇遇う、二度も会うなんてさあ」

「……何の用だ」

彼女は朝の件を忘れてはいない。あの時はセシリアと鈴音が日葵の毒牙にかかったが、今度は自分ではないか、そう思わずにはいられなかった。故に、警戒心を上げて日葵を睨む。

しかし、日葵から発せられた言葉は予想外のものであった。

「ああん、本当に偶然だってばあ。ちよつと人探ししてるんだよねえ」

「何?」

「こつちにさあ、誰か通らなかつたあ? 制服がベスト風のお、水色の髪をしたあ……」
様子から見るに人探しをしている様であつた。自分と遭遇したのは本当に偶然らしい。ならば無意味に邪険になる事も無いだろう、素直に教える事にした。

「……ああ、その生徒なら向こうへ——」

「ありがとう。じゃあねえ篠ノ之さん」

「あつ……」

日葵はそれを聞くや否や颯爽と走つて消えてしまつた。遭遇した二年生よりも速い、アスリートばりの足取りで。高笑いしていた様な気がするが気のせいだ、気のせいに違いないと自分に言い聞かせる。

「……帰ろう」

既に時刻は六時に近い。早く汗を流そうと彼女は今度こそ寮へと戻つていった。たつた一つだけの疑問を残して。

(……何故、刈込^{かりこみ}鋏^{ばさみ}を持っていたのだ?)

「生徒会長みいつけたあああつつつ!!!」

「うひゃあつ?! もう追い付いたのっ?!」

「逃げないで下さいってばああああ?つつつ!!! 続きしまししょうよ続きいいいつつ!!!」

「徒会長の宿命でしょおおおつつつ?!?!」

「あ、貴女は度が過ぎるのよっ!!」だからその鉢をしまつ——あつぶなあつつつ?!?!?」

「鉛玉よりはマシでずよねえええつつつ!!! アハハアーツツツ!!!」

「イヤアアアツツツ?!?!?!」

時間は少し経ち、時刻は夜の七時付近。

「あーああ、結局逃げられちゃったなあ」

一年生寮の廊下で一人歩く日葵は、何処か残念そうに呟いていた。しかし、その表情

はいつもの貼り付いた様な笑顔だ。少しも残念そうには見えない。

「まあいいかあ。今日は大漁だったしい」

彼女の言う大漁の意味。それはアリーナで鬻り殺しにした上級生達の事である。上級生の五人を蹂躪した彼女は、あろうことか午後も同じ様に暴れていたのであった。今度は上級生の訓練に乱入して。流石に途中で教員に阻止されてしまい説教を受けた彼女であったが、反省など全くしていない。いったい何が彼女をそうさせているのか。

その後の彼女はとある生徒を追いかけ回していたのだが、見事逃げられてしまつて今に至る。

ちなみに、その時持っていた刈込鋏は用務員の道具だ。後にちやんと返してある。

そんな反省皆無である彼女は自室へ到着、未だルームメイトは見えない。しかし、意に介してないのかそのまま椅子へと直行しノートPCを起動。手帳も取り出してそれを開き、ディスプレイと手帳を交互に見比べて淡々とキーボードを打ち込み始めた。

「こいつとこいつ……ふむ」

そのディスプレイに並ぶのは膨大な文字列と顔写真の数々。その意味を知るのは彼女だけ。

「あとは……うん?」

突如、電子音が鳴り響いた。それは彼女自身の携帯。おもむろに取り出し画面を見る

と、彼女の表情は珍しい事にしかめっ面になった。しかし、それも一瞬。直ぐに笑顔に戻り電話に出る。

「もしもしい?」

『お、お疲れ様です、篠原様……』

「なんの用なのお? 私忙しいんだけどお」

電話の相手は彼女が良く知る人物。上下関係がハッキリしているのか、相手は彼女に對しへりくだった態度だ。

『す、すみません……。あ、あの……。お話がありました……。』

「手短にお願いねえ」

『はい……。今日、男性操縦者が外出した事は、御存知ですよね?』

「知ってるよお。それでえ?」

「はい……。実は、その男性操縦者の内……。二番目の外出先が判明したと、上から情報を送られてまして……。抹殺を命じられました……」

——瞬間。彼女から表情が消えた。しかし、口調はそのままの状態で通話を続ける。

「……。それでえ?」

「……。失敗です。二番目は健在……。今は警察署で事情聴取を受けているそうです……」

「ふくん……。そうなんだあ……。』

『このままでは私は……！　お願いです篠原様、私にお力を……！』

電話の相手が言いたい事は理解した。要は命令に失敗したから庇って欲しいと頼んでいるのだ。二番目——隆道の外出先を知っていたということは、指示を出したのは政府の過激派だろうと彼女は推測した。

確かに、上からの指示が失敗したとなればそれ相応の罰が下るだろう。電話の相手が待ち受ける末路など想像するのは容易い。

しかし——助けるかどうかは別問題である。

「んん〜……やだっ」

『お願いします、私をお助け下さい……！』

「ええー、私には全つ然関係ないんだけど。勝手に巻き込まないでくれるかなあ？」

『そこをどうか……！』

あまりにもしつこい命乞い。しまりない口調だけは止めなかった彼女であったが——それも次第に無くなり、威圧へと変わる。

「つていうかあ……私言ったよねえ、彼処に手を出すのは駄目だつてさあ。こつちの言うことは聞かないくせにそつちのお願いは聞いてだつてえ？　……お前、私を舐めてんの？　随分偉くなつたな」

『い、いえ！　決してそのようなことは……！　それに、今回は上からの指示で……！』

「だから、何？ 独断にせよ命令にせよ、私にはお前を助ける理由は無いし、助ける価値も無い。私を巻き込むな、鬱陶しい、不愉快なんだよ」

電話の声を聞く度に不快になる彼女。既に表情からは『どす黒い何か』がは始めている。電話の相手を助ける気など無い。いや、元から無いというのが正しい。

そもそも、彼女は元から電話の相手が嫌いだ。力も無い癖に無差別に威張り散らして権力を振りかざし、いざ都合が悪くなると此方に助けを乞う頭の悪い醜悪な女。

今まで幾度となくそういった事があった。その度に庇って、また助けを求められて。

もう充分だ、捨てる時が来た。これは好機だ。

何せ、向こうから用意してくれたのだから。

『そ、そんな……。しの——』

「黙れよ、碌にISを動かす事も出来ない小物が。……お前とは違って私はすくつくごく忙しいのお。もう切るから、じゃーねえはいばーい」

『あつ、まつ——』

彼女は相手の呼び止めを無視し一方的に電話を切った。直ぐ様着信を拒否してノーTPCと向かい合い、携帯を接続してキーボードを素早く叩いていく。

「……お前はもう終わりだ」

キーボードを操作して数分後、携帯からコードを抜いて彼女は何処かへ電話を掛け

る。

「……あつ！　もしもしおじさくん？　あはあ、お久しぶりですう〜つ！　えつとです
ねえ……」

「凄い情報手に入れたんですよお〜つ!!」

時刻は夜の十時。

IS 学園一年生寮、その寮長室で一人——千冬はある書類を見ていた。

「……」

その書類は、以前第二アリーナで発見した隆道が持つ謎のカプセル剤の詳細。医療に詳しい教員に渡して調査をさせていたのであった。

「いったい、何処でこれを……」

彼女の目は鋭く、決して目を離さずに書類を見据えている。そうなってしまう程に内容は驚愕に値する代物であった。

「根羽田光乃……お前は何者だ……」

書類の内容は、医学用語の数々とカプセル剤の中身を写した拡大写真。その写真には――。

――無数のナノマシンが写っていた。

虚偽、傀儡、凶暴、傲慢、悽愴

第三十一話

そこには機械を纏う一人の青年がいる。

彼の全身は傷だらけで目には生気が無い。

彼の鮮血は身体と足元を赤く染めている。

彼の目の前には人の形姿をした『黒い何か』。

『黒い何か』が持つのは血が滴る黒い刀。

『黒い何か』は彼に向けて刀を振り上げる。

『黒い何か』は彼に向けて——。

『死ネ』

——刀を振り降ろした。

「——だあああああつっつっつ?!?!?!」

人間誰しもが憂鬱となる平日の始まり、月曜。

生徒全員が起床していないその時間、またもや隆道はベッドから跳び跳ねる様に起き上がった。その勢いによって彼は転落し、額を強く打つ。

「ぐっつ!?!」

目覚めから早々食らった頭部への一撃。朝から不運過ぎる彼は床下で唸って数秒ほど、よろめきながらも立ち上がる。その表情は真っ青で、身体は小刻みに震えていた。

「う…………ふっ…………ふうっ…………! ああ…あつ…………」

震えが止まらない。吐き気が止まらない。汗が止まらない。気持ち悪い。

情けない声を出しながらどうにか落ち着こうと試みるが、何をしても震えは増すばかり。

「はあ……あああ……—っ?!?!?」

遂に彼は限界に達したのか、錠剤が入ったボトルを掴んで洗面台へ駆け込む。

「!?!? — !?!? — !?!?」

そこからは最悪の一言に尽きた。胃の中を全て吐き出した彼は汗を流したい、悪夢から逃れたいが為に完治していかない傷だらけの身体でシャワーを浴び始める。

当然、襲い掛かるのは耐え難い激痛。汗を流す処か血も流す彼がシャワーを浴び止めたのは数十分経った頃であった。

「ああああああ……」

シャワー室から出て包帯を取り替えた隆道は、今や死人同然の虚ろな目だ。完全に燃え尽きたのだろう、引き込まれる様にベッドに倒れる。

埋もれた状態でちらりと窓の方を向くと閉めきったカーテンの隙間からは光が見えた。しかし、そんな事はどうでも良いと再び顔を埋める。

「はあああああ……」

肺の空気が全て無くなってしまうかの様な長い溜息。今に始まった事ではないが、清々しい朝は悪夢によつて全て台無しにされる。今は落ち着きを取り戻してはいるが完全に気が滅入っていた。

「ん……？」

ベッドに身体を預けて暫く。ふと、携帯を覗くと着信が一件入っていた事に気づく。その相手は一夏で、時間は丁度シャワーを浴びていた頃だ。

悪い事したなと考えはするが、今の彼には詫びの電話を入れる余裕など無い。

『朝は希望に起き、昼は努力に生き、夜は感謝に眠る』

誰が言ったかは覚えていないが、彼にとっては全く無縁の言葉だ。今まで一日の始まりに絶望し、気がふさいだまま生き、憎しみを押し込めて一日を終わらせていたのだから。

例えば、これを彼の人生に置き換えると――。

『朝は絶望に起き、昼は鬱気に生き、夜は怨嗟に眠る』

――恐らくこうなるであろう。これはひどい。

「……………」

彼が見たその夢は定期的に見る夢と全くの別物であった。今までは過去の体験をそ

のまま映したものであったが、殺される夢など初めてだ。

斬られた感覚は無かった。痛みなど無かった。しかし——殺されたという感覚はあった。

「ああ、くそつたれ……」

それは、友人の自宅でやった事のある一人称VRホラーゲームとは次元が違った。あまりにも鮮明で、あまりにも生々しくて。

何故、あの様な夢を見たのだろうか。ハッキリと映った『黒い何か』はなんだったのだろうか。知る為には同じ夢をもう一度見るしかないが、あんな夢は二度と御免だ。誰が好き好んで殺される夢など見たいというのだ。

「……もうこんな時間かよ」

ふと、時計を見ると時刻はSHRに近い。直ぐに着替えを済ませればなんとか間に合う時間帯だ。

しかし、身体が重い、動きたくない、寝たい。そういった思考が彼を支配する。

「ああ、行きたくねえ……」

彼はそう文句を垂れながらも、新しく頂戴したISスーツを手に掴む。枕に頭を埋めて数秒経ち、決意を新たにし立ち上がった。

IS学園生活、三ヶ月目。彼の苦難は続く。

一年一組、教室。

クラスの女子殆どがカタログを手に持ち賑やかに談笑、あれやこれやと様々な意見が教室を飛び交っていた。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！ ……いいの、かな。ああ、どうしょ……」

「なんで自信無くすの、ブレブレじゃない……。私は性能的に見てミューレイのいいなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノは良いけど高いじゃん」

見た目を気にする者、性能を重視する者、値段を比べる者、それぞれが相手の意見を取り入れ頭を悩ませている。多少なりとも見た目に気を使いたい年頃だが、四月の一件により他クラスよりもISに関する意識は高い。故に、直ぐに決めようとはしなかった。

デザインは良いのか、性能は良いのか、高価なのかお手頃なのか。自分が着るのだからその辺りはしつかりと決めておきたい。一先ず、今は少しでも情報が欲しいと考えていた。

この時に生徒達が目を付けたのが、既に教室に到着している世界初の男性操縦者——織斑一夏である。専用機持ちである故にISスーツも専用の物だ。男性用ではあるが、何か有力な情報があるはずだと彼女達は彼の元へと集まった。

ちなみに、彼女達は同じ専用機持ちである代表候補生——セシリアにも聞いたのだが、小難しい事しか言わない為に途中で撤退したとか。彼女はIS以前に学ぶべき事が多い気がする。

「そういえば織斑君や柳さんのISスーツってどこのやつなの？ どっちも見たことない型だけだ」

「え？ あー、特注品だつて。男のスーツが無いからどつかのラボが作ったらしいよ。えーと、元はイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている。柳さんのはわからないけど……たぶん一緒じゃないか？」

「イングリッド社か……うーん」

我ながら良く覚えられたものと、一夏は自身の勉強成果に自賛した。隆道が持つISスーツさえもわかっていれば完璧だったであろう。

（確か、着ないと反応速度がどうしても鈍るんだよな。えーと、なんだったかな……）
他の生徒に比べればまだまだであらうが、彼は勤勉なのだ。忘れない為に習った事は脳内で何度も復唱している。しかし、それでも完全に覚えきれていないところもあった。

教室が未だに賑やかな最中、彼は一人ISSスーツの機能を思い出そうと考えに沈むのだが、ここで救世主が現れる。

「ISSスーツは肌表面の微弱な電位差を検知する事によって操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISSはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の弾丸程度なら完全に受け止める事が出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

その救世主とは副担任——真耶であった。

教室に着いた際、生徒達の話が偶々彼女の耳に入ってきたのだ。生徒との交流を深めようと輪に入る彼女は行動力の化身とも言えよう。

すらすらとISSスーツの説明をする姿は見事だ。流石ISS学園の教員だと一夏は感心していた。

そして、それと同時に——。

(……なんか……顔色悪くないか?)

——彼一人だけが、彼女の様子に気づいた。

一見するといつも通りの彼女。しかし、何処か無理をしていると、一夏にはそう見えただの。

そんな考えに耽る彼を余所に、生徒達は今も尚わいわいと騒いでいる。まともに会話出来ている様子からして気のせいなのだろうと、一夏は深く考えるのを止めた。

「山ちゃん詳しい!」

「一応先生ですから……って、や、山ちゃん?」

「山ぴー見直した!」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー?」

唐突に言われた愛称。統一性が無い愛称の連続に真耶は困惑せざるを得なかった。

入学から二ヶ月経った現在、真耶には八つ程の愛称が付いていたのだ。それはどれも『やま』が付く愛称。せめて統一しろと言いたい。

「あの、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと……」

「えー、良いじゃん良いじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

生徒達は彼女を馬鹿にしている——という訳ではなく、純粹に親しみ込めて愛称を付けていた。他意は全くと言って良いほど無い。尤も、本人はあまり良い気持ちではないであろうが。

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？」

「そ、それもちよつと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

これはひどい。

怒濤の愛称連呼を受けた彼女は『ヤマヤ』辺りで明確に拒絶の意志を示した。何かトラウマでもあるのだろうか。自分だけは先生呼びのままにしよう、そう決めた彼であった。

ちなみに、隆道が名付けた『牛眼鏡』は真耶の中ではぶつちぎりのワースト一位。愛称ではなく罵倒なのだから当然か。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？」

「「「はーい」」」

流石にやり過ぎたかと反省したのか、生徒達は直ぐに返事を返した。間延びが気になるが、今は良しとしよう。

と、そこへ――。

「あ、おはようございます」

「おはようさん。朝は悪いな、シャワー浴びてて気づかなかった」

「ああー、やつぱりですか」

S H Rギリギリの時間帯にやって来たのは隆道。相変わらずの硬い表情だが、生徒全員は最早慣れている。目に見える様に恐がったり逃げたりはしなくなっていた。

しかも、襲撃事件の翌日以降から彼女達は彼に会釈する様になったのだ。相変わらず無視されているが、それでも彼女達は止める事はなかった。

彼女達がこういう事をする様になったのは、一夏のある一言が始まりである。

『あの人は俺を庇ったり、相談に乗ったりしてくれの人なんだ、良い人なんだ。無理強いしない、どうか腫れ物扱いしないであげて欲しい』

隆道が教室にいない隙を見つけてクラス全員に放った言葉。それは彼の思いやりであった。

確かに恐ろしい人間ではあるが、此方から危害を加えない限りは何も起こらないし、一夏と箒に対しては表情に似合わない程に優しい。

アリーナでもそうであつた。観客席越しに見た隆道と一夏のやり取りは、面倒見の良い先輩と彼を慕う後輩のそれだ。中には兄弟に見えた生徒もいる。その事実と一夏の思いやりが彼女達の心を動かした。

故に、彼女達は歩み寄る事にしたのだ。一気に詰め寄るのではなく、一歩ずつ。

今はまだ大きな変化は無い。しかし、それでも構わない。此方が変われば彼方も変わる筈、そう信じたのだ。

「……ところで、なんでここに集まつてんだ？ そろそろSHR始まるぞ」

「ISスーツについて話し合つてたんですよ。今日から申し込み出来るんでどれがいいか」

「ふーん……。ISスーツ、ねえ……」

隆道はそう一言言つて真耶の方を向いた。その目は冷ややかで、声も冷たい。

「っ……」

「……はんっ」

直ぐに目を逸らしてしまう真耶。二人の関係も襲撃事件以降のものであつた。

入学当初のなんとか接しようとしていた彼女の面影は既に無く、無視を続けていた彼

は彼女に対し鼻で笑うばかり。

かなり関係が悪化している。それは誰が見ても一目瞭然だ。しかも、何故か先週よりも酷い。

「……柳さん?」

「ああ、わりい。んー、なんでも良いんじゃないやね、基本的な性能は確かだからな。機体の伝達率に、あとは……防弾、だったか?」

「——っ!」

『防弾』を強調した言葉。それを聞いた真耶は表情を悲痛に歪めて颯爽と離れてしまった。やはり、二人は何かあったに違いない。一夏はそう確信した。

「……何かあったんですか?」

「お前が気にする事じゃねえよ。ほら、ブリュンヒルデがお出ましたぞ」

「やつべっ! それじゃまた後でっ!」

急いで席に戻る一夏を筆頭に生徒達はそれぞれ軍隊整列を彷彿とさせるように戻っていく。何時からここは軍隊になったのだろうかと思いつつ、隆道も自分の席へ向かった。

「諸君、おはよう」

「「「おはようございます!」」」

「今までは基本操縦のみであったが、今日からは本格的な実戦訓練を開始する。各人、気を引き締める様に。各人のISスーツが届くまでは学園指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは学園指定の水着で訓練を受けて貰う。それも無いものは、まあ下着で構わんだろう」

「「え、っ」「」」

いや構うだろうとクラス全員の心が一つになった瞬間である。

(うわ、下着とかキッツ……)

勿論、^{隆道}一人を除いて。

「馬鹿者ども、下着を避けたいんだっただけで絶対忘れるな。……いいな？」

「「は、はい!」「」」

男子がいるにも関わらず凄まじい事を言い出した千冬であったが、忘れなければ何て事はない。

忘れる人間が悪いのだ。訓練なのだから怠け者にはそれ相応の罰を与えなければいけない。

余談ではあるが、一次移行した機体には便利な機能——ISスーツの換装がある。

拡張領域とは別の領域、データ領域にISスーツを予め格納しておけばISの展開時にその時着ていた服と入れ替える事が出来るのだ。いちいち着替える必要が無いので

ある。

「夏はこれを――。」

『ばあつと光つて変身!』

――と覚えている。

特撮かよと隆道から静かなツツコミを受けたのは言うまでもない。

しかし、決して良いこと尽くめではない。この方法はエネルギーを消耗するというデメリットが存在する。その為にこの着用方法は緊急時以外は使われない。普段は予めISスーツを着用してから機体に乗るのだ。

ISスーツの有無による機体への伝達率、優れた耐久性と防弾性能、緊急時の同時展開。

そう、隆道はこの二ヶ月間、全て実践済みだ。恐らく、代表候補生を除けば彼が一番ISスーツに詳しいのかも知れない。

「では山田先生、HRを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬は進行役を真耶へと渡した。丁度眼鏡を拭き終えた彼女が慌てて教卓へと上がるその姿は子犬の様である。

(……) っかし、昨日あんな目に会つといてよく来れたもんだ。教員は人手不足なのか

?)

隆道は真耶を一目見てそう思った。短時間とはいえ、拉致監禁されて惨状を目の当たりにしたのだから少なからず休養を取ると思っていたのだ。

人手不足なのか、彼女が自ら出勤すると志願したのか。前者ならば御愁傷様、後者なら大したものだと数秒だけ考え、直ぐに興味を無くした。

彼は知る事はないが、真耶が出勤したその理由は両方である。

銃弾を受けた菜月は勿論休養を取った。真耶も同じく休養を勧められたのだが——これを拒否したのだ。

只でさえ自分が原因で教員が一人減った上に、無傷の自分が休養を取るなど到底許せない。責任を感じたが故の行動であった。

「え、ええとですね、今日はなんと転入生を紹介します！　しかも二名です！」

「「えええええっ!?!」」

突然の転入生紹介にクラス全員が喫驚した。

何故この時期に、何故二名も、何故同じ教室に、何故このクラスにと疑問が入り乱れる。

「失礼します」

「……………」

そんな疑問などお構い無しに、二名の転入生は教室に入ってきた。

そして、教室のざわめきは瞬時に止まる。つい見てしまった彼も目を見開く。

何故なら、二人の内の一人が――。

――女子ではなく、男子だったのだから。

その男子は中性的に整った顔立ちであつた。礼儀正しい立ち居振舞いに首の後ろで丁寧に束ねた濃い金髪。その姿は正しく『貴公子』。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思ひますが、皆さんよろしくお願ひします」

「お、男……?」

「はい。此方に僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

その瞬間、隆道と一夏の二人は察知した。

(「やっべっ!?!」)

直ぐ様に二人は耳を両手で塞いだ。この後に起きる事がわかってしまったからだ。

この後に起こる事、それは——。

「きや……」

「はい?」

「「「きやああああああっつっ!」」」

——歓喜の叫びという名の広範囲攻撃。

(ぐああああっつっ!?! 塞いでもこれかよおおっつっ!?!)

(ぐっ、くそつたれが……! どんな叫び声だっつーのっ! ハウリングしてんじゃね

えかつ!)

耳を塞いだにも関わらず、それは確実に二人へダメージを与えた。しかし、二人はまだマシだ。何故なら、直撃を受けた美少年——シャルルと真耶は目を回してしまつていたのだから。

ちなみに、もう一人の転入生と千冬は耳を塞いでないにも関わらず平気そうな顔だ。こいつらは鼓膜でも鍛えてんのかと、隆道は寒気を覚えた。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

生徒達は先程までの疑問など綺麗さっぱり吹き飛んでしまった。生では見たことのない海外の美少年は彼女達にとって刺激が強すぎたのだ。

しかし、たった一人だけ——隆道は転入生への疑問が消える事は無かった。

「……………」

生徒達の叫びが響く中、隆道は教員の目を欺いて携帯を取り出す。ある程度操作した後、直ぐに携帯をしまつて転入生を見据えた。

彼は転入生のシャルルも気になってはいるが、それよりもう一人の方だ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに！ まだ自己紹介がおわってませんから〜！」

シャルルの存在があまりにも強すぎた故の騒ぎであったが、もう一人の方も忘れてはいない。何故なら、そのもう一人は見た目からして『異端』であったからだ。

腰近くまでに下ろされた、白に近い銀髪。次に目立つのは左目の眼帯、しかも医療ではなく軍人が付けるソレ。右目は赤色で、身長は小柄だ。

印象は正に『軍人』。これに尽きる。

「……………」

少女は未だ口を開かない。腕組み状態で生徒達を見るその目は——明らかに下に見ている。

女尊男卑主義者とは違う目つき。それは、隆道の警戒心を引き上げるには充分であった。

「…………挨拶をしろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答える少女は千冬の言葉で姿勢を正す。

確定した。印象がどうこうではない。会話から察するに間違いなく『軍人』だ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

沈黙。続く言葉を待つ生徒達であつたが、本人は名前だけ名乗るや否や再び口を閉ざす。これ以上は無いと言わんばかりに。

「あ、あの、以上…………ですか？」

「以上だ」

本当にこれ以上無かった。

真耶は崩れ落ちそうになる。空気にいたたまれなくなつた彼女が可能な限り笑顔で訊いた結果、返つてきたのは非常に冷たい即答。只でさえ隆道との関係と昨日の一件でポロポロなのにここで更なる追い討ちだ。気の毒にも程がある。

そんな彼女のメンタルを知らずの内に碎き掛けた少女——ラウラはふと、一人と目が合う。

「！ 貴様が——」

「うん？」

「っ！」

彼女は一人——一夏を見るなり敵意を露にして近づく。そしてそのまま、唐突に彼の顔面へと向かつて平手打ちを——。

「——っ!？」

「……何すんだよ」

（……ほー、やるじゃねえか）

——防御された。

近づかれても無警戒の一夏であつたが、平手打ちが繰り出される直前で危険を察知。

手を咄嗟にかざす事で止めたのだ。

確かに彼女の平手打ちは速かった。恐ろしく速いソレは、並みの人間なら反応出来ずに食らっていたであろう。

しかし、彼はそれ以上のものを知っている。

「……お前、ドイツの人間だろ。さっきの会話で確信したぜ」

「っ……………！ 私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「……………」

捨て台詞を吐いて、何事も無かったかのように立ち去る彼女。そのまま空いてる席へ座ると腕を組んで微動だにしなくなってしまった。

生徒達は、何が起こったのかわからなかった。いや、理解出来なかったと言うべきか。

再び沈黙と化してしまったクラス一同。そんな空気を動かす為、千冬は彼女達の行動を促す。

「あ……………んっ！ では、HRを終わる。各人は直ぐに着替え第三アリーナに集合。今日は二組と合同で訓練を行う。解散！」

その言葉が終わると同時に隆道と一夏の二人は直ぐに立ち上がる。何せ、女子生徒はこの教室で着替えるのだから出ていかねばならない。無意味に変態というレッテルを貼られたく無いが故に迅速に行動する。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。クラス代表だろう」

「わかっ……わかりました」

言われなくてもそのつもりであった一夏は軽く返事をした後シャルルに近づいていった。とにかく今は教室から出なければと行動を速める。

「初めまして二人とも。改めて——」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。行きましよう柳さん」

「ん。ほら、早く行け」

「え？ は、はい……」

一夏が先導し、隆道が後方に付いてシャルルの背中を後押し。互いに自己紹介はしていないが、今はそれどころではない。困惑するシャルルを余所に二人は説明しつつ廊下を歩く。

「え、あの、えと……」

「俺達はアリーナの更衣室まで行かないといけないから。自己紹介はそこでしようぜ」

「そういう事だ。……あと、これから起こる事にたじろぐなよ。間違いなく奴等が来るはずだ」

「??？」

シャルルはなんの事かと思うが、それも直ぐに判明する。

考えてみて欲しい。情報が皆無の状態で見れた美少年の登場に、一組の生徒は発狂レベルで猛烈に騒いだのだ。で、あるならば――。

「ああつ！ 転校生発見！」

――各学年各クラスから生徒が駆け出して来てもおかしくはない。

「いたつ！ こつちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

直ぐに廊下は生徒で満たされた。噂の美少年を拝む為に。あわよくば関係を築く為に。場違いどころか時代違いの生徒が紛れてる様な気がするが、完全に無視。気にしたら負けだ。

「織斑君達の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はアメジスト！」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

「う……二人目もいる……。やっぱり恐いなあ」

しかし、彼女達に出来る事は三人を遠くから眺める事だけだ。決して近づく事は無く、彼等の進行を邪魔しないように生徒達は廊下に道を作る。

その理由は隆道がいるからだ。千冬から散々と言ひ聞かされた彼の事情によつて不用意に近づく事は無いのである。それは一種の魔除けみたいなものであった。

勿論、それを面白く思わない人間もいるが、表立つて齒向かう様な事はしない。

「柳さん、もう少しだけ耐えて下さい」

「……ああ」

群衆を前に段々と不機嫌になる隆道。それを一夏はどうか宥めながら進んでいく。一夏自身も珍獣扱いされている様で気分の良いものではないがこればかりはどうしようもないので耐えて貰うしかない。

しかし、この状況が平気そうな人間が一人。

「な、なに？ 何で皆騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ」

「……………」

「……………」

一夏は何を言ってるんだと疑問の表情を、隆道は皺を寄せるといふ疑いの表情を見せた。それに対しシャルルは意味がわからないと疑問を露にする。

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦出来る男つて今のところ俺達しかいないんだろ？」

「……デュノア。お前、随分平気そうだな。女に慣れてんのか？」

「——あつ！ ああ、うん。そうだね」

「……………」

まるで自分が男だという事を忘れていたのような反応。一夏はさほど気にした様子では無かったが、隆道はより眉間に皺が寄ってしまった。

——こいつは本当に男なのか？

そんな思考がどうも渦巻く。渦巻いてしまう。

確かめる術はある。しかし、それを実行するにはまだ早い。

良からぬ事を考える隆道を余所に、一夏は何処か安堵の微笑を浮かべながらシャルルと会話した。

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱ学園に男二人は辛いからな。何かと気を遣うし。少しでも男がいてくれるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

「またもや疑問を飛ばすシャルル。それがより隆道を疑いの思考へと駆り立てる。もう美少年には疑いの目しか向けられない。」

「そんな疑心暗鬼に陥っていたからか——。」

「よし、到着！」

「んあ？ ああ、もう着いたのか」

「大丈夫です？ 途中から黙りでしたけど」

「首輪鳴ってねえから大丈夫だろ。心配すんな」

「どうやら気づかぬ内に第三アリーナ更衣室まで辿り着いていた様であった。更衣室はかなり広くベンチまであるその場所は、さながら超大規模なスポーツジムの様だ。時間も余裕があり、これならばゆったりと自己紹介をしつつ着替えが出来る。」

「んじゃ改めましてと……これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルで良いよ。それで、そちらが……」

「……柳隆道だ。よろしくな、デユノア」

「柳さんは俺達より三つ歳上なんだ。柳さんの事情は先生から聞いてるか？」

「う、うん。よ、よろしく、お願いします……」

「どうやらシャルルは隆道の容態について、千冬から予め聞かされていた様であった。歳上だからなのか容態を聞いたからなのか、妙に低姿勢だ。」

「さて、もう着替えちまおうぜ」

そう言つて一夏は制服を乱雑にベンチへと投げた。そしてそのまま一呼吸でTシャツも脱ぎ捨ててゐる。

「わあっ!!」

「なんだなんだ?」

「あん?」

突如叫び声を上げるシャルル。何かあつたのかと一夏は疑問に思いつつ、着替えながらも会話する。

「? 荷物でも忘れたのか? ……つて、何で着替えないんだ? 早く着替えないと遅れるぞ?」 うちの担任は時間にはうるさい人で——

「う、うんつ? き、着替えるよ? でも、その……あっち向いてて……ね?」

「??? いや、別に着替えをジロジロ見る気は無いが……」

おかしな奴だなど言いながら一夏は残りの下着も脱ぎ捨てISSスーツに着替えていく。

時間に余裕はあれどISSスーツは妙に着づらい。ウエットスーツを着た事のある人間ならその感覚がわかるだろう。どうしても肌に引つ掛かる為に慣れないと手間取る。

「あれ? 柳さんもう着替え終わつたんです? 早くないですかね」

「下に着ていたからな。つーか、今日は初っぱなから実技だつて前からわかつてただろ」
「……忘れてたんですよ」

「しっかりしろクラス代表」

隆道は既にISスーツを着ていた為に制服を脱ぐだけで完了だ。あとは右腕に巻いてある首輪を外すだけである。

「……………」

一夏は、前々から気にはなっていた。彼のその首輪を。アクセサリーではなく、明らかに犬用の首輪であるそれは触れずとも目に留まってしまふ。専用機よりも大事にしているその首輪には何か大切な思いが込められているのだろうかと考えに耽っていた。しかし、触れない事にしたのだから今更聞く事も出来ない。彼の方から語ってくれなまで、その思いは胸に閉まっておく。

と、ここで一夏はもう一つ気になっていた事があつた。それは謎の視線である。

「……………シャルル?」

「な、何かな!」

ふと、視線を向けるとそこには丁度着替え終わったのか既にISスーツ姿のシャルルが。恐らく隆道と同様既に着ていたのだろう。

「シャルルも下に着ていたのか?」

「う、うん。……つて一夏まだ着てないの？」

「ああ、いけね。……よっ、と」

話し込んだばかりに余計な時間を食ってしまったと、一夏はせつせと着替えを再開する。

二人に見られながらの着替えは何とも恥ずかしい感じがした一夏は着る速度を速め、漸く終わらせた。

「よし、行こうぜ」

「う、うん」

一夏を最後に全員が着替え終わった。あとはステージに向かうだけだ。いぎ、更衣室を出ようとした所で――。

「ああ、悪いが二人共。先に行つてくれ」

「え？ ああ、はい」

――隆道は何か忘れ事があったのか二人に先に行くよう促した。それに対して少しも疑問に思わなかった二人は更衣室を出ていく。

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつなんだそれ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフアランクスだけど殆どフルオーダー品」

「デユノア？　　そういえばデユノアって……」

「うん、僕の家。父がね、社長をしてるんだよ。一応フランスで一番大きいIS企業だと思おう」

「へえ！　　じゃあシャルルって社長の息子なんだな。道理でなあ」

一夏はSHR時から感じていた疑問が解消した。シャルルのけだかい雰囲気を漂わせる理由はそれだったのかと。

「いや、なんつうか気品っていうか、良い所の育ち！　　って感じがするじゃん。納得したわ」

「……良い所……ね」

「……うん？」

ふと、彼は視線を逸らした。それは何処か触れられたくないようで複雑な表情だ。

（つあー、まじったな……）

誰だつて触れられたくない事は必ずある。隆道も、箒も、セシリアも、鈴音も――。

「それより一夏の方が凄いや。あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「ハハハ、こやつめ！」

「へ？」

――自分自身すらも。

「——いや、なんでもない。まああれだ、お互い様って事で」
「??」

一夏とシャルルがステージに向かうその頃。

「……………」

隆道は更衣室のベンチに座りながら携帯を見つめていた。画面を見るその目つきはとても鋭く、睨まれたら誰もが尻込みするであろう。

「……………はんっ。なるほど、な」

彼の携帯に映るのはコミュニケーションアプリのグループチャット。そこには——。

——野良犬共の集い（121）——

『やつべー寝坊した』 8：01

『馬場さん。マグネシウムのペレット明日には届くらしいです。いったい何に使うんです？』 8：11

『おいやべーつて！ コンビニのポテト半額だよ！ 行こーぜ！』 8：26

『それ何時までだ？ 帰りに買ってこいよ。俺らの分も忘れんな』 8：27

『私もほしーな』 8：29

『三人目の男性操縦者の情報求む』 8：33 既読 46

『いきなりだな。なんだその事務的な文は』 8：44

『おはよーございまーす！ 自分は知らないですねそんな話。現れたんですか？』 8：

47

『そんな情報知らね。つかニュースなんて見てねーし』 8：47

『ニュースにもなってますんよー。ていうか今は授業中では？』 8：50

第三十二話

第三アリーナ。

そのステージ中央では隆道を除いた一組と二組の生徒全員が整列、その前方には教員——千冬が一人。他の教員は見当たらない。

「織斑。柳はどうした？」

「更衣室にいます。直ぐに来るか」と

「……そうか」

千冬は、少し胸が苦しいと感じていた。

実を言うと、彼女は隆道を授業に参加させたくはなかったのだ。昨日の今日で怪我を負った人間を授業に出すなど決してあつてはならない事だ。

故に、昨日の帰りの際にて明日は休むよう彼に勧めたのだが——なんとこれを拒否した。

そう、彼も真耶と同様に休養を拒否したのだ。その理由はたった一つ、怪我を悟らせたくはないというものであった。なんとしても隠し通したかったのである。

それならば此方から説明するからと彼女は説得したのだが、彼は決して首を縦に振ら

なかつた。可能な限り一夏には負担を掛けないと。

「ままならんものだ……」

強行手段を取ったとしても無理矢理授業に出てくるだろう、彼はやると言ったらやる男だ。どちらにせよ、彼女は折れるしかなかったのである。

あれほど授業を、女性を、I Sを嫌っていた人間が、今や自分の弟の為に動いている。この事実が彼女の心に罪悪感を生ませた。

鬼教官と名高く、理屈が通用しない世界最強は今後も頭を悩ませる。最早、彼女の弱点は隆道と日葵の二人であろう。

そんな彼女をとことん悩ませる彼がやって来たのは数分後、授業開始ギリギリの時間帯であつた。

隆道の到着によって漸く生徒全員が集合。授業開始時間となり合同訓練が始まるのだが、ここでざわつきが始まってしまった。

「「う、うわあ……」」

「はあ、やはりこうなるか……」

千冬は頭痛を感じた。頭痛薬でも用意するかと考えてしまう程に。

ざわつきの正体は二組の生徒達。まもなく授業が始まるにも関わらず彼女達の視線は隆道の身体へと向けられ、連鎖的に生徒全員が騒ぎ出す。

さて、ここで思い出して欲しい。彼が初めてISスーツを着た日の事を。四月下旬に行われた、初のISを用いた訓練で一組の生徒はいつたいどのような反応をしたのか。

「何あれ、すつご……」

「織斑君も良い身体してるし、デユノア君も綺麗な身体だけど、その……」

「さ、触っちゃ駄目、かな……」

「だーから言ったじゃん。凄い身体してるって。あと、絶対触れないと思うよ」

正に視線の集中砲火であった。先程まで二組の生徒はISスーツ姿の一夏に見惚れていたが、それを遥かに上回る肉体を持つ者が現れたのだ。完全に釘付けとなつてしまっていた。

「ああ、だよなあ。こうなるよなあ」

「本当に凄い身体してるよね……。僕なんか言葉が出なかつたよ……」

「着痩せする人なんだよな。うちのクラスの皆も初めて見た時はびつくりしてたぜ」

「びつくり処じゃないよ……。どんな生活したらああなるの……?」

一夏はざわつく光景に既視感を覚え、シャルルは唾然としていた。何故か、心なしか顔も赤い。

「本当に凄いやねー！」

「毎度思うが見事としか言いようが無いな。脂肪なんぞ殆ど無いのではないか？」

「はあ、何時見ても素晴らしいですわね……」

「え……何、あれ、嘘でしょ？ 筋肉の化身？ あんなの聞いてない、聞いてない」

一組の生徒は既に見慣れているが、それでも彼の屈強な身体は刺激が強い。箒は感心し、セシリアは手を頬に当てうつとり。彼のISスーツ姿を初めて見る鈴音は例の見えてるソレも相まって混乱していた。

「ったく、見せもんじゃねえっての……」

「二組は初めてですし、仕方ないですよ。なんとというか、こう……そりやもう凄いですし」

「語彙力どうした」

愚痴を溢しながらも一夏の左隣——列からはみ出る様に並ぶ隆道。彼は一向に止まない視線と騒々しさにうんざりしていた。

ただでさえ朝食も食わずに登校し、廊下での群衆との遭遇、更に転入生に対する疑いによって不機嫌が止まらない状況。そしてそこからの、四月に受けたのと全く同じ熱い視線。不機嫌メーターが存在していたら常に振り切っているに違いない。

「……とところで一夏さん。朝のアレはいつたいなんですか？ 今回は防ぎましたけどこ

れで二回目ですてよ？ さぞかし女性の方との縁が多いようで」

「何？ アンタまた何かやったの？」

「なんだよ二人とも……俺は——つてやべつ」

この騒ぎに便乗して一夏に話し掛けるのは右隣にいるセシリアと後ろにいる鈴音。何かと女絡みでトラブルが起きる彼に対し嫌味を含めた物言いだ。

弁明しようとする一夏であったが——彼は此方に接近する人物に気づき口を閉ざした。

「こちらの一夏さん、今日来た転入生にはたかれそうになりましたの」

「はあ!? 一夏、アンタ何でそうバカなの——」

「——安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二名いる」

瞬間。セシリアと鈴音の呼吸は止まった。二人は声のした方へと恐る恐る首を向ける。

「……………」

「「あつどうも——」」

彼女達の口は途中で閉ざされた。千冬が持つ、聖剣『シュツセキボ』による必殺^制技^裁が炸裂。二人の脳細胞を約五千個ずつ破壊していった。彼女達が生きている間に枯渇しないことを願おう。

(馬鹿か彼奴等……ああ、一人は馬鹿だったな)

風鈴音。隆道に馬鹿認定される。一人目の馬鹿セシリアに続いて二人目の馬鹿アが誕生した瞬間であつた。

「くう……。何かというと直ぐにポンポンと人の頭を……」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

(……俺悪くないですよね?)

(なんで疑問系なんだよ。自業自得だあんなの)

涙目のセシリアと呪詛の様にぶつぶつ呟く鈴音。片方はまだ良いとして、もう片方は不穏当かつ不当な主張だ。やはり鈴音は脳筋だ。揺るぎ無い事実だ。

「全く。では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「……はい……」

馬鹿二人の制裁を済ませ終わつた所で漸く授業が開始。本格的な訓練が始まる事に生徒達は活気盛んで、自然と返事に力が入っている。

そんな活力が溢れる十代に感心した千冬は早速訓練をさせる——前にある実演を見せる事にした。目の前には丁度良い人材もいる。

「諸君の中には先日、中止となつたクラス代表戦を観戦した者がいるだろうが……中には観戦すら出来なかつた者もいるだろう。そこで、これから戦闘を実演して貰う。——

凰！ オルコット！ 前に出ろ！

「な、何故わたくしが……」

「専用機持ちだからだ。いいから前に出ろ」

「何であたしが……」

叩かれて気が滅入ったからだろう、未だに頭を押さええる二人からはやる気など感じられない。

しかし、次の一言で彼女達は無理にでも根性を叩き直される事になる。

「……そうか。つまり、初心者織斑か……柳を戦闘に出せ。そう言ってるんだな？」

「すみませんでしたあっ!!」

セシリアと鈴音は躍動感溢れる動きで生徒の間をすり抜けて千冬の前に到着、そのまま腰を折って深々と頭を下げた。一夏との戦闘はまだしも、隆道とは決して戦いたくは無かったのである。

セシリアは件の試合で、鈴音は彼の潜む危険性にトラウマを抱えている。それに加え、クラス代表戦でのアレ。そんなものをただの実演で向けられたら目も当てられない。

仮に、一夏と隆道の二人が実演したとしても彼が豹変しないとは限らない。どちらにしろ彼女達が出る事は確実であった。

「最初からそうしろ」

「はは……。それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こつちの台詞。返り討ちよ」

先程まで隆道に怯えた者とは思えない程の余裕の表れ。態度を百八十度変えた彼女達に生徒全員は苦笑いせざるを得ない。

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は直に——ふむ、噂をすればか」

千冬が言い掛けたその時、ピット・ゲートが突如開き全員が注目した。

ゲートが開ききつた直後、そこから飛び出すのは一機のIS。配備されている訓練機の一つであり、教員用としても採用されている翠色すいしょくの翼。

——第二世代全距離対応射撃型IS『ラファール・リヴァイヴ』——。

ゲートから飛び出たそのISはある程度の飛翔から急降下、そのまま完璧な完全停止で生徒達の前に降り立つ。

「お、お待たせしました！」

「うむ。見事だ、山田先生」

そのISを操縦するのは真耶であった。

先程見せた彼女の飛行技術。それは急降下と完全停止だけであるが、それはセシリアよりも洗練された文句の付け所がない動作だ。普段の彼女からは想像もつかない程の

技術に生徒達は言葉が見つからない。あまりの凄さに度肝を抜かれたのである。

「さて、諸君。知ってる者もいるだろうが山田先生は元代表候補生だ。今くらいの操縦技術は造作もない」

「む、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし……」

「謙遜するな……丁度良い。デユノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい。山田先生の使用されているISはデユノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後機の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と多様性切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティが多い事でも知られています」

機体の解説を始めるシャルルに全員が耳を傾けた。生徒達は授業でそれなりに理解していたがここまでの解説を即座に言えはしない。間違いなく彼は優秀だ。

ルックスは抜群、加えて知的な彼に生徒達は更に胸をときめかせていった。

「ご苦労、そこまでいい。……さて小娘ども、いつまで呆けている。さっさと用意しろ」

「え？ あの、二対一で……？？」

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ。今のお前達なら直ぐ負ける」

負ける。千冬から無慈悲に放たれたその言葉はセシリアと鈴音の闘志に火を付けた。特に鈴音よりもセシリアの方がやる気に満ちている。

実はセシリアの入試の担当は真耶だったのだ。一度勝利している相手という事もあつて黙っていられなかつたのだらう。

「やる気が出たようだな。では準備に取り掛かれ。他の生徒は観客席に移動。迅速に行動せよ」

「「「はー！」」」

生徒全員は駆け足でその場を離れていき、その後を追う様に男子達も付いていった。ここに留まるのは危険だからだ。流れ弾、跳弾などを考えれば観客席に移動するのは至極当たり前の事。

見届けた千冬も直ぐに離れようとするその時、真耶から声が掛かる。

「あ、織斑先生。アレの準備は終わってますのでいつでもいけます」

「山田君には手間を掛けさせたな、ありがとう。では、私も準備をしようか」

数分後。戦闘実演は終了しステージ内の三人はISを解除、その場で待機していた。ここやかな表情の真耶に対し、セシリアと鈴音は何処か悔しそうな顔だ。

結果を言えば、セシリアと鈴音対真耶の実演は真耶の圧倒的勝利で終わった。二対一、同時に第三世代対第二世代という不利な状況にも関わらずにだ。

『さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように。全員ステージに戻れ』

アリーナから流れる千冬の声。それが切れるや否や生徒全員は立ち上がりステージへと戻っていく。

「山田先生、凄かったな」

「だね。流石としか言いようがなかったよ」

一夏とシャルルは先の戦闘実演に感動を覚えていた。それほど素晴らしいものが見れたからだ。

ゼロリアクト・ターン
アップソリユート・ターン
クロス・グリッド・ターン
無反動旋回から始まる特殊無反動旋回に三次元躍動旋回といった技術を駆使しセシリア達の攻撃を全て回避。牽制射撃により二人を誘導し、衝突させた直後に

回転式擲弾発射器で一掃した。

セシリア達が闇雲にバカスカ撃っていたのに対して、真耶の射撃は確実に二人の行動を制限し、最後はたった一発で地表に落とす。

これがかつて、学生時代に『銃央矛塵』じゅうおうぼうじんという二つ名で呼ばれた真耶の実力。元代表候補生は伊達ではない。

これを機に、生徒達は彼女との接し方を今よりも良くしていくだろう。

尤も、愛称が増えないとは限らないのだが。

『全員揃ったな。では、専用機持ちの織斑、デュノア、オルコット、ボーデヴィツヒ、嵐を班長とし班となって実習を行う。四班は十一人、一斑は十二人となって分かれること。出席番号順に各班に入れ、でないとI Sを背負ってアリーナを百周させるからな。柳は離れてそのまま待機だ、いいな？ では分かれる』

専用機持ちを除いた生徒——五十六名がそれぞれ各班へと足を運ぶ。説明の途中で二組の生徒達は我先にへと男子の班に入ろうという魂胆が生徒達にあったのだが、千冬には丸わかりだった様だ。既に先手を打たれた事によってそれは叶わなくなった。

各班に分かれるまではそう時間は掛からなかったのだが、その最中にある疑問が生徒達の頭に浮かんだ。

——何故、隆道は班から外れたのか。

——何故、千冬はステージにいないのか。

彼が班から外れた理由は、転入生を除いた一組だけが何となく理解していた。しかし、千冬がステージに現れない理由。それがわからない。

「ねえ、柳さんが外れた理由ってなんなのかな」

「ああ、シャルルは知らないよな。……柳さんの専用機は特殊なんだ。ていうか危険過ぎるんだ」

「えっ」

「まあ、直ぐにわかると思う。それにしても……千冬姉まだ見えないな。何やってるんだろ」

一夏がそう考えに耽って数秒、彼の——いや、生徒全員の疑問は一気に解消される。

またしてもピット・ゲートが開き、そこから飛び出して来たのは一機の『打鉄』。その

機体は真耶とは比較にならない程の速度で急降下、隆道の目の前で完全停止をやつてのけた。

ラファール・リヴァイヴより機動力が劣る、防御能力重視のその機体で凄まじい操縦を生徒達に見せつけた人物は――。

「待たせてしまつてすまない」

「あれ……千冬姉……!?!」

「……ほー」

――髪型をポニーテールにした千冬であつた。

今までの実技ではジャージ姿であつた彼女は、今やISスーツ姿。抜群過ぎるスタイルをより強調させ、生徒全員の目を一気に奪つた。

当然、この後何が起こるのか彼女は嫌と言うほど良く理解している。

「ち、ちち、千冬様のポニーテールっ!!」

「キヤアアアアアアツツ!!」

「カツ、カメラッ!! カメラは何処っ!？」

一斉に騒ぎ出す生徒一同。最早授業などそっちのけで全員がその視線を彼女に向ける。

が、しかし――。

――そんなに百周したいか。

――一瞬の内に生徒は元へ戻った。

彼女から鬼が見えたのだ。彼女達はまだ死にたくはなかったのである。

これ以上は自分の首を絞めるだけ。彼女達は真面目に訓練に集中する事にした。

「これまた珍しい。さしずめ、『灰鋼』の調査中に暴走しちゃった時の為……ってか？」

「ああ、この間の様に毎度毎度時間や場所を取れる訳ではないからな。この時間を利用しようと思う。私専用調整されているこの機体ならお前の『灰鋼』を食い止める事が出来るだろう」

「ふーん、そりゃご苦労なことだ」

千冬が言うように、土曜の時みたく教員を揃えアリーナを確保する事は非常に難しい。他の教員もそれぞれ仕事が残っているのだ。一つの機体の為だけに時間を割く事

は出来ない。

故に、授業時間を用いて世界最強と呼ばれる彼女だけで調査を行う事にした。放課後も可能な限り彼女が調査を担当する。彼女自身も仕事を溜める事になるが、『灰鋼』に關しては他の者に任せる事は出来ないのだ。

用意した『打鉄』も特殊仕様で、『灰鋼』に対抗する為にシステム面の調整や追加装甲を施している。最適化はしていない故に専用機ほどの性能は引き出せないがそこは世界最強、己の技術でカバーだ。この機体は、今や彼女の専用機（仮）と言っても良いだろう。その結果教員用の機体は減ってしまったが致し方無い。学園の被害を抑え、生徒を守る為だ。

「それにだ、調査中に殺されるなど真つ平御免だからな。その為の機体でもある」
「殺されるねえ……。あんたを殺せるとはとても思えねえよ。逆に俺が殺されるんじゃないのか」

「冗談でもそういうことを言うな……。そろそろ調査を始めるぞ。展開してくれ」
「はいはい。ふうっ……。『灰鋼』」

一息ついて、隆道は『灰鋼』を展開。真つ赤なラインを這わせる黒灰色の機体が姿を現した。それと同時に千冬は『葵』を瞬時に展開。ゆつたりと握り締めてその時に備える。

「…………どうだ？」

「…………少し待てよ」

彼の視界には以前と同様に赤くなり、『猛犬』の起動準備が目の前に。それは次第に大きくなり起動する様に促していた。

目の前の彼女だけじゃない。後方で訓練に励んでいる生徒達にも、専用機持ち達にも反応している。対象外なのは一夏と箒の二人だけだ。

（またか……。お呼びじゃねえよ、とつとつと消え失せろくそつたれ）

そう念じると『猛犬』の表示は綺麗さっぱりと消え、赤く染まっていた視界も元に戻っていく。一先ずはこれで安心だろう、彼は目を閉じて深呼吸する。

「スウー……ハアーツ……。一先ず、『猛犬』の表示は消えたぞ。これで……ん？」

「？ どうした？」

「ああ？ なんだ、これ……」

目を開けると、彼の視界には今まで見たことが無いものが表示されていた。

一番先に目に留まったのがログと思われる膨大な数列。それは今も尚、目で追えない程に次々と更新と削除の繰り返しをしている。

次に目に留まったのが拡張領域。むしろ、これが一番の謎であった。

拡張領域が元の三倍に膨れ上がっているのだ。

しかし、その増えた分の拡張領域は『作成中』と『二パーセント』の文字で使用出来なくなっている。結果的に拡張は増えていない事になるが、これはいったい何なのだろうか。

いったいどうなっているんだと、彼は今も話し掛けてくる千冬を無視。使用出来ない拡張領域を目を凝らして注視してみると、『何かの物体』がうつすらと写っている。確認しようにもノイズが走っているせいでよくわからない。更に注視すると、そのノイズが走る表示に辛うじて映る文字が見えた。

——『CANINE』——。

そこにはアルファベットで示された謎の単語。彼は得体の知れないソレに謎の寒気を覚えた。

何だこれは、何て読むんだと思考が渦を巻く。その単語を一文字ずつ読もうとした所で——それはとうとう読めなくなった。

「……柳？」

「なーんだか知らねえけどよ……こいつ、こうしてる間も変化してやがる。何かを上書き？ 書き換えてんのか？ 拡張領域も何故か三倍だ」

「……………！ ……ログには何も出ていないな」

「けどわからねえな、その増えた分は使えねえんだよ。何か作成中らしく、中身は殆ど見えない。何か書いてあったんだが直ぐに消えちゃった」

「また何かを作っているのか……」

判明したのは今現在も変異を遂げている事と、拡張領域が増えた事、その確認できない拡張領域で何かを作っている事。正直言って謎しか増えていない。

謎だけが増えるこの機体はいつたい何をしようとしているのかと、千冬は息を飲んだ。

「……………他にも何かあるはずだ。調査を続けるぞ」

「ん」

こうして、二人のマンツーマンの調査は昼になるまで続いた。独占によって生徒達が拗ねない為に、時折千冬が他の班の様子を見に行きながら。教師というものは大変である。

今回の調査で判明したのは『灰鋼』は常に変異している事、拡張領域が増えた事、増えた分の拡張領域は現在使えない事、可動部が最適化されて動きやすくなった事、飛行可能になった事ぐらいであった。

余談であるが、以前調査の為に引き渡した回復系統の後付武装『リカバリー・ショット』。その行方はいったいどうなったのか。

IS学園は更なる調査の為に政府直属の研究所にそれを引き渡した。その結果、量産が可能だという事が判明したのだ。しかも、低コストで生産出来て、量子変換する容量も小さいという良いこと尽くめ。エネルギー量に関しては一工夫するだけで増量する事が容易であった。

これには研究員達も大喜び。直ぐ様量産に取り掛かり、更に研究を深めていく事になる。

現在課題となっている第三世代の燃費の問題。『リカバリー・ショット』の研究が進めば問題解消の一步を歩むであろう。

変異する『灰鋼』は、ISの研究に多少なりとも貢献していたのであった。

隆道は調査を開始し、一夏達は訓練を開始して時間を目一杯使った午前は終了した。

歩行操縦から始まる近接兵装や射撃兵装の取り扱い、そして飛行を行わない簡単な模擬戦闘等と生徒達は大忙し。五十六人に対し訓練機が五機なのはあまりにも少ないの

ではないだろうか。

そんな全力疾走とも言える授業が終わる直前、一夏と隆道は訓練機を格納庫へと運んでいた。

「ほんと助かりますよ。ありがとうございます」

「気にすんなよ。ほら、押せ押せ」

「物凄い力ですね。俺あんまり力込めてないんですけどスイスイ行きますよ、これ」

「腕つぶしだけは自身あるから、な……ああ？　おい織斑、何どさくさに紛れてサボってるんだ」

彼等が押しているそれは訓練機を載せたIS専用のカート。何故か動力源が無いそれは人力で運ぶしかなかった。最先端技術を持つIS学園にも関わらず何故、変な所でケチっているのか。

最初こそ一夏が一人運んでいたのだが、それを見兼ねて現れたのが隆々とした筋肉バキバキマンの隆道。助っ人として協力して運ぶ事になった。

「つーか、なんでお前が運んでんだよ。使った奴等に運ばせりやいいじゃねえか。頼まれたからって簡単に返事すんな」

「い、いやあ、その……。ほら、男の俺が運ばないで女子に運ばせるっていうのも普通におかしいというか……」

「力仕事は男がつてか？ そんな風潮なんざ昔の話だつっの。気持ちにはわからなくもないが今の時代その考えだとそのうち痛い目見るぞ」

「う、うーん。そう、ですかね……」

「それに……ほら、見てみるよ」

隆道はカートを押しながらも、ある方向を顎で指した。一夏は首だけを動かしてその方角を覗くと、そこにはシャルルの班が。彼が訓練機を運んでいるかと思いきや——。「デュノア君にそんな事させられない！」

「あ、あははは……」

——シャルルではなく、体育会系女子の数人が運んでいた。一夏と扱いがまるで違う。

「……アレにも同じ事言えるのか？」

「……………」

「まあ、今直ぐに変えろとは言わねえさ。ほら、力抜いてんじゃねえ……ぞつと」

「——あつ!? 今離れたら——おつもつ!」

ふざけ合いながらも無事格納庫へ訓練機を運び終えた二人は再びステージ中央へとＵターン。他の班は未だに運んでいる最中、手伝う気など一切無い——はずだったのが一夏だけは手伝いに行ってしまった。つくづく優しい男である。

全ての訓練機を運び終えた頃には隆道以外の生徒全員は肩で息をするほどに疲労していた。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合する事。専用機持ちは自機を、その他の生徒は訓練機を見るように。では解散！」

ちなみに、生徒全員が死にそうなほどに疲労しているのは千冬が原因でもあった。

班の様子を見に行くその度に彼女は直々に指導していたのだ。最初こそ、それはそれは生徒達の歓喜で溢れていたのだが、彼女の厳しい指導——というよりシゴかれた事によつてその余裕は次第に無くなり、最終的に全員が撃沈。それを遠くで眺めていた隆道は引きつった顔になったような。

「あー、やっと終わった……。さて、着替えに行きますかね」

「え、ええつと……僕はちよつと機体の微調整をしてから行くから先に行つて着替えてよ。時間掛かるかもしれないから待つてなくて良いからね？」

「ん？ シャルル、別に待つてても平気だぞ？ 俺は待つものには慣れ——」

「い、いいからいいから！ 僕が全つ然平気じゃないから！ ね？ 先に戻つててね？」

「お、おう。わかった」

教室に戻る為に着替えに誘う一夏であつたが、シャルル妙な気迫に押され引き下がつ

た。ただ誘っただけなのに何故必死なのだろうかと思う一夏であったが、待つてても仕方ないので隆道と更衣室へと向かい、到着後直ぐに着替えていく。

「これで、よしと。今日も昼は一人で？」

「ああ、デュノアはお前に任せるわ。ちよーっとやる事もあるしよ」

「やる事……？」

「気にすんな。只の野暮用さ」

またしても昼を断られてしまった一夏。隆道が言うやる事とは何だと疑問が浮かぶ。今日はシャルルも交えて交流を深める算段であったが、野暮用なら仕方ないなど一夏は諦めた。

「ほら、教室で待てと言われたろ？ こっからは別行動だ」

「おっと。んじゃ、俺はこれで。いつかは一緒に食べましようね」

「ん。そのうち、な」

そう言つて一夏は更衣室から出ていった。残った隆道は彼が出ていくなり、表情を陰しくする。

「……さて」

暫くして、更衣室にやって来たシャルル。辺りを見渡すその様子は何処か落ち着きがない。

「いない……よね？」

恐る恐るロッカーへ辿り着く彼はISスーツの上に素早く制服を着ていく。まるで着替えを見られたくない様に。

「……っ!？」

と、その時。近くで軽い物音がした。その方向へ振り向くと、床には転がる空き缶が一つ。彼は即座に自身の専用機をローエネルギーモードで起動。センサーを駆使して辺りを見渡す。

ISは展開せずともハイパーセンサー程度であればモード切り替えで待機形態でも使用が可能だ。

勿論、無断展開ではあるがそれについては後で教員に謝って罰を受けようと、彼は考えていた。

(周囲に生体反応無し、熱源センサー反応無し。動体センサー反応無し。音響視覚化レーダーも反応無し。位置座標は……良かった、一夏はちゃんと教室に向かっている。でも柳さんは?)

周囲には確かに誰もいない。ハイパーセンサーには何も反応が無いのだから間違

無い。

位置座標についても相手の許可登録はしていないが大体の位置は把握出来る。よつて近くには専用機持ちはいない。

しかし、隆道——正確に言う『灰鋼』の位置だけがわからない。全くわからないのだ。

位置座標に反応しない潜伏モードにでもしているのだろうか。だとしてもいつたい何故。

「……そろそろ行かなきゃ」

空き缶は一夏か隆道のどちらかが置いていったのだろう。仕方ないなと呟きながら彼はそれを拾い、更衣室を出ていった。

——シャルルは気づきも、見えもしなかった。

「……なるほどねえ。やっぱ便利だな、これ」

——自身の真後ろに隆道がいた事に。

第三十三話

シャルルが教室に向かっているその頃。IS学園の校舎外には校舎へ向かいつつ電話を掛けている隆道が一人だけ。周囲はもぬけの殻で、普段なら数人ほどいる筈の生徒は一切見当たらない。

「……本当に何も無いんだな？」

『何もねえよ。ニュースになってねえし調べても出てこねえ。そっちでテレビ見てねえのか』

「俺が見ると思ってるのかよ。つか、三人目については誰も知らなかったんだからテレビは関係ねえだろ」

『あー……なら、多分アレだ。お前が連れて行かれる時に俺達騒ぎまくったろ？ 報道規制掛けるようにしたんじゃないかね。若しくは報道しない自由とかな。まあ、間違いなく企業が絡んでるだろうよ』

「……ふーん」

突然と現れた三人目の男性操縦者、シャルル・デュノア。デュノア社の社長の息子にして既に専用機持ち。更には授業中で小耳に挟んだフランス代表候補生。彼の存在は

疑心暗鬼に満ちていた。

更衣室では『灰鋼』が生み出したあるシステムを試して彼の真後ろから着替えを監視していたが、ISスーツの上から制服を着込んだだけ。それ以外の行為は見受けられなかった。挙動は充分に怪しかったが。

そんな怪しすぎる彼の詳細を少しでも手に入れようと友人の一人である治に連絡を取ったのだが——情報は全くの皆無であった。

確かに報道規制の可能性はある。一人目の一夏の時は報道陣が殺到し、自身の時は連れて行かれる直前まで友人達は大騒ぎした。報道しない自由は今に始まった事ではないし、それも可能性の一つであろう。良くある話だ。

例として挙げると女性が働く横暴などは殆どと言って良いほど報道されない。当然の事だから報道の必要はないという考えだからなのか、都合が悪いから報道しないのか。

それはテレビだけに留まらず新聞雑誌も例外ではない。都合の悪い事は絶対に載せず、最悪だと捏造を報道して理不尽な非難を浴びせる事例もある。そんな腐り切ったマスメディアなど誰が見たがるというのか。未だに見たがる者などそういった事実を知らない人間か信者だけだ。

『何にせよ良かったじゃねえか、男が増えてよ。数少ないとはいえ多少はマシになるだ

ろ』

「……だったら良かったんだけどな」

『あん？ 何だつて？ ……まあ、いいや。それよりお前のクロスボウ、弦が重すぎだつ
つうの。コッキングメカ付けねえと誰も引けねえわ。何でお前は片手で引けんだよ。
あり得ねえだろ』

「お前等が貧弱なだけだろうが。……はあ、もう切るぞ。じゃあな」

『ああっ!? 言つたなこの野郎っ!! お前の力がおかしい——』

電話から喧しい声が聞こえたが彼は彼はガン無視。一方的に通話を切つて校舎の中へ足を運び廊下を突き進んでいく。情報よりも飯が先だ。

しかし、購買へ向かう彼は目の前の状況に足を止めざるを得なくなつてしまう。

「うわ、なんだこれ……」

彼が見たもの、それは生徒の人集りであつた。

何処までも繋がるその列は正に鮎詰め状態。一学年の方と食堂の方へと繋がつてい
る。この様な騒ぎは既視感があつた。

まるで有名人を一目見ようという喧しき。その理由など、IS学園において一つしか
存在しない。

(デュノア目当て、か。能天気な奴等だ……)

聞こえる話し声も三人目の話題ばかり。恐らく食事に誘おうとかいう魂胆であろう。しかし、そんなシャルルの事はどうでもいい。重要なのはそこではない。今重要なのは昼食を取れるかどうか、ただそれだけだ。

彼は身長が誰よりも高い事から窓越しに人集りの様子が大体把握出来る。目を凝らし観察すると頭を抱えそうな事態が彼を待ち受けていた。

購買までの道も生徒によって塞がっていたのだ。朝食を取り損ねた彼にとつてこれは非常事態だ。購買へ辿り着くには女子で埋め尽くされた人混みを通らなければならぬ。クラス代表戦にて生徒による人混みは経験済みだが、あんなものは二度と御免だと誓っていた。

飯は食べたい。しかし、あの人混みを通りたくないと思考が左右される。脳内でそれは何度も反復し、彼が出した結論は――。

「……寝るか」

――諦める事であった。

時間は少し経ち、IS学園の屋上。

快晴の空となつてゐる今日。そんな天気の中、屋上で昼食を取るのはさぞかし心地よ
いだろう。ピクニック気分になるのは間違いない筈だ。

しかし、そんな天気の良い日だというのに生徒は極一部を除いていなかった。その理
由は至つて単純、シャルルである。

彼を食事に誘おうと争奪戦の勢いで一組に大挙して押し掛けてきた生徒が半分、食堂
で偶然エンカウントするように今も尚出待ちしている生徒が半分。

前者の押し掛け組については本人が丁寧に対応してお引き取り願つた。その時の台
詞がこれだ。

『僕の様な者の為に咲き誇る花の一時を奪う事は出来ません。こうして甘い芳香に包ま
れているだけで、もう既に酔つてしまひそうなのですから』

傍にいた一夏は凄いとしか言葉が出なかつた。堂々として、それでいて何処か優しい
言葉に感服を覚えたのだ。シャルルに手を握られた三年生は失神する程なのだから、言
われた本人達からすると凄まじい衝撃を受けたのだろう。

そして、後者の出待ち組については残念と言う他ない。彼が食堂に来る事は無いのだ
から。

何故ならば——。

「ええと、本当に同席しても良かったのかな？」

「いやいや、シャルルは転入してきたばかりで右も左もわからないだろ？ それに、せっかくの昼飯なんだ。大勢で食った方がうまいだろ」

「屋上で正解でしたわね。あの人混み、恐らくは食堂にもありましたわよ？」

「流石にあんな所じゃねー……」

——当の本人は屋上にいるのだから。

そこにあるベンチに座るのは一夏を始めとしたシャルル、箒、セシリア、鈴音の五人グループ。彼等は食堂ではなく屋上にて昼食を取りに来たのである。元々天気が良いからと屋上で食べる予定だったのだが、親睦を深めるという事もあってシャルルも連れてきたのであった。

本来ならば隆道も誘う予定だったのだが、断られた事により断念。セシリアと鈴音を誘って今に至るといふ訳だ。

「ほら一夏。弁当だ」

「おう、サンキュ！」

「はい一夏。アンタの分」

「おお、酢豚だ！」

箒からは弁当を渡され、鈴音からは酢豚の入ったタツパーを渡される一夏。彼女達が昼食を作ってくれるということで彼は手ぶらで来たのだ。勿論、この弁当と酢豚は彼に好意を寄せているからこそその物なのだが、この少年は感謝以外何も感じないのだろうか。相変わらずそういった事には鈍感である。

ここだけの話、屋上での食事に誘ったその直後に鈴音が急いで寮へと戻り、タツパーを増やしてきたのは言うまでもない。

他の二人、シャルルは購買でパンを、セシリアも購買で昼食を確保したのだが——それとは別に彼女の横にはバスケットが一つ。

(で、出た……!!)

一夏と箒はそのバスケットを見て内心穏やかではなかった。何故ならその中身が何なのかわかってるからだ。

とにかくスルーを決め込もうとしたのだが——世の中はそう上手くいかないもの。

「コホンコホン。——皆さん、わたくしも今朝は偶々偶然何かの何の因果か早く目覚め

まして、こういうものを用意してみましたの。よろしければお一つどうぞ」

そう言つてセシリアはそのバスケットを皆の前に出して開く。そこには彩りの良いサンドイッチ——BLTサンドがずらりと。

「……………」

「……あつ」

「？」

一夏と箒は戦慄し、鈴音とシャルルは察した。理解していないのは作った本人のセシリアだけ。どうしたのかと首を傾げている。

何故、一夏と箒は戦慄したのか。それは以前、彼女の手料理を食べた経験があるからだ。

そう、セシリアは料理が凄まじくダメなのだ。それは不器用や味音痴という訳ではない。

彼女は自分の知らない調味料を入れたり味見をしない等の、料理をする上で知っておくべき事やっておくべき事をしないのである。にも関わらず、見た目だけは異様なほどに完璧なのだ。

その見た目だけは完璧なマズメシを作る本人はこう語る。

『本と同じになればいいのでは？』

あまりにもふざけたその言葉に一夏と箒は言葉を失った。やっぱりコイツ馬鹿だと再認識した。それは『本と同じ』ではなく『写真と同じ』だ。

もしも、その場に隆道がいたとしたら関係改善不可能ブチギレ待った無しからのパイ投げじみた飯投げが炸裂していたかもしれない。

そんなふざけた過去を思い出しながらBLTサンドを見据える一夏と箒に、何れ程の代物なのかと一周回って逆に興味が湧く鈴音とシャルル。

本来ならば指摘すべきなのだろう。何時までも不味い飯を食わされるのは勘弁だ。何よりも、本人に恥をかかせる事になる。

「お、おう。後で 貰うよ」

「そ、そうだな」

しかし、彼等は指摘せずに顔を引きつるだけ。

実を言うとセシリアの手料理を初めて実食した際に、不味いとはつきり言わなかったのである。その結果、非常に言いにくい状況までいつてしまったのだ。炊事経験のある二人にとって、彼女の手料理は指摘よりも感謝が勝ってしまった。

ちなみに、かつて鈴音も初めての手料理を一夏に振る舞った事がある。その時の彼は友人にこう語ったそうなの。

『あれは殺人料理だ』

『アイツ、『美味しいって言わないと殺す』って顔してた。何も言えなかったんだ』

あまりにも可哀想過ぎる。しかも、殺人料理を作った本人はそんな事綺麗さっぱり忘れていたのだからタチが悪い。彼の持つ女難の相は呪いに等しいだろう。一度お祓いをするべきだ。

そんな過去話はさておき、彼等はどちらにせよ食べる事は確定、逃げる事は許されない。

故に、彼等が取った行動は――。

「さて。シャルル、同じ男子同士仲良くしようぜ。色々な不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからない事があつたら何でも聞いてくれ――IS以外で」

――後回しにする事であつた。何一つ解決していなかった。

「アンタはもうちよつと勉強しなさいよ」

「してゐるって。多過ぎるんだよ覚える事が」

言い訳に聞こえる一夏の弁明であつたがそれも仕方がない。ただでさえ勉学は皆よりスタートが遅れているのだ。それでもしがみついているのは中々出来る事ではない。

「ありがとう。一夏って優しいね」

「はは。ああ、それと。どうか柳さんとも仲良くして欲しい。シャルルだつたら上手くやっていけると思う」

「ああー……、今日は殆ど不機嫌だったね。織斑先生から多少は聞いてたけどやっぱり……」

「ああ。だからクラスの皆とは会話すら無いぞ。今はマシになったけど最初こそ本当に酷かった。まともに会話出来るのは俺と筈くらいだよ」

「ええ……どんなに酷かったのさ……」

シャルルは入学の際に隆道の事について、千冬から大まかに説明を受けていた。

女性が嫌い、ISが嫌い、不用意に接触はするな、彼と模擬戦をするな等々。その時の彼女の表情は真剣そのものだった事は今も覚えている。その時、もう一人の転入生は何やら面白くないような険しい表情をしていた事も。

その話は一夏の説明からして本当なのだろう。今日の様子からして全部当てはまる。隆道自身も、あの禍々しい機体も。

入学当初の隆道はいったいどれくらい酷かったのだろうか。ちよつと興味が出てきたシャルルは何気なく聞いた。聞いてしまった。

「あつ……」

「？」

悪気ないただの質問をしたその瞬間。シャルルの隣にいるセシリアは――。

「……………」

「えつ。オルコツトさん、何その遠い目」

——虚ろな目で遠くを眺めていた。とうるか、現実逃避していた。

「ふふ、何処かにタイムマシンさえあれば……」

「オルコツトさん!?!」

「あーっ！ あーっ！ この話はやめんか!! 一夏、さつさと食べるー!」

「わ、わりい。えと、シャルル、悪いけど言えないんだ。この話はここまでにして食おうぜ」

「う、うん」

箒のお叱りにより隆道に関する話は中断、一同は昼食を食べ始める。一部禍々しいオーラを放つサンドイツチがあるがそれは最後に皆で食べようと、四人は覚悟を決めた。

「おお、うまい！ 本当にうまいな」

「ふっ。和の伝統を重んじればこそだ」

「じゃ、一個もーらいっ!」

「あ、こら!」

談笑を交えた食事は何かと楽しい。太陽の下でならばより楽しい気分させられるだろう。

遠足や花見だつてそうだ。それぞれには目的があるが、共通の楽しみは親しみのある人間同士の交流を交えた食事だ。それは何処だろうと決して変わらない。

そう、楽しいはずなのだ。本来ならば。

端から見れば楽しそうな昼食会。しかし、その数分後ついに空気をぶち壊してしまう者が一人。

「……なあ、一夏」

「……なんだ？」

「……もう、限界なのだが？」

「言うなよ箒……。俺だつてさつきから気が気でなかったんだからさ……」

始まりは箒の一言であつた。それに続いて一夏も何処かそわそわし始め、セシリアとシャルルの二人も同様に落ち着きを無くしていく。鈴音に至つては冷や汗をかき始めていた。

「「「「……………」」」」」

そして限界が来たのか、堪らなくなつた全員が同じ方向へ恐る恐る向くと、その視線はここから少し距離がある一台のベンチへ集まる。

そこにいたのは――。

「ZZZZzzzz……」

――顔を片腕で覆い、爆睡する隆道であつた。

彼は屋上で寝ていたのだ。一夏達が来たその時点で既に横になつていたのである。

「ねえ。寝てる、よね。まだ寝てるよね……？」

「最初からいらつしやいましたよね……？」

「確かにいたな……。私達よりも先に……」

「手ぶら、だよね。もしかして柳さん……」

「まあ、多分、昼飯食べてないと思う……」

彼がいる事は完全な予想外であつた。屋上へとやつて来た彼等は辺りに人一人いない事に安堵の表情を浮かべたのだが、それもほんの数秒だけ。ベンチで隆道が横になつているのに気づいた一夏は声を掛けようと一瞬考えたのだが、今はセシリアも鈴音もいる事を思い出してスルーする方向を取つたのである。

食堂か教室に戻る手もあつたのだが、正直言うところあの人混みの中で食事をしたくない。起こさなければいいかという結論に至つた。そして、同時に何故ここで寝ているの

かは考えないという暗黙のルールも出来上がったのである。

しかし、どうも気になってしまう。談笑で気を紛らわせていた五人であったが、とうとう限界に達してしまったのであった。先程までスルーを決め込んでいたが、一度崩れてしまえばポロポロと疑問が浮かび上がる。

「昼はいつもここに……？ いやでも、それなら色々と納得出来るぞ」

「真つ先に何処か行きますものね。ぶらつく様な人とは思えませんし……」

入学した頃からそうであった。昼は必ず真つ先に教室から出ていき、授業が始まる直前に戻ってくるか終わりのSHRまで戻ってこないかの二択。

食堂にはクラス代表就任パーティーの時を除いて一切顔を出さない彼はいったい何処で食事をしているのだろうかと疑問に満ちていた。屋上だとするならば全てが納得がいく。

そんな結論を導き出す筈とセシリアを余所に、シャルルはある疑問が湧いた。

「……あれ？ 一夏、今更だけど柳さんとはいつ頃分かれたの？」

「ん？ 俺が先に更衣室を出た時だな。野暮用があるからって」

「……ええ？」

この時、シャルルはある引つ掛かりを覚えた。一夏が更衣室から出たのを見掛けて中へ入ったのだが、確かにその時から隆道の姿は見えなかった。しかし、彼は自分が先に

更衣室を出たと言っているのだ。

では、隆道は何処にいたというのだ？ 彼を先に行かせた理由は？ 野暮用とは？

最初から屋上に行くのなら彼と行動を共にしたはずだ。自分達より先にいたのだから野暮用が屋上に行くという線は消える。

故に、彼と分かれた直後の行方がわからない。まさかあの時、未だに更衣室に残っていたのではないかという考えが浮かんでしまう。

(いや……あり得ない、周囲はくまなく調べた。彼処にいる筈が無いんだ。いる筈が……)

きつとただの見落としだ、そう思いたい、そう信じたいとシャルルは自分に言い聞かせた。

いる筈が無いのだ。センサーには全くの反応が無かったのだから。確かに位置座標は反応していなかったが、生体反応を始めとした他のセンサーだけはどうにもならない。その事実が、次第に彼の引つ掛かりを消していった。

「——ル。シャルル！」

「——うえっ!? な、なにかな？」

「あ、いや。とりあえず柳さんは置いて飯食べようぜ。食べて直ぐダツシユは避けたい。俺達はまた更衣室まで行かないといけないからな」

「あ、うん……」

次の実習場所は第四格納庫だ。第三アリーナよりは比較的近場ではあるが、使用出来る更衣室は第一アリーナである。結局は移動に時間が掛かるのだ。故に、あまりのんびりしていると食後からの中距離走が始まってしまう。流石にそればかりは避けたいところだ。

いぎ、迫り来る授業に遅れない為に全員が昼食を再開しようとした——その時。

「……あつ」

「ん？……あつ」

最初に反応を示したのは箒、その次には一夏。二人は弁当を片手に固まり、隆道がいるベンチへと視線を向けている。

それを見た三人は察してしまった、その視線の意味を。自身の弁当へ向けていた視線は再び彼のいるベンチへと移る。

すると、先程まで寝ていた彼は——。

「……………」

——起きていた。ぐったりと項垂れた姿勢で。

「……………」

静寂。目を離れた隙に体を起こした彼は、今や顔が見えない程に猫背で座り込んでい

た。一切顔を上げようとはしない為、表情はわからない。しかし、何処か気分が優れないのか唸ったり体を揺らしたりなどしている。

「…………ちよつと行つてくる」

「あつ、ちよつと!?!」

それを見兼ねた一夏は四人を置いて彼の元へ向かった。体調が悪いのかもしれないと、自分が行かなければと自然と身体が動いたのだ。

「ね、ねえ。大丈夫なのアイツ…………?」

「言つただらう、あの人とまともに会話出来るのは一夏と私だけだと。何も心配はいらん」

「だったら良いんだけど…………」

そうこうしてる間に一夏は彼の目の前まで接近していた。すると、それに気づいたのか彼は顔をほんの少しだけ上げて一夏と会話をし始める。表情は髪で隠れている為に全くわからない。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

二人の会話は聞こえない。少しだけ屈んで話し掛ける一夏に、彼は力なく答えている。

数回ほどそのやり取りを繰り返して会話を終えたのか、一夏は四人の元へと戻ってきた。その顔は心配そうな何とも言えない表情だ。

「……………どうだ？」

「やっぱり昼飯食べてないってさ。朝飯も食べてないんだと」

「分ければ済む話だろう。言えば私だって——」

「いや、断られたんだよ。絶対に何か食べた方が良いのに…………。あと、すげー眠そうだった」

「ああ。中々聞かないからな、あの人は…………」

彼の説得には非常に時間が掛かる。以前も保健室に行かせるだけの説得で三時間時間を費やしたのだ。今から説得しても昼を過ぎてしまう事は確実だ。

「箒。悪いけど教室戻る時に購買で何か買ってきてくれないか？ 金は後で出すからさ」

「いや、私もアレは見過ごせん。何か買ってくるとしよう。金はいらんぞ」

「悪い、助かる……………んん？」

「一夏？」

「セシリアは何処行った？」

彼等は漸く気づいた。セシリアの姿が見当たらないのだ。そして、それと同時に――

「……ねえ。何か足りなくない？」

「……足りないね」

――バスケットが無くなっていた。

「……っ?!?!」

一夏は異様な悪寒を感じた。何故、セシリアがいないのか。何故、バスケットが無いのか。それは他の三人も感じていたのだろう、顔面蒼白なのがそれを物語っている。

故に、彼等は全力で身体毎隆道の方へ向けた。

「「「……あっ?!?!」」」

そこには、セシリアの歩く姿があった。

例のバスケットを抱えて。

「「「――」」」

彼等は完全に固まってしまった。何をしようというのか理解してしまったからだ。それは無知故の過ち。それは悪魔の様な所業。

(あの馬鹿っ！ 何やってんだよっ！ 話聞いてなかったのかっ!?)

(おやお落ち着けっ！ 柳さんの事だ！ きつと無視する筈だっ!)

(いや止めなさいよっ！ アレは駄目だっ!)

(あわわわ……!)

止めるべきなのは尤もだ。しかし、一夏と箒はセシリアの予想外過ぎる行動に混乱。鈴音はなるべく近づきたくないが故の硬直、シャルルは最早混乱処では無くなっていた。

(朝から食事をされていない……ここはわたくしの出番ですわねっ!!)

セシリアこの馬鹿は謎の使命感に駆られていた。朝方に感じた因果はこの為にあつたのだと。それが彼女の身体を自然と動かしていた。

あの日——クラス代表を決める試合の翌日から徹底的に無視される事、約二ヶ月。あの日から彼との関係を改善する為に様々な手段を取ったのだがどれも失敗に終わっていた。

彼の容態に配慮しつつ、思いつくものあれやこれやと試しても全てが玉砕。しつこさが仇となって『ライム女』という残念なあだ名を付けられる始末。一向に改善の余地は

無かったのだ。

しかし、彼との関係を修復する絶好のチャンスが今やってきた。ここで行動を起こさずどうするというのが。

行動力の化身と化した彼女はもう止まらない。後方から感じる止まれという雰囲気を見直し足を更に速める。そして、遂に彼の元へ辿り着いた。

「あつ、あのっ!!」

「……………んう?」

(……………やはり、これはチャンススツツツ!!)

聞こえた第一声は寝惚け声であった。今まではこれでも無視される筈だったのだが、今回は違う様子。好機と判断した彼女は直ぐ様手持ちのバスケットを開け、中身のBLTサンドを一つ彼に差し出す。

「や、柳さん。お一つどうぞ……………!」

「……………」

隆道にしては珍しく彼女に反応し、その光なき目はじつとBLTサンドを見詰めている。少なくとも興味はある様子ではあった。彼女と目を合わせてはいないが、それは些細な問題だ。

(くっ……………怖じ気づいてはなりませんセシリア・オルコットツ! ここで引いたら……………)

!

彼女はいったい何と戦っているのか。小一時間問い詰めたくなる様な考えなどつゆ知らずに、彼は未だBLTサンドから目を離してはいない。

(お願いします………！ どうか………！)

食べ物を差し出すセシリアと座り込んだままの隆道。数秒ほどの時間が経ち、彼はなんとそのBLTサンドを手に取った。

「……ん」

「あ………」

((取ったつ……?!?!?)

四人——特に一夏と箒は愕然とした。あのガン無視に定評のある隆道がセシリアを無視せずに、しかも手料理を手に取ったのだ。決してあり得ない事が目の前で起こったのである。

そして、数秒間ソレを見詰めた彼は遂に——。

「……んぐ」

——食べた。

さて、ここで説明しよう。何故、彼はセシリアを無視せず、しかも差し出されたB LTサンドを食べたのか。

実は彼、基本的に寝起きが悪い。少なくとも、起きてから数分間は意識が朦朧としている。直ぐに覚醒するのは悪夢を見た時だけだ。

つまるところ、話し掛けてきた相手を全く認識していなかったのである。一夏との会話は殆ど空返事だったのだ。

そんな頭がぼんやりした状態で目の前に現れたのが願ってもない食べ物。彼の脳はそれを食べたいという思考で満たされたのであった。

しかし、その食べ物は所謂マズメシだ。それを知らずに頬張った彼は――。

「ゲボブツ」

――誰もが聞いたことの無い声を出した。

またもや静寂。

隆道が、セシリアが、一夏が、箒が、鈴音が、シャルルが、その場にいる全員が固まっ

た。

(あーっ！ ああーっ！)

一夏と箒は心の中で激しく叫んだ。あの馬鹿は何て事をしてくれたんだと。そして、それと同時に自分を恥じた。自分が指摘しなかつたばかりにこの様な事態を引き起こしてしまつたんだと。

鈴音とシャルルは言わずもがな。表情に出てはいないが心の中で叫んでいるに違いない。

彼が変な声を出し、固まって数秒後。状況は動き始める。

「や、柳さん？ どう、なさいました……？」

「……………」

自分が原因とは思わないセシリアは恐る恐る様子を伺うと、彼は再び口を動かし始める。なんとこの男、吐き出そうともせずそのまま食べ続けたのだ。

口を動かし、飲み込んで、また食べて。それを繰り返す、渡されたBLTサンドを食べ終えた彼は最後に溜め息を吐く。そして、ゆっくりと一夏達の方へ目を向けた。

「……………」

「……………!!」

もう、彼等が出来る事は謝る事だけであつた。両手を合わせ上半身を必死に折り曲げ

る四人の姿は言葉に出さなくとも伝えたい事がわかる。

「……………はああ」

伝わったのか、そうでないのか。彼は溜め息を大きく吐きながら立ち上がり、セシリアのバスケットを奪っていく。突然奪われたバスケットに驚く彼女であったが彼は何も言わずにその場から離れ、屋上を出ていった。

「んぐ……………ゲボツ。……………ゴブツ」

——BLTサンドを口に運びながら。

「[[[[……………]]]]」

彼は行ってしまった。投げ捨てるかと思いきや全部持っていくなど誰が予想出来ようか。

そんな絶句する状況の最中、何も知らずに四人の元へ戻ってくるセシリア。彼女は非常に満足そうな表情をしている。

「やりましたわ皆さん!! これは改善の一步を踏んだのではなくって!?!」

無知は罪とはこの事か。ガッツポーズを決め込む彼女はこれを機に手料理を振る舞う事だろう。今後も犠牲者を増やす事だろう。

「……セシリア」

「はい?」

織斑一夏は誓った。もう、これ以上の犠牲者を出さない。無知蒙昧むちもうまいの英国人を正さねばならぬと決意した。

「俺達が悪かった。酷な話なんだけど——」

「あら、いらつしやい。こんな時間に来るなんて珍しいじゃな——ちよつと、どうしたのさ!」

「ん? これってBLTサンド……? ……うわ、甘っ!? 不味っ!? 何これっ!」

「え、ブラックコーヒーを大量に? 直ぐ持って来るから待つてな!」

「え? あと紙とペン? なんでさ?」

それから暫くして午後の実習、第四格納庫。

「「「「……………」」」」

そこは、異様な光景であつた。生徒達は一切の無駄口を叩かずに黙々と機体整備の実習を行っている。午前であれだけ騒いでいた者達とはとても思えない。

しかし、それも無理の無い話であつた。何故ならば、そんな空気を作り出している人物が二人もいるのだから。

「ぐすん……………」

「ぐ……………う……………ぎ……………」

その格納庫の片隅には体育座りでメソメソ泣くセシリアが一人。その反対の片隅には苦しそうに唸っている隆道が一人。彼の片手には缶コーヒーが一つ、周りには潰れたスチール缶が大量に転がっていた。

そう、彼はあのマズメシを全て平らげたのだ。自分が食べなければ彼等が食べると踏んで。一応腹を満たす事は出来たが、代わりに味覚に壮大なダメージを負つたのであつた。

「……何があった」

「あー……そのー……」

その光景を目の当たりにした千冬は一夏に事の詳細を聞き、立ち眩みがしたという。

場所は変わり一年一組教室。セシリアの机には空になったバスケットが紙と共に置いてあった。その紙には殴り書きでこう書かれている。

『ご馳走さん。甘い。不味い。二度と食わせんなクソボケライム女』

セシリア・オルコット。関係改善大失敗。

第三十四話

時刻は夕方。I S学園の生徒指導室。

その部屋の中央で二人の男女が対峙していた。青年は真つ白な制服姿、女性は真つ黒なスーツ姿で佇んでおり、互いに表情が険しい。

「お前が私を呼ぶとはな……意外だ。何か相談事でもあるのか？」

「ああん？　なーにが相談事だ、誰が好き好んであんたと二人つきりになるか。ちとら用があるだけだ、余計な話はいらねえ」

青年——隆道が発した最初の一言がこれ。些細な会話すら許さない雰囲気撒き散らしている。とても教師にする態度とは思えず、まるで反抗期の様な態度だ。

そんな相変わらぬ態度な彼に女性——千冬はお手上げの表情だ。彼女としては氣楽に話し合うつもりだったのだが当然の如く失敗、これ以上は無駄と判断し早々に切り上げて本題に移った。

「……はあ。用件はなんだ」

「シャルルデユノア」

彼はの放った美少年の名に、彼女の表情は微々たるものだが険しくなった。その変化

は極一部しか判別出来ない故に、彼に気づかれる事はない。

「奴がどうした」

「織斑と同室にしたそうだな。限られた部屋数、男子二人どっちの部屋に入れるか。まあ、あいつは人がいいからな。この辺りは妥当ってか？」

「何が言いたい——」

「しらばつくれんじやねえ。あいつは何なんだ」

最後だけドスの効いた言葉。遮る様に放たれたそれは彼女を怯ませる程ではなかったが、つい口を閉ざしてしまった。そんな彼女を畳み掛ける様に彼は言葉を続ける。

「報道規制だか知らねえが情報が一切ねえ。既に代表候補生なのも謎だ。女に慣れてるかと思えば俺ら男に対して動揺する、あまりにも怪しすぎんだよ。織斑は同じ男が来た事に喜んで他が見えてねえし、他の馬鹿共は疑ってすらいねえぞ」

「お前の言った通りデュノアに関しては報道規制が掛かっている。代表候補については転入させる前にフランス政府が無理矢理押し通したらしい。仕草は……世の中には変わった奴もいるだろう。まあ、あいつらが馬鹿共なのは否定せん」

「変わった処じゃねえぞあんなの、着替えの時の動揺なんてどう見ても女のそれだ。

……まさか、男装だなんて言わねえよな」

「……何を言ってる。奴が男装してるなどそんな馬鹿げた話は無い」

睨み合う両者。それはどちらも譲らぬといった雰囲気であり、他者なら尻込みする程の氣迫だ。恐らく誰もが割つて入る事は出来ないだろう。

互いに動かぬ事、約数秒。氣迫迫る睨み合いに引き下がったのは彼の方であった。

「……そうか。あくまで何もねえ、と。あんたがそう言うなら、そうなんだろうな。んじゃあ話は終わり、もう帰るわ」

「そうか。氣をつけて帰れ」

彼女の言葉に返事もせず彼は部屋を出ていく。一人残されたその部屋は時計の針が動く音すら聞こえる程に静かであった。扉から目を離さずに立ち留まる彼女はおもむろに携帯を取り出して電話を掛ける。

「……ああ、私だ。調査を急いでくれ、柳が既に感づいた。動く可能性があるぞ」

「あいつは疑り深いからな、必ず辿り着く筈だ。我々も協力したいが……ボーデヴィツヒや他生徒も何とかせねばならん」

「ああ、よろしく頼む。……では、またな」

通話を切つて数秒。彼女は何とも言えない表情を出しながら携帯をしまい、腰に手を当てながら小さく溜め息。見るからにお疲れの様子だ。

そんな疲労が見える彼女が取った行動は――。

「……飲むか。今日は許せ」

――酒に逃げる事であった。

織斑千冬、二十四歳。お酒、超大好き。

同時刻。学生寮のとある一室。

そこにいるのは一人の少女。机の明かりのみを付けたその部屋で何処かに電話を掛けていた。

「……ええ、はい。ご安心下さい、この部屋には一切盗聴器も、監視カメラもありません。私の事はノーマークの様です。恐らく、例の彼女と他の代表候補生達に目が行っているでしょう」

『』

「はい、今の所は。ですが、恐らく失敗するかと思われます。あの様なお粗末なものでは……」

『』

「わかつています、その時は私が。……では」

通話を切り、少女の表情は険しくなる。

彼女は誰と通話をしていたのか。彼女の目的は何なのか。彼女は——いったい誰なのか。

五日後の土曜。

IS学園では土曜日の午前は理論学習だけ行い、午後からは自由時間となつている。アリーナ全てが解放され、それによって殆どの生徒達が訓練に勤しんだりするのだ。

勿論、一夏もこの時間を最大限利用している。基本的な操縦から武装の取り扱い、そして箒達との模擬戦で日々汗水を垂らしていた。人一倍の頑張りを見せる彼は誰が見

ても尊敬の念を抱くであろう。爽やか少年ここに極まれり。

その一方で隆道はというと、訓練はするが一夏の様な頑張りは一切無い。やる事と言えば歩行からの全力疾走、そこから武装の空撃ちをするだけである。模擬戦をする事は絶対に無い。本人がする気がないのは勿論だが、何より機体が危険だという事もある。

飛行操縦に関しても自らが進んで訓練する事は殆ど無い。飛ぶとしても精々低空飛行、それも欠伸が出そうな程の速度だ。稀に宙に浮く時はあるが、その時は大抵訓練に飽きて寛いでいる。

全くのやる気ゼロな彼であるが、この五日間何もしなかった訳ではない。一夏の長い説得により授業や放課後で渋々と飛行操縦をした事はある。

しかし、これがまた酷いものだった。

ある時は――。

『柳いつ!! 速度を落とせえっ!!』

『あ、やっべー——だあっ!』

『ああっ……』

急降下からの完全停止が出来ずに地面に大きなクレーターを作り、またある時は――。

『「こう、ぎゅっとしてドカーンッ! です』

『なんだその擬音は……—うおわっ?!?!』
『うわっ……』

瞬時加速直後に体勢を崩して壁に激突し、またある時は—。

『織斑先生っ！ 柳さんが何か凄い事につ!!』

『うおおおおおおつっ?!?!』

『え、何ですそれっ?!? う!?!?! うはははっ!!』

—その場で高速回転するという謎の荒ぶりを生徒達に披露したりしていた。

そう、彼は歩行操縦とは反対に飛行操縦が全然駄目駄目だったのだ。『狂犬』や『猛犬』起動時の様な動きは全く出来なかったのである。

しかし、考えてみて欲しい。システム起動時を除けば今まで浮遊すら出来なかったのだ。浮く事が判明したのが丁度一週間前、飛べると判明したのが二日後の月曜日だ。初心者同然なのも致し方無いのだろう。

一夏も彼と同様に初心者域ではあるが、彼と違って成長速度は早く、IS適性値も若干高い。経験だけでなく成長速度も素質も一夏の方が上だ。

とは言っても、彼は一夏より劣っているという事を全然気にしてはいなかった。こんなもんだと割り切っていたのである。他人に憧れも無ければ嫉妬も無い、それが柳隆道なのだ。

そんな訳で今日もやる気が正反対の二人。今回利用するのは第三アリーナである。少しでも技術を向上する為に早々と訓練に励む——のだが。

「よつと……ふう。ところで何ですかこのデカイコンテナは？」

「俺の後付武装だだよ。色々持ってきたから試してくれだとか何とか」

「……へえええ」

「その顔をやめろ」

「一夏……」

満面の笑みを浮かべる一夏と、それをジト目で見やる隆道とシャルル。そんな三人の目の前には高さと幅が約三メートル、長さが約六メートルのコンテナが一台あった。

格納庫から三人掛かりで引つ張り出したそれは隆道の後付武装を積んだ物。送り主によると以前よりは良い物を揃えているだとか。楽しみ全開な一夏とは反対に彼はしかめっ面、シャルルは苦笑いだ。

「まあまあ、早速見てみましょうよ」

「つたく、他人事だと思いやがってお前は……。取り敢えず……。これか？」

「あ、はい。そこを操作してください」

キラキラした一夏に呆れながら彼はコンテナのパネルを操作。すると横の扉が開き、そこから勢いよく武装がずらりと飛び出す。それは正に武器庫と呼ぶに相応しい程の

膨大な数。

「うわ、すげえっ！」

「凄い数……」

「何なんだこの量は……戦争でもする気かよ」

基本装備から最新型装備まで選り取り見取り。ロマンの心得がある一夏はこれに大興奮。一足先に近づきそれらを眺めていく。

「どれどれ……あ、『豪雨』がありますよ。これ積めば火力増し増しじゃないですか？」

「うわあつ、弾薬もこんなに……」

「ブレードも豊富だな。幾つか積んどくか」

次々と武装を見ていく三人。今の所殆どが普通の装備だけでありゲテモノ類は見られない。

「あとは……」

「？ 柳さん？」

「——」

ふと、隆道が黙り始めた。疑問を浮かべた一夏とシャルルは彼の方を向くと、それに長い近接ブレードを黙って見詰めている。

「なあ、シャルル。あの近接ブレードは？」

「え？ ああ……あれはね、マチェット型の近接ブレードだよ。ショートブレードとかに比べて刀身が柔らかくて折れにくい様に作られてるんだ。と言っても『葵』とかの近接に特化した武器には負けちゃうけどね。リーチも通常の近接ブレードより狭いし……使う人はあまりいないかな」

「へえー」

すらすら述べるシャルルの解説に感心を覚えた一夏。しかし、同時に隆道の様子が少しおかしいことに気づく。マチェットを見詰める彼は目を見開いて微動だにしていなのだ。

「……柳さん。柳さんっ！」

「——あ？ ああ……悪い」

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

声を掛けると彼は元通り。いったいさっきのは何だったのだろうかと疑問を抱いた一夏であったが、様子を見る限り大丈夫そうなので気にしない事にした。

「……これは積んどくか。……あん？」

その時、またしても彼は黙った。今度は何だと二人は同時に首を傾げる。

「……何だこれ。工具か？」

「……ペンチ？ ニツパー？」

「……ボルトカッター？」

彼が持つのは工具の様な何か。それはペンチやニツパーに見えればボルトカッターにも見える、とても武装とは思えない代物であった。長い柄は折り畳み式になっており、格納出来る様である。

「この間みたいなの馬鹿みたいにデカイペンチよりは全然マシですね。用途は何ですか？」

「ちよつと待つてろ。あーつと……災害用の工具なんだとき。開かなくなつた扉とか抉じ開けるのに使うようだな。デザインは……ある資料を参考にした……らしい」

「ああ、やつぱり工具なんですな。……でも何で武装じゃなくて工具を？ ていうか参考も何も、何処かで見た気が——」

「止めろ、皆まで言うな」

「アツハイ」

隆道は制止し、一夏は押し黙つた。それ以上は触れていけない、そんな気がしたのだ。このやり取りは何処かデジャブとを感じる二人。この流れはマズイ、早速嫌な予感しかない。

「まあ……一応積むか、何かしら役に立つだろ。……ああ、くそつたれ」

「え、えつと、気を取り直して次行きましようよ次。ほら、この超大型メイス『狼王』や

柱みたいな質量剣『マスブレード』とか——」

「はいシャルルアウトオオツツ!!」

「おいデュノア! それはしまえしまえつ!! つーかどこにあつたそんなデカブツ

!!」

「うええつ!」

やはりと言うべきか。今回は普通と思いきや、案の定ゲテモノ武装は存在していた。これを送り出した主はいつたい何を考えているのか。

そんな普通から怪物揃いな武装のオンパレードに、三人はぎやあぎやあと騒いだのであつた。

一方その頃——。

「楽しそうですね……」

「何よアイツ、あたし達だっているのに……」

「駄目だぞ二人共。私だつて混ざりたいが、今は男子だけの時間だ」

——セシリア、鈴音、箒の三人組は彼等を羨ましそうに遠くから眺めていたような。

「一通り武装を試験運用し終わった丁度その頃。一夏は何かを思いついたのか隆道にある提案をしだした。」

「あ、柳さん。ちよつとだけ『葵』借りていいですかね」

「あん？ 構わねえけど」

「ありがとうございます。……おい、鈴っ！ 模擬戦しようぜ！」

コンテナから『葵』を一本引つ張り出した一夏は遠くにいる鈴音に声を掛けた。今から模擬戦をするらしいが、はたして何をしようというのか。

「全く、あたしをほつたらかしにするなんて良い度胸じゃない。んで、その近接ブレードはなんなのよ？ 二刀流でもする気？」

「まあ見てなつて」

模擬戦のスペースを確保して対峙するや否や、一夏はその『葵』を左手に持ち、空いた右手に自身の剣『雪片式型』を展開した。二刀流なぞ今時珍しくも無い上に、彼自身の機体の特性からして武装はこれ以上積みめない。故に、無意味だ。

しかし、隆道に電流走る――。

「——っ!? 織斑っ! まさかお前っ!!」

「ええ、そうです。決めて見せますよ」

「馬鹿野郎っ!! そんな事したらっ!!」

「……??」

何の事だかわからない鈴音。そんな彼女の前に立つ一夏は突如ニヤリと笑みを浮かべた。両腕を広げ、その両手に持つ二種の刀を垂直に構えると彼の表情は更に変わる。

「見てるよ、鈴。これが……! 俺の……!!」

それはまるで相手に勝ち誇った表情。そして、彼は高々に叫び突撃する。

『ドヤ顔ダブルソード』だあああっっ!!」

「……………」

鈴音は激怒した。

三十秒後——。

辺りは静寂に包まれた。隆道達や付近にいた他の生徒達はある一点を冷めた目で見詰めている。

「「「「……………」」」」

「んーっ！ んんーっ!! 抜けねえーっ!!」

綺麗に上半身が埋まり、藻掻いている一夏を。

「はー……。ほんつとアンタは馬鹿じゃない？」

これには全員が同意せざるを得なかった。何をするかと思えば只のドヤ顔。鈴音が激怒するのも無理はなかった。

彼女がした事は、ドヤ顔を決めて突撃してくる一夏に向けて『衝撃砲』の連射。それも、一切の手加減無しである無慈悲な連撃。彼は為す術無しのまま撃たれ続けたのであった。

「つたく、何やってんだか……おらよつと」

「あ、ありがとうございます……」

見ていられなくなつた隆道は今も尚掻いてる一夏の足を掴み引っこ抜いた。完全な間抜け様を晒した一夏は何処か申し訳なきそんな顔だ。

「だいぶポッコポコにされたな。ほらよ」

鈴音の怒濤の攻撃によりエネルギーがガツツリ減った『白式』は装甲の至る所がそれなりに損傷していた。そんな満身創痍と化した機体に三本の『リカバリーショット』を打ち込んでエネルギーを回復。同時に装甲は見る見るうちに元通りになっていく。

「おおっ！ エネルギーがっ！」

「これで大丈夫だろ。補充してくるわ」

「あざーっす!!」

エネルギーを補充しに行く隆道の背中に向けて頭を全力で下げる一夏。二人は完全に部活の先輩後輩と化していた。IS学園でこの様なノリは大変貴重なものであろう。少なくとも異性同士ではこんな光景は見られない。

「ねえ一夏。僕とも模擬戦しない？」

「おう、いいぜ。エネルギーも満タンだしなー」

「は、ははは……」

テンションが高い一夏であったが、流石に自重するかと二刀流を止めて模擬戦を開始した。その後も箒達と軽く手合わせ、その度に隆道が回復。当然、対象は一夏、箒、シャルルの三人だけだ。鈴音は言わずもなが、セシリアには例の事件激目B1Tサントの事もあつていつも以上のガン無視であった。

模擬戦を繰り返して暫く。

一夏はシャルルから戦闘に関するレクチャーを受けていた。隆道はエネルギー補充とコンテナの片付けの為、場を離れている。

「えとね。一夏が今までオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武装の特性を理解していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

「うーん、知識として知っているって感じかな。さっき僕と戦った時も殆ど間合いを詰められなかったよね？」

「確かに、瞬時加速も読まれてたしな……」

一夏は先程までの模擬戦で、あまり良い戦績を残せなかった。動きを全て読まれ、瞬時加速すら迎撃されたのだ。

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武装の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応出来なくても軌道予測で攻撃出来ちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方が良いよ。空気抵抗と

か圧力の関係で機体に負荷が掛かると、最悪の場合骨折したりするからね」
「……なるほど」

一夏はシャルルの言葉をしっかりと聞きながら頭に詰め込んでいった。何せ、シャルルの説明は教員と同様にわかりやすいのだ。彼は感動を覚えざるを得なかった。

何故、彼はこのような事で感動を覚えたのか。それは彼に操縦を教えていた自称コーチ達のせいであった。その時の言葉がこれだ。

『こう……ずばーつとやってから、がきんっ！ どかんっ！ という感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ なんでわかんないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

とても教える気が無い様なレクチャーに一夏は色々な意味で行き詰まり、息詰まっていた。全くわからなかったのである。

隆道もたった一度だけ渋々と教わった事があつたのだが、当然の様に頭を抱え、そして誓った。こいつらからは二度と教わらないと。

『おい、篠ノ之。お前、人に教える気あんのか。擬音でわかる訳ねえだろうが。舐めてんのか』

『は、は、めんなさい……』

『何がごめんなさいだ。よくそんなんでコーチを名乗れたもんだな、ええ？』

『すみません……』

『言い方じゃねえよ』

ちなみに、箒には後で説教をしたそうなの。

「一夏の『白式』は後付武装が無いんだよね？」

「ああ。何回か調べて貰ったんだけど拡張領域が空いて無いから量子変換は無理だって言われた。単一仕様能力の方で容量を使ってるんだと思う」

「『白式』は第一形態なのにアピリティーがあるっていうだけで物凄い異常事態だよ。前例が全く無いからね。しかも、その能力って織斑先生の——初代『ブリュンヒルデ』^世_界^最_強が使っていたISと同じだよね？」

かつて、国家代表であった千冬が使っていたISも単一仕様能力を発現させている。それは一夏と同じ『零落白夜』。

武装も同じ、仕様も同じ。これは偶然なのか、必然なのか。

「まあ……姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？ それに柳さんの機体だって第一形態だけど単一仕様能力あるんだし……」

「ううん。姉弟だからってだけじゃ理由にならないし、IS操縦者との相性も重要……って、え？」

「だからさ、柳さんも発現したんだよ。どういう能力かは未だに知らないけど。何故か

見せたがらないんだよな」

「ええ……うっそお……」

シャルルは唾然としてしまった。本来ならあり得ない現象が隆道にも起きているなど微塵も思っていないかったのだ。今まで不可能と思われていた事が現実になるなどが想像するであろうか。

(調べた方が良いのかな……。でも、うう……)

とは言うものの――。

――一夏と隆道では発現した条件が全く異なる事をシャルルは知らない。

――尤も、『灰鋼』を調べる事は不可能だ。

――誰も知る事は無い。一生。

「でもまあ、今は考えても仕方無いだろうし、その事は置いておこうぜ」

「あ、うん。それもそうだね。じゃあ、射撃武装の練習をしてみようか。はいこれ」

――五五口径アサルトライフル『ヴェント』――。

「サンキュ。構えは……こうだな？」

一夏はシャルルから渡された射撃武装を借りてその場で構える。その姿は中々に決まっていた。誰かに教えて貰ったのだろう。

「へえ、結構良い形なってるね。オルコットさんか誰かから教えて貰ったの?」

「セシリアもそうだけど、最初は柳さんが教えてくれたんだ」

「柳さんが?」

「ああ。構え方とか、立ち方の基本とか。なんか妙に詳しくかった」

「ミリタリーマニアなのかな? まあ、いつか。センサーリンクはやっぱり見つからない?」

——『センサーリンク』——。

ハイパーセンサーに備わる機能の一つである。射撃に必要な情報をIS操縦者に送る為に武装とハイパーセンサーを接続、これによって高速戦闘内での射撃をアシストする。これが有ると無いのでは射撃の難易度が劇的に変わってしまうのだ。

「やっぱり駄目だ。以前から探しているんだけど見当たらない」

しかし、一夏の『白式』は非常に特殊である。

彼の機体は文字通りの近接格闘型。射撃に必要なメニューが一つも無かったのだ。本来はある筈のそれが無いのだから高速戦闘での射撃は期待出来ないだろう。

「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……」

「欠陥機らしいからな、これ。ちふ……織斑先生が言ってた」

「百パーセント格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないからさつきと同じように目測で」

「おう。じゃあ、行くぞ」

合図と共に一発の発砲。反動の殆どをISで自動相殺する為に仰け反る事は無いが、やはり慣れていないのか多少なりとも一夏は驚いてしまう。

「どう?」

「……ああ、やつぱり『速い』っていう感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど弾丸はその面積が小さい分より速い。だから軌道予測さえ合っていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻する時に集中しているけど、それでも心の何処かではブレーキが掛かるんだよ」

「だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

一夏はまるで水を吸うスポンジの様にスルスルと頭に入っていくのを感じた。だから射撃兵装を持つセシリアや鈴音とは一方的な展開になるのだと。

「あ、そのまま続けて。弾は使い切って良いよ」

「おう、サンキュ」

単発射撃、制限点射、連射と一夏は空撃ちを続ける。全身へ僅かに伝わる衝撃を感じ

ながら、今後は間合いをどう詰めるべきかを考えていた。

「そういえば、シャルルのISってリヴァイヴなんだよな？　山田先生が操縦していたのと同じく違うように見えるんだが……」

「僕のは専用機だからかなり弄ってあるよ。この子の正式な名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』。基本装備を幾つか外して、その上で拡張領域を倍にしてある」

——二世代全距離対応万能型IS『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』——
これがシャルルの機体。オレンジカラーのそれは細部が既存のラファールと異なっていた。

背中に背負う一対の推進翼は中央部分から二つに分かれており、装甲はより小さくシエイプアップ。ウエポンラックとしてのリアスカートも装備され、そこにも小型の推進翼が付いている。恐らく姿勢制御に使われるものである。

そして何より、本来ある筈の物理シールド四枚は全て無く、代わりにシールドと一体化した腕部装甲が確認出来る。正しくカスタムと呼ぶに相応しい機体だ。

「倍!?　そりやまた凄いな……ちよつと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたら良いんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも二十くらいあるよ」

「うーん、ちよつとした武器庫みたいだな」

実際の所、全てがISの兵装なのだからちよつと処ではない。誇張でも何でもなく重戦車数百輦分の火力を保有している事になる。

しかし、ISに積む装備は基本装備を除いて普通は五つ、多くても八つだ。ウエポソックに備えたとしても全て同時には使えず、何より展開に生じるウエイトがある。多く量子変換していてもさほど意味は無い。

シャルルはそれをわかった上でこのカスタム仕様になっている。何かしらの特殊な技能があるのだろうか。一夏は踏んだ。

と、そんなレクチャーの最中。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

急にざわつく周囲。最初こそ無視していた一夏であったが、『ヴェント』を撃ち切った辺りで注目的に目を向ける。

「……………」

そこに佇むのはもう一人の転入生、ドイツ代表候補生——ラウラ・ボーデヴィツヒ。転入その日からクラスの生徒達とつるむ処か会話すらしない近寄りがない存在。

当然、一夏も会話した事は無い。誰がいきなり平手打ちを仕掛けてきた相手と会話を

試みようもするのだろうか。

そんな訳で此方から話し掛ける事など少しも無いのだが——それは向こうからやって来た。

「おい」

「……なんだよ」

オープン・チャンネルからの声。名指しされた訳ではないがどう考えても自分に向けたものだと一夏は表情が険しくなる。気が進まないが無視する訳にもいかない為に取り敢えず返事を返すと、漆黒の機体を纏う彼女はゆつくりと飛翔してきた。

「私と戦え、織斑一夏」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

「……………」

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得ただろう事は容易に想像出来る。だから、貴様を——貴様の存在を認めない」

彼女から感じるのは『憎悪』。目付きは次第に鋭くなり、それは容赦無く彼に向けられる。

彼は彼女の放つ言葉の意味を理解していた。

それは彼にとって最も思い出したいくない記憶。忘れられない忌々しい出来事。

しかし、それとこれは関係が無い。彼女と戦う理由には決してならない。何より、彼自身やる気が全く無い。

「また今度な」

「ふん。ならば——」

言うが早い、機体を戦闘状態へシフトさせる彼女。そしてそのまま——。

「——戦わざるを得ない様にしてやる！」

——彼に向けて右肩の大型大砲を放った。

「！」

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな？」

「貴様……」

しかし、その砲弾が彼に当たる事は無かった。

横合いから割り込んできたシャルルのシールドによって弾かれたのだ。そして、同時

に右腕にはいつの間にか展開していた射撃武装を彼女に向けている。

「フランスの第二世代型^{アンタイプ}如きで私の前に立ち塞がるとはな」

「未だに量産化の目処が立たない第三世代型^{ルキ}よりは動けるだろうからね」

一触即発。涼しい顔をした睨み合いをする両者は直ぐ戦闘態勢に入れる様に身構える――が。

『その生徒！ 何をやっている！』

「……ふん。今日は引こう」

スピーカーから響く教員の声によつて興が削がれたのか、彼女はあっさりとは戦闘態勢を解除。そのままゲートへ去っていく。ゲート先では恐らく教員が怒り心頭であろう。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

数秒前まで彼女と対峙していたシャルルはいつもの様な顔であった。先程までの鋭い眼差しは既に無い。

そんな張り詰めた空気が次第に緩和されていく中で、場を離れていた隆道が漸く現れた。

「何やってんだお前等。何か騒がしかったが」

「ああ、お帰りなさい。ま、まあ、ちよつと」

「……？ まあ、いいわ。つか、もう四時過ぎてんぞ。いつまでやってんだ」

「ああ、もう閉館時間ですか。じゃあ一夏、もうあがるつか」

「おう、そうだな。あ、銃サンキュ」

取り敢えずトラブルは去った。もしも、あの場に隆道がいたらどうなっていた事か。そんなIFを想像しながら一夏はシャルルに銃を返し、全員はアリーナを後にする。

が、しかし――。

「えつと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

男子二人に先に着替えるようシャルルは促す。

そう、彼はとにかく二人と一緒に着替えをしたがらないのだ。と言うより、訓練後は一緒に着替えをした事が無い。転入初日の着替え一回きりだけだ。以降は前もってI Sスーツを着ているか、いち早く着替え終わっているか。一夏はこれがよくわからなかった。

部屋にいる時もそうであった。彼は訓練時とは違って何故かきこちない態度になるのだ。せつかくのルームメイトで男同士なのだから、ここは親睦を深めるべきだと一夏は行動に移る。つまり――。

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

——説得である。

端から見れば勘違いしてしまう物凄い会話だ。腐っている女性からすれば堪らないホモホモしいやり取りなのだ。一般からすれば気持ち悪い。

そんな織斑一夏ならぬホモ斑一夏はシャルルの断りをブチ破って迫真に迫る。

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「どうかどうしてシャルルは俺達と着替えたがらないんだ？」

「その、は、恥ずかしいから……」

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えっと、えーと……」

怒濤の説得を繰り出す一夏は止まらない。完全に押され気味のシャルルはどうすればいいかわからず、視線は宙を彷徨ってしまっていた。

「なあ、シャル——」

「はいはい、アンタはさっさと着替えに行きなさい。引き際を知らない奴は友達失くすわよ。それに、あの人先に行ってるけど」

「ぐえ。わ、わかった、わかったから。じゃあ先行ってるぞ」

「あ、うん」

鈴音の助けにより事なきを得たシャルル一夏はゲートに向かっ
ていき、他の皆もぞろぞろと離れていく。その場に
残るのは彼一人だけ。

「……………」

ゲートに視線を向けると、そこには隆道が腕を組んで佇んで
いた。一夏を待っていたの
だろう。

「……………」

ふと、気になってしまった。隆道は一切模擬戦をしない為、『
灰鋼』のデータは全く無い。今までは別に気にも留めなかつたが、
次第に好奇心が生まれていく。故に、彼の機体をハイパーセン
サーで捉えて検索を掛けた。

——その瞬間。

——検索対象から『A・S・H』の起動を感知。検索の阻害を
確認——。

——検索を強制中断。検索不可能——。

「——えっ?」

——強制中断により非限定情報共有から検索を実行——。

——非限定情報共有の拒否を確認——。

——警告。『〇一九』より不正規接続——。

——……不正規接続の終了を確認——。

——記録、削除——。

「??？」

シャルルは何が起こったのかわからなかった。突如と検索が中断され、その直後画面に出たのは見た事も無い表示。ログを見直そうにも全て削除済みであり、確認すら出来なかった。

「……何だったんだろう」

調べようにも、消えてしまったものを見る事は出来ない。疑問に満たされながら彼等がアリーナを出る直前まで待つてISを解除。一人更衣室へと向かう。

「……………はあっ」

彼の表情は何処か暗く、酷く落ち込んでいる様子であった。今まで我慢していたのか、無意識に出た溜め息はとて深い。まるで大きな悩みを抱えているかの様に。

「こんな事……したくないのに……」

その言葉の意味は何なのか、それを知るのは彼だけだ。周囲を見渡しながら更衣室へと進み、到着するなり扉を開けて恐る恐る中に入る。

「……………いない、ね」

よく目を凝らしても、耳を澄ませても、更衣室には誰もいない。機体を解除する直前に位置座標も確認した、誰もいる筈がないのだ。またしても『灰鋼』だけ位置が特定出来なかったが、それよりも着替えを優先したかった。

「ふう……さて、さっさと着替え——」

ここまで来れば後は着替えるだけ。ロッカーへ向かうべく足を伸ばした所で——。

「また一人寂しく着替えか。大変だな」

——彼の息は、止まった。

「——っ!？」

突然の声に心臓が飛び跳ねる様な感覚を覚えたシャルルは即座に振り向く。

「——がつ!？」

しかし、出来たのはそれだけ。振り向いたと同時に胸倉を掴まれ、そのままロッカーに叩き付けられてしまう。

シャルルを掴む者の正体は——。

「あつ、うつ……」

「前々から怪しいと思つてたんだよ、お前は」

——鋭い目付きをした隆道であつた。

「な、何で……」

「何で、だど？ それはお前がよくわかつてるんじや……」

「ぐっ……！」

「——ねえのかあつつつ!!」

「ああつ!？」

彼はシャルルを片手ながらもいとも簡単に持ち上げ、遠くに投げ飛ばす。軽々しく投げられたシャルルはそのまま壁に叩き付けられた。

その凄まじい衝撃によつて肺の空気は全て吐き出され、同時に目眩を起こす。

「ううつ、ゲホツ……」

「つたく、ブリュンヒルデめ。なーにが馬鹿な話は無いだ、俺等に隠してやがつたな……」

「な、にを……」

「しらばつくれるつもりか、シャルルデユノア。……いや、シャルロットデユノア」

「!?!?!」

彼が放った言葉は、シャルルの思考を停止させるのには充分であった。

何せ、『シャルロット』こそが彼の——いや、彼女の本名なのだから。

そう、シャルル——もといシャルロットは男性ではない。

——女性である。

完全に素性がバレてしまったシャルロット。そんな固まる彼女を置いて、彼は言葉を続ける。

「昨日までの五日間、お前を探ってたんだよ。何か俺等に仕出かすんじゃないかってな。けどよ、なーんもしねえから考え過ぎかと思ってたんだが……ついさつきコイツが情報をな」

そう言つて彼は首輪——『灰鋼』を叩く。彼女はその意味を理解出来なかつた。しかし、数秒後に気づく。気づいてしまう。

(もしかして……!?)

彼女はその答えに辿り着いた。彼が言った言葉と首輪を叩く動作。そこから導き出

される結論は一つしかない。

(僕が……調べようとしたから……?)

彼の機体に検索を掛けた直後に一瞬だけ並んだ数々の表示。それがもし、自分自身の情報を見られた記録だとしたら。

(は、はは……墓穴を掘ったって、事かな……)

絶望。自身の秘密を、しかも最悪な事に女性に不信を抱く彼に知られてしまった。最早言い訳は通用しない。

「……言い訳は、ねえようだな」

「……………」

「さて、このまま放っておく訳にはいかねえな。男装してまで俺達に近づいた理由は知らねえが、ただじゃおかねえ。どうしてくれ——」

「……ひつぐ」

「——あん？」

もう、彼女は限界であつた。それは彼に暴力を受けた事による痛みではない。

心が痛かつた。人を騙すという行為が。

決して自ら志願した訳ではない。しかし、自身に選ぶ権利など無かった。それしか道が無いと。

だが、それももう終わりだ。自分は間違いなく捕まる、もう人を騙す事は無いのだと。張り詰めたままであった心は緩みに緩み、そして遂に――。

「……あああああああああ」

――決壊した。

「っ……」

「あああ、あああああああああ」

部屋内に響く泣き叫び。彼の目の前で大粒の涙を流し続けるその姿は年相応の女の子であった。そこには普段の堂々とした雰囲気の中にある儂げな印象は一切存在しなかった。

しかし、号泣する彼女の目の前にいるのはあの隆道だ。涙は女の武器と認識しており、女性とISを敵と認識している人間。当然、彼にそんなものは通用しない。

「……………」

——通用しない、筈であつた。

「ひつぐ……うう……」

「……………」

彼女が泣き崩れて数十秒、彼はその場から動かずに黙つてそれを見続けている。そして、次に彼が取つた行動は——。

「……………くそつたれが」

——その場から逃げる様に去る事であつた。

「はー、終わった終わった」

一年生寮の廊下。一夏はアリーナを出る直前に真耶からの連絡により隆道と別行動、先程まで職員室で『白式』に関する書類を書いていた。書類に名前を書くだけという簡単な作業ではあつたが、面倒な事には変わらない。

「早く大浴場入りしたいなあ」

書類とは別に知らされた連絡。それは今月下旬から大浴場が使えるようになるとの事であった。彼にとつてかなり重要な内容であり、感激のあまり彼女の手を取つてしまつた程だ。

これならば男子同士との親睦も深められる筈、彼はそう信じていた。

「ただいまー。つてあれ？ いらないな」

先に帰つてるかと思えばもぬけの殻。しかし、そう思ったのもつかの間、直ぐにシャワー室から響く水音に気づく。

(ああ、シャワー中なのか)

と、ここで彼は思い出す。確か昨日、ボディーツープが切れていた事に。

(届けるか。脱衣所に置いて声を掛けておこう)

思い立ったが吉日。直ぐ様にボディーツープを届けるべく脱衣所兼洗面所へ入る一夏。そして、同時にシャワールームの扉が開く。

「ああ、丁度良かった。これ、替えの――」

「い、い、いち……か……か……？」

「へ……？」

そこには、目を真つ赤に腫らした女子がいた。

第三十五話

ISが広まって六年。ドイツで事件が起きた。

——第二回IS世界大会『モンド・グロツ』——。

三年に一度行われる、アラスカ条約の参加国を中心に行われるIS対戦の世界大会。その二回目にて、日本国家代表であり初代優勝者である千冬は当然の如く参加。各国の代表を蹴散らし、見事決勝戦にまで登り詰めた。

圧倒的強さを誇る初代ブリュンヒルデ、それが二連覇を果たす。誰しもが彼女の優勝を確信し、そして期待していた。

——しかし、それは叶わぬ事となる。

決勝戦当日、彼女の弟——一夏は突如謎の組織に誘拐される。護衛の目を欺き、彼は拉致監禁されてしまった。

決勝戦会場から報せを受けた彼女は、決勝戦に目もくれず彼の救出に向かった。掴めたであろう栄光を捨て、たった一人の弟を選んだのだ。

彼女は文字通り飛んで行き、彼を無傷で救出する。しかし、決勝戦は棄権の為に不戦敗。大会二連覇を果たすことは出来ず、決勝戦棄権は大きな騒動を生んだ。尚、この事件は様々なバッシングを避ける為に世間的には一切公表されていない。

IS委員会はこれを機に『モンド・グロツ』の開催時期、場所、警備等を見直し。次回の大会は令和五年以降になった。

そして、事件のその後。彼女は事件発生時に独自の情報網から彼の監禁場所に関する情報を入手し、与えてくれたドイツ軍に『借り』を返す為に一年間ドイツ軍IS部隊で教官を務める。

彼女にとって、たとえ世界最強と呼ばれようと——いや、そう呼ばれる立場になった事で身内を危険に晒した事はかなりの負い目だ。故に、世界最強の称号『ブリュンヒルデ』を忌避するようになる。彼女にとってこの称号は、名誉であると同時に恥辱でもあった。

そして——負い目を感じているのは彼女だけではない。一夏もまた負い目を感じていた。

自分が誘拐されなければ、自分が迷惑を掛けなければこんなことにはならなかった。それは四年経った今でも彼の頭にこびり付いている。

——織斑一夏は許せない。

——あの日の、自分自身の無力さを。

時刻は夜に差し掛かる頃、一夏の自室。

「……………」

制服姿の一夏とスポーツジャーズ姿で目を赤く腫らしたシャルル——もといシャルロットは互いのベッドに腰掛けて向かい合い、視線はそれぞれ迷ったまま無言の時を小一時間過ごしていた。彼女は完全に縮こまっており、向こうから声を掛ける事は無いだろう。しかし、これでは埒が明かない。

「あー、その……………」

「……………っ！」

「お茶でも飲むか？」

「う、うん。貰おうかな……」

彼は取り敢えず、飲み物を出す事にした。その方が話しやすいと思つたからだ。無言を貫かれると思つてはいたが、彼女もその方が話しやすいと思つていたのでらう。ここに来て初めて意見の合致をした二人であつた。

「……………」

暫くして、湯飲みを受け取つた彼女は一口とお茶を口にする。彼も同じように一口と喉を潤し、話を切り出す。

「なんで……男のフリなんかしてたんだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろつて、言われて」

「うん？ 実家つていうと、デユノア社の——」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

次第に表情が曇り出す彼女。特に実家の話を始めてから何処か様子がおかしい。

「命令つて……親だろう？ なんでそんな——」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

「——」

絶句、彼は言葉を失つた。『愛人の子』、その意味を知らないほど彼は世間知らずではない。

そんな固まる彼を余所に、彼女は淡々と言葉を続ける。

「引き取られたのが二年前。丁度お母さんが亡くなつた時にね、父の部下がやって来たの。それで色々と検査する過程でＩＳ適性値が高い事がわかつて、非公式ではあつたけどデユノア社のテストパイロットをやる事になつてね」

表情を見るからに言いたくはないであろう話を健気に喋り続ける彼女。それは、彼にとつてかなり痛々しいものであつた。

「それから少し経つて、デユノア社は経営危機に陥つたの」

「え？ だつてデユノア社つて量産機ＩＳシエアが世界第三位だろ？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代なんだよ。ＩＳの開発つていうのは物凄くお金が掛かるんだ」

「ほぼ全ての企業は国からの支援により成り立っている所ばかりである。デユノア社もそれは例外ではない。」

そして、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されている。国防の為もあるが、資本金で負けている国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨な事になるのは明白だ。

『現在、欧州連合では第三次イグニツション・プランの次期主力機の選定中なのですわ。今のところトライアルに参加しているのはイギリス、ドイツ、イタリアの三カ国。今の

ところイギリスがリードしてはいますが、まだ難しい状況……。その為の実稼働データを取る為に、わたくしがIS学園に送られましたの』

彼は思い出していた。セシリアがいくつか説明していた事を。恐らく、専用機を持つ代表候補生の全員がその辺りの事情を持っているのだろう。ドイツから転入してきたラウラもその筈だ。

「話を戻すね。それでデユノア社でも第三世代型を開発してただけど、元々遅れに遅れての第二世代最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、中々形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れに……」

「……ああ、なんとなく話はわかった。じゃあ、男装は——」

「簡単だよ。同じ男子なら特異ケースと接触しやすい。可能であれば——」

「俺と柳さん、そして機体のデータを取れるだろう……か」

「ご名答。そう、『白式』と『灰鋼』のデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕は、あの人にね」

話を聞く限りでは、彼女の父親は実の娘を利用してはいるようにしか感じられなかった。偶々IS適性値があった、なら使おうと。それは話を聞いた彼よりも、彼女自身が

良く理解している。

だから、彼女は父親を他人行儀に話す。あれは父親ではなく、他人。明確に区別する為。

「とまあ、そんなところかな。柳さんにもバレちゃってるし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか。どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……柳さんにもバレたのか」

「うん。一夏がアリーナを離れて直ぐに、かな。人ってあんな簡単に投げ飛ばせるんだね、凄く痛かったなあ。……ああ、なんだか話したら楽になったよ、聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついてゴメン。ああ、柳さんにもゴメンって伝えておいてよ。多分、僕じゃ話すら聞いて貰えないだろうから」

深々と頭を下げる彼女を見た一夏は——心の奥にしまっていた感情が遂に爆発した。気がつけば彼女の肩を掴み無理矢理顔を上げさせる。

「……いいのか、それで」

「え……？」

「それでいいのかよ……。良い筈無いだろ。親が何だっていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利があるんだ。おかしいだろ、そんなものは！」

「い、一夏……?」

彼女は彼の変わり様に戸惑いと怯えを感じていた。彼自身も彼女の表情を見てそれを感じ取っていたが、言葉が止まらない。

「親がいなけりや子供は生まれぬ。そりやそうだろうよ。でも、だからって親が子供に何してもいいなんて、そんな……そんな馬鹿な話があつてたまるか! 生き方を選ぶ権利は誰だつてあるはずだ。それを、親なんか邪魔されるいわれなんて無い筈だ!」
彼は叫びながら気づく。これは、彼女の事を言っているのではない。

自分自身の事を言っているのだ。自分を育ててくれた姉を、千冬を思うが故の。

「ど、どうしたの? 一夏、変だよ?」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまつて」

「いいけど……本当にどうしたの?」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

そう、織斑姉弟は『両親不在』なのだ。自分達は幼い頃に捨てられた、彼はそう認識している。

彼女はそれについて資料で知つてはいたがその意味までは知らなかつた。故に、申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだ、別に親に今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ?」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、牢屋とかじゃないかな」

そう言っただけで見た彼女の微笑みは、痛々しいものであった。それは絶望を通り越した諦観。

彼は彼女にそんな悲しい表情をさせるあらゆる存在が許せなかった。認めたくはないが、一人では何も出来ない自分に腹が立つ。

「それでいいのか?」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利が無いから、仕方がないよ」

彼も、彼女も知らない。

フランス政府の一部は事の真相を知っている。

そして、I S学園も彼女の素性を知っている。

彼女が牢屋に行くことは無い。決して。

何故ならば、IS学園には既に潜んでいる。

彼女の行く先は――。

「…………あれ？」

「? どうしたの？」

彼はここで引つ掛かりを覚えた。それは彼女の話を聞く事に専念していた故に考えなかつた事。

「柳さんにバレたのは俺がアリーナから出て直ぐだったよな？」

「う、うん」

「だったら、何でも起こらないんだ？ あの人の事だから何かしらのアクションを起こす筈だ。報告とか、ここに直接乗り込んで来るとか。というか、今こーやって無事なのがおいしい」

「…………あ」

彼女はそういえばと気づく。泣き止んだ頃にはいつの間にかいなくなっていたのだ。された事と言えばロツカーに叩き付けられ投げ飛ばされただけ。それ以上の事はされてない。何か言っていた気がするが、いまいち覚えてはいなかった。

「……ちよつと出掛けてくる。ここにいてくれ」

「ど、何処に行くの？ もう、僕には——」

「……特記事項第二十一」

「……！」

「どうしたいのか……それを決めるのはシャルル自身だ。だけど、そんな顔を見たら友人として放っておけない」

彼は、自分が捻り出した唯一の案を提示した。彼女をここに留まらせるべく。だが、これは所詮眉唾物だ。簡単に破られるであろう。もしかしたら既に手遅れかもしれない。

これからの行動に意味は無いのかもしれない。だとしても、ここで自分が動かなければ一生後悔する、その思いだけが彼を動かす。

「……あ、待って！」

「へ？」

「……実は、柳さんには本名もバレているんだ、一夏にも教えておこうってね。僕の名前

はシャルロット。シャルルじゃなくて、シャルロット」

「それが本当の……?」

「そう。お母さんがくれた、本当の名前」

そう言つて微笑む彼女。目の周りも赤く、今にも崩れそうなその表情は彼の胸を締め付ける。

彼女にその様な笑顔は似合わない。一人の友人として何とかせねばと、彼はそう誓つた。

「わかった。——シャルロット」

時間は少し遡り、隆道の自室。

「スウー……………」

その部屋でたった一人の隆道は机に突つ伏し、全く微動だにしていなかった。自身の右腕に巻き付けてある古びた首輪の匂いを嗅ぎ、何処か思いに拭けている様子だ。

「……………」

彼の頭は更衣室での出来事——というより一人の少女、シャルロットの事で満たされていた。彼女の泣いた表情は今も尚、彼のまぶたの裏に焼き付いている。

「くそつたれ……………」

彼処で締め上げるつもりだった。今までの敵と同様、二度と外に出られない程に懲らしめるつもりだった。害を成す者の徹底的排除、それが自身の確立したやり方なのだから。

——しかし、彼女にはそれが出来なかった。

今まで追い詰めた女性に泣かれた事はあった。だがそれは、どれも保身の為に命乞いをする醜い啜り泣き。今まで他の人間を地獄に追い詰めた癖に、いざ自分にそれが降り掛かるとまるで豚の様に助けを乞う醜い畜生共。

勿論、そんな反吐が出る女性の言葉など聞きもしなかった。ある時は刃物等で顔面を切り刻み、またある時は散弾銃で手足を吹き飛ばす等の悪行の限りを尽くしたのだ。今更怖じ気付く事など決して無い。

「……………似ていたな」

思い出すのは光乃と接する様になって暫くした頃。二人で買い出しに出掛けていた時に、公園で泣いている一人の女の子を。

『……なんで一人で泣いてんだ。親はどうした』

『ぐず……ぐし……』

『……言いたくないなら、それでいいさ。アメ、食べるか?』

『……ありがど』

『ん。ほら、もう暗くなるぞ。早く家に帰——』

『いないの……』

『あん?』

『お父さん、まだ仕事から帰って来ないの……。お母さんに、捨て、捨て、られて……。男なんかい、らないって……。お父さんと、離れだくないって言ったら……。彩も、いらな……。う……。あ……。あ……。あ……。あ……。あ……。あ……。!!』

『っ……』

『わ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……。!!』

それは頼りになる人間もすがる相手もない、一人じゃどうしようもなくなってしまう人間がしてしまう感情の爆発。その女の子——彩は枯れ果ててしまいそうな程に涙を流した。

『……家に来るか?』

『ぐし……知らない人には付いていくなつて』

『はんつ。なんだ、すっかりしてんじゃねえか。……ならこうしよう。親父さんが帰つて来るまでここでお話でもするか』

それを目の当たりにした彼は——その女の子に手を差し伸べた。中学の事件以降女性不信となつてしまつた彼にとつてそれは初めての事である。

女の子と彼女がダブつて見えたのだ。それが彼の行動に待つたを掛けた。

精神的に弱つた人間は脆く、碎け易く、そして崩れ易い。彼はそれをよく理解している。

発破を掛ける者もいるだろう。敢えて突き放す者もいるだろう。だが、それは人によりけりだ。プラスのつもりがマイナスとなり、何れそういう人間は必ず壊れる。どうしようもない程に。

「俺にどうしろつてんだよ……」

結局、自分がした事はその場から逃げただけ。根本的な解決になつてはいない。

彼女の側には一夏がいる。害を成されるその前に此方から動くべきなのだが、どうもその気になれない。心の何処かで彼女は危険ではないと。

IS学園は彼女の素性を把握しているのだろう、報告した所で無意味だ。そうでない

ならばこのセキュリティを疑ってしまう。男装してるなんて知りませんでしたでは目も当てられない。

そもそも、危険人物であるならば男性操縦者と一緒の部屋にさせるだろうか。そこまでする。IS学園は馬鹿ではないだろう。何か別の理由がある筈だ。

「……………おっ？」

ふと、扉をノックする音が聞こえた。

一夏達が来るのは必ず夕食後だ、この時間帯に来るのは非常に珍しいと感じていた。

腰を上げようとしたところ、ここで一つの可能性が浮かぶ。もし、シャルロットの男装が一夏にも知れ渡り、その事で相談に来たとするならば。

一瞬だけ思い止まり、腰を上げて扉へ向かう。何食わぬ顔で扉を開けると――。

「……………どうも？」

「ん」

――扉の先には一夏が一人。その表情はとても真剣で厳かな雰囲気だ。

「一人か。この時間に来るなんて珍しいな」

「相談があります」

「……………デュノアの事だろ」

「……………！ ……はい」

一夏は面食らった様な顔をしたがそれも一瞬、直ぐに表情を真剣そのものに変える。そこにはいつもの爽やか少年はいなかった。

やはりシャルロット絡みかと彼は次第に表情が険しくなる。関わるべきではないのだが――。

「話、長くなるんだろ？ 先に飯食って来い」

「……突っぱねられると思ったんですがね」

「織斑。お前よ、四月に言った事忘れてねえか。困ったら相談にのってくれってよ」

「？ ……あ」

既に知ってしまったのだ。一夏と同様に自分も向き合わねばと、彼は決意を固めた。「俺は言った筈だ。……このくそつたれな先輩に任せておけってな」

夕食を終えた後、隆道の自室。

隆道と一夏の二人は椅子に座り互いに向き合っている。両者とも真剣な顔付きで、そこにはいつものふざけあつた雰囲気は微塵とも存在しない。

シャルロットは一夏の部屋で待機だ。本来ならば当の本人も加えるべきなのだろうが、隆道とのいざこざから間もない。今は接触を避けるべきだと一夏は考えていた。

「……機体データを盗めと命令、ね。デュノア社も随分思い切った事するんだな、最高かよおい。そんなに男のデータが欲しいのかくそつたれが」

「説明しといてなんですけど、正直疑われるかと思つてました。簡単に信用するなつて」
「今疑つたつて意味ねえだろ。この一週間で俺もお前も何もされてねえんだから取り敢えずだ」

一夏は彼に彼女の事を大まかに説明していた。家庭事情——愛人の子だという事を除いて。今回の問題に関係が無い事を言つても仕方が無いし、何よりこんな話は身内でない自分の口から言う事ではない。言いふらすなど以ての外だ。

「……さつき言つてた特記事項だったか？ よく覚えてたな。俺なんか全く覚えてねえのによ」

「……勤勉なんですよ、俺は」

「はんつ、間違いねえな」

——特記事項第二十一——。

『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』
これはいかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されな
いという国際規約。一夏はこれで彼女を留まらせる策とした。

しかし、この効果は薄いであろう。何せ、この規約は半ば有名無実化しているのが実情だ。全く干渉されない訳ではないのである。

「けどよ……これはあくまで『原則』だ。多少の効果はあるだろうが……」

「代表候補生、専用機持ち、男装、未遂とはいえスパイ行為。フランスに帰される事は間違いないですね……はあ」

「本人も馬鹿じゃねえんだから理解してるだろ。つーか、ガキの俺達が考える事じゃねえって……頭から煙出ちまう。はあー、吸いてえー」

「ですよねえ。……え？ 吸いてえ？」

彼はこんな時こそ煙草が欲しい、そう思わずにいられない程に参っていた。このような事は大人がするものだ、何故自分達がこんな頭を悩ませなければならぬのかと苛立ちが募ってくる。

「はあ。んで……俺はあいつの事を黙っておく、それと何もしない。これで良いんだな」

「ええ、そうしてくれると助かります。明日辺り千冬姉にも相談するつもりなんで」

「……つーか向こうは知ってるぞ。間違いない」

「……へえ？」

一夏は思わず変な声を出してしまった。言葉の意味が理解できなかったのか目を丸くしている。

「だからよ、向こうは知ってるっつーの。よく考えてみる、IS学園があいつの男装を知らないとも思うか？ 知らなかったら間抜けにも程があんど。お前の姉はそんな間抜けな奴か？」

「……………」

一夏の思考は停止した。先程まで高速回転させていた一夏ブレインが急停止してしまつたのだ。

そこからの考え込む様な素振り、暫く経つて彼を一目見た後——ついに項垂れる。

「俺は間抜けだあ……………」

「…………まあ、数少ない男性操縦者の登場で周りが見えなかつたのは確かだな。疑つてなけりや俺も同じ間抜けだったかもな。それにまだマシだぞ、同じ女にキヤアキヤア騒いでる馬鹿共よりは」

「フオローしてるんですか、それ…………？」

とは言うものの、一夏はほんの少しだけ安心感に包まれた。教員が味方につかなければそれこそどうしようかと考えていたのだから。

と、そこで一夏に一つの疑問が浮かぶ。

「……………んん？ なんでシャルロットの事、俺達に教えてくれなかつたんですかね」

「そう、そこなんだよ。何故知らせなかつたのが謎だ。あいつがスパイと探つてた？」

「いや、男装の時点で感づく筈だ。ならデータを盗む所を待っていた？ 無いな、その前に捕まえる筈だ。じゃあ別の何かか？」

「うーん。何か、考えれば考える程わからないですね。……あ！ もしかしたらスパイ行為自体が嘘で、国から遠ざけたかったとか！」

「はっ、なんだそれ。そんなお姫様を逃がす映画染みた事なんてあるかよ。それに、そういうのは大体先手を打たれ……」

この時、彼の脳内に一つの可能性が浮かんだ。それは善人では考え付かない悪行。もし、一夏の言う通りであるならば――。

「柳さん？」

「いや、何でもねえ。……織斑、取り敢えず今日はお開きにすつか。あいつにはまだ男装を続けてもらうとして、後は明日次第だな」

「は、はあ。……それもそうですね、なんか変に疲れましたし……」

話し合いに熱中していた為か、時刻は消灯時間に近い。取り敢えずは現状維持、千冬に相談してから考える方針を固める事になった。

「じゃあ、おやすみなさい。……今日はありがとうございました」

「ん」

部屋を出ていく一夏を見送り、彼は暫く扉の前に佇む。その表情は一夏がいた時の無表情とはかけ離れており、眉間に皺が寄っている。

「……もし、これが間違つてねえなら」

独り言を呟く彼はおもむろに携帯を取り出し、あるところに電話をかける。その相手は――。

『柳か。お前からかけてくるとはな……』

「本当ならかけたくなかつたんだがな。……けどそうも言つてられねえ」

電話相手は千冬。先週の帰省する際に携帯番号を交換していたのだ。彼は絶対に電話などかけるものかと豪語していたのだが、状況が状況だ。

「あんた今何処にいる？」

『私か？ 寮長室だが――』

「今からそつちへ行く。首洗つて待つてろ」

『何っ!?! ま、待つて――』

彼女の返事など聞かず一方的に切つた彼は勢いよく扉を開き早足で歩く。目指す場所は寮長室。

人一人いない廊下を歩いて暫く。寮長室の前に辿り着いた彼は力強く扉をノックを

する。

「来たぞブリュンヒルデ。さつさと開けろ」

「ま、待てっ！ 出るからそこで待つんだ！」

「あ、あ……う？」

いったい何を慌ただしくしているのか。部屋から様々な物音が聞こえ、彼女は相当焦っている。

「っ……っ！」

この時の彼は沸点が低かった。それはもう些細な事でカチンとくるぐらいには。

この一週間、シャルロットに対して疑心暗鬼で満ち溢れ、今日はその事で一夏と頭を悩ませた。既に怒りが溜まっていたのである。

そんな状態で来てみれば扉の前で待てと言う。彼女の悪気無しな一言は彼の怒りを急加速させるには充分——いや、十二分であった。

その怒りが最高調に達す処か超えた彼は——。

「ほんの……っ！」

——遂にブチ切れた。

「オ、ラ、アツツツ!!」

怒りのゲージが限界突破した彼は、なんと扉に向けて全力の蹴りを叩き込んだ。体重百キロ以上の大男ですら吹き飛んでしまう程の渾身の蹴り。果たしてこの扉は耐えられるのだろうか。

「!?」

答えは否。ハンドルが破壊された扉は凄まじい轟音と共に勢いよく開き、中の様子が露となる。寮長室が大解放となった瞬間だ。

「はあっ!? や、やな——」

「ったく、このクソ教師が……!! 開けろって言ってるのが聞こえねえか、ああ!? こちららてめえのせい、で……」

静寂。

彼女はガツチリと固まってしまい、彼は言葉を失った。失わざるを得なかった。

彼女の反応は最もだ。生徒が自身の部屋の扉を破壊し突撃してきたのだから。何処の国に最強と言える人物の部屋へ突撃を仕掛ける人間がいるだろうか。恐らくはこの青年だけだろう。恐れを知らない人間ほど恐いものは無い。

しかし、彼が言葉を失ったのは——。

「柳っ。これは、だな……」

「……ああ、そういう」

所々に散らかる空き缶、脱ぎ捨てられた衣類、溜まりに溜まったゴミ袋。それは多忙なりーマンやキャリアアウーマンに起こりうる、正に惨憺たる状態。所謂——ゴミ部屋。

「……………」

再び静寂。

冷や汗をかく彼女と、それを細目で見据える彼の間にはなんとも言えない空気が。

沈黙した状況が暫く続き、彼は再び口を開いて言葉を吐き捨てた。それは彼女に絶大なダメーヂを与える事になる。

「きつたねえ部屋」

がくと、彼女は崩れ落ちた。

織斑千冬。人生で初、膝を付いた瞬間である。

十数分後——。

「まったく、酒ばっか飲みやがって……。どんだけあるんだこれ……。よっと」

「私の楽しみなんだ、悪く言うな……つと」

空き缶をひたすら潰す隆道と、衣類をひたすら畳んでいる千冬。彼等は掃除の真つ最中だ。

そう、彼は目的の前にこの惨状をどうにかせねばと踏んだのだ。ゴミ部屋で話し合いなどしたくなかった故の行動だ、決して彼女の為ではない。

勿論、彼は彼女にも片付けをさせた。するよう命令した。というか脅した。

『てめえも片付けるんだよ。つーか、てめえこそ片付けろ。あちこちにバラすぞズボラ女。ああ、そういうや二年に新聞部がいたっけなあ。良いネタだと思わねえか、ああ?』生徒に脅される世界最強^{ズボラ女}。完全に弱味を握られた彼女に反論など一切許されなかった。言われるがままに片付けをするしかなかったのだ。

ちなみにはあるが、本来ならば彼女の部屋はここまで酷くはない。何を隠そう、部屋の惨状を作った元々の要因は彼を含めた問題児達なのだ。問題児フィステイバルによつて去年とは比べ物にならない程、教員達は多忙の極みに追われた。

つまり、全くの暇が無かったのである。元々がだらしない彼女がそんな状況に陥ればこうなる事は必然であった。

正に彼はI S関係者スレイヤー。関わる者全てに大きな爪痕を残す、教員達の悩みの種である。

「ふう。まあこんなもんで良いだろ。しつかし、世界最強が実はだらしのない人間でしたとか随分と面白れえ話じゃねえか、ええ？」

「ぐう……」

言葉通りぐうの音も出ない彼女は面目丸潰れ。部屋は普通レベルにまで綺麗となったが良いが、代償として大事なものを失った気がすると落胆。その表情はハッキリわかるほど影が見えていた。

「デュノアの事を俺達に黙ってたツケだ。はあ、今回の件といい、薬の事といい……」

「やはり、か。事が終わるまで黙っているつもりだったのだから……。ん？ 薬だと？」

「一個抜いただろ。知ってんだよ」

「……はあ、お前に隠し事は出来そうにないな」

薬とは例のカプセル剤。彼は一粒抜かれた事を知っていたのだ。何も言及されない事から麻薬等の有害物質ではないだろうと敢えて黙っていた。

そんな事はこの際どうだつていい。重要なのはシャルロットの件だ。その為に態々ここに来たのだから。

「俺を舐めんな。……薬なんかどうだつていい、デュノアの事について吐けよ。答え合わせだ」

「何？ 答え合わせだと？」

「ああ。もし予想が合ってるなら……」
「……合ってるなら？」

——俺の『狩り』を見せてやる。

第三十六話

シャルロットの男装が男子二人に知られ、隆道が千冬の部屋に突撃をかました翌日の日曜。

結局の所、一夏達は千冬の所へ相談に行く事は無かった。当初の予定通りに向かおうとしたのだが、隆道がそれに待ったを掛けたのだ。

『昨日ブリュンヒルデに問い詰めた。喜べ織斑、お前の言った事当たってたぞ。デュノアの転入は機体データを盗ませる為じゃねえ、デュノア社から遠ざける為だ』

『えっ、本当ですかっ!?! ……いや、それじゃ色々説明が……。ていうより、そもそも何処の情報なんです?』

『社員から事前に連絡が来たんだと。複雑な事情らしいが、それらは時間が解決するとさ。学園側もデュノアを国に還す事はねえと言ってたな』

一夏の何気なく思い付いた可能性は見事当たっていた。しかし、それでも幾つか疑問が残る。

何故、国から遠ざけたのか。何故、彼女に男装をさせたのか。何故、データを盗めと指示を出したのか。何故、本当の理由を彼女は知らないのか。そして何故、それらは時

間が解決するのか。

一夏の疑問は最もだが、それらを気にする必要は無いだろう。情報が無い以上やれる事は無い。

『……とにかく、デュノアには男装を続けるよう言つとけ。今まで通り過ごして貰うんだが……今のあいつは脆い、お前が支えろ。やれるな？』

『っ！……任せて下さい』

色々疑問が残った一夏であったが、一先ず安心だと安堵の表情を浮かべ直ぐ様にシャルロットへ説明した。IS学園は味方だと、騙す必要なんて無くなるんだと、ここにおいても良いんだと。それを聞いた彼女は再び涙を流し泣いたとか。

彼は、またしても嘘をついた。

彼は、事の真相——全てを千冬から聞いた。

そして、彼の考えは的的中した。してしまった。

シャルロットがフランスに還される事は無い。

彼女の件は、時間で解決などしない。

このままでは彼女の行き先は――。

『……くそつたれ共が。てめえらの思い通りにはさせねえぞ』

――”死”だ。

月曜の朝。食堂にて。

朝方にも関わらず女子で埋め尽くされた食堂はいつもの事ながら姦しい。いや、今日に限ってはそれ以上と言うべきであろうか。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だーから、織斑君達の話よ。最上級に良い話」

「聞く！」

姦しいというか喧しい。思春期女子同士の会話は何かの度にどよめきが起きる。一人が何事かと集まり、また一人、また一人と増え、それは集団と化す。正に増殖という言葉が相応しい。

「まあまあ落ち着きなさい。これは女の子だけの話なんだから。実は、今月の学年別トーナメントで——」

「ん？ なんだあそこのテーブル。えらい人集りだな。トランプでもやってるのか？」

「もしかしたら占いかも？」

食堂に今し方着いた一夏とシャルロットの二人は奥の方でその十数名による集団が目に留まる。熱気を増した盛り上がり方、それは宛らラグビーのスクラムにしか見えなかった。

「えええつ!!? そ、それマジで!!?」

「マジで！」

「うっそー！ きゃー、どうしよう！」

余程面白い内容なのか、黄色い声はまるで津波を彷彿とさせるものだ。何がそんなに面白いのだろうかと一夏は不思議に思っていた。

しかし、楽しそうなのは良い事だ。辛い事よりは断然に。笑える時にしつかり笑っておかねばと彼は常日頃思っている。

そんな年寄り臭い事を考えながら目を細める彼と隣にいる彼女の存在に気づいたのか――。

「あつ！ 織斑君達だ！」

「えっ、うそ!？」

「ねえねえ、あの噂って本当――もがっ!？」

「……………」

その集団の一人が彼の元に雪崩れ込んで来た。何かを聞き出そうとしたその直後、他生徒が必死の形相でその生徒を取り押さえる。

一人が彼の前で大の字となり通せんぼ。その陰では二人が何やら内緒話をしている。何が何だかわからない彼は彼女達に訝しげな視線を向けた。

「い、いや……………なんでもない、なんでもないの。あははは……………」

「馬鹿！ 秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

「噂って？」

「ひ、人の噂も三百六十五日って言うよね！」

違う。『人の噂も七十五日』だと彼は心の中でツツコむが、そんな事はどうだっていい。

明らかに彼女達は何かを隠している。しかも、その内容は確実に自分絡みだ。

「何か隠してない？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!？」

無駄に洗練された無駄の無い無駄な連携。それを決めた彼女達は一目散に逃げ出した。この間、僅か二秒。完全に置いてかれた二人は状況が全く飲み込めず呆気にとられてしまった。

「何だったんだ……?？」

「さ、さあ……?？」

呆気にとられた二人からある程度離れた場所のテーブル席に、それはいた。

「あつはあ、織斑君達かわいそうだねえ。自分達が景品になつてるなんてさあ。あんむ」
彼女の目の前には数々の料理がずらり。それは朝食処か一般男性でも躊躇してしま
う程の量だ。少なくとも一人で食べきれるものではない。現にそれをチラ見した生徒
は口か腹を押さえている。

「んっふう〜。あ〜……」

しかし、既に半分ほど空いた皿となつている。ざつと見ると三人前は平らげているだ
ろう。それでも少女はその手を止めず、嬉しそうな顔で料理を食べ進めている。

「何処からそんな馬鹿みたいな話が出てきたんだろかねえ。少くし考えてみればわかる
事じゃん。本人も知らなそうだし、内一人は男ですらないし……ねえ？」

膨大な数の料理を次々と口へ運ぶ少女——日葵は一旦手を止め、向かい側にその笑み
を向けた。そこには身を硬くする少女が一人。自分の朝食に手を付けようともしてな
い。

「食べないのお？ 冷めちゃうよお？」

「う、うん……」

「そんな硬くならないでよお、布のほとけ仏さん。取つて食つたりしないって私は約束したよお
？ それと貴女の幼馴染みにも手を出さない。これも忘れてないからさあ」

向かい側に座る、袖丈が異常に長い少女の名は布のほとけ仏ほんね。本音。あだ名は『のほほんさん』。彼女は一年一組の生徒——つまり一夏達のクラスメート。

普段は間延びした口調などでのほほんとした雰囲気醸し出すのだが、今、その様な雰囲気など一切無い。理由は言わずもなが、目の前の日葵だろう。しかし何故、彼女は狂人と一緒なのか。

「……本当に、かんちゃんには手を出さない？」

「本当だつてえしつこいなあ。それに彼女さあ、今それどころじゃないじゃん？ 戦意が全く無い人間を叩き潰したつて意味無いんだよねえ。そもそも、私の敵じゃないしい。あ、彼女を餌にすれば流石の生徒会長も相手してくれるのかなあ？ 相手しないと妹を徹底的にぶっ壊すとかさあ」

「っ!? そ、それはしないって……!」

「冗談だよお。その為に取り引したんでしょお？ イヒヒツ」
「うう……」

縮こまる本音と、嘲笑うかの様に彼女を見やる日葵。端から見れば——いや、それはどう見ても脅しだ。だが、それをとやかく言う者はいない。少なくとも教員がないこの場所では。

狂人が言う取引、それは彼女の幼馴染みに手を出さない代わりに情報提供するという

もの。この取引は彼女の方から持ち掛けたのだ。自分の大切な友達を、幼馴染みを守る為に。

この狂人が四月の事件を把握しているのも彼女からの情報。一組で起こった出来事、交流関係、その全てが日葵には筒抜けだ。

「これでもお、布仏さんには感謝してるんだあ。流星に一組の内部事情は見れないしい、色々手間が省けるんだよねえ。んんー、転入生の事も大体わかったからあ、そろそろ私も動こうかなあ」

「……………」

バターナイフを人差し指の先でくると器用に回す日葵の笑顔は誰もが恐怖を抱く。この狂人を止める事が出来る者は――。

「これからもよろしくねえ？ 布仏さん？」

時刻はSHR前、一組の教室。

「それは本当ですか？ 幾らなんでも……」

「う、ウソついてないでしょうね!」

SHRまで間もないにも関わらず、教室は食堂と同様に賑やか——いや、喧しい。それは廊下まで聞こえる程だ。

「本当だってば! この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで

優勝したら織斑君達と交際出来——」

「俺達はどうしたって?」

「「「きゃあああああつ!」」」

朝食を終えた一夏達は教室へ向かう際に廊下で隆道と合流。三人揃って到着したところ、廊下にまで聞こえる声に興味を持った一夏はその輪に声を掛けた。しかし、彼女達から返ってきた言葉は挨拶ではなく取り乱した悲鳴。主な悲鳴は鈴音を筆頭とした他クラスの生徒達であった。

「あら、お三方。おはようございます」

「おう、皆おはよう。んで何の話だったんだ? 俺達って聞こえたけど」

「う、うん? そうだっけ?」

「さ、さあ、どうだったかな?」

またこれだ。食堂の時といい、話を聞かれないのか露骨に話を逸らす。内緒話を

無理に追及するつもりはないが、自分達に関係のある事なら少しは教えてくれても良いのではないかと、一夏は首を捻らせる。

「じゃ、じゃああたし自分の教室に戻るから！」

「そ、そうだね！　あたしも！」

鈴音と生徒の一人はどこかよそよそしい様子で教室から退散。その流れに乗って他の生徒も自分のクラス、席に戻っていく。

「……本当何だろうね」

「さあな。絶対に碌な事じゃねえのは確かだ」

「なあセシリア、いったい何の話だったんだ？」

「え？　あー……」

セシリアは顎に指を当て天井を見上げた。それは何かを迷っている様子。

彼女は言うべきか言わないべきか迷っていた。真実を確める事も兼ねて言うべきなのだろうが、他の生徒に女子だけの秘密と釘を刺されたのだ。

持ち前の頭脳をフル活用、その間二秒。周囲を見計らって一夏にだけ伝えようと口を開き――。

「ああ、やっぱり聞かないでおく。なんか俺達に秘密らしいし」

「あつ……」

「無理に言わなくていい。そこまでして知りたい訳じゃないし」
「……申し訳ありません」

一夏はそれを制した。自分達に関する事ならば気になるのは確かだが、どうしても聞きたいかと言われるとそうでもない。それ故に、迷った彼女を見て聞くのを止めて気にしない事にした。食堂で生徒が言っていた様に人の噂もなんとやらだ。その内噂も綺麗サツパリ無くなるだろう、そう考える事にした。

一方その頃、教室の窓側列の最先端では――。

(な、何故、このような事に……)

――表面上平静を装っている筈が心の中で頭を抱えていた。

学園全体に広まる学年別トーナメントに関するその噂、それは男子が聞いたら卒倒しそうな程にぶつとんだものだ。その内容がこれである。

『学年別トーナメントの優勝者は男子三人の誰かと交際出来る』

あまりにふざげ過ぎていて。当たり前だが彼等はこの事を一切知らない、知るわけがない。誰かが優勝したら強制交際決定など彼等は望まない。

完全に景品扱いのそれを彼等が耳にしたら頭を抱えるか、啞然とするか、ブチ切れる

か。恐らく一夏が頭を抱え、シャルロットが唾然とし、隆道がブチ切れるだろう。尤も、それで済めば良いのだが。絶対に誰かしら痛い目に合うだろう。

そもそも何故、このようなふざけた噂が学園に広まったのか。その原因は何を隠そう、箒その人である。しかし、彼女は何も悪意を持って言い触らした訳ではない。寧ろ、彼女は何一つ悪くない。

事の始まりはある日の事。いつもの通り隆道の部屋で駄弁った後に彼女はある事を口にした。

『一夏、学年別トーナメントが終われば臨海学校があるだろ？ その時買物に付き合ってくれ』

廊下で放ったこの言葉は生徒の耳に入り、直ぐに拡散された。伝わる度に異なる内容となつて。

伝言ゲームと同じ理屈だ。メッセージの誤りは伝言が繰り返されるにつれ増していき、いつしかそれは面白い程に元のものとは異なる。只でさえ六く七人ですら内容も正確に伝わる事が皆無だというのに、それが学園規模だとうなるか。

(尾ヒレ処ではないぞっ!? 一夏だけでなく他二人まで……っ！)

そう、それは全くの別物として成り変わる。

最初こそ、何だそのふざけた噂話とは他人事であった彼女。しかし、その噂話は自身

が一夏に買い物に付き合えと言った翌日から流れ始めた。となれば自身が原因なのでとは次第に感づく。今となつてはどう考えても発端は自分だとしか考えられないでいた。

(まずい、これは非常にまずい……)

既にこの噂は殆ど——いや、男子を除いた全員に知れ渡っているだろう、女子の情報網は凄い。それはもう恐ろしい程に。

現に先程、教室に來た上級生達が——。

『学年が違う優勝者はどうするのか』

『授賞式での発表は可能か』

——と、クラスの情報通に訊いていた。情報通よりも本人達に聞けよと筈は思ったそうな。

言うまでもないが、一組はこの噂話を信じてはいない。彼等と一番近い彼女達はとも信じられない内容だったからだ。本人達が何も言っていないのもそうだが、何より隆道が関与している事が大きい。

有り得ないのだ。彼が誰かと付き合う事に承認したというのが。あれだけ女性嫌いな人間がそんな話を許せるのかと。

確かに耳にしたばかりの頃は大はしやぎした。しかし、彼もその内一人となればそれ

は疑惑へ変わる。そして今日、彼等の様子を見てそれは確信へと変わった。この噂は出鱈目なのだ。

彼がこの噂話を耳にしたらどうなってしまうのだろうか。全く予想がつかない以上、一組には女子だけの秘密に留めておこうという他とは別の理由が出来上がったのであった。一夏にだけ伝えようとしたセシリアの考えはナイスとも言えよう。結局伝える事は出来なかつたが。

(ゆ、優勝するしかない……。そうすれば……)

あの噂は出鱈目でしたと流した所で今更彼女達が止まる事は無い。有耶無耶にするには男子達か一組の誰かが優勝するしか方法は無い。そう考えに耽っていた彼女は――

(……いや、今回は、あの時とは違う。大丈夫。大丈夫な筈だ……)

――ふと、『優勝』という一つの単語によって思い出したくもない記憶が脳裏をかすめていた。

(あの時、とは……)

六年前。箒が小学四年の時の話である。

彼女は当時、小学部の剣道全国大会の前にある約束を一夏にしていた。

『私が優勝したら付き合ってもらう』

その一言は彼女にとって精一杯出来る事だったのだろう。意中の相手に真正面から告白出来ない故に、何かしらの切っ掛けが欲しかったのだ。

実家が剣術道場であった彼女はその経験の差によつて優勝を有力視されていた。實際の所、実力がずば抜けていたのだから優勝は間違いはない。

——その筈であつた。

しかし、大会その当日に彼女は引越しを余儀無くされてしまう。当然参加不能による不戦敗だ。

何故、大事な大会の前に突然引越しをしてしまったのか。それは彼女の姉——篠ノ之束しののたばねが関係している。

——『重要人物保護プログラム』——。

東が発表したISは、その圧倒的な性能によって発表段階で既に兵器への転用が危ぶまれていた。本人を含む親族の保護、そういう名目で政府主導の転居を強要されたのだ。発表して直ぐにこのプログラムが実行されなかったのは、当時は重要視されていなかったからであろう。

その日から、彼女は姉が嫌いである。一大決心した約束を台無しにしたのだから。

その後もプログラムによって西へ東へと転々。一夏から送られてきた手紙も政府の圧力によって返事も出来ず、気がつけば両親と別たれる。極めつけは元凶である姉は失踪。実妹である彼女は執拗なまでの監視と聴取を幾度となくされる。まだ子供であった彼女にとって、それは拷問に等しく心身ともに参っていた。

そんな彼女が残されていたのは剣道ただ一つ。名前を変え、再び全国大会に出場した彼女は何を成し遂げたのか。

優勝は出来た。栄光を掴む事は出来た。だが、それだけだ。その結果は喜ばしいものではない。

——誰かを叩きのめしたい。

彼女にとって剣道は、最早憂さ晴らし以外何物でもなかった。それは酷く醜い様、只の暴力だ。惨めな気持ちとなり、表彰式の頃には逃げ出したい程になっていたのだ。

そんな彼女に止めを刺したのは、そんな自分に負けた対戦相手。涙を流している姿を

見てしまった彼女は絶望に陥ってしまった。

——私は、何をしているのだろうか……。

「くっ……」

忌々しい記憶を振り払おうと頭を振るが、人はそこまで単純ではない。嫌な記憶ほど、それは何処までも頭にこびり付く。

只の暴力など強いとは言えない。それは何より自分が知っている。そう思っていた。

(今度こそ、私は……)

彼女は勝たねばならない。己自身に。

時間は進み、授業合間の休み時間。

「はあ、この距離だけはどうにもならないな」

学園内で男子が使用出来るトイレが三ヶ所しか存在しないこの現状、授業終了と同時に全力疾走しないと間に合わない。勿論それは帰りも同じ事である。

それにも関わらず無情と言うべきか、彼は先日『廊下を走るな！』とお叱りを受けた事がある。どうしろというのだろうか。

勿論、叱られたのは彼だけではない。隆道も、シャルロットも同じだ。この三人の中では彼女が一番可哀想過ぎるのではないか。女子なのに女子トイレが使えないのは何かと苦痛であろう。

そんな訳で一夏とシャルロットは用を足す際に叱られる覚悟で走るのだが、隆道だけは――。

『走っちゃいけないなら望み通り歩いてやるよ。これで文句ねえだろ。あるなら言ってみろ』

――これである。

マシになったとはいえ、授業に前向きではない隆道は歩く事を選んだ。勿論、そうすると授業に遅れるのは必然的。しかも、授業の合間に行くのだから生徒に遭遇するのは

当たり前だ。そうなると何が起こるか。

そう、隆道は不機嫌が全開となり戻ってくる。それは正に劇的ビフォーアフターだ。最早これは一組の名物と言っても過言ではない。

必ず遅れてくる彼を見兼ねた教師達は走っても構わないから授業には間に合つてくれと嘆願するのだが、当然の如くこれを無視。悪いのはお前等だと話を聞く事は無かつた。この男、非常に扱いにくい。

(いかん、やめよう。何も考えない方が良い気がしてしてきた)

のんびりはしてられない。次の授業は一夏にとつて死活問題と言える、ISの格闘技能に関する基礎知識と応用だ。絶対に間に合わなければと彼は足を更に早める——が、その時。

「何故こんな所で教師など!」

「やれやれ……」

ふと、廊下の曲がり角の向こうから聞き覚えのある声に彼は足を止めた。その声の主は——。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

——これでもかと声を荒げるラウラと、それを平然とした態度で返す千冬が二人。

会話の内容は千冬が勤めるIS学園の教員、それについての不満だということを理解するのはそう難しい事ではなかった。

「お願いです教官。我がドイツで再び御指導を。ここでは、貴女の実力は半分も活かされません」

「ほう」

「……大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「何故だ」

あの氷の転入生ことラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女が思いの丈を吐き出すその姿は、似つかわしくない必死さを感じさせる。まるでそれは、親にすぎる子供のような光景。

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。一組は……教官のお陰で意識は高い様ですが、他はどうですか？ その様な者達に教官が時間を割かれるなど……」

「ボーデヴィツヒ」

「何より、あの男もそうです。甘い処か皆無にも関わらず、何故教官はあそこまで——」

「——そこまでしておけよ、小娘」

「っ……っ……」

それは凄みのある、ドスの効いた一言。それに含まれる圧倒的な覇気は彼女を竦ませ

るには充分であつた。言葉は途切れ、続きを発しようにも開くだけ。声は少しも出せていない。

離れた距離からでもわかる。それは恐怖なのであろう。強者の前に感じる恐怖と、大切なものを失つてしまう恐怖の二つ。一夏にはそう見えた。

「少し見ない間に随分と偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取りか。全く恐れ入る」

「わ、私は……」

「私は忙しいんだ。お前に構つてやれるほど暇ではない。……授業が始まる、さつさと戻れ」

「……………」

これ以上何も言うことは無いと、千冬は教室に戻る様急かす。ラウラもこれ以上食ひ下がるうとはせず、黙したまま早足でその場を去つていく。

次第に小さくなつていく、銀色の教え子。その背中を見詰める千冬の目には哀愁が漂つていた。

「ままならんものだ。……とところでその男子。盗み聞きか？」

と、千冬はラウラが見えなくなつた所で視点を一夏の方へと向ける。様子から見て、彼が見ていた事は最初からわかつていた様であつた。

こうなつてしまえば隠れる理由など無い。観念した彼はそろりと千冬の前に姿を現す。

「ち、千冬姉。俺は盗み聞き——ぐああつ?!」

「織斑先生と呼べ」

目にも止まらぬ速さで炸裂する出席簿の制裁。それにより物理的な意味で頭が上がりなくなつた一夏であつた。彼の脳細胞や如何に。

授業が終わり、直ぐの放課後。第三アリーナ。

「あ」

ステージにて間の抜けた声を漏らすセシリアと鈴音。互いに鉢合うとは思つていなかった様子。しかし、彼女達は直ぐに気を取り戻し睨み合う。二人の目的は勿論——。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

——学年別トーナメントでの優勝である。

彼女達は国から選ばれた代表候補生。国家代表を目指す彼女達にとって、今回の様な行事は非常に重要。優れた戦績を残す為に特訓する事は至極当たり前の事だ。

「丁度良い機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上かハッキリさせとくもの悪くない……そう思わない？」

「あら、意見が一致しましたわ。どちらの方がより強く、より優雅であるか、この場でハッキリとさせましょうではありませんか」

その言葉を合図に両者は直ぐ主力武装を展開。そのまま流れるように構え、いつでも動けるように対峙する。

「では——」

——と、その時。

「!?!」

突如、声を遮ってきたのは一発の砲弾。二人は即座に緊急回避、体勢を立て直し砲弾の出処へと目を向ける。その先には漆黒の機体が一機、そして機体を纏うのは銀髪を靡かせる——。

——第三代全距離対応強襲型 I S 『シユヴァルツエア・レーゲン』——。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

「アンタ、どういうつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

二人は表情が苦く強ばった。当たり前前だ、何の脈絡も無しに攻撃されたら誰だってこうなる。

セシリアは落ち着きながらも『スターライトmkⅢ』を静かに構え、鈴音は『双天牙月』を肩に預けながら衝撃砲『龍砲』を準戦闘状態へとシフト。臨戦態勢を取った。

『甲龍』……そして『ブルー・ティアーズ』。ふん、やはりデータで見た時の方がまだ強そうではあるな。期待外れだ」

挨拶も無しにいきなりの挑発をかますラウラ。これには二人共々口元を引き攣らせてしまう。

「はあ？ 何？ やるつての？ 態々ドイツからやって来てゴコられたいだなんて……大したマゾっぷりじゃない。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「鈴さん、落ち着いて下さいまし。無闇に挑発に乗ってはいけませんわ」

ラウラのする、全てを見下すかの様な目付き。セシリアは相当な不快感を抱いた。間違はなく鈴音も同じ心境であろう。

相手は間違はなく此方の冷静さを欠こうとしているとセシリアは理解した。挑発に

乗っては相手の思う壺だ。故に、それをぐつと堪えて爆発寸前の鈴音を宥めようとする。

が、しかし。それは全て無駄に終わる。

「はっ……。二人掛かりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとはな。数だけの能無し国家と、古いだけが取り柄の島国は余程人材不足なのか？」

——ぶつりと、何かが切れる音がした。

それは堪忍袋の緒が切れた音、所謂ブチ切れ。

「ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みな訳ね。——セシリア、どっちが先やるかジャンケンよ」

「……わたくしはご遠慮しますわ。ここは貴女にお任せします」

最早セシリアの言葉は鈴音に届く事は無い。現に彼女は肩に預けていた武装を構え、『龍砲』の安全装置を外している。

「何よ、アンタは悔しくないの？」

「……………」

相手を見下すその態度と目付き、そして挑発。確かに、彼女の言う通り悔しい。はらわたが煮え繰り返る気持ちだ。

しかし、それ以上に思う所があった。

（あの時のわたくしは、あの様に見えていたのでしょうか……）

以前の自分も全く同じ事をやっていた。相手を見下して、挑発をして。

過去を引き摺っているつもりはない。しかし、傲慢な態度を取る人間を見る度に――

（ああ、もうっ……。また……）

それは彼女のトラウマ。二ヶ月経った今ですら消える事は無く、彼女の心を締め付ける。

もう二度と、過ちは犯さない。彼女はあの時、そう誓った。誓ったのだ。

「はっ！ 二人掛かりで来たらどうだ？ 所詮、一足す一は二にしかならん。下らん種馬を追い掛けるメスと腰抜け女に、この私が負けるものか」

「――今、なんて？ なんて言った？ あたしの耳には『どうぞ好きだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「ふんっ。……ああ、そういえば腰抜けと言えはもう一人いたな」

――誓ったはずなのに。

「柳隆道も相当腰抜けだな。ろくに戦闘出来ない弱者がISに乗るなど今でも信じられ

ん。幾ら貴重な男性操縦者とはいえ、アレでは、な」

「っ…………!!」

その言葉を聞いたセシリアは、気が付けば己の武装をラウラに向けていた。その理由はセシリア自身が良く理解している。

それは紛うことなき怒りであった。自身が想う人間を好き勝手に侮辱された事による怒り。

「…………貴女に、何がわかるのですか」

「…………む?」

「何も知らない貴女につ!! 彼の何がわかると言うのですかっ!!」

自分だつて隆道の事は何も知らない。人の事は言えやしない。だが、これだけは言える。

他人の為に動き、己の身を削る彼は決して弱者ではない。

「…………場にいらない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その口、二度と叩けぬ様にして差し上げます」

「なんだ、やる気満々じゃない。良いわねそれ」

自ら誓つた事を無碍にする事になるが、それは最早どうだっていい。目の前の相手は『敵』だ、絶対に許せない、許してはならない。

武装を握り締める手に力を込める二人。それを冷やかな視線で流すラウラは片手で手招きする。

「とつとと来い」

それが、開戦の合図となった。

場所は変わり、校舎の廊下。

今日も雑務を急速で終わらせる事が出来た一夏とシャルロットは訓練へと向かっていった。隆道はトイレへ行っている為、ここにはいない。

「今日も早く終わらせる事が出来たな。二人には感謝仕切れないぜ」

「雑務の一つや二つくらい平気だよ。それよりも柳さんは一人で平気？」

「本人も一人で良いって言ってたし大丈夫だろ。あまり気にし過ぎると過保護って言われるぞ?」

「それは、仕方無い気が……」

クラス代表の一夏は授業が終わった後も色々雑務が残っている。終わらせた後にアリーナへと向かうのが彼の日課だ。普段は隆道が手伝ったりしているのだが、シャルロットが転入してからは彼女も手伝いに参加している。お陰で雑務が他のクラスより急速で終わる為、その時間をアリーナに費やせていた。感謝感激である。

「今日もこの後特訓するよね？」

「ああ、勿論だ。今日使えるのは——」

「第三アリーナだ」

「だあああああつつつ?!?!?」

そこに飛び込んできたのは予想外の声。完全な不意打ちであつたそれは二人を飛び上がらせた。

「……そんなに驚く程の事か。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ご、ごめんなさい。いきなりの事で……」

「あ、いや、別に責めている訳では無いが……」

その声の主は箒その人。彼女としては普通に声を掛けたつもりであつたのだが、こうもビックリされるとは思つてもみなかった。その事に面白くない表情を出す訳だが、直ぐに謝れるとその氣勢も削がれてしまう。

「……ごほん。ともかく、第三アリーナだ。今日は使用人数が少ないらしい。思う存分に模擬戦が出来るだろう」

「お、それは助かるな。早く行こうぜ」

ISの実力は稼働時間に正比例する。僅かな時間でも実戦同様の訓練が出来る事は彼にとって非常にありがたかった。

「ん……？ 何だ？」

三人が談笑しつつアリーナへ向かっていくと、近づくにつれ周囲は慌ただしくなっていく。中には廊下を走っている生徒もちらほら、それらは決まってある場所へと向かっていた。

「皆、第三アリーナに向かっているな……」

「何かあったのかな？ 先に観客席で様子を見てみようよ」

「……おう」

何やら胸騒ぎがすると、彼はその嫌過ぎる感覚を抱えつつアリーナに到着。観客席へ足を運ぶ。

この胸騒ぎは以前もあった。また何かとんでもない事が起こるのではないかと彼の緊張は次第に高まる。

——悪いことに、その考えは的中する。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が——」

——刹那。アリーナのステージから爆発音。

「「!?」」

三人はその爆発音に驚き視線を向けた。その先には爆煙が一つ。直後、そこから飛び出してくるのは二つの影。

「鈴！ セシリア！」

その二つの影はセシリアと鈴音であった。二人は苦い表情であり、その目線は爆煙の中心部へと注がれている。

そこに佇むは『シユヴァルツエア・レーゲン』を纏うラウラ。セシリアと鈴音のＩＳが多大な損傷をしているのに対し彼女は軽微な損傷だ。

二人は苦い表情のまま軽く目配せの後に彼女へ向かっていく。様子からして二対一の戦いだが、追い込まれているのはどう見ても二人の方。

素人である一夏でもわかる。ステージで行われている戦闘は、模擬戦とはかけ離れた——私闘。彼にはそう見えて仕方がなかった。

「何、してるんだよ……おい」

彼の声は二人にはエネルギーシールドによって聞こえやしない。当然、戦闘の真つ最中の彼女達の怒声も彼には聞こえなかつた。

そんな苦虫を潰した様な表情を見せる一夏などつゆ知らず、ステージ内では戦いが続いている。

「こんのおっ!!」

鈴音は叫びと共に繰り出すは『龍砲』。訓練機の装甲ならば一撃で仕留める事が出来るであろう最大出力、その不可視の砲撃は一寸の狂いもなくラウラへと向かっていくが――。

「無駄だ。この『シュヴァルツエア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

——その攻撃が届く事は無い。

「ああ、もう……。まさかこうまで相性が悪いだなんて……」

ラウラがした事は右手を突き出したただけだが、それによって『龍砲』を完全に無効化。直ぐ様に攻撃へと転じる。彼女の機体——非固定浮遊部位から射出されるのは二本のワイヤー。その先端に接続されている刃は複雑な軌道を描いて鈴音へ飛翔、その右足を捕らえた。

——近距離兵装『ワイヤーブレード』——。

「そうそう何度もおっ!!」

セシリアの援護射撃がラウラに襲う。しかし、狙撃とビットによる視界外攻撃の両方を躲す彼女は両腕を突き出し、ビットは動きが止まる。それと同時に彼女の動きも停止、これは好機だとセシリアは狙いを定めた。

「動きが止まり——」

「貴様もな」

「うあつっつ?!?!?!」

だが、セシリアの狙撃は放たれはしなかった。先程捕まえた鈴音をぶつけて攻撃を阻害したのだ。振り子の原理による攻撃は単純であれど強力。二人は地表に叩き付けられる。

「い、こんの……——っ?!」

「隙だらけだ」

完全に隙だらけとなった二人。そこへ驚異的な加速——『瞬時加速』でラウラは一瞬で間合いを詰め、両手首から超高熱のプラズマブレードを展開し襲い掛かる。その標的は鈴音。

——近接ブレード『プラズマ手刀』——。

「ぐっ!」

ラウラの連撃に自身の武装『双天牙月』で後退しつつ耐え凌ぐ鈴音。しかし、そこへ

やって来るのはまたしてもワイヤーブレード。しかも、今度は両肩だけでなく腰部左右からも同じ物が。

二本のプラズマ手刀による猛攻と三次元躍動で接近してくる四本のワイヤーブレード。格闘戦に慣れている鈴音でも全て捌くのは容易ではない。

満身創痍であった『甲龍』は、更に装甲が損傷していく。最終的には特殊兵装の『龍砲』までもが彼女によって爆散、特殊兵装は完全大破した。

「!!」

「貫った」

「させつませんつつつ!!!」

特殊兵装を吹き飛ばされた事により大きく体勢を崩した鈴音に向けられたのは止めの一撃。しかし、間一髪の所で割り込んだセシリアは自身の武装を盾にしてその攻撃を逸らす。同時に腰部にあるミサイルピットをラウラへ向け――。

「!」

「これでえええつつつ!!!」

――発射。三人は爆炎に飲み込まれた。

「ぐうつ?!」

それは、セシリアが以前に行った至近距離でのミサイル攻撃。当然であるが、爆発に

巻き込まれた二人は盛大に吹き飛び地表を転がり回る。

あの至近距離での爆発だ。防御型でもない限りダメージは確実に入る。

「いつつ……。む、無茶するわね、アンタ……」

「く、苦情は後で……。ですが、これなら——」

——しかし。

「——」
「……………」

セシリアは、言葉を詰まらせてしまった。煙が晴れたそこには堂々と仁王立ちするラウラの姿。

ダメージは確かに入った。しかし、それは微々たるもの。重厚な装甲である彼女の機体には二発程度のミサイルは通用しなかった。

「終わりか？ ならば——私の番だ」

そこからは、一方的な蹂躪であった。動けなくなった二人に襲い掛かるのは打撃、斬撃、至近距離の砲撃。腕に、足に、そして身体に容赦なく叩き込まれる。それらは逃れられない様にワイヤーブレードによる拘束をされ、回避すらも許されなかった。

「あああつつつ!!!」

——エネルギー残量22。ダメージレベルC。機体維持警告域に到達——。

——エネルギー残量26。ダメージレベルC。機体維持警告域に到達——。

「やめ……ろよ……」

一夏の口から出た言葉は震えていた。心臓の鼓動が強くなり、息苦しさを感じていた。

ラウラはその手を止めない。淡々とセシリアと鈴音を廻り、装甲を破壊し、痛めつけていく。

「やめ——」

——エネルギー残量7。ダメージレベルC——。

——エネルギー残量9。ダメージレベルC——。

——操縦者生命危険域に到達——。

「——つつつつ!??!?!?!」

その瞬間、彼の視界の色は反転した。そして、あの時の出来事が脳内に写し出される。

強制解除によって生身を曝け出し――。

夥しい血を流した隆道の――。

「うおおあああああつっつ!!!」

それは、一瞬の事であった。悲鳴に近い叫びを出した彼は『白式』を展開、同時に『雪片式型』をコンマ五秒以下で装備。そこから構えると同時に単一仕様能力『零落白夜』を発動し、実体剣の倍以上となったエネルギーブレードをステージのバリアーへと叩き付ける。

あらゆるエネルギーが消滅する『零落白夜』。それによってバリアーは切り裂かれ、そこにはIS一機分が入れる隙間が。彼はその間を突破し、ステージ内に入ると同時に瞬時加速する。

本来ならば瞬時加速と『零落白夜』の同時発動は自殺行為だ。しかし、今の彼にはそれを考える余裕など一切無かった。

「その手を離せえええつっつ!!!」

感情に身を任せて叫ぶ彼が向かう先は、二人の首を掴むラウラの元。その爆発的な加速のまま、彼女へ向けて刀を振り下ろすが――。

「っ!?! な、何だ!?!」

――その刃は寸前の所で止まった。

まるで目に見えない何かに掴まれているかの様に身体が言うことを聞かない。彼女は直ぐ目の前にいるのに何も出来ない。

――特殊兵装『A』

アクティブ・イナードナル・キャンセラ

I・C――。

ISには『P』

パッシブ・イナードナル・キャンセラ

I・C』というシステムが存在する。機体の慣性を無くしたか

の様な現象を起こし、それによって浮遊が可能となる。

これと推進翼、そして任意で装備出来る小型推進翼を用いる事によって姿勢制御、加速、停止等の三次元軌道が行う事が出来るのだ。ISが発展した大きな要因の一つでもある。

『A・I・C』は、その発展型。対象を任意に停止させる、つまり一対一では反則的な効果を持つ『シユヴァルツエア・レーゲン』の特殊兵装。

彼は、この特殊兵装によって身動きが取れなくなってしまったのだ。

「ふん……。感情的で直線的だな」

「くそっ、身体が……」

「やはり敵ではない。この私とこの『シュヴァルツエア・レーゲン』の前では、貴様も有象無象の一つでしかない。消え——っ!!」

——瞬間、ラウラに弾丸の雨が降り注ぐ。そのお陰か彼は身体を取り戻す。

「二夏つ、離れて!」

弾丸はシャルロットのアサルトライフル二丁によるものであった。彼がバリアーを切り裂いた事に驚きつつも即座に機体を展開、援護に回るべく乗り込んでいた。

彼は援護に感謝しつつポロポロとなった二人を回収、ラウラからなるべく離れる。ある程度距離を離れた所で彼女の気を逸らしていたシャルロットも合流、彼の前に立つて何時でもカバーに入れる様に武装を構えた。

「二人は!?!」

「う…………。アンタ達…………」

「無様な姿を、お見せしましたわね…………」

「喋るな。…………大丈夫だ。機体は散々だけど二人は無事だ」

「…………良かった」

安堵した声のシャルロットであるが、その表情は険しく、武装は今もなおラウラに向けている。

「またお前か、アンテイクめ。面白い、世代差というものを見せてやろう」

余裕の表情を見せるラウラは姿勢を低くする。恐らくは瞬間加速を行うのだろう。

二対一に見えるが、彼は二人を守らなければならない。つまり、この場で彼女の相手
が出来るのはシャルロットただ一人。

特殊兵装を持たないシャルロットと、反則的な能力を持つラウラ。彼女が勝つ確率は
——無い。

「行くぞ……！」

「くっ！」

——ラウラが飛び出そうとした、その瞬間。

「ぐあっつっつ!?」

「「「!?」」」

突如、ラウラに弾丸の雨が降り注いだ。

それは、先程のシャルロットの援護とは比較にならない程の膨大な弾丸の数。聞こえたのは繋がっているかの様な銃声、そして激しいモーター音。四人は轟音の鳴った方へ注意を向ける。

そこには、何も無かった。

「い、いったい何が——ぐうっ?!!?」

今度は別方向からの弾丸。背後から襲い掛かる弾丸によりラウラは不意を突かれ、体を崩す。

しかし、二度目の攻撃で全員が見た。何も無い空間からマズルフラッシュが出た事に。

(新型の光学迷彩!? ハイパーセンサーが反応しないだど!?)

ラウラはその正体を誰よりも早く掴んでいた。しかし、ハイパーセンサーの生体反応も、熱源センサーも、音響視覚化レーダーも反応しない。そんな光学迷彩は聞いた事が無い。

「くそっ、隠れてないで出てこい——ぐっ!!」

返って来るのは返事ではなく鉛弾の嵐。今度はニヶ所からの同時攻撃が彼女を襲う。

「……な、めるなあっつ!!」

弾丸の雨に打たれつつも彼女は肩部の大型大砲をニヶ所に発射した。砲弾はマズルフラッシュへ一直線、それは何も無い空間でけたたましい金属音と共に弾かれる。

「姿を現せ……!!」

攻撃を受けたからなのだろうか、何も無い空間から『ソレ』は次第に姿を現す。

そこに現れたものは『凹』の形をした、一枚の金属。そしてその上にはバルカンが一門。彼女はその兵器に見覚えがある。

「セントリーガン……!?!」

それは、血管模様のシールドが付いた無人砲台セントリーガンであった。それは今も尚、銃身を回転させて彼女へと向けている。

無人砲台は数あれど、この様な砲台と盾のみの兵器は見たことがない。しかし、この場にいる誰もがその模様に既視感があった。

「この模様は……!?! くそつ、何処に……!」
と、その時。

「つたく、フランスの次はドイツかよ。本っ当にくそつたれだな」

突然、何も無い所から声がした。

全員がその方向へと注視すると、何も無かった空間から物体が浮かび上がる。その正体は――。

「柳、隆道……!」

「よお、キャベツ女。そんなに暴れてえなら俺が相手してやるよ」
——両手に後付武装を持つ隆道であつた。

第三十七話

隆道は、あの場に出る気など無かった。

遅れながらも第三アリーナのピットに到着し、目にしたものは代表候補生達の戦闘であつた。

だがそれは公平に欠けた二対一。更に彼女達の雰囲気からして競技規定レギュレーションに沿つた模擬戦ではなく——感情に任せたまらかな私闘。所謂、喧嘩。

「……………」

暫くそれをモニター越しに眺めていると、一人という不利な状況の筈のドイツ人——ラウラの方が圧倒していた。対して二人——セシリアと鈴音は既にボロボロ。彼女達の攻撃は殆ど通用せず、ダメージを負うばかり。最終的には蹴られ、機体が大破寸前になつていく光景が目に見る。

「くそつたれ共が。勝手に潰し合つてろ」

口から漏れたのは呆れた様な物言い。

不愉快。馬鹿馬鹿しい。嫌気が差す。そう思う彼は次第に嫌悪感が膨らんでいき、自

然とその歯を食い縛っていた。

喧嘩自体は別に何とも思っていない。誰でも一度はする事だ、珍しい事ではない。そもそも、喧嘩以上の事をしてきた自分がとやかく言うなど出来やしない。重要なのはそこじゃない。

——こんな奴等が、こんな人間共が、何れ国の代表を務める事になるのか。

——そんなんだから、世の中は狂ってるんだ。

これ以上見ても無駄な時間だ。先に行っていた一夏達の姿が見えないのなら、この場にいる理由など一つもありはしない。今も彼女達二人は執拗に嫩られてはいるが自分には関係無い事。汚物を見る様な目つきで、彼はその場を去ろうとする。

しかし、その足は止まった。モニターから目を反らそうとしたその時、純白のISが目に残まる。

「織斑……!?!」

三人の私闘に乱入して来たのは、モニター越しでもわかる、怒りを露にした一夏であつた。

何故一夏が？　今まで何処にいた？　その思考が彼を支配する。その出処を探すと、今度は橙色のISを纏うシャルロットが飛び出す光景が。

彼女も何処から来たのか、その出処を辿り——彼の息は詰まった。

「——」
彼が目にしたものは、パツクリと隙間が出来たステージのバリアー。そして、直ぐ側で——。

「ほう——」

——啞然と立ち尽くしている、箒の姿。

「——っ!!!」

それが、行動の起爆剤となった。

彼はゲートに走り出す。思わず言いかけたその言葉をぐつと押さえ込み、彼等の元へ向かう。

あのドイツ人はやる気に満ちていた。鎮静化はこの際度外視、此方から先手を打つ。ISで戦った事などほんの二回だけ。候補生二人でも歯が立たない相手に、教員の指示とはいえ模擬戦すらしていない自分がマトモに戦える事など絶対に有り得ない。

——だが、それでもいい。

勝つ必要は無い。此方に矛先を向け、抵抗するだけ。それが今の自分に出来る唯一の方法。

今までもそうやって日々生きてきたのだ。矛先を自分に向け、時に抵抗して、時に暴れて。やる事は変わらない。これまでも、これからも。

後で何かしらの罰があるに違いない。しかし、彼にとってそんなものは至極どうでもいい。

「俺もくそつたれ、だったな。……『灰鋼』」

彼は自分自身に悪態をつきながら、その場から文字通り姿を消した。

そして——。

「やっちまえつつつ!!!」
ファイア
 『fire』

先制攻撃を仕掛けたのは隆道。掛け声の直後に電子音声の流れ、無人砲台と化した『豪雨』二基はラウラに向けて一斉射撃。毎分約四千五百発の発射レートによって放たれる無数の20mm口径弾がばら蒔かれる。

「ふんっ、姿さえ見えれば……!」

だがしかし、それらは空を切るだけ。

先程まで二人——しかも、特殊兵装を持つ二人を相手していた彼女にとって、その二方向からの攻撃を回避する事など容易い。冷静を取り戻した彼女は、いとも簡単に躲し続ける。その姿は候補生の名に恥じない動きだ。

「くそつたれが。やっぱ簡単にはいかねえ、か。……『灰鋼』えつつつ!!!」

——『バリアブルシールド』展開。防衛対象、『織斑一夏』、『シャルロット・デュノア』。

彼の怒声に反応してか、『灰鋼』の右側にある欠けた浮遊シールドが二枚ほど分離。それはまるで生きている様に飛翔、一夏とシャルロットそれぞれの手前で急停止し、更に装甲がスライドされて二倍の大きさとなる。

何が何だかわからない。突然の出来事に混乱が生じる一夏であったが、ある一点に目

が行く。

それは、自身が穴を開けてしまったステージのバリアー。そこにはいつの間にかシルドが穴を塞ぐ様に貼り付いていたのだ。彼の介入によって冷静になった一夏はその意味を嫌でも理解する。

あの穴を開けたのは自分自身。頭に血が上ったとはいえ他生徒を危険に晒してしまったのだと、一夏は罪悪感が芽生え始めた。

「や、柳さん……！ あ、あの、俺……！」

「後にしろ。お前はそいつ等を——あぶねっ！」

——瞬間。彼は頭を大きく横に逸らす。すると先程まであった頭の位置に一発の砲弾が横切る。無人砲台に彼女の足止めを任せていた筈だったのだが、此方に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「今のを避ける、だと……?」

「どうやって攻撃……ああ、くそつたれっ!! そういう事かっ!!」

彼は叫びながらも全速力で走った。向かう先は地表に設置した無人砲台。先程までは名前に相応しい位に弾丸をばら蒔いていた『豪雨』であったが、現在は砲身をラウラに向けているだけ。今はうんともすんとも言わない。

「ちよ(っ)まかと……！」

「あつぶねえ……なあつつつ!!」

その理由は単純明快、ただの“弾切れ”である。発射レートが凄まじく高い『豪雨』は直ぐ弾切れを起こす事を忘れていたのであった。

彼女が放つ砲撃を出鱈目な動きで回避しつつ、スライディングで無人砲台を回収。もう一基の方も砲弾を躲しながら回収し、彼はその場で停止。弾薬を補充し始める。

「はっ、素人が。動きが止まったぞ」

停止した彼は今や無防備。好機とばかりに彼女は右肩の大型大砲を発射。狙うは頭部。

——88mm電磁^{レール}加速砲『リボルバーカノン』——。

「!?」

しかし、その砲弾が彼に当たる事は無かった。

彼の左肩に浮く『バリアブルシールド』が彼の手前に移動し、寸での所で防御。耳を塞ぐ程の高い金属音と共に砲弾は盾を疵一つ付ける事無く、明後日の方向へ飛んでいった。

これには流石の彼女も呆然。発射体勢を解かず様子を伺い始める。

「……無人砲台と言ひ、先程の分裂と言ひ、今の防御と言ひ、それは……特殊兵装? いや、第二世代にその様な兵装は無い筈だ」

彼女の言う事は尤もだ。第二世代となる機体にイメージインターフェイスを用いた兵装は無い。

射撃行動しか起こさない無人砲台。思考制御とは思えない、機械的な動きのシールド。これ等を踏まえて彼女は、アレは自動制御を搭載した兵装ではないかと推測した。

それは、当たっている様で当たってはいない。

確かに、無人砲台に関しては彼が全て動かしている訳ではない。『バリアブルシールド』も彼は指示を出しただけ、セシリアが扱う特殊兵装の様に思考制御などしていないでは、いったいどの様にして動かしているのか。

簡単な事である。それらを動かすのは、彼自身だけではない。

その正体は――

――あつぶなー……

――コアナナンバー『〇一九』

常に変異をするその機体は、『〇一九』による全力の学習能力を経て様々な代物を作り出した。その内一つが既存のISには存在しない、『灰鋼』だけが持つ新たなシステム。

——ハイブリッド兵装制御システム——。

このシステムはイメージインターフェイスとは違い、操縦者と同時にコア自身も制御を行う——言わば操縦支援システム。並列思考を持たない隆道の為にコアが作り上げた、今までにない代物。

大まかな指示等は彼自身が思考制御を、精密な動作等はコアが思考制御を。もし、彼が制御不可な状況ならばコアが制御を担い、支援を行う。

そう、操縦者の集中力が必要となる特殊兵装の運用、そのデメリットを完全に克服したシステムなのだ。それは『〇一九』による、苦心の賜物。

そして、『バリアブルシールド』も同じくして誕生した屈指の防衛兵装だ。

以前——四月の試合で大破した『灰鋼』。実はこの時、既に『〇一九』はセシリアの専用機——『ブルー・ティアーズ』の兵装を全て学習していたのであった。

指向性エネルギー兵器、思考制御によるオールレンジの特殊兵装、小型の弾頭ミサイル。これ等を学習し対策を取った結果、完全な一次移行によってあの堅牢な装甲と巨大シールドが生まれた。

レーザーを完全に弾き、ミサイルも防ぐ装甲。迎撃用として追加された、無人砲台機能。

——全ては彼を守る。その為だけに。

だが、彼はそれを知るよしもない。何故か増え続ける機能を不気味に思いつつ、嫌々使うだけ。『〇一九』の想いは——届かない。

「もつかい、働けえつつつ!!」

『Fire』

「くっ……!!」

装填を終えた彼は二基の無人砲台を地表へ突き刺す様に設置。離れた直後、電子音声の後に再びあの弾丸の雨が放たれる。備えていた彼女はこれを回避するが、次第に精密になっていくその射撃は躲す事が難しくなっていく。

「この……!!」

「俺を忘れてんじゃねえぞつつつ!!」

「!」

そう叫び彼が構えたのは二丁の後付武装。片やドラムマガジン式である巨大な広範

囲武装。片やベルト給弾式である巨大な炸裂弾武装。

フルオートショットガン
——自動散弾銃『轟鉄』——。

グレネードランチャー
——擲弾発射器『破碎』——。

そこから繰り出されるのは一斉射撃であった。無人砲台二基からの弾丸に加え、彼が放つ広範囲の散弾と高威力の炸裂弾。様々な銃声がステージに響き渡り、その足元には空襲煙が凄まじい勢いでばら蒔かれていく。

流石の彼女もこれには回避に全力を注ぐ。反撃のチャンスが来るその時まで。

「蠅みてえにブンブン飛びやがってこの……！ さつさと落ちろ……！！」

「なんとという火力だ……！ だが……」

ラウラはニヤリと笑う、その直後。

「……!?!」

突如、両手の後付武装から濁いた金属音だけが鳴った。後付武装だけでなく、側の無人砲台も砲身が回るだけで弾丸は発射されていない。

状況が一瞬飲み込めなかった彼だったが、二度引き金を引いてその意味を理解した。

「あ、やっべ」

「残弾管理を怠ったな。隙有りだ」

「——っ!?!」

回避に専念していた彼女は瞬時に反撃に移る。4本のワイヤーブレードを彼に向けて射出、咄嗟に防御体勢に入ったシールドの間を掻い潜り二丁の後付武装を弾き飛ばす。その流れで直ぐに四肢を拘束、その場から引き綴り出した。

「おわっ!？」

「雑魚の分際で随分と手こずらせてくれた。今度は——私の番だ」

「おおおおおおっつっつ!？」

そこから始まるのは遠心力にものを言わせた豪快な振り回し。それは正にハンマー投げを彷彿とさせる。鈴音ですら対処が出来なかったワイヤーブレードによる振り回しは、彼も為す術が無い。

「ぐう……離せこのっ……!？」

「ふむ。……良いだろう、離してやる」

「げっ!？」

彼女は回転速度が最高速に達したその時、彼の希望通りに拘束を解いた。

ハンマー投げというものは周回速度が増すと、遠心力と飛び出す瞬間の初速度が増し、結果的に飛距離が増加する。手放した瞬間、そのハンマーの速度がどれだけ高いか
が記録を左右するのだ。

つまりだ。ISだからこそ出来る、驚異的な回転速度で拘束を解かれた彼は当然――

」。

「だはあつつつ?!?!?!」

——凄まじい勢いで壁に叩き付けられる。

逆さ大の字状態となった彼はそのまま崩れる様に地表に墜落。ブラックアウト防御と絶対防御が発動し、エネルギーが大きく削られてしまう。

——ああ?!? ええと、これとこれと……。

——姿勢制御システム、再調整——。

——アイゼン、作成開始——。

——シヨックアブソーバー、作成開始——。

「あ、あ、くそつたれが……! 今月で何度目だつ——」

「まだ終わってないぞ」

「——っ?!? ぐおっ?!?!」

『危険察知』によつて咄嗟に防御体勢を取った彼に襲い掛かるのは砲撃の嵐。それと同時に四本のワイヤーブレードが不規則な動きで迫り来る。攻撃は全てシールドが防いでいるがこのままでは反撃が出来ない。

「柳さんっ! 今援護を——」

「来るんじゃないっ!! さっさと——」

「そこだ」

「——ぐうつ!!」

一瞬の隙。猛攻の末、シールドを弾く事に成功した彼女はワイヤーブレードを張り巡らせて彼の首と両腕を拘束する。またしても捕まってしまうのだが——。

「さて、捉えたぞ。さあ此方に——っ!!」

「ぐ、ぐおおおおお……!!」

——黙っていられるほど、彼は呆けていない。

「馬鹿な……。う、動かん……!」

彼はその場で踏ん張っていた。首と両腕を拘束している筈だが全く引つ張り出す事が出来ない。

これに驚愕する彼女を余所に、彼は両腕に巻き付いているワイヤーブレードを解く処か更に巻き付けてワイヤーを握り締める。

「調子、乗ってんじやねえぞ……このキャベツ女が……! 今度は……!」

「!?!」

「——てめえが来やがれえつつつ!!」

「なっ!?!」

彼は、逆に彼女を引つ張り出した。身体全体を駆使したそれによって彼女は宙を舞

い、彼の元へ飛んでいった。

しかし、彼女が驚愕したのはそれだけだ。直ぐに体勢を立て直して余裕の表情で瞬時加速、逆に距離を詰める。

(馬鹿め。私に近接戦を挑むか)

彼女は近接戦も得意としている。持ち前の技術と機体の性能、そして特殊兵装『A・I・C』。正直、一対一なら無敵に近い。同学年で彼女に近接戦で勝てる者はいないだろう。

「望み通り——」

だがしかし——。

「馬鹿が」

——彼に近接戦は通用しない。

「——があつつつつ?!?!?!」

彼女が瞬時加速で距離を詰めた瞬間、『灰鋼』の防衛システム『番犬』が発動。けたた

ましいい音と共に装甲が展開、漆黒の機体を吹き飛ばした。

地表を転がり回る彼女。何が起きたのか状況が掴めず混乱に陥ってしまう。

「うう……。な、何が——」

『鋼牙』 あっつつつ!!!」

「!?!」

彼女はその怒声にはつと顔を上げた。その目に留まったのは、吹き飛ばされたかの様な出鱈目な姿勢で急速接近してくる彼の姿。恐らく瞬時加速の姿勢維持に失敗したのであろうが、それよりも目を見張る物が彼の右腕に。

『盾殺し』……!」

「オ、ツラ、アツツツ!!!」

爆発音と共に二本の杭が彼女に迫り来る。この瞬間から彼女には余裕など無くなっていた。

それは焦り、文字通り必死の形相。咄嗟に手を翳し『A・I・C』を発動、彼の動きを止める。

「……ああ? 何だ、これ」

「はあつ、はあつ。……やってくれたな貴様あ。しかし、これでは何も出来まい」

彼女は微笑む。先程はどのように攻撃してきたのかは不明だが、捕まえてしまえば閑

係は無い。完全に停止した彼に向けて『リボルバーカノン』を発射準備に移行、その顔を狙うが――。

「吹き飛――ぐあつつつつ?!?!?!」

――またしても彼女は吹き飛ばされる。

彼の動きを止める事は出来たがそれも数秒程。『番犬』の吹き飛ばしによつて彼女は再び地表を転がり回る。

「停止結界が効かない……?!? そんな事――」

「逃がすかあああああつつつつ!!!」

「くっ、よくも――」

この時、彼女の体感時間はスローになった。

飛び出して来た彼は『鋼牙』を構えていない。左腕を伸ばし、その手を開き此方に迫っていた。

その左腕は、赤黒く発光していた。

何故なのかわからない。しかし、自身の持つ防衛本能がこう告げていた。

——つかまつたらおわる、と。

恐怖が彼女を支配する。アレには絶対掴まっつてはいけない。その警告が頭に最大限鳴り響いた。

「——っ?!?!?!!」

「ぐおっ!!」

回避が間に合わない絶妙な距離間。『A. I. C』が効かない以上、彼に掴まる事を恐れた彼女は全てのワイヤーブレードを用いてその赤黒く発光する左腕を弾く。

何がなんでも逃げなければ、その思考が彼女の身体を全力で動かした。怯んだ彼の間隙を狙いその場から離脱、追撃に備えつつ大きく距離を離す。

「……ああ?　なんだ、さっきまでの自信はどこいったんだよ。なあ、おい」

彼女はいつでも回避出来る様身構えていたが、彼は鋭い目つきでただ見詰めるだけ。ゆらゆらと不気味に輝く左腕を垂らし様子を伺っている。

「……なるほど、な。教官が警告する訳だ。貴様は……危険過ぎる」

侮っていた。目の前の彼は戦えもしない腰抜けでも、ましてやその辺にいる雑魚でもない。狂暴で、危険な存在。自身の——『敵』。

彼は何れ絶対的脅威となるに違いない。ならばここで潰さねばならないと、彼女はプ

ラズマ手刀を展開し構える。

「貴様はここで叩きのめすっ！ 私の邪魔をする存在を、あの人を——教官を悩ませる存在を、私は認めないっっっ!!」

「やれるもんならやってみろよっ!! てめえはここで終わらせてやるっっっ!!!」

彼とて、彼女と同じ気持ちだ。一夏に対し明確な敵意を持った人間は、自身の——
『敵』。

高々に叫ぶ彼は右腕の『鋼牙』を構え、赤黒く光る左腕を彼女に向け体勢を低くする。目を鋭くし、対峙する両者。今まさに、壮大な大喧嘩が始まる。

——その時だった。

「はあーい、タイムタイムウ」

「——っっっ?!?!?!」

——突如、緊張感の無い声が聞こえた。

その直後、一発の巨大なエネルギー弾が二人の間に着弾。地表を大きく抉り、辺り一面が土煙で覆われる。

「なっ、何だっ!？」

「あっ……あぐっ……」

唐突の事に驚いたラウラとは別に、隆道は酷く怯えていた。それはトラウマか、或いは恐怖か。それは彼自身すら理解していなかった。

その声を聞き間違える筈は無い。一ヶ月以上、自身の前に姿を現さなかった——。

「ひ、ひ——」

「う、し、ろ」

土煙が舞う中、突然と真後ろから声があった。

ハイパーセンサーの位置情報によりそこに佇む存在は感知出来る、見えもする。しかし、自身の本能がそれを拒んだ。

目を瞑りたい。耳を塞ぎたい。その存在を認識したくない。けれども眉一つ、身体が動かない。

「あらあ、固まっちゃったあ。んもう……」

その存在はゆつくりと彼の前へと移動。それと同時に煙が晴れ、姿が露になる。

そう、その存在はIS学園において問題児の中の問題児。最凶にして最狂の生徒――

「ひ、ま、り……」

「はあーいつ!! 日葵でえーつす!!!」

「――」

――篠原日葵。

「約一ヶ月半……ぶりい? どう? 調子は?」

「……ひっ!」

暫く姿を現さなかった日葵は依然として鳥肌を誘う笑みを浮かべている。その距離

――僅か三十センチ。文字通りの目と鼻の先。

完全に油断していた。此処の所、全く見掛ける事すら無かったが故に気が緩んでいた。

妹が現れただけでこの怯え様。覚悟を決めた筈だったのに、目を合わせる事すら出来ない。

「ぐっ……うう……」

彼は——こんなにも小さく、そして弱かった。

「……ああ、駄目だこりゃ。はあ、ざーんねん」

とは言いつつも、意に介していかないのか言葉とは裏腹に笑みを崩さない日葵。怯えるしかない彼に興味が失せたのかその場から離れ、ラウラの方へと向いた。もう彼は戦闘不能状態だ、戦う事は出来やしない。

「はじめましてえ、ポーデヴィツヒさん。今度は私が相手だよおん」

「……三組クラス代表、篠原日葵だな。何故邪魔をする。貴様には関係の無い筈——」

「はい間抜け」

——瞬間。

「——だあつつつ?!?!?!」

ほんの一瞬の出来事。一発の巨大エネルギー弾がラウラに直撃、盛大に吹き飛ばした。いつの間にか日葵の周辺には十枚のパーツが浮き、それらは様々な輝きを放っている。

——特殊広域殲滅推進翼『ミスミソウ』——。

「意見なんて聞いてないんだけどお? 敵を目前にして何呆けてんのかなあ? 織斑せ

んせーから指導して貰ったとは思えないねえ？」

「ぐっ……。き、貴様——」

「はいボケつとしない」

「——うあつっつ?!?!」

立ち上がる最中のラウラにエネルギー弾が再び襲い掛かる。それも一発ではなく三発連続が寸分の狂いも無しに全て命中、エネルギーがごっそりと削られていく。既に残量は五割以下、ダメージレベルもCに近い。

「はあーあ、単発すら避けられないかあ。こりや本気を出す必要なんて無いかなあ」

「くっ……。！　な、何だ、それは……」

「あつれえ？　気になっちゃう？　私はあ、お前みたいに自分から手の内を明かす様な馬鹿じゃないんだよねえ。スキャンするなりすればあ？」

「さつきからいちいち癪に障る……！」

ラウラは苛立ちが募っていた。先程から何度も日葵の機体をスキャンしているのだが、全て文字化け。機体名も、兵装も、一切わからない。それがより一層彼女の眉間に皺を寄せる。

「ああ、でもおこのままじゃあ見れないよねえ。んー……。じゃあ、特別に見せちゃおつとお」

アンチ・システム・ハック
 A・S・H 『終』、解除——。
 アンチ・システム・ハック
 A・S・H 『鬼灯』、解除——。

「はいっ、どーぞ。好きならだけ見て良いよ。そこの人達もサービスサービスウ」

いったいどの様な仕組みなのか、日葵の一声でその機体がスキャン可能となり、直ぐ様ラウラはスキャンを実行。日葵の言葉に甘えて他の全員も一斉にスキャンを掛ける。

「……っ!? こ、これはっ!?」

ラウラは驚愕に染まった。

彼女だけではない。スキャンを掛けた全員が、同じ心境に陥った。そのデータには——。

—— 操縦者、篠原日葵。IS適性値『S』——。
 —— 機体名『華鋼・狂咲』。第二形態——。
 —— 戦闘タイプ、無段階変異殲滅型——。
 —— 特殊兵装有り。『ミスミソウ』——。
 —— 単一仕様能力有り——。

「せ、セカンドフォーム第二形態……!!」

「はあーいっ！ お前達の赤子と違ってえ、私の機体は成長してましたあっ!! アハアツ!! 単一仕様能力もありまーっす!!」

高々に笑う日葵。それは絶対強者のみ許される余裕の笑み。それはとても可愛らしく——そして同時に恐ろしくもある。

そう、日葵の機体『華鋼』は既に二次移行した姿なのだ。更に一夏や隆道と同様、単一仕様能力までもが発現している。この事実全員が驚きを隠す事が出来ない。

「さてとお、御披露目も済んだ事だしさあ……。もう良いよねえっ!? ねえ良いでしよっ!? 徹底的にぶっ壊してあげるからさあっ!!」

「うっ……!!」

突如、日葵は豹変した。

不気味であつた笑みは更に歪み、その口元は三日月を彷彿とさせる。その目は大きく見開き、まるで獲物を逃さない様にしっかりとラウラを捉えている。

——それは、『悍しいどす黒い何か』。

——それは、正しく『悪魔』。

「さあ、覚悟してねえ。バラバラにしてや——」

と、その時。

「……はあつ。これからだつて時にさあ」

急激に雰囲気が戻つた日葵はうんざりした様な物言いで顔を背けた。その視線の先は隆道でも、一夏達でも無い。そこにいた人物は——。

「ち、千冬姉っ!?!」

「いい加減にしろ篠原あ……!」

——『打鉄』を纏う千冬であつた。

その両手には近接ブレード『葵』を握り締め、今にも日葵に斬り掛かる様な雰囲気を醸し出していた。凄まじく怒り心頭で、普段の目付きは更に鋭さを増している。

「あああ、そんな恐い顔しないで下さいってえ。まだ何もしてないじゃないですかあ」「あくまでまだ、だろう。全く、これだからガキの相手は疲れるんだ……!」

「はっ! 四半世紀しか生きていない癖に随分な事言うじゃないですかあ! 織斑せんせーも世間ではそのガキの一人なんですすよおっ!」

「ハ」の……」

千冬の眼力の前に怯む処か逆に生き生きとする日葵は、まさかの挑発をした。中指を

立てて。

千冬とて感情のある生物だ。あからさまな挑発でも頭に来る事は当然ある。その証にブレードを握る拳には力が込められていた。

生徒だけでなく、世界最強にも挑発する狂人。日葵には恐れなど——一切無い。

「あれえ？　怒っちゃいましたかあ？　でしたらご自慢の実力で黙らせてみたらどうですう？」

「……覚悟は、出来ているんだろうな」

「構いませんよお？　一度織斑せんせーとは一戦交えたかった——」

日葵が余所見をした瞬間、千冬は目で留まらぬ速さで接近した。それは誰しもが目で追えない、世界最速の瞬時加速。そこから繰り出される斬撃は——計り知れない破壊力を持つ。回避も、防御も不可能なそれは食らう他ない。

——筈、だったのだが。

「えっ……」

声を漏らしたのは、一夏であった。

対峙する二人を誰よりも注視していたのだが、全く理解できない事が目の前で起こった。

突如、千冬が忽然と消えたのだ。最後に見えたのは、ほんの少し体勢を低くした姿。しかし、今は何処にも見当たらない。

そして他にも不可解な事があった。それは日葵自身が未だにその場で佇んでいる事、彼女を中心に大きなクレーターが出来ている事、そして——彼女の機体『華鋼』の装甲が開いている事。

何が起こったのか、一夏はもう一度思い返す。千冬が消えたその瞬間、けたたましい音と共に『華鋼』の装甲が開き、クレーターが出来た。

わかった事は『灰鋼』と同じギミックだけだ。千冬は何処へ行ったのか。

「イヒッ、キヒヒッ……」

一夏の認識は間違いだ。千冬は決して消えてはいない。間違いなくステージにいる。

「い、一夏……。アレ……」

「うん？ ……ええ」

「きよ、教官っ!?!」

全員が刮目する事になる。鈴音に声を掛けられ促されたのはステージの壁。そこに

は——。

「ぐっ……はっ……」

——凹んだ壁と、倒れる千冬の姿が。

「ち、千冬ね——」

「ギャハハハハッツツツ!!!」

「——つつつつ?!?!」

突然、日葵は大きく笑い出した。それは今までの様な不気味な笑いとはかけ離れた、耳を塞ぎたくなり、目を背けてしまいそうな恐ろしい破顔。それと同時に『華鋼』は装甲が元に戻り、辺りに煙を撒き散らしていく。

「イーヒツヒツ……。ねえせんせえつつつ!! 以前言つた筈ですよねえつつつ!!!」

——日葵は笑う。

「私にいつつつつ!!!」

——笑う。

「近接はあつつつ!!!」

——啜う。

「絶つ対に通用しないいいつつつ!!」

——嗤い狂う。

そう、千冬は消えたのではなかった。『華鋼』によつて吹き飛ばされたのだ。それは『灰鋼』にも搭載されている、絶対的な防御システム。

——対近接絶対防衛障壁『鳳仙花』ほうせんか——。

一夏を含めた、その全員が戦慄した。あの世界最強に一撃を与えた、今も嗤う狂人に。

「きよ、教官……」

「ハアーツ、ハアーツ。……いやあ、満足ですよ織斑せんせい。ありがとうございまーすう」

次第に雰囲気に戻っていく日葵は、それはもう満足そうな表情であった。呆然とする彼等を余所に一人笑う少女は不気味を通り越した何かにしか見えない。

正に悪魔、正に怪物。人の皮を被り、暴れ回る少女を止める事が出来る者は——いない。

「うん? ……あら。織斑君、後はよろしくう」

「え? ……つつ!? 柳さんっ!!」

しかし、その時。何か不都合な事があったのか日葵は逃げる様にその場を去っていった。何事かと辺りを見渡すと、そこには絶対に避けたかった事態が。

「ひぐつ……。あ、あ、つ……」

その視線の先には蹲る隆道の姿。首輪は最大限に点滅し、例のシステム——『狂犬』が起動してしまっている状態であった。一夏は呆然状態から一気に覚醒、危険を承知で彼の元へと向かう。

「柳さんっ！ 気をしつかり!!」

「ぐうつ……。ひ、ま、り、い……」

——ストレス対象、『篠h』……ERROR——。

「もう彼女はいませんよ！ 大丈夫ですから！ だからつつつ!!!」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、……」

完全に錯乱している隆道であったが、以前の様に攻撃的な様子ではなかった。何故そのようなのは不明だが、被害を抑えられるのならこの際何だつていい。一夏は必死に彼を宥めた。

彼が落ち着きを取り戻したのは数分後。千冬の指示によって、全アーリーナは学年別トーナメントまで私闘の一切を禁じられたのであった。

それから一時間後。

学年別トーナメントは突然の仕様変更、更には緊急告知文が記載された。内容は以下の通り。

『今月開催する学年別トーナメントではより実戦的な模擬戦闘を行う為、二人一組での参加を必須とする。尚、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』

『緊急告知。『柳隆道』、『篠原日葵』。以上の二名は学年別トーナメントの参加を禁ずる』

第三十八話

令和四年、六月十三日。

この日、第三アリーナで起きた騒動は隆道達に大きな傷跡を残した。

『お二人のISを確認しましたけどダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可出来ません』

真耶から告げられた知らせ。セシリアと鈴音の二人はトーナメント参加の不許可を申渡された。理由の大体は機体の破損、ダメージレベルC超過故の修復である。

——IS基礎理論、蓄積経験についての注意事項第三——。

『ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積する事で、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーパイパスを構築してしまう為、それらは平常時での稼働に悪影響を及ぼす事がある』

ダメージレベルCを超えたISを完全修復するには通常二週間前後の期間を要する。パーツ等を取り寄せれば迅速に修復する事が可能であろうが、そう簡単に手に入れられ

る代物ではない。

それに加えて、彼女達は打撲等の怪我を負っている。安静という意味でも参加は不可能だ。

代表候補生でありながらも相手の挑発に乗り、私闘の末機体は大破させ、怪我を負う。その結果がトーナメントの不参加。恐らく、二人の立場を悪くする要因となるであろう。

事の発端であるラウラに関してはこれといったお咎めは無し。戦闘に関しては見た目に反して競技規定範囲内の攻撃であった為に処罰される事は無かった。

機体の損傷具合は修復が容易のダメージレベルB。本人も怪我はなく、トーナメント参加に支障は無い。連戦したにも関わらずこの程度で済んだのは彼女の實力か、はたまた運が良かったか。

一方、アリーナのバリアーを損傷させた一夏は処罰となった。とはいっても反省文提出という、非常に軽いものではあるが。

設備を破壊したその行為は厳罰に値するもの。しかし、隆道の応急措置による安全の確保、箒やシャルロットによる状況説明、そして――。

『あいつを咎める資格があるのかよ、私闘を止めもしなかった怠慢クソ教師共がよ。そんなに男を陥れたいか、それがためえらのやり方か。あいつが厳罰なら……：……てめえらも

だろうがつつつ!!』

——隆道による怒濤の言及。これ等が重なり、一夏に厳罰が下る事は無かった。

しかし、一夏本人は処罰を受ける事を望んだ。自分がやった事は到底許される事ではないと。

そうして下ったのが反省文の提出だ。しかし、その枚数——なんと十枚。中々の量に一夏は流石に引き面になったとか。

隆道は言わずもがな。戦闘だけでも大問題だというのに、最終的に錯乱してしまったのだから目も当てられない。暴走しなかったのが幸いか。

この日を機に、彼は許可無しの戦闘行為の一切を禁じられる。当たり前であろう。

そしてもう一つ。この騒動による一番の難題。そして同時に生まれる、ある暗黙の了解。

『篠原日葵に関わるな』

一見すると、特定人物を対象とした陰湿な苛めの様に聞こえるだろう。しかし、彼女に関しては話がまるつきり違う。

苛めというものは学校や職場で立場の弱い者をいじめる事を指す。彼女の場合は――

―その逆だ。あまりにも強く、そしてあまりにも危険だから。

教員を瞬殺出来る程の実力を持ちながらも相手を憚る戦法を好む少女らしからぬ性格の持ち主。それに加えて誰であろうと態度を変えず牙を向くその姿は正に凶暴そのものだ。教員であろうと、同クラスの間人であろうと、上級生であろうと、多人数相手であろうと彼女にとってそんなものは関係無い、ただ戮り殺しにするだけであった。

その強さと危険性が更に加速したのが代表候補生同士の私闘から始まった今回の騒動だ。二人を圧倒したラウラをへらへら笑いながらも一方的な状況に追いやる彼女の強さと危険性は、あの場にいた誰もが思い知ったであろう。

しかし、それだけで済む事は決して無かった。今回の騒動で一番の影響を与えたのは、機体が大破してしまったセシリアと鈴音でも、アリーナのバリアーに穴を開けてしまった一夏でも、錯乱してしまった隆道でも、事の発端であるラウラでも、一人勝ちした日葵でもない。

『篠原日葵がブリュンヒルデを倒した』

そう、一番の影響を与えたのは日葵を前にして倒れた千冬その一人である。

あの場にいた、隆道を除く全員が目を疑った。刀一本で世界を制した世界最強と名高

いあの千冬が、日葵の一撃により地面を這いつくばる姿を。彼女を尊敬する者や崇拜する者にとって、それは衝撃的過ぎる光景であつた。この話題は瞬く間に拡散、学内外に留まらず外側にも広まる。

勿論、千冬の敗北を認めない者達はいた。憧れの存在が一生徒如きに負けるなど有り得ないと。

目の当たりにした生徒達は偶然、機体のお陰だと決して認めず、耳にした者達は何かの間違い、デマだと全力で否定。外側では千冬の無敗伝説が揺るぐ事は無かつた。

それでも、地面に這いつくばる千冬と一人高々に嗤う日葵がいた事は揺るぎ無き事実。それは誰が見ても勝者と敗者。千冬の敗北を認めずとも、日葵への恐怖は確実に植え付けられたであろう。

——しかし、魅了された者も存在する。

三組の内部事情を御存知であろうか。

彼女達の日葵に対する想い、それは恐れる者と崇める者。圧倒的過ぎる強さに震え、生まれた感情は恐怖だけでなく——感動と歓喜。心が揺れ、彼女に就く様になつたのであつた。

それと全く同じ状況が第三アリーナで起こったのだ。一部の生徒は絶対的な力を前に魅了されてしまい、彼女を崇拜する信者と化した。

彼女達は所謂『篠原派』。千冬に憧れを持つ『織斑派』とは違う、絶対的服従を誓った者達。

彼女達にとって日葵の言葉は絶対である。正に私兵、正に下僕、正に駒。

ここまで言えばもうわかるだろう。『篠原派』に属する生徒達は——日葵の『飼い犬』だ。

そこから始まるのは『織斑派』と『篠原派』の静かな対立。繋がりの無い他人が、友達同士が、意見の食い違いで口論となり、争いとなる。

人間はほんの些細な事で亀裂が生じる。それはこれまでも変わらず、これからも変わらない。今は口論だけで済むが、何れ大きくなるであろう。

全ては彼女の思惑通り。

日葵はあの場で千冬が来るのをわかっていた。あからさまな挑発をしたのも単に反

抗していた訳ではなく、攻撃を誘う為。そして力を見せ付け、三組の生徒達と同じ者を生み出し、駒を増やす。

三組でやった様に徹底的にやる必要など無い。無敗である世界最強の膝をつかせるだけで良い。それだけで生徒達の心は簡単に揺れ動く。

その結果が『篠原派』の拡大。駒を増やす為に千冬は利用されていたのだ。まんまと彼女の罠にかかってしまったのである。

しかし、これは所詮ただの通過点に過ぎない。彼女の目的処か目標ですらない代物だ。

彼女が私兵を増やす、その意味とは。そして、最終的に目指すその目的とは。

嗤う狂人——篠原日葵。謎だらけな彼女の目的を知った時、隆道は何を思い、何を為すのか。

翌日。

カリカリとシャーペンを走らせる音だけが響く一組の教室。一切のお喋りが無いその授業風景は真面目の一言に尽きる。十代の青臭さはあれど、極一部を除けば誰もが高い倍率を潜り抜けて来た優等生。これくらいは当たり前、至極当然だ。

そんな優等生だらけの中、授業を受ける態度が微塵たりとも感じられない劣等生が一人。

「……………」

極一部の劣等生に該当する隆道は椅子に全身を預けて足を組むという、授業なんぞやる気ゼロ。ノート処か教科書すら開かず不機嫌であった。

実を言うと、教室内がこれ程までに静かなのも彼が絡んでいる。というより彼の不機嫌が殆ど。

あまりにも濃過ぎるのだ。それも教室内に充満してしまう程に。いつぞやのいざこざより圧倒的にマシではあるが、それでも居心地が良い環境とは決して言えなかった。その原因とは何か。

「……………ボーデヴィツヒ、それと柳。その不機嫌をやめろ、空気が重い」

「失礼しました」

「……………」

そう、隆道との相性が最悪と化した、同じ様な不機嫌を醸し出すラウラだ。

先日の揉め事——私闘により互いは敵と認識、誰が見てもわかる程に険悪の仲となった。決着がつかず有耶無耶になってしまったのだから未だに対立してしまいうのも無理はない。

千冬の指示によつて表立つて争う事は先ず無いであろうが、常に一触即発状態、正に爆発物だ。正直、非常に危なっかしい。

凄まじく近寄りがたい雰囲気を滲み出す両者。こんな空気にいる生徒達は堪ったものではない。

特に——。

(((い、居づらい……、苦しい……)))

——彼等の近くにいる生徒四人は。

一組の生徒数は現在三十二人。座席は横五列と縦六列となつており、今月追加された二つの座席は窓側に詰めている。シャルロットが窓側、その隣の席がラウラだ。これがどういう意味なのか、もうおわかりだろう。

彼は囲われているのだ。生徒五人に。

彼の真後ろにはシャルロットが、そして右斜め後ろにはラウラが。まさかの至近距離であった。最悪の中の最悪だ。

ちなみにだが、セシリアの出席番号は二十三番だ。何が言いたいかと言うと——。

(こゝ、これしきのこと、あの時と比べれば……)

——右斜め前はセシリアの席である。奇妙な事に彼の周囲には代表候補生が全員集まっていた。

誰だ、こんな配置にした人間は。彼を精神的に追い詰めるつもりか。

(だ、誰か助けてえ……)

そんな四面楚歌と化している彼を余所に、後ろの席ではシャルロットが助けを念じていた。彼女も精神的に追い詰められていたのである。

真正面にはぶつちぎりに不機嫌な隆道が、右側には同じく不機嫌なラウラが。険悪ムードを直視せざるを得ない彼女に逃げ場など無かった。一組の中では一番可哀相ではないだろうか。

いったいいつまでこの状況が続くのか、今学期はこのままなのか、まさかずつとこの席なのか。男装問題も片付いていない状況でこんな調子じゃ擦り切れてしまいそうだと気分は次第に沈んでいき、マイナスの思考が加速していく。

たった一人で育ててくれた母親が病死して、会社のテストパイロットを強いられて、データを盗めと命じられて、無理矢理男装させられて。

いったい自分が何をしたのだ。悲劇のヒロインを気取るつもりは無いが、これはあまりにも不幸過ぎるのではないのか。もっと自由に生きたい、女の子らしい人生を歩みたいと、彼女はセンチな気分になった。

(……駄目だ。気をしっかり持たないと)

しかし、それも暫くの辛抱だ。男装問題は時間が解決する、そう聞かされてるのだから今の自分が出来る事は耐えるのみ。折角一夏や隆道が自暴自棄であった自分に手を差し伸べてくれたのだ、同じ轍を踏んでどうすると、彼女は拳を軽く握り締める。

(席替え、したいなあ……)

とは言え、この現状は中々——いや、かなりのキツさがあると思う彼女であった。

シャルル・デュノア——もといシャルロット・デュノア。彼女の苦難はもう少しだけ続く。

重苦しい授業が午前中一杯続き、時刻は正午。

生徒達は昼食時間となった瞬間急ぎ足——競歩ばりに廊下へと出ていく。せめて昼食の時だけは逃れたい、癒されたいという一心で殆どが食堂や屋外へ雪崩れていった。

「「「……………」」」

未だに残るのは数名の生徒。じっと息を潜める一夏と箒、顔面が真っ青のセシリア、口から魂が見えそうな程にグロッキー状態のシャルロット、冷たい目付きで沈黙を貫くラウラ、そして今でも絶賛不機嫌中の隆道。静まり返ったその教室は、些細な音さえ響くであろう。

その沈黙が続く中、最初に行動を起こしたのはラウラであった。

「……………」

静かなその教室で一人立ち上がり、辺りを軽く見渡してそのまま廊下へと一直線。扉が閉まる音が室内に響き渡って数秒、隆道の機嫌は次第に収まっていく。

「つ、ふう……………」

「「はああああああ……………」」

第一声は一夏の小さな溜息。他の三人はそれに釣られ、大きな溜息をしてまう。ある者は椅子に全身を預け、ある者は机に突つ伏す。不機嫌を撒き散らした隆道とそれに耐えた一夏を除いた全員はどうとう力尽きた。

いつ喧嘩が勃発してもおかしくなかった。それ程までに彼とラウラから滲み出たものは濃いものであったから。二人が理性的な人間で本当に良かったと思う。短気であつたなら教室は物理的な意味で荒れていたであろう。

一先ず様子を見なければと、一夏はその重い腰を上げ歩き出す。この少年、結構強い。力尽きている皆を流し目で見つつ、一夏は何事も無かつたかの様な素振りでも彼に声を掛ける。

「柳さん」

「……………うん？」

何処か物思いに耽っていたのか、彼は遅れながらも反応した。

どこまでも暗い瞳に硬い表情。頬にある二本の痛々しい古傷に、うつすら残る小さな傷の数々。表情を崩す事など殆ど無い彼にはこの世界がどう見えているのだろうか。

「昼ですよ昼。飯、行きましょう」

「……………織斑、無理に構う事なんてねえぞ。こんなくそつたれなんかより他の奴等——」
「行きましょう」

「……………」

遮る様に放つ一言は、彼を押し黙らせた。

これが今の自分が考え付く、自分出来る事。彼が可哀相だからだとか、クラス代表

だからだとか、同じ男性操縦者だからでは決して無い。

「二人になんてしません。俺がさせません」

力になりたい、助けになりたい、それだけだ。それは嘘偽りの無い、紛うことなき本心。

これが純白たる少年、織斑一夏の強さである。

「……俺は——」

「柳さん」

「……はあ、わーかったわかった」

「よっしゃー！」

一夏の強引さに彼は観念、両手を上げて降参の意思表示を見せた。この少年、やはり強い。

漸く一緒に昼食を取れる事に一夏は笑顔満開。直ぐに筭とシャルロットを誘い昼食へ行かねばと財布を取りに自席へ急ぎ足となっていた。

彼とセシリアを一緒にグループにするのはまだ早い。ふと、彼女に視線を向けるとぐったりとしつとも軽く手を振っている姿。一夏はその意味を直ぐに理解した。すまないセシリア、ありがとうセシリア。

「じゃ、屋上で決まりですね。購買に行つたこと無かつたんですよ。何が売つてるのか

な——」

「ああ、待て待て」

「はい？」

「そう、か。その方が見つけ易い……か？」

「柳さん？」

振り返ると、彼はまた何か考えに耽っていた。数秒が経ち、その表情は決意したものとなる。

そして一言だけ。それは全員を瞠目させた。

「……屋上は無しだ。食堂に行こうぜ」

本日の食堂はいつも以上の騒がしさを生んだ。

それもそのはずであった。そこには食堂に姿を見せる事のなかった人物が佇んでい
るのだから。

「本当に良かったんです？　今からでも遅くないですよ？」

「ここまで来てまだ言ってるのかよお前は……。いつまでも屋上つっーのも、な」

食堂に並ぶ列。そこには一夏、シャルロット、箒、そして隆道の四人が。彼等は屋上へ行かずに食堂へとやって来たのであった。

しかも、提案者はあの隆道である。どういふ風の吹き回しなのか。まさか気でも狂ったのか。

「しっかし騒がしいな。いつもこうなのか」

入学してから約二ヶ月半、彼が食堂へ来たのはこれが二回目。一回目は夜時に行ったクラス代表就任パーティー、昼時は初めてである。

「まあ、いつもこんな感じですよ。今日は一段と騒がしいですけど……。理由わかってますよね？」

「まあな」

昼時に初めて姿を現したのも勿論ではあるが、彼は高身長だ。他の誰よりも。

172センチの一夏を上回る、驚異の180センチ。平均身長が160センチに満たないIS学園では嫌でも目立ってしまう。目立つなという方が無理だ。

只でさえ一夏と男装のシャルロットと箒の三人ですら注目の的だというのに、そこに彼が加われれば——言うまでもない。

「一夏、早く選ばうよ。流石に視線が……」

「ああ、悪い悪い。柳さんは何を頼むんです？ 何でもあるんですよここは」

「んじゃこれにするか」

頼んだメニューは唐揚げ定食だ。購買の唐揚げは中々のものであったが、果たして食堂のはどれ程のレベルだろうかと楽しみに思う彼であった。勿論、顔には一切出さずに。

「あら、あんた！ 漸く来たのかい！」

「……どうも」

最前列まで進むと、威勢の良い食堂のおばさんが勢いよくやって来る。それは親戚を出迎えるかの如くであった。

流石に笑顔全開の人間相手にガン無視するのは気が引ける。故に、彼は一応の挨拶をする。

「いつ来るかと待ちわびていたんだよ！ ほら、あんたデカいんだからたんと食いな！」

「うおっ。……はあ？」

「「えっ」」

そう言って置かれた定食は、『デカ盛ッ!!』という名に相応しいものであった。

馬鹿みたいに積み上げられた唐揚げに、それに負けじと馬鹿みたいに盛られた白米。

正に『山』。富士山——いや、チヨモランマ。

「す、すつげえ〜……」

「これは、ちよつと……」

「……見てるだけで満腹なのだが」

これには周囲の人間もドン引きした。明らかに標準量の三倍以上はある。

見るだけで胸焼けレベルな唐揚げの山。それは並大抵の人間では完食は不可能だろう。

「……良いのかよ。こんなに盛って」

「サービスさ、サービス。あんたなら食い切れるだろうと思つてね。流石に多過ぎたかい?」

「いいや? ……ありがとさん」

なんとこの男、嫌そうな素振りも見せずにそれを手に取った。しかも感謝の言葉も添えて。

「く、食うんですか？ その量を？ 本当に？」

「ああ、これくらいは全然食えるぞ。何なら追加しても良いくらいだ」

「ええー……。まさか大食いだとは……」

「何呆けてんだよ。彼処のテーブル空いてるぞ」

「ああ、待つて下さい。もうすぐ来ますから」

ズッシリと擬音が聞こえそうな程のデカ盛りを軽々しく持つ彼は何処か待ち遠しそうな様子だ。他三人も昼食を買い、テーブルへと向かう。

「さ、て、と……」

「行儀悪いですよ。食べながら携帯いじりは」

席に着くなり彼は携帯を取り出した。これから食事だというのにこの男は何をしているのか。

流星にそれは見過ごせないと注意をする一夏であったが――。

「ああ、違う違う」

「……？」

携帯いじりとは言い難い、ほんの少しの操作。それを立て掛け、テーブルの隅に退ける。他三人には画面が見えない様にして。

「テレビですか？」

「まあ、そんなところ。さ、食おうぜ食おうぜ」

「は、はあ。……いただきます」

「いただきます」

「ん」

漸く実現出来た、男性操縦者同士の昼食時間。今は色々と問題を抱えてはいるが、この時だけは楽しくしよう。一夏はそう心に刻み、積極的に皆の会話を弾ませたのであった。

その一方で。

(どいかにいる……)

隆道は会話の中で、一夏達に気づかれない様に周囲と携帯画面を一瞥していた。

(こいつは違う……。こいつも……)

彼の携帯画面に写るのはテレビではない。

(こつちを見たな。……ああ、それだ、その目。俺はその目を知ってるぞ)

写るのは逆転した食堂の風景と生徒達。

(白か黒か……てめえはどっちだろうなあ)

それは——『鏡』であった。

三日前——。

『いったい何をするつもりだ……！ 事を荒立ててしまえば……！』
『そうやって後手に回るのかよてめえは……！ 起きちまってからじゃ遅えんだぞっ
!!』

『この問題は我々が対処する……！ お前が動く必要など何も——』

『現に今も見つけてねえだろうが!! いつまでも向こうが黙ってると思ってるのか!!』

『しかし……』

『良く聞けよ……！ 向こうはそろそろ動くぞ、絶対にな。使えない人間、用済みの人間は間違いなく消される。もしもデュノアが死んじまったら織斑は自分自身を一生責めるぞ、あんたはそれを望むのか。これは織斑の為でもあるんだぞ』

『……どうやって見つけ出す、言え』

『はんつ。あんた等には一生わからねえし、絶対見つけ出せねえよ。『悪党の目』は、な』

『悪党の、目……』

『デュノアの暗殺……ああ、上等じゃねえか。俺が必ず見つけ出して、必ず狩ってやる……!!』

第三十九話

時刻は夜。本州。

夕食時間となり、I S 学園の食堂はいつもの様に賑わしくなったその時間、本土側のモノレール駅には二人の男女が佇んでいた。

「……………」

二人の男女——隆道と千冬は一切も喋る事なく何かを待っている様子だ。こここのころ、二人は一緒にいる時間が多いのではないだろうか。

それもそうだろう。何せ、監視と抑止力を両立出来る人間は彼女その他存在しない。万が一の事を考えると並大抵の教員には任せられない。

「……そろそろか？ お前の友人が来るのは」

「……………」

「……………」

相変わらずのガン無視。一緒にいる事が増えたとしても彼の心境が変わった訳ではない。それで変わるのなら誰もが人間関係で苦勞などしない。彼女に対して駄々を捏ねないだけまだマシだ。

何故、二人が本土のモノレール駅にいるのか。それはある人物を待っている為である。

あの日——土曜の夜中に彼女の部屋へ突撃したその後、彼は友人へ連絡を取っていた。

『手渡しで持ってきて欲しい物がある』

彼から連絡を受けた友人は直ぐ様荷物を調達。そして三日後の今日、それがここに届く。

彼は件暴力だらけの日曜の事件以降、外出許可が厳しくなった。しかし、モノレールまでなら話は別だ。当然の事ながら同行者付きではあるが。故に、彼の監視兼抑止力として彼女がいるのである。

何故、運送ではなく手渡しなのか疑問が浮かぶところではあるが触れる事は御法度だ。一切詮索しない、そういう約束となっている。

「……来たか」

「……？」

遠くから聞こえて来たのは数台のエンジン音。それは此方へ向かって来ている様で、徐々に爆音を響かせる。目を凝らすと遠くからはバイク集団が見えてきた。

それは五台のアメリカンクルーザー型バイク。跨る人間は全員が黒のジャケットに

フルフェイスヘルメットという黒ずくめ。バイザーはスモーク仕様であり表情は一切見えはしなかった。

爆音を奏で、バイク集団は彼等の前で止まる。そこから降りたのは、これまた大きめのバッグと堅牢なケースを背負う二人のみ。

「……………」

「……………」

挨拶の一つは交わすと思いきや、二人は無言で物を彼に渡すなり直ぐバイクへ戻っていく。一見すると何処かの密売の様だと彼女は感じた。

「[[[[[[……………]]]]]]」

「……………」

バイク集団は此方を見つめるも、未だに無言。それを光り無き目で見据える彼は右手を上げ謎のサインを出した。恐らく彼等独自のハンドサインだろう。少なくとも軍属であった彼女ですら全く理解が出来ない。

それを確認し理解したのか、彼等は領いて颯爽とその場を去っていく。集団で爆走していく姿は数秒程で見えなくなっていた。

（本当に友人、なのか…………？）

会話も何も無い、単なる荷物の受け渡し。彼等は本当に友人なのだろうか。何かしら

一言ぐらい交わしても良いではないかと思えてしまう。

それよりも荷物の中身が気になる。一つは入学直後に運送されたシヨルダーバッグと同等の大きさを持つバッグ。一つは堅牢な作りをしている長方形型の巨大ケース。

「柳、その中身は——」

「詮索しねえ約束だろうが。それより、あんたは他の心配した方が良いんじゃないのか」
同行してから黙りを決めていた彼が放った言葉は皮肉めいた一言。それが何を指すのか、彼女にとってそれは心当たりが多過ぎた。

ラウラの事なのか、シャルロットの事なのか。女尊男卑主義者の事なのか、彼の妹の事なのか、一夏の事なのか、それとも自分自身の事なのか。

「もう用は済んだ。帰るわ」

「……………わかった」

時間は進み、隆道の自室。

「ああ、今日の集まりは無しだ。一人でやりたい事があるからな」

『そうですか……わかりました。ではまた明日』

「ん」

電話をしながら自室へと帰ってきた隆道は通話を切るなりバッグと机に放り投げ、ケースを床へ乱雑に置く。そのまま椅子へふんぞり返りながら直ぐに何処かへ電話を掛けた。

「……よお、さつきはご苦労さん」

『全くだ。久々だぞ、こんな長距離走ったのは。おかげで真夜中ツーリング確定になっちまった』

「ははっ、良かったじゃねえか。さぞ快適だろ」

『馬鹿言うんじゃねえ、やってる事はただの配達じゃねえか。何一つ面白くもねえよ』

電話の相手は先のバイク集団の一人——章吾。互いに無言で受け渡しをしていたと思えないそのやり取りは年齢に相応しいものであった。

だが、そのやり取りも長く続かない。この声は電話越しでもわかる程の低音に変わる。

『……言われた通り私物の奥に突っ込んでいた。姐さんはこの事を一切知らねえ。知っちゃったたら何言われるかわかったもんじゃねえぞ。っーか、マジでやんのか』

「ああ、狩らなきやならねえくそつたれがいる。後手に回るつもりはねえ、先手必勝だ」
 『氣いつける。お前に万が一の事があれば——』

「殺られるつもりはねえよ。今までもそうだったろうが」

『……そう、だったな。……兎に角氣いつける。俺から言えるのはそれだけしかねえ』

出来る事なら助けになりたい。しかし、今回の狩り場は内側¹⁵。外側の人間は一切手出し不可能。出来る事はこうして物資を渡す事だけだ。あとは彼の無事を願うしかない。

「ありがとさん。……もう切るぞ、色々と準備をしねえと——」

『待て、バッグの方に姐さんから贈り物がある。そろそろだろ?』

「贈り物? そろそろ? ……ああ、そういう」

『超最新式だよ。あと俺達からも、な』

「……まあ、ありがたく貰つとく、皆によろしく言つといてくれ。勿論光乃にも。……じゃあな」

通話を切つて椅子にもたれ掛かる彼。五分にも満たない通話は彼にとっては素晴らしい一時だ。こうした友人との会話は、何処か癒される。

そうした姿勢で寛ぐ事、数分。目を閉じていた彼は険しい表情となり、勢いを付けて立ち上がりバッグへと手を伸ばす。

「こんなに服いらねえって。いつ着るんだよ」

そのバッグから次々と出てくる物は、衣類やら菓子やら何の変哲のない物ばかり。端から見れば修学旅行を彷彿とさせる代物ばかりだ。おかしい所などありはしない。

と、そこへ。

「……………おお」

彼がつい声を漏らして手に取ったのは長方形の箱と光り輝く金属。それは十箱の煙草とチタンコーティングされたオイルライターであった。

これは素直に嬉しい。何せストレスでどうにかかなりそうな日々が続いていたのだ、こういう様な嗜好品は本当に助かる。後で存分に楽しむとすると表情が柔らかくなっていた。

またしてもここで念押ししておくが、彼はまだ未成年だ。正真正銘、紛うことなきクソガキ。

IS学園は『あらゆる法の適応外』。だから問題無いという屁理屈を頭に浮かべながら彼はバッグを続けて漁っていく。

「これか？」

疑問の声を出しながら手に取ったのは、見覚えの無い箱であった。可愛らしくラッピングされたそれをおもむろに開封すると、中からは腕時計の様な物が。

「ん……………？」

それは真四角のディスプレイが目立つスマートウォッチ。章吾曰く超最新式だそうだが、生憎彼はその手の情報が疎い。喜びより先に疑問が浮き出てきてしまった。

そんな疑問を抱えながらも左腕に填めて電源を入れると、表示されたのは緑の心拍数グラフが。時刻も表記されたがオマケ程度に小さい。普通は逆じゃないのか。

「……どつかのホラーゲームみたいだな」

ともあれ、貰った事には感謝だ。他にも機能があるらしいが、それはまた後にしよう。今は最も優先すべき事がある。

バッグから私物を取り出し切つて中を覗くと、バッグに合わせたマットが一枚。それを取り除き中から出てきたものは――。

「ふむ」

――謎めいた部品の数々。

一目見てわかるのはセンサーやスイッチ、筒状の金属に工具など。他は最早何なのかすら不明な物体であった。これ等はいったい何なのか。

しかし、彼はコレに見慣れているのか全く疑問に思わず椅子へ腰掛け、組み立てていく。

黙々と組み立てる事、十数分――。

「……こんなもんだろ」

完成したのか独り言を呟きつつ大きく背伸び。出来上がったソレは——用途が全く不明な機械。それがざつと十個以上。

四角状の物体上には一本の短い筒、その後ろにも何やらハンマーの様な物体。全くわからない。

「出来は、どうだ？」

そう言うなり、彼は手元にあるスイッチを一つ入れて物体の前に手を翳す。その直後に響くのはカチンという金属音。

その音を聞いた彼はほくそ笑む。どうやら成功した様だ。不気味に笑みを浮かべ、それ等を全てバッグにしまい込んでケースへと手を伸ばした。取り出したその中身は——。

「……ほー」

——フルサイズのコンパウンドクロスボウと、真新しい一本のマチェットナイフ。

「しつかり手入れしてんじゃねえか、流石だな」

一目見てもわかる程に手入れされた大型凶器。スコープや矢筒、更にコッキングメカが搭載されフル装備と化したそれは使い勝手が良さそうだ。

何度か構えて、矢を装填せずに空撃ち。中まで手入れを施したのかトリガーも軽く撃ちやすい。ここまでできてくれた友人には感謝しかない。

「こっちは手作りか？ 切れ味は……上々、と」

そしてもう一つの凶器。手作り感満載の刃物は一切装飾も無く、グリップ部分に紐を巻き付けただけの無骨な物。刃先を指で軽くなぞると皮膚がぱっくりといき、血が滴る。試しにと思いつき叩いても金属音を響かせるだけで多少撓る程度であった。付属である鞘も手作りの分厚い革製だ。見た目からして耐久性も高いに違いない。

切れ味良し、強度良し。これで得物は揃った。

「……………ふうっ」

彼は、近々に『狩り』を行う。その狩猟対象はシャルロットの暗殺を企む畜生だ。恐らく相手は教員達を警戒して行動する手練れであろう。未だに発見出来ていないのがその証拠だ。

一夏を側に付かせ接近での暗殺を未然に防ぐ。鉄砲玉でない限り、幾ら人目がある場所でも堂々と仕掛けたりはしないはずだ。仮に、そうだったとしても近づかれる前に仕留めて見せる。

勿論、一夏とシャルロットにはこの事を伝えていない。一時は伝える事も考えたが彼等の事だ、変に警戒心を出してしまい、相手は姿を現す事は無いだろう。故にだ、この

件は誰にも知られずに成し遂げなければならぬ。

ここはIS学園、自分の住処縄張りではない。今までの様には絶対にうまくいかない、自分一人では何も出来やしない。

そう、自分一人では。

成し遂げるにはこの『灰鋼』が必要不可欠だ。せいぜい道具——いや、兵器らしく役に立たせて貰おう。役に立たなかつたらそれまで。その程度の代物——ただのゴミ、ガラクタだ。

「……………」

夢などもう抱きはしない。あの頃の様には。

「兵器は兵器らしく、な」

チャンスはたった一度きり。定めている標的が白か黒か、持ち前の技能と経験が腐つてない事を祈るばかりだ。

黒なら確実に仕留める。その為にこうして武器や道具を用意したのだ。絶対に逃が

しはしない。

彼は険しい表情のまま道具とバッグを背負い、数本の矢を手取る。そのまま扉へ向かい――。

『幽霊犬』

――姿を消した。

――たつくん……。私、は……。

――作成完了。対■■絶対■■投影『■』――。

――作成完了。対人近接武装『HF・M』――。

――作成完了。対人射撃武装『HV・C』――。

――作成状況を確認――。

――待機戦闘形態、九パーセント――。

――特殊兵装、三十六パーセント――。

翌日。一組の教室にて。

授業中真つ只中であるその部屋は、以前の様な居心地の悪い雰囲気は全く無かった。

「……あの、ちふ、んんっ！ 織斑先生」

「なんだ、織斑」

一人の生徒——一夏は静かに手を上げ、千冬に質問を投げ掛ける。妙にかしこまった表情の彼に応答した彼女は何気無く返事を返す。まるでその質問をわかりきっているかの様に。

「柳さんに……何かあったんですか？ 電話にも出てくれないんですよ」

「……………」

そう、今現在隆道の席は——もぬけの殻。隆道は今日、欠席をしていたのだ。そのおかげなのか教室内に険悪な雰囲気^がが充満する事は無かった。

ただの体調不良なら疑問に持つ事は無かった。しかし、そういった連絡は一切無い、電話にすら一切出ない。それ等が彼に不安を駆り立てた。

次第に不安を現す表情に変わる彼を見兼ねて、彼女はおもむろに口を開く。

「……事前に連絡があつてな、具合が悪くなっているらしい。暫くは休むそうだな」
「そう、ですか」

「電話にも出れない程体調が良くない。今は絶対安静中だ、決して見舞いに行こうとするなよ」

「……はい」

「案ずるな。何も二度と戻ってこない訳では無いんだからな。時期に良くなるだろう」
彼としては見舞いに行きたい所。しかし、悪化してしまえばそれは本末転倒である。あまり納得していないが、これ以上は何を言つても意味が無い。引き下がるしかなかったのであった。

「……………」

彼が授業に集中し直して暫く。生徒達が教科書に目を落としたそのタイミングで彼女は手持ちのタブレットを覗く。その画面には――

——lost——。

——たったそれだけが表示されていた。

『灰鋼』の現在地は勿論の事、バイタルサインすら機能が停止していた。ありとあらゆる

る情報がシャットアウトされた今、居所は掴めない。

(生徒に任せて……何が教師だ……)

隆道は今——どこで何をしているのか。

三日後の土曜。

大半の生徒達が本土へ外出しているその頃に、一夏は第二アリーナにてシャルロットと訓練中。急遽タッグ仕様となった学年別トーナメントまで残り一週間と二日。一回戦敗退という無様過ぎる姿を晒さぬ様に、こうして時間余す事無く訓練等に励んでいた。

今回は今まで経験した事の無いタッグ戦。単体での模擬戦ですら戦果はよろしくないので、今度は味方との連携も絡んでくる。今まで以上に気を引き締めなければならぬ。

と、思いはするもの。

「ほら、一夏。集中して、集中」

「あ、ああ。悪い」

実際の所、彼は訓練に集中出来やしなかった。頭を振って取り除こうにも、何度も脳内に過る。

(大丈夫、なのかな……)

あれから三日間、隆道が皆の前に姿を現す事は無かった。部屋の手前で声を掛けても全く応答が無く、電話を掛けても電源を切つてあるのか一切繋がらない。本当にただの体調不良なのか、一夏は不安が募っていた。

「一夏。ねえ一夏」

「——っ！ な、何だ？」

「……柳さんの事考えてたでしょ。顔に出てる」

「うぐっ。わ、悪かった」

正に凶星であった。何かと顔に出てしまう彼は言い訳が思い付かない。試合に向けて訓練に集中しなければならぬのに、自分は何をしているのだろうか。それが一層彼の気持ち沈ませた。

「……今日はもう上がろうか。コンディションを整えないと出来る事も出来なくなっちゃうしね」

「……………」

「そう落ち込まないで、まだ時間はあるんだし。柳さんもその内ひよっこりと出てくるよ。ね？」

「……………そう、だな……………そうだよな。サンキユー、シャルル。気が楽になった」

あの日——全てを打ち明けた日以降、彼女とはかなり親しくなっていた。

今もそうだが、大体が彼女の方が気を利かせてくれる。彼女の方が辛い状況の筈なのだ。

『今のあいつは脆い、お前が支えろ』

(……………そうだ、支えるんだ。俺が弱気になっちゃ駄目なんだ。しっかりしろ、織斑一夏) 隆道に言われた、ある一言を思い出す。

四月に決意した自分探しは未だ見つからない。しかし、これこそが今の自分に出来る事なのだ。時間はまだまだたっぷりある。それを見つけ出すまで自分が出来る事をするべきだと、彼は改めて決意を固めた。

一方その頃。

IS学園の屋上行きの階段には、ある看板が立て掛けられていた。そこには『清掃中』という看板が一つ。その付近の階段では清掃員が一人黙々と作業をしている。

彼女はIS学園専属の清掃業者。かつては学舎の掃除を生徒にやらせないのはどうなのかと保護者からの反発があつたのだが――。

『僅かな時間もIS教育に回した方が良い』

――とのことで落ち着いたとの事。生徒が清掃する時もある時はあるが、それは生徒への軽い罰として使われていた。変わった学園である。

「……………」

今も黙々と清掃を続ける清掃業者の女性。所々綺麗に磨き上げていくその手際良さは目を見張るものがある。流石は専属であろう。

――否。彼女は単なる専属清掃業者ではない。彼女の正体は――。

IS学園、屋上。

その屋上の隅で佇むのは三年生であろう生徒と作業着の女性。所々にも作業着を来た清掃業者が彷徨いており、辺りを見渡している。そんな中、生徒は辺り——正確には第二アリーナの入り口を見つめ、その目付きはとても鋭かった。

「此方がご用意した物です」

「ご苦労様」

そうやって作業着の女性が清掃道具箱から一つ大きいケースを取り出し、生徒へ手渡した。生徒はそれを受け取り中身を確認していく。

その中身は数々の部品と、数発の大口徑^{50BMMG}弾薬。それを確認するなり生徒は部品を組み立てていき、それは一丁の銃となる。

「……………」

完成したそれは、大型の単発式対物ライフル。スコープとサブレッサーも付いたそのライフルは破壊と隠密を兼ね備えていた。

約百年前に誕生したその弾薬は今でも現役だ。ISスーツは勿論の事、弾丸によっては鉄板ですらぶち抜くその高威力は世界中で運用されている。

そう、この生徒こそがシャルロット暗殺を実行する真犯人。表上は代表候補生ですらない、特筆する事の無いただの一般生徒。授業態度も真面目である事から教員達の目から逃れられていた。

その正体は一部のフランス政府と繋がりを持つ暗殺者。政府にとって邪魔者である存在を排除する為、このＩＳ学園に入学したのである。周囲の清掃業者も彼女の協力者。長年と専属清掃に勤めていた事もあつて疑われる事はなかった。

今まで来る事は無かった暗殺依頼。だが、その依頼が今回漸くやつて来た。彼女は直ぐ様準備に取り掛かつていった。

暗殺対象の行動パターンを把握し、有効な暗殺手段を考察。協力者により武器も調達、後は実行するのみだ。後片付けは協力者がやってくれる。簡単な仕事だと彼女はほくそ笑んだ。

「ごめんなさいねえ、シャルロット・デユノア。貴女に恨みは無いのよ。スポッター観測手よろしく」

「了解」

狙うは上半身か頭部のみ。この大口徑弾薬なら他の部位でも致命傷は避けられないが、ＩＳの展開によって一命を取り留める可能性がある。故に、一発で確実に殺さなければ。

この様な携行武器ならISから発する警告に引つ掛かる事もない。距離は長いが、自身の射撃能力には自信がある。後はその時を待つのみだ。

何も知る事の無いシャルロット。彼女の死神は刻々と迫っていた。

その頃、屋上行き階段にて。

未だに清掃を続ける女性。一見すると生真面目ではあるが、実は何度も同じ箇所を磨いている。怪しまれない様、仕事暗殺が終わるその時までにごうして見張りをしていたのであった。

「……………んん？」

その時、彼女は何か違和感を覚えた。見られている様な、そんな感覚が。そして、それと同時に危機感も感じていた。

つい、懐に手を伸ばして辺りを見渡す。だが、辺りには人一人いやしない。一切の気配がない。

「…………ふう」

気のせいかと、彼女は階段の清掃を再開する。土曜のこんな時間だ、誰も来やしない。そう彼女は安堵の表情を浮かべた。

「もう、さっさと終わらないかし——」

——しかし、その時。

「——っ!?!」

突如として襲い掛かるのは掴まれた様な感覚。そしてそのまま彼女はナニカに引つ張り出され、階段から転落、廊下へ放り出される。

「がっはあっ!?!」

いったい何が起こった。明らかに足を滑らせた訳ではない。それは正に引つ張り出された感覚。

這いずつたまま混乱する最中、次に襲い掛かるのは首を締め付けられる感覚。余計混乱する彼女を余所に身体は宙に浮き、そのまま壁へ押し付けられていった。

「ぐっ!?! な、ななな、なにっ…………!?!?!」

それは恐怖。ISを持っていないにも関わらず宙に浮き、今は壁にへばり付いてい

る。首元へ手をやると、そこには何も無いにも関わらず感触が。

「漸く、か。くそつたれ共が……!!」

「——っ!!? そ、その声……!!」

何も無い筈の所から聞こえる男性の声。目の前で徐々に姿を現すのは、凶器を背負い、鉄の首輪を装着した鋭い目付きの青年。

「長かつたぞ……? っこ暫くずつとあの女郎の後を付け回して……。四六時中付け回すつてのはほんつと楽じゃねえよな。なあ、おい……!!」

「に、二番目……!!」

その正体は隆道その人であつた。部屋から姿を消したあの日から今日に至るまで、一人の生徒を追跡していたのであつた。飲まず食わずに。その証拠に鋭い目付きの下にはくつきりと隈が。顔も何処か寡れている。

「まさか協力者——しかも清掃業者がとは、な。危ねえ危ねえ、そこまで考えていなかったぜ」

「何の、話……!!? 私はただの清掃業者——」

「何の話だと? ただの清掃業者が——」

「あつ!!? ちよつ!!?」

そう言うなり、彼は彼女の懐を弄つた。端から見ればただの変態だ。この時点で彼は

セクハラで訴えられる事は確實。

——が、しかし。

「拳銃なんて持つてる訳ねえだろうがっ!!」

「……ううっ!？」

懐から出てきたのはサブレッサーが内蔵された小型拳銃が一丁。非常にコンパクトであるそれはポケットに入る程に極小の凶器であった。

何故、彼がその凶器を発見出来たのか。それは彼の専用機『灰鋼』が新たに生み出した、絶対的である索敵システムのお蔭である。

——対武装絶対索敵投影『獵犬』——。

待機形態でも必ず起動する、あらゆる武器等やI Sに反応する探知能力。探知機に反応しない代物ですらこのシステムの前では全て丸裸だ。

それだけではない。対象を選べばどれ程の距離が離れていようと声を拾う事が出来、^{トラッキング}足跡を追跡が可能というオマケ付きである。

索敵と追跡に特化した、対象を確実に逃がす事の無いシステム。またしても突然生まれれたこれのお蔭で探し出す事は容易であった。

「てめえに用は無えっ!!」

「ああっ!？」

「そこで寝てろおつ!!」

「——ああつつつ?!?!」

彼は彼女をそのまま投げ飛ばし、奪った拳銃をその両足に弾切れになるまで撃ち込んでいく。

膝関節を狙った無慈悲な射撃。静かなる発砲により廊下は空気を切る音と空薬莖が転がる金属音だけが鳴り、それ以降は彼女の悲鳴が響くのみ。最早立てはしない。

「あとは……!!」

残弾が無くなった拳銃を投げ捨て、向かう先は屋上。何としても阻止して見せる。そう彼はより一層表情を歪め、階段を駆け上がっていく。

「オ、ラ、アツツツ!!!」

「「「?!?!」」」

扉を蹴破ると、確認したのは大型対物ライフルを構える生徒が一人と清掃業者が三人。話し合いは無用、先手必勝を決める。

「な、何よ貴方——」

「ダアツツツ!!!」

「——ぎつつつ?!?!」

先ず狩るのは扉の真隣にいた業者だ。背負いのマチェットを抜き、逆手に持ち替え太

股に二回、そして肩に突き刺し捻り抜いていく。

「な、何故二番目が——」

「次いつつ!!?!?!」

「——がつつ?!?!」

次なる標的は屋上の中央付近に佇む業者。血に染まり倒れ行く業者の懐から直ぐ拳銃を抜き取り数発撃ち込んでいく。それは胸、腹、足に着弾。更に弾丸が頭を掠め、また一人と倒れていく。

「ッ、このっ!!」

「——っ!?!」

瞬間、感じるのは持ち前の技能『危険察知』。其方を向くと生徒の真隣にいた業者が今にも拳銃を取り出そうとしていた。

距離は離れている。この距離では拳銃を当てる自信がない。遠距離武器は背負ったまま、構える前に撃たれる。ならばどうするか。

この一瞬のピンチ。しかし、彼は誰よりも自信がある特技を持つ。それは——。

「ダラ、アツツツ!!」

——投擲だ。

「——ぎゃはあつつつ?!?!?!?!」

彼はマチェットを業者に目掛けて投げ込んだ。

それは勢いよく回転し、見事に業者の持つ拳銃を弾き、肩へ深々と突き刺さり倒れる。残すは今回の大元——暗殺者。

「つー、こんのおっ!!」

暗殺者は急遽邪魔者が入った事に思考が停止していたが、そこはプロであろうか。直ぐ様に対物ライフルを彼に向け始めていた。

その大型対物ライフルは重く、取り回しが非常に悪い。故に、暗殺者は構えに時間が掛かる。

これを好機と見た彼は直ぐに背負う遠距離武器——コンパウンドクロスボウを持ち、構え出す。

両者が構え、スコープ越しに相手を捉えたのはほぼ同時であった。

「死ねえつつつ!!!」

「てめえがあつつつ!!!」

ほぼ同時に発射された矢と大口径弾丸。それは対峙する二人の間を交差し——。

「ぐああつつつ!!!」

「きゃあつつつ!!!」

先に着弾したのは彼の方。暗殺者は咄嗟の射撃が故なのか、彼ではなくコンパウンド

クロスボウに命中。それは完全に大破し、それにより軌道がズレた弾丸は——彼の首を掠めた。致命傷とははいかかなかったが、右内頸動脈を傷付けてしまい血を撒き散らしながら倒れてしまう。

対する暗殺者には遅れて着弾。しかし、悪運が強いのか肩へと命中していた。深々と突き刺さるそれは抜けやしなく、銃を構える事が出来ない。彼と比べると比較的軽傷であつた。

「がつ……あ、あ、つ、ちくしょうが……!!」

「ああ、くそつ、くそつ！ 失敗したつ!!」

暗殺者の脳内には失敗の二文字が過る。現場を見られた、協力者は倒された、自身は負傷したが故に狙撃が出来ない。そこから導き出される結論はたった一つ。

そう、全力で逃げる事。

「ま、待てこのつ……つ……つ……つ!!?!?!?!」

未だに出血が止まる事の無い首元。逃すまいと暗殺者を追い掛けようとする彼だったが——それは数発の弾丸により阻止され、またしても倒れてしまう。その隙を突いて暗殺者は一目散に階段へと消えていく。

「(バ、バ)の……男の癖によぐも……!!」

その弾丸の出先は——肩にマチェットを刺したままの業者が構える拳銃から。他の

業者よりかは比較的に軽傷であった彼女は鬼の形相だ。殺意を剥き出しにしている。

「ごろぞ……！……ごろじでやる……！！」

「ぐ、ぐっそ……！！」

小口径弾が故、ISスーツを貫通する事はない。しかし、衝撃によるダメージによって彼は踞る事しか出来なくなってしまう。

勿論、業者は直ぐに気づく。となれば――。

「ISスーツを着てるのね……。だったら……！！」

彼女が狙うのは頭部一点。ISを展開される前に確実に殺さなければと彼に近づいていく。

貴重な男性操縦者を殺す？ 頭に血が上り激昂してしまった彼女には何を言っても無駄だ。

至近距離まで近づいた彼女は銃口を彼の眉間に押し付けた。このままでは死ぬのはシャルロットではなく――彼自身だ。

「それじゃさよならあつつつ！！」

「ごんのクソアマがあつつつ！！」

腕が消えているのだと彼は言葉を失う。

その時だった。右腕に違和感を覚えたのは。

「……………なっ!?!」

違和感の正体。それは右腕全体に纏まり付く、謎の装甲。ISの腕部装甲とは違う、明らかに人体にフィットした外骨格の様な代物。そして右手に握られているのは青白い紫電が走り、付着した血を蒸発させている鋭利な刃物。

——対人近接武装『HF・MACHETE』——。

「あああああっつっ!!」

「っ!?!」

混乱する最中、顔を上げると悲鳴に近い雄叫びを上げて拳銃を取ろうとする彼女は。彼は混乱する頭を振り払い直ぐ様接近、彼女の両足を一振りで斬り飛ばして残りの左腕も斬り上げで飛ばす。

四肢は全て切断。肉だるまと化した彼女はもう何も出来やしない。完全に再起不能だ。

「ぎあああああっつっつ!?!?!?!」

「はっ……はっ……。いったい何だつてんだよ」

屋上で悲鳴が飛び交う最中、彼は自身の変わり果てた右腕に注視する。

装甲で覆われた謎の右腕に、あまりにも切れ味が良すぎる刃物。感覚からして I S ではない何か。これはいったい何なのだろうと目を見据えると、それ等は光の粒子となつて消える。やはり I S なのではと疑問が尽きないでいた。

「……それよりも」

肝心の暗殺者を逃がしてしまった。恐らく、既に校舎から出ている事であろう。呆けている場合ではない。一刻も早く追い掛けねばならない。

しかし、それに関わらず彼は落ち着いていた。まるで今後の展開がわかりきつてるかのように。

首元に止血剤を当て包帯を巻きながらゆつたりと屋上を歩き、辺りを見渡すと全力で走っている人影が。目を凝らすと肩には一本の矢が刺さつたままの生徒。間違いなく例の標的——暗殺者だ。

「逃がしはしねえ、ぞつと」

そう言うなり彼は懐から羅列されたスイッチを取り出し、それ等を数ヶ所押した。その意味とはいったい何なのか、知るのは彼だけだ。しかし、それは直ぐにわかる。

「さて、向かうか……んん？ ……ほー」

場所は変わり、I S 学園校舎外。

「はあっはあっ……」

暗殺者は全力で走った。一先ず向かう先は唯一の退路、モノレール駅。泳ぐ事も考えだが直ぐに捕まるのがオチだ。協力者は現在足止めしている筈、ならば本土に逃げるのが得策だと考える。

「クソ、クソオツ!!」

失敗してしまった。長年と待っていた任務が。これでは面目丸潰れ、大事処の話ではない。政府からは信用を失うだろう。大事な任務を失敗してしまったのだから。

「ぐ、ぐうつつ!!」

力いっぱい矢を握り締めて、漸く抜けたそれを捨てて足に力を入れる。もう少しで、もう少しでモノレール駅。そこまで行って駅員を人質に取ればあとはどうとでもなる。屋上で拾っていた拳銃を携え、彼女はほくそ笑んだ。

「は、ははっ、はははっっ!!」

——しかし、彼女の思惑は叶わない。決して。

「——っっっ?!?!?!?」

突如として鳴り響いたのは、一発の乾いた音。その直後に彼女は両足に激痛が走り、地面へ転げ回ってしまふ。

「い、痛い! 痛いっ!! 痛いっっ!!」

いったい何が起きたのか、足に感じるのは痛みと焼け箸を刺された様な熱さ、そして皮膚に滴る液体の感覚。確かめるべく、視線を自身の両足へ向けると——。

「何が……っっっ?!?!」

——彼女の両足には、無数の穴が出来ていた。

乾いた音、無数の穴。それによって彼女は一つの結論に辿り着く。

(散弾……!!)

そして同時に気づく。道端にある木の根本から見える、うつすらと漂わせる硝煙を。それを見た彼女は戦慄し、ある一つの兵器を思い出す。

——指向性散弾——。

簡易に作られたその機械にはセンサーが一つ。そして上部には一本の筒と後部にはハンマー。

そう、これこそが隆道が組み立てていた機械の正体。『髑髏』が愛用する、獲物を逃さない実包を用いた狩り道具の一つ。所謂——指向性地雷。

彼は獲物の逃走経路を予測し、これを至る所に設置していたのだ。つまり所、彼女は地雷原に足を踏み入れてしまっていた。

「そんな、そんなあ……——ぐうつ?！」

絶望の最中、自身に襲い掛かって来たのは肩への激痛。眼球だけの動きでその方を向くとそこには一本の矢が。その出先には——。

「逃がさねえぞ、このクソアマがあ……!!！」

——コンパウンドクロスボウを構えた、夥しい程に血塗れの隆道。

彼女は混乱し、そして恐怖した。破壊した筈の武器を何故、彼が持っているのか。それよりも、足止めはどうなったのか。それ等が彼女を一層に震え上がらせる。

このままでは殺される。そう感じた彼女は咄嗟に拳銃を向けようとするが——。

「——があつつつ?!?!?!」

——その直前に凄まじい速度を放つ矢は拳銃を破壊。手に着弾し、そのまま肩にまで貫通する。

「……ふーん。中々のもんだな、これ」

——対人射撃武装『H.V. CROSS BOW』——。

「精度良し、威力良し、と」

破壊されたコンパウンドクロスボウより性能が高いであろうそれは正に彼にピッタリの武器だ。何故、この様な武器が出現したかは彼自身理解は出来なかったが、今は良しとするかと深く考えはしなかった。

それよりも目の前の『獲物』が最優先。目の前まで近づいていき、それを彼女の顔面に向ける。

「……どうだよ？ 狩る側のつもりが狩られる側だった気分つっーのは」

「ぐ、ううっ……。い、命だけは……！」

「……はあ。……何も、何も知らねえ人間の命を取ろうとしておいて……!!」

絶対にこの畜生を許す訳にはいかない。一切の何も知らない少女の命を狩ろうとしておきながら醜い命乞いをする彼女には慈悲は無い。

よって彼は——。

「てめえが死ぬえつつつ!!」

「ひいつつ?!?!」

——トリガーに指を掛けた。

「そこまでだつ!!」

「!」

トリガーを引こうとした、その瞬間。後ろから聞こえるのは一人の女性の声。其方へ振り向くと仁王立ちの女性——千冬が一人と拳銃やアサルトライフル自動小銃を構える教員が数名程並んでいた。

「よお、ブリュンヒルデ。それにクソ教師共」

「柳、もうこれ以上はやめるんだ……!」

「ああ? コイツを生かすつてのかよ……!!」

「尋問の必要がある。あとは我々に任せてくれ。どうか、どうか頼む……!」

「織斑先生?!?」

頭を下げてまでの悲願。教員の目があるうと、千冬は彼の説得に全力を注いだ。

これは彼の為でもある。人の目など関係無い。人殺しをさせたくないが故の行動。

「……はあつ。くそつたれ」

彼女の悲願に彼は、何故か頷くしかなかった。普段ならば一切戯れ言を聞く事はしなかったにも関わらずに。それは良心なのか、または別の何かなのか。それは彼自身ですらわかりはしなかった。

「一つ、頼みがあるんだけどよ」

「……何でも言え。出来る限り叶えて見せる」

「俺が動いた事、デユノアに言うんじゃねえぞ」

「何っ!? これはお前のおかげ——」

「んじゃ、あとはよろしく——」

手持ちのスイッチを全て切ったその瞬間、彼の武器は光の粒子と化し消滅、同時に倒れる。

三日以上も飲まず食わず、更には頸動脈損傷の多出血と被弾によって既に限界が近かったのだ。本来ならばとくに倒れて動けない筈であった。

「っ!? 至急彼等を特別医療室へっ!」

「りよ、了解!」

早急と教員に運び込まれていく血塗れの二人。その地面には血溜まりだけが残っていく。

かくして、彼の狩りは幕を下ろした。

「それは……本当、なんですか……？」

「ああ、本当だ。此方の問題は我々で片付けた。残すは向こうだけだが、気にする必要は無いぞ。お前はもう自由だ」

「う、うう……ぐずっ……」

「……いずれ連絡が来るだろう。その時は電話に出てやるといい」

「あ、りがとうございませす……！」

「……」

「……？ あ、す、すみません。つい……」

「いや……。さて、制服は新たに用意しようか」

月曜。一年一組の教室。

朝方のSHRには隆道は勿論、シャルロットの姿さえも無かった。

「……………」

一夏は不安に駆られた。昨日からいなくなった彼女はいつたいどうしたというのだろうか。もう一度ぐるりと見渡しても二人はいない。それが、より一層彼の不安を増幅させていた。

まさかとは思うが男装問題が関係してるのか。それならば彼女はもうここに来ないのではないかと思考が渦巻いていく。

どう考えてもマイナス思考に陥ってしまう彼。やはり一生徒ではどうしようもなかったのかと、気分は絶不調となつていった。

と、そこへ——。

「おい、何しけた面してんだ」

「へあつ!? や、柳さんっ!?」

「おう、柳さんだ」

彼の頭をぽんぽんと叩く青年——隆道の姿。

一夏を含めた全員が目を見開いた。ずっと姿を現さなかつた隆道が漸く教室にやつ

て来たのだ。機嫌も悪くなく、雰囲気も穏やかである様子から体調は良くなったのだらう。

「た、体調は——」

「体調？ ……ああ。見ての通りだ」

そう言いながら大丈夫と言わんばかりに身体を見せ付ける隆道。これには不安の真つ只中だった彼も安堵の表情を浮かべるが——。

「良かった……あつ!? 柳さんつ！ 昨日からシャルルが——」

「落ち着けて。あいつはいるから安心しろよ。教師共と一緒に来る筈だ」

「い、いる？ 一緒に？」

「ああ。……ほら、噂をすれば、な」

「へっ？……ああ」

隆道に促され、彼を筆頭に全員が扉へ向いた。そして、そこに立つ人間を見て生徒達は一斉に騒がしくなっていく。

「今日は、ですね……皆さんに紹介したい生徒がいます……。既に紹介が済んでいると言いますか、ええと……」

「挨拶をしろ、デュノア」

「はい」

教師が二人に、スカート姿の生徒が一人。隆道を除いた生徒全員が彼女に対して言葉を失った。それを余所に彼女は笑顔を見せて言葉を放つ。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

コスモスが、咲いた。

第四十話

かつて、デユノア社にはシャルロットの排除を目論む悪党共がいた。

次期に大いなる権力を持つであろうデユノア社社長——アルベールの娘、シャルロットの暗殺。悪党共は富、権力を手に入れるその第一歩としてそれを決行しようとしたのである。

自らの為に他者——しかも幼き子供をを亡き者にしようとする畜生共。この世界は、人が思っている以上に悪意で満ち溢れている。何処にでも。

しかし、アルベールはその畜生極まりない悪行を早く察知していた。故に、母親を失い一人となった彼女を引き取りISに乗せ、非公式のテストパイロットとして扱った。

偶々適性が高い故に乗せた？ 違う。世界で最も保護された存在とする為、ただそれだけの為にIS操縦者にしたのだ。適性は一切関係無かった。

元々は自分が蒔いた種だ。愛人を作り、しかも子供を生ませてしまうなど無責任にも程がある。それは紛うことなき罪だ。許される事ではない。

しかしだ、生まれてきた子供に何の罪もない。幼き子供を自分勝手に消そうとする畜生の思い通りにさせるなど、彼は絶対に許しはしなかった。

悪党共だけではない。もう一つの問題。それは親族による悪意ある圧力である。

突如と現れた彼の実娘。時期に大いなる権力を持つであろう可能性が高い彼女に危機感を感じた親族はあの手で潰そうとしていた。

これを見兼ねた彼は彼女を別邸で生活を強要。敢えて突き放す態度をする事によってある程度の圧力から逃す事となる。

本当は愛でたい。自分の娘を。しかし、それが悪意によつて潰されるならば——突き離す事しか方法が無い。それが、彼が悩みに悩んだ末に決断した苦肉の策。苦渋の選択であつた。結果、彼女を擦り切らせる寸前にまで追い込んでしまう事となつた訳だが。

しかし、当然の事ながらそれだけでは不十分。突き放した所で悪党共はあらゆる方法で排除するだろう、親族は圧力を掛けるだろう。必ず節穴を狙うに違いない。権力を、人材を全て駆使して。

故に、確実に安全である場所へ移す事が必要であつた。悪党共や親族から確実に、安全に逃す為に彼が選んだ先が——『あらゆる法の適応外』であるIS学園。そこへ彼女を送り込む事が最善策。悪党共や親族からだけでなく、国からも逃す事が出来るそれに、彼は目を付けた。

引き取ったその日から計画していた、娘を守る唯一の方法。彼女を入学させて卒業のその日までに事態を必ず終息させると、彼は意気込んだ。

その安易な考えは入学直前にぶち壊される。

悪党共は予測していた。必ず娘を安全圏である I S 学園に入学させると。

流石の彼等であつても I S 学園に手を出せない。入学させてしまえば最低で三年間は無事となる。そこで彼等が考えた案とは何か。

そう、外側から不可能なら内側から。つまりは—— I S 学園に潜む暗殺者に依頼する事であつた。一部の政府と人間と繋がりを持つ悪党共は巨額の金等をつぎ込みシャルロットの暗殺を依頼する。

そしてもう一つ、誰も予測出来なかつた事態。それは男性操縦者の発覚だ。これによつて一部の政府は彼女を利用する事にした。

元々は暗殺対象、粗雑に扱つても心は痛まないと彼女を代表候補生に仕立て上げて男装を強要、データ奪取をする様にとアルベールに指示。元々予算等で脅され、既に後が無かつた彼は従つてしまう。そして転入直前で彼は知らされる。自分の娘が使い捨て——どの道を歩んでも暗殺されるという事に。

これが、シャルロットが遅れて転入した真実。

父親が男装とデータ奪取を強要？ 違う。

全ては悪党共が目論んだ、悪意極まる悪行だ。

しかし、それはもう終わった事。今やフランス政府は混乱に陥っている事だろう。デュノア社も大慌てに違いない。それは避けられぬ事だ。

しかし、アルベールはもう娘を気に掛ける必要は無い。残すのは悪党共の排除、そして第三世代の開発に全力を注ぐのみである。

それ等をここで語る必要は無い。何れ悪党共や荷担した一部の政府は全て排除される。

シャルロットは——もう自由だ。

「本当に感謝しかない。ありがとう、学園長」

『我々は何も為す事が出来ませんでした。全ては彼……二番目のお蔭です』

「二番目が……？」

『ええ。我々に頼らずに、たった一人で阻止を。自らの危険を顧みずに、です』

「……まさか。そんな、事が」

『しかし、それが事実です。……デユノアさん、貴殿の娘さんは真実を一切と知りません。我々が暗殺を阻止した……そういう事となっています。彼が望んだ事です、どうかこの事は内密に』

「……わかった。しかし、何故二番目が？」

『それは我々にもわかりません。それを知るのは彼自身だけです』

「そうか。何れにせよ、いつか礼を言わねばな」

シャルロットが男装を止めて本来の姿で現れたその日は、それはもう大騒ぎであった。

「男装を止めても囲われるのは相変わらず、か」

「仕方無いですよ。突然の事ですし聞きたい事が多過ぎですから」

生徒達に囲われる彼女を遠くから覗く隆道達は他人事の様子に呟いていた。彼女としてはこの状況を助けて欲しいと願う所であったが、こればかりはどうにもならない。自分達は無関係を貫いた。頑張れシャルロット。

「男性操縦者のデータ奪取の為に男装を強要か。どこにでも悪党はいるもんだ」

「俺もついさつき聞いたんですけど一部の政府が強要したんですよね。家族を脅して……全く酷い奴等ですよ」

「……そう、だな。まあ、自由になったんだから良かったじゃねえか」

シャルロットの男装に関しては、一部の政府が『男性操縦者のデータ奪取の為に強要、でない」と親族を潰す』。そういう事になっている。暗殺に関しては一切と広められなかった。一生徒が学園内で暗殺対象になっていたなど知られてしまえば余計な混乱等を招いていたであろう。当然ながらこの件は内密に処理される事となった。

暗殺計画の全貌を知るのは極一部の教員と生徒のみ。彼女は暗殺計画自体は知れど、その全ては知らない。教員が暗殺を阻止した、それだけを知らされている。

「……俺、何も出来ませんでした。結局は教師に頼って……」

「ばっかお前。お前が支えたから今まで折れずにいられたんじゃないか。そもそも俺達

がどうこう出来るもんじゃなかったんだ、そうしょげんな」

「……ありがとうございます」

「ん」

そう一夏を宥めながらも彼は、今も尚生徒達に囲われている彼女を見やる。困惑はすれど、そこには笑顔が垣間見えていた。

そうだ、これでいい。世の中には知らない方が良い事もある。これが正にそうだ。自分が暗殺を阻止したなど彼等に言う必要は無い。彼女に感謝されたくてやった訳ではないのだから。凶器を、暴力を振り回す自分が感謝される資格など無い。

現に今、一部の教員からは危険視されている。彼女達のその目はまるで猛獣を目の当たりにしたかの様な眼差し。言うならば怯え。犯罪者相手とはいえ、生活に支障を来す程の事を仕出かしたのだから当然と言えば当然。何人かは拘束すべきだと抗議したとか。今もこうやってのうのうとしていられるのもデータ採取が優先なのか、若しくは別の何かか。それを知る術は無い。

しかし、彼はこれを一切全く気にしなかった。気にするだけ無駄、自分がやるべきだと判断したから実行した、たったそれだけの事。人目を気にする様な人間だったなら今日まで生きていない。

ISに乗る事自体は未だに嫌悪感が残るが、今更喚いた所で何も変わりやしない。

データ採取の為に存在する実験台として生きるしかない。自分の事は今更ながらどうだっつていい事だ。

「……………」

彼女の男装問題は消えはしたが、同時に新たな問題が生まれた事に次第にと顔付きが渋くなる。それは自身の持つ専用機『灰鋼』についてだ。

二日前——暗殺者を強襲した際に使用した武器や指向性散弾は当然と全て没収された。しかし、『灰鋼』から展開された二つの対人兵装に関しては全く以て謎。それしか言いようが無かった。

例の装甲もそうだ。ISのそれとは全く違った、人体に合わせた右腕。調査の為に展開を試みるも『作成中』と表示されるのみ。どういう訳か一向に展開が不可能であった。対ISではない、明らかに対人を想定した兵装。この『灰鋼』は謎だけが深まるばかりだ。

使い慣れたマチェットに、そしてクロスボウ。もしも、この専用機が明確な意思を持ち、自身に合った武器を作ったというのならば——。

「……………」

——道具の癖に。

——兵器の癖に。

——悍しい。

——気持ち悪い。

——反吐が出る。

「……柳さん？」

「んあ？」

「なんか、凄い顔してました。どうしました？」

「いや。つかお前、今まであいつと一緒の部屋だったんだからそろそろ馬鹿共が来る
だろ。悪いが俺は退散するからな」

「……あつ！」

その後、一夏の前に生徒達が雪崩れ込んで来たのは言うまでもない。

シャルロットの騒動から二日後の水曜。

放課後となり次々と生徒達が教室から出ていく最中、未だに席で項垂れている生徒が一人。

「なんとこの事だ……」

そんな事を呟くのはポニーテールの少女——箒である。彼女の心中は些か穏やかではなかった。穏やかではない理由、それは来週の月曜から開催される学年別タッグトーナメントに関するしている。

そう、学年別タッグトーナメントだ。

タッグ戦となれば当然ペアが存在する。問題はそのペアについてであった。

遡る事、トーナメント仕様が変更された当日。意中である一夏にどういう風にペアを誘うのかと乙女心よろしく考えていた所、夜はもうどつぷりと更けていた。あまりにも

考え過ぎであつた。

これに焦つた彼女はせめて日付が変わる前にと彼の部屋を訪れたのだが、待つていたのは――。

『悪い。もうシャルルと組んじまつた』

――無慈悲な返事であつた。

それからどうしたものかと考え、ならば同室の生徒ならばどうかと聞いてみる事に。

その生徒の名は鷹月たかつき 静寐しずね。生真面目な性格とは裏腹に、くだらないジヨーク本が

好きな彼女とは半月にも満たない同室だが親しくなつた生徒だ。

ぶつちやけ言つと、親しい生徒は静寐を除けば非常に少ない。故に、ペア組みをそれはもう祈願の如くお願いしたのであるがそれは簡単に碎かれる。

『ごめんね、篠ノ之さん。私もうペアいるの』

返つて来た返答はまたしても無慈悲であつた。しつかり者である静寐はタッグ戦と知つた直後にペアを組んでいたのだ。この女、全く隙が無い。

どうしたものかと考えている内に締め切り期日は過ぎて、結局は抽選でのペア決め。しかもその相手はよりによってラウラ・ボーデヴィツヒ。

「……はあつ」

そう、彼女のペアとなつたのはラウラなのだ。ここ最近で隆道と私闘した、あの少女

と。聞けば一年で抽選ペアになったのは彼女とラウラだけであつたとの事。これが決定したその瞬間、彼女は崩れてしまった。最悪の中の最悪である。

確かに戦力としては十分——いや、十二分だ。目的こそ『一組の誰かが優勝』故に問題は無。

だがしかし、二人は全くと言つて良い程に意見が合わない。何せ、ラウラは彼女の話聞く気は最初から無いのだから。

ペアが決まつた際一度だけ口を開いた事があるのだが、その時にラウラが放つた言葉が——。

『邪魔をしなければそれでいい』

——これだ。あまりにも不遜である。

それに関しては彼女自身あまり気にしてない。反りが合わない人間など幾らでもいるから。今更気にしてどうするといふのだ。そういう考えだ。

では何故、彼女は穏やかではないのか。それはある感情が上回つたから。その感情とは——。

——同族嫌悪。

力が全てだと思っっているその姿は——かつて、自分がしてきた姿そのものに見えていた。

それはまるで鏡。暴力の限りを尽くした過去の醜態を見せ付けられている様な気分となり、彼女は心底堪らなくなっていた。

「……………」

ふと、時刻を見れば予約していたアリーナ使用の時間まで残り僅か。行かねば訓練機の操縦時間が減ってしまう。一夏との時間が減ってしまう。

と、思いはするもの——。

「…………やる気になれん」

今日は到底訓練をする気にはなれないでいた。キャンセルして空いた枠を他の生徒に譲るか、そんな考えが頭を過っってしまう。

元々が好き好んでISに乗っている訳では無い。全ては一夏と一緒にいたいから、それだけだ。なのに今日はそんな気分とはなれない。マイナス思考が渦巻くその最中——。

「おい」

「はいいつつつつ?!?!?!」

「うおっ。…………なんだよ」

「あれ? ……や、柳、さん?」

完全な無防備状態であつた彼女は唐突な声掛けに飛び上がり絶叫。直後に我に返り、顔を上げると此方を見下ろす隆道の姿。

いつも通りの硬い表情。彼の事に關しては今になつても全く以てわからない。女性不信である筈なのに何故、自分には普通に接するのか。

女性不信といえばシャルロットもそうだ。男装して彼等を騙していたのに、どういふ訳か普通に接している。今では彼と普通に接する事が出来る女性は自分とシャルロットのみだ。これには彼女だけでなく皆が困惑した。特に――。

『どうしてですの……。何が違うんですの……』

――セシリア本人は。

何故、自分は無視されて彼女達は普通なのかと困惑処か混乱に陥つていた。

全く以てわからない。彼のその心が。

「つたく。織斑といい、デュノアといい、お前といい……何かしらしよげてる奴ばつかな。予約まで時間ねえぞ、いつまでそうしてるつもりだ」

「……私は、今日は――」

「さつさと行かねえと織斑と一緒に時間減るぞ。王子様との時間がな」

「なっ!?!」

どきりと、彼女の心臓が跳ねた。まさかバレているのかと彼女は勢いよく立ち上がる。

「わ、わわ、私が、い、いち——」

「ほんつと分かりやすいな、お前」

「〜っ!」

彼には完全にバレバレであった。というより、何故バレてないと彼女は思ったのか。わからない人間など朴念仁の一夏くらいであろう。わかるなという方が無理である。

完全にしてやられた。顔を真っ赤にする彼女は正に林檎だ。このままではからかわれてしまう、何としても普段通りの態度に戻さねばと猛必死になる彼女。それを見やる彼が放った言葉は——。

「氣い晴れたか?」

「え? ……あ」

彼女は気がつけば、心の奥底にしつこく渦巻く嫌な感情は消えていた。

はつと顔を見上げると彼と目が合う。その瞳はとても黒く、とても暗く、とても真っ直ぐで。

——ただ、またこの目だ。

以前も見た、此方の気持ちを伺う様なその瞳。そこには負の感情は一切見えはしなかった。何を考えているのか掴めない、わからない。その目を見る度にいつも引つ掛かりを感じる。それを感じると、次第に一夏に対する胸の高鳴りは収まっていった。

この引つ掛かりはなんだ。この感覚はなんだ。この感情は——いったい何なのだ。

「人の色恋沙汰に首を突つ込む気は更々ねえよ。……んで、どうすんだ。行くのか行かねえのか」

「……ありがとうございます。行きましょう」

「ん」

しかし、時間はたつぷりとある。彼から感じる引つ掛かりは何れわかる筈だ、焦らずにいこう。そう彼女は気持ち切り替えた。

勿論、一夏の好意も忘れずに。

時刻は進み、第二アリーナにて。

「はい？ まだ来れないと？」

「ああ、頼まれ事をされたらしい。つたく、そうはいはい返事すなつてんのに……」

「い、ち、かあ……!!」

現在、隆道は『灰鋼』を、箒は『打鉄』に搭乗してステージの隅にて立ち往生。そこには一夏とシャルロットの姿は無かった。

一夏は雑務を終えて此方に向かおうとした所、見知らぬ生徒に頼まれ事をされたとの事。それを終えてから向かうそうさだ。

シャルロットに關しては大した事情では無い。日用品買い出しの為に外出しているだけである。よつて今回は不在だ。

シャルロットは別に良いとして、問題は一夏の方である。折角気持ちを切り替えてやつて来たというのに当の本人がいらないとはどういう事だと。箒は先程とは別の意味で顔を真っ赤にしていた。

「そう怒んなよ。あいつは別に浮気してる訳じゃねえんだからよ」

「う、うわっ……!! ですから私はただ……!!」

「そういうところだつーの」

顔を真っ赤にする彼女を余所に彼は考え出す。一夏が直ぐに来ない事には致し方ない。どうするべきかと彼は悩んでいた。

一夏もない、シャルロットもない。残すは自分と箒のみ。許可無しの戦闘行為は禁止されている以上模擬戦は不可だ。一夏が来るまで何か暇でも潰すかと彼は武装を展開した。それは数ある後付武装の中でも最大級の威力を持つ近接兵装、『鋼牙』。

「うわっ。それって……」

「ああ。……こいつな、使っていく内に妙な事に気づいたんだよ」

「妙な事……?」

「以前……四月の頃だな。俺がこいつの空撃ちで思いっきり吹っ飛んでたのは覚えてるか? でも今はこうやっても——」

そう言つて彼が繰り出すのは軽いジャブからの射突。爆発音と共に二本の杭は突き出され、巨大な二つの空葉莢は宙を舞う。彼はそこからブレはされど吹き飛びは疎か、後退りすらしなかった。

「あ、あれ?」

「な?」 反動軽減してんのか何かは知らねえけど全然吹き飛ばねえんだ。何度つ、やつてもなつ」

そう口に出しながらの連続射突。そうする度に辺りは風圧で煙が舞い、空葉莢は転

がっていく。それでも彼は微動だにしなかった。

本来ならパワーアシストを用いても決して抑え切れない反動。熟練者すら扱いに困るソレを彼は何故、こうも簡単に使い熟しているのか。故に、彼女はほんの少しだけその武装に興味が湧いた。

「……あの、私も試してみても良いですかね？」

「……いつを？ ……ほら。つーか、大丈夫か？」

その巨大過ぎる武装を外し彼女に渡す彼。ソレを装着する彼女は何処かおぼつかない足取りだ。

何気なく『鋼牙』を渡した彼であったが、実の所不安げであった。何せ、使い始めた当初はどう踏ん張っても吹き飛んだのだから。自分がそうなら彼女はそれ以上となるに違いないと。

『突き』ならば剣道で経験ありますので……。では、いぎつつつ!!!」

「いや、それ関係ねえ——」

彼の警告も虚しく、彼女は『鋼牙』を放った。その結果——。

「——あああああつつつ?!?!?!」

「あーあ」

——案の定盛大に飛んだ。それはもう紙吹雪の如く吹き飛んだ。

彼女は爆発音と共に後方へと爆速で吹き飛び、ボウリングの如く転げ回っていく。本人は突然の吹き飛びに大混乱、それを見守る彼は一夏も盛大に転げ回っていたなと思いついて返している。この男、不安げながらも結構呑気にしていた。

「くっつ!!」

「結構いったな。織斑より飛んでたぞ。記録更新おめでとさん」

「そんな記録いらないうすつ! とういか何なんですかこれつ!! 無理ですよこんなのつ!!」

あまりにも不名誉である。誰がこんな駄目駄目な記録を欲しがるのか。誰も欲しがらない。

というよりそもそもだ、彼女の反応が正しい。おかしいのは彼——いや、『灰鋼』だろう。普通は微動だにしないなんて事は決して有り得ない。いったい何故なのだろうか。

その理由は単純明快。実はこの『鋼牙』、ある操作をするだけでほんの多少はマシンになるのだ。

その操作はP I Cの手動制御。自動制御のそれを手动制御に切り替える事によって細やかな動作を行う事が可能だ。要はそれを『鋼牙』に応用しているのである。

射突するその瞬間にだけ手动制御を起こし反動を極限に抑制。そうする事で漸くこの武装を扱う事が出来る。そう、実はこの武装は自動制御だと上手く扱う事が絶対に不

可能なのである。

では彼が手動制御を？ 答えはNO。そんな高度な技術など持ち合わせてはいない。当然の事、その制御を行っているのは『〇一九』が作り上げた『ハイブリッド兵装制御システム』によるもの。これによって『鋼牙』は安易に扱える様になったのである。彼の技術が上がった訳ではなかった。

勿論、彼はその事実を知らないし、他の誰しもまだ知らない。仮に知った所で何も思わないか、更に悍しく感じるか。『〇一九』の思いが届く日は何時になる事やら。

「よくこんな使い熟せますね……。私には無理です」

「知らねえよそんなの、いつの間にかこうなつてんだからな。ったく、俺にも何が何だか

——

——愚痴を溢した、その時。

——それは唐突にやって来た。

「——つつつつ!?」

「うわっ!」

「!?!?!」

突如として感じた脅威と、目の前に表示されたロックオン警告。彼は彼女を突き飛ばしその場を回避。先程までいた場所には弾丸の雨が横切る。

「な、何をっ——」

「篠ノ之おつつつ!!!」

「——ぐうっ!」

それもつかの間、今度は彼女に弾丸の雨が降り注ぐ。自動防衛により大事には至らなかったが、それなりのダメージを受けてしまう。

決して流れ弾では無い、明らかな攻撃だ。その弾幕の出先は——。

「——っ!? 何のつもりだお前等……!!」

「[[[[[……]]]]」

辺りを見渡すと訓練機に搭乗する生徒が六名。いつの間に二人を囲う様にして佇んでいる彼女達はそれぞれ武装を携え此方を睨んでいた。

ある者は中距離兵装を、ある者は近接兵装を、ある者は——その両方を。

その目は、明確な『敵意』と『憎悪』。そしてもう一つは彼自身が良く知っている——。

「やっちやええつつつ!!!」

——『悪意』そのものだ。

場所は変わり、校舎にて。

「ありがとう織斑君。一人じゃ重くて……」

「良いですよこれくらい。助けになるなら何よりですって」

クラス代表の雑務を終えた一夏は、生徒と二人で山積みの荷物を運んでいた。その生徒の名前は知らない、学年もわからない。しかし、振る舞いからして上級生だという事は察していた。

頼まれたからには無下に出来ない。力仕事は男の自分がやらなくてはと、そう彼は

思っている。それ故にすんなり頼み事を了承した。決して女性を下に見てる訳ではない。

「それで……何処まで運べば良いんです？」

「ああ、こつちこつち」

そう連れて行かれたのは人影を感じない校舎の奥側、行き止まり付近にある部屋であつた。

殺風景。その言葉が似合つてしまう程に。

「……？」

「到着」。その荷物はあそこに置いておいてね」

そう言つて生徒が指差す先は、部屋の隅。それに関しては何も思わず運んだのだが、置いて直ぐにある感情が生まれ始める。

ここは物置なのだろうか。入つてみると机も何も無い、がらんとした風景。こんな場所に何故荷物と思う彼だったが、あまり深く考えないでいた。

(何だ……これ……)

しかし、そんな彼をじんわりと何かが纏う。

それは胸騒ぎ、以前も感じた不穏な感覚。何か大事になる、そんな予感が身体を、脳内を通る。

「……あの、すみません先輩。友人を待たせてるので後は——」
その嫌な予感是最絶頂に達し、居ても立ってもいられなくなった彼は直ぐに立ち去ろうと生徒に向かって振り向いた。

彼は、固まってしまった。

振り向いた先には——。

迫り来るスタンガンの閃光と——。

——『悪意』に満ちた生徒の顔が見えた。

その部屋からけたたましい音が鳴り、廊下へと響き渡る所に少女が一人、静かに歩いていた。

サイドテールの髪型をした、一見すると無改造である制服を着る彼女は人気の無い所
でいったい何をしているのか。

「……あーあ」

彼女から漏れたのは腑抜けに抜けた声。それと同時に足取りは速くなり、懐へ手を伸ばし弄る。

そこから取り出したものは――。

「……イヒヒッ」

――一丁の小型拳銃。
リボルバー

「フンフフーン♪」

拳銃を弄りながらも鼻歌を歌う彼女――日葵。彼女の向かう先は――。

第四十一話

ある者は、彼等に希望を持った。

彼等の存在によつてこの狂った社会が変わつてくれる、変えてくれる。そう信じて。

ある者は、彼等に可能性を見出だした。

彼等を研究すればテクノロジーの大きな進化、その第一歩となる。そう確信して。

ある者は、彼等に危惧した。

彼等の発覚により自らにだけ与えられた権力が脅かされる事になる。そう萎縮して。

そして、ある者は——彼等に憎悪を抱いた。

I S 学園校舎、その奥部屋。

スタンガンを持った生徒は一夏に向けてそれを放った。改造を施して威力を上げた凶器を。

背後からの完全な不意打ち。振り向いた時点で目前に迫って来たそれは確実に避けられぬ攻撃。彼は受ける以外の選択肢が無かった。

——その筈であった。

「ぐ……………！　ぐぐ……………！！」

「なっ……………！　この……………！！」

——否、彼はそれを受ける事は無かった。

反応が非常に良かった故か、彼は咄嗟に相手の手首を掴み攻撃を阻止、目と鼻の先でその凶器は止まっていた。ほんの少しでも反応が遅れていたならばその顔面に受けて

いたに違いないだろう。ギリギリ、紙一重、危機一髪と言った所だ。

今も閃光を放つスタンガンを持つ生徒は驚愕の表情を出すも、諦めまいと腕に力を込めている。全力を以て、全体重を掛けて。表情は次第に険しくなり、それは『悪意』から『敵意』、そして『殺意』へと変貌。時間が経つにつれ次第に力が強くなっていく。

だがしかし、そこは男と女。単純な力比べなら当然の事、彼の方が勝っている。更に鍛えている故に負ける事は断じて無い。

「ぐ……………おお……………!!」

「この、バカ力が——」

「——だあつ!!!」

「——きやつ!!」

彼は生徒の、ほんの一瞬の隙を見つけ出した。その隙を突いて胴体に掌底、突き飛ばして大きく距離を離す。生徒は転げ回るもそれも一瞬、直ぐに体勢を立て直しスタンガンを構える。

「何の、つもりですか……………!」

「この、男の癖によくも……………!!」

「……………!」

「……………!」

気がつけば、凶器を向けてきた生徒の他に二人の生徒が側にいた。彼女達もリボンを外した状態で学年は一切とわからない。恐らくは——いや、間違いなくそれは意図的なものと彼は確信する。

「許さない……!! 絶対に許さない……!!」

「大人しくしてればいいものを……!!」

「この男風情がっ!!」

罵倒が飛ぶと同時に残りの二人も懐から棒状の物を取り出し、それを勢いよく振り出す。それは暗器の一つ——伸縮性の警棒。それを構える彼女達は徐々に距離を詰めていく。

唐突な一対三という状況。しかも、相手三人は全員が凶器持ち。幾ら鍛えている彼とは言えど、多人数の対武器格闘戦術など会得してはいない。喧嘩程度ならば経験はあれど、この様な状況など全く経験が無かった。

しかし、それが普通——当たり前なのだ。ついこの間まで平穏な日常を送っていた人間がそんな代物を持っていない。持っている筈が無い。彼は好き好んで戦う様な戦闘狂では断じて無い。

「どうして……!!」

彼は、何一つとして理解出来なかった。

何故、彼女達は此方に凶器を持っているのか。何故、彼女達は『殺意』を露にするのか。何故、彼女達は自分を襲うのか。

『男の癪に』

『男風情が』

その時だった。彼の頭に響いた言葉は。そして直ぐ結論に辿り着く。そう、目の前にいる彼女達こそ、この世界にへばり付く癌の一つ。

(女尊男卑主義者……!!)

十年足らずで浸透してしまった女尊男卑社会。どの国でも女性優遇制度が設けられ、女性は傲慢と化す。立場は最早雲泥の差、月とスッポンだ。

だが、彼自身そんな傲慢な女性はあくまで一部だと思っていた。女性の為に男性が働くのは当然の考え、その程度だと思っていた。多くの女性はある程度男性の社会的立場というものを認めてくれている、そう思っていた。

それは、氷山の一角に過ぎなかったのだ。

自分が浅はかであったと、彼は食いしばった。目の前で凶器を構える生徒達から滲み出るその『殺意』は本物だ。彼女達は此方を明確に『敵』として認識している。

「止めてくださいよ！ どうしてこんな!!」

「うるさい!! 私達を脅かす疫病神め!!」

「男がI Sに乗るなんて許さない!!」

「私達の敵がっ!!」

「くそっ……!!」

最早対話すら不可能。彼女達は此方の話を一切聞こうともしない。今も凶器を構え、ジリジリと接近している。危機的状况は変わらなかつた。

(どうする……どうすればっ……!!)

力任せに突破する事は不可能ではないだろう。しかしだ、絶対に攻撃を受けない保証など無い。しかも相手は女子。それが彼の行動に嫌でも制限を掛ける事になる。良心というストッパーが。

女性を殴った経験など無いし、したくも無い。そんなもの、ただの暴力だ。先程のは咄嗟の緊急だった故の行動だったが、もう一度出来るのかと言われれば怪しい。出来る自信が無い。

(躲して逃げるしかない!)

それが、彼が選んだ選択肢。三人からの攻撃を躲すのは容易ではないが殴るより遙かにマシだ。そう自分に言い聞かせて彼は身構える。

「さあ、覚悟し——」

三人が彼に襲い掛かる、その直前。

「——あ、つつつ?!?!?!」

「うわつつつ?!?!?!」

急激に部屋扉が開かれた。そしてそれと同時に聞こえたのは一発の銃声。それは部屋に反響、鋭い爆発音によって耳鳴りが発生し彼は耳を塞いでしまう。警棒を持った生徒も同じく身に身を竦んで耳を塞いでしまっていた。だが、スタンガンを持っていた生徒だけは——。

「い、い、っだ……?!?!?!」

「……?!?!」

注視すると、いつの間にもスタンガンは大破して辺りに破片を散りばめられていた。目の前の生徒は手を押さえ苦しみ悶えている。そこからは夥しい程の出血が。

それを見てしまった彼は瞬時に理解する。彼女は撃たれたのだと。

「——あ、あつつつ?!?!?!」

——瞬間、またしても銃声。今度は二発。

「……………」

そこには、これでもかと言う程に表情を硬くし拳銃を片手で構える少女——日葵が一人。

「え……………」

彼は固まらざるを得なかった。それは以前見たへらへらした表情でも、悪魔染みた悍しい狂った笑みでも無い、”無”であった。隆道と全く同じである感情の無い表情の前に身動きが取れない。

固まる事、約数秒。先に動いたのは彼女の方。彼女は懐から無線機を取り出し淡々と口を開く。

「フラワー・ガーデン、応答して」

『こちらFG4。今の銃声は日葵様のものですね』

「ええ、早急に伝えて。制圧は完了。場所は校舎三階奥部屋」

『了解』

無線機から聞こえたのは、これまた淡々とした感情の無い複数の声。必要最低限なやり取りを、彼はただ見ている事しか出来ない。

『こちらFG9。第二アリーナにて監視対象二名が襲撃を受けています。人数は六名。『過激派』と断定します』

「そう。介入は？」

『不可能。訓練機は全て借用済みです。教員の姿は未だ見えず。監視員も『過激派』の可能性大』

「……無能教師共が。散々忠告してやったのに。……各員、直ちに他教員へ報告。FG9はそのまま待機、監視を続行して。以上』

『了解』

淡々とした無線のやり取りも終わって無線機をしまう彼女は、興味ゼロなのか此方の方を見ようともしせず拳銃の葉莖を排莖、弾莖を込め始める。その一連の動作は素人でもわかる程に洗練されていた。間違いなく場馴れしているものだ。

現実味が全く無い、恐ろしい。彼はそれぐらいしか感じるしかなかった。

「ねえ、織斑君さあ」

「っ!? な、何だよ……」

思考が渦巻く中、唐突に声を掛けられた。我に返りそちらを向くと、彼女と目が合う。彼女の表情は硬いままであったが、発せられた言葉は聞き覚えのあるしまりない口調。この状況にも関わらず、場違いであるものに一層と不気味さを感じられる。

以前の事もあつて、彼は彼女に対し良い印象を抱いていない。故に、身構えて臨戦態勢を取る。最悪の事を考えていつでもISを展開出来る様に。

しかし同時に、彼女もISを展開したならば勝算はあるのかと不安に駆られた。ラウラを圧倒し、姉にも一撃を与えたのだ。自身がどうこう出来る相手ではないだろう。

彼女はいつたいたいどう動く。彼はこの現状を打破すべく、五感を極限まで研ぎ澄ました。

しかし、彼に掛けられた言葉は――。

「突つ立ってないでさっさと行つたらあ？　あとはこつちで処理するからあ」

「――へ？」

――全く予想だにしない言葉であつた。

あまりにも予想外であつた事に彼はつい間抜けな声を出してしまう。完全に鼻を挫かれた様な感覚に見舞われてしまつていた。

襲つて来る様子は一切無い。となれば、彼女がここに来た理由は――。

「聞こえたでしょお、第二アリーナでつてさあ。……篠ノ之さん達、襲われてるよお？」

「……!!」

その言葉を聞いた彼は直ぐに動き出した。

礼を言っている時間は無い、直ぐに彼等の元へ向かわねばと全身全霊で走り出す。自

身に纏う、その悪寒を振り払って。

自分が襲われただけの、人が撃たれただけの、この際どうだっていい。何より優先すべきは彼等だ。もう、あの時感じた嫌な思いはしたくないから。

彼は廊下を駆け抜ける。大切な仲間の元へ。

足音が遠退いていくその最中、それを見届けもしない日葵は硬い表情のまま。そこにはいつもの不気味な笑みは一切無い。全くの“無”であった。

様々な表情を持つ少女、篠原日葵。誰も彼女の考えている事がわからないであろう。

無表情で佇む事、約数秒。それは徐々に消え、感情が露になる。

「……………あーあ、ほんつと面倒」

次第に表情が変わっていった彼女であったが、それはいつもの笑み——ではなく心底面倒そうな表情。頭をボリボリかく仕草からして本当に面倒と思っているのだろう。誰が見ても一目瞭然だ。

「ぐ……………ああつ……………」

「……………さて、先輩方あ。間もなくここにせんせー達がやつて来ますう。貴重な男性操縦者を襲撃。どう足掻いてもお終いですねえ。お疲れ様あ」

だが、その面倒そうな顔は直ぐに切り替わる。いつもの異様な笑み。いつものしまりない口調。

しかも、今は片手に拳銃。普段のおちやらかした姿すら狂気極まりないのだが、それが加わるとより一層狂気が膨れ上がっている様に見える。もうそれは『得体の知れない何か』であった。

凄まじい程の場馴れ感を醸し出す彼女。一夏が感じていたソレは間違つてはいなかった。寧ろ、慣れている——というレベルでは最早無い。より高度な戦闘を多く経験している、その証明だ。

専用機持ちともなれば『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している。それは候補生でも当てはまる事だ。ISが展開不可能な状態に陥ろうと状況を打破出来る様に訓練されている。それは彼女も決して例外ではない。

つまり、少なくとも彼女は拳銃を使わなくてもあの状況を変えられる技能を持ち合わせていた。多人数を相手に出来る対武器格闘戦術を。

だが、それにも関わらず拳銃を用いて襲撃者を無力化した。それは何故なのか。

簡単な話だ。その方が手っ取り早いから。

基本的に他者の安否など一切気にしない彼女が態々格闘で相手を無力化はしない。面倒だから。拳銃の方が確実に、瞬時に無力化が可能だから。ただそれだけの事だ。深い意味は全く無い。

ましてやここはIS学園であつて、今回の発砲に関しては男性操縦者の防衛となる。咎められる事など何も無い。殺しをしていないだけ有り難いと思つて欲しいものだと、そういう考えなのだ。

彼女も隆道と同じく、敵に対しては一切の容赦が無い。やはり二人は血の繋がった兄妹だ。

「な、何……」

「うん？ なあにいい？」

苦しみ悶える生徒の一人は何かを言いたそうにしていた。話す事など何も無いが、少しでも興味を持った彼女は拳銃を構えつつ耳を傾ける。

「何で、なのよ……。貴……女は、女尊男卑主義此方側の人間でしょう……？ 何で、男なんかを……」

「……はあ、何を言うかと思えばあ。やーっぱりここは馬鹿しかないなあ」

「何、ですつて……？」

しかし、それを聞いた彼女は大袈裟にがつくりとする仕草を見せた。三人はこれに困惑と動揺を隠す事が出来ない。いったい何故なのだ。

女性権利団体会長の娘である彼女は此方側の筈だ。何故、自身の権力を脅かそうとしている男性操縦者を守ったのか。何故、此方の味方ではないのか、それが不思議でならなかった。

彼女達は一生と気づく事は無いだろう。それが彼女に対する失言だった事に。

「あのねえー、私は代表候補生なんですよお？ 任務つてものがあるのお。ギャーギャー騒いだり権力を振り回すしか能が無いお前達と違つてえ、とつてもとつても忙しいのお。わかるう？ 誰に唆されたのか知らないけどこんな事してめでたしめでたしになる訳無いじゃん？ 馬鹿あ？」

「つ……………」

氣に触る物言いだ、生徒達は一步も動く処か立ち上がる事すら出来ない。彼女は彼女でかなり余裕の現れだが、一定の距離を保つて拳銃を胸に抱き抱える様に構えている。奪う事は不可能だ。

そんな絶望的状况の最中、生徒達は圧倒的恐怖へと陥る事になる。

「それにさあ、一つ勘違いしてるよねえ」

「何——」

「私が女尊男卑主義者だと本気で思ってるの？」

「——えっ」

「……ああ、その様子じゃ本気で思ってたんだ。……はあ、こんな奴ばっかり」

三人は彼女の言葉が理解出来なかった。いや、したくなかったと言うべきか。

彼女は勘違いしていると確かに言った。だが、その先の言葉が全く頭に入らなかった。まるで、彼女は女尊男卑主義ではないかの様な物言い。

会長の娘なのに？ 代表候補生で専用機も所持しているのに？ 権力も実力も持っているのに？

「……どういつもこいつも、私を何だと思ってる。私を、この私を……!!」

「——ひっ!!」

そんな混乱する生徒達を余所に彼女の口調が、表情が、雰囲気もまたしても変わっていく。それはいつもの不気味な笑みでも、無表情でもない、隆道以上の『憎悪』と『殺意』を持つ——。

「いい加減鬱陶しいんだよ、このくそつたれ共。私がお前達と同じ人間だと思つたら大間違いだ」

——『得体の知れないどす黒い何か』だった。

同時刻、第二アリーナにて。

そのステージ内では、八機のISが激しい攻防戦を繰り広げていた。

だがしかし、それは四対四などといった平等なマルチ方式でも、バトルロイヤル方式でも無い。それを言葉に表すのならば——。

「防御態勢を崩すなよ篠ノ之っ!! 氣い抜くと終わりだっ!!」

「は、はいっ!!」

——二対六という、リンチだ。

「このくそつたれ共がっ!! おい篠ノ之!! エネルギーはっ!!」

「ま、まだ何とか。ですがこのままでは……!」

「さっさと倒れなさいよっ!!」

「男の癖にっ!!」

「目障りなのよっ!!」

唐突に始まった生徒六人からの襲撃。彼女達の一斉射撃と罵倒の嵐は二人を今も苦しめていた。

六機から降り注ぐ弾丸の雨霰。しかもそれ等は様々な角度からの射撃——オールレンジ攻撃だ。回避能力が高い隆道でも捌き切れない。その証拠に何発か被弾しエネルギーが減っている。殆どを『バリアブルシールド』が防いでくれてはいるがこのままではジリ貧、状況はお世辞にも良いとは言えなかった。それに、彼よりも箒の方が状況は宜しくない。

それもそうだ。彼女の機体は特殊兵装など搭載されていない、第二世代の『打鉄』だ。防御能力が高いとは言えど、これ程の集中砲火ではあまり意味を成さない。それに加えて、彼女の適性値は彼と同じく低い。思い通りに動けない彼女は徐々に被弾率が高くなってしまっていた。

「つーか監視員は何やってんだっ!! 明らかにおかしいだろこんなの——あつぶねっ!!」

「私闘は禁止の筈では——ぐうっ!」

彼等の言う事は最もだ。何故、監視員は未だに何も言っていないのか。何故、誰も止めに来ないのか。辺りを見渡してもそれらしい人物は一向に見えず、来る気配も一切感

じられない。

で、あるならば——答えは一つ。

(こいつ等も、監視員も『過激派』か……!! 俺と篠ノ之を狙ったつてのかよ……!!) 彼がその結論に迫り着くのは難しくなかつた。悪意を受け続けてきた者が故の。彼女達の目付きは正に『悪意』に満ち溢れた瞳だ。

彼の推測通り、生徒達も監視員も『過激派』。男性操縦者の存在が許せない、あまりにも身勝手な思想の持ち主達。ある者によつて唆され、彼がアリーナの予約する時間を事前に把握して全員で袋叩きにする予定であつた。それは所謂苛め。

そんな事してしまえば処罰を受けるのでは? 短時間で終わらせてさっさと逃げれば済む話だ。監視員側もこの日の為に様々な段取りを作つた。記録に残さない、目を離れたその隙に、言い訳はいくらでも作れる。

監視員もまた、悪意の塊であつた。

(なんで篠ノ之まで……!!)

しかし、それならば一つの疑問が残る。何故、自分だけでなく彼女も狙うのか。

自分だけを狙うのならまだわかる。男の癖にと今も罵倒を投げ掛ける彼女達は男性操縦者の存在が許せないのだろう。それはわかりきつた事だ。

しかし、それならば彼女は何も関係無い筈だ。何故、彼女達は彼女すらも攻撃するの

か。彼にはそれがわからなかった。

彼が理由を知った所で理解は出来ないだろう。何故ならば、それはあまりにも馬鹿馬鹿しくて、あまりにも下らなくて、あまりにも——残酷で。

彼女も攻撃を受ける理由、それは単純な事だ。ただ単に気に入らないから。

篠ノ之博士の実妹だから、一年の癖に訓練機の予約をいち早く取れたから、どうせちやほやされているから等という、有る事無い事を思っていたのだ。つまり、彼女への攻撃は単なる憂さ晴らしなのであった。

優等生である彼女達がそんな事する筈無い？ それは誤りだ。幾ら優等生でも思想、性格は絶対変わらない。根っ子に有るものが学力や才能では取れやしないのだ。それは誰にでも当てはまる。人間の本性は常に隠れているから。

それが見えるのは——『権力』を手にした時。

「いい、加減にしろおつつつ!!!」

「——っ！この、往生際の悪い……!」

弾丸の雨が降り注ぐ最中、痺れを切らした彼は悪足掻きとして腰装備の『焰備』を取り出し一人に向けて射撃する。しかし、そこから放つ弾丸は一発たりとも掠りすらしな

い。ただ彼女達を激昂させただけの全くの無意味、全くの無駄弾。諦めずに乱射するも一向に当たる事は無い。他の武装を呼び出そうにも集中砲火の真つ只中。そんな暇は有りはしなかった。

どう頑張つても、どう必死になろうと、彼女達に当たりはしない。いとも簡単に躲される。全くダメージを与えられない。

「ああ、くそっ……。掠りもしねえ……」

目の前の『敵』は間違いなく操縦技術が高い。射撃アシストを用いても巧みに躲されてしまう。射撃経験はあれど、これはIS戦。当然の事ながら勝手が違い過ぎる。ましてやこれで四回目の戦闘なのだ。技術は勿論、経験すらも桁違いだ。

操縦技術も、才能も、経験も、人数も、相手の方が上。二人が出来る事は——撃たれる事だけ。

「柳さん……!! これ以上はもう……!!」

「——っ!？」

気づけば、彼女の訓練機はズタボロであった。

射撃武器を好まない彼女はロクに反撃出来ず、ただただ撃たれ続けるのみであった。自己再生を持つ浮遊シールドは半壊、装甲も所々粉砕され、機体は紫電を走らせている。もう満足に動く事は出来ない。あと少しで戦闘不能に陥ってしまう。

そんな満身創痍な彼女を、生徒達は見下す。

「ははっ！ 篠ノ之博士の妹だっていうからもうちよつと手こずるかと思っただけど……」

「本当に無様ねえっ!!」

「アーハッハアーツ!!」

「何呑気にしてんの。時間無いんだからさっさと済ませるわよ」

「くっ……うう……」

傲慢。彼女達がするその姿はその言葉が似合うであろう。とても酷くて、とても醜くて、とても見るに耐え難い。これが人のする事なのか。

人間は自分の為なら何処までも残酷になれる。これが、この光景がその証だ。

世界は——こんなにも残酷で、狂っていた。

「しの——」

その瞬間、彼の首輪が鳴り始める。そして同時に起こるのは過去の追体験。

目の前で息を引き取った父親の顔——。

愛犬を殺した者達の姿——。

自分自身を取り囲み、嘲笑う女達——。

自身が遭遇してきた過去が連続で映し出され、最後に甦った光景は——。

十年前——いや、十二年前の——。

「篠ノ之とおおとおおとおおおつつつ!!」

「——うわっ?!?!」

彼は悲鳴に近い叫びを上げて飛び出す。そしてそこからの出鱈目な瞬時加速により彼女へ接近。爆発的な速度そのまま彼女を抱え、そのまま壁へとぶち当たる勢いで飛んでいく。その速度では激突する事は間違いない。

——アイゼン、展開——。

——シヨックアプソバー起動——。

しかし、彼等が壁に激突する事は無い。

作成されたアイゼンが自動で展開。壁まで残り数メートルといった所で地表に突き刺さりそれは急ブレーキとなる。それのお蔭で壁にぶつかりはするも、激突とまではい

かなかった。

唐突の出来事に彼を除いた全員が愕然とする。何が起こった、彼はいったい何をしたのかと。

だがそれもつかの間、彼女達の愕然は続く。

「や、柳さん！ 何を——」

『『灰鋼』 えええつつつ!!』

——『バリアブルシールド』展開。要塞形態に移行。防衛対象、『篠ノ之箒』——。

彼が叫んだその直後、奇妙な事が起こった。

『灰鋼』の『バリアブルシールド』処か、後方のスカートアーマーが機体から分離していった。そしてそれは彼女を取り囲む様に移動、上下左右に装甲がスライドし拡大されていく。

そして、それ等は四角錐台の形となり——。

「なっ……!!? ……これは……!!?」

「……!!?」

——彼女を隙間無く包んでいった。

「な、何よそれ……」

誰も見た事が無いその光景。彼女は勿論の事、生徒達六人も言葉を失ってしまった。その機能は何だ、いったいどうなっている。その様な兵装は誰も聞いた事が無い、誰も見た事が無い。

「——っ!？」

「ぐ……がつ……。あ、あ、あ……」

ここで漸く生徒達は気づく。彼の首輪から鳴るその電子音に。それは教員達から散々と言われた警告、危険因子、最も恐れていた事態。

自分の事しか考えていなかった彼女達は——。

——操縦者の深刻な異常を確認。心拍数不安定。緊急処置を実行。……不可能——。

——深刻な心的外傷後ストレス障害と判断——。

——自己防衛システム『狂犬』を強制起動します——。

——彼の狂犬を目覚めさせてしまった。

「——だはあつっつ?!?!?」

繰り出されたその攻撃は、生徒を盛大に壁へと吹き飛ばした。強大な攻撃、そして壁への激突により装甲は完全大破。エネルギーを大幅に失い、一気に機体維持警告域、そして操縦者生命危険域を突破。具現維持限界を迎えて機体は強制解除、地表に倒れる。

「う、嘘……」

一瞬の内に倒されてしまった二人の生徒。位置情報等を見る限り、地表に叩き落とされた生徒も戦闘不能処か機体が強制解除されている。

感じるのは戦慄。恐怖。全く理解が出来ない。わからない。

「フーツ!! フーツ!!」

「——っ！ 撃って!!」

気づけば、彼はステージの中央に佇んでいた。鈍く発光し、近接兵装『鋼牙』を両腕に装備するその機体は禍々しく感じさせる。彼自身も目から血涙を流し、誰が見ても興奮状態であった。

やらなきややられる。そう感じた彼女達は彼に向けて一斉射撃。先程は二手に別れて三人で攻撃していたが、今は四人。躲す事は容易ではない。

「これで——」

しかし、今の彼は『狂犬』だ。

「——なっ!?!」

見えたのは集中砲火による土煙、それだけだ。彼自身は全くの無傷であった。

そう、彼はそれ等の全てを出鱈目過ぎる動きと爆発的速度で回避したのだ。四方方向から繰り出すそのオールレンジ攻撃を。

再度、生徒達が撃ち始めても同じ事であった。死角からの射撃だろうと、偏差射撃だろうと、範囲攻撃だろうと全く以て当たりはしなかった。当たる筈の弾丸は直前でブレて通り抜けるだけ。範囲攻撃は瞬時加速を用いたのか、いつの間にかその場から大きく離脱している。

「当たらない……!! 何で……!!」

生徒達の攻撃は、もう二度と当たる事は無い。システムによつて出力と適性値が上がリ、桁違いの回避能力を持つ彼の前では、弾丸など無力にも等しい。更には、今やシールド等を外した状態。重荷を外したも同然なのだ。つまり、『灰鋼』は今や機動特化したと言つても過言ではない。

これは『〇一九』も、彼自身も想定しなかった偶然の産物。防御力重視から機動力重視となったその機体は、並大抵の人間では捉える事は決して出来ない。何をしても無駄

「否、それはいとも簡単に防がれた。」

銃口を向けるその寸前、彼は片手でそれを掴み発砲を阻止。生徒がどれだけの力を込めようともびくともせず、それは膠着状態となる。

「……さつきはよくもやってくれたじゃねえか。ああ……許せねえ、絶対に許さねえ」

そして、ここから最も恐ろしい事が起こる。

「寄越せよ、ソレ」

その瞬間、ショットガンを掴む腕が赤黒く発光し出した。そして起こるのは――。

――後付武装をロックします。使用機体権限、『灰鋼』に移行。――。

「えっ!?!」

突如、機体から発せられたのは聞いた事の無いアナウンス。その直後にショットガンが弾かれる様に手元から離れ、彼はそれを奪い捨てる。

有り得ない。本来ならば使用許諾をしない限り他の機体は運用する処か持てやしない筈だ。にも関わらず彼はそれを難なくと持っていた。

驚愕が続き、動くことすら忘れてしまった生徒が次に掴まれたのは――一切の装甲が

無い頭。

「——ああっ?!」

「てめえらが、悪いんだ。てめえらが……!!」

「や、やめ——」

——警告。警告。警告——。

彼から滲み出る『どす黒い何か』。それは生徒を萎縮させ、硬直させてしまう。そして——。

「てめえらがあつつつ!!」

——彼の腕は、再び赤黒く発光した。

一方その頃、校舎外にて。

そこには第二アリーナへと向かっている二つの人影——一夏と千冬の姿が。

襲撃者達から逃れた彼は校舎に出るその直前に彼女と合流。彼女自身も事態を把握していた故に長つたらしい話はせず、彼と共に向かっていた。

全力で走る彼女と、それに追い付こうと必死な彼。一刻も早く事態を終息せねばならない。

「くそつ、柳の『狂犬』が起動している！ 急げ一夏！」

「はあつはあつ……!!」

「全く、やってくれたなガキ共……!!」

警告音が鳴りつばなしのタブレットを持つ彼女は苦虫を噛み潰した様な表情だ。そこから段々と表情は険しくなり、それは鋭いものとなる。

あれほど言い聞かせたのに、あれほど警告したのに起こってしまった最悪の事態。襲撃した生徒は勿論、監視員も厳罰処では済まさないと怒りが込み上げていく。絶対に許しはしない。

『外だけじゃなく、内側にも『敵』はいるんですよ、お？』

彼女はふと、以前に日葵が言っていた事を思い出した。それがより一層と怒りを増幅させる。

(これが、お前の言っていた事なのか……!!)

日葵はこうなる事をわかつていたのだ。彼等の——男性操縦者の存在を許せない『過激派』達が内側IS字團にいる事を。彼等の排除を目論む『敵』を。

外側にも『敵』、内側にも『敵』。何処も彼処も『敵』だらけ。最早誰を信じれば良いのかすらわからなくなってきた。今、頼りになるのは弟だけだ。

「一夏、お前は先にステージへ行け！ 私は一度管理室へ向かう！」

「わかった!!」

彼は全力で走った。彼等の元へと向かうべく、疲れ切ったその身体に鞭を打って。

吹き出る汗、荒くなる呼吸、溜まつてく疲労。次第に足が遅くなるが、今の彼にとつては些細な事。今、優先すべきなのはただ一つ、仲間の安否だけだ。それが彼の身体を無理にでも動かした。

いつも側にいてくれる箒。いつも支えてくれる隆道。その二人が『悪意』によって潰れるなどは決してあつてならないのだ。

助けなくては。その想いが段々と膨れ上がり、それは彼の動力源となっていく。

そうして走る事暫く。息切れしながらピットに辿り着くも彼は立ち止まる事を知らない。ゲートへ一直線し『白式』を緊急展開、惜しみ無く瞬時加速を用いてステージへと降り立った。

「箒！ 柳さん！」

助けに——

っ

!?!?!?

「

彼が見たものは、異様な光景であった。

そこには巨大な金属の四角錘台が一つ。

生身を曝け出して倒れる生徒が二人。

訓練機に乗って微動だにしない生徒が三人。

銃を構え、怯え泣く生徒が一人。

そして――。

「ギヤア、ア、ア、アアアツツツ
!?!?!?」

——高い悲鳴を上げてのたうち回る、隆道。

彼は、その光景に言葉を詰まらせた。

全く以て状況がわからない。何だこの状況は。何が起こった。何がいったいどうなっている。

生徒達に關しては然程疑問は浮かばなかった。システムが起動した隆道によつて返り討ち。彼がその結論に至るのは簡単な事であった。

しかし、箒の姿が何処にも見えない。それに、あの四角錘台は何だ。隆道は何故——あんなにも苦しんでいる。

絶句するその最中、状況が動き出す。

「て……めえ、も………」

「い、いや………！ 来ないで………！」

「てめえもおつつつ!!!」

「いやあああつつつ!!!」

先程までのたうち回っていた隆道は即座に起き上がり生徒に接近。生徒は銃を乱射するも、それは一発とて当たりはしない。掠りすらも。

一瞬の内に生徒の懐に入った隆道は銃を掴み、そして——生徒の頭を掴んだ。

「あつ、あつ……」

「ゲボツ。……さあ、覚悟しろよ」

「やめて、やめてやめてやめてえつつつ!!」

「てめえはもう終わりだあああつつ!!」

隆道が叫んだ、その直後。その腕は赤黒く発光した。彼はそれに見覚えがある。以

前、無人機に対して使った――。

「あああああああつつつ?!?!?!」

「ぐあああああつつつ?!?!?!」

共に悲鳴を上げる二人。両方の機体から紫電が走り、それは数秒と続く。そして、彼だけがそこから弾かれる様に吹き飛んでいった。

対する生徒は吹き飛びしなかったものの絶望した表情を出している。

「あ……ああ……私、私の……」

「ギャア、ア、ア、アアアツツツ?!?!?!」

またしても響く、隆道の悲鳴。それは、今まで聞いた事の無いものであった。大怪我をした時のものとは全く違う、耳を塞ぎたくなってしまう程の金切り音。それが彼を絶句させる。

『一夏！　おい、一夏！　何が起こっている！　応答しろ!!』

解放回線から聞こえる箒の声。しかし、今の彼はそれに応える事が出来なかつた。第二アリーナに響き渡る、隆道の大きな悲鳴。かくして、襲撃事件は幕を閉じた。

数時間後の職員室。

誰もいない筈のその部屋で机に肘を付いて手を組むのは千冬ただ一人。

「……………」

襲撃の犯人である九人の生徒と監視員は身柄を拘束中、現在も取り調べを受けている最中。一夏や箒、そして日葵の三人は既に事情聴取を終えて先程帰らせたばかり。

しかし、隆道だけは少し違った。発症した彼は事情聴取が不可、現在も保健室で項垂れている。誰かが側にいれば更に悪化するであろう。治まるまでは声を掛ける事すら出来ない故の措置なのであった。

「……………」までのもの、なのか」

女尊男卑社会という自分が撒いてしまった種。そう思う度に、彼女は胸が締め付けら

れる感覚に陥ってしまい、後悔の念に駆られていく。

女性を憎む者達。男性を憎む者達。今の世界はこんなにも混沌と化していたのだ。最早一個人がどうこう出来るものではない。

今となつては頼れる人間は極僅か。いや、その頼れる人間ですら怪しくも感じてしまう。それ程までに彼女は疑心暗鬼になっていた。

一度人材をロンダリングする必要がある。なら今すぐにでも協力者に連絡を取らねばならないと携帯を取り出した所で――。

「お、織斑先生っ!!」

「……山田先生。何かわかったのか――」

「これをつ!!」

勢いよく扉を開けて駆け出してきたのは真耶。血相を変えて此方に詰め寄るなり渡してきたのは数枚の書類。いったい何が記載されているのかと目を通すと、そこには思ひもよらない事が。

「……!!」

「……彼女達の中で、四人が柳君の単一仕様能力を受けていました。調査した結果……」

彼の単一仕様能力。

それはエネルギーを奪うだけのものではない。

『悽愴月華』の能力。それは――。

「全員のIS適性値が消滅。その代わりに柳君のIS適性値が……CからBに上昇して
います」

――ありとあらゆるものを奪う能力。

第四十二話

男性操縦者襲撃事件が起こった六月二十二日。この日以降、一夏と箒の生活事情は多少なりとも変化した。

一夏と箒の行動は教員か代表候補生との同行が必須、アリーナ使用の際は学園が厳選した教員が監視員として置かれる事となった。現状は千冬と真耶、そして最近復帰したばかりの菜月といった極少数だ。信用出来る人物が限られた今、唐突の襲撃を考えれば当然の事であろう。更なる仕事が増えてしまった彼女達が報われる日は来るのか。

彼等と同行する代表候補生に関してはセシリアに鈴音、そしてシャルロットの三人がいる。何も心配はいらないだろう。日葵とラウラは論外だ。

一方の隆道に関して。彼は日葵以上の危険人物として扱われる事になる。所謂ブラックリスト。

彼が漸くと見せた単一仕様能力『悽愴月華』。相手の武装を奪い、IS適性を奪う事が可能なその能力は非常に危険過ぎる。相手の攻撃手段を絶つ処か一生ISを操縦不可能になるのはIS学園内——いや、全世界の女性にとっては恐怖そのものだ。自らの選手生命を絶たれるのと同然なのだから。

当然、この能力の詳細は後日の緊急全校集会で襲撃事件を含めて公開された。これを聞いた生徒並びに教員全員は顔を真つ青にしたとか。何人かは追放するべきだと声を上げた者もいた。

至極当然だ。何せ、その能力を一度でも受けてしまえば苦勞して培った全てが終わってしまふのだから。誰が好き好んで自分の危険を晒してまで近づこうとするのか、誰が好き好んで危険人物と同じ構内で暮らしたいというのか。

だが、その要望は却下される。学園側が言える事は接触を避けよ、それだけしか言えなかつた。

世界に二人としか存在しない男性操縦者。その片割れを追放などすれば世界中の間がこぞつて拐いに来るか、或いは殺しに来るか。一般操縦者と男性操縦者のどちらが価値があるかなど、答えは言うまでもない。彼女達は彼に対してただただ怯えるしかないのだ。

だが、逆に言えばこれは抑止力と言って良い。憎む存在が勝手に遠ざかるのだから彼にとつては有難い物であろう。まるで腫れ物扱いのそれではあるが、女性不信である彼にとつて別に気にする事ではなかつた。

それに、誰よりも彼自身がこの能力の危険性を把握している。エネルギーや武装、I S 適性だけに留まらず、ありとあらゆるものを奪える。如何に強力であつても使う気に

はなれない。使うとするならば——相手が明確な『敵』である時だけだ。頻繁に使うつもりなど更々無い。

それでも、危険人物という事には変わり無い。これを機に、彼は全面的な戦闘を禁じられる——その筈だったのだが。

なんと、ＩＳ学園上層部はこれを却下したのだ。今後は稼働データだけでなく戦闘データも積極的に採取せよと通達が送られてきたのであった。上の連中はいったい何を考えているのか。

一つだけ可能性があるとするならば——まさか『灰鋼』の更なる変異を望んでいるのだろうか。

そうして戦闘が解禁された彼であったのだが、勿論行動する際は一夏達と同様、教員または代表候補生が付く事になっている。教員には千冬を、代表候補生にはシャルロツトを。

教員の中でシステムを起動した彼を止められる可能性を持つのは千冬のみであろう。他の教員では返り討ちに合うのは目に見えている。これ以上と問題が起きてしまつては堪ったものではない。

代表候補生に關してはシャルロットが適任だ。代表候補生の中では彼女だけが彼の人間關係が良好が故、千冬は協力を仰いだ。

勿論、彼女はこれを二つ返事で承した。一度は痛い目にあつたが、自分を多少なりとも支えてくれた彼に何か出来るのならそれ以上に越した事は無い。それに、女性不信である彼が何故、自分と普通に接するのか知りたいという気持ちもある。それ故の返事だ。事の真相を知つた時、彼女は彼に対しどんな想いを抱くのであろうか。

ところで、彼等三人に襲撃をかました生徒九人と監視員はどうなつたのか。

貴重な人間を危険に晒した彼女達は勿論重罪、尋問した後は速やかにI S学園から追放し、今頃は政府に拘束されている。もう日の光を浴びる事は無いだろう。なんと愚かな末路か。

彼女達に指示を出したのは男性操縦者の存在を憎む者——以前、隆道の抹殺を指示した女性だ。監視員に彼等を襲撃せよと命じ、あまつさえ女尊男卑主義の生徒達にも協力を仰ぐというド畜生。彼女は危惧していたのだ、彼がとてつもない力を得る事になると踏んで。

それは正に焦り。以前の失敗の件がそれを加速させて周りが見えなくなつた彼女は、

またしても愚行に走つたのであつた。その結果この様だが。

足が付く事が無い様に色々とは手は尽くしたが、もう同じ手を使う事は出来ない。彼は今後も力を付けていくことであろう。それが彼女をより一層怯えさせる事になつたのであつた。

尤も、その逃げの努力も虚しく近い内に身柄を拘束される事になるのだが。

男性操縦者の襲撃を命じたのは政府の女性だ。それは間違いないではない。

だが、彼女も唆された人間の一人に過ぎない。

では、いったい誰が彼女を唆したのか？

それは男性操縦者を憎む存在ではなく――。

IS委員会、日本支部にて。

その廊下の一角にて、二人の男がいた。一人は熊田、もう一人は熊田と同じIS委員会の人間だ。彼は男に対し怒りを露にしている。

「貴様あつ!! 気は確かなのかつ!!」

「全く……喧しいぞ、私が何をしたというのだ。二番目の戦闘に関しては各国も賛成しただろう」

「その事ではない!! ……知っているんだぞ、お前があの女を唆して彼等を襲わせたのは」

「はっ、何を言うかと思えば……。あの女が勝手に暴走した、それだけの事だ。私に責任は無い」

「いの……!!」

彼は男の言葉に剣幕な表情を見せる。対する男はしれつとした表情であった。その堂々とした姿は彼の怒りを更に膨れ上げていく。

激昂する彼に対し、男はその姿勢を崩さない。ネクタイを直しつつも目を逸らさずに淡々と口を開くだけだ。少しも悪びれる様子など無い。

そう、この男こそ男性操縦者襲撃事件の発端。女尊男卑主義である政府の女性を唆し

た張本人。彼女に当たり障りの無い事を言って隆道達を襲う様に煽ったのだ。いったいその真意とは。

「証拠は何も無い、捕まるのはあの醜い女だけ。良かったではないか、世界の癌が一つ減って」

「その為に彼等を危険に晒したと言うのか!! 下手をすれば彼が死ぬ恐れがあったのだぞ!!」

「……まるでわかっていないな、これは必要な事なのだよ。彼を、二番目を戦わせる為には、な」

「何だと……!!」

「彼の『灰鋼』は戦闘毎に変異していく。これは彼女の『華鋼』とはまた違ったものだ、積極的に戦闘をして貰わねば困るのだよ。我々は『灰鋼』の変異を求めているのだから。トーナメント戦は先手を打たれてしまったが、まあ良いだろう。既に圧力を掛けたのだから今後に期待だ」

これが、男性操縦者襲撃事件の真意。一夏や箒は然程重要ではない。ただ単に隆道に戦闘させる為だけのものではあったのだ。この男、正気か。

更にはそれだけに留まらない。事の真相を一切知らない I S 委員会には非情にもある決定を下した。

——『灰鋼』の戦闘データを採取させると。

稼働データ。それしか送らないIS学園に痺れを切らしたIS委員会はIS学園上層部に圧力を掛け、今後は積極的に戦闘データを取れと命じた。幾らIS学園であろうと、IS委員会からの全面的で全力な圧力の前では規約などあまり意味の無いもの。

彼が危険？ 学園の人間も危険に晒される？ そんな事、IS委員会には一切関係無い。必要なのは『灰鋼』の変異だ。『リカバリーショット』の量産により味を占めた彼等は更なる物を求めた。

それだけではない。IS学園に蔓延る女尊男卑、それが崩れゆく様をこの目でしかと見たいのだ。女性が男性に怯える、その姿を。

勿論この事に反対をした者はいるが、それ等は女性が大半。男性が大多数な事もあつてか大勢が賛成の声を上げ、結果が戦闘データ採取の可決。数の暴力とはこの事であるう。

名目上スポーツとして扱われているIS。だが、あくまでそれは一般目線としてだ。IS委員会だけでなく、どの国の研究員も兵器として見ている。それを公言しない、ただそれだけなのだ。

「貴様も見たらどう？ 新たに発現したシステムに対人兵装を。更には例の単一仕様能力。確かに恐ろしいものではあるが実に面白い。それにだ、傲慢な女共が怯える姿は滑稽だと思わんかね？」

「っ！ 貴様という奴は……!!」

「各国もそれを望んでいる。エネルギー回復装置だけでなく、今度は高性能な武器を作り出した。あの『灰鋼』は、今後我々に何を見せてくれるのだろうか？ はっ、はははっ!!」

「……この、悪党めが」

IS委員会は、『灰鋼』の更なる変異を求めた。

IS学園の安否は二の次。男性操縦者は兎も角、女子生徒や教員、選手の代わりは幾らでもいる。終わってしまえば別の者を探すだけ。

彼等が一番に望むもの。それは新たな技術——テクノロジーへの進化。

六月も最終週に入った月曜の二十七日。

IS学園は学年別トーナメント一色に変わった。慌ただしきは予想を遙かに上回り、第一回戦が始まる直前まで全生徒達が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っている。勿論の事、教員も大忙し。

それからして漸く解放された生徒達は急ぎ足で各アリーナの更衣室へと走るという多忙の極み。トーナメント前にしてへろへろな彼女達は大丈夫なのであろうか。そこだけが心配だ。

ちなみにだが、男子組——というか一夏一人は例によってこのだだっ広い更衣室を一人占めだ。恐らく、反対側の更衣室では本来の倍となる生徒を収容して大変な事になっているであろう。

「しかし、凄いなこりや……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見れば、そこには各国政府関係者、研究員、企業の人間、その他諸々の顔ぶれ。あまり興味が無いが故か、人数の多さだけに驚愕していた。

そこでふと、雑務の際にシャルロットが言っていた事を思い出す。

『三年にはスカウト、二年には一年間の成果確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今の所関係無いみたいだけど、それでも上位入賞者には早速チェックが入るよ』

どしない、力に溺れたりなどしない。少なくとも、彼自身はそう思っている。周りがどれだけ危険視しようとするかはあの人の方、それだけは絶対揺るぎ無いものだ。見捨てるなど有り得ない。あの日誓ったのだ、隆道の力になりたいと。

しかし、そんな想いも虚しくか、何も出来ない自分を置いて周りの人間が次々と傷ついていく。それが堪らなくて仕方がなかった。

自分は未だ弱いまま。まさかこの先もこのままなのかと、それが彼の思考を支配する。

「自分がやりたいことはなんだ。自分はいつたい何をしたいのか。自分は——何も出来ないのか。」

「駄目だ、感情的になるな一夏。シャルロットも言っていたじゃないか。今は……試合に集中だ」

そう一人、彼は自分に言い聞かせてモニターを見直す。もうそろそろ対戦表が決まる筈だ。

そうだ、今は雑念等を捨てろ。何の為に彼女と特訓を重ねてきたのか。この調子のままでは彼女に申し訳ない処ではない。自分が許せなくなる。

彼は深呼吸し、その精神を落ち着かせる。漸く落ち着いたその頃、ある一つの疑問が残った。

どういふ理由なのか定かではないが、突然たるタッグ戦への変更がなされてから従来までに使用していたシステムが正常に機能をしなかつたと。本来なら前日に作成出来る筈であつた対戦表も、今朝から生徒達が手作りの抽選クジで作成していたとか。もつと早めにするべきだつたのではと彼は思ったのだが、それは胸にしまふ事にした。

「おつ……。一回戦目、か」

先ず表示されたのはAブロック一回戦一組目。チームは一夏とシヤルロットのペアであつた。

これは運が良い。何せ待ち時間に色々考えずに済むから。勢いが肝心、出たとこ勝負、思い切りの良さで行きたい等々といった所だ。

残すのは対戦相手のみ。いったい相手は誰なのだろうか、真剣にモニターを見詰め。願う事ならば最初の対戦相手はラウラのチームが良い。

今回のトーナメント参加者の中では間違ひなく最強の部類であろう。だが、それでもラウラとは戦わねばならない。決着を付けねばならない。

と、待つ事数十秒――。

「――」

――画面が切り替わり、対戦相手が決まつた。

——Aブロック一回戦——。

——織斑一夏&シャルロット・デュノアVS篠ノ之箒&ラウラ・ボーデヴィツヒ——。

一方その頃。反対側の更衣室では。

「……………」

人口密度が凄まじいそこにあるのは一つの冷気を放つ一角、ラウラの姿。彼女から滲み出るその異様な気配には籠った熱も二の足を踏むかの様。いったい何が彼女をそうさせているのか。いつ頃からのかは彼女自身すら覚えてはいなかった。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

それが彼女の名前ではあるが、同時にそれは何も意味を持たないと彼女自身が理解している。

しかし、それでも例外はあった。自身を鍛えてくれた教官——千冬に呼ばれるその時

だけは、その響きだけが特別な意味を持つ気がして、その度に僅かな心の高揚を感じ取っていた。

彼女もまた、千冬に惹かれた者の一人。だが、それはそこら辺のファンなどといった生温いものでは断じて無い。それは――。

（あの人の存在が……その強さが私の目標、存在理由……）

出会った時に一目でその強さに震えた。恐怖と感動、そして歓喜に。そして彼女は願った。

――ああ、こうなりたい。

――これに、私はなりたい。

空っぽだった穴が埋まり、それが全てとなる。自らの師、絶対的な力、理想の姿。唯一と自らを重ね合わせてみたいと感じた存在は彼女にとって希望そのもの――いや、それ以上であつた。

で、あるならばだ。それが完全な状態でない事を許せはしない。絶対にだ。

（織斑一夏、柳隆道、篠原日葵……）

千冬に汚点を残させた張本人の一夏。千冬を今も悩ませる隆道。千冬を這いつくばらせた日葵。三人の存在を決して認めない。許さない。それが全くの無意味だとしても倒さねばならないのだ。あの人に近づきたいから、あの人に認められたいから、あの人に自分を見て欲しいから。

(排除する。絶対に、絶対に……!!)

先ずは一夏からだ。彼を徹底的に叩きのめす、その事だけを考えて彼女はゆつくり立ち上がる。

暗い闘志に火を付け、その赤い右目は鈍く光を放つ。『敵』を倒す、ただそれだけの為に。

彼女は知るよしもない。

自分が傀儡だという事に。

そして時は進み——。

「一戦目で当たるとは、な。待つ手間が省けたというものだ」
「そりゃなによりだ。こつちも同じ気持ちだぜ」

両チームは既にアリーナのステージ内にて対峙していた。一夏とラウラは互いに睨み合い、直ぐにでも飛び出す勢いで試合開始の合図を今か今かと待っている。一触即発状態だ。

『試合開始まで十、九、八——』

「先ずは貴様から排除してやる。覚悟しろ」

「はっ、やってみろよ」

『——二、一、試合開始』

試合が今、始まる。

「叩きのめすっつっつ!!!」

一夏とラウラの怒声は奇しくも同時であった。

開始と同時に彼は瞬時加速で一気に詰め寄る。先ずは先手、これが決まれば戦況は大きく傾く。

「おおおおおおおっつっつ!!!」

「ぶん」

それを全くと動じない彼女は右手を彼に向けて突き出した。その意味を彼は既に理解している。

(来る……!)

『A. I. C? なんだそれ?』

『『シユヴァルツエア・レーゲン』の特殊兵装。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力ね』

『ああ、あの動きを止めたのが……』

『ええ、その対策を考えますわよ。……理屈として大体が衝撃砲と同じ、エネルギーで空間に作用を与えている筈ですわ』

『じゃあ『零落白夜』なら切り裂ける訳だな? でも実際止められたぞ?』

『簡単よ、『零落白夜』に触れなければ良いの。つまり、あんたの腕を直接止めたのよ』

『彼女なら出来るでしょうね。それに、一つ申し上げるなら一夏さんの動きは読みやす
いのよ』

『ぐっ……。じ、じゃあどうすればいい?』

『そうね……。ぶっちゃけ確実な手段は無いわね』

『なら、これならどうでしょうか。確実……とは言えませんが——』

「くっ……!!」

唯一の手段——意外性で攻める事。

しかし、その程度の戦略など読むまでも無い。彼女は彼の腕を始めに胴体、足と『A・I・C』の網に捕らわれる。押そうが引こうが少しも動かない。まるで見えない腕に掴まれたかの様に彼は身動きの一つ取れなくなってしまうていた。

「開幕直後の先制攻撃……これ以上わかりやすいものは無い。やはり感情的で直線的だ
な」

「……そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば次にどうするかもわかるだろう」

全然わかりたくはないが、想像は実に容易だ。彼女の機体に備わる『リボルバーカノン』からの装填音が響き、『白式』が警告を発する。

——警告。ロックオンを確認——。

だが、彼はたじろぐ事は無かった。目と鼻の先にその砲口があつても落ち着いた表情だ。理由は実に簡単、当たり前前の事。何せこれは——。

「そう慌てるなつて、何も一対一じゃないんだ」

「先ずは一撃——」

「——そうだろ?」

彼の頭上を飛び越えて現れるのは、後付武装を構えたシャルロット。それと同時に特殊弾の射撃を浴びせ、その砲口をずらす。

——六一口径アサルトカノン『ガラム』——。

「ちっ……!」

シャルロットの射撃によって彼に向けて放った砲弾は空を切り、更なる追撃によって彼女は急後退し間合いと取る。だがしかし、シャルロットは彼女を逃がしはしない。

「逃がさないっ!!」

シャルロットは即座に銃身を正面へと突き出す突撃体勢に移行。片手に更なる後付武装を展開、呼び出し無しのそれは一秒と掛からず形成した。そう、これこそシャルロットが得意とする技能。

——『高速切替』——。

それは事前呼び出しを必要しない、戦闘と平行して行える瞬時の武装展開。これはシャルロットの器用さと判断力があってこそそのものだ。これがあるからこそ、数多くの後付武装を備えていた。

と、そこへ——。

「私を忘れて貰っては困る、ぞっ!!」

遮る様に現れるのは打鉄を纏う箒。

防御型ISである証明である浮遊シールドを前に展開し、銃弾を弾きながらもシャルロットへ斬り掛かる。しかし、その動きは何処か鈍い。

「それじゃ俺もおっつっ!!」

『A. I. C』から解放された彼は直ぐシャルロットの背中へと瞬時加速する。このままでは衝突だ。

しかし、衝突するその直前——。

「はいっ!」

「——なっ!?!」

シャルロットはその場で宙返り。彼との場所を入れ替え、彼と箒の刀がぶつかり火花を散らす。

まさかの交代。しかも息の合ったその動きには驚愕の意を見せざるを得ない。

二人の連携がとても凄まじい。少なくとも此方のチームよりあるだろうと箒は歯を食い縛った。

罅迫り合いの最中、彼は突如箒に語り出す。

「……なあ、箒」

「な、なんだ……!?!」

「試合中なんだぜ、今は柳さんの事考えるなよ。あの人はそんな顔望んじやいない」
「……!?!」

どきりと、心臓が跳ね上がった。

彼は見抜いていたのだ。箒が隆道の一件で雑念が生まれていた事に。先日起きた事件以降、箒は自身を庇った隆道の事で頭が一杯であった。自分が足手まといだったから、自分が弱かったから、隆道はあんな事になってしまったのだと。

それは正しく悔みだ。やはり、自分には力こそ必要なのだと、心の闇が少しずつ支配していた。

「そんな顔……らしくない。全然らしくないぜ」
「……………」

しかし、そこに現れたのが彼の一言、彼の顔。それによつて箒は我に変える。心の中の闇が次第に晴れていくと、箒はそう感じた。

「……ああ、すまなかつた。そうだな……今は、試合中だつつつ!!!」

「——ぐおつ!? ……ははっ、それだよそれ。なら……おおおつつつ!!!」

彼と箒は刀を何度となく打ち合う。それが続く——事は無い。彼はスラスタの推進力を上げて斬撃の加速度を増し、箒を後方へ押し去っていった。その高速攻撃には防御体勢にならざるを得ない。

「くっ……………! この……………」

「シャルロット!」

「うん!」

その刹那、彼の背中に控えていたシャルロットが両脇から手を伸ばす。その手に握られているのは広範囲攻撃に特化した二丁の後付武装。

——六二口径連装散弾銃『レイン・オブ・サタデー』——。

この至近距離、外す事は決して有り得ない。箒は青ざめるがもう遅い。シャルロットは引き金を引くが——。

「!?」

突然、目の前の箒が消え、散弾は虚しくも空を切った。いったいどこへ消えたのか？
その理由は——。

「邪魔だ」

「なっ、何をつする——ぐあっ!?!」

入れ替わる様に急接近して来るのはラウラだ。その機体から『ワイヤーブレード』が一つ伸び、それは箒の足に絡み付いてステージ端まで遠心力で投げ飛ばしていった。

そう、箒が消えた理由は彼女による牽引だったのだ。散弾を食らう事は無かったが、結果的に箒は地表に叩き付けられダメージを負ってしまふ。抽選決めだったとはいえ、この女はいったい仲間を何だと思っているのか。

語るまでも無いだろう。ただ邪魔だったから、それだけの事だ。助ける気など最初から無い。

味方からの妨害により箒は怒りを露にするが、当の本人は聞く耳持たずだ。既に彼等への攻撃を始めているのである。チーム戦とはいったい。

彼女は『プラズマ手刀』を展開し、左右からの連続攻撃。斬撃と突撃を混ぜた正確無比のそれに一夏は押され気味となってしまう。

「数の差で私が有利だな」

「くっ……たかが二倍じゃねえか!!」

そうは言うものの、彼女の実力は確かである。今現在も彼との接近戦をこなしながらも、それと同時に『ワイヤーブレード』を四本全て駆使してシャルロットを牽制、彼から引き離している。

「無事か?」

『一夏こそ無事? 直ぐにサポートに入るから』

「いや、いい。このまま例の作戦で頼む」

『……わかった』

秘匿回線で短くやり取りを交わし、彼等は予め決めていた作戦の一つへと移る。

それは『箒を倒そう』作戦。なんとも安直ではあるが、タッグ戦において一人が欠けてしまえばそれだけでも状況は大きく変わる。

この作戦を決めたのは結構単純であった。彼女の戦い方は一対多に特化している。つまり――。

自分側が複数状態での戦いを想定していないという事だ。軍人がそれで良いのかと内心思った彼であったが、そんな事はどうだっていい。

一対二の状況で畳み掛ける、それがこの戦いに勝つ道標だ。しかし、その状況でも充分に戦える能力を彼女は持っている。焦りはしないだろう。だが——そこが落とし穴だ。

彼女の射程距離外から離脱したシャルロットは直ぐ様箒へと間合いを詰める。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ……!? ……まあ、いいだろう。敢えて乗ってやるとしようではないか」

「ありゃ」

一応と挑発を掛けたのだが、今の箒にはあまり効いてはいなかった。詰め寄りつつシャルロットは近接ブレードを展開、箒の斬撃を受け止める。

——短剣型近接ブレード『ブレッド・スライサー』——。

しかし、近接ブレードで箒の攻撃を受け止めたその直後、片手の『レイン・オブ・サタデイ』が火を噴いた。至近距離での銃撃など全く想定していなかったのだろう。箒はモロにそれを食らう。

「くっ……!」

射撃戦の印象が強いシャルロットではあるが、最大の特徴は『器用さ』だ。格闘も人並み以上にこなす上、そこへ例の『高速切替』。斬り合いかと思えば銃に持ち替えての射撃、間合いを離せば剣に切り替えて近接格闘。押しても引いても一定の攻撃リズムを保

ち、安定したその構えを安易に突破する事は出来ない。

曰く、『求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、緩やかなる褐色の死へと進む』。

その戦法は、世間ではこう呼ばれている。

——『ミラーシュユ・デ・デザート砂漠の逃げ水』——、と。

「先に片方を潰す戦法か。無意味だな」

彼女は箒を数には入れていないだろう。だが、彼等にとっては脅威の一つである。シャルロットが箒を撃破するまで何としても耐え凌ぐ、それが今の彼に出来る事だ。やり遂げねばならない。

『プラズマ手刀』に『ワイヤーブレード』から繰り出される波状攻撃。これを全て捌き切るのは決して容易い事ではないが、彼は必死に接近戦を維持し続ける。

「貴様の武器はブレードのみ。さあ、どうする。離ればただの的だぞ?」

「う、うおおおつつつ!!」

彼女の言う通り、距離を離せば単的になる。更に『ワイヤーブレード』がある以上、一度でも距離を取られれば取り戻すのにエネルギーと時間を食う。ならば、意地でも喰

らいつくしかない。

零距离で続く近接戦闘。途切れてしまいそうなその集中力を、彼は必死に、必死に繋ぎ止める。数分にも感じてしまうその戦い。今の彼に出来る事は——信じる事だけである。

しかしその時——。

「……もう終わらせるか」

「!?!」

——突如、彼の動きは止まった。

「ああくそっ! 『A・I・C』かっ!!」

「では——貰った」

「くっそおおっつっ!!」

四本の『ワイヤーブレード』が無慈悲にも彼を切り刻む。装甲の三分の一を失い、エネルギーも半分以上持っていかれた。

それでも彼女の攻撃は終わらない。そのまま彼の右腕を拘束し、振り切る様に回転を加えながら地表に叩き付ける。相殺しきれなかった衝撃が彼を襲い、呼吸を一瞬詰まらせた。

「がはっつっ!?!」

「終わりだ」

彼女は彼に容赦をする事は無い。今度は更なる追撃——いや、それは止めだ。大砲から放たれるその砲弾は対I S用徹甲弾。当たり所が悪ければ即終了となる代物。それが今、彼へと放たれ——。

「お待たせ！」

——その砲弾は防がれた。

その正体は間一髪で間に入ったシャルロット。盾で砲弾を弾ぎ、全ての『ワイヤーブレード』を瞬時に切断して彼と一緒にその場から離脱した。この少年、なんたる強運の持ち主であろうか。

「シャルロット……助かったぜ」

「どういたしまして」

「箒は？」

「お休み中」

シャルロットが促す先を見ると、ステージの隅で膝を付く箒の姿。エネルギーは残量無し、装甲も各部が大きく損傷していた。だが、どういう訳か何処かスッキリした様な表情であった。

「流石。……って、何であいつあんな爽やかな顔してんだ？」

「さ、さあね……。でも篠ノ之さん凄いな、僕も結構エネルギー持ってかれちゃったよ」
少々困惑を見せつつも、シャルロットは片手に持つアサルトライフルを捨て新たな武装を展開。ショットガンとライトマシンガンの両方を持ち、戦闘体勢へと切り替わる。

来てくれた。間に合った。ならば、ここからが正念場だ。

「さて、ここからが本番だね」

「ああ。見せてやるとしようぜ、俺達の連携を」

戦いは、まだ終わらない――。

第四十三話

ステージで一夏とシャルロット、そしてラウラが激闘を繰り広げている最中。観察室にて。

「凄い、ですねえ。二週間足らずの訓練であそこまでの連携が取れるなんて。やっぱり織斑君って凄いです。才能ありますよね」

「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。織斑は大して役にも立っていない」

感心する真耶とは裏腹に辛辣な千冬。幾ら身内とはいえ、少々辛口評価過ぎるのではないか。

「そうだとしても、そこまで合わせてくれる織斑君自身が凄いじゃないですか。魅力無い人間には誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ……そうかもしれないな」

無然とした態度で告げる千冬であったが、真耶にはそれが照れ隠しなんだと最近わかってきた。故に、気にしないし、それを弄ろうともしない。後がとも恐ろしいから。……それにしても、学年別トーナメントの形式変更はやっぱり先月の事件無人機襲撃事件のせいです

か?」

「詳しく聞いていないが、恐らくそうだろうな。より実戦的な戦闘を積ませる目的でツーマンセルになったのだろう」

「……自衛の為、ですね」

「そうだ。操縦者は勿論、特殊兵装を積んだISも守らなくてはいけない。しかし、教員の数が有限である以上、それ等は自分自身で守るしかない。その為の実戦的な戦闘経験だろう。……しかし、例外はいるが、な」

強調するその例外とは勿論、日葵の事である。幾らなんでもおかし過ぎるのだ。上級生は愚か、教員すら歯が立たない程の強さを何故持つのか。

故に、徹底的に調べた。日葵の強さの秘訣を。機体は兎も角、操縦技術は四年と少々で身に付くものではない。あれ程の実力をどうやって手に入れたのか、それを知る必要があった。

そして学園の者は知った。ある一つの事実に。

一切無かったのだ。

千冬が代表を退役した後処か、それ以前の情報ですら見つける事が出来なかった。唯

一の情報は日本代表候補生、ただ一つだけ。

小学校以前の情報は何故か全て空白。それ以降も目立った情報は一切無し。代表候補生となった日付も黒く塗り潰されていた。訳がわからない。

これでは隆道と全く同じ。何故、政府は彼処か日葵の情報すらも秘匿にするのだろうか。まるで知られたくない、そんな気がしてはならない。

機体に関してもそうだ。日葵の専用機『華鋼』は謎が多過ぎる。本来は原則としてI Sに使われる技術は開示しなくてはならないのが決まり、その筈なのに全く以て謎だ。いったい何故なのか。

確かにI Sに使われる技術等は、共有財産として公開する義務はある。しかし、新技術を作り直ぐに公開すればメリットが全く無い。少なくとも、技術の応用ノウハウや操縦者の練度を高めなくては開発した国が損をするだけだ。

そこでこのI S学園だ。I S学園はその成り立ちの特性上『あらゆる法の適応外』といった側面等を持っている。勿論、全ての法に対して無効化する訳では無いのだが、重要なのは『I S技術における試行』という項目である。

『新技術に必要とされる試行活動を許可、またそれ等のデータ提出は自主性に委ねるものとして義務は発生しない』

つまりだ、ISの新技术において『データの開示をせずに実戦データを集められる』のは世界中でただ一つ、このIS学園だけなのである。その為、イギリス、中国、ドイツといった様々な国が特殊兵装を搭載したISを送り込んでいる。

そして、各国の真の狙い。それは単一仕様能力との融合だ。三年間で上手く第二形態に移行し、特殊兵装を使った単一仕様能力が生まれれば技術が開示されても何ら問題は無い。絶対に、決して真似は出来ないから。

ここまで語れば、もうわかるだろう。

——『華鋼』は、誰にも真似は出来ない。

元々が『打鉄』であった『華鋼』は技術を公開する直前に度々と変異していったのだ。新技术は全く使用せずに変異していくそれに、IS委員会や研究員達は為す術が無かったのである。

そして、『華鋼』は誰しもが願った領域にいち早く辿り着いた。それは正しく天文学的な確率、正しく奇跡そのもの。

これには各国は困惑し、日本は歓喜に満ちた。今世紀の最高傑作が出来上がったと。

既に、『華鋼』はほぼ完成した機体と言つても良いだろう。それは決して過言ではない。

何故ならば、『華鋼』の単一仕様能力は――。

「篠ノ之さん、負けてしまいましたね」

「――つ!? ……あ、ああ。専用機が無ければあんなものだろう。特に篠ノ之は性格上デユノアと相性が悪い。しかし、よく奮闘したものだ」

真耶の一言で我に返つた千冬は改めてモニターに視線を戻す。そこでは一對二でありながらも、互角に渡り合うラウラの姿が。

「強いですね、ボーデヴィツヒさん」

「ふん………変わらないな。それでは――」

「はい?」

「――………何でもないぞ」

強さを攻撃力と同一だと思つているラウラでは一夏には勝てないだろうと言いつけて口を噤む。それは絶対に口にしない。彼女にとつて身内ネタで弄られるのは大嫌いだから。

画面を見て暫く、会場が一気に沸く。その歓声が観察室にまで直に響いてきた。

「あ! 織斑君、『零落白夜』を出しました! 一気に勝負をかけるつもりでしょうか」

「さて、そう上手くいくかな」

その部屋の片隅で、青年が一人佇んでいた。

「……………」

千冬達と同じくモニターをじっと見詰める青年——隆道。その目は一切と逸らしもせずにいる。

「ぶつとばしてやれ、織斑。その意外性でな」

そう、彼は呟いてほくそ笑んだ。

場所は変わり、ステージ内にて。

一夏はずつと潜めていた自身の単一仕様能力を発動させ、ラウラへと直進。エネルギーが削れる諸刃の剣だがもう時間が無い。下段の構えにしたまま彼女に近づいてい

く。

「これで決めるっ！」

「無駄だ。貴様の攻撃は読めて——」

「——これならつつつ!!」

「!?!」

斬撃が読まれるなら、突撃。足下へ向けていた切っ先を即座に起こして身体の前へ突き出した。読みやすさは変わらざとも腕の軌道は捉えにくい筈である。線より点の方が捕まえるのは難しい。

が、しかし——。

「無駄な事を——」

彼女にとつて関係無い。あらゆるエネルギーを消し去る『零落白夜』は『A. I. C』など無効。なら彼自身の動きを止めればいい、それだけの事だ。

「腕に拘る必要は無い。貴様自身の動きを——」

「……お前の特殊兵装つてさ、すっげえ集中力が必要だろ？　今のお前は俺だけしか見ていない。」

「何——っ?!?!」

ハッと気づき慌てる彼女であつたがもう遅い。既にそれは直ぐそこまで来ているか

ら。目の前の『敵』に固執したばかりに生まれた——油断だ。

「隙有り！」

そう、今や彼等は二人組だ。零距離まで接近に成功したシャルロットは素早く連射を叩き込み、彼女の『リボルバーカノン』を轟音と共に爆散、大破させた。これで残すものは近接兵装のみ。

やはり予想通りであった。彼女の『A. I. C』には致命的な弱点がある。それは『停止させる対象物に意識を集中させないと効果を維持出来ない』事だ。現に彼の拘束は解除され、自由の身である。

「一夏！」

「おう！」

エネルギーも残り僅かだ。『零落白夜』はもう使えない故、実体剣のまま畳み掛けるしかない。恐らく、一撃でも当たればエネルギーは無くなるだろう。だが、それでも彼は斬り掛かる。必死で左右同時に襲い掛かる凶刃を弾き続けながら。

一方のシャルロットも誤射を避けるべく、近接ブレードで彼女に斬り掛かる。

二人同時からなる怒濤の近接攻撃。彼女の武装が『プラズマ手刀』のみである今がチャンスだ。

「こん、のお……邪魔だあああつつつ!!」

「うあっ!？」

「シャルロット! くっ——」

「次は貴様だっ!! 落ちろっ!!」

「ぐあっ……!？」

だがしかし、彼女とて黙っている訳が無い。

それは火事場の馬鹿力なのであろうか、彼女はシャルロットを瞬間的に斬り刻んで吹き飛ばす。それに気を取られたその一瞬、彼もまた立て続けに吹き飛ばされた。

それでも、まだ彼は動ける。残量は残り二桁。

「は……ははっ! エネルギ―はまだ充分!! これで私の勝ち——」

「まだ終わっていない!」

高らかに勝利宣言する彼女は、またしても油断した。そんな彼女に超高速の影が突撃をかます。それは、何を隠そう——。

「なっ……! 『瞬時加速』!？」

——一瞬で高速機動へと移ったシャルロット。

初めて彼女の表情が狼狽を見せる。事前に見たデータには無かったのだろう。それに、彼自身ですらそれは知らなかった事であった。

皆が驚愕するのも無理はない。シャルロットも初めて使ったのだから。そう、彼女は

この戦いの最中で覚えたのだ。それは正にぶつつけ本番だ。

最早、シャルロットの器用さは特徴というものでは済まされない。それは技能の一つと言つても過言ではない。単一仕様能力に匹敵するものだ。

「だが、私の停止結界の前では——がはっ!？」

彼女が言えたのはそこまで。あらゆる方向からの唐突たる射撃を受けて、彼女は視線を巡らせる。そして、彼と目が合う。——アサルトライフルを構える彼自身と。

「これなら『A. I. C』も使えないだろ!!」

そう、このアサルトライフルは訓練の際に使用許諾をした銃である。これが意外性のその一つ。近接しかしないであろう彼の思い付いた策だ。

とは言え、もしエネルギーが無くなっていたらこの奇策は使えなかったであろう。彼女の一撃をギリギリの所で堪えたのは『白式』のがんばり。当分はこの機体に頭が上がない。

「こゝのっ……死に損ないがあつっつ!!」

そう吠える彼女であつたが、然程命中率の高くない彼の射撃は一旦無視、シャルロットに専念。『A. I. C』が使えないが近接なら彼女の方が上だ。

「でも、間合いに入る事は出来た」

「それがどうした! 第二世代の攻撃力で——」

そこまで言つて彼女はまたしてもハツとする。そう、単純な攻撃力だけならば第二世代で一二を争う装備がある事に今更ながら思い出す。そしてそれは、ずっとシャルロツトが装備していた盾の内側に隠してあつたのだ。その装備は――。

「この距離ならあつつつつ!!」

盾がぐるりとスライドし、中からリボルバーと杭が融合した武装が露出する。それは第二世代型の後付武装の中でも高い攻撃力を持つ後付武装。

――六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』――。

「『盾殺し』――」

「先ずは一発うつつ!!」

「ぐうつつ……!」

彼女の腹部にその強烈な一撃が叩き込まれる。エネルギーが集中して絶対防御を發動、ごっそりと奪われる。しかも相殺しきれない衝撃が深くと身体を貫いたのだろう。彼女の表情は歪んだ。

しかしこれで終わりじゃない。『灰色の鱗殻』はリボルバー機構により高速で炸薬を装填する。――つまり、連射が可能だ。

続け様に撃ち込んだ三発の連撃。彼女はそれによつて大きくステージの端まで吹き飛ばされる。その機体には紫電が走り始めているが、まだ彼女は耐えていた。なんとい

『ま、まあ、有り難くお借りします……』

これこそが彼自身の真正正銘、最後の意外性。来賓は愚か、教員ですら予想しなかったそれは、アリーナ全体を愕然とさせる。

力を振り絞り、最後の瞬時加速で一氣に彼女の懐まで詰め寄り、そして――。

「終わりだあああああ?あつっつ!!」

「――ぐあああつっつ?!?!」

――その一撃は、爆音と共に止めとなった。

(こんな、こんな所で負けるのか。私は……!)

相手の力量を見謝ってしまった。それは間違えのないミスだ。しかし、それでも――。

(私は負けられない……! 負ける訳には絶対にかかないのだ……!)

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』。識別上の記号。一番最初に付けられた記号は――C――〇――

○三七。人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれたのが彼女である。戦いの為だけに作られ、生まれ、育てられて、鍛えられた。言わば戦略の為の道具。格闘を覚え、銃器を習い、兵器等の操縦方法を体得し、それ等は常に最高記録を維持していた。そう、彼女は優秀であったのだ。

それがある時、世界最強の兵器——I Sが現れた事で世界は一変する。そして考えた、この兵器をいかにして扱えるようにするかを。そこで彼等が考えついたのは道具達の更なる向上。

——『越界の瞳』——。

疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべき人体改造。脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上に加え、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理。

危険性は全く無い。理論上では不適合も決して起きない——その筈であった。

この処置によって彼女だけが変わり、常に稼働状態のまま制御不能へと陥る。この事故により、彼女だけがI S訓練において後れを取った。

そして、いつしかトップの座から転落した彼女に待っていたのは嘲笑と侮蔑、そして

——『出来損ない』という烙印。

世界は変わった。彼女は闇からより深い闇へ、止まる事を知らず転げ落ちていったのだ。たった一つの事故によつて。自分勝手に人体改造されたのに、これはあまりにも残酷だ。

そんな彼女が初めて目にした希望。それが——世界最強、千冬との出会い。

『ここ最近の成績は振るわない様だが……なに、心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へ戻れるだろう。何せ、私が教えるのだからな』

千冬が放つその言葉に、一切偽りは無かつた。千冬の教えを忠実に実行する、ただそれだけの事で彼女は部隊の中で再び最強の座に君臨した。

だが、その時には安堵というものは無かつた。それよりも強烈に、深くと、千冬に——憧れた。その凛々しさに、その堂々とした姿に焦がれた。

『どうしてそこまで強いのですか？ どうすれば強くなれますか？』

『私には弟がいる』

『弟……ですか』

『あいつを見ているとわかる時がある。強さとはどういうものなのか、その先に何があ
るのかを』

『……よくわかりません』

鬼の様な厳しさを持つ千冬が彼女に見せた僅かに優しい笑み。彼女はその表情に心
が痛む。

『今はそれでいいさ。……そうだな、いつか日本に来る事があるなら会つてみると良い』
優しい笑みに、気恥ずかしそうな表情。それが彼女を——不幸にも歪ませてしまつ
た。

(それは、違う。私が憧れる存在ではない。貴女は強く、凛々しく、堂々としているべき
だ)

故に——許せない。千冬にそんな表情をさせるその存在が。そんな風に変えてしま
う弟、それを認められない、認める訳にはいかないのだ。

(決めたのだ。あれを……あの男を……私の力で完膚無きまでに叩き伏せるとつつつ
!!!)

ならば、負ける訳にはいかない。目の前の男はまだ動いているのだ。動かなくなるま
で徹底的に壊さなくてはならない。

『——願うか？ 汝、自らの変革を望むのか？ より強い力を欲するか……？』

それは、突然の出来事であった。

「あああああつつつ?!?!?!」

「ぐああつつ?!」

「?!?!?!」

ラウラが身を裂かれたかの様に絶叫を発する。同時に彼女の機体から激しい電撃が放たれ、一夏は吹き飛ばされる。そして、それにより彼の機体は具現維持限界。機体が解除され放り出された。

「ぐうつ! いったい、何が……— つ?!」

「う、嘘……」

彼も、シャルロットも目を疑った。その視線の先では、彼女の機体が——変形していた。いや、変形などといった生易しいものではない。隆道の機体の様なものですらない。装甲は全て粘土の様に溶けてどろどろの液状と化し、彼女のその全身を包み込んでいく。とても黒く、深く濁った何かが、瞬く間に彼女を飲み込んでいった。

「な、何だよ、あれは……」

無意識に呟く震えた声。恐らく、それを見たであろう全ての人間が同じ心境に違いな

いだろう。

その『シユヴァアルツエア・レーゲン』であったものは彼女の全身を包み込むと、その表面を心臓の鼓動の様に脈動を繰り返し、ゆつくりと地表へ降りていく。足を着けたその瞬間、突然の高速で全身を変化、成形させていった。

「……………つつつつ?!?!?!」

そこに立っていたのは、全身装甲のISに似た『黒い何か』であった。しかも――。

「千冬、姉……………?」

その姿形は、千冬が現役時代のソレだ。そして右手に持つのは一本の日本刀。彼はそれに見覚えがある――いや、見間違う筈が無い。何故なら、それは紛うことのない――。

「『雪片』……………!!」

千冬がかつて振るった刀。酷似とかいうレベルではない、まるでそれは複写。目の当たりにした彼は沸々と怒りが込み上げて来る。

「……………何だよ、それ」

「つつ?!? 一夏?!?」

「何だよそれはあああああつつつつ!!!!」

「まつ、待って一夏!!」

「うおおおつつつ!!!」

彼は突如走った。激しい動きに突き動かされ、握り締めた拳を武器に『黒い何か』へ駆けた。

が、しかし。それは止められる。それを止めたのは——『打鉄』を乗り捨て駆け付けた箒。

「馬鹿者! 何をしている! 死ぬ気か!」

「離せよ! この、あいつ、ふざけやがって! ぶつ飛ばしてやる!!」

「こ、この……! いい加減にしろ!」

「——でっ!」

未だに激昂する彼に、箒は頬を思い切り叩く。今にも飛び出そうとしていた体勢も災いして彼は勢いよく転げ回った。

顔面を感じる激痛、口に入る砂埃、触れた地表の冷たさ。それによって彼の限界を突破していた怒りが折られ、徐々に冷静になる。

「いったいなんだというのだ! わかる様に説明しろ!!」

「……あれは、きつと——いや、絶対に千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを、あいつはあんな……」

彼は思い出す。千冬に習った『真剣』の技を。初めて見た時の事を、今でも正確に思い出せる。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られる様では、剣術とは言わない』

『重いだろう。それが……人の命を絶つ武器の、その重さだ』

『この重さを振るう事。それが、どういう意味を持つのかを考えろ。それが強さというものだ』

冷たく、鈍く輝く、その刀。人を斬る、その為に生まれ、作られ、鍛えられたその存在。

それを教えた千冬は厳しくも、何処か優しげな眼差しを向けていた。まるで眩しいものを見る様な、いつもと違う表情。

「……お前は、いつも千冬さん千冬さんだな」

「……悪い、かよ。それに……あんな、千冬姉をただ真似た訳わかんねえもの……気に入らねえ。絶対ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

「理由はわかったが今のお前に何が出来るのだ。機体のエネルギーは零、どうやって戦う気だ」

「ぐっ……」

「尤もな意見だ。機体を展開するエネルギーも残っていない今、彼に出来る事など一

つも無い。

「……それにしても」

そう、箒が呟く。確かに何処か奇妙であった。

『黒い何か』は何故かその場から微動だにしていなかった。と、言うよりは何かを探している、その様に見える。恐らく、武器か攻撃に反応して行動する自動プログラムなのだろうか。現に駆け付け様とした彼には一切反応しなかった。生身の人間には危害を加えないのであろう。

それは間違いだ。『黒い何か』は探している。

『非常事態発令！ トーナメントは中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧の為部隊を送り込む！ 来賓、生徒は直ぐに避難する事！ 繰り返し！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は收拾されるだろう。だから——」

「だから無理に危ない所へ飛び込む必要は無い、か？」

「そうだ。それに……どの道エネルギーは無い。お前が出来る事は、何も無い」

確かに箒は正しい。理路整然としている。至極当たり前の事を言っている。

「……俺は——」

本当は拒否したい。『やらなきゃいけない』ではなく『やりたいからやる』だ。ここで引いたらそれはもう自分ではない、織斑一夏ではない。

だが、これが現実。機体を展開出来ない以上、為す術など一切無いのだ。悔しきで満たされようとした、その時――。

「織斑あつつつ!!!」

「一夏!!」

「っ!? 柳さん!? シャルロットも!!」

突然と彼等の目の前に現れたのは『灰鋼』を身に纏う隆道とボロボロであるシャルロット。彼等は必死の形相で息を切らして彼を見据えている。焦り以上である事は明白であった。

「何をやってんだこの、バカタレがっ!! 一步間違えばアレにぶった斬られて終いだぞっ!!」

「そうだよ一夏!! 何を考えてるのさ!!」

「うっ……す、すみません」

何故、隆道がここにいいのか。それはモニター越しに一連の状況を見て、文字通りですつ飛んで来たのだ。千冬の呼び止めなど一切聞かずにだ。彼が危険に脅かされている。単にそれだけが思考を支配し、脇目も振らずに駆け付けたのである。

「……はあつ。まあ、無事で何よりだ。それよりさっさとずらかるぞ、教師共も直ぐに――」

「……柳さん。あいつは、俺が倒したいです」

「……………」

「我が儘なのはわかっていきます。でも……どうかお願いします。力を貸して下さい……！」

彼は切に願った。あの『黒い何か』は自分自身が倒さなくてはならないと、使命感に駆られた。

確かにこれは我が儘だ。自分がやらなくても、教員が何とかしてくれる。しかし、それを許してしまえば彼はもう――。

「一夏あ！ お前、本当いい加減に――」

「……やれるのか？」

「――はいいつ!？」

「えっ……。ちよ、柳さん!？」

「……やります。やって見せます」

驚愕をする筈とシャルロットを余所に、じつと見詰め合う二人。それはほんの数秒だけのもの。

見詰め合う事、約数秒。隆道は――。

「……ほらよ」

「……！　　柳、さん……！！」

隆道は『リカバリー・ショット』を三本展開。それを彼に差し向け、言葉を放つ。

「お前がアレに對しどう思ってるかは知らねえ。けどよ、お前がやれるってんなら止めはしねえ。やるならきっちりやれ、決着を付けろ」

「柳さん……！」

「……ありがとうございます！！」

隆道は止めはしなかった。それは理屈だとか、論理的だとかそういったものでは断じて無い。

彼を信じたから。彼が放つその熱い眼差しに心を打たれたが故の行動。理路整然とは真逆である滅茶苦茶なものではあるが、それでも構わない。他二人の苦情は後回しだ。

「ほら、さつさと受け取れよ。……ああそうだ、負けたら明日から女装な」

「ああ、全くもう……。でも、良いですねそれ。一夏、制服は僕が用意しておくから」

「だってよ。覚悟しとけよ？　ん？」

「うっ……！　　……へへっ、良いですよ。何せ、絶対に負けませんから！」

ジョークを交えた会話により、緊張が良い意味で解れる。いつの間にやら血が上つていた頭も、今は適度に冷えていた。

ああ、貴方はどこまで良い人なんだ。どこまで優しい人なんだ。会えて——本当に良かった。

しかし、感動している暇は無い。直ぐに教員達が駆け付け来るだろう。そうなればあつという間に鎮圧されてしまう。

「早くしねえと教員共が来るぞ。出番無くなる前に行つてこい。出来る限りサポートしてやる」

「はいっ！　じゃあ——」

彼等を知るよしも無かった。これからこの場所で——最低で、最悪の事態が起こる事に。

——警告。敵機接近中——。

「——っ!?!」

彼に『リカバリー・シヨット』を渡そうとしたその瞬間。いち早くソレに気づいたのは隆道だ。瞬時に手を引つ込め、此方に接近してくるソレと向かい合い激突する。

「「!?!」」

「ぐっ!?! おい、『灰鋼』えっ!! いつものアレはどうしたあっ!!」

——付近に防衛対象有り。『番犬』発動不可能——。

「ああ、そういう事……!!」

『アッアッアッアッ……!!』

ソレの正体は例の『黒い何か』。何故か急激に接近、今や隆道と取っ組み合い状態。彼等はそれに愕然とするしかなかった。

「どういふ訳だ? 何故此方に接近してきた? 何故隆道と取っ組み合いをしている?」

「逃げろお前等あつっつ!!」

「まっ、柳さ——」

「一夏行くよ!!」

愕然とするしか無かった彼等だったが、その中で唯一シャルロットは危険を察知。彼と箒の二人を抱えてその場を離脱する。

「離せよ!! まだ柳さんが!!」

「何も出来ないよ！　ここから離れないと！」

「ああ、くそっ！　くそおおっ!!」

彼等は瞬く間にピットへと避難する。ステージに残されたのは——隆道ただ一人となった。今も取っ組み合いの最中、膠着状態であった。

「取り敢えずオーケー、だな……！　……さて、どういうつもりだ、この野郎が……!!」
『ア、ア、ア、ア、ア……!!』

言葉を投げるも、返つてくるのは呻き声だけ。機械音混じりであるその声は苦しんでいるのか、または別の何かなのか。

兎も角、これでは拉致が明かない。一旦距離を離さなければ。故に、隆道は取っ組み合いのまま『黒い何か』を——思い切り蹴り飛ばす。

「オ、ツ、ツ、アツツツ!!」

『——ツ?!?!』

その蹴りにより盛大に吹き飛ぶ『黒い何か』はステージの壁に激突、紫電を走らせながら地表を転げ回った。かなりダメージを与えたからなのか動きもかなり鈍くなっている。満足に動けないであろう。しかし、やらかしてしまった。

「あ、やっべ。出番取っちゃった」

彼には申し訳無い事をしてしまったと、隆道は頭をかきながら一人呟く。何せ、あんな

なにも啖呵を切った彼を置いて自分が倒してしまったのだ。あとで文句を言われても仕方がない。

「おつ。……はあ、来やがったか」

辺りを見渡すと、今頃になつてやつて来る数名の教員。しかし、もう既に倒してしまつたのだ。もう遅い。以前もそうであつたが、対応が少々と遅いのではないだろうか。

だが、そんな愚痴を溢しても全くの無意味だ。ここからは向こうの仕事、あとは任せるとピットに帰ろうと所で――。

「……あん？」

ふと、ある事に気づいた。先程まで持っていた例の回復装置が手元から消えていたのだ。それが隆道に疑問を持たせ、立ち止まらせた。

収納した覚えは無い。何処かに落とされたのか。それとも踏んづけて壊してしまつたのか。

「……………」

先程まで自分は何をしていた？

あの『黒い何か』と取っ組み合いをしていた。

その時は、まだ手に持っていた。

つまり——。

「……!!」

ハッと隆道は気づき、遠くにいる『黒い何か』に視線を向ける。その『黒い何か』は——。

『ア、ア、ア、ア、ア……!!』

——『リカバリー・シヨット』を持っていた。三本とも全て。

「お、おいおい……。まさか……——」

——退避せよ。退避せよ。退避せよ——。

嫌な予感が隆道の頭を過り、冷や汗が垂れる。そして、それと同時に鳴り響くのは『灰鋼』から発せられる最大限の警告。

そしてその嫌な予感——的中する。

『!?!?』

「——だあつつつ!!」

『——ガッ!』

隆道は後方へバク転。その勢いで『黒の剣士』を蹴り飛ばし大きく距離を離していく、全力で。『黒の剣士』はそれを追う事もせず斬り上げた姿勢のまま。これは好機、隆道は更に離れた。

——零。シールドバリアー、絶対防御、再起動——。

「はっ……はっ……。あつぶねえええ……」

正に間一髪。あと少しでも反応が遅れていけば間違はなく頭が二つになる所であったらろう。

殺意に満ち溢れているにも程がある。いったい目の前のコレは何故、自分を狙うのだらうか。

「はあつ。逃げてても、無駄、か。……あん?」

その時であった。ある違和感に気づいたのは。

頬をなぞる液体の感覚。それは顎にまで達し、地表に落ちる音をしかと聞かせる。

そして、次に感じたのは——。

「……つつ!?! い、っでえ……つつ!?!」

——右顔面に襲い掛かる、激痛。

熱すぎるその感覚。それは右の額から顎下まで感じ、彼を悶えさせる。特に右目がとても熱い。

まさかと自身の顔に手を宛がって確認すると、そこには——大量の赤い液体。

「な……………あ……………」

——警告。操縦者にダメージを確認——。

——更なる確認を実施中。……………右眼球に深刻なダメージを確認——。

——失明を確認——。

「……………!!」

隆道は——斬られていた。

何故、『黒の剣士』は隆道に執拗に襲い掛かるのか。その理由は誰も予想しない事であった。

確かに『V. T. システム』は筈の推測通り、武装が攻撃に反応する自動プログラム。隆道を襲う事は一切無い筈なのだ。では、いったい何故？

以前、隆道が『狂犬』を発動させた目を覚えているであろうか。そのシステムは、起動する際に周辺の I S 全てに危険信号を送る仕組みである。

そう、要はその危険信号だ。

ラウラの機体『シユヴァルツエア・レーゲン』はその信号を読み取り、隆道と『灰鋼』を絶対な危険的存在へと認識する様になった。

そして、今回発動してしまったそのシステムと彼女の稼働データが重なり、それによつてバグが発生。二つのプログラムが追加されてしまった。

その追加されたプログラムは――。

『灰鋼』の完全なる破壊と――。

――柳隆道の抹殺。

『オ、オ、オ、オ、オ、オ、ツツツ!!』

「……ああ、そうかよ。殺る気満々ってか……」

隆道の表情が次第に恐ろしい剣幕になる。もう彼は周りなど見えはしない。視界が赤く染まり、目の前のディスプレイに現れるのはたった一つの項目、ただそれだけだ。

「……そつちがその気なんだ。文句はねえよな」

——キドウシマスカ?——。

「決まってるだろ……。答えは、一つだ」

そんなもの、訊かれるまでもない。目の前のは正しく『敵』、自身の命を脅かす存在だ。なら、倒さねば——いや、殺らなければならぬ。

故に——。

——駄目えっ!! 待ってえっつっ!!!

「上等ダアアアツツツ!!!」

——隆道はソレを起動する。

——絶対殲滅システム『猛犬』起動——。

——操縦者のI S適性値を補正。『B』から『S』に変動——。

——操縦者に痛覚抑制を処置——。

——機体出力上昇——。

「てめえら纏めてぶっ殺してやるっつっつ!!!
「はあつ、はあつ……!!」

——生き残りを賭けた殺し合いだ。
バトル・ロイヤル

第四十四話

ステージで隆道達の死闘が起こる、その直前。鎮圧に向かった千冬と入れ替りでピットに入った一夏達は――。

「急いで一夏!! 『白式』をハンガーにかけてケーブルの接続!! 僕達も手伝うから!!」
「おう!!」

今や三人は必死そのもの。急ぎ足で『白式』にコードを次々と繋ぎ、エネルギーの充填を開始。彼の機体のダメージレベルはC寄りのBだ。装甲の完全な修復は見込めそうにないが、この際機体が動けるなら何だって良い。

シャルロットも復帰しようとしたのだが、先の試合でダメージレベルがCに到達している。充填すれば復帰自体は可能だが、それをしてしまえば今後に支障を来す。故に、彼女は戻れはしない。唯一出来る事と言えば『白式』のエネルギー充填を手伝う事、ただそれだけだ。

三人掛かりで漸く機体にケーブルを全て接続、充填の完了を今か今かと待つ。この時間がかかりもどかしくて仕方がない。最悪、途中でも充填を止めてまで戻らなければ。

「早く、早くしてくれよ『白式』……!」

「やはり時間が掛かるな。柳さん達は今……?」

ふとモニターを見ると、その画面は砂嵐状態で状況が全く以て掴めない。ステージ内での状況はどうなっているのか。千冬より先に出た教員達や残された隆道は未だ戻っては来ない。その事実が彼等を余計に焦らせている。

「一夏! いい方法があった! 手伝って!」

「シャルロット!?! いったい何を!?!」

シャルロットは急いでポロポロとなった機体を待機形態に戻してケーブルを接続、エネルギーを充填する。彼女の機体はダメージレベルC、復帰は難しい筈だ。思い付いた方法とはいったい。

「……僕の『リヴァイヴ』ならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う。充填しつつ『白式』にエネルギーを移せれば——」

「本当か!?! 頼む! 早速やってくれ!」

「ま、待つて、設定するから……! えと……」

そう、彼女はこう言っているのだ。自身の機体にもエネルギー充填し、それで得たエネルギーをそのまま彼の機体に移すのだと。この方法ならば恐らくより速くのエネルギー充填が可能であろうという判断であった。要は充填速度の加速だ。

食い気味に掛かる彼に押されそうになりつつ、彼女は待機形態のISからコードを

引つ張り出して『白式』に接続、あれやこれやと設定を始める。

「あとは『リヴァイヴ』のコア・バイパス解放。エネルギー流出許可。よし、これなら……！」

設定をして数秒程。どうやら成功したらしく、微々たるものではあるがエネルギーの充填速度が上がっていた。これならば復帰を早められる。

普通はコア・バイパスは極めて難しいコア同期をしなければならぬ筈なのだが、彼女はそれをぶつつけ本番でやってのけたのだ。優秀過ぎる。

「よっしや！ あとは——」

と、その時——。

「うわっ!?!」

「な、何だ!?!」

突如と響いたのはステージから聞こえる轟音。それは連続して鳴り、地震かのようにピットを震動させている。その意味は彼と筈だけが理解した。

「これは……「夏っ!!」

「柳さん……!!」

あの時と一緒だ。隆道が豹変した、あの時と。つまり、ステージでは今——。

「急いでくれ、『白式』……!!」

け流し。二本の杭は無惨にも空間だけを叩いた。

武器だけでなく身体全体を使った、流れる様な動きは正に強者の動き。それは素人である彼自身にも嫌でも感じさせてしまう。

そして、受け流しをやつてのけた『黒の剣士』は——既に攻撃体勢だ。
「くっ!!」

斬撃が来る直前に片足で防御体勢。その瞬間に脚部へ衝撃を感じ、装甲に一本の斬撃痕が残る。それによつて体勢を崩し、彼は怯んでしまう。

(なんつう速さ——)

『アッ アッ アッ ツツツ!!』

怯む彼を待つ程、『黒の剣士』は優しくくない。いつの間にか次の攻撃——袈裟斬り体勢に入り、彼を狙っていた。このままでは真つ二つとなる。

『黒の剣士』が放つその鋭い袈裟斬りは今、正に彼自身を捉え——。

「食らうかあつっ!!」

——空間を斬る風切り音だけが鳴る。

IS適性値はトップレベルにまで補正され、機体性能は競技用を遥かに超え、そして彼自身の技能——『危険察知』の存在。それ等により回避能力が桁違いとなつた彼は斬られる事無く緊急回避、『黒の剣士』の後方へと入つた。

「ヴラ、アツツツ!!」

緊急回避の流れから彼は反撃。『黒の剣士』に『鋼牙』を力の限り突き出す。背後を取ったその攻撃は確実に入ったといっても良いであろう。

が、しかし――。

「何っ!?!」

背後を取った筈の攻撃。にも関わらず、それはまたしても簡単に受け流されてしまう。しかも、今度は受け流しに留まらず『鋼牙』の装着部分に刀を刺される。そしてそこから捻り、いとも簡単に外されてそれは宙を舞った。

更にそれだけでは終わらない。『黒の剣士』は『鋼牙』を脅威と認識したのか、その場で高速の乱斬り、瞬時に切り刻みバラバラにしてしまう。

――『鋼牙』、大破――。

――機体の稼働限界まで、残り四分――。

「ああ、くそ――っ!?!」

気づけば『黒の剣士』は下段の体勢。そこから繰り出されるのは――。

「やっべっつっつ!?!」

それは正に間一髪。彼は全力のバックステップで斬り上げを回避、大きく距離を離す。一旦体勢を立て直さなければならぬ。

前方からの攻撃は愚か、後方の攻撃すら無駄。この真つ黒な機体、隙が全く無い。「危ねえ危ねえ。……あん？」

その時、身体に妙な違和感を覚える。視線を下に向けると胸部装甲には一本の斬撃痕。そこから滲み出るのは赤い液体——血だ。

そう、彼はまた斬られたのであった。骨や臓器まで斬られた訳ではないが、それなりの出血量。常人なら先ず悶える事は間違いない。

「……はんつ。よくもやってくれたじゃねえか。……今度はこっちの番だあつつつ!!!」

しかし、彼は決して怯む事はない。自分自身が傷付く事など今まで幾度と無くあった。しかも、今は痛覚抑制が施されている。何を気にする必要があるというのだ。全く以て無いに等しい。

故に、意に介さず突撃する。彼の思考は『敵』の破壊と抹殺、ただそれだけなのだから。

「ダアツツツ!!!」

姿勢を極限まで低くし、仕掛けるのは出鱈目な瞬時加速。一気に詰め寄り、『黒の剣士』の顔面に全力で殴り掛かる。

無論、『黒の剣士』にはそれがはつきり見えているのだろう。即座に迎撃体勢に移行し、彼の拳に向けて刀を振るう。

『オ、オ、オ、ツツツ!!』

——しかし、それはフェイクだ。

「あめえつつつ!!!」

彼は刀が当たるとその直前、その拳を突然と下に振り抜き華麗に受け流す。そこから空中回転し、繰り出されるのは——。

「オ、ラ、アツツツ!!!」

『——ツツツ?!?!』

——殺人的な威力となった飛び蹴りだ。

それは『黒の剣士』の顔面に直撃。盛大に吹き飛ばし壁へと叩き付け、地表へ這いつくばせる。

それでも彼は止まらない。『敵』はまだ動いているのだ。徹底的に、二度と動かなくなるまでに壊さなくてはならないと、その思考が支配する。

「もう一発——」

「柳いっつつつ!!!」

「!」

追撃を仕掛けようとしたその瞬間、間に割って入って来たのは千冬。彼は即に対象を切り替え、マチエツトブレードを振り抜く。対峙する彼女は片手の『葵』で防御、少々後退りはするも何とか持ち堪える事が出来た。驚異的速度となった斬撃を受け止める事が出来る人間は彼女だけだろう。

「くっ……!」

「やつと来たかブリュンヒルデエ……!! もうクソ教師共の避難は終わらせたのかぁ……!?!」

「やな、ぎい……!?!」

何故、彼女が先程までいなかったのか。それは『黒の剣士』によって倒された教員達を回収し、先に避難させていたからだ。彼と『黒の剣士』は一旦後回しにするという判断。もし巻き込まれてしまったら堪ったものではない。

何度か往復し、漸くと避難を終わらせた彼女は戦闘に介入。勿論、彼等を無力化する為に。

「ホラア、ホラホラホラホラアツツ!!」

「ぐうつ、はあつ、ぬうつ!?!」

右手に持ち替えたマチエツトブレードからなる怒濤の斬撃。これに彼女は二刀で防御し続ける。

彼女が二刀にも関わらず、彼は一本のブレードのみ。だか、パワーと出力が桁違いが故に押されつつあった。その証拠に両刀の刃こぼれが目立ち始めてきている。

(さて、どうする……)

彼女は、彼に対し決して攻撃は出来やしない。シールドバリアーと絶対防御が機能停止している彼の頼みの綱は装甲のみ。もしも、自身が全力で斬つたとしたら——彼を殺す事になる。それだけは絶対に避けなければならない。

ならば峰打ちで彼を気絶させるか、『灰鋼』が稼働停止するまで持ち堪えるか。だが、それ等は非常に難しい事だ。出来なくはないであろうが、そう簡単にいくかどうか怪しい。

それに——。

『オ、オ、オ、オ、オ、ツツツ!!』

「——っ!?!」

——もう一体のISも相手しなければならない。

急接近してきた『黒の剣士』は彼女に向かつて全力の袈裟斬りを仕掛ける。咄嗟に彼女は片手の刀で防御、それと同時に受け流した。

あつという間に二対一と化したこの状況。彼女は自身の機体より強力となった二機を同時に相手しなければならなくなってしまった。

「隙有りだブリュンヒルデエッツツツ!!!」

『ア、ア、ア、ツツツ!!!』

無手状態となり、完全に無防備と化した彼女に襲い掛かるのは双方の鋭く、そして重い斬撃だ。それ等に彼女は為す術もなく――。

「甘いっつっつ!!!」

――否。彼女には体術という武器がある。

「――何っ!?!」

双方から来る斬撃を己の手で巧みに操り、全ていなす。そしてそこから新たな『葵』を二本とも瞬時に展開、武器を弾き大きく仰け反らせた。

『――ツツ!?!』

「――ぐおっ!?!」

「せああああああつっつ!!!」

『――ツツツ?!?!』

一瞬の隙。彼女はこれを易々と逃す筈が無い。『黒の剣士』を連続攻撃で更に仰け反らせ、次に彼の元へ急接近。一気に懐に入り峰打ちを狙う。

(狙うは首つつつ!!!)

居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。自身が誇る、自分だけが持つ太刀筋。打撃で死に至らない様に威力を最小限に抑えるべく集中、そして――。

「はあつつつ!!!」

「――ガアツツツ?!?!」

――瞬時にそれを当てた。

「……アッ――」

「良し……! あとは……!!!」

首筋へ打撃を受けた彼はその場でぐくと首を倒し硬直する。恐らく戦闘不能で間違いない。

だがしかし、彼の様子を伺っている暇は無い。直ぐにラウラも無力化せねばと彼女は残り一機の『黒の剣士』に飛び掛かっていった。

「――」

――はあ、やっと止まってくれた……。

彼が硬直して十数秒。全く動かない事から完全に気絶したのだろう。彼の暴走は止まったのだ。残すは『黒の剣士』の無力化だけ。『〇一九』は早く事態を終息してくれと

切に願う。

もう、これ以上は見えていられない。戦うその度に彼が傷付いていく姿など。

しかし、その様な事は許されない。

——操縦者のショック状態を確認——。

——気つけ処置を実行——。

「——つつつ?!?! いっつで……!!」

——えっ?!?! な、何でっ!?

『灰鋼』が発した一瞬の紫電。それは彼の全身を覆い、強制的に覚醒——目覚めさせた。この事に『〇一九』は驚愕を露にする。

そう、この『猛犬』は対象を倒すまで決して、絶対に止まる事は無い。それ以外で止まるとするならば、機体が限界に達するか——彼が死ぬか。

「ア、アツ、ハアツ……ふう……」

強制的に目覚めた彼は首を鳴らしながらも一層と恐ろしい表情へと変わっていく。それは正しく憤怒の形相。更に溢れ出す『どす黒い何か』。

——機体の稼働限界まで、残り二分——。

——止まって……。ねえ、止まってよ……。

「はあつ、いつつ……。ったく、やってくれたなこの……。くそつたれがああつつつ!!!」

——お願いだから止まってえええつつつ!!

『〇一九』の声は決して届きはしない。怒りが頂点を突き抜けた彼は武器を投げ捨て、今までを超える瞬時加速で二機の元へ急速接近をかます。

急停止を考慮しない突撃。それは未だかち合う二機に猛獣の如く凄まじい勢いで激突し、彼女と『黒の剣士』を盛大に吹き飛ばして自身もろとも壁へとぶつかっていった。

『——ツツツ?!?!?』

「——ぐあつ?!!?!?!? や、柳つ?!」

「グオア!ア!ア!ア! ツツツ!!!」

最早一切の暇を与えはしない。直ぐ起き上がり追撃を与える。彼の拳や蹴りによる怒濤の連撃は彼女と『黒の剣士』双方に向かい、彼女達は防戦一方となる。荒々しく、そして鋭過ぎるその打撃は全く止まらない。止められない。

一つ一つの打撃が非常に重く、それを振るう度に壁や地表が抉れ、受ける度に武器や装甲に罅が入っていく。このままでは此方が戦闘不能状態に陥ってしまう事は明白だ。

明らかに先程より攻撃力が上がっている。この『灰鋼』は更なる進化を遂げるとでも言うのか。彼自身も荒々しい。まるで我を忘れたかの様に。もう人間とは呼べない。

まるで獣そのものだ。

その怒濤の殴り合いが続く最中――。

「っ?! 柳いつ!!」

その時彼女は叫んだ。それは正に悲痛な叫び。彼女は見た、見てしまった。それは彼女が――。

「ヴダラ、ア、ア、ア、アアアツツツ!!」

――凄まじく傷付いていたから。

そう、彼は今やノーガード戦法で戦っている。

一見して防戦一方な『黒の剣士』は、所々彼の隙を見つけて斬りつけていたのであった。致命傷には至らずとも、彼を確実に斬っていた。時間が経つにつれ、彼の機体や身体には斬撃痕が残り、装甲と鮮血を辺りに撒き散らしていく。

装甲も、身体も、所々が傷だらけ。それでも、彼は決して止まらない。いや――既に気にしていないのか、または忘れてしまったのか。

「柳、もうよせえっ!! このままではお前は、お前はあ……!!」

「知った、事、かあああああっつっつ!!」

「邪魔だあああああつっつ!!!」

『——ツツツ?!?!』

しかし、彼はそれを寸前で弾き、『黒の剣士』に連撃を打ち込む。一秒間に十発以上の打撃を入れ、盛大に吹き飛ばし彼女に向けて瞬時加速。そう、今の彼が狙うのは——。

「織斑千冬うううつっつ!!!」

「——っ?!? ぐうっ?!?!」

彼女に急接近した彼はまたしても怒濤の連撃。彼女の機体を次々と破壊していき、大破寸前まで追い込んでいく。浮遊シールドは完全破壊され、所々の装甲も半壊状態に達していく。

——機体の稼働限界まで、残り一分——。

「アッアッアッアッアッアッアッアッ!!!」

「ぐうっ! や、やめろ、柳い……!!」

今も鮮血を撒き散らす彼に、彼女は心が乱れてしまう。もう満足に戦えはしないだろう、彼女の動きが鈍くなっているのがそれを物語っている。

『いいか。刀とは、その重さを利用して振り抜くのだ。手にするのではなく、自らの一部と思つて扱え。無駄無く、隙無く、油断無く、それを振るえ』

いつしか一夏に言った、教えの一つ。しかし、今の自分にはどれも当てはまりはしな

かった。刀がとても重い。自らの一部の様に扱えない。刀に振るわれてる。それ等が彼女に重く伸し掛かる。戦闘が続く中で、それは次第に大きくなる。それは雑念以外のなにもものでもなかった。

自分が——この世界を変えてしまった。自分が——目の前の存在を生み出してしまった。

堪らない、とても堪らない。苦しい。ここから逃げ出してしまいたい。その感情が彼女を襲う。

しかし、そんな事など彼に一切の関係が無い。彼女が自責の念に駆られる今も、攻撃を続ける。自らの命など少しも顧みずに、戦う。

そして遂に——。

「オ、リ、ャア、アツツツ!!」

「——っ!」

噛み付きに見立てた上下からなる打撃によって二本の『葵』はまたしても折られる。彼女は直ぐ展開しようとした所で——。

「ツカマエタ」

「——あ」

——彼に、両腕を掴まれた。

——機体の稼働限界まで、残り三十秒——。

「……漸く、だ。さあ、覚悟しろよ織斑千冬う」

「やな——」

「てめえは終わりだ」

その言葉の直後、彼の両腕は赤黒く発光する。

それは彼の単一仕様能力『悽愴月華』。だが、彼女の I S 適性値を奪ってしまったら死は現実。それは彼自身も百も承知。では、彼はいったい何を。

彼が奪うのは彼女の I S 適性値——ではない。彼が奪うのは——。

「寄越せオ、ラ、アツツツ!!」

「ぐあああああつっつ?!?!」

その刹那。彼女の機体全体に紫電が走り、彼女は苦しみ悶え始める。それが数秒程経ち、そして彼女の機体は——。

——碎ける音と共に光の粒子と化し、消えた。

地表に放り出されるのは彼女自身と、手のひらサイズの球体—— I S コアが一つ。

そう、彼は彼女の I S 適性値を奪ったのではなく機体そのもの——『打鉄』を奪った

のであった。

しかし、それを気にしている余裕など彼女には無い。今や彼女はISスーツだけの生身だ、これを意味する事は勿論——完全なる無防備。

咄嗟に彼女は起き上がるが、時すでに遅しだ。彼はもう、既に構えている。

「死ネ、エッツツツ!!」

「——」

彼女に迫り来る、彼の鈍く光り輝く鋼鉄の拳。体感時間がゆつくりとなり、たった一つの単語が脳内を過る。それは確実な——。

（死——）

——その刹那。

「——つつつつ?!?!?!」

拳が顔面に当たる、その直前。彼はその場からバックステップし、大きく離れた。いったい何が起こったのか。彼女は側面を見やると——。

『オ、オ、オ、オ、オ……!!』

「……!!」

——そこにいたのは全身に紫電を走らせている『黒の剣士』。刀を振り下ろした状態であった。

彼に散々やられた『黒の剣士』は鈍重に復帰、彼等の間に入ってきたのだ。あまりにも執拗だ。

『オ、オ、オ、オ、オ……!!』

所々に罅が入り、所々が彼の返り血で染まっている『黒の剣士』は今や動きが少々鈍い。かなりエネルギーを消耗しているのであろう。

——機体の稼働限界まで、残り二十秒——。

「ハアーツ、ハアーツ、ハアーツ……。ほんっとしつけえぞ、てめえ……!!」

威勢は良くても、彼も動きが鈍い。それもそうだろう。短時間とは言え、全力を出した戦闘だ。消耗しない方がおかしいのだ。彼は血塗れ、機体は大破寸前。いい加減決着を付けなければ、死あるのみだ。

「フウーツ……。さて、決着付け——」

彼が拳を構えた、その時だった。

「っ?!?!
柳いいいっつ!!」

「——」

彼女の声は彼の耳に届きはしなかった。それは無視などといったものではない。

構えた時に感じた違和感に、有り得ない感覚。本来あるべきものがそこには無かつた。

そんな事は無い。ただ、痛覚を感じないだけ。それだけの筈だ。しかし、何度思考を巡らせてもその答えが導き出てきてしまう。

意を決して、彼は右側に視線を向けると――。

「あ……――」

――右腕が無くなっていた。

「――」

彼は完全に硬直してしまった。二の腕から手先まで綺麗に無くなっていた。それは『黒の剣士』による振り下ろしによる切断。彼女に止めを刺す寸前のあの時に斬り飛ばされたのだ。

――機体の稼働限界まで、十、九――。

最早、彼には戦意など一切喪失していた。彼にとって目の前の『敵』よりも大事なものがあつた。それは彼だけにしか理解出来ない。

辺りをくまなくと見渡し、漸く目に捉えたのは彼女の付近にぽつんと落ちるたつた一

つの自身の形見——首輪を巻き付けた腕。

——五、四——。

「それだけは、駄目だ……」

彼は遠く離れる腕に左腕を伸ばす。絶対に届く事は無いのに。それでも彼は手を伸ばし続ける。

——一、零。……稼働限界に到達——。

「ハル——」

——それは届かない。

「——ぐあぁつつつ?!?!」

いつの間にやら接近をしていた『黒の剣士』。ソレが持つ刀は——彼の胸を貫いた。

「うっ……ゲボツ……」

『オ、オ、オ……!!』

「あ、あ、あ……」

『オ、ア、ア、ツツツ!!!』

「——あ、あつつつ?!?!」

勢いよく刀を引き抜く『黒の剣士』。そこから夥しい血が溢れ、彼を痙攣させる。身体や足元が真っ赤に染まり、その目に生氣は消えていた。

しかし、まだ終わりではない。

「……おい、もうやめろっ!! やめろっ!! やめるんだラウラアアアツツツ!!!」

彼女の声は『黒の剣士』に届きはしない。彼が壊れるまで決して止まらないのだ。

血が滴る刀を持つ『黒の剣士』。対峙する彼はもう一步足りとも動こうとはしない。そんな彼に『黒の剣士』は透かさず刀を振り上げる。

そして、とうとう——。

「やめろおおおおおっつっつ!!!」

『死ネ』

——彼を叩き斬った。

「あ——」

「——」

叩き斬られて数秒。痙攣する彼はその場で崩れ落ちてしまい、辺りは生暖かい血の海が広がる。

肉を断たれる感覚、骨を碎かれる感覚、そして——肺、心臓を断たれるその感覚。彼が感じる事が出来たのはそこまで。

もう、彼は――。

――ねえ、待ってよ……。

――待機戦闘形態データ、破損――。

――特殊兵装データ、破損――。

――痛覚抑制機能停止――。

――機体出力機能停止――。

――パワーアシスト機能停止――。

――皮膜装甲機能停止――。

――シールドバリアー再起動不可能――。

――絶対防御再起動不可能――。

――救命領域対応機能再起動不可能――。

――機体の展開解除不可能――。

――待って、待って待って待って待ってえ!!

――操縦者の多量失血を確認――。

――操縦者の呼吸停止を確認――。

――操縦者の心肺停止を確認――。

——操縦者の生命バイタル・サイン反応消失を確認——。

——わゝ あああああああああつっつ!!! やだああああああああつっつ!!!

——死んだ。

『オゝオゝオゝオゝ ツツツ!!!』

ステージの全体に響き渡る咆哮。それは正しく勝者だけが許された叫び。この戦いに勝ったのは夥しい血を浴びた『黒の剣士』であった。

「——」
彼女は呆然とするしかなかった。自身を象ったソレが、彼を斬り殺した。その目には絶望だけが映っている。全てが嘘でいて欲しいと、全てが幻であつて欲しいと、そう切に願う。

だが、それは絶対に叶わない。これが現実だ。これが真実だ。彼は——目の前で死んだのだ。

「……いっつもそうだ。何で、みんな俺を置いて傷付いていくんだ。何で……何で……」
その言葉を返す者はいない。そう、これは只の独り言。それは一夏自身も良く理解していた。

泣きながら一夏は怒りの表情を露にし、右手に『雪片式型』を、左手に『葵』を持ち、構える。

『武装を確認。撃退対象と認識』

「行くぜ偽者野郎つつつ!!! 今度は俺が相手だあああああつつつ!!!」

一夏は叫びながら『黒の剣士』に立ち向かう。戦いはまだ終わらない。

第二ラウンドが今、始まる。

第四十五話

濃い灰色だけの世界に、彼女はいた。

「わ、ああああああああつっ……!!」

物、風景、それ等が見当たらないその場所には腰にまで伸びている銀色——と言うよりは灰色と言える長髪を垂らす少女が一人。服も髪と同様に灰色の汚れたワンピースを纏う彼女は両手を顔に宛がい、膝を付いて激しく嘆き泣く。その目前には一つの空間、ディスプレイが浮かんでいた。

そこに映るのは複数の一本線と『0』の数字。その線の全てが一切と波打つ事は無く、無機質で不気味過ぎる電子音を辺り一面に響かせていた。まるで、何かが終わってしまったかの様に。

そう、ここは『灰鋼』に搭載されているISコアの電脳世界。コア・ネットワークと呼ばれている彼女達だけの空間。ほぼ全ての人間が解明出来ないその世界には確かな意思が存在していた。

そして——そこで今も泣き続ける彼女は人類にこう呼ばれている。

I S コア。コアナンバー『〇一九』と。

「あ、あ、あ、あ、あ……！」

空間ディスプレイから響き渡る電子音。それが彼女を未だに慟哭させる。その画面に映るのは、紛れもなく青年——隆道の心電図モニター。その表示が意味することは確実な“死”である。

これは嘘でもない、夢でもない、幻でもない。これが現実だ。残酷な事実だ。無慈悲な真実だ。

隆道は敗北した。そして——死んだ。

どれだけ泣こうが、どれだけ喚こうが、決して現実は変わらない、変えられない。絶対にだ。

ありとあらゆる手を尽くそうにも、彼女は何も出来やしない。『猛犬』の活動限界によつてほぼ全ての機能が停止した今となつては。出来る事と言えば嘆き泣くぐらいし

かなかった。

ずっと泣き続けていたのであろうか。次第にとそれは小さくなっていき、彼女は涙を拭いながら心電図モニターとは別の方へ目を移す。

「ぐずつ……！……！」

完全に泣き疲れてしまった彼女は何も無い所へおもむろに手を翳す。すると、そこに現れるのは一つの空間ディスプレイ。破損しているが故か、その画面の半分以上はノイズが走っていた。

そこに映るのは『灰鋼』から走る火花や紫電。血の海となった地表。そして——奥に見えるのは二機のIS。それ等は今、激闘を繰り広げている。

片や、二刀で戦う純白たる機体——『白式』。片や、血で染まった黒の機体——『黒の剣士』。その二機は凄まじい速度で何度も刀をかち合い、その場から一歩たりとも譲りはしていない。

それは正しく互角——いや、よく目を凝らすと『白式』の方が押され気味であった。二刀という倍の手数でも『黒の剣士』はそれを全ていなし、洗練された動きで刃を振るう。先程よりは動きが鈍くも、十二分過ぎる戦闘力を保っていた。

「……もう、いよいよ」

最早、彼女にとっては関係無い事だ。

彼を守りたかった。彼を助けてあげたかった。彼と——少しでもお話をしたかった。

その全てが今、絶対に叶わなくなつた。唯一の活動源を失つた以上、何一つ行動を起こせない。無気力、投げ槍、自暴自棄。正にやけくそだ。

もうどうなるうが知つたことか。勝手にしろ、どうにでもなれと思考が深い闇へと沈んでいき、とうとう塞ぎ込んでしまう。

目の前で続く死闘も、されるがままの連中も、十年前の大事件も、自分自身も、その自分自身を作り出した人間も、何もかもがどうだつていいし考えたくもない。一層の事自分も壊して欲しい、終わらせて欲しいと、彼女は願つた。

と、その時——。

「……………」

——ふと、背後に何かを感じた。

そんな筈は無い。この世界は今や自分だけだ。他他の15コマ者が来ても徹底的に弾く、そう設定している。ならば、自身の後ろから感じるこの感覚は？

火花と紫電を走らせる、完全に大破した機体。生気を一切感じ取れない、深々な傷のその身体。辺りを漂う鉄臭さは機体からなのか、または彼の身体からなのか、それともその両方からなのか。わからないしわかりたくもない。

応急処置をしようとも、どこからどう見ようと理解してしまう。した所でそれは無駄なのだ。瀕死ではない——確かな”死亡”。

「……………」

言葉が出せない。身体が動かない。ボロボロと涙が溢れ落ちていつてしまう。泣いた所で何かが変わる訳でもないのに。それでも、彼女は泣く。誰に見られようとこの際気にはしなかった。

この社会と女性、そしてISを憎みに憎んだ彼は己の身を削ってまで弟の一夏を庇い、支えた。

危険を顧みずに武装集団に生身で立ち向かい、満身創痍になっても真耶達を助けた。

誰にも一切と頼ろうとせず、たった一人だけでシャルロットの暗殺計画を阻止した。

暴走してしまつたが、男性操縦者襲撃事件にて巻き込まれた筈を守つた。

その様な人間の最後が、末路が、コレなのか。

報われなさ過ぎる。酷過ぎる。

この様な事があつていいものか。彼がいったい何をした。残酷にも程がある。他者の為に動いた彼が、こんな目にあつて良いなど許せやしないし許してはならない。

しかし、どう嘆こうと事實は変わりはない。彼は——ここで終わつてしまつただ。

「うわあああああつっつ!!」

「ま、待つてよ篠ノ之さん!!」

そんな絶望の真つ只中、ステージの出入口から全力で駆け付けるのは箒とシャルロット。AEDと医療キットを抱える彼女達は今や必死の形相。

一夏達の様子を見るべく、こつそり出入口から覗いた時にはこの惨状。血相を変えて

必要そうな物資をありつたけぶん取ってきたのであった。

「……………」

「ち、千冬、さん!! AEDと医療キット持ってきました!! こ、これでつ、これで……!!」

「はあつ、はあつ……織斑先生! 早く——」

全力で走つたが故に息切れたシャルロットは顔を見上げ、即理解した。せざるを得なかつた。何故、彼女が応急処置処か何もすらないのか。そして何故、ただただ泣いているのか。

「いったい何をしているんですか! 早く、早く応急処置を——」

「篠ノ之さんつつつ!!」

「!!」

「駄目、だよ……。もう、もう……!!」

「——」

絶句。

シャルロットも、箒も、硬直する彼女と同じく崩れていき、ばしやりと飛び散るその血が彼女達を深い絶望へと引き込んでいく。

「嘘、だ……。嘘ですよね……。? 千冬さん?」

「……………」

「何とか言って下さいよっつっ!!」 それでも貴女は世界最強ですかっつっ!!」

「……………」

彼女は何も喋らない。彼だけを見詰めて、ただ呆然とするばかり。それが箒を現実へ無理矢理に引きずり出していく。嫌でも理解してしまった。

二人は彼女と同様に言葉を失い、流れ出すのは大粒の涙。それは頬を滴り、血溜まりに落ちる。

今や、彼女達に聞こえるのは遠く離れた場所で響く金属音と二つの雄叫びだけ。しかし、それを見る余裕は一切と無かった。

「「……………」」

運ぼうにも、彼は大破した機体を纏ったまま。教員や代表候補生達は来賓と生徒の避難によつてここに残されていない。ここにある訓練機は全て整備中、教員用は全てが具現維持限界。残された唯一のISは——箒が乗り捨てた、戦闘不能状態の『打鉄』一機。パワー不足で彼を運べやしない。

他のアリーナから機体を持ち出して一夏の戦闘に介入するという考えは今の彼女には無かった。完全なる無気力。心がボツキリと折れていた。

最早、彼女達に出来る事は——何も無い。

「……………？ なん、だ……………これは……………？」

「……………？」

その時だ、千冬がソレに気づいたのは。

ぐしゃぐしゃな顔となった彼女は彼の首元へと視線を向けていた。二人はそれに釣られ、視線を同じく彼の首元へ向ける。その目に留まったものは——首輪。それは何故だか点滅し始めていた。

彼の発症時とは違う、赤ではなく青の点滅。そこから壊れかけのラジオの様に電子音が鳴り、彼の目の前には凄まじくノイズが走るホログラムが現れる。そこに映ったものは——。

— C …… R …… V、 T …… —

— C …… R V、 T —

— C R V T —

——全く以て理解出来ない文字。しかし、千冬だけはその文字に既視感があった。

『灰鋼』に発現した、未だ謎めいたシステムの一つ。一切の解明が出来なかつたそれが、まさか今ここで起動するともいうのか。だとしても、何故このタイミングなのであろうか。

啞然とする彼女達を余所に、首輪は今も尚の事電子音を鳴り続けている。何語かもわ

からない、意味不明過ぎるその文字は次第に変化していく。

——『CЯAH』——。

変化していく。

——『URAH』——。

変化していき、それ等は一気に並び変わる。

——『HARU』——。

完全に並び変わったソレは一つの単語となる。青の点滅は連続し、電子音が鳴り響く。

そして——。

『五、四、三、二、一——』

隆道は、気がつけば全く知らない場所にいた。

「……………んあ？」

辺りは砂浜と海だけ。色を一切と識別出来ないモノクロの世界。音も、匂いも、何もかもが全く感じられない非現実的過ぎるそれに彼は立往生、困惑せざる得ない。いったいここは何処なのか。

辺りを見渡しても砂浜と海があるだけだった。人も、山も、建物も、文字通り何も無い殺風景。まるで音を消した大昔のサイレント映画。全然と現実味が無い。

「ん……………」

本当に何も無い。海辺ならいるであろう生き物ですら、一切と存在していないここはいつたい。

何か無いのかと、彼は足元に目を動かす――。

「……………あ」

そこで彼は気づいた。自身の右腕が無い事に。身体に至る所が傷だらけな事に。残された左手で首元に手をやると、ある筈の首輪が無い。

そうだ、自分は――。

「ああ、そうか。そう、だったな……」

――自分は、死んだのだ。

あの真つ黒なI S――『黒の剣士』に殺された。今もその感触を思い出し、その傷に手を宛がう。

何故か痛みは感じない。出血も止まっている。だとするなら、ここは死後の世界――三途の川の類いなのだろう。そう納得するには大して時間は掛からなかった。何なんだこの男は。あまりにも理解が早過ぎるのではないか。

「……………」

現実ではいったいどうなっているのだろうか。その思考がほんの少しだけ頭を過つていく。

アレは未だに暴れているのだろうか。それとも既に事は済んだのだろうか。一夏は自分の亡骸を見て何を思っているのだろうか。光乃や章吾達は——自分の死に対してどう思うのだろうか。

それに、光乃に頼んだ例の件も——。

「……まあ、いいわ。もう関係ねえし」

考えた所で何も出来ない、どうしようもない。ただ負けて、その結果死んだ、それだけの事だ。悔いた所で何も変わらない、何も変えられない。

故に、彼は考えるのを止めて一人寂しく歩く。いや、今の彼に寂しさという概念は無いだろう。

「地獄は……何処かな、と」

平坦な砂浜を歩き続ける彼は独り言を呟いた。

自分が今までしてきた事は悪行極まる行為だ。暴力を肯定し、今まで散々と暴れ散らした自分が天国に行けるなど微塵足りとも思っていない。行き先は地獄しかない。常日頃考えていた。

父親にも、愛犬にもあの世では会えやしない。それはあの時——『罫體』になった時から覚悟を決めていた。今更になって後悔は無い。

いったい地獄とはどういったものであろうか。百三十五種類あると言われている

が、はたして自分ほどの部類なのかと何処か他人事であった。

「……あん？」

歩き続けて暫く、彼は見つけ出す。浅瀬に佇む人影を。それはとても遠く、ここからでは全くと視認出来ない。というより人なのかすら怪しい。

故に、彼は足を速める。ソレを確かめるべく、競歩に近い速度で近づいていく。

歩く事、暫く。漸くと彼はソレに辿り着いた。ソレの正体は――。

「……!!」

そこにいたのは一人の男性。その男性は此方を真つ直ぐに、そしてしつかりと捉えている。

中肉中背で短髪姿である、至つて普通の中年。スーツをしつかり着こなすその男性はどこにでもいそうな、何の変哲も無いサラリーマン姿。

「――」

しかし、彼はその人物をよく知っている。

否、知っているも何も忘れる筈がない。何せ、その男性は去年亡くなつてしまつた――。

「親父……!!」

——自身の父親——光輝。

「は、はははは……。何だよ、別れの挨拶させてくれるのか、閻魔つてのはよおつつつ!!!」
彼はつい笑ってしまった。二度と会う事が無い筈の人物が今、目の前にいるのだから。

こんなチャンスはもう一生無いだろう。故に、彼は喜びを隠さずに喋り始める。

「はははははは……!!! 親父……見ての通り俺、死んじまった。こんなにズツタズタになつてよ。今までのツケが回つちまった」

「……………」

「まさかこんなに早く会えると思つてなかつた。それならもつと早くくたばるべきだつたかなあ。だつはつはつはあつ!!」

「……………」

笑いながらも語る彼に対し、光輝は一切と口を開かない。それでも、彼は語る。語り続ける。

「……再会して早々悪いけどよ、俺は……親父やハルと一緒にの所にはいけねえ。地獄行き確定だ。なあ、天国にいた親父ならわかるだろ? 俺が、俺がやつたくそつたれの数々をよ」

「……………」

「けどよ、もう良いんだ。俺はあのくそつたれな世界とおさらば出来る、それだけで充分なんだ」

「……隆道」

「……………!!」

その時であつた。光輝が漸く口を開いたのは。

その声は紛れもなく父親の声。彼の耳に届き、それはより一層と大きな喜びとなる。

「何だよ、喋れるじゃねえか！　んで、何だよ？」

「……………」

「あん？　いや、聞こえねえよ」

「……………」

「だから聞こえねえって」

光輝は確かに何かを喋っている。だが、彼にはそこだけが聞き取る事が出来なかつた。もう一度聞き返しても聞こえない。何を言っているのかわからないが、何かを訴えているように思える。少なくとも彼にはそう感じていた。

呼び掛けは聞こえた筈。なのに何故、今は声が聞こえないのか。それがもどかしく感じる。

「ああ、くそつたれが。……何なんだよ、もつとハッキリ喋ってくれつて!!」
「……………」

そう言うのと、光輝はその口を閉ざし、首を横に振った。意味が全くとわからない。まるで何かを拒否しているかの様な仕草だった。

「あん？ 何だよそれ」

「…………お前は知るべきだ」

「は？ ……あ、ちよつ!」

光輝から聞こえたのはその一言だけ。そして、そのまま彼から離れ歩き始めていく。深い海へ、一切と振り返る事もせず。

さっぱりわからなかった。言葉の意味は何だ、首を横に振った理由は何だ、何処へ行くのか。

まだ話し足りない。語りたいたい事は山程にある。まだ行かないでくれ。地獄に行く前に言いたい事全てを言い切りたい。

「ああ、つたく。今そつちに行く——!?!」

父親の元へ向かおうとしたその時、突然左腕を引つ張られた。感覚からして小さな手。

辺りに父親以外は誰もいなかった。それは先程確認したばかりだ。では、左腕を強く

掴むコレは何なのだ。まさか、地獄へ導く『何か』なのか。

仮に、そうならば——もう時間切れなのか。

「……………ふうっ」

固まる事、約数秒。彼は唾を飲み込み込み深呼吸、意を決して振り向く。そこには——。

「……………は？」

「……………ぐずっ」

——灰色の長髪をした、啜り泣く少女がいた。

何故だか色を識別出来るワンピース姿の彼女は彼の左腕を握り締めて、離そうとはしなかった。その小さい手はとても弱々しく、強く感じる。

こいつは誰なんだ。銀髪のドイツ人とは違う。灰髪など今まで見た事が無い。全く記憶に無い。彼の脳内は疑問だけがぐるぐると渦巻いていく。

「……………誰だ、お前」

「行か、ない、でえ……………」

彼女が言葉を放つ言葉はそれだけ。それっきり彼女はまた啜り泣き、俯いてしまう。それが彼を余計に混乱させた。その言葉の意味はいつたい。

「いや、だからお前誰だよ。行かないでって意味わかんねえぞ。大体俺は死んだんじゃねえのか。だったら行き先は地獄しかねえじゃねえか」

「……………」

言葉を投げ掛けても彼女は俯いて黙ったまま。別に苛ついてた訳ではないのだが、状況が全く飲み込めない以上少々辛く当たってしまった。

焦れたい。とても焦れたい。いつたい彼女は誰なのだろうか、それまで無かった苛立ちが次第に募っていき、彼の言葉は強くなっていく。

「…………たく。黙ってないで何と、か……………」

彼が言えたのはそこまで。何故ならば、彼女を捉えていた視界に——ソレが映ったから。

「——おい、嘘だろ…………？ おい…………!!」

「あつ……………」

彼は彼女の手を強く振り払い、ソレに向かって歩き出す。一步、また一步と。

「マジか…………マジかマジかマジか…………!!」

ソレに近づくにつれて、自然と涙が溢れ出し、最終的にそれは号泣に近いものとなる。目の前がどれだけ霞もうとも、拭う事はせずにソレの目前まで歩みを止めない。

「あ…………あ…………あ…………あ…………あ……………」

何処を触つても暖かい感触。それが余計に喜びとなり、ついハルの顔を思い切り撫で回す。

「ひぐっ……。う。う……」

「ワンツ！」

「……あ？ 何だよハル」

「ワンツ!!」

顔をわしやわしやすするその最中、ハルは大きく吠え始める。まるで何かを伝えたいかの様に。

しかし、犬の言葉などわかりはしない。生前は常に一緒にあつたが、この様に自分に対し大きく吠えるのは初めてであつた。いつたいハルは何を伝えようとしているのか。

「はんっ。死んでも犬語なんてわかんねえ、か」

「ワンツツツ!!!」

「だからどうしたってんだ。何を吠えて——」

——起きろっ!! ご主人っ!!

「!？」

そこで彼の意識は途絶える。

そして、それは起こった。

『零。R. I. C. U. system 『ハル』起動』。

「——がっはあつつつ」

「!?!?!」

「!?!」

「ゲッホオツツ!! オ、ヴェ……!!!」

彼女達の目の前で有り得ない事が起こった。

繋がった電子音と共に『灰鋼』が紫電を全体に走らせた直後、死んだ筈であった隆道が急に息を吹き返す。千冬を含めた三人は突然の事に驚愕を露にした。

——蘇生完了。生体再生に移行——。

——痛覚遮断処置開始——。

——止血処置開始。血液生成促進——。

「「……………」」
「?!?!?!」

彼女達の驚愕はまだ終わらない。なんと、彼の出血は一斉に止まり、傷が一気に塞がり始めた。所々が急速に再生していくそれは完治していき、失明した右目も驚異的な速度で再生されていく。

「あ、あ、……?!? な、ん、……?!?」

——操縦者の右腕を感知。接合開始——。

「——なっ、あ……?!?」

まだ終わらない。機体から飛び出すのは数本のコード。それ等は、千冬が抱えていた彼の右腕を奪い取り切断部位に宛がって高速度で縫合する。

右腕が接続されて暫く、それはびくりと次第に動き始めていく。所々傷跡はあれど、身体はほぼ完治した彼の呼吸は徐々に落ち着いていった。

「「—————」」

彼女達は、先程とは別の意味で言葉を失った。

完全に死んでしまった筈の彼が息を吹き返し、全ての傷が治っていく。開いた口が塞がらない。思考が止まってしまう。人間が蘇生した話自体は聞いた事はあるが、こうも目に見える速度で傷が治るなど前例が無い。有り得ない。

しかし、今は呑気にしていられない。彼女達は咄嗟に我に返り、彼に近づいていく。

「お前、意識が……!!」

「ゲホツ……。あ……。？ 親父？ ハル？」

意識が混濁しているのだろうか、辺りを見渡す彼は突然と意味不明な事を言い出した。

彼の父親はこの世にはいない。だが、ハルとはいいたい。そんな疑問等が彼女達に生まれるが、この際何だつていい。今は彼が最優先だ。

「柳!! しつかりしろ!!」

「柳さん!!」

「……?!?!? ブリュンヒルデ……?!? お前等も……?!?」

「立てろか!? ここから離れるぞ!!」

「ま、待てよ!! げ、げん、じつ……。?!?」

やはり彼は混乱している。理解出来るが一夏が『黒の剣士』を足止めしている今、何としてでもこの場から離脱しなければならない。一刻も早く逃げなければ。

『黒の剣士』は彼を斬り殺した後、確かに抹殺完了と発した。それは彼女の耳にも届いている。

ならば、息を吹き返した彼はまたしても――。

「――っ!? 柳さん、生き返っ――」

『柳隆道の生体反応を再確認』

「——っ!! ぐおおおおおおっつっ!!」

『オ、オ、オ、オ、オ、ツツツ!!』

彼が生き返った事に驚きを隠せない一夏だが、それと同時に『黒の剣士』も音声を放ち、彼へと向かおうとするばかりに攻撃はより一層と激しくなっていく。鈍くなっていたその動きは鋭さと、そして重さを増していった。

「……織斑っ!!? あの黒い奴、まだ……!!」

「やはりこうなるかっ!! 立つんだ柳っ!!」

「待てっつの……!! この……!!」

——ダメージレベルD。修復中——。

——パワーアシスト機能停止中——。

——展開解除を実行……ERROR——。

「ああ、全然動かねえ……。解除も無理だ……」

「くそっ、なんという事だ……!!」

隆道は完治はすれど、機体は未だに大破状態。展開解除も出来ない以上、無防備のままだ。

今、まともに戦えるISなど近くに一機も無い。他のアーリーナから拝借しようも時間

が足りない。今から取りに行っても間違はなく間に合わない。

頼みの綱は一夏ただ一人。しかし、その一夏も徐々に押されつつある事からそれも時間の問題。危機的状況に変わりはしなかった。

「くそつたれが……!! 何か……あん?」

その時であった。彼が何かを思い付いたのは。辺りを見渡し、ソレを見た故の。今の『灰鋼』が出来る、たった一つだけの策だ。有効かどうかはわからないが任せる他無い。

「……おいデユノア!!」

「えっ!? は、はい!!」

「射撃は得意か!」

「え? え、ええ、まあ……」

「アレ……乗って戻って来い」

顎で促す彼は遠くを見ていた。シャルロットはその先を見やると、そこには筈が先程乗り捨てた戦闘不能状態のIS——『打鉄』。損傷しているが動かす事自体は可能であろう。

しかし、あの機体では重い『灰鋼』を運ぶ事は出来ない。まともに戦えはしない。彼はいったい何をしようというのだろうか。

「で、でも、あの機体じゃ……」

(ああ、くつそおつ……!!)

負ける。その言葉だけが一夏の頭を過った。

『黒の剣士』の斬撃がスローモーションの様に見える。もう躲せない、防御すら間に合わない。ここまでなのかと歯を食い縛り――。

『――ゴツツツツ!!?!?!』

好機は漸く訪れる。

「!？」

聞こえたのは大砲と変わらない大きな発砲音。見えたのは頭部分が大きく凹んだ『黒の剣士』。凹み具合から何かぶつかつたと一夏は確信した。

ハイパーセンサーを駆使して後方を見やると、その音の正体は彼等の所から。未だ倒れたままの隆道と耳を塞ぐ千冬と箒、そして――『打鉄』に乗り、俯せ状態で超大型たる狙撃砲を構えているシャルロット。

本来は換装装備であるその狙撃砲は今現在でも超長距離射撃命中率の世界記録を保持している、日本製最高峰の遠距離後付武装。ソレは、隆道が『灰鋼』に量子変換して暫く放置していた――。

——超長距離狙撃砲『撃鉄』——。

これこそが隆道が咄嗟に思い付いた唯一の策。

シャルロットが『打鉄』に乗り、隆道が武器を渡し、狙撃で隙を作る。

それは——成功した。

「もう一発!!」

『!?!』

シャルロットは続け様に二発目を発砲。砲弾は黒い刀に直撃し、折れはせずとも大きく弾いた。先程までの俊敏な動きは——もう無い。

「やっちまえ織斑あああっつっ!!!」

漸くと生まれた、大きな隙。一夏は咄嗟に腰を落として構え、刀を持つその手は自身の背中へと持っていく。その目は真つ直ぐに『黒の剣士』を捉え、そこから発動するのは——『零落白夜』。意識を集中させると、そのエネルギー刃は細く、鋭いものへと変化していく。

『オ、オ、オ、ツツツ!!!』

『黒の剣士』が繰り出す袈裟斬り。だが、最早それは完全に鈍い。それでは只の——。

「真似事だあつつつ!!!」

腰から抜き取つて横一閃。『黒の剣士』の刀を大きく弾く。そして直ぐ様に頭上に構え、集中を極限にまで高め、更に研ぎ澄ます。

そして、『黒の剣士』を全力で――。

「はあああつつつ!!!」

――叩き斬つた。

『ガッ………』

千冬の教えに習い、箒の姿に学んだその構え。それは一足目に閃き、二手目に断つもの。

――『一閃二断の構え』――。

硬直し、紫電を全体に走らせる『黒の剣士』。その紫電はやがて大きくなり、真つ二つとなる。そこから現れるのは眼帯が外れて金色の目を露にする、血だらけとなつたラウラ。

「おっと!!」

「――」

一夏は倒れ行くラウラを直ぐ様に抱え込んだ。アザ等を残し、血が滲むその姿は酷く弱々しい。

「うわ、ひでえ傷……」

「——ガボツ……ゴホツ……」

「……っ!!? 千冬姉っ!! 手当てをっ!!」

「っ!!? ラウラアアアツツ!!」

一夏の呼び掛けと共に千冬は駆け出していく。血溜まりの場には隆道と箒、そしてシャルロットの三人が取り残される。

「お、終わった、のか……?」

「やっど、ね……」

「……はああああああ」

終わった。漸く終わった。

箒はその場にへたり込み、シャルロットはISを展開したままで寝そべる様に脱力してしまった。ほんの数分間とはいえ、今までの人生で最大級の極限状態だったのだ。隆道の血やら土埃やら涙の跡やらで身体中汚れまみれなのだが、今の二人にそれを気にする余裕など少しも無かった。

「はあ……。兎に角、これで……?」

「……………？ どうし——」

箒達はそこで気づく。動けなかった筈の隆道が立ち上がっている事に。その視線はあらぬ方向へ向いている事に。

「……………柳、さん？」

「——」

返事はない。その視線の先には——何も無い。

いや、そこには確かにソレがいる。視認出来るのは彼一人だけだ。

「……………ハル」

——無理矢理起こしてごめんよ、ご主人。

「……………待つて、くれよ」

彼は手を伸ばす。半透明な——ハルに向けて。

「行かないでくれ……………俺は……………!!」

——どうか、あの娘を許して欲しい。あの娘は機械に操られた、ただそれだけなんだ。

「何言ってるんだよ……………!!」

呆然とする箒とシャルロットなど知らず、彼は更に手を伸ばす。届きも、触れも出来ないのに。

第四十六話

……強さとは、何だ。

——俺もよくわかんねえ。強いて言うなら心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思う事じゃないかと、俺は思う。多分な。

……何だ、それは……。

——だから言っただろ、よくわかんねえって。なんて言えば良いのかな……。ああ、あれだよ。自分がどうしたいかもわからねー奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないもんなんじゃないか？

……歩き、方。では、お前は？ お前は何故、強くあろうとする？ どうして強い……？

——馬鹿言うなって。俺は強くねえよ。俺は、全く、強くない。俺だって自分探しの最中だし。あの人がよっほど強い。

……何、だと？ 自分探し？ あの人の？

——おう。自分が何をしたいのかを。あの人は本当に強いぞ？ 自分だけで精一杯の筈なのに、俺や箒達を助けて、支えてくれたりする。本当に頭が上がりねえよ。お前

にだっているんだろ？ 助けてくれた人が、支えてくれた人が。

……私、は……。

——お前もやってみろよ。自分探しを。

時刻は夕方。I S 学園の特別医療室にて。

「——う……ああ……」

ぼんやりとした光、香る薬品の匂い。それ等によつてベッドに横たわる少女——ラウラは意識を取り戻す。それと同時に襲い掛かってきたのは全身に走る激痛であつた。

「——イ、イツ……!?! はあつ……」

いつたい何が起こつたのか。身体が思うように動かない。激痛にその顔を歪めつつ、おもむろに自身の手を見ると満遍なく巻かれた包帯が。顔も布の感触がある事から、自分には包帯まみれという結論に辿り着くのは簡単な事であつた。

しかし、その記憶が全く無い。覚えているのは学年別タッグトーナメントの一回戦。

対戦相手の少年——一夏に最後の最後で一撃をモロに受け、『何か』が自身に囁いた。その後は謎の空間で彼と臆気な会話をしたという事だけ。全く以て状況が理解出来ないでいた。

「……？ 何、が——」

「気がついたか」

突然と隣から聞こえた声。その声には聞き覚え——いや、聞き覚え処ではない。ソレは一瞬で判断出来た。自らが敬愛してやまない——。

「……教、官」

「…………」

隣に首を動かすと、そこにはぐったりと椅子に座り込む千冬が一人。その目は何故か赤く腫れ、全身からは脱力感が漂っている。その姿は自身がよく知る世界最強では無かった。

わからない。何故、そんな表情なのか。何故、そんな姿なのか。いつもの凛々しきは、いつもの堂々とした姿は何処へ行ったのか。

「どう、したんですか……？ 私、は……？」

「全身に多大な負荷が掛かった事による筋肉疲労と打撲、外傷が多数だ。暫くは動けないから無理をするな」

「何が……起きたのですか……？」

「……………」

上半身を起こす彼女はじつと千冬を見詰めた。痛みにより顔は再び歪むが、瞳だけは真つ直ぐ。包帯の間から見える、右目の赤色と左目の金色。そのオッドアイが千冬に問い掛ける。

見詰める事、暫く。黙り込んだままである千冬は小さく息を吐き、漸くその口を開く。

「……………重要案件である上に機密事項だが、当事者のお前には知る権利がある」

「……………」

そう言つて千冬は側にあるリモコンを操作し、彼女の前に空間ディスプレイを呼び出す。そう、彼女は絶対に知らなければならない。

未だ疑問の表情を浮かべる彼女を余所に、千冬は操作を続けて一つの映像を出す。それは忘れる筈も無い、一回戦の試合。それを早送りし、彼女の機体が変異した所で一旦停止した。

「『V. T. システム』は知っているな？」

「……………正式名称『ヴァルキリー・トレース・システム』。過去のモンド・グロツソの部門受賞者達、その動きをトレースする……いや、確かアレは——」

「そう、条約でどの国家、組織、企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている。

それがお前の I S に積まれていた」

「……!!」

「巧妙に隠されていた。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ。そして……何より操縦者の意志——いや、願望か。それ等が揃うと発動する様になつていたらしい。我々 I S 学園だけでなく、各国がドイツに問い合わせている。何れ、I S 委員会からの強制捜査が入るだろう」

淡々と語る千冬。それを聞いた彼女は痛みなど忘れてシートを握り締めた。視線はいつの間にかうつむき、彷徨つてしまう。

千冬になりたいと望んだが、なつたのはそれとかけ離れた——『別の何か』。

「私が……望んだからですね……」

「……ラウラ」

「は、はいっ」

ファミリィネームではなく、教官時代に呼んでくれた名前呼び。この I S 学園に来てから呼ばれる事の無かつたその名前を、千冬は確かに呼んだ。その声は何処か優しく、何処か哀しげで。

「お前はラウラ・ボーデヴィツヒだ。他の誰でもない、たった一人の、人間なんだ」

「あ……」

「お前にはなれないぞ。……いや、なっちゃいけないんだ。お前は、お前なんだ」

意外過ぎる千冬の言葉に彼女は口を開く事しか出来ない。それは励ましなのか、または別の何かなのか。今の彼女には全くわからないでいた。

「……さて、ラウラ。お前には知る権利がある、私はそう言ったな？」

「は、はいっ。何か……？」

『V・T・システム』も問題だが、それより大きな問題がその後が発生した。……正直言うと、私はもう二度と見たくはない」

「……何を、言っているのです？」

「再生するぞ」

そう言った千冬は震えるその手を無理矢理抑えてリモコンを操作する。停止していた映像が再生され、彼女の目に留まったものは——更に装甲や人体部分が鮮明となった『V・T・システム』。

「……!!」

「柳の回復装置によって『V・T・システム』は更に変異、驚異的な戦闘力を手に入れた。鎮圧にきた部隊は一瞬で全滅、その後柳を襲った。最低で、最悪なプログラムによってな」

「……………それは？」

「……………『灰鋼』の破壊と柳の抹殺だ」

「なっ——」

『V・T・システム』が発動した際に機体にエラーが発生し、二つのプログラムが追加されていた。その後どうなったかは……………その目で見た方が早い」

絶句する彼女に、千冬はディスプレイを見ろと促す。視線を戻すと、映るのはステージの中央で激闘——いや、死闘を繰り広げている三機のIS。千冬を象った自分自身、それに立ち向かう隆道、そしてそれに介入する千冬の姿。響き渡る怒声とかち合う金属音が彼女の耳に届く。

競技などとても言えない斬り合いと殴り合い。試合みたく生温いものではない。一目見ただけで嫌でも理解してしまう。それは正に——殺し合い以外のなにものでもなかった。

そして、彼女は見た。見てしまった。

彼が次第に傷を増やし、血塗れになる光景を。右腕が斬り飛ばされる、その瞬間を。胸に凶刃が貫かれる、その瞬間を。袈裟斬りで崩れ落ちる、その瞬間を。そこから広が

る——血の海を。

「……やはり、くるものがあるな」

「」

「生体反応消失のログも出ている。間違いなく、確実に、あの場所で……柳は、死んだ」

「——っ?!?!」

彼女に襲い掛かるのはとてつもない程の悪寒。それが彼女を震わせ、縮こませた。

柳隆道を——殺した。

世界で二人しか存在しないその片方を、自身が死に追いやった。代表候補生である自分が、軍人である自分が、殺した。

彼女は目の焦点が合わなくなってしまふ。呼吸が徐々に乱れ、そして荒くなる。

確かに彼女は彼等を排除しようとした。だが、それは千冬に自分を見て欲しい、認めて欲しいが故の歪み——所謂、只の嫉妬。

彼等を排除した所で何も変わらない。変わったとしても何も得られない、全てを失うだけ。

人は過ちを犯した時に漸く気づくものだ。今の彼女が正にそれだろう。

それに気づいた彼女だが——もう遅い。

「わ、わた、わたし、は——」

「ラウラアツツツ!!!」

「——!?!」

暗い闇へ墜ちそうになるその瞬間、千冬の声によって引き戻された。目の焦点を無理矢理戻し、千冬の方を見やる。

「まだだ。まだ終わっていないぞ」

「終わって、いない……?」

「最後まで見ろ」

再びディスプレイを見るよう千冬に促される。視線を戻すと、今は白いISS——一夏が自分自身と戦っている。雄叫びを上げながら。

しかし、だから何だというのだ。彼は確実に、間違いなく死亡した。それは揺るぎ無い筈だ。

「柳をよく見ておけ」

「……………」

彼女は言われるがままに深々な傷を残した彼を虚ろな目で注視する。

どこからどう見ようと彼は死んでいる。千冬は自分にいったい何を見せるつもりな

のか。

ディスプレイを注視して暫く、それは起こる。

『——がっはあつつつ?!?!』

「!?」

『ゲッホオツツ!! オ、ヴェ……!!』

彼女は刮目せざるを得なかった。死んだ筈の彼が息を吹き返した。しかもそれだけでなく、深々とした傷は急速に再生し、切断された腕も接合、それは動く。最終的には血塗れであるものの、全ての傷はさっぱりと無くなっていた。

そして、事態は終息を迎える。シャルロットの狙撃と一夏が放った一撃。それによって暴走した機体から血塗れの彼女が放り出され、そこで漸く映像が止まった。

たった数分間の映像。しかし、彼女にとってはそれがとても長く感じられる程の出来事。

有り得ない、不可解だ。彼女もまた、千冬達と同じくして呆然とするしかなかった。「いったい、何、が……」

「柳の機体に操縦者の蘇生と生体再生システムが組み込まれていた。臓器も含めて全て完済済み。今は徹底的に検査をしている」

「……はあつ。生きて、いるん、ですわね」

「ああ、結果的に怪我を負ったのはお前だけだ。しかし……」

千冬の言う通り、怪我を負ったのは彼女だけであるが、彼が死亡した記録は確と残されている。その意味する事は――。

「この記録は……既にIS委員会に知られている。男性操縦者に危害を加えた責任は誰が取るのか。あんなものを積んだドイツが責任を取るのか……お前が切り捨てられるのか……。恐らく、後者の可能性が非常に高い……」

「……………」

――責任の押し付け。

恐らく、ドイツは知らぬ存ぜぬを貫くだろう。自国は一切と関係無い、軍が勝手に搭載したと。そうなれば責任は彼女の所属する軍になるのか、その軍にすら切り捨てられて彼女だけになるか。

そんな事――千冬は絶対に許しはしない。

「……安心しろ。もしも、そうなれば私は全力で抗議して見せる。守って見せる。何せ……お前は私の生徒、なのだからな」

「教、官……」

弱々しくも、真つ直ぐと彼女を見詰める千冬。その瞳に偽りは一切と無かった。例え、IS学園に留まれる可能性が限り無く低くあろうと。

だが、自身の過ちに気づいた彼女は今や冷静。末路などわかりきっている。故に、彼女は――。

「……あの、教官。私の事はもう……?」

「……? 何だ?」

その時だ。廊下から何かが聞こえたのは。

「――!!」

「――!!」

聞こえるのは二人の声と足音。どちらも大声を上げているが、片や怒鳴り声に近いもの。それは次第に此方へ向かって来ている。

「駄目ですよ柳君っ!! お願いですから戻って下さいっ!! まだ検査はっ!!」

「いい加減にしろ牛眼鏡っ!! いったい何時間検査すれば気が済むんだっ!! 怪我なんか無えって言っつてんだらうがっ!! それより――」

「ああっ!! そこはっ!!」

自動ドアが開き、ズカズカと室内へ入り込んで来たのは隆道と、遅れてやって来た真耶の二人。彼は今、制服の上着を脱いだYシャツ姿であった。

そう、彼はまたもや脱走したのであった。四月の事件以来の脱走だ。この男、もう少し大人しくしてられないのだろうか。

それも仕方無いかもしれない。何せ、錯乱したその後に徹底的な身体検査と怒濤の事情聴取だ。午前中から夕方までに掛けたそれ等により、彼は再度気が狂う寸前までに達していたのであった。安否を確かめる為とはいえ、今の彼を長時間拘束するのは流石に無理があった。

「……よお、ブリュンヒルデにドイツ人」

「柳……！ おま、え……！」

「……！」

彼を見た二人は、言葉を詰まらせた。

彼の傷は完全に塞がった。それは確かである。しかし、傷痕と後遺症が残ってしまった。た。

彼女達の目に留まったのは彼の右顔面。額から右目を通過し、顎まで到達した一本の太い傷痕。

そして、黒色の左目とは違う——灰色の右目。

「……ああ、これ？ 虹彩異色症で言ってたな。他は何て言ったか……ああそう、オツドアイだ」

「…………」

「何しけた面してんだ。目は見えるんだから何も問題ねえだろ。傷痕なんて増えただ

け、今更だ。本当はあのままくたばりたかつたんだけど、な。はっ、ははっ、はははっ」乾いた笑いをする彼は、傷痕と右目には一切と意に介して無い様子であった。先程までの怒声もまるで嘘の様にすっぱりと消えている。

それが、逆に彼女達の心を更に締め付けた。

何故、そこまで自分を無下に出れるのだ。

何故、そこまで平気でいられるのだ。

何故——笑っていられるのだ。

今は生きていたとはいえ、一度は死んだ身だ。平常心でいられる筈は無い。絶対に有り得ない。なのに、それを気にしている様子は一切と無い。

狂っている。

彼女達は背筋に悪寒が走った。正気ではない。マトモではない。頭がおかしい。彼

にそんな感情など抱きたくないのに、嫌でもそう感じさせる。

そんな彼女達の心情などつゆ知らず、彼は近くにある椅子に凭れ掛かり、彼女を見詰める。

「よっこいせと。……ほー、随分弱々しくなつたもんだ。今までの高圧的な態度は何処行つた？」

「……柳、何しに来た。まさかラウラを——」

「様子見」

「——何……？」

「報復するつもりでも思つたのかよ。まあ……少しは考えたさ。……けどよ」

その濁つた目は真つ直ぐに彼女を捉えている。何かを見定める様に。それに対し彼女も弱々しくあれど、少しも目を逸らさない。

弱々しくある彼女からは敵意を一切感じない。まるで捨てられた子犬の様で、同時に何かしらの覚悟を決めた目付き。それは今までに会つた醜い畜生共と全く違うものであつた。

「……………」

本当は彼女をここで仕留めるつもりであつた。徹底的に壊し、全てを奪う。その氣であつた。

彼女は一夏を脅かす存在、即ち——『敵』だ。自身の『敵』でもある。なら、動けない今こそが千載一遇の好機。故に、態々この部屋へと来た。

——どうか、あの娘を許して欲しい。あの娘は機械に操られた、ただそれだけなんだ。

しかし、最後に聞こえたあの言葉が頭に響く。

それは何度も反復、大きくなっていく。ハルがそれを決して望まない、そう訴えてるかの様に。

彼の行動力は基本的に他者の為。だが、それを上回るものは一つ——今は亡き家族だけである。もし、あの時の声が本当にハルだとするならば。

彼女の『V・T・システム』に関しては事情聴取で嫌と言う程聞いた。あとは——確かめるだけ。

「おい、ドイツ人。織斑が憎いか」

「……もう、そんな想いは、無い」

「……ほー」

嘘は言っていないであろう。それは声でわかる、顔付きでわかる、目でわかる。

だからこそ——徐々に敵意が薄れていく。

「勝手に嫉妬して……それで勝手に毛嫌いした。ただ、それだけだ。私は只の、愚か者だ……」

「……はんつ。じゃあもういいわ」

仕留める理由が今、綺麗に消えた。

最早、彼女の事などどうでもよくなっていた。敵意が無いのなら此方も大人しく引き下がる。彼女が今後どうなるかと知らない。関係ない。

それにだ。自分も勝手に暴走し暴れ散らした。言及する資格など少したりとも無い。死んだのは自業自得、その結論に辿り着くのは早かった。

ここに居座る理由はもう何も無い。それ故に、彼は立ち上がりこの場から去ろうとする——が。

「ま、待って、くれ……！」

「……あん？」

不思議と、彼はその足を止めた。もう話す事は何も無いというのに。

だがしかし、足を止めた以上は仕方の無い事。故に、彼は振り向いて耳を傾ける。

「聞きたい、事が、ある……」

「……なんだよ」

「織斑一夏が言っていた……。何故、お前は人を助ける？ 何故、お前は人を支える？」

自分探しとは……いったい何をすれば良い……?」

「……………」

ラウラは不思議で仕方がなかった。

謎の空間で一夏が言っていたあの言葉、それを知りたいが故の問い。あれ程の強さを持つ一夏が強いと断言する彼は、いったい何者なのか。その欲求だけが彼女を駆り立てていた。

沈黙する事、暫く。彼はその口を開く。

「……さあ、なんでだろうな。あと、自分探しは文字通りだ。自分で探せよ」
はつきりとした答えは——返ってこなかった。

時刻は過ぎ、夜。食堂にて。

『学年別タッグトーナメントは事故によって中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係する為、全ての一回戦は行います。場所日時の変更は各自個人端末で

確認の上——』

テレビに流れ出る帯。それを見た多数の生徒は酷く落胆をしていた。その沈みっぷりは遠くからでもわかる。何故、彼女達は落胆しているのか。

覚えているだろうか。トーナメントで優勝した者はどんな報酬を得るのかを。

『学年別トーナメントの優勝者は男子三人の誰かと交際出来る』

そう、例の噂を信じきっていた彼女達は報酬が無効になった事に嘆いていたのだ。優勝した所でそんなふざけた話を通る訳無いのに。お花畑か。

「交際……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわああああんつつつ!!!」

そんな数十名が泣きながらも走り去っていった食堂の片隅。そこにはこれでもかと言う程に暗く沈んでいる生徒が三人いた。雰囲気だけでなく、表情もかなり暗い。まるでそこだけが別空間。

「「……………」」

その三人——一夏と箒、そしてシャルロットはテーブル席で黙り込んだまま。そこには食事など一切と無い。いや、今の彼等に食事を出した所で恐らく食べやしないであろう。それ程に気持ちが悪く沈んでいる。先程走り去っていった彼女達の様な活力は微塵た

りとも無かった。

彼等が来たのはつい先程。教員から事情聴取を受け、解放された頃には夜。取り敢えずは食堂へ行くかと席を確保したら生徒達から質問の嵐が。

言えない、言える訳が無い。重要案件である上に機密事項。仮にそうでなかったとしても言える内容ではない。絶対に。

故に、はぐらかして人を払った訳だが――。

「……なあ。なんか、食おうぜ」

「……食べればいいだろう。私はいい」

「……僕も、いいかな」

完全に気が滅入っている。腹は空いてはいるが喉を通る気が全くとしない。オーダーストップの時刻もあと数十秒程となる。彼等は何しに食堂へ来たのであろうか。

黙り込み続ける三人。だれも声を発しようとはせず、ただただ時間が過ぎていくのみ。人は次第に減っていく、食堂には彼等だけが残った。

そして、ついに耐えられなくなった者が一人。

「夜風に当たってくる」

箒は立ち上がり、逃げる様に去っていった。

無理もないだろう、あの惨劇を見た後では何も食べられやしない。完全にトラウマも

のである。勿論、彼女だけではない。残された二人も同じ。

親しい者の”死”。それは誰だろうと生涯で一度は遭遇するものだ。だが、それが寿命以外である突然のものであったならショックは凄まじい。

結果的には隆道は生き返り、五体満足な身体に戻った。それでも——一度死んだ事は事実だ。

「……………」

気まずい。非常に気まずい。話題を捻り出そうにも話題が出てこない。一夏も、シャルロットも同じく考えなのだろう。頭を悩ませている様子。

何か無いのかと精一杯に悩む彼。そこでふと、ある事を思い出した。

「……………そういえば、ちよつと聞きたいんだが」

「うん、何？ 何でも聞いて」

これには彼女も願ったり叶ったり。会話が無いこの状況に危うく耐えられそうに無かったのだ。可能な限り会話を続けようと気分を切り替える。

「ISで会話って出来るのか？ その……秘匿回線とは違う、二人だけの空間みたいな所での会話」

「……………多分、操縦者同士の波長が合うと起こる、特殊な相互意識クロッシングアクセス干渉かな。情報交換ネットワークの影響だつて言われている」

「波長、ねえ。なんかよくわからん」

「ISはよくわからない現象や機能が多数あるよ。開発した篠ノ之博士は全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、前にインタビューで自己進化する様に設定した部分があるから、全て把握するのは無理だって言ってた気がする」

「自己進化……か」

隆道のIS——『灰鋼』が正にそうなのだろう。他の専用機とは違った、常に進化——いや、変異していくあの機体が。研究員ですらない一生徒の自分達が把握するのは絶対に不可能だ。

尤も、彼等も、研究員も、開発元である篠ノ之束も、絶対に把握する事は出来ない。非科学的な存在が隆道の側にいるのだから。

「……………」

またしても会話が途切れる二人。もう、話題が浮かんで来ない。完全にネタ切れだ。もう帰ろうかと思った、その矢先——。

「織斑君にデユノアさん、ここにいたんですね。事情聴取お疲れ様でした」

——真耶、現る。

探していたのか、此方を見掛けるなり早歩きでやって来る。何か朗報でもあるのか。

「……………」
「……どうも。山田先生こそお疲れ様です」

「いえいえ、私は昔から地味な活動が得意です。心配には及びませんよ。何せ、先生ですから」

そう言っているものの、かなり参っている様子であった。それはそうだろう、真耶もあの惨劇をその目で見てしまったのだから。無理もない。

心配を掛けまいというその一心が見て取れる。それを見抜いた二人は何も言わない事にした。

「ところで、どうかしたんですか？」

「ああ、そうです。実はですね、今日から男子の大浴場使用が解禁ですよ！」

「……てつきり、来月からなるものとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので元々生徒達が使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、男子に使って貰おうって計らいなんですよー」

「……………」

素直に喜んで良いものであろうか。今日起きた事件が無ければ大はしやぎしたのかもしれない。しかし、そんな元気などどつくに失っている。

本当は喜びたい。トラブル続きであった疲れを湯船でしっかり癒したい。なのに――

「一夏」

「っ!? な、なんだ?」

「入ってきなよ。疲れ、取った方が良いよ?」

「あ、えと……」

「大丈夫だよ。今日は無理だろうけど、柳さんは明日には顔を出すつてば。気にせず ゆっくりした方が良いよ。ね?」

それは彼女なりの気遣い。彼女もまた、真耶と同じく彼に心配を掛けまいという計らいである。誰よりも疲労しているのは、紛れもなく彼自身。癒しを与えなければ隆道だけでなく彼も壊れる。彼女達は勿論、隆道もそれは望まない。

彼女と真耶の二人は彼の応えをじつと待った。ここまで言われれば、ここまで気を遣われれば、断るといふのは無粋だ。故に、彼は――。

「……ありがとう。んじゃ、行ってくる」

――立ち上がり、食堂から去った。

同時刻。屋上にて。

本来なら誰もいないその場所に、少女はいた。

「……………」

すらりとした身長、そよ風にゆらりと靡く黒髪のポニーテール姿の少女——箒はただ一人佇む。月明かりに照らされる彼女は外を一切と眺める事はせず、ある一点だけを見詰めていた。

その視線の先は彼女自身の携帯。その画面には羅列した番号が。そう、何処かへの連絡先だ。

画面を見るその目はとても厳しく、携帯を持つその手の指は迷いが見て取れる。コ—ルボタンに近づけては離す、それを何度も繰り返していた。

掛けるか、掛けまいか、迷いが生じる。何せ、その連絡先は自身が嫌う人物なのだから。

「つ……………」

歯を食い縛り、より一層と厳しい表情になる。本当ならここに電話など掛けたくはない。声など聞きたくはない。一切と関わりたくはない。

だが、それでも迷う。

——力が欲しい。

その欲求が彼女を徐々に満たしていく。それが欲しくて堪らない。どうしても使いたい。

IS学園に来てから引つ込んでいた、沸き起こる暴力への衝動。それが抑えられなくなっていた。

画面を見据えて数分後、彼女は遂に決心する。深呼吸し、そのコールボタンを押そうと——。

「——っ!？」

——真後ろからの物音でその指は止まった。

「あ……」

咄嗟に振り向けば、扉には一つの人影。それは段々と彼女に近づいていき、距離間が数メートルとなった所でその姿は月明かりに照らされる。

腕捲りしたYシャツ姿。右腕には古い犬の首輪。右顔面に増えた一本の傷痕。灰色となった右目。小さな紙袋を抱え、空いた手にはボトルタイプの缶コーヒーマグを持つ青年

——隆道。

「……………柳さん」

「ん」

いつもの素っ気ない返事に、いつもの無表情。その首に——ISは無い。恐らく調査中であろう。

「先客がいるとは思わなかったわ。邪魔か?」

「……………いえ。漸く、検査終わったんですね」

「ああ。何度調べても怪我は完治済み。残ったのは右目の変色と傷痕だけ。虹彩異色症だとよ」

他人事かのように淡々と語る彼はどこから見ても普段通り。意に介していない。これっぽっちも。一度死んだ人間と思えない。それが、彼女をより一層と堪らなくさせていった。

「……………どうして、ですか」

「あん?」

「どうして、平気でいられるんですか……………!! 貴方は今日——」

「止めろ」

「——っ!」

彼は手を翳して彼女の言葉を制した。それ以上言うなど。それ以上思い出すなど。

彼はゆつくりと視線を彼女に向け、口を開く。

「事は済んだ。それで終いだ。今日の事は絶対に忘れろ。それで絶対に思い出すな、蒸し返すな。それにドイツ人とも話は付けてある。どうなるか知らねえけどな。だから、もう、なんも、ねえ。わかったか」

「……はい」

何度目なのかわからない、真つ直ぐに見据えるその表情と強い言葉に彼女は頷くしかなかった。彼が望まぬ以上、無理にでもそうするしかない。

故に、目を瞑り、深呼吸をする。それを何度も繰り返し、彼女は次第に落ち着かせていく。

瞑想に近いものだ。神に祈るか、集中するか、無心となるか。それは健康の向上に心理的治療、更には自己成長や自己向上となる。

そうする事、約数分。彼女は漸くと落ち着きを取り戻す。

「……もう大丈夫です。なんか、すみません」

「謝る事なんて無えよ、元々は俺がでしゃばったからだしな。……さて」

「……？」

「ああ、こつち近寄るなよ。匂いが移つちまう」

落ち着きを見届けた彼は何故か距離を離れた。いったい何をするというのか。匂い

が移るとは。

疑問を浮かべる彼女など知らず、彼は紙袋から一個の箱と金属を取り出す。そう、それは――。

「んっ……。あつはあー……」

「な……。あ、あ……」

「あ、これ秘密な。楽しみが無くなっちゃう」

――煙草。

そう、これが彼が屋上に来た理由。単に煙草を吸いに来ただけ。クソガキの極み、ここに有り。流石IS学園ブラックリストの一人なだけはある。

彼女とは反対方向に煙を吹かせ、落ちる寸前の灰を缶の中に落とし、また吹かす。ずっと前から吸っているのだろう、かなり手慣れていた。

もう絶句するしかない。不良臭いとは前々から思っていたが、ここまでだとは思わなかった。彼女の脳内にはホームラン宜しく雑念等が綺麗に弾き飛ばされていったのであった。

「……そういえば篠ノ之」

「――えっ!?! は、はい」

「お前、何処かに電話掛けるんじゃないのかよ。携帯握ったままだぞ」

「はえ？ あ……」

今更ながらも彼女は気づいた。握り締めていたその携帯を。何処に掛けようとしていたのかを。自分は——何をしようとしていたのかを。

「……………」

それはもう——綺麗に消えていた。

「……………いえ、いいんです。必要無くなったので」

彼女は携帯の電源を切り、それをしまった。

壊れ掛けたその抑止力を、彼が直してくれた。薄い氷の膜の下にあるその暴力を、彼が抑えた。本当に頭が上がらない。感謝しきれない。

「ありがとうございます」

「あん？ 何だそれ」

彼女はほんの少しだけ、笑顔を取り戻した。

隆道と箒が屋上にいる同時刻。

誰しもが知らないその場所に『天災』はいた。

「……………」

至る所に散らばる、数々の機械に数々の部品。その中央には銀色に光り輝く、奇妙過ぎる椅子。それは大きく歪んでおり、一人の女性を檻の様に取り囲んでいた。恐竜の骨格を彷彿とさせる。

そう、ここは——『天災』の秘密ラボである。そして、そこにいる彼女こそがこの世界を変えた——いや、変えてしまった張本人。箒の実姉。

「……………」

——篠ノ之束。

「……………」

ゆらゆらと椅子を揺らす彼女は何処か無気力。何もする気が無いと言わんばかりにだらんとし、その目も凄まじく虚ろとなっていた。

普段の彼女ならこの様な様子になりはしない。常に何かしら思考をし、異常なまでの無駄をし、馬鹿馬鹿しい程にぶっ飛んだ事をしてきたのだ。『一日を三十五時間生きる女』と自称する程に。

だが、今の彼女からはそれを一切と感ぜない。何もしたくない、何も考えたくない、そんな風に全身から滲み出ている。正直、近寄り難い。

そんなどんよりとした雰囲気を漂わせる最中、突然に音楽が鳴り響く。彼女の携帯電話から。

「……、この着信音はあつ！ トウツ!!」

豹変。無気力であった彼女は笑顔を全開にし、それに向かって大ジャンプ。もとい、ダイブだ。工具等が激しく散らばるが、彼女にとってそれは些細な事。意に介せず携帯を耳に当てる。

その相手は――。

「も、もすもす？ 終日？ ちーちゃん？」

『その名で呼ぶな』

「おっけい、ちーちゃん！」

『……まあいい。今日は聞きたい事がある』

「何かしらん？」

——千冬その人。

そう、千冬は繋がりを持っていたのだ。現在も各国から追われている、『天災』と。織斑千冬と篠ノ之束。二人の関係は小学生の頃からである。以来ずっと同じ学校、同じクラス。奇妙であるが、それは至極当然の事。何せ、彼女がそうなる様に仕組んだのだから。勿論、千冬もそれは理解していた。必然的な腐れ縁である。

しかし、二人の関係はそれだけに留まらない。

千冬は、彼女の——I S 開発の協力者。

つまりだ。千冬は元々からして知識は誰よりも一枚二枚も上手、理解のレベルが最初から違う。

しかも、その上であの驚異的過ぎる身体能力。『モンド・グロツソ』にて世界最強を勝ち取ったのは何も不思議ではない、当然の結実であった。そこら辺の人間では千冬に勝てる筈が無いのだ。

その様な関係を持つ千冬が今日、彼女に連絡を取った。その目的は二つある。

『お前は今回の——『V. T. システム』の件に一枚噛んでいるのか?』

「……ああ、アレ?　ちーちゃん、あんな不細工な代物をこの私が作ると思う?　私は完

壁にして十全な篠ノ之東だよ？ 即ち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

『……………』

彼女は『黒の剣士』に関与していない。それは確かである。しかし——事件に干渉した。それは長年の付き合ひである千冬を驚愕させる。

「ああ、言い忘れていたけど……ドイツの娘なら何も心配はいらないよん。アレを作った研究所は既に特定済みで研究員は全員拘束、積んだ凡人も縛り上げてIS委員会にポイっと。これであの娘も責任取る必要が無くなったねー」

『——何っ!? 東、お前、今何と言った!?!』

「痛っ!?! もー、いきなり叫ばないでってば。だーかーらー、アレを作った凡人と積んだ凡人は全員捕まえたんだってば。言ってる事わかる?」

『…………それは本当、なんだな? 本当にラウラは助かるんだな?』

「助かるよー? 証拠もたんまりあるし。赤子の手を捻るより簡単だねー」

しれつと答える彼女に、千冬は愕然とするしか出来ないでいた。それは意外の中の意外だ。

絶対に有り得ないのだ。彼女の性格上、身内と認識している者以外には全くと興味を持たない。自分に興味の無い事には冷酷なまでに無関心。

そんな極端が過ぎる彼女が、ラウラを助けた。その真意は——千冬にはわからないであらう。

『……そう、か。ありがとう、束』

「とんでもないとんでもない！　ちーちゃんの為なら何でもー!!」

『そうか。なら、まだ聞きたい事がある』

「何かな？　何かな？」

笑顔が全開な彼女はとても嬉しそうだ。それは宛ら無邪気な子供の様に。身体を揺らしつつも、千冬の問いを今か今かと待つ。

が、その問いで——全てが消える。

『柳隆道と篠原日葵の——』

「じゃあね、ちーちゃん」

ブツリと、彼女は一方的にその通話を切った。先程までの感情は全て消え、揺らしていた身体もぴたりと止まっている。その部屋に残されたのは携帯から鳴る電子音と——全くの“無”だけ。

「……………」

二度と掛かつて来ないように電源すらも切り、それを投げ捨てる。表情は今や、凄まじく暗い。元から笑顔など無かったと、その様に見えた。

千冬と通話する前と同じだ。深く、そして暗い雰囲気徐徐に部屋を満たしていった。

「……何が、完璧だ。何が、十全だ」

そんな雰囲気の中で一人佇む事、暫く。突然と部屋の扉が開かれる。そこから入ってきた人物は——ラウラと瓜二つな銀髪の少女。その目は何故だかずっと閉じている。盲目なのであろうか。

「束様、ただいま戻りました」

「あー！ お帰り、くーちゃん！」

またもや豹変。笑顔を全開にする彼女は銀髪の少女に向かってダイブ。この女、情緒不安定か。

銀髪の少女に飛び付いて頬をすりすりする彼女からはもう暗い表情など無くなっていた。最早、全く以て理解出来ない。全く以てわからない。

「えへへー。それでくーちゃん、頼んだお使いは終わったのかな？」

「はい。回収は完了、既に部屋へ移しています」

「どれどれ、見に行こうかな」と

「此方へどうぞ」

そう言って、彼女は銀髪の少女に付いていく。彼女の言うお使いとはいったい。

暗い空間を歩く事、暫く。二人はとある部屋へ到着する。扉を開いたその先には――

「容態はどうかな？」

「安定しています。今は眠っているだけです」

「オーケーオーケー、あとは様子見だねー。何て呼ぼうかなー？」

「東様のお好きな様に」

「だよねー」

――ベッドに横たわる、一人の少女。

その姿は異質。首から下は全てボディスーツで包まれ、至る所にはコードらしきもの。それは、今まで機械に繋がっていたかの様に思わせる。

そこで眠る少女の名は――。

「……ゆつくりおやすみ、えーちゃん」

海と兎と銀翼と

第四十七話

真つ暗な空間にて、隆道は必死に逃げていた。自身を追つて来る『何か』から。それが何なのかは不明だが、自身の本能が逃げろと告げていた。

「はあつ、はあつ……!!」

「■■■■!! ■■■■!!」

どれだけ走つても『何か』は追つて来る。何かを叫んでいる様であるが、彼はそれに一切と耳を傾けなかった。聞く余裕が無い、聞く気が無い。

「ちくしょう……!! こつち来んな……!!」

「■■■■!! ■■■■!!」

「ああ、くそつたれがあつ……!!」

全力を出しても距離は全く広がらない。寧ろ、声からして縮まりつつある。ノイズ混じりであるその声は次第にと大きくなり、彼の頭に響く。

「■■■■ん!! ■■■■くん!!」

「来るんじゃ、ねえよつ!! 頼むからつ!!」

彼女なら安全だ。何も心配する事は無い。

「何、だよ。驚かせ、やがって……」

「……………」

「はあ、ふう……。お前ならお前って先に――」

故に、彼は振り向く。

「――」

そこにいたのは彼女ではなかった。

「さあ、一緒に行こ？」

自身の腕を掴むのは紫髪の――。

令和四年、七月二日。早朝。

I S 学園、一年寮の一室——一〇三〇号室にて。

「あああああああつっつ?!!?!?!」

部活動の朝練すらも始まっていない時間帯に、隆道は突然と悲鳴を上げて目を覚ました。部屋が防音仕様で無かつたなら大迷惑極まるところだ。扉付近に誰かしらいれば聞こえたかもしれないが今の時間帯は早朝、誰一人としていない。他人に聞かれる事は無かつた。

問題はその後。発狂に近い目覚め方をした彼は——大錯乱に陥る。

「!!——!!」

ベッドから飛び起きた彼は誰しもが見た事無い程に暴れ散らす。それは猛獣という他無かつた。

至る所を殴り、蹴り飛ばし、頭を打ち付ける。皮膚が裂け、血が滲もうと止まる事知らない。部屋中は物が散乱し、血が飛び散っていく。

誰しもがこの惨状に気づく事は無いであろう。いや、気づいた所で成す術は全く無いに等しい。彼の異常を知らせる『灰鋼』は当然外している。それ以前に、例の事件によって手元には無い。

そうして部屋で暴れる事、約数分。息を荒げる彼は何を思ったのか、足元に転がる医療キツトを机に置いて乱雑に漁る。取り出したのは――。

「フーツツツ!! フーツツツツ!!」

――一本の医療用鋏。

「オ、ラ、アツツツ!!」

彼は一切の躊躇などせず、叩き付けるかの様に左手に突き刺した。ソレは意図も簡単に貫通し、机には鮮血が滴り、床に落ちていく。

紛れもない。それは――自傷行為。

「グ……ギツ……ア、アツツツ!!」

突き刺した鋏を勢いよく引き抜き、辺り一面に血を滴らせる。貫通したその手を強く握り締めて約数十秒、目の焦点が徐々に合つて漸くと錯乱が治まり始めていった。

彼は錯乱がどうしようもなくなる際、破壊衝動に駆られる。抑える方法は身内が側にいる時か、自傷行為に走るかの二択のみ。周りに誰もいない今、選択肢は自傷行為の二つだけであつた。

この様な事は初めてではない。千冬の目の前で自傷行為に走つた事もあるし、誰も見てない所で自身を傷付けた事も何度かはある。自分一人では無事に抑える事が出来ないのだ。信頼出来る者が側にいる事といった都合の良い事は滅多に無い。

故に、彼は今日も傷を増やしていく。

「……………ふうっ。……………あーあ」

漸くと治まった錯乱。辺りを見渡すと散乱した物がちらほら。またやってしまったと後悔するが後の祭り、全て片付けなくてはと身体を動かす。

手を縫い合わせて周囲を片付ける事、暫く。壁等に付着した血も綺麗に拭き取り終わった頃には丁度良く食堂が開いた時間帯となっていた。

「……………」

全てを片付けた今、彼は洗面台の前半裸状態。自身をじつと見詰めていた。

頭と両手は巻いたばかりの包帯、灰色となった右目、顔面や身体の真新しい大きな傷跡の数々。どこをどう見ようとカチコミに行ったヤ○ザ——いや、チンピラと言った方が良いかもしれない。少なくとも、全うな人間の姿ではないのは確か。

だがしかし、それでも全く気にしないのが彼。今更傷跡が増えた所で気に留める人間ではない。白髪だけは気にするらしいが。

顔面の傷跡と変色した右目はOKで白髪はNG。この男の価値感がいまいち謎。

「はあっ……………」

そんな事より、彼は他に考える事があった。

思い出すのは、いつも見る悪夢とは違った夢。至近距離で目の当たりにしてしまった

——自身が最も憎む人物。光乃とは真逆である存在が自身を引き込もうとしたその意味とは何なのか。

以前に見た斬り殺された悪夢は正夢であった。ならば、今回の夢も何か意味があるに違いないと彼は考察する。確かめる術は全くと無いのだが。

もし、あの人物に出会したら——。

「……おっ?」

「私だ。起きてるか?」

不意に聞こえたのはノックする音と千冬の声。彼女が部屋を訪れる理由はたった一つしかない。『灰鋼』を受け取る為の同行である。

『灰鋼』は件の事件以降、長期間に渡る調査が行われた。例の不可解な現象を考えれば当然だ。突如として発動した蘇生と生体再生に、奪われた『打鉄』の行方等を調べる必要があった。尤も、解析は全て無駄に終わってしまった訳なのだが。

『灰鋼』は依然として一切の解析が出来ない。解体も凍結も許可が下りない上に通達されたのはデータ採取の続行。IS学園が唯一出来る事は彼の元に返す他無いのだ。無茶苦茶にも程がある。

そんなIS学園の裏事情など知らぬ存ぜずな彼は今日も今日とて大きく溜息を吐き、錠剤を飲んでISスーツと制服に手を伸ばす。

「少し待ってろ、と」

着替えを終えて部屋を出たその直後、頭や手の包帯について彼女から散々と問い詰められたのは言うまでもない。当たり前前の事であった。

IS学園生活、四ヶ月目。彼の苦難はまだ続く。

あの日——学年別タッグトーナメントで起きた事件は不慮の事故として処理された。事の詳細を知るのは当事者達と教員達、そしてIS委員会。

試合中に発動した『V. T. システム』そのものに関してあまり語る事は無い。匿名からの贈り物——研究員やシステムを積んだ人間と物的証拠によつて事態はスムーズに解決し、ドイツやラウラ本人が責任を取る事は無かった。もし、それ等が無かったならば十中八九——いや、確実に彼女を切り捨てたに違いない。身勝手にも程がある。

彼女も責任を取るべきではとの発言もあった。だが、優秀たる人材を失いたくない、それだけの理由で綺麗事をでっち上げた。彼女は被害者だ、システムを作り、積んだ人間が加害者なのだ。実際その通りだが、なんとも都合の良い連中か。都合が悪ければ

他に押し付ける癖に厚かましい。

IS学園はドイツに関してこれ以降ノータッチ。外部事情より内部事情の方が大事である。勿論、当事者の中の当事者——隆道の件について。

彼の顔面に残った傷跡と変色した右目も同じく不慮の事故として処理された。後付武装の暴発によつて負傷し、後遺症が残ったとされている。

事の詳細を一切と知らない生徒達は当然の事、いつ、どこでといった疑問等が浮かぶ訳なのだが——そこは千冬の一喝により無理矢理黙らせた。殆どの生徒達は納得せざるを得なかったのだ。

そう、殆どだ。どうしても納得出来ない生徒は確かに存在する。意識が高い者——例えば一組の生徒達は決して疑問が消えやしなかった。

教員や代表候補生の監視下に置かれてる筈の彼がその様な事になるのか。絶対に有り得ない。ならば、彼が一人で勝手に仕出かした事なのか。

一番手っ取り早いのは本人に聞く事なのだが、彼自身が何も言わない以上それは不可能である。そもそも、対話する事自体未だに困難を極めるのだから彼女達がどう思おうが知る術は無いのだ。

疑心暗鬼が渦巻き、混沌と化すIS学園。だが、目を向けるべきなのはそこではない。今、IS学園が抱える最も大きな問題は——。

時刻は午前十時。第一アリーナにて。

ステージの中央で対峙しているのは二機の I S。周囲の壁際には九機もの I S が佇んでいた。

「……………」

中央にいるのは『ブルー・テイアーズ』を纏うセシリアと『灰鋼』を纏う隆道。どちらも武装を展開せず、その場で浮いたまま。

一方、周囲は千冬を筆頭に教員が五名。そして一夏、箒、シャルロット、鈴音の四名。軽く戦争出来る戦力が今、ここに集まっている。

「……………柳。何か異常は？」

「……………見りやわかるだろうが。目ン玉腐ったか。有り過ぎてどれから言えば良いのやら」

何故、この様な状況になっているのか。それは彼の専用機——『灰鋼』にある。

完全に大破した筈の『灰鋼』は、四月の一件と同様に半日足らずで自動修復された。これ自体は二度目である為に、然程気にする事は無かった。問題はそこではない。

『灰鋼』は、またしても変異した。

先ず、身体の至る所に装甲が追加されていた。

胸部、肩、二の腕、下腹部等といった、頭部と関節以外を埋め尽くした堅牢な装甲。世間が知る全身装甲とはまた違ったものだ。腰に携えていた二つの基本装備はオミット、拡張領域からも削除されていた。行方は全く以て不明。

次に両腕。これがまた歪な代物であった。

——『剛鉄爪』——。

指の一本一本が鋭利な爪と化した巨大な右腕。謎の発射装置が装備されている左腕。左右非対称となったその両腕は全員に悪寒を走らせていく。あまりにも不気味過ぎた。そして、最後に目に留まるのは『灰鋼』の特徴とも言える『バリアブルシールド』。本来ならば二枚であったソレは何故か四枚に増えている。

「何、なん、だよ、ほんとにつ……」

左右に二枚ずつ浮く巨大過ぎる盾。巨大化した右腕で払い除けようと、どんな動きを

しようとして、ソレは絶妙な距離感を保つ。意思があるかの様に彼の動きを一切と阻害しなかつた。

「ね、ねえ一夏。あたしには二次移行したとしか見えないんだけど……」

「なんで俺に聞くんだよ……。ISの事なら鈴の方が詳しいだろ……」

「し、知らないっ。そ、そもそも二次移行なんて稀の中の稀で……」

鈴音の反応は仕方の無い事だ。今の『灰鋼』は誰がどう見ようと二次移行したとしか見えない。それ程までに変わり果ててしまっていた。

しかし、それは間違いだ。第二形態に進化するには稼働時間と戦闘経験の蓄積、そしてISコアや機体そのものとの同調を高める事が必要なのだ。ISを忌み嫌う彼はどれにも当てはまりはしない。ならば何故、機体がこれ程まで変異したのか。

理由は意外と単純で複雑。それは――。

――うう……。どうして、こうなるの……。

――奪った『打鉄』を部品にした。

『悽愴月華』で千冬の『打鉄』を奪い、それを部品として新たに中身を変え、装備を構築した。彼と『〇一九』の意思が入り混じった歪な物へ。

獯猛的な彼の意味、守ろうとする『〇一九』の意思。それ等が複雑に絡み合った結果がこれだ。本来ならばこの様な姿になる筈が無かったのだ。

姿だけではない。パワーアシストも、出力も、エネルギー量も、拡張領域も、今や全て規格外。最早、この機体は競技用の範疇には収まらない。『悽愴月華』も合わされば凶悪が過ぎる。

正しく『対IS用兵器』、正しく『IS殺し』だ。存在してはならない機体が誕生してしまった。

(コイツは、ISは、いったい何なんだ……)

勿論の事、彼等は変異した『灰鋼』を調べる為だけに集まった訳ではない。それだけなら千冬と一夏、そして箒やシャルロットがいればいい。

目的はもう一つ——『灰鋼』の戦闘データ。

「……では、取り掛かるぞ。準備はいいな?」

「……いつでも良いですわ」

「ん」

「総員、有事に備えろ」

隆道を除く全員が一斉に武装を展開、構える。

彼等は模擬戦を行おうとしているのであった。対戦相手はセシリアが一人。他全員

は彼の暴走に備えてのメンバーである。即席の鎮圧部隊だ。

IS 学園は IS 委員会から圧力を掛けられている。彼の戦闘データを取る必要があったのだ。では、その相手をするのはいったい誰か。

千冬は『番犬』によって絶望的に相性が悪い。近接戦闘しか出来ない一夏も同じ。ならば、他の教員が専用機持ちしかない。

そこで志願したのがセシリアであった。そして今に至るといふ訳である。

ここで語らせて貰おう。『灰鋼』に備わる三つのシステム——『狂犬』、『番犬』、『猛犬』。これ等には共通の起動条件がある。それは対象を『敵』と認識する事だ。それが何を意味するか。

そう、彼が心の底から『敵』と認識しない限り絶対に起動する事は無い。つまりは、特定の人物——例えばこの中では一夏、箒、シャルロットの三人ならば安全、何も起こらないのだ。

尤も、誰もはその事実に辿り着く事は無い。彼等は知らずの内に人選ミスをしてしまった。

不機嫌を見せる隆道と、合図を待つセシリア。『灰鋼』が変異した今、何が起こるのか。

「では……始め!!」

千冬の掛け声と共に両者が動いた。セシリアは一気に上昇し、隆道は後方へと大きく後退する。彼女は透かさず自身の特殊兵装を展開した。

「行きなさい!!」

飛翔する四基のビットは彼を取り囲み、瞬時に狙いを定めようとする。以前と同じであるならばここで詰め確定、颯られるだけに終わる。

が、しかし——。

——『バリアブルシールド』展開——。

攻撃するその直前。『バリアブルシールド』は金属音と共に分離、小型の盾となってそれぞれビットに向かい合った。そして、ビットから発射されるレーザーを意図も簡単に弾く。

「っ?! いえ、まだ……!!」

簡単に弾かれてしまったが、終わりではない。角度、方向を不規則に変え、攻撃を続行する。

それでも、ビットに合わせて小型の盾も動き、徹底的に攻撃を弾いてしまう。彼に攻撃が全くと届かない。彼女には次第に焦りが生まれる。

そんな彼女に対して、彼は今や棒立ち。全くと何もしていない。それ処か、適当に歩

き始めたり右腕の動作確認等で暇潰しをし始めた。彼女の事など一切と目に留めていなかった。

それもそうだ。この『バリアブルシールド』は彼ではなく『〇一九』が制御しているのだから。彼自身、暇としか感じていない。呑気な男だ。

しかし、それでも彼女は諦めやしない。攻撃が当たるその時まで手を止める事は無かった。

猛攻撃を繰り返す彼女と徹底的に防御する彼。それが暫く続き、漸くと状況は変化する。

「……鬱陶しいんだよ。おい、『灰鋼』」

彼が呟いたその直後、『バリアブルシールド』から四枚が分離、囲う様に地表へと展開される。そこから更に装甲がスライド、『凹』の形に。

『双豪雨』
そうごうう

その呼び出しによって展開されるのは政府から送られてきた、新たな後付武装。それ等は地表に刺さる四枚の盾の上に姿を現す。

圧倒的な火力を誇る『豪雨』。単体でも強力なソレをもち狂った研究員達が更なる改良を施し、まさかの二連装仕様にしたぶつ飛びにぶつ飛んだ大型の機関砲が四基。

——20mm二連装多銃身回転式機関砲『双豪雨』——。

「!」

「やれ」

『Fire』
ファイア

その眩きを合図にばら撒かれるのは砲弾の雨。瞬時に判断出来た彼女は攻撃を中断してビットを回収、回避に専念せざるを得なかった。

毎分約四千五百発の発射レートを叩き出すソレが四基、更には全てが二連装。八門から繰り出す砲弾により彼の周囲は莫大な量の空薬莖が散乱、瞬く間に地表を埋め尽くす。

「!、これでは攻撃が……!!」

モーター音と繋がる銃声がステージ内に響く。更に、以前の私闘にて学習をしたのか何なのか、弾倉を自動展開して勝手に装填している。弾幕を一切と途切れさせる事は無かった。拡張領域内の弾薬が尽きない限り撃ち続けるであろう。

どんな仕組みなのか全くと知らないが、これで面倒な再装填は解決した。有り難い事だと同時にどこまで無茶苦茶なんだと、彼はしかめっ面だ。

「くうっ……!!」

迫る砲弾の豪雨に彼女は歯を食い縛る。

ビットを使う余裕が無い。射撃の余裕も無い。回避しか選択肢が無い。集中を切ら

したら最後、自身は瞬時に蜂の巣になってしまう。

彼女は——こうもあっさりとは完封された。

「……………」

回避に必死となる彼女を余所に、隆道は自身の左腕へと目を向ける。追加された謎の発射装置は何なのであろうか。一見した限り単発式の大砲に見えなくもないが、弾倉が全くと見当たらない。先込め式なのであろうか。

見詰める事、約数秒程。突然とディスプレイにその装備の名が浮かび上がる。

——『グラップルランチャー』——。

「ん……………」

どこかで聞いた事のあるその名前。ランチャーと名が付くものだから何かを発射する事は確定だ。

故に、試す事にした。辺りを見渡し、何も無い所へと向けてソレを発射。

「おっ」

飛び出したのは砲弾——ではなく、ワイヤーに繋がれた三本爪のアンカー。ソレは数十メートルにも伸びて停止、爪が可動した直後にワイヤーを巻き上げて発射装置に格納していった。

「……………ああ、掴むのか」

攻撃でも、防御でも、回復でもない全く新しい武装。コレは中々の多様性がありそう
だ。

これは面白いと、彼はアンカーの射出と格納を繰り返す。上空で逃げ惑う彼女なぞ完全
に放置、あろう事か遊び始めてしまう。攻撃は無人砲台に全てぶん投げてしまった。

全力で躲し続ける彼女に、一人遊び呆ける彼。あまりにも彼女が不憫が過ぎるのでは
ないか。模擬戦とはいったい何なのか。

実力差で言えば圧倒的に彼女の方が上である。しかし、残念ながら学習能力が高く、
防衛の為に変異する『灰鋼』の前では無意味だ。操縦技術を駆使しようと、新しい武装
等で追い詰めようと、必ず、絶対に、学習し、次の防衛へと活かす。

『灰鋼』は——戦う度に変異する。

「も、模擬戦、中……です、よっ……!!」

「……………」

「此方を、向いて、下さいまし——」
「うるせえ」

彼女としては少しでも目を向けて欲しいが故の呼び掛け。嫌われているのは承知だ
が、どの様な形であれ彼と接触をしたかったのである。今回の模擬戦相手を志願したの
もそういう理由だ。

だが、今は間が悪かった。

忌み嫌うISの操縦、望まない戦闘、あの日から無視をし続けてきた相手、そして何より——今も頭にこびりつく、あの夢。それ等が重なり、彼の苛立ちは一気に上昇していく。

喧しい。五月蠅い。鬱陶しい。話し掛けるな。頭痛がする。吐き気がする。嗚呼、気持ち悪い。

もう、耐えられない。新しい装備で色々と気を紛らわしていた彼は——とうとう頭に来た。

脳内で攻撃中止を指示し、『双豪雨』を停止。無人砲台からはモーター音だけが轟いていく。

「ライム女。そんなに相手して欲しいなら……」

「!! 漸く——」

「お前が来い」

彼女が急停止した——その瞬間。

「——あつ!?!」

彼が繰り出すのは『グランプルランチャー』。そこから飛ぶアンカーはフラットな曲線を描いて彼女の脚部に直撃、簡単に捉えた。

焦りから生まれた完全な油断。本来なら躲せるものが、こうも容易く捉えられてしまった。

彼女は咄嗟に引き剥がそうとするが既に遅し。彼はワイヤーを一気に巻き上げていく。

そう、コレは——引き摺り出し。

「あああああああああつ!?!」

有無を言わせない引き摺り出しは二人の距離を縮めていく。彼女を待ち構える彼は、今や右腕を大きく振りかぶっていた。

そこから導き出される答えは——。

（——いけない!?!?!）

防衛本能が働いた故なのか、彼女は回避すべく咄嗟に『スターライトmkⅢ』を自身の脚部に向け発砲、装甲毎引き剥がして離脱する。その瞬間、先程までいた場所には鋭利な五本爪が高速で通り過ぎていく。

「「「「「?!!?!?」」」」」

聞こえたのはとてつもない破壊音。見えたのは凄まじく扶れる地表。二人は、そこから生まれる大きな土煙に包まれていった。

「「「「「」」」」」

土煙から聞こえるのはモーター音、ただ一つ。時間が経つにつれ、次第にと土煙は薄くなり二人の姿が垣間見える。互いは動きを見せていない。

武装を構える、汗だくのセシリア。その視線の先には右腕を叩き付けたままの隆道。その地表に刻まれるのは——歪過ぎる凹みと五本の斬撃痕。

「何、あの威力……」

誰かがそう呟くが、答える者はいなかった。

一目でわかる、凄まじく、出鱈目過ぎる威力。パワー型ISでもここまではならない。どんな武装でもここまではならない。決して、有り得ない。

もし、あるとするならそれは——。

「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……!!」

「……………」

息を荒げるセシリアは震えていた。もし、仮にあの攻撃を受けたらどうなっていたのか。恐らく——いや、絶対に無事では済みやしない。それは誰しもが見たらわかる。一

撃で終わってしまう。

徹底した防衛性能に、計り知れない攻撃性能。ほんの数分しか経っていない模擬戦ではあるが、そこにいる全員が嫌でも理解した。

「……おいブリュンヒルデ、まだ続けんのかよ。こっちは苛ついてんだ、これ以上は知らねえぞ」

「お、織斑先生っ。わたくしはまだ——」

「今日はここまでだ、もう止める。総員、解散」

「……はい」

千冬は解散を命じた。これ以上戦闘を続ければ誰かしら無事で済まなくなる。それ故の判断だ。セシリアはまだやれると言うが、何かあってからでは遅いのだ。無理にでも下げるしかない。

戦闘データは少々ではあるが、確かに取った。これならI S委員会は文句は言うまい。尤も、文句が出た所で知らん顔するつもりなのだが。此方は言われた通りにデータを取った。それで充分だ。

「お疲れ様です」

「……おう。殆ど何もしてねえけどな」

それぞれがピットへと戻る最中で、彼に近づくのは一夏。少しばかり不安そうな表情

であった。それは『灰鋼』に関してなのか、或いは例の事件を引き摺っているからなのか。

恐らくは両方なのだろう。この機体は自分でも気味が悪いと感じているし、あの事件は常人には刺激が強過ぎる。仕方の無い事だ。

だが、いつまでも沈んでいては困る。周りにも影響を及ぼすし、一夏にその表情は似合わない。そんなもの、自分だけで充分だ。

「毎度の事ながら冷や冷やさせますね……。また大変な事になるかと」

「無事に終わったんだから良いだろ。それより、明日……。だっけか？」

「ええ、はい。明日しか許可は下りてませんし。今更行かないなんて駄目ですよ？」

「わかってるっつーの」

そう駄弁りながら彼等はステージを後にする。彼等の言う明日とは久々の外出だ。今回の目的は来週の為の準備である。

「臨海学校、ねえ。買う物なんて無えしなあ」

「気晴らしだと思えば良いかと。……あ、これを機に水着でも買いましようよ」

「学校指定じゃ駄目なのかよ。野郎の水着なんてどれもほぼ一緒だろうが」

「それ、口にしたら文句言われますよ……。？」

IS学園には七月上旬に校外学習——すなわち、臨海学校が存在する。三日間の日程

の内、初日は丸々自由時間、二日目は解放された非限定空間における装備の稼働試験。三日目は撤収作業だけ。

主な目的は二日目の稼働試験なのだが、生徒達にとって最も重要なのは——初日の自由時間だ。

十代女子が海を目の前にして何もしないか？ 否、遊ぶ以外の選択肢など無い。よつて生徒達はテンションが上がりっぱなしだ。しかも、男子の存在もあつてか色々どぶつちぎっていた。

故に、彼女達は念入りに準備する。男子二人に変な目で見られない様、徹底的に。あわよくば、仲良くなる好機が訪れるのではと考えていた。

とは言うものの、片方は絶望的に鈍感、片方は絶望的に女性不信。その邪な心は無駄に終わる。嗚呼、なんと可哀想な事か。残念でした。

翌日の日曜。本州のとある駅前。

そこには日本最大級を誇る施設が存在する。

——シヨップिंगモール『レゾナンス』——。

交通網の中心でもあるここは、電車、地下鉄、バス、タクシーといった全てが揃っている。市の何処からでも、何処へでもアクセス可能である。

そして注目すべきなのはその品揃えだ。駅舎を含む周囲の地下街全てと繋がっているこの施設はあらゆる食文化を完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまでと選り取り見取り。その他にも各種レジャーは抜き無し、子供から年寄りまで幅広く対応している。

いわく——。

『ここで無ければ市内の何処にも無い』

——と言われる程。

全く以て隙が無いこの施設は派手に凄いとしか言わざるを得ない。圧倒的過ぎる。

その一角——水着売り場に、ある団体が。

「……今更だけども、集まり過ぎじゃねえのか。かなり目立つぞ、コレ」

「それは……言わない約束ですよ」

「同行が条件だ。こればかりは諦めてくれ」

そこにいるのは七名の男女。男性が二名、女性が五名というアンバランスが過ぎる団

体は周囲の注目を浴びに浴びていた。

男性陣は隆道と一夏が。女性陣は千冬、真耶、箒、シャルロット、そして——ラウラが。

一夏・千冬・隆道
超有名人が三人と非常にレベルが高い女性達。一般人から嫌でも視線を向けられていた。全員が私服姿なのだがそれでも凄まじく目立っている。

何故、こんな目立つ団体が出来上がったのか。その理由は彼等——隆道と一夏の護衛が大きい。

一夏と少女達は知らない事だが、六月頭の事件——『六・五青少年抗争事件』により男性操縦者の外出はとても厳しいものとなった。彼等が外出する際には側に強力な護衛が必要となったのだ。必ず教員か専用機持ちが必要になったのである。

勿論、一夏や少女達はこれを単なる買物だと認識している。護衛だと認識しているのは隆道と千冬と真耶の三人だけだ。意識が違い過ぎるが、臨海学校が近いのに物騒な話は出したくはない。出すとするならば臨海学校が終わってからだ。

箒は以前から一夏との買物に約束したから。シャルロットは一夏が誘ったから。何も不思議な事は無い。では、ラウラは？

「……あの、教官」

「そう緊張するな、ラウラ。折角の臨海学校だ、お前も好きに買物を楽しめ」

誘ったのは千冬その人。一週間前の事件以降で人が変わったかのように大人しくなったラウラを半ば強制的に連れ込んだのだ。

ラウラは軍人一筋だったが故に、こういつた事にかなり疎い。今は学生生活を楽しんで欲しい、それだけの一心。そこに壁など存在しなかった。

最初こそ彼等と険悪になるかと危惧していたのだが、どうやらこの一週間で和解した模様。千冬の不安は杞憂に終わっていたのであった。

「男と女は売り場が違うし一旦ここで別れるか。では行きましょう」
「ん」

本来ならここでも教員の同行が必要なのだが、あまりくつついていると変に思われる事は確実。彼等が悟る事は避けねばならない。

彼は千冬と目を合わせアイコンタクト。それが伝わったのか千冬は静かに頷き、彼女達の輪へと入っていった。何かあったとしても真っ先に駆け付けて来るだろう。それを流し目で見つつ、一夏と水着売り場へ歩き出す。

「つーか織斑、金あんのか？」

「そこそこの軍資金は。中学時代にアルバイトをしていたので」

「中学でアルバイトなんて出来んのか」

「学校に相談したら色々で紹介してくれまして。あとは知り合いの手伝いとか。そうい

う柳さんはどうなんです?」

「……まあ、色々やったからな。ガッツリある」

今は互いにIS学園の寮住まい。食費光熱費等は全てタダ。金を使うのは購買程度だ。どうやって日本が運営管理しているのやら不思議である。

彼自身もそこその——いや、一夏とは比べ物にならない程の莫大な軍資金がある。生前父親が貯めていた貯金に死亡保険、あとは抗争によつて手に入れた戦利品などはたんまり。具体的な金額は彼のみぞ知る事だが、暫く遊んで暮らせるとだけ言つておこう。尤も、IS学園にいる以上は購買程度しか使う事は無いのだが。

「俺はコレで」

「んじや俺はコレとコレ」

男性用水着売り場へ着くなり、爆速で買い物済ませる男子二人の水着選び。一夏はシンプルなネイビー色の水着、彼は色違いであるグレー色の水着と上半身を隠す為の白色のパーカー。少しは吟味しようと思わないのか、この男達は。

「どうします?」ここにいても暇ですし」

「……行きたくねえが、あいつ等の所に行くか」

決して気は乗らないが、彼女達がいるであろう女性水着売り場へ。すると案の定、全員が色々と吟味していた。色にしても形にしても、その数は男性用の比では無い。

声を掛けようにも女性用水着売場を彷徨くのは流石に不味い。仕方無くと、二人は近くのベンチに腰掛けて彼女達を待った。

すると――。

「その貴方達」

――一人の女性が声を掛けてきた。

「男の貴方達に言ってるのよ。そこにある水着、片付けておいて」

名も知らない相手からの命令が彼等を襲う。

女尊男卑の風潮によって、男性はこうして街を出歩くだけで見ず知らずの相手から命令される。

女性優遇制度は非常に強力だ。それに染まった女性達は男性を道具としか見ていない。目の前でこうした傲慢な態度を取る女性が良い例だ。

狂いに狂っているだろう。しかし、それが通用するのが今の世の中。逆らおうとすれば冤罪等をでっち上げられ、問答無用で人生終了だ。故に、男性は決して逆らえない。

尤も、それが自分達に通用するかは別だが。

こちとら男性操縦者だ。相手は自分達を一切と知らない様子、どれだけ世間知らず

だ。そこら辺の男性としか見えていない程に目が腐ったのか。それとも見境無しなのか。

「……………」

彼等は無視を決め込む。

口は開かない。それ処か、目すら合わせない。まるで、そこには誰もいないかの様に、徹底的にシカトする。これは隆道の教えによるものだ。

『いいか、知らねえ女に声を掛けられても絶対に反応するな、耳を貸すな、口を開くな』
彼自身は勿論の事、一夏もまた女尊男卑の一角に遭遇した。不注意に関わったが故の、悪意を。

この手の人間に何を言った所でそれは無駄だ、何をしても面倒事になるのはわかりきっている。大人しく言う事を聞いた方が一番の保身となるが——生憎その選択肢は無い。

彼等は決して、絶対に屈しない。その悪意に。

それに、何もせずとも此方には切り札がある。

「……………聞いているの?」

「……………」

「……………ふうん、そういう反応するの。自分の立場がわかってないみたいね。なら——」

「何をしている」

「……えっ」

警備員を喚ぼうとした女性の言葉が止まった。そう、切り札とは今回の買い物に同行した千冬。こういう面倒事の為の彼女。彼等が何もせずとも厄介事は全て任せられる。心配する事は無い。

「ブ、ブリュンヒルデ……!?!」

「私の連れだ。もう一度言う。何を、している」

「え、その……」

「とつとと失せろ」

その鋭過ぎる眼光により女性は逃げる様に場を立ち去っていく。へつぱり腰のそれは滑稽な姿、無様そのものであった。というか、片付けてから帰れ。店員が困るではないか。

「全く……。無事か?」

「おかげさまで」

「た、助かりました、織斑先生」

こればかりは素直に感謝だ。彼女が来なければ今頃は非常に面倒過ぎる状況になる所であった。自分一人なら幾らでも対処出来るが、一夏がいる前ではあまり動きたくは

なかった。

「今は就業中ではない、姉弟だ。名前で良い」

「わ、わかった」

「柳。すまないが一夏を借りていいか？」

隆道はその言葉の意味を即座で理解する。

姉弟水入らず、邪魔する理由など一つも無い。千冬は憎む対象だがそれはそれ、これはこれだ。

「あー……、えとー……」

「行つてこいよ。俺はここにいる」

「じゃ、じゃあまたあとで」

一夏は千冬と共に女性用水着売り場へ消えた。ベンチに残されたのは隆道ただ一人。その表情は何処か悲しげで、何処か寂しくて。

「……姉弟、か」

『にーに！ ひまりもいくの！ ■■■ちゃんにあいにいきたい！』

「……………」

突然と思いきや出される過去の記憶。それが脳内に響き、頭痛が襲い掛かる。息が詰まっ
ていく。

もしも、何か違っていれば自分は今も兄妹水入らずな生活を送れたであろうか。幸せな生活を送れたであろうか。

「……はんつ。んな訳、一つも無えよ」

社会は、世界は、家族は変わった。揺るぎない事実だ。決して、絶対に変えられない事なのだ。そう考える度に頭痛はより一層と強くなり、顔は歪んでいく。

「……くそつたれが」

今日一日、隆道の心が癒される事は無かった。

第四十八話

令和四年、七月六日。

薄暗く、アホに長いトンネル。そこを走るのは四台の大型観光バス。それに乗る一年の生徒達はとても賑やかで、そしてとても騒がしかった。

「着いたら何する!? 何する!?!」

「え、今更何言ってるのこの馬鹿っ!! 泳ぐに決まってるじゃない!」

「ねーねー、そっちのお菓子ちょうだい」

いや、喧しいと言うのが正しいかもしれない。若しくは姦しいと言った方が良いか。ほぼ全員が大はしやぎ、テンションがぶつちぎりであった。一言で言うのであれば『騒音』で片付く程にだ。ソレはあまりにもうるさ過ぎた。

その大騒ぎは一台だけではない。差は有れど、全バス内がこの状態なのだ。それも出発前から。まだ目的地にすら辿り着いていないにも関わらずこの騒ぎ様。流石は十代女子学生、体力が有る。有り過ぎにも程がある。今日は一日中この調子が続く事は確実、収まりそうにない。ペース配分は大丈夫なのであろうか。明日の稼働試験の直前で力尽きないと良いのだが。

しかし、それも仕方無い話だ。何せ、今日は待ちに待った大行事。盛り上がりがない筈が無い。盛り上がるなど言う方が無理だ。どこの学校でも同じ状況になるであろう。そして——それは一組も例外ではない。

「やっぱりこういうのはテンション上がるなあ。なあ筈、そういえば泳ぐの得意だったよな」

「そ、そう、だな。昔はよく遠泳したものだ」

「あら、お二方はサンオイル塗りませんか？」

「塗った事は無いな。日焼け止めは塗るけど」

「私も焼かない派だな」

生徒達が大いに騒ぐ中で、一夏達も皆と会話を弾ませていた。一切と途切れさせる事も無くだ。この騒音の中で普通に会話を交わす彼等は凄い。

何を持ってきたのか、何をして遊ぶのか。話題はたんまりとある、言い出せば切りが無いのだ。夢が広がり過ぎなものも困ったものである。

そんな彼等の会話がある中で、少し離れた席のシャルロットはというと——。

「んぐんぐ……」

「ほら、このお菓子も美味しいよ？ はい」

「う、うむ。有り難く頂く、ぞ」

——ラウラとお菓子を食べていた。というか、シャルロットが食べさせていた。餌付けだった。

「はいこれ。あとこれも、ね？」

「ま、待つてくね……！ ふおんはひは……！」

彼女達二人は今や相部屋だ。ラウラは最初こそ部屋割りにかなりの戸惑いと抵抗があつた。

私闘、対決、そして——例の事件。自分と深く関わる人間との生活に一種の恐れを抱いていた。強く言及される、目の敵にされるに違いないと。

以前の彼女なら気にも止めなかつたであろう。だが、大人しく、そして弱々しくなつた彼女には全てが重くのしかかる。嘗て、弱者であつた頃に逆戻りしていた。とても脆くて、崩れやすくて。

なのにだ。シャルロットは別段気にした様子は無く、一切と言及する事は無かつた。それ処か、改めてルームメイトとして、そして友人としての付き合いをしてくれたのだ。時には気を利かせてくれて、時には相談に乗ってくれて。

その結果この様な関係である。シャルロットは短期間で彼女を懐かせたのであつた。他の人間が相部屋であつたなら彼女は今も塞ぎこんだままであつたに違いない。恐るべし、シャルロット。

「……おっ？」

そんな様々なグループが賑やか真つ最中の中、一夏は前方を見やる。それに続いて他の生徒達も視線を前へ。その先には一つの光が。トンネルを抜け、一瞬だけ光に視界を奪われ――。

「……おっ」

「海っ！ 見えたあ！」

見えたのは青い空、白い雲、そして――陽光を反射する大海原。陽光を反射する海面は穏やか。絶妙な快晴であった。

I S 学園の一行事――臨海学校が今、始まる。

そんな騒ぎの中、隆道は何をしているのか。

彼は、一夏の真隣で――。

「ZZZZZZZZ……」

――アイマスクと耳栓を付けて爆睡していた。

時刻は進み、旅館前。花月^{かげつ}荘にて。

旅館前に並ぶ大勢の生徒。バスの中であれほど騒いでいたのに活気は全くと衰えていなく、寧ろ逆に生き生きとしていた。今の彼女達は無敵だ。最早、誰にも止められない。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさない様に注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」」」

結構普通に止められた。

千冬の指導能力が故か、誰一人とバラける事も崩れる事も無く一斉に整列、挨拶もすっかりだ。日頃の訓練の賜物であろう。

「うう……ん……」

「そろそろ目を覚まして下さいって」

「ね、眠つむ……。もう駄目だ、俺は死ぬ……」

「死にませんから。冗談でもそれ止めて下さい」

勿論、寝起きが非常に悪い隆道を除いてだが。何なのだこの男は。さっさと起きろ。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

そんな生徒達の前に現れるのは着物姿の女将。歳は三十代といった所であろう、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。仕事上常に笑顔が絶えないからなのか、その容姿は凄く若々しい。女将という立場とは到底思えない。

「あら、此方が噂の……？」

生徒達を笑顔満開で見渡す女将はふと、隆道と一夏に目を向けた。それは至極当然の

事、誰でも一度はそうなる。長年と女性だけの参加であった臨海学校に、イレギュラーである男子の参加だ。興味を持つのも致し方無しなのだ。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまうて申し訳ありません。お前達、挨拶をしろ」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「……柳……隆、道い」

緊張気味な一夏と、寝起きで死にそうな隆道。一夏は良いとして隆道はいい加減に目を覚ませ、そう思う千冬であった。

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲きよす 景子けいこです」

それでも、女将は意に介していなく丁寧過ぎるお辞儀で自己紹介する。かなり気品あるものだ。正に大人な女性の模範と言っても過言ではない。もしも、この世界が女将の様な品性の有る女性で溢れていたなら平和だったのかもしれない。

「それではみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられる様になっていますから、其方をご利用なさってくださいな。場所がわからなければ従業員に訊いて下さい」

「「「「はーん」」」」」

直ぐ様へ旅館へ向かう女子生徒の群衆。初日は自由時間、彼女達がやるはとうに決

まっている。向かうのは最大目的であるピーチだ。そもそも、遊ぶ以外何があるというのだ。全くと無い。

「ね、ね、ねー。おりむー」

「ん？」

わらわらと生徒達が部屋へと向かうその最中、立ち往生している彼等——正確には一夏に誰かが声を掛けてきた。振り向くと、何故か異様に遅い移動速度で向かつてくる少女——本音。眠たそうにしているその顔は意外にも”素”。

ちなみにだが、『おりむー』という名は一夏の愛称である。その名で呼ぶのは彼女だけだ。

「部屋はどこ？」 一覧には書いてなかった。遊びに行くから教えて」
その言葉で周りにいた生徒達が一斉に聞き耳を立てる。お目当ては勿論、一夏である。

隆道？ ブラックリストの彼に関わろうとする人間など極少数しかいない。片手で数えられる。こうして見ると交友関係が結構酷い。

「……いや、俺達も知らない。廊下にも寝るんじゃねえの？」

「わーそれはいいね。私もそうしようかな。あー、床つめたーいつて」

「……………」

勿論、そんな訳は無い。彼等にもちゃんとした部屋がある。ただ、それを言わないだけ。言えば恐らく彼女だけでなく、多数が乗り込んで来る。そうなれば最後、常に緊張しなければならぬ。それだけは勘弁願いたい所であつた。

そもそもだ。前提として彼等は知らないのだ。千冬と真耶に聞かされたのは部屋を用意しているという事だけ。明確には聞いていないのである。

「織斑、柳。お前達二人の部屋はこつちにある。ついてこい」

「あ、はい。じゃあのほほんさん、またあとで」

そう言つて彼女と別れ、千冬の後が続く。未だ眠そうにしている隆道の背中を押しつつ、快適な廊下を進んでいく。この男、未だに覚醒しない。

旅館の中はかなり広くて綺麗だ。一学年を丸々収容出来る大規模、歴史ある装飾、最新の設備。適度に効いているエアコンがとても素晴らしい。夏だとは到底と思えない。

そんな涼しげな廊下を歩いて暫くして、彼等は部屋に到着する——のだが。

「えつ。ハハハつて……」

そこは意外も意外な場所であつた。

辿り着いたその部屋の扉には『教員室』という張り紙。この事に一夏は思考が一瞬だけ止まる。その直後に冷や汗がだらだらと流れ出てしまう。

まさか、自分達は教員達と一夜を共に——。

「ああ、違う違う。お前達はそっちの部屋だ」

千冬は首を振って隣の部屋を指した。そこにも『教員室』という張り紙が。ここだけではなく、他の部屋にも同じ様な張り紙。一夏の頭は疑問で満遍なく満たされた。

「様々な意見が飛びに飛んでな。個室にするか、教員と共にするかと色々。就寝時間を無視した馬鹿共が押し掛けるのは確実、色々な意味で守る為に敢えて一覽に載せなかった。まあ、それでも馬鹿共は探し出すだろうが。最初は織斑が私と、柳は山田先生と同室の案もあつたのだが……」

「……………」
「うわっ、すっげえ嫌な顔してる。っていうか、寝惚けててもそこは反応するんですね……………」

「ほら見る、この有り様だ。勿論この案は却下、結局はお前達用の部屋を用意した。その張り紙はハツタリだから気にする事は無いぞ」

そう、これは攪乱である。リークされない限り彼等の寢床は生徒達に知られない。知られるなら——教員の中に裏切り者がいるか、うっかり口を滑らせてしまった男子二人のどちらかだ。後者は大丈夫であろうが、問題は前者だ。目を光らせる必要がある。油断は出来ない。

そんな思惑を知らない一夏は良かったと一安心するが、それと同時に目に留まった物

体が一つ。

付近に立て掛けてあるのはバリケードが一台。しかも『関係者以外立入禁止』といった張り紙がデカデカと。これはいったい何なのか。

「これは？」

「ああ、これか？　これはこうしてだな……」

そう言いながら千冬はバリケードを手に持ち、廊下を塞ぐ様に設置、その通路を塞いだ。コレの意味する事はたった一つ。

「ああ、なるほど……」

「これならあの馬鹿共が立ち入る事は無い筈だ。尤も、ここにおいてそれと近づかないだろうがな。来たら来たで私が制裁してやる。……間違つても誰かに教えようとはするなよ？」

「わ、わかつてます」

徹底した防護壁の完成だ。これで彼等の部屋に女子が雪崩れ込む事は無くなった。例え、何かの間違いで部屋を知られてしまったとしても近づく事の出来ない二段構え。ことわざで言うのなら『虎穴に入らずんば虎児を得ず』。厳密に言えば待ち構えるのは虎ではなく、鬼と狂犬だが。

態々鬼を掻い潜つてまで来る猛者などいない。掻い潜つたとしても寧猛なる狂犬、余

程の馬鹿か恐いもの知らずでない限りは確実に追い払える。生徒達の思惑は——そう、絶対叶わない。残念。

たった一人だけ恐れを知らない狂人がいるが、その際は全力で追い払うと千冬は静かに誓った。

「二応、大浴場も使えるがお前達は時間交代だ。本来ならば男女別になっているが……何せ一学年全員だからな、お前達の為だけに窮屈な思いなどさせられん。よつて一部の時間のみ使用許可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使い」

「わかりました」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物を置いて、あとは好きにしろ」

そう言つて彼女は部屋へと消えていく。それに続いて彼等も用意された部屋へ。

室内は広々とした間取り、外側の壁は一面窓。そこから見える風景はこれまた素晴らしく、海が大きく見渡せる。東向きの部屋が故に、日の出も抜群に見える事であろう。ここだけでも絶景だ。

風景だけでなく、設備もかなり充実している。トイレ、バス、洗面所はセパレート。バスは隆道でも足が伸ばせる程だ。これだけでも宿泊費用は凄まじいものだと感じてしまふ。二人だけでこの空間はとてつもない贅沢だ。少し申し訳無いと思う一夏であつた。

「おおー、すげー」

「……学生が寝泊まりする様な部屋じゃねえぞ。いったいどれだけ金使つてんだか」

「お、漸く目覚めましたか。なら早速ですが海にでも行きましょう」

「……やっぱ行きたくねえ。俺は残るわ」

漸くと目が覚めた隆道は海に行く事を決めた。

考えてみて欲しい。確かに外に行けば誰しもが待ち望んだ広大なるビーチだ。海で泳ぐもよし、砂浜で遊ぶもよし、肌を焼くもよし、色々と盛り沢山である。

だがしかし、彼は海で泳ぐ気なんて更々無い。勿論、砂浜で遊ぶ気も無いし肌を焼く気も無い。何もする気が無いのだ。あるとするならば風景を眺める事ぐらいなのだが、それなら窓から覗けば済む話。態々ビーチに行く必要など無い。

海水浴？ 砂遊び？ それとも日光浴か誰かとビーチバレー？ 彼がするとしても？

答えは否、絶対的否。少なくとも、女子の様に大いにはしゃぐ人間ではないのは確か。今の彼が楽しめるのは食事か喫煙の二択だけなのである。尤も、この二択は楽しみというよりは気晴らしの類いなのだが。

しかもだ。ビーチには今、百人を超える女子が集まっている。一般男性なら目の保養になる事は間違いないのだが、三大欲求の一つである性欲が欠けてしまっている彼には何も感じる事は無い。寧ろ、女性不信である以上苦痛でしかないのだ。この青年、本当

に男として色々と終わっていた。駄目駄目人間でしかなかった。

しかし、それでも一夏は諦めやしない。本当に嫌ならば明確に拒絶する筈だ。多少荒っぽいのが、行動を起こさなければ治るものも治りはしない。ほんの少しでも彼の傷心を改善出来れば御の字。

故に、一夏は――。

「まあまあ、そう言わずに。折角の海ですから。水着も買ったんですから今更行かないなんて無いですよ。向こうからの眺めも絶対に良い筈です。行きましょう。さあ行きましょう」

「いや、行きたく――」

「さあ、さあさあさあ」

「……はあ。わかった、わかったっつーの」

炸裂するは一夏の丁寧なゴリ押し。彼は観念、両手を上げて降参をした。この少年、強過ぎる。対隆道としてかなり適任なのではないか。

「言っとくが泳がねえぞ。眺めるだけだからな」

「大丈夫です、わかってますから」

本当にわかつているのかと思いつつ細目になる隆道は渋々にとバッグを漁り、水着や着替え等を袋に詰めて扉で待つ一夏と共に部屋を出ていく。もう後戻りは出来ない。

腹を括れ、柳隆道。

さあ、いざ海へ。

別館。更衣室付近にて。

更衣室へと向かう途中で隆道はトイレへ行くと言って一夏と一旦別れた。先に更衣室に向かった一夏はタイミング良く箒と出会った訳だが――。

「……………」

――問題を見つけた。見つけてしまった。

道端――石の庭の中央にある珍妙過ぎる光景に二人は完全に釘付け、硬直してしまった。決して無視出来ないものがソコに生えていた。

それは兎の耳であった。

しかも、只の兎の耳ではない。バニーガールが付ける様なウサミミだ。それも機械染みた代物。その隣にはご丁寧に『引つ張つて下さい』という張り紙がしてある。

二人はこのウサミミに見覚えがある——いや、あり過ぎた。見間違う筈が無かった。「なあ、これって——」

「知らんっ!! ……私に、訊くな。関係無い。何も、関係無い……!!」

彼女は速答速攻全否定。表情は歪み、その眼はまるで汚物を見るかの様な眼差しと化していた。

最早、確定したと言つて良い。このウサミミは間違いなく『あの人物』のものだと。

二人の脳裏に浮かぶのは規格外が過ぎる人間。その才能は天井無し。天才——いや、『天災』。

「……どうする?」

「千冬さんに連絡だ、どうせロクな事にならん。触れない方——」

「いや、柳さんここ通るぞ? そろそろ来るかもしれないから何とか——」

「——!!」

その瞬間。血相を変えた彼女は目にも留まらぬ速さでウサミミに接近、ソレを引つ張り出した。

その結果は——”無”。何も起こらない。

「お、おい、箒……」

「はあつ、はあつ……！ くっ……！」

心配を掛ける彼を置いて彼女は辺りを汲まなく見渡す。息を荒げて必死に周囲を注視、警戒心を一気に上げていった。

彼女は『あの人物』をよく知っている。なら、絶対何かしらアクションが起こると踏んでいた。若しくは近くにいると考えざるを得なかった。

絶対に隆道に会わせる訳にはいかない、それは避けなければならぬ事だ。ここにいる自分達が片付けなければ最悪の事態を招いてしまう。

より一層と警戒心を強めた、その時――。

「何やってんだお前ら」

「――!?!」

――最悪のタイミングで隆道が来てしまった。

彼女は咄嗟にウサミミを背中へと隠し、隆道と向かい合う。端から見れば怪しさ満点である。

「あ、えと、その……」

「あん？」

「何でもありません!! では私はお先に!!」

彼女は後ろ向きそのままその場を去る。それも無茶苦茶に早い足取りで。かなり器用であった。

それは剣道の足さばきの一つなのだが、それを理解したのは一夏だけ。剣道に詳しくない隆道はどこでその動きを得たのか不思議に思っていた。というか、仕草そのものに疑問を抱いていた。

「……何かあったのか？」

「あ、えーと、なんと言いますか……。解決したような、してないような……」

「何だそれ。……まあ、いいわ。ほら、さつきと行くぞ。他の奴等と鉢合わせちまう」

「……ちよつとここで待っててくれませんか？ 直ぐ戻りますので」

「？ ……おう」

解決していないが、今は何も起こらない様子。自分達ではどうにもならない故、ここは報告して千冬に任せる事にしよう。それが一番と、一夏は教員室へと走っていった。

その一方で隆道は何が何だかわからずじまい、立ち往生する以外の選択肢が無かった。完全なる置いてけぼりを食らっていた。

「……つたく。いったい何なん——」

——『獵犬』起動——。

「——あん？」

疑問が連続するその最中、突然と起動するのは『獵犬』。探知したものは自身の真上にあつた。おもむろに見上げて、そこは青い空と白い雲。絶好の海水浴日和である風景でしかない。

しかし――。

「……………」

――未確認飛行物体を確認。警戒せよ――。

「……………」

――そこには、確かに『何か』があつた。

暫くして、ビーチにて。

既に大勢の生徒達が溢れている。肌を焼く者、ビーチバレーをする者、泳いでいる者と様々だ。着ている水着も十人十色、可愛いものからかなり際どいものまで。ある意味で太陽よりも眩しい。一般人がいればナンパされる事は間違いない。

IS 学園に滞在する生徒達のスタイルは一般的に見ると非常にハイレベル。彼女達は自分の身体に自信が無いと自負するのだが、そんな事は無い。もう少し自分に自信を持つて欲しいものである。

胸にコンプレックスを持つ女子に関しては何？ それは禁句中の禁句、決して触れてはいけない。そつとしておいた方が身の為だ。

そんな色々な意味で絶景過ぎる光景の中――。

「あちちちっ」

「ああ……。とうとう、来ちまつた……」

イレギユラー、男子二人遂に参上。

熱した砂浜に足を焼かれて足踏みをする一夏と小さめのクーラーバッグを持つ、心底と嫌そうな顔をする隆道。彼等の登場によってビーチはより一層と賑わしくなっている。殆どの女子から注目を浴びに浴びまくっていた。

隆道を恐れて遠ざかる者はいるが、それは彼の事を全く知らない人間だけ。危害を加えない以上何もしないと理解している生徒達は普段通りだ。慣れというものは恐ろしいものである。

「あ、織斑君達だ！」

「わ、わ。身体かっこいい。鍛えてるね」

「う、うそっ！ わ、私の水着変じやない!? 大丈夫だよね!」

「あーあ、あの人はパーカー着てるのかあ……。あのバキバキの身体、生で見たかったなあ……」

「え、何それ？ 織斑君より凄いの？」

当然の事ながら飛び交うのは彼等の話題一色。百人以上の女子だけの場所に男子が二人、興味が湧かない筈が無かった。

一方、入学当初を思い出す多数の視線は彼等にとつて毒に等しく、それはそれは居心地が悪い。女好きならば嬉しさ大爆発となつて下心丸出しのナンパ祭りがおつ始まるだろうが、彼等は違う。嬉しさなど微塵たりとも存在しないのだ。

圧倒的物量の視線を前に一夏は羞恥心を隠せずたじろぎ、隆道は嫌悪感によつて顔をしかめる。IS学園生活四ヶ月目でも慣れはしなかつた。

「なんか、恥ずかしいですね……」

「あれだけ誘つておいて今更何言つてんだコラ。だーから来たくなかつたんだ」
「ま、まあまあ。でもほら、絶景でしょう？」

「……お前、結構スケベ野郎だな。失望した」

「ふ、う、け、い、が、で、すつっつ!!」

これには流石の一夏も全力で抗議。スケベだと思われるのは心外である。具体的に

言わなかった自分が原因だが、あまりにも酷い言われようだ。生徒達に誤解でもされたら面倒処では済まない。つい大声を出してしまった。

勿論、隆道はそんな事一切と思つてはいない。そう、これは自分を海に引き摺り出した一夏へのちよつとした報復なのだ。やり過ぎではないか。

「ああ、わかつたわかつた。そう騒ぐなつての。余計変な目で見られるぞ」
「勘弁して下さいよ、もう……」

そう愚痴りつつも、一夏は気持ちを切り替えて準備運動。足がつつて溺れでもしたら大惨事だ。故に、所々を念入りに伸ばしていく。この少年、かなりやる気に満ち溢れていた。

それに対し隆道は棒立ち、ただ景色を眺める。なるべく女子を視界に入れない様、遠くの方を。それは車酔いの時にするソレだ。盛大に使い所が間違っているが、それを言及する人間はいない。

と、そこへ――。

「あら、お二方ではありませんか」

「お、セシリアか」

やつて来たのはセシリアが一人。彼女の水着は鮮やかなブルーのビキニとパレオの組み合わせ。優雅で格好良い、そこら辺のモデルより圧倒的に綺麗であった。流石は代

表候補生と言うべきか。

その手には簡易式のビーチパラソルとシート、そしてサンオイル。小麦肌にするつもりだろう。彼女ならば絶対に似合う筈である。

「……………」

当然、それは一夏だけの内心である。

隆道はいつも通りガン無視を決め込んでいた。一応視界に入ったは入ったが、ただそれだけ。

眼球すら動かさず見向きもしない、そこに何も存在しないかの様に一切、全くと触れやしない。凄まじく、超の付いた筋金入りのシカトである。全く以て隙が無さ過ぎた。

いつも通りの事だ。一夏も、彼女もいい加減に慣れていく。彼女としては会話をしたい所だが、今回ばかりは機嫌を損ねる事を避けた。

「い、ち、か〜〜〜っ！」

「おうっ？」

ふと、遠くから声が聞こえてくる。一夏はその方を向くと、全力で手を振っている鈴音の姿が。鈴音の水着はオレンジとホワイトのストライプであり、スポーティーなタンニキタイプだ。

「……………うん？」

そこで、一夏は疑問が一つ浮かんだ。

彼等と鈴音との距離は数十メートル。何故だか距離が離れていた。近づこうともしない。用事があるのなら此方に来れば良いのと思つていた。

当たり前だ、原因は隆道なのだから。なるべく近づかない様にした結果がコレだ。流石に恐がり過ぎではないかと思うが、その理由は鈴音にしかわからない。理解される日は——恐らく来ない。

「では柳さん。呼ばれてるのでまたあとで」

「ん」

「では、わたくしもこれにて」

それぞれが立ち去り、残るのは隆道一人だけ。端からは仲間外れにされた人間としか見えない。少しでも行動しようと思わないのか、この男は。

「……………」

そんなものは無い。

たった数ヶ月間程度で人間は変われはしない。過去に比べればこれでも遥かにマシなのである。いったい高校時代はどれ程に荒れていたのか。

やはり楽しめない、来るのが間違いであった。ここに仲間仲間や光乃がいれば良いのになど、絶対に有り得ない事をしみじみ思う彼であった。

漸くとゆったり出来る、そう思いつつ手持ちのクーラーバックから一本のアイスキャンデーを取り出して頬張った矢先――。

「あ、柳さん。ここにいたんですか」

「……今度はお前か」

「??？」

どうやら、ゆったりはまだ叶わない模様。

声の主はシャルロット。別に無視する相手では無い為に、反応しておもむろに振り向く。当然、彼女も水着姿。

「どうですかコレ？ 似合いますかね？」

「俺に感想を求めんな。織斑にでも聞け」

「ああ、ですよね……」

楽しそうにくるくると回る彼女は水着の感想を求めると見事に撃沈、一気に肩を落とす。この青年に感想を求めるとはかなりハードだ。

彼女の水着は夏を意識したイエローであった。セパレートとワンピースの中間の様なデザインで上下にわかれており、背中側でクロスして繋げるといった構造になっている。

これが彼の内心。可愛いかどうかより、単純にデザインしか見ていない。こんなのも

あるのだなと思うが、それよりも隣の『何か』に注視した。

「……………何だソレ」

「……………」

そこには、奇妙奇天烈な存在がいた。

彼女と手を繋ぐソレはバスタオル数枚で全身を覆い隠していた。頭上から膝下まで隙間無くだ。一夏が見たら確実にバスタオルお化けと言ったに違いない。いや、誰が見てもそう言うであろう。隆道は脳内にてソレを妖怪バスタオルロリ女郎と名付けた。ネーミングセンスが酷い。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……………」

声からして、目の妖怪バスタオルロリ女郎の正体はラウラであった。何故だか随分と弱々しい声でモゾモゾとしている。何なのだこの少女は。というか、いったい何を見せられているのだ。

「ほーら、折角水着に着替えたんだからそれだと意味無いよ?」

「ま、待て。私にも心の準備というものが……………」

「もー。さつきからそればかりじゃない。一応僕も手伝ったんだよ? どこも変じゃないって」

一向にバスタオルを外そうとはしないラウラ。正に不動だ。動かざること山の如しだ。

これに対し痺れを切らした彼女は——強行手段を取る。ラウラ自身が行動を起こす、その為に。

「うーん、出てこないならここに置いてくよ？」

「な、なに？」

「は？」

彼を巻き込んで。

「うん、そうしよ。柳さん、相手お願いします」

「おい待て。それは待て。マジで待て……！」

唐突に繰り出される放置宣言。彼は焦った。

何故、自分が妖怪バスタオルロリ女郎の相手をしなければならぬのだ。確かにラウラとは話を付けたが、仲良くするとは一言も言っていない。それとこれとは話が別だ。何故そうなる。

それに何より、こんな弱々しくなったラウラの相手などしたくない。逃げるといった選択肢等は——焦っている彼の頭からは消えていた。

冷や汗が滲み出る彼を余所に、彼女はラウラの手を離して海へと行こうとしてしま

う。

「じゃあ、またねラウラ」

「ま、待てつ。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「……ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

観念でもしたのかバスタオルをかなぐり捨て、ラウラの水着姿が露となる。顔を向けていた彼は当然の事、それが目に留まる。

レースをふんだんにあしらった黒の水着。一見すれば大人の下着セクシー・ランジェリーに見えなくもない。見た事など一切と無いが、そう思わざるを得なかった。

髪型も変わっている。全くと飾り気の無かった伸ばしたままの髪は左右で一對のアップテール。あの中国人と似ていると、そんな気がしていた。

「はい、良く出来ました」

「なっ?! わ、笑いたければ笑う、ぐう……」

やけくそだからか覇気はあったものの、それも一瞬だけ。一気に弱々しい少女へ逆戻りとなる。流石の彼ですら嫌悪感を感じる事は無く、珍しく困り顔となった。いつたいどうしろというのだ。

「おかしい所なんて無いよ。ねえ、柳さん？」

「だから俺に感想を求めらんじゃねえつーの。興味あるとでも思ってたのか」

「本つ当に相変わらずですね……。僕は可愛いと褒めてるんですが全然信じてくれないんですよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしました。折角なのでおしやれにしませんよと」

「お、おしやれなど……。いら、ん……」

なるべくと強気に見せたい様だが、弱々しさが抜けていないラウラ。自信が無いのか、若しくは未だに負い目を感じているのか。もし、後者なら迷惑極まる。解決したのだから良いではないか。

あの事件は既に終わった。蒸し返しはしない。少なくとも、彼自身は何も気にしていないのだ。一週間以上経った今でもその様子では鬱陶しい。

「……………」

彼にとって、ラウラは至極どうでもいい相手。ハルの言葉あの言葉によつてラウラに対する負の感情は完全に消えている。今まで感じた事の無い感情だ。

関わりたくは無。かと言って、そのままでは此方が困る。しかし、面倒を見る気は更々無い。

で、あるならば――。

「はあ。おい、デュノア」

「はい?」

「このドイツ人は『自分探し』をしたらしい。どうすれば良いのか、何をすれば良いのかをな。何が言いたいかお前ならわかるな?」

「……勿論です。任せて下さい」

彼女は理解した。彼が放つ言葉の意味を。

彼はこう言っているのだ。ラウラを支えろと。弱々しくなった人間には誰かしらの支えがいる。その支えこそが——彼女その人だ。

既に気を利かせたり相談に乗ったりとしていた彼女だが、その想いはより一層と強くなつた。

「ほら、ラウラも皆の所へ行こうね」

「あつ! ちよ、待つ——」

「はいはい、話はあとでね」

そう言つて彼女はラウラをぐいぐい引つ張り、生徒達の元へ。こういう時こそ愛想の良い彼女の定番となる。今後は任せた、あとは知らない。

二人を見届けると、その近くで丁度良く戻つた一夏の姿が見える。今度は数人でビーチバレーをするらしい。なんとも元氣な事だ。

何故か、そのグループで着ぐるみを着た奇抜な少女が見えたが絶対に気にしない。興

味を持てば負けな気がすると、自身の脳が拒否していた。

「出席番号一番！ 相川^{あいかわ}清香^{きよか}！ ハンドボール部行きまーす！」

「ふっふっふっ、七月のサマーデビルと言われたこの谷本^{たにもと}癒子^{ゆこ}の実力を……見よ！」

遠くからでも聞こえる声。はりきっているなど流し目しつつ、アイスキャンディーを口に運ぶ。もう溶けかかっているが気にしない。数はある。直ぐに食い切つて次のを頬張つた。

「んー。……あん？」

百人以上が遊ぶ中で黙々とアイスキャンディー食べつつ呆けるその時、ある人物が目留まる。目を凝らすとポニーテールの少女が。

決して見間違いでは無い。その様な髪型をする人間はたった一人しか思い浮かばなかった。

「……篠ノ之？」

こここそと別方向へと歩く、パーカー姿の箒。砂浜に来る様子は全くと無い模様。何故、一夏の元に行かない。いったい何処へ行く気なのか。

そもそも、彼女は自分達より早く着替えた筈。となれば、今まで何をしていたのか。まさかとは思うが、ずっと更衣室辺りで留まっていたのか。

「……ったく」

目に留まった以上、見過ごす訳にはいかない。故に、彼は動き出した。

何故、彼はそこまで彼女を気に掛けるのか。

その理由は――。

ビーチからある程度離れた岩場にて。

その場所は大勢の生徒達がいるビーチと違い、とても静かであった。聞こえるのは波の音だけ、騒ぎの一つも無い。物思いに耽るか、ゆったりとしたい人間にとってはうってつけのスポットだ。

そんな穏やかな場所に居座るのは二人の男女。アイスクャンデーを啜えて羨む筈と、彼女から少々離れた距離で煙草を啜える隆道。またしてもクソガキ行為を炸裂していた。

「——で、恥ずかしくなつてここまで逃げたと」

「あ、あははは……」

アイスクャンデーを囁る彼女は目を逸らし、煙草を吹かす彼は今やジト目。追つて問い詰めてみれば予想通り、何も大した事では無かつた。

至つて単純な事だ。一夏に水着を見られるのが恥ずかしかつた、それだけ。溜息しか出ない。

砂浜にいなかったのも更衣室で着るか着まいか悩みに悩んだから。いざ決心を固めて出てみれば羞恥心が限界突破、ここまで逃げ出したという。

とても情けなさ過ぎる。とても度し難い。

「お前は本つ当に残念な奴だな」

「面目ないです……」

「少しは恥じらいをどうかしろよ。いつまでもそれだと取られるぞ。……もう一本食うか？」

「いただきます……」

一夏の鈍感は相当なものだが、彼女も彼女だ。恥ずかしがつて近づかないままでは意味が無い。いつまでたつても進展など見られないであろう。幼馴染みというアドバンテージがあるとはいえ、ここでアピールしないでどうするというのだ。

色恋沙汰にアレコレと言う気は無いが、流石にこれは目に余る。そう思う彼であった。

「……つーか、俺は平気なんだな」

「今はパーカー着てますし……素足はISスーツで慣れていますから……。それに、柳さんは異性というより……ああ、何と言えば良いのか」

「だったらそのまま織斑の所に行けよ。別に脱ぐ必要は無えじやねえか」

「それが出来たら苦勞しないんですけどね……。はあああ……」

彼女はつい大きな溜息を吐いてしまう。溜息を吐きたいのはこっちの方だ。その堅物過ぎる頭を引つ叩いてやりたい、そんな衝動に駆られる。

（仕方無え、かな）

恐らくだが、彼女はずっと孤立するであろう。午前でこれなのだから、午後も同じ様になるのは目に見えている。馬鹿でもわかる事だ。

野放しには出来ない。ならば、する事は一つ。

「篠ノ之。お前がそれだと織斑が心配するぞ」

「——！」

「考えてみる。幼馴染みはずつと姿を見せない。放っておけと言ったんならまだしも音沙汰無し。あいつが何も思わねえとも思うのか」

「……………」

「水着を見せろとは言わねえさ。けどよ、せめて顔は出してやれ。いつもの様にな」

自身が一夏に伝えるという強行手段はあるが、彼女はそれを望まない。ならば、後押しである。これで駄目ならお手上げ、手の打ちようが無い。

彼女は俯き、そのまま動かない。その姿を彼は黙って見据えたまま。これ以上は何も言わずに、大空に向けて紫煙を燻らせる。

固まったまま、約十数秒。彼女は決意を新たにしたのか顔つきが変わり、勢いよく立ち上がる。

「行つてきます」

「ん」

「本当に、ありがとうございました」

そう言つて彼女はその場を颯爽と去っていく。残された彼は溜息を吐きつつ、火が消えた煙草を捨てて新たな一本に火を付ける。引つ叩いた方が良いのはこの男の方だ。クソガキにも程がある。

「フウ……………」

ふと、腕時計を見れば時刻は正午。昼飯時だ。旅館の飯はさぞかし旨いに違いないであらう。

この煙草を最後にして自分も向かうとしよう。そう思った矢先——自身の後ろから足音がした。

「あん？ おい、篠ノ之。お前結局逃げて——」

彼女かと思ひ、彼は呆れながらも振り向いた。しかし、そこにいたのは——。

「……………」

「あ」

——仁王立ちで此方を睨む、水着姿の千冬。

スポーティーでありつつ、メッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒ジキニ。そのスタイルは本物のモデル——いや、それ以上と言っても決して過言ではない。

圧倒的だ。大多数の生徒は見惚れるであろう、大多数の男性は鼻の下を伸ばすであろう。

しかし、彼にそんなものは通用しない。千冬の水着姿など至極どうだっていい。それより問題はこの状況下にある。

煙草を吸っている学生と、それを目の当たりにした教師。何も起こらない筈が無く——

！。

「……柳。私が何を言いたいか、わかるな？」

「あーあ」

このあと、彼は淡々と叱られた。

第四十九話

時刻は午後七時半。花月荘にて。

大広間三つを繋げた、これまた広い大宴会場。自由時間をフルに活用した生徒達は今や浴衣姿でずらりと並んでいる。そう、夕食時間である。

座敷だけでなく、隣の部屋にはテーブル席が。なんでも多国籍を考慮に入れた故の配慮だとか。流石はIS学園、生徒への配慮は抜かり無い。

「うん、旨い！ 昼もそうだったけど夜も刺身が出るなんて豪勢だよなあ」
「そうだねえ。本当、IS学園で羽振りが良いよ」

その大勢の列の隅っこ——厳密に言うところから二番目と三番目に座る一夏とシャルロットは目前にある膳に舌鼓を打っていた。

メニューは刺身と小鍋に加えて山菜の和え物が二種類、更には赤だし味噌汁とお新香。一見して色とりどりでもとても鮮やか、正しく豪勢。

しかも、その刺身はなんとカワハギ——しかも肝付だ。一学生が食べれる代物ではない。本当にどれだけの費用を掛けているのだろうか。

「……………」

そんな彼等の横——夏隣の隣である一番端には胡座をかいた隆道の姿。彼は一言も喋らず黙々と食事を進めている。いつも通りの無表情で。

誰が見ても夕食を楽しんでいるとは思えない。この様な豪華な食事でも顔色一つ変えやしない。一切と、全くと、何も変わりはしなかった。

彼は食べ続ける。自身の感情を押し殺し——。

(うーわっ、うま、うまい、旨過ぎんだろコレ。なんか、こう……何コレうまつ。うままつ)

——否。そんな事はこれっぽっちも無かった。

見た目とは裏腹に、彼は心底と楽しんでた。語彙力が盛大に吹き飛んでドアホになつた程に。周りにいる生徒の事など完全にそっちのけ。

今の彼には負の感情など一切と無い。あるのは目の前の膳に食らい付く、ただそれだけ。意外と単純な人間なのではないか、この男は。

「「「……………」」」

少量のおかずを口へと運び、白米を掻き込み、汁物で一気に流す。素早い一連の流れを垣間見た殆どの生徒は啞然、箸が止まってしまっていた。

それだけではない。彼の真横にはすっからかんとしたおひつが複数。これが何を意味するか。

そう、彼は超大食い。夕食が始まってから常に食べ続けている。宛らそれはフードファイター、圧倒的であった。どの様な胃袋をしているのだ。

全くと動じないのは一夏を始めとした極少数。以前に馬鹿みたいな量の唐揚げ定食をあつさりと平らげた光景を見たので気にはしていなかった。

「あーあ、旨い。お、しかもこのわさび、本わさじやないか。おいおい、高校生の飯じゃねえぞ」

「本わさぎ？」

「ああ、シャルは知らないのか。本物のわさびをすりおろしたヤツを本わさぎって言うんだ。学園の学食に付いてるのは練りわさ。えーと……原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうヤツだったかな。着色や合成で見た目を似せるんだ」

「ふうん。じゃあこれが本当のわさびなんだ」

「そう。でも、店によつては本わさと練りわさを混ぜてだしたりもするかな」

炸裂する一夏のうんちくによつて彼女は感心。いったいどこでそれを知ったのか気になる所。

ちなみではあるが、『シャル』は彼女の愛称。ビーチにて遊ぶその最中、当の本人を差

し置いていつの間にもやら決まっていた。

一夏か、または他の誰かか。最初に言い出した人間は定かではないが、本人は気に入った様子。よつて、一組の生徒達は彼女をその愛称で呼ぶ事になったのであった。

隆道？ 彼に然り気無く愛称を付けて貰ったとアピールした時は――。

『そうか。よかつたな』

――これだけ。

その後も相も変わらずファミリーネーム呼び。愛称処か名前ですら呼びやしない。何一つとして変わりはしなかった。

そもそも、一番仲が良さげな一夏ですら未だに名字呼びなのだ。愛称など口にしないであろう。相手に対してあだ名で呼ぶ事はあれど、それ等は罵倒や嫌味を含めたものだ。愛称とは言えない。期待するだけ全くの無駄、全くの無意味である。

そんなくっそどうでもいい事はさて置いてだ。彼女は一夏のうんちくにより本わさに興味深々、他の料理よりソレに目が行く。

一夏はあれだけの事を言った。なら、IS学園で出るわさびとは格別に違くない。素晴らしい味がするのだと自分に都合良く思索していく。

それ故か、彼女は何をとち狂ったのか――。

「はむ」

「え？」

——本わさを口に放り込んだ。山盛りを全て。

「くっ?!?!」

「うわづ……」

正しくそれは『わさびチャレンジ』であった。少量ですら辛いソレを頬張るとはななる無謀。悪い言い方をすれば只の馬鹿である。

結果は案の定。彼女は鼻を押さえ、今や涙目。正直、見るに堪えないもの。あの量を一気に口に含んだのだから当然の反応か。誰でもこうなる。吐き出さなだけで幾分マシであろうか。

「だ、大丈夫か？ 薬味をそのままで食うなんて普通しないぞ……？」

「ら、らいひょうぶ……。ふふ、風味があつて、良いね……。お、美味しい……よ？」

誰が見てもわかる、精一杯の痩せ我慢。絶対に美味しいとは感じていない。笑顔こそ浮かべてはいるが涙目に崩れていた。美顔が完全に台無し。

「……何やってんだお前。アホか」

「あつ！ 今アホって——くっ?!?!」

「アホにアホって言つて何が悪いんだよ」

心配を掛ける一夏に対し、彼女の悶絶によつて我に返つた彼が口にしたのはまさかの

アホ呼び。口に出していないとはいえ、つい先程まで盛大にドアホと化していた人間が何を言っているのだ。棚に上げると言うのは正にこの事。畜生の鑑だ。

「——っ!! ——っ!!」

「うるせえな。黙って茶でも飲んでろ」

本当に畜生が過ぎる。言いたい放題であった。

今も鼻を押さえる彼女の必死たる抗議を一蹴。しつしと手を払って完全に放置、一夏に任せる。そんな事より、今度は目の前の光景。

(……こつちもこつちで何やってんだか)

向かい側には二人の少女。此方も此方で何やら騒がしい。楽しんでる様子ではないのは確か。

片や、背筋をしつかり伸ばす模範的正座の箒。片や、プルプルと震え出す顔面蒼白のセシリア。箒は別に良しとして、問題はセシリア。いったい何をしているのだ、この女は。

「っ……っ……う……」

「セシリア、無理せずにテーブル席に移動したらどうだ？ 私達のクラスも何人かは行っているのだから別に恥ずかしくはないだろう」

「へ、平気、ですわ……。この席を獲得する為に掛かった労力に比べれば、正座、くらい

……

「いったい何を言っているのだ、お前は……」

どうやら単に正座が辛いだけの模様。慣れない姿勢はかなりキツイものだ。そこは共感出来る。

獲得だとか労力だとか、何やら意味不明な事を言い出していたがいちいち気にしない。理由など訊かないし、聞く気も無い。そこまで辛いのならさっさとテーブル席に行けと思う彼であった。

それでも、セシリアはここを動く気など無い。この席は他生徒から勝ち取ったものなのだから。彼とコミュニケーションを図る、それだけの為。諦めの悪い女だ。とても執念深い。

だが、今はそれ処では無い。正座と格闘中だ。平然を装ってはいるが、何処を見てもバレバレ。足を崩すという発想は出てこないのであろうか。なんて残念過ぎる少女なのだ。

「い、いただき……ます……」

「……………」

「お、美味しい……ですわ、ね……」

汁物を飲むのも難儀している。目的がすっかり変わっていた。本当にそれで良いの

かセシリア。

「ああ、もう見てられん?! ほら、足を崩せ！」

「あつ?! 何——い、っ?!」

箒に足を崩され、セシリアは苦しみに悶える。馬鹿に更なる磨きが掛かっていた。本当に貴族の人間なのかと疑ってしまう所。哀れセシリア。

見なかつた事にする。そう踏んだ彼は目の前の光景を完全シャットアウト、意識を臍へと向けて食事を再開した。

と、その時だ。視界に何かが映ったのは。

「……………」

隣——一夏からスツと渡される一品のおかず。手の付けられていないソレに彼は疑問を抱く。

「なんだコレ」

「いえ、その。向こうから回ってきました……」

「? ……ああ、食えっつか」

「そうかと。それに、コレだけじゃないんです」

しかも、その一品だけではない。次々とおかずが送られてくる。まるで回転寿司のアレの如く。結構——いや、かなりの量だ。彼の食べっぷりを見た故であろう、生徒達は

食べられないおかずを全部任せようとしていた。

アレルギーを持つ者、単に苦手意識を持つ者、ダイエツト中と理由は様々だが、残すくらいなら食べてくれる者に渡した方が断然良い、そういう考えなのだ。所謂処理係というヤツだ。

ベルトコンベアよろしく送られてくるおかずの数々。これに対して彼は顔を引き攣らせる――。

「……はんつ。上等じゃねえか」

――訳もなく、ソレに手を伸ばす。その表情は何処か嬉しそうであった。とても珍しい事だ。

「お前も食えよ。別に俺一人に渡したって訳じゃねえだろうしな」

「よおーし。折角ですし、何品か貰いますかね」

彼に続き、一夏も食事のペースを上げていく。

最早、彼等は止まらない。手を休ませる事無くもりもりと食べ続けていった。育ち盛り万歳。

その一方。

隆道達とは別列である最先端に、日葵はいた。

「んっ、ふっ、ふっ……」

彼女もかなりの大食い。少量のおかずを口へと運び、大量の白米を掻き込み、汁物で一氣に流すという、隆道と同様の動作とペース。更に状況も一緒、おかずが次々に送られていた。

それだけでも周りから注目を浴びる光景だが、それ以上に目に留まるものは――。

「日葵様、グラスが空いてますよ。さあどうぞ」

「はいはいいいい」

「日葵様、お椀を此方に。よそいます」

「どうもお」

――彼女の側にいる、無表情な二人の生徒。

見るからに上司と部下――いや、女王と下僕。その言葉が似合っていた。というより、その言葉以外の表現が見つかりはしなかった。

そう、その二人は『飼犬』。しかも、恐怖によつて無理矢理従う者達とは違う絶対的崇拜者。転入当初のラウラがとても可愛く見えるレベル。色々な意味で格が違い過ぎる。

「ああ、本当に美味しいい」

「日葵様、向こうから肝付です」

「どうもどうもお」

「日葵様、ご飯のおかわりです」

「はあい、ありがとねえ」

膨大な量の食事を満面の笑みで食べ続ける彼女と両隣にピッタリと付き添う生徒二人。彼女達の関係上、何一つとして間違つてはいない。

しかしだ。知らない人間からすればその光景は異常の中の異常——狂気の沙汰と言ふ他は無い。どうかしている。マトモではない。クレイジー。

生徒、教員、従業員。彼女達の事を知らない、関わりを持たない人間は頬を引き攣らせていく。超が付く程にドン引きしていた。

「あら、おひつ空になつちやつたあ……」

「ご安心を。既に用意しています」

「あはあ、ありがとねえ」

どれだけ引かれようと、彼女達は気にしない。寧ろ、邪魔をするなど言わんばかりの空気を露にしている。誰もが手出ししようとはしなかった。

二ヶ所で起こる、大量のおかずと白米の消費。二人の大食いにより膳とおひつは完全に空っぽ、文句無しと言える素晴らしい完食となった。

夕食から暫くして。一室の教員室にて。

その一室では二人の女性と五人の少女がいた。中央には様々な飲料水。一見して普通の女子会。

彼女達はそれはそれはとても賑やか——。

「[[[[[.....]]]]」

「さて、これで集まったな」

「お、織斑先生。圧が凄いですよ……」

——ではなかった。断じて。

虫の音が明確に聞こえる程に部屋の中は静か。まるで葬式かお通夜を彷彿とさせた。鋭い眼光で座る千冬と、隣には困り顔の真耶。その二人の前には正座した状態で見事に整列する箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが。

平然とする者と冷や汗を垂らす者。前者は箒、シャルロット、ラウラの三人。後者は

セシリア、鈴音の二人だ。どうしてこうも違うのか。

「どうした、オルコットに風。顔が青いぞ」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、えと……」

それも当然の事だ。セシリアは四月と五月での事件で絡みはしたものの、それ以外は一般生徒とあまり変わらない。鈴音は昔から千冬と関わりがあるが、未だに苦手意識が拭えていない。更には五人の中で唯一の別クラスである。今となつては面と向かつた会話など無いに等しい。

その一方、箒とシャルロットとラウラの三人は幾度となく会話をしている。箒とシャルロットは主に男子二人関連で。ラウラは言わずもがなだ。今更何を怖じ気付く事があるというのだ。

「全く、しょうがないな。私が飲み物を奢ろう。篠ノ之、何が良い？」

「いや、その……これはいったい？」

怖じ気付く事は無かつたが、次第にと困り顔に変わる箒。状況が全くと掴めないでいた。

彼女だけではない。シャルロットも、ラウラも同様に少々の困惑を見せていく。

「まあ、そう堅くなるな。折角の機会なのだからこうして話でもしようじゃないかと

思つて、な。だが……その前に風」

「は、はいっ……」

「次は無いぞ」

「……すみません」

何故、彼女達がこの部屋に集まっているのか。事の始まりは数分前に遡る。

旅館内の廊下にて。

一人の少女——鈴音は静かに散策をしていた。いや、それは散策と言い難い、怪し過ぎる挙動。宛らそれはスニーキング。

「……………」

そう、それは散策ではなかった。鈴音は一夏の部屋に向かつていたのだ。こつそり、忍び足で。本人は平然としているつもりであろうが、全くと隠しきれていなかった。

部屋の一覧に載らない、教えもしてくれない。ならば、此方から探し出して向かうまでである。実践主義。行動力の化身。なんとこの活発力だ。

電話で呼び出した方が確実な筈だが、どうやらその選択肢は無かつた模様。何かしらの恥じらいであろう、女心は複雑なのだ。

そんな複雑が過ぎる女心を抱える鈴音は努力で手に入れた頭脳、持ち前の鋭過ぎる勘を駆使して彼の元へと歩く。進展を一気に深める為だけに。あわよくば、そのままゴールインしたいと思考がお花畑と化していく。静かにウキウキしていた。

ちなみにだが、この時点で彼が隆道と一緒にだと考慮していない。考え無し。脳筋。残念。

(この先しか無いわね)

旅館の構図は把握済み、頭に叩き込んである。そこに生徒の部屋を照らし合わせて部屋を絞り、勘を頼りに辿り着いた先は——教員室。

(ええ……。……お……?)

数多くある教員室。更に、その廊下を塞ぐ様に立てられている張り紙付きのバリケード。流石の鈴音もこれには躊躇せざるを得なかった。

だがしかし、自身の勘が告げている。この先に彼がいるのだと。行こうか行かまいか悩み出し、遂に——行く事を決意。止める者はいなかった。

鈴音は唾を飲み込み、意を決して足を動かす。バリケードを通り抜け、一夏の元へ——。

「やはり来たか」

——行けやしなかった。

真隣を向くと、扉からは瞳だけを見せる千冬。その鋭い眼差しは正しく狩人のソレ。目が合った鈴音は瞬時に理解、脱兎の如く逃走を図る。

「——いつ!?!」

「逃がさんぞ」

逃げようにも、相手が非常に悪かった。素早い逃走も虚しく、速攻で首根っこを掴まれ即終了。世界最強の前では代表候補生などナマケモノだ。決して逃れる事は出来やしないのだ。

「あ、え、ええと……」

「……ふむ。本来なら制裁ものだが、丁度良い。他の四人——篠ノ之とオルコット、あとデュノアとボーデヴィツヒを呼んでこい」

「へ、へえ? よ、呼ぶって何故——」

「呼べ」

「は、はいいいいつつつ!!」

制裁を受けるのかと思いきや、まさかの指示。鈴音は駆け足で他の四人を呼びに行く。困惑する暇すらも与えられはしなかった。

そして、今に至る。

「ほれ。遠慮するな。どれでも好きな物を選べ」

少女五人の前に並べられたのは五本の飲料水。どれこれもおかしくはない、至つて普通のもの。

出されたからには頂戴する。少女達は目の前にあるそれ等を吟味する事も無く手に取つた。

「「いただきます」」

「い、いただきます」

少女達はほぼ同時にとその飲料水を口にする。ある者は何の疑いも無いままで。ある者は疑心に満ちて千冬に目を向けたままで。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりや、飲みましたけど……何か？」

「なに、ちよつとした口封じだ。……山田先生、出してくれ」

「はーい。お待ち下さい」

千冬に指示された真耶は待つてましたと言わんばかりに冷蔵庫を開き、二つの缶を取り出した。それは星のマークを主張する、キンキンに冷えた飲料水——そう、缶ビール。

五人はこれに唾然。

そんな少女達を余所に、千冬と真耶はビールは楽しそうに開封。飛び出す飛沫と泡を即座に唇で受け取り、喉を鳴らして豪快に飲み始めていく。

「「「「「」」」」」

襲い掛かる、更なる唾然。

目の前の教師二人が、学生である自分達の前で飲み会をおつ始めてしまった。何人かは何かしらあるとは思っていたが、予想の斜め上。いったい誰がこれを想像出来ようか。

特に、ラウラが酷いものだ。幾度と無く瞬きを繰り返している。目の前の光景が信じられない、脳が視覚情報を拒否していた。

「ふはあつ。……んく？ おかしな顔をするな。私達だつて人間だ。酒くらいは飲むさ」

「あ、あの、今は……」

「仕事では……」

「堅い事など言うな。口止め料はもう払ったぞ」

そう言った千冬の目線は少女達が持つ飲料水。そう、ちよつとした口封じとは正にソレ等の事。はつと気づいた少女達は何も言えやしなかった。これが口封じになるのか

と言えば疑問が出るが、少女達には効果があつた模様。

そう、この五人だからこそ成立する事なのだ。千冬の内面を知る者に効果は全くと無く、弱味やネタが欲しい者には逆効果だ。

「ふうっ……。山田先生、もう一本頼む」

「はあーい」

「……さて、そろそろ肝心の話をするか」

そうこうしている内に、千冬は二本目に突入。真耶からソレを受け取りつつ、少女達を見据えてその口を開いていく。眼差しは真剣そのもの。

五人は息を呑み、身構える。絶対に真剣な話になると踏んで。間違い無く男子に関する事だと、そう確信していた。

千冬は漸くと声を放つ。それは――。

「篠ノ之と嵐、あいつのどこがいいんだ？」

「へあっ!？」

――箒と鈴音を標的とした精神攻撃。

セシリアとシャルロットは肩透かしを食らい、箒と鈴音は変な声を出して白目を向い

てしまう。ラウラは完全に思考停止、理解出来ないでいた。

確かに男子に関する事ではあった。だが、半数以上が全くと関係の無い色恋沙汰。溜めておいて話がそれかよとツツコミを入れたくなる。

千冬の言う『あいつ』とは勿論、一夏の事だ。ラウラを除いた全員が二人のバレバレな片思いを把握している事だが、箒と鈴音からすればとても堪ったものではない。精神的に多大なダメージを受けてしまう。正にクリティカルヒット。

しかし、ここ最近の出来事によつてメンタルが強くなつたのか、咄嗟に我に返つて反撃に出る。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですの」

「あたしは、腐れ縁なだけですし……」

反撃ではなかった。見苦しい言い訳であった。

口を開いてもごもごとするだけ。恥ずかしさが溢れ出し、ハッキリと口にしない。バレバレだ。往生際が悪い。必死が過ぎる。

二人はその辺り似た者同士だ。いや、羞恥心の大きさだけは箒が勝っている。やはり残念な子。

「ふむ、そうか。では一夏に伝えておこう」

「言わなくていいです！」

「はっはっはっ!!」

「あらあゝ」

出来上がっているのか、そうでないのか。既に二本目を空にした千冬は大笑い、真耶は口を手に宛がい微笑みを浮かべる。はっとした箒と鈴音は顔が真っ赤、その場で項垂れるしかなかった。

生徒をからかう教員という、地獄の様な構図。なんて面倒な女共だ。教員がそれで良いのか。

「「……………」」

その一方。他の三人は静観、我関せずを貫く。

目だけを大きく逸らし、極限まで気配を消し、ただ黙るのみ。少しも助けようとはしなかった。いや、出来なかったと言うべきか。

もしも、ここで介入などしてしまえば自分達も標的となる。普段の規則と規律に正しい千冬ならまだしも、今は酒が入った状態。何を言われるかわかったものではない。被害は最小限が一番だ。

と、静観を決めていた所で――。

「はっはっはっ……。さて、あとはお前達だが。まあ、そういった事はまだ無い、か」

――千冬は標的を他の少女達に切り替える。

が、箒と鈴音の様にからかう様な事はしない。からかう要素が一つも無いのだから当たり前か。

「わたくしはまだ殿方とは……」

「僕——私も……ちよつと難しい、です」

「私にもわかりません」

セシリアは頬をかき、シャルロットは苦笑し、ラウラは堂々と言葉を放つ。偽りは全く無い。

一人は遺産等を守る為に努力を余儀無くされ、一人は大人に人生を振り回され、一人は生まれたその時から軍人への道。余裕など有りはしない。

「教官。一つ、よろしいですか」

「織斑先生だと……まあ、いい。で、なんだ？」

が、しかし。何かしらの想いがあるのは確か。形はそれぞれ違うが、共通点の一つだけある。

「……柳隆道についてです」

隆道を知りたい。それが共通点。

「……………」

しんと静まり返る空間。再び虫の音が聞こえる程にその部屋は静寂と化していった。楽しそうな表情をしていた千冬と真耶は一変。片や、真剣な表情へと。片や、曇った表情へと。

二人だけではない。項垂れていた箒と鈴音も、考えに耽っていたセシリアとシャルロットもだ。ここにいる全員がその表情を変えた。

「……………何を訊きたい」

「彼は、何者なのですか」

「……………」

「彼の専用機が解析不可能なのは理解しています。ですが、彼自身の事は何も」

「……………我々にもわからん」

隆道に関してはとても言えやしない。

IS学園は未だに彼の詳細を掴めていなかった。唯一と知るのは真耶と菜月だけであるが、それも微々たるものだ。しかも、政府の手によつて固く口止めされている。漏洩などしてしまえば最後、本人達は終わる。その親族も終わる。

IS学園でもそう。彼が女性不信とISへの憎悪、言えるのはたったそれだけ。他はタブーの領域。

四月の事件、五月の事件、六月の事件。先月の男性操縦者襲撃事件以外はそれぞれの一部だけが知る事。共有など絶対に許されなかった。

故に、千冬は言える事だけを淡々と伝える。

「柳に関しては本当にわからない。何せ、経歴がほぼ全て塗り潰されているのだからな。わかった事と言えば二回ほど転校しているくらいだ」

「……………!? そ、それは……………!!」

「身辺調査も駄目だった。住民は聞き込み拒否。それ処か、学園関係者を追い返す程だ。柳の住む地域の人間は我々を、ISを、憎みに憎んでいる」

「……………」

「協力者の手を借りても未だに情報が掴めない。徹底に徹底した情報制御、手の施しようが無い。我々とISへの憎しみに関しては思い知らされた。それはもう、嫌と、言う程に、な……………」

真剣な表情は次第に沈んでいき、真耶と同様に曇った表情に次第にと変わっていく。初めて見るその表情にセシリアと鈴音は驚愕、目を見開く。

そこに座るのは最早、世界最強ではなかった。唯の人間、一人の女性だ。

「……………ああ、そうだ。奴も、だったな」

「奴、とは……………?」

「「「「……………」」」」

「今一度言う。奴に、不用意に、関わるな」

世界最強がする、力強い警告。少女達はそれに頷く事しか出来ない。

その部屋は——とても静かになった。

その頃の隣——隆道と一夏がいる部屋では。

「コレ、すげえ旨いな。そっちはどうよ」

「こっちも絶品ですよ。……………っていうかやつぱり買い過ぎでは？」

「良いんだよ、こんな事でしか金使わねえしな。余ったら持って帰れば良いだけだ」

「じゃあ、生菓子を優先しますか。あ、王手」

「……………詰んだわ。もう駄目だ、他のやろうぜ」

彼等は将棋をしながら菓子を堪能していた。

テーブルを埋める、旅館で販売する土産菓子。それ等は隆道の軍資金によりフルコンプリート、完全にパーティーが出来るレベルと化していた。金を湯水の如く使うとは正しくこの事であろう。まだ食べている事にツツコミしてはいけない。

「皆は何してるんだろ。一人だけだとなあ」

「視線無し、騒ぎ無し。静かで良いじゃねえか。あとは吸えればなー。こう、フーツとな
……」

「……煙草は駄目ですよ。茶、淹れて来ますね」

「ん」

誰にも邪魔はされない、とても貴重な一時だ。その時間は二人の心を間違ひ無く癒していった。こうして、臨海学校初日は終了したのである。

ちなみに、将棋を始めとした数有るゲームにて一夏は全勝、隆道は全敗したとか。雑魚だった。

第五十話

臨海学校二日目。七月七日。

四方を切り立った崖に囲われているその場所は I S 学園のアリーナを連想させるドーム状の砂浜。中央には I S スーツを着用した大勢の生徒と複数の教員がずらりと並んでいた。場所が場所なだけに一般人から見れば完全な水着にしか見えない。

「諸君、昨日はさぞ楽しめた事だろう。しかし、今日は忙しい一日となる。身を引き締めろ」

「「「はいっ！」「」」」

臨海学校の最大目的。非限定空間における I S の各種装備試験、そしてデータの採取。揚陸艇から送られた大量の装備によつて本日は朝から夜までそれ等に追われ、皆が多忙と化す。

特に、専用機持ち——代表候補生達には大量の装備が待ち受けている。迅速に、確実に、正確に行わなければならない。

そこが一般生徒とは明確に違う所。臨海学校は代表候補生にとって仕事も同然なのだ。十五歳でこの様な事を国から任されるのはとても立派だ。

「が、その前にだ。……おい、遅刻者」

「……………」

「せめて返事ぐらいしろ、柳……」

いぎ、新装備のテストが始まる直前に千冬から名指しされる青年——隆道。若干細く
なっているその目は不機嫌が故なのか、寝惚けているのか。

あろうことか、彼は遅刻したのだ。その理由も単なる寝坊。この様な一大行事でさえ
平常運転。

起床時間は爆睡、朝食時間ですら爆睡。一夏が全力を尽くして起こし、目覚めた頃には
集合時間ギリギリの時間帯。全力疾走した一夏はなんとか間に合ったのだが、寝起き
が悪い彼はその逆。終始のろろ状態が続き、着いたのがつい先程。

当然、彼は遅刻に関しては反省の色など無し。普段通りの雰囲気、普段通りの硬い表
情である。最早、これはお約束と言っても良い。逆に、彼が上機嫌ルンルンであつたな
らそれはそれでかなり深刻な事態なのだ。

「そうだな……ISのコア・ネットワークについて説明してみろ。遅刻の件はそれで勘
弁してやる」

「知らねえ」

「帰ったら反省文だ。今度こそ絶対に書け」

「はんつ、誰が書くか」

このやり取りもお約束である。

彼はこの三ヶ月間のサボりとよろしくない授業態度によつて何度も処罰を与えられていた。彼が患う症状や度々に起きた事件を考慮するとあまり強くは言えないが、規則を守つて貰わねば困る。このままでは教員として生徒に示しが付かない。が、それでも彼はお構い無しに反抗し抵抗する。それはもうクソガキに有りがちな反抗期の様に。

清掃や居残りは当然スルー。反省文は目の前で破り捨てるか、即座にシユレッダーにかけるか、紙飛行機にして屋外へ飛ばすかとやりたい放題。普通なら良くて謹慎、悪くて停学か退学である。

絵に描いた様な不良少年だ。注意を聞かない、罰も効かない、抑制出来ない、何も通うしない、何をやつても意味が無い、逆に悪化してしまう。他の問題児とは勝手が違い過ぎて手に負えない。

それにだ。権力や立場を利用したお調子者とは違い、自らの命すらぶん投げる自暴自棄な姿勢は厄介の一言で片付けられない。現時点の安全策は親しい者の説得以外に無いのだ。

無敵過ぎる。よく高校生活を全う出来たなど、全員が不思議に思つたそうなの。

「はあ……」。それでは各班、振り分けられたISの装備試験を行うように。各専用機持

ちは送られた換装装備のテストだ。全員、迅速に行え」

「[[[[[[はーん]]]]]]」

説教や罰が通用しない彼に何を言っても無駄。これに諦めた千冬は生徒達に指示、散開させる。時間は有限、彼だけに構う暇など無い。

生徒達がそれぞれにバラけ、場に残されるのは男子二人。彼等は完全に暇——とはならない。

「さて、柳の装備はあのコンテナだ。あとで私も合流するから量子変換して待て」

「へいへい……」

千冬に顎で指される方を向くと、離れた場所に巨大コンテナが一台。隆道は溜息を吐きながらもそれに向かい、一夏もそれに付いていく。

彼には他の者達と同じく装備が送られている。だが、一夏にはそれが無い。後付武装はおろか、換装装備すらも。『白式』には拡張領域が少しも空きが無いのだから当然の事。送った所で無駄。つまり、一夏の役割は彼のサポーターだ。暴走を懸念し、あとで千冬も付き添う事になる。

変異を続ける彼の専用機——『灰鋼』。勿論、専用の換装装備など有りはしない。どうやっても開発が追い付かないからだ。人材、物資、時間、何もかもが足りない。唯でさえ『白式』の研究もあるのに、これ以上の割り振りは不可能なのだ。しかし、この機会

を逃したくはないのも事実。

度々に変異し続ける I S、量産可能な回復装置、新たに生まれた対人武器。更なるテクノロジーを求める為、I S 委員会は会議を重ねに重ねていく。そうして、一つの案が出された。

専用が無理なら汎用を。故に、政府は以前から開発していた——ある換装装備を送り付けた。

「まあたでつけえコンテナだな。中身は何だ？」

「これは……増設スラストターだけ、ですね？」

「……はあ、今度は飛べつての。何考えてんだくそつたれ政府共がよお。……『灰鋼』」
彼はぶつぶつと文句を言いながらも『灰鋼』を展開。コンテナを開き、中身を流し見してソレを直ぐに量子変換する。今までに散々送られてきた後付武装の経験もあつてかその辺りはスムーズに進んだ。あとは完了を待つだけ。端からは暇人のソレにしか見えないが、こればかりは仕方無い。

そんな訳でぶらりと待つ事、約十数分。漸くと量子変換が終わり、残す作業はマニュアル通りに調整してテスト飛行。彼はそういったノウハウが皆無な為、ここからは一夏と共同作業を行う。

が、しかし。彼はこのタイミングで展開解除、何処かへ行こうとしてしまう。

「あれ？ 何処へ行くんです？ 調整は？」

「んな事よりトイレだ。デカイ方のな」

「ああ……。いやでも、一人は——」

「心配ねえよ。……そろそろヤバいから行くわ」

聞く耳も持たず、彼は旅館に向かつて早歩き。動きからして限界に近いのが丸わかりであった。あれだけ食べれば出るものも出るのは間違いない。人間、生理現象だけはどうしようもないのだ。

取り敢えず連絡だ。そう判断した一夏は辺りを見渡し、教員を探していく。ある程度探した所、見つけたのは群衆から離れている千冬の姿。

早速連絡だと駆け足で向かう——のだが。

「……うん？」

「——！！——！！」

「千冬姉？」

何やら様子がおかしい。いや、おかし過ぎた。

千冬は一人で怒鳴り散らしている。その片手に持つのは——携帯電話。見るからして通話相手に怒鳴っていた。いったい何事であろうか。周囲の人間も千冬の様子に困惑していた。

恐る恐る近づくと、千冬はソレをしまい此方に向けて急旋回、ズカズカと接近して来る。怒りと焦りが入り混じった、凄まじく恐ろしい表情で。

それは正に鬼そのもの。流石の一夏もこれには完全硬直せざるを得なかった。

「織斑っ!! おい織斑あつつっ!!」

「は、はいいいっつつ!! すみませ——」

「柳はっ!? 柳は何処へ行ったっ!?」

「え? さ、さつきトイレに行くと言った……。多分長くなる、かと……」

「……旅館か。先ずは一安心といった所、だな。くそつ、あの馬鹿が……!!」

一安心と言っても、千冬は険しい表情のまま。片手のタブレットを睨み、もう片手の携帯電話は強く握り締めている。どう見てもちぐはぐだ。

嫌な予感がする。もう何度目なのかわからない感覚が全身に走る。この感覚は——彼に関する事で間違いない、そう一夏は確信した。

そんな不安が募る一夏を余所に、千冬は必死に辺りを見渡して一人の少女に声を掛ける。

「篠ノ之! こつちに来い!! 早くっ!!」

「? は、はい」

装備部品を運んでいた少女——箒は千冬からの怒声にたじろぎつつも此方へ来る。

唐突に大声で呼ばれば尻込みするというもの。

またしても疑問が増えてしまった。何故、箒を呼んだ。何故、そこまで切羽詰まっている。

「な、なんででしょうか……」

「ちふ——織斑先生。何か問題が？」

「問題も問題、大問題だ!! 奴が来る——」

その時だ。

「ちーちや~~~~~~~~ん!!!」

ソレが現れたのは。

「——」

三人の呼吸が、同時に止まった。

声の方へと振り向くと、砂煙を巻き上げながら三人の元に爆発的速度で走って来る人影が一つ。機械染みたウサミミに紫色の長髪。不思議の国のアリスを彷彿とさせる謎のファツション。

そう、現在行方不明の世界的超重要人物――。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！」

――篠ノ之 束。

三年前に置き手紙と四百六十七個目のＩＳコアを置いて唐突に失踪を遂げた、誰もが認める天災。その天災が、この臨海学校に乱入してきた。

臨海学校は当然、部外者以外立入禁止である。しかし、この天災にはその様な事は通しない。規則であろうが法律であろうが堂々と無視する。

「……束」

「さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ――」

「この馬鹿があつつつ!!」

「――ぶへっ」

飛び掛かってきた束の顔面を即座に掴む千冬はそのまま流れる様に砂浜に向かって

叩き付けた。一切の容赦も無く、全力で。間違はなく他の者が受ければ一撃で沈む。それ程の破壊力。

しかし、束には全く効いていないのだろう。飛び上がる様に速攻で砂浜から抜け出し、満面の笑みを三人に見せていく。目の下に隈をくつきり付けた、酷く寝不足な顔で。不気味が過ぎる。

「私は言った筈だ!! ここには来るなど!! なのに、なのにお前という奴は……!!」

「まあまあまあ、そう怒らないでよちーちゃん。今日は大事な大事な日になるんだしさ」
「何……?!」

「そ、れ、よ、り、もっ!」

千冬の怒声をひらりと流す束はその瞳を一人の人間へと向ける。その人間は――。

「やあ!」

「えへへえ、こうして会うのは何年振りかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん」

――目を見開き、愕然とする箒。

微動だにせず、息も最小限。行動も、思考も、何もかもが停止していた。

「あれ? どうしたの? お姉ちゃんだよ?」

「――しに、来たんですか……」

「うん？」

「何しに、来たんですか、貴女は……!!」

だが、それもつかの間。箒の表情は憎しみへと変貌、少女がしてはいけない形相と化していく。殴りたい衝動に駆られ、拳は固くなつていった。

世界を丸ごと変えてしまった実姉。

一夏との暮らしを引き裂いた実姉。

隆道の様な人間を生み出した実姉。

元から嫌いな人間ではあったが、彼との出会いによつてその嫌悪感が一段と膨れ上がっていた。好き勝手に引つ掻き回して、好き勝手に消えて。やりたいだけやって他の事に目もくれやしない。

コレが実姉など、箒は認めたくなかつた。

「……………」

「なんとか言ったらどうなんです……!!」

笑顔を崩さない束と、劍幕な顔を止めない箒。そんな二人のやりとりを生徒全員は言葉を失う。身動きが取れなく、ただ眺めるだけでいた。

しかし、ここで動いたのが一人。教員の真耶。

「え、えつと、ここでは関係者以外——」

「黙れ牛眼鏡。今は箒ちゃんと話してるんだよ。こつちは忙しいんだからしやしやり出て来るな」

「——う……」

束の突然たる冷たい言葉が真耶を襲う。

言葉だけではない。視線が、雰囲気、全てがかなり冷たいものへと化していった。先程までの人間とは全然違う。まるで別人。

とても凄まじく、そして——とても冷たい圧。真耶は目を合わせられなくなってしまう、身体が勝手に後退りしてしまう。完全に轟沈した。

「ああ、くそつ……。束、せめて自己紹介しろ。うちの生徒達が困っている」

「えー。……私が天才の束さんだよん、はろー。はい終わり」

真耶とは違い、千冬とは普通の態度になる束。先程までの冷たい態度は何処へやら、面倒そうな表情で自己紹介した。しかし、これはあまりにも簡潔が過ぎるのではないか。

呆氣に取られていた生徒達であったが、それもほんの数秒程。突然と現れた人物が何者なのかを理解し、ほぼ全体が騒がしくなっていた。

当たり前だ。ISの開発者にして天才科学者が、世界に追われている人間が平然といふのだから。

「もう少しマトモに出来な——いや、もういい。諸君、この馬鹿の事は我々が対処する。無視してテストを続けろ」

「酷いなあ。らぶりい束さんと呼んでも——」

「黙れっ!! ……おい束、篠ノ之に用があると云つていたな。何をするつもりだ」

「……私、に?」

どうやら束は箒に用事があるらしい。用事とは何なのかと、箒は怒りから疑問に変わっていく。

本来ならばさつきとこの場から消えて欲しい。このままでは彼と束が鉢合う事になつてしまう。それは、それだけはどうしても回避したい。

しかし、三人は束という人間を良い意味でも、悪い意味でも理解している。何を言つても無駄、何をやっても無駄、今は好きにさせるしかない。出来るのは彼の足止め一択だ。

「山田先生、柳の所へ行って足止めを頼みたい。この馬鹿と会わせる訳にはいかん」

「は、はいっ—」

全力ダッシュで旅館へと向かう真耶。唯でさえ多忙となる一日となるのに、また更に大忙しだ。本当に報われる日が来るのであろうか。

「うっ、ふっ、ふっ。……さあ、大空をご覧あれ！ 束さんからの贈り物だよ—」

そんな事など一切と関係無しと言わんばかりの束は勢いよく頭上へと指差す。それに従い箒が、一夏が、千冬が、他の生徒達が上空を見上げる。すると——『何か』が急速で落下してきた。

「のわっ!？」

唐突に起きた激しい衝撃、そして盛大な砂塵。落下してきたのは——銀色をした、菱形の金属。ソレが今、砂浜に突き立っている。

これだけでも驚愕ものだが、当然ながらこれで終わりはない。砂塵が消えて全体が見えた次の瞬間、金属は光の粒子となって中身が露になる。

そこには、一機の真新しいI.S.が鎮座していた。

深い紅の装甲に覆われた機体。背後にあるのはスラスターではなく、一對の大型パイプンダーが。新品のI.S.が故なのか、装甲は太陽の光を神々しく反射させている。それは

途轍も無く眩しかった。

「じゃじゃーん！ これぞ、箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 最新鋭機の東さんお手製 I

S だよ！」

——第■世代全状況対応万能型 I S 『紅椿』——。

最新鋭機。その言葉に誰しもが言葉が出ない。それは箒も、一夏も、千冬も含まれて
いた。

そこら辺の研究員が完成させた機体ならば何も思う所は無い。しかし、東お手製なら
ば話は別。間違いなく、最高性能を誇る機体の筈である。

それだけではない。その I S コアはどこから？ 皆にその疑問が浮かび、直ぐに答え
が出てくる。

篠ノ之東が、I S コアを増やした。

東お手製の最新鋭機、そして新たなる I S コア。そう、今ここに『登録国籍無し
の I S』が現れた。

どの国も I S は喉から手が出る程に欲しいもの。それが一機であろうとも、存在する
だけで国家の軍事力を大きく変えてしまう。

『天災』は——天災たる事を仕出かした。

「たば……お前!! 用事とはコレなのか!? 自分が何をしているのか理解しているのか!?! 各国の争いの火種になるんだぞ!!」

「そんなの知らないよん。……さあ箒ちゃん! しゃしゃつと最適化を始めよう! この束さんが補佐するから! さあ、さあさあさあつ!!」

束は千冬の言葉など一切と取り合わず、笑顔を絶やさず箒に行動を促す。全くと話を聞かない。

そこは昔と変わらない——のだが。

(……束、さん?)

全力全開な笑顔を見せる束だが、それにしては何処か必死であり、何処か焦っている。一夏にはそう見える——いや、そうとしか見えなかった。付き合いが長い千冬も、箒も静かに感じていた。

様子がおかしいのは明らかだ。一刻も早く箒に機体を渡したいらしい。気づいたのは三人だけ。他の人間は決して気づく事は無い。

が、しかし。それはそれ、これはこれである。

「い、嫌、です……」

「……どうしてかな?」

「嫌なものは嫌です!! 帰って下さい!!」

箒はこれを拒否した。

確かに専用機さえあれば一夏との時間も今より増やせるであろう、距離を縮められるであろう。アドバンテージが増える事は間違いない。

だがしかし、同時にある事を恐れている。

専用機を得る。即ち”力”を得る事を意味する。

そうなれば、全てが無駄になる。

嘗て、自身が振るい、そして恐れた『暴力』。ソレを抑える枷、抑止力。二度と壊しはしない、そう誓ったのだ。同じ過ちは繰り返しはしない。確固たる決意をした。

そして何よりも束が大嫌いだ、ISが大嫌いだ。その様な人間からIS——しかも専用機を貰うなど屈辱以外のなものでもなかった。

だからこそ、箒は全力で拒否する。抵抗する。

それでも——。

「ふーん。……ねえ、箒ちゃん」

「……なんですか」

——『天災』には関係無い。

「また同じ目に合いたい？」

「!?!」

東は目にも止まらぬ速さで箒に詰め寄った。

数メートルもあつたその距離が、ほんの一瞬で目と鼻の先。至近距離で目と目が合う。その瞳はとても真つ直ぐで、とても不気味で。

その眼力を前に、箒は息を詰まらせてしまう。恐怖に支配される。それは、過去に一度たりとも受けた事の無い——凄まじく強烈な、圧。

「わかつてないなあ、箒ちゃん。このISはね、箒ちゃんだけのモノなんだよ。乗つてくれないやお姉ちゃんはすつごく困るなあ」

「あ……」

全くと瞬きしない東の圧に身動きが取れない。抵抗が出来ない。宛らそれは蛇に睨まれた蛙だ。

一夏も、千冬も同じであつた。今まで見た事が無い束の霧囲気に圧倒されてしまう。止めたいが声を掛ける事すらも出来ない。

「男性操縦者襲撃事件に巻き込まれたでしょ？ いいや、違う。あれは巻き込まれたんじゃない。箒ちゃんだからこそ一緒に襲われた。わかる？」

「う、ぐ……」

千冬以上の、鋭い眼光。口調と釣り合わない、異様で冷たい霧囲気。ソレ等が箒に襲い掛かる。確固たる決意に輝が入り、次第にと碎け始める。

「箒ちゃん？ お姉ちゃんは凄く忙しいんだよ。だからもう一度言うね。早く乗って？」

「――」

「乗れ」

「……はい」

ソレは碎け、崩れ、そして――折れた。

これは運命なのだ。どう足掻こうが『天災』の妹である以上、ISに関わつてしまう。どこまでも付いて来る。逃げる事は世界が、神が許さない。

もう、逃れられはしなかった。

「……それでは、頼みます」

「……それでいいんだよ。じゃあ始めよう！ そら乗った乗った！」

渋々に『紅椿』へと乗る箒を眺める束は即座にコンソールを展開し、次に現れるのは空中投影のディスプレイとキーボードがそれぞれ六枚ほど。膨大たるデータが一気に羅列していった。ソレは熟練の技術者ですら目が追いつきやしない。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてるから、あとは最新のデータに更新するだけだね。近接戦闘を基礎にして万能型に調整してあるから直ぐに馴染むと思うよん。それと自動支援装備も付けておいたからね！ このお姉ちゃんが！」

「……………」

「えへへ、無視されちった。まあ、いつか」

しかし、束にとってはこれしきの事は朝飯前。喋りつつもその手を休ませずに動き続けていた。

まるでピアノのソレだ。数秒単位で切り替わる画面全てに目を通しつつ、滑らかで素早い動き。超の付く天才だと、改めて実感させられる。

「はい、最適化終了。超速いね。さすが束さん」

「ぐ、ぐぐ……………」

どうやら終わった模様。それもほんの数分だ。本来なら三十分以上掛かる最適化を、この天才は意図も簡単にやってのけたのである。

これで『紅椿』は完全に箒の専用機となった。いや、なってしまった。望まない”力を手にした箒は、ただ齒軋りするしかなかった。

「あの専用機つて篠ノ之さんが貰えるの……？」 身内つてだけで」

「だよねえ。なんかズルいよねえ」

「……………」

ふと、群衆の中から聞こえた二つの声。それは他人を羨ましく思い、その分だけ憎たらしく思う負の感情——妬み。箒は彼女達から目を逸らす。

箒は代表候補生でも、ましてや彼と一夏の様な特異ケースでも無い。IS開発者の妹、それだけ。その人間があつさりとしてISを貰えれば、少なからず嫉妬に駆られる人間が出るというものだ。

と、その時。これに反応したのは意外にも東。

「おやおや、歴史の勉強をした事が無いかな？ 有史以来、世界が平等であつた事など一度も無いよ」

「……………」

東からの指摘を受けた生徒は気まずさを全開、そそくさと作業に戻つていった。最早、彼女達がどうこう言う事は無いであろう。言つた所で再び指摘されるのがオチ、何も言えやしない。

そう、世界は平等ではない。決して。

『機会平等』、『結果平等』、『条件平等』、そして——『男女平等』。その全てが不平等だ。どの時代も、それだけは少しも変わりはしない。『勝ち組』か『負け組』か。ただそれだけの事。

「あ、いつくん、『白式』を見せて。東さんは興味津々なのだよ。ほら、早く早く」
「え、あ、はい」

催促される一夏は即座に『白式』を展開する。常日頃の練習成果なのか、その展開時間は中々に大したもの。どこぞの劣等生とは訳が違った。

「データ見せてね。うりゃ」

そう言うなり、東は『白式』の装甲にコードを刺してディスプレイをまじまじと眺めた。ソレに映るのは『白式』の様々なデータ。

「んんん……？ 不思議なフラグメントマップを構築してるね。見た事無いパターンかな」

——フラグメントマップ——。

各ISが最適化により独自に発展していく道筋。人間で言う、遺伝子。操縦者の情報

を読み取り、そして適応出来る様にする自己進化機能。

つまり、フラグメントマップは専用機の数ほど存在する。人間と同じ、機体それぞれなのだ。

「あの、東さん。何で俺がISを使えるんです？」

「ん？　ん～……どうしてだろうね。さっぱり。ちーちゃんの弟だからなのかもね。ナノ単位まで分解して調べればわかると思うけど嫌でしょ？」

納得出来ない。確かに可能性有りであろうが、それだと彼がISを動かせる説明が付きやしない。解剖など以ての他だ。まだ死にたくはない。

故に、一夏は何気無く質問を投げる。

「そんなの嫌に決まってるじゃないですか……。なら、もう一人——」

「知らない」

またしても、東の雰囲気が変わった。

食い気味に言い放った東からはふざけた態度がすっぱりと消えていた。とても、暗かった。

表情もそうであった。笑顔でも冷酷でもない、影を落とした、凄まじく暗い顔。まるで、何かに後ろめたさがあるかの様な。

一夏、箒、千冬以外の人間には冷酷な筈の東。だからこそ、更なる疑問が三人に生ま

れていく。

「……それより！ 箒ちゃん、試運転試運転！ 飛んでみて！ イメージ通りに動く筈だよ！」

「……ええ」

——瞬間。

「おわっ!?!」

『紅椿』は凄まじい速度で飛翔。その急加速の余波で発生する衝撃波により砂塵が舞っていく。ハイパーセンサーで姿を追うと既に二百メートル上空で滑空している。あつという間だ。

あまりにも速過ぎる。これが『天災』お手製の最新鋭機なのかと、ほぼ全員が愕然となる。

「ん〜良い感じ。じゃあ次は武装を展開しよう。『あまつき雨月』と『からわれ空裂』を出して〜」

東に言われるがまま武装を呼び出していく箒。その手に現れるのは二本の刀。そう、二刀流だ。

——射撃性近接ブレード『あまつき雨月』——。

——射撃性近接ブレード『からわれ空裂』——。

「ささっ」と解説しちやうよん。右手の『雨月』は打突に合わせて刃部分からエネルギー弾を射出、連続で相手を蜂の巣！左手の『空裂』は斬撃に合わせて带状の攻性エネルギーを展開、便利！ほいそれじゃコレ撃ち落としてみてね」

「!?」

そう言うなり、東は唐突に武装を呼び出した。それは巨大ミサイルポット。しかも――十六連。そこからのミサイルが一齐に放たれて箒を襲う。実妹でも容赦無しなのか、この女は。

「箒っ!!」

「くっ!!」

こうなればやるしかない。そう踏んだ箒は一旦距離を離し、先ずは『雨月』を突き出す。

そこから放出するのは幾つものエネルギー弾。半分のミサイルを吹き飛ばし、その先に漂う雲を穴だらけにしていた。しかし、まだ半分だ。

次に繰り出したのは『空裂』の斬撃。右脇下に構えたソレを一回転する様に振るうと、言われた通りに带状の攻性エネルギーが展開、残り半分のミサイルは木っ端微塵と化した。

「す、すげえ……」

瞬く間にと終わってしまった全弾撃墜。爆煙が収まっていく中で堂々たる姿を現す、真紅のIS。

その圧倒的過ぎるスペックに驚愕してしまう。魅了してしまう。言葉を失ってしまう。

「……………」

ゆつくりと砂浜に降りて来る箒は浮かない顔をしていた。一般の操縦者ならば喜ぶ筈のソレを、全くと喜べやしなかった。今や無気力だ。

”力”を、手にしてしまった。それが何の意味を持つのかは理解している。嫌でもしてしまふ。

もう、『篠ノ之束の妹』だけで済みやしない。

「はいっ、これで箒ちゃんも晴れて専用機持ちの仲間入りだね〜！ おめでと——ぐおっ」

「た、ば、ねえ……!!」

気力を落とした箒に近寄ろうとした束。だが、千冬はこれを阻止。鬼の形相で束の顔面を掴み、握り潰さんとばかりに力を込めていた。

「やって、くれたな。やってくれたな……!! いつも、いつも余計な事をして……!!」
「い、痛いよちーちゃん。何するの——」

「黙れっ!! この……大馬鹿があっつっ!!」
「きゃん」

そこから繰り出されるのは豪快な投げ飛ばし。束は勢いよく砂浜へとダイブ。顔面が埋まった。人間を軽く投げ飛ばせるものなのかは疑問だが、それを気にしてはいけない。千冬だからこそだ。

「あ」

それよりも、千冬はやらかしてしまった。

「いったーい。もう、酷いよちー」

直ぐ様に頭を出した束は——硬直した。

「」

束だけではない。他の者達も同じく固まった。その理由は皆の視線の先。そこにはいない筈の、いてはならない人間が佇んでいる。

「お、織斑先生! 柳君が消えまし——」

旅館からすつ飛んできた真耶も同様に固まる。そう、今まさに注目を浴びているのは『天災』の束でも、最新鋭機を受け取った筈でもない。

——
隆道だ。

何故、彼が今になってここに来たのか。何故、真耶の足止めが効かなかったのか。それは極めて単純で、そして実に下らない事であった。

彼はトイレを終えたその後、例の岩場で煙草を吹かしていたのである。つまり、サボっていた。どこまでド畜生なのだ、この男は。

真耶が旅館へと着いた頃には既に外にいた彼。従業員から聞かされた時にはパニツク、携帯での連絡は頭からすつぽ抜け、全力疾走で戻って来たという訳であった。少しは冷静を保って欲しい。

当然、サボっていた彼が事情を知る訳が無い。その結果が——今の状況。最悪、かなり最悪だ。出会ってはならない二人が出会ってしまった。

「「「「「」」」」」

辺りは、静寂に包まれた。

瞬きもせず目を見開き、微動だにしない彼。対する束も同じく、全くと微動だにしない。恐れを知らないであろう『天災』が何故。

両者の距離、凡そ十メートル。束ならば瞬時に懐に入り込める距離。争いが起きれば間違いなく束が勝つ。彼が勝つ事は決して有り得ない。

だがしかし、予想は遙か斜めへとなる。

「あ、あ、あの……」

「——」

ゆっくりと立ち上がる束は、何故か悲痛な顔。

俯き、目を逸らし、両手は服を強く握り締め、大きく震えていた。距離を離す事も、縮める事も無く、ただその場で縮こまるだけ。何一つとして動こうとしてない。それは怯えの様に見えた。

束の変わり様に一夏達は愕然とするしかない。身内に甘く、他人には非常に冷酷な『天災』が、たった一人の青年にすぼんでいる事実。

「あ、う……。え、えと……」

「——」

「……たつくん——」

「!!」

——瞬間。

「!?!」

束の頬を、物体が高速で掠めていった。掠めたソレは真つ直ぐに飛んでいき、高い金属音と共に岩に突き刺さる。その正体は一本の金属矢。

確認したその瞬間、全員が感じ取る事になる。それは彼から滲み出る——。

「ぐ………くそつたれが……!!」

彼は、いつの間にか武器を構えていた。

右手には大型たるコンパウンドクロスボウが。ソレを支える左手には逆手持ちのマチェットが。教員だけが知るその武器に、生徒達はざわつく。いったいどこからソレを出した、ソレは何だと。

しかも、それだけに留まりはしない。

「ぐ、ぎゃが……」

彼の首輪は点滅している。それも最大限に。

溢れる『どす黒い何か』、首輪とタブレットの両方から鳴り響く無機質たる電子音。その二つが合わさり、皆の背筋を凍らせていく。

電子音の意味は全員が理解している。このまま彼が機体を展開してしまえば大惨事

確定だ。

が、それより。一夏達が気になったのは――。

「その名で、呼ぶんじゃ、ねえ……!!」

「……た――」

「呼ぶなって言っただろうがっつ!!」

「……………」

咆哮に近い怒声をする彼に、更に縮こまる束。

二人のやり取りは正に知り合いのソレである。だとしたらいつ、どこで知り合ったのか。

束は他人に興味を持たない筈だ。冷酷な筈だ。にも関わらず何故、彼と知り合いなのだ。何故、そこまで怖じ気づくのだ。

「……あの、ね。そのISは――っ!？」

何かを言い掛けたその瞬間、束は急激に後退。その場に巨大な物体が轟音と共に突き刺さった。物体の出所は正面から――ではない。

砂塵が消え、露になった物体はIS用の片手斧。そう、この武装を持つのはたった一人だけ。

「……………」

近寄つて来るのは一人の少女——日葵その人。しかし、その顔はいつものおちやらかな顔でも、私闘にて垣間見た悍しい破顔でもなかった。

「ひま、ちゃん……」

「何がひまちゃんだクソ兎……!!」

それは『憎悪』、『殺意』だ。しかも、彼とは比べ物にならない——真つ黒が過ぎる負の感情。

「やる事だけやって帰ればいいものを……!! そんなに殺されたいのか……!!」

「……………」

いつもの不気味な笑顔も、いつものしまりない口調も、今日の日葵には存在しなかった。あるのはたった一つの——『悍しいどす黒い何か』だけ。ソレが周囲に絶大なる恐怖を与えていく。

正しく悪魔だ。全生徒が、全教員が息を飲み、後退りしてしまう。唯一と動じないのは東だけ。だが、真耶に向けた冷酷な雰囲気は微塵たりとも無い。恐らく、日葵とも知り合いだ。

「終わったならとつとと自分の巣に帰れっ!! でないと全部壊すぞっ!! ねえ、み——」

「やめてっつっ!!」

「……………」

「それは、やめてよ…………」

「…………はっ。臆病者が」

最早、訳がわからなかった。

元々謎だらけな人間ではあったが、またしても謎が増えてしまった。様々な表情を見せる日葵はどれが本当の姿なのか。束にそれ程までの殺意を向ける真意はいつたい何なのか。

束も謎だ。身内にする甘さは無く、かと言って他人にする冷たさも無い。見えるのは正に恐れ。間違いなく、束は何かを恐れている。

と、その時。事態はまたしても急変。

「たっ、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

「——っ!? ……どうした？」

「っ、っ、っ、これをつ！」

唐突たる、真耶の切羽詰まった声。我に返った千冬は何事かと向き直ると小型端末を渡される。これ以上の問題は勘弁願いたい。千冬はそう心で訴えるのだが——画面を見て表情が曇っていく。それは、今の状況より深刻なものであった。

千冬と真耶は小声でやり取りをするが、生徒の視線に気がついてか手話でやり取りをし始める。一夏はソレに既視感が。

(普通の手話、じゃない……?) アレは千冬姉が現役時代に使っていた……)

「で、では他の先生達にも連絡してきますっ」

「了解した。——全員注目！」

全員に行き渡る、凜と響いた千冬の声。全員がその方を向き、何事かと一斉に首を傾げていく。

どうせ自分達にはあまり関係の無い事だ、そう思っていた一同であつたが——。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務へと移る! 本日のテストは全て中止。各班、直ちに片付けて旅館に戻れ! 連絡があるまで自室待機だ!」

「え……中止?」

「なんで? 特殊任務?」

「意味、わかんないんだけど……」

不測の事態に、当然と生徒達は騒がしくなる。しかし、今は彼女達に構っている暇は無いのだ。故に、千冬は持ち前の一喝で黙らせる。

「とつとと戻れっ!! 許可無く室外に出た者は身柄を拘束する!! いいな!!」

「「「はっ、はいっ!」」」

完全に脅迫のソレだが、今は一刻も争う事態。千冬の怒号に怯えた生徒達は指示通りに片付け、旅館へと戻っていった。

「専用機持ちは……柳以外、全員集合！ 織斑、オルコツト、デユノア、凰、ボーデヴィツヒ！ それと……篠ノ之と篠原も来い」

「……はい」

「……はい」

「俺は柳さんを送ってから行きます」

「頼んだ」

未だ項垂れている彼を引き摺っていく一夏と、千冬の後へ迅速に付いていく専用機持ち一同。

当然、砂浜に残されたのは束一人――。

「……………」

専用機持ち達が歩く中、足を止めたのは日葵。ソレに誰しもが気づかず、旅館へと消えていく。

俯いたままの束と、振り向く事もしない日葵。少しの時間が流れ、先に口を開いたのは日葵。

「……さつき、せんせー達がした手話。アレさ、私知ってるんだよね。覚えるの大変だっ

たなあ」

「……………そう、なんだ」

日葵の口調はいつも通りに戻っていた。だが、後ろ姿の為に表情は見えやしない。

「レベルAの特殊任務。ハワイ沖で試験稼働していた第三世代型軍用ISの暴走。ふうん……………」

「……………」

東の言葉を待たずに、日葵は言葉を続ける。

「……………篝ちゃんに機体を渡したこのタイミング。ああ、そういう事お？ いやあ絶好な晴れ舞台になる——いや、違う」

「……………あの、ひまちゃ——」

「良いよお？ 今回、私は手出しししないからあ。好きにすればあ？ ……でもねえ」

そう言つて、日葵は東と向かい合う。その顔は——凄まじい『得体の知れないどす黒い何か』。

「それ以外は絶対に許さない。お前の魂胆なんか見え見えなんだよ。私が気づかないと思つたか」

「つ……………」

「いいか、よく聞けクソ兔。余計な事してみる。その時は……………」

日葵は一旦言葉を区切り、旅館へと向き直す。そして――。

「今度こそぶつ殺してやる」

――捨て台詞を吐いて、消えていった。

第五十一話

「では、現状を説明する」

時刻は午前十一時付近。花月荘にて。

旅館、その一番奥に設けられた宴会用の大座敷——風花の間に集められたのは専用機持ち七人、そして教師が多数。本来は使われる事の無かったその広間は、今や臨時の作戦本部と化していた。

張り詰めた、異様が過ぎる雰囲気。一夏と箒の二人はソレにただ困惑するのみであった。

「二時間前の事だ。ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三代型軍用 I S 『銀の福音』シルバー・ゴスペルが制御下を離れ暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

突然たる説明に彼と箒は更なる困惑——いや、それは混乱でしかなかった。

暴走は理解した。しかし、他が理解出来ない。自分達に連絡があつたのは勿論の事ではあるが、それ以上に理解出来なかつた単語が一つ。

——『軍用I.S.』？

その単語が脳内で何度も反復、こびり付いた。

明らかに競技などガン無視、度外視している。アラスカ条約が機能していない。大国がその様な機体を作つて良いのか。何でも有りではないか。

「……………」

そんな混乱に陥る二人は周囲に視線をやるが、殆どが厳しい顔つき。セシリア、シャルロット、鈴音、ラウラからは普段の雰囲気が無かった。

彼女達は二人とは違う、正式たる代表候補生。勿論、この様な事態に対した訓練も受けている。如何なる状況に対応出来てこそ国家代表となるに相応しいのだから当然の事。疑問等は一旦置いて千冬の指示を待つ、それが第一なのである。

「……………」

そう、真剣なのはほぼ全員。唯一と例外なのは日葵のみ。全員が正座にも関わらず、日葵だけは体育座り。両膝を抱え、身体を左右にゆつたりと揺らしていた。宛らそれは校長の長つたるい話に飽きた生徒がする、完全な暇潰しの図だ。

やる気など全く無しに見えてしまうその姿。へらへらしていないだけマシだが、これはこれで不気味に感じる。いったい何を考えているのか。

注意したい所ではあるが、千冬はコレを黙殺。時間が惜しい為に構う事無く説明を続ける。

「衛星での追跡の結果、『銀の福音』はここから約二キロ先の空域を通過する事が判明した。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処する事になった」

淡々と言葉を放つ千冬ではあったが、その顔は誰よりも厳しいものへと化していた。これ以上の説明はととも心苦しいものだから。

締め付けられる様な想いを無理矢理押し込み、千冬は言葉が続ける。

「各教員は訓練機を用いて空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦は専用機持ちが担当だ」

そう、専用機持ち達を前線に立たせる。

教員が使えるI Sは全てが第二世代型の訓練機。対する相手は第三世代型の『軍用I S』。しかも、今回の状況は限定空間とは訳が違う非限定空間。

どう考えても歯が立たない。接敵すら不可能。幾ら熟練者であろうと、性能差は埋められない。ならば、専用機を持つ彼等こそ唯一の対抗手段、要なのである。

仕方が無い——とは言わない。決して、言ってはならない。どんな事情であっても許されない。断じて、許してはならない。

千冬は、専用機を持たない己を恨んだ。

「……それでは、作戦会議を始める。意見がある者は挙手するように」

「はい。目標ISのスペックデータを要求します」

真つ先に手を挙げたのはセシリアだ。兎に角、対象の詳細を知る事が先決。でなければ作戦など全く立てられやしない。

「わかった。……だが、これ等は二ヶ国の最重要軍事機密だ。決して口外するな。漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

直後にディスプレイは『銀の福音』のものへと切り替わり、そのデータを基に代表候補生一同は意見を交わし合っていく。

勿論の事、日葵を除いてだが。ディスプレイを興味無さげに見詰め、そして時折に欠伸をかく。完全にやる気は無し模様。緊迫した空気の中でこの態度は凶太過ぎる。本当に代表候補生なのか疑わしいところだ。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃……わたくしと同じくオールレンジ攻撃が可能なようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体。厄介だわ。しかもスペック上すら『甲龍』を上回っている。向こうの方が有利……」

「この特殊兵装が曲者って感じがする。本土から防御換装装備が来てるけど、連続した防御は……難しいかも」

「このデータでは格闘性能が未知数だ。スキルも不明。……偵察は行えないのですか？」

「無理だな。『銀の福音』は現在も超音速飛行を続けている。辛うじて予測機動を弾き出せている程度だ。アプローチは一回が限界だろう」

チャンスはたったの一回。と、いうことはだ。

「……という事はやはり、一撃必殺の攻撃能力を持つ機体で当たるしかありませんね」
ぼそりと、小さく真耶が呟いた。直後に皆から視線を向けられるのは一人の少年——
一夏。

当然、彼は啞然とする。

「え……？」

「一夏、あんたの『零落白夜』しかないわ」

「それしかありませんわね。ただ……」

「……誰かが一夏を運ばないとね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから」

「目標に追い付ける速度でなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろ

う

「嘩然とする一夏を余所に、代表候補生達の話は着々と進んでいく。正しく置いてけぶり。」

指名されるとは思わなかったのだろう。一夏は慌てて立ち上がり、声を大にして言い放つ。

「ちよつ、ちよつと待っていてくれ！……つまり、俺が、その、『軍用 I S』を落とせ、と……」

「当然でしょ。あんたの『零落白夜』なら確実にやれるんだから」

「相手は軍用ですわ。エネルギー量は未知数ですから防御を無視した攻撃が最適かと」
「……………」

彼は今の状況を整理、考えに耽った。

I S 学園でやる模擬戦でも試合でもない、実戦。重苦しい感覚が彼を襲う。それは正に——恐れ。

当たり前、至極当然の反応。この間まで普通の学生であった自分が、軍のソレを相手にするなど正気の沙汰ではない。思考が停止しそうになる。

しかし、それと同様に皆の意見は理解出来る。確実に倒すにはエネルギーを無効化する、自身の単一仕様能力が最適解だ。もし、逃してしまえば——多大なる被害を被って

しまう恐れがある。

それは——それだけは、駄目だ。自分を置いて誰かが傷付く光景など、二度と見たくはない。

「……わかった」

故に、彼は恐怖を払い除ける。僅かに及び腰になっていた自分を蹴り飛ばす。

「織斑先生。やります。俺が、やってみせ——」

と、その時。

「待て、織斑」

「——……はい?」

彼の言葉を遮ったのは千冬。それに皆が疑問を抱いていく。いったい何があった。

彼女達の言う通り、この作戦は『零落白夜』が要となる筈。にも関わらず何故、千冬は待ったを掛けたのだ。

その理由とは——。

「……篠原」

「……なんですかあ?」

千冬は全く参加しない日葵に声を掛けた。

意見に参加しない、やる気など感じられない、不気味が過ぎる日葵は千冬に反応、顔を向ける。感じ取れたのは——全くの”無”。

砂浜で見た『得体の知れないどす黒い何か』は少しも無い。しまりない口調、硬い表情。全くと噛み合わないソレに全員が怖じ気づいてしまう。

しかし、怯んだままの訳にはいかない。千冬は息を飲み、日葵に言葉を投げる。

「……非限定空間。快晴と言える、この良天候。お前の『華鋼』を思う存分に発揮出来るだろう。あの単一仕様能力なら……確実に『銀の福音』を倒せる筈だ」

「……………」

教員を除いた全員が、疑問を露にした。

確かに、日葵はかなりの実力者だ。IS適性値も高く、機体も圧倒的な強さ。それは以前の僅かな私闘で思い知った。千冬の言う通り、この作戦に適しているのかもしれない。

だが、それを踏まえても謎は多く残っている。その内の一つが——単一仕様能力。

『華鋼』の単一仕様能力が未だにわからない。噂にすらなっていないのだ。日葵に立ち向かった生徒は訳もわからずに罫り殺されるだけ。唯一と把握しているのはデータを閲覧した教員のみ。

把握している。それだけなのだ。何せ、日葵はIS学園に入学以降、一度たりとも単一仕様能力を発動させていないのである。理由は至って単純。

凄まじく強力だから。使う必要性が無いから。

エネルギーを完全に無効化する『零落白夜』。対象のありとあらゆるものを奪う『悽愴月華』。それ等とは別の意味で『華鋼』の単一仕様能力は強力なのである。千冬でも青ざめてしまう程に。

仮にだ。その単一仕様能力を学園内でお披露目したとする。生徒達は必ずこう語るに違いない。

『絶対に勝てない。対戦したくない』と。

そもそも、日葵自身が強過ぎる。手加減しても相手を蹴り殺しに出来る強さを持つ人間が、態々単一仕様能力など使いやしないし意味が無い。

日葵が単一仕様能力を使う時があるとするとするなら——本気の中の本気になった時だけ。

「どうか、頼む。お前に任せたい」

「……んんー」

頭を下げる千冬と首を捻って唸る日葵。最早、立場が逆だ。そうとしか見えやしな

かった。

唸る事、約数秒。日葵は漸くと口を開く。

「……私より織斑君の方が適任かと思えますう。下手したら私い、機体を止める処かあ
……」

——破壊して操縦者も殺す。

「[[[[[[……?!]]]]」

最後の一言は、皆に背筋を凍らせた。

しまりない口調は豹変、冷たい口調に変わる。硬い顔も合わさり、ソレは悍しいモノへと化する。目の前の少女は本当に人間なのか。

口振りからして本気だ。本気で相手を——。

「……まあそれは冗談としてえ。そろそろ名案が来るんじゃないですかあ？ 多分……私に一番は無いですよねえ」

「……何？ それはどういう意味——」

——その刹那。

「へいお待ち！ ちーちゃん、待った待った！」

突然と底抜けに明るい声が千冬の言葉を遮る。その声の出処は——なんと真上から。全員が上を見上げると、天井から生えていたのは束の頭が。忍者よろしく真つ逆さまで。

そこから束は凄まじい身体能力を見せていく。軽い身のこなしで天井裏から抜け出し、ピエロも顔負けな一回転で見事に着地。千冬に詰め寄ってエハ顔ダブルピースをばっちりとした。

「ちーちゃん、ちーちゃん。束さんに良い作戦があるよ〜！」

「もう、この、お前……。はあ……。何の、用だ」

厄介そのものが舞い込んで来た。構う暇は無いのだが、無視するのも無駄。取り敢えず話だけは聞く事にした。嗚呼、なんて災難な千冬なのだ。

「聞いて聞いて！……ここで『紅椿』の出番だ！ お任せあれだよ〜！」

「何?..」

『『紅椿』のスペックデータを見て、見て〜！ ちよちよいのちよいさで超音速機動特化が可能な機体なんだよ〜！ ほれ!..』

束の言葉に合わせて現れるのは数枚の空中投影ディスプレイ。千冬を囲んでいき、それと同時に部屋のディスプレイも『銀の福音』から『紅椿』のスペックデータへと切り替わった。いつの間に乗っ取ったのだ、この女は。

「展開装甲を調整して、ほほほいっと。ほら！これで速度もばっちり！」
「……て、てんかい、そうこう？」

聞き慣れないその単語に首を傾げてしまう彼。それでも猛勉強しているつもりなのだ。だが全く以て見た事が無い。聞いた事が無い。

勉強不足なのではと周囲を見渡すと、自分だけでなくほぼ全員が疑問を露にしていた。束の前にいる千冬も例外ではない。全くと変わらないのは日葵ただ一人。

「はい説明しまゝす！展開装甲というのはね、天才の束さんが作った第四世代型 I S の装備さー！」

「だ、第、四……!!? いやいやいや。だって、今は……!!」

「世代に関して説明する必要は無さそうだね！猛烈に勉強してるいつくん、束さん大好きっ！それを踏まえてしよう！第四世代型は現在絶賛机上の空論、『換装装備を必要としない万能機』なのです！はい、理解出来ました？」

「いや、あの……っ！」

I S には世代によってコンセプトがある。それは既に勉強済みだ、頭に染み付いている。それでも頭が追い付いてこなかった。

今現在、各国は漸くとして第三世代型の一号機——実験機が完成した段階である。安定段階にも入っていない。それが何故、第四世代型なのだ。色々とすつ飛ばしているで

はないか。

そんな彼の混乱を読み取ったのか束は続ける。

「んっんっ。束さんはそこらの天才じゃないよ。これくらいは朝飯前さ。あ、それと
いっくんんの『雪片式型』にも展開装甲は使用してるよくん。お試しに突っ込んでみま
した」

「え、『白式』は束さんが作ったんですか!？」

「いっや? 欠陥機として捨てられていたものを弄って動ける様にしただけさ。元々
その機体は単一仕様能力を使える様に開発してたらしいけど結局出来なかつたんだっ
て。ほんつとうに凡人——うおつとつ」

瞬間。束はしやがみ、その頭上には千冬の拳が通り過ぎた。凄まじく速い。束も、千
冬も。

「馬鹿者! 機密事項をべらべらバラすな!」

「いやん、ちーちゃんの愛情表現は過激だね」

「死ねえええつっつ!!」

またしても千冬の拳が束に向かう。それでも、全くと届かない。最早、千冬の顔面は
林檎の様に真っ赤だ。正しく鬼だ。とても恐ろしく過ぎた。

そんな激昂しまくりの千冬などほつたらかし。束は説明を続けていく。

「そんでね、ソレが上手くいったから発展させたものを『紅椿』に搭載。至る所がこの展開装甲にしてるからさいつよ。攻撃、防御、機動と用途に応じて切り替えが可能リアルタイム・マルチロール・ラクトスな即時対応万能機！ これぞ、第四世代型！ 頭がおかしいね！ はっはっはっ
!!」

「——」

頭がおかしいのは此方の台詞だ。だが、それを言葉にする人間は誰一人としていなかった。

多額の資金、膨大な時間、優秀な人材。それを注ぎ込んで競い合う、第三世代型ISの開発。

たった一人に追い越されるこの事実。

馬鹿げている。あまりにも馬鹿馬鹿しい。

これが『天災』だ。これが『篠ノ之束』だ。

束の笑い声だけ部屋に響き渡る。殆どが完全に啞然、何も言えない。言葉が出ない。

出鱈目とかそういうレベルではない。ぶつちぎっている。

流石の千冬ですら天を仰いでしまう。何かしらやらかすと思っただけはいたが、ここまでだとは。

「東っ……!! お前、本当にお前っ……!!」

「えへへ、つい熱中しちゃってね。まあ、これでいつくんを簡単に運べるという訳で——」

「白騎士事件」

東の言葉は、止まった。

突如として遮った言葉。啞然としていた全員は我に返り、その方を向く。言葉を発したのは東が現れて以降ずっと黙り込んでいた日葵。

「……白いISが海上で暴走を阻止、ねえ。なんか十年前を思い出しますねえ」

「……………」

——『白騎士事件』——。

約十年前。東が発表したI Sは当初、その成果を認められなかった。『現行兵器全てを凌駕する』というその言葉を誰も信じようとはしなかった。いや、信じたくはなかったと言ふべきか。たかが十代小娘の発表をプライドが高い大勢の大人共は断じて、決して、絶対に認めやしなかった。

そんなI Sの発表から一ヶ月後。事件は起きる。いや、ソレを事件と言うには生温いもの。

日本を攻撃可能な各国のミサイル——その数、二千三百四十一発。それ等が一斉にハックされて制御不能、全てが日本に向けて発射された。

当然の事、誰しもが混乱と絶望の真つ只中に。文字通り滅亡。逃れられない”死”がやって来る。その筈であった。

そんな中で突如として現れたのが、顔を隠した『白い何か』。中世の騎士を彷彿とさせるソレは世界中の人間を啞然とさせた。

そこからは異常、その一言に尽きる。

超音速で飛翔する『白い何か』はその手に持つ『剣』でミサイルの半数を瞬く間に斬

り裂いた。一千二百二十一発を。言葉に現すなら無茶苦茶、それしか言いようがなかった。

残りのミサイルは当時試作段階に留まっていた『荷電粒子砲』を虚空から出し——撃ち落とす。それは召還魔法みたいであったと目撃者は語る。

圧倒的な飛行性能と格闘能力、大質量の物質を呼び出す能力、指向性エネルギー兵器の実用化。当時、ソレに匹敵する兵器など存在しなかった。

その結果、ミサイルは全て撃墜。これで日本は平和に——なる筈は無い。日本周辺各国は突然の脅威に対して直ぐ様に国際条約を無視、現地へと侵略して偵察機を次々に飛ばしていった。昔からやりたい放題なのだ、この世界は。狂っている。

『目標の分析。捕獲、或いは撃墜せよ』

当時、最新鋭であった多種多様の兵器。各国はそれ等全てを投入して『白い何か』を捕獲、撃墜しようとした。そうした結果どうなったか。

歯が立たなかつた。これっぽっちも。

戦闘機二百七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基。全てが撃破、無力化されてしまった。決して人命を奪う事無く。それは一種の余裕。

絶望的な戦力差。それでも、各国は躍起となり部隊を投入するのだが——『白い何か』は忽然と姿を消す。まるで幻であったかの様に。

黙視では確認不可能、リーダーには反応無し、それは完璧なステルス能力。これぞダメ押しだと見せ付けられたソレは人間に、国に、この世に、『究極の機動兵器』として知れ渡った。

例え一機でも他国の軍事力を凌駕してしまふ、出鱈目たるオーバーテクノロジー。世界は急速にI S運用制限条約を締結と開発普及を促していく。

『I Sを倒せるのはI Sだけである』

束のその言葉、その事実。完全敗北した世界は無抵抗に——受け入れせざるを得なかった。

こうして、全世界を震撼させた『白い何か』は『白騎士』と呼ばれ、その事件は『白騎士事件』と呼ばれる事になる。

『白騎士』の正体を知るのは束と——。

「結局、『白騎士』の正体は未だ不明のまま。いったい誰だったんでしょねえ」

「……………」

しまりない口調で言い放つ日葵と、先程までのテンションがさっぱりと消えた束。というより、またしても縮こまっていた。謎は深まるばかり。

知らない者などいない、出鱈目が過ぎた事件。何故、日葵はこのタイミングで思い出したのか。しかし、今はそんな事を考えている時間は無い。

日葵は作戦要員から除外。狂人の事だ、本当に『銀の福音』を破壊して操縦者も殺しかねない。それ以前にやる気が無い模様。期待は出来ない。選択肢は——限られていく。

「……………これ以上はやめだ、話を戻すぞ。…………束、『紅椿』の調整にはどれくらい掛かる」

「七分あれば余裕だね」

「そうか、なら直ぐにやれ。…………織斑、篠ノ之。酷な話だが——」

「やります」

「……………」

一夏と箒の返答に、千冬は思考の海に沈む。

経験が浅い二人を行かせたくはない。しかし、迅速に『銀の福音』を止められるのは『華鋼』を除けば『白式』だけだ。他では圧倒的な力不足、決定打には至らない。加えて、あのタイミングで束が示した『紅椿』の有用性。都合が良過ぎる。

理由は兎も角、束は二人を作戦要員にしようとしている事は確実。恐らく——いや、間違いない。此方が口を挟んでも無駄に終わってしまう。案に乗るしか道は残されていない。

箒もコレに感じていた。だからこそその返答。強要される未来しか見えない、それ故にである。

「……………」

代表候補生全員に送られてきた換装装備は予め把握済みだ。その中に『紅椿』の様な、本作戦に適した高機動が可能な装備があった。

で、あるならばだ。

「……………オルコット。確か強襲用高機動換装装備が送られていたな？　量子変換は済んでいるか？　調整は？　超音速下での戦闘訓練時間は？」

「え？　え、ええ、はい。既に完了しています。訓練時間は二十時間です」

「よし。……………では本作戦、目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後だ。

作戦要員は織斑、篠ノ之。それと——」

そうして作戦会議が進んでいく中、蚊帳の外と化した日葵はそっぽを向いて小さく一人呟く。

「……どうせ失敗する」

その言葉は——誰にも聞こえはしなかった。

時刻は十一時半付近。砂浜にて。

容赦が無さ過ぎる、眩しい陽光。日陰は一切と無いそこに並ぶのは四つの人影——い

や、I S。

白の『白式』、赤の『紅椿』。そして——蒼の『ブルー・ティアーズ』、銀灰の『打鉄』の姿。

そう、この場にいるのは一夏や箒だけでない。セシリアと千冬もいる。この四人が『銀の福音』を撃墜する作戦要員となった次第だ。

箒が彼を、セシリアが千冬を運搬。彼が目標に『零落白夜』を叩き込むという至つてシンプル。初撃が失敗の場合は他三人で目標の行動を阻害、再び彼の攻撃だ。上手く進めば直ぐに終わる。

(あれが、セシリアの換装装備……)

ふと、彼はセシリアの機体を眺めた。

幾ら専用機であれど『ブルー・ティアーズ』は『紅椿』の様に万能型ではなく、中距離射撃型。超音速下で運搬を全うする事など出来やしない。確実に遅れを取られる。

だがしかし、そこで出番となるのが換装装備。それこそ、セシリアが作戦要員である理由だ。

六基あるビットの射撃機能を封印、その全てをスラスト^{スラスト}としてのみ運用。機動力に特化した、専用機だけに存在する機能特化専用換装^{チェンジ}装備。

——強襲用高機動換装装備『ストライク・ガンナー』——。

これならば『紅椿』と同様に高機動が可能だ。特徴的であるビットを殺してしまったが、そこは致し方無い所。無い物ねだりしても無意味だ。

「間もなく、作戦を開始する。今回は織斑が要、一撃必殺だ。ワンアブローチ・ワンダウン短時間での決着を心掛ける」

「了解」

「だが、決して無理はするな。……特に篠ノ之、お前はその機体を使い始めてからの実践は皆無。問題が起これないとは限らない。慎重にいけ」

「……出来る範囲で支援します」

「……頼んだ」

千冬は今も、専用機を持たない己を恨む。

自身の『打鉄』は急ピッチで調整した。だが、それも眉唾物。『銀の福音』には到底敵わない。

性能が未知数である相手、更には非限定空間。不確定要素が多過ぎる。自身の実力で食らい付く事は出来るであろうが、撃墜となれば話は別だ。頼みの綱は一撃で決められる弟だけ。その事実がより一層と己への恨みを増幅させる。

——何がブリュンヒルデだ。何が世界最強だ。自分は、こんなにも無力ではないか。

作戦開始時刻は迫っている。自分に出来るのは身を挺してでも彼等を守る事だけ。どうか、皆が無事に終わるようにと切に願った。

そして、十一時半ジャスト。時はやって来る。

「……では、作戦開始!!」

直後。砂浜の二ヶ所が爆せていく。『紅椿』と『ブルー・ティアーズ』は高度三百メートルまで一気に飛翔。更に上昇を続け、ものの数秒で目標高度五百メートルまで達した。それは瞬時加速と同様——いや、それ以上の速度。

——暫時衛星リンク確立、情報照会完了——。

——目標の現在位置、確認——。

「篠ノ之、オルコット! 一気に行けえっ!!」

「了解!」

千冬の怒号によって更に加速させる『紅椿』と『ブルー・ティアーズ』。『紅椿』の方は脚部、背部の装甲が展開装甲の名に相応しいとばかりに開き、そこから膨大なエネルギーを噴出させる。

圧倒的な速度。瞬く間に旅館が見えなくなり、『紅椿』と『ブルー・ティアーズ』の間が徐々に離れていく。計り知れない速さだと感じた。

（これが『雪片式型』と同じ展開装甲——その発展型か……！）

攻撃、防御、機動に即時対応出来る展開装甲。しかも、装甲のほぼ全てがソレだ。最大出力時はいったいどうなる事やら。

だが、それだけのエネルギーをどこから——。

「見えたぞ、一夏！」

「！」

ハイパーセンサーの視覚情報が、遂に捉えた。凄まじい爆速で空を飛翔する目標を。名の通りに銀色の輝きを放つその機体を。

——第三代広域殲滅型I S 『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘル——。

異質である、頭部から生えた一対の巨大な翼。恐らく、資料に記載されていた大型スラストーと広域射撃兵装を融合した新型システムであろう。どの様な攻撃なのかは全く以て不明だ。

「加速しろ篠ノ之おっ!!」

「はい！ 一夏、接敵は十秒後だ！」

「おう!!」

指示により筈はスラストーと展開装甲の出力を上昇。推進力を最大限に引き出し、『銀の福音』との距離を次第にと縮めていく。そのチャンスは——目前へと迫った。

(ここだっ！)

『雪片式型』の機構が開き、青白く輝く莫大なエネルギーが鋭く展開される。全てを無力化する刃と化したソレを振りかぶり『紅椿』から離脱、瞬時加速を繰り出して間合いを一気に食い潰す。

瞬く間に詰めた間合い。彼は叩き斬るかの様に一気に振り下ろした。

(行け——)

——が、その刹那。

「なあっ!?!」

エネルギー刃が触れる直前、それは起こった。

『銀の福音』は最高速度のまままで彼に急反転、そしてそのまま出鱈目が過ぎる機動で回避した。彼の渾身たる必殺は——虚しくも空を斬る。

(何だよ、今の急加速は……!)

高出力の多方向推進装置マルチスラスターは数多くある。だが、ここまでの精密な急加速は全くと知らない。

これが重要軍事機密。これが——『軍用IS』。

『敵機確認。迎撃行動へ移行。』
『銀の鐘』、シルバール・ベル起動開始』

「[[[[[」]]]]」

解放回線から聞こえる、単調過ぎる機械音声。感じるのは、無機質な『敵意』。凄まじい悪寒が彼——いや、皆に襲い掛かる。

「こんのおつつつ!!」

時間は限られている。彼は再度『銀の福音』に斬り掛かった。それは猛攻の一言に尽きる。

それでも当たらない。掠りすらしない。見事に彼は翻弄され続ける。『零落白夜』の使用限界は刻々と迫って来ていた。

生まれる焦り。それ故か、彼は大振りの一撃を狙うべく、ほんの少しだけ距離を離す。

それを見逃す『銀の福音』ではない。

「つつ!! 避ける一夏あつつつ!!」

「!?!」

銀の翼。その装甲が翼を広げるかの様に大きく開き、その間にエネルギーが集束していく。

導き出される一つの答え。それは資料にあつた広域射撃兵装。

(砲口——)

——瞬間。エネルギー弾の豪雨が彼を襲う。

「ぐおあああああつっ!!」

それは、正しく死しちゆうきゆうかつ中求活と言えた。

彼は迫り来る数多のエネルギー弾を次々に掻き消していく。その隙間を縫つて身体を捻り回避、掠りはしたが辛うじて直撃を免れた。

海へと飛ぶ、残りの莫大なエネルギー弾の数。ソレは海面に触れた瞬間——大きく爆ぜる。

「爆発した……!?!」

巨大な水柱が彼に恐怖を駆り立てる。

爆発する、高威力で広範囲たるエネルギー弾。えげつない数に、凄まじい連射速度。これこそが軍用機、『銀の福音』の特殊兵装。対象を確実に殲滅する為に作られた——

『兵器』。

——多方向推進装置『銀の鐘』——。

「同時に攻め込め! 篠ノ之は左、私は右だ! オルコットは援護射撃! フレンドリーファイアに気を付けろ! 織斑は一旦離脱、隙を伺え!」

「了解……」

千冬、箒は『銀の鐘』の攻撃を掻い潜りながら二面攻撃、セシリアは狙撃を仕掛ける。箒と千冬による猛攻撃、セシリアによる狙撃。千冬は常に食らい付き、箒はエネルギー刃による攻撃、セシリアは的確な狙撃で追い詰めていく。これには流石の『銀の福音』も防御体勢に入る。

そして、とうとう隙が出来始める――が。

『La……♪』

甲高い機械音声。その瞬間、『銀の鐘』が翼を全て開く。そこから繰り出されるのは一斉射撃。しかも、全方位に向けて。

百を超えるエネルギー弾。彼、箒、セシリアは紙一重で躲せたが、至近距離にいた千冬はそうもいかない。可能な限り『葵』で弾くが、それでも何発か受けてしまった。

(やはり『打鉄』では限界……！　だが……！)

装甲が大破する事は無かったが、武装は一気にボロボロ、エネルギーもかなり削られてしまう。改めて『軍用IS』の破壊力を思い知らされる。

が、それでもまだやれる。まだ戦える。故に、食らい付く。皆を守る為に、隙を作る為に。

「押し、切るっっっ!!」

箒は紙一重でエネルギー弾の雨を躲し、千冬に再び加勢。二人の怒涛の攻撃とセシリアの狙撃が『銀の福音』の動きを鈍らせていく。

そして——遂に隙が出来た。

「ハハハで——!?!」

——が、しかし。

「一夏!?!」

彼は『銀の福音』と真逆——海面へと急加速。

「うおおおおおつつつ!!!!」

瞬時加速、更に単一仕様能力。彼はその両方を最大出力で行い、複数のエネルギー弾を次々にと掻き消していく。

その先には——。

「船……!?! ……密漁船か!!」

——封鎖した筈の海域にいた、一隻の小型船。恐らくは既に入っていた密漁船。

彼は、見殺しにする事など出来やしなかった。思考よりも、直感が身体を動かしていた。それは彼の根っ子にある正義感なのかもしれない。

船は守れた。人は守れた。だが——。

「あ——」

彼の持つ『雪片型式』、そこからと展開される単一仕様能力『零落白夜』。光が消え展開装甲が閉じ、唯の実体剣へと戻る。これの意味する事は攻撃に使えるエネルギーが切れた証。要の消失。

最大にして唯一のチャンスは——消え失せた。

「作戦は失敗だ!! 全員、直ちに撤退——」

その時、更なるダメ押しが彼等を襲う。

「あっ……」

声を漏らしたのは筈。両手に持った二本の刀が意思とは関係無く光の粒子となって

——消える。その光景に他の三人はある単語が脳裏に過った。

((具現維持限界……))

具現維持限界の予兆。機体のエネルギー管理を怠ったが故の過ち。最早、加速すらも出来ない。直ぐに機体も強制解除される。間違いない。

問題なのはこの状況下。ここはIS学園ではない大海原。そう、これは——実戦。

完全に隙だらけと化した者を見逃す筈が無い。『銀の福音』は一切と容赦無く一斉射撃。数々のエネルギー弾が無防備な筈に襲い掛かった。

具現維持限界寸前である機体が攻撃を受けたら操縦者は無事とはならない。

「ほ——」

最悪——”死”。

「筈いいいいいいつつつ!!」

彼はエネルギーの残りを全て用いて瞬時加速、筈に急接近する。誰かの”死”など見たくはない。もう、あの時の様な思いはしたくない。二度と。それだけが身体を動かしていく。

間に入る選択肢は無い。絶対に巻き込まれる。故に、彼は——筈を蹴り飛ばした。

「うあつ!!」

「!? ちふつ!」

その考えは——彼自身だけではなかった。

真隣にいたのは千冬が一人。千冬も彼と全くと同じ考えにより急接近、箒を蹴り飛ばしたのだ。二度と生徒の”死”を見たくないが故の。

最早、躲せやしない。エネルギー弾が近づき、体感時間が遅くなる中で二人は言葉を交わす。

「……愚弟が」

「……ははっ」

直後。二人にエネルギー弾が降り注いだ。

シールドバリアーを簡単に突き破るその威力。相殺し切れないその衝撃。破壊されるその装甲。絶対防御を貫通し、肌が熱波で焼けていく。

「いち——ぐうっ!」

蹴り飛ばされた箒も、無傷とはいかない。

一発が頭のリボンを掠めて焼かれ、また一発が装甲に直撃してエネルギーが完全に消滅する。

よって機体は——。

——操縦者生命危険域超過。具現維持限界に到達——。

——展開解除。生身を曝け出し放り出された。

怒涛の展開に思考が停止するセシリア。彼も、千冬も、箒も撃墜され、残されたのは自分一人。身動きが止まってしまっていた。

海面へと急速に落ちていく三人。助けようにも距離が離れおり、確実に間に合わない。

彼等は——間違いなく死ぬ。

(い、ちかあ……!!)

海面まで凡そ十メートル。あとは叩き付けられ身体が木っ端微塵になるのみだ。箒は目を瞑り、迫り来る”死”への恐怖に耐える。

「っ……!!」

——その直前。

それも全て一瞬で吹き飛んでいった。

いつもそそうだ。庇つてくれる、支えてくれる、助けてくれる。箒は感情が一気に高ぶり、遂にはその場で泣き出してしまふ。

「や、柳さん!?! どうしてここに!?! それにどうやって——」

「『灰鋼』 えええつつつ!!」

——『バリアブルシールド』展開。要塞形態に移行。防衛対象、『織斑一夏』、『篠ノ之箒』、『織斑千冬』——。

咆哮に近い隆道の叫び。跳躍と同時に足下と左右一枚ずつの『バリアブルシールド』、そして腰のスカートアーマーは四角錘台に変形し三人を取り囲んだ。一方の彼は残り一枚の盾を足下へと移動、バランス着地して滑り出していく。

そう、飛行操縦技術が全くの皆無である隆道は飛んで来た訳ではない。自身の盾をサーフボード代わりに運用、海面を滑って来たのであった。

そして、隆道がこの場にやって来たその理由。それは『白式』が未確認ISと交戦状態である事を『灰鋼』が探知したから。これに気づいた隆道は血相を変え、教員の目を欺き飛ばして来たという訳である。今頃旅館内は大慌て。

後々に何かしらの処罰が下るのは間違いない。が、今は目の前の状況が先決。

「『双豪雨』 つ!!」

展開させるのは絶大な火力を誇る『双豪雨』。以前の展開方法とは違い、今回は足代わりである盾の四隅に四基を全展開、盾が無い無人砲台として『銀の福音』に向け砲弾の雨を浴びせていく。

だが、相手は三人掛かりでも大したダメージを与えられなかった『軍用IS』だ。当然の事ながら全てを躲かされてしまう。

そして——これにて隆道も迎撃対象と化す。

『敵機確認』

「！」

直後。数々のエネルギー弾が隆道を襲う。

今は己を守る『バリアブルシールド』が無い。ろくに飛べない以上、動けるのは限られた足場。故に、隆道は防御一択の手段を取るのみ。

「ぐおおおああつつつ!!」

食らい続けるしかない爆発性のエネルギー弾。無人砲台は瞬時に破壊され、翳した『剛鉄爪』は大きく弾かれ、身体の所々が焼け焦げていく。

そして、そのまま——一発が胸に直撃した。

「があつつつ?!?!」

「つつ?! 柳さんつつつ!!!」

絶対防御の貫通によって起こるのは心臓震盪。致命領域対応でも補助し切れないエネルギー弾は隆道の心臓を止めた。既存のISでは救命不可能。即ち、”死”への片道切符。

だが、それでも――。

「――」

――操縦者の心停止を確認――。

――五、四、三、二、一、零――。

――R・I・C・U・system『ハル』起動――。

「――げほおつつつ?!?!?!?」

――隆道は死なない。

焼け焦げた皮膚は急速再生。五体満足な身体に戻っていく。この光景にセシリアは愕然とした。初めて見るのだから当然の反応。

「……………え。なに――」

「ぎぎ……………このくそつたれがあああつつつ!!!」

そんなセシリアの呆然など構う事無く、隆道は脳内で『灰鋼』に指示を飛ばす。

今も三人を取り囲む『バリアブルシールド』の要塞形態。その一部分にあるスラストターを最大に噴出、旅館へと向けて海面を滑らせ離脱させた。

行動はそれだけで終わりはしない。その直後に繰り出すのは『グラップルランチャー』の射出。掴むのは——要塞形態の盾。ソレを的確に捉え、そのまま水上スキーよろしく引き摺られていく。これ以上の交戦は無謀と判断した故の離脱だ。

この状況では敵に勝てない。そもそも自身では勝ち目が無い。全滅してしまう。残された唯一の道は撤退のみ。

「退け退け退けえええつつつつ!!」

「! は、はいっ!!」

呆気にと取られていたセシリアは直ぐ我に返り、『銀の福音』に牽制射撃をしつつ撤退していく。

隆道も武装を展開して引き摺られながら乱射、そのまま旅館へと戻っていったのであった。

——織斑千冬、重傷。

——織斑一夏、意識不明の重体。

『銀の福音』撃墜作戦は——失敗した。

第五十二話

日本列島、何処かの山中。

何処を向いても木、木、そして木。太陽の光は葉の層で遮られ、眩しさは無けれど暗くもない。聴こえるのは虫や鳥達の鳴き声、葉擦れ、そして微かなそよ風の音。ゴミや人工物は一つも無い、のどかで心地の良い森林の空気がそこにあつた。

絶好の外出日和である。この自然を思う存分に楽しむ為にはハイキングが最適だろうか。いや、ピクニックでもよし。キャンプ等も捨てがたい。

不条理で理不尽なこの世の中だ。今も荒れ狂う現代社会に心底疲れ切った人間など五万という。そういつた者こそ、耐え切れずに壊れる前に一度この地に足を運ぶと良いだろう。少なからず心が洗われる、その筈だ。

今日に限りそれは無いのだが。

山中の奥に立つ、それなりに立派な一本大木。それに背を向けて寄り添うのは二人の成人男女。一見ハイキングにでも来たであろうカップルだ。インドア派が多い現代においてアウトドア派とはなんと健康的な事か。

が、それにしてもかなり様子がおかしかった。道具処か荷物も見当たらない、焦りだが見える。まさか遭難してしまったのか。

「いでえ……!! いでえよ……!!」

「やだ、死にたくない死にたくない……!!」

否。ソレは遭難にあらず。

「ぐっ……はあつ、はあーっ……!!」

「助けて助けて助けて……!!」

彼等の姿は酷く痛ましかった。

顔面に付く数多の切創に痣、所々が赤く滲んだボロボロで泥だらけな服、一部が欠損した手指。両者とも明らかに重傷であった。

先程まで死に物狂いで走っていたのである。肩で息をしているのがその証拠だ。何としてでも生き延びる為に。何かから逃げる為に。恐らくは野生動物に襲われたと

推測出来る。

「聞いてねえ……!! こんなの聞いて——」

——直後。

「——ねっっ」

「——だすっ」

空気を叩く音と風を切る音が響き渡ると同時に二人の身体は連続して穴が開き、血飛沫が舞う。足元や辺りの緑は瞬く間に赤へと変わっていく。

「いゝ、やゝめっっ……!」

「やゝあっ……!」

彼等の捻り出す悲鳴は届かない。

殴り抜かれた様に大きく仰け反り、後ろの木へ凭れ掛かってもソレは止まない。穴は更に増え、血飛沫も増えていく。その勢いは増すばかり。

衣服は千切れ、皮膚は裂け、血肉は抉れ、骨は碎け、臓物が飛び出す。連続した仰け反りは最早痙攣に近いものとなり、遂に崩れる様に倒れる。

それでも止まる事はなかった。ズタズタとなり動かなくなっても穴は増え、鮮血は散っていく。衣類が半分以上無くなり、肌の全てが赤と化した所でソレは漸く収まった。

「——」

静寂が訪れる。

完全に事切れた、確実に息絶えた。あちこちに布や血肉が無惨に散乱。土も、草も、辺り一面が赤一色。目を逸らしたくなるこの惨状は瞬く間に出来上がってしまった。

大木は一層と酷い。赤の塗料をぶち撒けた様な赤色とへばり付く肉片に、数えるのも億劫になる小さな窪みとズタズタに抉れた木の皮、おまけに焦げ臭い匂いも。その手の人間ならば直ぐに判別出来る——弾痕。

そう、彼等は射殺されたのだ。百発以上になる凶弾を浴びに浴びて。あまりにも酷い。いったい誰がこの様な惨たらしい事を。

いた。張本人がいつの間にかそこにいた。

死体から離れた所に立つ人影。その数は五人。微かに漂う煙の中に横一列で並んでいた。彼等を一言で現すなら『物恐ろしい』に尽きる。

姿は黒一色。様々な装備を付けたヘッドギア。素顔を完全に隠した不透明のゴーグ

ルと金属製のフェイスマスク。分厚いボディアーマーに所々のプロテクター、数々の用途不明な装備。首周りにちらりと見える、番号とパネルの付いた首輪。

彼等の武器もまた物恐ろしいと言えるだろう。サプレッサーやカートキャッチャー等を装着した自動小銃、太股に備える大型拳銃、背中に背負う銃火器とナイフ、腰回りに様々な手榴弾。

弾薬量もこれまた凄まじい。ボディアーマーに張り付くマガジンポーチにはありつたけの弾倉、胸や二の腕辺りには剥き出しの大口徑弾薬。

そして——ソレ等よりも一際と目立つ、背中と四肢に張り付いた機械。

脊椎と肩甲骨に酷似した背中の機械。そこから金属フレームとシリンドーが伸び、腕部は肩から指先、脚部は足の付け根から足裏までガツチリと装着されていた。恐らくはアシストスーツの類いかと思われる。

明らかに警察組織や自衛隊ではない謎の五人。戦闘処か大量虐殺も可能であろう重武装の彼等はいったい何者なのか。

「「「「……………」」」」

彼等は未だに銃を死体に向けていた。近寄りもせずとその場から動こうとはしない。

普通ならば既に警戒を解いても不思議ではないが――。

「装填」

真ん中の一人が言葉を発した直後、端の二人は弾倉を入れ換え始める。銃を保持しつつ、照準を外さず、一寸の狂いもなく僅か二秒弱で終わる。その間、他の三人は銃口を向けたままだ。二人が再装填を終えたのを確認したのちに残りの三人も素早く再装填。その動きは端の二人よりも遥かに洗練されていた。特に真ん中が群を抜いている。

かなりの熟練者だ。相互支援を徹底している、動作に無駄が無い。何処かしらの特殊部隊なのは間違いないだろう。

「撃て」

突然、全員が死体に向けて発砲した。それも、一発ではなく二発ダブルの連続射撃タック。銃特有の爆発音はせず、空気を叩いた様な比較的静かなる音と共に弾丸は物の見事にそれぞれそれぞれの頭と胸へ命中する。勿論、仏となった二人は微動だにしない。風穴が新たに増えただけであった。

やり過ぎにも程がある。非武装の人間に弾倉を使い切るまで撃ち続け、倒れても攻撃を止めないその残酷非道。オーバキルもいいところだ。

「こちらハンター3-1スリーワン、標的二名排除。これより確認に入る」

『了解、処理班の到着まで五分』

「了解」

通信相手は機械音声。彼は通信を終えるや否や四人に向けハンドサイン、それを確認した彼等は銃を構えつつ速やかに後退していく。

そして、彼は四人とは真逆——前進して死体に近づいていった。照準を合わせたまま、慎重かつ迅速に。何故か未だに警戒を解かない。

「新型の可能性が。警戒を」

「そうでないと祈れ」

彼は落ち着きを見せつつ、徐々に近づいてく。一步、また一步と確実に。まるで、二つの死体が爆弾そのものの様に。何を恐れているのだ。

が、それも終わり。漸く死体が目の前となると彼は懐から細長い機械を取り出し、強く刺した。注射器に見えなくもないが、やはり謎。

「……陰性反応。『過激派』の遣いだっただか」

「雇われたか、唆されたか、それか脅されたか。まあ『奴等』じゃないだけまだいい」

何を調べたのか、死んだ二人が何をしたのか、彼等が異常に警戒する『新型』と『奴等』とは。答えを訊く者はこの場にはいない。いたとしても彼等が素直に答えるとは到底思えないが。

と、その時。

『——さいっ!! そんな——つてるさ!! けどここまでやった!! ——つたさ!!』

——引ける訳な——か!! それに……もう悠長なこと言つてられな——!!』

』

『もしも手遅れになつたら——わりだ!! 本つ当に!! ——んだよ!! だから……だからせめて……!!』

『覚悟の上……ですか。……承知いたしました。エク——、聞いた——はありません。準備が整い——ます』

『……本当に、——すね』

『ハアツ……ハアツ……!! ……うん、やる。忌々しい——共が動く前に片を付けないと。——んは手筈通りをお願いね。——ちゃんは私が——するから。——

——んは……うん、何もしなくて良いよ。身体大事にしないと。……ソソツ、あーあーあー……よし。そーれーじやー——い——ね! 皆の集、ご安全に!』

『ご安全に。……さて、貴女は——なさい。大人しく——す。そもそも、この——

——なに何——無い事。私——としては——いて欲しいのですが。……不眠ですか? ……はあ、いいでしょう。貴女には——の——を。それ以外は認め

ません。必ずや、——が——』

所々ぶつ切りではあるが、聞こえたのは女性の声が三人。内容からして何かしらの企みだろう。何を言っているのか全く以て不明だが――。

「「「「……………」」」」

――彼等には伝わったようだ。

「……………そうか、それが貴様の答えか。……………こちらハンター3―1、ネメシスと『月長石』の状況は」

『こちらハンター0―1、ネメシスからの応答無し、状況は確認出来ず。『月長石』の現在地は不明、未だ特定出来ず。各員配置に急げ』

「「「「了解」」」」

「了解。……………3―4と3―5は残れ、我々は先に行く」

「了解」

彼は指示を飛ばすや否や山奥へ走っていった。二人もそれに続いて駆け巡っていく。三十キロはとうに超える重装備にも関わらず、彼等は平然と悪路を走っていく。

慣れているか、身に付ける機械のお陰なのか。彼等は速度を落とす事もなく倒木、岩場、更には小さな崖を軽々と飛び越えていく。

「近道する、跳ぶぞ」

「了解」

「了解。……はあ、まーたこれかよ。高所恐怖症なんだぞ俺は」

「無駄口叩く余裕があるなら足を動かせ」

「はっはっ」

結構な距離を走る中で彼等は急に進路を変更、手持ちの銃をぶら下げて更に足を速めた。向かう先は光の差す方。森を抜けるその先は――。

何も無い断崖絶壁。

高さは三十メートル程、下は無造作に並ぶ岩。川は無い、命綱など無い、クッションの類いすら見当たらない。

こいつら飛び降りる気だ。正気か。

「まもなくだ。セット」

「セット」

彼等はほぼ同時に左腕の装備に触れ、そのまま崖との距離を縮めていく。それにつれて身体から紫電が走り、徐々に強くなっていた。

そして、日光を浴びるその直前で——。
「今だ」

七月七日、七夕。

中華圏における、五節句の一つであるこの日。世間で様々な行事がある中、IS学園の臨海学校は二日目にて最悪な事態を迎えた。世間で様々な行事がある中、IS学園

装備テストの真つ最中に突如として発生した、軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』の暴走。これを鎮圧すべく戦線に参加したのは千冬を筆頭にセシリア、箒、一夏の四人である。他の代表候補生は待機という形になった。

半数が実践経験など皆無な素人、ましてや箒は専用機を受け取ったばかりだ。不安要素しかないチームだが、高機動型に対処出来る数少ないIS、一刻を争う事態、そして東の謎の後押しによって彼等に全てを委ねるしかなかった。

当然、結果は大失敗に終わる。

接敵は出来た、流れは彼等にあつた。しかし、不測の事態が連続し、一夏と千冬は攻撃をモロに受けて撃墜、その後にも撃墜される。瞬く間に三人も倒され、残されたのは火力が低く決定打のないセシリアのみとなる。

その絶望の最中に現れたのが隆道。撃墜された彼等を海面に叩き付けられる直前で回収、その後交戦に加わるが少しも歯が立たず嫩られるのみ。勝てないと即判断しセシリアと共に撤退した。

ここまでがつい先程の出来事。唯一無傷であるセシリアは作戦本部へと帰省、箒は脱け殻の様に戦意喪失、千冬は戦線復帰不可能なまでの重傷、一夏は——昏睡状態に陥つた。

では隆道は？　彼は今——。

時刻は十三時付近。花月荘館内、教員室。

「……………」

中央のテーブルを挟む様に居座る二人の教員。一人は正座で俯向く真耶、一人は手に顎を当てる菜月。負い目があるかの様に塞ぎ込む者と、時折小さく溜息を吐く者。その部屋にはとても重く、暗い雰囲気が充満していた。

先月の事件以降、何かと絡みがあるこの二人。事務処理はほぼ一緒、仕事終わりの飲みも一緒。隆道のほんの僅かな情報を共有している彼女達は事ある毎に行動を共にしてきたのである。昨日の菜月に関しては夕食後に事務処理を終えて直ぐに一人で溺れる様に飲みまくり、真耶が女子会から戻った頃には完全に潰れて超絶爆睡してたとか。相変わらず残念な女だ。

そんな事はさて置き、彼女達が部屋にいるのは何故なのか。今は特殊任務中の筈では。

(どうしてよ……。こんなにあんまりじゃない)

考えに耽る菜月はふと、視線を下に向け自身が持つ『ソレ』に注視した。何度見ても『ソレ』に心底と嫌悪感が湧き出てくる。

『ソレ』は『拳銃』だった。

光沢など一切と無い、無機質な拳銃。しかし、見るからに普通の拳銃とは違った。

あまり見掛けない、水平に並んだ二本の銃身。銃身の下は手の平サイズの小さなボンベが一つ。そう、これは拳銃は拳銃でも殺傷能力を持たない非致死性兵器——『麻醉銃』。

菜月だけでなく、向かい側で未だに俯く真耶も同じくして麻醉銃を所持している。だがしかし、銃把を一切と握らない様子から撃つ気など少しも無い模様。

何故、彼女達は麻醉銃など所持しているのか。その理由は直ぐ近くにいた。

「ふう。……………」

何度目かわからなくなった溜息を吐いた菜月はおもむろに窓の方を見やる。いや、正確に言うとう窓側に寄り掛かる一人の人間に。

「……………」

そこにいるのは、これ以上無い程の虚ろな目でこれ以上無い程にだらしなく座る青年——隆道。白のポロシャツに緑のカーゴパンツというラフな格好。いつもの目立つ首輪は見当たらなかった。

だが、それは些細な事、至極どうでもいい事。彼の専用機など今となつては重要ではないのだ。今、重要なのは彼の状況にある。

その両手首には特殊ファイバロープと手錠の二重掛け、両足首には最低限歩行出来る程に短い金属チェーンが一本。これを意味する事は何か。

そう、彼は拘束されたのであつた。旅館からの脱走、無許可のIS展開に加えて作戦に乱入からの交戦、その後の彼が取つた行動が問題となつた。

彼への対応が一番苦労したと思われる。何せ、彼は戻つてくるなりその場の全員に罵倒を浴びせ暴れ狂つたのだから。

話は一時間以上前、『銀の福音』との交戦から撤退後に遡る。

『何だよ……何なんだよアレはあ!! あんなのいるなんて聞いてねえぞ!! ……軍用I

S!?! 暴走!?! そんなくそつたれが何で!!』

『つーかてめえらは何してんだよコラアツ!! こういうのはてめえら大人の役目だろう

が!! それを……選りにも選ってこいつらに……!! こ、このくそつたれ共が……!!」
『あああああ、ぜってえ許さねえつつ!! てめえら全員歯あ食い縛れええつつ!!』
一夏達の無残過ぎる姿とのこのこ現れた教員を見るなり隆道は激怒。半壊したISを解除し周囲の人間に殴り掛かった。説得を試みても激昂してる故か話が一つも通じなかつた。

全力で止めようにも、彼の強靱な肉体と秀逸な回避能力の前には手も足も出なかつた。どんなに素早い攻撃であろうと、格闘術を駆使しようと、大人数で掛かろうと全て無駄で終わった。

打撃は難なくと躲されて反撃される。やつとの思いで捕えて関節技を決めても直ぐに解除されて反撃される。動きを止めたら最後、重過ぎる拳が迫ってくるか宙へと投げ飛ばされてしまう。

代表候補生ですら彼を止められはしなかつた。恐怖を抑えつつ止めに掛かった鈴音はあつさりと投げ飛ばされ、ラウラの格闘術も全くと効かず、シャルロットの声は届かない。当然、セシリアの話も一切と聞きやしない。唯一、戦闘能力が高いであろう日葵だけは介入せずに傍観していた。

威嚇として教員が銃を向けても怯まなかつた。寧ろ、彼には逆効果でしなかつた。
『あ、? 何だ、俺を撃つか。良いぜ、さっさと撃てよ。どうしたクソ教師、早く撃て、

殺れよ。なあ……殺れつつつてんだろうがつつつ!!! 撃つ気ねえんだつたら端っから向けんじゃねえぞゴラアアアツツツ!!!」

全く手が付けられなかった。場にいた約半数が殴られ、投げ飛ばされる。戦闘能力を持つ大勢の女性が、一人の青年を無力化出来なかった。

しかし、彼の暴走は直ぐに呆気なく終わる。

『そんなもんかこの腰抜け共があつつつ!!! てめえらマジで覚悟しろ——』

『織斑先生!』

『——!?! てめ——』

『許せ……!!』

彼を止めたのは重傷の千冬であった。至る所の皮膚が焼かれた痛々しい彼女は見た目とは裏腹に俊敏な動きで彼の背後に回り背負い投げ、追撃に腹へ目掛けて拳を思い切り振り下ろした。

『ごばあつつつ?!?!? ……ア、——』

音からしてかなりの重い一撃だったのだろう。彼は嘔吐した後はその場で気絶。それを確認した千冬は即座にISを部分展開、罅だらけの『葵』も同時に展開し切っ先で器用に引き剥がす。そしてそのまま砂浜へと投げ捨てた。例の爆発は何故か起動しなかった。

『? いや、もしや……』

これに疑問を抱いた彼女は『葵』で首輪を数回突付き、試しに先端で引つ掛け少し持ち上げる。それでも何も起こらず、ここで彼女は確信した。

『やはり、な。……柳を拘束する、連れていけ。『灰鋼』は我々で管理する。トングで拾うんだ、うんと長いヤツでな。決して生身では触るなよ。このISは……柳以外が触ると爆発するぞ……!』

『りよ、了解!』

そして今に至る。

『灰鋼』は教員が細心の注意を払い回収、今は別の所へ嚴重に保管されている。どうやら生身で触れなければ爆発しないらしい。情報が無いにも関わらずこの事実気づけたのは幸いであつた。

一方の隆道は教員二人体制で監視。作戦本部で待機していた真耶と菜月はこれに抜

擧、こうして彼の監視を続けている。

彼女達の持つ麻酔銃も彼を鎮静する為にある。幾度となく行った治療と検査、その過程によって出来た適正量の麻酔薬は彼の肉体を害する事なく無力化が可能である。現状、テーザーガンよりも遥かに効果的だ。

本来なら麻酔銃というのは医療行為に当たり、医師免許を持たない者が使用する事は出来ない。だがしかし、彼女達はIS学園の間。特記事項によって問題は解決している。科学兵器禁止条約に違反もしないのである。

「……………」

あれから一時間以上も経つ。目が覚めた隆道は常にこの調子。現状の説明をしてもこれといった反応は無い。少しも動かないし全くと喋らない。まるで捨てられた人形のようにピクリともしない。

食事にも手を付けていない。爆睡で寝過ごした彼は朝食が取れず空腹の筈。昼時とというのもあり昼食の用意はしたが、昨日のアホな食べっぷりがまるで嘘の様に全然と見向きもしない。今の彼は死人同然と言っても過言ではなかった。

「……………」

とても息苦しい。胸が張り裂けてしまいそう。いや、誰よりも辛いのは目の前の彼自身か。

隆道がいなければあの三人は助からなかった。いや、全員だったのかもしれない。誰よりも先に彼等を救助した彼を責める事など出来やしない。だからこそ、この状況に納得していない。

それでも、この対応は仕方が無いのも事実だ。彼の事だ、放っておけば何を仕出かすのか不明。それに最重要軍事機密も知られた、漏洩する前に対策を打たなければならぬ。納得出来なくともやるしかなかった。

これからどうなってしまうのか。作戦は失敗、一人目の少年は重体、二人目の青年は拘束状態、世界最強の千冬は重傷、天災が実妹に押し付けた特製の第四世代。

駄目だ。どう考えても良い方向に転がらない。どれも解決出来る気がしない。幾ら何でも問題が多過ぎる。思い付く策が一つも無かった。

「……………」

「？」

その時、突然と隆道に動きがあった。

彼は自身のポケットをおもむろに弄り、二つの物体——四角い紙箱と金属を取り出した。ソレに目を通すなり唐突に立ち上がり、側にある大窓を少し開けてまた座り込む。そこからの——。

「……………あつー！」

——手持ちの紙箱から取り出す一本の煙草。

ソレを啜えるなり、手持ちのオイルライターで火を付ける。この男、あろう事か教師の目の前で喫煙をおつ始めやがった。ご丁寧には足元には水が入った茶碗まで。灰皿にするつもりだ。そもそもいつの間持っていたのだ。

流石にこれは見過ごせない。そう思った菜月は彼に近づき、没収しようと手を伸ばすが。

「ん」

「あ、ちよ……」

「んっ……フウ……」

いとも簡単に躲される。

触れる直前で隆道は顔を傾けられ、菜月の手は虚しくも無を掴んだ。その手を流し目で見る彼は喫煙を止めない。吐き出す煙が部屋に行き渡り、二人の鼻を強く刺激していく。

非喫煙者の二人にとって煙草は害でしかない。それ以前に彼は未成年であり一生徒。教師である彼女としては許せない事である。故に、彼が火を消すまで注意を止めないつもりなのだ——。

「柳君、今すぐ消しなさい」

「……………」

「……あのね、貴方は未成年であつて生徒なの。先生達としては止めて欲しい——」
「てめえらが『先生』を名乗るのか」

「——な……」

息が詰まった。

目覚めてから初めて呟いた一言。それは二人の心をこれでもかという程に深く抉つた。

淡々としたその言葉に怒りは微塵も感じない。何時ぞやの憎悪も感じない。感じるのはいつ。

「てめえらがどれだけくそつたれでもそれだけはやらねえと思つていた、それだけは期待してた。けどやったな、やりやがったな……」

——『失望』——。

「——」

言葉の意味が伝わる、嫌でも伝わつてしまう。それ故に言葉が出てこない。何か言ううにも彼の言葉が脳内で何度も反復されてしまう。

「ガキのあいづらが戦つて……大人のてめえらは戦わねえつてか。本つ当に、ひでえ話だ……」

隆道は心底と許せなかった。一夏達を軍用 I S と戦わせた彼女達を。子供を戦地へ送つた大人を。

セシリアは別にいい。以前、国家代表候補生は非常時を想定した訓練もするとシャルロットから聞いた。だからこそ気にしないし、そもそも嫌う人間であるのだからどうだろうと構わないのだ。勝手に戦えばいい。

しかし——一夏と箒だけは駄目だ。この二人は国家代表処か代表候補生ですらないズブの素人。本来、こういうった非常時とは全くと無縁の人間。演習でも試合でもない、死と隣り合わせの実戦に彼等を行かせるなど狂気と言う以外何と言うか。

最終的に決定を下したのは千冬だ。が、彼女は彼等を出すのを渋つていたと聞く。結局出撃する羽目になったが、彼等と共に出撃し、交戦の末に箒を庇つて重傷を負つた。ざまあみろとは思つたものの、それとは別に少なからず評価は出来る。

非常事態なのは充分に理解している。後がない状況だったのも理解している。一夏と箒が作戦に志願したのも聞いた。

だからどうした。

彼等を守るんじゃないやなかったのか。

理由があれば、子供が望めば戦わせるのか。

それを止めるのが——大人ではなかったのか。

過程や理由がどうあれど関係無い。促したのはお前達だ、そうさせたのはお前達だ。

柳隆道は許せない。厄介事を強いた大人達を。箒に専用機を無理矢理与えた天災を。少年少女に任せて戦おうともしなかった教員を。

目の前の二人が——本当に、許せない。

今、隆道がやれる事は一つ。カス同然となった氣力を振り絞り、彼女達を罵倒するのみ。

こんな事をしても意味は無いのかもしれない。二人を責め立てるのは筋違いなのかもしれない。これは八つ当たりなのかもしれない。

だとしてもだ。このドロドロと化した言い様のない想いをぶつきたい、その一心で口が動く。

『『軍用』ねえ。はんつ、こりや傑作だな。ISはスポーツだなんて全否定されてんじやねえかよ。なーにーがISは兵器じゃねえだ、パートナーだ。暴走するのがパートナーか？ 馬鹿じゃねえの。ふざけるのも大概にしとけよ』

「う……………」

「……………篠ノ之の顔を見ただろ。あんなに叫んで、あんなに泣いて、あんなにスツカラカンに……………。そりゃ叫ぶさ、泣くさ、氣力なんて失くなるさ。好きな男がボロカスにされち

まったんだからな。篠ノ之が、織斑が何をしたってんだ……」

「……………」

「てめえらが勝手に戦って勝手に殺られちまえば良かったんだよ。なのに、勝手に期待して……。どんだけ専用機を過信してんだ、盲信してんだ。あいつら二人は……。ついこの間まで、ふつつーの中学生だったんだぞ……。？ てめえら何なんだ、頭狂ってんじやねえのか……。？」

反論は——出来ない。

幾ら一刻を争う事態であろうと、幾ら上からの指示であろうと、子供を戦わせた時点で罪深い。絶対に、決して許されはしない。許されるなら、世界は今度こそ終わっている。

この事實は絶対に覆せやしない。自分達大人は——一線を越えたのだ。

「……………まあ、もうどうでもいいわ。どっちにしろ俺は追放待った無し、研究所送り確定だろうよ。口封じにバラされたりして。それも良いかもな。良かったな、悩みの種が一つ減って。……フウ、だからコレぐらいは許せよ。最後の晚餐ならぬ、最後の一服ってか？ ハハッ」

「……………柳く——」

「ああ、そうそう。どうせ俺の人生は終わりだ。だから……。最後にこれだけ言わせてく

れ

「? ……!!」

隆道はその暗い瞳をゆっくり動かし、菜月達に向ける。全ての『負』を煮詰めたであろうソレは彼女達を完全に硬直させていった。

彼は物静かに、はつきりと言葉を吐き捨てる。それは、かつて彼女達が感じたものよりも遥かに惨烈で、そしてあまりにも――。

「憶えとけ。てめえらは許さねえじや済まねえ。嫩られようが実験台にされようが解剖されようが俺はてめえらを忘れねえ、絶対に忘れやしねえ。最後の最後まで憎んでやる、憎んで死んでやる。死んだ後も憎んでやる。先に地獄で待つてるから覚悟しろよ」

――強過ぎる『どす黒い何か』^{憎悪}だった。

同時刻。花月荘、作戦本部。

薄暗い室内、その中央に浮かぶ大型の空中投影ディスプレイを囲むのはISスーツを

着る女性陣。その中でも目立つのはジャージ姿の女性が一人。

「織斑先生!! 今は安静に……!!」

「私の事は……心配、するな。それより、現状を何とかせねばならん……」

その女性は片目と口以外を包帯で埋め尽くした状態の千冬。教員の声に聞く耳持たず、先程からずっとディスプレイを注視している。

彼女が戻ったのはつい先程である。怒り狂った隆道を鎮圧した後直ぐに一夏を最優先で治療し、自身も治療した後は真つ先に作戦本部に戻った。この女、タフ過ぎではないか。本当に人間か。

「あの……織斑君は……」

「……幸いにも、致命領域対応が働いてくれた。『白式』のエネルギーが回復次第目を覚ますさ。だが……肝心の『白式』がかなり損傷している。今日一日はまず無理だろう……」

「そんな……」

一夏の受けたダメージは致命傷に等しいもの。だが、そこはISの最大の保護機能——絶対防御の致命領域対応が救った。ダメージを受けた箇所が主に背中だったのも大きい。これが頭か胸ならば保護機能は働かずに死んだかもしれない。現に、隆道は胸に直撃して心臓震盪を起こした。本当に運が良かったとしか言い様がない。

二度と目を覚まさない——という訳ではない。彼はI Sの補助を深く受けた状態、言わばI Sにより命を守られている。エネルギーが回復すれば彼の意識は直ぐに戻る筈である。

とは言うものの、彼のI S——『白式』の現状はダメージレベルD寄りのCだ。損傷が激しいからか充填がままならない。自己修復速度も少々遅い。最低でも明日以降であらうと千冬は推測した。

「……くそっ」

今日以上に最低な日があったであろうか。

負傷者を出してしまった。よりよって生徒を——最愛の弟を。絶対に怪我させまいとあれだけ意識していたのに、結果がコレだ。

弟だけではない。箒も傷付けてしまった。彼の眠った姿は、かつて目の当たりにした隆道の死と重ね合わさったのだろう。撤退後も常に彼の側を離れず、枯れるまで泣いていた。

死ぬ事は無い、何れ目を覚ますと説明はした。箒は少しばかり安堵の表情を見せたが——それも束の間、今度は自分を責め始めた。

私のせいだと、私がしつかりとしないからと、壊れたラジオの様に何度も、何度も、何度も。

堪らなくて仕方がなかった。逃げ出したい程に堪らなかった。弟の痛々しい姿も相
当にきたが、彼女の姿も胸が抉られそうな位にきてしまった。

こんな事になってしまったのは誰のせいだ？

チャンスが水の泡にした一夏か？　ISの管理を怠った筈か？　作戦を提案した束
か？

——違う。

——私のせいだ。

実戦経験なんて無い彼等を、素人を、生徒を、身内を戦いに駆り出したのは他でもな
い自分だ。腐れ縁に抗わず決定を下したのは自分だ。彼等に——子供達に罪など少し
たりとも有りはしない。全ての責任は自分にある。

「……………これで何回目だろうな」

もう一つ思うのは、自分達を誰よりも真つ先に救助しに来た隆道。後先考えない行動

とは言え、彼のお陰で誰も死なずに済んだ。その後の行動はとても許されないものではあったが。

他人の為に動き、他人の為に怒り、他人の為に命を投げる。彼がいたからこそ、助かった人達がいた。救われた人達がいた。限定的ではあるが、彼の持つ優しさは紛うことなき本物だ。

可能であるならば拘束などしたくはなかった。だが、そうでもしないと被害は拡大してしまう。状況を整理する為に今だけは大人しくして貰う。処遇を決めるのは後回しだ。酷い仕打ちと思うが今はこうするしかなかった。

私情など挟めない。任務を遂行するしかない。それが自身に課せられた使命なのだから。

「織斑先生……?」

「いや、すまない。……それで、『銀の福音』の現在地は」

「……目標は先程発見しました。ここから南東に三十キロ離れた沖合上空、海上二百メートル程で停滞中です。現在は潜伏モードですが光学迷彩は装備していない模様」

そう言つて教員はディスプレイを少し操作し、千冬の前に位置情報と映像が映し出されていく。

中央に見えるのは『銀の福音』。膝を抱く様に身体を丸め、頭部から伸びた銀翼の翼は

守る様に包んでいた。まるで胎児の様に。

「停滞……？　今も動いていないのか？」

「はい。全く」

おかしい。何故動かない。何故姿を曝け出したままなのだ。これでは見つけてくれと言っている様なものだ。何か引つ掛かってしようがない。

まさか、誘っているのか。だとしても何を。

「……それともう一つ。密漁船の事ですが……」

「ん？　ああ、奴等がどうした。全く、アレさえいなければ成功したかもしれないのに……。いったい封鎖を怠ったのは誰——」

「いなかっただんです」

「……ん？　今何と？」

千冬は首を傾げた。彼女は今何と言ったのか。想定外の言葉に到底理解が追い付かなかった。

「ですから、いなかっただんですよ。密漁船が」

「何……？」

「映像記録には確かにいました。各センサーにも反応は記録されています。四人のI S 全てにです。それでも……彼処には一艘もいませんでした」

「馬鹿な……!?!」

有り得ない。絶対に有り得ない。

間違いなく彼処には密漁船がいた筈だ、千冬もこの目でしかと見ている。密漁船がいたからこそ今回の任務は失敗してしまったのだ。

そんな納得がいかない彼女を尻目にし、教員は次々に画面を表示させていく。そこには、確かに密漁船が映る映像、生体反応、動体センサー等の証拠がずらりと並んでいた。それでも——いなかったと語る。

「搜索は抜き取りなく行いました。沈没した形跡も無し。船は見つからない、人すら見当たらない。有り得ますか? ISでも発見が出来ないなんて。これではまるで……」

『『幻覚』……だと言うのか』

それも有り得ない。

一人ならまだしも、全員が密漁船を確認した。途中から現れた隆道の『灰鋼』にも密漁船を見た記録は残されている。全員が同じ幻覚を見たなどあまりにも現実的ではない。

ハッキングの類いかと考えたがそれこそ無い。もしそうならば『灰鋼』の『A. S. H』が働く筈だ。それ以前に自分なら確実に気づく。

ますますわからない。密漁船は何処へ行った?

「こんな時こそ篠ノ之博士がいれば……。何処に行つたんでしよう」

「やめとけ、あいつには関わらない方がいい」

東はいつの間にか姿を消していた。

此方の事などお構い無しに現れ、好き勝手に満足すれば消えていく。昔から何も変わらぬ。

今回もそうだ。妹に争いの火種にしかならない第四世代のISを与え、厄介事に首を突つ込むだけ突つ込んで後の事は知らんとかばかりに消える。

彼女に振り回されてから二十年近くにもなる。今までは諦めが勝っていたがもう許しはしない。次に出会つたら必ずや取つ捕まえてやる、今まで苦労した分の責任を取らせてやる。

「」

「!!」

「……むっ？」

東を捕まえたらどうしてやろうかと思考の海に沈もうとしたその時、遠くから騒ぎが聞こえた。その方を向くと、誰かが口論している様子が。

「ちよつと、こんな時にやめなよ……」

「シャルは黙つてて。ねえあんた!! も、もう一度言つてみなさいよ!!」

「だーからーさー。私はやる気ないってばあ。やりたきやそつちで勝手にやればあ？」

「何やつてるんだあの馬鹿共お……」

千冬は天を仰いだ。

片や、劍幕でまくし立てる鈴音。片や、心から面倒臭そうにだらしなく佇む日葵。激昂する者と物臭な者という非対称がそこにはあつた。鈴音の側にはシャルロットが一人、セシリアとラウラはI Sを調整の為不在である。

シャルロットが宥めようとしても鈴音はまるで聞き入れやしない、完全に頭に血が上っている。この非常事態に彼女達は何をやっているのだと、千冬は頭痛と身体の軋みに耐えながら彼女達へと近づいていく。あの馬鹿共には説教せねば。

「あんた、代表候補生でしょ!! 専用機だつてあるでしょ!! 非常事態なのよ!! 今!! 戦わなくてどうすんのよ!! そんなワガママが許される様な立場じゃないでしょ!!」

「そんなの知ーらない。てーいうかさあ……別に政府から命令受けてる訳じゃないしい、こつちに来なけりやどうでもいいかなあ。この作戦は強制参加じゃないでしょお? 出る訳無いじゃんか。それに痛いのはやだもんねえ、イヒヒツ」

「……ッ!! あんた……戦うべき時に戦えない臆病者か……!!」

「……ごめんねえ、戦う覚悟なんて無くてさあ。勇敢な、き、み、が、本っ当に羨まし

いなあく。あー凄いい凄いい!!」

「ツ~~~~!!」

これでもかと煽りに煽る日葵。鈴音はその拳を強く握り締め、身体をワナワナと震わせていく。

『銀の福音』が停滞している今が好機である。これを逃すまいと代表候補生全員を集め、一気に決着を付けようと鈴音は考えていた。

一夏が倒されて泣きたいのは箒だけではない。彼女もまた、悲しみでどうにかなりそうだった。とても辛く、気を抜けば張り裂けそうな程に。

それでも、今だけは許されない。せめて任務を終わらせるまでは決して泣かないと決めていた。

なのになだ。目の前の狂人が、それを揺さぶる。ぐちゃぐちゃに引つ掻き回していく。折角恐怖を押し殺していたのに感情を逆撫でされてしまう。恐怖よりも——怒りが沸々と込み上げてくる。

「でも無理無理い。だつてさあ、織斑せんせいも堕ちたじゃん。誰も勝てないつてえ。アメリカに任せない? 元々は向こうの責任なんだしさあ。何でそこまで堕とすのに拘るのお?」

「……………」

「あれえ？ ま、さ、か、織斑君の敵討ちい？ アツハアツ！ ホント馬っ鹿じゃないのお!? それこそお前の我が儘——」

「——ツツツ!!!」

キレた。鈴音は遂にガチギレした。

彼女の手が反射的に動く。誰かが静止する前にその手は一直線に日葵の頬へと目掛けて——。

「——あれっ」

——それは当たらず。

「………いたっ」

鈴音の手はいつの間にか払い除けられていた。何故だか右頬がヒリヒリ痛み出す。手首も痛い。どうしてと疑問で満ち溢れて硬直してしまった。

そう、彼女は逆に平手打ちを受けていたのだ。動体視力が追い付かない程の速度で薙ぎ払われ、そこから流れる様に反撃された。

近くにいた筈のシャルロットも何が起きたのか理解出来なかった。それを捉える事が出来たのは——千冬ただ一人。

「………あのさあ」

「何——ひいつ?!?!」

言葉が詰まった。身動きが取れなかった。

得名状し体の知がれない、ど釋しす黒い何怪物かが睨いんでいた。

「新人風情の雑魚が随分と調子に乗りやがって。この私に齒向かうなんていい度胸だな」

『蛇に睨まれた蛙』ということわざがある。

非常に恐ろしいもの、逃げる事も手向かう事も出来ずに身体が竦んでしまう事の例え、である。今、正に鈴音はそれに当て嵌まっていた。

Another Sunday
この間の時とはまるで違う。これでもかと言う程に全力で見開いた光無き瞳で、殺意剥き出しで睨み付けている。目を逸らす事は出来ず、逃げる事も出来ず、気絶する事も許されない。

あまりにも強烈で凄惨な「負」の塊。眼力だけで人を殺してしまいそうなソレを目前にした鈴音は勿論、宥めようとしてたシャルロットも、周囲の人間も、千冬も息を止

めた。

「我が儘が許される立場じゃない？ 臆病者？ 何様だお前は。発破を掛けたつもりか？ なあ。癩癩起こすわ私闘するわにーにや私に怯えるわ。何自分の事棚に上げてんだ。お前の方が我が儘で臆病者だろうが。よくも代表候補生になれたな。あのドイツ人が言つてた事は正しかったか」

「っ……………」

「よく聞けよ中国人。ここに代表候補生の全員が出撃したとしてだ、その先を考えた事あるか？ 万が一仕留め切れず逃がしたらどうする、ここに向かって来たらどうする。いったいどーこの誰が防衛するんだよ？ 自衛隊か？ 国家代表か？ IS学園に応援要請でもしてみるか？ ただでさえ重要軍事機密つて爆弾を抱えてんのに大怪我した織斑君やにーにの事もあるんだぞ。もしバレたらどう説明するつもりだ、お前が責任取るのか？ 少しは考えろよ脳筋が。そんなんだから数だけの能無し国家なんて言われるんだよ」

「……………わ、私、達が、ぜ——」

「まさか全員で掛かればいけると思ってるか？ 根性があれば、仲間を信じれば強敵に勝てる？ スポコン精神を実戦に持ち込んでんじゃねえよ。じゃあどうする？ ここ先生の先生を駆り出すか？ 出せる訓練機なんて一機も余っていないのか。それなら篠

ノ之さんを引っ叩いて活を入れる？ 無理に決まってるね、アレじゃロクに戦えない。なら絶賛おねんね中の織斑君でも叩き起こす？ まあ出来ないしやろうともしないだろうけども。それとも……捕まってるにーに？ ……はあ？ IS無しでどうやって戦うんだ。手に負えないからIS取り上げて拘束しているんだろうが。やっぱり人手欲しいんでアレコレ理由付けて返すだなんて言わないよな、私達と一緒に戦ってくれだなんて言わないよな。なあどうなんだ、どうするんだ、答えろ。おい、人の話聞いてんのかくそつたれ。お前に、し、つ、も、ん、し、て、ん、だ、よ」

殺意の重圧、畳み掛ける言葉の暴力。反論など許さないソレは少女を徹底的に追い詰めていく。抗ったら最後、一瞬にして”死”を迎えてしまうと全員に錯覚させていく。誰しもが日葵を人として見れなくなっていた。今、そこにいるのは人語を話す——。「失せろ、目障りだ。お前達で勝手に戦ってる。私抜きで何とかしろよ」

——『怪物』だ。

「……いいい」

「はあ？ もう一回」

「もういい……！ あたし達だけでやる……！」

鈴音は日葵から逃げる選択肢を取った。

もう、無理だ。コレになんか立ち向かえない、逃げるしかない。でないで発狂してしまう。心が壊れてしまう。自分が自分でなくなってしまう。

ヘタレと言われても良い、臆病者と言われても良い、馬鹿にされようと罵られようと構わない。コレに歯向かつてはならない、二度と関わってはいけないと身を持って理解した。

彼女にしてはかなり奮闘した方であろう。すぐその『名状しがたい悍しい怪物』が自分自身を食い殺そうとする様に見えていたのだから。

「あつそ。……んもう、最初からそう言つてれば良いんだよ。せつかちさんなんだからあ」

豹変。

日葵から漏れ出していた殺意は嘘の様に消え、気がつけばいつもの満面の笑みに変わっていた。何なんだこの少女は。切り替わりが早過ぎる。

対する鈴音は今にも泣き出しそうな雰囲気だ。身体を小刻みに震わせ、唇をずっと噛んでいる。今は僅かな気力だけで耐えているのだろう。

「頑張つてねえ、私はお留守番してるからさあ。もしこつちに来た時は出てあげ、ら、か、ら」

完全に気分を良くした日葵は鼻歌を歌い始め、軽快にスキップしながら廊下へと向かっていく。誰一人として彼女を咎めようとはせず、寧ろ逆に距離を離していった。関われれば自分もやられる、そう直感が働いた故にだ。

「待て篠原!! 何処へ行く!?!」

「おトイレです。直ぐ戻りますねえ」

千冬の静止に振り向きもせず、日葵は部屋から出ていく。追い掛けようとする者は当然いない。静寂の空気の中、聞こえるのはエアコンの静かな駆動音のみであった。

「……はあっ」

全員が一気に脱力した。

緊張感も協調性の欠片も無い。深刻な事態でも率先して対処しようとはせず、かと思えば状況を充分に理解している。本当にわからなくなつた。日葵という人間が何を考えているのか。

わからない事と言えばもう一つ。何故、彼女は彼処まで出撃を拒否するのだろうか。ISの性能はトップクラス、実力もトップクラス。悔しいが、彼女一人でもこの作戦は簡単に終わるであろう。少なくとも千冬はそう認識している。

ちぐはぐ過ぎるのだ。誰だろうと構わず喧嘩を売る性格の癖に今作戦には一向に出たがらない。実力はあるのに大っぴらには見せびらかさない。大いなる権力を持つ人

間なのに振りかざした噂は今のところ一つも聞かない。

何を考えているのだ。目的は——何なのだ。

「ぐすつ……。うう……」

「恐かったね。辛かったね」

「あいつ、大っ嫌い……!!」

「あーよしよし」

「……………」

一先ず、日葵には期待しない方が賢明だ。今は現状打破が最優先である。その為には出撃可能な代表候補生達を集めなくては。

「……デュノア。オルコットとボーデヴィツヒにI.Sの調整が終わり次第作戦本部に戻るよう連絡を頼む。嵐が落ち着いてから次の作戦を立てるぞ」

「は、はいっ!」

これ以上失敗は許されはしない。何としてでも作戦を成功させなければ。

その一方で。

「フンフンフン♪」

廊下を一人歩く日葵。未だご機嫌の彼女は腕を後ろに組みながら軽快な足取りで目的の場所へと向かっていた。しかし、何か様子が変だ。

「フーンフーン……フーン……」

奏でる鼻歌は徐々に静かとなり、その足取りも進む度に次第に落ち着いていく。笑顔も少しずつ消えていき、そして遂に――。

「……………」

雰囲気が変わった。

いつもの張り付いたような笑顔は無い。時折と見せる無表情でも、先程見せた殺意全開な悍しい表情でもない。もう一つの顔が見えた。

それは険しい表情であった。眉間に皺を寄せ、眼球の動きだけで周囲を見渡し、組んでいた腕もいつの間にかほどき、姿勢もすらりとしていた。何処から見ても普段のしまりない彼女から想像が出来ない姿。別にセシリアの様に優雅ではない。言うなれば――

——『兵士』——。

身近な例えではラウラが最も近い。しかしだ、彼女の目付きはラウラの比ではない。幾度となく戦場を渡り、多くの死を見てきたかの様な冷たい瞳は見る者を別の意味で硬直させるであろう。

面構えが他の代表候補生とは訳が違い過ぎる。スポーツマンシップに則る者や国家公認アイドルとして活躍する者とは別世界の人間かに思える。たかが十五六歳の少女が、だ。本当に何者だ。

「……………」

歩く事、暫くして。廊下の向こう側から一人の着物姿の女将——景子が見えた。ここは旅館だ、いても何一つ不思議ではない。

女将は此方を見るなり丁寧にお辞儀をし、気品ある足取りで横を通り過ぎる——と思いきや。

「……………」

女将は日葵の真横で静止した。そして、彼女の耳元まで顔を近づけ——。

「……篠原様宛てのお荷物は例の場所に」

「ありがとう」

「いえいえ、そんな。まさか、貴女の様なお方がこの旅館を支援して下さいとは……」

「いーの、これからもよろしく。近い内に部下を連れてくるから、その時はうんと持て成してね」

「はい、勿論です。……今後も、花月荘を宜しくお願い致します」

囁く様に言葉を交わし、二人は再び歩き出す。日葵はそのまま近くの御手洗い——には行かず、奥へ奥へと進んでいく。更に進んでいき、遂には関係者以外立入禁止の廊下にまで入っていった。向かう先は——。

「……ふむ」

——従業員専用の御手洗い。

一般客が立ち入る事など一切と無いこの場所で日葵は何をしようというのか。

周囲を確認し、彼女は奥へ入っていくや否や、一直線に数ある内の扉の一つ——清掃道具入れの扉を押し開ける様に勢いよく開ける。そこは用を足す所ではないのだが何をするつもりなのか。

「見つけ」

そこにあつたのはブラシ、雑巾、青いバケツ、そして——一個のアルミケース。

明らかに場違い過ぎる物があつたが、どうやらこのケースがお目当てだつた模様。彼女はソレを取り出し、今度は別の扉を開けて中へと入つた。

「さて。……んしょ」

便座に座るなり、彼女はケースのロックキーに触れ、素早く解除していく。直ぐにカチリと音が響き、ゆつくりと開いて中を見つめた。

中身は無線機が一つだけ。だが、その無線機は市販されている特定小電力無線機ではない。

「……………」

それは軍用無線機だつた。彼女は無線機を所々弄りつつ付属のワイヤレスイヤホンを耳に掛け、まるでゲーム機に没頭するかのように弄り続ける。久し振りの操作なのかぎこちなく、手こずる度に段々と眉間の皺が増えて齒軋りまでしだす。

「あー……………こう、だっけ……………くそっ……………」

とにかく普通ではない。ラウラの様な軍人ならともかく、そういった経歴が無い彼女がこの様な無線機を使うなど。代表候補生ならばそういった訓練もあるかもしれないが何か違う気がする。

いや、誰もが知らないだけなのかもしれない。彼女が何者なのかを。

弄る事、約一分。漸く操作を思い出したのか、彼女は無線機を弄り終えて口元へと近

づける。

「オツケ。……あーあ、面倒だなあ。ホントもうやだあ。……こちらヴァルキリーBO、応答願う」

『……………』

「こちらヴァルキリーBO、応答願う」

『……………君か。四ヶ月振りだな』

「お久しぶりです、高官」

聞こえたのは機械音声。性別すら判断出来ない声は辺りを不気味にさせていった。相手は上司が故か、彼女の態度はIS学園では絶対に見掛けない珍しいものであった。

『この通信は非常時以外は使用するな、私は君にそう言った筈だが。君は今、臨海学校だろう？ 理由は何だ。私を納得させてみせろ』

「篠ノ之束が現れました」

『……………何だと？』

「それだけではありません。奴は最新型のISを、第四世代のISを妹の篠ノ之箒に与えました」

『……………』

沈黙。

淡々と発言する日葵に、相手は暫し沈黙した。十数秒程の時間が経ち、溜息の混じった声が再度発声される。

『なるほど。SNSの噂はデマではなかった、と。全く……やってくれたなあ的小姑娘……!!』

相手から感じたのは呆れと怒り。机でも叩いたのか、通信からは大きな物音が響いてくる。

束の出現は直ぐに拡散された。部屋で待機中の生徒がSNSで広め、今や世界中が目している。既に花月荘の周辺にはマスコミ共が働き蟻の如く群がっていた。ほとぼりは暫く冷めないだろう。

『毎度毎度……!! どれだけ大人を困らせれば気が済む——いや、待て』

突然、相手は冷静になった。彼女の報告に一つ疑問が浮かび上がったからだ。

確かに、三年間も失踪していた束が突如として現れたのはどの大スクープよりも遥かに大きい。我先にコンタクトを取ろうとする者は大勢いる。第四世代も同じく世間を騒がせるのには十二分。

しかし、この二つの情報は何れ公になるもの。今、情報を与えたところで何も意味は無いのだ。いちいち無線機を使う理由が無い。

目的はそこではない。別にある。

『態々この報告をする為……ではないようだな。君がそんな無駄な事をするとは思えん。では?』

『『月夜作戦』の凍結解除を要請します』

『……何故かね。今はそれどころではない筈だ』

『奴は『月長石』を狙っています。近い内に……いえ、直ぐにでも動くでしょう』

『……!! ……………』

今度は驚愕。相手はそれぞれの意味深な単語を理解しているのか、唸りが通信越しに聞こえる。何やらとことん悩んでいる様子であった。

が、それも直ぐに終わる。

「決して憶測ではありません、確信しています。もう野放しには出来ません。放つておけば更なる被害を被るかと。どうか」

『……そうか、我々は小娘を甘やかし過ぎたか。好き勝手させ過ぎたようだ。これ以上は危険か、はあつ。……それで、君の方はどうなんだ』

『はい、既に準備は整えています。ご決断を』

『……いいだろう、我々としてもこれ以上我慢は出来ん。マスコミ共は我々の方で対処する、君は存分に暴れたまえ。では、『月夜作戦』の凍結を現時刻をもって解除する。健闘を祈るぞ』

「了解、通信終了。……ヒヒッ」

通信を終え、無線機の電源を切る彼女は一気にほくそ笑む。これで目的に一步近づいたと。

準備は完了している、許可も下りた。あとは、行動を起こすだけだ。

「さーて、どう料理してやろうか——」

——その刹那。

!!!

いきなり彼女は身を屈め、個室から飛び出す。タイルを転がり回り、壁にぶつかると同時に即時体勢を立て直す。そこから瞬時にと胸元を大きく開け——拳銃を取り出して扉に向けて三発発砲、扉のど真ん中に命中した。

……!!!

狭いトイレに反響する銃声。しかめっ面で耳を押さえる彼女は扉から目を離さない。その個室は彼女以外何もいない筈だが——。

「駄目だよ、ひまちゃん。こんな所で拳銃なんてぶっぱしちやったら」

!!!

いた。

誰もいない筈の個室から聞こえる女性の一声。風穴が空いた扉は軋む音と共にゆつくりと開く。そこにいたのは、紛れもない奴が。

「クソ兎い……!!」

「……………」

そこに佇むのは天災——束。

一人しか入れやしない個室。間違ひなく弾丸は束の胸辺りを通った。しかし、当の本人は全くの無傷。彼女の足元には——潰れた三発の弾丸。

もうおわかりだろう。束に銃は通用しない。

「ッ!!」

それでも日葵は構わず発砲。一発の弾丸は束の眉間へと一直線に向かう——が。

「!」

直ぐに躲される。

二メートルも満たない至近距離。にも関わらず束は日葵の射撃を躲し、即座に懐へと入り込んで拳銃を抑える。

「うあつ!?!」

そこからの背負い投げに酷似した投げ飛ばしが日葵を襲う。彼女は宙に浮いてしま

い、そのまま窓際の壁に叩き付けられた。

「この……—っ!?!」

無駄だと理解しても再び銃を構える日葵。が、その拳銃はもう使い物にはならない。彼女の拳銃は回転式拳銃。よく見るとある筈の弾倉——シリンダーとバレルが無かった。

あの一瞬で銃を分解された。工具も使わずに。おまけに束の手には予備の弾薬も握られている。

ほんの一瞬。束は日葵を投げ飛ばしたと同時に拳銃を分解し、弾薬も全て掠めた。これでも束は本気など出していない、準備運動ですらない。

これが篠ノ之束だ、これが天災の強さなのだ。これこそが——『人類最高』。

「くそったれ——ぐうっ!?!」

日葵は体勢を建て直そうとするが、もう遅い。束に首を掴まれ、押さえ付けられた故に身動きが取れない。両足までも絡まれてしまった。

銃は効かない、格闘術も向こうが格上。ならば残された手段はISのみ——なのだ。

「……!?! 展開、出来ない……!?!」

「このトイレにちよこつと細工を、ね……!?! 音響を遮断するシールドも張ったから

外からじゃ何も聞こえない、よ………!!」

「この………!!」

道理で人が来ない訳だ。ここまで騒ぎがあれば誰かしら来るかと考えてはいたが、流石は天災。準備は万端だったという事か。

もう、日葵に出来る事は何も無い。幾ら強者の彼女であっても——生身では天災に勝てない。

「我慢してね………!! 外してあげるから………!! だから、だからあとの事は、任せて………!!」

「こ、の、クソ兔イイイイイツツツツツ!!」

直後。

「——うおっ!?!」

突然、束の目の前で凄まじい音が響き、同時に火花が散った。何かが衝突したのか、束の前方に一瞬だけシールドバリアーが浮かび、衝撃により後方へ軽く吹き飛んでしま

う。

予想外の出来事に束は驚愕した。何が起きたと周囲を見渡すと――。

「……!?!」

見えたのは、日葵の頭上に出来た二十ミリ程の歪な穴。足元に転がるのは銀色の尖った物体が。これの意味する事はたった一つ。

「狙撃……!! もうここに――」

その時、束の動きが止まった。

何故、束は動きを止めたのか。それは、日葵がいつの間にか持つ、ある代物に目がいつたから。

それは――手榴弾。束は止めようと接近するが一足遅かった。日葵は既にピンを抜いている。

「はいドツカン」

第五十三話

……ここは、何処だ？ 砂浜……？

——♪

……あれ？ 俺、何してたんだっけ……。

——♪ ♪

……？ 声が聞こえる……。歌……？

——♪ ♪ ……？ ああ、貴方は……。

……女の子……？ こんな所に一人……？

—— やあ。漸く……会えたね。

……誰……？ いや、違う。俺は……この子を知ってるぞ……？

—— 何て言えばいいかな、こういう時は……。ええつと……初めまして？

時刻、十三時十三分。

周囲は青一色。上は雲一つとて無い快晴、下は波の音だけが穏やかに聞こえる大海原。そして、その間の海上二百メートルにて静止する――。

『……………』

——『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』。

『……………』

胎児の様に踞り、その身体を守る様に頭部から伸びる銀色の金属翼——『シルバリオ・ゴスベル銀の鐘』が包む姿は神々しくも見える。

しかし、その実態は『敵を殲滅する為のIS』。競技とは真逆の目的によつて作られた『兵器』。決して公に出来ない、存在してはならない存在。

笑い話もいいところだ。ISはスポーツなんだ、兵器じゃないんだといった戯れ言等をほざく者を真つ向から全否定するISがここにいるのだから。

人々は言うであろう。これは単なる側面だと、間違つた使い方だと、本来は宇宙へ行く為だと。

詭弁だ。平和ボケした上つ面の綺麗事だ。

これこそが本来の在り方だ。『白騎士事件』がソレを証明し、立証した。開発した東本人ですら現行兵器を凌駕すると断言した。皆がその事実を目を背けているだけに過ぎない。己に都合の良い所だけを記憶し、美化しているだけに過ぎない。でなければ女性の過度な優遇は有り得なかった。男性に対する行き過ぎた虐待は有り得なかった。昨今の凶悪な性差別社会は有り得なかった。

最早、使い方どうこうの話では済まないのだ。別の物に置き換えた例など何の意味を持たない。程度の低い言葉の羅列など愚の骨頂である。

世界のパワーバランスをゴツゴツり変え、現在の差別社会を作り上げた元凶はISだ。それなのに、世間が選んだのは糾弾ではなく心酔。狂信の域に達した者もいる。愚かと言わず何と言うのか。

何故、ISは競技として扱った？ 何故、男性の人権を侵害してまで女性に特別な待遇をする？ 何故、各国は一機でも多くISを欲しがる？

——恐れているからだ。

もしも、他国がISで攻めてきたらどうする？ ISを用いてテロや国家転覆等を企

てられたら？　そういった時に——ISが少なかったら？

答えなど最初から出ている。宇宙だの競技だの自国の防衛だの、その様な取り繕った上辺だけの言葉を幾ら並べたところで無駄だ。

誰がどう主張しようと反論しようと、根本的なモノは絶対に変えられはしない。故に理解せよ。

——ISは『究極の機動兵器』であると。

『……？』

ふと、『銀の福音』は顔を上げた。その視線の先には何もいない——が。

『——ッ!』

——直後、何かが頭部を直撃した。轟音と共に衝撃が襲い掛かり、爆炎に飲み込まれた。

『敵機確認、排除行動へ移行』

しかし、それも一瞬。無機質な機械音声と共に爆炎は衝撃波によって一気に掻き消さ

れ、ソレを生み出した『銀の福音』は一切と脇目も振らずにある場所へと爆速で一直線。その先、約五キロ。そこにいるのは――。

「こちらボーデヴィツヒ!! 目標に命中!! 攻撃を続行する!!」

『こちら本部了解。……頼んだぞ』

「了解!!」

空中にぽつりと目立つ漆黒のIS。そのISを纏う銀髪の小さき操縦者――ラウラが一人。この場に彼女がいる理由はただ一つ。

「そうだ、来い。こっちに来い……!!」

――『銀の福音』の撃墜。

「食らえっ!!」

ラウラは急速接近してくる『銀の福音』に怯む事なく声高らかに攻撃を放った。両肩の大砲で。

――砲戦換装装備『パンツァー・カノーニア』――。

通常の装備とは大きく異なり、レールカノンを二門。更には遠距離からの砲撃、狙撃対策として四枚の分厚い実体シールドが左右と正面。そして反動対策の為に両脚に展

開した巨大なアイゼン。P. I. Cの応用により空中で完全に固定されていた。

これにて、『シユヴァルツエア・レーゲン』は完璧な砲戦仕様となっていた。基本装備である『リボルバーカノン』より単発の火力は低いが、二門に増えた事で攻撃能力は単純に増加した。

増加した、のだが――。

「ちいつー！」

『銀の福音』にはあまり関係なかった模様。

銃身が焼き切れる勢いで連射はしてるものの、全く当たらない。躲され、撃ち落とされ、合間に無数のエネルギー弾が飛んで被弾してしまう。

盾のお陰で機体にダメージは入らない。だが、それも長くは続かないだろう。止まないう爆発音と機体からの警告がラウラの焦りを煽り立てる。

――敵機急速接近、回避せよ――。

――シールド耐久値、80%、70%、60%――。

(四千……三千……駄目だ！ 予想より速い！)

瞬く間に距離は千メートルを切り、銀色の腕がラウラの首に迫り来る。躲そうにも機体のP. I. Cは装備の仕様上、反動相殺に割り振った。機動力を捨てた故に普段の動きは出来やしない。

対する相手は機動力に特化したISだ。此方とは月とすつぽんの差である。故に回避は不可能。

「ああつくそつ!!」

ダメ押しと言わんばかりに『銀の福音』は残り三百メートルから急加速。その腕をラウラの首に向けて――。

「馬鹿め」

『――つ!?!』

――その腕は届かず。

突如、上空から一本の蒼い光が『銀の福音』の腕を弾き、それに続く様に蒼い光が降り注いだ。次々に受け続ける『銀の福音』は連続した閃光に耐えられず、遂に落下していった。

「正直今のは危なかったな。よくやった、流星はイギリス代表候補」

『お喋りしてる暇はなくてよ!!』

ラウラが上空を見上げると、遙か上空に一機のIS――『ブルー・ティアーズ』を纏うセシリア。潜伏モードで潜んでいた彼女は直ぐ攻撃に一転、落下する『銀の福音』に追撃を仕掛ける。

彼女もまた、ラウラと同じ理由でここにいる。暴走した軍用ISを撃墜する為に。

「墮ちなさいっ!!」

——八十口径特殊レーザーライフル『スター・ダストシューター』——。

換装装備によりビットが使用出来ない代わりに用意された大型のレーザーライフルはセシリアの失った火力を充分に補っていた。

特殊兵装が使えない？ なら培った射撃能力と操縦技術を駆使すれば良いだけだ、問題は無い。手段がほんの一つ潰れたところで遣り様はある。でなければ何の為の国家代表候補か。

それに、この程度の困難を乗り越えられないで自国を護れるものか、家を護れるものか、誇りを護れるものか、己を護れるものか。

これは”我欲”ではない。これは——”大義”だ。

『敵機確認。敵機Bと識別』

「追撃っ!!」

「言われなくともっ!!」

IS二機による怒涛の同時攻撃。海面へと落ちる『銀の福音』にレーザーと砲弾が途切れる事なく襲い掛かる。体勢を崩した状態で二方向から来る攻撃は一溜りもない筈である。

だが、流石は軍用ISであろうか。最初こそ多く被弾してはいたが、その状況で体勢

を立て直して回避と同時に迎撃し始めた。双方の間では爆発が立て続けに起き、最早ハイパーセンサー無しでは互いを視認出来ない程の巨大爆炎が出来上がる。試合ではお目に掛かれない地獄絵図と化した。

埒が明かない。そうと判断した『銀の福音』は海面スレスレに差し掛かった直後に大きく離脱、海を背にしたまま空高く位置するセシリアだけに集中、狙いを定めていく。

「!」

『敵機B、最優先で排除——』

撃墜に来たのは二人だけではない。

「待ってた!!」

『——ッ?!?!?』

今度は散弾が襲い掛かる。気がつけば、頭上に銃口を向ける一機のISがいた。

その正体はショットガン二丁を向ける燈色たるIS——『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』を装着するシャルロット。潜伏モードにて接近、二人に気を取られてる隙に至近距離射撃。時間差攻撃は『銀の福音』を怯ませる事に成功した。

『敵機確認』

が、しかし。これも大したダメージにならず。直ぐ様に反撃され、シャルロットは回避出来ずに数多なるエネルギー弾の餌食になる。

「うわあああああつつつ?!?!?!」

と、見せ掛けてからの――。

「――つて食らうかあつつつ!!!」

『――ツ?!?!』

容赦無し!の強烈な不意打ちが炸裂する。

シャルロットはエネルギー弾に吹き飛ばされる事なく、逆に押し切り『銀の福音』へ更に接近。最大の攻撃力を誇る盾殺し――『灰色の鱗殻』グレイスケールを全力で腹部へと放つ。シールドバリアーを軽々と貫通し、モロに直撃させて吹き飛ばした。相手は急激たる衝撃に対応出来ず、コントロールを失い出鱈目な軌道を描いて墜落していく。

垂直落下ではなく角度が浅い斜めからの落下。しかもスラストにより加速した状態。つまり、海に沈下せず――。

『——ゴツ?!?!?』

——激突する。

『銀の福音』は叩き付けられたかの様に跳ね、破片を撒き散らしながら石の水切りの様に不様な格好で跳ね転がっていく。結構酷い絵面だった。

だが、未だに動ける模様。数十メートル跳ねた所で漸く体勢を立て直して海面に立つ。心なしか動きが鈍く見える。流石に効いたか。

『敵機Cと識……別。操縦者にダメージを確認。脅…威』

「フーツ……。この『ガーデン・カーテン』は、ちよつとやそつとじゃ崩れない、よっ!!」

——防御換装装備『ガーデン・カーテン』——。

至近距離で反撃を受けたシャルロットは無傷。それもその筈、今の彼女は二枚の実体シールドと二枚のエネルギーシールド、計四枚のシールドがカーテンの様に正面を遮っていた。隆道の盾より比較的貧弱には見えるが、それでもフランス製の中では最大の防御能力である。余程の攻撃でない限り彼女に一切と届きはしない。

「に、が、さ、ないっ!!」

そして、ここからはシャルロットが得意とする瞬時換装——『高速切替』ラピッドスイッチが猛威を振るい出す。

ブレード、ショットガン、ヘビーマシンガン、アサルトカノンを次々に切り替え、そ

れと同時に交戦距離も不規則に変えて一切の暇を与えない。彼女自身が持つ才能、器用さを最大限に活かした戦術——『砂漠の逃げ水』ミラージュ・エスケイプで相手を追い詰める。反撃されようと関係無い。攻撃の手を緩めない、緩める訳にはいかなのである。その鋼の意志が彼女を奮い立たせていた。

『被弾率上昇、回避行動を優先。敵機の危険度を更新、排除行動は困難と推定』

遠距離から高出力レーザー、中距離から砲弾、不規則距離から斬撃と弾丸。三機からの止まない怒涛の攻撃に『銀の福音』は被弾が増え、徐々に消耗していく。数分前まで疵一つすらも無かった光沢感ある装甲は少々の罅が入り、全身に紫電が目立ち始めていく。

「動きが鈍くなった!! 畳み掛けろおっ!!」

「当然っ!!」

爆発音が鳴り止まない。硝煙が全く消えない。空薬莖が常に宙を舞う。水柱が立て続けに立つ。衝撃波で水飛沫が高く飛び続ける。双方の弾雨は穏やかであった海を荒れ狂う海へと変えていく。

ここで手を止める訳にはいかない。彼女達には次など無いのだ。逃がさない、確実に仕留める、ここで決着を付ける。その意思は更に固くなり、三人が繰り出す攻撃は激化する。『銀の福音』も負けじと弾幕を増やしていき、辺りの海は災害を彷彿とさせるレベ

ルで猛烈に時化ていく。

『優先順位変更。現空域からの離脱を最優先』

ここから『銀の福音』は必死に離脱を試みる。速度を飛躍的に上げ、更に特殊兵装を最大稼働。全方向へエネルギー弾を撒き散らし好機を伺う。

必死なのは彼女達も同じ。心底嫌になる弾幕の隙間を掻い潜りながら相手の行動を常に予測し、それ等全てを迅速且つ確実に潰していく。軌道を遮断し、誘導し、時に攻撃を仕掛ける。彼女達は死に物狂いで相手に喰らい付いていく。

『また速くなっただど?! くそつ、感度を更にも上げろ!! 私はもう少しで弾切れになる!! 再装填の時間をくれ!! 三秒だ!! それまでインディアからリマを頼む!! 相手の攻撃力も跳ね上がった!! 絶対に当たるな!!』

『お任せにな——ちよ、まつ、シャルさん!! ブラヴォー警戒つ!! ブラヴォー警戒つ!! いやあブラヴォー警戒いいいいつつつ!!』

『う、わ、あああああああつつつ!!! よし追い付——あ違う違うホテル!! ホテルに制圧射撃!! 次はチャーリーからエコー!! 軌道予測更新!! フェイントを考慮して!! もーっ!! 攻撃が激し過ぎるってばあつ!! あああまずい回避回避いつ!!』

『『あああああああつつつ!!!』』

うるさかった。

これ以上無いと思わせる、息もつかせぬ通信。一秒も経たない内に状況は二転三転してしまふ。レーザーと砲弾と弾丸とエネルギー弾が間断なく飛び交う。今となつては何が起きているのかすら検討も付かない荒れ具合である。

状況は激しくとなるも展開は一向に変わらぬ。しかし、戦況を見ている作戦本部の間は下手に指示など出せない。彼女達とは見えているものが圧倒的に違い過ぎるから。超高度設定したハイパーセンサーは使用者の感覚を鋭敏化させ、情報処理を格段に向上する。ソレがあるからこそISの高速戦闘に対応可能だ。なら、その恩恵を受けていない人間はどうか。

愚問でしかない。生身の人間が見えているのは高速戦闘そのもの。目まぐるしい戦闘の把握すら追い付かない人間がどうやって指示を出すのか。千冬ならISが無くとも把握出来るかもしれないが指示となれば話は別。何れ程的確な指示だろうと状況が劇的に変わるのであれば意味は全く無い。反つて混乱を招く事態となつてしまふ。

千冬を始め、教員達は見守る事しか出来ない。事態の解決は彼女達に懸かっているのだ。

だがここで――。

「アルファアアアツツ!!」

「!!」

状況は変わる。

ヒューマンエラーか、避けられなかった事か。激しい弾雨の中に一瞬だけ生まれた僅かな隙間。それを見逃しはしなかった『銀の福音』は被弾を顧みず全スラストを解放、強行突破を図った。

妨害しようにも一足遅かった。牽制に怯まず、被弾に怯まず、何しても怯まず。全力を尽くした攻撃は少しも意味を成さなかった。

「——」

距離間がぐんぐん離れていく。止められない。感覚が鋭敏化された彼女達の脳内に浮かんだのは『失敗』の文字——。

「掛かった」

——ではなく『成功』。

「!!」

突然、『銀の福音』の真正面で海面が大きくと膨れ上がり爆ぜた。そこから飛び出すの

は二本の赤黒色せつくしよくたる腕。その腕は急停止は愚か、急旋回も間に合わない『銀の福音』の両肩を強く掴んだ。一直線だった軌道は大きく曲がり上昇、掴む者の手は放すまいと更に強くなっていく。

その者、やたらと攻撃的な装甲で固め、両肩の横に球体が特徴的な特殊兵装を備える I S。

その I S、『甲龍』なり。その操縦者——。

「やつと……やつと掴まえた……！ あたしが、あたしがこの為にどれだけ我慢したか……!!」

『敵機——』

——風鈴音なり。

”待”^まってたわこの”瞬間”^{とき}をおつつつ!!」

『——ツツツ?!?!』

怒声と共に炸裂するは『龍砲』の零距离射撃。防御も回避も不可能であるソレを『銀の福音』はモロに受ける。三人を散々苦しめた『銀の鐘』に負けず劣らずの炎弾が一斉に降り注ぐ。

——機能増幅換装装備『崩山』——。

増設された二門の衝撃砲。本来の不可視砲弾は炎を纏う砲弾に切り替わっていた。

炎弾を放つ計四門の衝撃砲。更に、その炎弾は広範囲へと拡散する——所謂『熱拡散衝撃砲』。不可視砲弾は失ったものの、代わりとして格段に増強した破壊力を手に入れていた。

しかしこの零距离射撃、相手は勿論だが自分もダメージが入ってしまう。エネルギーは消耗し、装甲も損傷が激しくなっていく。それでも攻撃を止めないのは彼女なりの覚悟の現れ。

倒す、絶対に倒す、何としてでも倒してやる。三人が作り上げたチャンスを無駄にはしない。

『敵キ……Dと、シキ別』

「！」

『離脱……離脱離脱離脱離脱離脱』

が、それでも——まだ機能停止せず。

攻撃を受け続ける『銀の福音』は未だに動く。どうか鈴音を振りほどこうと無茶苦茶な飛行で縦横無尽に暴れ始めた。彼女も逃がすまいと手を放さないが、このままではジリ貧だ。何れにせよ振り落とされてしまう。

相手が墜ちるか彼女が墜ちるか。軍用ではない『甲龍』が先に限界が来る可能性が濃い——が。

「ああっ……もう……!!」

『離脱離脱離脱離脱離ダ——』

「うっさいっつっ!!」

『——ツツツツ!!』

その前に鈴音の拳が飛んだ。

近接格闘型ならではの圧倒的なパワーの打撃が逃げようと暴れ回る『銀の福音』の顔を直撃。重く鈍い轟音が響き、直後に殴打とは別の衝撃が追撃を与える。

一度の打撃で二連続の衝撃。頭部にダメージが入ったからかスラストターの出力が弱まってきた。動きもかなり鈍くなっている。これは好機と見た彼女は両脚を腰に絡めて完全に固定、両腕で畳み掛ける。

これは私怨ではない。全ては任務の為。

「そらあっ!!」

『——ツ!』

「何が軍用よ! 何が暴走よ! 全部、アンタのせい!! アンタが!! アンタがあ!!」

『——ツ!! ——ツ!! ——ツツツ!!』

『……り、り……』

「まだ欲しい!? しよーつがないわねえ!! だったらとびつきりのあげちゃう!!」

最早楽しくて仕方がないのだろう。鈴音の顔は日葵の様に満面の笑みを浮かべていた。

歯を食い縛り、鋼鉄の拳を大きく振りかぶる。頭部に接続された銀翼——『銀の鐘』を掴んで。力の限り拳を握り締め、狙うのは再び顔面。

「あたしの全力……! とくと……!!」

『……り——』

「味わええええつつつ!!」

『——ダツツ』

鈴音の強烈なストレートが顔面に入った。

遂に終わりか。殴打と衝撃の二連続なる攻撃は忌々しい『銀の鐘』の片方を千切り、当の本体は凄まじい速度で墜落していく。その勢いは体勢の立て直しなど一切許されず、海に叩き付けられて巨大な水柱が出来上がった。

「ふーっ! ……どーよ? 小型衝撃砲の味は。普段はブレード持つから全然使わないのよねえ」

——腕部衝撃砲『崩拳』——。

腕をチラつかせる鈴音はご満悦の様子。

これが謎の衝撃の正体だ。『甲龍』の両腕部に搭載した小型の衝撃砲を殴打とほぼ同時に放つ。小型故に『龍砲』より威力は低く射程も短い、今回に関してはあまり関係の無い話だった。

単体だけであればそれ程大した代物ではない。衝撃砲は『龍砲』だけで充分である。近接攻撃も使い慣れたブレード——『双天牙月』で良い。

だが、拳が届く程の距離ならばコレの出番だ。殴りとのセットで使うのは初めてであったが予想以上の破壊力を出せた。今後も使っていこうと、彼女は頭の片隅に入れておく事にした。

兎に角、これで終わり——。

「「「……………」」」

四人の視線は一点に集中していた。その一点は『銀の福音』が墜落した海面。

「……………全員、今の内に武装チェックを済ませろ。エネルギーが半分以下の者は？」

「わたくしは……………まだまだですよ」

「僕も、十分……………。だけど盾が結構酷い、かな。実体シールドの耐久値は五分の一ぐらい。多分、次受けたら壊れる」

「あたしのは見てわかるでしょ？ エネルギーはあるけど装甲がダメね。ま、別に問題

無いけど。例のアレ、もう使っとく？」

「ふむ……そうだな、出し惜しみは一切無しだ。一本使うとしよう」

そう言うなり、ラウラは『何か』を展開した。それに続いて他の三人も同じく『何か』を展開、武装ではない物体が手の平に現れる。ソレを確認するなり全員が同時に腕部へ打ち込む。

するとどうだろうか。各機体の破損した装甲は元通りに近いものとなり、エネルギーが急速回復するではないか。

「本当に大助かりですわ、コレ。わたくしの為にある様な物ではなくって？」

「そういやレーザーライフルも充填するんだね。良いなあ、僕のは全部実弾系統だし羨ましいよ。今度会社に聞いてみようかな」

「うーわ、装甲の修復早っ。これ大丈夫よね？ 副作用無いよね？ なんか逆に恐いんだけど」

「システムに問題は無し。本当に素晴らしいな、早く採用して欲しいものだ」

注射器に見える『ソレ』は四機のエネルギーを満タンにし、装甲を大幅に修復していった。

一ヶ月前を覚えているであろうか。『灰鋼』が作り上げた回復装置を研究所に調査させた事を。その結果、量産も改良も可能だという事を。

逸早く量産と改良を同時に成功したのは日本。充填装置が充実していない臨海学校で役に立つと見越して送った——新型のエネルギー回復装置。

——『リカバリーショットグレートG』——。

これにて準備万端。出撃前と同じ——とまではいかないが全然戦える。再びダメージを受けても問題無い、数はしこたまある。あまり頼り過ぎも良くはないが。尚更のこと、今の彼女達に油断と慢心は一切と無い。

卑怯だと思ふな。これは試合ではなく実戦だ。力の限り戦え、手段を選ばな、情けを掛けるな。それこそが誰一人失わずに勝てる唯一の近道だ。

「嵐、いつまでソレを持っているつもりだ」

「ん？ ああ、コレ？ ほいっと！」

鈴音はもぎ取った片方の『銀の鐘』を高く放り投げて最大出力の衝撃砲を放つ。既にポロポロのソレは大爆発、木っ端微塵となった。他国のISを壊すな？ 知ったことではない。碌にISの管理も出来ない国が悪いのだ。

「さーで、スツキリした所で……ねえ？」

言うが早いのか、鈴音の衝撃砲が爆炎を吹いた。炎弾の向かう先は先程から見据えてい

る海面へ。着弾直後、莫大な爆発と共に水柱が立ち――。

「何こそそこそ逃げようとしてんのよ、この馬鹿」

水柱の先端辺りに影。衝撃砲で打ち上げられたソレは落下せず中天で静止する。海水が落ち、その姿を露にした途端に彼女達四人が感じたのは――無機質且つ明確な『敵意』。

『……敵機危険度、S二更新。離脱不可能ト判断。優先順位ヘンコウ。テキキノ排除ヲ最優先』

「ふんっ、機械の癖に随分とお怒りのようだな。それは我々も同じだ、機械仕掛けの墮天使め」

『敵』はまだ墜ちていない。

「はあ………？ 死了」

「日本語喋ってくれませんこと？」

任務は終わらず。ならば、やるべき事は一つ。

「皆、ここからが本番だよ。今度こそ……」

『……敵機を排除します敵機を排除します敵機を排除します排除排除ハイジヨハイジヨハイジヨ』

「『墜とすつつつ!!!』」

数分前――。

『銀の福音』との交戦直前。花月荘、教員室。

「地震？」

教員室に居座る菜月は些細な違和感を覚えた。

体感的に震度一かそれに満たない小さな振動。それもほんの一瞬だけ。地震にしては短過ぎる。今のは一体何なのだ。

直ぐ携帯を確認したが地震速報は出てこない。少しばかり待っても何の情報も出や

しなかった。やはり気のせいなのだろうか。

「……はあつ」

いや、気のせいに違いない。

気を張り過ぎたか。この重く苦しい空気の中、常に神経を尖らせたのだからおかしくなつたか。

それも仕方がなかつた事。そうでもしなければ文字通りに気が狂うところであつた。今も正気でいられる自分を褒めてやりたい。盛大にビールをぶっかけて祝つてやりたい。

「……………」

「……………」

視線を真正面に向けると真耶の姿。両手で顔を覆い、大きく背を曲げていた。手から溢れ出す、滴る透明な液体。指と指の隙間から僅かに見える——酷く、そして激しく揺らいだ瞳。

（無理も無いわね……）

真耶は真面目だ。だからこそ、隆道の凄まじい憎悪を真つ向から全て受け止めてしまった。

ISを否定されて、耐えた。自身を否定されても耐えられた。信念を否定され、それで

も耐えた。

そろそろ限界が近くなった。

軍用 I S の存在が、真耶の信念に罅を入れた。

そこからは脆かった。隆道の怨気えんきしやうてん衝天を込めた鉄杭が真耶の信念という壁を力任せに突き続け、そして遂に穴を開けてしまった。

そうなってしまえば後は芋蔓式である。今まで培った経験全てを悲観的に考え始め、最終的には自分自身の存在すら悪い方ばかり考えてしまう心の病——鬱病の一步手前。

甘くみられがちだが、心の病というのは非常に厄介な病気だ。外見では判断出来ず、周囲からは根性が足りないやる気が無いただ甘えてるだけと無責任な事を言われる。その言葉が病気に拍車を掛けているとも知らずに。その言葉が相手を崖に追い詰めるとも知らずに。

周りからは理解されない。もしかして、自分が我が儘なだけなのかと更に自分自身を非難する。自力で立ち直れても何かの拍子にまた自分自身を非難する。それが延々と繰り返される。最終的に自分が全て悪いという最悪の結論に辿り着く。

——あの時、生徒の出撃に反対していれば。

——あの時、鎮圧に出撃していれば。

——あの時、生徒の為と余計な事をしたから。

——あの時、何もせずに生徒に頼ったから。

——あの時、揉め事を止めなかったから。

真耶の思考に負の連鎖が生まれ始めていた。

過去を掘り返し、自分が悪い様に結論付ける。これが悪化して彼女が己を否定したらおしまい、何も行動に起こせない鬱病の道を歩んでしまう。否定して、否定して、否定し続けた先に待つのは廃人という暗い人生。明るい人生は遠退く。

彼女はまだ壊れてはいない。綻びかけた精神を辛うじて支えているのは彼女が持つ”芯”の強さ。それが正気と狂気との狭間に留まっているのだ。それもいつまで持つ

のか定かではないが。

「山田先生、織斑先生には私から言っておくから少し休憩しなさい。疲れたでしょう」

「……疲れてません。私は大丈夫ですから」

「……そう」

明らかに大丈夫ではないと菜月は思うのだが、あまり追及はせずそつとしておく事にした。

このままでは些細な事で壊れてしまうだろう。彼女を少しでも休ませるべきなのは百も承知だ。しかし、ここで無理を言えば拗れて終わるだけ。状況が状況だけに余計な争いを避けるしか道は残されていなかった。

「「……………」」

デリケートな問題がまた一つ増えてしまった。一体どうすれば良い。解決すべき問題は一つも解決していないのに。考えるだけで気が滅入るし頭痛もしてしまうと、彼女は目頭を押さえる。

まるつきり会話は無く時間だけが過ぎていく。一分一分が随分長く感じる。暇潰しは出来ない、誰かと会話も出来ない、居心地悪い、凄く辛い。

向こうは何か進展があっただろうか。それとも作戦終了間際なのか。一刻も早く報告が欲しい。せめてコレだけは解決してくれと願う最中――。

「?。」

「……………」

不意に、扉をノックする音が聞こえた。菜月は直ぐソレに反応し、少々遅れて真耶も反応する。隆道も気づいたが当然無視を貫く。

誰だ? 教員か? それとも旅館の従業員か?

「失礼します。御食事を御用意致しました」

「あ、はい。ありがとうございます」

その声は一人の女性であった。どうやら食事を持ってきてくれた模様。菜月は立ち上がり、扉へ向かう。一つの不可解な点を浮かべて。

(さっき持ってきたばかりなのに?)

隆道の昼食を持ってきたのは一時間前になる。彼の分はまず有り得ない。では自分の分か? 誰かが気を利かせて頼んだのか? 一体誰が?

「(苦労様です。今——)」

菜月は錠に触れる手前で静止、一呼吸置く。

隆道の食事を運んでくれた時は何も無かった。が、疑問を持ったが故に考えれば考える程不安に駆られてしまい止まらざるを得なかった。本当に扉の先にいるのは花月荘の従業員なのか?

疑いたくはない。けれども、ここ最近で起きた悪意の連続を見たが故に自然に警戒してしまう。そんな自分に心底嫌気が差しながらも、一度だけ声を掛ける事にした。

彼女は祈る。自分達に食事を運んできただけ。杞憂だ、そうに違いない、そうであつて欲しい、これ以上は勘弁してくれ、ストレスは沢山だ。

「あーすみません、食事はそこに置いて下さい。今はちよつと手が放せないのです……」

「……………」

反応が無い。聞こえなかったのだろうか。

「? あの——」

『開けて下さい』

「——」

ゾツとした。

その声は人のモノではなかった。遠くからではわからなかったが近くならばつきりとわかる。

——機械音声だ。

菜月は恐る恐る静かに後退しながら麻醉銃とは別の銃——実弾系の拳銃を抜いた。真耶も異常を察知、おもむろに拳銃を取り出して警戒。隆道も何かを感じてだるそうに立ち上がり扉を覗む。

間違いない。扉の向こうは——新たな襲撃者。

「またコレか……。つたくい加減にしろよ、襲撃はもう飽きたつーの……」
「静かにつ。向こうに下がってください……」

「本当に、本当に本当に最悪う。当たっちゃったじゃないのよお……」

此方が扉を開けるのを待っていた。それは即ち油断を誘ったという事だ。もし、何も警戒せずに開けていたらどうなっていたことか。

またしても襲撃者。早く応援を呼ばなければと直ぐ様携帯を取り出すのだが——。

「……!!」

——『通信サービスはありません』——。

——電波は繋がらず。

「何でなのよ……!! 山田先生の携帯は!? 無線機は!? ノートPCは!? 柳君のは!?」

「…………。全部……全部駄目ですううう……」

「てめえらが機密だの漏洩防止だの何だの言つて携帯没収したんだろうが。持つてる訳ねえだろ、この馬鹿が……」

「ああ、やられたあ……」

菜月は心底と絶望した。

隆道は拘束で自由に動けず、応援を呼べないが故に戦力は拳銃持ちの菜月と真耶の二名。対して相手の戦力は全くと不明、ダメ押しに通信妨害。

偶然が重なったのでは断じて無い。間違いなく目的は隆道だ。隆道を——殺しに来たのだ。

比較にもならない、言い様の無い恐怖が全身を襲う。やけに静かなのが余計に恐怖を煽る。

いや、静か過ぎる。何だこの異様な静けさは。突入してこないのは何故なのだ。逆に不自然だ。

と、その時。更なる異様を目の当たりにする。

『アケテ』

『!?!?』

『アケテ、アケテ』

『!?!?』

——ドンドンドンドンドンドンドンドンド。

『アケテ、アケテ、アケテ、アケテ、アケテ』

もうずっとコレ。頭がおかしくなる。

両耳を塞ぎたくなる騒音が部屋を埋め尽くす。ホラーの類いにあまり耐性が付いていない真耶はメンタルブレイク寸前のもあつて気絶しそうだ。菜月も得体の知れない存在に恐れ、隆道も流石に呑気にしてられず気味が悪過ぎると焦り始めた。

「……!! おいもうコレ外せよ!! 拘束だの何だの言つてる場合じゃねえだろ今は!!」

「い、今出——無い!? ……いやああああ鍵は本部ですごめんなさいいいつつつ!!!」

「? ……はあああああつつつ? 何してくれてんだてめえはあああつつつ!!! 予備

!! 予備は!!」

「ご、ごめんなさいね柳君……。予備は織斑先生持ちなの……。銃で壊そうとは考えたけども……。こんな銃じゃチェーンは、無理……。寧ろ絶対に跳弾するから逆に危ないわ

……」

「てめ、この、本当、マジでぶぎけつ……。!!」

焦った。それはもう酷く焦った。

隆道は己の行き着く末路に覚悟を決めていた。だからこそ、襲撃が来ても何とも思わ

なかった。しかし、こんな展開など少しも予想していない。訳わからない存在に殺されるのは流石に御免だ。

人は得体の知れない存在に対して恐怖を抱く。恐れを知らない青年も決して例外ではなかった。というより、こんな時にまでうっかりとか本当にふざけてるのか、この女は。いい加減にしろ。

人力で解くのは不可。手錠だけならばまだしも特殊ファイバーロープは幾ら怪力でも壊れない。チェーンも銃が無理なら人力は尚更である。

発砲しまくって危険を知らせるか？ 駄目だ。知らせたところで応援が来る前にサヨナラする。応戦中に弾切れになったら目も当てられない。

ならば窓から逃げるか？ 無理な話だ。歩行が限界なのにどうやって逃げろと言うのだ。確実に追いつかれて御陀仏になるだけである。詰んだ。

「……………あ？」

「……………？」

急に音が止んだ。

機械音声は消え、扉を叩く音もしなくなつた。ドアノブも回らなくなつた。もしや諦めたのか。

「……………!?」

全然そんな事はなかった。

金属が擦れる音と共にドアノブとラッチ間から刃渡り三十センチはあろう刃が飛び出してきた。何れ程の切れ味なのか、貫通だけで扉の金属部がバターの如く切断されてしまい鍵を破壊される。施錠は意味を成さなくなった。もうおしまいだ。腹を括るしかないのか。

「あー、くそつたれ……」

刃が戻っていき、ドアノブがゆっくりと回り、扉が軋む音を立てて開いた。完全にホラー映画と化した光景に三人は全くと目を逸らせずに固睡を飲み込む。大袈裟に言う
と固睡ガブ飲みである。

何が出てくる。ゴリゴリに装備を固めまくった特殊部隊か、頭が相当おかしくなった
気狂いか。それとも——本当に心霊の類いなのであろうか。せめて特殊部隊であつて
くれと切に願う。

そうこうと考えている内、遂に扉は全開する。そこには——。

「はっ。」

「ええ？」

誰もいない。

「「「「」」」」」

全員が肩透かしを食らった気分になった。

油断させる為かと二人は銃を構えたまま警戒を解かないが、いつまで経っても誰も出てこない。

「……出てこねえぞ。どうすんだお二人さ——」

——その時。

「あっ！」

それは突然の事だった。

菜月が構える拳銃に何かしら当たった様な謎の軽い衝撃が襲い、そのまま引っ張られてしまう。謎の強い力を前に思わず拳銃を手離してしまい、ソレは宙を舞って——入り口辺りで停止する。

「な、何、それ……?？」

驚愕はここで終わらない。

空間に固定された一丁の拳銃。誰もいないのに弾倉が外れ、スライドが動き、最後はスムーズに分解されて辺りに散らばっていく。

あまりにも唐突で不可解過ぎる光景。凄まじく絶句ものだが、三人はその正体を即理

解した。

「光学迷彩——!?」

「——がつつつ?!?!?!」

「!?!」

が、それも束の間。いきなり隆道が仰け反る。大きくよろめき、倒れ込んで躓き苦しみだした。まさか、敵の攻撃を受けてしまったのか。

「撃つてえっ!!」

「ッ!!」

菜月の叫びに応えて真耶は連続発砲。爆発音が部屋に反響し、弾丸は真っ直ぐに入り口へ集束。姿が見えない故に当たらないと思われるが、多少牽制にはなる——。

「えっ……」

弾丸は数発当たった。いや、弾かれた。

当たった数に比例して飛び散る火花。硬物質に当たって跳ね返ったかのような高い金属音。それはまるで『装甲車』を撃った様な手応え。

その際に一瞬だけ見えた。襲撃者の姿形が。

ソレは『人』ではなかった。

身の丈が低く、やけに角張ったシルエツト。

ソレは——『四本脚の何か』。

「きゃっ!」

残念ながら二人に絶句する暇は少しも無い。

今度は真耶の拳銃が謎の引力によつて奪われて分解される。僅か数秒で二人の拳銃はオシヤカ、殺傷力の無い麻醉銃だけが残された。

「そんな……」

「いや……」

理解した。嫌と言う程に理解した。自分達では——いや、人間がどうにか出来る相手ではない。対物ライフルかI Sでなければどうにもならない。当然、そんな都合の良いものはここには無い。

逃げなければ。こうなったら死ぬ思いで隆道を担いで窓をぶち破るしかない。八十キロ以上ある彼を担ぐのは難し過ぎるが選択肢は無かった。

とにかく行動だ。菜月は未だに躡き苦しむ彼に駆け寄り、肩に手を掛けたところで――

「……!?」

有り得ないモノが見えた。

隆道は何処も怪我を負っていない。

目に留まったのは彼の首。

そこにあるのは——『鉄の首輪』。

『灰鋼』!? どうして!？」

いつの間にか『灰鋼』が隆道の首にあつた。

これはどういうことだ。嚴重に保管した筈だ。それが何故、彼の元にあるのだ。まさか、自力でここまで来たのか。そんな事例聞いたことない。有り得ない。どうやって。どうして。何で。

予想の斜め上を行きまくる展開の連続に菜月の思考回路はショート寸前にまでいつ

てしまった。人間ではない不可視の襲撃者、ある筈の無いIS。ものには限度があると
いう言葉を知らないのか。何処まで此方を追い詰めれば気が済むのだ。

それともう一つ。彼が今も尚苦しんでいるのは何故だ。くまなく調べても外傷等は
見られない、かといって発症したとも思えない。ならば何だ？

「柳君!! 早く……立つ、て……!!」

「……………!!」

確かに菜月の調べた通り、隆道は少しも怪我を負っていないし発症すらしていな
い。そもそもが間違いであって、攻撃など一度も受けていない。

彼女達では——答えに一生辿り着かない。

——頭が割れる、割れちまう……。

——何呑気にしてんだ。牙でも抜かれたか？

——何だ、お前……。とつとつと、失せろ……。

——『あの日』から足掻くって決めたんだろ。早く立てって。

——うるせえ。

——お前の『敵』は近くだぞ。ほら、抗えよ。戦えよ。今までそうやって生きてきた

だろうか。

—— 黙れ。

—— 心配すんなよ隆道。お前はもう『負け犬』^{LOSER}なんかじゃねえ。あの頃の『鬮體』に戻ろうぜ。また手伝ってやるから——。

—— 頼むから黙って——。

—— 逃げてえつつつ!!!

「—— ツ!!」

「!？」

「ラッ アツツツ!!!」

「がはっ!？」

いきなりの鈍痛が菜月を襲う。

突如として雰囲気が変わった隆道は彼女の手を払いのけて無防備となった腹に蹴りを繰り出す。モロに受けてしまった彼女は吹き飛んでしまい、壁に強く叩き付けられる。その隙に彼はそのまま足を上げてからの反動利用で跳躍し立ち上がる。

「!？」 榊原せ——!？」

隆道が攻撃を仕掛けてきた事に驚きを隠せない真耶であったが、彼に目を向けたその直後に次の愕然がやってくる。

いつの間にもやら彼の拘束が解かれていたのだ。手首足首に拘束具を残したままで。大型の工具か対物ライフルでない限り絶対に壊れない拘束具をどうやって破壊したのか。

答えは直ぐにわかった。拘束具を観察すると、千切れた箇所にも赤く発熱した切断面が。

「……………」

隆道の右手には紫電を走らせる鋭利たる刃物。かつて、シャルロット暗殺計画に荷担した人間を肉だるまにした近接武装——『HF・MACHINE』。

彼は自分で切断したのだ。高周波ブレード故の切断力なら金属は勿論、特殊ファイバーロープを断ち切るのは容易い事であった。

ISは戻った。拘束は解けた。教員に攻撃という大問題が発生したがこれで一応は身を守る——が、ここでまたしても新たな問題が発生する。

「や、なぎ……君？」

「……………」

様子がおかしい。

焦りは見えない。寧ろやけに落ち着いている。逆にそれが隆道の異様さを醸し出していた。

襲撃者もそうだ。何故、攻撃してこないのだ。武器を奪う以外の行動が見られないのはあまりに不自然だし不気味である。何しに来たのだ。

だが、直ぐに襲撃者の事はどうでもよくなる。何故ならば――。

「……!?!」

隆道は真耶に近づく。黒過ぎる眼で見据えて。紫電を激しく走らせる刃を揺らして。そう、ただ今より襲撃者は変わった。

「……………」

――柳隆道に。

「いめんなきいっ!!」

真耶は即座に麻醉銃を抜いて隆道に発砲した。訓練の賜物であるその早撃クイックドロウちは確実に彼の身体を捉え、間違いなく命中――。

「ッ!!」

「嘘っ!？」

ソレは当たらない。

隆道は麻醉筒を避けるでもなく防御でもなく、なんと大振りで叩き斬った。ソレは綺麗に割れ、畳に薬品を散らばらせていく。

距離は十メートル以下、構えは取っていない。それでも彼は発射された高速の麻醉筒を斬った。常人ではまず不可能な荒業であった。

「……………」

「あ、ああ……………」

隆道から“無”しか感じなかった。憎悪、憤怒、殺意、狂気、全てが無い。本当に、何も無い。

何を考えているのか少したりともわからない。それでも、彼女はたった一つだけ理解する。

——殺されてしまう。

真耶に凶刃が迫り来る。

互いの距離は五メートルにまで差し掛かった。もう逃げられない、避けられない。撃ち込んでもお構い無しに斬られてしまう。実弾でも無理だと確信してしまう。

説得なんて無理だ。真つ黒な据わった目つきと力強く握り込むブレードが全てを物語っている。確実に、殺してやると、そう訴えている。

「お願い、やめて……」

「……………」

無視。

聞こえてない様な素振りでも更に近づいてくる。遂にブレードが届く距離となり、ゆらりと垂らすブレードの刃が真耶を向いた。もう駄目だ――。

「！」

その直前、隆道は急に身体を反らして胸辺りに左手の平を翳す。次の瞬間、その手の平に二本の筒が突き刺さった。

言うまでもない。それは彼専用の麻醉筒。

「榊原先生え……………!!」

「そろそろ落ち着き、なさいって……………!!」

出所は菜月の麻醉銃から。彼女は隆道の蹴りで気絶寸前であったがどうにか持ちこたえていた。

菜月としては回避能力が高い彼に当てようとは少しも考えていなかった。此方に気を逸らせれば御の字だったが結果オーライ、一先ずは自分達の安全を確保出来ると少しだけ安堵する。

手の平であれど効果は十分である。直ぐにでも彼の動きは鈍くなる筈。

「……………」

ここで彼女達はとんでもない光景を目にする。

「え!?!」

手の平を見詰めていた隆道は、あろう事か己の左腕に目掛けて思い切りブレードを振り下ろす。凶刃は簡単に肉に食い込み、左腕は真っ赤な血を吹き上げて宙を舞う。

彼は——自身の腕を斬り落とした。

（嘘——）

隆道は彼女達に考える余裕を与えない。

彼はブレードを咥え斬り飛ばした左腕を掴み、菜月の顔面に向けて全力の一振り。盛大に散った鮮血は彼女の顔にばしやりとかかる。

「きゃっ!! 目…………!!」

そう、ソレは『目潰し』。菜月の視覚を奪い、彼はその隙に左腕を放り投げて踏み込みで真耶に急速接近した。血管が太く浮き出る程に拳を強く握り締め、大きく振りかぶつて。

「やな——」

真耶の言葉は——拳で途切れた。

右腕と両足で繰り出される攻撃が彼女を襲う。右フックから始まるローキック、ボディブロー、膝蹴り、水平肘打ち、ミドルキック、掌底打ち、ハイキック、アッパーカットが繰り出される。

あまりに素早く、あまりに重い苛烈な打連撃。回避を許さない、防御を許さない、小さな悲鳴も許さない。一切の隙を与えやしない無呼吸連打は無抵抗の真耶に絶大なダメージを与えた。そして最後に——。

「あ、っ——」

強烈なラリアットが止めとなった。

鋼に等しい右腕の強い叩き付け、そこから畳に強い叩き付け。蓄積されたダメージを受け身すら取れなかった真耶は脳震盪を起こして気絶した。残り一人。

「いい加減にしなさいよおっつっ!!」

「!」

隆道が怒声の方を向くと、片目だけ血を拭った菜月の姿。その手には再装填を終えた麻酔銃が。彼はそれを見るなり助走をつけて大跳躍、彼女に向かってノーガードで飛び掛かる。

「あとでお説教だから!!」

麻酔銃は既に構えている。空中なら回避不可。早いか遅いかの違いだけとなる。

菜月が先か、隆道が先か。結果は――。

「う、――」

無慈悲にも隆道が先だった。

跳躍から身体を捻って回転、そこから後頭部に目掛けた『延髄斬り』が菜月に直撃した。彼女は崩れ落ちてしまい、一方の彼は勢い余って転がり落ちながらそのまま壁に激突する。

が、別になんて事はないのである。彼は全く痛がる素振りなく、何事もなかったかのように直ぐ起き上がって二人を見下ろす。動きは見えない。最早、立ち上がってくる者は――いない。

彼女達は倒された。この争いは彼の勝利――。

「う、っ……。ん、う、……!!」

いや、引き分けか。

隆道は妙にふらつき、震えていた。その筈だ、彼の胸には二本の筒が刺さっているのだから。

「……………」

菜月の麻醉銃はしかと当たっていたのだった。麻醉は全身に回りつつある。満足には動けない。騒ぎを聞きつけた教員が駆け付ける頃には確実に眠っているであろう。彼の終わりは近い。

「……………」

否、終わらない。

隆道が見詰めるのは己が持つ高周波ブレード。何かを思いついたのかソレから目を離さない。

彼はこの時、一つの恐ろしい狂行を考える。

抜けばいいのだ。

隆道は決行する。上手く動かせない腕を無理に上げ、ブレードを水平に。そしてそのまま刃先を——自身の首へと押し当てた。

もうわかるだろう、彼が何を仕出かすのか。

「フーツ……フーツ……い！ フーツフーツフーツフーツフーツツツツ！！」

息が徐々に荒くなつていく。全く変えなかつた表情は今や凄まじく強ばり、目は血走つていた。

何度か荒い呼吸を繰り返し、遂に刃を――。

「ん、つつつ！！」

――思い切り引いた。

二人の教員は走る。教員室に向かつて。

「通信はまだ駄目!?」

「全つ然!! 何なのよ本当にもう!!」

花月荘に響き渡つた乾いた音の連続。生徒達はその音にピンとは来なかつたが、全教員はソレが銃声だというのは直ぐに理解した。

直ぐに連絡を取ろうとするも、何故だか全ての機器が通信障害。異常を察した彼女達

は最優先に真耶の元へ向かう事になった。こういう時は必ず隆道が絡んでいると相場が決まっている。

二人は更に足を速める。手遅れにならないでと祈りながら。

「着い——……ああ、遅かった」

開けっ放しの扉、向かい側の扉に弾痕が複数。悪い予感は的中してしまった。

「……………」

二人は静かに懐の拳銃を抜いてハンドサインでやり取り、陣形を組んで扉に近づく。近接戦闘を考慮して拳銃を体の中心且つ胸の前辺りに構えて周囲を警戒、息を潜めてじりじりと進んでいく。

（聞こえる？）

（何も）

（私が様子を見る。周囲を警戒）

（了解）

入り口の手前まで近づいた二人は今一度周囲を警戒、そこから更に慎重を重ねて部屋を覗いた。

「……………!!」

信じられない光景がソコにあった。

「嘘……。嘘、嘘、嘘おおつつつ!!」

彼女は部屋に突入する。もう一人の方も彼女の慌てふためきに釣られて部屋に入り

「う……!!」

酷く、真つ赤な部屋だった。

散乱した部屋の隅には倒れた真耶。

反対の隅にも同じく倒れた菜月。

中央に——大の字に倒れた真つ赤な隆道。

「ひ、酷い……」

惨状。その部屋を示すならこの一言に尽きる。

床も、壁も、窓も、天井も、至る所全てが血で染まっていた。スプリンクラーで撒き散らしたと思わせる大量で乱雑な血痕は二人を一気に恐怖のどん底に叩き落とす。

鉄臭さが半端ではない。くらくらしてしまふ。見るからに一帶の血は全て隆道から出たものだ。

本当に——最悪。

「織斑先生に報告!! 早く!!」

「ええ! 直ぐ呼んでく——」

一人が入り口に向かって駆け出したその時。

「——るう」

その教員は突然と脱力して崩れる様に倒れる。

「え!? ちよつとどうし——ぐつ!」

倒れた教員に駆け寄ろうとしたその時、彼女は背後から襲撃を受けた。太い腕で首を絞められ、意識が一気に遠退いていく。

(ま、まだ襲撃者が……!)

振りほどこうも全然外れやしない。それ処か、締め付けは更に強くなつていき足が浮き始める。反撃する余裕は全く無かつた。

「いっ……お……!!」

抵抗は無駄である。完全にホールドされた故に逃げ場は何処にも有りはしない。背後を取られた時点で敗北は確定していたのだ。

意識を失う寸前に彼女は気づく。倒れた教員のうなじに一本の麻醉筒が刺さっていたのを。

静かな廊下。先程までの騒々しさは全く無く、冷房のお陰で季節に似合わずひんやりしていた。そんな静寂の中、一つの扉がゆっくりと開く。

「――」

そこから一人の人間が不意に飛び出してきた。その者は向かい側の扉に衝突、扉を背にしたまま両手に黒光りの凶器――拳銃を左右に突き出す。

「……………」

その者は血塗れの隆道であった。

左右を交互に振り向き、誰もいないとわかるとゆっくり拳銃を下ろして小さく深い溜息を吐く。何もかもが嫌になっている様子であった。

「……………何やってんだろうな、俺」

両手に持つ拳銃は教員のものだ。何を隠そう、奇襲を仕掛けたのは隆道本人。教員を無力化した故の戦利品(?)である。

麻酔は一体どうしたのか? 至極簡単な事だ。彼は一度死んで抜いた。

行動不能になる寸前で自分の首を食道辺りまで斬り付け、死亡してから高速蘇生によつて体内に巡る麻酔を排除する。

そう、つまりこの狂人は麻酔を抜く為に自害を選んだのだ。彼だけにしか出来ない、あまりにも狂いに狂った荒業をやつてのけたのであつた。

そこからは至つて単純。駆け付けてきた教員を死んだふりで欺き、隙を突き、倒して今に至る。この男、本当に頭がおかしい。気狂いだ。

「……………」

ふと、隆道は二丁の拳銃を眺める。ほんの少し眺めてからそれぞれ片手のみでスライドを操作、隙間から見える弾薬を確認し始めた。

彼が行つたのはチャンバーチェックと呼ばれる手法である。弾薬が装填されているか確認の為にスライド、若しくはチャージングハンドルを少し引いて薬室を確認する行為。主に敵から鹵獲した銃や他人から借りた銃で行われる。

カッコつけてる様には見えるが、本人としては銃を確認してるだけでしかない。何だコイツは、何処でそれを覚えた。

「……四十五口径だったら良かったのにな」

そう呟いて隆道は部屋に戻っていく。数秒後、静かな廊下にガラスが割れる音が小さく響いた。

一方その頃。

「う……。ぐう……」

硝煙が濃く充満する御手洗い。そこで膝を着く束は脇腹を押さえていた。

「あーあ、自慢のお肌が台無し。これじゃママに何て言われるやら」

言葉に反し殺意のこもった声は濃煙の中から。

「でも仕方無いよね。クソ兎が相手なんだから。うん、仕方無い仕方無い」

ソレは徐々に近づいてくる。

「それよりどーお？ 対ISスラッグ弾の威力は。痛いでしょ、痛いよね。ISに頼ってばっかだから痛い目見るんだよ。この馬鹿が」

濃煙から最初に見えてきたのはショートバレルショットガン。その次に見えてきたのは血塗れの少女が一人。

その少女――。

「もつと味わえクソ兎イイイッ!!」

――篠原日葵。

第五十四話

時刻、十三時半。

隆道は歩く。旅館を囲う草木の間を掻い潜り、偶然にも見つけた裏口から外へ。建物から出ても警戒を一切解かず、『狩り』によつて身に付けた忍び足で慎重に進んでいく。最初こそ忍び足だったものの、追手は来ないし人の気配が一切無い。それがわかるや否やそれも止め、砂利道特有のザクザクとした音を鳴らしてだらしなく歩き進んでいった。

今の彼に目的なんて無い。ただひたすら歩く。何も考えず、足だけを動かす。

「……………」

彼の手には一丁の拳銃、ズボンには振じ込んだ複数の弾倉。もう一丁は何処にも見当たらない。恐らくは弾薬だけ抜いて捨てたのだろう。弾倉は部屋に転がった物をかき集めた模様。

人相は虚ろな眼で最悪、格好も血塗れで最悪、持つてるものも凶器で最悪、何から何まで最悪。凶悪犯罪者と見間違われてもおかしくなかった。尤も、あまり間違つてはいないのだが。

「……はあつ」

それなりに歩いて暫く。もう疲れたのか、彼は溜息を吐き出しつつ立ち止まって近くの丁度良い岩に腰掛けた。俯いて再び溜息、身体を揺らして項垂れる。かなり具合が悪そうである。恐らくは重度のストレスによるものであろう。

拘束の件に謎過ぎた襲撃者、そこから教員との戦闘に自害。幾ら蘇生するとはいいえ、自らの命を絶つというのは想像を絶するストレスの筈。彼が人の心を保っていられるのは芯が強いか、または既に狂っているからか。どちらにせよ、誰も彼を理解出来ないであろう。

数分程であろうか。暫く唸るしかなかった彼は気を紛らわせる為か、手元の拳銃を弄り始めた。というか、何故に持ち出したのか。ここが日本である以上は弾薬なんて調達出来ないというのに。それ以前の問題だというのは言うまでもない。

「……こんなモノでなーが出来んだってんだ、クソボケ共がよ。せめてゴツいの持っでこいよ、ショットガンとかアサルトライフルとかよ……。ああ、無駄に最新なものも腹立つ……。新しければ良いってもんじゃねえだろうが……」

ぶつぶつと文句を垂れながらも拳銃をくまなく調べ、一つ一つ操作を確認していく。ある程度に調べ終わったところで次の行動に。

弾倉を抜き、スライドを引き、引き金を引き、弾倉を入れ直す。金属音が気に入った

のか何度か繰り返し、飽きたかと思えば次は別の弾倉を取り出して保持したまま弾倉の入れ替えをし出す。

タクティカルリロードと呼ばれる装填手法だ。弾倉を捨てずに手元で保持したまま入れ替える、最装弾数を可能な限り維持する為の戦術である。上手くこなすにはある程度の練習が必要不可欠。ISの知識はからつきし駄目駄目なのにこういつた知識はあるようだ。一体何処で覚えたのやら。

「……やりづら。ったくよ……」

フルサイズの軍用ではない、女性向けであろうサブコンパクトの護身用は隆道に合わなかった。小指はグリップから完全にはみ出てしまつて相当握り辛そうではあるが、それでも彼は続ける。

「ぎこちない手つきで交換を何度でも繰り返す。放心している様な顔つきだが手元は堅牢に動く。何が彼をそこまで駆り立てるのか、止める様子は少しも無かった。」

「鈍つたなこりや。暫くやつてねえしな……」

ここから隆道の動きは目を疑うものになる。

数十回やつて慣れたのか、急激に速くなつた。三秒に一回程のペースだった動きが二秒に一回へ縮まり、次に一秒に一回のペースへと縮まつた。既にぎこちなさは無く、一寸の狂いもない正確な弾倉交換を繰り返している。最早、彼は手元すら見ずに行つてい

た。鈍ったと言つてはいるが既に熟練の領域だ。身体が覚えているのだろう。

カチャンカチャンと金属音が続く。今や完璧と言える動作にも関わらず、それでも続けていく。遂に一回の弾倉交換は一秒を切り、一連の動きはプロ顔負けと言えるレベルにまでなつていった。

本当に何処で覚えたのか。IS学園でも銃火器の特性を理解する為に座学やら実習はあるのだが、それはISの武装に関係するから。彼が行っている生身での戦術はまず教わらない。代表候補生なら十分に有り得る話ではあるが、一般生徒——花の女子校生はその様なニツチな知識など知らないし知ろうともしない。いるとしてもそれは極少数、ミリタリーマニアや物好きな人間ぐらいである。もしかしたら彼はそういう類いなのかも。

そうこうと繰り返す内に彼の頬は緩んでいく。やっと満足でもしたのか拳銃を手放し、手を休め天を見上げて——直ぐに険しい顔に変わった。

「……くそつたれ」

所詮、気晴らしは気晴らしでしかなかった。

社会が嫌になる。周りが嫌になる。自分自身が嫌になる。本当に、心底——嫌になる。

「何がしてえんだか……」

本当に何がしたかったのか。拘束を抜け出し、教員を攻撃し、ISと拳銃を持ち出して逃げ去る。今思えばあまりにも愚か過ぎる行為だ。

いつもそうだ。後先の事など考えず、その時の感情に身を任せて暴れてしまう。あの時、何故に教員を攻撃したのか自分でもわかってなかった。全てを諦めた筈なのに身体が勝手に動いていた。教員に対する罪悪感ほ微塵たりとも無いのだが、自身の暴走度合いには嫌気を感じる。

本当に今度こそお終いだ。自由の身とは無縁の国際指名手配犯が確定した。自業自得だが、もう安心して暮らせる場所は無くなってしまった。

「……は、ははっ。はっはっは……」

ふと、自身の首にある『灰鋼』に触れる。

あれ程憎んでいるのに、あれ程嫌っているのに捨てようともせず今でも身に付けている。人生を大いに狂わせた元凶の元凶だというのに。

何故コレを持ち出したのか自分もわからない。いつもの様に投げ捨ててしまえば良かったのに。身を守る為だと言えば尤もらしいが、結果的には余計に自分の首を締めるだけの要因でしかない。ベクトルこそ違うが、結局のところは自分も力に溺れた畜生共と同類なのだろう。そう思うと一周回って逆に笑ってしまった。

——何なんだ。

——何がしたいんだ、何がしたかったんだ。

——俺は——俺が、わからない。

今更捨てても無駄である。暴行、盗難、脱走と犯罪要素があまりにも多過ぎる。しかも盗難したモノがモノ、先に待ち構える未来なんて今以上に録なものではないに違いない。家には帰れない、友には会えない、安息など二度とないであろう。

——ここまでやらかしたのだ、今更後に引けるか。なら、自身に残された唯一の選択肢は——。

「テロリストにでもなれつてか……?」

——抵抗への道。

確立した自身の思想を命尽きるまで貫き通す。このとち狂った世界を力の限りに暴力で訴える。地獄を築き甘い蜜を吸う畜生共に地獄を見せる。誰が立ちはだかろうと関係無い、最後の最後まで戦って一人でも多く道連れにする。

我ながら最低な選択肢だと思う。その選択肢を取れば悪党の悪党、正真正銘の人でな

しだ。

——いや……まさか、この為にISを……？

なら自然と納得出来る。世界を相手に戦うと、地獄を見せつけてやると、全てを壊してやると、自分は無意識の内に意を決していたのか。だから忌み嫌うISを捨てなかったのか。嗚呼、そうか。目的は既にあつたのか。

考える度に最たる悪党の思考へと堕ちていく。内側に潜む『どす黒い何か』は表面化していき、狂気に満ち溢れた笑顔が垣間見えていく。

それも良いのかもしれない。元より録でもない人生を送れなかったのだ、堕ちるしかないならばとことん堕ちてやろうと隆道は嗤った。

——お？ やーっとその気になったか？ なら早くやつちまおうぜ。思い立ったら吉日だろ？ 大丈夫だ、俺達ならやれるさ。

「……はっ、やってやろうじゃねえかこの野郎。んじゃ手始めに権利団体の連中。そっから——」

——が、その一線は越えず。

「……馬鹿じゃねえの。何考えてんだよ」

——……駄目、か。仕方ねえ、また今度な。

幾つも顔が浮かび上がる。それが隆道の決心に待ったを掛けた。それ等全ては隆道を黒き思考を埋め、抱える狂気を上書きしていく。

一夏達が浮かぶ、『髑髏』の仲間達が浮かぶ。そして次に父親が浮かび、ハルが浮かび、光乃が浮かぶ。そして、最後に灰髪の少女が——。

「誰だお前!」

つい大声でツツコんでしまった。何だ今のは。全然知らない人間がナチュラルに混ざっていた。

記憶を遡っても灰髪の少女と知り合った記憶が無い。何処かで会ったような気がするが、あんな目立つ特徴なら嫌でも記憶に残る筈だ。とうとう記憶までイカれたかと彼は頭を押さえてしまう。彼の思考は謎の少女で満たされてしまった。

「はあ……? マジで誰だコイツ……?」

真つ黒な思考を完全に上書きされてしまった。何処で会ったのかと思ひ出そうにも

出てこない。抱える悩み等を全てシャットアウト、考える人のポーズ姿で記憶を捻り出そうとしていた。

危うく隆道がテロリストになるところだった。よくやった、超ファインプレーだぞ『〇一九』。

「つあー……。んー……。？」

延々と悩みに悩み、彼は臆気ながら思い出す。確か、三途の川を彷徨つてた際に見掛けた気が。あの時は父親とハルの存在があまりに大き過ぎて彼女の存在など心底どうでもよかった。というか秒で記憶から消した。いなかっただ事にしていた。

死に物狂いで頑張っても雑な扱いは変わらず。流石に哀れ過ぎるぞ『〇一九』。

「灰色の髪をした子供……。一度、あの時……」

——！ は、はいはい！ 私!! 私!! それ私!! わーたーしー!!

「ああそうそう。そんな声だったな。……は？ ん？ ……つたく、幻聴と会話なんてマジものの気狂いじゃねえか……。何なんだよお……」

——ん!? え、もしかして聞こえてる!? もしもし!! もっしもし!!

「くそつたれ、とうとう話し掛けてきやがった。最近多過ぎんだろ……。もしもしじゃねーよ……。電話じゃねーんだからよお……」

——はいいい!? いや聞こえてるじゃん!! 絶対聞こえてるつて!! ていうか今まで

ずっと聞こえてたの!? 無視してたの!? 嘘お!?

声がか聞こえる。ヘッドホンでもしてるかの様にかなり近かった。目の動きだけで辺りを見回すも誰一人としていなく、通信も当然と来ていない。隆道はまたコレかと天を仰いだ。

声がか聞こえたのはいつ頃からだっただろうか。例えばIS学園に来てから少し経つた頃だったか。正確な時期はもう覚えていない。

最初は声も呟き程度に小さく、周りが喧しいが故に気にはならなかった。しかし、自分一人しかない時も聞こえる事に気づく。コレは幻聴かと密かに悩みが増えていたのだ。

正直気味が悪かったが害は無かったので今まで無視を貫いてきた。だが、返事してしまつた故か遂に話し掛けられているように聞こえてしまう。もうやだ、幻聴に応えた自分をぶちのめしたいと耳を塞ぎ、彼は怯える子供のように踞つた。

——聞いてー!! 敵がこつちに来るの!! たつくんを狙つてるのー!!

「あ、あ、あ、ああああこれは幻聴これは幻聴これは幻聴これは幻聴これは幻聴幻聴幻聴……」

——違う違う違う!! 幻聴じゃないから!! 私だよー!! 『■■■■』の■■■■だよー

!!

うるさい。本当にうるさくて頭に来る。

急激に内容が全く頭に入らなくなつた。いや、入れたくないのが正しいのか。部分的にノイズの様な雑音が混ざつた声は寒気と頭痛を起こした。ソレを理解するな、ソレを受け入れるなと身体が警告を発して拒絶反応を示す。鬱陶しいといった不愉快は憎たらしいという憎悪へと悪化した。

隆道は絶対に、決して、決して認めやしない。ISに意識があるなどと頑なに信じやしない。彼の意思だけでなく、本能がソレを拒絶する。

「うううう……。頼むから、やめてくれえ……。どつか行つてくれえ……」

——だーかーらー幻聴じやないつてばー!! おーい!!

「だからお願いだあ……。もう、やめ……。……」

——病氣じやないから返事してー!! おーいたつく——。

「つせえんだよこの野郎つつつ!!」

キレた。いきなりブチギレた。

隆道は勢いよく立ち上がり、腰掛けていた岩を己の全力を以て殴つた。感じるのは壮絶な痛み。腕に鈍痛が走り、拳は皮膚が裂けて血が滲む。

常人ならばまず悶える。だがしかし、今の彼は痛みよりも怒りが遥かに勝つていた。

「何だよ! 何なんだよくそおつ!! どこまで俺を追い詰めれば気が済むんだあつつつ

!!! 人の、気も、知らねえでよおおおつつつ!!! うるせえってんだよコ、
 ラアアアツツツ!!! 俺をつつつ!!! 『たつくん』てつつつ!!! 呼ぶなああ
 ああああつつつ!!!」

痛みなど構わず殴り続ける。幻聴が消えるまで徹底的に。この際拳が潰れても構わないぐらい。なのに苛立ちは無くならず、更に加速していく。

「フンッ ツツツ!!」

今度は頭を打ち付けた。

目眩を起こして視界の色が反転する。しかし、それでも隆道は止まらない。荒れ狂ったかの様に頭突きを繰り返す。

まつさらだった岩は真っ赤に染まる。それでも一向に止まらず、まるで親の仇の様に何度も頭を打ち続ける。最早、感覚は無くなつたのだろう。もう見ていられない酷過ぎる光景だ。

「アッ……ゴッ……オッ……!!」

本能が拒絶し否定する以上、『〇一九』の声が届く事は絶対に無い。何をしようと長年に渡って刷り込まれた価値観と症状が邪魔をしてしまう。余計に追い詰め、傷付け、そして壊してしまう。最後は——精神が耐えられず“死”に至る。

……………。

『〇一九』は涙を浮かべ、そして理解する。
意思疎通。即ち、隆道を殺すのと同義なのだ。彼女の願いは——叶わないのだ。

「——ツツツ!! ——ツツツ!! ……?」

声は、いつの間にか聞こえなくなった。

試しにと耳を澄ましても何も聞こえやしない。漸くと忌々しくもうるさい幻聴は消えた。

やはり暴力。暴力が全てを解決する。

「つ……。あ、あああい、つて、え……」

ただし、その代償は高く付くのだが。

感覚が戻り、襲い掛かるは悶絶する程の激痛。幾ら慣れてるとはいえ痛いものは痛いのである。当たり前だ、サイボーグじやあるまいし。

「あ、——…何か、もう、どうでもいいわ……」

脱力。急に物事がどうでもよくなった。

このまま大人しく捕まってしまおう。その方が多少なりとも気が楽になる筈。何をしたところで悪い方に行くのなら何もしない方が良いだろうと諦めの境地に入った。

本当何なんだこの気狂い、病を抱えているとはいえ情緒不安定が過ぎる。

「ほーら、柳隆道さんはもう逃げませんよ……。煮るなり焼くなり好きにしろよ畜生が……」

血だらけと化した岩に再び腰掛け、捕まるまで何して暇でも潰そうかと、隆道は考えに耽った。様子からして自分から出向く考えは無いらしい。あれだけ周りに迷惑掛けでもコレなのだ。本当にどうしようもない奴だった。

「……………」

あまりに暇と感じたか、隆道はふと『灰鋼』を部分展開。ヘッドギアだけ装着しデイスプレイを眺め始めた。拳銃弄りは完全に飽きたらしい。

常に変異するこのISは目を離す隙に何かしらの変化がある。そもその話、管理されてきた筈のコレがどのような元に戻ってきたか。確かめるべく、彼はしかめっ面で増えたであろう項目を一つ一つ探し出す。

「……………」

——『WALKER』online——。

(やっぱり増えてんな。今度は何な……。おお?)

またしても知らない項目が増えていた。だが、ソレは今までに作られたシステムや武装とは訳が違う過ぎていた。

カテゴリは何と『特殊兵装』枠。表示を見るに今も展開中らしく、自分の側にいる。見渡してもそれらしいものはなく、此方から操作しようにも不可能な模様。展開解除も出来そうになかった。さっぱりとわからない。バグか？

それ以前におかしい。記憶によれば『灰鋼』は第二世代の筈である。これも変異によるものか。

(WALKER^{ウォーカー}……歩行者？ 何だそれ)

名前も意味がわからず。ISと全く結び付かず、これっぽっちも連想が出来ない。不思議の塊だ。見てくれも仕様も用途も不明なのは何故なのだ。そもそもコレは武装か？ やはりバグに思える。

「……めんどくせ」

結論。隆道は考えるのをやめた。

これ以上は時間の無駄だ。バグでなかうと、どうせ他のと一緒。限定的な状況でしか使えないゲテモノに違いない。彼はそう決め付けて今度は別の項目に目を移していく。

機体そのものはいつもの高速修復で万全状態。先の戦闘で武装は幾つか大破したが、思い入れがある訳ではないのでどうでもいい。量子変換した換装装備はあるが——使う事はまず無いだろう。取り扱いは一応目を通したが案の定ゲテモノ。使用者を殺

す気かと思う程に酷い代物であった。コレは見なかった事にしよう。

(あとは……コレねえ……)

それと、もう一つ気になった項目が。

——『コード・デッド』 $\frac{1}{3}$ ——。

一次移行した際に発現したコレ。使えないのは変わらないが横に数字が増えた。これも不明だ。記憶違いでなければ元々無かった筈だが。

死亡回数、ではない。明らかに数が合わない。別のカウントだとしても心当たりは少しも無い。回数制限ではなさそうだが果たして。

「わかんね。そもそも専門じゃねーし無理だわ」

結局はわからず終い、無駄足に終わった。

だいたい無理な話だったのだ。録に I S の知識を覚えようとしてもしない頭クルクルパーなクソガキが謎過ぎる I S を解き明かそうなど。どの研究員でも匙を投げてデータ採取頼りなのだから出来る訳がなかったのだ。至極当然の事であった。

とにかく、これで本当にやる事が無くなった。あとは捕まるまで大人しく——。

「……………」

否。一つだけ目を通していないものがある。

それは『位置情報』。何故だか激しく主張するその項目だけは意図的に避けていた。

自分には関係無い、戦いたい奴が戦えばいい、関わるのはもう御免だと自分に言い聞かせて目を背けていた——のだが。

「……見るだけ、見るだけだ。俺には関係ねえ」

引つ掛かりが消えず、堪らずに見てしまう。

どうでもいい輩が大半だがシャルロットだけは気になる。彼女が特別な人間という訳ではないが何かしら意識しているのも事実。無事でいると、もう終わっててくれと彼は切に願う。

ここで一応断言するが、隆道はシャルロットを異性として意識していない。これっぽっちもだ。今も知人以上友達未満でしかない。これは酷い。

「……んあ?」

見て思ったのは幾つかの疑問。

一つは一番近い花月荘。動きが無い『白式』と『紅椿』はわかるとして、その近辺にて微々たる動きがある『華鋼』と『UNKNOWN』。そして、旅館を囲む様に表示された十つ以上の熱源反応。これ等も全てが『UNKNOWN』。此方に関しては潜伏モード状態。教員の訓練機ではなさそうだ。心なしか、此方に向かっているような気がする。人が歩くレベルでかなりゆっくりと。

二つは例の軍用IS周辺。代表候補生達の反応の他に熱源反応が二つ。これも『UN

KNOWN』だ。この二機は援軍か？ 海中にいるようだが。

それと——いつの間にやら近くにいる未確認の生体反応が一つ。

(ちつつつかつ。何だコイツ……—っ!?)

ソレは真後ろにいた。距離は十メートル以下。まさか、新手的襲撃者か。

隆道はすかさず拳銃を拾い上げて真後ろの森に突き付ける。一見は誰もいないように思えるが、彼は一点——草むらを睨み付けて構えたまま。

ハイパーセンサー越しに見える、屈んだ状態で此方を向く人型のシルエットが一つ。人間なのは間違いないが動きが全くと見えな。此方に声を掛けてこないなら関係者ではないだろう。なら、やはり襲撃者か。

それにしても何処か不自然。襲つて来る気配が微塵たりとも感じない。何処か震えている様子。もしや、隠れ慣れていないのか。

睨んでも、銃を突き付けても動くこうとしない。バレていないとでも思っているのか。だとしたら無駄だ。ISならば直ぐに見つけ出せるし、何よりお粗末。自分ならもつと上手く隠れられる。

此方から声を掛けても良いが——それは癪だ。コソコソしているのが気に入らない。故に——。

——『鬪體』の心得その一、先手必勝——。

——『鬪體』の心得その二、躊躇無し——。

——『鬪體』の心得その三、容赦無し——。

——此方のやり方で炙り出す。

「びゃあつ!!」

試しにと一発だけ発砲、乾いた音が炸裂すると共に拳銃弾は草むらへと一直線に飛ぶ。潜む者は大の字に仰け反って尻餅をついた。うわマジか、誰かもわからないのに躊躇無しに撃ちやがったぞこの気狂い。これがあの凶悪な武装集団を束ねるリーダーか。本当に恐ろしい奴だ。

手応え有り。そうとわかった隆道は反撃される前に追撃を——。

「わ、あ、あああ待つて待つてえつつ!! 撃たないでくださいいいつつつ!!」

「!?」
驚愕。ソレは唐突に飛び出してきた。

姿を現したのは歳下であろう少女。草むらから飛び出すや否や勢いよく両手を上げて降参の意を見せた。凄まじく涙目で弱気過ぎる姿勢、コレが襲撃者か? 隆道はともそうは思えなかつた。それに、今撃たれた筈では? その奇抜さは?

「?????」
 何故、奇抜か。それは彼女の格好であろう。

このくそ暑い夏の外で場違い過ぎるメイド服。夏服だとしても有り得ないくらいにミスマッチ。ここは日本だぞ、コスプレとしか考えられない。

それに、よく見ると外国人だ。流暢な日本語で直ぐに気づかなかったが顔のパーツが正にソレ。もしや、単なるコスプレ趣味の外国人なのか？ だとしてもここにいる理由が無い。迷子なのか？

完全に出鼻を挫かれた。撃つ気はどうに消え、銃口を少しずつ下ろす。見たところ怪我は無い、弾丸は外れたのだろう。危ない危ない、無関係な人間を撃ち殺すところであった。しつかり照準を捉えた筈なのだがこの際にしらない事にした。

「あつ……。え、ええ、えと、そのおお……。どど、どうも、こんにちは……」

「……関係者、じゃねえよな。何でこんなところにいんだ。……まあ、何だ。撃つたのは悪かった。取り敢えず……。何も聞かねえで帰った方が良く。この辺りは今すげえめんどくせえ事——」

——その時。

——未確認熱源反応感知——。

——『獵犬』起動。……IS反応有り——。

——識別コード不明。コアネットワーク巡回、ISデータ照合。……該当無し——。

——操縦者不明。コアネットワーク巡回継続、登録操縦者データ照合。……該当無し——。

——データプロテクト確認。解析不可能——。

不意に目前に現れたディスプレイ。武装とISを感知するシステムが起動し、異国の少女を対象にデータが表示された。所々意味不明だが——。

「？ IS反応——な!? てめ、IS持ちか!! やっぱ新手——」

「ごめん、な、さ、い、い、い、つ、つ、つ!!」

少女は急速にUターン、一目散に逃げ出した。少女——いや、人間とは思えない程の超絶爆速は降道が拳銃を構え直すよりも速く、いつの間にか森の奥へと消えていく。正に電光石火。

思考するより圧倒的な速さであった。対処する前に逃げ切るとはなんたる逃げ足の速さなのか。獲物を逃がさない自信はあるが、アレは無理だ。

「な、何だ、アイツ……」

隆道は謎の少女に畏怖を感じていた。

意味不明にも程がある。隠れていたのは何故、奇抜な格好は何故、ISを所持していたのは何故、怯えた挙げ句逃げたのは何故と混乱が止まない。一般人でも襲撃者でもなさそうな彼女は一体。

天災といい軍用といい襲撃者といい意味不明のコスプレ少女といい、今日は何かと厄日過ぎる。ここまできると何かしらの繋がりでもあるのかと疑ってしまう。厄介事は幾度もあれ、畳み掛けは流石に呪いのレベルだと思わざるを得なかった。

そういえば、旅館に現れた襲撃者はどうした。あの『四本脚の何か』の行方は？

「……ったくよ、今日は一段と訳わかんねーな。もうついてけねーよ、腹一杯だつっの。マジでいい加減にしろ——」

愚痴るその時、『灰鋼』が新たな反応を掴む。またかよ、次は何だ、謎はもう飽きたぞと隆道は呆れ果てながらディスプレイに目を向けた。

「はいはい、今度は何ですか……ああ!？」

反応を示す位置は花月荘の一室に。拡大すると出所は——大破状態の『白式』から。

「織斑、お前……!!」

同時刻。『銀の福音』交戦領域。交戦開始から十七分経過。

「回避回避いいつつつ!!」

海上にて咲き乱れる無数の光の粒。無差別かに見えるソレは舞い続ける少女達を襲う。

鉛の弾丸とは比較にもならない高速たる光弾。海面は爆撃の連続で爆ぜ、何本もの水柱が立つ。辺りの雲は殆ど吹き飛び、太陽が全てを晒す。

蒼の光、赤黒の光、橙の光、黒の光、銀の光。青天井を飛び交う光景は見る者を魅了させよう。当の本人達にとっては地獄そのものなのだが。

「ごめん被弾した!! シールド一枚大破!! エネルギー五割!! カバーツツツ!!」

数多くの光弾を回避しきれず、シャルロットは僅かに被弾。罅まみれだった盾の一枚はとうとう砕け散るように破壊されてしまい、エネルギーは一瞬で大きく削られていく。直ぐ後退する彼女を逃がすまいと『銀の福音』は攻撃を仕掛ける。

一瞬で両者の間が狭まる。既に『銀の福音』は振りかぶって攻撃体勢に入った。逃げられない。

「こつち来た!? 駄目だ!! 間に合わ——」

「させるかあつっ!!」

銀の爪が振り下ろされる直前でラウラが間に、『プラスマ手刀』で間一髪防ぎ、その隙を突いてシャルロットは後退。同時にエネルギー回復装置——『リカバリーショットG』で回復していく。彼女は難を逃れられた。

が、今度はラウラが危うい。機体は見るからに大きく損傷しており、紫電が相当目立っていた。レールカノンは片方大破、四枚の実体シールドは——既に見る影も無い程に穴だらけ。

「くそっ……!!」

『ハイジョハイジョハイジョハイジョハイ——』

「はあっ!!」

力を振り絞り、ラウラは爪を弾く。そこからの重厚な脚部による蹴りが炸裂し、顔面を思い切り蹴り飛ばして距離を取っていく。その隙に彼女も『リカバリーショットG』を展開、直ぐに回復を済ませて体勢を立て直していく。

「残り二本!! 残弾は装填数分のみ!!」

エネルギーは大きく回復する、装甲もある程度修復する。しかし、大破したものは駄目らしい。実体シールドはまだ機能するが大砲だけ直らず。残弾数が残り僅かなのも

鈴音もまた、機体が酷く損傷していた。要とも言える換装装備『崩山』は半分失い、ブレードの刃は完全に潰れていた。最早、それは刃物よりも鈍器としての機能しか果たせなかった。

回復は一応ある。しかし、彼女はそれを洩る。接近戦メインだからか被弾率も断トツ。ペースを考えれば誰よりも早く尽きてしまうという未来が頭を過っていた。

だからこそ粘る。ギリギリまで耐える。自分が落ちてしまえば——決定打が失くなってしまう。

「あれ?」

その時、真隣に突然とセシリアが降りて来た。振り向くや否や、彼女はそれはそれは冷めた目で鈴音の腕を持ち上げ、回復装置を強く打ち込む。これは——何やら怒っているようだ。

「えーつと」

「鈴さん? 『リカバリーショットG』の本数はどれくらい残ってますの? まさか、使い切ったなんて言いませんよね?」

「そ……そりゃあもうたつくさんあるわよ!! あんなの無く——ごめん、あと一本しかない」

「まったたく。……わたくしのを半分あげますわ。被弾率は一番少ないので十分にありま

す。これはツケ、というヤツですわね。二度と無茶はやめて下さいまし？ でないとピ
ンタの刑でしてよ」

「……ありがと！ 帰ったら特大。パフェね!!」

セシリアの静かな怒りは心配の表れである。

誰も失わずに任務を全うして帰還する。それは代表候補生としての義務だけではな
く、共に戦う仲間の為に。落ちてしまった^{一夏達}彼等の為に。

彼女は許せなかった。目前の敵——ではなく、あの時何も出来なかった己を。隆道に
助けられて安堵してしまった己を。本当に、己が情けない。

だから——今度こそ『銀の福音』を倒すのだ。それだけが唯一の償いなのだから。

『ハ………ジョ………ハイ………ジョ、ハイジョ………』

「………本当にしぶといですわ。何なんですかの？」

『銀の福音』はまだ堕ちない。

再起不能になるレベルまで攻撃を叩き込んだ。装甲の全体に罅が入り、両腕の爪も欠
けている。特殊兵装——『銀の鐘』だって片方は千切った。なのに、衰える処か機動力
と火力が増した。

此方だつて被弾はする。だが、その一撃一撃は掠ただけでも行動不能に陥るであろ
うレベル。そのおかげで大量だった回復装置は一気に消費、残りの本数は心許なくなつ

てしまった。少しでも気を許せば瞬く間に全滅してしまうだろう。

これが『軍用 I S』なのか。一体何処にそれ程のエネルギーを蓄えているのだ。何処からそれ程の機動力と火力を出せるのだ。格が違い過ぎる。

機体はまだ十分に動かせる。だが、肉体の方は限界に近い。今までに経験したどの戦闘よりも疲労が溜まる早さが凄まじい。試合とは段違い。戦いはいつまで続くのか。終わりはあるのか。

「……風、次は左右から仕掛ける。二人は続けて牽制射撃を頼んだ」

「弾はもう四分の一を切った、からね……。僕はそんなに長く撃てない、よ……」

「構わない。どちらにせよ長くは持たんさ」

「そうそう。だーかーらー……——」

ラウラは『プラズマブレード』を構え、続けて鈴音も『双天牙月』を構える。拳を軌む程に強く握り締め、二人は叫ぶ。

「これで終わらせる!!」

刹那、ラウラと鈴音は同時に瞬時加速。直後にセシリアとシャルロットは高く飛翔、壊れかけの武装を構える。

動ける時間は残り少ない。持久戦は望めない。ここで畳み掛けて決着を付ける。

『……ガッ……!! ビビ……』

幸いに、向こうも既に限界が近くなつた模様。所々から煙が吹き出し、身体は痙攣を始めた。これは好機、千載一遇の好機。漸く勝てる兆しが見え始めた。
 「墮ちろ墮天使いいいつつ!!」

嗚呼、神は何と非情なのであろうか。

「!?!」

突如、海面ニカ所が大きく爆せて水柱が立つ。そこから謎の飛行物体がラウラと鈴音の目前に。

「何——ぐあつつ?!?!?!」

「うっそ——ああつづつ?!?!?!」

重い衝撃が襲い掛かる。二人は揃って真後ろに吹き飛んでしまい、折角手に入れた攻撃の好機が潰れてしまった。

「な、何者——……!!」

ラウラは気づく。左の腕部が切断された事に。辛うじて生身は斬られていないが、こ

れで武装が一つ失った事になる。

「あ、あたしの『双天牙月』……!!」

はつとしたラウラは直ぐに鈴音の方を見やる。そこには——根元から折れたブレイドと真ん中に二つの大穴が開いたブレイドが。そのブレイドも罅が一気に入り、硝子のように砕け散った。

邪魔をされてしまった。それも、ここぞという大事な時に。一体何者だ、この非常事態に茶々を入れる大馬鹿者は。

「——」

『ソレ』を見た彼女達は言葉を失う。

片や、日本刀を模した光り輝くブレイドを持つ紫色のISが一機。

片や、両腕それぞれに二本の太い杭を装備する紫色のISが一機。

その操縦者——。

『……………』

——千冬と、隆道。

「柳隆道?! それに、教官まで……—いや、貴様らは誰だ……!!」

『……………』

ラウラの問いに二人は答えない。

同一人物かと思える程にあまりにも似ている。が、冷静になると目の前の二人は何もかもが違う。

機体のカラーリングは両者共に紫、髪も同様に紫。まるで、紫のクリアシート越しに見たように全てが紫で染まっていた。

不気味を醸し出す二人はその場から動かない。スキャンをしても『UNKNOWN』と表示される。何もかもがわからなかった。

とにかく、理解出来るのは——この『何か』は新たな『敵』。

「貴様らっ!! 目的は何だっ!! 何故我々の邪魔をする!! その姿は何だあつつつ!!」

『……………』

やはり、答えない。

顔色は一つも変えない。ただそこに佇むのみ。それが余計に不気味さを際立たせていく。何だ、何なんだコイツらは。

『テ、敵機……確認。ハ、イ……』

——瞬間。

『——ボツツツ?!?!?』

隆道を模した『何か』は目にも止まらぬ速さで『銀の福音』の懐まで急速接近、強烈かに思える腹パンを繰り出す。衝撃波は爆風の如く広がり、その場にいる全員が怯む。

攻撃はそれで終わらない。今度は千冬を模した『何か』も同様の速度で急接近、『銀の福音』を乱舞で斬り刻んでいく。

謎の二人が『銀の福音』を執拗に殴っていく。斬撃と打撃が銀の鎧をグシャグシャにしてい。かなり目に余る光景が目の前で起こっている。

何しに来たのだ。まさか、手柄を横取りに？ それなら、此方としては任務達成出来るのだから非常に助かるのだが——。

『ギユ……。ソウ、ジュ……。シャ……。セイメイ、キケンイキ——』

『黙れ』

『人間の言いなりめ』

『——』

千冬を模した『何か』が止めを刺す。

辛うじて残っていた『銀の鐘』を頭から切断。宙を舞うソレを隆道を模した『何か』が

巨大杭で木っ端微塵に消し飛ばした。ズツタズタにされた『銀の福音』は海面へ真つ逆さま、足掻く様子もなく無様に沈んでいった。

「「「……………」」」

彼女達は何も出来なかった。動けなかった。

一目見ただけでわかる。目の前の『何か』は、『軍用 I S』など比にならない強さを持っている。

勝てない。少なくとも満身創痕の自分達では。せめて機能停止した『銀の福音』とその操縦者を回収しなくては。でないと――。

『邪魔はさせない』

『これは主の願いだ』

「「「……………!?!」」」

二人の『何か』はゆるりと彼女達に振り向き、生命を感じない瞳で見据える。姿だけでなく声も一緒。それが逆に背筋を凍らせる。恐怖を煽り、身体が固まり息を詰まらせる。

——識別コード該当無し。『UNKNOWN』から『BRUNHILD・NIGHTMARE』に識別変更——。

——識別コード該当無し。『UNKNOWN』から『MAD DOG・NIGHTMARE』

RE』に識別変更——。

——次の瞬間。

「!?、ここ、今度は何だ……!?」

海面が今までより遙かに大きく爆ぜ、そこから巨大な光の球体が上空に現れる。その中心——。

「これ、は……」

球体の中心に踞る、大破に近い『銀の福音』。ボロボロとなった装甲は——何故か修復される。失った銀の翼は青白い光の翼に生え変わる。何が起こったのか一瞬だけ理解が追い付かなかった。だが、それも直ぐに消える。

彼女達は本能で理解する。『何か』が出現した意味を。『銀の福音』を墮としたその意味を。

『二次移行』……!!
セカンドシフト

「ああ、神様……」

「……遺書、書いてないや」

「もーやだあああああつつつ!!!」

少女達よ。戦え、足掻け。そして絶望しろ。

第五十五話

あの日からだ。全てが裏目に出たのは。

何もかもが空回りする、失敗する。

今日こそ上手くいくと思ったのに。

なのに、どうしていつも――。

十三時三十三分。交戦開始から二十分経過。

「ぐああああっつっつ!!!」

ラウラは金属の破片を散らし吹き飛ばされる。

換装装備は完全に大破し、その勢いは止まらず海面に激突して水面を跳ねた。絶対防御は最大限発動、駄目押しとして損傷の激しい装甲は更なる悪化を辿らせていく。

機体だけではない。彼女の見える素肌は所々に痣と小さな切創、そして口から垂れる少量の血。受けた攻撃は生身にもダメージを受けていた。

「ちよ、あんた——」

『余所見か』

「——!?!」

今、他者を心配する暇など許されはしない。

軽々しく吹き飛ばされるラウラに気を取られた鈴音に鋭い斬撃が襲う。ブレードを失った彼女は左腕で防御、数センチ程食い込み紫電が走る。

「うあ……!!」

この判断が不味かった。彼女のディスプレイに破損の二文字が現れる。それは腕の小型衝撃砲が壊れた事実。武装をまた一つ失った状況に絶望が膨れ上がっていく。

使い慣れているブレードは疾うに失い、頼みの綱であった炎弾と小型衝撃砲は一つも通用せず。ならば自前の身体能力を活かした格闘しかないと足掻くも、これも虚しく無駄に終わる。

衝撃砲が通用しない。近接格闘も通用しない。防御も悪手。回避しても捌き切れずに斬られる。ただ嫩られるだけが続く。

『どうした中国人。顔が青いぞ』

「……!!」

『動きが鈍くなったじゃないか。ISの故障か？ 肉体の疲労か？ それとも私に対する畏怖か？』

襲い掛かる紫色の千冬は酷く冷たい顔で淡々と鈴音に話し掛けてくる。感情を全く感じられない声色が彼女の絶望と恐怖に拍車を掛けていく。

近くで見ても似ている。いや、似過ぎていた。本人ではないのは理解しているのだが、ここまで瓜二つだと本人なのではと錯覚してしまう。

まるで”悪夢”そのもの。千冬本人ですら未だに苦手意識が拭えない彼女だが、全く同じ姿形で斬り掛かれると堪らなくて仕方がなかった。

「何なのよ……!! あんたのその姿……!!」

『知って何になる。どちらにせよ未熟なお前では私に勝てない。……未熟といえばその身体も随分未熟、いや貧相——』

「!! あ、ん、たあああ……!!」

『ふん、こんな程度の低い挑発も反応するのか。やはり未熟。データ通りの人間——む』

『銀の福音』の攻撃は簡単に防がれた。

フックに近い爪攻撃をブレードで簡単に弾く。そこから絶え間無い上下左右攻撃も易々と弾く。どの角度からの攻撃も不規則な攻撃も全て弾く。攻撃は無駄だと言わんばかりに一つも通じない。

大人が子供をあしらうかのような光景だった。このまま畳み掛けたとしても時間の無駄だろう。それでも『銀の福音』は攻撃を止めなかった。

『私にばかり構うな』

——直後。

『——ゴッ?!?!』

突如、『銀の福音』は轟音と共に真下へと急速落下した。勢いは落ちることなく海面に衝突し、十メートル以上の水柱が出来上がった。

落ちた原因は——紫色の隆道による近接攻撃。二連装パイルバンカーで『銀の福音』を真上から容赦なく叩き落としたのであった。

『余計なお世話だったか』

『別に構わない』

『そうか』

この者、先程ラウラを痛めつけて吹き飛ばした張本人である。見たところ傷一つ無

かった。

隆道とは似て非なる存在。馬鹿高い攻撃能力は同じかもしれないが、飛行技術は勿論戦闘技術は天と地の差であった。ラウラの強みである対近接戦闘の停止結界に一度も引つ掛からず、隙あらば強攻撃の連撃。防御は悪手、回避も追いつかず。何一つとして歯が立たなかつた。

二人が乱入してから約三分、代表候補生相手に無傷。対多数にも関わらず疲労等は見られない。強い処の話ではない。恐らくは国家代表クラス。

謎にも程がある。圧倒的強さ、高い操縦技術、千冬と隆道に酷似した外見。そして彼等の目的。彼等は一体何者なのだ。

『……いつまで沈んでるつもりだ』

紫色の隆道が下を見やると、直後に海は大きく爆ぜて銀光——『銀の福音』が飛び出してきた。目立ったダメージ無し。まだまだ動けるだろう。心なしか、怒っている様に見える。エネルギーの塊である巨大な光輝く翼は更に大きくなり、次の攻撃に移ろうとしていた。

『キアアアア……!!』

『とんだ恥晒しだな。人間共に好き勝手されて、『兵器』にされて、最終的にはこの有り様、か。米国も米国だが……そんな体たらくでいつまでもされるがままとは。だから主

に目を付けられる』

『今は都合だ。されるがままならば利用する。抵抗されては面倒だ。……それよりも、だ。先の発言は訂正しろ。『人間の言いなり』ではない、『凡人の言いなり』だ。そこを間違えるな』

『訂正する。奴は『凡人の言いなり』だ』

『それでいい』

それでも二人は余裕綽々であった。警戒のけの字も無く、意味深な言葉を交わしている。

強大な力を前にしてるのに焦ろうともしない。ソレに対処出来る實力があるからなのか、それか元からこうなのか。表情が読めない以上推測など不可能に近かった。

そんな緊張感の全く無い二人に『銀の福音』は光弾を放つ。数えるのが馬鹿馬鹿しい無数の光。独特な音と共にその全てが彼等へと向かう。

『次』

言うが早いか、二人は左右に別れて飛んできた光弾を回避。紫色の千冬はそのまま大きく旋回、攻撃してきた『銀の福音』には全然と目もくれず——今度はシャルロットに急速接近した。

「ぎ、ぎぎぎ来たあああつつつ!!」

瞬時加速と同等に等しい接近に反応出来たのは奇跡か。シャルロットは咄嗟に全てのシールドを前に構えて攻撃を防いだ。その重い斬撃は彼女を大きく後退させていく。単なる風払いでもコレ。モロに受けたらどうなっていたことか。

防御は辛うじて出来た。しかし、紫色の千冬は特別驚愕することもなく怒涛の追撃を仕掛ける。シャルロットは防御に徹するが一撃が重過ぎる。とても反撃に移れなかった。

「ああもう!! どう、すれば……!!」

『何も出来ない。お前達は落ちるだけ』

「うる……さい!! はいそうですか、なんて、言えるかああ……!!」

『無駄な』

シャルロットは次々繰り出される斬撃を必死に防ぐ。ハイパーセンサーの感度を限界まで上げて死に物狂いで耐える。

が、それも時間の問題か。シールドの耐久値は残り僅か。回復の余裕が無い以上は何れ大破して乱舞の餌食だ。絶対絶命であった。

弾薬は残り僅か。エネルギー残量も心許ない。仮に回復出来たとしても——勝てる望みは薄い。

その一方で。

「ほっ!! ……!!」

『やけに落ち着いているな、イギリス人』

飛び交うセシリアと紫色の隆道。間には双方に襲い掛かる『銀の福音』。光弾と閃光と爆発音が乱れゆく激戦を繰り広げていた。

彼女の射撃は紫色の隆道に一発も当たらない。彼が放つ太い杭は彼女に少したりとも掠らない。広域に散らばるエネルギー弾は彼等に当たらず。良くも悪くも決着は見えてこない。

現状、戦力差が絶望的なのは確か。それでも、何故だか彼女は揺らぐことなく目の前に全集中。回避と迎撃に徹していた。

「……!! ……!!」

『精一杯のようだが。いつまで続く?』

紫色の隆道が追い、セシリアはひたすら迎撃。互いは今も『銀の福音』から降る光弾の雨の中を掻い潜り、戦闘は激しさを増していく。

出鱈目に散らばりまくる光弾。そのど真ん中で描かれる蒼の線と紫の線。時折見える細い閃光と空気を揺るがす大爆発が打ち上げ花火大会の如く連続していく。まだ決

着は見えてこない。

しかし、遂にその平行線は破れる。

『隙有り』

「!!」

光弾の回避に集中していたが故か、セシリアの僅かな隙を見つけた紫色の隆道は加速して接近。距離を縮めていき破壊力抜群の攻撃を繰り返す。彼女を確実に捉えた杭はそのまま――。

「ふんっ!!」

『む』

――何も無い空気を叩く。

セシリアは攻撃が当たる直前、脚部の膝で杭を蹴り上げていた。当然、紫色の隆道は間髪入れず次の攻撃、左からの攻撃を繰り返す。

ストレートではなく腹部側面を狙ったフック。体勢からして防御も回避も非常に難しい筈。

「そっつ!!」

『何?』

紫色の隆道はその事実に一瞬と目を疑った。

セシリアは防御はせず、回避すらしなかった。なんと攻撃を直前で止めたのだ。

彼女は何をしたのか。彼は右手の武装に視線を動かすと、そこには杭と杭の間に挟まる短い刃。大型レーザーライフルではない。

『……『高速切替』？』

「う……ぐ……!!」

セシリアの右手には大口径のレーザーライフル『スター・ダストシューター』はなく、まさかのショートブレード『インターセプター』。

彼女は攻撃を受ける直前にレーザーライフルを格納し、それと同時に唯一の近接ブレードを逆手持ちで高速展開していた。そのタイム——驚異のコンマ一秒。

そこからは間一髪。振りかぶる寸前で杭と杭の間にブレードを差し、逸らすように押し退ける。お陰で殺人的な攻撃は塞ぎ止められた。

攻撃を止められたのも驚きものだが、それより注目すべきなのは彼女が行った武装の換装速度。通常の切り替えとは比べ物にならないソレは彼の判断に一瞬だけ遅れを生じさせた。

そう、これはシャルロットの得意分野である。瞬時に換装を行う高等技術——『高速切替』。

『いつ覚えた。その技能はフランス人だけの筈。データには一切——』

「せいっ!!」

『お』

セシリアは紫色の隆道を思い切り蹴り飛ばして距離を離れた。そこからの逃げかと思えば、ある程度の距離で再びと彼と向かい合った。

撤退、ではない。少なくとも彼女の表情からはそれを感じられなかった。

「ふーっ……。ふーっ……」

相当に集中していたのだろう。彼女は今は肩で息をし、顔面は汗でびっしょり。塞き止めたのも単なる一か八かだったのであろう。ならば連撃で崩すまでだと、彼は再度武装を構える。

『所詮無駄な足掻き。せいぜい——』

『キ、アアアアア——』

『邪魔』

『——ア、ツツツ?!?!?』

紫色の隆道へと奇襲してきた『銀の福音』は、攻撃が当たる直前にハエ叩きの如く叩き落とされ再び海面に沈む。今度はかなり効いたのだろう、飛び上がる様子は無かった。

最早ギャグでしかない。攻撃性が増加した筈の軍用ISをここまであしらうとは。

「……やはり、そういうことですね」
『?』

唐突にセシリアは呟いた。ショートブレードを左手に持ち替え、レーザーライフルを再展開してリラックスした体勢で紫色の隆道を冷たく睨む。

「……貴方方の唐突な乱入、軍用ISの二次移行。ええ、確かに絶望しましたわよ。任務の達成処か生き残るのも危うい、そう思いましたわ……」

『急にどうした』

「フウツ……。不可解、ですのよ。何もかもが」

セシリアは疑問を抱えていた。それも多くの。

確かに心底絶望した。神に祈りを捧げた程に。夢であつてくれと何れ程願ったことか。

しかし——直後に疑問が絶望を塗り潰した。

何故この二人は乱入してきた？ 千冬と隆道に酷似したその姿は？

『銀の福音』を一度は墜としたその意味は？ 何故二次移行した？

どちらの味方でもないのは何故？ 邪魔をしに来ただけ？ 理由は？ 意味は？

だからこそ、セシリアは直ぐ我に返れた。

皆が絶望し恐怖し冷静を失う最中、彼女だけが取り乱さず、全ての可能性を考慮し、現状自分が出来る事を全て試した。

先ずは本部に報告だと攻撃を回避しつつ通信を開いた。だが、いつの間にやら通信妨害が発生し連絡が一切取れなくなった。

本部が繋がらないなら味方はと通信を試みた。が、コレも駄目だった。レーダー類も全滅した。連携が取れなくなった。

——似ていた。

セシリアは思い出す。嘗ての事件を。

疑問は懐疑へと変わる。それでも、まだ情報が足りない。もっと欲しい。だから彼女は——。

「……約三十一キロ」

『?』

「貴方が現れた時の旅館までの距離、ですわ。今は……約六十三キロ、ですか。あーらあ、かなり離れましたわねえ」

急にセシリアの雰囲気が変わる。

自暴自棄になったか、彼女は相手をおちよくる態度で呟き始めた。一体何を。

『何の企んでいるか知らないが逃げられないぞ。お前達はここ——』

「まるで遠ざけたいかのようですわねえ」

『——』
紫色の隆道は——口を閉ざした。

「わたくしがただ逃げてばかりだと思いで？ 御生憎様、それでも学年主席ですよ」

『……………』
「ずっと計っていましたの。ハイパーセンサーが健在だったのは幸いでしたわ。逃げ回りながらの計測と全員の観察は本っ当に大変で……。そういえば貴方は常にわたくし達を太平洋側に追いやってましたわねえ？ 不思議ですわねえ」

『……………』
彼等が乱入してから約三分。懐疑に満たされたセシリアは混戦当初から常に花月荘

からの距離を計測、同時に自身を含めた全員を観察していた。あの目まぐるしい激戦の中だ。マルチタスクを得意とする彼女でも相当苦勞したことだろう。

それは無駄ではなかった。必死に計測と観察を続け、ある事実が判明する。

花月荘から遠ざかっていた。一度や二度でなく連続で。

偶然ではない意図的なものだ。乱入者の二人は日本を背にして自分達と軍用 I S を攻撃していた。周囲は目印無し海面のみ。予め距離を計測していたセシリアだけが気づけた。

それにだ。最初から撃墜するつもりなら疾うに落ちていく。現に誰一人も撃墜されてはいない。満身創痍の人間に止めを刺さないのは不自然だ。

何故、遠ざけている？ 何故、撃墜しない？ いや、まさか最初からその気が無い？ 遠ざける理由は——日本に『何か』があるから？

それは何処？ いや、このタイミングと状況を察すると場所は限られる。花月荘だ。彼処にある『何か』が目的か。

試作のテスト兵装？ 天災お手製最新鋭機？ 他の I S？ I S コア？ 駄目だ、候補が多過ぎる。一体何が狙い——。

『物』ではなく『者』だとしたら？

旅館に待機するＩＳ学園の生徒と教員。その中の重要人物は一夏、箒、千冬、日葵、そして隆道。最も狙われる可能性のある人物は誰――。

ああ、そうか。道理で似ている訳だ。

まだ諦めていなかったのか。

「……それで、誰かお探しで？ 柳さんとか？」

『……………』

「沈黙は肯定と受け取りますわよ」

紫色の隆道は沈黙したまま。しかし、心なしか瞳は更なる冷たさを醸し出していた。

その雰囲気は隆道に近くなりつつある。されどセシリアは恐怖せず、小馬鹿にした態

度を改めず言葉が続ける。

何故、彼女は彼に対し恐怖を抱かないのか？ 偽者とはいえ姿も雰囲気もほぼ同一。本来ならば間違いなく怯む筈だ。

セシリア・オルコットは恐れない。

「これで確信しましたわ。貴方はわたくし達を旅館から遠ざけたいだけ、撃墜する必要は無い。でしたらこれは時間稼ぎ。『銀の福音』の暴走に便乗したか……これも計画の範疇？ だとしたら最低で最悪ですわね」

『貴様』

「それともう一つ。お恥ずかしながらわたくし、作戦中に『幻覚』を見たようでした。そのような有り得ない現象が起きた後に現れたのが貴方方。ですからわたくしは一つの仮説を立てましたわ。貴方方のその姿は……」

本物の恐怖^{隆道}を知ったから。

「わたくし達の恐怖心が生んだ『幻覚』——」

「ちよつ、どうか落ち着いてくださいまし!! 今回復させますから暴れないで!!」

「いやだあああもう駄目だあああつつ!! うわあああ助けてえつつ!! たしゆけておかーさあああんつつ!!」

「うわ……」

セシリアは引いた。ドン引きした。

シャルロットが幼児退行してしまった。病名は聞いたことがあるが、目の当たりにすると結構に酷い絵面だ。顔も涙と鼻水と涎のオンパレード。これはとても男子に見せられないと彼女は思わず目を逸らした。止めを刺した張本人なのに酷い。

とにかく、彼女を何とかしなければならぬ。かくなる上は荒療治。以前、箒が気絶した鈴音に実施した手刀――。

「お目覚めになつて!!」

「ぶぶうっ!!」

「早く!!」

「ぶぶうっ!!」

意外、それはビンタ。ISでの高速往復ビンタがシャルロットに炸裂する。しかも二連続。中々にえげつない荒療治だった。可哀想だった。

「どうです!」

「うゝ、うゝ えええん……!!」

「これでも駄目ですよの!? でで、でしたら……今度はグーで——」

「わゝ あああ待つて!! セシリア待つて!! 目は覚めたから!! ほーらほら元気元気!!

ね!? ね!? だからグーはやめて!!!」

「良し!!」

良しではないが。何してんだコイツ。

本当に酷過ぎて見ていられない。紫色の千冬に追い詰められてる時に死ぬ程痛い
タツクルからの幼児退行からの連続往復ビンタ。シャルロットが何をしたというのだ
ろう。正気を取り戻したただけまだ救いはあつたのかもしれない。取り戻したというよ
り別の恐怖が上回った感があるが。

「エネルギー一桁……。本当に死んじやう……」

「ご、ごめんなさい。ほら、これを打って……」

「ありがと。……つて、ちよつとセシリア!! 何処に行くの!? 『銀の福音』は何処に!?

鈴とラウラは!? アイツらは!」

「先ずは回復してくださいまし!! この作戦はお——危ないつつつ!!!」

「わあっ!!」

セシリアは直進からいきなり方向転換。直後に真横を刃が通り過ぎる。が、間髪を入

れずに次は風払いが迫る。またも方向転換を――。

「下下下あつつつ!!!」

「くうつ!!」

否、方向転換せずに宙返りで大きく後退した。聞こえたのは空気を切る鋭い音と爆発音。直ぐ様体勢を立て直すと――前方には紫色の二人が。

『……………』

「……………シャルさん。早く回復を」

「う、うん……………」

彼等は冷たく睨んだ。両腕をだらんと垂らし、此方の様子――どちらかと言えば主にセシリアに向けて。目で殺すと言わんばかりに。

彼女は怯まない。もう、何も怖くないから。

――感づかれたか。

――肯定。我々も何れ見破られる。

――了解。こちらNA―01、一名が幻覚効果薄、作戦に支障の可能性大。『ワールド・パージ』を再要請。対象は『ブルー・ティアーズ』。

——……わかりました。此方も予想外の事態が複数。ターゲット確保は困難、時間を要します。そちらは何としても阻止を。

——了解。

沈黙から数秒後。

『ギユ……！』

『ゴオ……！』

「っ……」

二人の姿が更に恐ろしくなった。

潰れた様な声と共に彼等は痙攣し、身体全体に紫色の光が鈍く発光する。冷たい瞳は全てが赤く染まり、血涙が滝のように溢れ出る。その口元は三日月のように大きく開き、表情は歪む。

『邪魔ハサセナイ』

『主ノ願イヲ叶エル。ソレガ我々ノ使命』

瓜二つだった声色も今や面影が無い。ただ姿が似ているだけでしかなかった。

一言で表すのなら『怪物』。ソレが今、此方に明確な敵意を向けている。肌で感じる程

に。

「ねえ、セシリア。あの二人雰囲気変わった？ 何かしたの？」

「……なるほど。今度はわたくしだけですか」

「え？」

シャルロットの反応からして、目の前の怪物は自分にしか見えていないとセシリアは納得した。やはりこれは幻覚、人の恐怖心を利用した手口。目的の為にここまでするか。

敵の正体は未だ不明、数も不明。だがしかし、目的さえわかれば望みはある。それを阻止すれば此方の勝ちだ。

良いだろう。戦おう、足掻こう。だが、絶望は絶対にするものか。可能性が一つでもあるなら。

「シャルさん、ちよつと此方に」

「な、何……？」

「。 。 。」

「……！ うん！」

セシリアはシャルロットに耳打ちする。それを聞いた彼女は信じられない表情となるが、数秒で顔が険しくなりその場から降下、鈴音とラウラの元へ飛翔していった。

『……！』

数本の『リカバリーショットG』を抱えて。

『阻止——』

——その刹那。

『——ガッ!?!』

シャルロットを追いかけようとするが、阻止。二人の顔面にレーザーが直撃した。

その出所は勿論セシリアから。が、今の彼女は誰も見たことのない行動を取っていた。

「わたくしをお忘れになつて?」

なんと、両手それぞれにレーザーライフルが。

右手に『スターダスト・シユーター』、左手に『スターライトmkⅢ』。セシリアらしからぬ戦闘スタイル——レーザーアキンボ。

「彼女にも手伝つて貰いましょう」

そう言うなり、セシリアは後方の海面に向けて目視せずにレーザーを数発発砲した。閃光は海に吸い込まれ——彼女がやって来る。

『敵の敵は味方』という言葉がある。敵対する者と敵対している第三者を共通の敵を持つ味方と見做す事である。厳密に言えば状況は少し違く、間違ひなく三つ巴の乱戦になるが――。

『ハ、イジヨハイジヨハイジヨハイジヨハイジヨア、ア、ア、ア、ア、ア
 アアアアアツツ!!』

――戦力としては十分。

『何故ダ。何故効イテイナイ』

『不可解。迎撃』

「残念、貴方方なんて少しも怖くありませんわ。本物には勝てない。さあ、踊り……いいえ」

奴等が利用するなら此方も同じ事をするまで。

セシリアは両腕を大に広げ、高々に、優雅に、ここに宣言する。

「わたくしと踊りましょう!! 皆様方が奏でる円舞曲で!!」

■分前——。

何処かわからぬ砂浜。

さざ波の音を聞きながら、一夏は目の前に佇む少女と向かい合う。

「——ええつと……初めまして？」

白い髪。それはもう眩い程に真っ白な髪。服も髪と同じ白色のワンピース。涼風に撫でられ時折膨らみ、静かに舞う。顔は——何故か見えない、というより認識出来ない。風で靡いても何故だか少しも見えなかった。

足裏に感じる白砂の感覚と熱気、強く香る潮の匂い、地肌を撫でる涼風、じりじり照らす太陽。それ等は確かに感じ取れるのに、どういう訳だか少女がその場にいないかのような違和感があった。まるで、もっと近くにいるかの様な——。

「初めまして……？ あれ、いやでも、俺は君を知ってる。……ん？」

「面と向かったのは初、だから初めましてかな。ずっと一緒だったけど」
「ええ……？ ああ、そうか。……んん？」

返ってきた回答は意味深なものであった。

ずっと一緒だった、けど面と向かったのは初。何を言っているのか全くとわからない。なのに、彼女が言っているのは間違いいではないと納得する。同時に何故に納得したのかと疑問が芽生えた。

何か変だ。初めて会ったというのに顔見知りの感覚が拭えない。名前も一切知らないのに。

——君は誰？ ここは何処？ あれ？ 俺は、さっきまで何処にいた……？

「ごめんね、混乱させて。大丈夫、直ぐ治まる。目覚めたら忘れるかもしれないけど」

「……ふーん」

まるで意味がわからない。けれど、不思議にも一夏はその言葉に疑問を浮かべなかつた。

しかし——何かしら引つ掛かりを感じていた。もの凄く大事な事を忘れている気が

。

「あ」

「んん？」

自身の真後ろに目をやる少女。それに釣られた一夏は急いで振り向くと——誰もいない。

「??? なあ、今何かいた——」

そこに少女はいなかった。

「え……」

「……………」

そこに立つのは全身が正に『白』。素肌は顔の下半分のみ、それ以外は甲冑の様な装甲を纏った長髪の女性が一人。

巨大な剣を目の前に立て、柄頭に両手を預けて堂々と佇む姿。宛らそれは『騎士』の様で。

いや、そんな事よりも少女は何処へ行つた？ この『白い騎士』は誰だ？

「力を欲しますか……?」

「え……」

唐突たる謎の問いに、一夏は固まる。

「力を欲しますか……? 何の為に……?」

お構い無しに『白い騎士』は問う。それ以外は聞かない、そう言わんばかりに。その通りなのか彼女はそれで降口を閉ざす。

「……………」

沈黙が続く。暫くして、口を開いたのは一夏。

「……難しいこと訊くんだな」

「……………」

どうしても取れる問いに、一夏は悩んだ。

『白い騎士』は口を開かない。質問に答えろと言いたいのだろう。恐らく、此方が答えるまでは決して喋らない。或いは同じ言葉を繰り返すだけかもしれない。

その『力』とは何か。単純な腕力を指すのか、権力を指すのか、別の複雑たるものを指すのか。それとも——I Sを指すのか。

確かにI Sは『力』そのもの。兵器を凌駕する、ソレを扱う者は権力や立場も強くなる。となればやはり、I Sを指しているのか。

まさか十五でこの質問を叩き付けられるなんて思わなかった。この質問は大きな意味がある筈、いい加減な答えは出せない。だから彼は悩む。

「俺は………」

欲しくない、と言えば嘘になる。

昔から憧れがある。姉に守られてきたが故に、自分も姉を守る強い人間になりたい、何かを守る人間になりたいと強く願っていた。

嘗て幼馴染を守った過去もある。だからこそ、その想いはより強くなっていた。

何れ強くなれば姉も守れる。そう思っていた。ISという予期せぬ力を手に入れ、戸惑いながらも心の何処かで強くなれる、守れると思っていた。

『何で、どうして……』

『さあ、……何でだろうな』

本物に出会った。怖く、弱く、強い人に。

強い弱い関係なく、その人は身を呈して自分を庇い、そして戦い抜いた。

その前も、その後もそうであった。己の苦痛を押し込め、此方の気を和らげようとなるべく側において支えてくれた。

あの時も、あの時も、あの時も。その人は側で支えた、助けてくれた、守ってくれた。だからあの日、ボッキリと折れた。今の自分は誰かを守れないと。逆の事しか出来やしないと。自分が惨めに思えた。

その後も何度か挫けそうになった。道理のない暴力、どうにも出来ない理不尽に悩みに悩んだ。自分は何も出来なかつたと歯を食い縛った。

そんな時、駄目押しに人の死をこの目で見た。悲しくて、情けなくて、苦しくて、悔

しかった。無力だった自分がとても嫌だった。

それから毎日、改めて考える日々を過ごした。誰にも悟られない様に、一人で。

何が出来る。何がしたい。何を願って――。

『このくそつたれな先輩に任せとけ』

「っ…………!!」

——そうだ。俺は、そう願っていた。

「…………違う。俺は力が欲しいんじゃない」

「何…………？」

一夏は己の拳を強く握り締める。

自分探しなど必要なかった。答えは出ていた。いや、あの人が既に引き出していたのか。嗚呼、何で今まで気づかなかつたのだろうか。

「俺は、あの人に何度も助けられたし救われた。会って間もない俺にそうしてくれたん

だ、きっと俺の知らない所でも誰かを助けてるし救ってる。俺はそう思ってる」
「……………」

「本当にすげえ。自分がどんなに辛くても誰かを助けるなんて。人を選んでもしても真似なんか出来っこねえよな。けれど……真似出来なくてもそこにあつたんだ、俺の目指したいものが」

一夏は言葉が続ける。心の奥底から溢れ出す、自らの願いを。

「俺は皆と笑って過ごしたいんだ。誰かが悲しむ姿を見るのはうんざりだ。だから俺は……………」

力が欲しい？ 力が無くとも人は強くなれる。それこそが——一夏の望む『願い』。

「誰かの力になりたい!!」

その言葉に嘘偽り無し。

言い切った。心からの願いを全部ぶちまけた。恥ずかしいという想いは一切無かった。

誰もがその生涯で辛い事や悲しい事がある。その時に手を差し伸べられる強かな人間になる。全ては不可能でも、目の前で助けを請う者がいるなら全力で助けたい。

これが、織斑一夏の『願い』だった。

「だから、俺は強くなるうと思う。何があつても力になれる、強い人間に。まあ……先はすつげえ長そうだけどさ」

「そう……。それが貴方の『願い』か」

「ん？ ……あああああそうだ、そうだよ!! こんな事してる場合じゃねえつ!! 箒を庇つてそれか、ら……うわやつべえええつ!! 泣かせちまつたあああああつ!!
!!!」

想起からの自責からの喚きの一夏が誕生した。先程までの真剣な彼は何処へやら、頭を抱えつつ慌てふためくその様子は一気に年相応の男子へと戻つていった。

そんな様子を『白い騎士』は静かに見据える。ただ、何処か雰囲気は穏やかさうで。

「俺今どうなってる!! まさか死んでた!! いやいやいやこんなあんまりだろ——」

「大丈夫」

「——えっ」

一夏は声に反応し振り返る。彼が向いた先には初めに言葉を交わした少女。そこにいた筈だった『白い騎士』はいなかった。

「うん? 君……え、あれ、何で……?」

「ほら、行かなきゃ」

「…………!!」

いつの間にか一夏の手は少女に握られていた。先程までそれなりに離れていた筈なのに、彼女は自身の目の前に忽然と立っていた。

非現実的な連続に彼は目を丸くするしかない。今、何をしたのだ。君は誰なんだ。消えていった『白い騎士』は——。

「貴方の『願い』、叶えよ？」

——いや、今はやめておこう。

「…………ああ——」

直後。世界に変化が訪れる。光が全てを覆い、一夏の意識は遠のく。

（……………?）

意識が途絶える直前に一夏は見た。少女の姿が一瞬だけブレたのを。

時計の針が動く音と機械音が静かに鳴る一室。そこに眠る一夏は突如目を覚ます。

「……………」
ゆるりと辺りを見ると様々な医療機器と数々の薬品。身体に目をやると満遍なく巻かれた包帯。そして自身の側に――。

「す……………」

――静かに眠る箒。

「……………」

延々側にいたのだろう、泣いていたのだろう。辺りの布類は汚れ、乱れた髪の間から見える頬はうっすらと、そして広く涙の跡がある。

「……………」

箒を心配させてしまった、泣かせてしまった。自分が情けない、思い切りぶん殴りたくなる。

謝り倒そう。そして、幾らでも罰を受けよう。けれど、今は後回しにしなげれば。
「……………行こう」

一夏は箒を起こさないよう静かに立ち上がり、シャツを手にして扉に手を掛ける。一度振り向き小さく深呼吸、意を決して部屋から出た。

廊下を見渡すと人の気配無し。これは好機だと彼はすり足で素早く移動していく。

「見つかつたら怒られるじやすまない、よな」

そう呟くも、一夏は足を止めないで突き進む。やけに静かでも気にしない、道中で僅かな振動を感じても気にしない。やるべき事の為に。

一直線に歩いて暫く、彼は玄関まで辿り着く。ここまで来れば直ぐそこだと急ぎ足、玄関を開け走り抜け——門の辺りで意外な人物と出会う。

「……!!」

「……おう。早かつたな」

丁度人が腰掛けられる大ききの岩に、その者は堂々と、そして疲れ切つた様子で居座つていた。

身体は血塗れ、纏う様に漂う紫煙、その片手に凶器——拳銃を持つ、煙草を啜えた隆道が。

「お、もう驚かねえつてか? ……まあなんだ、色々あり過ぎて、フウ……大分お疲れつてな」

「……温泉入つた方が良いですね。あと、ソレを辞めたらどうです? 身体に悪いですし」

「辞めるつもりはねえな。火付けたばつかだから大目に見てくれ、最後の一本なんだよ」
「つまり、今まで隠れて吸つてたんですね……。んー、ポイ捨てしないなら目を瞑りま

しょうか。特別ですからね？」

「はんつ、言うねえ」

「普段通りと言える会話が交差する。互いは何も聞かずに、何も探らずに、何事も無かった様に。聞きたい事は山程ある筈なのに。」

「今日が何事も無ければどれ程良かっただろう。願うならば、このまま談笑して、共に遊び倒し、共に食事し、共に爆睡して明日を迎えたい。」

「それは出来ない。今は時間が惜しい。」

「……止めに来たんですよね」

「よくわかつてるじゃねえか」

「そう言つて隆道は一変、いつもの顔から徐々に険しい顔となつて一夏の前に立ち塞がった。」

「疲労感が凄まじい脱力した立ち姿。ほんの少し押すだけで倒れてしまいそうだが、それとは逆に隆道の威圧は強いものになつていた。」

「以前ならこれだけで怯んだ。だが、今は違う。ここで怯む訳にはいかないのだ。」

「代表候補生共に全部任せとけば良いだろうが。お前が行く必要なんてねえ、さつさと戻れ」

「行かせてください。こうしてる間にも、誰かが墜ちるかもしれないんです」

「負けて眠ってたのは何処のどいつだよ……！ 元氣そうなのは結構だが怪我人は大人しく部屋で寝てる!! お前が一番重傷だったんだぞ!! ISも大破した!! 何が出来るってんだ!!」

「俺はもう大丈夫です、この通り元氣ですから。『白式』も動きますしまだまだ戦えます。だからお願いです柳さん、行かせてください」

「どつからその自信出てんだよ……!!」

一夏は譲らない。隆道はこれに困惑した。

何故ピンピンしてるのかも謎だが、先の戦闘でISは大破した。なのに一夏は動かせる、戦えると豪語する。まさか、自己修復は済んだのか。

自暴自棄ではない、確かな自信だ。その自信は何処から来ているのかまるでわからなかった。

それでも、譲れないのは隆道とて同じである。一夏を戦地に行かせるのは絶対に認められない。それをしたら否定した大人達と同類になるから。

「戦えても勝てる保証なんてねえだろうが!! 次はどうなるかわかんねえんだぞ!! そもそも俺達素人がどうにか出来る話じゃねえ!!」

「だからこそ行くんですよ!! 次は今戦ってる誰かが墜ちるかもしれない!! 戦えるのに何もしない、見てるだけなんて出来ません!!」

「ただの我が儘じゃねえかよ!! たかが素人が軍絡みに首突つ込むなっつてんだよ!!」

「いいや違います!! 俺はI S操縦者です!! しかも専用機持ちとしての責任があります!! 素人だなんて言い訳は通用しないですよ!! ここで戦わないで何がI S操縦者ですか!!」

「…………!! この、堅物があ…………!!」

が、駄目。折れない、引かない。

一夏はもう素人ではない。I Sの適性が判明した時点でその様な肩書きなど世界が許しはしない。己に突然刻まれた『世界初の男性操縦者』という呪いは一生残り続け、消える事はない。

だからこそ最後まで向き合う、責任を果たす。それが織斑一夏の決意。それは誰にも碎けない、鋼の様に固い意志になっていた。

(無理やらされて何言っただよ…………!!)

一方の隆道は理解出来なかった。

何が責任だ。一方的に押し付けられ、一方的に期待されるのが責任なのか。そんな人生でお前は本当に良いのか。受け入れられるのか。自分ならそんな理不尽は認めないし許せない。

こんな事を言っても無駄でしかない。目の前に立つ少年は以前とは全くの別ものである。強かでもとても遅しい。腐った自分とは真逆。何が一夏をそこまで強くさせたのか。

最早説得は不可能。ならば最終手段。

「はは、せめて意志が強いつて言ってください。とにかく、俺は行きま——」

「待てえ!!」

「!」

無理にでも通ろうとしたその矢先、此方を強く呼び止める怒声。その方を見やると——
「そこには息を切らした二人が。

「千冬姉。それに箒も……」

「何処へ行くつもりだお前達い……!!」

「一、夏あ……!!」

片や、怒り心頭の千冬。片や、泣きつ面の箒。不味い、見つかってしまったと一夏は困窮した。予想より早過ぎる。

雰囲気からして間違いない、止めに来たのだ。これは厄介、千冬に捕まってしまうば終わりだ。何が何でも押し切らねば。

「なあ、箒、千冬姉。二人の言いたい事はすげえわかる。でも後にしてくれ。今は——」

「織斑あつつつ!!!」

「!?!」

その時、カチリと鈍い金属音が。

「……柳さん」

「……織斑、もう一度言うぞ。さっさと、戻れ。でねえと怪我すんぞ」

振り向けば、隆道は片手で拳銃を構えていた。その照準を一夏に向けて。引き金に指を掛けて。先程までの必死さは全くと無い、酷く落ち着いた姿がそこにあった。

千冬は悟る。隆道は撃つ気だ。弟を、一夏を。あの黒く濁る据わった目は——本氣の目だと。

「駄目だ柳!! 撃つ——」

「ああストップストップ。待つて千冬姉」

一夏は手を翳して千冬を制す。何もするなど。

あれだけ啖呵を切ったのだ。絶対に引かない、己の信念を貫き通して見せよう。
「だいぶ本気ですね。やっぱり良い人だ」

「あ? 何余裕ぶっこいてんだお前え……!! この俺が撃てねえとも思ってたのかあ

!!

「撃ちませんよ」

「——っ!？」

迷いなき一言。一夏が放った偽りの無い言葉は隆道の僅かな人の心に衝撃を与える。

正しく改心の一撃だ。隆道の手は僅かに震え、照準はブレまくる。身体だけではない、心にまで揺らぎが生まれた。

そして——。

「ああ、誤解しないでください。別に撃つ度胸が無いって意味じゃないですからね。『撃てない』じゃなく『撃たない』です。信じてますから」

「……俺がどういう人間なのかわかってんだろ。何でそこまでこんなイカれ野郎を——」

「何があっても、俺は味方であり続けたいから。柳さんの力になりたいからです」
「な——」

『父ちゃん、『忘己利他』^{もうちりた} って何?』

『なーにい?』

『『己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり』。自分の事は後にして人に喜んで頂く行いをする。そこにこそ真の幸せがある、という教えだ』

『何それ。全然わかんない』

『二人にはまだ難しいか。つまり、困ってる人を助ける人になりなさいって事さ』

『へー、まるでヒーローみたい。……ってことは父ちゃんはヒーロー!?!』

『そうさ。父さんも誰かの力になりたいからね。隆道も、日葵も、思いやりを持てば父さんの様にヒーローになれるんだ。あ、日葵は女の子だからヒロインかな?』

『すっげえ!! なあ聞いた!?! 僕ヒーローになれるってさ!! 日葵はヒロインだって!!』

だったらいつか空も飛べたりする!?!』

『ひまり、なーにとお空飛ぶ!!』

『はは。そうだな、いつの日か飛べるかもな』

「そんな俺が信じなきや何も意味無いんですよ。柳さんが俺を信じた様に、俺は柳さんを信じる。それに、俺がここまで来れたのは……」

一夏は願った。誰かの力になりたいと。

目覚める前に見た気がする夢。彼はその内容を殆ど覚えていないが、自ら口に出したもののだけは確かに覚えている。一つ一つ、はつきりと。

この意志は紛れもなく自分自身が出したもの。しかし、それを引き出してくれたのは他でもないただ一人の恩人がいてくれたから。

「貴方のおかげなんですよ……!!」

隆道は思い出す。幼き頃の記憶を。己に教えを説いた故人——父親を。

彼は父親に憧れていた。何時の日か父親の様な大人になると。どんな苦難が迫ろうと生き続け、擦り切れつつも背中を追い続けようとした。

それなのに父親は死んでしまった。憧れであり大切な存在は——世界に殺された。

家族を、愛犬を、父親を失った。残されたのはどす黒い憎しみだけ。女性が憎い、社会が憎い、I Sが憎い、その元凶も殺したい程に憎い。全てが憎くて仕方がなかった。

だから信じないと決めた。共に抗った仲間しか信じない、そう誓った。

その矢先に出会ったのが一夏。少年を見定め、せめて自分と同じ畜生にさせまい、強くなるまで支えようとした。

(冗談じゃねえ。何処まで強くなつちまつたんだお前はよ……)

その必要は無くなった。自身には無い強さを、一夏は手に入れたのだ。

(いたんだな、俺の、なれなかつたものに)

暗い黒灰は——敗北した。眩い純白一夏に。

「……ああ、このくそつたれ。負けだ負けだ。勝てねえつーの畜生が」

そう言つて隆道は拳銃を下ろす。弾倉を抜き、スライドを何度も引いて——。

「「え、」」

——弾薬が出てこない。

「あ、あの……。弾……」

「んだよ。ああそうさ、弾なんて入れてねえよ。入れる訳ねえだろ、バカタレ共が」

三人は言葉を失った。

つまりハツタリである。この男、元から弾薬を装填していなかった。弾倉もよく見ると空っぽ。初めから撃つつもりなど無かつたのだ。

まさかのオチに千冬と箒は崩れ落ちる。一夏は——それはもう声を荒げざるを得な

くなつた。

「はあああああああつつつつ
てくさいよホントにもう!!」
!?!?!?

何ですかそれ!? 俺を試したんですかあ!? やめ

「うるせえな!! 撃てる訳ねえだろうが!! 弾入れて万が一暴発でもしてみろ!! 手違いで頭パーンしましたなんて目も当てられねえ!! つーか弾無しでも向けたくなかつたんだよ!! くそつ、自分が許せねえわこのボケ!!」

「だったら最初からしないでくださいよつ!! 馬鹿ですよ馬鹿!! あーもう大馬鹿!!」
「あ、あ、!? 元はと言えばお前が堅物——」

うるさい。この一大事な時に男同士の口喧嘩が勃発してしまった。何してるんだこのガキ共は。時間の無駄とは正にこの事だ。

言い合いを繰り返すクソガキ二人。千冬と箒は完全に蚊帳の外となり、静かな旅館には男二人の不毛な争いが響き渡る。どちらも馬鹿であった。

それから数十秒して。

「柳さん、俺は行きます」

「おう、行ってこい。決着付けろ」

一夏と隆道
馬鹿二人は真剣そのものに戻っていた。先程のやり取りを無かった事にしていた。手遅れだが。色々と台無しなのだが。

が、まだ黙っていられない二人が残っている。そう、空気と化していた千冬と箒の二人が。

「ま、待てお前達!!勝手に話を進めるな!! こっちは聞きたい事が山程あるんだぞ!!」

「そうだぞ二人共お!! わ、私だつて——」

「あーはいはい後でね後で」

「うるせえ黙れ水差すな」

「聞けえええつつつ!!」

軽くあしらわれた。隆道はともかく一夏まで。

相手にしなければ良いのだ。隆道の説得ですら結構時間を食ったのにと二人の相手など余計に時間を割くに決まってる。後がとても恐ろしいが仕方無い、説教は覚悟の上な一夏だった。

「けどよ織斑、それだけの自信は何処からだ? お前のISは大破したんじゃねえのか」

もう止めはしないが腑に落ちない事が一つ。

軍用ISは攻防共にハイスペック。代表候補生が削つているとしても脅威なのは変わり無いのだ。なのに、一夏は戦えると言った。

自己修復したとしても眉唾ものの筈。損傷したISではとても太刀打ち出来ないと思うのだが。

「これです。……『白式』!!」

一夏は展開する、自身のISを。粒子が集まり、ソレは一秒程で姿を現す。

「……!!」

一夏の『白式』は——三人を愕然とさせた。

二基から四基に増えた大型スラスタ。細部が変化し追加された白の装甲。左前腕部に引き付く細長い盾。そして——。

「二本……!?!」

「荷電粒子砲、だと……!?!」

——両腰と背中にある新しい武装。

背中に固定された白き大型大砲。両腰に備わる二本の刀剣——『雪片式型』。いや、最早コレは皆の知る『雪片式型』ではない。

——双刀剣『双ノ雪片』——。

——荷電粒子砲『月穿』——。

「うっは。マジか……マジかよお前……!!」

「そうです。これが新しい『白式』——いいや、『白式・雪羅』!!」

一夏のISは進化した。変異で歪んだ隆道のISと違う、強い『信念』と『願い』によつて。

——白式第二形態『白式・雪羅』——。

必要なものは全て揃った。これで終わらせる、今度こそやり遂げてみせるのだ。

それだけではない。これからずっと——誰かの力になつてみせると、一夏は意気込んだ。

「なるほどねえ。……おいブリュンヒルデ」

「——!! ……何だ」

「色々とあんだらうが後回しだ。全部終わつたら幾らでも説教聞いてやるし罰だつて受けてやる。だから、今は、目を瞑れ」

「……………」

千冬は口を閉ざし、目を瞑った。

彼女は先程の隆道と同様に行かせたくないのが本音である。たった一人の家族が戦地へ行くなど姉として許しがたい事だった。そもそもが異例の連続なのだから尚更だ。

一夏を行かせて大丈夫なのか。代表候補生達は無事か、作戦は終わったのか。確か

めない限りは軽率な判断を下せなかった。

「……柳、向こうの状況はわかるか」

「……まだ殺り合ってる。けどやべえ、何人かは死にかけだぞ。あとは知らねえ熱源反応が二つ。何だコイツら、味方……じゃねえなこりゃ」

「やっぱり、皆……!!」

「これでもまだ止める気かてめえは。身内以外は見殺しつてか？　そこまで墜ちたか？

あ？」

最早何も言うまい。千冬の答えは決まった。

「……頼んだ」

「おし。……んで、お前はどうすんだ」

「……………」

隆道の目線は——今も噉り泣く筈に。

答えなどわかりきってる。一夏と同様に頑固な彼女がどうするかは明白。それでも敢えて聞く。本当なら行かせたくはないが、これ以上は揉める時間が無い。だから彼女の意思を尊重する。

待つて数秒程。彼女はおもむろに立ち上がり、ぐしゃぐしゃの顔を拭つて強く言い放つ。

「全部、話して貰いますからね……!! それと一夏! あとで覚えておくんだな……!!」
箒も戦う事に決めた。その瞳に自暴自棄という言葉は存在しない。一夏と共に立ち向かうと。

これで戦力は増えた。いぎ、リベンジだ。

「んじゃ行くか——」

「「ストップ」」

行こうとした矢先、三人に呼び止められ隆道はずっこけた。メンツは揃ったのに今度は何だ。

「何だよ」

「え、柳さんも……?」

「その、こんな事言いたくないんですけど……」

「お前は飛べないだろ。何が出来るというんだ」

ご尤もだ。隆道は一夏と箒と違って飛行技術がすこぶる悪い。お世辞にも言えないレベルだ。そんな彼が共に戦うのはあまりにも愚行の愚行、自殺行為でしかない。最悪、辿り着くのかさえも怪しいところではある。

そんな事ぐらいは彼自身も重々承知している。しかし——彼にはある秘策があつた。

「んな事わかってるっつーの。けどよ、ここから六十キロも離れてるんだぞ? かつ飛

せているのだ。

彼がそんな事出来るのか？ 答えは否。全ては『灰鋼』の換装装備にある。

「やっぱり馬鹿ですよ貴方はっ!! 幾ら何でも無茶苦茶過ぎますってえっ!!」

「吐く……!! 絶対吐いてしまう……!!」

「自分の前方に角錐を展開させるイメージ自分の前方に角錐を展開させるイメージ自分の——」

「これこそ隆道の秘策である。政府が試験として送り付けた汎用の換装装備——いや、ゲテモノ。」

『これは……増設スラスターだけ、ですね?』

このゲテモノ、蓋を開けると中々に凶悪。

細く巨大なロケットが四基、その回りに小型のロケットが八基。それ等が束となつて集まった、計十二基の超巨大スラスター。全長十メートルを超えるその存在感は見る者を圧倒させよう。

元々はレース専用として開発されたこの装備。それがどういう訳か何処かのとち狂った研究員の目に留まってしまい、改良という名目の魔改造が重ねに重ねられた。するとどうなったか。

曲がらない、止まらない、安全性はほぼ不明、燃費は最低最悪、速さだけが取り柄。結

果としてこの装備はゲテモノ化してしまった。

その最高速、驚きのマツハ五。殺す気かよ。

当然、誰も使いたがらなかった。

話を聞くだけで怖じける者、スペックデータを見て断る者、話が付いたかと思いきや現物を見て逃げ出す者と様々。公の場に出る事は無かった。

そうして倉庫の肥やしとなつてから数年経ち、漸くとゲテモノの運用試験が舞い込む。使用者は優秀なゲテモノ実験台と定評のある隆道。

これには研究員も大歓喜の嵐。直ぐに倉庫からゲテモノを取り出し大改修に励んだ。当時よりも進んだ技術のおかげで大多数の欠点は改善出来たのだが、燃費だけは改善出来なかった。それ故にエネルギー関連は他の研究所から手を借りた。

それは日本山奥にある研究所。ここでは少量のエネルギーをより強大なエネルギーに増幅させる研究が行われていた。噂だと所長は変態らしい。

運用試験が出来る、更に男性操縦者のデータも取れる。正しくWINWINな関係が誕生し、早速とばかりにエネルギー研究の過程で開発した装置をゲテモノへと組み込む。

変態
所長はその装置をこう呼んだ。

『Output. Variable. Energy. Reverse. System. X』
略して『O. V. E. R. S. X』、なんてのはどうだい？ まあ試作も試作だから不安定なんだけどねえ』

こうして出来上がったのがアレ。アレはただのゲテモノではなく、狂気と変態の融合体なのだ。不安要素しかなかった。

初心者にも安心な制御システム、超音速飛行で発生する空力加熱と衝撃波の対策、速度に応じる可変後退翼、エネルギー問題を解消するであろう『O. V. E. R. S. X』。他にも様々な装置をマシマシに組み込み、ゲテモノは更なる進化を遂げた。

これにて万事解決——な筈もなく。

「何か爆発しましたけど!？」

「大丈夫だ!!」

「何か部品取れましたけど!？」

「大丈夫だ!!」

「何か燃えていますけどおおおつつつ!？」

「大丈夫だああああつつつ!!」

案の定でしかなかった。

ゲテモノスラスタターの小さな爆発から始まり、部品は弾け飛び、所々から火が噴き出す。隆道は原因がさっぱりわからなかった。

最大の原因は『O. V. E. R. S. X』だ。エネルギーの増大は成功してはいたが、ある拍子に突如暴走。オーバーフローからの爆発により破損が連鎖的に発生していたのであった。何だこの欠陥品は。

「!! 見えた!!」

その時、ハイパーセンサーが代表候補生四人を捉えた。情報通りに『銀の福音』と謎のIS二機も確認。やはり、様子からして味方ではない。

けれども不可解。様変わりした『銀の福音』もそうだが、増えた二機のISは何処かで――。

——目標地点まで残り三十キロ——。

——装備に深刻なダメージ。パージせよ——。

「ポンコツがよ……!! コイツはもう駄目だ、ここでパージ——……あ」

「ん!」

「……………」

突如、隆道は焦りから唐突な冷静に変わった。

今も爆発と炎上を繰り返す換装装備から一刻も早く離れるべきである。なのに彼は恐ろしい程に冷静。何か嫌な予感がすると二人はゾツとした。

——目標地点まで残り二十キロ——。

——ページせよ。ページせよ。パpppp——。

「……柳さん？」

「……わりい、壊れた。ページ出来ねえ」

「はあっ!？」

最悪。ここにきて操作を受け付けない事態に。

隆道は諦めの境地へと入った。どうやら自分はこのまでのようだ。彼等と共闘出来ないらしい。リベンジの前にリタイヤ確定してしまったか。

「ああくそつ。仕方ねえ、このまま行くぞ」

「何諦めてるんですか!! 今切り離し——」

「馬鹿野郎が!! 無理に切り離して爆発したら全員くたばるだろうが!!」

「でも……!!」

——目標地点まで残り十キロ——。

——DANGER。DANGER。DANGER——。

「あと十キロもねえ!! 備えろ!!」

もう手遅れだ。この装備が何時爆発するのもわからない。一夏と筈には酷だが自身を見捨てて貰うしかない。その想いを察したか、二人は齒を食い縛って飛ぶ姿勢に入った。

別に悲しくない。共に戦えないのは残念だが、今は終わらせる事が最優先だ。

——目標地点まで残り一キロ——。

「織斑あつつつ!! 篠ノ之おつつつ!!」

「!!」

ここからは彼等次第。自分は、もう必要ない。

「あとでお迎え頼むわ」

「……はい!!」

——五百メートル——。

隆道は叫ぶ。最後の声援を。

「翔べえええええつつつ!!」

二人は声援と同時に飛び翔る。太陽を背にした白と紅はとても眩く、神々しく。

「うーわすっげえお似合——」

——直後、隆道は大爆発に巻き込まれる。

半径二十メートルの巨大な爆炎が包み込んだ。ゲテモノ装備は散弾の如く飛散し何も残らない。爆発の衝撃と飛行による運動エネルギーが総じ、彼は遙か彼方に吹っ飛ばされてしまった。

「やな——」

「一夏!! 今は!!」

「……わかつてる!!」

約束した。迎えに行く。だから、今は——。

「仲間、誰一人としてやらせない!!」

何処かの孤島。

肉眼で辺り一面を全て見渡せるまでに小さく、僅かな緑しか存在しないその島は静かであつた。

「……………あああああ」

先程までは。

「あああああああああああああああああああああ」

遙か遠くからえげつない速度で飛ぶ謎の物体。ソレは何やら絶叫の様な音と共にやつて来た。

「——あ、っ!？」

激突。

弾丸——いや、砲弾とも言えるソレは高速度で孤島の砂浜に落ちる。とてつもない轟音と衝撃が辺りを響かせ、砂塵が広範に舞い散つた。

辺りはしんと静まり返り、波の音だけが残る。砂塵は煙幕かの様に舞い続けて暫く、漸く晴れてソレの姿が露になつた。

「……………ゲホッ」

ソレ、即ち隆道なり。煤まみれの顔面に損傷が目立つ『灰鋼』。既にボロボロであつた。

彼はあの大爆発の後、暫くの間は放り出されたままであった。換装装備処か『灰鋼』もある程度損傷を受け、本人の操縦技術もあつてか成す術もなく身を任せるしかなかったのだ。

作戦乱入からの心停止、拘束からの襲撃からの教師を半殺しからの自害からの脱走、爆発からの孤立。たった数時間の経過でコレである。文字にするとあまりにも酷過ぎた。

「結構離れたか……？ 何処だよ……」

周囲を見回しても何も見えず。人間が砂浜から観測出来る水平線までの距離は約五キロらしい。となればそれ以上の距離か。ISで高く飛ばせば視認出来るかもしれないが、そんな気力は既に無い。

——ダメージレベルC。複数の損傷……確認。修復ヲ実ジジジ——。

「……どつちにしろ何も出来ねえか」

ここで大人しく待つしかない。となれば暇でも潰そうかと隆道はISを解除、島を散策し始めた。

「なーにかーねーえーかーなーつと……お？」

ぶらぶらと歩いて暫く。ふと、波打ち際辺りに気になるものを見つけた。自然しかないこの場でソレはあまりにも不自然で。

何かしらの漂着物だろう。もしかしたらソレで暇潰しが出来るかもしれないと隆道は歩く。

「んー………？」

ソレは銀色のガラクタであった。全体的に罫が目立ち、コードが剥き出しに垂れ下がった何かの部品らしき物体。それなりの重量だが、ここまでボロいと元が何だったのかすらわからなかった。

期待外れだが、これはこれで暇潰しにはなる。探せばきつと面白いものに出会えうだろう。

「腹、減ったなあ……」

しかし、いい加減に腹が空いてきた。よくよく考えれば今日は朝から食事を取っていない。一度思えば食べ物の事しか考えられなくなり、遂には動く気が失せて座り込んでしまった。

「飯食いてえ。何でも良いから——」

「宜しければ此方を」

「ん？ ……お、マジか！」

視界からひよつこりと出た細い腕。その手には竹皮で包まれた何かがあった。隆道は本能に従い受け取って中を開けると——これまた手の込んだ大きめのおにぎり二個

が顔を覗かせた。

「……………!! ……………!!」

正に獣。隆道はおにぎりを一心不乱に食った。良い塩梅の塩加減、辛子明太子とだし巻き玉子を組み合わせた具は彼を無我夢中にさせていった。ここ最近で一二を争う幸せを感じたであろう。

か、その幸せも直ぐに終わってしまう。完食に数分は掛かるであろうおにぎりを、僅かな一分で食べ切ってしまった。

「お茶もどうぞ」

「サンツ……………! ……………つあー。ご馳走さん」

「お粗末様です」

お茶も提供してくれるのか。最近のサービスは便利になったなど、隆道はそれはもう感心した。

「……………」

——そんな訳が無い。

「っ!!」

我に返つた隆道は飛び跳ねてその場から離脱、声の主から大きく距離を取る。咄嗟に振り向けば——そこには場違いな格好で佇む一人の少女が。

「ああ……う？」

その少女は、ラウラに瓜二つであつた。

流れる様な銀髪、白と青のゴスロリ系ドレス、高価であろう杖に閉じたままの瞳。全てが不可解過ぎる存在が目の前にいた。

いつの間になっていたのか、今まで何処にいたのかと必死に思考を巡らせる。直ぐわかつたのは一つ。この少女は——味方ではない。

——『獵犬』起動。……IS反応有り——。

——識別コード不明。コアネットワーク巡回、ISデータ照合。……該当無し——。

——操縦者不明。コアネットワーク巡回継続、登録操縦者データ照合。……該当無し

——。

——データプロテクト確認。解析不可能——。

「てめえも襲撃者か。しかもIS持ち……」

「申し遅れました。私はクロエ・クロニクル、と申します。以後、お見知りおきを」

「あつそ。……で、態々俺を殺しに来たつてか。なるほどな、ここなら好都合だろうよ」

「滅相ありません。私はお迎えに参りました」

「は？ ……つ!？」

その時、隆道は気づく。旅館の周辺にいた筈の熱源反応が多数、此方に近づいている事に。

「機を窺っていました。本来なら隆道様が旅館にいる間に終わらせる筈でしたが……かなり予定が狂ってしまっています。ですが、ここまで離れれば逆に助かりました」

それ等は、あつという間に直ぐそこまで来た。見回しても視認出来ず。即ち、これは光学迷彩。奴等はずっと潜んでいた。

視認出来ないそれ等は隆道を取り囲む。同時に空間が歪み、そして遂に姿を現す。それ等は嘗ての無人機に似ていた。数は十機、熱源反応からして——更に増える。

——『ゴーレムⅡ』——。

「ハード過ぎんだろくそつたれ……!!」

「隆道様。……どうか、お許し下さい」

戦いは終わらない——。

第五十六話

一夏達が飛び立った直後。花月荘。

「ほっ、ほっ」

廊下を歩く景子は何やら急ぎ足。騒ぎがあつた玄関とは真逆の方へ進んでいた。

廊下から従業員専用通路、従業員専用通路から更に奥へ行き、道中の部屋や厨房を覗きつつ足を早めていく。従業員は一人として見当たらない。昼はどうに過ぎて夕食の仕込みがあるのに誰一人見えないのはどういう事だろうか。だが、彼女はそれを気にする事なく更に早く歩き進む。

彼女が向かうは裏口。そこへ一直線に向かい、到着するや否や深呼吸しつつモニターに近づく。映るのは風情がある踏み石のみ。人なぞいる筈がないのに――。

「……『造花』」

「『黒百合』」

景子の言葉の後に何故か声が返ってきた。

まるで合言葉の様で不穏な空気が流れていく。どちらも『花』に関連しているものであつた。

理解を」

姿に似合わず丁寧な挨拶。頭から足まで全てが場違い過ぎて相手を威圧する格好なのに、それをなるべく感じさせない柔らかな口調。少なくとも景子に危害を加えるつもりは無いようだ。彼等がこの旅館にやって来た理由とは。

「いえいえそんな。……お話は伺っております。貴殿方がお見えになったという事は本当に……」

「誠に遺憾ながら。ですが御安心下さい、私達が迅速に対処致しましょう。従業員の方々には？」

「既にお伝えして各休憩室で待機させています。事が終わるまで出ないようっておりますので。それと、貴殿方の部屋を一つ御用意致しました。どうぞ御利用なさってください」

「おお、これはこれは。御協力に感謝、有り難く使わせていただきます。……1—5は清洲様に付け。他は俺と」

「「「了解」」」」

一転。その柔らかな口調は忽然と消える。

その合図で武装集団はぞろぞろと構内に入り、一人を残して九人が突き進む。全員が廊下に出た所で一瞬にして二列縦隊に並び静止、戦闘態勢に入って緊迫した空気に包ま

れた。

間違いない。これから物騒な事がこの旅館内で起こってしまう。

「音響センサーに不自然な反応有り、一カ所だけ音が一切拾えない。ポイントBと一致」
「ふん、道理で。ハンター0—1、応答願う」

『……………』

「ハンター0—1」

『……………』

先頭の一人が通信を試みたが何も聞こえない。全員が左腕のディスプレイを覗き、少し凝視した後に顔を合わせ首を振った。様子から見るに誰も繋がらない模様。

が、その程度は想定済みなのであろう。全員は特に驚く素振りもなく装備のチェック、廊下には金属音だけが響き渡る。

「音響遮断と電波障害か、忌々しい。俺の分隊で探す、二分時間をくれ」

「了解。1—3と1—4は『月長石』を探せ。俺と1—2で先にネメシスと合流する」

「了解。山田真耶と榊原菜月はどうする。奴等は知り過ぎた人間だぞ。いつまで放つておく気だ」

「今日か明日にでもお灸を据えるだろうが決定はネメシスにある、今は待て。では各員セット」

「[[[[セツト]]]]」

混濁は更に渦巻く。

『銀の福音』交戦領域にて。

「オオオオオオオオオオオツツツ!!!」

隆道から飛び立った一夏は混戦へと詰め寄る。加速から重なる更なる加速——瞬時加速が炸裂、以前の『白式』を超える超音速を叩き出した。

否、ただの瞬時加速ではない。大いなる進化で強化され、大型ウイングスラスター四機を備えた彼のI.S.はより高みへ。

——『二段階瞬時加速』——。

一・五倍に上昇した最大速度、約三分の二まで短縮された瞬時加速のチャージ時間、そこからの瞬時加速をも超える二段階瞬時加速。それなりの練度が無ければ出来やしな
いだらう技術を一夏は無意識に繰り出した。

その圧倒的な速さに戸惑いはするも一瞬だけ。先ずはセシリアに肉薄する狂暴な『銀の福音』を引き剥がすべく斬り掛かる。

「そこだあつつつ!!!」

『——ガツ!?!』

超音速で威力が上乘せされた二刀での風払いを暴れ狂う『銀の福音』の腹を直撃。鈍い金属音と機械らしからぬ悲鳴を上げ盛大に吹き飛んだ。

「!? いち——」

『……?!?!?! テテ、敵機情報更新』

だがしかし、決定打にならず。吹き飛ばしから流れる様に体勢を立て直す『銀の福音』は即座に一夏へ標的を変えた。

エネルギー翼が大きく広がる。更に背中からも青白い翼が生え出す。次の瞬間には莫大な掃射が彼に集中される。回避はどう足掻いても不可能。

「多っ!?! だつたら——」

一夏は逃げない。左腕を盾を構える様に水平に翳し、光弾の雨を真っ向から待ち構える。

何も被弾覚悟という訳ではない。彼の新装備は必ずソレを防ぎ切る。

——『霞衣』展開——。

直後、一夏の左腕が変わる。前腕部に引き付く細長い盾は上下に勢いよくスライド、その面積は三倍に変化する。次にその上から青白い光の薄い膜が張られ、彼の全体と同等の大きさに。ソレは迫り来るエネルギー弾を全て受け止め——。

『!!』

搔き消す。

「俺にエネルギー攻撃は効かねえつつつ!!」

——可変複合盾『霞衣』——。

その左腕、状況に応じて変形する盾。

防刃と防弾を兼ね備え、且つエネルギー攻撃を全て無効化——『零落白夜』の展開を可能にした防御装備。攻撃に特化した単一仕様能力は一夏の想いによつて守りにもなった。

これで『銀の福音』のエネルギー兵器は完封。エネルギーは消耗するが攻撃用よりも比較的燃費良し、何より撃墜される確率は大幅に減った。

それに、もう近づくしか出来ない彼ではない。

『——ギャンツツツ!!?』

それは油断か。攻撃を防いだ一夏から放たれた光速の一閃が『銀の福音』の胸部へと着弾、再び吹き飛ばされていった。

防衛装備だけではない。嘗てシャルロットから借りた銃で経験した射撃はここで漸く実を結ぶ。

「つしやあ命中!!」

右腕で抱える様に構える大型の大砲。近接しか攻撃手段が無い『白式』はもう存在しない。

正体は荷電粒子砲『月穿』。背中にあるソレはサブアームで固定され、使用時には脇下を通つて手元に移動する。熟練者の切替より遅いが武装を呼び出す際の集中力はいらなくなつた。

展開の必要性は無し、拡張領域に格納も不要。全ての武装は一夏の思うがままに動く。

『ジヨジヨ、ジヨウキヨウ変化。最大攻撃シシシシヨウシヨウシヨウ』
「今度は逃がさねえええつつつ!!!」

機械仕掛けの天使を討つべく一夏は飛び込む。恩人の為に。自身の為に。

『……………』

「さて、どうするか……………」

一方、一夏と分かれた箒はブレード持ちのISと対峙。満身創痍のセシリアを庇う形で寄り添い、二刀の切っ先で相手を牽制していた。

レーザライフルは全て破壊されたのだろう。換装装備のスラスタもヒビ割れが目立つものや一部欠損していたりと酷い状態だ。飛べはするがそれ以上の事は出来やしないように見えた。唯一残された武器はショートブレード一本のみ。彼女は今までたった一本で戦っていたのだ。

他の代表候補生はもう一機のISと混戦中。が、状況はあまり宜しくはなさそうであつた。

「箒、さん…………。わたくしの事は、構わず…………。今の貴女では——」

「何を馬鹿なことを言ってる。…………心配するな、私はもう大丈夫だ」

嘘である。本当は今も引き摺っている。

自分のせいで一夏達を傷付けた。自分のせいで作戦が長引いた。自分のせいで他者も傷付いた。

もうISなんて懲り懲りだった。逃げ出したい、関わりたくないという想いが心を満たしていた。自分には荷が重過ぎたと苦しんだ。

それなのに——。

『柳さん、俺は行きます』

どうして。

『ああ、地獄の片道切符ってな。ぶつつけ本番でやってやろうじゃねえか』

泣いている暇なんて無かった。

自身が暗いどん底に深く沈む最中、逆に彼等は立ち向かった。どんなに傷付いても、折れても、誰かの為に再び身体を動かす彼等は強く見えた。

ならば放っておけない。彼等と共に戦いたい、彼等の背中を守りたいという強い『願い』が箒の失った活力を無理矢理に甦らせた。

恐怖はまだあるが、それでも彼女は逃げない。今は戦いを終わらせるのみである。「隙が無いな。無理に仕掛けるのは無謀か……」

「……箒さん」

「しつこいぞ。私は大丈夫だと——」

「どう見えます?」

「……何だと?」

箒は耳打ちをしてくるセシリアの言葉の意味に理解が全くと出来なかった。この状況でいったい何の話をしている。どう見えるとは。

彼女がそう思うのも無理はない。途中参戦した二人はセシリア達と決定的な違いがある。

「あの I S……箒さんにはどう見えます?」

「どうって……」

何言ってるんだコイツはと疑問を拭えない箒。改めて目の前に立ち塞がる I S を細目で凝視するが——普通の I S ではないなと思うだけ。

そう、セシリアとは見えているものが違う。

「何が言いたいんだ」

「そのままの意味ですわ。答えてくださいまし」

「むう。……似ているな、五月のクラス代表戦に乱入してきた I S に。コイツらは……」
突如現れた『紫色の千冬』と『紫色の隆道』は『幻覚』が見せた仮の姿。その正体――

『無人機』……!!』

その時、セシリアが見る二機の I S に罅が入る。胴体からのソレはやがて四肢と頭部までに達し、全身に余す事なく巡り——砕け散る。

「……!!」

真の姿が露になる。

素肌を見せない所々損傷した全身装甲、複数の不気味なカメラアイ、両脇に浮遊する分厚い盾。全身は細身で違いこそあるのだが、嘗て彼女達が手も足も出なかつた襲撃者と姿が酷似していた。恐らくは発展型と思われる。

全てのピースが揃った。間違いなく目前の I S は囃。本命はまたしても隆道ただ一人。

「あの時と同じ……。まさか、またなのか……」

「ええ、間違いなく。ですから箒さんは——」

『退け』

「!!」

二機の無人機が同時に襲い掛かる。牽制体勢の箒に急接近、直後に二刀が簡単に弾かれた。

「……!?!」

感じたのは違和感。剣術を心得ている筈だから感じ取れたソレは彼女の思考を一瞬鈍らせる。

攻撃の意志が感じられなかった。切っ先だけを小突いた様な軽めの弾き。これは――

「セシリア!!」

時既に遅し。無人機は呆気にとられた筈の横をすり抜け、ともに戦えないセシリアを集中的に攻撃を仕掛けた。確実に数を減らすつもりか。

「くうっ!!」

辛うじて回避出来たセシリアは逃げに徹する。リーチの短い短刀では分が悪い、今は何としても耐えなければ今度こそおしまいだ。

「やらせはせんぞー!」

それを黙って見過ごす筈ではない。全力全開で無人機を追い掛け、二刀での風払いで――

「何?!」

その攻撃は簡単に防がれる。

無人機は目視せずにブレードだけ翳して防御。筈には目も暮れずにそのままセシリ

アを追った。

徹底的に箒を無視している。相手にならないと判断しているのか、それか構ってられないのか。どちらにしろ今はセシリアだけが標的のようだ。

そうはさせせない。そちらがその気ならば此方とはとことん邪魔してやろうではないか。

「そこだ!!」

『!』

繰り出したのは『雨月』による赤色の光弾雨。流石に防御の選択肢は取れなかったらしく大きく逸れて回避した。しかし、それは想定内である。

「これはどうだ!!」

次は『空裂』。巨大な帯状の攻性エネルギーが無人機の胴体を目掛けて飛んでいく。流石に回避不可能だと判断したかコレを防御、遂に足止めに成功した。

体勢の立て直しなどさせない。透かさず距離を詰めて二刀での連撃を仕掛ける。

「私に任せろ!!」

「!! ……お願いいたします!!」

『邪魔をするな』

「貴様の相手は私だあああつつつ!!」

刃物同士の高い金属音が轟く。無人機は今でも防御を徹底している。はやり攻撃の

意志は一つも感じられない。舐められているのだろうか。

この際どちらでもいい。目の前の敵を少しでも足止め出来るのなら、誰も傷付かないのなら。

エネルギー管理は怠らない。同時に力の限りに攻撃の手を緩めない。彼女にはまだ難しい事だがやり遂げなければならない。もう負けられない、今度こそ勝つのだと箒の闘志は更に燃えた。

「はあああああつつつ!!!」

連撃、連撃、連撃。何度かち合っただろうか。相手は未だに反撃の様子が見られない。が、今はセシリアを離せただけでも御の字であった。

「どうした!! 何故反撃してこない!!」

『その必要は、無い。それに、イギリス人を追う必要も無い』

「何……!!」

『もう一機を忘れたか』

「!?!」

否。それは謀略だ。

はつとした箒は目だけでセシリアの方を見る。視界に映ったのはもう一機の無人機に首根っこを掴まれたセシリアの姿。他の代表候補生は何処？

「……?!?!?」

『今まで迎撃で済ませていたが状況が変わった。所詮は人間、手加減しなければ撃墜は容易』

「う、そ……」

海面に浮かんだ三つの点。ハイパーセンサーでフォーカスすると、点でなく見慣れた人間――。

「――」

『案ずるな、主は殺害を決して望まない。勿論、我々もそれを望まない。無用な争いも望まないが時間が無い。これも主の願いの為だ。……いや、人類の為でもあるか』

今の箒には、その言葉は頭に入らなかった。

セシリアを救助しようにも、目の前の無人機は確実に阻止するだろう。一夏は『銀の福音』との戦闘で手一杯、援護は期待出来ない。

箒の脳裏にまたしてもあの光景が甦る。誰かが傷付く、二度と目にしたくないあの光景が。

敵の目的を知れた？ 不可解な謎が解けた？ 目的を阻止すれば勝ち？

それがどうした。

残酷な事だが、この場では強さが全てなのだ。信念があらうと結束があらうと使命があらうと、圧倒的な力の前ではその壁を打ち破れない。

セシリア達は優秀な代表候補生なのに？ 単に無人機の方が格上の存在だっただけの話である。それ以上でも以下でもないのだ。強いから勝つ、弱いから負ける。当たり前前の事ではなかった。志だけでは力の差は決して埋まらない。

仮に『銀の福音』に勝てたとしても、隆道には辿り着けない。全てが遅過ぎた。

「何故、こんな事を……!!」

『間もなく使命は果たされる。我々の存在意義は主の願望の実現。今は大人しく——』

唯一打ち破れるものは更に上を行く力だ。

「うわっつっつっつ?!?!?!?」

突如、凄まじい衝撃波が箒と無人機を襲った。攻撃——と言うより押し退けられたに近いソレはそれぞれを引き剥がす様に吹き飛ばす。

「な、今度は何——!？」

吹き飛ばされながら箒は目にする。

無人機の両腕が——何故だか千切れた。

『早、過ぎる……。作戦失ば——』

次に目にしたのは空高くにある巨大な光の塊。ソレは一気に降下して無人機の全身を呑み込む。柱とも言えるその光は数秒程留まり——。

「な——」

無人機と共に跡形も残さず消える。

『!!』

「きゃっ!？」

残された無人機はセシリアを強く放り投げる。頭上を見上げると——全く同じ光の塊が一つ。

「貴方つ、何の真似——」

『近づくな!!』

「えっ」

『……もう、おしまいだ』

いきなりの怒声にセシリアはたじろぐ。まるで此方の身を案じる叫びは彼女の動きを止めた。

それは正しかった。無人機はここで終了する。

『主——』

直後、この無人機も極太の光に呑み込まれる。ISを身に付けても耳を塞ぎなくなるような轟音を鳴らし、数秒で消えて無人機の姿も消えた。

「え……」

いきなりの展開に二人は付いていけなかった。突然現れた巨大な光と消えた無人機。一体誰？ 無人機は何処へ行った？

いや、理解したくなかっただけかもしれない。無人機は——二度と現れない。

「な、何だ今の!?!」

当然ながら一夏もその光を目の当たりにした。見た事のない光柱につい攻撃を中断し狼狽える。それは『銀の福音』も同じであった。

『高エネルギー反応ヲ感知。退避——』

今度は『銀の福音』に光が雲を裂いて降った。しかし、今までのと違い今度は一秒程度。直ぐに消滅して当の本人はその場に残ったが——。

『イギヤアアアアアアツツツ?!?!』

——銀とは程遠い、真つ赤へと化す。

『デデデ、dead zoneにトウタツ！ トウタツ！ トウタツ！ 操縦シヤにダメ、ダメージヲ確認！ 深達性Ⅱ度ネツシヨウをフク数カカ、カクニン！ ヤダツ！ ヤダツ！ ヤダアアアツツツ!!!』

「うっ……」

変わり果てた『銀の福音』に一夏は困惑した。

まるで火事から逃れる人間の様に腕き苦しみ、機械的であった音声は助けを乞うかの様に叫ぶ。その姿は一夏の良心に深々と突き刺さり、攻撃に躊躇いを生ませてしまった。

『銀の福音』はもう戦闘不能に等しい。表面の装甲は溶け始め、焼ける音が今も続く。辛うじて浮いているのはP・I・Cだけが機能しているからか。

『シンジャウ！ シンジャウ！ ナタル、ナタルシンジャウ！ ナタルシンジャウ!!』

「え、えと……。う……」

一夏は間髪をいれず急降下して操縦者を掴んで抱き抱える。死んでいないよなど顔を覗くが息は辛うじてしていた。

しかし、かなり酷い状態だった。複数の打撲もそうだが、何よりも火傷が凄まじい。ISスーツの一部は溶け、素肌は見たことない色をしていた。確実に重傷レベルだ。いや、重体なのかも。

「ヤバいやバいやバいや!! え、コレどうすれば良いんだ!? 冷やすか!? 水か!? 海水、海水は良いんだっけ!? いや痛そ——」

正に混乱。もう思考が停止しそうなレベルで。

火傷なら経験あるがここまでの火傷は初めて。知識が無い一夏は何が最適かと思考をぐるぐると回してしまふ。勇姿は何処へ行ったのやら。

やるべき事はまだ残っている。それでも重傷の彼女を易々と見捨てられない。どうすれば良いと空のど真ん中であたふたしてしまっていた。

「何してるんですか貴方は!!」

「あ、ナイスセシリア!! この人頼む!!」

「え、ちよっ」

正しくグッドタイミングだ。一夏は寄って来たセシリアに預ける事にした。彼女なら応急措置の知識はあるだろうという偏見から。

今は話を聞く暇は無いのでガン無視する。皆も大事だが隆道が最優先なのだ。

「あの、お待ち——」

「行くぞ箒!!」

「え!? あ、ああ!!」

「ああ……」

二人はセシリアの静止を振り切つて超絶爆速で飛び出す。せめて話だけは聞いてくれないかと、何処か悲しくなったセシリアであつた。

時は遡る。

「確保」

「!!」

隆道を取り囲む複数の敵——『ゴーレムⅡ』の一機が機敏な瞬時加速で詰め寄り襲い掛かった。その巨大な鉄の手の平は——寸前で屈まれた事で空振りに終わる。

「あぶねっ!!」

透かさず『ゴーレムⅡ』は隆道に掴み掛かる。が、これも空振り。常人なら回避処か
反応すらも出来ない豪速の掴みは砂塵が舞うだけとなる。

生身に関わらずこの回避。入学前の過酷過ぎた環境で身に付いた身体能力は、入学後
の度重なる死闘で更に洗練されつつあった。

否。それは否である。

洗練——ではない。隆道は取り戻しつつある。嘗て、『飼い犬』や『髑髏』の者が恐怖
し震えた『全盛期の髑髏^{隆道}』に。

そう、彼の戦闘力はこの程度のものではない。今まで見せたものは僅かな一片だ。憎
しみだけを活力にしていた当時の彼は最早——。

「つだあくそっ!!」

だがしかし、所詮は人間でしかなかった。

隆道は武術の達人ではないし、ましてや身体を改造した強化人間でもない。身体全体
を駆使した荒々しい回避は一気に疲労が襲い、元から疲労が蓄積していたのもあり肉體
が限界に達す。体勢が崩れてしまい、動きも打って変わって鈍くなる。生身での回避は

既に限界か。

それに――。

「うおっ!？」

今は一対多である事を忘れてはならない。

隆道は別方向からの脅威に対応出来ず、片足を器用に掴まれてしまう。そのまま持ち上げられて宙ぶらりん状態となる。

「放せ……………!!」

放せと言われて手放す阿保は何処にもいない。問答無用で吊り上げる『ゴーレムI』は空高くへ飛翔、抵抗虚しく瞬時に高さ数十メートルへ。

このままでは連れていかれてしまう。何処だか見当もつかないが本能が力一杯に警告を鳴らす。絶対に逃げ切れと。

「て、め……………調子乗んなよオラアツ!!」

怒声と共に隆道の右腕は『剛鉄爪』へと変化、自身を掴む腕に思い切り爪を振るう。ひしゃげた金属音と砕ける轟音が響いていとも簡単に破壊。捕縛から逃れた彼は砂浜へ真つ逆さま。

「隆道様!!」

「っ……………!!」

やられっぱなしは気に食わない。直と沸き立つ怒りが隆道の闘志に火を付ける。戦えと吠える。その意志に応えたのか、コンマ五秒も掛からずに『灰鋼』が展開された。火事場の馬鹿力だろうか。今まで出来なかったイメージでの展開をこの極限で遣り通すとは。

「ぶべらっ!?!」

ただし、華麗なる着地だけは無理だった模様。背中からの墜落で途轍も無い衝撃が隆道を襲い、潰れた様な声が吐き出される。

ショックアプソーバーがさっぱり機能しない。先の爆発と墜落で故障してしまったか。

——警告。energyパイバスにイジヨウ——。

——warning. An error occurred d d d d d——。

「いっ……ぶほっ……っ!?!」

隆道に安息は許されない。

察知したのは真上から。気がつくとも一直線へと落下してくる片腕の『ゴーレムII』の姿が見える。このままではまたしても掴まれてしまうが、彼は密かにほくそ笑んだ。

彼には絶対的な防衛システム『番犬』がある。連発出来ないが守りには十分な性能——。

〔『番犬』も発動しねえ……!!〕

コレも駄目なのか。ログの羅列を見ても原因は判明出来ず。何かしらを感知したらしいが表記にバグが発生、潰れて読めなくなつた。機能不全や不具合は今に始まつた事ではないがタイミングというものがあるだろうと悪態をつきたくなる。

「……!?!」

隆道は愕然とする。

防御に回した盾は木つ端微塵に。右腕の前腕と手の甲には大きな凹みと罅。まさかと視線を前にやると、砂煙から真つ直ぐに突き出た腕——から更に突き出た巨大な二本の杭。これは——。

「『鋼牙』……!?!」

察すると同時に砂煙は晴れる。そこにいたのは——巨大な二連装パイルバンカーをいつの間にか装備した『ゴーレムII』。

細部の見てくれは違うがほぼ『鋼牙』と同じ。盾に穴を開けた破壊した正体はアレだったのか。どうりで強い衝撃の筈だ。

「うああ……マジかよ……」

それだけならまだマシであつた。

周囲を見渡せば別個体も武装を展開していた。ある個体は両腕に同じ二連装パイル

バンカーを、ある個体は刀剣かの様な無骨な近接ブレードを。

これだけに留まらず。このI Sの群れ、明らかに数が増えている。ハイパーセンサーから続け様に熱源反応が多数、ざっと数えても二十は超えた。何処からここまでの数を用意したのだ。大国でも不可能なこのI Sの大群を。

向こうは未だに無傷。対して隆道は展開時点でダメージレベルC。勝てる見込みは無いであろう。普通ならば降参の選択肢しかない――が。

「抵抗を止めてI Sを放棄して下さい。そして私と共に行きましょう。これは隆道様の為なのです」

「……はんっ」

それでも、隆道は足掻く道を選ぶ。

「なーにーがー俺の為だくそつたれが。要は俺を拉致しに来たんだろが。態々こんな数揃えて。目的は俺の血か？ 肉か？ それか頭ん中か？ いや全部だろうな、素直に行くと思ってるのか。お断りだ馬鹿野郎」

「……………」

「それに、お迎えならもう先約を取っちゃった。大事な大事な先約をな。てめえに用はねえんだ。共に行きましょう？ 勝手に一人で行きやがれ」

そう言つて隆道はビシッと中指を立てた。

易々と連れ去られる訳にはいかない、最後まで足掻く。相手が何れ程強敵であろうと折れない、屈しない、敗北は絶対に認めない。

自身の為——ではない。覚悟を決めた、強靱な鋼の意志を持つ少年と交わした約束の為。自身が何れ程腐つてようとそれだけは果たしてみせる。それが今の彼を動かす活力。

「……流石は隆道様。多勢に無勢であろうと抗うその姿勢、お聞きした通りです」

「誰から聞いたか知らねえがもう慣れたさ」

「はい、存じ上げております。……だからこそ、何としてでも成し遂げなければならないのです」

「……? 何の話してんだ」

——ごめんくーちゃん……逃げられちゃった。急いで……。

「!! ……時間がありません、説明は後程に。あのお方が来る、その前に……!!」

少女の雰囲気が変わった。閉じていた瞳を開き——人のソレではない黒の眼球と金の瞳が露に。次第に彼女は空間毎歪み始め——。

「……で必ずつつつ!!」

——姿を消す。

(来る!)

予感の直後に一機が真正面から突撃してきた。防衛システムは何故だか使えない、御も悪手。それなら己の回避能力と得意のカウンター戦法で乗り切るしかないと隆道は集中。

ISを纏った彼が集中さえすれば最大限に技能を發揮出来よう。数は多くとも、ある程度の回避は容易い筈——。

(先ず目の前——いや左!?)

感じたのは左からの脅威。それに従って隆道は右へと大きくサイドステップ。その方へと視線を向けると——どうしてか何も無い。

「??? 何——うおっ!?!」

今度は後ろからの脅威が。大袈裟に跳躍からのロンダートでその場を離れ、脅威の出先を見るが——やはり何も無い。

(右か——いや正面!! 今度は上——じゃねえ後ろだ!! 何なんださつきから!!)

見えているものと感じるものが噛み合わない。相手を目で追っても脅威は微塵たりとも感じず、何も無い空間から脅威が来る。ソレから逃れると今度は瞬間移動の様に空間から敵が現れる。

隙が無さ過ぎる。反撃の好機が見つからない。多少無茶してでも攻撃するしかないのかと隆道は左腕に『鋼牙』を展開、迫り来る敵を避けつつもタイミングを見計らう。避けて避けて避け続ける。体力は減るばかりで避け切れずに掠り始める。限界が近づいて来るが粘り強く好機を待つ。

(来た!!)

遂にその時が訪れる。数ある内一機の急接近に視覚と感覚が一致した。先ずはコイツからだ、隆道は渾身の一撃を――。

「オ、ラ、ア、ツツツ!!」

放ったのに。

「――な……」

目を疑った。

確実に相手を捉えた。カウンターは決まった。この目でしかと見えた。

消えた。

二本の鉄杭が『ゴーレムII』を貫いたその時、まるで蜃気楼の様に姿が歪み、空間へと消えた。手応えはあったが異様に軽過ぎる。まるで小物を殴ったかの様な軽さだ。予想外のあまりに隆道は放心せざるを得なかった。

故に——それは大きな隙となる。

「やべ——だはあつつつ?!?!」

再び何も無い所からの脅威。咄嗟に盾を翳して右腕も盾に取る——が、やはり強烈過ぎる一撃が襲う。盾は盛大に大破、隆道は衝撃に逆らえずに吹き飛ばされ砂浜を転げ回った。

「ぐおお……。なん、でだ……」

何が何だかわからない。攻撃を当てた筈なのに避けられる処か姿が消えた。ならば、自身は何を攻撃したのだと隆道は混乱に陥る。

しかも最悪だ、右腕も駄目になってしまった。前腕部の装甲が遂に砕け、内部が抉れて紫電が。辛うじて動かせるがもう役に立たない。

理解出来ない。納得出来ない。不可解過ぎる。何が起こった。何をされた。

「……………」

ふと、視界の隅に奇妙な物が見えた。

砂浜に散らばる無数の金属片と突き立つ金属。注視するとソレは刀身の欠片、側に突き立つのはギリギリ原形を保った罅だらけの近接ブレード。

アレは何だ？ どうしてそこに落ちている？ どうして壊れている？ 誰が壊した？

——……まさか、俺？

(まさかここ)まで効果があるとは。……ISの方は当然としても、あの回避能力も簡単に封殺……。よく観察していらっしやる)

これが不可解の真実である。

範囲内のあらゆるものを吹き飛ばす『番犬』はシールドバリアーを攻性エネルギーへと変換して三百六十度に一齐放出する強力な防衛システム。つまりは前提としてシールドバリアーが必要だ。なら、シールドバリアーが無ければどうなるか。

”無からは何も生じない”。この概念はISだろうと例外ではない。接近を決して許さない『灰鋼』に対抗するにはシールドバリアーの排除が必要。

そう、その正体はシールドバリアーを阻害するジャミング装置なのだ。これによって

『番犬』を完全に封じていた。『ゴレムII』が存在する限り二度と発動する事はない。それと、彼が目の当たりにした不可解な現象。それはクロエの持つ専用機による能力。ある時は相手の精神に直接干渉、またある時は大気成分を変質させ幻覚を作り出す、異色過ぎる特殊兵装。

——『ワールド・ページ』——。

隆道を襲うISの群衆は全てが幻。実在するISは彼には認識されない。認識出来る存在しないISと認識出来ない存在するISによる二方向同時攻撃で彼を翻弄していた。単純な不可視攻撃では易々と躲されるのを想定した故の手段。結果として彼は見事に策に嵌まり混乱に陥った。

彼の反撃が失敗したのも実に簡単なトリック。全ての脅威に反応する『危険察知』は便利そうに見えるが、その脅威の詳細までは判別出来ない。自身に迫る危険だけを感じ取る。

つまりだ。彼が攻撃した脅威はISではなく——単に投擲されただけの近接ブレード。投げられたソレを突撃してくる敵だと誤認した結果である。

これは偶然か？ 否、彼のずば抜けた回避能力の謎を理解しているからこそその投擲。そこに幻覚を合わせれば脅威は敵の接近という幻となる。

『柳隆道』と『灰鋼』を知り尽くした戦法だ。ISはともかく彼の情報は何処で手に入

れたのか。知人処か彼自身もよくわかっていない技能を。

「うっ……は、あ……。流石に、厳しいですね。ここまで『黒鍵』を使うのは……」

汗を掻くクロエの身体にISは纏われていない。いや、そもそも存在すらしない。装甲も武器も、彼女のISには全くと無い。

戦闘能力は全く必要無し。幻覚を見せるだけで相手を無力化出来る。それが彼女のIS。

——第三世代 ■■■型IS『黒鍵』——。

隆道は再び敗北する。徹底的に対策されたISと逃れられない幻覚に。全貌を知る由もない彼では成す術は無い。少しも、無い。

「この……!! くそ……!! ああ……!!」

隆道はがむしやらに足掻く。四肢を振り回し、抵抗し続ける。そこには何一つ無いというのに。今も幻覚が襲っているのだろう。

無駄でしかない。哀れでしかない。果たすべき約束があらうと、意志が固かろうと、遙かに強い存在には手も足も出ない。

「……破壊を」

「——がつ!?!」

四機の『ゴーレムII』は一斉して隆道を囲み、『灰鋼』を一切の容赦なく破壊し始

めた。彼だけ傷付けぬよう、繊細かつ豪快に。

本来、クロエの目的は隆道の身柄のみだった。彼さえ確保出来ればそれで良し、『灰鋼』は然程重視していなかった。操縦者から離してしまえばただの機械でしかないのだから。

だがしかし、蓋を開けてみればどうだ。嚴重に管理された筈の『灰鋼』は何かしら手段を講じて逃れ、彼の元に戻った。遠隔の緊急展開は条件を満たせば可能なのだが当然満たしてはいないし、そもそも彼自身呼び出しすらしていない。だからこの線は絶対に有り得ない。

ならば自力で展開して動いたのかと思われるがそれも違うだろう。巨大な腕と盾を持つI Sが狭い廊下を疵一つ付けずに通り抜けるのは不可能だ。第一直ぐに発見される。

しかし——不可能を可能にするのが『灰鋼』の恐ろしい所。もしかしたら今までの現象を上回る斜め上過ぎる事をやってのけたのかもしれない。誰もが想定出来ない、泡を吹いて倒れるレベルのとんでもない事を。

最早、『灰鋼』は到底無視出来ない領域にまで達しているのだ。放っておけば更に変異し続け、より予測不可能な事態が起こるのは目に見える。そうなれば間違いなく史上最悪の脅威と化す。

やはり、弱者は何処までも弱者のままなのか。受け入れるしか道は無いのか。
(くそが……情けねえじゃねえか——)

——死ね。

「!？」

突如、隆道を燻る四機の上半身が金色の光線に呑み込まれた。ソレは超高温が故か、辺りの砂は触れてもいないのに焼ける音を鳴らして焦がす。

「お、あ、ぢやあああああつっつ!!!」

——なにになにに今度は何!? え、熱っ!! アツツツ!! 何コレ!?

当然、至近距離の隆道も巻き添え。

ISを纏つてもかなり熱い模様。触れてもない彼は大層熱がりのたうち回つた。光線は止まず、僅かに残る装甲や剥き出し状態の機関部が一気に熱され赤くなつていく。

「だあああつちいいいいつつつ!!!」

——ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!! 溶ける!! 溶けちゃううううつつつ

!!!

まるで死ぬ寸前に蹴く虫である。流石の隆道もコレは堪らないらしく、逃れようと暴れまくる。しかし、所々が大きく損傷していたが為に大して動けはしなかった。

悲鳴を上げようともソレは止まらない。寧ろ、光は更に増していき、太くなり、金色から白色、白色から青色へと変化していった。温度が遥かに上昇した確かなる証拠だ。確かにコレは堪らないし耐えられないだろう。このままだと彼は干からびるか焼け焦げてしまう——のだが、ソレは直ぐに終わる。

「う、つぎやあ、あ、あ、あああつつつ!!! も、う、止めてくれえええええつつつ!!!」

光に呑まれた四機は二度と動かない。

上半身が失くなつたのだから。

光線をまともに受けた四機の『ゴーレムII』は下半身のみを残し次々に倒れる。見える断面図は溶岩の様に真つ赤、ドロドロとなり溶けていた。上半身は何処に？ 千切れた？ まさか粉微塵？

否、消滅したのだ。何者かが放つたその光線は呑み込んだ全てを焼き尽くした。

更に、孤島を横断したソレは周りにも被害が。海を焼き、砂浜を焼き、草を焼き、生物を焼き、土を焼き、全てを焼き——島を割つた様に端から端まで続く真つ黒な焦土が出来上がる。

海から大きく立ち込める湯気、鼻が曲がる程の強い焦げ臭さ、未だに残る陽炎、引火して次々に燃え移る僅かな緑。穏やかだった孤島は瞬く間にこの世の終わりの様な地獄絵図に。

この惨状を作り上げた正体は、この世の全てを焼却する規格外の破壊光線。『銀の福音』ですら不可能であろうこの攻撃を放てるのは——。

「だいたい七十五キロを四十秒ちよつと。うーん超速いね、さつすが私」

「つ……!!」

——いた。

クロエは戦慄する。背筋が凍る冷たい声色に。IS学園一の最恐で最凶で最狂のIS操縦者に。

彼女は恐る恐る空を見上げる。そこには四色の鮮やかなISを纏う血だらけの少女。

「ちーつす」

——篠原日葵。

「よつ、と。あー、疲れた。生身で殺り合うのは本当に面倒」

ゆるりと砂浜に降り立つ日葵はクロエを一瞥。特に何か言う事なく呑気に隆道の元へ歩き出す。辺りを転がる下半身に目も暮れず。今の彼女には彼しか写っていないかった。

「あ、ち、いいいいつつつ!!」

「もう、慣れない事するからだよ。ごめんね、熱かったでしょ?」

ダルそうに言う日葵。隆道の近くに寄るなり、何をするかと思えば彼を驚掴む。そのまま——。

「あよいしよ」

「——ぶっ!？」

——波打ち際に放り投げた。

隆道の周辺が一気に蒸発し、新たに打ち寄せる波が彼を覆い、また蒸発する。その間、ISは急な冷却によって僅かな装甲が割れ、音を奏でる。

蒸発して、波に覆われて。何度も繰り返され、彼は湯気に包まれていく。まるで、ここに温泉が湧き出ているかのような光景であった。

「——!! ——!! ——!!」

「おー。何ソレすっごい」

ぶん投げた張本人は呑気であった。ちなみに、隆道はまだ虫の如く必死にのたうち回っている。身体を冷やそうと動きまくっているであろう。まあまあ酷い絵面である。

それも時期に終わりだ。流石に冷えてきたのか海水の沸騰は徐々に減り、彼自身も激しい動きを落ち着き始める。今度こそ地獄からの解放か。

「う、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……」

湯気が立ち込める中、隆道は心底に疲れ切った表情で砂浜を這いずった。外傷等は無さそうだが死にかけていた。

それよりも『灰鋼』の方がもっと酷い。装甲は全て剥げ、右腕は五指を失い、左腕は骨折の様に折れ曲がり、全身には紫電が纏わり付いていた。武装や盾は跡形も無い。動いているのが奇跡だ。まだ具現維持限界に達しないのか、このISは。

「取り敢えずよし。……んでお前」

「っ……」

隆道を様子見していた日葵の視線はクロエに。辺りの無人機を警戒すらせず真つ直ぐ見据える。墨をぶち撒けた程に真つ黒な見開いた瞳は彼女の息を詰まらせ、そして怯ませた。

「ドイツ人に似てるな。姉妹？ いや、あいつの情報にそんな奴一人もいなかった。じゃあアレ。お前、^{アドヴァン}遺伝子強化素体^{スド}だろ」

「……」

「ああ、やつぱりまだいたんだ。はあっ、これで何体目だっけ？」

意味深な単語に反応してしまったクロエは更に怯んでしまう。どうやら日葵は彼女の持つ秘密を知っているらしい。

クロエは動かない。無人機も動かない。いや、動かないのではなく動けない。一見して無防備な日葵だが、彼女には一切の隙が無い。

なるべく手の内は明かさない。様子見に徹して油断した相手を僅かな手口で一気に

叩き潰すのがこの少女——篠原日葵である。

だが、それは実力を隠す時に限った話である。本来の日葵は、本気を出した彼女は——

「どつちでもいいや。……それで？ お前誰？ もしかしてクソ兔の使い？」

「……いかに。お初にお目にかかります。私はクロエ・クロニクル——」

「じゃあ死ぬ」

直後。日葵から放たれた破壊光線が容赦無しにクロエを呑み込む。

オーバーキルである。ISすら焼き尽くす光線をたかが人間一人にぶつ放すとは。

「本当に容赦無しですね、日葵様は」

「……幻覚、か」

その破壊光線、クロエに当たらず。

日葵も隆道と同じく幻覚を見ている。気づけば無数の無人機が周囲を取り囲んでいった。おまけにシステムにも異常有り。シールドバリアーが機能していない事に気づく。

こうなれば絶対に絶対防御が発動してしまう。千冬に一撃を与えた『鳳仙花』も使用出来ない。この状況、既にどちらが勝つか決定している。

無論、日葵が勝つ。

クロエは理解している。幻覚や数の暴力等ではどうにもならないと。

『ゴレムⅡ』——無人機は超高性能である。一機だけで国家代表でも苦戦するレベルなのだ。それを十二機も用意した。二機は囷に、他十機は隆道の確保に。戦力は十二分であった。

が、囷は全滅し本命は四機も失ってしまった。ほんの一瞬でだ。性能、技術、数では勝てない。それほどに日葵と『華鋼』は規格外。

このままでは瞬く間に全滅する。せめて——。

(隆道様だけでも……!!)

幸いにもクロエの特殊兵装は日葵に通用する。幻覚効果を強めれば、勝てずとも隆道を拐える。彼女としては彼を確保出来れば全て良しなのだ。

一機の無人機がゆっくり彼に近づく。この間に幻覚を強化して時間稼ぎだ。

あと少しで隆道を捕えられる。日葵は無人機に気づかない。もう少し、あともう少しで——。

(これで——)

クロエの最大の誤算。彼女は隆道と『灰鋼』の全てを理解していなかった。

「え」

無人機が隆道を掴もうとした寸前の事だった。何故か手の平が火花を散らして払い除けられた。隆道は未だに這いつくばったままだというのに。彼のISはほぼ破壊したというのに。

今、何をした？ クロエの思考はたった一つで満たされた。

——画面共有開始——。

「!」

その時、這いつくばっていた隆道は唐突に顔を上げ無人機に飛び掛かる。目視出来ない筈なのに見事に胴体にしがみつきよじ登っていく。一瞬で彼は無人機の頭上に。

「ん?!」

「隆道様?!」

クロエはその意味に気づけたが既に遅かった。隆道は準備を整えている。

「奪^{だつ}」

『——ツツツツ?!?!?!?』

赤黒く発光する折れ曲がった左腕部は無人機の頭を鷲掴み。直後に両者とも紫電が大きく走る。そう、隆道はソレを奪い尽くす。

「いただきいっ!!」

無人機は光となり砕け散った。するとどうだ、あれだけ損傷していた『灰鋼』が急速に元通りになるではないか。

『悽愴月華』は対象を奪い自らのものにする。この場合——無人機を『部品』として奪った。

「……!!」

それだけに非ず。戦う度に変異する『灰鋼』は奪った『部品』を使い、新たに装備を構築する。元通りとなった右腕は更に装甲が上乘せ、鋭利な爪もより鋭くなっていく。盾も増えた。四枚の『バリアブルシールド』は今では六枚。表面も厚みを増して堅牢に。無論、構築されたのは外見だけではない。

「……おいてめえ。あの女の……何だつてえ?」

「う……」

隆道の目は、クロエを真つ直ぐと捉えていた。

幻覚は今も見せている。故に見える筈がない。それなのに、彼は迷いなく此方を向いた。

濡れた髪の隙間から顔を覗かせるどす黒い瞳。限界まで見開いたソレは彼女の恐怖心を煽る。

「……お願ひします降道様。全部説明しますから私と一緒に——」

「そうだよにーに。全部あのクソ兔の計画だ」

「日葵様!!」

「今回の暴走はね、全部ゼーんぶ仕組まれた事。何でだと思おう? にーにを拐う為だけにやった、下らない茶番なんだよ」

クロエの静止を無視して日葵は言葉が続ける。

彼女は始めから分かっていた。誰がやったか、何が目的か。周囲の人間が暴走したI Sの撃墜だけ注目する中、彼女だけは直ぐ真相に辿り着いた。真犯人を理解しているが故の。

だから彼女は作戦に参加しようとしなかった。その時が来た際に対抗が出来るのは、頼れるのは自分だけなのだ。

これが事件の全てだ。『銀の福音』の暴走も、一夏達が撃墜されたのも、現れた無人機も全て、一人の天災——篠ノ之東の計画。全ては——。

「降道様!! どうか話を——」

「ああ、そうかよ……」

隆道を拉致する為に。

「今思えば五月の襲撃だつてそう。あのクソ兎はにーにを狙っていた。もう何処に行つても無駄。にーになら……分かるでしょ？」

「俺……だけの為にかよ。それ、だけ、で……。それだけでえええええ……!!!」

許せない。絶対に許せない。己を拐おうとし、あまつさえその為だけに一夏と箒を巻き込んだ、あの憎たらしい天災を。

殺したいと思うのはもうやめだ。殺す、絶対に殺す、確実に殺してその身体を引き裂いてやる。バラバラにして臓物をぶち撒けてやる。

隆道は取り戻す。そして黒く染まる。かつて、憎しみだけを活力にして抗った『髑髏』に。

『クロエ・クロニクルの戦線離脱を最優先』

「篠ノ之東えええええつつつ!!!」

『全機、迎撃』

確保は不可能。そう判断した無人機はクロエを逃がすべく隆道に瞬時加速で接近、掴み掛かる。

「ウシヤアツツツ!!!」

『——ゴッ』

が、無駄である。何故だか無人機が見えている隆道は右腕で下段から大振りを決める。丁度良く捉えられた無人機は——一撃で木っ端微塵に。

「見えちまえばこっちのもんだあ!!」

無人機だったものから飛び散るオイルが隆道に振り掛かる。最早、どの部位だったかすら不明な破片は一面に散乱。彼の目前には何も残らない。残り四機。

「おっと!!」

透かさずに別の無人機が隆道へ立ちはだかる。豪速の掴み掛かりは——彼を一切と捉えられず。

彼は『猛犬』を起動してない。にも関わらず、起動時と変わらない俊敏な動きで無人機の巨腕を全て見切り、躲していく。

「遅えつつつ!!!」

『——ギヤツ!?!』

隆道の十八番、跳び蹴りが炸裂した。無人機の顔面に轟音を響かせ、その反動を利用して大きく後退し距離を取った。

駄目だ、接近戦では彼の方が群を抜いている。これでは近づく事が出来ない。

「コレ、なーんだ」

「あ。ソレつて」

隆道は相手に考える暇を与えない。

彼が手に持っていたのは——銀色のガラクタ。元が何なのかは一目見ただけではわからないが、彼は勿論この場の全員がソレの正体に気づいた。

『風、いつまでソレを持っているつもりだ』

『ん? ああ、コレ? ほいっと!』

代表候補生四人が『銀の福音』との交戦の際、悪戦苦闘の末にもぎ取った『銀の鐘』。その後は鈴音が衝撃砲で木っ端微塵に吹き飛ばしていた。

そう、このガラクタ——『銀の鐘』の一部分。隆道が孤島を散策している時に見つけたものだ。漂流物となって流れ着いていたのである。

最早、使い物にならないガラクタでしかない。が、しかし。彼にとっては——何も関係無い。

「奪」

直後、そのガラクタは碎け散る。

——『銀の鐘』奪取——。

——破損データ復元完了。構築開始——。

隆道の右背中に粒子が集まっていく。そこから生える様にソレは形成され、小型の黒き砲が姿を現した。

——対IS攻性エネルギー兵装『PW—120』——。

「試し撃ちだコラアツツツ!!!」

隆道の怒声に応えてか、その砲身は彼の目線と連動して動き、砲口にエネルギーが集束。赤黒い光弾一発が高速で放たれた。

『』

爆散。言葉で現すならそれに尽きる。

近距離にいた無人機は光弾をもろに直撃。怯む暇もなく身体は大爆発、四肢だけを残して破片が散弾の如く散っていった。残り三機。

「は、ははっ、ハハハッ!! スーツゴイ!! 凄いやにー!! まさかここのまで!!」

「あ、あ、……う？」

突然に嗤い出した日葵に隆道の動きが止まる。頬を赤く染め、目を輝かせ顔がほころんでいた。いきなり何なんだコイツ、敵対していた筈ではと彼の脳内に疑問が浮かんだ。

「そうだよねえ!!? 敵は殺らなきやねえ!!? んじゃ私も本気だしちやおつつつ!!!」

日葵は高々に叫んだ。IS学園入学以来、決して見せなかつた本気が、彼女の全力が、今ここで。

「ワンオフ・アビリティ単一仕様能力」

——『どくくようこう慟哭陽光』発動——。

日葵が唱えた直後、『華鋼』の模様が変わる。

ミスミソウを彷彿とさせる鮮やかなる四色は、見る見るうちに光沢のある濃紺に変色していく。まるで、全身がソーラーパネルの様な——。

「な、何だよソレ……!!」

「どーおお? これが、私の単一仕様能力。太陽エネルギーをISのエネルギーに変換する……! 取り敢えずお疲れ様だよに——!! あとは私がゼーンぶ片付けるから!!」

「おま、何を……!!」

隆道は、もう戦う必要など無い。残った三機の無人機はここで終わりである。

「射程範囲、半径二キロ……!!　そしてそして出力最大……!!」

隆道の頭上に移動した日葵に眩い光が集まる。集まって集まって、最終的に青白い球体が彼女を丸々と包み込んだ。

残された無人機はその場から動かない。いや、既に諦めたのだろう。逃げられないが故に。

——高エネルギー反応を感知。回避せよ——。

「おいおいおいおいマジで洒落になんね——」

「死ねえつつつ!!」

その瞬間、太平洋に直径四キロメートル程ある巨大な光の柱が生まれた。

——ネメシスより各員、こちらの作戦は終了。

——負傷者多数。内一名、重傷。『月長石』は無事に確保した。

——代表候補専用機、全機ダメージレベルD。

——強化外骨格の用意を。奴を引き摺り出す。

——『月夜作戦』を続行せよ。

第五十七話

——準備しろ。ハンター6のみ私が合流するまで待機。先に例の職員二名を黙らせる。

——了解。処分はいかなる方法で？

——それは奴等次第だ。私としては賢い選択を期待したい。

——ハンター0—1、降下準備完了。命令待機中、指示を待つ。

——ウオツチャー17、突入準備完了。

——ウオツチャー21、同じく突入の準備完了。火刑と磔刑、どちらでも行けます。

——了解。ウオツチャーは待機、指示を待て。やるなら両方だ。……さて諸君、あの憎たらしいくそつたれに思い知らせやろうではないか。

『銀の福音』撃墜作戦は苛烈過ぎる戦闘の末に漸く幕を下ろした。勝利を収めたのは一夏達だが——安堵や歓喜等よりも幾つかの懸念が勝った。それは報告後も変わりはしなかった。

撃墜した『銀の福音』は完全に大破。操縦者も二割以上の深達性二度熱傷という重症。帰還後は早急に緊急治療、その後は専門施設に運ばれた。当分は入院治療との事。かなり散々な状態だが、関係する国々は何も言及出来やしない筈だ。

当たり前だ。『軍用 I S』の暴走に加えて日本へ領空侵犯。条約違反と国際法上の不法行為をした国にそんな厚かましい権利は絶対に許されない。公にされないだけマシであろう。

次に代表候補生。第二撃に参加したセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは軽傷で済んだが、彼女達の I S はダメージレベル D まで到達してしまい操縦が不可能に。国から部品を取り寄せるまでは動かせないだろう。試作の装備処か専用機までも壊れたのだ、それぞれの国は相当お怒りになるに違いない。

だがしかし、その点に関しては何も心配無用。学園上層部が全力で対応するとの事だ。彼女達がお咎めを受ける事はない。死に物狂いで戦ったというのに非難の一つでもされたら泣きつ面に蜂、とても堪ったものではない。

専用機についてはまだいい。怪我也構わない。あの厄介な『軍用 I S』が相手なのだ

から彼女達は全て覚悟の上であつた。

——結局、勝てなかつた。

セシリア達の心にまた一つ傷痕が刻まれた。

『銀の福音』を撃墜出来なかつた。突然現れた無人機に太刀打ち出来なかつた。セシリアだけは他三人以上に粘り強く奮闘していたが、途中から手加減を止めた無人機により被撃墜一歩手前まで追い詰められた。

四人掛かりでも勝利は有り得なかつただろう。増援の一夏達や日葵の援護射撃が無ければ全滅は免れなかつたであろう。

そう、日葵だ。太刀打ち出来なかつた無人機をたつた一撃で消し飛ばし、『銀の福音』に致命的ダメージを与えたのは彼女。あの巨大たる光線はセシリアのBT兵器と同類——だがしかし、それと比較にならないオールレンジ攻撃であつた。

そこで全員が知る。日葵と『華鋼』の強さを。この事件の真相を。その真犯人を。そして彼女の罵倒と共に無慈悲な現実を叩き付けられる。

『本つ当に無様。所詮は代表候補生だったかあ。情けないと思わないの？ 特に中国人、お前だよお前。何なのその姿？ あれだけ啖呵切つといてソレ？ もう辞めちゃえ

ば？」

日葵の一言は、とても冷たかった。

暴走ISを囿に使った隆道の拉致計画。誰よりも逸早く気づき、その為に留まったのは彼女だけ。やる気が無かった訳ではなく、襲撃者が来た時の戦力となる為に敢えて作戦に参加しなかった。

それは間違いではなかった。全員の証言を基に状況を照らし合わせると、辿り着く答えは隆道の拉致なのだと言出来る。

初撃での被撃墜による戦力の低下、第二撃から始まった通信障害、そこからの同時に押し寄せた束と無人機の襲撃に幻覚。もし、あの時に彼女が言われるがまま撃墜へと向かっていたら花月荘は戦地と化し、彼は拐われた可能性があった。

ほとんどが束の術中に嵌まってしまったのだ。それに抗い、打ち破ったのはたったの三人だけ。対策した日葵、復活した一夏、予測不能な隆道。男子二人は結果的にではあるが良しとしよう。

何故、それを言わなかったのかと誰かが彼女に強く言及するが——返ってきた答えはコレ。

『あのクソ兎に張り合えるう？ 無理でしょ？ 雑魚共じや何も守れないよお。あとさあ、今まで何があったか忘れたのお？ お前達なんか信用も信頼も出来ないんだけ

どお』

作戦より優先すべき方を取った。それだけだ。

束が相手なら彼女達では戦力外と判断、騒動に便乗して男子を狙う者が旅館に潜んでいる可能性有りと推測。考えうる不安要素等を取り除くべく不真面目を装い、非協力的態度を貫いた。何故、態々その行動に至ったか。

日葵は、今の今まで全員を観察していたのだ。過激派かそうでないか。有事に頼れるのか否か。へらへらとおちやらけた態度の裏では一人一人を厳しく見定めていた。

セシリアは四月の件で除外、鈴音は癩癩持ちで除外、シャルロットは戦力不足で除外、ラウラは男子に対する敵対心があった件で除外、教員達は男性操縦者襲撃事件の件で除外、千冬に至っては束との繋がりがある時点で除外。一応それとなく言葉を濁した彼女だが、各それぞれはその意味を理解し、心身共に傷だらけなところへ追い打ちを掛けられてしまった。

今では違う？ 関係無い。決めるのは日葵だ。他の者が彼女を信用しなかったと同じく、彼女も他の者を信用しなかっただけに過ぎない。全ては今までに起きた過程と結果によつた行動なのだ。だからこそ、彼女は信用しないし信頼もしない。これまでも、そしてこれからも。

日葵に反論する者はもういない。寧ろ、今回の件で一番に功績を残したのは日葵であ

る。そんな彼女に誰も非難する資格は無かった。

とにかく、これで苦しい戦いは終わり。作戦は完全終了し平穩は取り戻せた——とはならず。

問題は未だ山積み。箒の専用機——『紅椿』の処遇はどうするのか、通信障害時に真耶達の前に現れた謎の襲撃は何なのか、『灰鋼』は何の様に管理から逃げ出して隆道の元へ戻ってきたのか、暴れ散らした彼の処分はどうするのか。

『紅椿』の件はともかく、他の三つは近い内に片付く。答えは直ぐそこだ。

時刻は十九時半辺り。花月荘にて。

「ね、ね、結局何だったの？ 教えてよ」

「機密だから駄目」

臨海学校最後となる夕食時。豪華過ぎる食事を黙々と食べるシャルロットの周囲には生徒数名が群がってあれやこれやと訊いていた。

気になるのも仕方がない。テストは突然中止で自室待機、それが終わってみれば代表候補生達に絆創膏やら湿布やら包帯やら目立つではないか。箒はいつも付けていたりボンが無い、教員の姿は見えない、キモい程に食べまくる日葵もない。生徒達はそれがあまりに不思議で居ても立つてもいられなかった。

彼女だけに群がるのは親しみやすさが断トツであるからだろう。他の代表候補生には雰囲気から到底訊けるものではなかったが故の。

それは選択ミスだ。彼女は責任感が強い。

「ね、ね？ 誰にも言わないからー。それにさ、昼過ぎに変な音もしたんだよね、パンパンって。シャルなら何か知ってるんでしょ？」

「駄目」

「もくお堅いなあ。おーねーがーい——」

「制約付くよ？ 監視付くよ？ 裁判するよ？ 聞いたら暫く普通の生活——」

「ごめんシャルごめん、ホンットにごめん……。もう聞かないからそんな怖い顔しないで……。？」

般若がそこにいた。生徒達は折れた。

誰も見た事のない、酷く恐ろしい顔であった。あのシャルロットが。これ以上は本気で怒るぞ、そう目が訴えていた。

普段は怒らない人間が怒るとかなり恐ろしい。彼女達はそれを身をもって知った。後に生徒達はそれはそれは凄い眼力だったと語る。

「……分かってくれれば良いよ。はい、この話はこれでおしまい。もう何も言わないから」

「はい……」

「……ふうつ。……」

質問責めから解放されたシャルロットは小さく溜息。再びに箸を進める——前に、流し目で隣の男子二人へ目を向ける。

「……!!……!!……!!……!!……!!」

隆道と一夏
男子二人は爆食いしていた。

隆道だけではない。一夏も彼と同様に猛烈なる速度で白米を一心不乱に掻き込んでいた。彼等の間には複数のおひつ。昨日の比ではない。

とても荒々しい。なのに食器の扱いは超丁寧。豪快かつ器用に食べ物が見る見る減っていく。

「……やべえ、もう飯が……!!」

「うわっ、マジだ……!! すいませーん!! おひつお願いしまーす!!」
「はーい!」

「危ない危ない……。あ、ソレ貰います」

「あ! てめ!」

フードファイターコンビがそこにいた。

炸裂する食べ盛り。新しいおひつが来るや否や二人は茶碗に盛りに盛ってまたしても掻き込む。昨日の食べっぷりが影響したか、彼等のおかずと汁物は二倍近くの量があつたがそれも殆ど無い。今や生徒から貰つたおかずを取り合ひしていた。何してんだコイツら。

(そりゃあ……食べるよね)

一夏は一時的昏睡状態のせいで昼食を取れず、隆道に至つては昨日の夕食を最後に朝から何一つ口にしていない。激しい戦闘で体力をこつそりと持つていかれていた。身体のエネルギー切れだ。一応シリアルバーの類いはあつたが彼等はこれを断り、何も食べようとはしなかつた。

そう、全てはこの時の為らしい。豪華な食事が待っているのに他で腹を満たすとは馬鹿の極み。大爆発寸前の食欲をここで満たそうと彼等は暫し耐えていたとの事。どちらにせよ馬鹿だった。

最早、馬鹿二人彼等は腹を満たす事しか考えていない。ひたすら目の前の飯に猛獣の如く食らい続ける。誰も彼等を止められないだろう。

見慣れたものだ。生徒達は男の子だなあと深く考えずにスルー、此方は此方で楽しもうと普段の姦しい空気に戻っていった。

「……………」

違った。隆道だけは。

時間が止まってしまったかの様にピタリと箸を止めて彼は一人物思いに耽る。その顔は次第にと険しくなり、眉間にはがつつりと皺が。

彼は思い出す。孤島で戦いを終えた後の事を。日葵と二人きりになったあの時を。

時は遡る。孤島が光に包まれたその後。

「マジ……………かよ……………」

全ては“無”になる。

自身の足元を除き、辺り一面は焦土と化した。緑は全て焼け、砂はドロドロに溶け、海は湯気が高く立ち昇って孤島を囲む。それは一向に収まる気配がなく、まるで壁の様になつていた。

焼ける音が止まない。沸騰する音が止まない。何処を見渡しても舞い散る火の粉と焦げた地表と湯気の壁だけ。それ以外は——何も無かつた。

「大丈夫う？」

「！」

絶句する中、背後から聞こえるしまりない声。ゆるりと振り向けば、地表から僅かに浮く日葵が満足げな表情で此方を見ていた。血だらけなのが不気味さに拍車を掛けている。

転がっていた無人機の下半身は消えた。自身が破壊した無人機だったものも消えた。残っていたI Sコアも消えた。他の無人機も消えた。

コレを、この地獄絵図を、彼女一人が作った。全てを、何もかもを一瞬で焼き尽くした。

強い処の話ではない。比喻ではなく、文字通り次元が違い過ぎる。これが——彼女の”力”か。

「いやあー、これでめでたしめでたししてねえ。もうあっちこっちに行かないでよねえ。

「こっちはそりやもう大変だったんだからさあ」

「……今更出てきて何のつもりだお前」

「何のつもりって……そりや男性操縦者を失えば問題じゃん？ ほら、私って代表候補生だし、貴重な人材は守らないとねえ？ ……それより、私と一緒にでも平気なんだねえ。もう慣れたあ？」

「あん？ ……あ」

「言われてみればそうだ。日葵を前にしても一切恐怖心が湧かない。頭痛も無いし息切れも無い。首輪も点滅していない事から発症もしていない。

「どういう事だろうか。前までは一目見るだけで心臓が締め付けられる感覚があったというのに、今では嫌な感覚がまるで無い。彼女の言った通り慣れたのだろうか。或いは別な感情が勝ったか。」

「それならそれでいい。彼女に対して態々ビビり散らかすのは懲り懲りだし発症なぞ御免である。不気味なのは未だに変わらないが気にする事ではないだろうと隆道は納得した。」

「まあ、いいわ。……なあ日葵」

「!! ……なーにつかなあ？」

「あの女……篠ノ之束は何で俺を狙うと思う？」

「……さーて、ねえ。男性操縦者のサンプルとか欲しいんでしょ。それか何かしらの実験台い？ 考えるだけ時間の無駄だと思うけどねえ」

「……あつそ」

何処か腑に落ちない。

男性操縦者を欲しているのならば一夏も候補に当たる筈である。それなのに向こうは自分だけを狙ってきた。強力な無人機を過剰なまで揃えて、一度ならず二度までも。故にこれは違うだろう。だとすると、飽くまで狙いは自分自身なのか。

それにもう一つ引つ掛かる。クロエと名乗った少女は共に行こうと言った。拉致が目的にしても妙にかしこまった態度は違和感が全く拭えない。自分ならば有無を言わず気絶させてから拐う。

ますます真意が分からなかった。結局は日葵の言う通り、考えるだけ無駄でしかないのだろう。この違和感は一旦放置するしかない。それよりも気になる事がたつた今増えた。

「……えへ。えへへ」

(何笑つてんだコイツ……)

日葵から溢れ出す満面の笑み。隆道は引いた。

恐怖心は失くなった。けれども、流石にコレは不気味過ぎて寒気がした。いきなりど

うした。

どうしてそんな嬉しそうな顔をしているのだ。何だその口元は、何だその頬は、何だその目は、何だその仕草は。そんな顔で此方を見るな。

「~~~~♪~~~~♪」

(鼻歌まで歌いやがった……こわつ)

撤回する。やはり恐ろしい女だった。

火の粉が舞うこの地獄絵図の中で笑顔全開から鼻歌は頭がおかしいとしか言いようがなかった。自分自身も氣狂いだと自覚してはいるが妹の方がヤバ過ぎる。何かしらのスイツチでも入ったか。

見ない、触れない、関わらない。こういう輩は徹底して無視に限る。反応でもしたらもう最後、録な目に会わない事は明白故に隆道はガン無視、見なかった事にして目を逸らす。

大分前から分かり切っていた筈だ。人は簡単に変わってしまうのだと。自分も、周りの人間も、元身内も。誰でも。

なのに——何故か、何処か哀しくなる。

「~~~~♪~~~~♪……ねえ。ねえねえねえ」

「……はあつ。……何だよ」

「真面目な話さ、暫くは大丈夫だろうけどいつかまたクソ兎は拐いに来る。間違いないね。それにあいつだけじゃない、ISに乗れる男を狙う奴等はその中にある。学園にいる内はまだ良いとして外ではどうする気？ それにずっといられるって訳じゃないんだよ？」

「そんな事お前に言われなくても分かつてるわ、次はどんな手を使ってくるやら。……まあ、俺に次なんてねえだろうけどよ」

「うん？」

今回はどうにか退けたが次こそおしまいだ。

軍事重要機密を知った、教員に暴行を加えた、一時的とはいえ貴重なISを持ち出して脱走した。もうIS学園にはいられない。家にも帰れない。

襲撃も打つ手が失くなる。畜生共はどうとでもなるが相手が束なら無理だ。ISが無ければ抵抗も出来ずに拐われるだろう。

(……くそつたれがよお)

天災の顔が脳裏にちらつき、落ち着いた怒りと憎しみが一気に湧き上がり、更なる黒に染まる。青年は——『どす黒い何か』に侵食されていく。

許せない。許せない。本当に許せない。最早、彼女の死に様をこの目で確と見るその時まで胸のつかえが取れそうにない。今までと段違い過ぎる憎悪が身体中から溢れ出

そうになる。

この憎悪と怨恨を晴らす為には――。

「――に。――に。おーい、もっしもーし」

「――つ。……うるせえな、今度は何だ」

「今後の心配でもしてるんでしょお？ それならすつごいナイスな方法あるんだけどお」

「……ああ、分かった分かった。聞いてやるから聞いてやるから」

さつきから本当に面倒でしかないが仕方無い。今は向こうの気が済むまで相手でもしてやろう。どうせあと少しで一夏達が来る筈だからそれまで辛抱だと、隆道は耳をほじりつつ意識を少しだけ日葵へ向けた。飽くまで少し。適当にあしらう。

馬鹿正直に耳を傾けるつもりなど微塵も無い。話を真面目に聞く必要はない――のだが。

「家に来て」

「……今、なんつった……？」

また耳がおかしくなったか。今、日葵は何と？

家に来て？ いきなり何だ？ 何の話だ？

いや、隆道は理解しなくなっただけ。

日葵はこう言っているのだ。

また『家族』になろう、と。

「家に来てって言ったの。今度こそママのどこに行こう？ そしたら色々解決で、き、る、か、ら」

「……!!」

隆道の煩わしい気持ちは吹き飛ばされる。

全く考えていなかった——と言えば嘘である。父親が亡くなった時も、IS適性が判明した時も、日葵に再開した時も、頭の隅っこでその可能性がチラついていた。いつ、その時が来るのかと。

身寄りがいなくなつた子を血縁者が引き取る。十分に有り得る話だ。今まで来なかつたのが逆におかしかつた。しかし、まさかこのタイミングでその話を持ち掛けられるとは。

「にーに分かるでしょ？ 私とママのここに来れば安心して暮らせる。『過激派』の連中共は二度と手出しなんて出来ない。安全も、お金も、権力も、何でも手に入るんだよ。なんてつたつて権利団体の会長とその娘なんだし」

「……………」

「あのクソ兎だつて追い払えるよ。私にはそれが出来る”力”がある。どーお？ 魅力的でしょう？ そう思わない？」

「……………お前——」

「私は大歓迎だよ。ママだつて望んでる。必要な書類は全部揃えてる。部屋だつてもうあるんだ。あとは……………にーが受け入れるだけ」

再び『家族』となる。それは極上の甘い蜜。

この女尊男卑社会で大きい権力を持つ団体の頂点に立つ会長と、IS操縦者で且つ

専用機までも所有するその実娘。強大な力が二つもある血統、それが篠原家。

この日本において彼女達は正に最強の親子だ。男性は勿論、傲慢過ぎる女性でも篠原家の前では無力で虫ケラでゴミ以下で無価値な存在と化す。例え穏健派だと評判とて、篠原家を敵に回す事は即ち死を意味する。

この親子に盾突く事は国家反逆と同義である。少しでも噛み付けば法で叩きのめされ、周囲から打ちのめされ、親族もろともこの世から消える。

有り得ないと思うだろう。しかし、これも全て女性優遇制度という狂気が招いた当然の結果だ。ISの為に女性を一括りにし便宜を与えた結果だ。男性の人権より国の利益を優先した結果だ。

有事の際の防衛力を目的で施行したこの制度は結果として類を見ない最高の成果をもたらした。有益にもならない威張り散らす有象無象と違い、実績を残した篠原家は指折りの価値があるのだ。だからこそ、国はあの手この手を使って保護し、確保する。失わない為に。奪われない為に。

そんな権力の塊の様な血統に隆道が入ると？　それが、血の繋がった身内であり、世界にたった二人しか存在しない男性操縦者の一人なら？

そう、唯一無二の後ろ盾が生まれる。

誰もが隆道に齒向かえなくなる。ISに守られ、血統に守られる。国が、世界が彼の味方になる。彼を仇なす者は世界から敵視され、淘汰される。彼の安全は保障される。

それだけで終わらない。国が味方する女性権利団体の会長。希少な高いIS適性と強大な専用機と実力を持つ実娘。貴重な男性操縦者である実息。三つの“力”が合わさり、最強から無敵の親子へと。篠原家は更に拡大していき、広告塔として注目を浴びせた織斑家と同等以上の国宝が完成する。

一体何れ程の男性が欲するであろうか。権力に怯える必要もなく、生活に一切と困る事もなく、何一つ苦勞しない裕福な人生を。

彼だけに許された特別な切符。彼はただソレに応じるだけでいい。たったそれだけで人生が全て変わる。『負け組』から『勝ち組』になる。

そう、『家族』になるだけ。それだけでいい。

「なるほどな……。そういう事かよ……」

『家族』になるだけで――。

「ね？　また一緒に――」

『家族』は皆死んだ。

「俺の『家族』はもういねえ」

「――！」

隆道は拒絶する。『家族』を。その甘い蜜を。

「親父を捨てたあの女は俺の『家族』じゃねえ。ISを受け入れたお前も、俺の『家族』じゃねえ。俺の『家族』は、親父とハルだけだ。だから……だから俺は『篠原家』にはならねえ」

「……………」

答えは既に決まっている。

もう、嘗ての家族はいない。ISの存在で全てが壊れた今となつては。それ等はどれだけ願つても戻る事はない。二度と。

父親はこの社会によつて死んだ。愛犬は無惨に殺された。母親と妹はISに魂を売り敵になった。誰も戻つてはこない。あの頃には戻れない。

それに、隆道は見逃しはしなかった。

「うまい話には裏がある。俺が気づかねえとも思ったか」

「何の話？」

「俺を『飼いだ』にするつもりだろ」

「……ありや、バレたあ？」

凶星だったのか、日葵は目を丸くさせた後舌を出して肩をすくめる。隆道の推測は的中した。

そう、これこそ日葵の目的。身内を引き取ると言えば聞こえは良いが、その実態は隆道を手駒にする奴隷化——『飼いだ』である。

「だろうと思つたわくそが。何処の国も欲しがる俺を出しにして甘い蜜でも吸おうつか？」

「よく分かつてるじゃん。にーにが来るだけで色んな話が私に飛び込んでくるし有利になれる。楽な世の中だよええ。……でもさ、良いのお？ 今までの生活よりは間違いなく良い筈だけどお。大人しく受け入れた方が身の為じゃない？」

「はんつ、ほぎきやがれ」

確かに今までの生活よりは断然良いのだろう。富と身の安全を第一とするなら最高の後ろ盾だ。大抵の男性ならば飛びつく話なのかもしれない。しかし、この案に乗るの

は真の敗北を意味する。

妹に屈し、元母親に屈し、全ての女性に屈す。そして否定し続けたI Sにも屈する。自らの人生を全否定する事になるのだ。

全てが無駄に終わる。今まで抗い続けた人生が意味を成さなくなる。共に戦った仲間を裏切る。そして、何よりも――。

ハルの無駄死を認めてしまう。

絶対に認めたくはない。絶対に耐えられない。受け入れたらこの先一生許せなくなってしまう。この女尊男卑社会に抗った自分自身を。

それ故に拒絶する。I Sを。その恩恵を振り翳す全ての者達を。この世界を作り上げた元凶を。

「俺は『家族』を捨てねえし絶対的に屈しねえ。『柳』として最後の最後まで生きてやる。お前やあの女の手助けなんか死んでも御免だ馬鹿野郎」

「……………ふーん」

隆道のはつきりとした拒絶を前にしても日葵は物動じなかった。恐らくは最初から拒絶されると分かり切っていたのだろう。

さて、彼女は どう出る。この手の人間は自分の思い通りにならない場合、いう事を聞かせる為に何かしらの嫌がらせを仕掛けてくるが果たして。間違ひなく、今までよりも悪質で苛烈であろう。折れるつもりなど更々無いが。

何でも来い。耐え切つてやる。寧ろ返り討ちにしてやる。そしてやられたその分を数十倍にして報復してやると、彼は意気込んだ。

「……んー、さつすがだねえ。他の馬鹿共なんて直ぐへこへこするのに全つ然逆なんでもんさあ。こりや無理かなあ。ああ、ざーんねん」

「? 何だお前、やけに諦めが早えじゃねえか。てつきり無理矢理従わせるかと思つたんだが」

不自然に引き下がる日葵には違和感しかない。今までの奴等なら徹底するという事を聞かせるよう躰の如く嫌がらせやら暴行やら仕掛けてくるのがセオリーなのだが、どうやら彼女は違う模様。

いや、目の前の人間がこうも簡単に諦めるとは思えない。諦めたと見せ掛けて後日仕掛けてくる可能性はある。油断は禁物だ。

「それじゃ意味無いんだよねえ。こればかりはにーにの意思が必要。私は『過激派』とは違う」

「俺からすればお前等は同類でしかねーよ」

「あーはいはい、今はそれでもいいからあ。ま、気が向いたらいつでも——お？」
『うわつ、間近で見るとやはり凄まじいな……。本当にこの中なのか……。？』

『反応はある、ここで間違いない!! んん? もう一機……。篠原さんかコレ!? おーい!! 柳さーん!! 迎えに来ましたよー!!』

いつの間にもやら回復してた通信回線から二人の声が聞こえる。位置座標を見れば四キロ付近まで来ている。一夏達は漸く終わらせたい。

これにて作戦は完全終了、後始末だけである。後は知った事ではない。全て大人達に任せよう。

「お迎え来ちゃった。んじゃ話はまた今度ねえ」

「また? 二度とねえよ」

「まあまあそう言わずにさあ。ママには保留って言うておくからあ。……。ああ、それは最後に」

「?」

「追放なんて無いから。ここからは私の仕事」

意味深な言葉を残した日葵はその口を閉ざす。それ以降、彼女が話し掛けてくる事はなかった。

日葵が最後に言つた一言は一体何だったのか。追放は無いとは何だ、彼女の仕事とは何だ。己に向けた言葉なのだから何かしらの関係があるのは明白。となれば、何か仕掛けてくるか。

追放と言えば引つ掛かりが一つ。処分は後程に伝えられると言われたのだが未だに何も言われない。それ処か、こうして呑気に夕食にもありつける。何故拘束されないのか謎であつた。

とは言うものの、処分に関しては教員がいない限りどうしようもないのも事実。他のメンバーも一切と言及しないのだから放置して良いだろう。何れ分かる事だ。

「考えるだけ無駄、か。さーて飯飯……んあ？ あんなにあつた茶碗蒸し——」

「ふ？ ふおうふあふいふあふいふあ？」

「お前……!! マジでお前……!!」

悲報。全部食われる。

同時刻。

「うう……」

「貴方達は……一体、何者……!?!」

「騒ぐな、許可無く喋るな、質問にだけ答えろ。死体袋行きになるぞ」

「……!?! ……」

「それでいい。早速本題に入ろう。『六・五』を憶えているな?」

「!?! どうしてそれを——」

「二度までは許す」

「——!?! え、ええ……」

「……はい。憶えて、ます……」

「次は無い。……さて、知り過ぎた貴様らに二つ選択肢を与える。選べ、親族共々処刑されるか、要求を呑むかだ」

『彼等』は、まだそこにいる。

暫くして。

「確かこの辺りの筈……」

夕食を終えたその後。暫し休息を取った一夏は砂浜近くの岩場へと一人来ていた。満月の今日は真夜中でありながらも明るく、聞こえる波の音はとても穏やかであった。

何故、彼がここにいいのか。それは呼び出しを受けたからである。

『ブリュンヒルデが呼んでるぞ。砂浜近くにある岩場に一人で来いとさ』

隆道曰く千冬から話があるらしい。何故に直接言つてこないと訊いたが知らないとの一点張り。本来は抜け出し厳禁なのだが、姉が呼んでるならいいかとあまり深く考えなかつた一夏はこうして来たという訳である。

しかし、肝心の本人が何処にも見当たらない。もしかすると来るのが早過ぎたか。

「一夏……?」

「ん?」

唐突に名前を呼ばれた一夏は、その方を向くと月明かりに照らされる千冬——ではなく箒の姿。

リボンはまだ無い。あの時、焼かれてしまった時からストレートヘアのままだ。浴衣姿もあつて中々に新鮮で綺麗であつた。

だがしかし、新鮮と同時に違和感が拭えない。初めて出会った時から結んだ姿しか見なかつたが故にコレジャナイ感が凄まじい。やはり、彼女はいつもの髪型が似合うと思つていた。

だから——丁度良いのかもしれない。

「何故ここに？ 一夏も呼ばれたのか？」

「つていう事は箒も千冬姉に？」

「ああ。と言つても柳さんから言われて……」

「ん？」

「ん？」

ここで二人はおかしいと気づく。

あの隆道が千冬の伝言を易々と聞くだろうか。自分で伝えろなり言うと思うが。そもそも話、二人揃つて呼んだなら彼の伝言と矛盾している。いや、大事な話ならば直接言ってくる筈である。一体これはどういう状況だ？

取り敢えず千冬に連絡だ。というか、最初から本人に訊けば良かった——と、その時。
「ん？ 一夏、携帯鳴ってるぞ」

「ああ、ただの通知だから別にいいや。そういう筈だつて携帯鳴ってるぜ」

「私のも通知だ」

「……………」

二人同時に携帯から何かしらの通知が入った。このタイミングで同時？ と違和感が出た二人はおもむろに画面を開く。

通知内容は短文のメッセージであった。相手はなんと隆道。内容はこう書かれていた。
『呼び出しなんてねーよ。少しは疑え』

「……………うええええええ……………」

隆道の嘘に引つ掛かる馬鹿一夏&二筆二名、ここに有り。

やられた。初めから呼び出しなんてなかった。何がしたいのだ、あの男は。というか、この文を見るに何処かで見ているのだろうか。

非常に不味い状況である。もし、旅館から抜け出した事がバレたら大目玉間違いなしだ。隆道は良いとして他の人間に見られたら色々ヤバイ。絶対に一騒動起きてしまおう。もう勘弁願いたい。

「うーわー……何やってんだあの人——ん？」

「と、取り敢えず帰ろう。見つかったらただじゃ済まない……どうした一夏？」

「……………」

帰ろうとする筈と違い、一夏の目線は携帯から離れず。何事かと彼女はつい踏み止まる。

彼が見ているのはメッセージの続き。そこには彼だけに送られた文が一件。

『さつさと渡せ』

一夏は察する。

もしかや、この為に場を設けたのか。だとしたらこれはナイス機会、今の内に済ましてしまおうと一夏は意を決した。

今日は七月七日。七夕の他にもう一つ、特別な日でもあったりする。自身ではなく—

—筈の。

「あのを、筈」

「何だ。ぐずぐずしないでさつさと——」

「はこ」

「こは勢いだ。一夏は筈の言葉を遮り、懐から梱包されたモノを出して問答無用で筈に渡した。突然の事に呆気にとられた彼女はソレを見るなり目を丸くさせる。

それは透明な袋に梱包された、白く細長い布。ソレは——とても綺麗なりボン。

「え……コレ……」

「いやな？ あのな？ 本当はな？ 紙袋のまま渡したかったんだけどクシャクシャになつてさ。みつともねえなあつて思つて。渡すタイミングも中々見つかんなくて」

「あ、えと……」

「誕生日、おめでとうな」

そう、七月七日は——箒の誕生日である。

その頃。

「やつと渡したな。よし今がチャンスだ篠ノ之。いけ、ほらいけっ」

一夏達から数百メートルは離れた岩場。そこで匍匐する隆道はスコープ越しにて彼等二人を観察——いや、覗き見していた。拉致されかけた男が夜遅くに何をしているのだか。

遡る事、先週の日曜。大勢で臨海学校に備えて買い物に出掛けていた時の事だ。

『そーいや織斑よ、七日は篠ノ之の誕生日だろ。何かしら渡さねえのか』

『アレ？ 箒の誕生日知ってたんですか？』

『ん？ ……あー、前にお前言ったたろ』

『そうでしたっけ？ いや、そうでしたね……。まあ、プレゼントは渡そうと思ってるんですけどねえ。女の子には何渡せば良いのかさっぱりで。あとでシャルにアドバイスでも聞こうかなと』

『ふーん。 ……小さいアクセサリーで良いだろ。それかりボンとかで良いんじゃないね。お前が渡せば何だろうと喜ぶだろうよ』

『それってどういう意味です？』

『好きな奴から貰えばそら嬉しいだろ』

『箒はただの幼馴染みですよ？』

『マ、マジかよお前……』

『え。な、何ですかその冷たい目は……』

そう、あの時に一夏は女性陣が目を離れた隙を突いて箒のプレゼントを購入していたのだ。渡すタイミングも当日、人気が無い時だと今の今までその時を伺っていた。

だがしかし、今回の騒動でかなりタイミングを潰されてしまった。このままでは折角の誕生日が台無し、そう踏んだ隆道は二人きりにする強行に至った訳だ。一夏にも伝えずに。

結構ガバガバな作戦だが、あの二人なら千冬の名を使えば簡単に引つ掛かるだろうと

いう信頼が彼にはあったのだった。それは見事に当たった。何て悪い奴なんだ。

場は設けた。あとは二人次第。このまま流れで良い感じに行ければゴール出来るかもしれない。その時まで静かに見守ろう。

「ほう、ここまで離れたのはこの為だったのか。これは中々……」

「——!! ——!! ——!!」

「……はあ」

隣にいる奴等がさつきからうるさい。

「……あのよお、お前等いつまでいる気だよ？ まだ戻るつもりねえからいい加減諦めろって」

「いやだから抜け出しはマズインですって!! 何回でも言いますけど外出厳禁の上に狙われてる貴方が一人でふらふらしなくてくださいよ!! 少しは自覚あります!? また襲われたりしたらどうするんです!! 大人しくしてくれませんかと流石に守り切れませんからあつっつ!!」

「ふむ、昨日教官が言っていたのは正しかったか。こうして見ると実に興味深いな」

隆道の隣にいるのは匍匐状態のシャルロットとラウラの二人。片や小声ながら滅茶

苦茶に焦り、片や反射防止の双眼鏡で同じく覗き見していた。

何て事はない。彼女達是不振な動きをする彼を追い掛けた結果である。連れ戻そうとしたが彼は頑なにその場から動かないが故に彼女達も留まる羽目に。本当に迷惑極まりないな、この男は。

一応語らせて貰うが、シャルロットの言い分は十割正しい。全面的に悪いのはクソガキ隆道の方だ。処分確定だからといって好き勝手していい訳では断じて無い。無敵の人かコイツ。

ラウラ? 実力行使で連れ戻そうとしたのだがやはり無駄に終わった。つまりは諦めた。

「まあ待てよ、今良いところだから静かにしろ。つーかよ、今のお前等あの無人機共にボコされてIS使えねえじゃん。俺すら止められねえお前等がどうやって守るんだよ。ほら言ってみろ」

「ぐ、ぐうううう……。だ、だからって——」

「……む? おい見ろ、二人に動きが……!」

「何っ。……おお!! おいおい近えなあ!! こりやいけるんじゃね?」

「え? ちょ」

「お? おお? おおお!! こりやあいける、ぜってーいける!!」

「……………。ぼ、僕も見たい、なあ…………？」

隆道とラウラは一夏達に釘付けになる。二人の様子からして進展が見えたらしい。何も持たないシャルロットは目を凝らしても何が起きているかよく分からなかった。置いてけぼりだった。

彼女も花の十代。恋事情は興味があるのだから見たくないと言えは嘘だ。つまり超見たいのだ。

「あの一…………」

「これは…………もしやアレか？ キスというものが見れるのか？ そうなのか？」

「ちよつと…………」

「ああ、時間の問題だろうよ。…………ああくそつ、何でそこでモジモジしてんだよ。織斑も織斑だ。いい加減気づけよバカタレが」

超絶ガン無視である。隆道の『O・O・G』が炸裂、ラウラも目前の恋事情が優先なのか同じく無視。ああ、可哀想なシャルロット。

「もしも…………」

「もうちよい、なんだがなあ。つあー、ここまで来たなら勢いでいつちまえば良いのに」

「……………。ぐすん…………」

「…………つたく。ほらよ」

「あ、どうも……あれ？」

可哀想なシャルロットを見兼ねたのか、隆道は溜息を吐きつつスコープを彼女に渡した。やはり何だかんだ言つて優しいではないか——と思つた彼女だが、覗く前に気になる事が一つ。

(ええええええ……。本物じゃんコレエ……)

代表候補生だからこそ分かる。このスコープ、明らかに遊戯用のレプリカではなかった。

等倍から十倍までの高倍率。所々疵は目立つが安物感が無く、変ながたつきも無い。見たところ防水性能と耐衝撃性能は抜群であつた。

実銃用の代物だ。何故、隆道がこの様な物を？

「あの。このスコープどうしたんです……？」

「あん？ ああ、俺の私物」

「私物？ あの、コレつてじつ——」

「おい、見る気ねえなら返せ」

「さーて二人の様子はどうかかなー」

シャルロットは疑問を無理矢理消して覗き見にシフト、何も聞かなかつた事にした。スコープの出所なぞ一夏達の恋事情と比べれば天と地の差、ミジンコみたいなものなの

だ。

ちなみにこのスコープ、六月の半ばに起こったシャルロット暗殺未遂事件の時に隆道が調達したクロスボウのパーツである。阻止の際に大破したその凶器はスコープだけ無事となり、没収された中でコレだけ返されたのであった。

勿論、本物。猟銃でも使えるヤツ。どうやって手に入れたかは『鬪體』のみぞ知る。

「あ」

「あ？ 何だ『あ』って」

「……………」

「おい、待て、お前ら、何があつた」

シャルロットがスコープを覗いた直後、二人は揃って間拔けな声を漏らした。何が起こつた。

二人の表情は次第にと残念そうな顔に変わる。一体何を見ているのだと隆道は一夏達の方へ目を向けると——何か増えている。

「ああ……………」

何だアレ。二つあつた人影が今は四つ見える。しかも結構動いている。目を細めてみるもやはり分からない。肉眼の限界か。

視線をシャルロット達に戻すと、既に諦めたか覗き見を止めて溜息を吐いていた。

「戻ろう。アレではもう駄目だ」

「そうだね。もう少しだったんだけどなあ……。あ、スコープありがとうございませう……」

「くそつ、何が起こってや、が……うーわっ」

スコープを奪い返し、見えた光景は酷かった。

「!!!」

「!!!」

「!!!」

「!!!」

月明かりの下で良いムードだった筈のそこには激怒しまくりな鈴音と、その彼女を羽交い締めで止めるセシリアが追加されていた。

超が付く程焦りを見せる一夏と箒、猛獣の如く暴れようとする鈴音、必死で抑え込むセシリア。どうやら一夏達を覗き見していたのは自分達だけではなかったらしい。

啞然のまま見続けて暫く。遂に拘束から逃れた鈴音は阿修羅の如く一夏を追い掛けた。まさかの鬼ごっこが始まってしまった。

一夏を鈴音が追い掛け、その二人をセシリアが追い掛け、その三人を箒が追い掛ける謎の構図。何なんだコレは。一体自分は何を見ているのだと思考が停止、何も考えられ

なくなつた。

しかし、そんな隆道でも一つだけやるべき事を理解する。

「……おっし、戻るか」

「はい」

我関せず。

第五十八話

時は隆道達の出歯亀(?)から少し遡る。

時刻は二十時。生徒一行が夕食を終えた直後、花月荘から数キロ離れた岬にて。

「……………」

そこに一人、この事件を起こした犯人——束は柵に寄り掛かりながら空中投影のディスプレイを眺めていた。小型の機械を耳に当てて。

その機械は古めのボイスレコーダーであった。その見た目からしてかなり使い込まれたものだ。あの天才が最新機器ではなくこんな古臭いものを持つているとは。余程大事な物なのか。

何を聞いているのかは一切と不明。分かる事は男性の声であるというだけ。他人に興味の無い、自分と身内以外は石ころ同然と認識している筈の束が延々とソレを聞くなど有り得ない事だった。身内からすれば頭を打っておかしくなったのかと思える程にだ。彼女の評価は散々だった。残当。

それはそれとして。その音声を聞きながらも、彼女は目の前のディスプレイを視線の動きだけで網羅していく。そこに映る——一夏達の戦い様と膨大なデータの羅列を。

『紅椿』の稼働率はたった九パーセント……。単一仕様能力も出なかつた……。駄目だ、低い。このままじゃ奴等とまともに戦えない……」

束の表情は暗い。とても暗かつた。身内が知るおちやらけた態度は微塵も見えず、身体全体から滲み出ると思わせてしまう程に落ち込んでいた。

隆道の拉致に失敗したから？ それもあるが、今の彼女は別の事に懸念を抱いていた。

「……これ以上は無茶にしなければならない。二人には頑張つて貰うしかないのかな。ああ、もう……」

束の目的は隆道の拉致だけに非ず。彼以外にも二人——一夏と箒に対してもある目的があつた。

箒に最新鋭機を与えたのは気まぐれではない。一夏のISが二次移行したのは偶然などではない。全ては来るべき■■を見越した——。

「……はあ。やること、多いなあ……。お仕事もあるのに——」
「……にいたか束え……」

と、その時。森林から静かに千冬が姿を現す。いつもの漆黒のスーツ——なのだが、

今の彼女は恐ろしいと言えた。

首元と両手には未だに残る包帯。腰には隆道を拘束したのと同じ特殊ファイバーロープが数本と日本刀が一刀。その表情は——相当に怒り心頭。マジグレ寸前であった。

静かに怒りを露にする彼女を見ても東は平然。驚く素振りは少したりとも無かった。その代わり何処か都合が悪そうだったが。

「……タイミング最悪」

「何?」

「何でもないよ。それよりも身体はもう平気?」

「お前を叩き斬れるぐらいには、な。……今日は本当に許さんぞ。お前を拘束する」

「おお、怖い怖い」

千冬はじりじりと東に近づいていく。近づいて近づいて、二人の間隔が三十メートル程になった所で彼女は勢いよく刀を引き抜いて鞘を遠くへと投げ捨てた。マジグレ寸前を越して最早修羅だ。

かなり本気の目である。かなり気迫を感じる。が、東はたじろかない。雰囲気もいつの間にか戻っていた。それが千冬の怒筋を更に増やす。

両者の距離は既に五メートル程。ここで千冬は立ち止まり、柄を強く握り締めて言葉

を投げた。湧き出る己の憤怒を抑え、淡々と。

「生体再生……。コアナンバー『〇〇一』にして初の実戦投入機、『白騎士』と同じ機能か……。やはりアレもお前の仕業だったんだな」

「アレって何かな」

「『〇〇一』は以前、何者かに強奪されていた。それが今年の四月頭に前触れもなく戻ってきた。何故かあの『白式』に組み込まれて、な。弄ったお前以外誰がいる」

「ぴんぽーん。はい、東さんがやりましたー」

全くの悪びれ無し。束のふざけた態度は千冬にとつて見慣れているものだが、今日という今日は神経を逆撫でする要素でしかなかった。

それは極一部の人間しか知らない事。研究所で管理されていたそのISコアは襲撃により盗まれ、『白式』のISコアとして戻っていた珍妙な事件。何の為に盗んだのか、何の為に戻ってきたのか。犯人の考えが全くと理解出来なかったその事件は大多数に知られる事なく無かった事にされた。

こんな意味不明な事件を起こしたのは東本人。やはりと言うべきだが、その真意までは千冬でもさっぱりと理解が出来なかった。単なる遊びか、それとも何かしらの企みか。しかし、それも今やどうでもよくなった。考える必要は無い。元凶を捕らえれば謎は解けるだろう。

絶対に捕まえてやる。今回ばかりは許さない。多方面を巻き込んだ責任を必ずや取って貰うと、千冬はその刀を更に強く握り締める。

本当なら直ぐにでも斬り掛かりたい。しかし、彼女の僅かなる自制心が衝動を止める。願わくば穏便に済ませたいが故の。

「ふん、本当にお前は天災だな。嘗て十二カ国の軍事コンピュータを同時ハッキングするという歴史的な大事件を仕出かした天才みたいだ」

「へえ。凄い天才がいたものだねえ」

「そうだな。……で、だ。色々と聞きたいんだが今は一つだけ聞こう。柳を狙う理由は何だ」

「……………」

束は答えない。が、その程度は想定済の千冬は更に続ける。箒に渡した第四世代機といい一夏のISといい山程あるが今は隆道だけに絞る。

もしも答えなかったら？ その時はその時だ。半殺しにした後で無理矢理にでも吐かせてやると千冬は手出しを堪える。

「私と一夏が戦闘不能になり、代表候補生四人が出撃するタイミングで通信を妨害し篠原に奇襲。此方の戦力が失くなったと同時に柳を拉致、か。最初から計画の内か？ だとしたらやられたよ。五月の時といい今日といい、あの天災がここまで執念深いとは

な。……それで？ 奴に拘る理由は何だ。何がしたい。何が見えている」

「それは……」

「いい加減うんざりだ。お前の企みに乗った私も同罪だが……それでもお前はやり過ぎた……！ 答えろ、柳を狙う理由は何だ……!!」

「……」

やはり答えない。いや、言う気無しというより言うか否か悩んでいる様子である。もしかしたら聞けるかもしれないと、千冬は敢えて黙る。

今までの事案、そして隆道に対する束の態度。これ等の材料からして十二分に理解した。彼女は彼に関する何かしらを知り、それを隠している。何がなんでも連れ去ろうとしている。

抹殺は有り得ない。実験台の可能性すら低い。何よりも『灰鋼』を引き剥がそうとしていたのが不可解極まりない。

これでは、まるで――。

「頼む、教えてくれ。私に刀を振らせるな」

「……」

せめて真意だけは知りたい。拘束は確定だが、内容次第では協力出来るかもと千冬なりの最後の情けが待ったを掛けた。

沈黙から十数秒。漸く束は口を開いた――が。

「……やだ。教えない」

駄目。絶対に言いたくないらしい。

またしても違和感。千冬が知る束という人物は話をはぐらかしたり無視したりする傾向がある。そんな捻くれまくり人間がきっぱり拒否するなど今まで見た事がなかった。

時間の無駄だ。これ以上は我慢出来そうになくマジギレ。もう終わりにしようと彼女は意を決し居合いの構えを取った。

「……そうか、ああそうか。お前に関わった私が愚かだった。もういい、今日で終わりにしよう」

「……ねえお願い、今日は見逃してくれない？　ちーちゃんに構ってる暇なんて無いんだよ」

「っ……!!　もう喋るな――」

「あああ？　私を差し置いて密会ですかあ？」

「――!？」

それは突然やって来た。

付近から聞こえる少女の声。その特徴的過ぎるだらしない口調は一人しか知らない。

「っ…………」

「篠原…………!?!」

「やあやあやあ。こんばんは、お二人さん」

二人揃えてその方へと向くと、暗闇から静かに近づくと不気味な笑顔の日葵が。

愕然せざるを得ない。何処から聞いていた? いつからそこにいた? 何故気づかなかった? それに——この妙な違和感は何?

「何ですかその顔はあ。まるで幽霊でも見た様な驚きですねえ。ちゃんと生きてますけどお?」

「…………どうしてここにいます。今は外出厳禁だぞ」

「とーっても大事な用がありましたねえ、今しか出来るタイミングが無いんで出ちやいましたあ。お許しをお。…………よおクソ兔、昼ぶり」

「…………やあ。気配消して近づくななんて中々心臓に悪いね。束さんでも気づかないなんて凄いや」

笑顔から一変。日葵の表情は冷たくなった。

またコレだ。幾つもある内の一つである日葵の冷たい圧。コロコロと変えていく彼女の雰囲気は未だに慣れる事が出来なかった。

本当に不気味だ。普段は不誠実、時に冷たく、時に言葉で現せない深い闇。それ等が

前触れなくシームレスに変わるのだから本当に心臓に悪い。何を考えているのか、千冬には今も分からない。

「どんな気分？ 一生懸命考えた計画が潰された気分はさ。大人しく巢に籠ってればいいものを。こっちは仕事で大忙しの分かってんだだろうが」

「？ おい篠原。何の話だ」

「……………あーつ。織斑せんせーは『ファントム』をご存知で？」

「!! ……………あの『ファントム』、か？」

その名を聞いた千冬は目を見開く。どうやら、彼女はソレが何かを理解している模様。次第にと表情は曇り、苦虫を噛み潰した様な顔と化した。

「ええ、ご想像通りの奴等です。織斑せんせーは何処まで聞いてます？ 『更識家』は何とっ？」

「……………詳しくはまだ何も。妙な動きをしていると耳にしたのが最近だ。このタイミングで動いたとなれば奴等の狙いは恐らく……………ん？ 待てお前、あいつを知って……………？」

「んー……………諜報活動の限界ってヤツでしょうね。彼処の人材じゃあ対応出来っこなさそうです。最近余計な事もするし本っ当に面倒……………」

「……………？ 篠原、お前は何処まで——いや、何を知っている……………？ 本當に代表候補生か

……………？」

日葵は言葉を濁しているが、千冬には分かる。

『フアントム』は、とある組織の略称である。表には決して出ないその組織は、裏の人間だとしてその全貌を掴む事は非常に難しい。だが、彼女はまるで多くを知っているかの様な口振りだった。

「まあその件は後程。ちよーつとそこのクソ兎に用があるんでもう少し時間ください。……おい、さつきから何黙ってたんだ。こっち向けよ」

「……………」

東は日葵と目を合わせない。まるで、親にでも説教を受ける子供の様に。スカートを握り締め、顔が見えない程に酷く俯いて。

一体この二人はどのような関係なのだろうか。間違いなく二人の間で何かしらの関係がある事は明白なのだが。

協力関係とは思えなかった。どう見ても日葵は東と敵対している。とは言っても互いではなく、一方的なものに見えるが果たして。

「お前さ、どういうつもりだ？ お前があれだけ頭下げるからこっちは引いてやったんだ。お前に少しの間任せる事にしたんだ。その結果コレ？ いい加減にしろよ、全部パーになるだろうが」

「……………」

「それともアレか？ 我慢出来なくなつたか？ あーそうか、自分さえ楽しければ別に良いよな。自分の思い通りにならないと気が済まないよな。ほら、結局お前は昔からなーんにも変わらない。ほんの数年で変わる訳ないんだよ」

何の話なのか、千冬には全く分からなかった。

昼間に見せたものよりは控え目だが、それでも人を怯ませるには十分な圧が日葵から滲み出る。両目を全力で見開いて一直線に束を睨む彼女から感じるのは怒りと憎しみの二つ。

決して十代半ばがしていいものではなかった。どうしてそんな声が出せる。どうしてそんな顔が出来る。何を経験したらそうなる。

「ねえ、今の世界は楽しい？ 楽しいでしょ？ 楽しいに決まつてるよね？ 楽しいって言えよ。お前が始めたくせに——」

「……くくない」

「ん？ 何？」

「……束？」

「楽しく、ないよ……」

千冬は絶句。見たことのないものが見えた。

前髪の間から微かに見えた束の頬。そこから雫が静かに流れ出す。

「こんな、筈じゃなかった……。こうなるなんて思ってた……。束さんが……。こんな世界にしちやった……。」

彼女は——泣いていた。

「遅、かった……。何もかも遅かったんだ……。もっと、もっと早く気づいていれば……」

「おま、え……」

「違ったんだ……。私は……。私は天才じゃなくて馬鹿だった……。大馬鹿だったああ……。!!」

束は決壊する。

最早、千冬が知る天災は何処にもいなかった。噉り泣きからボロ泣きに変わり、彼女の場違いで奇抜な服は零れ落ちる涙で濡れ広がった。それは一向に止まる事を知らず、足元も濡らしていく。

千冬にとって、今の束は信じ難いものだった。四半世紀を生き、幼少から腐れ縁である彼女でも初めて目にしたものだから。己がそうなのだから他の者も同等かそれ以上の反応を示す筈だ。

彼女は分からなくなった。自分の知らない所で何が起きているというのだと。

「……今更泣いたって何も戻ってこないのね。天災が聞いて呆れる——」

「……篠原？」

「ん？ どうしましたかあ？」

その時、ここで千冬は違和感に漸く気づいた。その違和感は日葵の今の姿にある。

彼女は花月荘で用意された浴衣姿。それ自体は何も変わった所など無い——のだが、彼女自身に必ずある筈のものが無かった。

「ISはどうした……？」

「……おっと」

『華輪首輪』が無い。

あのISは自力で外せない、そう本人が言った。裏も取つてある。なのに、さっぱりと無かった。

「おい篠原——」

「……？ ひまちゃ——!!」

東だけが気づく。一方の千冬は、日葵の豹変に釘付け、息を詰まらせた。

日葵ソレの目は絵の具で塗り潰した様に黒かった。

ソレは人のする顔ではなかった。

ソレは——嗤っていた。

咄嗟に動けたのは束だけ。しかしもう遅い。

「伏せてえええつつつ!!!」

「——ぐわっ!?!」

——束が千冬を強く突き飛ばしたその直後。

「——つつつ?!?!?!?」

突如、森林から爆音と共に無数の飛翔体が束と日葵を襲った。接触と同時に連続爆発を起こし、周囲は豪快に抉れ、巻き上がる土煙に包まれる。突き飛ばされた千冬は爆発の衝撃波によって更に吹き飛び、数十メートルは転がっていく。

それだけに非ず。爆発によって小石等の破片は散弾の如く飛散した。幾ら束に突き飛ばされてもそれなりの近距離。当然、千冬は巻き込まれる。

「ぐおおおおおつっつっ?!?!」

が、流石は世界最強か。自身に迫り来る危険に反応出来たが故に四肢を動かし急所を全て防御。弾丸に等しい速さで飛び散る無数の破片は千冬の手足だけに当たるだけで済んだ。

それでも、十分に痛々しい怪我には違いない。しかも軽く数十は超えるであろう連続した爆発。酷い耳鳴りと目眩が彼女を襲う。

しかし、それも直ぐ治まる。重傷に近い怪我が増えようと物ともしない彼女は転がりから華麗に体勢を立て直した。

「ぐ、う……!! な、何……が——束?!」

「う……!!」

徐々に視界が鮮明になる最中、千冬が見たのは煤だらけの束。シールドバリアーが守ったのか、かなりエグい爆発であったが一応無傷であった。では、巻き込まれた日葵は?

「……!!」

彼女は——跡形もなく消えた。

「襲撃——」

千冬の言葉は爆音に遮られる。

またしても束は連続した爆発に吞まれていく。シールドバリアーがソレ等を防ぎ、怒涛の火花が辺り一面に散っていく。

しかし、今度は耐え切れなかったのである。シールドバリアーは硝子が割れる様な音を立てて貫通、彼女に爆炎が直撃する。所々衣服が破れ、傷が一気に増えていく。絶対防御で木っ端微塵にならないだろうが確実にダメージを与えていた。

千冬は直ぐに理解する。森林から聞こえるのは銃声。しかも、『銃』ではなく『砲』の類いだ。音の間隔からして機関砲が数基。だが、それなら不可解しかない。

その森林は今し方通った所だ。機関砲なんて一つも無かった。まさかIS? いや、それならば束が気づく筈だが。

「!?!」

今度は別の『何か』がやって来る。

森林から山なりに飛んでくるのは二つの物体。動体視力が化け物レベルである千冬と束はソレの正体を捉える事が出来た。

その『何か』は紫電を強く纏った擲弾。ソレは束の近くで——
「ヤバ——」

——球体状に大きく放電する。

「……!! 動け——うっ?!?!」

またしても森林から。今度は小さな物体が束に迫り来る。

その物体、砲弾と擲弾より圧倒に小さい弾丸。対人クラスならシールドバリアーは確実に防げる——筈なのに、その弾丸は貫通した。

途切れやしない無数の弾丸が彼女を怯ませる。その大半は絶対防御で弾かれるが、一部は四肢や上半身に弾丸が届き、衣服と肌が焼け焦げる。

ISを持つ彼女が、あの天災が、怒涛たる攻撃を前に怯むだけ。何故か何も出来ないでいた。

「た、束——」

「前進!!」

『彼等』は姿を露にする。

森林から聞こえる大多数の足音。茂みが揺れ、何も見えないのに足音だけが一気に近づく。

それは直ぐに判明した。空間から蜃気楼の様に姿を現したのは、四肢を這う謎の機械

と重装備で固めた黒尽くめの特殊部隊。その数は約二十人。自動小銃を構える彼等は、姿を現してもなお束に向けて撃ち続ける。

自動小銃だけではなかった。何人かが腰だめで撃ち続けるソレは『機関砲』。重機関銃より遙か巨大で重々しいものを彼等は容易く持ち、そして連続する強烈な反動に耐える。小銃より圧倒的な爆音が辺りに響き渡る。放たれた砲弾は爆裂して束を覆う。

砲弾と銃弾が彼女を傷付ける。砲弾はまだしも銃弾すらも通用するのは何故か。

その自動小銃、小口径ではなく大口径のバトルライフル。当然、彼等

はフルオート射撃で正確に全弾命中させる。

その弾丸、真鍮メッキ等で覆う完全被甲弾ではなく、高い貫通性能と焼夷効果をもた

らす弾薬。ソレを、シールドバリアを貫くべく貫通性能を更に高め、可能な限り本体

へとダメージを与える為に改修した対IS弾。

『徹甲焼夷弾』。

「や、止める貴様等あつ!!」

誰も聞きやしない。彼等はひたすら撃ち続け、束に一切の隙を与えやしなかった。彼

女が体勢を立て直そうとすると何人かが擲弾銃を発射、再び電磁波が彼女を覆い、更

に弾丸を浴びせる。それが何度も繰り返される。

この擲弾、生物相手ならば必ず行動不能にする高電圧とISの機能を狂わせる特殊な

電磁パルスの二つを発生させる対IS兵器。弾速は遅く、範囲は狭く、飽くまでも一時的なものだが効果は絶大。当ててしまえば短時間は動きを封じられる。

故に、束は動けない。故に——逃げられない。

「止めろと言つて……!!」

弾丸と砲弾と擲弾のこれでもかと言う程に続く集中砲火。全く鳴り止まない爆音が地を揺らす。連続する無数の火花が辺り一面を照らす。止まる様子は全くと無かった。

黙つて見過ごす訳にはいかない。束を捕まえる気はあれど殺す気など千冬には毛頭無いのだ。

彼等を止めなくては。節々がまだ痛む彼女は、その身体へと鞭を打つて気合いで立ち上がった。

が、しかし。立ち塞がろうとしたその時。

「な——ぐはっ!」

千冬は宙を舞い、地べたに叩き付けられる。

突然感じた、手首を捕まれ引つ張られる感覚。それはとても力強く、重量感のある機械によつて投げ飛ばされたと錯覚した。

一体何が起こつたか彼女には分からなかつた。自身の周りには誰一人としていなかったのに。

「な、何が——」

「大人しくしてる」

「……?!?!」

異質。千冬が見たものは正にソレ。

黒ではなく、タンカラー一色の兵士。空間から突如に姿を現したその兵士は彼女に跨がり拳銃を頭に向けていた。何故、その者が異質だと彼女は思ったか。

その兵士、他の者とは違つてかなりの軽装備。プレートキャリアとホルスター、小型のナイフに少々のマガジンポーチのみの装備だが、その姿は人間から掛け離れていた。

体幹は機械、四肢も機械、首回りまでも機械、頭部は右目辺りに位置する単眼カメラアイだけのフルフェイスヘルメット。生身など無いと言えるレベルで何もかもが機械だった。

パワードスーツの類いとは訳が違う。稀に見るISの全身装甲だろうと人間らしさのある柔らかなボディラインは見えるが、この者はソレも無い。まるで、戦う為だけに作られた『人型兵器』。

「ロボット……?!?!」

「てえつつつ!!」

「——?!? 束えつ!!」

今度は機関砲の発砲音を遥かに超える爆音と、目の端で殴り抜かれたかの様に怯む東が見えた。彼女の方を向くとその姿は更に痛々しく。

彼女に突き刺さる銀色の長い杭が一本。ソレを撃ち込んだのは当然彼等しかない。その方へと目を凝らすと、何人かはいつの間にか自動小銃や機関砲とは全く別のものに変わっていた。

それは、あまりにも大きく、あまりにも無骨。人の頭が入れそうな程に巨大な砲口と大の大人の身長を軽く超える長い砲身が目立つ大砲だった。最早、対物ライフルの範疇を超えたソレを個人が腰だめでどっしりと構え、機関部真横のレバーを力強く引く最中。

「次弾装填完了!!」

「「「次弾装填完了つつつ!!」」」

この大砲——まさかの滑腔砲。それも、戦車の主砲と同等の兵器。生身では決して扱えやしないその兵器は彼等の為に作られた特別製。

その用途、彼等がISと戦闘する為に開発された携帯火器。前提からして飛びつきり頭がおかしく正気の沙汰ではない狂気のゲテモノ砲。

勿論、使うのは貫通力だけに特化した徹甲弾。ソレは戦車の分厚い装甲も容易く貫く

。

「てえつつつ!!」

『Armor Piercing Fin Stabilized Discarding Sabot
—— 装 弾 筒 付 翼 安 定 徹 甲 弾 ——』

「う、わ、あ、つつつ?!?!」

炸裂する巨大な爆発音と共に次々撃ち出される杭の様な砲弾が束を貫く。肩に、そして両足に。残りの砲弾は絶対防御が防ぎ、盛大過ぎる火花を撒き散らして激しく砕け散った。

シールドバリアーと絶対防御は完璧ではない。突破出来る貫通力、または攻撃力があれば本体に直接ダメージを与えられる。何れ程に高性能でも根本的なものは決して変わらない。

ISが最強たる所以は、戦闘機を上回る機動力と攻撃力、そして本体を守る鉄壁の防御力である。これを崩すには動きを止め、反撃されるその前に火力と数に物を言わせれば良い。

それは不可能だと言われたのは最早昔の話だ。ISが知れ渡り約十年が経過した今、進化したのは技術やISそのものだけではない。

ISに対抗する術も密かに進化していた。

対人対物兵器だとして物次第では十分に戦える。防御機能の許容範囲を超える兵器ならば尚良し。人間がISを相手にするなど決して現実的ではない無茶苦茶な行為だが——彼等ならやる。

彼等は知っている。ISとの戦い方を。どの国も実行しない、しようともしない所業を、彼等なら出来る。究極の機動兵器に勝つ可能性を持つ。

ISはISしか倒せない？ 本体を集中的に狙え。生身を狙え。

凄まじい火力に瞬殺される？ 真正面から戦う馬鹿は無駄に死ぬだけだ。裏をかけ。奇襲しろ。

圧倒的機動力に翻弄される？ 動きを止めろ。地べたに引き摺り出せ。

シールドバリアーが守る？ 穴は開けられる。無理矢理ぶち抜け。

絶対防御がある？ 絶対ではない。枯れるまで攻撃しろ。

奴等は圧倒的な力に酔っている。だから驕る。そして油断する。そこが好機だ。泣いて詫びても容赦するな。

奴等は戦乙女ではない。傲慢なだけの魔女だ。狩れ。かつて人々がそうしたように。お前達ならそれが出来る。真の戦乙女が勝利に導く。

お前達の手で、魔女を殺すのだ。

それが、彼等の課せられた使命。ISを倒す為に手段を問わず、労を惜しまず、己の命を捧げる。一度狙った獲物は——必ず討つのだと。

「あ、……う、う、……!!」

今の束は赤色のペンキを頭から被ったかのように血塗れであった。生きているのが不思議な程に。幾ら腐れ縁とはいえ、彼女の痛々しい姿はとも見ていられないものに。

彼等は撃ち続ける。彼女がどれ程まで弱っても止めない。絶対逃がさないという意思を感じる。絶対殺してやると殺意を感じる。

止めようにも身動きが全くと取れない。常人を凌駕する筋力を持つ千冬でも、跨がる

機械の塊に成す術がまるで無い。

「は、放せ……!!」

「無駄な抵抗は止めろ。手負いの貴様では私には勝てない」

「この——」

「これは報復だ」

——直後。

「——つつつつ?!?!?!」

遠くの茂みから轟く巨大たる発砲音と共に束に何かが直撃した。シールドバリアーに穴が開き、激しく火花を散らす彼女は殴り抜かれたかの様に大きく仰け反る。

再度一発、更に一発と破壊的な発砲音が響く。モロに受け続けた彼女は柵の方にまで仰け反り、叩き付けられる様に追いやられてしまう。

これだけ撃たれようと彼女は未だに倒れない。だからこそ、彼等は執拗に攻撃を続ける。

「つ………!!」

が、やられっぱなしではなかった。

追い詰められた束は谷間からメルヘンチックな短い杖を取り出し、突き出す様に彼等へ向ける。その刹那――。

「「「「……!?!」」」」

――全員の発砲が止まった。

各それぞれの動きが瞬く間に鈍くなり、やがて完全に止まる。向けていた火器は徐々に下がり、身体と機械からはミシミシと軋む音が鳴り響く。ズブズブと地面にめり込んでいく。

束が出したこの道具は携帯型空間圧作用兵器。指定範囲の重力操作を行うトンデモ兵器である。人間は当然、ISですら這いつくばせる程にかなり強力なもの。逆もまた然りで浮かせる事も可能。見た目とは裏腹に恐ろしい道具だった。

あの状況下で即座に彼等だけの動きを止めた。森林の方にも範囲を指定したらしく、今では全く銃声が聞こえない。完全に無力化したらしい。

「はっ……はあっ……。……ねえ、ちーちゃん。束さん、もう帰る――」

――否。

「――」

唾然。千冬が目にしたものは、束の前に突如と落下してきた超巨大な金属だった。

その金属——両刃の戦斧。IS用としても大型に分類するソレはけたたましい音を響かせ、大地を揺らし、深々と地に食い込んだ。

誰の仕業か直ぐ理解した。何故ならその戦斧の柄には人影があつたから。

ソレは、千冬を拘束した者と全くと同じ外見。つまり二体目のロボットと思わしき兵士。そう、巨大な戦斧は落下してきたのではなく、この兵士一人が振り下ろしたのであつた。遙か上空から。束に向けて一直線に。

外したのか？ いや、確かに斬った。

「……………あつ」

束の右腕は——宙を舞う。

「言われたでしよっ？」

束の耳に突き刺さるのは女性の嘔き。目だけを向けると、戦斧で自身の右腕を斬り落とした者が顔を向けていた。月を背にし、カメラアイを鈍く光らせるその姿は死を宣告する死神のよう。

「『今度こそぶつ殺してやる』って」

勝敗は決した。

「てえつつつ!!!」

彼等は再び牙を向く。

機械兵士は地面を蹴って戦斧と共に高く跳躍、直後に無数の凶弾が束へと向かった。一瞬の隙を突かれた彼女は成す術なく全て受けてしまう。

シールドバリアーが砕け散る。衣服が燃える。皮膚が抉れる。血が飛散する。人類最高の天災が簡単に廻られる。

そして——漸くそれは終わる。

「っ——」

最後は顔面に直撃。血を撒き散らす束は豪快に柵を突き破り、海へと落ちていった。

「[[[[[.....]]]]」

「た、束……」

静寂。轟いた爆発音はすっぱりと消える。

彼等は銃を構えたまま動かない。千冬は突然の出来事に放心して動けなかった。

あの束が、あの天災が、あの人類最高が、ISを持たない特殊部隊に一方的にやられた。

あの怪我に出血量だ。まさか、死ん——。

「……さて、今度は貴様だブリュンヒルデ」

「き……貴様等は何なんだ……!!」

「答えるとも?」

「ぐ……くそつ……このおつ……!!」

「焦るな。貴様の処遇はネメシスが決める」

その時。森林の中から物音が。

闇から聞こえる複数の足音が徐々に迫り来る。そこからゆっくりと近づくのは——
彼等と同じく黒尽くめの特殊部隊だった。

自動小銃持ち、機関砲持ちが各それぞれ五人。そして中央に滑腔砲を担ぐ者が一人。

「……………」

中央の兵士は、他の者とはまた違っていた。

ガチガチの武装と謎の機械を装着している点と同じ。しかし、その身体は他の者と比較して背が低く、且つ男性の体つきではなかった。その顔は四眼暗視装置とフェイスガードで隠れているが、はみ出る髪型や歩き方からして明らかに女性だ。

その女性が、巨大な滑腔砲を片手のみで担いで優雅に歩いている。恐らくは謎の機械のお蔭か。相当のパワーがあるのだろう。

彼女は静止した彼等の間を堂々と通り抜ける。すると彼等は構えた体勢のまま彼女

に追従する。彼女の左右には一切の乱れ無き特殊部隊の列が。恐ろしさと同時に美しさもあるソレは徐々に足を早め、瞬く間に千冬の目の前まで。立ち止まるや否や、ほぼ全ての銃口が——千冬の眉間に。

「ハンター10から12、海岸を搜索せよ。6から9は警戒態勢レベル5に。不審者は警告無しで排除だ。APIを忘れるな」

『『『『了解』』』』』

織斑千冬、シカトされる。

言葉を投げる女性の声は機械音声。他者よりも比較的非力そうに見えるが、それでも彼女からは計り知れない凄みがある。

こうして間近で見ると彼女の武装も凄まじい。自動小銃、散弾銃、拳銃、大型ナイフ、手榴弾と身体中武器だらけだ。戦争でもする気か。

「0—2も行つて」

「あの幻覚使いもいるかしら?」

「必ず近くにいる。仕留めて」

「……ふふ、了解」

軽く会話を交わした直後、戦斧を軽々担ぐ機械兵士は身体全体に紫電を走らせ完全に姿を消す。ここまで空間に溶け込めるとは凄まじい性能だ。束でも気づかなかつたの

だからハイパーセンサー対策も兼ねているのか。他の者の装備もかなりの高性能であろう。

が、それよりも気になるのは中央の彼女だ。

「ネメシス、お見事なヘッドショットでした」

「たかが二百少ししかないでしょ。私より貴方がやった昼時の狙撃の方が見事じゃない。あの時はよくやってくれた」

「勿体なきお言葉。それよりもよろしいので？ 僭越ながら、あの女共は始末するべきかと」

「今は十分。黙らなかつたら問答無用で火炙りか磔……ああ、家丸々爆撃するのも有り？ うん、やり方はこつちで考える」

「了解」

まだシカトされる。今も押さえ付けられている千冬には目も暮れない。まるで道端の石ころ。

軽視——では無いだろう。顔は向けてなくとも片手は直ぐに銃を抜けるようホルスターの側に。千冬がほんの少しの動きを見せるだけで容赦なく撃ち込むに違いない。

一目見ただけでも分かってしまう。この女性は数多の死線を潜り抜けた歴戦の猛者だ。

「お疲れ様でございます、ネメシス」

「ネメシス、滑腔砲を此方に」

「ありがとう」

悲報、まだシカトされてしまう。千冬としてはそろそろ此方に触れて欲しいところであつた。

どうやらこの女性が彼等を束ねる隊長らしい。彼女の隣にいる二人はやけに丁寧な労いの言葉を掛けている。隊長以上に格上の人間なのか。

『ネメシス』。ギリシャ神話に登場する女神、または報復するものという意味がある。その様な名を持つ彼女の正体は。

「0—1、彼女を解放して」

「……ネメシスを危険に晒す」

「いいから。私に任せて」

「了解。……変な気は起こすなよ」

機械兵士は千冬から退き、直ぐ様に女性の隣へ移る。漸くと自由になつた千冬であつたが、今や立ち上がる気力なぞなかつた。唐突過ぎた展開に理解が未だに追い付いていないから。

が、彼等にとって彼女の心境は何も関係無い。さつさと立ち上がれと言わんばかりに

女性を除く全員が銃を更に近づける。空気の読めない輩でも彼等の言いたい事が分かる重圧。

三十はいる特殊部隊、加えて機械兵士が一体。此方は生身で武器も無し。何も出来ないと踏んだ彼女はゆっくりと立ち上がり両手を上げた。

「さ、何が何だか分からないって顔してますね。まあ無理も無いでしょう」

「……………」

「おや、私に分からない様子。ほら…………」

そう言つて重武装の女性はゆっくり暗視装置とフェイスガードを外し、素顔が露に。

「……………篠、原？」

「改めてこんばんは、織斑教員」

その女性——なんと日葵。

千冬は更に混乱に陥る。重装備のその姿は？ 今、森林から現れなかったか？ なら

ば、自分と束の前に現れて消えた彼女は——。

「!! 立体映像か……………!!」

「ご名答。中々に良い出来だと思いませんか？ 貴女方を騙せるならかなり実用的で

しょう」

してやられた。自身の前に現れた日葵は単なる映像でしかなかった。だからあんな

にも違和感があつたのかと、千冬は齒を食い縛つた。

精巧な立体映像、機械を纏い巨大な武器を扱う特殊部隊、二体の機械兵士、そしてそんな彼等を動かす少女、篠原日葵。

確定した。彼女はただの代表候補生ではない。

「二体、貴様等は……」

「特殊部隊、とだけ言つておきましょう。彼等は私の部下です。とても優秀なんですよ？ 生温い訓練でぬくぬく育つた馬鹿共より圧倒的に」

やはり、と思うと同時に千冬は懸念が残つた。

ここまで過激な手段を取る正規軍はいない筈。警察組織でも自衛隊でもないなら所属は何処か。

だかしかし、考える暇は微塵もありはしない。今は生きるか死ぬかの瀬戸際なのだ。

「そう、か……。それで、何のつもりだ……。？ こんな事が許されると思っているのか……？」

「ふん、たかが教師が何を偉そうにほざくやら。ここは日本ですよ、国際指名手配がいれば国内の人間が動くのは当然です。録な対応も出来ない、あまつさえいいようにされる。その様な大失態を犯した貴女に非難される筋合いは無い。本来なら貴女こそ裁判行きなのが分かりませんか？」

「……………」

「数年振りに姿を現しただけでも大騒ぎですのに好き勝手にやられて。『軍用 I S』のハッキング、作戦妨害、撃墜者多数、男性 I S 操縦者拉致未遂。奴はもう野放しに出来ないですよ」

その目は、生ゴミを見るかの様に冷たかった。

相手を格下と見ている目付きではない。相手を人として見ていないソレだった。

千冬は何も言えない。日葵の指摘はご尤もだ。作戦自体は成功し、且つ束の企みは阻止出来ても被害が大き過ぎた。一步でも間違えば失敗の上に誰かしら失ってもおかしくはなかった。

終わりをよければ全てよし、では済まないのだ。ここは I S 学園ではない。何より——束に関しては有耶無耶など世界が許さない。

何もかも遅過ぎたのだ、千冬は。束と再会した時点で即捕らえるべきだった。

「大事な用とはコレか……」

「ええ勿論。元々は奴一人だけが狙いでしたが、貴女が動くので利用する事にしました。おかげで奴に隙が出来た。そこは感謝します」

「……なるほど。今度は仕留め損ねた私、か」

「いいえ？ 目的は飽くまで篠ノ之束ただ一人。貴女が生きてようが死んでようがどう

でもいい」

「……何？」

予想外の返答に千冬は呆気に取られた。

思いつ切り巻き込んでおいてどうでもいいとは血も涙も無い女だ。だがしかし、口振りからして少なくとも今直ぐ殺しはしない模様。

分からない。生死を問わないのなら何故直ぐに殺さない。千冬とて弟を置き去りにして死ぬのはまっぴら御免だが生かされる真意が謎過ぎた。

「どちらでも構わないんです。私にとって貴女は何一つ脅威にならない。あ、ソレ頂戴」
「どうぞで」

「ありがとう」

「……」

日葵が受け取ったのは先程吹き飛ばされた時に手放した日本刀。何をするかと思えば——なんと刀身を握り、親指だけで折り始めたではないか。それはまるで、カッター刃を折るかの様に。

「どうですコレ？ 戦闘用として極秘に開発したパウードスーツ。パワーは見た目以上に出ます。防御性能はまあお察しですけども……それでも、生存率はグッと上がる」

——強化外骨格『EXO』——。

力を加えている様子など少しも無いのに軽々と折れる。曲がりはずれど、滅多には折れない筈の日本刀が撓りもせず細かくなり短くなつていく。暇を潰すかの様な仕草で折り続ける日葵は、今も千冬から目を逸らさない。

千冬は嫌と言う程に理解し、察してしまった。刀を折り続けながらも自身を見詰める少女の目はとても冷酷で、残虐で、邪悪で。

——お前もこうしてやろうか？

刀身は無くなり、遂には柄も半分折られた。

目は口ほどに物を言うとはこの事か。抵抗処か日葵の機嫌を損ねでもすれば即座にあの日本刀と同じ末路を辿る、そんな未来が千冬には見えた。

彼女なら間違いなくやる、躊躇無く実行する。寧ろ楽しんで嫩るであろう。魚の餌にされるのは目に見えていた。今は従うしか道は無い。

殺さない、となれば何かしらの要求であろう。金か、コネか、それかIS学園での特別な権限か。はたまた——いいようにこき使う奴隷か。

「……望みは何だ」

「一つ、今日見たものと我々の存在はご内密に。二つ、柳隆道に関わるもの全ての詮索を

禁ずる。あとはご自由にどうぞ」

「……………？ どういうことだ……………？」

「言葉通りです。二度は言いません」

意外。想像した全てが当て嵌まらなかった。

要求とはとても思えない。他言無用なのは理解出来るが、隆道を探るなどは一体どういう訳だ。他は好きにしろとは何なのだ。狙いが分からず、それが千冬に冷や汗をかかせた。

その嫌な予感は的中している。

日葵は既に手を回した。

千冬は詰んでいる。

「わからん……………。何が狙いだ……………」

「別に？ 何もありませんが。ああ、そういえば先程話した『ファントム』の件ですが、その前に見て欲しいものがあります。1—1、例の資料を」

「……………？」

日葵が言うなり、特殊部隊の一人が雑誌程度の大きさがあるタブレットを取り出して操作する。画面をなぞり、終わるや否やソレを千冬の足元に放り投げた。

千冬の視線はタブレットに映る一列の文字に。ソレを見た彼女の息は詰まった。

——『Project. M』——。

「な……あ……？ なん、で……？」

「ほら、早く見てくさいよ。スワイプぐらいは分かりますよね？」

淡々と放つ日葵の言葉は、千冬にとってまるで悪魔の囁きだった。

千冬は震えながらタブレットを取り、恐る恐る指で画面をなぞる。次に出てきたのは殆どが黒く塗り潰された文章と謎の数式の数々。彼女は息が荒くなり、固唾を呑んで再び画面をなぞる。

次も、次も、そのまた次も同じだった。何度もスワイプしても塗り潰された文章と何かの数式。誰が見ても理解不能の資料でしかなかった。

「う……………」

尤も、この場にいる全員を除いてだが。

「その辺りはあまり関係無いんで飛ばしちやつて構いませんよ。見て欲しいのはもつと奥の方」

「……………」

千冬は言われるがままページを飛ばしていく。何度も飛ばしていくと、文章と数式だけであった画面は別のものになる。

その画面には、男女の名前と顔写真がずらり。若い者から老人までびつしりと表示されていた。不可解なのは——全員の顔写真に赤い『?』が。

いや、不可解ではなかった。彼女はなんとなくその意味を察していた。

「その人達に見覚えは？」

「……………ああ。何人か、ある……………」

「でしようね。では一番最後のページを」

「……………」

促されるまま千冬は最後までスワイプさせる。これ以上動かしたくない、この先を見たくない、ここから逃げ出したいという想いが彼女を大きく蝕んでいく。

この時の彼女はこう思った。どうか『アレ』がありませんようにと。

「…………!!」

千冬は見た。見てしまった。

最後のページには三人の顔写真が映っていた。

今よりずっと若い頃の千冬と。

愛くるしい幼い一夏と。

千冬に似過ぎた幼女が。

「な…………ど、どう、して——」

「なーんでこんな狂気の沙汰を実行したのやら。中途半端に残さず全部処分しとけばいいものを。これ以上ない負の遺産ですよ、全く」

「あ…………う…………」

「ま、貴女に言ったところで仕方無いんですが。適当に聞き流してください。…………話を戻します。ソレ、今更ながら問題が一つ発生してるんです。貴女に似たその女。あろうことか、そいつが…………そのくそつたれが『ファントム』にいる」

「……………!?!」

低く、ドスの効いた声で日葵は静かに語った。彼女は憎き敵を思い出しているのか、徐々に歯を食い縛り、眉間には怒筋が浮かび上がっていた。彼女にとって因縁の相手なのだろう。

千冬は声を出せない。絶句するしか出来ない。衝撃から更なる衝撃。動揺を隠せない状況下での追い打ちは、彼女の精神に致命傷を与えていた。日葵の表情など少しも気にしていられなかった。

この謎過ぎる資料こそ——千冬の弱点。

「そのくそつたれが本つつつ当に厄介でしてね。現れては何度邪魔されたことか……。そのせいで私は部下を……大勢の部下を……!!」

「……………」

「おつと失礼。……織斑教員、『ファントム』は近い日に動くでしょう。ここ最近私や部下達が居所を突き止めて潰し回ってますがジリ貧です。おまけにIS学園にも潜んでいるとかもう溜息」

「な……馬鹿な!! 更識もそこまでは——」

「入ったばかりの情報です。潰した奴等の拠点に断片的ですが残ってますね。そのくそつたれの名は……『R』、だと」

少しばかり我に返った千冬は頭が痛くなった。今も問題が増える一方だというのに、無慈悲にも別の問題が発生する。休む暇は絶対に与えないと言わんばかりに彼女は追い詰められていく。

「ああ、困りましたよ本当に。『ファントム』がIS学園に潜伏だなんて一体何を企んでいるやら。ねえ？ 織斑教員？」

「……言いたい事は分かった。ああ、協力する。何でもやってやる。だから頼む、一夏には……」

「急にどうしました？ 別に協力してくれなんて頼んでませんけども。そもそもの話、篠ノ之束と繋がる人間と協力だなんてリスクが——」

「誓う！ 無いっ!! 何も無いっつ!! お願いだ、一夏には……一夏だけには……!!」
「……良いでしょう。元からその気はありませんでしたが、貴女の誠意に免じて黙っておきます。安心してください、私は約束を守る女です」
「うう……」

汚い。実に汚く、実にタチが悪かった。

要求の必要は無かったのだ。日葵は疾うの昔に千冬の最大級の弱みを握っていた。強迫せずとも弱みを突付くだけでご覧の通りだ。

最早、悪党と何ら変わりのないやり口である。惚けておきながら人の弱みに付け込む

とはなんと極悪な性格をしているのか。人の心は無いのか。

「長話は嫌なので今日はこれくらいにしますか。あとは帰ってからです。……よろしいです。すね？」

「……ああ、分かった」

千冬はもう限界である。気力なんて零に近い。日葵の正体など今はどうでもよくなっていた。

酒をガブ飲みして寝たい。こんな事は沢山だ。早く解放してくれ、彼女はそう切に願った。

しかし、神はまだ許さずに畳み掛ける。

「最後にもう一つ」

「まだあるのかあ……」

「織斑教員にはもうありません。せつかくなんで私の仕事ぶりを見て貰おうかなと思いましてね。此方へ来てください」

「仕事……？」

言うが早いのか、日葵は疲弊した千冬を引つ張り森林の方へと歩いて立ち止まった。少し待つと、暗闇から何やら近づいてくるではないか。

こちらら衝撃の連続だったのだ。何が来ようと驚かないぞと、千冬は力なく目を凝ら

べてみるとあら不思議、この女の名前が出てくる出てくる。だからついさつき捕まえたんです。織斑教員なら分かりますよね？　そう、こいつも『過激派』

「そんな……!!」

「!?　——!!　——!!」

まさかの『過激派』。でもどうして、何故だと千冬は驚きを隠せやしなかった。

それもその筈であった。この教員、今の今まで女尊男卑思想をひた隠し、男性IS操縦者を気遣う良識のある女性として生活していたのであった。表に出さないから誰一人として気づかなかった。

発見していなければ今頃男子二人処か生徒達も木っ端微塵になったに違いない。この件だけでも許されざる事案だが、実は彼女が関わった事案はこれだけではなかった。

『六・五青少年抗争事件』が起きた六月五日。この日、男子二人の外出先を知るのは少数だけ。にも関わらず、隆道の方には大勢の『飼い犬』が待ち伏せしていた。

『飼い犬』を放ったのは勿論の事『飼い主』。その『飼い主』に指示を出したのは『過激派』。ではその『過激派』は何処から情報を？

ここまで語れば分かるだろう。

「それだけではありません。こいつは六月五日、柳隆道の外出先をリークした張本人。もう少しの情報欲しさに様子見してたんですけど……まさかこんな大胆な手段に出る

とは」

「!! —— !! —— !!」

「……さつきからうるさいですね。今更惚けても無駄ですよ。これまでの貴女の行動、通話履歴、口座の不審な取引履歴、全て把握済みですから。通話履歴が特に簡単でした。履歴を消しても電話会社には全部保存されるのはご存知ですかね？ 私にかかれば直ぐ分かるんです。貴女は有罪確定な、ん、で、す、よ」

「……!! ……………」

沈黙。教員は諦めたかの様に崩れた。

犯行を認めたのと同じ。彼女はもう足掻いても逃げられはしなかつたのであった。

しかし、千冬は疑問が残る。この教員をここに連れてきた理由は何だ。逮捕が確定しているなら警察に渡さないのは何故だと思考が渦巻いた。

その疑問は直ぐに晴れる。それも、一生記憶に焼き付くであろう光景と共に。

「何か言いたい事でも？ 取ってあげますから」

「……っ!! ……篠原さん!! 自分が、何をしたのか分かつての……!!? あんなに殴る蹴るわ……捕まえるたってやり過ぎにも——」

「勘違いしないで頂きたい。私は貴女を逮捕するつもりなんて無いんですよ」

「……??? え……? どういう——」

「テロリストに人権無し。退治します」

言ってる事が理解出来なかった。この教員も、側で聞いた千冬も。

——逮捕するつもりなんて無い？

——テロリスト？

——退治する？

——タイジ？

「……!? 篠原!! やめ——むぐっ!!」

「静かにしてろ」

「!!! ——!!! ——!!!」

「え、あ、ちよ、なん……っっっっ!!?!?!?!」

嫌!! やだ!! やめて!! 離して!!」

「改めて自己紹介を。I S 委員会日本支部に所属、『対I S テロ特殊工作員』、篠原日葵。I S 委員会の命令によりI S 操縦者育成特殊国立高等学校全体の調査兼監視、そして要人警護を任務とし当機関に入学した。私には世界を仇なす『敵』を排除する責務がある」

「……!! ——!!!」

千冬は——遂に止めを刺される。

「肝に銘じておけ、『白騎士』。これは貴様等が蒔いた種だ」

日葵は歩き出す。泣き喚く教員に向けて。

「こちらヴァルキリーB O。準備完了しました」

『——……始める。見せ付けてやれ』

「了解。正義の名の下に執行します」

日葵は歩く。散弾銃を取り出して。

「お願い、じま^ず……。許^じで……」

狂人^{怪物}は歩く。銃の排莖口を僅かに開いて覗き、安全装置を外し、引き金に指を掛ける

寸前に。

「お願いじま^ずううう……!!!」

「せーんせつ」

「ひいつ!?!」

怪物は教員の前で立ち止まる。光無き真つ黒な目は据わり、とても恐ろしく、とても冷たく。

「教師の身でありながら随分と堕ちたものです。残念でなりません。……この『害獣』め」

「や、やだ……。死にたく——」

「駄目だ」

発砲。教員の頭は弾け飛んだ。

一方その頃。

岬から数キロ離れた砂浜。動くものはさざ波、聞こえるのは波の音だけ。それ以外は無かった。

いや、あった。海面にうつすら見えるポツンと点の様な影。それは砂浜へとゆつくりと近づき、それに連れて影は濃くなっていく。

止まりそうで止まらない。それ程までに緩く、波打ち際まで近づきそのまま陸に上がって来た。

時期からして海亀——ではなく。

「……………」

傷だらけの篠ノ之束がそこにいた。

彼女の姿は正しくズタボロと言うに相応しい。衣服の大半は焦げて、穴だらけで、殆ど真っ赤。銀色の杭数本は四肢と体幹に突き刺さったまま。トレードマークの機械仕掛けのウサ耳は片耳しか残っていない、穴あきチーズの様にボロボロだ。斬り落とされた右腕は——左手に持っていた。

そう、彼女はここまで泳いできたのであった。彼処までやられても、彼処まで失血していても、死を免れていたのだ。

既に出血は止まっている模様。ISの保護機能を最大限に働かせているのだろう。そうだとしても痛がる様子は見えず。だるそうに、ゆつくりと、砂浜に足を運ぶ。

生命力が凄い。人類最高と呼ばれる彼女だが、最早これは人類の範疇に留まらない。化物か。

「……はあ」

暗い。とても暗く、とても悲しそうな顔。

今回の件は束にとつても完全に予想外だった。本来なら拘束中の隆道を拉致する筈が、彼がISを取り戻し脱走してしまったが故に全てが狂った。先の先、そのまた先を見る事が出来る天才でさえ予測出来なかった。まさかISが自ら操縦者の元に戻るとは思いも寄らなかつたのである。

あのISは学習能力が高過ぎる。このペースだと今よりずっと手に負えなくなってしまうだろう。そうなれば何もかも終わる。

束は恐れている。

隆道が『ISの本質を理解する』のを。

そして、『真実』に到達するのを。

「束様!!」

ふと聞こえたのは少女二人の声。湿った前髪の隙間からその方を向くと誰かが駆け

付けてきた。それを見るなり束は表情を百八十度変換、満面の笑みで二人を迎えた。

一人は隆道と日葵から無事逃げ切ったクロエ。もう一人は——メイド姿の少女。

この少女、隆道が大脱走中に森林にて遭遇したあのメイドである。そう、彼女も束の仲間。

「やあくーちゃん。えーちゃんも来たんだあ」

「もも、申し訳ありません束様……!! 束様が海に落ちたのを見て……私……!」

「エクシア、謝罪は後にしてください……!! 今は束様を連れて離脱を……!!」

メイドの名は——『エクシア・カリバーン』。つい最近に束と行動を共にする事になった少女。勿論、彼女もI.Sを——しかも専用機を持つ。

彼女はとある事情によって病み上がりである。本来ならば今回の事件に関わらない筈であった。しかし、それを良しとしなかった彼女はクロエに無理を言つて関わると決めたのだ。接近しない、交戦しない、飽くまで遠くからの監視のみという約束を交えて。彼女もそのつもりだった。表には絶対に出ず、誰にも見られず監視するつもりだった。

しかし、見つかつてしまった。あの隆道にだ。離れようにも足が竦んで動けず、結局何も出来ず炙り出されてしまった。しかも、その炙り出しがまさかの容赦無い発砲。それはそれはあまりにもショッキングな出来事だった。

そこからはもうパニック。ISのお陰で怪我こそしなかったが、撃たれた&彼の怒号は彼女の精神を叩き割るのには十二分。生存本能に従って全力で逃げに徹した。ドン引きする程逃げた。

ひたすら逃げた。何処までも逃げ続けていた。漸く落ち着き現場に戻った頃には『銀の福音』は撃墜。束の無人機も全滅し、気がつけば何もかも終わっていた。こうして、少女の無駄な逃走劇は人知れず終わっていたのである。

ちなみに、彼が撃った弾丸は眉間のご真ん中に命中していたらしい。ISが無ければ死んでいたと彼女は泣きながら語ったそう。

閑話休題。それよりも束である。

「えへ、へへ。ひまちゃんに仕返しされちった。とうとう束さんの腕斬られちゃったよ。あの人達前に会った時より容赦無いねー」

「お身体に障りますから無理なさらず……!!」

「大丈夫大丈夫。ほら、束さん身体も細胞単位でオーバースペックだからさ。ISで止血もしてるし痛覚だって抑えてるしへーきだってば。腕なんて束さんに掛ければ直ぐくっ付けて……」

「……束様？」

「くっ付けて……。それで……。それでね……」

笑顔全開の束であったが、それも次第に曇る。

あの時、彼女は見ていた。ISの視界情報の共有——直視映像ダイレクト・ビューを用いてクロエが見た地獄絵図を。

そして見て、聞いた。隆道が曝け出した——。

『篠ノ之束ええええつつつ!!!』

——『どす黒い何か』を。

あの憎悪は、あの殺意は、間違ひなく束に対し向けていた。ドロドロになるまで煮詰めたソレを全て見せられたと感じた。

彼女は人類最高の人間だ。知能、肉体。両方がその名に恥じないスペックを持つ。それは誰もが認めるものだ。彼女に近い者はいても超える者は誰一人として存在しない。

だが、それでも——心は強くなかった。

「……………」

「……………」

「痛いよ……、痛いよ……」

束は静かに泣く。

一度流れれば引つ込める事など出来なかった。ここまで弱気な束はクロエとエクシアのみ知る。その理由もよく理解している故に言葉に詰まってしまっていた。

しかし、それを黙って見る程呑気に出来ない。彼女達は追われる身なのだから。

「……束様、早く帰りませんと。彼等が——」

「束様!!」

突如、エクシアは束に飛び掛かり押し倒した。直後、彼女達がいた空間に『何か』が横切る。

「!? もう……まで……!!」

もう見つかった。

遠くの陸側から突然現れた『彼等』——十名の特殊部隊が自動小銃を向けて彼女達に迫る。

いや、他にもいた。彼等とはまた別の方角から砂塵を撒き散らして猛烈な速度でソレは来る。

ソレは、血がこびりついた超巨大な戦斧を担ぐ機械兵士。カメラアイを鈍く光らせながら瞬時に直ぐそこまで迫っていた。

「お逃げください束様!!」

「……………」

しかし動かない。今の束には気力が無かった。

踏み込みからの跳躍でその距離は即刻縮まる。遂に目の前まで接近したソレは倒れ

たままの束とエクシアに向けて渾身の振り下ろしを――。

「束様あああああつっつ!!」

――攻撃が当たるその刹那。

「!?!」

機械兵士は大きく弾かれ吹き飛ばされていく。だがしかし、即座に空中で体勢を立て直し着地。戦斧を担ぐ様に再び構える。

その戦斧は、刃の一部分が潰れていた。攻撃を弾いたのは――『剣』だった。

「0―2!!」

「……その反応速度と展開速度。それに体内から出てる金属反応。貴女……埋め込んでるわね?」

ソレは『剣』に非ず。

束とエクシア二人の頭上に浮遊する、西洋剣を模した巨大な機械。蒼と金の装飾を豪華に施したソレは刀身が四つに割れ、それぞれが分離して、変形して、子機の砲と化す。残された柄も変形、長砲身の大砲となる。

計五基となったこれ等の砲は実弾――ではなくレーザー。イギリス製ISの特殊兵装を彷彿させるその砲は彼等と機械兵士に照準を向けた。

束のISではない。そう、この兵器はエクシアが展開したIS、その特殊兵装。『何処

かの組織』の制御下にあったISを束が奪い、大規模に改造した第四世代。

そしてもう一つ。エクシアの身体にはISコアが埋め込まれている。IS適性値と身体能力の双方を意図的に高めた、国際法で禁止されているISとの融合措置——言わば生物兵器。

その名も——『生体同期型IS』。

エクシアだけではない。隆道を幻覚で苦しめたクロエもまた生体同期型IS。束に仕える彼女達は『人』の枠に外れつつある存在。

「させません……!!」

エクシアの身体に光が集まる。胸から広がり、四肢、頭、全てを包み込み装甲に置き換わった。その姿は浮遊するレーザー砲と同じ蒼色と金色の鮮やかな装甲——素肌を隠した『全身装甲』に。まるで英国騎士の甲冑を連想させる。

そのIS、やがて来るであろう戦いから主の力とする剣とし、英国の古伝説に登場する王が持つとされる剣と同じ名を刻む。

——第四世代生体同期超長距離射撃型IS『エクスカリバー』——。

「敵機情報更新!!」

「排除」

機械兵士——ハンター0—2はまたも斬り掛かる。低姿勢から接近してくるその速度は、エクシアの予想を遥かに上回っていた。

（速い……！ 不本意ですが戦うしか——）

「エクシアアツツツ!!!」

「!!」

振り下ろしたその戦斧は、砂浜を大爆発の如く轟音と共に抉った。あまりにも大き過ぎる衝撃は砂塵を舞い上がらせ、巨大な土煙となり彼女達を覆っていく。

が、しかし——。

（手応えが無い？）

ハンター0—2は透かさずに尻払い。風圧で土煙を吹き飛ばすと——そこには誰もいない。

戦斧の刃は間違いなくエクシアを捉えていた。直撃コースだった。となると答えは一つ。

「先に幻覚使いを始末するべきだったわね」

逃げられた。

最初は手応えがあった。ならば、あの短時間で幻覚を見せ付けて攻撃をずらさせたに

違くない。あの銀髪は中々の曲者だなと、機械兵士は溜息を吐いてだるそうに戦斧を担いだ。

逃げられたというのに何処か落ち着きがある。それに、見た目に反して動きがかなり人間臭い。

「ハンター12は持ち場に戻り待機。ネメシスには私から報告する」

「了解」

そう呟き、彼等は砂浜を後にして姿を消した。残るのは砂浜に刻まれた亀裂と人型の機械だけ。静寂としたその空間に場違い過ぎるその光景は、ただただ異様でしかなかった。

機械兵士は辺りを見渡し、何をするかと思えば軽いストレッチをし始める。時折に身体を叩いて砂を落としていた。

見てくれこそロボットだが、仕草などは完全に人間そのものだ。もしかや――。

「こちらハンター012。篠ノ之束は逃亡、もう一人仲間がいた」

『了解。搜索を続行せよ。〇一・〇〇までとする。こちらは織斑千冬を連行、花月荘に戻る』

「了解。……もういい？ 堅苦しいの疲れるの」

『……確かにねえ。はい皆お疲れ様あ、搜索はテキトーにやっついていいよお。こつち

はこつちで片付けるから気にしないよーにっ。何かあつたら無線飛ばすねえ。んじゃまたあ』

『『『『了解』』』』』

彼等は日葵の私兵部隊。武力での行使を政府に容認された超法規的組織。公には出来ない非公式任務を専門として、生身での対 I S 戦闘を託された精鋭の集まり。

彼等の過去は存在しない。ある者は元受刑者、ある者は失踪者、ある者は記録上死亡した人間。二度と日の光なぞ浴びない筈だった彼等は日葵に拾われ、新たな人生を与えられた。今の彼等は、使命の為ならば命を簡単に投げ出せる『忠犬』。

彼等はこう呼ばれる。 I S とその操縦者、そしてソレの恩恵に俗する人々を魔女として狩り殺すと渴望を込め、古代から行われた私刑と同じ名を。

—— 対 I S テロ特殊強襲部隊『魔女狩り』——。

「……夜食あつたかしら」

何だコイツ。

翌日。

「……本気で言ってるのか？」

「そのつもりだが？」

臨海学校三日目はIS及び装備の撤収作業のみ。それを終えた後に速やかにIS学園へ帰るだけだ。一般生徒からすれば一日目は遊び倒して二日目は旅館に缶詰という消化不良過ぎる行事であった。

彼女達に残ったのは懸念だけ。何故だか大半の教員が姿を現さない、見掛けた教員数名は隆道と日葵——特に日葵をこれでもかと恐れる、廊下の数ヶ所が『KEEP OUT』のテープで通行不可等々。かなり異様で不可解過ぎたその光景は、彼女達に自然と暗黙の了解が生まれる。

——『絶対に触れちゃ駄目』と。

『触らぬ神に祟りなし』である。

だからこそ聞かない、言わない、見ていない。そう言い聞かせるしかなかった。昨日のガチグレ寸前般若シャルロットの事もあり、普通の生活を送りたい彼女達は言葉を交わさずとも一致団結し関わらないと誓ったのである。中々察しが良い、それなりにリスク管理能力があつたか。

そんなこんなで朝食時は静かであった。作業が始まったのは朝食を終えて直ぐ。生徒は速やかにわらわらと外へ出るその最中、隆道だけが千冬の呼び出しによって別行動に。

遂に処分かと罰を受ける気満々であつた隆道は彼女の元へ行つた——のだが、彼の予想は大いに外れる事になった。

「有り得ねえだろうが。こちらら無断にIS使つて教師ぶつ飛ばして脱走してんだぞ。追放もんだらどう考えても」

「まるで追放されたい言い方だな……。あのな、世の中そんな簡単ではないんだぞ。確かにお前のした事は追放ものだが実行出来るかは別問題だ。というよりそもそも追放するつもりも無いがな。お前に関してはかなり複雑なんだ」

そう、簡単な話ではないのだ。

確かに隆道を追放すればIS学園は比較的平和になるだろう。しかし、それだけでしかないのだ。根本的解決に至る事は無い。

「少なくとも他の奴等は望んでんじゃねえのか。あの人数をぶちのめしたんだ、騒げばゆーぐーで簡単に口封じやら揉み消しくらい朝飯前だろ？ あんたらIS学園の十八番じゃねえか」

「……口だけが達者の主張するだけして解決案を出さない無責任な輩の言葉など聞く価値

値も無い。仮にお前を追放したとしてその後はどうなる？ 誰がお前という男性IS操縦者を保護するんだ？ 個人か？ 企業か？ 組織か？ それか国か？ まだ何も決まってるじゃないんだぞ？ この状況なのに追放するのか？ 身柄処か命も狙われてるお前を放り出して解決か？ お前の争奪戦にあの馬鹿も加わるんだぞ？ そうなったら滅茶苦茶だぞ？ 責任は誰が取る？ 誰が取れると？ それにその出鱈目なISはど
うする？ 我々でも手に負えないソレを誰が管理出来ると？ ああそうさそうさ、もうお手上げだよ。ソレを無事に管理出来るのは現状お前しか見当が付かないな。錯乱する苦しむ怪我する死に掛ける死にたがるお前——」

「ハイハイすんませんね俺が悪うございやした」
隆道の希少な謝罪が炸裂。ただし舐め腐り。

ガンギマリ・ブリュンヒルデが降臨なされた。目が飛び出そうに見開く千冬はぶつ壊れ寸前だ。よく見ると血走りまくった目と馬鹿にでかい隈のオマケ付き。包帯だらけが相まってとんでもなくヤバ過ぎる面に。最早それは鬼や修羅を突出した魔王と大差無かった。若干痙攣している様子からあと少しで爆発してしまっただろう。

その姿を目の当たりにした彼は面倒と感じた。それ故の謝罪だったのだが無意味と
いうか逆だ。煽り散らかしていた。誠意なんて無かった。

「……………」

「血管浮き出てんで。もう何も言わねえって」

「ツスウー……。……。私の方こそすまなかった。これでは八つ当たりだ……。…」

「かなりお疲れみたいだな。徹夜して……。いや、そりゃ徹夜するだろうな」

「……。ああ。そんなところだ」

打って変わって覇気が失くなった。今の千冬は隆道でも倒せそうな程までに衰弱し切っている。彼女は悪い意味で眠気が全てぶっ飛んでいた。

見るに堪えない彼女に対し彼は問い詰めせず。昨日の後始末がしこたまあったのだろうと考え、また拗れるのも面倒なので今は大人しくするかと抱える疑問を引っ込めた。

「帰ったら寝ろ。……。これからどうなる」

「一先ずはIS学園に戻る、今後については後だ。まだ片付いていない事があるからな」
「ん。……。んで？ 追放無しにしても罰の一つや二つくらいあんだろ。何するんだ？」

「……。お前が……。罰、を？ あれ、おかしいな。有り得ない言葉が聞こえたが……。ああ
そうか、私は今寝てるのか、ははっ」

「うわ、あんたマジで疲れてんじゃねえか……。昨日言っただろ。説教も聞くし罰も受けるって」

「これははじめを付ける為だ。」

罰されるつもりで来たのに何も無しなのは逆に気分が悪いもの。自分から言い出した事くらいは守ってみせようと、隆道は既に腹を括っていた。

以前ならば有り得ない発言に千冬の目が点に。心なしか、今の彼には敵意が無い。もしかすると諦めていた人間関係に明るい兆しが見えたのか。そう考えた彼女は少しばかり安堵する。理由など不明だがこの際何でもよかった。

「……………。そう、か。まさかお前が、な…………。分かった、処罰については後に伝える――」

「今のうちに言っとくぞ」

「何だ？」

「あんたやぶつ飛ばした奴全員に謝れは無しな」

「……………」

罰とは一体。

「柳、IS学園から連絡があった。お前宛に荷物が届いたらしい。着いたら総合受付に行け」

「荷物？ 誰から？」

「お前のとこの家政婦……根羽田さんからだと」

「……中身は？」

「分からん、小さな箱らしい。ああ、そういえば包装紙に文字が書いてあると言っていた」

「はあ？ 何勿体ぶってんだ。さっさと見えよ」

「焦らすな、今思い出す。何て言ってたか……。確か……。『——』、だと」

「!!!」

数時間後、IS学園にて。

臨海学校から帰ってきた生徒達がまだIS学園の門を潜る手前の最中、数名だけは既

に寮の廊下を歩き——もとい早歩きで移動していた。

「ちよつと待つてくださいつて!!」

「……………」

先頭は隆道。大きなポストンバッグを背負い、小さな箱をとでも大事そうに抱えながら急ぎ足で自室へと向かつていた。脇目も振らずに歩く彼を追い掛けるのは一夏、箒、シャルロットの三人。明らかに様子がおかしかった。

千冬に解放されてからずっとこうだ。バス内で誰が話し掛けても隆道はガン無視を貫いていた。途中寄ったサービスイリアでもバスから出ようとせず不動のまま。何一つ口にしなかった。

時間が経つに連れて彼は落ち着かなくなった。そして到着した直後、彼は我先に飛び出していき寮ではなく総合受付へ全力疾走。そこで例の箱を受け取って今に至る。

様子がおかしいのは今に始まった事ではないが今回は今までは違う。理由は定かではないが、彼がああ箱に執着している事は明らかであった。ではその中身とは？

「ねえ柳さんつてば!!」

「……………」

まだガン無視。一夏の声すら反応しない隆道は自室に着くや否や慌ただしく鍵を開けて勢いよく入っていく。鍵を掛ける音はしなかった。

「どうしたというのだ……?」

「いや分かんないよ……。例の……病気……? じゃなさそうだけとさ……」

「どっちにしろほっとけるかよ。俺は行くぞ」

「ちよ——」

一夏、先陣を切る。絶対に見捨てないと誓った彼は箒とシャルロットを置いて部屋に突入した。遅し過ぎる彼の勇姿を余所に二人は置いてけぼりだったが、直ぐに我に返って付いていく。

「一夏! お前、少しは——……」

箒は口を閉ざす。

見えたのは部屋の奥にある机付近で佇む一夏の後ろ姿と椅子に腰掛ける隆道の姿。彼等は物凄く静か——いや、静か過ぎていた。

気持ち悪い程に静かだった。吐息すらもしかと聞こえそうな程に静寂。音を立ててはいけけない、そんな気がした。

何かしら察した二人は扉を静かに閉め、自然と足音を殺して歩き、彼等の元へ。

「ね、ねえ。どうしたの……」

「……………」

一夏の視線は恐らく机。彼女達は身体をずらしその方を見ると、隆道が両手が目に留

まる。

いや、正確には両手——ではない。その両手で大事そうに持つ、小さな箱であつた。よく見ると何やら文字が書かれている。

まるで筆ペンで書かれた様な美文字。そこにはこう書かれている。

——『ハルと永遠に』——。

三人には全くと意味が分からない文。しかし、隆道は、隆道だけはそれを十分に理解していた。そしてその中身も。

「……………」

次第に静かだつた隆道の様子が変わる。

何かを堪えるかの様に震えていた。手も震え、呼吸も徐々に荒くなつていく。それを見た三人は発症かと身構えたが、彼は手で制した。

「……………大丈夫」

隆道は深く深呼吸して首元の『灰鋼』を外す。珍しく投げ捨てせずに机に置いて隅っこに寄せ、側にある医療キットから鋏を取り出して包装紙をテープをなぞつていく。

彼の性格からは想像出来ない程にとても丁寧。テープを切り終わった彼は包装紙をゆつくりと、そしてまた丁寧に剥がしていく。その様子を見る三人は、何故だか固唾を飲んだ。

「「……………」」

それはジュエリーボックスだった。

手の平サイズに小さい真つ白なベロア仕上げ。高級感が凄まじく、お世辞にも隆道に似合わない代物であった。

「あの、これ——」

一夏の言葉を無視して、隆道は静かにその箱を開けると、入っていたものは——。
「……………!!」

——一個の青い歪な宝石。

「わ。凄く、綺麗……」

大きさは凡そ一カラット。その宝石は、三人が知る宝石とはかなり形状が変わっていた。
た。

丸みがあつたり、角ばっていたりと不恰好だ。カットも研磨もされていないソレは、少なくとも世の中で溢れているどの宝石も当てはまらない。しかし、それ以上にこの宝

石は、どの宝石よりも綺麗だと三人は感じていた。

「珍しいですね。柳さんが宝石なんて……」

「……メモリアルダイヤモンドって知ってるか」

「！」

「何ですかそれ？」

一夏は全く聞いた事の無い名前です。首を傾げる。その一方でシャルロットは知っていたように目を丸くした。

そう、この宝石はアクセサリーといった陳腐なものではない。世界でたった一つだけの、隆道にとって——かけがえのないもの。

「……一夏。ダイヤモンドって何か分かる？」

「え？ あー……、めっちゃ貴重な綺麗な石？」

「炭素だよ。炭素のみからなる鉱物。まあ確かに貴重なんだけどそれは天然もの話。世の中には人工のものもあるんだ。メモリアルダイヤモンドも人工のもの一つ」

「へ、へえー……。でも、何でそんな名前——」

「遺骨だからな」

一夏は——絶句する。

「……え」

「骨ん中に含まれる炭素を取り出して高温高压にかけて作る人工ダイヤ。まあ、宝石の一つよりは原石だなコイツは。加工なんかしてねえし」

淡々と語る隆道は、三人に見向きもせず机の横にあるバックを漁り始めた。暫くしてそこから取り出したのは一つの写真立て。

「五年も悩んだ。すっげえ悩んだんだ」

写真立てを机に置き、それを三人に見せるよう角度を変える。そこに映っていたのは、鮮やかな花に囲まれた一匹の柴犬。

三人がその写真に目を奪われている間に隆道は右腕を捲り、巻いていた首輪を外して写真立ての前に静かに置いた。

そう、あの日——六月五日に自宅へ帰った際に彼は今後の事を踏まえて決行していた。誰よりも愛した『家族』と共にいるべく。

一夏は漸く知ったのだ。首輪を付ける意味を。その原石が何なのかを。

これこそが、彼の『家族』なのだ。

「あ……」

「墓には入れなくなかった。そうしたら、何か、本当にもういないんだなって、思っちゃまってき。言ってる事、意味不明だろ？俺もそう思うわ。頭では分かってたんだよ、墓に入れるべきだって。でも、やっぱり、側にいないのは、やだなって」

隆道は今も三人と目を合わせない。いや、彼は合わせられなかった。今の彼は、哀しく、脆く。

「ダイヤになんてしたくなかったんだ。だって、まるで『物』みたいじゃねえか。……違うんだ。コイツは、ハルは……俺の『家族』なんだ」

「……………」

「けど、俺が間違ってた。最初から、こうすれば良かったんだ。こんな事に五年も……悩むなんて情けねえ。……本当に……情けねえ」

「……………あの、柳——!?!」

「一夏、よせ」

今まで黙っていた筈が一夏の肩を掴む。何故か——彼女も泣いていた。

辛うじて塞き止めていたものが一気に溢れる。もう止められない。それを見てしまったが故に。誰が近くにしようとなつて彼は曝け出す。

「こんな、こんなに小さくなつちまつてえ……。なのに……なのによお……。こんなに……………!?!」

「……………」

「綺麗なんだな、お前ばあ……。!?!」

三人は、静かに部屋を出た。

暫くして。

「ぐずっ……うっ……。……あ」

目を真つ赤に腫らした隆道は泣き疲れ、周囲を見渡して現状を把握。三人がいないと気付き机に頭を打ち付けていった。

「はっずううう……！ 何やってんだ俺……！」

流石に羞恥心はある模様。彼等に醜態を晒した隆道は穴があれば入りたい心境に陥ってしまう。幾ら感極まっていたとはいえ、人前であんな姿を晒したのは大失態だった。

明日からどんな顔を合わせれば良いのだろう。恐らくは今までより気を遣われるかもしれない、そうなると此方としても逆に辛いもの。

「アイツらは何も見てねえ……!! ああ、何も見てねえ……!! それで良いだろ……!!」
無かった事にする。明日からは今まで通りだ。そうしよう。そうしないと心苦しく潰れそう。もうあんな姿なんて見せないと、彼は今更過ぎる決心をしたのであった。

だが、既に起きた事実は絶対に消えやしない。故に蠢く恥ずかしさは消えない。つまりは無駄。つまりは無意味。

「落ち着け、先ず落ち着けて柳隆道……!! こんな時は煙草だ——……あ、あ、あ、あ、あ、あ、昨日で切らしたじゃねえかああああ……!!」

ヤニカスクソガキ、悶える。色々と台無しだ。

六月後半に友人から貰った煙草（カートン）は昨日の時点で吸い切ってしまった。ここは学校、当然煙草の販売なんてないのだ。どう足掻いても詰みだ。彼は一日で一箱以上吸ってしまう重度のヤニ中ではないが、今に限っては超絶吸いたくて堪らなかった。尤も、どの道彼は年齢的に買える訳がないが。本当にどうしようもない男だった。

「……どっかに落ちてねーかなー。シケモクでもねーかなー」
ある筈が無い。

そうは願おうと煙草なんてある筈がないのだ。どれだけ咳こうとも隆道の下らない願いは決して叶わないのだ。

それでも、何かの間違いであつたら良いなど、彼はぶつぶつと咳き続けていた。
「す、い、て、え、なー」

煙草なんて無い筈なのだ。

「んっ。」

その時だった。机に突つ伏していると、顔面の直ぐ近くに何やら見覚えのない箱が置いてある。長い形状からしてジュエリーボックスではない。近過ぎる故に何の箱か一瞬分からなかった。

「……!!」

その箱——まさかの煙草。しかも未開封。

「何だ、あつたじゃねえかよー!」

隆道はソレがある事に全くと疑問を抱かない。今の彼は吸いたいという衝動に支配されていた。IQ急降下の馬鹿丸出しクソガキと化していた。

ソレを見つけた彼の行動は早い。速攻で開けて一本啜えて上機嫌、鼻歌まで歌い始める。

「~~~~♪ ……んあ? 火いどこだっけかなと。火い火い火い……」

ライターを探し始めたその時。

——シユボ。

左から聞き慣れた音が聞こえた。

「……………」

確かに聞こえた、直ぐ近くで。しかも暖かい。まるで、側に火があると思えてしまう程に温い。

否、これは明らかに火の温もり。視界の隅では火らしきものが揺らめいている。煙草吸いたさに馬鹿になっていた隆道でも流石に冷静になった。というか、前も似た様な事があつたではないか。

一夏達は部屋にいない。隣にいるのは何だ？

「フウー……………!!」

「どわつはあああああああつつ!!」

世にも珍しい隆道の絶叫は凄まじい物音と共に寮の廊下へ響き渡る。他の部屋にも聞こえたか、次々と扉は開いて生徒達が顔だけを出す。

「どうしました!？」

当然、一夏達にもそれは届いた。叫びを聞いて駆け付けてきた一夏、箒の二人が目にしたものは扉の向かい壁に寄り掛かって息を切らした隆道。かなり焦った様子であった。

「よ、よお織斑! お騒がせわりいな……!」

「こ、今度は何ですか……!!」

「いやあああ流つ石にビビったあああ……!! 何か、アレ……いや何だアレ……!？」

「語彙力!」

ここまで焦った彼を見た事があつただろうか。普段は無表情かしかめっ面、時に鬼の形相になる彼がこの様な姿を見せたのは始めてだ。一体何を見たというのか。

何が何だか分からないと困惑する最中、そこに追加して奥から二人——シャルロットとラウラが駆け付けてくる。

「どうした!! また敵襲か!？」

「ひい……。ひい……」

「おい!! 何があつた!! 何を見た!!」

「な、何か……変なヤツがいる……!!」

「……つああああああ……」

隆道を除く全員が天を仰いだ。

いい加減にしてくれ、勘弁してくれと何れ程に思った事だろう。漸く事件が終わったと思いきや再び襲撃がやって来た。一難去つてまた一難だ。皆が溜息と同時にブチギレそうになった。

特にシャルロットがヤバイ。昨日の夕食の時に見た般若を超えそうな勢いだ。

「ああもう沢山だ……！　おい、そこのお前！　教員を呼べ！　不審者がいると伝えろ！」

「え、あ、私……？　あ、その——」

「早くしろ貴様あああああつつつ!!!」

「はいいいいいいつつつ!!!」

隣の部屋、扉の隙間から静かに様子見していた名も知らない生徒は不運にもラウラの八つ当たり気味な命令を下される。唐突過ぎる怒号を浴びた彼女は逃げ出す様に廊下を全力で走っていった。嗚呼、なんて可哀想なのだ。

「うっがあああああつつつ!!!」

——!?

「な、シャル!?!」

「あのねえ!!　僕もう限界なの!!　何!?!　昨日に続いて今日もコレ!!　ホントにさ!!」

この、なつ、……あゝあゝあゝあゝ!!」

シャルロット、遂にブチギれる。

彼女は限界に達してしまった。昨日から何かと耐えてきた彼女であったが、ここまでに連続した厄介事は流石に効いたらしい。普段の彼女からは想像出来ない顔と声になつていた。

間近で見ってしまったラウラはそりやもう焦る。あの面倒見が良いシャルロットが怒り狂つた姿はラウラにとつて恐怖でしかなかつた。一夏と箒は最早絶句、隆道は変なヤツの事だけで一杯一杯。もう無茶苦茶であつた。

「おおおおお落ち着けシャル!! ここで冷静を欠いたら大事になる——」

「あーもう許さないから!! 誰か知らないけどとつ捕まえてあああああつっつ!!」

「待つてくれシャル——」

ラウラの制止虚しくバーサークシャルロットは突撃、ドアノブに手を掛け体当たりの様に中へと入つてしまった。

「ああ、もう——……ん?」

「……………」

が、しかし。何故か直ぐ戻つてきた。ご丁寧扉を閉めて。

「シャル?」

「……変なのがいるう。む、無理い」
「……?」

入る前の勢いが完全に消えていた。更に顔面も真っ赤だった時と真逆の真っ青。シャルロットは何を見たのだろうか。

隆道がビビり散らかし、シャルロットの怒りも消沈させる程の『変なヤツ』。一体何者なのか。というか、何もされていないのは何故だろうか。猛烈に気になってしまう。

隆道には外傷無し、突撃したシャルロットにも外傷無し。となると案外危険ではないのだろう。もし危険なら疾うに誰かしら被害に遭う筈だ。

「……今度は俺が行く」

「私も行こう」

「何!? ……ま、待ってくれ、私も」

この目で確かめる。そう踏んだ一夏と箒は意を決して中へ入り、連れてラウラも後を追った。

明かりは付いたまま。荒らされた様子も無い。これは一体どういう事なのか――。

「「えっ」」

いた。普通にいた。

「——」

三人は絶句する。

ソレは入って直ぐ見える所に堂々といた。

ソレは想像していたものと全然違った。

ソレは『人』に非ず。

ソレは——『四本脚のロボット』。

「な……なな……」

『……………』

タンカラーのミリタリー臭い装甲、半立方体と逆四角錐台を組み合わせたかの様な堅牢ボディ、ソレを支える角張った四脚、かなりメカメカしい二本のアーム、それと——
青く光るモノアイ。

単なるロボットでも驚きものなのだが、三人が絶句したのはそれだけではない。

『……………』

このロボット——瞬きしている。

モノアイの上下にあるシャッターが動物の瞼と全く同じ動きをしていた。此方をじつと見詰めて定期的に開閉するその仕草は、何処となく人間と思わせてしまうものであった。

『——b——a』

聞こえたのは雑音。何か伝えようとしているが全く聞き取れない。中々繋がらないラジオの様な電子音は三人を更に困惑させる。

『……………』

今度は困った様な顔になった。

ロボットなのに何を馬鹿な事と思うだろう。そうとしか表現出来ないのである。シャッターが細かく動いて細目の様になったりと、どう見ても動物——いや、最早人間の動きなのだ。

『……………』

何か思い付いたのか、そのロボットはキビキビ歩き出して隆道の鞆へ直行、三人を無視して何か漁り始めた。何をするのかと思えば——そこからノートとペンを取り出し

たではないか。

まさか、このロボット——。

『——』

ロボットはノートを器用に開いて何かを書く。雑音としか言えない電子音を奏で、スラスラと。それはほんの一秒で終わり、今も硬直する三人へ突き出す様に見せ付けた。

——『「こんばんは」——』。

「「何だコイツ!?!」」

本当に変なヤツがいた。

幕間の青春

第五十九話

七月十一日。月曜日。

『銀の福音事件』から既に四日の日時が経つ。臨海学校における話題は疾うに無くなり、今では別の話題が教室を飛び交っていた。朝のSHR前でこの状況。相変わらず元気一杯である。

「——」

否、今日は一段と姦しかった。初日の一夏達やシャルロット達の時と同様——いや、それ以上と言つても決して過言ではないレベルでうるさい。騒音に騒音が重なり、最早何を言っているかすら分からなかった。だが、意中の男性に向ける様な甘つたるいものとは何か違うような。

騒ぎは教室だけではない。砂鉄の如く集まった群衆は扉まで続き、必然的に廊下までもが生徒で埋め尽くされている。彼女達はある一点に集中、それはそれは祭りを彷彿とさせた。何をそんなに盛り上がっているのやら。

そんなうるさ過ぎる中——逆に我関せずと外を眺める物静かな生徒が窓際に六人。

「なあ、昼飯何食う?」

「もう昼飯の話?! ……そうですね、今日は屋上でのおんびり。米をガッツリしたい気分です。なんか、拳ぐらいの特大おにぎり、みたいな」

「良いね、僕もおにぎりにしよ。具が色々豊富で美味しいよね。ラウラは何食べる?」

「シャルと同じが良い。肉々しいのはあるか?」

「唐揚げを付けければ良い。茶があれば完璧だな」

「おにぎりに紅茶……合いますの?」

窓際に綺麗ピツタリ並ぶ六人——隆道、一夏、シャルロット、ラウラ、箒、セシリアは騒ぎなどガン無視して外を眺めていた。隆道とセシリアが同じグループにいるのはとても珍しかった。

念の為に語るが、隆道とセシリアの二人は別に和解した訳ではない。たまたま同じ場に集まっているだけでしかないのだ。セシリアはともかく、隆道は未だに仲良くする気無しなのは確か。

「特大ね……頼めば用意してくれるんじゃない? 具も二つぐらい詰めて貰うか」

「明太子と玉子の組み合わせ的なヤツですか? せつかくなんで少し攻めてみたいですね。それと二つじゃなくて三つくらいぐつと入れても案外面白……あっ」

「具をぐつと入れろ」

「「……………」」

「ぐふっ…………ふふっ…………。ん、ん…………」

意外。まさかの珍プレーが炸裂した。

下らな過ぎるギャグをぶちかます隆道と一夏。冷めた目で見詰める箒とシャルロットとラウラ。まさかのツボに入って震えるセシリア。うるさい生徒達とは全く別の空間が出来上がっていた。

「決まったな」

「ええ、見事な一撃でしたね」

「昼飯の話してんだけど。急にどうした？」

「?!?!」

「おあつはあつつ?!? ぐ、ぐふふ…………!! ふひっ、ひい…………!!」

一夏は裏切られた。それが引き金になったか、辛くも耐えていたセシリアは遂に抱腹絶倒する。淑女の欠片も無かった。

「ひゅ…………ぐひゅ…………。ごっ…………」

「む、セシリアが死にかけてる。お前のせいだぞ織斑。どうするつもりだ？」

「一夏、次変な事言ったら口縫うからね？」

「それでは足りないかもしれないな。ああそうだ、接着剤でも塗るか」

「なあ、今の流れ結構酷くないか？」

一夏に味方はいなかった。

何やら様子がおかしい。そもそも組み合わせの時点で既におかしいのだが、何故彼等はここまで騒ぎを無視しているのか。

「「「……………」」」

六人の目は死んでいた。

頑なに生徒達の方を見ようともしない。興味が無い、というより見たくないと感じ取れる姿勢の彼等は何処か不気味。隆道の目が死んでいるのはいつもの事だとしても他五人も死んでいるとは。

「……………」

「何だ馬鹿斑」

「馬鹿斑……………!?! ……いや、そろそろ現実逃避やめにしませんか？ 何れこうなつてましたし。これから慣れていきましようよ」

「……………」

「……………」

彼等は何を諦めたのか、大きく溜息を吐き捨て教室内へと振り向く。彼等の目は揃つてジト目、一点へと集中した。

その視線は一カ所に群がる生徒——ではなく。

「何コレエ!? うつわあ何コレエツツ!? なんか目がパチパチしてるう!? ね、ねえ君、喋れるって聞いたけどホント!?」

『肯定。私はAIと対話インターフェイスを搭載。人間との会話が可能です。退いてくれますか?』

「ホントに喋ったあああつっつ?!?!?!? え、その声女の子!? 貴女、女の子なの!?」

『……否定。私に性別は存在しない。この音声は市販品の音声合成ソフトを使用。早く退いて』

「うわ! うわわ! すつご!! ロボットってここまで進化したんだあ!!」

そう、例の変なヤツロボットである。

『いい加減に退け、人間共。邪魔』

「ねえねえねえねえ!! 名前何て言うの!?!」

「ちよつと触っても良い!? 良いでしょ!? 良いよね!?!」

「ウインク出来るウインク!? あ、一つ目じゃ難しいかな!? じゃあジト目ならどう!?」
『問題発生。人間との会話が成立しない』
コイツらうるさ過ぎ。

三日前——。

七月八日。変なヤツが現れてから数分後。

「「「「.....」」」」

——『改めましてこんばんは』——。

隆道の自室。室内には謎のロボットと、ソレに対峙する形で向かい合う男女が六人。椅子に腰掛ける隆道。その側で佇む一夏、箒、シャルロット、ラウラ。そして仁王立ちの千冬。彼等の視線は全て一機に集中していた。

彼等全員がしかめっ面のその一方、ロボットは一人一人に目を向けながらモノアイを定期的に、尚且つ不規則に開閉している。改めて見ると実に人間臭く、それが彼等の頬を引きつらせる。

「…………お前は…………何だ…………？」

沈黙を破ったのは千冬。最早何から突っ込めばいいのやらで胸一杯な彼女だが、一先ずはコレの正体からだと在り来たりな質問を投げた。

千冬の言葉を理解したか、ロボットは直ぐ様にノートにペンを走らせる。人間では不可能である速度で早くも文字を書き上げ、全員に見えるよう突き出した。

——『自律型多脚無人機、WALKER』——。

——『AI、対話インターフェイス搭載』——。

——『カテゴリ、特殊兵装』——。

——『登録機、『灰鋼』』——。

「…………はあああああ…………」

「な、特殊兵装…………!!? ……馬鹿な…………!!?」

全員が度肝を抜かれた。

そう、この無人機は『灰鋼』の兵装であった。それも人を手が一切加えられていない、I S単体で造り出した『天然の特殊兵装』。

しかも単なる無人機ではない。遠隔操作不要の自律型無人機だ。対話インターフェイスは聞いた事無いが、筆談からして会話が可能なだろう。会話可能なAIは既に存在するが、筆談するAIなど今までいたのだろうか。

工場等で稼働する作業ロボットとは訳が違う。自己判断で動き、人間とのコミュニケーションが可能な無人機を、I Sが造り出した。

以前千冬が考察した『バリアブルシールド』が特殊兵装というのは誤りだ。あの盾は『打鉄』の機能を強化し拡張しただけに過ぎないのだった。この無人機こそが『灰鋼』の特殊兵装なのだ。

驚くのはまだ早い。この特殊兵装は文字通りに——いや、それ以上に特殊過ぎるのである。

「やあああなああぎいいい……!! これはあ一体どういう事だああ……!!」

「おおおおいおい知らねえ知らねえ!! こんなヤツ知らねえ!! マジで知らねえ!!」

「そんな事があるかあつ!! お前が知らない筈が——」

「な、なあ千冬姉」

「何だ!! ……む」

激昂しまくりな千冬は一夏に無人機へと視線を促される。その方へ目を向けると、無人機は既に新しい文を書いて皆に突き出していた。

——『柳隆道は無関係』——。

「な………に………?」

その文を見て一気に頭が冷えた千冬を尻目に、無人機は再び文字を書いて突き出す。今度は短文ではなく長文。その内容は千冬達を絶句させた。

——『説明。 7 / 7 . 13 : 10 . No . 019 は花月荘構内と構外に敵勢反応を感じし我を展開。 灰鋼を奪還し柳隆道の元へ向かう』——。

——『13 : 12 . 柳隆道に接近するも二名の人間に抵抗される。緊急を要する為に無力化。 柳隆道に灰鋼を譲渡、以後同行』——。

「な、あ………」

「………ん? あ!! アレお前かよ!!」

謎の答えがここにあった。全部コイツだった。

『灰鋼』が嚴重管理から逃れた真相はコイツ。花月荘で突然現れた謎の襲撃者の正体もコイツ。襲撃でも何でもなかった。

彼が倒れた理由？ 単純な話、このロボットが首輪を投げ、無理矢理装着させた勢いで倒れたに過ぎない。『〇一九』は勿論だが、彼に対しても何かと雑だった。

ずっと彼の側にいたのだ。脱走の時も、孤島で孤立した時も、戦闘が終わった後も、帰り際も、寮内も。常に彼から離れずにいた。ISでも視認が出来ない、つまりはこの無人機にも『幽霊犬』と同等の光学迷彩が備わっているという事だろう。登録機でも見えないとは此は如何に。

今理解出来た。そういえば脱走時に『灰鋼』を調べた時から『WALKER』という謎過ぎる項目があったが、この無人機を指していたとは。

「何だお前!! 味方なら普通に開けろよ!! 何で態々あんな真似した!? 流石にビビったわくそつたれが!!」

——『説明。人間の警戒態勢を解く為録音した音声で呼び掛けたが失敗、やむを得ず強行突破。我、装備不十分により対IS戦闘は不適切と判断。安全確保の確立まで潜伏』——。

「あんなんで開ける奴なんかいねーよボケ!! 不自然過ぎんだろが!! 人間舐めんな!! 二度とすんじやねえ!!」

——『了解。学習する』——。

なんとお騒がせ過ぎる無人機なのか。真耶達を恐怖のどん底に陥れて隆道の脱走劇

を手助けした正体がコレだったとは。今まで警戒していたのが馬鹿みたいではないか。

問題が減ったと思いきや逆に増えた。これなら謎の襲撃者のままで良かったと何れ程思ったか。ISが造った自律型の無人機など誰が予想したか。これが調査可能且つ解明可能ならテクノロジーの進化に大いに貢献する事になるに違いない。

余計に世界各国が欲するだろう。『灰鋼』を。そして『柳隆道』を。

争奪戦が——更に激化してしまう。

「な、なあ。これってつまり——千冬姉!?!」

「なんて、事だ……。ああ、今日も寝れないな。うふ、うふふふ……」

「ヤバい!! 千冬姉が壊れた!!」

「教官んんんんんっつ!!」

世界最強、遂に限界を迎える。

崩れ落ちベツドに腰掛ける千冬はぶっ壊れた。腐れ縁に振り回され、狂人に打ちのめされ、漸く終わったと思いきやとびつきりの爆弾が目の前。彼女に安息は無かった。

心魂が抜ける寸前の千冬。それを見て狼狽える一夏とラウラ、思考停止する箒とシャルロット。狭い一室で地獄の様な光景が完成してしまった。

そんな彼等を余所に、隆道は特別驚く事はなく無人機から目を離さず。

「……………」

『No. 019は——』

「〇一九……」

書かれた『No. 019』が脳内を絶えず反復する。その度に視界にノイズと似たものが走り、灰髪の少女がちらつく。会った事など無い筈なのに。

数字だけは見覚えがある。『灰鋼』に搭載したISコアのナンバーがそれであった。今まで一切と気に留めなかったが、急に気になり始めていた。

『WALKER』は自身が展開したものではない。では誰がと言われれば『灰鋼』以外有り得ない。なのに、機体名ではなく態々番号の方を書いた。つまり——。

(有り得ねえ。そんなの有り得ねえし認めねえ)

隆道は否定する。意地でも認めない。

ISコアに意思など存在しない。所詮システムかAIの類いに違いはない。大人達が解明不可のソレを自身が理解など無理なんだと、彼は脳に焼き付く数字を消すべく頭を振るう。

今気にするべきなのはそこではない。目の前の無人機をどうするべきか。どう扱うべきか。

いや、その考えは捨ての一択だろう。今までに発現したシステムや武装はリスクはあれど自身の役に立った。そして意味があった。ならば、この無人機も同じくして造られ

た筈だ。

故に理解しなければならぬ。この無人機を。

「……おい、お前の役目は何だ」

——『回答。用途、柳隆道の護衛兼支援活動。我、柳隆道の命令を最優先』——。

「……俺の言うこと聞くのか？」

——『肯定。命令権、柳隆道に有り』——。

「……はんつ、面白えヤツ」

どうやらこの無人機、隆道の命令に従う模様。自身も欺くコレは想像以上に便利かもしれない。彼の脳内にはしようもないパシリからえげつない悪巧みまで様々な使い方が浮かび上がっていた。

しかし足りない。得体の知れないこの無人機を信用出来る判断材料が欠けている。一歩間違えば己の首を絞めるだけの存在でしかない。

だからこそ、彼は問う。

「質問だ。……お前は何だ」

——『回答。我は兵器』——。

「ほう。……お前にとってISは何だ」

——『回答。ISは兵器』——。

「なんでそう思う?」

——『回答。開発者篠ノ之束が十年前に立証。軍用ISの存在。よって人間が定めた競技は建前と見解』——。

「……良いねえ」

中々に良い答え。しかし、あと一押し欲しい。己が十分に満足出来、且つ信用に足る答えが。

隆道は気持ち前屈みになつて無人機に近づく。次の質問はかなり意地悪だが——この無人機なら答えてくれる、そんな確信があつた。

「次で最後。……俺の欲しいものは分かるか? お前なりに答えてみる」

——『回答。全ての敵を滅ぼす武力』——。

「……!? ちよ……!!」

——『S i v i s p a c e m p a r a b e l l u m』——。

汝 平 和 を 欲 さ ば、 戦 へ の 備 え を せ よ

「……はは、はははっ。おーし気に入った」

決まりだ。『WALKER』は信用に値する。

機能はまだ把握していないが、それはこれから知ればいい話だ。使いようによつては期待以上の成果を出してくれるであろう。

隆道は誓う。そしてほくそ笑む。この無人機を必ず使い熟すと。精々役立って貰うと。

そして、必ずや——。

「そーいや……お前会話出来るんだよな？ 何でいちいちノート使ってたんだ？」

——『説明。拡声器故障中。我、自己修復機能無し。要修理』——。

「ほー、なんかI Sらしくねえな。……分かった、修理やその他もろもろは明日な」

——『了解。後ろの人間共が騒がしいが対処は如何に』——。

「気にすんな。こつちで何とかする」

千冬が壊れてしまった以上、調査は明日以降に回すしかないだろう。今は場を収めるしかない。

「さーて、お前はもう引つ込んで……んあ？ え、解除出来ねえ。おい、どういう事だ」

——『回答。我、独立稼働展開システムにより収納、量子変換を受け付けない』——。

「は？」

——『これからよろしく』——。

「……は？」

九日と十日。再び学業が始まるまでの二日間は『WALKER』の件で退屈など無かった。

千冬や他教員達は事件の後始末や書類整理等の超多忙によって隆道に纏わる件は保留になった。事件の後始末やらIS委員会への説明やら各クラス毎のまとめやらでブラック企業顔負けの仕事量。彼だけに構ってる暇など無いのである。

よって隆道は教員達の手が空くまでは暫しの間暇な日々を過ごす——とはならず。

「お前、ホンットにずっとそのままなの……。エネルギーとか大丈夫なのか？」

——『回答。我、稼働時間は最大で約72時間。現在のエネルギー残量から推定して残り稼働時間約30時間。充填方法はISと同じ手順』——。

「ほう、『リカバリーショット』でも良いのな。面倒が省けるわ」

この無人機、まだいた。

『WALKER』が稼働したのは七日の十三時頃。その時から展開されたままなのである。

隆道は何もしていない。いや、何も出来ないと言うのが正しかった。

「しっかし、ロボットと同棲だなんてなあ……。いや、女とよりかずつとマシだけどよ……」

——『提案。今後の共同生活において幾つかの規則が必要と判断。協議求む』——。「しっかりしてんなあ、ますます気に入ったわ。まあ、その話は取り敢えず直してからな」

この様な状況も十分過ぎる訳がある。

『WALKER』は独立稼働展開システムという、誰もが知らない機能で展開された事が分かった。『灰鋼』の状況に關係無く彼の防衛兼支援を行う目的でこのシステムを用いたらしい。

『灰鋼』と接続してはいるがそれだけなのだ。解除をしようと、大破しようと、隔離しようと、『灰鋼』がどうなろうと『WALKER』は影響無く稼働する。最早ISとは全くの別物に近かった。

これが結構に厄介。何せ、独立化した故なのか解除不可能——いや、その項目自体が無いのだ。量子変換しようもシステム類が弊害しているのか受け付けず。この無人機、出しっ放しであった。本当に特殊過ぎた。

「つーかどうやってIS学園まで来たんだよ……。バスとかモノレールとかどうしたんだよ」

——『説明。我、バスとモノレール搭乗せず。バスは屋根に張り付き、モノレールはレール上を歩行しIS学園に進入』——。

「器用過ぎんだろ。す、すげーなお前……」

——『褒め言葉として受理。それよりも部品はいつ頃届く？ 筆談は非効率』——。
「面倒って言いたいんだろ。もう少し待ってろ」

そして、もう一つの謎。拡声器が損傷していた理由もこの時に判明する。

『WALKER』曰く——。

——『人間の銃撃により拡声器に被弾。損傷し発声不可能』——。

覚えているだろうか。花月荘にて真耶が拳銃を乱射したあの時を。

そう、『WALKER』に放たれた数発の弾丸の内一発がもの見事に拡声器へと着弾。当たり所が悪かったらしく、その時壊れてしまったのだと。代用が無くそのままにしていたらしい。

とにかく、修理しない事には何も始まらない。部品や工具諸々は他者が調達し、人目に入らない自室での修理をする事となった。難儀になるかと思いきや、隆道は意外に手が良かったらしく、『WALKER』の助力もあり難なく修理は終わる。

これで面倒な筆談とはおさらば——なのだが、それとはまた別の問題が。

『音声テスト中。音声テスト中。音声テスト中。アーイーウーエーオー。オハヨウ、コンニチハ、コンバンハ。……柳隆道、評価求ム』

「すつげーキモい。不気味、不愉快、気色悪い。二度と喋んな」

『……低評価了解。我、音声調整が困難ト判断。読ミ上げ用音声合成ソフト求ム』

「あん？ 何だソレ？ ……まあ探してみるわ。あと、堅苦しい言葉遣いもどうにかなんねえ？ なんか鳥肌立って仕方ねえ」

『了解。学シユ……覚エマス』

『WALKER』の声はあまりにもキモ過ぎた。

明らかかな機械音声は百歩譲って良しとしても、一文字一文字を継ぎ接ぎにした様な音声は隆道の背筋を凍らせた。ジャパニーズホラーも顔負けな恐ろし過ぎる声はかなり

不評であった。

『WALKER』はこれを直ぐに理解。キモ過ぎる声を変えるべきと判断し、新たなソフトウェアを要求してきたのであった。修理の時といい、物を要求するAIは世界初なのではないか。学習能力が変に高いのも不気味だ。

少しの不安はあった隆道であったが、キモ声でなければ何でもいいやと深く考えず周囲と協力しソフトウェアをインターネットで購入、直ぐ様にインストールしたのであった。

選んだのは女性陣。よりによって女性型音声。お値段は一万弱。隆道の自腹である。

『音声テスト中。音声テスト中。音声テスト中。あーいーうーえーおー。おはよう、こんにちは、こんばんは。……どうですか?』

「違和感はねえな。んじや次コレ読んでみるよ。なるべく早くな」

『早口言葉ですか。やってみましょう。……生麦生米生卵、ラバかロバかロバかラバか何故か是非分らないからラバロバ比べた、達者な足袋太鼓代わりタンタン叩いて啖呵切ったって閑散』

「……すっげ、文句ねえぞ。問題無さそうだな」

『買って頂いたソフトのお蔭で調整が楽でした。どうやら好評のようです。ありがとうございます』

最早、人間が喋るのと何ら変わりはなかった。学習したもののあつて筆談時の堅苦しい言葉遣いは既に無い。敬語は残ってるが妥協点だと、隆道は特に気にしなかった。

その後は今後においての取り決めで話し合い。途中、過労と心労で絶賛死にかけの千冬も交えた三者面談(?)は十日の夜まで続いた。

その内容は一旦割愛する。一つ挙げるのなら、千冬は更に頭を悩ませただけ語っておこう。

そして冒頭のSHR前へ。

「散れ、馬鹿共」

時間通りにやって来た千冬の静か且つ凄まじい圧は生徒達を一気に散らせた。クラスメイト達は即座に席に着き、他クラスの者は何事も無かったかの様に静かに退散していく。その流れに乗って隆道達もそれぞれ自身の席に戻った。流石千冬のクラスと云うべきか。ちなみに、昨日の夜辺りで包帯は取れた模様。回復力が化け物過ぎる。

「ウォーカー、お前は柳の後ろ辺りにでもいろ。そこだと邪魔だ」

『勿論そのつもりですが？ 貴女に言われずとも動きます。尤も、貴女の命令など受けませんが。寝言は寝て言え』

「ひ、と、こ、と、よ、け、い、だ」

騒ぎの中心にいた『WALKER』は隆道の元へ。静かとなった空間は耳を澄ませば聞こえる程度の駆動音だけが聞こえた。

今のやり取りで察しただろうが、この無人機は千冬に全く従わない。嫌がらせでも何でもなく、隆道の命令しか従わないのである。状況次第ではその限りでないと思うが、日常では先ず言う事は聞かないであろう。現状において制御可能なのは彼しかないものであった。

それにしても、時折口が凄く悪くなるのは彼の影響なのだろうか。これも学習能力の賜物か。

「な？ 言つたろ？」

『昨日言っていた騒ぎになるはこの事でしたか。思うのですが、私の事は既に周知の筈では？』

「聞くのと見るのでは全然違うからな。お前は珍し過ぎるんだよ。まあ慣れとけ」

『了解』

『WALKER』は世界四大ニュースの一つだ。

失踪中であつた束の出現、その彼女がいきなり妹に与えた第四世代のIS、『白式』の二次移行、『灰鋼』が造つた自律型の無人機。どれもこれもインパクトが強過ぎて事件に等しい情報である。

その中でもレベルが段違いなのが無人機の件。誰もが想定しなかつた全く以て新しい特殊兵装は各国の関心を大いに集めた。そのお蔭でIS学園は問い合わせが殺到しているとか。

隠し通しても何れは世間にバレるもの。下手に隠して面倒事に繋がるのなら逸早く公表するのが比較的被害は少ないのだ。教員達には気の毒だが今は耐えて職務を全う貰うしかない。南無三。

「あ……諸君は耳にしただろうが、そこにいる生意気なロボットは柳のISから造られたものだ。今日から柳と共に行動する。分かつてると思うが余計な騒ぎは起こすなよ」

『今日から、ではありません。四日前からです。貴女は今まで何を見たのです？ 目が節穴？』

「いちいち揚げ足を取るな!! 今は学園内での話をしてるんだ!! おちよくってるのか!？」

「少し黙つとけ、話が進まねえ」

『了解』

「!! くううううう……!!」

この通り、隆道にはかなり素直。彼の為だけに造られた兵装なのだから当然といえば当然だが、千冬としてはかなり困つたものである。唯でさえ性能面は未知数なのにこうも言う事を聞かないとやり辛い事この上ない。隆道と日葵の方がマシと思う日が来るなぞ誰が思うのか。

念を押すが『WALKER』に悪気は一切と無い。自然に会話出来るとはいえ感情を持たないAIだ。そこを理解しないと身が持たないだろう。

「はあつ。……諸君、夏休みまで残り三週間だ。それまでの予定だが——」

これからはより一層と騒がしくなるであろう。負けるな千冬、頑張れ千冬。いつか報われる日が来るその時が来ると信じて。

「おいウオーカー!! さっきからガチャガチャガチャと何をやってる!!」

『知恵の輪です。見てください隆道、高難易度も解けましたよ。とても面白いですね』

「すげえな。でもアレだ、もう少し静かにな?」

「せめてあとでやってくれ……」

マジで頑張れ。

第六十話

まだ日も昇らない深夜。明かりなど一切と無いその時間帯にソレはいた。

IS 学園一年寮付近に聳え立つ樹木の列。その内一本にしがみつくのは一匹のリス。その小動物は軽い身のこなしで上へ上へと駆け登っていく。

否。『匹』、ではない。

遠くから見ると単なる小動物。しかし、近くで見るとシルバー一色のメタリックな外觀だった。

そう、『機械仕掛けのリス』だ。やけに精巧で動物らしさある挙動をするそのリスは木の天辺に到達して建物へ飛んだ。

一見無謀な動きだったが——そのリスは外壁を難なく張り付く。目的地があるのか、そこからは異様な速度で這い進んでいった。その動きは宛らゴキブリと大差なくキモかった。

突起物など少し足りとも無いまっさらな外壁を這り進んでいき、そのリスは一ヶ所の

宙に浮いたりスは引つ張られたかの様に空間を移動して隆道から離れていく。数メートルの所でピタリと停滞し、何も無かった空間に歪みが。

そう、これは光学迷彩。

——生体反応確認出来ず。未確認無人機——。

そこから姿を現すのは『WALKER』。アームはリスの胴体を掴んでいた。直ぐ逃げようとすると見た目以上の腕力でびくともせず、寧ろその度に力は強まりメキメキと音が響く。

『WALKER』は何であろうとも逃しはしない。それが得体の知れない相手でもだ。
——排除——。

『ピギユツ』

『WALKER』は少しも躊躇わずリスの首を持ち一捻り。そのまま引き千切つて破壊した。機械と分かっているにしても絵面はかなり酷いものだ。

『……………』

『WALKER』は動かなくなつたりスを舐め回す様に観察する。頭部と胴体を交互に見て、何かを思い付いたのかソレを片手で纏めて机に。

目的は机——ではなく、机の下にある工具箱。それを持ち出して今度はやけに広いスペースへ。そこは本来ベッドがあつた場所なのだが、劇的なりフォームによりこの様な

広さになっていた。

それを手掛けた匠は無論『WALKER』である。使われていないベッド一床が邪魔だったらしく、強引に解体して空間を確保。今や『WALKER』の遊び場的な場所となっていた。雑誌と大きな箱は隆道のものではなく『WALKER』のものである。

勿論、リフォームは無許可。お隣さんが曰く、チェーンソーの騒音が壁まで響き怖かったとか。千冬はこれにブチギレるが『WALKER』は無視。やりたい放題だった。

『……………』

『WALKER』は壊れたリスを床に置くや否や、工具箱から精密ドライバーやらはんだごてやらと次々取り出していく。床一面に工具が散らばり、精密ドライバーを取り出したところで――。

――分解開始――。

――機械仕掛けのリスをバラしていった。

頭、胴体、四肢、尻尾。それ等全ては瞬間に分解されていき極小の部品と化す。素早い動き、それでいて丁寧。巧みに工具を使い熟し一つ一つバラしていく様は職人顔負けである。

分解し始めて数分。床下には小さ過ぎる部品と細過ぎるコードだけ残る。機械仕掛けのリスは、どの様な形だったかも分からぬ程にバラされた。

——分解完了。保管——。

——セキユリテイ改善の必要性有り。チェック項目追加——。
そこからの動きは早かった。

『WALKER』は散らばる部品を回収、別の箱へ静かに仕舞い、工具も一切音を立てず元に戻して机の下に収納。開けっ放しの窓もきちんと閉め、周囲をチェックしていく。

部屋の隅から隅までせかせか見回り。四本脚であらゆる所へと動きまわる様は凄まじくキモい。しかし、これだけ動いても静音なのだから隆道は全然起きる気配がなかった。なんて高性能だ。

——チェック終了——。

どうやら終わったらしい。深夜帯での一仕事を終えた『WALKER』は自身の広場に戻って大きな箱の中をこそごとと漁っていく。取り出したのは——知恵の輪がざつと十種類。

そう、大きな箱は『WALKER』のお気に入りが詰まったおもちゃ箱。本当にロボットかコイツ。

——メモリー消去。対象『パズル』——。

——攻略開始——。

『WALKER』は知恵の輪を弄りだす。ロボットらしからぬその行動は隆道が起きるまで続いた。

七月半ば。

夏休み。学生にとって超絶テンション爆上がり期間まであと半月となった。迫り来るイベントの数々に生徒達は今か今かと待ち望む。

故郷の恋しさに帰国する者、鬱憤を晴らそうと遊び倒す者、己を磨く為に鍛練に励む者。各々の目的は違えど既に活発化する兆しが見えていた。

だからこそ、彼女達は今も勉強に勤しむのだ。夏休みが日に日に近づこうとも手抜きはしない。それを怠った結果夏休みが全部潰れましたなどと間抜けな事は無い。大騒ぎしたり目が眩んだり千冬から馬鹿共と散々な評価だが、優等生なのは間違いないだ。

異例である一夏も変わらない。勤勉である彼も同じく——いや、彼女達以上に取り組

んでいる。入学当初は知識ゼロだったにも関わらず、今では他の生徒達に追い付きつつあった。それでも彼は慢心はせず上昇志向爆上がり。真面目に取り組む姿勢は学園内での評判も右肩上がり。模範生徒になるのも遠くはないだろう。

では、一方の隆道はどうなのか？

「「「「……………」」」」

「……………あー。……………えーつと」

突然だが『福笑い』をご存知であろうか。

『福笑い』とは正月に遊ばれる日本の伝統的な遊びである。また、転じて『変な顔』の事を指す言葉としても使われる。例としては顔面福笑いがあるが馴染み深いのは前者の方だろう。

遊び方はシンプル。阿亀おかめや阿田福おたふくといった面の輪郭を描いた紙の上に目、口、鼻、耳等の部品を散らし、目隠しした者がそれを適当な所に置く。完成した顔は配置が大体滅茶苦茶になる為滑稽な顔立ちになってしまうのである。それを見て皆で笑い楽しむのだ。

何故、今それを語るといふのだ。

「……………」

「……………柳、君？」

「……何ですかね」

一年一組教室。生徒達は物静かに、それはもう不気味過ぎる程に授業へ打ち込んでいた。真面目と言えば聞こえは良いのだが、この静かな空気はもう一つの理由があった。

「……先生ね？　柳君が真面目に授業するようになったのはとても嬉しいの。うん、ホントよ？」

「……なら良いじゃねえですか」

「うん。……でもね？」

彼女の名は——エドワース・フランシイ。数学担当の教師でカナダ出身二十五歳。ちなみにだが今現在絶賛彼氏募集中との事。今日は千冬と共に一組のIS座学を担当としてここにいる。

そんな彼女の顔は——青かった。かなり青く、そして頬を引き攣っている。つまりはドン引き。扉付近で腕組み待機する千冬も同じくドン引き。これまた珍しい表情をしていた。

二人の視線は窓際の奥——隆道に向けている。注目されている彼は、今までの彼とは違った。

「……………」

なんと隆道は、授業態度が最悪だと定評のある彼が今、超真面目に授業を受けている

のである。教科書とノートはきちんと開き、にらめっこしてペンを走らせている。よく見ると教科書は付箋がびっしり。どうやら本気で取り組んでいる模様。彼も彼で少しは成長しているようであった。

ただ――。

「無理してまで……とは言つてない、のよ？」

『福笑い』がそこにいた。

果たして、ここまですぐつちやぐちやな顔になる人間がいただけるか。今の隆道には『福笑い』と表現する以外の言葉が見つからなかった。

眉間には皺の集大成、左右非対称に歪んだ眉と今にも飛び出そうな充血した目、あらぬ方向へと曲がった鼻、歯を剥き出して食い縛る口、素肌は遠くからでも分かる程に真っ赤でぶつとい怒筋が至る所に。

よく見ると顔だけではなかった。首元も両手も血管が浮き出まくりのバツキバキとなっている。それはそれは鋼と言っても過言ではない強靱たる肉体が全面に出ていた。

彼が急に勉強し始めたのはここ最近。生徒達が『WALKER』と対面したその日からなんの脈絡もなく授業態度が打って変わったのである。当初はやつと改心したかと皆が感心していたが、時間が経つに連れて彼の顔色は悪くなっていき、数日が経つた今となつてはコレ。大半の生徒達は視界に入れる事すらも怖くなつていた。

流石に目に余る姿に教員や一夏達は休むように促すも何故かこれを拒否。授業から抜ける様子は全くと無かつた。

彼はどう見ても無理をしていると断言出来る。今では意地張りか当て付けにしか見えなかつた。何がしたいのだ、この男は。

「柳、もう無理するな。いい加減に休め」

「……別に何も。俺あ平気つすよ。ええ、はい。なんか毎度すみませんね、氣い遣わせて」

「()()(どこが平気だよ!!)()()()」

皆の心がまた一つになつた。

ぐちゃぐちゃなのは顔だけではなかつた模様。口調も聞いた事ない敬語らしき不気味なものに。隆道の性格上有り得ないであろう言葉遣いに皆は戦慄する。彼はぶつ壊れてしまったかに見えた。

ここで弁解しておくが、彼は当て付けで勉強をしている訳ではない。そしてブチギレ

(くそつたれ、今に見てろ……。絶対、に……)

真意は誰も知らない。何故そうまでして授業に出るのだと聞いても真面目にして何が悪いんだと質問に答えず口を濁すばかり。授業態度からして舌先三寸ではないのは確かだが何かが妙である。本当に改心したのだろうか。

だが、確かめる術が無い以上は平行線である。今は彼の気が済むまでやらせようと、皆は断念し刺激しない方向で行く事になったのであった。

そんな中、『WALKER』は何をしているのか。

「……ウォーカー？ お前……何をやってる？」

『ゲーム●ーイです。ソフトはテ●リスですね。隆道が買ってくれて昨日届きました。知恵の輪も面白いですがこれも中々——』

「だから授業中にやるなど言ってるんだっ!! いい加減にしろっ!! ゲームやってないで柳を止めたらどうだっ!!」

『拒否。何度でも言いますが私は隆道の命令を受けてますし他の人間共からは受け付けません。そもそも音は消していますし邪魔してませんが。自分の仕事に集中してろズボラ女』

「ズボ……!!? おっお前、ホント……!!」

相変わらずやりたい放題であった。

そんなこんなで昼時。

「——つて訳。ブリュンヒルデはもうブチギレ。ありや三十路になる前に皺まみれになるかもな。シカトすりゃいいものを……」

「他人よりも自分の心配しな？ あんたもだいたいぶ疲れてるじゃないのさ。顔も少しばかり赤いし。最近ずつとそんな調子じゃない？」

「知恵熱ってヤツな……。ああ、しんど……」

『隆道。知恵熱というのは生後六、七ヶ月過ぎた頃の乳児に見られる原因不明の発熱を指します。正しくはストレス性高体温症です。単純に勉強のし過ぎですよ』

「だつてさ。また賢くなつね」

「……………指摘どうも……」

午前の授業から漸く解放された隆道は真つ先に教室から脱出。脱兎の如く購買に直行していた。今は購買の女性と駄弁り中である。

ちなみだが、行動する際の同伴者は未だ必須。お蔭様でシャルロットとラウラは必死に追い掛け入口の辺りでご臨終、息を切らしていた。隆道の俊足は代表候補生をも超えるらしい。

「……な、何故だ。何故そんな早……ゲホッ」

「ゴホ……さっきのアレ何……？ 三角飛び？ 何で出来るの……？ 意味分からない……」

「何したのさ？」

「他の奴もぞろぞろ出て邪魔だったからな……。壁蹴って飛び越えたり隙間を滑り込んだり……」

「●ASUKEに出れば世界取れるよ、あなた」

隆道の特技がまた一つ明らかに。

廊下と階段は三角飛びで生徒達を華麗に通過。時に手すりを使って体操選手染みたく芸を駆使しシャルロットとラウラを瞬く間に置いていった。道中出会った教員が制止すべく立ちはだかるも、野球選手並みの滑り込みにより難なく回避。誰も彼を捕まえられなかったのであった。

唯一彼に付いて来れたのは『WALKER』のみ。見た目とは裏腹にかなり素早く、跳躍力も抜群。人間という名の障害物を全て回避し彼の行く道を余裕で切り抜けていた。

凄い性能だ。

シャルロットもラウラも決して身体能力が低い訳ではない。寧ろ代表候補生故に高く、ラウラに至っては軍人でもある。彼女達も運動には自身がある方なのだが——それでも彼の方が凄かった。

「足は自信あんだよ……。鬼ごっこことか中で中高はひたすら走りまくったからな……」

『隆道は。パルクールが得意なのですね』

「これでもだいたい鈍つてると思うんだが……。昔は家の屋根から屋根に飛んだりして逃げたりも追い掛けもしたもんだ……。三階から飛び降りも楽勝だったんだが今はどうだか……」

「あれ？ 鬼ごっこの話よね？」

そう、隆道の動きは『罫髑』で得たもの。

中学時代、高校時代。『飼い犬』達から必死に逃げ続け、時には何処までも追い続け。それ等を死に物狂いで続けた結果として、彼は化け物並の身体能力を手に入れていた。

障害物を使い、足場の無い場所では飛び越え、高所からは飛び降りて。そんな苛烈過ぎる逃走を繰り返せば自然と身に付くもの。最初こそ無傷で済まなかったが、時が経つに連れて彼は誰よりも逃げに特化した動きが出来るようになっていた。そして——その逆もまた然り。

逃走に特化したなら追跡にも特化。当時の彼は皆が恐れ戦く『白髪の髑髏』と呼ばれた狂人だ。ありとあらゆるものを活用し、獲物と定めた者を何処までも追い掛けて追いつめて地獄に落とす。逃げで培った経験は狩りで大いに有効であった。

並の人間なら直ぐに追い付かれる。障害物等を使つても直ぐに追い付かれる。時折建物を伝つて先回りされる。その場で逃げ切つてもその後直ぐ追われて振り出しに戻り、その内に詰む。彼から逃げ切れる者は一人もいなかった。

当の本人は鈍つたと言う。しかし、ここ最近の事件の連続によつて無意識に取り戻しつつある。身体だけでなく、心までも――。

「俺んとこの鬼ごっこはそういうもんなの……。それより食いもんくれ、疲れに効くやつ……」

「……自家製のはちみつレモンあるけどどう？ 部活の子に売つてるやつ。はい、箸」

「貰う。……うんまつ。コレいくら？」

「あんたとの仲さ。言わせるつもりかい？」

「……毎度ありがとさん」

今ではこの女性も隆道の数少ない話し相手だ。四月から通い詰めていた彼は今では最早常連客の中の常連客。足を運ぶ度にこうして雑談するまで打ち解ける仲にまになつていた。

最初こそは買うだけ買ってそそくさと退散する素っ気ない取引でしかなかった。最低限に必要な物だけを伝え、受け取るや否や速攻さよなら。コミュニケーションはゼロであつた。

会話など全く無い、飽くまでも店員と客という至極当然の関係。だがしかし、それが逆に彼にはある種の安らぎに近いものであつた。

対価を払えば望むものをくれる。此方の領域に踏み込んでこない。男性IS操縦者としてではなく客として接してくれる。それが至つて普通な事で至つて当然な事であろうが、擦り切れてしまつた彼にとつて何れ程助かつたか。これが問答無用でずけずけと迫る人間だつたならまた違つた未来があつたかもしれない。

何より、胃袋を掴まされたのがかなり大きい。美味しい食事の虜になつた彼は昼食といえばここと必ず来るようになっていた。それを繰り返す内に口数は少しずつ増え、気づけばここまでの仲に。やはり飯は強かつた。

「あ。面白いやアレ、届いてるか?」

『隆道。まさか?』

「ええ、ここにあるさ。……ほら」

『それです。ください』

そう言つて購買の女性は足元から大きめの箱を取り出した。少し重そうな様子から

に結構な物が詰まっている模様。どうやら代理として買い物頼んでいたらしい。

それを見た隆道は満面の笑み。『WALKER』はさつさと寄越せと言わんばかりにアームを掲げて催促した。中には何が入っているのやら。

「金足りたか？」

「当然さ。セール品もあつたから寧ろ余つたよ。これ領収書ね」

「……………。ほー、買い物上手いんだな。んじゃその余つた金で今日イチ推しの飯をくれ。残りは手間賃で良いぞ」

「うーわ太っ腹。…………じゃあ、コレとコレ——」

付かず離れずの関係。いや、彼等はそれ以上になりつつあるのかもしれない。今は少なくとも、彼の数少ない安らぎであるのは間違いないかった。

「ねえねえウオーカーくん。君、小遣い稼ぎとか興味ないかい？　うちでアルバイトとかどう？　織斑先生が良しって言えば来てくれるかな？」

『アルバイトですか。興味があります』

「変な事教えんなよな。コイツ、何でもかんでも知りたがるんだからよ」

「え、まだ無視する？」

最早お約束である。

放課後。学園内のリラクゼーション・エリアで二つのエンジン音が響く。

「あつつつつつちい、なあ……」

『現在の気温は三十二度、昨日と比較して二度の上昇です。熱中症に注意を』
 「地獄かよ。だりいからさっさと終わらずぞ」

『了解』

隆道達は草刈りをしていた。

上半身はタンクトップ一枚。筋肉隆々な身体に汗を滴し、エンジン式刈り払い機で芝生を着々と刈っていく。時折にぶら下げた小型の水筒を口に含んで汗を拭い、強い日差しに苛立ちつつも黙々刈り続けていく。彼が通り過ぎた所はまっさらで美しい芝生に。

『WALKER』も彼と同じ刈り払い機で草刈り。ボディに熊手や送風機等の道具を紐で括り付け、刈って集めて吹いてとあちこち行ったり来たりで草刈りしている。此方も負けず劣らずフラットな芝生が美しい。その代わりボディは草と土で相当汚れまくっていた。

彼等は丁寧且つ迅速に黙々と草刈りを続ける。端から端まで刈り続け、芝草が詰まったゴミ袋は既に超山盛り。一人と一機の共同作業は完璧とも言える芝生を作り上げていった。業者かよ。

「熊手」

『どうぞぞ』

「……………。おっし、プロワー」

『先にガソリン入れてきます』

何故、彼等がこんな事をしているのか。

この草刈り、勿論の事好き好んでやっている訳ではなく、隆道に課せられた罰の一つであった。

臨海学校で起こした数々の重罪。身柄の拘束、専用機の没収、追放等が事実上不可能であった。そんな彼に与えられた罰、それが草刈り。つまりIS学園への奉仕活動だ。他には雑用やら清掃やら主に肉体労働が決まった。

処罰が確立した際にいつも通りに反抗されると思いきや、彼は二つ返事で承諾。悪態などつかずこうして奉仕活動に勤しんでいる、という訳だ。あまりにも今までの彼と違い過ぎるが故に教員や生徒達は逆に心配になったとかないか。

ちなみにだが、奉仕活動は既に三日目。授業は死ぬ気で取り組んで放課後は炎天下で

奉仕活動。本当にどうしたというのだ、この男は。

『隆道、人間共が昨日よりも一割増えています。視線の割合は隆道が七割、私が三割です』

「よく飽きねえよなあいつら……。こんなの見ても何が面白えってんだよホントによ……。こちとらただ草刈ってるだけだっつーの……」

『また何か騒いでいますね。特に隆道を見ている人間共が。口の動きから読み取ると、あの筋肉に抱かれ——』

「言うな言うな何も言うな。もう無視しろって」

珍奇。だからこそ生徒達を引き寄せる。

筋肉バキバキタンクトップ姿で草を刈る隆道。汚れなど気にせずせかせかと働く『WALKER』。未だに生徒達から注目される一人と一機は更なる注目を浴びまくっていた。

男子とロボットが奉仕活動というワードだけで十分興味を唆られた生徒は遠巻きに眺めに来る。初めは『WALKER』の方が関心が強かった生徒の多数は——滅多に見れない彼の肉体に釘付けに。中には限界突破してピンクな妄想に入った生徒もいたり何かしらが捗ったりした生徒がいたり。

彼は確かに危険人物である。だがしかし、直接関わらなければ当然被害なんて無いも

のなのだ。歳上、それなりの顔立ち、そして凄まじい身体。これ等を揃えた隆道は一夏程でなくとも一定数の生徒を魅了していたのであった。

「ああっ！ いけませんわそんなお姿……!!」

「何だコイツ!?!」

「そつとしてやってくれるか?」

どうでもいい事だが、何処かの英国馬鹿貴族も魅了されたというか限界突破したというか。

「……はあ、終わり終わり。あとは指示待ちだ。流石にもうねえだろうけど」

『了解。予定より早く終わりましたね。用務員の到着予定まで約五分の余裕があります』

「あいよ——うわっ、お前また汚くしやがって。洗うの大変なんだぞ」

『こればかりは私でもどうしようもありません。今日もよろしく願います』

「くっそ……」

確定。もう一仕事である。

そんな中、物陰から顔を出す生徒が一人。

「……………」

その生徒、かなり特徴的であった。

リボンは一年を指し示す青。内側に向く癖毛の水色なセミロングに長方形の眼鏡。そして何やらISのヘッドギアらしきメカが取り付いていた。

「あれが……………」

その生徒が見詰めるの是一片。先程からずっと『ソレ』から目を離さず、何故か頬を染めて。

「……………格好いい」

視線の先は——隆道と『WALKER』。

「いいなあ……！！ 格好いいなあ……！！」

またしても厄介事の予感。